白の皇国物語

白沢戌亥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白の皇国物語

【Ｎコード】
Ｎ３２７３Ｉ

【作者名】
白沢戌亥

【あらすじ】
一人の男が、異なる世界に生まれ落ちた。
それを待っていたかのように、彼を取り巻く世界はやがて激動の時代へと突入していく。
魔法と科学と愛と憎悪と、諦め男のラブコメ&ウォークロニクル。
現在第三章諸国鳴動編を連載中。

第一章ダイジェスト：プロローグ～第九話　前編

はるか昔、大きな戦いがあった。

大陸の片隅に灯った小さな小さな火種は、いつしか大陸全土を巻き込む大戦争となって人々を焼き尽くした。

龍を始めとした少数の人ならざる種と、人間を中心とした多数の命短い種の争い。

ときに憎しみ合い、ときに分かり合い、出会い、別れ――多くの人々の想いが混じり合い、混沌とした時代だった。

そんな時代に、何処からか一人の若者が現れた。

白の髪を持つ彼は一人の貴き者に見出され、戦乱の中に飛び込む。

その戦乱のさなかに生涯忘れられない多くの経験をした彼は、いつしか敵であった人ならざる者たちと、彼と共に進むことを決めた人間たちを率いて戦場に立っていた。

彼は世界の理を剣とし、志を共にする者たちを率い、大戦争に終止符を打つ。

戦乱の原因となった人間たちは北の地に追い遣られ、人ならざる者たちと、彼らと共存する道を選んだ人間たちが大陸の覇者となった。

それから、二〇〇〇以上の星巡りののち、物語は英雄となった若者の国から始まる。

・

◇　◇　◇

「――はあ」

白龍公の縁者であることを示す銀の髪が、湖面を滑る風に揺れる。

夫である白龍公と夫婦になるまで、否、夫婦となってからも変わらずに大陸一の美姫と謳われたその母の面影を残す白皙の面と、それに映える黄金の瞳。

白い飾り布を多用した衣裳と相俟って、その姿は吟遊詩人の歌に登場しても遜色ない、まるで物語の女神や美姫のようだった。

だが、その美貌に浮かぶ表情はひたすらに暗い。

溜息を零しては桟橋から湖面を眺め、少し気の早い者ならば或いは、身投げの一歩手前にさえ見えるかもしれない。

実際、彼女の中にはこのまま湖に消えてしまいたいという願望さえあった。あとのことを考えてそれを実行しないだけの理性は残されていたが、その願望自体を打ち消すだけの力は理性にもなかった。

「ああ……本当に」

理性だけで生きていけたら、願望だけで生きていけたらどれほど楽だったか。

大領を預かる公爵の令嬢としての役目も、この国の軍人としての役割も果たせない自分に対して、彼女は自身のその価値を一切認めていなかった。認められるはずもなかった。

そんな、「民に顔向けできない」という想いが、彼女の表情からあらゆる明るさを奪っていた。

良くも悪くも、高貴なる者の果たすべき義務を弁えた彼女にとって、それは己の命の価値を失わせるに十分なことであった。だが、自分が命を捨てることで発生するであろう諸々の面倒ごとを思えば、その面倒ごとに巻き込まれる人々のことを思えば、迂闊に命を断つことも出来ない。

彼女は白龍公の姫君であり、その人生の大半は他者を排斥しては成り立たないように出来ている。それは望む、望まないに関わりなく、彼女の生まれから決まっていたことだった。

「――……」

それでも何度か身投げでもしようかと思ったことはある。自分の存在そのものが無価値なもののように思え、一度思ってしまえばその考えは容易に消えるものではない。しかしいざ実行に移そうとすれば、やはり一欠片の理性がそれを押し留めてしまう。何度もそれを繰り返し、そんな優柔不断な自分を顧みて落ち込んだ彼女は、気分の切り替えと視線を上げる以外に特に意味もなく周囲を見回し、湖岸まで伸びた城壁の辺りに違和感を覚えた。

（何？　不審物？　――まさか、爆発物なんてことはないと思うけど……）

一瞬の内に思考を巡らせた彼女は、疑問と警戒がない交ぜになった視線を違和感の中心に向けると軍事用魔法の一種である遠視魔法の術式を意識内に展開、その術式に沿って魔力を流した。

それに伴い実際の視界とは別に脳裏に映し出される風景。その真ん中にあってはならない、でも完全に否定することは出来ない物体を見付け、彼女は目を見開き、無意識に大きく息を吸っていた。

そして彼女は一瞬息を止め、思い切り吸い込んだ息を吐き出す。

「――ッ！！」

それは人を呼ぶ声だったのか単なる悲鳴だったのか、混乱していた彼女はそのときの自分の言葉を憶えていなかった。

◇　◇　◇

異なる世界で生を諦めた青年は、白龍の姫君に生命を救われた。

かつての家族も友人も恋人も、最後に自分の生命さえ諦めた彼。

その先にどんな運命があるとも知らないまま、彼は自分の世界を取り戻し始める。

◇　◇　◇

身体を起こし、軋む身体に顔を顰めながら呻くように呟く。

「――起きた、のか？」

自分に問い掛ける言葉として些か不適切な言葉だが、少なくとも彼の口から真っ先に出た言葉はそれだった。起きたのか、そうでないのか、そもそも自分は何をしていたのか。

手足の感覚を確認し――痺れはない。鼻から空気を吸い込んで匂いを確かめる――仄かに甘い匂いがある。

次いでかさかさに乾いた唇を舐める――痛みが走った。何とも言えない痛みに顔を歪めた彼は、ここでようやく自分が寝ている場所がひどく豪奢な寝台であることに気付いた。

恐る恐る見回してみた室内は品の良い、そして間違いなく高価であろう家具で統一されていた。

「――……」

恐ろしい。どんな理由かは分からないが、彼はそう思った。

落ち着かないという感覚がある一線を越えると、人間は恐ろしさを感じるのかもしれない。

「ここは何処だ？」

そして、何処だと思う自分は誰だ。

知っているのに分からない。理解出来ない、理解しようにも自分という意識が希薄でそれが出来ない。

彼が自分の思考に混じる歪みの除去に没頭し始めたとき、視界の片隅にある扉から小さくも聞き逃しようのない音が響く。

「――！！」

こんこんと二回。同時に肩が震えた。

返事をするかどうか数秒悩んだ彼だが、扉は勝手に開いた。

「失礼します」

「――」

扉を開けたのは、彼の主観で年の頃十代後半と思わしき、色素の薄い空色の髪を一つに纏めた女性。

彼の知る――これは記憶にあった――メイドと表しても良い姿をした彼女は、部屋の中にいた彼の返事を期待した様子もなく一言断りを入れて部屋に入った。彼の存在をそこらの家具と同じように扱っているらしく、その視線は一度も彼を捉えることなく、彼女は扉とは反対の壁にある大きな窓に向かった。

絨毯に音が吸収されることを差し引いても、その足音は極々小さい。彼女は窓辺に着くと、薄い布の窓掛けを引いて何気なく彼を見

た。

「――」

そうなると当然、一度たりとも彼女から視線を外していない彼の瞳とぶつかることになる。

互いに無言。ただその数秒後、大きく見開かれた彼女の瞳の色が鳶色であると彼が認識した瞬間――

「ひ、姫さまぁッ！！」

「――！！」

彼女はこれまでの楚々とした佇まいを完全にぶち壊し、大声で叫びながら部屋から飛び出していった。

どたどたという足音と「姫さま」と叫ぶ声が遠ざかっていく。

青年は一人、首を傾げるだけだった。

◇　◇　◇

彼を救った白龍の姫君、メリエラ。

その侍女にして、彼にこの世界の知識を与える役目を負ったウィリィア。

彼は彼女たちと言葉を交わしながら、少しずつこの世界での居場所を得ていく。

◇　◇　◇

「――あなた！　身体は大丈夫なの！？」

彼は問われ、言葉に詰まった。

紅潮した頬は白皙に良く映え、潤んだように光る金色の瞳は自分を真っ直ぐに見詰め、浮かされたような吐息が何とも言えない色香を漂わせている。

大貴族の令嬢に相応しい、簡素でいて何処か華麗な印象を抱かせる薄緑の衣裳は、さぞ走り難い格好だっただろう。踵の高い靴のままここまで走ってきた彼女を褒めるべきか、危険だと諫めるべきか。実はこの部屋に辿り着くまでに何人もの使用人がそのようなことを考え、中には実際に諫めようとした者も居たのだが、彼女はあっという間に彼らの前から走り去ってしまっていた。

「え、あ……」

「言葉は分かる？」

メリエラは自分を落ち着かせるように一呼吸置き、再度問い掛けた。

「は、はい」

「良かった、じゃあ、幾つか質問に答えて貰える？」

「はい、構いませんが……」

「ありがとう」

メリエラは寝台横の椅子に腰掛けると、背後の侍女に命じて紙と筆記具を用意させた。装飾の施された用箋挟を差し出した侍女がメリエラの命令で部屋の外に退出すると、メリエラは真剣な表情で彼に向き直る。

彼女にとっての最重要事項である『あの事実』の存在を差し引いたとしても、『民とは善も悪も須らく己の総てを賭して守るべきものである』と幼い頃から教えられてきたメリエラにとって、自らの一族が統べる領土で行き倒れていた青年は、その一族の名と矜持に賭けて確実に保護すべき対象だった。

一つの言葉も聞き漏らさない。そんな気持ちでメリエラは彼に迫った。寝台に手を置き、嘘を許さないよう顔を近付ける。

目覚めたばかりだからだろうか、彼の顔色は蒼白で余り血色が良いとは言えない。出来るだけ手早く用事を済ませ、侍医を呼んだ方が良さそうだ。

そうと決まれば早速始めよう。彼女は硬筆を手に、事情聴取を開始した。

「まずあなた名前は？　対岸にある〈クリアード〉の街の人なの？」

「くりあーど……？」

男は首を傾げる。発音も怪しく、街の名前を知っている様子ではなかったが、彼女は念のため、重ねて確認する。

「そう、それがあなたの街？」

「いや……多分、違う」

「そう、それじゃあ何処の人？　その前に名前は？」

彼の様子に嘘はない。

メリエラはそれを確認すると、更に質問を重ねる。本来なら最初に訊くべきことであったにも関わらず、それを忘れていた自分に内心苦笑した。

「名前……？」

問われた、名前という単語に記憶の一部が蘇る。

その単語を発音しようとして――

「――ッ」

しかし、彼の喉は一切の音を発しなかった。

いや、より正確に言うならば、発音出来なかった。

「――？」

口は動く、だが、発音出来ない。

それは違う、お前の名ではないと自分の中にある大きな何かに否定されているようで、口に出そうとしても身体がそれを否定した。意識と記憶が合致しない。

否、記憶さえも欠落している。思考し、記憶を手繰り、自分の名を舌に乗せようとすると、その部分が抜け落ちたように真っ白になっていた。

思い出せないのではない、初めから存在しないのだと気付き、彼は愕然とした。

黙り込んだ彼の様子に首を傾げるメリエラ。硬筆を動かしていた手が止まり、訝しげに彼の顔を覗き込んで来る。そんな彼女の様子に気付く彼だが、だからといってどうしようもない。

だが、今まで見たことの無いほど澄んだ彼女の金色の瞳を見た瞬間に、彼の喉は音を生んでいた。

「――レクティ……ファール。レクティファール」

「レクティファール？　それがあなたの名前？」

いいや、違う。違うはずだ。

しかし、そう言おうとして、彼の唇は動きを止めた。

間違っているが、正しい、そう思えたからだ。

メリエラはそんな彼の内心など知らないまま、微笑んで一つ頷いた。硬筆を走らせ、用紙の一番上にその名を記す。

「古代語で『月の人』ね。良い名前だわ、両親か神殿の司祭かは知らないけど、あなたの優しい色をした瞳にちなんだのね」

良き名は、愛されて生まれた証拠だ。

神殿に照会すれば、もう少し情報を得られるかも知れない。彼女はその旨を名前の横に更に書き込んだ。

「瞳……？」

ただ、彼女に自分の容姿を評されはしたものの、一度も鏡を見ていない彼――レクティファールには自分の姿というものが分からない。

メリエラはそんなレクティファールの態度に少しだけ違和感を覚えながらも、硬筆を滑らせながら彼の言葉に答えた。

「そう、きれいな銀の瞳。あともう一つ聞きたいんだけど……」

そこで彼女は表情を固いものに変えると用箋挟に視線を落とし、やがて意を決したように頷くと、上目遣いで彼を見詰めながら問い掛けた。

その声は、少しだけ震えていた。

「あなたの――――その白い髪は、生まれ付き？」

質問の意味が分からないレクティファールは、首を傾げるしかない。

このときの彼は知らない、彼女のこの質問が自分の運命を大きく変えるものだったということを。

そしてそれに気付いたとき、彼はもう、引き返せない場所に立っていたのだった。

◇　◇　◇

運命であったと人は言う。

白龍の姫君の下に、彼が現れたことを。

白き髪は、かつての英雄の証にして、現代の皇王の証。

皇国の人々は白き髪を持つ皇王を戴き、国を作っていた。

だが皇国はこの時期、未曽有の危機に瀕していた。

白き髪を持たないために本来皇位を継承出来ぬはずの、先代皇王の一子による皇位簒奪。

簒奪者である当代皇王によって国は荒れ、ある貴族たちは皇王を見限り、ある貴族たちは皇王に追従する。

国を憂いた貴族は辺境へと流され、自らの栄耀栄華を求める貴族

たちが国の中枢を占めた。

二〇〇〇年の歴史は暗く濁り、皇国はかつての輝きを失う。

それは、豊かな皇国を狙う他国にとって好機以外の何ものでもなかった。

当代皇王即位よりしばらくの後、西方の大国〈アルストロメリア民主連邦〉を中核とした連合国が軍を発する。西方に領地を持つ貴族は当代皇王の思惑に反して連合軍の通過を黙認。皇国正規軍もまた、西方を守る西方総軍司令部が当代皇王の軍統帥権について「その正当性に疑問がある」として迎撃命令を黙殺。

それによって遮るもののなくなった連合軍は皇国領へと侵攻する。彼らの旗印は「皇国の主権を不当に掌握している独裁者の討伐」であった。

◇　◇　◇

皇国を良き隣人と見る市民の声援に後押しされた連合軍は、まさに破竹の勢いで『賊軍』を粉砕し、そのまま一気に皇都に向かって突き進む。

「中央貴族は何度も防衛線を張ったけど、その防衛線を担う貴族軍の兵士は徴兵された平民。当然、士気なんてある筈もない。それどころか公然と連合軍に味方した兵士さえいたそうよ。――――まあ、自業自得としか言えないわね……わたしたちにとっては不名誉なことだけれど」

自嘲気味に哂うメリエラ。唯一その目だけが、悲しげに揺れていた。

「防衛線は虫食い穴だらけ、やっぱり連合軍は止められなかった」

内応や寝返りが続出し、結果次々と破られる防衛線。やがて支持貴族たちは自己保身のため、皇都への転進を開始した。味方さえ信じられないという状況に、防衛線の維持どころか組織的な戦闘も困難になっていた。

皇王麾下の近衛軍を中心として防備を固めている皇都なら、ひょっとしたら辺境に流された貴族たちが救援に来るまで持ちこたえられるかもしれない。そんな儚い期待を胸に、残存兵力と共に皇都へ向かう支持貴族たち。

だが、彼らにとって本当の不幸はそこから始まった。

「――支持貴族たちが皇都絶対防衛線に戦力を集結している最中、今から約六ヶ月前の朝、今上陛下が突然身罷られたの」

自殺とも、謀殺とも、病死とも言われているが、真実は未だ判明していない。

その頃にはもう皇都は連合軍に包囲されてしまい、中の状況を詳しく知る術は無かったのである。

「でもここで困ったのは、連合軍も同じこと」

何せ、今回の侵攻の大義名分が勝手に消えてしまったのだ。

悪の独裁者を討つことで幾らかの特権を皇国から得ようとしていた連合軍だが、その独裁者がいなくなってしまえば皇国に武力侵攻する大義を得られない。大義もなく武力による行動を起こせば、今度は自分たちが民衆にとっての『悪』になってしまう。各国政府は、国内の対抗勢力が皇王崩御の情報を掴み、自分たちを政権から引き摺り降ろそうと画策していることに気付いていた。

何としても、国民を納得させる勝利を得なくてはならない。

そんな各国政府の意思を受けた連合軍は、皇王崩御による混乱で悪化している治安を維持するという理由で皇都の包囲を続けた。その間、凡そひと月。

その一ヶ月の間に連合軍に軍を派遣している国家の政府と、彼らを招き入れた辺境貴族の間で停戦条約が締結される筈だったのだが、そこでも幾つか新たな問題が出てきた。

辺境貴族たちは事前に約束されていた賠償金の内の何割かの支払いには応じても、各国政府が求めるような経済的な特権は認めなかったのだった。

約束が違うと詰め寄る各国政府に対し、辺境貴族たちは今や故人となった皇王の身柄を連合軍が引き渡さない以上、約束を果たす義理はないと強硬な姿勢を崩さなかった。今上皇王の身柄を確保出来ず、大義名分を失ったのは貴族たちも同様だ。これ以上国土と国民を疲弊させるような真似は絶対に出来なかった。

だが、皇王の身柄はすでに支持貴族たちによって葬られたあとだ。

そして、皇王の廟は皇都の地下深くにあり、皇族と一部の儀式院

職員以外の立ち入りは認められていなかった。

「つまり、今上陛下の身柄を抑えるためには皇都に侵攻し、武力で廟を暴かなくてはならない」

だが、皇都へと侵攻すれば今度こそ辺境貴族たちの軍が連合軍に攻め掛かるだろう。貴族たちは何度もそれを匂わせたし、現に彼らの軍は続々と皇都周辺に集結し、いつしかその数は連合軍を凌駕していた。

自分たちで皇王の身を害すれば反逆となってしまう、それを防ぐために他国の力を借りたが、これ以上他国の軍を愛する皇国の領土に留め置く理由はない。貴族たちにとってはもう、連合軍は邪魔者だった。

「もう用は済んだのだから早急に撤退せよ」という辺境貴族軍と、「僅かな賠償金以外に何も得られず、単に無駄に軍事費を消費しただけでは国民の支持を失ってしまう」という各国政府の対立という構図が新たに生まれ、状況はより混迷の度合いを増した。

外征は莫大な資金と物資を必要とする軍事行動である。どんな大国でもおいそれと実行出来るものではない。国債発行などで戦費を拠出した各国政府にしてみれば、すでに自国経済に影を作り始めた今次侵攻作戦の戦費にも満たない、少額の賠償金だけで納得出来る訳がない。

結局のところ、連合側からすれば最低限収支の釣り合いが取れる条件を皇国側に呑ませなくては撤退など出来ない。

他方、連合軍と睨み合いを続ける辺境始原貴族軍も内部に複数問

題を抱えていた。

「そう、何処も問題だらけだった」

身内の恥を晒すことに躊躇いはない、と言わんばかりに言葉を続けようとするメリエラ。

しかし、彼女が口を開く前に、扉が数度叩かれる。

冷水を浴びせられたように身体を竦ませるメリエラであったが、レクティファールの視線を感じると慌てて表情を取り繕い、扉に向かって入室の許可を出した。

「――姫さま、お茶をお持ちしました」

扉けて部屋に入ってきたのは、先程の侍女だった。

台車にお湯の入った保温瓶と茶壷、お茶請けの焼き菓子を載せ、二人にそれを差し出す。

「あ、ありがとう……でも……」

「何ごとも緩急が大事だと、旦那様も仰っておられたではありませんか。それに、彼は病み上がりです。余り無理をさせては」

彼女は侍女にそう指摘され、はっとした表情でレクティファールを振り返る。

良く見てみれば、先程よりも顔色が悪くなっていた。

「ごめんなさい。少し気が急いてしまったみたい」

「いいや、別に……」

気にしていない、と続けようとしたレクティファールだが、こちらを見る彼女の目が自分を窘めているような気がして、それ以上言葉を継ぐことが出来なかった。

「少し休憩しましょう」

メリエラの言葉で、部屋の空気が少しだけ弛緩した。

◇　◇　◇

一刻の休息、それはレクティファールとメリエラにとって忘れ難い記憶となる。

レクティファールはメリエラを貴族の娘ではなくただの女として見、メリエラは何の力も持たないはずのレクティファールに自分にはない男を感じた。

それは二人がお互いを一個の人として認識する切っ掛けであり、二人にとっての一大転換点だった。

◇　◇　◇

「これでも、お茶にはちょっと自信があるの」

そう言い、彼女は慣れた手付きで紅茶を淹れた。温めたポットに茶葉と熱湯を入れ、ほんの少しの時間で見事な色合いのお茶を淹れて見せた。

（うまいものだ）

貴族令嬢というからには、てっきり侍女にお茶を淹れさせるものと思っていたレクティファールは、メリエラの見事な腕前に感嘆するしかない。

「どうぞ」

「頂きます」

差し出された磁碗を受け皿ごと受け取ろうとしたレクティファールだが、ふとお茶の表面が波立っていることに気が付いた。そして、その原因を探ろうとしてメリエラの手を見、そこに付着したインクに目を奪われた。

小さな傷だらけの手。その傷や爪の間に染み込んだインクは、メリエラのその美しい姿には余りに不釣合だった。

「どうしたの？　――あ！」

メリエラはレクティファールの視線が自分の手に向かっていることを感じ取ると、その手が染み込んだインクで汚れていることを思い出し、慌ててお茶をレクティファールに押し付けた。

「ご、ごめんさない」

真っ赤な顔で恥じ入ったように手を隠し、「本当にごめんなさい。いつもはこんなことないのに……」と呟く。染み込んだインクは少し洗った程度で落ちたりしないのだから彼女に責任はない筈だが、メリエラは顔を伏せたまま上げようとしない。

「あの、別に気にしていませんから」

そうレクティファールが明るく声を掛けても、お茶を飲んで美味しいと言っても、メリエラは顔を上げなかった。ただ、その耳だけが真っ赤に染まり、彼女の隠された表情をレクティファールに窺わせる。

先程まではひどく真剣な空気が満ちていたというのに、今の室内は余りにも穏やかであった。

しかし、隠そうとして隠しきれないメリエラの手に刻まれた幾つもの傷に気付くと、彼の表情から一切の笑みが消え去った。

「――その傷は、どうしたのですか」

動揺を押し隠して問うてみれば、メリエラは自分の手を見詰め、困ったように微笑んだ。

「大丈夫、わたしたちの種族は治癒力が高いから」

レクティファールが求めた答えは、もちろんそんなものではなかった。

そして、メリエラのその今にも泣き出しそうな表情も、けっして望んでいなかった。

明確な理由もなく、ただただそんな顔を見るのが嫌だった。

「治癒能力が高いのに、そんな小さな傷も癒せないのですか」

「いじわる、本当に」

だが、今の彼には、メリエラを笑顔にさせるだけの言葉がなかった。

気の利いた台詞も、仕草も知らない。

だから、せめて怒らせようとした。少し考えればそれが余りにも拙い小細工であるとすぐに分かりそうなものであるが、この時点ではふたりともそれを察することは出来なかった。

「あなたには関係ないことでしょう」

「いいえ」

レクティファールはこれまでで一番強い意思を瞳に滾らせ、メリエラの黄金の瞳を見詰めた。

しばらくの間その視線を受け止めていたメリエラであるが、やがて耐え切れなくなったように視線を逸らした。

「――本当に、いじわるな人ね」

「あなたには負けます。あんな顔を見せられて、黙っていろと言うのだから」

あそこで黙っていられる程、レクティファールは大人になりきれていなかった。そして、そんな大人になどなりたくもなかった。

「折角の綺麗な顔が台無しでしたよ」

「お世辞は、もう少し場を選ぶべきね。こんな雰囲気も何も無いところで言っても、恥ずかしいだけよ」

そう云うメリエラ自身が、一番恥ずかしそうに頬を染めている。

言葉を発したレクティファールが平気な顔をしているということが、益々彼女の羞恥心を煽る。

「少し、手を見せてくれませんか」

「え？　でも……」

躊躇うメリエラの手を、レクティファールは強引に引き寄せた。メリエラが本気で抵抗すればそんなことは出来なかっただろうが、驚きを顔いっぱいに浮かべたままの彼女は自分の手を掴む青年に抗うことが出来なかった。今まで、彼女をこんな風に扱う他人など、ほとんど居なかったからだ。

人々は彼女を姫君として扱っていたし、辛うじて軍の上官や教官がそれ相応の態度を取っていただけで、ひょっとしたら、仕事や役目以外で彼女を白龍公の姫君と知り、なおその態度を変えなかったのは目の前の青年が初めてかもしれない。

「――肌が白いってことは、その分荒れやすいんでしょうか」

言って、メリエラの両手を自分のそれで包みこむレクティファール。

彼の体温が、じんわりとメリエラに移っていく。

「――う」

それがなんとも気恥ずかしい。移ってくる体温に集中してみれば、それはまるでもっと親密な男女の睦み合いを体験しているような感覚であった。

全体は優しく包まれ、荒れて痛みを覚える箇所は優しく撫でられる。それは治癒魔法ではなく単なる愛撫であった筈なのに、メリエラの白磁の手は、その傷を次々と癒されていく。

不思議な光景だった。魔法も使わずに傷を治すなど、神々が与える奇蹟のようではないか。

「こんなこと言うと、怒られるかもしれませんが」

レクティファールは、自分の引き起こしている現象の理由を知らない。

それが奇蹟でも何でもないということだけ、知っていた。

「君は、君の守りたい人たちの痛みを知る必要はないと思います」

メリエラの肩が、大きく震えた。痛みを感じることで許しを得ようとしていた自分の浅薄さを、初対面の男に看破されたことで生じた衝撃。それは彼女の身体を反応させ、心を揺り動かした。

「でも、彼らの苦しみを理解しないと……」

「擬似的な体験と、感覚の共有は別物です。そして、共有でもしない限り、本当の意味で、その他者が感じている痛みを理解することは出来ないのではないですか」

「じゃあ、わたしはずっと彼らの苦しみを理解出来ないの？」

彼にこんなことを問うのは、間違っている。

だが、訊かないという選択肢はない。それほどまでに、メリエラの心は答えを欲していた。

「彼らの苦しみを理解することが、そんなにも大切ですか」

レクティファールの言葉を、メリエラは理解出来なかった。

民の苦しみや喜びを理解出来ずして、何が為政者かと思った。

「当たり前、じゃない……そうしないと、彼らがわたしたちを統治者として認めることが出来ない」

「本当に？」

尋ねるレクティファールの表情は、メリエラとは正反対の穏やかなものだった。彼の中の答えは、メリエラの言葉にも揺らいでいな

いのだ。

「人々の苦しみを理解出来れば、人々のためになると？」

「――……」

肯定も、否定も出来なかった。

苦しみを理解出来れば、彼らの望むことが分かるだろう。だが、分かったところで望むものを与えられるかどうかは、また別の問題だ。

「手段と目的を間違えては、あとで後悔することになるでしょう。あなたがすべきは民の苦しみを擬似的に感じるのではなく、その苦しみを取り除くためにどうしたら良いかを考えることなのでは？」

「でも、それじゃあ、人々が求めることは……」

「人々が求めることは、人々の声で聞くしかないと思います。勝手に想像を膨らませて、自分を傷めつけて、そして理解しようとしていると言っても、それは目的と手段を間違えているだけ」

レクティファールにとって、メリエラの語るこの世界の現実は、所詮他人ごとでしかない。彼の言葉を聞けば、怒りに駆られる者も居るだろう。現実を知らぬ者が何を知ったような口を聞くのか、と。

だが、彼の手の中にある細く白い手は、彼にとっての現実である。そこに刻まれていた痛々しい傷も、彼女の浮かべていた悲しみも。

彼はその現実をどうにかしようと思案を巡らせ、そして彼なりの

答えを見付けたのだった。

「まず、あなたはあなたとして自分を万全な状態にしておくべきだと思います。あなたが倒れてはあなたが救えるかもしれない人々も救えなくなる」

「それは、慰めかしら」

「まさか、あなたを慰められるほど、私は上等な人間ではないのです」

レクティファールは、そっとメリエラの手を解放した。そこには一つの傷も残っていなかった。

「あなたが間違っていたということはありません。傷付くことで得られたものもあったでしょう。あとは、その得たものを上手く使うだけです」

「上手く使えなかったら？」

それこそ、意地の悪い問い掛けだった。

だが、レクティファールはその意地の悪い問い掛けにも笑みを崩さない。

「失敗を得たと思い、その得たものをさらに上手く使うだけです。何度失敗しようとも、諦めようとも、放棄さえしなければ機会は訪れるもの。あなたは未だ生きていて、まだ歩くことが出来て、まだ喋ることが出来る。そして、そうやって穏やかに笑っていられる」

「――？」

メリエラは、思わず自分の顔に触れた。

笑っていたのだろうか、もし笑っていたのなら、それはどんな表情だったのだろうか。

平和だったあの頃と同じ表情だっただろうか、それとも役目として身に付けた令嬢としての笑顔だろうか。

彼女は疑問をそのままに、レクティファールに問い返した。

「――どんな、顔をしているかしら」

レクティファールは、少し考える素振りを見せると、一つ頷いて答えてくれた。

「あなたに似合う、綺麗な笑顔です」

メリエラは、頬に触れていた手に平で熱を感じ、自分が真っ赤に染まった顔をしていると確信した。

◇　◇　◇

心を通わせ、二人の距離は縮まった。

メリエラは少しだけ軽くなった心で、レクティファールに国の現実を話し始める。

皇都を包囲する連合軍。その連合軍と相対する辺境の始原貴族軍。
そして、皇都に立て篭もる当代皇王の支持貴族軍。

補給線の断裂。人質となった皇都。圧倒的戦力差。それぞれが戦えない事情を持つ三つ巴の戦いは硬直し、時間ばかりが過ぎていく。

そしていつしか、五ヶ月が経過していた。

補給を断たれた連合軍の兵たちが暴走を始め、周辺の民間人に被害が出るようになる。

皇都の戦いは一触即発の状態と化した。

◇　◇　◇

「でもね、本当に……これは、所詮わたしたち皇国の問題よ。だけど、今あなたがいる場所は皇国で、きっとあなたはこれらに無関係では居られない」

「――」

レクティファールは彼女の言葉に無言を貫いた。

彼女が心の裡の悲鳴を押し殺して語った内容は、正直彼の想像を超えていた。現実として認識することが酷く困難なほどに、余りのことに悪い夢ではないかと思ってしまうほどに。

彼の生まれた世界は、いや、記憶にある限り、少なくとも以前の彼の周囲は平和だった。

人が人に殺され、女が暴漢に犯され、子供が親に虐げられる世界ではあったが、それでも多くの人々が自分たちが平和の中にいると気付かない程度には平和であった筈だ。

だが、ここは違う。

彼の居るこの部屋からそう遠くない場所で、今も戦いに怯えている人々がいる。そして、今ここにいる彼の周囲に、自分は平和の中にいると思っている人間など殆ど居ないだろう。

哀しいほど空虚で、同時に血の烟る現実感に充ち満ちた現実。

だが、哀しいと思うことさえもがこの世界では不相応なのだ。

そう、これは自分の身に降り掛からない遠くの世界の話ではない。今、彼がいる世界の現状だった。

「――やっぱり、あなたには関係のない世界かしら？」

「――！」

その言葉に、彼女の黄金の瞳を見た。

試すように、侮るように、そして、何故か乞うように。悲しげに細められた金色に、彼は心臓を鷲掴みにされたような気分を味わう。

様々な感情に翻弄されて揺れるその瞳は、決して自分には解き明

かせない答えを求めていた。

「関係……ない訳ではない……でも……」

言葉に詰まる。

答えようとして、答えることが怖かった。

答えてしまえば、もう後戻りは出来ないような気がした。

ついさっきまであれほど良く動いていた口は、現実を認識すると途端に動きを鈍らせた。

「ええ、そうね。あなたは知らない。無知過ぎる。わたしも同じだけど、あなたよりはこの国を知っているわ」

メリエラは身を引き、窓の外へと視線を巡らせた。彼女の世界（げんじつ）がそこにあった。

彼女の目には、レクティファールには見えない世界が広がっているのだろう。

「私は……」

無知を詰られることには慣れていた。

仕事でも、最初はやはりこうしてどうしようもない人間を見るような目で見られたものだ。

だが、人という生き物は永遠に無知ではいられない生き物だった。

良い意味でも、悪い意味でも。

無知で居ることに、恐怖さえ覚える生き物。それが人。

真実を聞き、受け入れることに恐怖はある。

だが、真実を知らずに居ることにも、同じだけの恐怖がある。

そのどちらの恐怖を受け入れ、拒絶するのか――――人の根源的な性質はそこで分かたれる。

彼の本質は――――果たして。

「ならば、私に……あなたの知る世界を教えてもらっても良いですか？」

知らず、只無為に生きることへの恐怖だった。

その恐怖に追い詰められ、総てを知るべきだと彼の本能が叫んでいた。

他の何を置いても、あの悲しそうな瞳を見たくないと、彼の中の何がが唸りを上げる。

「何故？　そして何を知りたいの？」

彼のこれまで希薄だった気配に厚みと重みが増したことに気付いた彼女は一切の表情を消し去り、彼の銀の瞳を見詰めた。

この言葉で彼の為人を見定めよう、そういう意図だった。

彼は彼女の思惑に気付いていたのかもしれない。だが、気付いていなかったのかもしれない。

ただ、彼の持つ答えは一つしかなかった。

「私の生きる道を探す道標。私が望む未来への糧。あなたが求める明日への扉」

そして彼は、そこで一つ吐息を漏らし、続けた。

本能のままに。

意地のままに。

「この世界で私が私として生きるための、総てを」

◇　◇　◇

このときを以て、レクティファールは一歩を踏み出す。

そして彼に与えられたのは、侍女ウィリィアとの学びの日々。

歴史を学び、法を学び、宗教を学び、常識を学ぶ。

〈アルトデステニア〉という国の名前さえ知らず、子どもでも当たり前に知っている常識さえもない彼に、ウィリィアは驚くと同時

に興味を抱いた。

主人メリエラが、レクティファールに大きな関心を抱いていることを彼女は知っていた。嫉妬さえ抱いた。

自分に課した「メリエラを守る」という誓いを侵されるのではないかという疑念が、彼女の心に付き纏う。

それでも彼女は、それを隠し、レクティファールに接する。

彼女は気付かない。嫉妬、独占欲による負の興味であっても、人を変えることはあると。

◇　◇　◇

レクティファールという青年は、常に厭世的な雰囲気を纏っていた。

白龍公の諸侯軍で一兵卒から少将まで勤め上げた城の警備司令の言葉を信じるならば、「一度死を間近に感じたか、それに近い境地に至ったことがある者の雰囲気」ということになるだろうか。

世話係に任じられたことで一日中その姿を見ているウィリィアは、講師として様々なことを教えているとき以外に彼が見せる表情を「まるで死を悟った老人のようだ」と評した。

穏やかで、世界に一つの未練もなく、生きるだけ生きた。数年前に他界した彼女の祖父も、晩年はそのような姿を見せていた。

家を守るに足る後継夫婦と、可愛い孫たち、死に臨むその瞬間でさえ祖父は、人々が羨むような静かな笑顔だった。

そんな祖父と同じような表情を見せる青年に、彼女は言い知れぬ恐怖と嫌悪を抱いた。

「姫さま」

廊下を歩く主人にそう呼び掛ければ、振り返る顔は随分と血色の良いものだった。

つい一週間前ならまるで幽鬼のような蒼白さであったというのに、今ではこのくだらない争いの始まる前とそう違いはない。それを成し遂げたのがあの青年であるとは、城の誰もが認めるところだ。

ウィリィアとて青年に対して蟠りはあるものの、その功績は認めている。

「あ、ウィリィア」

ただ問題があるとすれば、

「彼の様子はどう?」

「……」

最近の主人は、自分の姿の向こうにあるあの青年しか見ていないことだろう。

「――だいぶ食欲も戻りました。もう食事もわたしたちと同じものでも良いかもしれないと侍医殿が……」

「そう、良かった。もうすぐ父上も戻ると思うから、それまで彼をよろしく」

「――はい」

そのまま自室へと向かう主人の後ろ姿を見送るウィリィア。

主人に対する不満が無いといえば嘘になる。

だが、それを表に出すことは憚られ、自然とその不満は別の方向へと差し向けられることになった。

「今日は、皇国法でも勉強してもらおうかな」

彼女のそんな言葉は、誰にも聞かれることなく無人の廊下へと消えていく。

向かう先は、城の資料庫だ。

そこで彼女は分厚い法典を数冊借り受け、かの青年の元へと赴く。

「――――え、これを全部ですか？」

「はい、姫さまのご意向です。これを主要な部分、総て憶えていただきます」

差し出された皇国大法典に顔を引き攣らせたレクティファールは、

何かの間違いではないではないかと何度も確認した。

されど彼の目の前に立つ侍女は厳然として彼の夢想を打ち砕き、さらに数冊の資料を追加する。

「この国で生きていくなら、基本的な法は知っておくべきとのことです」

「正しい、至極正しいんだけれども……」

ずっしりとした重さに、彼の腕が弱々しく震える。

一般人ならば日常生活の上で少しずつ憶えていく法も、彼は一気に覚えなくてはならない。

「あとは、皇室法に関しても追加で憶えていただきます」

「――嘘ですよね」

「侍女は嘘を言いません」

「言って欲しかった、切実に……」

レクティファールは間近に迫った脅威を思い、ぐったりと身体を弛緩させた。

「では、始めましょう」

「はい……」

右手に硬筆を持ち、左手で帳面を押さえるレクティファール。

これが悪意からの嫌がらせであるなら幾らでも抵抗するのだろうが、これらの行いは総てあの姫君の厚意であるらしい。

そうなると、抵抗することは彼の良心に反する。黙って耐えるしか道はないのだ。

「では、軽く各法の触りから」

「はい、お願いします……」

心で泣き、彼は真っ白い帳面に向き直った。

◇　◇　◇

白龍公カール・フォン・リンドヴルム。

リンドヴルム公爵にして、未だ皇王家を見限らずにいる大貴族。

その思惑はただ一つ、国家の安寧のみ。

◇　◇　◇

城の一切を取り仕切る家令から水精湖の対岸の街〈クリアード〉にある商館に出向いていた父が帰ったと聞き、メリエラ慌ててウィ

リィアの代わりとして自分に付いた侍女に身支度を整えさせた。

「髪、肌、服、装身具、全部よし」

その姿を姿見で確認して納得すると、彼女はそのまま部屋を飛び出して城に入ったばかりの父を出迎える。侍女が慌ててあとを追ってくることには気付いていたが、自分の中で渦巻く気持ちを抑え切れなかった。

玄関で外套を脱いでいた二メイテルを超える長身を持つ見た目壮年の男性。彼は貴族伝統の長衣に包んだ身体を慌ただしい足音の聞こえる方向へと向けた。そして、自分よりも色素の薄い銀髪を揺らして走り寄ってくる娘を見ると、慌てて執事に手荷物を預けて大きく手を広げた。

「おいでメリア。儂の可愛い娘よ！」

威厳の欠片もないほど崩れきったその表情は、満面の笑みという言葉がこれほど相応しいものはないと断言出来るものだった。〈クリアード〉にまで随行していた執事はそう思い、これこそが親馬鹿の姿だと改めて確信する。

ただ、父親のそんな蕩けた表情を見た瞬間に娘は急減速。大きく広げられた腕に飛び込む直前にしっかりと停止した。

娘が完全停止した瞬間、長身の偉丈夫が浮かべた完全無欠の笑顔が凍り付いたのも執事はきちんと見ていた。

「――メリア……」

あの方は凍り付いた笑顔の裏で泣いている、執事はそう思った。

ただ、娘はそんな父の姿に一欠片の同情もしなかったらしい。きっと引き結んだ唇を微かに開くと、用件を口にした。

硬く、張り詰めた声音だった。

「父上、先ほど伝えました件についてですが」

「む……」

そんな娘の言葉と表情に、広げた腕を下ろす男。

先のメリエラの言葉の通り、この男性が彼女の父でありこの城の主である第二代白龍公カール・フォン・リンドヴルム公爵である。娘に関することを除けば、皇国貴族の筆頭に相応しい風格と威厳を持つ男だ。

そんな彼は顎に手を当てて少し考えると、金の瞳を細め、娘に向かって低く告げた。

「――正直に言うならば、俄には信じがたい話だ」

「ですが……！」

カールの言葉に噛み付くメリエラ。

だが、自分に対しても意見を曲げず、その目に涙さえ浮かべている娘を見て、カールはふっと表情を緩める。そして、先ほどとは全く違う優しい声で続けた。

決して、厳しさだけが風格や威厳を形成するのではない。

「しかし、我が娘が此度のような重大事を見誤るとは思えん。部屋で詳しい話を聞こう」

「は、はい！」

ぱっと花開くように表情を明るく変える娘。

父親はそんな娘の様子に微笑むと、そのまま娘を伴って城の上層にある自分の執務室へと上っていった。

◇　◇　◇

親子の想いは同じ――この国に平穏を。

しかし、その目標に至る手段には大きな隔たりがあった。

カールは娘の保護した〈白〉を連合軍に差し出すことで戦乱の終結を図り、メリエラは〈白〉を然るべき地位に就けることで国を立て直そうとしていた。

裏で連合軍に物資を送り、始原貴族軍に干渉することで戦線の崩壊を食い止めていたカールは、連合軍の実情も始原貴族軍の現状も知り抜いている。

連合軍の士気は落ち、軍としての規律を維持することも難しくな

っていた。

始原貴族軍もまた、その連合軍の行いを座視することが出来ないでいる。

ここでひとつ切っ掛けがあれば、皇都は火の海になってしまう――それを知るが故に、カールはひたすらに冷たい決断を下そうとしていた。

◇　◇　◇

誰もが笑って終わる結末など現実には存在しない。ならば、泣く人間が一番少ない方法を選ぶのが政治を司る者の役割である。カールは常日頃から自分の後継者である彼女の兄と、彼女自身にそう言い聞かせていた。

しかし、彼の娘は父の言葉に決して頷かなかった。

若者特有の、潔癖さが彼女にはあった。

「ち、父上の言葉は至極ごもっとも……。ですが、〈白〉は――レクティファールはわたしたちに対してなんの害も為していないではありませんか……！　罪には罰を、罰には赦しを与える。それが為政者の務めではないのですか！」

「敢えて言うならば、今、この瞬間にここにいることが罪なのだ、我が娘。儂とてもう少し状況が良ければ〈白〉を殺す算段などせぬ。むしろ、次代皇王として臣下の礼を取り、健やかに養育しよう。だ

が、すでにそのような状況ではない」

〈クリアード〉にて秘密裏に会談を持った連邦の使者は、このまま睨み合いが続くようならば更なる派兵を行って皇都に拘束されている連合軍将兵を救出するとまで言ってきた。

今回は皇都にいる連合軍に対して公爵家に出入りしている商人に依頼して物資を届けさせると約束することでとりあえず話を纏めたが、こんな方法がそう続くはずはない。

最長でもひと月で限界が来る、カールは娘に告げた。

「ですが、それではレクティファールが報われません！　これではまるで、殺すために救ったようではありませんか！」

「お前に救われていなければ〈白〉は死んでいたのだ。ならば、その命存えさせる代償に皇国の礎となってもらうべきだろう」

「父上っ！！」

娘は卓の天板に手を叩き付けて立ち上がった。

涙声で、彼女は叫んだ。

「礎になる理由など彼にはありません！　皇国の皇族でも貴族でも平民でもない、まして誰かに裁かれる理由も罪もないのに、どうして命奪われることが正しいと言えるのですか！」

「正しいとは言わん。だが、必要なことだ」

世の中は正しいことだけで廻っているのではない。間違ったこと、不条理なことで廻っているのだ。

激する娘の泣き声など、為政者としてのカールに何の痛痒ももたらさない。政治とは、過程が正しいか間違っているかではないのだ。それによってもたらされる結果が、大多数にとって良き結果であれば正しい、そうでなければ間違い、ただそれだけだ。

「くっ！　どうしても……どうしても彼を贄とすると仰られますか？」

「他に術がなければそうせざるを得まい。儂はお前が気付かぬ間にかの〈白〉を拐かし、お前が気付いて泣く頃には総てを終わらせる」

恨まれること、憎まれることも役割の一つ。

そしてそれを受け入れることが、父としての愛情だ。

「―っ！」

圧倒的なまでの存在感で目の前にいる父を、彼女は絶望的な思いで睨んだ。

それ以外に、今ここで彼女が出来ることはなかった。

あの自分の手を握って、自分の苦しみを肯定してくれた優しい青年を殺そうとしている父親を前に、メリエラが出来ることはそれだけだったのである。

◇　◇　◇

メリエラは、カールの考えを覆すことが出来なかった。

これまで自らの心の拠り所としてきた貴族としての役割。それを全うするなら、レクティファールを生かすよりも、その生命で国を救うことを選択せざるをえない。

彼女はこのとき初めて、「貴族」という存在の重さを知った。

貴族とは立場でも位階でもない、生き方なのだと。

それを知り、彼女はレクティファールの下へと赴く。

貴族として彼に死を求めるのなら、貴族としてその対価を負わなくてはならない。

たとえそれが、自分の身を費やすことであっても……

◇　◇　◇

痛いほどの沈黙がどれくらい続いたのか、時計のない部屋では判断が付きかねたが、夕食を運んでくる筈のウィリィアが未だ姿を見せないことを考えれば、そう長い時間ではなかったのかもしれない。

いつしかメリエラは、分厚い皇国大法典簡易版を読むレクティフ

ァールを眺めていた。その姿を見ていると、波立つ心が落ち着いた。

「――」

それでもまだ、この部屋に来た理由を発することはない。ただ静かに、見ているだけだ。

レクティファールもそんなメリエラの様子に気付いていたが、特に何か言うことはなかった。この男の場合は単に話し掛ける切っ掛けがなかっただけという理由なのだが、このときだけはそれが正しかったのかもしれない。

沈黙を破ったのは、ようやく覚悟を決めた姫君だった。

「――あなたを、連合に差し出そうという意見があるわ」

再び沈黙が落ちた。

メリエラはレクティファールから向けられるであろう怨嗟の声に耐えるために身を固くしたが、しかし、彼女の想像したような言葉はいつまで経っても彼女を襲わない。

まさか、言われたことを理解していないのか――――顔を上げたメリエラの前で、レクティファールは顔色ひとつ変えずにそこに居た。

「――ほう」

自身の死を告げられて尚も黙っていたレクティファール。そう相槌を打つと、また黙り込んだ。その間ずっと大法典から顔を上げな

かった。

沈黙が怖い。何か言わなくてはならないという強迫観念に駆られたメリエラは、震える声で続けた。

「最長でもひと月、その期限が経過したら、あなたは連合国側に戦犯として引き渡される。多分、皇国と連合国合同の裁判にかけられるわ……」

「それは困りましたね」

やはり、レクティファールは顔を上げない。メリエラは、いっそ罵ってくれと心の底から思った。だが、言葉にすることは出来なかった。たったひと月の期限を得たくらいで、彼に何かを求めることが出来るなどとは考えられなかったのだ。

「ええ、本当に」

レクティファールとて、動揺していない訳ではない、ただ、余りにも現実感がなくて反応のしようが無かった。

一度死んでいるのに、もう一度死ぬと言われて、どんな反応を示せば良いのか分からない。

そんな彼の沈黙をどう受け取ったのか、メリエラは顔を伏せ、両の手を握り締め、涙を浮かべて言葉を続けた。黙りたくない、黙ったら、もう――――意味のある言葉は紡げない。

「どんなに……罪を軽く見積もっても、死に方が変わるだけ。名誉を持ったまま死ぬか、名誉すら取り上げられて死ぬかの違いしかな

いわ……っ」

「そうですか」

レクティファールはここでようやく大法典を閉じ、窓の外に視線を移した。

姫君の言葉を聞いて、頭の芯が氷のように冷えていた。

恐怖よりも、圧倒的な『無』が彼の心を支配している。

この感覚は、二度目だ。

「この風景も、短い付き合いになるのですね」

「――ごめんなさい、ごめんなさい」

彼女は謝ってばかりだと、レクティファールは思った。

謝ってばかりで、こちらの顔を見てくれない。顔を見せてくれない。そちらの方が、彼には辛かった。

「それも、ひとつの終わり方でしょう。あなたの責任ではありません」

「でも……わたしが余計なことをしなければ……」

「そうなったら、もっと前に死んでいただけです。結果は同じではないですか」

違う、そう叫びたかった。

自分が見付けても、父の帰還前に彼を解き放っていれば良かった。神殿に連絡を入れ、保護してもらえば良かった。やりようは幾らでもあったのに、それをしなかったのは焦燥の余り状況を見誤っていたからか、或いは、〈白〉に対する執着が強過ぎたのだろうか。そのどちらでも、責任はメリエラにある。

「でも、でも本当に……」

「お願いですから、泣くのだけはやめてください」

言われ、メリエラは慌てて涙を拭った。

動揺した様子を見せないレクティファールに対し、自分が動揺する様を見せる訳にはいかない。

だがしかし、泰然として死を受け入れるという、メリエラにとって理想とする貴族像が目の前にあるのに、彼女はそれを見ることが怖かった。

自分が余計なことをしたばっかりに余計なものを背負わせてしまった、その事実がどうしても彼女を縛り、責める。とはいえ、レクティファールも姫君が思うほど泰然としていた訳ではない。

（――ここでも終わりか）

何故ここに居るのか知らないまま果てるのは少し心残りだが、既に一度死んだのだと認識した彼に、死は恐怖の対象となり得ない。もしかしたら、本当は死というものが理解出来ていなかっただけな

のかもしれないが、このときの彼は自身が驚くほどに『死』に対して鈍感であった。

それはこの世界に執着するべきものがないという現状と、彼の持ち前の諦めの良さが発揮されていただけであり、別に矜持だとか心構えによって冷静な態度を取っていた訳ではないのだ。そもそも、そんな矜持や心構えがあれば、元世界でももう少しましな人生だっただろう。

「一ヶ月間、わたしが出来る限りの支援をします。望みがあればわたしや当家の力の及ぶ限り叶えます。それで許してもらえるとは思えないけど、わたしに出来ることならなんだって……」

それこそ、身体を差し出せと言われたら黙って差し出す、とまでメリエラは言い切った。

それくらいの覚悟でなくでは、彼女は罪悪感で一言もレクティファールと会話できないし、何より彼女の矜持が自分自身を許さない。

公爵家は兄が継ぐ予定で、そうなれば元々政治の道具として誰かの伴侶になった筈のこの身だ。皇国を救うために政治の道具とされた男に捧ぐことに問題などありはしない、メリエラはそう考えた。

それがある種の父親への反発であることに、彼女は気付いていない。彼女には、父親の行いが本来の貴族の役目さえも他人に押し付けようとしているように思えた。

だからこその言葉、だが、レクティファールはそれを拒んだ。

「それは……私には過ぎた申し出です。救われた命を費やすだけな

のに、そこに対価を求める訳にはいきません」

白皙の美貌と銀の髪、金の瞳。

そして均整の取れた体躯は異性としてひどく魅力的ではあったが、彼女の申し出が贖罪のためと分かった以上望むことは出来ない。自分がいなくなったあと、彼女がいつか後悔する日が来ると分かっていたからだ。

もしも彼女が後悔しないにしても、男として譲れない一線というのはある。そして何よりも、自分みたいな男が汚して良い女性ではないと、レクティファールは自虐的に笑った。

一方死の直前になれば、ひょっとしたらみっともなく彼女を求めてしまうかもしれないと思う自分も確かに存在し、彼はそんな自分を積極的に黙殺した。彼なりの小さな小さな矜持だ。

「今みたいに贖罪に逃げるためではなく、いつの日か心の底から納得して身を任せる相手が出来ますよ。少なくとも、私はそっちの方が嬉しい」

命の恩人が悲しむのは、嬉しいことではなかった。

出会って間もないが、彼女には幸せになって欲しい。

レクティファールにとって、メリエラは少なくともそう願える程度には大切な知り合いだった。

これは正義感だとか、そういった類のものではない。ただ、自分が嫌だと思うことはしたくなかっただけだ。

そこにあるのが恋愛感情であるとしても、彼はそれを否定も肯定もしない。このまま消えればそれで済む話だと思っていた。

（想い、想われることがどれだけ幸運か、知らない訳ではないですしね……）

女々しいことだと思う。他人を想うことが出来ないことを、他者のせいにするのだから。

しかし、そんな自分でも譲れないものがある。

何も無い自分の中にたった二つだけある確かな記憶。

この愛らしく儚げな姫君と、ちょっと気の強い侍女。

自分の世界のたった二つ確かな存在。それぐらい、守らせてくれても良いではないかと思った。

「――ありがとう、って言うべきなの？」

俯いていたメリエラはようやく顔を上げた。レクティファールを上目遣いで見ながら、小さく笑って首を傾げる。無理をしていると、一目で分かった。レクティファールはメリエラをそのままにはしておけず、彼女の月明かりに輝く銀髪に手を伸ばした。

彼女の問いに答えながら、彼はメリエラの髪を撫でる。

「嬉しければありがとう、多分、それだけで良いんじゃないですか？」

さらさらとした銀髪は、レクティファールにとても心地よいと思わせた。出来るなら、もう少し触っていたいと思うほどに。

だが、彼はそんな誘惑を振り切ってその手を引っ込めた。メリエラが少しだけ残念そうに表情を曇らせたが、彼はそれを気のせいだと決め付ける。そう思わなければ、分不相応なことを考えてしまいそうだった。

「私が前居た場所では、意味のある死なんてそうそうあるものではありませんでした。だというのに、ここでは一国を救うなんて大きな意味を与えられた。これは運が良いと言えませんか？」

言ってから、心の中で叫んだ。本当は、国なんてどうでも良い。

でも、今の自分にとって一番大事な人を守れるなら、この大して意味の見出せない生命を費やすに足るのではないだろうか。

あの空虚な世界のように、ただ漫然とした死を賜るよりも幾らか“マシ”なのではないだろうか。

◇　◇　◇

生を実感出来ないから、死を恐れることがない。

それは異常なのか、それとも生き物としてあたり前のことなのか。

メリエラは死を恐れる素振りを見せないレクティファールに、自

分の理想とする貴族像を重ねた。

そんなメリエラの内心に気付かないレクティファール。彼は、メリエラに一つの望みを伝える。

それは彼にとってこの世界で生きるための大切な糧。たとえそれが、ひどく短い生であったとしても。

◇　◇　◇

こんなことなら軍学校の同期に色々聞いておくべきだったと後悔している銀色の姫君に対し、レクティファールの言葉が与えた衝撃は激甚だった。曰く、名前を教えて下さい、である。

「――名前？　え、名前？」

「ええ、名前教えて下さい。恩人の名も知らず死ぬのは流石に気分がよろしくないので……」

「な、なんだぁ……」

がくりと崩れ落ちるメリエラの姿に、男は首を傾げるだけだ。彼女の中で繰り広げられた葛藤の内容を知れば多少は態度が変わったかもしれないが、良い変化が起きるとも思えない。

とりあえず、そんな男だという評価を下された自分に落ち込んだことだろう。

彼にとって彼女は自分の命を懸けるだけの価値があるのだ、そんな女性に破廉恥漢と思われていたらまず間違い無く落ち込む。

「それで、教えてもらっても？」

「も、もちろん！　というより、今まで名乗ってなかったこっちが謝らないといけないくらい」

「いえ、ウィリィアさんに偉い人だと聞いていたので、名前を名乗らないのが当たり前なのかと……」

名前を知っているのが当たり前の人間というのは居るものだ。

少なくとも、この白龍公領の領民で彼女の名を知らないのは小さな子供と別の領地から来た者くらいなのだろう。レクティファールはそう考えて、敢えて名を聞かなかった。

聞くことが失礼に当たるのではないかと思っていたのだ。

「名を尋ねられて怒るって、それってどんな不作法者？　まあ、それはいいとして、きちんと自己紹介させて貰うわね」

メリエラは体に染み付くくらい厳しく教え込まれた流麗な動作で、レクティファールの前に立った。銀の髪が流れ、衣裳が踊る。レクティファールはその光景に目を奪われた。

「〈アルトデステ二ア皇国〉公爵、カール・フォン・リンドヴルムが一女、メリエラ・リリ・リンドヴルムと申します。以後、見知り置き下さいませ」

完全無欠のお姫さま振りを発揮して緩やかに頭を垂れる姫君――
――メリエラ・リリ・リンドヴルム。

皇国四龍姫と呼ばれる公爵家の姫たち。その中の一人であり、その戦場での姿に敬意を込めて『戦女神』とも呼ばれる女性がそこにいた。

「――これでよろしい？」

頭を下げたまま小さく舌を出してレクティファールを見上げるその姿に、レクティファールはくくっと喉を鳴らして笑った。

彼も威儀を正し、名乗り返す。

「丁寧なお名乗り恐悦至極。私の名はレクティファール。一切の肩書きもないこの身なれど、あなたの名を知ったのはまさに天の与えた大いなる恵み。今後ともよろしくお願いいたします」

「こちらこそ、皇国の英雄になられる方に名を憶えてもらって嬉しいわ」

そう言って笑い合う二人。

その姿は、単なる友人同士のじゃれ合いにしか見えなかった。

それが幸福であるかどうかは別にして――――

◇　◇　◇

大層な肩書きなど必要としない相手。

彼女は始めてそんな相手を得た。

それが彼女の運命の始まりであり、同時に彼らの人生に於いて決して忘れられない戦いの始まりでもあった。

ときに皇国歴二〇〇九年。

秋も間近に迫る頃だった。

◇　◇　◇

自らの称号である『白龍公』の名を使い、始原貴族軍側の主立った将に書簡を送ってからしばし、彼は瞑目したまま己の脳裏で皇国の現状を分析していた。

すなわち、本来国土を防衛するべき国軍が政治的混乱によって動くことが出来ず、更に国家の藩屏として録を食んでいた筈の貴族の一部がそれを支援した結果、皇都の鼻先まで他国の軍隊に攻め込まれてしまったという現実についてであった。

確かに首都の眼前まで他国の軍に攻め込まれたとはいえ、〈アルトデステ二ア〉国軍である皇国三軍そのものが敗退した訳ではないから、皇国そのものが軍事的敗北を喫したとは言い難い。皇王の支持貴族の軍隊は確かに連合軍に鎧袖一触粉砕されたが、逆徒と化した貴族の軍勢など皇国軍全体と比較すれば、その総兵力一割にも満

たない寡兵でしかなかった。

それに支持貴族軍の主力は、各支持貴族の所領から強制的に徴兵された農民兵と、金で雇われた傭兵である。

専門の教育を受け、日々訓練に励んでいる職業軍人がその大多数を占める皇国軍とは、たとえ同じ数であってもその戦闘能力に大きな差がある筈だ。確かに傭兵の中には腕の立つ者も多く、皇国軍には長期契約を結んだ傭兵たちで編成された外人部隊も幾つか存在する。彼らの能力は皇国軍でも高く評価されており、同じ階級の皇国軍人と大差ない待遇を与えられていた。

しかし如何に精強な彼らとて、肩を並べて戦うのがつい最近まで鍬を握って畑を耕していた農民では、総ての力を出し切るのは難しい。それどころか信用出来ない味方を与えられたことで士気が下がったことも容易に察することが出来る。

つまり、支持貴族軍は己の面目を保つために数だけは揃えようとして、誰の目にも明らかな失敗を犯してしまったのだ。軍で正式な高級士官教育を受けた者や、常日頃から私設軍を常備している一部の貴族ならば、絶対に犯さない類の間違いだった。

「――愚かな連中だ」

全く度し難い。

カールは執務机の引き出しに入れておいた蒸留酒と硝子杯を取り出そうとして、しかし娘に執務中の飲酒を止めるようきつく言い含められていたことを思い出し、不機嫌そうに鼻を鳴らした。約束を破ったら二度と「父」とは呼ばないと言われれば、娘を溺愛するカ

ールは従うしかない。

「くそ」

八つ当たりだと自覚しながら、彼は自分の中の苛立ちを皇都に篭る馬鹿共に向ける。貴族的と言ってしまえばそれまでだが、カールは貴族という人種に些か理想を求め過ぎるきらいがあった。大権を甘受するには重責を果たさなくてはならないという考えだ。

皇国二〇〇〇年の歴史をこのような形で危機に晒すとは、民と国を護持する貴族には不相応な連中だ。たとえこの戦生き残っても皇国の益にはなるまい。ならばいっそのこと――――この時点で、彼はすでに支持貴族たちの処遇を決めていた。

皇王家を見限り、独立を宣言した三公爵も似たような考えを持っているということは、つい最近自分の元に届いた書簡から容易に読み取れた。いつか誰かの目に晒されることを警戒して直接的な表現は避けていたが、カールがその真意を読み取ることに少しの問題もなかった。

そして先ほど送った始原貴族への書。これで支持貴族の運命は決まったようなものだ。

カールの送ったものと同じような文面の書簡が残る三公爵からも届けば、始原貴族たちは内心はともかく表向きはカールたち貴族議会の重鎮の決定に従うだろう。四公爵にはそれだけの影響力があり、また、その影響力を維持するに足る軍事力を持っている。

この戦、四公爵は一兵たりとて出していない。

それはつまり、貴族軍で最も精強と名高い公爵軍が、無傷のまま四つ残っているということになる。

他国正規軍を相手取って一切の不足無し、必要とあれば三日以内に皇都に向けて進発出来る準備を整えているカールの軍隊は、この戦争に一石を投じる存在だった。

（だが、連合軍に更なる増援があれば、一層状況は悪くなり、我が軍を含めた四公爵軍を差し向けても意味が無くなってしまう）

四公爵領から皇都まではいずれも歩兵の行軍速度で五日、騎兵でも二日は掛かってしまう。

龍族などの空に生きる者たちならばどれだけ飛行速度（あし）の遅い者でも一日と掛からず皇都に辿り着くことも出来るだろうが、龍公爵の軍とはいえ、彼らを擁する部隊は決して多くない。万単位の軍勢を相手取るのは荷が勝つというものだ。

唯一の救いは、連合軍の増派に必要な大義名分が何処にもないことだろうか。

友好国を混乱に陥れている独裁者を討つという戦略目標が自国民に支持され、他国の領土に侵攻することが出来た連合軍だったが、目標の喪失という形でその目的を果たすことは既に不可能となった。そうなれば即刻撤退するのが筋というものだが、連合軍の今次遠征に掛かった戦費は、連合国の国内総生産の五分を超えるのではないかという試算が出ている。

元々が複数の国家の集合体で、それ故に地方政府がある程度の力を持つ〈アルストロメリア民主連邦〉と、似たような国家体系の周

辺国によって編成された連合軍である、その戦費負担に関しては色々揉めたらしい。

単に費用だけ出して兵を送らなかった国もあれば、義勇兵という形で兵士のみ送り付けた国もある。

そして、結局は限りのある同じ木の実を取り合っているのだから揉めない訳がない。

〈アルストロメリア民主連邦〉は皇国との経済的な繋がりを強化した上で賠償金を手に入れる予定だった。しかし、皇国が示した遺族補償金という名の賠償金は、連合軍の戦費負担を補填するには全く足りない金額だった。第一、遺族たちに支払う補償金を国家の予算として分捕る訳にもいかない。

結果、侵攻を主導した〈アルストロメリア民主連邦〉が、本来得られた筈のものも得られないと知った諸国から突き上げを受けていることは想像に難くない。カールはそこに連合軍撤兵の糸口を見付けようとしているが、外務院の知己から得た情報では、連邦政府と軍部が今後の方針で対立していて交渉どころではないらしい。

何としても皇国から譲歩を引き出したい連邦政府と、兵力が消耗する前に早期撤退したい軍部。

戦費による経済情勢の悪化に伴う民衆からの怨嗟に怯えて自己保身に走る政治家と、多大な予算と長い時間を掛けて育てた兵士をくだらない政治の犠牲にしたくない軍の対立とも言える。

皇国内でも、連合軍と裏取引した始原貴族に対する不満があり、同時に支持貴族に対する断罪を叫ぶ過激な一派も貴族議会や国民議

会には存在する。現在国民議会で少数派の彼らが各派閥の支持を集めて多数派になるかどうかは今後の動静次第だが、このまま睨み合いが続くようならそれも現実味を帯びてくる。そうなれば、国権の発動に伴う全面戦争の可能性すら考えられるだろう。

現在皇国軍は最高司令官たる皇王不在を理由に部隊を動かしていないが、現実は、皇王によってその座に据えられた上層部が、今や完全に敵に回った皇国三軍の統率を放棄して自分の身を守ることに躍起になっているからだとカールは知っている。

だが、国軍が動かないのはこの状況では好都合だった。

この戦争、皇国は正規軍が動いていないからこそ、連合国に余計な貸しを作らずに済んでいる。

連合軍に被害が出てもそれを行ったのは貴族の私兵である。その補償を行うのはその貴族であり、皇国は貴族を抑えられなかった責任は負うが、その貴族を罰するという形で正当性は主張出来るのだ。無論、主張が可能であるだけであって当然諸外国が納得するとは考えられないし、他国に対する責任を負わないという愚行は亡国の行いである。

現実的に考えれば、とても実行できる手段ではない。

だがそれでも、今回の戦争は国家間の同意に基づいて連合軍が皇国領内に侵攻したわけではない。

所詮主権のない始原貴族が勝手に約したことに則って行われた侵攻であり、皇国は、その気になれば連合国を領土侵犯で追求することも不可能ではないのだ。もっとも、連合国に対する追求と同時に

皇国は始原貴族の裏切りという事実を認めなくてはならないが、貴族は貴族であって皇王ではない。代わりは居るのである。

始原貴族は名であって、爵位ではない。

始原貴族の家が取り潰されれば、その名を継ぐ別の貴族が生まれるだけのこと。

しかし、同じようなことが無駄に繰り返されるのなら、総ては無意味。

「――やはり、我ら貴族も変わらねばならん」

二〇〇〇年の歴史は決して失ってはならぬ誇り。

しかし、ただ古いだけのものはいつか腐り朽ちる。

歴史を抱きながらも変わっていくことこそ、真に歴史を作るということだとカールは考えていた。

幸い、自分以外の三公爵も同じ考えを抱き始めている。カールに匹敵する権力を持つ彼らが悪しき権力者の因習に囚われていないと分かっただけでも今後の改革に弾みがつくというものだ。

白龍リンドヴルム。

黒龍ニーズヘッグ。

紅龍スヴァローグ。

蒼龍レヴィアタン。

龍族故に矜持が高く、人間たちが望んで止まない権力や富というものに対する執着が薄いからこそ、彼らは友人でもあり主人でもあった初代皇王によって皇国を守る盾として今の領地と地位を与えられた。

初代皇王は嘗て人間であったことで、自分たち短命の種族が心に飼っている『欲』という化け物を怖れていた。

自分たちを信じて共に戦ってくれた皇国の民を守るために、己が従えた四頭の龍をその守護者としたのだ。

「ここで皇国を失っては建国皇陛下に申し訳ない」

そして、皇国を守れという主人の命に背くことになる。

龍が、その名と存在に賭して誓った約定を違えるなどあってはならないこと。

いくら代替わりしようとも、〈白龍のリンドヴルム〉の名と存在が生きる限り、約定もまた生きているのである。

カールは他の総てを捨ててでも皇国を守るという誓いを己に課した。

そして、その手段は彼の手元にある。まるで運命に導かれたように、〈白〉が龍の巣に落ちてきた。

「〈白〉の若者よ、怨むなら怨むが良い。儂が死して冥界に居るお

前の膝下に傅いたとき、儂は総てをお前に捧げ罪を償おう。だが今は、その命皇国の礎とさせてもらう」

カールは自分の執務室から見える庭の長椅子に、銀の髪と白の髪を見付けていた。

彼自身が遠い日に経験した歳の離れた友との語らい。今、自分の娘が同じ経験をしていると思うと、寂しさと同時に嬉しさを覚えた。

そういえば、あの友も――――

「今の奴と同じように、笑っていたな」

すでにこの世界ではない何処かの世界に旅立った友を想い、カールはゆっくりと目を閉じた。

◇　◇　◇

ゆっくりゆっくりと時間が過ぎていく。

レクティファールに短い生を遂げさせようとするメリエラと、その主人の意思を最優先するウィリィア。

二人と共に日々を過ごし、レクティファールはかつて得られなかった安息を実感する。

確実な死に向かう猶予期間であるとしても、それは三人にとって掛け替えのない時間だった。

盤上遊戯に興じ、近くの森を散策し、秋の実りを眺めた。

レクティファールは自らに迫る死を実感出来ないでいたが、メリエラは時折暗い表情を浮かべていたし、ウィリィアはそんな主人の様子に一抹の不安を抱いていた。

水面上は穏やかに、水面下ではもがくように、三者三様の気持ちを抱いたままに日々は移ろう。

大きな歪みを抱えたまま。

第一章ダイジェスト：プロローグ～第九話　後編

カールの眉間に深い皺が刻み込まれる光景を、報告を携えてきた部下は背筋が凍る思いで見ていた。

自らの主人が古代史に出てくるような傍若無人な龍族でないことは知っているが、それでも主人の怒りが彼にとっての不幸であることに違いはない。普通の人間に、龍族の発する気迫は最早毒である。

「――西方の国境線に連合軍の大部隊が集結。これは冗談などではないんだな？」

「も、勿論です！」

こんな命懸けの冗談は言わない。

悪名高き龍族の逆鱗に触れるような真似を、その部下である自分がする筈がなかった。

「総数は六〇〇〇〇を超え、尚も続々と連合各国より増援が送られてきているとの情報もあります。主力が連邦ではなく〈シェルミア共和国〉だという情報もありますが、これはまだ裏付けが取れていません」

各国の諜報機関とて、防諜には多大な労力と予算を注ぎ込んでいる。そう簡単に情報が引き出せるとはカールも考えていない。だがそれでも、少しでも情報を得たいと思うのは彼の慎重な性格故だった。

しかし、無い物ねだりをするような性格でもない。彼はこの場でこれ以上の情報を得ることを諦めた。

「――まあいい、北方国境線に帝国の軍勢が集結との報はどうなった？」

「帝国で征南軍――我が国に対する侵略軍が新たに編成されたのは確実です。帝王の署名入りの文書が北方諸国に届けられたようで、諸国の動揺も大きいかと」

「ふん、我らを魔物と断じて軍を発する。帝国の国是とやらも面倒なことだ」

皇国の北方に広がる凍土地帯を国土とするのが、この大陸を嘗て支配していた旧アルマダ帝国の後継を自称する新生アルマダ帝国だった。

もちろんアルマダ帝国の名を名乗るだけの国力はあるが、皇国や連邦と比較して圧倒的という訳でもない。皇国と連邦を合わせれば、帝国の国力に食らいつくことは出来る。

しかしその豊富な地下資源と、魔法技能者が少ないという国内事情故に発達した科学技術は侮れない。

帝国は、皇国や連邦よりも遙かに多い兵士の数と優れた武器の性能でその軍事力を支えていた。

しかし、帝国には他国にはない宿痾とも言える問題がある。

この国は建国時より人間種至上主義なのだ。

辛うじて亜人族の一部が人間と同じように扱われているが、魔族や龍族、獣人族などの人間族以外の種族は国民として認められない。それどころか旧帝国崩壊の原因となった害悪だと国の公文書で明言しているのである。つまり、彼らにとってカールたち皇国の民は、国家として討つべき害獣。

今に至るまでも帝国とまともな国交を結べていない理由は、ここにあった。

「あれだけ散々痛めつけられてもまだ、我々が黙って征伐されるだけの獣と思っているのか、あの連中は」

他国との緊張状態にあるだけあって、皇国の北方国境警備軍は皇国軍の精鋭たちが集まっている地方軍だ。貴族軍も優秀な人材を集めているらしく、そのため、陸上に脅威らしい脅威がなく、南洋海上輸送路を警備している海軍が主力を担う南方方面の陸軍との練度の違いは思わず笑ってしまうほど。

東方も海しかないために海軍が主力になってはいるが、海を挟んで〈イズモ神州連合〉と国境を接しているため、それなりの部隊が揃っていた。

ともあれ、北方の皇国軍が帝国の侵攻を許すことはない。事実、今までも何度か国境付近で戦闘が起こっているが、これまで一度たりとも皇国の国土を侵されたことはなかった。

皇王不在の時期を狙ったのだろうが、このままなら今までと同じように国境付近で迎撃して撃破するだけだ。

「しかし、万が一ということも考えられる。念のため北方の情報量も増やせ」

「は」

部下が頭を下げて退出するのを見送ったカールは、そのまま椅子の背もたれに身体を預けて目を閉じた。

皇国を取り巻く情勢は依然予断を許さないが、あの〈白〉の若者を連合側に引き渡せれば問題のほとんどは解決する。新たな皇王の即位まで時間が空くだろうが、内憂を駆逐できればそれくらいの時間は稼ぐことが出来る。

（――そろそろ、あの若者に挨拶をしなくてはな……）

今までは娘の気持ちを慮って敢えて〈白〉に接触してこなかったカールだが、死を強要するという立場上何の挨拶もしないという訳にはいかない。白龍公は礼儀知らずと思われたまま死なれては、それこそ公家の恥だ。

最後の望みを聞いてやるというのも悪くない。

娘がすでになんらかの願いを叶えているかもしれないが、娘には出来なくても自分には出来ることがあるだろう。

廟代わりに城でも建てるという手もあるな――カールはそんなことを考えながら、思考の海に沈んでいった。

◇　◇　◇

それから二日後。

白龍宮に衝撃が走る。

「正体不明の騎兵部隊、連合軍陣地を急襲」

連合軍はそれを皇国側からの攻撃と判断し、始原貴族軍に反撃を開始する。

カールは執務中、慌てて走り込んできた部下からその報を聞いた。

与えられた衝撃に耐えることしばし、彼はすぐに何人かの部下に指示を出すと、〈白〉の青年の部屋へと足を向けた。

彼には、最早取るべき手段は一つしか残されていなかった。

◇　◇　◇

黒の第二月二一日の始原貴族軍首脳会議は紛糾していた。

自軍の一隊と思わしき騎兵部隊が、連合軍に対して誰が見ても明らかな先制攻撃を仕掛けたからだ。

連合軍は一気に緊張を高めており、今この瞬間に皇都や始原貴族軍に対して攻撃を始めても不思議ではないほど。いや、すでに一部

の部隊が自衛のために始原貴族軍に対して攻撃を仕掛けているという情報もあった。

始原貴族軍は、辛うじて自軍の反撃を抑えることで事態の泥沼化を防いでいた。

そんな現実を見て、「あの部隊は何処の所属だ」「指揮官は誰だ」と、最早貴族としての対面など総てをかなぐり捨てて怒声を上げる出席者たち。

彼らが集まった天幕は、始原貴族軍本陣の中でもっとも喧しい場所だった。

「何処の所属かまだ分からんのか！？　連合軍からはすでに状況の説明と謝罪、容疑者の引き渡しを求める使者が何度も訪れているんだぞ！　今のような散発的な攻撃ではなく連合軍総てが攻撃に転じれば、我らとて黙ってやられる訳にはいかん！」

天幕内の長机に座る貴族たち、その中でもっとも上座に座っていた一人の男が、立ち上がりながら大吼した。

始原貴族軍の主立った諸将の中で、もっとも武に優れていると言われているエルベンハイト辺境伯、ミッドガルド侯アルブレヒト・フォン・ヴィーヴルだ。

巨人族特有の銅色の短い髪と熊のような身体に角張った顔、白毛交じりの眉は太く、濃い髭を蓄えたその姿は、皇国始原貴族の一つであるミッドガルド侯と言うよりも、皇国内の山間部に出没する山賊の親分と言った方が人々の納得を得られるだろう。

領地を持たない下級貴族の次男として生まれた彼は、十五歳で皇国軍の門を叩きその後二〇〇年間皇国軍の将として勤め上げた。長命な種族が大半を占める皇国にあっても、二〇〇年という経験年数を持つ者はそうそう居ない。軍の退役定年は短命な種族に合わせてあるので、彼のように一〇〇年を超える勤務年数を持つものは全体的に見れば少ない。

しかも、その二〇〇年間はほとんどが戦場にいた時間だという。

その戦場で幾度も武勲を挙げ、断絶したヴィーヴル家の名を与えられ、当時の皇王からも幾度か直接言葉を賜るという栄誉に浴した彼が、その功績によって始原貴族の一人に列せられたことは、ある意味では当然のことかもしれない。

彼が今佩いている大剣も皇王から恩賞として下賜されたものだ。本来なら家宝として屋敷に飾るような剣を戦場に持ってくる剛胆さがあってこそ、今の地位にいるのだろう。

この場でもっとも軍事に明るい彼は、間違いなく始原貴族軍を束ねている者の一人と言えた。

「――現在調査中だと何度も言わせるなミッドガルド侯。少なくとも書類上は、あのとき攻撃を仕掛けられるような位置にいた騎兵部隊は存在しない。しかも連中、魔導師を連れていたというではないか。騎魔混合、そんな部隊は我が軍に存在しない筈だ」

ミッドガルド侯の正面に座る金髪の女将が、腕を組んだまま告げる。

妖精種らしい色素の薄い肌、肩口で切り揃えられた金髪は輝きこ

そ失っているが、その仄かな色合いは彼女に武人としての風格を与えていた。

アストリア侯タチアナ・リアト・フォン・ハルゼ子爵。

始原貴族アストリアの名を持つ彼女は、現黒龍公の後輩にあたり、かつて皇国情報院に奉職していた人物だった。

国内外の情報の管理を担当する情報院で経歴を全うした彼女は、退職後亡き夫の家であるハルゼ子爵家を継いで領地の経営を行っていたが、その後しばらくして、請われる形で皇王の私的諮問機関の一員となった。

その直後に発生した帝国との大規模な紛争に和平交渉の使者として派遣され、その類稀な交渉能力で捕虜全員の奪還を果たした上、交渉に当たった帝国の使者に頭を下げさせるという偉業を成し遂げた。

そのとき、交渉で彼女が使ったのはたった数枚の書面であったというから、その能力は皇国どころか大陸で随一と言っても過言ではない。

書面の内容は明らかにされていないが、彼女が独自の繋がりを通じて手に入れた帝国内の機密情報だったのではと言われている。

実際に内容を知っているのは彼女とその腹心だった男性、後は彼女から報告を受けた先代皇王だけだ。

「アストリア殿……それは分かっているが……！」

「なればこの状況を打開する方に能力を傾けられよ。貴殿が知りたいことは、私が責任を持って確かめる。――それでは不服か？」

ミッドガルド侯の呻きにアストリア侯は酷く冷淡に答える。それでも同じ始原貴族として長い付き合いのあるミッドガルド侯に、アストリア侯に対する敵意が芽生えることはなかった。

少し付き合えば、アストリア侯の物言いが天下万人総てに等しいものだと分かるからだ。皇王相手の時ですら、公式の場以外では同じ口調であるとミッドガルド侯は先代皇王本人から聞いて知っていた。

そして、アストリア侯と自分の皇国に対する愛情に差がないことも知っている。

「――相分かった。アストリア殿の言を信じよう」

「感謝する」

軽く目を伏せて謝意を示すアストリア侯。

ミッドガルド侯はそんな同輩の態度に苦笑しながら、椅子にどっかりと座った。

「問題の部隊の調査はアストリア侯とその配下の者に託すとして、今後の我らの方針についてはここで大凡の同意を得たい」

連合軍はこのとき、始原貴族軍に対して謝罪と容疑者の引き渡しを要求していた。それが受け入れられない場合は本国と連携を取った上で皇国に対して宣戦を布告するとも。

始原貴族たちには、すでに連合軍の増援部隊が西方の国境線を越えたという情報が与えられていた。その数およそ六〇〇〇〇。帝国に対するために北部に軍の部隊を残していることを考えれば、この数は連合軍の外征戦力の半数に等しい。

これまでは友邦である皇国に対する義理を果たすため軍を発しなかった国々も、この連合軍に対する始原貴族軍の攻撃には非難の声を上げている。このまま皇国が有効な手を打てなければ、これらの国も皇国に軍を進めるだろう。

過去の皇国であれば、このような小国の反抗を許しはしなかっただろう。だが、今の皇国にこの連合軍を相手にする余力はないと言っていい。国が割れ、首都を賊徒に占領され、さらに専制君主制を標榜する国家でありながらその象徴たる国主が存在しない。大陸でも有数の大国である皇国がここまで侮られている理由は、概ねそれで説明で出来る。

だが、今まで皇国の属国に等しい扱いを受けてきた小国が、ここに至り宗主国に牙を剥いたのには別の理由がある。

彼ら小国は、この大国が割拠する大陸に於いて何処かの大国の庇護下になければ国を保てないのだ。それが何れの国家であるかは問題ではない、自分たちを守り、その代償として自分たちを支配するだけの力があるかどうかが問題だった。

そして皇国は、この条件から外れつつある。

国内の治安悪化に伴い経済活動が鈍化し、国の力の象徴である軍事力も皇王不在の影響で分裂している。さらには他の大国から侵略

を受けており、この事変を切っ掛けとして皇国そのものが失われる可能性すら出てきた。こんな状況では親皇国を声高に叫ぶなど自殺行為である。

ならば、今までの義理を捨てて新しい宗主を戴こうと考えても不思議ではない。

国家間に於いて、このような行動は多少非難されることこそあれ、決して行ってはならない行為ではない。このまま皇国が消え、連邦や帝国が伸長するようなことになれば、彼らは滅びるしかないのだから。

「〈マイヤー大公国〉、〈ブラッドレー公国〉、自由都市〈ルルイエ〉、すでにこれらの国は我が皇国に向けて軍を発した。〈ザクセン〉や〈アルマイア〉も軍の招集は終わっていよう。我らには時間がない、だが、容疑者が確保できていない現状ではその引き渡しは不可能。事実関係が明らかになっていない以上、謝罪も不可だ」

そもそも皇国が攻撃を行ったということ自体が欺瞞である可能性もある。連合か、或いは帝国か、それ以外のどの国が黒幕であっても、この一件を利用して皇国の頭を抑えに掛かるはずだ。

そうなれば、皇国の歴史は終わる。

「ことは皇国の存亡に関わる。――そうだな、エイメルシア侯……！」

ミッドガルド侯が静かな怒気と共に長机の中程に座る一人の翁を睨んだ。

出席者たちはその視線を追うように、エイメルシア侯と呼ばれた老人に目を向けた。

「――そうでしょうな」

静かに頷く老人。

ほとんど青みがかった白髪に支配された頭髪は、その老人の積み重ねてきた人生を物語っていた。短命な人間種であれ、それ以外の長命種であれ、老人となったときの姿は変わらない。その過程が異なるだけだ。

オイゲン辺境伯、エイメルシア侯ハイデル・ツー・リッテンハイム。

この場にいる皇国始原貴族の最後の一人にして、今回の連合軍侵攻の原因となった人物だった。

「貴殿が連合軍と取引を行い皇国に招き入れたこと、この場にいる全員が知っている。四龍公もご存じだろう」

「――それが自然ですな」

エイメルシア侯は周囲から向けられる憎悪にも等しい悪意を一身に受けながらも、その顔色は変わらない。人間種としては高齢の七〇歳を越え、その人生の大半を皇国の政に捧げてきた男だ。この程度の敵意などそよ風のようなものだった。

「なればどうする!?　皇王陛下がお隠れあそばされても尚連合軍は残り続け、今こうして皇国の危機を招いた。その責は重いぞ……

!?」

ミッドガルド侯にとって、エイメルシア侯は戦友にも等しい存在だった。

共に皇国を支えてきた朋友である筈だった。

だからこそ、今回の一件はミッドガルド侯にとって許し難い裏切りのように感じられた。

エイメルシア侯が皇国を売るような真似をする筈がないとミッドガルド侯は今でも信じている。しかし、現実として皇国に危機が訪れた今、エイメルシア侯の責任は重大だった。

「それがしの命一つで解決せよとでも仰られるか?」

エイメルシア侯とてミッドガルド侯の言いたいことは分かる。

しかし、本来なら自分の命一つで片付く問題だったのだ。だが、皇国の民を苦しめたあの偽皇の死が総てを狂わせた。死んでも尚、皇国に災厄をもたらすか――――彼は心の奥底で皇王に対する憤怒を滾らせていた。

それが逆恨みであることは理解している。老い先短いこの身で皇国の未来を贖えるならと、連合国と取引した自分に責任がないとは言えない。

だが、すでにエイメルシア侯の命一つでどうこうなる問題ではなくなってしまった。

「出来るのならば貴殿はすでにそれを行っているだろう。今ここに

貴殿が居るということは、最早貴殿にこの争乱を解決する手段はないということだ。違うか？」

今まで黙っていたアストリア侯が目を閉じたまま問う。

「然り。なれば、この戦の後にこの命御国の礎として捧げることで、諸兄らと共に戦うことを許して欲しい」

「それが貴殿の責任の取り方と言うのなら、それもよろしかろう。私はそう思うが、諸君らは如何に？」

アストリア侯の問い掛けに、長机に座る貴族たちが静かに首肯した。

此度の責任は免れぬ、されどエイメルシア侯が今まで挙げた勲功を鑑みれば、皇国に対する最後の奉公を認めることくらいは許されるだろう、とその場にいた者たちは考えたのだった。

エイメルシア侯は胞輩たちの無言の許しに瞼を振るわせながら深く頷き、次に顔を上げたときには鋭い眼光で居並ぶ諸将を見渡した。

「――それがしの最大の過ちは、諸兄ら皇国の友人を信じられなかったことだろう。諸兄らを信じ、皇王陛下に諫言することを厭わなければ今日の問題はなかった。すでに状況は最悪と言って過言ではない。それでもここにお集まりの諸兄らは、皇国の為に命捧げる覚悟がおありか？」

「貴殿に問われるまでもない！　先代皇王の御代より御国のためにこの身を捧げてきた。この国難に背を向けるような真似をするものか！」

エイメルシア侯の言葉に答えたのは、やはりミッドガルド侯だった。

立ち上がって胸を張り、破鐘のような声で天幕に集った貴族たちに己の決意を叫んだ。

それに引き摺られる形で出席者たちから同意の声が上がり、最後に一人残ったアストリア侯がゆっくりと組んでいた腕を解いた。そしてゆっくりと立ち上がり、今まで閉じられていた切れ長の目を鋭く輝かせて声を上げた。

「――諸兄らの決意、しかとお聞きした。しからば、このまま今後の方針について意見を纏めたい。よろしいか？」

次々と挙がる同意の声。

彼女はその声に満足げに頷くと、ミッドガルド侯と視線を交わして自らの方針案を話し始めた。

第一に、これ以上の言い掛かりを避けるためにも、連合軍の攻撃に対しては守勢を貫くこと。

第二に、今回の問題の発端となった部隊の洗い出しを総ての貴族たちの軍で大々的に行うこと。

第三に、皇都に籠もる反乱貴族に対しては逆徒の討伐という形を取ること。

この三つが大方針として提示され、出席者たちに受け入れられた。

特に第三の方針については、この戦争が皇国内の問題であると主張するために不可欠なものだった。

今の時点では始原貴族軍が連合軍に攻撃を仕掛けたことが事実かどうかまだ分からない。それでも連合軍の増援が国境を越えたのは、皇国内に駐留する友軍と皇国国民の安全を確保するためだと発表されていた。

正体不明の武力集団が跋扈しているとなれば、それは進軍の理由になるということだ。

無論、このような論法が通るのも、皇国正規軍が機能不全に陥っているのが原因である。正規軍が機能を取り戻せば、連合軍の駐留を認める理由はなくなり、その撤兵を求めることが出来るはずだった。

しかし、始原貴族たちの呼びかけにも皇国軍は動かない。

本来皇国軍を統帥するべき皇王がいない上、三軍の統帥組織が皇国軍を動かすことを頑なに拒否しているからだ。

皇国軍が動けば連合軍は撤退し、賊徒とされた支持貴族とその協力者は、始原貴族と更迭されていた元の軍上層部によって法廷に引きずり出されて裁かれる。この期に及んで軍を動かさなかっただけでも十分に重罪だ、少なくとも自分たちの身の安全が保障されない限り、現在の軍上層部は軍を動かさない。

先に崩御した皇王が何を思って彼らに軍を預けたか定かではないが、少なくとも、軍本来の役割を果たさせるだけの能力はなかったようだ。

たった一人の男がこの国に与えた傷は、自分たちが思っているよりずっと深いのかもしれない――――三人の始原貴族は同じように考えたが、結局それに対する答えが出ることはなかった。

各部隊の再編成と動揺する兵士たちへの対応、その他この混乱に乗じて軍規を乱そうとする不逞の輩に対する処分内容を定める。混乱しているのは始原貴族軍全体だと、この場に集まっている者たちは正しく理解していた。

◇　◇　◇

始原貴族軍が連合軍の猛攻に耐える中、事態は大きく動き始める。

多くの悲劇の渦中で、ひとりの青年が歴史の表舞台に立とうとしていた。

◇　◇　◇

扉を叩く音に、レクティファールとメリエラは顔を見合わせた。

ついでに扉の横に立っているウィリィアも驚いたような顔で扉を見詰めており、この部屋に客が来るということがどれだけの異常事態か容易に察することが出来る光景だ。

しかし、いつまでも扉の前に客を立たせておくことは出来ない。

メリエラはレクティファールが頷いたのを見ると、一言「どうぞ」と告げた。

その言葉を受けてウィリィアが扉を開け、入ってきた人物を見て慌てて頭を下げた。

「父上……！」

メリエラもまた、来客の正体を知って驚きの声を上げて立ち上がる。彼女の座っていた椅子が、くぐもった音を立てて倒れた。

これまで彼女の父がこの部屋に訪れたことはなかった。その父親の態度がレクティファールに対しての『生け贄』という扱いを示していると、彼女はずっと思っていた。

そして、レクティファールもまた同じように考えていた。

白龍公は、自分を決して人とは扱わないだろうと。ここで何不自由ない生活を送らせているのは、単に自分たち皇国のために死に往く存在に対して最低限の礼儀を貫いているだけだと。

そんな白龍公がここに訪れた理由に、レクティファールは心当たりがあった。

すなわち、自分がこの世界での唯一の役目を果たすときが来たのだ。

レクティファールは驚いて椅子を蹴倒したメリエラにちらと目を向けると、ゆっくりとした仕草で寝台から降り、立ち上がろうとした。

その動きを慌てて止めたのはメリエラだった。病み上がりであることはカールも知っている。たとえ相手が誰であっても病人と知って訪ねてきた以上、寝台の上で応対しても失礼には当たらない。

しかし、レクティファールは頭を振ってメリエラ耳だけに聞こえる声で囁いた。

「――私も男の一人な訳で、そして、男にはどんな時でも見栄を張らなくてはならない相手が居るのですよ」

これもあなたたちを守るという約束の一環です――レクティファールの自嘲気味な声音に顔を歪め、メリエラはレクティファールに肩を貸した。ありがとう、というレクティファールの声に答えず、彼女は自らの父をきっと見据えた。

これが、今彼女の出来る唯一の意思表示だった。カールの眉が、ぴくりと動く。

レクティファールは、自らの前に立つ偉丈夫に対して真っ直ぐに立ち、ゆっくりと頭を下げた。

「――お初にお目にかかります、私はご息女に生命を救われた者、名をレクティファールと申します。白龍公、カール・フォン・リンドヴルム公爵とお見受けいたしますが」

「如何にも。儂がリンドヴルム公爵のカールだ」

ただの人間と侮るような真似をカールはしなかった。

だが、それだけだ。

龍族が人間を相手にするとき、人間はその圧倒的な存在感の差に震えが止まらないという。

それは本能的な恐怖と言っていいだろう。旧帝国時代よりもさらに昔、龍族が人間種と敵対していた頃、龍族とは人間にとって神に等しい存在だった。

気紛れで殺されることもあった。

人間の万の軍勢がたった一頭の龍に蹂躙されることもあった。

しかし、レクティファールの中にはそのような歴史的背景をもつ恐怖はない。

だが、それでも生物としての格の違いは本能的に理解できた。

これは自分が抗って良い存在ではない、と彼の中の生物としての本能が訴えていた。

「――っ」

汗が滲み、目に痛みが走った。

レクティファールは、その痛みで自分がカールの前で顔を上げられずにいるということに気付いた。

そして、カールはそんなレクティファールの態度を一切気に留めていない。

（取るに足らないとでも言いたいのか……？）

確かに今の自分の態度を見ればそう思うだろう。

死を目の前にして逃げ出さないよう、こうして心を抑え付けておこうということなのか――――レクティファールは辛うじて思い通りになる思考の中でそう思った。

そして、それは大きく外れていないだろうとも思う。

（私の価値は死ぬことのみ、そう言いたいんだろうなこの人は……）

怒りも憐憫もない。

ただ、黙って自分を見据えているだけのカールの態度から、レクティファールはそんなことを悟った。そして、自分の隣に立っているメリエラと、カールの背後で自分を見ているウィリィアを目の動きだけで確認し、大きく息を吐いた。

その音に、カールがぴくりと反応したのが分かった。

（別に、死にたくないとは言わない）

どうせ一度死んだ身だ。

たった二人の世界のために、死んでやる。

そして人生で一度だけ、退かずに意地を通してやろうじゃないか。

レクティファールは腹の底に力を入れ、ぐっと身体を起こした。

目の前に立つ、カールの金色の瞳を真っ直ぐに見た。

レクティファールの視線とカールの視線が互いを呑もうとせめぎ合った。

「命を救って頂いたこと、感謝の念に堪えません。しかし、ここに公がいらっしゃったということは、私はここから移動させられると考えてよろしいのですか？」

「――……」

レクティファールの震え一つ無い声音に驚いたのは、メリエラとウィリィアだった。

〈白〉である以外普通の人間と変わらないレクティファールが、齢一〇〇〇年を越える龍族のカールに怯え一つ無い声で問い掛けている。その事実は、二人にとって驚き以上の何かだった。

衝撃だったと言ってもいい。

今に至るまで、カールを目の前にした人間は大半がその言葉に震えながら頷くことしか出来なかった。

数少ない例外の人間たちも、人間としては人生の半ばを越えた年齢の者たちだけだ。レクティファールのような若い人間がカールに怯えないなどということは、これまでになかった。

いや、怯えていてもそれを態度に表さないだけなのだろう。だが、

同じことの出来る人間がこの国にどれだけ居るのだ。

二人は驚きに満ちた顔をレクティファールに向け、その成り行きを見守っていた。

「私の認識に間違いが？」

黙り込んだままのカールに、レクティファールが重ねて問う。

その言葉を聞いても尚カールはレクティファールを黙って見下ろしていたが、ふっと引き結んでいた唇を解くと、小さく口の端を上げた。

カールの両親と亡き二人の細君以外の者では気付けない、小さな笑みだった。

それは娘であるメリエラでさえ気付かぬ笑み。

人間という種の大多数を保護するべき民としか見てこなかったカールにとって、レクティファールの態度は新鮮で、同時に痛快だった。

「――いや、正しい。貴卿の言う通りだ」

カールがレクティファールに対して『貴卿』という、敬意を持った言葉で呼び掛けたことにメリエラとウィリィアは再び驚愕した。

初対面であっても公爵としての態度を崩さず、相手を格下に見るカールには珍しいことだったからだ。死に往く者に対する敬意だけではない、別の何かを感じた。

「出発はいつですか」

レクティファールはメリエラに目を向けながらカールに問うた。

別れの挨拶は出来るのか、と聞いているのだ。

そんな自分よりも娘を優先したレクティファールの態度に怒ることもなく、カールは首を振った。

「――悪いが、今すぐにでも出発したい。用意はこちらでする、ついてきてくれ」

「父上ッ！」

レクティファールを促して退出しようとするカールに、メリエラだけが反発の声を上げた。

ことの中心に居るレクティファールにはカールに反発する理由がない、ウィリィアは、たとえ反発する意志があっても立場上声を上げることは出来なかっただろう。

そんな中で、彼女だけが自分の意志で声を上げることが出来た。

「せめて、明日まで待つことは出来ないのですか？　今から出発しても、すぐに野営することになります。なら……」

確かに、今から出発してもすぐに日が暮れる。

レクティファールに何かあっては困るのはカールの筈だ。

しかし、彼女の父は、娘に対して苛立ち以外の感情が込められていない眼差しを向け、一言で斬り捨てた。

「余計な心配は要らん」

「な……」

何も知らないお前は黙っていろという父の目に、メリエラは絶句した。

このような態度は父らしくない。そこまで考えた彼女は、カールが焦っているということに思い至った。

そうだ、父は焦っている。

泰然自若を絵に描いたような父がここまで焦る事態、それは皇都戦線に異状があったということではないか……！

「ち、父上！」

再び歩き始めたカールの背に、メリエラは追い縋るように呼び掛けた。

立ち止まったカールは、今度こそその苛立ちを隠さずに娘を睨んだ。

「――ッ！　お、お願いがあります……！」

その眼光に圧倒されながらも、彼女は一人の友人のためにそれに

抗った。

「わたしも共に、彼と共に連れて行って下さい！」

共に行って何が出来る訳でもない。

だが、ここで行かねば彼の友人を名乗ることが出来なくなると思った。

「父上！　お願いいたします！」

深々と頭を下げた娘を見て、カールはレクティファールに目を向けた。

娘にこれほど想われているのだからさぞかし良い気分なのだろう――――そう思っていたカールだが、レクティファールの表情は硬かった。カールにはそれが少し意外で、少し腹立たしかった。

カールの娘に対する愛情に翳りはない。むしろ、年を経ることにその愛情は深く、大きくなっていく。

これまで男に興味を示さず、軍務と政務に掛かりきりだった娘の未来に不安を抱いたこともある。だが、そんな娘に安心していた。まだ、娘は自分のものだと思えたからだ。

しかし、そんな幻想は崩れ始めたのかもしれない。

そう考えると、娘が始めて執着した男が娘に対してどのような感情を抱いているのか、彼は酷く気になった。

だから、こんな言葉が出たのだろう。

「――良いだろう。ついてくるといい。急いで準備を整えて屋上に来るように」

そう言って部屋を出るカールに、娘の感謝の言葉が投げ掛けられた。

◇　◇　◇

レクティファール、メリエラ、ウィリィア、そしてカールの向かった先、それは聖都〈セオトコス〉の中央、エルメイレ山の頂に聳える白亜の神殿。

四界神殿の総本山であるミストラル＝ヘルメ大神殿だった。

そこでレクティファールは、四界神殿総大主教ミレイディア・キール・ルプスブルグ＝ヘルメと出会う。

彼女はレクティファールの来訪を喜び、彼に次代の皇王としての素質ありと認める。

それは、過酷な運命への道標。

二度と戻れない運命を突き付けられ、しかしレクティファールは頷いた。

「――恐ろしくても、不安でも、私は諦めても放棄はしません。諦めは今を捨てて別の道を探すこと、放棄はあらゆる未来を捨てるこ

とですから」

◇　◇　◇

レクティファールが着替えている最中、カールたちは別室で茶を供されていた。

茶菓子は神殿で採れた香草を使った焼き菓子で、食べれば甘さのあとにすっとした清涼感が広がる。

「――む、これは中々……」

「ウィリィア、これってうちでも作れるかなぁ」

まるで姉妹のようにお茶を飲み、菓子を食べる二人。カールといえば持ち込んだ書類を確認しつつ、それに花押を書き入れる作業に没頭していた。レクティファールが〈白〉であると確認されたことで、彼の仕事量は一気に膨れ上がった。

だが、カールはそれを精力的にこなしていた。彼の意識にどんな変化が現れたのか、メリエラとウィリィアはそれが手に取るように分かった。

カールは嬉しいのだ。自分の愛する国が、民が、幸せになれる道が見付かったから。

これまではレクティファールを生贄にするしか無かったが、皇都戦線で戦端が開かれてしまった今、レクティファールを時期皇王と

して立てた方が皇国の利は大きいし、何よりも皇王不在という最大の懸念事項を解消出来る。

仮にレクティファールを差し出したとしても、それは時期皇王を失い、さらに連合との関係改善のために国の権益を削るだけになってしまう。時期皇王と国益を敵国に売る、それによって齎されるのは民の落胆と猜疑心だ。

レクティファールが神殿に来るまでなら、連合からすれば、戦線が硬直したままならレクティファールという戦犯を捕らえたことで撤退の理由にすることは出来た。皇国側としても公的に次期皇王ではない〈白〉を失っても大きな痛手は無かった。その気になれば、レクティファールを今上皇王の行動の黒幕として処罰することも可能で、つまりは今上皇王の行動は〈白〉としての立場を悪用したレクティファールに言葉巧みに操られてのこと、今上皇王はその責任を感じて自害したとして皇王家に傷を付けない形で事態の収拾を図ることも可能だったかもしれない。

しかし、ミラ平原で戦いが始まり、レクティファールが〈白〉として認められた今、この戦いを皇国の傷を一番浅く済む形で治めるには、皇太子の名の下で国を纏め、総てを今上皇王の責任にして国の体面を保ち、連合の戦意を完全に砕く。もっと正確に言えば、皇太子が民の支持を失った支持貴族を撃滅し、駐留する理由を失った連合軍を撤退させることが一番良い。

それに、この神殿に向かう前に部下から齎された一つの情報。連合軍の一部に帝国側と通じて争いを大きくしようとした勢力が居たという情報を上手く使えば、連合軍に対しても優位に交渉を進めることが出来る。

カールにとって、謀略陰謀は大いに望むところだ。それでことが上手く行くのなら、自分が泥を被るくらいどうということはない。これまでの苦痛に満ちた日々に較べれば、それは薄汚くも楽園に思えるだろう。

◇　◇　◇

巫女姫リリシア。

四界神殿の実務の最高責任者が総大主教なら、巫女姫は四界神殿の象徴。

次期皇王と〈皇剣〉の間を取り持ち、その継承を支える存在。

それだけを求められる存在。

◇　◇　◇

ぱちぱちぱちと、小さな拍手が聞こえてきた。

その音に釣られて視線を巡らせた五人のその先に、ミレイディアとは違う意匠の長衣を着た少女が居た。

年の頃は一四、五。儚いという印象を見る者に与える薄絹重ねの衣と、床に流れるほどの長さを持つ、色素の薄い翡翠の髪。その瞳は閉じられており、しかし顔には笑顔があった。

「――……」

何度か口を開けては閉じる。

明らかに言葉を発したと分かるその動きは、一つの音も奏でることはなかった。

しかし、ミレイディアにはその声が聞こえていたらしい。

「ああそうだよリリシア、こいつが新しい〈白〉だ」

ミレイディアがレクティファールの両肩に手を置いて、少女の前に押し出す。

レクティファールは少しだけ逡巡したが、ぎこちない笑みを浮かべて会釈することは何とか出来た。

「白龍公たちは知ってるね。四界神殿の巫女姫リリシア。あたしの妹だよ」

「――……」

裾を持ち上げて一礼。

楚々としたその仕草に、レクティファールはほうと声を漏らした。

「巫女姫は結婚するまで名前以外の呼び名を持たないから、リリシアって呼んであげて。あと、気付いていると思うけど、この子は巫女姫の『お役目』で喋ることと見ることが出来ない。でも、周囲の

状況は感覚で分かるらしいから、見えている人間と同じ扱いで大丈夫だよ」

巫女姫の空間認識能力は常人の比ではないという。

それが『お役目』に付随して与えられた特殊な能力であることは神殿内でも知られているが、詳しい理由は巫女姫本人とその相方となる者以外に明かされないため、ミレイディアも良くは知らないらしい。

「――……」

レクティファールが自分を見ていると理解していたリリシア。

口を開き、やはり音のない言葉を発した。

「――？」

だが、聞こえない。

リリシアもレクティファールの動きから自分の声が聞こえていないことを知ると、少しだけ表情を曇らせた。

ミレイディアが慌ててレクティファールに通訳する。

「儀式の介添えをさせていただきます、って言ったんだよ」

「あ、ああ、そうでしたか……！　こちらこそよろしくお願いします」

レクティファールは慌ててリリシアに頭を下げる。

リリシアは少しだけ苦いものが残った笑みで、それを受けた。

「そろそろ聞こえると思うんだけどねぇ……でも、相性の問題ってのもあるし……」

ミレイディアがレクティファールの背後でぼそぼそと独りごちる。

彼女の経験上、どちらかが接続を拒否していない限りは、念話が聞こえるようになるまではそう時間は掛からない。

聞こえるようになって貰わないと儀式に支障が出る――――ミレイディアは儀式の時間をずらすことも考え始めた。

「――……」

「――あ」

三度レクティファールに話し掛けたリリシア。

また通訳しなくてはとミレイディアが口を開いた瞬間、レクティファールが呆けたような声を出した。

一瞬訝しんだ彼女だが、すぐにその理由に思い至った。

ようやくだ、ミレイディアはほっと溜息を吐いた。

「聞こえたのかい？」

念のためにと、レクティファールに確認するミレイディア。

レクティファールは、こくこくと頷いた。

「はっきりとは聞こえませんでしたが、体調はどうですかと聞かれたような……」

「――！」

レクティファールの言葉にぱっとリリシアの表情が輝いた。

どうやら正解だったらしい。

〈――良かった……ちゃんと聞こえるんですね……〉

「あ、今度ははっきり聞こえました」

先ほどより明瞭に脳裏に届いた声。

レクティファールは、少女の澄んだ声は、空気という媒介がなくとも十分に魅力的だと思った。

〈では、改めて名乗らせていただきます。四界神殿巫女姫、リリシアと申します〉

「どうもご丁寧に。自分は、今はレクティファールと」

〈存じ上げております。遠い遠い世界の方だと四界の方々からお聞きしました〉

リリシアのその言葉を聞き、レクティファールは四界の主と呼ばれる者たちのことが気になった。

どうやら異世界を含めた物ごとを一番知っているのは彼らしい。

「猊下、お久しぶりでございます」

〈白龍公もご壮健そうで何よりです。されど此度の争乱、公もさぞお心を痛めておいでしょう〉

「いえ、猊下のご心痛に比ぶれば鱗を撫でられたようなものでございます」

カールの挨拶にも巫女姫として完璧な返答を返すリリシア。

その上品な物言いを聞き、レクティファールは思わずミレイディアを見てしまった。

姉妹なのに――目がそう言っていた。

「――儀式中に手が滑っても良いってことなんだね？　真っ白小僧」

「いえ滅相もない」

半眼になったミレイディアの威圧感に屈したレクティファール。

あっさり撤退を開始した。

情けないと思うなら思えばいい、怒った女性は怖いんだ。レクティファールは誰にともなくそう心の中で呟いた。

〈姉さん、レクティファール様苛めてるの？〉

「失礼なこと言うんじゃないよ、この若造に世の厳しさを教えてやってるんだ」

呆れを多分に含んだ声を姉に向けるリリシアと、ふいと視線を逸らしてふて腐れるミレイディア。

申し訳なさそうに自分を見るリリシアの優しさが心に染みた。だから、少しだけ見栄を張ることにする。

「お姉さんは私を心配して下さったのでしょう。良いお姉さんですよ」

〈そうですか……レクティファール様がそう仰るなら……〉

渋々といった風ではあったが、リリシアはレクティファールの顔を立ててくれたらしい。そんな心遣いにもちょっとだけ涙が出そうになるレクティファールだった。

◇　◇　◇

地下深くへと向かう階梯で、レクティファールは〈皇剣〉の歴史を知る。

〈皇剣〉を知り、その秘密を守り続ける四界神殿典部。そこに属する神官が語る歴史を、レクティファールは黙って聴き続けた。

初代皇王が旧帝国の切り札として開発されていた概念兵器を開発途中で奪い、それを完成させて〈皇剣〉と名付けたこと。

同時期に製造された〈皇剣〉の兄弟機が暴走し、旧帝国の帝都とその周辺地域を丸ごと消滅させたこと。

現在に至るまで概念兵器を完成させた国も組織も存在せず、〈皇剣〉だけが唯一稼働していること。

その強大な力を制御するための儀式に耐えられず、皇太子となる前に生命を落とした者がいること。

儀式を乗り越え、〈皇剣〉と一体化したとして、普通の生き物としての死は望めないこと。

兵器として生きるしか、道はないこと。

総てを聞き、レクティファールは薄暗い地下の階段で最後の選択をする。

そこには、諦めることさえ諦めた決断があった。

◇　◇　◇

地下深くにあるはずのその空間は、真っ白な光に満たされていた。

光源を探して見上げた天井は距離感が掴み難いほど高く、軽く目眩がした。しかし、その天井の一部が光を発していることは分かっ

た。

よくよく見れば、天井を支える柱にも光源が取り付けられている。

どういう原理で光を発しているのかは分からなかったが、直視することが難しいほどの明るさだった。

「――来たね」

端から端までどれくらいの距離だろうと周囲を見回していたレクティファールの耳に、ミレイディアの声が届いた。

反響を重ねて届いた声だったが、それでも声を発した人物が何処にいるかということは分かった。

この広大な地下空間の中央。そこに複数の人影が見えたからだ。

レクティファールはそちらに向けて歩き始めた。

「必要なことは聞いたかい？」

人影たちの中心。

単なる石とも違う、光沢のある何かで出来た床に描かれた精緻な魔法陣。その中央にミレイディアは居た。

周囲にいるのはリリシアとベールで顔を隠した神官たち。

神官たちはいずれも自らの身長を優に越える杖を持っており、全員同時にレクティファールに黙礼した。統一された衣裳を纏い、体

型も似ているため酷く個性の薄い神官たちに少しだけ驚いたレクティファールだが、それを敢えて問おうとは思わなかった。

その代わり、ミレイディアの問いに答える。

「典部神官殿にある程度は」

「聞いた上でここに居るなら、それで十分さ」

ミレイディアは笑った。

嬉しそうでありながら、同時に悲しそうな笑み。

その表情に、レクティファールはミレイディアが総ての歴史的事実を知っているのだと悟る。

「今まさに戦争中だってのに、過去の戦争の罪過を聞かされるってのは嫌な気分だろうけどね。これも儀式の一環だと思ってくれると助かる」

「むしろ、この上なく判りやすい説明になったと思うことにしますよ」

「そうかい」

苦笑。

お互いに同じ表情を浮かべ、二人は少しだけ笑い合った。

ミレイディアはレクティファールが総てを知って尚ここまで来た

ことに純粋な安堵を覚え、レクティファールはミレイディアという秘密の共有者を得ることに深い安心感を抱いた。

「二〇〇〇年の記録ってのは栄光や幸福だけじゃない。罪科も不幸も何もかも、誰の主観もなくただ記録されたもの」

〈皇剣〉という無機物が無機質に、一片の抒情も無く記録していった代々の皇王の記録。

記憶ではなく記録を選んだ初代が何を意図したか、代々の皇王はその答えを得ることが出来たのだろうか。それは神殿の総大主教が幾つもの代を経て尚、疑問に思っていることだ。

もしかしたら、答えが得られるかもしれない。

心の片隅でミレイディアは期待していた。

「受け継ぐだけじゃない。あんたもここに記録を残すことになるかもしれない」

この青年がどんな記録を残すのか、それを受け継いだ次代の皇王が何を思うのか。興味は尽きない。

「どんな歴史書にも勝る事実。たとえそれがたった一人の見詰め続けた世界だとしても、それはこの国の記憶なんだ」

道を誤らないようにという道標かもしれない。

進む先は地獄であるという警告かもしれない。

孤独こそ皇の真の友人であるという教えなのかもしれない。

唯一の記録、故に其を受け継ぐのは当代ただ一人。

「負けるんじゃないよレクティファール。この儀式が終われば、あんたは皇王の座という真の孤独と、〈皇剣〉という真の同胞を得るんだ。最初で最後の孤独な戦い、勝たなきゃ男が廃るってもんだ」

〈――姉さんの言うとおりです。わたしも儀式の一翼を担うことは出来ますが、レクティファール様ご自身がこの試練に打ち勝たなくては、結局わたしの存在など意味はありません〉

リリシアは、その決して開かぬ瞳で白を纏う青年を見詰めた。

きっとミレイディアと同じように強い意志を秘めた瞳があるのだろう――――儀式の中心たる青年はそう思い、その瞳を見てみたいと思った。

多くの人は輝く宝珠に魅せられる。そして、同じく光輝の心にも惹かれるものだった。

『欲望』と言うには浅く、『興味』と言うには深いその感情。

自分には無い何かを求め、それを目の前にして湧き起こるもの。

人は、或いはそれを『憧憬』と呼ぶのかもしれない。

「この子が巫女姫の役目を果たしてここから出られるか、これもあんた次第なんだ」

巫女姫としての役目を果たすためにこれまでの人生を抛ってきた彼女に、レクティファールだけが新たな人生を与えられる。

だが、リリシアが本当に望むのは新たな人生などではないのだろう。

〈姉さん、わたしは……姉さんと一緒に……〉

そう、彼女は一人で神殿を出ることを望みはしない。

離ればなれだった姉妹がこうもお互いを想い合っている。それは、供にいる時間や互いの抱く感情がその繋がり総てではないことの証拠ではないだろうか。

ミレイディアは妹の頭を撫でると、優しげに微笑む。

「――リリシアが居なくなれば、あたしがここにいる理由も殆ど無くなるさ。お互い役目を果たしたら、どっか連れてって貰おうか。勿論、全部こいつ持ちでね」

酷いな、そう思いながらも、いつかきっと実現させたいと願う。

もしも実現できたらな、自分は自分を誇れるかもしれない。それはひどく楽しみだ。

「――そうなったとき、リリシアさんが望むならそうしましょうか」

だから、約束しよう。

小さな小さな約束を。

あなたが微笑むのなら、それはきっと自分にとって幸福なことだから。

〈――わたしは……この神殿しか知りません。それでもよろしいのですか？〉

困惑したように自分を見上げるリリシアに、レクティファールは笑って答えた。

その柔らかな髪を撫でながら、頷いて。

「私も似たようなものだから、ミレイディアさんに色々案内してもらうとしましょうか……きっと楽しいですよ」

〈は、はい……！　きっと！〉

嬉しそうに笑うリリシアの姿に、ミレイディアも同じく嬉しそうな笑みを浮かべた。

そしてそんな二人を見て、レクティファールも笑みを深める。

これから命を懸ける青年の、心からの笑みだった。

◇　◇　◇

立ち向かうは世界最強の兵器。

嘗て大地を砕き、海を割り、天を穿った概念兵器。

それはまだ目を覚まさず、ミレイディアの手にある。

その眼前に立ち、ちっぽけな剣を握りしめるレクティファール。

やがて始まる儀式。魔法陣の光に包まれ、レクティファールはミレイディアの振るう〈皇剣〉を受ける。

幾度も幾度も、そのたびに〈皇剣〉は目覚め、レクティファールにその存在を誇示する。

吹き荒れる風の中で、ミレイディアは〈皇剣〉の目覚めを確信した。

彼女は躊躇いなく、目覚めた〈皇剣〉をレクティファールの右目に〈皇剣〉を突き立てた。

魔法陣の外に弾き飛ばされるミレイディア。

残されたのは、レクティファールとリリシアの二人のみ。

◇　◇　◇

（レクティファール様！）

リリシアは柄を強く握り締め、〈皇剣〉をさらに深く突き刺す。

それと同時に大きくなる叫び声に追い立てられるように、彼女は小さな身体でさらに刃を押し込んでいく。〈皇剣〉と候補者の合一が進まなければ、リリシアの預かる〈力〉とて意味を成さない。

実際に身体の中に埋まっていくわけではないとはいえ、異物を挿入されることへの拒否反応が起きない訳ではない。

融合率が一定の値を超えれば巫女姫の持つ力で〈皇剣〉を制御、安定化させることが出来るが、しかし、そこに至るまでの融合は候補者一人の手に掛かっていた。

〈レクティファール様！　頑張って下さい！〉

聞こえているかも定かではない。

それでも叫ばすにはいられなかった。

あと少し、あと少しと〈皇剣〉を押し込み、溢れる血に顔を汚しながらリリシアは叫び続ける。

あんなに優しく笑う人を、傷付けたくはない。

だけど、この一度だけは自分が傷付いてでも成し遂げなくてはならない。

〈こんな儀式すぐに終わらせて一緒に出掛けましょうレクティファール様！　何も出来ないわたしですけど、お弁当ぐらい作れるようになります！　あなたが隣に居てもいいと仰って下さるなら、いつまでもお支えします！〉

どうしてそこまでこの青年に拘るのか、正直自分でもよく分からなかった。

優しくしてくれたからなのか、巫女姫として自分を見なかったからなのか、考えても考えても答えが出ない。

（でも、一緒にいてみたい）

大神殿の書庫には多くの書物があったけれど、目の見えないリリシアにはあまり縁のある場所ではなかった。

或いは、仮にその書庫で彼女が文学を嗜んでいたとしたら、気付いたかもしれない。

このとき、少女は青年に恋をしていた。

それは〈皇剣〉の器たる青年に、彼女の中で多くを占める四界の力が引き寄せられた結果だ。

歪められた恋心と言う者もいるだろう。紛い物と笑う者もいるだろう。だがそれでも、少女の恋は事実であり真実。

歴代の巫女姫の中には、候補者と儀式以前に想いを交した者が居た。それはこのときのリリシアと同じ状況だったのかもしれない、しかし、その巫女姫は生涯その事実に気付かなかった。

後に夫となった候補者と確かに幸せな日々を送ったからだ。

リリシアが己の役割として皇王の隣に立つことを選ぶのか。　己

の望みとして皇王の傍らに佇むことを願うのか。

総ては、儀式が終わったあとのことだ。

〈レクティファール様！　わたしはここにおります！〉

今確かなことは、リリシアという少女がレクティファールという青年を守ろうとしていること。

そして、青年もまたリリシアという少女の笑顔を見てみたいと思っていることだ。

（姉さん……）

嘗てミレイディア・キールにとってリリシア・キールが唯一の妹であったように、リリシアにとって、ミレイディア・キール・ルプスブルグ＝ヘルメは唯一の姉。

自分以外の誰かが姉を姉として幸せには出来ない。

自分のために総大主教にまでなった姉。

そんな姉ともう一度ただの姉妹として過ごしたい。

総大主教と巫女姫というしがらみを取り払い、もう一度家族に戻りたい。

（――わたしは、ただのリリシアでいい）

望みはそれだけ。

巫女姫の候補としてこれまで一度たりとも自分の将来を考えることはなかった。

巫女姫としての公務を果たしながら、来たるべきときに備えるだけ、継承の儀を成功させることだけが生きる理由だった。

そしてその役割を果たしたなら、今度はリリシアとしてこの青年の元に行く。そうなったとき、この青年はきっと自分を巫女姫としては見ないだろう。

ミレイディアの妹として、ただのリリシアとしてだけ見てくれると思う。

（レクティファール様）

それは過ぎた望みだろうか。

皇太子となるこの人の隣でただのリリシアになることは無理だろうか。

（レクティファール様……！）

天を仰ぎ、膝を着いて絶叫するレクティファールの手をひび割れた儀礼剣から引き剥がし、両手で包み握り締める。

ぴくりと、レクティファールの手が動く。リリシアはそれに気付き、さらに力を込めた。

「――ぅ、あ、ぁぁあああああああああッ！！」

リリシアが手放した〈皇剣〉が、ゆっくりと沈んでいく。

それは、レクティファールが自分自身で〈皇剣〉を受け入れていることの証。

同時に〈皇剣〉に貫かれていない左眼に金の光が走る。

縦に割れた瞳孔、黄金の龍瞳がそこにあった。

〈あと少しです、レクティファール様！〉

さらに猛威を増す暴風に耐えるため、リリシアはレクティファールの身体にしがみついた。

自分よりも遙かに大きな背中に手を伸ばし、唇を噛んできつく抱きしめる。

暖かい、そう感じた。

「――ッ！！」

血の涙を流し、それでもこの人は自分に応えてくれた。

なら、自分は総てを賭してこの人を助けよう。

〈――！〉

〈皇剣〉の鍔から先が光の粒子へと変じていく、それは暴風の中にあってもレクティファールを中心にして旋回し、少しずつレクテ

ィファールの左眼に潜り込む。その瞳に皇国皇王家の紋章でもある十字の星が輝き始めたのを見て取り、リリシアは声無き声で祝詞を詠う。

〈――在れ、在れ、在れ、この地の光、この地の星、この地の闇、この地の月――〉

導く者よ。

導かれる者よ。

命果つるまでこの地の道標になる者よ。

我は汝と共に在るモノ。

汝が望むモノになるモノ。

我は希う。

〈――闇の内より光照らす者よ。我らと共に――〉

我と共に。

〈――在れ――〉

集束する爆光。

中央に向けて渦巻く風。

リリシアはその中で己の唇を噛み切った。

「――ッ！」

一瞬痛みに顔を顰め、それを堪えて顔を上げる。

滴る血で唇を湿らせ、彼女はレクティファールの首に腕を巻き付けた。

〈レクティファール様、失礼いたします！〉

その声は自分への叱咤でもあったのだろう。

彼女は躊躇う一部の感情を無理やり抑え付けると、レクティファールの唇に自分のそれを押し付けた。

「――――！！」

接触と同時にリリシアとレクティファールの間に〈力〉の連結が発生。

金の龍眼の瞳孔が一気に収縮する。

リリシアはレクティファールに向けて意識が流れ出す感覚を最後に、意識を失った。

◇　◇　◇

「よう、兄ちゃん」

見覚えのある石造りの大広間。

その中心に立ち、レクティファールは一人の男と相対していた。

肩に届く白い髪を一つに束ね、真っ白い装束に身を包んだ男。その姿を、レクティファールは知っている。

「ああ、そんなに驚くことじゃないぞ、皆、『俺』とは一度必ず会うことになってるんだ」

「――どちら様ですか」

『自分と同じ姿をした』男に対し、レクティファールは警戒心も露に身構える。この状況、この時期、警戒しない方がおかしい。

男はレクティファールの質問に腕を組むと、少し唸り、何か思い付いたとでもいうように人差し指を一つ立てた。

「うーん、そうだな。最初の皇王の、皇王になる前の記憶とその他おまけってところかな」

「初代、皇王ということですか」

レクティファールは重ねて訊ねた。

「違うな、皇王になった『俺』を皇王になる前の『俺』は知らない。俺には記憶するっていう機能がないからな、こうして話していることも、一度眠ったら殆ど忘れちまう」

男は楽しそうに肩を揺らし、レクティファールに笑い掛けた。

「何故、ここに居るのかって顔だな」

「――察しが良くて助かります」

「はは、礼を言われるほどのことじゃないさ。俺も、これまでの皇王も、本質的には似たようなもんだからな。仲間、同胞って言っても良いかもしれない」

組んでいた腕を解き、男はレクティファールに一歩近寄る。

レクティファールは腰を落とし、男の動きに警戒を強めた。

「おいおい、そんなに警戒するなよ。お前、今まで一番警戒心の強い奴だな」

「一応、責任があるので」

「生き残るって責任か？」

その問いに、レクティファールはほんの少しだけ哂い、頷いた。

「ええ、死ぬならそれ相応の機会に、と思っているのです。以前の私なら、違ったかもしれませんが」

「相応の機会、ねぇ。意外と多いかもしれないぞ」

「多かろうと少なかろうと、それを決めるのは私です」

諦めるのも、諦めないのも自分だ。自分の決めたことに責任を負えるのは、自分しか居ない。

「難しい奴だ。難しすぎると、いつか大事なもの取り逃がすぞ」

「逃げた先に回り込みますよ。逃げただけなら、また捕まえれば良い」

レクティファールの言葉に男は一瞬虚を突かれ、そして大口を開けて大笑いした。

「あははッ！　そうだな、逃げただけなら捕まえればいい、それだけのことだ。――――だが」

男の姿が、消えた。

「――ッ！」

一瞬遅れて金属の悲鳴が反響する。レクティファールはいつの間にかその手に掴んでいた刃の腹に複雑な文様の刻まれた幅広の刀で、自分の目の前に現れた男が振り抜いた剣を防いでいた。

「逃せば消える、そんなものも世の中にはあるぞ」

男の瞳は、黒く澄んでいた。

一つの迷いもなく、ただ真っ直ぐな眼差しだった。

「俺がここに居るのはな、皇王になろうとしている奴に最後の忠告をするためだ」

男は刃を引き、すぐに新たな斬撃を繰り出した。

ミレイディアのそれよりもだいぶ速く、だいぶ重い、レクティファールがそれに反応出来ているのは、身体が意識と同じ速度で動いているからだった。

意識と身体の完全な同調。今までに経験したことのない感覚だった。

「別に、逃がすなとは言わないさ。永遠に失うことも、まあ、そいつの責任だ」

左上から、右下へ、右下から、左への薙ぎ払い。空気を斬り裂き、鋒で雲を生み、男はレクティファールに迫る。

「お前も、憶えておけ」

大上段の一撃。受け止めれば腕が痺れた。

「何を……」

痺れた腕を叱咤し、レクティファールは男の刃を払い除けた。男はレクティファールの反撃を受ける前に、一挙動で最初の位置まで引き下がっていた。レクティファールの刀が、虚しく空を切る。

「俺たちは異常者だ。必ず、等しく心の何処かがおかしい。おかしく出来ている」

男は再び姿を消すと、今度は上空から奇襲を仕掛けてきた。

その場から飛び退り、男の持つ剣の分厚い刃が床を削るのを見届けてから、レクティファールは男に向かって一撃を振り下ろした。

「お前は、自覚があるだろう」

躊躇いなく刃を頭上に捨てた男が、拳でレクティファールの顎を狙う。

レクティファールは勢いを殺さず、身体を捻ってそれを回避した。

二人の位置が、入れ替わる。

「そうですね、確かに」

レクティファールは頭上に刀を掲げ、自分の頭上目掛けて落ちてきた刃を防いだ。

火花が飛び、同じ顔をした二人の男を照らし出す。レクティファールが弾いた剣は、まるで意思を持っているかのように持ち主の手に戻って行く。

戻ってきた剣を二度三度振り回し、彼はレクティファールに向き直る。

「ただ、私はそれでも別に構いませんよ」

「ほう」

二人は同時に間合いを取り、そして同時に近付く。さらに同時に

刃を繰り出し、同時に受け止めた。

「それで何の問題がありますか、異常、異質、異端、異なることが罪だと言うならば、それは単に世界が総て等しく罪を背負っているというだけのこと」

世界に、二つとして同じものは存在しない。

世界は、総てが異なるもので出来ている。

「罪など、私が私でなくなることに較べればどうということは無い」

レクティファールは男に向かって刺突の構えを見せ、男もまた、レクティファールに刺突の構えを向けた。

「私は――私として生きていくのです。罪も罰も責任も、私が背負えるものは全部背負って……！」

繰り出す。

音を生む。

雲を曳く。

そして、穿つ。

「――そうかい、それはそれで……面白い生き方かもな」

自分の胸に突き刺さる刃を見下ろし、男はすっきりとした表情だった。その表情に、レクティファールは全身が粟立った。

「だけどまあ、面白いだけでは上手くいかないこともある」

男の言葉と同期し、その周囲に七本の武具が現れる。

大剣、軍刀、薙刀、短槍、小太刀、鋭剣、短剣。

そのいずれもが嘗ての〈皇剣〉の姿であると、レクティファールは気付いた。

そして、それらの刃が一斉に殺到してくるのを見て、一挙動でその場を退く。

だが、短槍と小太刀が、その肩と脇腹に突き刺さった。

「ぐっ」

痛みは、身体に突き刺さった刃によるものではなかった。

刃から流れ込んでくる怨嗟と憎悪が彼の身体を駆け巡り、まるで溶けた鉄を流し込まれたのではないかと思うほどの苦痛を彼に与えた。

「痛みを感じるだけ、幸せってもんだ」

男は苦悶の表情を浮かべるレクティファールに対し、男は今までになく冷ややかな眼差しを向けた。

「人は痛みにさえ慣れちまう生き物だ。そのときがどれだけ苦しくても、しばらくすれば何とも思わなくなっちまう」

男は虚空に浮いたままの大剣を手に取ると、レクティファールの腹に突き刺した。

「――っ！」

レクティファールの口から、声にならない声が迸る。

単に痛みとも言えない純粋な〈苦痛〉が、彼の身体を蹂躙した。

「嫉妬でも、怨恨でも、羨望でさえ、痛みであると忘れてしまう」

鋭剣が背中に突き立ち、短剣が太腿に、薙刀と軍刀が両足を床に縫い付ける。

「痛いだろうなぁ、でも、それだって人はすぐに慣れる」

男はレクティファールを見下ろし、悲しげに呟いた。

「いつか、人は痛みという概念すら忘れちまうんじゃないか、そんな風にさえ思えてくる」

『俺』たちは、その先魁かもしれない――――男の言葉が、レクティファールの身体に染み込んだ。

だが、レクティファールの中に湧き上がったのはそれに対する同意と恭順ではなく、否定と反発だった。

メリエラの手から感じた彼女の苦しみが、ウィリィアの言葉の端

々から感じる悲しみが、カールの厳しい視線から感じる懊悩が、レクティファールをその場から退かせない。

この場は、諦める場ではないと彼の中の『彼』が叫んだ。

「――だから、どうだと……」

レクティファールは震える身体を無理やり奮い立たせ、取り落としそうになる刀を握り直した。

金属の柄に、彼の体温が移っていく。同時に、刀が一つ鼓動を打った。

どくんと、空間を震わせる鼓動だった。

「痛みに慣れるから、どうだというのです……！」

彼の叫びが更なる鼓動を呼び、一つどくんと空間が震えるたびに〈皇剣〉が一つ一つ光となって消えていく、帰っていく。

「痛みに慣れるということが痛みを乗り越えることだというなら、それを否定することを私は許さない」

慣れようと慣れまいと、人は痛みを忘れることなどありはしない。

「私たちが憶えていれば良い。忘れることが出来ない私たちが痛みを憶えている限り、人は痛みを忘れたりはしない」

地を踏み締め、刀を構え、呼吸を整え、そして眼前の男を捉える。

「あなたは、そうしてきたのでしょう」

レクティファールがそう問いかけると、男は少し驚いたような顔を浮かべた。

「なるほど、お前もこの場に来るだけのことはあるってことか」

そして独語し、うっすらと笑みを浮かべながら剣を構えた。

「じゃあ、そうやって生きろよ」

男の言葉を合図に、二人は愚直なまでの直線運動で相手を狙う。

「――っ！！」

呼吸が一致し、音を持たない裂帛が互いの身体を貫いた。

第一章ダイジェスト：第十話～第十八話　前編

目覚めたレクティファールは、その身と同化した〈皇剣〉の存在を感じとり、自らの行く末に一抹の不安を抱いたという。

歴代皇王が持っていた当たり前の知識や経験を持たない彼にとって、〈皇剣〉とは得体の知れない半身であり、しかし二度と手放すことはできない片割れだったということだろう。

生きるも死ぬも〈皇剣〉と自分次第。この世界に執着すべきものができた彼には、もう後戻りという選択肢は存在しなかった。

レクティファール・ルイツ＝ロルド・エルヴィッヒという青年の物語は、ここから始まる。

◇　◇　◇

レクティファールが自分の行く末にうんうん唸っていた頃、彼の寝かされていた部屋から少し離れた廊下でちょっとした事件が発生していた。

当事者は二名。双方共に姫と呼ばれる人物である。

その一方、白龍公の姫君メリエラが何かを堪えるように片眉を震わせつつ先制する。じっと相手を見詰め、その仕草の一つ一つまでも見逃さないという気迫に満ちていた。

「――猊下、四界神殿の巫女姫ともあろう方が、このような軽挙をなされては困ります」

彼女のあまり好意的ではない視線を真正面から受け止めつつ、四界神殿の巫女姫リリシアが感情を押し殺した無表情で反論する。双方とも互いを油断ならない敵手と認め、相対していた。

「軽挙ではありません。これは皇王を支えるという巫女姫の役割に沿った行動です」

〈皇剣〉継承の儀式後、無事役割を果たしたことで声と視力を取り戻したリリシアは、これまでの清楚な印象よりも年齢相応の活発さが表に出てくるようになっていた。

姉のミレイディアが驚くほど活動的になり、これまで暗闇の中で生きることを強要されていた鬱憤を晴らすように毎日大神殿の中を駆け回っている。

そんな行動の変化に合わせて服装も変わり、肩の出た襯衣と丈の短い傘袴が、リリシアの最近の神殿内での装いであった。

人生の大半を過ごした大神殿だが、今の彼女にとっては初めて来た場所も同じらしい。確かに周囲の状況を情報として脳に直接送り込まれる場合と、視覚として得る場合には大きな差がある。その差が、彼女の隠れた本質を呼び覚ましたのかもしれない。

斯くしてお転婆の才能を開花させたリリシアがここ数日の日課としているのが、今回メリエラが見咎めたレクティファールの寝室訪問である。

大神殿内に限れば、リリシアの方が圧倒的に地の利がある。メリエラはレクティファールの世話役としてほぼ一日中彼の寝室にいる

のだが、それでもレクティファールの目覚めを待って神殿内で公務を執っている父カールの補佐として仕事がある。そのときにはメリエラの世話をしているウィリィアも同行するので、レクティファールの寝室には大神殿の神官が残るのみとなる。

リリシアは、そうしてメリエラが居ないときばかりを狙ってレクティファールの寝室に不法侵入を繰り返していたのだ。大神殿の職員であれば、白龍公の姫よりも巫女姫の都合を優先するのは当たり前。彼らはリリシアの侵入を手引きし、さらにリリシア侵入の事実をメリエラに隠していた。

これまでは天の時も地の利も人の和も完全にリリシアに味方していたと言える。

ただこの日だけは、運がなかった。

偶然にも仕事が早く終わったメリエラに寝室から出るところを見付かってしまい。こうして廊下のど真ん中で説教されているのである。

もっとも、リリシアに反省の色など欠片もなかったが。

「四界神殿の巫女姫は、皇王の最大の理解者となり、その支えとなるようにとの教えを受けています。当然、わたくしもです」

「レクティファールは未だ正式に皇太子位に就いておりません。従って、彼はまだリンドヴルム公爵家の客分です」

皇太子位は、儀式後に候補者が目覚めた段階で正式に認められる。

だからまだ、レクティファールは白龍公の客人という扱いになるとメリエラは言っているのだ。

言葉は辛うじて失礼にならない程度に丸められているが、その視線は同じ龍族の男でさえ裸足で逃げ出すほどの鋭さだった。

「たとえリンドヴルム家の客分であろうと、公爵家当主ではないメリエラ殿にレクティファール様に対する客人を選ぶ権利はないでしょう」

その視線を受けてもそよ風程度にすら感じていないリリシアも、ある意味では龍族以上の胆力の持ち主かもしれない。

彼女はメリエラの公的な立場の不明確なことを指摘し、彼女の行動の正当性を崩そうと攻勢を強めた。

「レクティファール様の御身は皇国の大事。一公爵家の姫が判断していい問題ではないとわたくしは考えます」

「う……」

リリシアの舌鋒鋭い指摘に言葉に詰まるメリエラ。

儀式終了に伴い、聖都には皇太子誕生の噂が流れ始めている。これはカールが意図的に流した噂だが、聖都から皇国全土に情報が拡がるまで数日といった所だろう。上手くすれば、連合や帝国の動きを牽制することもできるかもしれない。

しかし、レクティファールの存在が大々的に明らかになった時点で、メリエラの庇護者としての役割は自然消滅したと言って良い。

メリエラが守らなくてもレクティファールの身柄は皇国が国として保護するし、神殿とて自分たちの元に現れた候補者を保護しない理由はない。

そして、存在が公になったということは、メリエラが個人でレクティファールに関する事柄を判断することもできなくなったということだ。

未だ正式な扱いは候補者とはいえその立場はすでに公の存在であり、私的な関係しか持たず、公的には何らレクティファールに対する権利を持っていないメリエラよりも、同じ公の存在であり神殿の教義として明確に定められた理由のある巫女姫の言い分が優先されることは明白だった。

「レクティファール様のお世話はわたくしが引き継ぎます。メリエラ殿は白龍公の補佐としてレクティファール様の支えになって貰わなくてはなりませんし、そちらの仕事に集中なされては？」

この娘、かなり黒い――メリエラはそう思った。

あんなにも清楚で可憐だった巫女姫が、たった数日でこんなにも真っ黒に染まるなんて思ってもいなかった。

実際には皇王の支えとなる巫女姫が知っているべき常識として神殿内で教育を受けた結果なのだが、そんなことを知らないメリエラにとってはたちの悪い詐欺に引っ掛かった気分だ。

ミレイディアが知ったら嘆くのではないかと考えたメリエラだが、あの人のことだからすぐに笑って済ませるかもしれないとも思った。そう考えると、この姉妹は根の部分でよく似ているのかもしれない。

心の中でリリシアに対する警戒段階を引き上げたメリエラは、だがしかし、ここで負けを認めるような種類の女性ではなかった。公式な発表はまだであるが、彼女にも皇太子を補佐する確かな理由が存在するのだ。

彼女は深呼吸すると、目の前で屹立する四界神殿の巫女姫という巨大な壁に突撃を開始した。

「――猊下のご意見は至極尤もです。ですが、わたしにも同じく彼を守る理由が……」

「姫さまッ！！」

しかし、その突撃は味方によって遮られる。

自分の言葉を遮った侍女に対して、駄々っ子のようにむくれて涙目を向けるメリエラ。さあ反撃だと勢い込んでいたせいで、言葉を中断させられた瞬間に思わずこけそうになったことは秘密にしようと思う。

されど、平時であれば主人の視線のその意味に気付かぬはずもないウィリィアが、このときは少しも気付く素振りを見せずにメリエラとリリシアの前で大声を上げた。メリエラは、そういえば、前にも似たようなことがあったと思い出す。

確かあのときは――

「行き倒れ……じゃない、レクティファール殿下、お目覚めになりました！！」

その言葉に顔を見合わせる二人。両者の視線には互いに対する隠しようのない警戒心が透けて見え、じりじりとした視線の交わりの末、二人は同時に廊下を走り出した。

まさに抜きつ抜かれつの一進一退。取り残されたウィリィアが慌てて後を追い始める頃には、二人は走りながら先ほどの舌戦の第二戦を始めていた。

神殿の神官や修道女たちが大慌てで二人の進路から逃げ出す。

「メリエラ殿！　廊下を走るなんてはしたない真似はおやめになったら如何ですかッ！？」

「猊下こそ、巫女姫として国民の尊敬を集めるお方が、どすんどすんどかんどかんとくそ喧しい足音を立てて走るなどあってはならないことですよ！」

「未来の夫となる皇太子殿下がお目覚めになったのです、まず一番にご挨拶をしなくては巫女姫の恥！　いいえ、女の恥っ！」

「そんな理屈があるはずないでしょう！？　ここはわたしにお任せになり、後からゆっくりといらっしゃればよろしいではありませんか！」

「そんなこと言って！　レクティファール様に目覚めの口付けでもするつもりでしょう！？」

「はあッ！？」

酷い言い掛かりだ。

メリエラは興奮状態のリリシアの言葉に憤慨した。決して心当たりがあった訳ではない、と彼女は自分を納得させた。

そもそも彼との間に男女の感情はないし、保護者と非保護者の関係を崩したこともない。

よって、リリシアの言葉は冤罪である。

「猊下！　その下品な物言い、巫女姫としてあるまじきことですよ！」

「誤解だというのですか！」

「ええそうです！」

メリエラは語気を強めて断言し、怒りと羞恥で真っ赤になった顔をリリシアに向けた。

だがしかし、巫女姫は明らかにその言葉に更なる興奮を抱いたようだった。

「あなたは毎日毎日朝方まで殿方の部屋に居座ることが下品でないというのですか！」

「なッ！」

メリエラの顔に先ほどよりも色濃い朱が走る。

さらにぱくぱくと口を開き、驚きを全身で表現していた。

「それだけではありません！　レクティファール様のお召し物、あなたが洗濯しているそうではありませんか！」

「何故それを！？」

さらなるリリシアの追撃。

メリエラの速度が目に見えて低下する。

「女官たちが教えてくれました！　白龍公の姫さまは皇太子殿下と大変仲がよろしいのですね、と！　わたしだってレクティファール様と仲良くなりたいのに！」

折角取り繕った「わたくし」という一人称さえかなぐり捨て、リリシアが叫ぶ。

「ぐう……」

対して辛うじてぐうの音は出たメリエラだが、さらに赤みを増した危険な顔色になりつつあった。

どこでも女性たちはこういった噂話が好きだが、大神殿も例外ではないらしい。

実際、レクティファールの衣服はウィリィアよりもメリエラが洗っていることの方が多い。本人としては単に弟の世話を焼く姉のような気分で——人目もあるしと、自分にそういう言い訳をして——やっていたのだが、周囲は別の目で見ていたらしい。

そうして、レクティファールの居室が見えてきた頃、勝負は決した。

「レクティファール様とメリエラ殿がどんな仲か、わたしは問いません！　ですが、ここは勝たせて貰います！」

「ああッ！」

メリエラの速度が落ちた一瞬の隙を突いて、リリシアが猛加速。メリエラを一気に引き離してレクティファールの居室に飛び込む。

そして、息も絶え絶えになりながら目覚めの挨拶をと顔を上げた彼女は――

「いやぁ、仕事が空いたから見舞いでもって思ったんだけど、まさか目ぇ覚めてるとは。あたしの運も中々のもんだね」

「運の問題なのかよく判りませんが……お見舞いに来て頂いたことは感謝します」

和気藹々と雑談する姉とレクティファールの姿に呆然となった。

そのまま二人はリリシアの姿に気付かず、話を続ける。

放置される形となったリリシアは、ぽかんと口を明けたまま硬直することになった。

「かったいねぇ、ていうかあんたもう皇太子なんだから、あたしに敬語使っちゃ不味いと思うよ」

「そうなんですか？」

「一応宮内序列は同じだけど……まあ、正式に摂政位拝命してないから年功序列ってことでいいか。ほら、あんたって践祚しないまま〈皇剣〉継承してるから半皇って訳でもなし。そういえば、摂政云々ってのは聞いた？」

「確か、皇王以外で国事国政行為を行える唯一の位、実質的な皇王、通常であれば当代の皇王によって皇太子が補せられる職。皇王不在であり、法的に皇位継承が行えないならば――ということでしょう。まあ、白龍宮ですぐ手が出る良い教師がいたもので、そのくらいは憶えています」

「践祚ができていればねえ、まだ違ったんだけど。践祚って法解釈次第で皇王立会以外でも可能なんだけど、正式には即位の儀式の片割れだからね。喪が明けないうちにやるのはちょっとねぇ……特例ってことにするにしても反発も大きいだろうし。あ、ちなみに半皇ってのはね――」

皇家典範に於いて、皇太子は原則として皇王立会いのもと践祚――法的な皇位継承――を行い、その後皇王が崩御した時点で皇号を名乗る。そして一年の先代皇王の喪が明けた時点で対外的に皇位継承を報せる即位の儀を執り行うことと定められている。

法的には践祚後に皇王が崩御した段階で皇太子が皇王位へと登っているが、建前上は践祚と即位の二つの儀式を以て皇位継承と看做されている。その際、践祚のみを行った皇王を『半皇』と呼ぶことがある。

「てな訳で、あんたはまだ半皇にもなってないんだよ。ま、践祚と

同時に即位だから、半皇なんて呼ばれることはないだろうけどね」

「はあ……」

そこまで二人の会話が進んだ頃、ようやくリリシアの意識が回復の兆しを見せ始めた。背後からメリエラとウィリィアの気配が近付いてきたということもあるのだろう。

ただ、その動きは緩慢であり、どこか危なっかしいという風であった。

「ね……姉さん――って、きゃあッ！」

そんな状態のせいか、リリシアは足を縺れさせてしまい、床に敷いてある絨毯に向けて身を投げる羽目になった。

受け身も取れず、真正面から盛大に顔面を絨毯に叩き付けたリリシア。

べたんという景気のいい音がレクティファールの居室に拡がり、あまり丈の長くなかった傘袴がふわりと揺れてその下の布をさらけ出す。それは飾り布がふんだんに使用された、最高級の薄青の逸品であった。

「――――」

レクティファール、ミレイディア共に突然の闖入者の悲劇に言葉もない。

呆けるように悲劇の当事者を見詰め、無言を続ける。

「お待ち下さい猊下ッ！　って……あら……？」

「姫さま、どうかなさいまし……え、猊下……？」

しばらくして部屋に飛び込んできたメリエラも、床に全身を投げ出した格好の巫女姫の姿に言葉を失った。

さらにメリエラの背後に現れたウィリィアも部屋の中の惨状を認め、黙り込む。

酷く空虚な時間が、五人を包み込んだ。

◇　◇　◇

平穏な日々だった。

のちのレクティファールの人生から見ても、この立太子から皇都へと赴く数日間は、彼の人生最後の寧日と言っていい。

以降、彼の身は常に摂政、或いは皇王として存在し、その責任によって心からの平穏は失われてしまった。

妃や子らとの時間は確かに彼を慰めはしたが、それも皇王としての立場の上にあるものでしかない。レクティファール個人という考え方が彼やその周囲の者たちの心中に残されていたのはこの頃が最後で、それ以後は『公あっての私』という考えが、彼らの心の内を占めることになる。

さらに言うなら、白龍宮のレクティファールを知る者たちと、このとき神殿にいた者たちだけが、一個人としての『レクティファール』という青年を記憶に留める、数少ない人々だった。

そして蒼、黒、紅の三龍公。

三人はレクティファールという英雄の紡ぐ物語において幾度も登場し、その折々に華を添える役目を果たした。

そんな彼らがレクティファールと出会ったことは、時代のひとつの転機でもあった。その証拠に、三人の回顧録は揃ってこの出会いを『時代の節目』と記している。

一国から大陸へ、大陸から世界へと物語の舞台が移り変わる。三人の生きた時代は、そんな時代だった。

◇　◇　◇

レクティファールが四阿に入ったとき、その場にいたのは円卓に座るたった三人の男女であった。

一人目は長い真っ直ぐな黒髪を持ち、小柄な体躯を飾り布の多い衣裳に包んだ小さな少女。彼女は眠たげに細められた瞳をレクティファールに向け、茫洋としたその視線で何かを探るようだった。

二人目は深紅の髪を短く切り揃え、細くもしっかりとした筋肉に覆われた大柄な身体をカールと似通った衣裳で包んだ美丈夫。レクティファールの到着に気付いていながら、目を閉じて一瞥さえしな

い態度は、或いは拒絶の証だったのかもしれない。

三人目は蒼穹の色を写した髪をゆるく三つ編みにし、それを背中に垂らした女性。比較的穏和そうな雰囲気を持っていたが、その実、もっとも底の知れない気配の持ち主でもあった。

レクティファールが三人を短く観察し終えた頃、カールが彼の横に並び、三人それぞれを示しながら紹介を始めた。

「黒龍公、アナスターシャ・フォン・ニーズヘッグ」

「紅龍公、フレデリック・バルガ・スヴァローグ」

「蒼龍公、マリア・ヴィヴィ・フォン・レヴィアタン」

本来ならば自ら立ち上がって名乗るのが礼儀だが、この三人がレクティファールに礼を示す理由はない。

当代皇王の素行に反発して皇王家からの独立を宣言した彼らにとって、如何なる公職にも就いていない、ただの皇太子であるレクティファールに示す礼儀などありはしないのだ。

いや、彼ら三人が皇国以外の国の貴族であるのならばそれなりの礼儀を示していたかもしれない。

しかしここは皇国であり、彼らは皇国守護を初代皇王より命じられた四龍の子孫である。

皇国を乱すのならば、皇王とて斬り捨てる理由があった。

しかしこのとき、彼らは決してレクティファールを排除しようとはしなかった。

ただ――

「――カール……これで義理、果たした」

黒龍公アナスターシャがおもむろに立ち上がり、カールとレクティファールに向けて言い放つ。肩を震わせたカールの動揺が、レクティファールにも伝わってきた。

それに続き、紅龍公フレデリックも組んでいた腕を解き、席を立つ。立ち上がればレクティファールよりも背が高く、見下ろすようにレクティファールを睨み付けてきた。

「確かにな、時間が限られている中で譲歩したんだ。文句はないだろう」

レクティファールは彼らの行動に驚きを隠しきれなかった。

自らは未だ名乗っていない。

確かに彼らにとって取るに足らないような存在かもしれないが、仮にも国家元首になろうとしている人物をこうも軽んじられる理由が理解できなかった。

好き嫌いで人を選ぶことはあるだろう。だが、好悪で元首を選ぶようなことはあってはならない。真に国を想うというのなら、個人的感情よりも優先すべきことがあるのではないか。

「カールちゃん、あとはよろしくね」

にっこりと暖かな笑みを浮かべた蒼龍公マリアが彼らに続いて立ち上がり、レクティファールの隣に立つカールに笑いかけた。このとき彼女は、決してレクティファールを見ようとしなかった。

レクティファールはこの状況に驚き、満足に思考を働かせることはできなかった。だが、それはカールも同じこと。彼は顔を紅潮させ、三人の前に立ちはだかった。

「き、貴様ら……何を考えている」

唇を震わせ、三人を睨む。皇国の一大事に、最強の手札である皇太子を無碍に扱うとはどういうつもりなのか。

しかしその視線を受け止めても、三人は小揺るぎもしなかった。

カールと同格の龍族である三人にとって、その視線など大した意味を持たない。現にフレデリックは呆れたように首を振り、レクティファールとカールに告げた。

「決まっているだろう。俺たちは皇王家から独立したんだ、皇国を守ることはするが、その配下に入ることはしない」

「馬鹿なっ！　初代皇王陛下との契約は……」

「それだけどね、カールちゃん」

マリアが困ったような笑顔をカールに向けた。しかし、その金色の瞳は少しも笑っていなかった。

「初代様の遺言は、皇国を守ること。わたくしたちは確かに皇王家には忠誠心を持っているけど、国にとって善か悪かも分からない皇太子に対する忠誠心は持ち合わせていないの。それに、彼がこの混乱を収められるという確証はないでしょう？　賭けごとは嫌いじゃないけれど、わたくしたちだって時間と場所は弁えているつもりよ」

不確定要素だらけの賭けに出るよりも、確実に現状を収めることができる方法を選ぶべき。マリアはそう言っているのだ。

「――――」

カールは絶句して残りの一人、黒龍公アナスターシャを見た。

お前も同じ考えなのか、そう視線で訊ねていた。

互いの視線が絡み合い。果たして、アナスターシャは小さく頷いた。

「――うん。……じゃあねカール、また遊びに行く」

そう言って身を翻すアナスターシャ。その動きには躊躇いの欠片も見えない。

マリアもそれに続き、フレデリックもまたカールたちに背を向けた。

「待て！　皇国を守るというのなら、お前たちはまさか……」

カールの声に、フレデリックだけが振り返った。

「――決まってる。俺たちは、自分たちの軍を率いて連合を喰らい尽くす。皇国軍の手は要らん、協力を約束した貴族共もいるしな。そのまま帝国の蛮人どもも追い返すさ」

「な……っ！」

フレデリックの言葉に、カールは驚きのあまり目眩がした。

皇都戦線の危機的状況は知っている。だが、朋友である三人がいきなり強硬手段に出るなどということは予想していなかった。それでは連合諸国と周辺国に要らぬ敵愾心を植え付けるだけではないか。

確かに強硬手段に訴えれば、短期的には連合の主力を殲滅してその侵攻の意志を挫くことはできよう。

だが、その先に待っているのは連合との泥沼の戦争だ。周辺国も皇国を危険な国と見るかもしれない。

何としてもそれだけは阻止しなくてはならない。

カールは三人を呼び止めるために口を開いた。

だが、それを遮るように金属じみた硬質な声が四阿に響いた。

「――ふざけてもらっては困るんだよ、この石頭共。長生きのし過ぎで考えが化石になったのか」

彼の隣に立ったまま、そして立ち去る三人に目を向けることもしないまま、青年が呟いた。

千年以上生きたカールさえ感情を揺り動かされたのだ。他の三人が何も感じないはずがなかった。

「――何？」

初対面のレクティファールに痛罵された三人は揃って足を止め、一斉に振り返った。

総じてその表情は硬く、フレデリックに至ってはその怒りのあまり瞳孔が鋭く裂けていた。

龍族の特徴の一つである龍眼は、人間の姿で日常生活を送っている限りは決して現れない。ただその龍族の感情が昂ぶり、溢れる魔力を抑えるために龍の姿に戻ろうとする過程の中で、瞳孔が裂け、龍眼となる。

つまり、龍族の瞳を見れば、その龍族の怒りがどの程度のものか判断できるということだ。

最近は龍族も自らの魔力を効率よく抑える術を開発しているので絶対とは言えないが、それでも公的私的を問わず龍族との関わりのある者はこの判断基準を固く信じて行動するようにしていた。

皇国内外に関わらず、悪名高き龍族の逆鱗とは別に、彼らが人の姿で見せる龍眼という存在もまた人々の恐怖の対象だったのである。

しかし、フレデリックの龍眼を見せ付けられてもなお、レクティファールの表情に変化は無かった。

常に使用者の状態を最良の状態に保つための機能を持つ〈皇剣〉。その機能の一つによって怒りを排除された思考を元に、ただ冷然と、こう告げるのみだった。

「ふざけるな、と言ったんだ。それとも、老いて耳も狂ったか？」

「――！」

その言葉に三人の反応は分かれた。

明らかに挑発と分かるレクティファールの言葉に、衝動的な怒りよりも強い疑問を抱いたアナスターシャとマリア。彼女たちは動きを見せなかったが、その挑発に乗ったフレデリックは一気に龍眼を開き、その体内に内包する莫大な魔力を練り上げて一瞬で召喚魔法の魔法陣を虚空に生み出した。

その魔法陣から飛び出したのは一本の柄。

革紐ではなく鱗状の金属で覆われたそれは太く長く、その先に存在するであろう刃の巨大さを物語っていた。

フレデリックはその柄を引っ掴み、短い呼気と共にそれをレクティファールに向けて振り抜く。魔法陣の残留魔力が尾を引き、現れた巨大な両刃を輝かせた。

対するレクティファールもその刃を黙って受けるようなことはしなかった。

瞬き一つで白銀の龍眼を右眼に顕わすと同時に、ほぼ無意識のうちにフレデリックのものとは違う魔法陣を組み上げ、同じように魔

法陣から現れた細い柄を握る。それは白金に輝く糸を柄巻にした、彼にとって最も身近である『白刃』。

「――っ！」

自分に向かってくる大剣に向けて、レクティファールはその細い剣――刀を叩き付けた。

折れない、折れることは有り得ないと本質的に理解しているからこそできる、武技の欠片も感じられない無茶な迎撃。脳まで響くような金属の衝突音と摩擦音、それらが空に溶け消えるまで僅かに刹那の間で、フレデリックはその刀の正体を察した。

レクティファールの召喚した刀はこの世界で唯一無二の概念兵器――

「――〈皇剣〉っ！」

フレデリックの悲鳴にも似た叫びには意味がある。

過去に皇太子が〈皇剣〉を継承したときには、その力を使いこなすまで幾ばくかの時間を要した。

だが、目の前の無礼な男は僅か数日前に〈皇剣〉を継承したばかりのはずである。たとえこの男が〈皇剣〉の力を望んだとしても、〈皇剣〉が使い手を認めない限りその力を振るうことはできないはずだった。それは未熟な使い手に対しては自己を守るために機能を制限するという〈皇剣〉に備わっている安全機構が原因であるとも、単に使い手が未熟で〈皇剣〉の機能を理解していないからだとも言われているが、事実は一つ、皇太子として〈皇剣〉を継承した者が

これほど短期間で〈皇剣〉を使うことはこれまで不可能だったということ。

しかし、フレデリックの前に立つ男だけは〈皇剣〉を使って彼の剛剣を凌いで見せた。

〈皇剣〉に傷一つ無いという事実は、その機能故に特にフレデリックの矜持を傷付けたりはしなかったが、立太子したばかりの若者が自らの剣を受けきったという事実はフレデリックを動揺させた。

その動揺はレクティファールにも伝わり、彼はそうして生まれた間隙に言葉を滑り込ませる。

「――〈皇剣〉はこの国を守るために力を振るう。だからこそ、今私に力を与えた。この意味が理解できるはずだ、紅龍公」

怒りを機械によって圧し潰され、しかし隠された激情をその龍眼に滾らせたレクティファールの言葉に、フレデリックは一言呻き、そして沈黙した。

今となっては彼とて理解している。

今までの皇太子がすぐに皇王として〈皇剣〉を振るえなかったのは、単にその状況になかったからだと。

護衛に守られ、先代皇王の喪が明けて即位の儀を迎えるまで決して危険に晒されることはなかった彼らに、〈皇剣〉を振るう理由も意志も存在しなかった。だからこそ〈皇剣〉はその力を発揮することはなく、即位前の践祚を終えたばかりの新たな皇王には〈皇剣〉を使うことができないという常識ができ上がってしまった。

だが、今このとき皇太子となった青年にはそれが存在した。

外敵を排し、内憂を滅し、大切な者が住むこの国を守る。

だからこそ、〈皇剣〉は皇国を守るために使い手の望みを叶えたのだ。

「私が三人の立場だったとしても、いきなり現れた、践祚もしていない皇太子に忠誠を誓うなんてことができるとは思えない。だから、忠誠なんてものは後回しでも、最悪、無くても構わない」

レクティファールはフレデリックの剣を受け止めた体勢のまま、三人に語り掛ける。

今必要なのは剣ではなく、意志だ。

否、今の自分には意志しかない。人脈も財も、経験さえ持たない自分にあるのは、皇太子として振舞うという意志だけだ。

「あなた方は初代皇王より皇国の護持を命じられているはずだ。そして、当代の時代でもそれは変わらなかった」

彼ら三人がここで軍を発することを選んだのは、皇都戦線の崩壊を察知したからだろう。

皇都は単に皇国の首都というだけではない。

初代皇王の建国宣言から始まる皇国の歴史が、皇都〈イクシード〉には籠められている。

それを他国に蹂躙させることは皇国の存在が傷付くと同義、だから彼らは戦いを選んだ。もっとも確実で、早期の解決になるであろう道を。

しかし、レクティファールはそれを性急だと言う。

「当代皇王の蛮行、代わって私が謝罪する。だから、此度の戦だけは私の意見を通させて欲しい。その上で私がこの国に害を及ぼすと判断したのなら、そのときに斬り捨ててくれて構わない。決して抵抗はしないと約束する」

レクティファールの龍眼が三人を見詰めている。

力持つ龍族ならば金色以外に有り得ない龍眼。

しかし、この皇太子の瞳は他に類を見ない白銀の龍眼だった。

これまでの皇王も同じように龍眼を持っていたが、彼らの龍眼も元々の瞳の色を色濃く残していた。その中でも、白銀という色素の薄い龍眼はこれまでに無いものだ。

別にそれが特別であるという意識はない。ただ、その白銀に少しだけ興味が湧いた。龍族とは違うその瞳で、今何を見ているのかと。

「――――」

「ターシャ！？」

フレデリックの驚愕を涼しいぼうっとした顔のまま受け流したア

ナスターシャが、無言のまま円卓に戻り腰を下ろした。

そんな盟友の行動に、如何にも仕方がないといった風に肩を竦めたマリアが続いた。

カールもまた密かに安堵の溜息を漏らして円卓に着き、残るはフレデリックただ一人となった。

「――――」

無言で視線を絡ませる二人。睨み合いとも言えない視線の交わり、互いの内心を解き明かそうと視線を交換する。

白銀と黄金が交わり、そして離れた。

その刃と共に。

「――今回だけは〈皇剣〉に免じて話を聞いてやる。従うかどうかはそのあとだ。文句はねえな？」

「感謝する」

不機嫌そうに鼻を鳴らしたフレデリックが円卓に戻ったとき、この場は皇国の次期皇王と元老が集う議場となった。

この戦いを記した書物に悉く名を残すことになる、『聖都会談』の幕開けである。

◇　◇　◇

『聖都会談』

この会談は初等中等高等とどの学校でも皇国史の教本を開けば必ず登場し、試験の鉄板問題として点数稼ぎに使われている。

しかし、高い知名度とは裏腹に、詳しい内容が明かされなかったことで、研究者たちはこぞってその内容を分析、研究した。このたった一つの問題を解き明かすために大規模な研究討論会が開催されたほど、人々の興味を刺激してやまない題材なのだ。

ある研究者はこの会談の終えた時点で皇王レクティファールを支える臣下団の礎ができあがっていたと言い。別の研究者は事務的なやり取りに終始したのではないかと分析した。

前者の言い分としては、この会談以降四公爵は皇王家の臣下として大きな働きを見せており、その働きによってこの一連の騒乱が終結したというものだ。それだけの大仕事をさせたのだから、レクティファールにはそれを可能とするだけの能力があったと見るべきだと彼らは主張する。

対して後者は、この時点でのレクティファールには圧倒的に経験が不足しており、四龍公を纏め上げることは難しかった。そのため、三龍公側は大義名分を得るために皇太子という旗頭を利用し、レクティファール側がその策に乗っただけで、会談の内容はその確認に費やされたに過ぎないと主張した。

両者の違いは、レクティファールという後の世の英雄をどう見るかに尽きる。

前者がレクティファールという存在を生まれながらの英雄と仮定

し、その片鱗はこの頃からあったと考えているのに対し、後者はレクティファールという人物は結果的に英雄となっただけで、その過程は地道な行動と結果の積み重ねであると考えている。

ただ、両者とも共通している部分はある。レクティファールという人物が旗頭となり、この会談のあとに行われた戦いに勝利したという点だ。

公文書には『ミラ平原鎮圧戦』と記され、人々には『皇都奪還戦』と呼称される戦いは、レクティファールという英雄がその名を世に知らしめた最初の戦いだった。

『英傑時代（フェイルド・イギス）』とも渾名される皇国暦二〇〇〇年代は、世界各地で英雄が生まれ、消えていった時代だ。

アルマダ大陸だけでも〈新生アルマダ帝国〉の陽虎姫。〈マルドゥク王国〉の赤髪鬼。〈自由都市国家聖印連盟〉の魔弾女王。〈シェルミア共和国〉の鉄血王子。そして、〈アルトデステニア皇国〉の星龍皇。

世界規模で見るなら、この数倍もの英傑たちが現れた。

彼らはその後、ある者はひっそりと消え、ある者は華々しく散り、ある者は元の生活へと戻り、ある者は老いて死ぬまで英雄として生きた。

どの生き方が正しかったのかは、彼らにしか分からない。

しかし確実に言えることは、その中の一人がひとつの国を、人々の意識を変えたということだ。

◇　◇　◇

会談を終え、カールと別れたレクティファールは、時折擦れ違う警備の騎士に労いの言葉を掛けつつ部屋へと戻った。

しかし、延々と続いた会談で疲労した心身を引き摺るようにして戻った部屋で、彼はさらに精神的な疲労を重ねることになったのである。

「――――」

「む～～レクティファールさまぁ……」

「レクト……ばか……しらない……」

何故か矢鱈と広かった寝台の上で、リリシアとメリエラが気持ちよさそうに眠っていたのだ。

一瞬警備の騎士は何をしていたのかと思ったが、一介の騎士にこの二人を止められるはずがないと思い直した。

「――私だって、何も感じないわけではないんですけどね」

二人ともひらひらで微妙に透けている目のやり場に困る寝間着姿であり、彼は一目見た瞬間に一瞬気が遠くなった。仲悪いんじゃなかったのか、と疑問にも思った。もっとも、彼の疑問が解消されるのは翌朝を待たねばならなかったが。

しかし、双方とも見目麗しい乙女である。この部屋がレクティフ

ァールの寝室であるという諸々踏まえ、このまま襲いかかっても文句は言えないはずだった。

それでも嫁入り前の娘が男の部屋で着る服ではないと真剣に考えた辺り、彼の理性の鉄壁振りが伺える。

あまりにも常識外れな光景に腰が引けただけという理由もあるが、それは言わぬが花というものだ。それに、いつまでも理性が鉄壁であり続けるとは限らない。精錬された鉄でも、劣化するのだ。

「ああ、もう」

彼は深夜の大神殿の居室で途方に暮れることになる。

新たに部屋を用意して貰うという選択肢は気後れしてしまって選択することができず、当然二人の寝ている寝台に入ることもできない。いや、仮にやったところで実は問題ないのだが、彼はそれを知らなかったし実行する度胸やら何やらが決定的に不足していた。

結局彼は寝台から一枚だけ掛け布を拝借すると、部屋の中央に置かれた長革椅子に寝転がってしまう。

すると今までの疲れが一気に押し寄せ、彼は数分もしない内に夢の世界の住人となっていた。〈皇剣〉も自己の機能保全と最適化のため、使用者に休息を要求していたようだ。

「くかー……」

皇国皇太子レクティファール・ルイツ＝ロルド・エルヴィッヒの皇太子生活初日は、こうして終わりを迎えた。

翌朝彼は盛大に叫び声を上げることになるが、少なくともこの時点では暢気に寝息を立てている。

「――へくしッ」

あと、間抜けなくしゃみも。

◇　◇　◇

「ウィリィアちゃんはやっぱり筋がいいわね、お父様の血かしら」

「ありがとうございます！」

城の庭で剣の稽古をつけてもらったとき、自分を褒めてくれるあの笑顔が好きだった。

「うちの子は余り剣は好きじゃないみたいだし……折角だからわたしの剣は全部ウィリィアちゃんに教えようかな。アルフォードの剣は剛の剣だし、わたしみたいな軽く速い剣も少しは覚えておいた方がいいでしょう」

「はい、頑張ります！」

公務の傍ら、自分に剣や礼儀作法を教えてくれるあの人の手のひらが好きだった。

「ああもう、やんちゃなのはいいけど、顔に傷が残ったらどうするの。うちの子みたいに綺麗に治るとは限らないのよ？」

「ごめんなさい……」

困ったような顔で自分の顔を撫でるあの人の指が好きだった。

「ほら可愛い！　ルイーズに頼み込んだ甲斐があったわ。ルシェットの焼き菓子は結構財布に響いたけど……」

「奥さま……動き難いです」

自分を着せ替え人形にしたあの人が浮かべる得意気な笑顔が好きだった。

憧れていた。あの人のようになりたいと思った。

だから、剣の稽古も礼儀作法も踊りの稽古も頑張った。

あんなにも綺麗で、強くて、優しい人になりたいと思った。

なのに――

「この子を、メリエラをお願い」

あんな悲しそうな顔で、別れることになってしまった。

自分がもっと強ければ、もっと思慮深ければ、幼い主君を止める勇気があれば、それだけであの悲劇は回避できたのに。

「――ウィリィアちゃん」

そう思うたび、こんな悪夢を見る。

憧れたあのひとが、恨みがましい目で自分を見詰めてくるのだ。

半身を失い、焼け爛れた身体で、青白い顔をして。

「――ウィリィアちゃん、あの子を」

分かっている。分かりきっている。

自分の存在価値はあの方を守ること。それ以外の生きる道はない。生きる価値がない。

そう思わなければ、罪悪感で潰されそうになる。

「――ウィリィアちゃん」

大好きだった。本当の姉のように思っていた。

あの人より強い人はいない。あの人より綺麗な人はないない。ずっとそう思っていた。

「――ウィリィアちゃん」

そんな人を殺してしまった自分が、自分のために生きることは許されない。

自分が生きていられるのは、あの方を守っている間だけ。

「だから、許してください……」

だから今日もまた、彼女は一人で涙を流す。

◇　◇　◇

騎士妃ウィリィア。

まるで誰かが消し去ったかのように、後世にはほとんど資料の残っていない人物だ。ただし、レクティファールと関係が深かったと推測できる資料が幾つか存在している。

その中の一つは彼女の孫――但し、血縁関係については諸説ある――に当たる人物が記した伝記であり、物語として描かれていることもあって、その内容は史実とはだいぶ異なる。

しかし、異なるといっても彼女の生涯を記した確かな資料が存在しない以上、どこまでが創作であり、どこからが真実であるか、その答えは出ていない。

レクティファールの愛人であったという市井の記録があり、皇族簿に記載がないことから、名前を変えて妃となった。もしくは皇族簿に記載されない愛人という立場のままだった。単に皇族簿から名前を削除したという意見もある。

その愛人という記録の真贋を疑問視するなら、レクティファールの無二の友だった。実はメリエラ妃を巡る敵対関係にあった。レクティファールによって他国へと嫁がされたため、皇国に記録が残っていないという説も成り立つ。

最後の説の根拠としてレクティファールが摂政だった頃にウィリィアらしき女性が〈マルドゥク王国〉に嫁いだという資料の存在があるが、その資料には史実と異なる点も多く、真相を解明するには至っていない。

舞台演劇には、メリエラ以上にレクティファールに愛され、それ故に本来の主君であるメリエラに疎まれたというもの。皇妃たちの争いに巻き込まれて生命を落としたというもの。戦場に赴き、そこで戦死したというものもある。

謎多き妃――厳密には妃と断定された訳ではないが――として人々の創作意欲を刺激する彼女であるが、比較的信頼性の高い歴史資料とされる皇妃メリエラが残した記録によれば、若い頃はレクティファールと毎日のように剣を交えていたのは間違いないらしい。

◇　◇　◇

あの部屋に入った瞬間のことは憶えていない。

ただ、自分の生命よりも大切だった人が誰かの隣で眠っているということを認識した瞬間、心の奥底から制御できない感情が吹き出した。

自分の生きる理由を奪われた、そんな気がした。

「そこを動くなッ！」

「お断りです」

誰かがあの方を守るなら、自分は不要なのではないか。

誰かがあの方の隣にいるなら、自分の居場所はもうないのではないか。

「たとえ婚約者だとしても、未だ正式に輿入れも済ませていない今！　あのようなことをして許されると思っているの！？」

「私の意志じゃありませんよ！」

その言葉に、迷いなく剣を振り抜く、相手は刃の軌道を潜りぬけ、壁を蹴り登って天井へと。

「そんなことッ！」

信じられるわけがない。あの方はそう簡単に身体を許したりはしない。

そんな軽挙を許すような教育は誰もしていない。あの方は、然るべきときに然るべき殿方に嫁ぐべく、リンドヴルム公爵家の未来を担う女性として育てられたのだ。

「何故、あなたが……！」

何故、そう、何故だ。

もっと力のある者でなければあの方は守れない。

あの方はずっと待っていた。自分の役割を果たせるときを、それこそ身を切られるような想いで。

「姫さまに守られていたあなたが、姫さまを守れるというの！？」

この男は何の力も持たず、記憶さえ不確かで、あの城でもっとも弱い男だった。

確かにこの世界のことを憶えようと必死に勉学に励んでいたことは知っている。だが、だからこそ納得できない。

「姫さまは……あなたのためだけに生きているんじゃないッ！」

太腿に固定されている剣帯に手を走らせ、三本の投擲剣を引っ掴む。それを上空に向かって投げ放ち、自身もそれを追う。追いながら、思った。

ああ、なんと勝手な言い分だろう。

あの方から家族を奪うきっかけを作った自分が、あの方の生き方に口を挟めるものか。

「逃げるな！　逃げずに私に勝って見せなさい！」

飛来した投擲剣を、レクティファールは空中の不安定な体勢の中で一つ残らず掴み取ってみせた。そのまま投擲剣を光へと変換し、何処かに転送してしまう。

その一連の動作の間に、一気に距離を詰めた。

「レクトぉおッ！」

躊躇いなく大上段から振り抜く。その瞬間金属の悲鳴が上がり、

回転していたはずの刃が一本の細い刀身に絡み取られた。

「やっと名前で呼んでくれた」

「ふざけるなッ！」

そのまま床へと降り立ち、二人は神殿の中庭へと飛び出した。

周辺に神官や騎士の姿が見える。

だがウィリィアはそれに気付かず、レクティファールも対応する余裕がなかった。

歴戦の戦士であるウィリィアの動きは、〈皇剣〉を継承したばかりのレクティファールには余りにも早い。

〈皇剣〉の反応速度のお陰で一撃も受けずに済んでいるが、周辺にまで気を配る余裕はなかった。

それに、レクティファールにはもう一つ余裕を奪う理由がある。。

「そんな苦しそうな顔をして追い掛けられたら、流石に対処に困ります」

「そんな顔してない！」

〈岩窟龍断ち〉の駆動機関が過負荷に警告を発する。刃の回転を無理やり停止させられ、駆動部からはうっすらと白煙が上がっていた。

「離せ！」

「まあ、構いませんが」

ウィリィアが怒鳴れば、レクティファールはあっさりと〈岩窟龍断ち〉を解放した。駆動部は異常加熱によって緊急停止したままだ。

「ああッ」

だが、ウィリィアはそのまま〈岩窟龍断ち〉をレクティファールに向けて振り上げた。

回転していなくともある程度の切断能力は有している。それに、ウィリィアには目の前の男の冷静な顔が酷く気に食わなかった。

相手が皇太子であることさえ、彼女は完全に意識の彼方に追いやっていた。

それだけメリエラを奪われることに逆上したのか、純粋にレクティファールを疎んじていたのか。

その答えさえ見付けようとしないまま、彼女は〈岩窟龍断ち〉を振り下ろす。

「おっと」

大きく土を巻き上げながら、〈岩窟龍断ち〉は地面にめり込む。ウィリィアの動きは、時間を経るにつれてぎこちないものへと変わっていた。

レクティファールには、それが手に取るように分かった。しかし、

一体化した〈皇剣〉が幾度反撃の機会を教えても、彼はウィリィアに手を上げようとはしない。

彼は〈岩窟龍断ち〉を避け、中庭を走り、庭の中にある人工林へと足を向ける。

木々の中では、いよいよウィリィアの動きが鈍くなった。

樹木と〈岩窟龍断ち〉が接触しないよう、一つ余計な動作を強制させられるようになったからだ。

「逃げるなって言ってるでしょうッ！」

「逃げなくては当たってしまいます」

そうなれば、ウィリィアは皇太子を伝家の宝剣で傷付けたことになってしまう。

たとえレクティファールが問題視しなくても、周囲の者たちがウィリィアを遠ざけるだろう。

それは、レクティファールの望むことではなかった。

「落ち着いてください」

「わたしは落ち着いて……」

そんなはずがないことを、二人とも理解している。

目尻に涙を浮かべて叫ぶウィリィアも、その涙に胸を軋らせたレ

クティファールも。

「その剣を下ろしてください」

そう言ったところで、返答は剛剣の一撃。

レクティファールは〈岩窟龍断ち〉を躱しながら鬱蒼と生い茂る樹々の間を走り、その中から一本の樹を選び出した。〈皇剣〉の光学情報分析により見付け出したその樹には、他にはない特徴があった。

「ウィリィアさん」

できるだけ優しく名を呼べば、逆上したように彼女は迫ってきた。

真っ直ぐに、彼女の信念のごとく、生き様のごとく。

「どうして、今、あなたが！」

もう少し自分が強ければ、〈皇剣〉を使いこなせれば、この人にこんな顔をさせずに済んだだろうか。

笑った顔でも、怒った顔でも、困ったような顔でも、照れたような顔でもいい。

ただ、泣き顔だけは苦手だ。

「――私にも、良く分かりません」

自分が此処にいて、〈皇剣〉を扱う身の上になった理由など、分

かりはしない。

「だったら……！」

「ですが、ウィリィアさん」

こんな自分でも、分かることはある。

理屈以上の何かが目の前の女性を大切だと結論づけていて、自分の感情もそれを肯定していることだ。

「私はウィリィアさんのことがどうしようもなく大切なので」

「――ッ！　そんなことッ、そんなこと……！」

「まあ、分かりやすく言えば」

そう、一言で言えば。

「一目惚れかと」

「――え」

がしゃん、と〈岩窟龍断ち〉が地面に落下する。

ウィリィアは力なく柄を掴んだまま、目を丸くしてレクティファールを見上げた。

その瞳が動揺し、口が意味もなく半開きになる。

呆然、と言えば、それだけでこと足りる表情だった。

「ですので――」

もうそろそろ、剣を置いて欲しい――その言葉はしかし、ウィリィアには届かなかった。

「ふ」

「ふ？」

彼女は顔を真っ赤に染め、肩を震わせ、涙目になって、〈岩窟龍断ち〉を振り上げる。

レクティファールの顔色が、一気に青ざめた。

「え」

本当に意味のないその一言を最後に、〈岩窟龍断ち〉は振り下ろされた。

同時に、神殿の各所で「ふじゃけんにゃ」という悲鳴が聞こえたという。

◇　◇　◇

レクティファールという男を表現するとき、女の存在は欠かせないと人々は口を揃える。

正妃、側妃、愛妾、と男女の仲であった者たちはもとより、友人や好敵手といった間柄の女性たちも多い。もちろん、レクティファ

ールは男性の友人や好敵手にも事欠かないが、物語として彼の人生を描く場合、女性たちを中心に据える場合が多く、そういった理由から「レクティファールは女好きだった」という明確な根拠のない評判が立ってしまったのだと考えられる。

当時の他国の専制君主と比較してもレクティファールが群を抜いた女性遍歴を持っていたとは考え難く、ある種の情報操作によって人々の間にそういった評判が定着したというのが、現在の定説だ。

それらの女性の中で、〈白鱗の龍妃〉メリエラをはじめとした五人の四龍姫などは、それぞれが物語の主人公になるほど人々に愛され、よく知られている。

だが、そういった日なたの妃たちがいるように、歴史に名の残らない日陰の妃たちもいる。

側妃アリアといえば、そういった妃たちの中では比較的名の知られた人物だろう。

行儀見習いの貴族子女を多く受け入れたため、貴族たちへの影響力が大きかった人物で、それにより、貴族たちを手玉にとった悪女とも、君臣の融和に努めた聖女とも言われる。

彼女の人生はレクティファールに献上されたところから始まると言って間違いない。

マリエの離宮の主として、レクティファールとの間に七人の子を作った彼女であるが、その出会いについては彼女自身ではなく、彼女の下で行儀見習いをしていた一人の女性が書き残している。その女性はレクティファールの仲立ちで隣国の王太子の元へと嫁ぎ、両

国の友好の架け橋として国民に愛された。

◇　◇　◇

なるほど彼女は男の理想というものを具現化した一つの形であった。

全体的に細く、決して肉感的ではないが艶美さを失わない肢体。

皇太子に“献上”されるだけあって、薄い桃色の髪は白に近い。緩やかに波打つそれが軽やかにレクティファールの視界で踊り、その髪の中に浮かんだ白皙は一つ一つの部位が整っていた。純粋な美という意味では、皇国の社交界に於いて美姫と称されるメリエラよりも洗練されているかもしれない。

ただ、何かが抜け落ちているような気がして、彼は気付く。

（ああ、人形のような美しさ、とはこういうものか……）

選ばれて、そういう形に育てられた。たった一つ、男に気に入られるためだけに。

だからこそのこの美貌なのだ。

整形だとか、肉体改造だとか、そんな次元のものではない。

彼女たちは、それ以外に選択肢を与えられずに育てられる。

それ以外に道があることも教えられず、疑問を持たないように常識ではなく知識だけを与えられて。ほんの一握りの男に総てを捧げ

るためだけに生かされてきた。

それが今、レクティファールの前にいる『蕾の姫』。

男を知り、花となった暁には『花の妃』と呼ばれるようになる最上級の『蕾』。

この上なく丁寧にアリアと名乗った彼女だ。

「殿下は、湯浴みはもうお済みですか……」

レクティファールの姿を見て、彼女はそう言って少し困ったように顔を伏せた。

その仕草にミレイディアからどんな指示を受けていたのか大凡理解できたが、何、ミレイディアの日頃の言動を思えばさして不思議でもない。

彼はできるだけアリアという存在に深入りしないよう、慎重に言葉を選ぶ。

「疲れていたから、早めに休もうかと」

言葉数を少なくしたのは、相手にこちらの感情を伝わりにくくするため。

暗にこれから休むところだと伝えたのは、彼女が自分の『手付き』として扱われる前にここから帰すためだった。

彼にしてみれば、とりあえず会ってみたという時点で関係各所に

対する義理は果たしたと考える。

ならば、さっさとお引き取り願うべきだろう。

レクティファールも男である。美しい女性が目の前にいれば心も弾もうが、このアリアという女性が意志とも呼べない曖昧な気持ちでここにいるということは容易に理解できる。

そこで手を出すことは、果たして後の後悔の種にならないのか――レクティファールはそう考えてしまうのだ。

「そう、ですか……」

だというのに、アリアは彼の意図を理解したようには見えなかった。或いは、上役からきつく言い含められているのかもしれない。

肩や背中、胸元など、メリエラが普段来ているものより素肌を晒した艶麗な衣裳の裾を弱々しく掴み、寝室へと繋がる扉をちらちらと盗み見ている。かと思えば、今度はレクティファールの顔を伺うように見上げてくるのだ。

もしかしたら、先ほどのレクティファールの言葉を彼女の役割に沿った形に解釈したのかもしれない。

彼女は緊張を少しも隠せず、震える声で言った。

「では、あちらのお部屋で――」

ああ、やっぱりだ。

レクティファールは頭を抱えそうになる自分を抑え付け、頭を振って、できるだけ高圧的にならないよう細心の注意を払い、それから口を開く。

「いや、必要ない」

でも結局、その声は固くなった。

レクティファールは自分の言葉に目の前の女性――或いは少女の肩が大きく震えるのを認め、口を噤む。

そして考える、もしかしたら彼女は自分以外の男というものを間接的にしか知らないのではないか。

男を悦ばせる知識技術は教えられていたとしても、それを実在する男で確認したことはないのではないか。

そこまで考えて、レクティファールは別の事実にも気付いた。

（――ここで帰したら、彼女はどうなる？）

皇太子に突き返された『蕾』。

確かにその容貌は皇国どころか大陸の男たちの欲望の対象として相応しいだろうが、現実はどうだ。彼女はメリエラやリリシアとは立場が違う。

彼女を育てた者たちにとって、彼女が何もされずに――手を付けられずに帰ってくることは何を意味する。

決まっている。これまで彼女に注ぎ込まれた時間、労力、金、ほとんどが露と消えるのだ。

当然彼らもそれで諦めるわけにはいかないから、レクティファールより格下の男に再び差し出されることもあるだろう。だがその相手は、皇太子の『お下がり』を欲しがったりするだろうか。いや、本人が望んだとして、それを周囲が許すだろうか。そもそも、皇太子殿下の眼鏡に適わなかったような『失敗作』を貴族や大商人が欲しがるのか。

彼らにも見栄がある。皇太子から直々に下賜されるならともかく、在庫処分のような形で女を宛てがわれたら、彼らの矜持は著しく傷付けられるだろう。

最上級の『蕾』としての価値はレクティファールに気に入られなかった時点で地に落ちる。となれば、見た目が良いだけの娼婦として客を取らせた方が儲けが大きいと考えたりはしないだろうか。

この常識を知らず、世間を知らず、男を知らない『蕾』の運命とは、今日この大神殿に上げられた時点で決まってしまったのではないだろうか。

決して逃げられない場所まで追い遣られてしまったのではないだろうか。

そこまで考えたとき、怯えたように自分を見るアリアの姿を見て、レクティファールは総てを理解した。

――ああ、これが皇太子であり、皇王か、と。

己の内の正義感と義侠心に駆られるまま人を物のように扱う人々に憤慨し、自己満足に浸って彼女を帰したあと、その運命がどうなるのか、それに気付かなくても考えなくても良い存在なのだ。

（解りたくないもない現実だ）

そうだ。

もう自分はあの頃の価値観で何かを判断することは許されない。

あの世界で死んだとき、あの世界の価値観は総じて錆び付き、朽ち落ちてしまった。それを以前のように気楽に使うことはできず、代替品で自分という装置を動かすしかない。

継承の儀の直前、ミレイディアに自分は言った。諦めることを諦めようとしていると。

だがどうだ、現実はそれよりも早く、諦めて進むよりなお早く進めと言ってくる。

諦めろ、そして棄てろと言ってくる。

それが皇だと。

それが生かす者、殺す者だと。

諦めて諦めて、それでも諦めて進もうとしている自分に、世界は言うのだ。

本当に総てを諦めていいのか、と。

自分の出す答えを知っていながら、それでも問うてくるのだ。

（これが、これこそが皇か）

命を簡単に斬り捨てる権利を有し、他人を虐げる権利を有し、総ての価値観を無視する権利を有する至高の愚者。

愚者であることに誇りを持ち、愚者であることを忘れず、愚者としての生き方を恥じること無き愚者。

自らの諦めの果てに存在するのは、愚者の宴。

「なんだ――皇とは、愚者の中の愚者じゃないか」

簡単なことだ。賢しく生きるには、この身は大きくなり過ぎた。

この身は、この身に相応しい生き方しかできない。

「よし」

ならば、自分なりに生きよう。誰憚ることなく、皇王として好きに生きる。

「え、あの……？」

レクティファールの口から漏れた言葉に、アリアが顔を上げる。

きょとんとしたその顔を見て、彼は腹を決めた。

「あなたが好きなものは何ですか？」

「え……」

アリアはレクティファールの問い掛けに困惑しているようだった。

当然だ。何の脈絡もなく、これといった分野に限定することさえしていない質問を投げ掛けられ、悩まない者は幼い子どもぐらいのものだ。

ただ、相手が相手であると思ったのか、アリアは少しの間だけ悩み、レクティファールの反応を窺うように答えた。

「花が、マリエの花が好きです」

レクティファールはその答えに肯く。大いに結構、そう思った。

そして重要な決断するように二度三度深呼吸し、アリアに向き直る。黙ったまま、目の前の『献上品』の両肩に手を置いた。

アリアが身体を震わせたことなど、無視した。皇王のように、傲然と。

そして告げるのだ。これ以上ない傲慢な言葉を。

人々が望むように、皇王らしく。

「これからの君の時間、私がすべて預からせて貰う。その代価に、君が望むとき、望むだけ、私は君にマリエの花を贈ろう。君の望みは私しか叶えられない。君の未来は私しか作り得ない。そしてその

代償は、やはり私にしか贖えない」

驚くアリアの顔を見詰めながら、レクティファールは自分の中の何かを圧殺しようとしていた。

それは嘗ての自分であり、皇太子としての自分でもあり、そして今、アリアを前にしてなおこの場から逃げたいと思う自分だ。

みっともない、この上なくみっともない自分が腹立たしく、しかし、それ故に彼は決断することができた。

皇王が殺すのは他人だけではない、自分をも殺す。

全身全霊を懸けて、自分という存在を殺し尽くさなくてはならない。その切っ掛けとして、アリアという女性を利用しようとしていた。

「だから、君は生きている限り私の庭に咲く花であってくれ」

くそ、と益体もない自分の語彙を毒突きたくなった。

もっと他に言うべきことがあるだろう。もっと他に言わなくてはならないことがあるだろう。

そう思えば思うほど、言葉は出てこない。

だから、彼は言葉を諦めた。ただ、自らの地位に与えられた女を怒りのままに抱き締めた。

ああ、この素晴らしく愚かなる世界よ。

自分は諦めよう、この世界で嘗ての世界を忘れぬことを。

だが、諦めても尚進もう。

あらゆるものを諦めても、それでも進んでやろう。

そして忘れるな、“我”はここにいる。

レクティファール・ルイツ＝ロルド・エルヴィッヒはここにいる。

皇ではない、皇として。

それだけは、世界にさえ指図される謂れはない。

◇　◇　◇

お転婆正妃リリシア。

本人はリリシア・エルヴィッヒと呼ばれることを好んだと言われる。

わずか十四歳にして大国の正妃となった彼女は、しかしその二つ名に反してそれ以降特に目立つことはなく、他の妃に較べれば平穏な人生を歩んだ。

子を成し、家を守り、正妃としての生き方を全うした。

若い頃は随分とお転婆で、少数の護衛を付けて城下へと繰り出したことは数知れず、城下の人々の中にはその正体に気付きながらも、

あえてそれに触れないまま彼女と接していた者たちもいたという。

その目撃談には様々なリリシアの姿があり、港で釣りをしていた。川に落ちていた。木の上で降りられなくなっていた。屋台で食べ歩きしていた。本屋で立ち読みして店主に怒鳴られていた。初等学校の生徒たちと札遊びをしていた。公園にいた妊婦の腹部を撫で、嬉しそうに笑っていた――などなど、皇王家の公式記録よりも、市井の者たちの日記などの方が多くの記述が見られる。

子どもが生まれてからはその子どもと一緒に城下に出掛けることもあり、彼女の第一子――正妃が産んだレクティファールの子としては六人目。男子としては一人目――が市井の女性に求婚し、結ばれたというのは、その頃の教育が影響しているのだと思われる。

◇　◇　◇

大神殿の廊下を、軽やかに進む一つの人影。

袖なしの上衣は簡素であるが品の良い装飾で彩られ、丈の短い傘袴から伸びる足は細く白い。

揺れる翡翠の髪には幾つもの飾り紐、廊下で彼女の姿を見つけて頭を垂れる者たちは総て、その嬉しそうな姿に顔を綻ばせた。

その中のひとり、警護役の神衛騎士が彼女に訊ねた。

「猊下、どちらに？」

「レクティファール様のところに」

実を言えば、訊くまでもなく答えは分かっていた。

彼女の顔に訊いて欲しいと書いてあったから、敢えて訊いたまでである。

「殿下はまだご執務の最中ではありませんか」

「ええ、ですから突然訪ねて驚かせて差し上げようと思ってるのです。マリア殿にはお話ししてありますし」

根回しは済んでいるという巫女姫を前に、騎士は苦笑と共に頭を下げる。

「そうですか。それでは、いってらっしゃいませ」

「はい！」

まるで翼があるよう、とはこのような光景を指す言葉なのだろう。

騎士はとんととん、とんととんと規則正しく飛んでいく巫女姫を見送った。

〈温室〉に着くと、リリシアは入り口に立つ二人の警備の騎士にレクティファールの所在を確認した。

彼がまだ中で政務を行っていると聞き、良かったと呟いて近くの長椅子に腰掛ける。

両足をご機嫌に揺らし、鼻歌を歌いながら、何度も何度も〈温室〉の入り口を窺う。

警護の騎士たちは微動だにせず入り口に立っているが、時折その視線が巫女姫に向かうのは仕方のないことだろう。

彼らはリリシアがこれほど明るく活発な少女であるとは知らなかった。

物静かで、儚いという印象をずっと抱いていた。

それが、たった一人の青年の登場で一変した

今のリリシアは毎日大神殿の中を駆け回り、歳相応の笑顔を各所に振り撒いている。

神官たちさえその行動を諫める者は少なく、諫めても笑顔で諭す程度。

一番強く窘める者がいるとすれば、白龍姫メリエラという有様だ。

「猊下、そろそろ殿下が参られます」

警備の騎士がそう告げれば、リリシアはぴょんと椅子から立ち上がって身嗜みを整え、最後に騎士たちの前でくるりと回った。

「おかしなところはありませんか？」

問われれば、答えなど決まっている。

騎士二人は声を揃えた。

「はい、お綺麗ですよ」

その答えに、ぱっと表情を輝かせるリリシア。

うきうきと入り口を眺めるその姿に、騎士たちは崩れそうになる表情を必死に維持した。

年齢相応というよりも、実年齢より幼い印象を受ける仕種の数々。

一部の女官たちがリリシアの姿に熱を上げているというのも、あながち嘘ではないかもしれない。

騎士たちがそんなことを考えている間に、〈温室〉の入り口が開いた。

「――礼」

金属の擦れる音と共に、騎士二人が剣を捧げる。

扉から姿を見せたレクティファールが答礼すると、二人は剣を降ろして直立不動の姿勢に戻った。

「ご苦労。楽に」

「は」

再度の金属音。騎士は肩幅に足を開き、必要以上に溜め込んでいた力を抜いた。

「レクティファール様！」

「ああ、リリシア。こんなところで何を？」

「決まっています！　レクティファールとお散歩がしたくて……」

なるほど、とレクティファールは独語し、背後を振り返る。

蒼龍公マリアと、神殿に召喚された数名の文官に頷いてみせた。

「では、万事予定通りに」

「は」

マリアを除く文官たちが一礼と共に立ち去る。いずれも書類を抱え、歩き難そうだった。

「マリアも、よろしく頼みます」

「はい殿下」

優美なお辞儀の最中、マリアはリリシアに片目を瞑って見せた。

リリシアもレクティファールに気付かれない程度に頷き、二人の無言の遣り取りは終わる。

静かに歩いて行くマリアの背を見送り、レクティファールはリリシアに訊ねた。

「メリエラは……」

「お仕事です」

即答である。

レクティファールはリリシアの声音が硬く鋭いものに変わったことに苦笑すると、「少しは仲良くしてください」と本心を吐露した。

「だって、レクティファール様はお一人しかいませんもの」

「分身でもできれば違うんですかね」

レクティファールが歩き始めると、リリシアはその腕にしがみつくようにして身体を寄せてきた。

歩き難くないかと聞けば、大丈夫と満面の笑みが返ってくる。

「――分身なさるのはいいですけど、本物はわたしのものです」

「それでは何も変わらない気がしますけどね」

「ええ、ですから分身なんてしなくて構いません。ちゃんとわたしを見てくだされば」

頬を膨らませるリリシアの頭を撫で、レクティファールはやれやれと頭を振る。

リリシアの気持ちは理解できなくはないが、一夫多妻という制度そのものが原因ともなれば抜本的な解決は難しいだろう。

皇太子として仕事をしていると分かるが、君主というのは専政者

であると同時に調停者である必要がある。

行政官庁の間を取り持ち、家臣同士の間を調整する。それができなければ、皇国という国は満足に回らない。

調整という地味だが重要な仕事を忘れた国は、少しずつ少しずつ末端から腐っていくものだ。中央がそれに気付いたときには、もう手遅れということも多い。

帝国などは、その典型的な悪例だ。中央の目の届かない場所で、地方官吏や軍人が好き勝手に利を貪っている。

中央にもその現状に気付いている者がいるだろうが、彼らはその情報を生かすことができない。そのような場を得られないからだ。

組織の潤滑剤となる調停者が不在であることは、そのまま国家の存亡に直結する。

そして調停者には、幅広い人との繋がりが不可欠であった。

「レクティファール様は皇太子ですもの、わたしも妃妾の百や二百でどうこう言うつもりはありません。ですが、それもレクティファールがわたしをちゃんと見てくださることが前提ですよ？」

「百、二百……」

想像よりも桁が一つ違う。レクティファールは何とも微妙な気分になった。

余りにも桁が大きすぎ、想像の範疇を超えてしまったのだ。

「レクティファール様？　ちゃんと聞いてくださってますか？」

「ええ、もちろん」

「だったら、もっとわたしのこと見てください。こういう髪型がいいとか、こういう服が好きだとか、色々お教えくださいませ」

言われて、レクティファールは改めてリリシアに目を向ける。

リリシアも、じっとレクティファールを見上げていた。

「今日の召し物は如何ですか？　髪型は？」

「ええと、よく似合っていらっしゃる」

「どの辺が？」

ぐいと腕を引かれ、レクティファールはつんのめった。

リリシアの胸に引き寄せられた腕から柔らかさと暖かさが伝わってくる。

「そうですね……」

レクティファールは顎に手を当て、リリシアの姿を上から下まで眺める。

リリシアが頬を染め、顔を伏せた。

「あの、やっぱりもう少し女性らしい体付きの方がいいですよね。一応栄養を考えた食事を摂って、朝晩の運動も欠かさないように頑張っているのですが……」

姉という希望があるからこそリリシアも努力を欠かしていないが、彼女の種族の十四という年齢の平均にさえ届かぬ身体は、彼女にとって密かな悩みであった。

「いえ、それは時間がどうとでもしてくれるでしょう。私としては、リリシアが健康でいてくれればそれで……」

「でも……！」

リリシアがなおも言葉を続けようとするも、レクティファールがその唇に人差し指と中指を触れさせる。

困惑したようなリリシアに、レクティファールは溜息を吐いた。

「最近、どうにも女性関係で色々問題が起きている気がするのですが、占いとかありませんかね」

「む――っ」

レクティファールの吐き出した言葉に、リリシアが抗議の声を上げる。

自分の知らないところで一体何をしているのかと訊きたいらしい。

「何というか、色々努力しているのです。リリシアと同じように」

「む――？」

首を傾げるリリシア。

「前は大切なものがなかったから気付かなかったんですが、人って大事なものができるとそれを守るために平気で無茶をするようになるんですよね」

ウィリィアのメリエラに対する献身も、これに類することだ。

大切なものは人によって様々で、金、地位、女、或いは家族や友人、信義などもこれに含まれる。

「私にとってはメリエラもウィリィアさんも大事ですし、アリアだってリリシアだって失くすのは怖い。皇太子の地位や権力は目に見えませんが、リリシアたちはこうして目に見えて、触れ合うことができる。私としては、リリシアたちの方がより大切なものだと思うんです」

「む」

リリシアが神妙な顔で頷く。

「ですから、リリシアが色々悩んでいることはどうにかしたいですし、相談されれば幾らでも協力します。その代わり、私の近くにいてもらいたいと思っていますけど……」

「む！？」

驚いたようにレクティファールを見上げるリリシア。

「あー、そういえばそういうつもりでは誰にも言ってないなぁ。あ、丁度いいからここで伝えておこうか」

レクティファールはリリシアの前に膝を突くと、その手を握って笑い掛けた。

「リリシア」

「は、はい！」

上擦ったリリシアの声に、レクティファールの笑みが深まる。

「色々あるでしょうが、私の手の届くところにいてください。手が届かないと不安でしょうがない」

リリシアはレクティファールの物言いに目を点にしたが、すぐにその言葉の真意を悟って真っ赤になった。

「あの……それって……」

「これからもどうかよろしく、そういうことです」

リリシアに答え、レクティファールはその指を絡める。

メリエラとも手を繋いだが、リリシアの手はそれよりも一回り小さかった。

「如何ですか？」

リリシアが、大きく頷いた。

「はい！　不束者ですが、こちらこそよろしくお願い致します！」

第一章ダイジェスト：第十話～第十八話　後編

〈皇都奪還戦〉

皇国戦史に燦然と輝くこの戦いは、のちの時代の陸戦に大きな影響を与えた。

大規模な航空戦力を打撃部隊として用い、その援護の下で陸戦部隊を進撃させる。それだけであればこれ以前の戦いでも見られた戦術だが、そこに投入された戦力を見れば、航空射爆こそが本命であり、陸上戦力の投入は最後の一手であったことが分かる。

この戦いでは〈偉大なる凡将〉として名の残るベルファイル・ハウサー元帥が、初めて摂政レクティファールの下で働いた。前線指揮官としては凡庸そのものの彼だが、その実力は決して他の三元帥に劣るものではなかった。

新生近衛軍の父としても知られる彼は、レクティファールの臣下として近衛軍を一線級の軍隊に育て上げ、その功績をもって始原貴族の一角に叙せられることになる。

彼の孫であるエルウィン・ハウサーが近衛軍元帥として元帥剣を受け取った際、彼は「必ず祖父を超えてみせる」と全軍の前で演説したというのは有名な逸話だが、それほどまでに、近衛軍でのベルファイル・ハウサーの評価は高い。

◇　◇　◇

〈アルストロメリア民主連邦〉首都〈アニュア〉。

都市中心部での人口六〇万を誇るこの大都市は、旧帝国崩壊後のアルマダ大陸でもっとも早く高層建築物が建設された都市として世界に知られていた。

民主主義を掲げ、当時この地を支配していた大国、〈神聖メルキトル王国〉に対して独立戦争を仕掛けたアニュア・ハイスト。彼は二〇年にも亘る独立戦争を王国政府打倒と王国の崩壊という最高の結果で終わらせ、皇国歴でいう一八〇八年に〈アルストロメリア共和国〉の樹立をこの地で宣言した。

彼の死後、共和国は急速にその版図を拡大した。武力行使をも辞さない強硬姿勢で同じく〈神聖メルキトル王国〉から分裂した周辺国を『民主化』し、その国家群を取り込み〈アルストロメリア民主連邦〉へと国号を変えた。彼らが今のように内政に全力を投じるようになり、外征を控えるようになったのはここ五〇年のことであり、それも〈アルトデステニア皇国〉や〈新生アルマダ帝国〉という大国と国境を接することになったからということと、度重なる侵略戦争で国民に厭戦気分が漂い始めたからという理由だった。

ただ、アニュア・ハイストの掲げた民主主義は周辺国にも飛び火し、アルストロメリア民主連邦の周辺には同じく民主主義を掲げる国家群がひしめき合うこととなった。

それらアルマダ大陸民主主義国家群が隣国の独裁者を討つという名目で軍を発してから八ヶ月余り、皇国歴二〇〇九年黒の第二月二六日午前三時〇五分の連邦国務省に一人の老人が現れた。

中肉中背、灰色の髪をきっちりと撫付けたその老人の肩書きと名は、〈アルトデステニア皇国〉外務院所属、〈アルストロメリア民主連邦〉駐箚大使ウィルコット・ハース。

彼は迎えに現れた国務省職員に案内され、国務省の最奥へと進んでいく。

そんな彼の持つ鞄の中には、この〈アルストロメリア民主連邦〉の運命を左右するであろう封書が大切に収められていた。

「――皇国の大使殿は、確かアンバー・フォイツ殿ではありませんでしたかな」

長官公室に通されたウィルコットに対して高級そうな革椅子を勧め、世辞と挨拶もそこそこにそう切り出したのは〈アルストロメリア民主連邦〉国務長官ガートンだった。彼は不機嫌さを隠さず、このような時刻に自分を呼び出した無礼な来客に対して冷ややかな目を向けている。

だが、ウィルコットの表情は穏やかなものだ。ガートンの言葉などどうとも思っていない、そんな態度だった。

ウィルコットはその態度を崩さないまま、ガートンの疑問に答えた。

「彼は昨日本国へと戻りました」

「ほう……それはまた急な話ですな」

ガートンは不機嫌なままだ。

「申し訳ありませんな。本来ならご挨拶の一つもしなくてはならないというのに……」

「いえ、貴国の状況であれば仕方がありますまい」

ガートンの目に微かな嘲りが浮かぶ。

国を割って内乱中をしている皇国に対する嘲弄だった。お前たちのせいで余計な苦労を背負い込んだのだとその目が言っている。だが、それは逆恨みもいいところだ。ガートンは元軍人であり、そのせいかは分からないが、連邦内の皇国侵攻推進派の先鋒だった。軍人時代に築いた繋がりで軍部にも大きな影響力を持っている。今回の連合軍編成に関しても、彼が中心になって旗を振っていたらしいとウィルコットは聞いていた。

ただ、ウィルコットはガートンの言葉にも態度にも一切の揺らぎを見せなかった。変わらず、穏やかな笑みをその顔に浮かべている。

ガートンはその笑みに底知れないものを感じ、密かに警戒を強めた・

「まこと、申し訳ない。実は私も本日付でこの職に任じられましたもので、この訪問はそのご挨拶も兼ねているのですよ」

好々爺然とした態度は、むしろガートンの神経を逆撫でするだけだった。

ミラ平原での戦闘など夢幻であるかのように扱うその態度に、ガートンは必死で怒りを堪える。相手は国力で自国を凌駕する大国の大使、無碍に扱うことはできなかった。

彼はなけなしの自制心を総動員し、引き攣りながらも作り笑いを浮かべた。

「これはこれは、ご丁寧にどうも。それで、ご用件はこれで終わりですかな？　もしそうなら私はここで――」

これで話は終わりだ。暗にそう告げて腰を浮かせようとしたガートンだが、ウィルコットが公室の外に拡がる〈アニュア〉の市街地に目を向けて呟いた。

「閣下、ここ最近、連合軍に部隊を送り込んでいる国々で囁かれる噂をご存知ですかな？」

「――！」

ガートンの動きが止まった。

彼は慌ててウィルコットを見るが、彼は窓の外を見たままだ。

ガートンは大きく鼻を鳴らすと、どっかりと革椅子に座り直した。ガートンの大きな身体が、深く沈み込む。

明らかに先ほどよりも不機嫌だ。

「貴国で皇太子殿下が立太子されたとかいう、あの噂ですかな」

「おお、ご存知でしたか」

ウィルコットはようやくガートンに向き直った。

やはり、穏やかな笑顔のままだ。

ガートンの怒りが勢いを増した。

「ですが、先の大使殿はそれは根も葉もない噂だと私に断言しましたよ。私と国務省はそれを貴国の公式見解として受け取っているのだが……」

「なるほど、では彼の罪が一つ増えますな。本国政府の命令無く、一外交官の勝手な私見を国家の公式見解として他国にお伝えしたのですから」

「――――」

ガートンは舌打ちした。

ウィルコットはガートンの言った『公式見解』を一外交官の『私見』であると断じた。なるほど、当時の皇国は外交権を持つ国家元首不在である、本国の命令を無視した行動と言われれば連邦側も納得するしかない。連邦も建前としてその外交官の罪は追求するだろうが、あとは皇国外務院からの謝罪ぐらいしか成果は得られまい。再発防止を徹底するというありきたりな回答文書が目に浮かぶようだった。

心底腹立たしいが、ガートンはその話題を引っ込めた。

「では、噂ではないと仰るか」

「実は今日お伺いしたのは、その件のことなのです」

「ほう」

ウィルコットはガートンに問うた。

「閣下の知る噂とは、どのようなものでしょうか」

「――先ほど言った通り、皇太子殿下が立太子されたということだけですが……」

ガートンはできるだけ当たり障りのない言葉でその場を切り抜けようとした。迂闊なことを言って場の主導権を渡したくはなかった。しかし、それは結局果たせなかった。

「おや、その皇太子殿下が連合各国に謝意を抱き、その友情に報いるために今回の派遣で死傷した兵士に対する補償を皇家が行うという噂はお聞きになりませんでしたか？　正規軍に治安維持を命じたことも？」

「――――」

聞いている。

ここ数日、連邦以外の連合各国に流れている噂だ。いや、すでに噂の範疇に収まらなくなってきている。

すでに政府と報道協定を結んでいない二流以下の新聞各紙は皇国の政変と次期皇王の英明を伝えており、一部の大衆新聞も報道協定を破棄してその話題を取り上げ始めていた。

それによると、皇国で皇太子が新たに立ち、その皇太子が今次の派遣軍による治安維持活動を受けて、連合各国に感謝の意を伝えているという。今回の派遣で負傷した兵士には見舞金を、死亡した兵士の遺族には見舞金と補償金を支払うと約束しており、さらには国内の治安維持のために国軍を掌握、動員したということで、連合各国の市民の大多数はその噂と報道を喜びと共に受け止めていた。

これらの報道が外的要因によるものだということは政府もわかっている。新聞社や放送局に皇国系の商会から多くの金が流れ込んだことも掴んでいた。ただ、法に触れるようなことをしている訳ではないため、手を出すことができなかったのだ。

しかし、そんな国家間の綱引きを知らない民衆は、これらの情報に純粋な喜びを見せている。自分たちの行いが友好国の元首に認められたのだ。手厚い補償も皇太子の名で約束され、その上皇国の治安維持のために軍を駐留させる必要もなくなるというのだから、喜び以外の反応など表しようがない。各国政府はともかく、彼ら市民は皇国の友人を救うための軍の行動を支持した。その役割が終わったのだから、当然軍は帰還すると思っているはずだ。これで戦場に赴いた家族や恋人、友人が帰ってくる、そう考えるだろう。

そして、連合は民主主義、国民主権。市民の意思は国家の意思と同義である。少なくとも建前上は。

「し、しかし、所詮は噂ですからな。そのような不確かな情報で軍を動かす訳には……」

「おお、おお、そうですな！　その通りです。だからこそ、私が参りました」

「何ですと……？」

冷や汗を浮かべ始めたガートンの言葉に、ウィルコットがずいと身を乗り出した。彼は驚くガートンを余所目に、鞄から一枚の封書を取り出すと立ち上がり、それを両手に捧げ持つ。

そしてその封書に一礼して脇に抱えると、ソファに座ったままのガートンに笑いかけた。

「閣下、我が国の皇都とこのアニュアの時差は何時間でしたかな」

「――あ、え、た、確か二時間だったと……」

「ありがとうございます」

ウィルコットは自分の懐から懐中時計を取り出すと、その時刻を確認した。

午前三時十五分だった。

「うむうむ」

ウィルコットはそれを確認して何度も頷くと、懐中時計を仕舞ってガートンを見詰めた。

「――っ」

ガートンはその視線に怯んだ。

先ほどとまでは違い、その表情は穏やかさなど微塵もない。

引き結ばれた口、鋭く相手を見据える瞳、どれもが先ほどとは違っている。

ウィルコットはガートンを見下ろし、言った。酷く冷たい声だった。

「閣下、我が皇国の国事国政全権代行、摂政レクティファール殿下よりの書状をお渡ししたい」

「な……」

「そのような姿のまま、殿下よりの書状を受け取るお積もりか」

「あ、いや……」

ガートンは慌てて立ち上がるとぎこちなく姿勢を正し、やはりぎくしゃくと深く一礼した。

外交儀礼上、一閣僚と一国の元首ではその地位に雲泥の差があった。その元首の代理として書状を渡す場合、その大使はやはりガートンより立場が上になる。

ウィルコットは冷や汗を浮かべ、青ざめた顔のガートンに欠片の同情もしなかった。ただ、粛々と自分の責務を全うした。

「――摂政殿下よりの書状である」

「は……」

ガートンは震える手でそれを受け取る。

金で縁取られた滑らかで手触りの良い封筒に、皇国国章『四頭の龍と十字星』の封蝋。そのどれもが彼の神経を削り取った。

ガートンはできるなら、このままこの封書を破り捨てたかった。だが、それが許されるはずもない。

「この書状には、殿下からの軍撤退要請が記されております。この要請が早急に受け入れられない場合、貴国にとっても我が国にとっても好ましからざる事態となりましょう。それは私も、我が主君も望まぬこと。国務長官閣下に於かれては、貴国政府と議会を説得し、早急なる軍の撤退を決定していただきたい。我々はそのために必要な協力を惜しみません。摂政殿下にもそう命じられております」

「――承知いたしました。大統領にお伝えいたします」

いつの間にか、ガートンはウィルコットの顔を見ることができなくなっていた。

手に持った書状はかたかたと震えており、その瞳は茫洋として焦点を結んでいない。

たった一封の、自らの手の内にあるこの封書が引き起こす事態を考え、彼は暗澹たる想いを抑えきれない。

「それでは、私はこれで失礼いたします。両国のため、早期の撤兵を重ねてお願いいたします」

「はい、承りました……」

ウィルコットが公室を出ると、ガートンは革椅子に崩れ落ちた。

そして、自らの手に中にある封書を見詰め、その扱いを考える。

首都の至近にまで他国の軍隊が進出している皇国は何としてもその軍勢を撤退させたい。当然、この封書はそのための手段だろう。

皇太子が現れた――その事実だけを考えれば、連合各国の思惑は外れたと考えるのが妥当だ。大陸有数の大国である皇国はすんでの所で身を持ち直し、皇太子の下結託して連合と帝国に対するはず。当然、連合としては進駐の大義名分が失われた以上軍を退くしかない。

ただ、帝国がどう動くかは分からない。かの国はこれまでも皇国の国土を脅かし続けてきた。皇太子が現れたくらいで兵を退くことはないと考えた方が自然だろう。

となれば、皇国としては早々に連合軍を引き上げさせ、腰を据えて帝国との戦に集中したい。

「なるほど……」

そこまでの思考で、ガートンは先ほどまでの絶望的な気持ちが和らいだのを感じた。

何だ、皇国の奴らに連合軍と帝国軍双方を相手にする力など無いではないか。

よくよく考えてみれば、我が連合は大規模な増援部隊を皇国首都

に向けて動かしている。それとミラ平原の派遣軍が合流すること叶えば、再び皇国の喉元に剣を突き付けることができるはずだ。

皇国側に連合と戦争する気がないというのなら、積極的に正規軍は動かせまい。となると軍の主力は民兵を中心とした貴族軍、やりようはある。さらに言えば、正規軍が皇太子の命で動き出すまではまだ時間があるはずだ。それまでに増援と派遣軍を合流させ、その撤退を条件に皇国に大幅な譲歩を強いる。

何、我らは人道的見地から軍を派遣しただけに過ぎない。皇国は我らの“善意”に感謝の気持ちを表すだけで、決して武力による圧力に屈してしまった訳ではないのだ。

「いや、私としたことが相手の口車に乗せられるところだった……」

皇太子が立太子したとしても、軍を纏めて反撃に出るまでに何日も掛かる。おそらくその間に、増援部隊と合流できるはずだ。

北から帝国に攻められ、首都には我が軍。皇太子は我々に多くを捧げ、そして撤兵を請うしかない。何、どうということもない、つい最近まで姿形もなかった皇太子が国内の貴族を纏められるはずもないではないか。

最後まで皇家を見捨てられなかったリンドヴルム公爵家はともかく、他の三家は国を守るために仕方が無く皇太子に協力しているだけだろう。交渉の場で上手くこちらの策に乗せれば、三家は再び皇家に対して反抗する。そうなればしめたもの、三家からの突き上げを受けながら交渉する皇太子に、様々な条件を飲ませることができるだろう。

「ははは……」

まだ何も終わっていない。

こんな書簡に怯える必要などないではないか。

すぐにでも今回の大使との会談を大統領に報告し、今後の皇国の扱いに関して打ち合わせなければ――ガートンは自身の未来の明るいことを確信し、大統領に連絡を取るべく秘書官を呼ぼうとした。

だが、彼の頭に浮かんだそれは、結局のところ空想に過ぎなかった。

「閣下っ！」

けたたましく飛び込んできた秘書官が、目を丸くするガートンにこう告げた。

――ミラ平原にて当連合軍と皇国摂政軍衝突せり。我が軍、圧倒的劣勢。

そして、その報告から五〇分後。

緊急に連邦大統領府に集められた閣僚が今後の対皇国戦略について話し合いを始めようとしたその矢先、再びの凶報が彼らの下に届けられた。

――皇国派遣軍総司令部より、降伏の許可を求める報あり。

――我が連合軍は、皇国摂政軍の包囲下に置かれた模様。

――増派部隊侵攻経路上に皇国西方諸侯軍展開せり。

――派遣軍、増派部隊との合流、絶望的。

◇　◇　◇

近年公開された皇都奪還戦を題材にした映画――『ミラ平原』では、いっそ清々しいほどに摂政軍を悪役として描いている。

主人公が義侠心溢れる連邦陸軍の若者であり、映画そのものは連合軍側から見た〈ミラ平原事変〉と〈皇都奪還戦〉を描いたものだが、事前警告もなしに突如降り注ぐ光の雨。空を埋め尽くす飛龍たち。散発的に撃ち上げられる対空砲火は弱々しく、射爆から逃げ惑う兵士たちの必死の形相と悲鳴が観客に恐怖と臨場感を与えている傑作だ。

仲間を潰れた幕舎から引っ張り出そうとしている主人公と、その頭上を埋め尽くす飛龍。

兵士たちの泣き叫ぶ声と、飛龍たちの鳴き声。

必死の思いで離陸しようとする連合の飛竜と、それを離陸前に叩き潰す皇国の飛竜。

余りにも一方的な展開に否定意見も多い映画だが、最後の瞬間、降伏を受け入れた皇国の白い飛龍が主人公のすぐ頭上を通過し、彼の流した涙を吹き飛ばす光景は人々の心に善悪とは別の価値観を与

えてくれる。

実際、『ミラ平原』は連合側を描いた前編と皇国側を描いた後編に別れており、いずれ公開される後編では連合軍を悪虐非道な軍に据えた構成が採られている。

映画のように少数の登場人物に焦点を当てた作品では、善悪が固定されやすい。

しかし善悪を明確に定め、その上であえて観客に善悪を問う。

正義が存在するのかどうか、人々が自ら思考することこそこの映画の持つ存在意義なのだと、監督であるリビル・フォスは語っている。

◇　◇　◇

朝日に照らされるミラ平原に、爆光と轟音が連続する。

連合軍陣地に対して行われた皇国摂政軍の爆撃は連合軍の戦闘能力を奪い去るという点に重点が置かれており、人的被害を極力抑えるという摂政の意向を実行したものだった。

対空陣地、野戦砲陣地は兵士たちが迎撃準備を整える前に砲を破壊し、この時点での連合軍側の被害は重傷者と軽傷者に留まっている。例外的に幾つかの陣地が攻撃に晒されたが、これは事前に取り決められた連合軍内部で多くの違法行為を行っている部隊への攻撃だった。

さらには通常の戦場では有り得ないほどの龍や飛竜の鳴き声が連

合軍陣地に轟いており、それらは連合軍将兵の士気を粉微塵に打ち砕いた。元々、亜人や人間という種族は龍種や竜種に対しての絶対的な恐怖を遺伝子に刻み込まれている。迎撃のために弓を構えても、銃を構えても、杖を構えても、その恐ろしい雄叫びを聞けば手足が震え、精神が揺らいで弓矢も魔法も使えない。

連合軍側にも対空戦力として、鷲の上半身と獅子の下半身を持つ幻想種『グリフォン』や鷲の上半身と馬の下半身を持つ幻想種『ヒポグリフ』、さらに皇国側に比べて少ない数ではあるが、飛竜を擁した空軍部隊が随行していた。だが、初撃で防空指揮所が破壊されたせいでまともな迎撃行動が取れず、地上に貼り付けられたまま制空権を完全に掌握されてしまい。迂闊にグリフォンやヒポグリフ、飛竜などの空戦部隊を離陸させることができなくなった。

そんな中で一人の勇敢な竜騎兵が空に上がろうとするも、それを察知して急降下してきた戦闘騎に飛竜の鼻っ柱を強打されて竜から落下、腰の骨を折るという重傷を負ってしまう。そんな姿を見せ付けられて、彼に続こうと思える者が現れる訳がない。誰もが戦々恐々と空を見上げ、皇国の同業者たちの勇姿を見詰めることしかできなかった。

さらに連合軍航空部隊の不幸は重なった。飛竜以外のグリフォンやヒポグリフは敵の龍種に怯えてしまって騎兵の命令を聞かず、とても戦力にはならなかったのである。空に上がった状態ならともかく、完全に頭を抑えられた状態では本能的な恐怖が主人の命令に勝るということだろう。

この時点で、攻撃開始より三六分。連合軍で最大の戦力を保持していた本陣は完全に戦闘能力を喪失したと言って良かった。

だが、依然として皇都と始原貴族軍に対している陣地は戦意を残しており、反撃の準備を進めていた。

皇都上空から移動してきたレクティファールは戦場を俯瞰する高空を旋回しながら、その動きを見詰めていた。

「貴族軍側の陣地への攻撃が一足早そうですね」

〈そうね、良い指揮官がいるみたい〉

「これで降伏してくれれば一番楽だったんだけれども……」

〈本国からの命令もなく、さらに戦いもせず降伏はできないでしょうね。しかも、あの陣地の将兵は今までずっと始原貴族軍に対して優勢だった。勝てるという幻想から抜け出せないのよ〉

「重装歩兵と陸上騎兵が出る……始原貴族軍を突破して平原から撤退するつもりか……」

重装型の魔動式重甲冑に身を包んだ歩兵と、馬や亜竜種の一つである陸竜に跨った騎兵が列を整えて動き始める。騎兵で陣地を切り裂き、その傷を歩兵でこじ開けるつもりなのだろう。全軍をこの場から撤退させるには、今以外にその機会はない。これ以上の時間の経過を許せば、彼らの持つ機動力と突破力は兵や馬、陸竜の心身の疲労によって殺がれてしまうだろう。

さらに言えば、彼らの向かう先と思われる始原貴族軍の陣地はこれまでの攻撃で散々に耕されており、陣地の攻略を目的とした攻撃ならともかく、一点突破を目指した突撃を防ぎきることは難しいと言わざるを得ない。しかし、始原貴族軍はすでに陣地の修復を開始

しており、時間が経てば経つほどその防御力は回復してしまう。

それらの理由から、連合軍は死に物狂いで突破を図るだろうと思われた。

しかし、その突破を許すわけにはいかない。

彼らが首尾良く陣地を突破したとして、そのまま本国に撤退するならまだ良い。

だが、撤退の最中に脱走兵が出るのはほぼ確実なことで、それらが皇国の治安に大きな影を落とすことは目に見えている。さらに非対称戦を仕掛けられるような小部隊が皇国内に潜伏するようなことになれば、その排除に多大な時間と予算、そして鉄血が費やされることになるだろう。

内乱そして諸外国からの侵略と皇国の負った傷は決して浅くない。そこに更なる負担の増加など、絶対に認められないことだった。これから皇国は傷を癒し、新たな戦乱に備えなくてはならない。

平穏の影で、牙を研ぐ日々が始まるのだ。

「――『平和とは、戦争と戦争の間に流れる間奏曲に過ぎない』」

レクティファールはそんな言葉を思い出した。

偉大なる先達の言葉だが、自分がその言葉と同じ状況に立たされるとは思っていなかった。

だが、もう逃げ道は自分で塞いでしまったのだ。あとは前に這い

進むしかない。この身が無辜の民の返り血で塗れても、だ。

そう考えると――

「皇とは、なんとも損な仕事ですね」

〈今更何を言ってるの。皇以上にそんな仕事なんて、そうそうあるものじゃないわ〉

「至極ごもっとも。まあ、私も大して皇の仕事を知りはしませんが」

〈今、あなたが立っている場所。そこに立ち続けることが皇の仕事の一つよ〉

レクティファールの今立っている場所。

それは、多くの骸と妄念が渦巻く戦場だ。

「なるほど、一つ賢くなりました」

レクティファールは嗤った。

そう、自分はこの惨禍の中心に立つ者。今更、損も何もない。

ただ、彼女は違うはずだ。レクティファールは自らの騎龍に問うた。

「メリエラ、それでも付いてくるつもりですか、私に」

この問いは、これが最初で最後。

どんな答えを得ても、二度はしないと決めた。

果たして、彼の伴侶の言葉は明快だった。

〈付いていくだけじゃないわ。あなたが立ち止まろうとしたら、わたしが引っ張ってあげる〉

そう、後に付いていくだけじゃない。

ときに先に立ち、総ての汚泥を被ることさえ構わないと彼女は言ったのだ。

〈あなたの行いが正しいとわたしが思ったなら、百の老人だって潰してあげる。千の女だって喰らってあげる。万の子供だって焼き尽くしてあげる。わたしがあなたに誓ったことは、そういうことよ〉

「後悔は……しないんでしょうね……」

レクティファールは心底呆れていた。

そしてこんなにも強い女性が、何故自分のような男の隣にいるのかと本気で疑問に思った。

だが、その疑問さえ彼女に対する侮辱なのだろうとも思った。

〈心配ないわ、あなたが間違ったらちゃんと元の道に戻してあげる。どうしても戻れないなら、ちゃんと滅ぼしてあげる。そして冥界でも寂しくないように、あとから付いていってあげるわ〉

「――――」

ああ、なんとも恐ろしい。

だが、なんとも――

「――綺麗だ」

〈――!!〉

途端、メリエラの体勢がぐらりと傾いた。

レクティファールは滑り落ちそうになる身体を慌てて支える。そしてメリエラに訊いた。

「と、突風とかですか……？」

〈ええ、そうよ！　似たようなものよ！　――全く、情緒の欠片もない……戦場で言う言葉じゃないでしょう……〉

レクティファールの呟きにメリエラの怒声が返ってきた。

そのあと何かぶつぶつ言っているようだったが、小さな声で聞き取れなかった。

「何か言いました？」

〈――そ、そうならないようにあなたが……守ってくれるんでしょうって言ったの！〉

メリエラは途中もごもごと言葉を濁したが、そう言い切った。

そう言われてしまえば、レクティファールも言うべき言葉は決まっている。

「もちろん、この身の及ぶ限り全力で守りますとも」

ウィリィアさんとの約束ですし――後半の言葉は心の中に留めたレクティファール。正解である。

〈じゃあ問題はないわね。でも、今はわたしのことを気にせず仕事をなさい〉

「ええ、判りました」

レクティファールは微笑して頷き、すぐにその笑みを消し去って眼下の連合軍部隊を睨むように見詰めた。

連合軍の歩兵と騎兵は、完全に陣地から身を乗り出している。頃合いだった。

「――無駄な労力、所詮はあとになって分かること、か」

〈――？〉

レクティファールは呟き、念話を一人の女性に繋いだ。

彼らが合流しようとしている増派部隊に対する手は打ってある、あとは眼下の部隊の動きを封じてしまえばいいだけだった。

ミッドガルド侯アルブレヒトは、陣地の中央に位置する小高い丘の頂で、半ば呆然とした面持ちで連合軍の陣地を遠望していた。

隣にはエイメルシア侯ハイデル、アストリア侯タチアナの両諸侯。二人もまた、連合軍陣地にそれぞれの想いを込めた眼差しを向けている。

「まさか、四公すべてを纏め上げるとは……」

連合軍陣地の上空を埋め尽くす航空部隊を見て、ミッドガルド侯が呻くように漏らす。

彼が立太子の情報を得たのが三日前、アストリア侯が持ってきた情報だった。

半ば当然のように、皇太子が国軍や残った諸侯軍を率いてミラ平原に現れることは予想していた。だが、それは早くとも半月程度先のことだと考えていた。そして、白龍公軍はともかく、四公爵軍すべてを纏めることは不可能だとも思っていた。

皇国空軍に匹敵する航空戦力を有している四公爵軍はそれだけでも強力な戦闘集団だが、四公の内三公は皇王家からの独立を宣言している。皇太子の指揮下に入るには、当然一悶着あるだろうと考えるのが自然だ。

ただ、結果から言えば皇太子は四公の軍勢を纏め上げ、立太子からたったの数日でミラ平原に現れた。

皇太子が現れるまで何としても連合軍を引き付ける。そのためには命を捨てる覚悟までしていた三諸侯だが、目の前の光景はそんな

覚悟を嘲笑うかのようだった。摂政軍は始原貴族軍を顧みることさえせず、一方的に連合軍陣地に圧力を加え続けている。そこに彼ら始原貴族軍の介在する余地は無いように見えた。

しかし、少し考えを働かせれば皇太子が自分たちを歯牙にも掛けていないことには納得できた。

皇太子は自分たち貴族軍をこの戦いの勝利者にするつもりはないのだ。いいや、この内乱の勝利者は摂政でなくてはならない。今後の国家運営に際して皇太子が、ひいては皇王が貴族に遠慮するようではいけない。皇国は皇王が統べるべきものであり、貴族は皇王に従属して皇国を守り盛り立てる存在であるべきだった。

そして摂政軍が正規軍を擁していないのにも彼らは気付いていた。この戦闘を皇国と連合の全面戦争と見なす訳にはいかないのだ。

正規軍を駆り出した段階でこの戦闘は皇国軍と連合軍の争いとなる。それは皇国と連合の、国権の発動に伴う全面戦争を意味する。摂政が軍を率いた段階でそれは国軍と見なされかねない。たとえ天領の治安維持を名目として掲げてもその可能性は拭い切れない。連合側には侵略してきたという負い目がある分、幾らでも言い訳はできるだろうが、それでも危険要素は可能な限り排するに越したことはなかった。

そんな目的もあって、摂政はこの戦いで連合軍の将兵に死者が出ることをできる限り避けようとしている。そして、政治的にはこの戦いを連合軍の領土侵犯に対する警告に止め、それを受けて連合軍が撤退するという物語を作り上げる。

多少の調整は必要かもしれないが、最終的には連合側はその筋書

きに従うだろう。

連合軍兵士が皇国で行った蛮行を個人或いは非主流派国家の暴走とし、連合軍としては治安維持に努めたと強調。さらに始原貴族軍との戦闘を第三国の工作部隊と思われる武装集団によって引き起こされた不幸な事故として処理し、皇国と連合の間に事故以外の一切の戦闘行為は無かったと喧伝する。

皇国と連合の間にある友情には少しの翳りもない――皇国は連合との戦争を避けて国内の情勢を安定させるため、連合は主権者足る国民の支持を失わないため、その『真実』を『事実』として落とし込まなくてはならないのだった。

「むう、何とも難儀な戦いよ。初陣がこれとは、殿下の心労も大きかろうな……」

「ならば、貴殿が直接指導して差し上げるか？　飛竜の一騎くらいなら用立てることもできるが……」

「冗談はよせアストリア侯。この戦、殿下の掌にあってこそのものよ。殿下はよく軍を統率していらっしゃる、ワシがしゃしゃり出たところで、大して役に立つまい」

ミッドガルド侯は心底ほっとしていた。次代の皇王がどれほどの人物であるか、当代皇王を知る彼はそれだけが気になっていたのだ。だが、次代皇王は四公爵軍を纏め上げ、一時の感情よりも独自の中長期的な国家戦略に基づいて戦闘行為を行っている。満点を出すことはできないが、及第点よりは遙かに高い点数を付けられるだろう。

それが皇太子独自の考えではなかったとしても、それを容れて実

行しているのだから、皇としての資質はあると見ていい。

「殿下があと少し早く現れていたら、皇国はここまで乱れなかっただろうに……」

「いや、こうなったからこそ得たものもある。違うか、エイメルシア侯」

ミッドガルド侯の言葉をアストリア侯が引き継ぎ、エイメルシア侯に問い掛けた。

「然様。この戦で殿下が勝利なされれば、摂政としても次期皇王としてもその地位は確固たるものとなりましょう。対して我ら貴族はこの国を存亡の危機に立たせたという決定的な負い目があり、何よりも戦の趨勢を決する一因にすらなり得なかったという事実も残る。殿下はこの皇国の君主としての基盤を得、我ら貴族は殿下の下に跪くことになりましょうな」

ひょっとしたら、この戦は新たな皇王に対する供物だったのかもしれないとエイメルシア侯は思う。

これまでの皇国の歴史を自分の都合の良いように曲解し、座るべきでない場所に座ろうとした道化者。そんな者が現れたという事実こそがもっとも恐るべきことであり、この国を滅ぼす原因になるのではないか。エイメルシア侯はそんな考えが頭から離れなかった。

「当代皇王陛下がその地位を本来の主より簒奪したという変えようのない事実、それがしはその事実が恐ろしくてならなかった。二〇〇〇年の歴史がたった一人の莫迦に汚されたようで、我慢ならなかった……」

「――――」

ミッドガルド侯も、アストリア侯も、その言葉を不敬であるとは言わなかった。

彼の言葉は、始原貴族全員が多かれ少なかれ持っている考えだったからだ。

ひょっとしたら、皇国の歴史はここで終わるのではないかと心密かに怯えていた者もいるだろう。

〈皇剣〉という皇権を象徴するものを継承しない皇王というのは、国民総てにとって受け容れ難い存在だったのかもしれない。これまで皇国が繁栄を続けてこられたのは、偏に皇王という恐ろしくも頼もしい君主が国を纏めてきたからだと誰もが思っていたのだ。そこに血筋だけの皇が現れたとなっては、これまでの皇国の歴史とは何だったのかと思う人々もいるだろう。

エイメルシア侯は、そんな者たちの代表だったと言える。

彼らは間違いなくこの国とそこに生きる民たちを愛しており、そこに一切の虚偽も欺瞞も無い。

だからこそ彼らは今上皇王に対して敵意を抱き、しかしその愛情の結果、国と民を苦しめることとなってしまった。

「殿下があと少し早く現れていればと思うことは事実。されど、それはそれがしの勝手な言い分に過ぎない。殿下はつい先頃まで何も知らぬ一人の民であったのでしょう。そんな殿下から日常を奪い、

ああして多くの命を弄ぶことを強いたのは我ら。結局我らは、主君も民も苦しめるしかできなかった」

エイメルシア侯は呻いた。

「そんなそれがしとあの愚皇と、どれ程の違いがあるというのか。こうして命を捨てる覚悟までしていても、戦う殿下を見上げるしかできぬそれがしに、如何ほどの価値があろうか……！」

愛するが故、彼は他国の軍を招き入れることさえした。

そのときはそれしか方法がなかったなど、それによってもたらされた結果からすれば単なる言い訳でしかない。

彼が他国の軍勢を招き入れ、その軍勢が彼の愛する民を傷付けたことは紛れもない事実だった。

「殿下はそれがしを見てなんと仰るであろうか、売国奴か、皇国貴族の名を騙った詐欺師か、それともただの愚か者か」

どれであっても構わない。それだけのことをしたのは事実だ。

しかし、彼の言葉に応えたのはレクティファールでも同輩の二人でもなかった。

「ご注進！」

三人に駆け寄った一人の伝令兵が、告げた。

「我が軍前方、連合軍陣地より魔動式重甲冑装備の重装歩兵、及び

騎兵の集団が分離前進！　目的は我が軍陣地の突破と思われます！」

その報告に、三人の皇国貴族は連合軍陣地をじっと見据えた。

土煙を巻き上げながらこちらに飛び込んで来る騎兵の集団。

蹄の奏でる轟音が地面を揺らし、三人の足下まで震わせた。

「摂政殿下のお考えを思うなら、下手に迎撃することは避けるべきなのだろうが……」

「しかし、黙って蹂躙されるようなことになれば無駄な犠牲も出る。最低限の構えは取るべきだな。何より、突破させる訳にもいかない」

ミッドガルド侯が顎に手を当てて考え込み、アストリア侯がそれを補足する。彼女の言う通り、万が一にも陣地を突破されるようなことがあってはならない。

「うむ、全軍に下令。全軍迎撃準備、防御序列は対騎兵後対歩兵」

「はっ、全軍迎撃準備、防御序列は対騎兵後対歩兵」

ミッドガルド侯の命令を復唱し、伝令兵が走り去る。

三人はそれを見送り、各々の顔を見合わせた。

「殿下も白龍公も、まさか何も対応策を考えていないとは思わないが……」

アストリア侯が呟きながら自軍に戻るべく丘を下り始める。ミッ

ドガルド侯とエイメルシア侯が後に続いた。

「だが、航空部隊は本陣に掛かりきりだ。こちらに回す戦力など残っていないのではないか」

「機動力の問題でありましょうな。陸戦部隊を同道させてはこうも早くこの地に現れることはできませぬ」

ミッドガルド侯もエイメルシア侯も、それぞれ自分の軍を率いて戦ってきた戦歴がある。あれだけの打撃力を持った航空部隊を敢えて鈍足の陸上部隊と協同させるかどうか、正直悩まざるを得ない。

「ううむ、あそこまで見事な攻撃を成した殿下に手落ちがあるとは思えないのだが」

「では――ん？」

二人が丘を下りると、陣地内の兵士たちが彼らの下りてきた丘とは別の方向、陣地の北を見て騒いでいた。一足早くその場に着いていたアストリア侯も同じ方向を見てぽかんと口を開けている。いつも冷静な態度を崩さない彼女にしては、非常に珍しい表情だった。

何が起きたのか、二人が同時にそちらに目を向ける。

そこに居たのは、確かに居て当たり前の人物だった。

「こ……」

「黒龍公……？」

驚く彼らの視線の先では、体長三〇〇メイテルを超える巨大な黒龍が四肢で大地を踏みしめ、その巨体を揺らして連合軍陣地に向けて進んでいたのだ。その巨体は、見上げるほどの、という表現が一番適しているだろうか。歩くたびに地面は揺れ、空気まで震える。喉を鳴らせば衝撃波となり、揺れる尻尾の先では気圧の変化で水蒸気が発生している。

余りにも巨大過ぎ、近くでは全身を見ることも叶わない。

今まで何処にいたのかと思った二人だが、その巨体の周囲にさらに多数の龍が侍っているのを見て絶句する。

総数四〇〇程度。太い四肢を持ち地を征く地龍と、同じく飛行能力を持たない陸竜の集団だった。

「街道を進んできたのか？　だが、我が軍の警戒網をどうやって……」

地響きと共に進む龍と竜。

その視線の先にある連合軍の陣地でどのような阿鼻叫喚の地獄が繰り広げられているのか、彼らは想像することすらできない。あんな大きさの龍と、あんな数の竜と相対して平静を保っていられるのは、おそらく残りの三公と皇王ぐらいなものだろうと思った。

しかし分からない。あの数の龍族を見張りが見逃すとは思えないのだ。

「か、閣下……！」

「ん、ああ、お前か……」

揺れる地面と格闘しながらミッドガルド侯の元に駆け寄ってきたのは、彼が普段従えている従兵の一人だった。

彼はぜいぜいと息を切らしていたが、ある程度息が整うとすぐに主君に報告した。

「現在我が陣の側面を通過中の部隊より、通信がありました。彼らは黒龍公アナスターシャ様とその指揮下の陸戦強襲部隊、殿下のご命令を受け、我が軍陣地の北の森より進撃したとのこと。尚、自軍の進撃を妨げること厳に禁ずると」

「なるほど、人の姿を取らせての伏兵か……！」

ミッドガルド侯は驚きながらも、あの摂政殿下はなんてことをするのだと思った。

あれ程の戦力を丸ごとすべて伏せていたなどと、戦力の大いなる無駄遣いとしか思えない。航空打撃で決着が付くならそれに越したことはないということなのだろうか。しかし――

「通常の野戦なら決戦戦力になるほどの部隊だぞ……」

ずんずんと地面を揺らして進撃する黒龍公アナスターシャ。

人の姿では四龍公中もっとも小さい彼女だが、龍の姿ではもっとも巨大だ。

未だ存命である彼女の祖母、初代黒龍公はさらに輪を掛けて巨大

だということだがその大きさを想像することさえ今のミッドガルド侯にはできない。

それに進撃を妨げるなと言われても、そもそもあの部隊の進軍をどうやって止めろと言うのだろうか。それこそ悪い冗談だ。

「――しかし、殿下はどんな教育を受けてこられたのだ……」

あの戦力を伏せたこともそうだが、戦力投入の時期が相手の士気を打ち砕くことに最適なときを見事に突いている。

偶然でないとしたら、まこと恐るべき軍才ではないか。あれが公爵軍の将軍たちの策だとしても、それを使いこなした手腕は驚嘆に値する。〈皇剣〉継承のための教育を受けていないということが、たちの悪い嘘ではないかと思えてきた。

「殿下は一体、何者だ」

ミッドガルド侯が呟くとときを同じくして、巨大な黒龍がその口から黒の光条を放つ。

それは光をねじ曲げながら奔り、こちらに進撃してきた騎兵の鼻先に着弾。周辺に衝撃波を走らせた。

「大地が、爆発した」

と誰かが漏らした通り、連合軍の陣地が見えなくなるほど巨大な土煙を巻き上げる。

ミッドガルド侯はそれを見て、思った。

――これが、これこそが、皇国を二〇〇〇年の間守り続けた守り龍たちの力なのだと。

◇　◇　◇

この騒乱終結の後、皇国と連邦は二度と直接干戈を交えることはなかった。

それは両者の間にある国力の差が埋めようもないほど隔絶したことと、連邦内部で親皇国派が主流となったことが理由として挙げられる。

皇国は連合国に対していっそ不思議なほどに寛容であった。

しかしその裏で、皇国に対して否定的な人物が重要な地位に就けないよう連合各国の政府に働きかけていたことは、長い時間を経て公開された両国の外交文書で明らかになっている。

皇国は、軍事力の行使による紛争の解決を最終手段と位置付け、それ以外の手段を用いることが多くなった。そしてその手段に関して、寛容と呼べる意思は一切存在しなかった。

「皇国は軍事力の直接行使以外のあらゆる手段を用いて連合国に侵攻した」という識者もいるほど、その手法は苛烈で、慈悲の欠片も存在しなかった。

連邦国内で皇国系資本が幅をきかせるようになり、その国政選挙

を裏から操るようになるまでたった二百年。連邦は先の言葉通り、緩やかに皇国に侵略されることになる。

◇　◇　◇

連合軍が降伏した。

その情報を真っ先に得た人物が誰であったのか、後世に至るまでも明確な答えは出なかった。

連合軍司令部が降伏を申し入れたとき、彼らは降伏の軍使をアナスターシャ率いる陸戦部隊にも、マリア率いる水龍部隊にも送っており、さらにレクティファールが直率する航空部隊にも通信という形で降伏の旨を申し送っていた。

さらには自軍内にも降伏の事実を周知させるため、各国の国旗と陸軍旗を掲げていた旗手に対して『降伏を示す青十字旗を掲げよ』と命じており、旗手たちは自らの腰嚢の底に大切に畳まれていた白旗を取り出し、涙を流しながら国旗と陸軍旗を降ろしてそれを掲げた。

その中の一人、〈シェルミア共和国〉陸軍に所属していた一人の旗手は戦後こう語っている。

「自分は炎に嬲られて黒こげになった連隊旗を降ろし、青い十字の描かれた白旗を掲げた。それを、あのミラ平原の空を悠々と飛んでいた一騎の白い龍に向けて、大声で泣きながら力一杯振った。自分の人生の中で、あれほど惨めだった瞬間はない。だが、あれほど生を実感した瞬間もない」

彼のそのときの姿は、連合軍に従軍していた記者が写真という形で残していた。

その写真は後々まで連合国の市民たちに秘されていたが、戦後三〇〇年の年に公開され、写真賞としてはもっとも高名なアイレルメイカー賞を受賞している。

実は彼にはもう一つ逸話があった。旗を振った相手については彼自身、そのときは全く気付いていなかったのだが、戦後しばらく経ってその正体が発覚した。

彼らの軍を降伏へと追い詰めた張本人、皇国摂政レクティファール・ルイツ＝ロルド・エルヴィッヒとその騎龍メリエラだ。

旗手自身は単に自分の目に付いた中で一番目立っていた飛龍に旗を振って見せただけだが、実は彼こそがレクティファールに戦いの終わりを教えた人物だったのである。

レクティファールは眼下の旗について咄嗟に情報を取り出すことができなかったから、それをメリエラに訊いた。

メリエラはレクティファールの無知を知っていたから文句を言うこともなく、あれは降伏の申し出だと教えた。そのとき彼女は、この実にくだらない――その意義に関して、であり、戦争の当事者たちの名誉に関してではない――戦争が一応の終わりに向けて動き始めたことを喜んでいた。

しかし、メリエラはそのことを伝えたときのレクティファールの表情に驚いた。そして、記憶に留め続けることになる。

彼女の唯一無二の男は、そのことを教えられると途端に黙り込み、一切の感情を封じた顔で平原を見渡したのだという。

その表情には争いが終わったことに対する安堵も喜びもなく、或いは死んでいった両軍の将兵に対する悼みさえなかった。もしかしたら心の奥底で密かに発露されていたのかもしれないが、少なくとも彼女はその感情を知ることはできなかった。

敢えて言うまでもないが、彼女は後々までレクティファールという男に寄り添うことになる。

そんな彼女でさえ、このときのレクティファールの本心については知らずにその長い生涯を終えた。

ともかく、連合軍が降伏を申し入れてきた以上、摂政軍が戦闘行為を継続する理由はなかった。

レクティファールは全軍に攻撃の中止を命じ、白龍公カールを全権大使として連合軍との停戦交渉に当たらせた。このときすでに、皇国の西域にいた連合側の増派部隊は本国からの指示によって撤退行動を開始しており、皇国西方諸侯軍はその背後を送り狼よろしく追跡した。この世界で送り狼といえば半精霊の幻想種であり、言い伝えでは自分の縄張りの山を通過する旅人を守る存在であった。だが、万が一その旅人が山に対して何らかの不利益をもたらすと判断するとこれを噛み殺すと言われていた。そういう意味では、彼ら西方諸侯軍は正しく送り狼だった。

この増派部隊が万が一にも本国の命令に背いて皇国に何らかの不利益を強要しようとするなら、彼らはその持てる力の総てを以てこれを噛み殺すだろう。実際には増派部隊の方が数、質ともに圧倒的

に有力な軍であったが、西方諸侯軍の背後には摂政とその軍勢が控えている。この事実を踏まえれば、諸侯軍の方が優勢であった。

そんな事情の上に始まった連合国皇国派遣軍との停戦交渉は、連合本国との連絡を要するということもあってそれなりの時間が掛かった。本来なら両国の外務機関が行うべき交渉であったが、この戦いは政治的な理由で『戦争』という形を取ることができない。

彼ら連合軍は義勇軍に近く、摂政軍もその名の通り正規軍ではなく摂政自身の私軍という扱いになっていた。自然、交渉も遙か昔の戦いに於ける停戦交渉のように各軍の責任者が直接交渉するという形を取り、その責任者の背後に両国が立っているという構図になった。

数日間に亘るこの交渉で連合側は武装解除と皇国側の臨検に応じることを受け容れ、ミラ平原での睨み合いの最中皇国国民を拉致監禁していた将兵に関してはそれも引き渡すということで決着した。彼らは皇国の法で裁かれることになる。

連合側はこの交渉に先立ち、彼ら――事実上の戦争犯罪人の逮捕を自らの手で行っていた。

中には自らが連れ去ってきた女子供を『始末』しようとしていた所を逮捕された者もおり、連合軍司令部の素早い対応が無ければ両国の間にまた新たな火種が生まれていたかもしれない。

ただし、この交渉よりも以前に連れ去られ、殺されてしまった皇国の民も無視できないほど存在していた。

彼らを害した者たちは連合軍によって逮捕され皇国側に引き渡さ

れたが、これらの事件に関してだけは戦後皇国側と連合側の共同捜査が行われ、この時点で引き渡された者たち以外にも多数の逮捕者が出た。

政治に振り回されてこのような戦場に送り込まれた彼らに対する同情の声が無かったわけではないが、彼らの犯した民間人に対する拉致監禁、暴行、殺害という罪は戦場であっても、いや、戦場であるからこそ決して許されぬ罪であるとしてほとんどが極刑となった。

戦場での略奪暴行は得てして罪が重くなりがちだが、このときの連合と皇国の処断には政治的な要素が多分に含まれていたことは否めない。実際、このとき戦犯らを軽い罪で裁いていたら、皇国と連合各国との関係に無用の軋轢を生じさせていただろう。

連合軍将兵が友邦たる皇国のため、と言ってこの軍に参加していたことは皇国首脳部の誰もが知っていた。

だが、彼らに無用な情けを掛けようという者はひとりも現れなかった。

「連合軍の将兵に感謝をしていても、あの平原中に散らばっていた骸を前にそれを口に出すことは憚られた。その骸の中には明らかに兵士ではない女性や子供の遺骸も含まれており、連合軍の一部将兵が皇国の民に与えた痛みは決して幻ではないのだと我々に教えてくれた」

この言葉は停戦交渉の場に立ち会った近衛軍の武官のものである。

摂政の護衛として派遣された彼は、ミラ平原での戦後処理にも参加した。

そのときの経験をこうして言葉として残しているのだが、この言葉が皇国の将兵たちの気持ちを代表していると言っていい。彼らにとって連合軍は憎みきれない敵手であり、それでも憎まなくてはならなかった敵手だった。

結論から言えば、このときの戦乱の傷跡は人々が思っているより浅く済んだが、実際にここに骸を晒すこととなった人々の身内にしてみれば両国は怨みの対象だ。

政治とは大多数の人々の幸せのために行われているものだったが、それがこのときほど如実に表れたことはない。

少数の涙に暮れる人々を置き去りに、連合と皇国は新たな関係を形作り始めた。

◇　◇　◇

連邦との戦いを終えた皇国は、その傷を癒す間もなく次の戦いに身を投じた。

宿敵とも言える北方の人間種国家〈新生アルマダ帝国〉との幾度目かの戦いである。

その戦いについての詳しい内容は後述に譲るが、この連戦によってレクティファールの国内での評価は定まったと言っていい。

単に連合に勝利しただけであれば、この後の彼の治世はもう少し波乱を含んだものになっただろう。

彼はこの二つの騒乱を乗り越えたからこそ国内で絶大な支持を集め、誰にも掣肘されることなく政治を全うすることができた。

ときに戦争狂と呼ばれることもあったが、皇国の国民が皇王に求める「あらゆる種族の守護者」として、彼は十分な才能を持っていたようだ。

それを一番良く知っていたのは、図らずも彼の敵となった者たちだったのかもしれない。

◇　◇　◇

停戦交渉が終わりを迎えた頃、新たな衝撃は北からやってきた。

「現帝王の第十三姫、帝国の戦狂姫が南進」

〈パラティオン要塞〉を主戦場とする北方戦線に、帝国が一石を投じたのである。

帝国現帝王の十三番目の娘、帝族であると同時に不世出の戦将としても知られている第十三皇女グロリエ・デル・アルマダが自らの軍を率いて征南軍に合流したというその情報は、連合との争いに一応の決着がついたことで弛緩し始めていた皇国の思考を一気に引き締めた。

このとき帝国が帝王の一門に連なる者を皇国征伐に差し向けたのは、帝国の地理的な問題が第一の原因、皇国の内政問題が第二の原因とされた。

第一の原因、つまり帝国の地理的な問題というのは、大陸の北の

過半を占める帝国の冬の厳しさが挙げられる。

これまで帝国に攻め寄せた軍勢は数あれど、そのほとんどは帝国軍とその寒さに撃退されたと言っていい。帝国軍は寒さに対する備えが万全であるが、南から攻め寄せた軍が冬期攻勢を予定していてもその寒さは予想を遥かに超えるものだった。予定されている場所に陣地を築いたとしても、寒さは幕舎の布さえ凍らせる勢いであり、とても歩哨などできたものではない。地面はその下数メイテルまで凍り付き、穴を掘ることさえ満足にできない。そんな中でも帝国軍は攻撃を仕掛けてくるのだから堪ったものではない。

しかし、帝国が攻撃側に回っていると事情は変わる。

皇国の北も帝国本土ほどではないにせよ極寒の地である。当然〈パラティオン要塞〉は帝国本土にあっても十二分に機能を果たせるほどの寒さに対する備えがあるし、そこに詰めている要塞軍の将兵も寒さに強い。

無論、その要塞に攻め寄せている帝国軍が寒さに負けるなど有り得ないが、その補給線の維持という点で帝国軍は問題を抱えていた。

帝国軍の補給路となっている鉄道と街道は帝国南方の山間部を縫うようにして形成されている。

その道は冬季ともなると揃って雪に埋まり、雪崩や吹雪などの自然の猛威の前に幾度も停滞を余儀なくされる。さらには遭難滑落などの事故も少なくないため、輜重兵以外の人足や馬匹の集まりも悪かった。

一応その山間部を通らない大回りの補給路というのもあるのだが、

それでは時間ばかりが掛かり過ぎる上に、街道としては南方山間部のそれよりも整備不足で道が悪い。さらには山賊盗賊の類も多く潜んでおり、軍とはいえ無傷でそこを抜けられるとはとても思えないのだった。

そんな理由から、これまでの帝国による皇国征伐は冬期を跨ぐようなことは滅多になく。この戦いもあとふた月程度で降り始める雪によって自然休戦になると皇国側は考えていた。

しかし、皇女自らが軍を率いて来たとなると状況は深刻の一言に尽きる。

第二の原因、帝国は今回の皇国動乱を千載一遇の好機と捉え、本格的な皇国本土侵攻を決意したということだ。今回の皇女出征からもその本気ぶりを窺うことができる。

皇女グロリエの擁する軍はその数二〇万とも三〇万とも言われており、後方部隊を含めてしまえば中規模国家の全軍を上回る数になるだろう。

対する〈パラティオン要塞軍〉は二個師団二三〇〇〇。

現在要塞に攻め寄せている軍がすでに十二万居るため、それらと合わせて四〇万に届く軍勢と相対しなくてはならない。四〇万対二三〇〇〇。十七対一という途方もない戦力比だった。

魔法技能者が少ないという帝国軍の事情を加味したとしてもその戦力比が小さくなることはほとんど無く、このまま自然休戦の到来を待つということになれば要塞の陥落は酷く現実味を帯びてくる。

それに伴い要塞軍司令官ガラハ中将は、皇国陸軍総司令部に対して有力なる援軍を要請、可能であれば皇女出征という帝国の士気を大いに高める政治的手段に対し、摂政自らが軍を率いて援軍に駆け付けるという政治的攻撃手段を以て対抗されたし、とまで言ってきていた。摂政の持つ〈皇剣〉を相手への牽制に使おうという意図もあるはずだ。

当たり前のように、ミラ平原に置かれた臨時大本営での会議は紛糾した。

皇都と皇城の補修が終わるまで摂政の星天宮入城を延期していた彼らは、ミラ平原の皇都側、半島の根本付近に大規模な宿営地を作り上げていた。そこを摂政の座する臨時の大本営としており、政府の主立った者たちが摂政との会見を求めてそちらに出向いてきている。

そんな宿営地の中央付近に作られた石造りの建物、臨時摂政府と呼ばれているその建物で、北に対する方針が話し合われていた。

「ラグダナの次男坊は殿下を馬や砲などの兵器と同列に思っているのではないか」

そう口火を切ったのは皇国陸軍総司令官〈大将軍〉ゲルマクス・ツー・ヴィートリッヒ元帥。

今上皇王に職を追われていた彼だが、今回の皇都奪還に先立って出された摂政令によってその職に復帰していた。

元々は先代皇王に信頼された智将で、陸軍の元老とも言える人物だ。灰色になった髪を長く伸ばし、蓄えた髭と相俟って何処かの賢

人かといった風貌をしている。

「だが、殿下は自ら軍を率いて北進すると仰っている。ここで帝国に弱みを見せれば、来春以降帝国の攻勢はその勢いを増すだろうと」

白龍公カールはこの会議に摂政の名代として参加していた。

レクティファールの意思を十分に汲み、政治的感覚が未だ未成熟な主君に代わってその意思を代行している。

「殿下は戦狂いという評判も出始めている。あまり戦ばかりにかまけていては、民草がどう思うか」

そう慎重論を述べたのは皇国空軍総司令官〈大総統〉アレックス・ハルペー元帥。

堂々とした体躯と空色の短い髪を持つ美丈夫だ。

彼もゲルマクスと同様今上皇王に排斥されていた人物だったが、やはりレクティファールの手によってその職を取り戻していた。

「ですが、殿下の意見も至極ごもっとも。ここは殿下の御意志を尊重するのも手の一つでは？」

この場で唯一の女性が二人の同輩を宥めるように穏やかに言う。

皇国海軍総司令官〈大提督〉イザベル・ヴィヴィ・エールステン元帥。

穏やかに微笑む群青色の髪の老女は、実は蒼龍公マリアの異腹の

妹であった。

両親とも龍族の姉と違い彼女の母は混血種――各種族の血が混ざり合った混血種族、皇国の多数を占める。寿命以外は人間種とさほど変わりがない――だった。龍族と他種族の子供はほとんど龍族になるという常識からすれば非常に珍しいことではあるが、彼女は龍族の血とその特徴を受け継ぐことができず、姉より一〇〇〇歳も年下でありながらその姿は姉よりも老いて見えるのだ。

ただし、姉妹仲は良好で、彼女の子供たちの名前は半分以上姉のマリアが名付けた。龍族の女は生涯で二人から三人の子供しか産めないから、十人以上居る妹の子供たちというのはマリアにとって決して手の届かない夢のような存在だった。

「殿下も未だお若い。若い頃に戦場を経験しておけば、歳を経てから無茶をするようなことも減りましょう」

「む、むう……」

「イザベル様……」

二人の元帥はイザベルの言葉に反論できなかった。

元々三人の中での力関係ではイザベルが圧倒的に上位である。

軍歴とか貴族としての格とかの問題ではない。

あの穏やかな笑顔に対して強硬な手段に出られるほど、二人の元帥は捻くれていないというだけだ。

「皇太子時代に多くの戦場を経験することはこれまでの皇国の伝統。先代陛下も皇太子の頃に北との戦争に参加しておられたではありませんか」

しかし、今の皇太子レクティファールは摂政という立場である。

イザベルの言葉は確かに事実であるが、それが現状に沿っているかと問われれば首を傾げざるを得ない。

摂政とは事実上の皇王である。

その摂政が戦場に出るということは、それは親征ではないかと二人は思った。

親征そのものが悪い訳ではない。だが、この乱れに乱れた国内を放置して帝国との争いを重視する理由を得られないと彼らは思っていた。

そんな二人の内心を察したカールが、主君の意向を踏まえた意見を述べる。

「殿下としては、今回の戦いを正規軍と近衛軍のみで行い。今回の戦いで低下した正規軍の発言力を元の水準まで戻したいと仰せだ。正規軍が貴族軍に圧倒されているなどという状況は国防上好ましくないと」

「ぬ、そう言われれば我らに反論することはできんぞ」

ゲルマクスが腕を組んで唸り始める。

正規軍は役立たずという風評は国民の中に根強い。

それを払拭するためにもここで帝国軍を撃退し、皇国の剣とは正規軍であると内外に示したいというのが彼らの偽らざる本音だ。それに幾らパラティオン要塞が堅牢無比の大要塞だとしてもいつか限界は来る。

戦力比十七対一という馬鹿げた戦いをして勝てるなどと、この場の誰も思っていなかった。

「近衛から軍を引き抜き、殿下の直率とする。陸軍は主力部隊の編成を、空軍も輸送部隊を含めた支援部隊の編成を頼みたい。海軍は――」

「精々が帝国領海すれすれの海域で大規模演習を行うくらいしかできませんね。我々の持つ陸戦師団だけでは揚陸戦を行って占領地を得たとしても春まで保持できませんし、帝国内であれば向こうが圧倒的に有利です」

「――その通りだ。各軍参謀本部には摂政殿下より正式に命令が下ろう。諸兄らには参謀本部の作戦案に従って対帝国戦の指揮を執って貰いたい」

カールの言葉に頷く三人。

戦略は彼らの職分ではなく、各軍の参謀本部が考えることだ。その参謀本部が出した作戦案に従って実際の作戦を行うのが彼らの役割だった。

とはいえ、各軍の元帥として元帥府――皇王の軍事諮問機関――

を構成しているのはこの三名と近衛軍総司令官を合わせた四人だ。彼らが各軍の長であることに変わりはない。

「殿下の出立は陸軍の編成を待ってからということになる。素早い行動こそ帝国に勝つ第一条件と言えるだろう。各々には己の職分で全力を尽くして貰いたい」

その言葉を最後に、皇国軍首脳部の対帝国作戦会議は終了した。

元々儀式的な意味合いの大きかった会議だが、正規軍の長たちが摂政レクティファールの真意。つまり、今後は貴族軍重視ではなく正規軍重視の政策を行うと知ったことが最大の収穫だったかもしれない。

正規軍は今回の争乱で何の役にも立てなかったという汚名を雪ぐためにこの戦に全力を投ずるだろう。

摂政とその周囲の者たちの目的とは、そこにあったのかもしれない。

◇　◇　◇

皇国軍。

それは皇王を最高指揮官として戴く〈アルトデステニア皇国〉の国軍と定義されている。

陸海空の三軍から成り、近衛軍を含めて皇国四軍と称されることもあった。しかし近衛軍は皇国の国法上半正規軍であり、厳密な意味で皇国軍といえば、陸海空の三軍を指す。

無名皇の崩御から始まったこの混乱において、皇国軍は一つの軍事行動も行なっていなかった。もちろん、部隊単位での活動はいくつか見られたが、参謀本部が立てた命令を総司令部が実行するという形での作戦行動は、一切存在しない。

そのせいで無能集団と揶揄されることもあったようだが、皇国軍はその後汚名を雪ぐように活躍を重ね、大陸有数の軍として知られるようになる。

しかし、もっとも多い時期でも兵力は陸軍五十五万、海軍十七万五千、空軍十七万と、近衛軍の陸海空十万を合わせても一〇〇万に届かない。隣国〈新生アルマダ帝国〉の一二〇〇万、〈アルストロメリア民主連邦〉の三一〇万、〈シェルミア共和国〉の一二〇万と較べても、一際少ないことがわかる。無論、兵員の数だけがその軍の能力を計る目安ではないが、当時の大国の中では一際少ない人員であったことは間違いない。

その分兵士一人一人は精強で、帝国では皇国兵を無力化するために十倍以上の損害を覚悟したという。

戦闘系種族の比率が最も高い軍としても知られており、陸軍では獣人部隊や巨人部隊が有名だが、特に陸龍部隊は「陸上戦艦」と呼ばれ、畏怖の対象だった。さらに、この時代最大の水中戦力だった水龍艦隊は世界中の海軍に恐れられ、空軍の飛龍部隊はイズモ神州連合の空中戦艦「天照」と並んで空の覇者と呼ばれた。

◇　◇　◇

「白龍公」

会談を終えて廊下を歩いていたカールに背後から声が掛かる。

カールが振り返ると、そこにいたのはつい先ほどまで顔を合わせていた空軍総司令官アレックスだった。

「ハルペーか」

「いきなり渋面でお出迎えですか、白龍公。一応自分、あなたの元部下なのですが……」

苦笑するアレックス。

彼はカールが空軍の退役大将として士官学校の教官を務めていた頃、その部下として働いていた時期があった。

「元部下であろうと、今では何の関わりもない。素早く確実にことを運べと言い付けたのにこんなところで油を売っている貴様に掛ける情けはないぞ」

「はは、相も変わらず厳しい人だ。今日は公のことではなく、娘さんのことです」

「――メリエラか」

カールは渋面を深くした。

『騎従の契約』を結んでいたとはいえ連合軍陣地に攻撃を仕掛けたことに変わりはない。その文句ならば、それは受けるべきだろうと思い直す。

「済まなかったな。娘が勝手をした」

「いえいえ、あの勝ち気なお嬢様が自ら『騎従の契約』を申し出たと聞いて、摂政殿下とはそれほどの人物かと驚いたくらいです。何よりあの小さかったメリエラ様がご自身で伴侶をお選びになるなど、まさに快事としか……」

そこまで言って、アレックスは目の前の男の米神に青筋が浮かんでいることに気付いた。

あれ、儀式認めたんじゃないの――アレックスは大いに慌てた。

「あ、あー、うん、やっぱり寂しいですよね」

「気を遣うな馬鹿者」

「失礼しましたッ！」

敬礼。

元帥まで位階を進めたアレックスだが、やはりというか元上官には勝てないらしい。

「殿下であるからこそこの程度で済んでいるのだ。もしも他の者であれば――そうだな、もし仮に貴様が娘の伴侶であると仮定するなら……」

カールは最上の笑顔を浮かべて言った。

「貴様は今頃儂の腹の中だ」

そうですよねぇ、それが当たり前ですよねぇ。

アレックスは乾いた笑みを浮かべるしかなかった。

「それで、何の用だ。まさか娘の契約祝いとでも……？」

カールの目が龍眼になりかけていることに気付き、アレックスは慌てて両手を振った。

「いえいえいえいえッ！　メリエラ様の契約に関することではありますが、そのような用件ではありません」

「では何だ」

アレックスは若干逃げ腰になりながらも、空軍総司令官としての役割を全うするべく口を開いた。

「メリエラ・リリ・リンドヴルム中尉を明日付で近衛軍へと転属させます。此度の北征、正直なところ近衛軍は多くの兵を割けますまい。となると殿下の護衛としてもっとも適しているのはメリエラ様です。空軍士官として同道させることも考えましたが、近衛軍の侍従武官として殿下付きとなった方が面倒が少ないでしょう」

アレックスの言ったことは効率云々の問題と言うよりも政治的な要素が多分に含まれたものだった。

メリエラを空軍士官として送り込むにしても、指揮系統に組み込まれていない士官が軍にいるというのは軍令上余り歓迎できること

ではない。その点近衛士官となれば、個人で摂政直属の侍従武官という役職に就くことができる。侍従武官は近衛軍の正式な命令系統に組み込まれない名誉職的なものであったから、軍令上の混乱は起きない。

ただし、これには別の目的もある。

「メリエラは、これで軍務から離れることになるか」

将来の皇妃殿下を軍に置いておくことは避けたい。

アレックスたち空軍にはそういった思惑もあった。

皇妃が軍務に就くことは可能だが、皇王への配慮もあって危険な任務に就くことはできない。何より、観戦武官として軍に帯同するならまだしも、実際に命の危険のある前線に立たれては軍総司令部の気が保たないのだ。

そのため、空軍はメリエラという空軍士官を今日を以て退役させることにしたのだろう。

「メリエラ様は戦闘騎として類い希な才能を持っておられました。望むなら航空騎兵学校の教官職に席を用意させます。ですが、前線には……」

「よい、あれもすでに気付いているだろう。それを承知で殿下の騎龍となった。親がどうこう言うことは、あれの名誉を傷付けるだけだ」

カールとしても、娘が軍で何処まで行けるか見てみたかったとい

う気持ちもある。

だが、レクティファールの隣に立つメリエラは確かに幸せそうに笑っており、それはカールが何をしたところで与えられなかった表情だ。

それに、あの娘は前線で皇国の盾となることよりも、あの若者を支えることを選ぶだろう。

「何、メリエラが空軍を退いたとて息子もいる。そういえば、あれは最近どうなのだ？　長期休暇になっても基地から戻ってこんのだ」

「息子――エーリケ少佐ですか……航空教導団で雛共を扱いていると聞いていますが……。ああ、そう言えば教え子の娘に懸想しているという噂が……」

「何だと！？　儂は聞いてないぞ！」

げ、またやったか自分――アレックスはこの親馬鹿公爵の逆鱗を見事に狙い撃つ自分の運に絶望した。

「ど、どこの娘だ！　まさかもう手を出したと言うのではないだろうな！？」

「さ、さあ、本職には判りかねます。公が直接、基地に行った方が早いかと……」

必要なら慰問という形で準備を整えても良い。

これ以上この鼻息荒い親馬鹿に付き合わされるくらいなら、いっ

そ慰問の準備をした方が余程ましだ。

「分かった。この戦が終わり次第時間を空ける、慰問の準備を整えておけ！」

「は、了解しました」

アレックスは喧しい足音で去っていく元上官の後ろ姿を見て大きく嘆息した。

あれは絶対孫馬鹿になる男だ。殿下も色々ご苦労なさるだろうな。

◇　◇　◇

人々の記憶に刻まれた連合との争いは、その後の対帝国戦争を含めて一つの騒乱と考えることもできる。

レクティファールが摂政として臨んだこの二つの戦いが時代の節目になったことは、以降の歴史を紐解けば一目瞭然で、レクティファールに留まらず、彼の周囲にもこの二つの戦いを契機に頭角を現した者は多い。

皇立企業連合体もこの戦いの復興需要を足掛かりに規模を拡大し、軍もこの戦いの経験を糧に一層の近代化を成し遂げた。皇国そのものが生まれ変わるきっかけと言ってもいいほど、この戦いが各方面に与えた影響は大きかったのだ。

とはいえ、当時の人々は目先の問題を片付けることで精一杯という状況で、自分たちの行動が後世にまで深い影響を与えることになるとは思っていなかっただろう。

そんな皇国の中興を担った彼らが、何十年もあとになって、「あれほどがむしゃらに働いていたことが、まるで他人ごとのように思える」と口を揃えたことが、当時の騒々しくも華やかな時代を感じさせた。

第十八と半分の話「北へ」（前書き）

今回の話は、コメディ比が五割増となっております。
ご覧になる時はご注意ください。

第十八と半分の話「北へ」

――――黒の第三月五日。

摂政レクティファールはこの日パラティオン要塞救援軍を率いて皇都を発った。その救援軍の内訳は、皇国陸軍中央総軍所属の二個師団三〇〇〇と、皇国空軍中央航空総軍に属する第一空軍と第二空軍より二個航空団五〇〇。さらに近衛軍一個中隊一二〇だ。正面兵力を優先したため輜重部隊の比率は低いが、それは北方総軍が担う手筈になっている。

彼らは皇国全土に広がる鉄道網を北に向かい、皇国鉄道が通じる最北の都市『ヴァーミッテ』で魔動車と馬による移動に切り替える予定だった。このとき、聖都から皇都へ向かうよりも遙かに遠距離を移動しなくてはならない為、空中機動は行われていない。

その代わりという訳ではないが、北方総軍の持つ戦略予備軍が摂政擁する中央総軍の援軍部隊よりも一足早く、パラティオン要塞へと入城することが決まっていた。彼らは要塞防衛軍司令官ガラハ・ド・ラグダナ中将の指揮下に入り、帝国との激戦に身を投じることになる。

陸空軍の北進に先んじて海軍も動き始めていた。皇国の海を任務地とする海軍正規艦隊十二個の内、第三、第七艦隊を統合運用した北洋艦隊を北上させ、帝国領海に迫った。目的はお互いを仮想的とした軍事演習。しかし、その艦総てに実弾を満載しているというこ

とは、諜報に於いて他国の後塵を拝する帝国でさえ気付いていた。

さらに第三艦隊には強襲揚陸艦や輸送艦などが随伴しており、これらの艦は内部に“何か”を満載していることを示すように海に深く身を沈めている。敵地への揚陸を目的とした第三艦隊と、その揚陸を防ぐ第七艦隊という演習が設定されているらしいが、それが本当に軍事演習であるかどうか帝国に判断は出来ないだろう。

しかし、万が一にも『神聖なる帝国の国土』が害獣共に汚されては大問題。帝国海軍南遣艦隊がこれらの動きに反応して根拠地リーベラより出航した。

その報告を聞いた“大提督”イザベルは、皇国海軍連合艦隊旗艦にして第一艦隊旗艦『カルマイク』の司令座艦橋で微笑んだ。

帝国は皇国海軍の動きをどう見るか、反撃か、積極的防御か、或いは陸上での軍運動を間接的に援助する陽動か。

どれと判断してもイザベルたちの目的は果たされる。

「帝国は我々の動きを注視するでしょう。結果がどのようなものであれ、帝国は陸海の双方で我々皇国と相対しなくてはならない。そう、わたしたちの最大の目的はそこにあります」

皇国の最終的な戦略目標は帝国軍の撃退ではない。

『皇国、侮り難し』――――そう帝国に思わせることが最大の目的だった。

皇国の内情を正直に述べるのならば、今帝国と全面的な紛争を戦う余裕はない。

内乱とそれに先立って行われた当代皇王の悪政。結果として皇国の経済は破綻寸前、国民の心は辛うじて皇王家に対する忠誠心を残しているに過ぎない。内乱を終結に導いたのが次期皇王の摂政レクティファールであるからこそ、この帝国との国境戦を戦うだけの力、つまりは兵力と士気、そして国民の新たな戦争への許容と僅かな時間が残されただけで、本来なら早急な国家の立て直しこそが優先されるべきなのだ。

万が一にも帝国との戦いが長引けば――帝国側の事情からすれば殆ど可能性はないが――皇国の西方、連合参加国のいずれかが分不相応な野望を抱きかねない。

帝国と国境を接する連合参加国は帝国の南進を警戒して早々に軍を北に貼り付けることを選択したが、それ以外の国が何処を狙うかなど子供でも分かる。どのような過程を経たとしても、勝てば正義、負ければ悪。国家間の価値観とは得てしてそんなものである。

もちろん、西方には皇国陸軍西方総軍の各部隊が無傷で残っているので、皇国領土に火事場泥棒が入る可能性は限りなく低い。だが、万が一という事態は常に想定しておく、これが国防と呼ばれる諸々の事象の一側面だった。

摂政レクティファールが軍事列車に揺られて皇都を発った数時間後、聖都より巫女姫リリシアが皇都へと入った。

ある程度皇都が落ち着いてから皇都に入るべきという神殿の意見を受け容れてこれまで聖都に残っていたリリシアだが、再び摂政レクティファールが戦いに赴くと決まったとき、復興途中の皇都に飾られる象徴として相応しいのは彼女しか居なかった。

次期皇王摂政レクティファールの伴侶にして四界神殿の巫女姫。いずれは皇王の第一妃となることがほぼ決定している彼女ならば、摂政不在の皇都と皇城の民心を纏めることが出来るだろう。

もっとも、彼女は入れ違いでレクティファールに会えないことを酷く不満に思っていたらしい。だが、一人の気の利く女官に、

「夫の留守を万事大過なく守ることこそ良き妻の仕事」

と教えられたらしく。紅潮した顔を緩めながら鼻歌でも歌いそうな様子で、改装工事中の皇城を素通りして後宮へと入った。

未だ戦痕夥しい皇城内はリリシアのような純粋培養のお姫様が気軽に入れるような状況ではなかったので、レクティファールから書

面で皇城の留守を任された近衛軍総司令官ベルファイルが近衛軍の後宮護衛部隊である第一特別護衛旅団――――『機甲乙女騎士団』に命じてリリシアを後宮へと押し込んだのだ。

もっとも後宮というのは皇妃と呼ばれる皇族待遇の皇王配偶者が起居する施設なので、ベルファイルのリリシアに対する扱いが悪いということもない。ちなみに政治的な理由で皇妃になれない女性たちや自ら皇妃となることを拒んだ女性たち、側妃や妾妃と呼ばれる皇王の非公式配偶者――というよりも愛人――は一応皇族に準じる扱いはされるものの、公的に皇族や準皇族とは見なされず、後宮ではなく離宮で暮らすことになる。彼女たちの子供は皇妃の子供らと違って皇族扱いを受けないが、貴族以外の家、例えば大商家や名家などの家に養子に出される場合が多い。

畢竟、この時点で後宮に入れる資格を持つ女性はリリシア一人だけであり、ベルファイルの判断は特別間違ったことではない。

実はこのとき皇城に最も近い離宮にも一人の女性――――アリアが入ったのだが、これは殆どの市民に気付かれることはなかった。

彼女の場合はレクティファールがそう差配していたこともあって、本人が望みさえすれば皇妃として後宮へと上がることが出来たが、「所詮愛妾の身であり、さらには未だ摂政殿下の愛を受けていない自分が、リリシア猊下のおられる後宮に入ることは出来ない」と固辞した。

彼女なりのけじめということなのだろうが、この時点では後宮にリリシアしかいない。

後に皇妃となるであろう四公の姫君たちも入宮していない時点で

『蕾の姫』である彼女が入宮することは、後々の諸事を円滑に進める上では悪手だっただろう。そう考えれば、彼女の今回の判断は至極妥当だったと言える。

元々『蕾の姫』は特定の男に気に入られるために大貴族の令嬢以上の教育を受けるから、アリアの政治的な感覚というのはリリシアのそれと近い。巫女姫も幼少の頃から政治の何たるかを学んでおり、ひょっとしたらこの二人の方が摂政として日の浅いレクティファールよりも、余程上手く皇都とその周辺を慰撫することが出来るかもしれない。

ベルファイルや皇都に残された政府高官たちがそこまで考えたのかは分からないが、少なくとも、皇都の市民は笑顔で入城する巫女姫リリシアの姿に新たな時代の幕開けを感じ取り、明るい表情で復興に努めることとなった。

パラティオン要塞までの行程は、民間鉄道網との兼合いもあって時折駅に足止めされることもあり、多くの人々が順調と聞いて思い浮かべるほどには簡単に進まなかった。

それでも徒歩行軍が主であった頃に比べればその早さは桁違いであり、陸軍からも空軍からも、当然近衛軍からも文句は出なかった。それどころか三軍の兵士たちは、駅や駐車場に列車が止まる度に上

官からの『下車許可』の声を待つようになっており、摂政以外の救援軍首脳陣の苦笑と失笑を買っていた。

だが、摂政自身が時折供を連れて駅のある街にお忍びで出掛けるということもあり、彼ら兵士も交代で街に出ることが許された。

彼らは万を超える大集団であり、当然彼らが落とす金というのはそれなりの額になる。その結果、摂政軍の止まる駅、止まる駅で恐ろしい数の出店が軒を連ねることとなり、予定された日でもないのに駅前に市が立つことさえあったほどだ。

彼ら商人にしてみれば、寒々しい限りの懐を少しでも暖めようという切実な想いもあっただろう。

特にこれから迎える冬に備え、農業と兼業で店を営む人々は彼ら摂政軍の来訪を歓迎した。

自分たちは『摂政殿下の軍隊』であると自負するだけあって、街で問題を起こす兵士もおらず、むしろ摂政軍が来たことで治安が改善されたということもあった。

皇国鉄道は元々北への迅速な兵力展開を目的として敷設されたもので、それが皇国の各地へと広がっていったという経緯がある。そのため兵員輸送車両という専門の車両が作られており、これは海軍技術者が設計に携わって兵士たちの長旅の疲れを極力抑えるよう工夫されていた。

例えば寝台は四段三列になっているが、基本的に兵士一人に一つ宛がわれる。

帝国の兵員輸送列車が家畜用の運搬車をそのまま使っているのに対して、皇国のそれは狭いなりに一応個人の空間というものが用意されているのだ。彼らの寝台を覗けば家族や恋人の写真がべたべたと貼られているのを見ることが出来るし、夜ともなれば気の合う仲間と囁き合う光景が見られる。

皇国軍は他国に比べて女性将兵の割合も多いから、女性専用の兵員輸送車というのもあった。こちらは男性用の車両とは違う匂いというものがあり、男性兵士たちはどうにかしてあの車両に潜り込めないかと日々無駄な努力を重ねていた。潜り込んだところで、腕っ節に自信のある頼もしい女性兵士たちに“歓迎”されるだけなのだが、男の性質（サガ）というのは理屈で量れるものではないらしい。

流石に何日も足止めされることはないから車外宿泊は許可されないが、昼間の内に『花屋』や『花売り』の元へと向かうことは黙認されていた。というよりも、軍としてはそういったことを止めるつもりは全くない。

戦場などに於いては男女の欲求は高まるもので、それはどうしようもないことだ。

勤務時間と軍律さえしっかりと守っていれば、恐い憲兵に睨まれることもなかった。

そんな軍人たちと市民で溢れる市場を、軍装を纏った四人組の男女が歩いていた。

「――――勇猛果敢に敵軍に飛び込む軍人も、結局は人の子ということですかねぇ……」

雑多な人種と喧噪が場を支配する市場を歩きながら、一人の青年が漏らした。

肩ぐらいまで薄青の髪を一つに束ね、他の三人と同じく濃緑の皇国陸軍の制服を着ている。

「当たり前のことを感心したように言わない」

「――――――――失礼」

彼の隣にいた空色の髪の女性が、青年の言葉を窘めた。軍人を消耗品扱いする人々は多く、青年の発言はそのような意図がなかったとしても誤解を招きかねないものだったからだ。青年はそれを認め、大人しく謝った。女性もそれ以上何かを言うつもりはないらしく、一言「分かればよろしい」と言って視線を前方に戻した。

この二人の風貌は髪の色のせいもあってよく似ており、姉弟だと言われれば殆どのひとはその言葉を信じるだろう。実際、この市に来てからは何度も間違えられた。

実際のところ、女性の見た目は十代後半のように見える。しかし、見た目と年齢が一致していない種族が多いこの国では、見た目だけで年齢を判断する者は少なく、この二人の場合は雰囲気で姉と弟という判断が為されていた。

まあ、実際の年齢としては正しい。

「ウィリィア、あの串焼きは何かしら」

「白狼山羊の肉ではないでしょうか、この辺ではこの時期によく出回りますし」

女性――――ウィリィアとは青年を挟んで反対にいた銀髪の女性が彼女に問う。

問われたウィリィアは女性の指差す先を一瞥すると、少し悩みながらも答えた。女性はその答えに納得したのか、何度も頷きながら串焼きの屋台をじっと見詰める。

「ふうん、そうなんだ。美味しそうだし、ちょっと買ってくるわね」

「あ、いえ、姫様。言ってくだされればわたしが……」

「姫様禁止って言ったでしょう、メリエラでいいわよ。それに、軍にいればこういう場所で買食いなんて当たり前なんだから」

そう言うと、銀髪の女性――――メリエラは屋台に向かって走っていった。

屋台で彼女が串焼きを注文している間、残された三人は別の店を覗きながら時間を潰す。

串焼きの屋台の店主は中年の親父だったが、見た目麗しいメリエラの笑顔に鼻の下を伸ばしており、紙袋にどかどかとおまけの串焼きを放り込んでいる。すでにおまけの方が多いくらいだ。

もしかして、彼女はそれを狙っていたのだろうかと、青年は店主に少しだけ憐憫の情を抱いた。

あの女性は、何というか、すでに売約済みなのだ。たとえ自分のモノにならないと分かっていても、それが別の男のものになるというのは、男にとって格別の悲しさがある。それを知らずああしてだらしない顔を晒しているのだから、同情ぐらいはしてもいいだろう。

まあ、売約先が自分だという優越感が無いこともない。

「――――うん、自分がここまで良い性格しているとはこれまでの人生で気付かなかった。いや、これまでの人生って何処から何処までだろうか……まあ、いいか……」

そもそも、悲しいことに、これまでの人生で女性に縁があったことなどない。そんな自分がああも男の欲望を刺激する女性を隣に置くことが出来るというのは、小市民的と言われても仕方がないが、ちょっとした優越感を抱いてしまう。

そのままお手軽な優越感に浸り続ける青年の下に、一抱えほどに

膨らんだ紙袋を持ってメリエラが戻ってきた。

「パンに挟んでも美味しいって、店の人がおまけしてくれたの。いい人よね」

「うん、いい人だね、本当に」

青年は心の底から同意した。メリエラの後ろ姿を見送っていた店主が自分に気付き、微妙に憎しみの籠もった目で睨んでいることには気付いていたが、同じ男として理解できない感情ではないので好意的に無視した。多分、自分が向こうの立場だったら溜息を一つ吐いて諦めていただろうと思いながら。

そんなちょっとした男としての矜持を賭けた戦いを済ませた青年に、メリエラが串焼きを差し出した。

「はい、レクト。あーん」

「――――っ!?」

こんがりとした肉に飴色のソースが絡み、非常に美味しそうである。

そしてそれを差し出しているのは自分に売約済みの綺麗な女性。

でも、周囲には沢山の人。

これから轡を共にする戦友たちが市場のど真ん中に発生した甘ったるい空間を見ている。

男は若干の憎しみを視線に乗せて、女は頬を赤く染めて。

（――――ああ、でも、何が恐いって……メリエラの後ろのウィリィアさんですよねぇ……目だけ笑ってないし……何か詠唱しているような気がするし）

どっちを選んでも結局彼女に良い笑顔で見詰められ、ちょっとした折檻を受けるのだ。

だったら、この可愛らしくも美しい女性を喜ばせる方が良いだろう。

「――――いただきます」

衆人環視の中で恋人というか婚約者に手ずから串焼きを食べさせて貰うというある種の快挙を成し遂げた青年――――皇国摂政レクティファールに周囲からやっかみと黄色い悲鳴と拍手が送られる。

殆どの者には変装しているせいで摂政だとは気付かれていないだろうが、勘の良い者はすでに気付いているだろう。

銀髪の女性を連れた若い男というのは、居るようで意外と居ないものだ。

ただ、気付いたとしてもそれを明かして場を混乱させようという無粋な者はいなかったらしく、四人は再び歩き始めた。

「――――殿下は、いつもこうなのですか？」

四人組最後の一人、筋骨隆々とした長身を持つ鈍色の髪の青年がウィリィアに訊いた。

ウィリィアは無意識にいちゃつく二人から一歩下がり、男の隣に並ぶ。

二人はお互いに串焼きを相手に食べさせるという高等精神攻撃を周囲に撒き散らしている。

「殿下はやめるように、軍曹。まあ、いつもはレクトが一歩引いて逃げ腰なんだけれど、皇都戦以降は少し余裕が出来たらしいわ。――――――全く、どうしてくれようかしら」

「じ、自分としては、妃殿下と仲が良いならそれに越したことはないと思うのですが……」

軍曹と呼ばれた男が静かに怒気を発するウィリィアに抗弁する。

彼は近衛軍から摂政随伴を命じられた下士官で、今は護衛も兼ねてここにいた。その大きな体躯は、余計な騒動を防ぐ抑止力といったところだろう。

近衛軍らしく、皇王家に対する忠誠というものは一般人よりも大きいらしい。

「ええ、メリエラ様が嬉しそうだからこれに関しては何もしないわ。後でメリエラ様泣かしたときに纏めてお返しするけれど……ふふふ……」

「――――――……」

冷や汗を垂らす軍曹。

ちなみに名前はガーリー・フィリポという。

「フィリポ軍曹は、ああいう女性はいないの？」

「は、軍に入って以来作っておりません。以前は海軍の艦隊勤務でしたし、陸に居る時間は余り多くなかったもので」

「そう、でも今は近衛だし、作っても困らないのでなくて？　巨人族は退役後に結婚する人も多いから急ぐ必要は無いけれど」

そういうウィリィアもいい年齢（とし）なのだが、彼女自身にはそういった噂が一切無い。元々白龍宮の一使用人であるのだから当たり前といえば当たり前なのだが、皇国貴族筆頭リンドヴルム公爵家の使用人となれば嫁の貰い手などいくらでもある。

貴族の使用人というのは高い教養が必要とされることが多く、行儀見習いで使用人として貴族に仕える者も居るほどだ。

使用人の質はそのまま貴族の評価になるから、貴族たちも使用人の教育には力を入れる。伯爵家以上の使用人となれば、市井の識者よりも博識だという。

「わたしは、姫様のお側にいられればそれで満足なのよ。その内姫様の稚様――赤ん坊の意――を抱けるだろうし、それで十分」

そう言ってウィリィアは前を歩く二人を眩しそうに眺める。

彼女と二人の間にある距離は、彼女の歩幅で二歩分程度。しかし、その二歩こそがウィリィアとメリエラの間に確かに存在する距離だった。

「――――……」

ガーリーはおそらく同僚となるだろう女性の横顔を、ただ黙って見るしかなかった。

まだ若い彼には、こういうときに発するべき言葉というものがない。あっても声を掛けられたかどうか。

「――――あ、あの……」

それでも、何か言うべきだと本能が告げた。

本能と言うよりも、無意識の自分が何かを言えと叫んだ。

それに従い、ガーリーは絡む舌を無理やり動かした。

だというのに――――

「あ、ウィリィアさんも食べませんか？」

あの摂政は、いともあっさり自分の葛藤をぶち抜いていく。

ガーリーは無意識の内に感嘆の溜息を漏らしてしまった。

「そうよね、ウィリィアもガーリー軍曹も。ほら」

差し出されるのは何本かの串焼き。

それを差し出すのは幸せそうな銀の龍姫。

ガーリーは隣にいるウィリィアをちらりと見た。

「ほら、これとか結構あっさりしていて美味しいんですよ。ウィリィアさん濃い目の味付けよりこっちの方が好みでしょう」

「――――確かにその通りですが、レ……若旦那様に教えたことは無かった筈です」

「だって、ウィリィアさんの食べる料理っていつもあっさり目の味付けのものばかりですし、何となくそんな気がしていたし」

「何となくって何ですか、実は結構お馬鹿様ですか」

「うわ、教え子になんて酷い言葉の暴力。馬鹿に様付けても尊敬語にはならないと私は思います」

立場を弁えた敬語であるはずなのにどこか気安げな笑みを浮かべるウィリィアと、どんなに邪険にされても平気な顔で笑いかけるレクティファール。

ガーリーとしては、ウィリィアのその顔は先ほどの顔よりもよっぽど幸せそうに見えた。

「まあ、人間観察の力が付いたということで頂いてあげます」

仕方がないなぁといった風に頭を振るウィリィア。何とも微笑ましくて、メリエラから串焼きを貰ったガーリーは密かに笑ってしまった。二人の周囲の人々も、二人の仲の良い姉弟のような遣り取りに笑みを浮かべている。

「じゃあ、メリエラに倣って……はいどうぞ」

「――――――――」

眼前に差し出された串焼きにウィリィアの笑顔が引き攣る。

ついでにガーリーの笑顔が凍り付いた。

周囲の人々は相変わらずで、機嫌の良いメリエラは先ほどからにこにこ笑ったままだ。

「――――何故？」

「いや、こういうもんなんじゃないかと」

常識外れというよりも、単にこれが当たり前だと思っているだけのレクティファール。

元世界の常識は半分以上役に立たないと考えた彼は、この世界の常識をさっさと学習してしまおうと積極的に動き始めていた。

そして今日得たこの世界の常識が、“これ”だった。

すなわち――――『親しい男女はお互いに食べ物を相手に食べさせてあげるのが常識』

普通ならとても常識であるとは思えないが、レクティファールはどれだけ自分が変だと思ってもこの世界では常識であると考える、思考上の変な癖が付いていた。

この世界に適用するための自己防衛手段なのかもしれないが、巻き込まれる方は堪ったものじゃない。

「ええと、レクト様……いえ、レクト。こういうことはね、特別好き合う男女が――――」

はぁ、と溜息を吐き、出来の悪い弟に物事を教える姉そのものの態度で説教という名の小言を続けるウィリィア。レクティファールといえば首を傾げながらもその説教を聞いており、ガーリーという

第三者の目には平民の姉弟が街中で戯れているようにしか見えなかった。

しばらく説教が続いたが、こちらもレクティファールにとって姉のようなであるメリエラが区切りの良いところで止めた。これ以上長々と続けられると、市を見て回る時間が無くなってしまう。

「ウィリィア」

「はい、メリエラ様」

主君の一言で小言終了。

ウィリィアの中ではメリエラの言葉に対する答えに、基本的に否はないらしい。

「折角だから、食べてあげて、ね？」

「――――は、いただきます」

厳しいところもあるが基本的に駄々甘な姉と常に厳しく時折優しさを見せる姉。そんな二人の女性に囲まれたレクティファールが幸せであるかどうか、正直他人には理解できない。

少なくとも、ガーリー・フィリポという一近衛軍下士官には理解できなかった。

女性というのは、何処の世界でも買い物好きと決まっているらしい。

レクティファールは広場で店を出していた服飾店の中で、あーでもないこーでもないと良いモノ探しをしている二人の女性を見てそう思った。

「――――うーん、これって学術的に証明できるだろうか」

しても、多分誰も相手にしない。

世の男性陣は深く頷いて同意を示してくれるだろうが、それだけだろう。

「ガーリー軍曹は、どう思います？」

「は、小官には正直何も言えません。――――確かに母と妹の買い物では苦労しますが……」

「ですよねぇ……長いですよねぇ……」

懐から懐中時計を出して時間を確認するレクティファール。

フレデリックから戦勝祝いということで貰った時計だ。国章を上蓋に刻んである以外は酷く簡素で、その簡素な外見に相応しく戦場に持ち込んでも壊れないという別の意味での信頼性があるらしい。

ともあれ、時刻を確認した限り、すでに一時間以上広場の中心にある噴水の縁で二人は待ち呆けている。

何処かに行こうかとも思ったが、後が恐すぎるので止めた。

「ふうむ、何か飲みますか……」

「では、自分が行って参ります」

ガーリーの言葉に一瞬躊躇ったレクティファールだが、自分はこの世界の飲み物に関してあまり知識がないことを思い出した。仕方

がないと諦め、ポケットから銀貨を一枚出してガーリーに手渡した。

「じゃあ、これで買ってきてくれるかい。あの二人の分はいいから、君と私の分、二つ」

「あ、いえ、自分が……」

銀貨を返そうとするガーリー。

だが、レクティファールは笑顔でそれを止めた。

「これは皇王府から支給された交際費。元も私がいつの間にか相続した皇王家の資産だし、こういうときにこそ使わないと、ご先祖に後で文句を言われてしまうよ」

「は、はぁ……了解しました」

しぶしぶ頷いて広場の片隅に店を構える喫茶店に向かうガーリー。

レクティファールはその後ろ姿を見送ると、ポケットの中から皇国で流通している法定貨幣を出してみた。どれも北へ向かう前に皇王府の担当者から渡された“交際費”だった。

「マーカス金貨が一〇〇ギル。ペトロベン金貨が五〇ギル。リッキルス銀貨が一〇ギル。フェドロック銀貨が一ギル。ガルガイス銀貨が二五リッツ、カーパス銅貨が一〇リッツ、グリニッド銅貨が一リッツ――――と、一〇〇リッツが一ギルっていうことは……うーん……リッツは補助通貨ってことなのか……」

先ほどガーリーに手渡しものがリッキルス銀貨だ。

こういう場で供される飲食物は一部の例外を除いて五ギルを超えないから、それで十分だろう。一例を挙げると、割れないよう金属製の容器に入っている紅茶が一杯三ギル五〇リッツである。

「紙幣がないのは造幣技術云々って言うよりも、紙幣が信用されていないってことなんだろうか。勝手に鋳つぶされても困るけど、これで経済成り立ってるんだからこっちの急な変更は要らないか」

必要になれば、紙幣も世に出るだろう。

レクティファールは貨幣をポケットにしまうと、とりあえず財布が欲しいと思った。

「レクト様、お待たせしました」

「ん、ありがとう」

この頃から、レクティファールには一つの偽名があった。

レクト・ハルベルンという、ウィリィアの実家ハルベルン家の三男という設定だ。

レクティファールはこの偽名を名乗るに当たってハルベルン家当主アルフォード・ハルベルン――――ウィリィアの父と顔を合わせる機会があったが、ひたすらに恐縮された上に少し親しくなると「娘を側に上げていただければ、本当にうちの息子になれますぞ。あの性格でしょう、貰い手に困っておりまして」と言われて非常に困った。

その直後彼は娘に折檻されていたが、お互いに『龍殺し』と呼ばれる存在だから問題ないとアルフォードの奥方に教えて貰った。その奥方は普通の人間種らしい。

「レクト様の好みが分かりませんでしたので、無難なものを選びましたが……」

牛乳入りの黒豆茶だった。

レクティファールの感覚ではミルク入りコーヒーといった所だろうか。ほかほかと湯気が上っている。

「いや、正直食べ物飲み物に関しては余り詳しくなくてね。とりあえず美味しいと不味いしか分からない」

「はは、小官も似たようなものです。巨人族はその体質的に繊細な味の違いが分からないのですが、小官はそれ以上に味がよく分からないようで」

「私もこんな立場になってから色々教わってはいるんだけどね。うちの教師は厳しい割に辛いモノが苦手のようだから、私も甘いものばかり詳しくなる」

「メリエラ様とウィリィアさんですか、正直意外です」

揃って好き嫌い無く何でも食べるような気がしていた。

メリエラにも好みくらいはあるだろうが、軍人とは大凡好き嫌いを言っていられる職業ではないからだ。ウィリィアもその態度から、目立つ弱点などないように思っていたらしい。

「人なんてそんなものかもしれない。君だって、私と初めて顔を合わせたときは――――くく……っ」

「れ、レクト様……！　勘弁して下さい！」

レクティファールと顔を合わせたとき、ガーリーはその穏和な風

貌と皇都奪還戦で展開した苛烈とも言える戦運びが繋がらず、酷く困惑してしまい、思わず――――

「――――『本物ですか？』だものなぁ……あれは笑わせて貰った。悪いとは思ったけどね」

「あのときは、本当にレクト様の姿があの戦いで受けた印象と違いすぎて……失礼しました……」

「いや、構わないよ。多分、他の人も多かれ少なかれ同じような印象を持っているだろうからね」

事前に顔を合わせていた人々ならともかく、あの戦いのあとに知己となった人々は総じてレクティファールの風貌と戦い方の差に驚き、ガーリーと同じような表情を見せたものだ。

「主君にするなら、もっと上背があって、威厳があって、ついでに個人的な武もあるといいんだけど――――とか思われてたんじゃないかと思う」

「あ、いえ、まさか……」

正直、そう思っていた。

本当に大丈夫かと不安にさえなった。

あの衝撃的な皇都奪還戦での戦いがなければ、不本意ではあるが、ガーリーとしてもまず主君を疑うことから始めなくてはならなかっただろう。

「評価って言うのは自分でどうこう出来るものじゃないからね。周囲の人たち、後を生きる人たちがするものだ。これで帝国との戦いに負ければ皇都の戦いも偶然か、別の誰かの作戦だったってことになる」

諦めの上に立つ男。

彼は今すぐにこの場で死んでも、おそらく少々の後悔しか抱かないだろう。

自分の器というものを一切信用しておらず、彼の中の自分というのは他人の評価の上にしか存在しない。

彼の持つ“自信”というのは他人に貰った感謝の“代価”であり、何もない場所から湧き出す類のものではないのだ。

「あそこであああしているあの人たちを守れれば、結局私は満足なんだと思う」

何処か遠くを見るように、ガーリーの主君は笑顔を浮かべる二人の女性を眺める。

その顔は老人のようで、子供のようで、どれか一つの感情を読み取ることは出来なかった。

「皇都にも二人くらい守らなきゃいけない人が居るし、私としてはここで何処かの国のお姫様と殺し合うくらいはやっても良いと思うんだけど、困ったことに私は個人では戦えない」

“皇剣”の力が全部使えれば出来るのかもしれないけど――――レクティファールは自嘲気味に笑う。

「結局、私は誰かを使って自分の大切な人を守るしか出来ないんだよ、軍曹。そして誰かを使うという行為のその代価は、誰かの大切な人を守ることだ」

皇として振る舞う代償は、皇として在ること。

レクティファールは一度皇として振る舞うことを決め、そしてその権利を行使した。

「私はあの人たちを守る権利を行使するために、この国全部を守る義務を負った。君たち近衛は、それに巻き込まれたということかな」

レクティファールは何かを試すような眼差しでガーリーを見る。
その視線を受けて、巨人族の青年はたじろいだ。

「幻滅してくれてもいいけど、仕事だと割り切ってくれると嬉しい」

レクティファールは小さく「よっ」と掛け声を掛けて立ち上がる。
ぐっと伸びをして、軽く肩を回した。

「さて、お姫様方の機嫌を取らないとね。軍曹もお土産選ぶと良いよ。皇都勤務じゃ、こっちまで出てこれないだろうから」

「で、殿下……」

レクティファールはガーリーの言葉を聞こうとはしなかった。

ガーリーがここでどんな決断をしても、レクティファールにそれをどうこうする理由はない。畢竟、ガーリーの意思こそがガーリーの人生を決めることが出来るのだから。

「さて、装飾品の何たるかも分からない私がどうやって機嫌を取れるのか……うん、皇都を取り戻す方がよっぽど楽だ」

ぶつぶつと自分に対する文句を呟きながら、レクティファールは店への一歩を踏み出した。

それと同時――――

「泥棒だぁっ！！　財布を取られたっ！！」

彼らの座っていた噴水の正面。

市場通りからこちらに走ってくる一人の男がいた。

「はっ……はっ……はっ……！」

農民の風体ではあるが、その身体は痩せ細って精気というものが大きく欠けている。着ている服も泥や埃、そして男自身の垢で汚れており、とてもではないが市場に買い物に来た客とは思えなかった。

そしてその男の背後を、陸軍の兵士たちが追い掛けている。

どうやら、掏摸（すり）らしい。

「軍曹」

レクティファールは、ただそれだけ告げた。

「は、御意のままに」

そしてガーリーも、それだけを答える。

彼はその巨体に見合わぬ早さで逃げる男の前方に飛び出した。

同時にレクティファールが叫ぶ。

「止まれっ！」

「ひっ！」

巨人族が発する威圧感というのは、一般の人々にとっては悪鬼羅刹のそれと大差ない。

掏摸の男は足を縺れさせ、ガーリーの直前で大きく速度を落とした。

「止まれと言っている！」

しかし、男は止まろうとはしなかった。体勢を大きく崩しながら

もガーリーに突っ込んでくる。

「くっ」

ガーリーは唇を噛みながら、自分に全体重を掛けて突っ込んできた男を受け止めると、次の瞬間には身体をぐるりと半回転させ、その勢いのまま投げ飛ばした。

レクティファールの頭上を、情けない悲鳴を上げた男が通り過ぎた。

そのまま盛大に水飛沫を撒き散らしながら、噴水に落ちる。

「力任せでここまでやれるっていうのは、すごい力だな……」

幾らか体術を嚙ったレクティファールには、ガーリーの動きは力任せのそれにしか見えない。巨人族とは見た目以上の怪力を発することが出来る種族だが、流石海軍から近衛軍に引き抜かれただけのことはある。自分の特性というものがよく判っている動きだ。

「それに引き替え、私は何とも……」

レクティファールは自分の不甲斐なさをぼやきながら、噴水に落ちた男を助けるべく上着を脱いだ。

騒ぎを聞いて現れた衛視隊に男を預けたレクティファールは、そのまま軽い事情聴取を受けていた。

「中央総軍、皇都方面軍のレクト・ハルベルン少尉ですね。ご協力感謝いたします」

「いえ、職務ですし、実際に働いたのは私の部下です。それで、あの男は何故……」

何故、軍の人間を狙ったのか。

訓練を積んだ軍人からも財布を盗める玄人ならば、こんな軍人だらけの場所は選ばない。

となると、素人の場当たり的な犯行と考えられるのだが――――

「少尉殿の考えておられる通りかと……。あの男は家族で畑をやってましてね、街の近くに畑もあって、よく作物を売りに来てましたし、自分も知っております」

「すると、罪を犯すような種類の人間ではないと……」

「はい、つい先頃までの――――こんなこと言うのも畏れ多いことですが、皇王陛下の政で多くの農民が蓄えを失いました。街に住んでいるものはまだマシですが、あの男のように財産が畑や家畜だけという家は、嫁や娘が……身を売らないと税を払えない程でして……」

中年の衛視は辛そうに顔を顰めながらも、それでもレクティファールの疑問に答えてくれた。

一応皇王に仕える軍人ということになっているレクティファールを前にしてさえ、皇王を貶す言葉を言い切った衛視。彼にしてみれば、あの農民の男よりも当代皇王の方が余程憎い相手なのだろう。

「少尉殿に話しても仕方がないのですが、このような犯罪も最近は増えるばかりで……。自分たち官憲や街にいる者たちは摂政殿下のお陰で幾らか仕事も増えましたが、百姓衆には畑以外ありません。領主様に食料の配布を願ったりもしているのですが、それだけじゃあとても……」

皇国現政府としても、これまでの皇王政治の負の要素を洗い流そうと必死になっているが、すぐに効果が出るというものは少ない。皇王家も多くの資産を復興支援に投じているが、やはり社会経済基盤（インフラストラクチャー）やら社会保障やらに多くを取られて末端の農民にまで予算を投じることが出来ないでいる。

今現在の誰が悪いということでもない。単純に、社会が回復しきれていないだけのことだ。

時間を掛ければ農村部に至るまで支援の手は届く。少しずつ回復の兆しは現れている筈なのだ。

だが、それまで待てと言われて待てる者が、総てではない。

レクティファールにとってみれば、やはりという感想しか抱けない現実だった。

「は、それで……少尉殿にお伺いしたいのは、その……」

衛視は持っていた調書の上で筆を彷徨わせながら、何とも聞き辛そうにレクティファールの顔色を窺う。

彼もこの街の衛視としてはそこそこの立場にいるのだろう、胸章には衛視隊の部隊長として扱われる衛視長の階級章がある。

「ええとですね……あの男は少尉殿の警告を無視して、軍曹殿に殴

りかかったという証言もありまして……」

「ああ、なるほど」

この衛視は、あの男の罪に軽重に関わる証言をレクティファールとガーリーに訊ねているのだ。

単なる掏摸であれば窃盗罪、相手が怪我を負っていれば暴行や傷害という罪も加わる。ただ、それはあくまで掏摸に付属する罪だ。

しかし、逃亡中に限定的ながら逮捕権を持つ軍士官の制止を無視し、あまつさえ自発的にその公務を妨害しようとしたとなれば罪はさらに増える。

現行犯である以上逮捕権などは関係ないかもしれないが、それでも軍の制止を無視して公務執行妨害。懲役が倍の年数になり、執行猶予を得ることは難しくなる。そうなってしまえば、彼が罪を犯してまで守ろうとした家族はどうなるのか。

「彼は、その、仕方がな――――」

「衛視長、それ以上は職分を超えるぞ」

「――っ！　失礼いたしました……」

犯罪者の罪を決めるのは衛視の役割ではない。

ましてや、犯罪者のために罪を軽くしようと働くこともその役割ではない。

「私は事実しか言えない。そうでなくては、彼も含めたこの国を守れないからだ。私は国家の盾だが、彼だけの盾にはなれない」

「は、仰る通りです」

衛視としては、全くの正論に抗弁することは出来ない。苦虫を噛み潰したように、ひたすら俯くだけだ。

ガーリーもレクティファールに総てを託しているらしく、特に口を挟む様子はない。

レクティファールは、今の彼に出来るぎりぎりの選択をした。

「――――彼は私の制止に驚き、止まろうとしたが、足を縺れさせてしまい、軍曹に飛び掛かってしまったように見えた。本当の所は本人から訊いて欲しい」

「は、ははっ！」

衛視は顔を上げ、驚いたようにレクティファールを見る。

そしてその言葉を理解すると、右手の拳を胸に当てる武官風の敬礼をして頭を下げた。

「捜査協力、感謝いたします！　それでは自分はこれで！」

走り去る衛視。

それを見送ったレクティファールは、ガーリーに苦笑して見せた。

「――――甘いね、私は」

「いえ、小官にもそう見えました。レクト様は“そう見えた”と証言なされたのです。あとは、本人がどう自供するかです」

正直、レクティファールの言ったことが事実である可能性も否定しきれない。

それは結局、本人にしか分からないことだ。

レクティファールは、内政を立て直すためにもさっさとこの戦いを終わらせることこそ自分の役割であると再確認し、ガーリーに笑い掛けた。

帝国よりも先に、まずは目の前に迫った脅威を何とかしなくてはならない。

二人に――というよりもレクティファールに――対して、衛視隊によって張られた立ち入り禁止用の紐の外から厳しい視線を向けている二人の女性だ。

「さて、と――――あそこで頬を膨らませているお姫様と侍女様への言い訳、一緒に考えませんか？」

「無理です」

ガーリーのいっそ冷たいとさえ言えるその断定に、レクティファールはさめざめと涙を流した。

「うん、よく似合ってるよメリエラ」

「そ、そうかしら……ちょっと派手じゃない？」

「メリエラの髪はきらきらしてて綺麗だから、これくらいで丁度良いと思う」

「そうかしら……うん、そう言われれば結構合うかも……」

庶民的にそこそこ高級な装飾品を扱う店でご機嫌取りを実行するレクティファール。

メリエラの性格上、ただ高いだけでは駄目だと判断した結果だ。こういう店は流行に敏感で、高級店よりも品数が多い。

鏡の前で、自分の銀の髪に挿された銀細工に宝石をあしらった髪飾りを様々な角度から眺めるメリエラ。実に顔が緩んでいる。

「ウィリィアさんにはこっちの耳飾りがいいと思います。この耳飾り、小さくてもちゃんと自分の仕事をしていると思いませんか？」

「――――え、ええ、細かい細工だけど、いい趣味ね……」

「仕事中に着けていても、これなら目立ちません。でも、ちゃんとウィリィアさんの魅力は出せますよ」

「そ、そこまで言われて……受け取らない訳にはいかないじゃない……もう、誰に教わったのかしら……」

困ったように、それでもやっぱりちょっとだけ頬を緩ませるウィリィア。メリエラとは別の鏡で着けたときの見え方を確認している。

小さな金細工の耳飾りだが、凝った細工が職人のこだわりを感じさせる品だ。派手さは無いが、その分一歩引いて主君を立てるウィリィアにはよく似合っていた。

レクティファールは機嫌良さそうに鏡を見る二人の視界から下がり、店の入り口に立ったままのガーリーに近寄った。

「レクト様、すごいですね。機嫌直りましたよ」

「ふふふ、人間必要になれば何でも覚えるものです。あと死にそうになっても覚える」

最近、何故かこういう機会が多いレクティファール。

神殿の男性職員やら軍の男性将兵やらに『女性を宥める方法一〇

八』を伝授されていた。

殆どは役に立たないが、組み合わせて発展させて、さらに追い詰められたとき限定で時々レクティファールの命を救うだけの効果を発揮するようになった。微妙に役に立たないような気がしないこともない。

「尊敬しますレクト様、小官にはとても真似できません」

「褒められているのか貶されているのか、ちょっと悩む言い方だね、うん」

あのままでは胃に穴が空く。

空いてもすぐに塞がるだろうが、それでも精神的なダメージというのは“皇剣”の機能でどうこうできるものじゃないのだ。

「さて、ついでにリリシアとアリアさんの分も選んでおこう。お土産は～～人間関係を円滑にする～～潤滑油ですぅ～～っと」

そう悲しくなる鼻歌を歌いながら店員に様々な装飾品を見せて貰うレクティファール。

背中になんとも言えない哀愁が漂っている。

（――――でも殿下、あなたはすごい）

女性を褒めた数十秒後に別の女性に贈る贈り物を選ぶなんて、普通の男の神経ではとても出来ない。

ガーリーはこれこそが皇としての最大の才能ではないかとさえ思った。

ある種の道化を演じるのが皇の役目であるが、男としてこの姿以上の道化はないと断言出来る。

「あ、こちらなど如何ですか？」

「うーん、君みたいなすらっとした綺麗なタイプじゃなくて、もうちょっと小さくて可愛らしい人なんだけれど……」

「あ、は、はい、だとするとこちらの方が……」

（すごいですよ、本当に、婚約者の背後でさらっと別の女性褒めるなんて……。店員さん、顔が赤いですよ、照れてるだけかもしれないけれど）

時折人は、無知故に途方もないことをやり遂げる。

それは恐れを知らないから、限界を知らないから、そして自分の命を知らないから。

今ガーリーの目の前にいる男は、その無知故に恐ろしい底無し沼に沈み始めている。

（――――結婚、したくないな……）

自分は、もう少し仕事を恋人にしていよう、一人の巨人族の青年は決めた。

第十九話「梟雄」

『ヴァーミッテ』より北、そこはすでに雪の白が支配する世界だった。

皇国の北端と言えど、黒の暦の前半にここまで雪が積もるのは珍しい。

その白い平原を、白地に『四騎の龍と十字星』――――皇王家の紋章旗を掲げた軍が往く。陸軍部隊、空軍部隊の部隊旗とほぼ同数のその軍旗は、この軍が皇王家当主によって率いられた“皇”軍であると言外に示している。

歩兵、騎兵は言うに及ばず、貨物魔動車に載せられた各種重砲、馬や陸竜に牽かれた繋駕式野戦砲、魔動式弩弓、幌を被せられた魔動車には要塞に据え付けるために運搬してきた要塞砲の部品が分割して乗せられており、補給物資、飛竜と軍に必要なあらゆる物資が行列を作る様はある種圧巻だった。

本来要塞に物資を輸送する輜重段列はこれ程の規模にはならないし、軍という組織以外にこれ程の規模の行列を作る要素が果たしてこの世に存在するだろうか。

「すげぇな……真っ白だ……」

誰かが呟いた言葉が、この軍列に参じている者たちの言葉を代表していた。

冬本番を前にして、この前日の降雪よりも深い万年雪をその身に纏った天狼山脈と白狼山脈が彼らの眼前にその巨体を横たえており、その光景に感嘆の声を上げるのは陸軍の医療部隊や近衛軍の一部の軍人たちだ。彼らは心身修練のため雪中行軍訓練が必ず行われる陸軍の将兵とは違い、この視界全部が白と黒に支配された光景というものを写真や映像でしか見たことがなかった。

一度はこの光景を見たことのある者でも、やはりというか驚きが無いわけではない。自分という小さな存在を押し流してしまいそうな自然の情景は、彼らに恐怖に似た感覚を抱かせた。

「――――……」

その先頭近く、鎧を着けた馬に乗った男が、大外套の裾に付いた雪を払う。

白金の胸甲と同色の手甲と脚甲、そして皇王家の紋章を背負う大外套――――摂政レクティファールだ。

「一面の銀世界、観光名所にするにはちょっと殺風景か、うん」

「こんな紛争地帯を観光地にするのですか？」

その隣で馬に揺られていたメリエラが呆れたように呟く。こちらも防寒着の上に胸甲を着けた姿だ。

共に白い息を吐きながら、寒さを感じていないかのように振る舞っている。

事実として、二人は“皇剣”の使い手と龍族という寒さに強い性質が備わっていた。

実は魔動車での移動も選択肢にあったのだが、自分たちを乗せるくらいなら行軍に慣れていない従軍医師たちに魔動車を使わせるようにとレクティファールが指示していた。

「そんなことはしませんよ。ええ、少なくともパラティオン要塞が要塞としての機能を残している間は」

つまりは、北に要塞を以て対抗しなくてはならない存在が居る限りは、ということ。

周囲に近衛軍将兵以外にも多くの兵士将校が居る中で、二人の会話は酷く事務的だった。この場での二人の関係が婚約者ではなく、摂政とその侍従武官に過ぎないからだ。侍従武官とは主君の傍に侍って軍事に関する諸々を君臣間で疎通させるもの、つまり軍から上がってきた情報を分かり易く編纂して君主に理解させ、軍事の専門家ではない君主の言葉を軍事的な命令に変換する翻訳者といった風の職だが、皇国の場合、この侍従武官にも二種類ある。

軍事百計に通じ、君主の軍務上の頭脳となる本来の意味の侍従武官と、政治に関われない武官が君主の傍らに侍る名目としての侍従武官である。

メリエラの場合、前者の侍従武官を名乗るには些か、否、圧倒的に経験が足りておらず、彼女自身も後者であると自認していた。もっとも、現在の皇国に前者の意味での侍従武官は存在しておらず、それ以前にメリエラ以外にレクティファールの侍従武官はいない。

その代わり、元帥府と統合参謀本部という二つの組織が摂政レクティファールの軍務上の頭脳となっていた。そういう意味では、三元帥と近衛軍総司令官、各軍参謀総長が前者の侍従武官と言えるかもしれない。

無論、レクティファールが望めば各軍総司令部からも参謀本部からも大挙して武官が押し寄せるだろうが。

「そうですか。では、北が静かになったら内務院に諮るとよろしいでしょう」

静かに微笑むメリエラ。まさに君に侍る臣に相応しい落ち着いた態度だ。深窓の令嬢としての教育も、貴族としての教育も修めた彼女だからこその立ち居振る舞いだった。

だが、摂政の周囲を固める近衛軍武官たちにとってみれば、ここまでの道程で見せ付けられた無自覚無差別無遠慮の甘ったるい光景との差は夥しいことこの上ない。相手が相手でことがことだけにまさか「いちゃつかないでください」などと諫言できるはずもなく。

この光景を見たある軍下士官など、自分は夢でも見ているのではないかと思ったくらいだ。

実際にはこれくらいの使い分けが出来なければ皇なんて出来ないという現実があるだけだが、生憎とそれを理解している者はいなかった。

「しかしまあ、要塞に私が入ったところで何か役に立つのでしょうか」

レクティファールはそうぽつりと漏らすと、黒煙棚引く遙か前方へと目を向ける。

そこには、黒々とした偉容を見せ付ける皇国の北の守護神『パラティオン要塞』があった。

要塞の三つの城門、その中央の一つに陸軍制式採用の薄灰色の外套を纏った一団が直立不動の体勢で待っていた。

その背後に剣を携えた騎士たちを従え、彼らの主の到着を待つその姿は、皇国の守り手としての強烈な自負と自信に満ちていた。

厳然たる事実として、彼らはこの北の地を帝国に寸土足りとて渡していない。つまり、自負も自信も一欠片として違えていないのだ。それだけに、彼らの纏う気配は戦場に鍛えられた刃、盾のそれだった。

幾度も幾度も帝国のもたらす劫火に焼かれ、その炎と敵の猛攻という鎚にて鍛え上げられた皇国陸軍随一の精兵。

皇国の人々には『北の防人』『天白の氷壁』『氷雪の守護神』と呼ばれ、帝国の国民には『凍土の殺戮人形軍（キリングドールズ）』『南の人食い要塞』『骸踊る最果て』と怖れられるその集団が、今レクティファールの前に在る。

彼らを見て僅かに目を細めたレクティファールは、近衛軍に守られながら彼らの前に馬を寄せ、ひらりと飛び降りる。恐い白龍宮の使用人に馬の練習をさせられたが、こういうときはやって良かったと思う。“皇剣”のお陰で常人よりは高い身体能力を得たので、あとは実際に身体を使って動きを覚えるだけだったのも幸いした。

レクティファールに続いてメリエラを始めとする武官が下馬し、要塞前に整列した。

「摂政殿下にぃ、礼ッ！」

出迎えの団体の端、特務曹長の階級章を着けた男が吼える。

轟、と響く掛け声に合わせ、踵を揃えた騎士たちが剣を捧げる。

さらに黒い外套を纏った集団が拳を胸に当て、頭を垂れた。

「――――ご苦労」

レクティファールが肘を曲げて軽く額に指先を当て、敬礼を返す。

摂政などの文官の場合、答礼は軽く頷くだけでも構わないのだがレクティファールは通常の上官が部下にする答礼を返すことにしていた。特別な理由はないが、相手に敬意を表するのに分かり易い形があるならそちらの方がいいと思っているらしい。

レクティファールが手を降ろすと、その場の全員が礼を解く。

さらにレクティファールが言う。

「楽に」

「休めッ！」

先ほどの特務曹長が号令を掛ける。

騎士たちが剣を鞘に収め、肩幅に足を開いた。外套の集団はその

号令を受けて緊張を解く。

その外套の集団から、一人の中年女性が進み出た。胸章は大佐、金色の参謀飾緒と略章が幾つも飾られている。

「お初に御意を得ます、摂政殿下。当要塞防衛軍次席参謀、ハルエリア・ハルエリオ・ハルアリオ陸軍大佐でございます」

「よろしくハルエリオ・ハルアリオ大佐、司令官は？」

「は、司令官ガラハ中将はただいま第一長城にて防衛戦の指揮を執っておられます」

「ふむ……」

レクティファールは顎に手を当てて考える振りをした。

別段、戦いの最中に歓迎式典を催せなどと言うつもりはなかったし、要塞防衛司令官がこの攻撃の最中に自分の出迎えをする余裕があるとも思っていなかった。

（――――ふぅむ……一度責任者を顔を合わせない分には、下手に動けないか……）

摂政とは、言うまでもなく皇国の国政と国事をその手に握る全権代行職である。当然軍権も掌握しており、皇国軍の最高司令官に補されている。

だが、この場合の最高司令官とは文官としてのそれであり、その職分とは国家としての大戦略を決めることだ。

その大戦略に沿って軍の方針を決めるのは元帥府であり、その方針を実現するための戦略を練るのが統合参謀本部。そしてその戦略を全うするために戦術を駆使して戦うのが、各軍総司令部以下の各部隊だった。

つまりレクティファールに軍を指揮する権限はあっても、それを実行するだけの実力がない。

ここで戦うためにはガラハ・ド・ラグダナと意思の統一をしなくてはならないし、そもそもレクティファールにはここで自分の権限を行使しようとは思っていなかった。

必要とされるだけの役割を果たす、それだけだ。

（まあ、居ないというなら仕方がない）

考えていると、ズン、という音と共に地面が揺れる。どうやら、この巨大な黒壁の向こうは地獄らしい。

ハルエリオ大佐がその振動に眉を顰める。彼女の背後に立ってい

た一人の参謀大尉が、舌打ちした。

聞こえない振りをするレクティファール。当然その態度は上官の前でするものではないが、これまで帝国の攻撃に晒されてきた彼らに礼儀云々を論じる余裕があったとも思えないし、何よりも彼らが論じるべきは戦術だけだ。当然、平時であればレクティファールとて甘い態度は見せない、戦時であるからこそ見逃すだけだ。

ハルエリオ・ハルアリオ大佐がその大尉を睨んだが、レクティファールは気付かぬ振りをしたまま言った。耳を澄ませば兵士たちの鬨の声が聞こえてくるような場所でくだらない長話をしている場合ではない。

「大佐、要塞司令部へ案内してくれ。司令官を待たせて貰う」

「はッ」

何が出来るかではない、やれることを全部やるのが国主。

国家を振り回す権利を行使するなら、国家を守る義務を負う、ただそれだけだ。

相手が何であれ、一度負った義務に例外はない。

「帝国の第十三姫、その戦い振りを見せて貰おうか」

「――――南の頭目が要塞に入ったか」

「は、空軍の偵察騎が確認しました」

皇国パラティオン要塞を望む帝国軍陣地、その中央付近にその天幕はあった。

彼らの言葉をそのまま使うなら――――大アルマダ帝国南方辺境領鎮定軍総司令官、グロリエ・デル・アルマダの座する大本営である。

その大本営の主、帝国の戦狂姫は部下の報告を聞くと居並ぶ鎮定軍諸将の前で嫣然と笑った。

豪奢な朱金色の長髪を掻き上げ、金糸で飾られた紅色の軍服のスカートから伸びる長い足を組み直す。

「ふん、面白くなってきたな。南の摂政となった男、連合を鎧袖一触蹴散らしたと聞いている。しかも、しかもだ。概念兵器の力を一切使わず、自ら手を下さず、だ。貴様らの中で同じことが出来る者は何人いるか」

グロリエは言葉こそ痛烈であったが、その表情は酷く楽しげだ。

自分よりも遙かに年上の軍人たちを前にして、遠慮というものが一切無い。

グロリエ自身は帝国元帥の階級を持っているからそれも当然と言えるのかもしれないが、それでも年齢という追い越しようがない要素はどこの組織でも見えざる壁になっているのが常だ。特に単一種族国家と言って過言ではない帝国では、年功序列という官僚的思考が帝国軍を始めとした多くの組織に根付いている。

そんな中でグロリエが帝国元帥というたった八つしかない席の一つを占めることが出来た理由。

どうということはない、帝族で、戦功に恵まれたからだ。

皇国とは別方面――――西方戦線で亜人種国家を相手に連戦連勝し、帝国の版図を大きく広げた立役者が彼女だった。帝族である故に、というよりも彼女の持つ特性故にそれだけの戦功を得ることが出来たのだが、結果が総てだ。元々の生まれが特殊なだけに彼女の存在を疎んでいる大貴族や有力な官僚は多いのだが、父である帝王がグロリエを気に入っていた。

帝王は娘の望むまま、玩具を与えるように精兵を与え、手習いの師を付けるように有能な軍人を侍らせた。

彼女はそんな父に対し、子供が学校の試験の満点の答案を見せるように、自らが築いた夥しい死山血河を示した。

「ふふ……ああ……心躍るじゃないか、西の亜人どもとの戦を取り上げられて腹が立っていたが、あの“オモチャ”といい南の摂政といい、東も捨てたものじゃないな」

ぺろりと舌なめずりする皇女の艶に、将たちの何人かが居心地悪げに身動ぎした。

現帝王の子供のうち、帝位継承権を持つ者は三七名。

グロリエは帝位継承権二四位。しかし、軍に於いてもっとも栄達している帝族の一人だった。

もう一人、帝位継承権第四位、第四皇子バレストローラ・フェルド・アルマダが帝国元帥の座にいるが、軍としてはどちらかに帝位を継承して貰いたいと考えていた。

皇国に比して良くも悪くも官僚的である帝国軍は、専制者――帝王に擦り寄ることで自らの持つ力を守ろうとする。帝王の傍に侍る侍従武官は両手の指ではとても足りない数だし、何より帝国軍で栄達出来るのは大貴族出身者か帝王のお気に入りかの二通りしかない。現帝王は優れた才覚を持つ者を愛し、厚遇する男だった。

自然、何処の軍部隊でも軍に属する帝族は小さな帝王として最上の扱いを受けることになるのだ。

特にグロリエは現帝王の大のお気に入り。未だに今年二十歳になった娘の伴侶となる者を探す気配すら見せないのは、それだけ現帝王のグロリエに対する愛情が深い証拠だった。

軍としては、そんなグロリエの機嫌を取ることはしてもわざわざ勘気に触れるような真似はしたくない。

「さて、“オモチャ”の方はどうだ？」

グロリエは楽しそうな表情を変えないまま、将たちに問い掛ける。

今日の姫君は機嫌が良い――――殆どの将がそれに気付き、自分という存在をグロリエに印象付けようと動き始めた。

「遅れていた装填装置の部品が届きましたので、あと一週間もあれば完成いたします。数日程度試運転を行うとしても、一〇日後には殿下お望みの結果を出してくれましょう」

グロリエのすぐ下座に座っていた男が愛想笑いを浮かべながら請け負う。東進してきたグロリエの指揮下に入るまではパラティオン要塞攻略部隊の指揮官を務めていた陸軍大将だ。

凡愚ではないが、これといって傑出した能力があるわけでもない秀才型貴族軍人の典型と言える。ただし帝国軍人の特徴の一つとして、彼らは決して軍事的無能ではなかった。間違いなくその職分を果たせるだけの能力は持ち合わせているのだ。

「“雷霆”の発射までは、叛徒共に動きを気取らせないよう徹底的な攻撃を要塞に加える必要があります。引き続き第三軍、第四軍に要塞を攻めさせます」

第三軍、第四軍は元々彼の指揮下にあった軍だ。

総数十二万程度の実力部隊だった彼らは、グロリエが現れる頃には一〇万にまでその数を減らしていた。

通常であれば援軍が到着した時点で後方へ移動、再編成を行うものだが彼は自分の持ち駒を最大限グロリエの歓心を得るために投資した。そしてその投資は、これまでのところ成功している。

彼ら一〇万の将兵は要塞の北に配された各堡塁、砲塁に対してその身を砲弾として突撃を繰り返し、間違いなくその力を奪いつつあった。その当然の帰結として、両軍の兵力は実に八〇〇〇〇程度にまで減っているのだが、大将はここで攻撃の手を緩めればパラティオン要塞側に堡塁群の補修の機会を与えるだけだと判断し、必要なだけの増援と補給を送りながら引き続き鉄血の消費を両軍に強いていた。

それだけの損害を出しながら彼が無能者扱いされない理由は、帝国軍の企図する本格攻勢は未だ実行されていないという点にある。

グロリエ率いる帝国軍第三軍集団はその数二六万の大軍勢だが、西方戦線から移動してきた彼らの本来の目的はパラティオン要塞を攻めることではない。彼らの目的は、南方辺境領と彼らが呼ぶ皇国本土を蹂躙することだ。

皇王――――概念兵器という帝国にとって最大の恐怖の不在という、まさに千載一遇の好機に、帝国はその最強戦力と言える第三軍集団を西方戦線より引き抜き、東方戦線と呼ばれる対皇国戦線に投入した。

その際に対パラティオン要塞攻略の切り札として用意されたのが、通称“雷霆”と呼ばれる秘匿兵器だった。

“雷霆”は帝王からグロリエに預けられた。今は要塞を攻める帝国軍の後方で人員と物資を集積する拠点となっている要塞都市『ウィルマグス』近傍にあり、その力を発揮する機会を待ち続けているという。

その“雷霆”の揺り篭となっている『ウィルマグス』はパラティオン要塞に対抗するために帝国が建設した要塞都市だ。

元々は獣人たちの街であった旧ウィルマグスは、帝国が興り皇国との紛争地帯が出来上がることでその価値を要塞として高めた街だった。亜人種が住民の大半を占め元々皇国寄りだった旧ウィルマグスは帝国の手によって城壁、砲台、連絡壕などが次々と建設され、それらを要塞として機能させるために人間種が移り住んできた。

元から住んでいた住民たちはどんどん都市の外側に追い遣られていき、今では街の外に集落を作って暮らしている。遊び半分で帝国

兵に虐げられる亜人たちも多く、『ウィルマグス』は皇国にとって数ある未来の一つの姿としてそこに存在していた。

二五年前の紛争時、国境から五〇キロメイテルしか離れていない『ウィルマグス』を占領すべきと言う声もあった。

虐げられる亜人種を救い、国境に新たな楔を打ち込むべきだというその声は、先代皇王の外交政策には合致せず、最終的に流れた。

それから二五年後、『ウィルマグス』は皇国を滅ぼす牙の巣と化している。

「元帥殿下におかれましては、要塞攻めは我らにお任せいただき、来るべき南進に備えていただきたいと考えております」

大将はそう締めくくった。

暗にまだ手を出すなと言われたに等しいが、グロリエが機嫌を損ねた様子はない。

「うむ、余としてはあの摂政と戦う機会さえあれば諸兄らの作戦に口を挟むような真似はしない」

笑って、鷹揚に頷くだけだった。彼女とて大将の意図は理解している。しかし、部下の手柄を取り上げるような真似は望むところではなかった。

だが、そんな彼女の背後から、一人の女性の声が響いた。低くも高くもない、よく通る声だ。

「――――お言葉ですが、殿下」

諸将の視線が一人の女将に集中した。

彼らの視線を受け止めたのは色素の抜けきった青灰色の髪を束ねた、人間種でいえば齢六〇前後の老女将だった。

准将の階級章を付けた彼女は、自分に向けられる諸々の視線を一切歯牙に掛けることなくグロリエの横に立った。

「大将閣下の作戦では第三軍、第四軍双方の将兵に無駄な犠牲を強いるばかりです。時間を稼ぐならば別の方法もありましょう」

「その時間で叛徒共は要塞を修復し、堡塁を修理し、壕に溢れる兵士の死体を片付ける。あれらはひたすらに攻撃を重ねること以外に動きを拘束する術など無い！」

大将の言葉は、確かに真実の一つの側面。

パラティオン要塞はすぐ後背に自国国土があるという最終防衛戦だ。当然、要塞兵たちの士気は高く、粒揃いの精兵たちばかり。し

かも要塞の守将はこれまで幾度も帝国の攻撃を凌ぎきってきた良将ラグダナ。帝国側には、常に攻撃を行い相手の動きを制限するという行為を行っていなければ、湧き上がる恐怖に精神を侵されてしまうという現実もあった。

帝国将兵にとって、皇国将兵というのは人間種が他の種族に持つ劣等感をそのまま移し替えたような存在だった。

野戦に持ち込んでも、一人の皇国兵を殺す間に帝国兵は二人も三人も殺される。

それは明確な数字としても表れ、帝国軍首脳部に拭いがたい恐怖として浸透していた。

「ですが、こちらも一度休戦を行う必要はあるでしょう。進軍用の壕は兵士たちの骸で埋まり用をなしていません。負傷兵が前線の壕で介抱されていれば、それだけ健康な兵士たちの隠れる場所が減るのです。大将閣下とてお分かりでしょう、時間を稼ぐには戦いも必要、されど休息も必要なのです」

第三軍、第四軍とて無駄に負傷兵を抱えていれば動きも鈍る。ここで一度休戦を申し入れ、兵士たちを入れ替えなくては後々になって大きな代償を支払うことになるやもしれない。

女将はそう言っているのだ。

グロリエは女将の言葉に苦笑し、拗ねた子供のように唇を尖らせた。

「お婆さま、これは余の軍の軍議だぞ？　お婆さまが奴らを説き伏せては余の立つ瀬がないではないか。大元帥陛下のご威光をあまねく大陸にもたらす、ここにいる諸将は皆分かっているさ」

「これは失礼を、殿下」

『お婆さま』というグロリエの言葉は、そのままの事実を示している。

女将の名はカリーナ・ヴォル。グロリエの母、イレーヌ・デル・アルマダの実の母だった。

カリーナは帝国軍にその人ありと言われた猛将で、『龍殺し』の血を受け継いでいる。その力で多くの龍種、竜種を血祭りに上げ、人間として認められない種族でありながら将軍にまで成り上がった女傑。帝国軍では非主流派である彼女だが、帝王に娘が輿入れしたことで一定の立場は保証されている。

その娘こそ『龍殺し』の力はそれ程でもなかったが、孫娘は先祖返りと言われるほどの強大な力を持って生まれてきた。そのことも彼女の立場を補強することに繋がった。大きな力を持つ『龍殺し』はそれに対抗できるだけの力を持つ『龍殺し』にしか育てられないという覆しようのない事実が、カリーナをグロリエの傍へと置いている。

だが、カリーナとしては孫娘が心配だという気持ちもあった。

『龍殺し』の力は龍種、竜種に対しては絶大だが、それ以外の上位――個体能力的に――種族に対しては前述の二種族に対するほどの優位は持っていない。

元々が人間種を基にしているだけあって、『龍殺し』は絶対的な強者とはなれなかったのだ。

カリーナはグロリエが自分の限界を知ってくれることを望んでいた。限界を知れば自然と退くことを覚え、次に繋げるという発想が生まれる。そうすれば無駄に命を浪費するような真似はしなくなるだろう。

今のグロリエは戦場の最前線で剣を振るうことを楽しみにしている。

自分の力が他者より優越しているという事実が孫娘を増長させている、若さと相俟ってカリーナには危うく見えた。

「まあ良い。お婆さまの言葉もまた事実であろう。そしてここはディトリア兄上の王国、騒がしいのは申し訳ない――――うん、だからこうしよう」

その孫娘は、祖母の憂いなど少しも気付かぬままに笑顔で言った。

「休戦交渉と同時進行で一度、向こうの摂政と会おう。いつの間にか世界最強の力を“持たされた”男がどれ程の男か、この目で確か

めてみたい」

グロリエ・デル・アルマダ。

その将を示す言葉にこういったものがある。

――――『戦狂姫』

「文字通り、戦場の中で狂い咲く華のことです」

参謀長との会談を前に、レクティファールはこの要塞での居室となる将官用の居室にいた。

ハルエリオ・ハルアリオ大佐は職務に戻ると言い、レクティファールの許可を得て退出した。その代わりと言って大佐が置いていったのは、眉目秀麗という言葉が見事に合致する才媛、参謀大尉リーデ・アーデンだった。若く未だ未熟者ですが、という大佐の紹介にも眉一つ動かさない彼女に、レクティファールは少しだけ苦手意識

を刺激された。

リーデはずり落ちた黒縁の眼鏡を上げ、愛想の欠片もない表情でレクティファールを見た。彼女の軍服にある銅色の参謀飾緒は彼女が未だ無任所の参謀であることの証左だ。

「彼女は大陸西方の亜人種国家との戦いで、自ら剣を振るい暴れ回りました。帝国にはそれを許容するだけの指揮系統と、姫を守る精強な近衛――――重装近衛騎兵団が存在します」

リーデは応接用のソファに足を揃えて座り、いくつかの資料をレクティファールに示しながら説明を続ける。

グロリエと鮮血色の重厚な鎧を纏った集団の写真、これまでの戦績、血縁関係、そして――――彼女の保有する巨大な紅の剣。

「これが対神族用汎断裂兵装『神殺しの神剣』――――ディヴァインスレイヤーです」

『神殺し』と『神剣』の二重名称（ダブルネーム）。旧帝国時代末期に制作された対神族用兵装の一つだ。

レクティファールはその資料を覗き込みながら、若干顔を引き攣らせた。どう見ても人間の持てる大きさではない、現に資料には『質量一二〇〇キログルーム』の文字がある。

彼は背後に立つウィリィアに『岩窟龍断ち』の重さを訊ねる。

「二〇〇キログルーム程度だったと思います。最近の技術で素材を見直したので、これでも以前より軽くなった方ですが」

え、六倍？――――レクティファールはその事実に声にならない悲鳴を上げた。

聞けば『龍殺し』は個人差はあれど巨人族並かそれ以上の腕力を持っているという。ただ、グロリエの持つ『神殺しの神剣（ディヴァインスレイヤー）』は元々『龍殺し』用に作られた武器ではない。

「『神殺しの神剣』は本来、機族が合一した装甲機兵が使用する兵装でした。ただ、帝国にはすでに稼働している装甲機兵が存在せず、『神殺しの神剣』は研究資料として保管されていたそうです。それをグロリエ姫の祖母であるカリーナ准将が見付け、持っている力に見合う得物に出会えていなかった姫のものとしたとか」

リーデはレクティファールの後背で直立不動の体勢を保っているウィリィアに目を向けた。

白地に赤の線の入った近衛軍軍装に身を包んでいるのは、その隣のメリエラと同じ。ただし、テーブルの上に広げられたグロリエに向ける視線は、この中でもっとも険呑なものだった。

「――――准尉は、グロリエ姫に何か思うところでも？」

ウィリィアはその問い掛けに頭を振り、小さく頭を下げた。

「いえ、同族と戦うことはとうの昔に覚悟していました。しかし、これだけの力を持つ同族が、何故帝国などに与しているのかと思っただけです。――――ああ、そういえば、殿下にはまだお話していませんでしたね」

自分をじっと見つめるレクティファールの視線から逃れるように、ウィリィアは一歩下がって『龍殺し』について語り始めた。その態度に疑問を抱くレクティファールだが、今問うことではないと考え、大人しくウィリィアの説明に聞き入る。

それは遥か昔に遡上する、命の話だった。

『龍殺し』――――そう呼ばれる種族がいる。

彼らは旧帝国時代末期、帝国と水面下で争いを続けていた龍種や竜種に対抗するために帝国が生み出した生命だ。

個体で強大な力を持つ人間種以外の種族、亜人種、精霊種、龍種、幻想種は帝国にとって常に恐るべき存在だった。亜人種の一、巨人族は優秀な個体であれば一体で帝国の一個中隊を易々と破り、同じく亜人種である獣人族は人間種と同じ体格を持ちながら圧倒的な身体能力を持っていた。さらに精霊種の一、エルフ族は様々な魔法に通じ、魔力を効率的に運用出来る体質を持っており、幻想種の一、氷狼族は狼の姿であって人間以上の知恵を持ち、さらには魔法さえ操った。

そして龍種や竜種の圧倒的な戦闘能力と生命力は、レクティファールとて十分に知っている。

人間種が他の種族に優っている面など、その多様な文化と圧倒的な繁殖力だけだった。

その文化――技術とも言い換えられる――と繁殖力で大陸を支配するに至った帝国だが、実際には他種族が“支配”というものに関して大した興味を持っていなかったからこそ実現出来たに過ぎない。

当然、彼らに対して支配者として振舞おうとすれば、その大きな力で逆に蹴散らされる。当初帝国は彼らと協定を結んで相互不可侵を貫き、なんとか大陸を支配していた。

しかし、人間には一つ種族的特徴というものがあった。

ある意味ではもっとも人間種が他の種族に優っている要素、“欲望”である。

人間種は当時、知恵持つ者共の中でもっとも短命だった。その寿命に急かされるように人生を生き、短い人生の中で大きく輝こうとした。その輝きを掴む要素として、人間種が他種族に比して大きかったのが様々な“欲”だ。

見方を変えて繁殖力も文化もその“欲”の産物であったとすれば、人間種は“欲”というたった一つの要素で大陸を統べたということになる。

無論、他種族も“欲”を持っていた。種の保存にも“欲”は不可欠であり、知恵を持つ限り“欲”から逃れられた生命体は存在しない。それでも他種族が人間種よりも“欲”の発露が少ないように見えるのは、彼らにとっての“欲”が長い人生の中で全うされれば問題ないという程度のことでしかなかったからだ。

生が短く、魔法や科学技術で延命をしても一〇〇年を僅かに越える程度の寿命しかない人間種が彼らと同じだけの“欲”を満たすためには、それこそ他種族が潜在的に恐れるほどのがむしゃらさで物事に取り組むしかなかった。

やがてそれらの“欲”は帝国という大陸統一国家という形になり、自分たちより圧倒的に優れた他種族を支配下に置くという形で実現された。その支配が細い一本の糸で吊るされた危ういものであったとしても、だ。

しかし帝国は大陸を統一した後も、他種族に対する支配欲を満たしていなかった。

いや、正確にいうならば、時が流れ、他種族を恐れ、そして心の

何処かで敬っていた世代が帝国から消え去ってしまったのだ。

帝国黎明期と先人の想いを知らず、自分たちは支配者であるという意識しか持たない人間たちが帝国を総べるようになったとき、アルマダ大陸は再び戦禍に包まれた。

帝国は他種族に対抗するため、自らの持つ技術と“欲望”を投じた。

そして、あの忌まわしき暗黒の時代が訪れたのだ。

「――――人間たちは、自分たちの遺伝子と多種族の因子を組み合わせることで、圧倒的な力を持つ他種族に対抗しようとしました。それだけではありません、彼らは自らが誇る科学技術を総動員して多種族を滅ぼせる武器を次々と生み出したのです」

人間種は多くの生命を生み出した。

数多くの失敗を重ね、他種族に対抗出来るだけの能力を持つ人造種が生まれた。

彼らは“人の形をした種”と称され、人形種と呼ばれた。

人間と同じ体格を持ちながら単体で龍種に対抗しうる、現代で『龍殺し』と呼ばれる“龍人族”。

身体を機械と融合させ、四メイテル規模のヒト型兵器『装甲機兵』と感覚を重ねる能力を持った“機族”。

獣の因子と獣人族と同程度の身体能力を持ち、闘争本能を増幅された“牙族”。

水棲種族に対抗するため、彼らの因子を埋め込み水中での戦いを可能とした“水人族”。

翼持ち、空を往く敵と戦うために生み出された“翼人族”。

多くの種が生まれたが、現代にも名が残っているのはこの五部族だけだ。

その理由は諸説様々あるが、この五部族いずれもが生殖能力をもっており、対して生殖能力を持たなかった部族は名さえ残らなかったのではないかと現代では決着している。

この部族の多くは現在皇国の民となっているが、それは彼らが創られ他種族その争いに投入されある程度時間がたった頃、この世界に突如現れた初代皇王に同調し、帝国を滅ぼす側に回ったからだ。

人形種を人間扱いせず、ある意味では家畜程度にしか考えていなかった帝国に対し、人形種は基となった人間種の因子に従って叛逆する道を選んだ。彼らは人間と同じかそれ以下の寿命しか持たなかったから、自分たちを守るという“欲”は人間のそれに近かったのかもしれない。

そして、人形種と同じように他種族に対抗するために創られた様々な兵器。その中に『神殺しの神剣』があった。

同じ目的で造られた兵器の中には、『不沈要塞』や『天空戦艦』

と呼ばれるモノも存在したが、今ではイズモ神州連合にその基となった異世界の遺物、遺跡戦艦『天照（アマテラス）』があるのみで、すべて帝国崩壊戦争後に闇に葬り去られた。

元々それらの兵器は実用段階前に破壊されてしまっていたから、形として残っているのは人形種が扱える大きさの兵器だけである。それらは優先的に開発されていたこともあり、帝国が滅びる戦争の頃には実用化され、戦場で用いられていた。

そして、帝国が最後に生み出した狂気の最終制圧兵器が、皇国にある。

「――――帝国の欲望が生み出した最後の切札、総ての種族に対して圧倒的な力を持ち、それらを滅ぼせるだけの能力を持った最後の希望という名の欲望、それが……」

「『概念兵器』――――“皇剣”」

レクティファールが大きく溜息を漏らしながら、呟く。

ウィリィアは頷いた。

「“皇剣”は他種族に対して人間種が抱いていたあらゆる憧憬と嫉妬が生み出したモノです。万象を操る四界の力を振るい、合一者に不老不死と呼んでも過言ではない生命力を与え、総てを照覧する普遍の知識さえ与える“皇剣”。これが完成したとき、帝国の真の支

配が確立するはずでした」

「だが、“皇剣”は多くの種族を率いて帝国と戦った初代皇王の手に落ち、帝国は滅びた」

初代皇王が人間種であったことは記録に残されている。

“皇剣”と合一した後は人間種と名乗らず、自分は『概念兵器』という存在であると称し続けた初代皇王。

その心の裡を知る者は、今では現役を退き隠遁している初代四龍公を残すのみだとされている。

「その旧帝国の遺産が、今こうして旧帝国を滅ぼした者の末裔を滅ぼさんとしている、か――――うん、理解した」

レクティファールは天を仰ぎ、大きく息を吐いた。

なんてことはない、何処に行っても誰が支配しても、知恵ある者は“欲望”と戦い続けているというだけのことだ。

「――――――――さてと、私は何処まで過去の亡霊と仲良く出来るのかな」

その音となるか否かの小さな声量で放たれた言葉は、龍人族として優れた聴力を持つウィリィアだけが認識することが出来た。

メリエラでさえ微かな囁きにしか聞こえなかったその言葉がレクティファールとってどれ程の重荷であるのか、ウィリィアはこの場で考えるようなことはしなかった。

ただ、出来の悪い生徒をほんの少しだけ心配するように見つめるだけであった。

リーデの下に要塞司令官帰還の連絡が届き、レクティファールは遅れていた要塞司令官との会談を行うことになった。

夜になり帝国の攻撃が散発的になってきた頃、後に幾度も戦場を共にし、君臣にして戦友となる二人は出会った。

ガラハはレクティファールの顔を見るなり跪き、頭を垂れた。

「当要塞を殿下よりお預かりしております、皇国陸軍中将ガラハ・

ド・ラグダナです。この度の戦では殿下の赤子たる兵士の多くを喪い、こうして殿下ご自身の出陣まで願う有様、罰は如何様にも……」

「これまで御苦労だった、中将。私が摂政レクティファールだ。しかし、謝罪はまだ早い。この戦が終わってから、またその話をしよう」

「は、殿下のご温情、この臣ガラハ、決して忘れません」

言葉少なげに返答し、拝跪の礼を見せているガラハを助け起こすレクティファール。

両者ともに柔和な表情だが、内心では別のことを考えていた。

（――――ダークエルフ族、ふむ、長寿の種族としては珍しいくらい戦いを好むということだったが……）

レクティファールはガラハの瞳に溢れる戦意を読み取り、その情報が正しいことを確信した。

（――――考え方は人間のようだが、堅物の四公を説き伏せたということはそれだけの男ではないな）

ガラハは人の良さそうな摂政の表情の奥に高速で繰り返される思考を感じ、あの電撃的な皇都奪還戦を指揮しただけの知能と知恵があると理解した。

双方とも表面上の挨拶を様々な思考の片手間で済ませ、司令官室の応接間で向かい合った。

「殿下に確認したいことが幾つかございます。質問してよろしいでしょうか？」

ガラハが前置きなくそう切り出したことで、二人の作戦会議は始まった。

レクティファールはそれを鷹揚に頷くことで許可し、ガラハは少し唇を濡らすと口を開いた。

「殿下がここにおいでになったということは、帝国との戦いは殿下主導の下で行うと考えてよろしいのでしょうか？」

北方総軍からの増援部隊はガラハの指揮下に入っているが、レクティファールの連れてきた部隊は未だレクティファールとその指揮下にいる二人の師団長と航空部隊司令官が握っていた。

ガラハは要塞防衛司令官として彼らに要請という形で指示を与えているが、それも摂政がその要請に応えるよう命令してあるからこそ疎漏なく命令が通じているに過ぎない。帝国四〇万を前に指揮系

統が一元化されていない危険性を、ガラハはよく理解していた。

それに対するレクティファールの答えは、ある種ガラハの予想を裏切るものだった。

「当然、この場にいる全軍を私の指揮下に入れる」

「――――！」

皇都奪還戦で無駄な戦いを望まなかった摂政ならば、自分の下に指揮権を集めるような真似はしないとガラハ思っていた。レクティファール自身は所詮戦の素人で、戦う相手は強大。となると戦い慣れた者に指揮権を与え、最も高い勝算を取ると思っていたのだが……それでも、摂政の命となればガラハに否は許されない。命ではなく諮られたのであればいくらでも再考を促すことも出来るが、一度命令として下された以上、それを覆すだけの意見がない限りは抗弁出来ない。

「――――了解しました、私は要塞司令官の権限を一時殿下にお返しすればよろしいのですね？」

総ての軍司令官は、その指揮権を皇王――――現在は摂政から預かっていることになっている。正確には上級司令部から預かっているのだが、その上級司令部も元々は摂政から指揮権を預けられているのだからガラハの言葉は間違いではない。

軍事に関わる諸権限は遍く主権者のもので、それは国家として当然のことだった。

僅かな失望を滲ませたガラハの言葉に、しかしレクティファールは頭を振った。そして、ガラハが望む未来の一つを与えた。

「その必要はない。貴官はその職務を変わらず果たすように、そこに付け加えて、私の下で帝国に対する戦いの指揮を執ってもらう」

「――――は……？」

珍しく、非常に珍しくガラハは呆然とした。

だが、すぐにレクティファールの意図を理解した。

摂政は一中将が持つには大きくなりすぎた戦力の指揮権を纏めるため、一度自分にその指揮権を集め、さらにそれをガラハに預けると言っているのだ。

これならばガラハは上級司令部の許可を待つことなく全軍の指揮を行えるし、何よりその命令は摂政の命と同義。増援部隊の師団長も、管轄の違う空軍部隊でさえガラハは手足の如く動かすことが可能になる。しかし、万が一のときの責任はガラハを任命したレクティファールが負うことになるだろう。

これはレクティファールにとっては当たり前のことだったが、未

だ陸海空の指揮系統が強固な壁に遮られている皇国軍では画期的なことだった。

この方針は後々皇国で深く研究され、陸海空を有機的に結合した指揮系統の確立という全軍を挙げての大事業の始まりとなるが、この時点では誰もそれに気づいていなかった。

その方針をこの世に生み出したレクティファールにとっても、単に自分の能力以上のことが求められる状況を打開しようと編み出した苦肉の策に過ぎなかったのだから。

「各部隊司令官を集めて緊急の軍議を開きたい。場所と時間の設定を頼んでも良いか？」

レクティファールから指示というのは、この戦いでも実はそう多くはなかった。

彼は自分が軍事的才能を持ち合わせていないことを自覚していたから、餅は餅屋とばかりに優秀だと思われる人物にそれを任せた。結果としてそれが君主としての理想的な振る舞いだっただけだ。

将を信じ用いる――――それだけが戦いに於ける君主の役割だった。

他の才能はともかく、レクティファールはこの点だけは優れていたのかもしれない。

ガラハは顔に現れそうになる笑いを抑えるため、深く頭を垂れて

摂政の命を受けた。

「はっ、殿下のご期待に応えるよう。万事滞りなく勤め上げます」

ガラハは思った。この主君の下でなら、満足して戦えるかもしれない、と。

生来の戦狂い――――それがグロリエだけの称号でないことを、ガラハは自分の中から湧き上がる興奮によって気づいた。

そしてそれを自分に自覚させたこの若い摂政もまた、ある意味では戦いに狂う一人なのかもしれない。

それから数時間後、ガラハが軍議の下地を整え、それを摂政に報告するべく司令官室を出ようとしたとき、彼の下に帝国軍からの休戦申し出が届いた。

それだけであれば、ガラハの労力はレクティファールへの報告に

一枚書類を追加するだけで済んだだろう。だが、彼の下に届けられた休戦申し出には帝国からの会談要請が付記されていた。

それもガラハが思っていたような実務者同士の会談ではない。

帝国が実務者同士の会合と合わせて申し入れたのは、双軍の最高意思決定者同士の会談。

摂政レクティファール・ルイツ＝ロルド・エルヴィッヒと、帝国第一三皇女グロリエ・デル・アルマダの直接顔を突き合わせた弁舌という戦いの申し出だった。

この件に関し、ガラハは人生で最も実りなく面倒な事務仕事をこなさなくてはならないのだが、部下の報告に眼を丸くしているこのときの彼には知る由もないことである。

ともあれ、大陸有数の個人戦闘能力を有する“モノ”同士の顔合わせの下地は、こうして出来上がった。

第二十話「邂逅」

急遽決まった皇国、帝国両軍の最高意思決定者会談に向けて最も苦労した人物は誰か。

その答えは人によって違うだろう。

帝国側からの申し出を受け、此度の会談は帝国軍陣地で行うことになった。ここに至るまでも多くの交渉があったが、それは割愛する。

摂政の護衛を担当する近衛軍一個中隊は慌てて護衛計画を立案、皇都の総司令部に許可を得て再編成に入った。当然突如重過ぎる責任を与えられた中隊長の近衛軍大尉は過労死一歩手前まで心身ともに追い詰められ、それをメリエラから教えられたレクティファールは直接労いの言葉を掛けることになった。大尉は英雄としても扱われるレクティファールの慰労に感奮し、怒涛の勢いで計画を練り上げた。

しかしレクティファール自身も大いに苦労していた。会談に反対する関係者――主にメリエラ、ウィリィアの近衛軍将兵――を宥め賺し、さらに個人的にもご機嫌取りをして何とか消極的賛成というところまで持っていった。このとき彼は反対論を述べる関係者に「今のような状況にある内は、私はどんな戦いであっても一歩も退けない。退けばそれだけ相手に寄せられる。今の私にも皇国にも、退いていられる余裕は一切ない。愚直と言われても、今は踏み止まる

か、或いは進むしかない」と言い切った。

このとき、レクティファールが見ていたものは実際のところ帝国やその軍隊ではなかった。

軍事の最高責任者としては失格なのかもしれないが、実は自らの後方に広がる皇国こそが彼の見ていたものだった。

帝国やその軍隊と戦うことはあくまでも背後の皇国を守るための手段であり、それらと戦うことに集中し過ぎて背後を顧みることを忘れては元も子もない。彼はそう考え、現実にそのように行動した。

今回の会談も、その行動のひとつだ。

皇国はあと二ヶ月持ち堪えれば良い。あと二ヶ月あれば、帝国本土とパラティオンを結ぶ後方連絡路――つまり補給線は雪で埋もれて機能が著しく衰える。四〇万もの帝国兵が日々費やす戦略物資は膨大で、その連絡路が途切れれば彼らは飢え死にするか、武器弾薬が尽きるまで戦い骸を晒すしかない。

帝国軍は剣槍よりも銃火器を重視するが、これは身体能力に優れる他国兵と近接戦闘を行わないようにとの思惑もある。しかし剣と槍を持って戦う兵士が廃れることは遂に無く、未だ数的主力は彼らだ。というよりも、剣や槍と一緒に小銃や拳銃を携行するのが帝国軍の兵士たちの姿だった。

自然、帝国軍指揮官の中で銃火器とは他国での魔法と同じ運用法を行うべきものとされ、一定以上の距離を空けた戦いでその威力を発揮した。元々人間種というのは他種族に比して魔法の使用が難しく、従って人間種が主力の帝国軍では戦闘行為に必要な魔法量を満

たせなかった。

総じて、帝国軍は質的にはアルマダ大陸で最も劣悪な軍隊と言える。

彼らはそれを圧倒的な兵数と、旧帝国時代の遺跡から発掘した資料を用いて作った銃火器で補っている。

つまり――――帝国軍とはアルマダ大陸で最も多くの戦略物資を必要とする軍隊でもあるのだ。

彼らが必要とする膨大な物資を連絡している補給線が潰れればどのようなことになるか、他人の不幸ではあるが、摂政としてのレクティファールはそれを期待していた。

そんなレクティファールが志向することは一つだ。

時間を稼ぐ。

そう、いつの間にか皇国と帝国は、至上命題として同じものを掲げていたのだった。

実は帝国側もグロリエの気紛れに近いこの会談の決定に大いに慌てた。

帝国は旧帝国の後継を自称しており、アルマダ大陸はすべからく自国の領土であるという国としての基本方針を持っていた。当然のように皇国も帝国内では『南方辺境領』と呼ばれており、帝国の民は魔獣どもが住む未開の地だと蔑み、同時に恐れていた。

そしてその“未開の地”代表として帝国の貴族名鑑に“皇王”として名を記載されているのが、皇国皇王家の当主だ。帝国は自らの君主を“帝王”とし、“皇王”はその下に位置しているとしていた。

では、その帝王の娘と皇王の後継者はどちらが上位であるか。

これが帝国側を大いに悩ませた。

間違っても敵側、しかも自分たちが獣や蛮族と呼んで蔑んでいる者共の頭目である。一天万乗の帝王陛下の姫君と同列に扱っていいものか。

しかしながら相手は皇国の国事国政全権代行職として国内外に周知されている。帝国元帥とは言っても政治的には、結局は単なる皇女であるグロリエとどちらが上位かと問われれば、当然次期皇王のレクティファールの方が上位である。

帝国は皇国を主権国家として認めていないが、国際的にそんな言葉が通じる筈もない。新生アルマダ帝国が建国されたのは約三〇〇年前、翻って皇国は約二〇〇〇年前である。帝国がアルマダ大陸の宗主国を自称しても、自分より幼くその主張に納得できる要素がな

い国家に宗主権を認める国家はない。

畢竟、帝国は国家の屋台骨と言えるその大方針に拠って、大陸で孤立していた。

辛うじて民間レベルでの交流のある国家もあるが、大国と呼べる国家との間に公式の国交はなかった。

無論、皇国とも国交はない。

紛争が起きる度に帝国が皇国に従属を強いてそれを皇国が突っぱねるという遣り取りは幾度もあったが、両国はお互いを対等な国家として交流を結んだことはなかった。帝国の帝族と皇国の皇族が交流するようなこともなく、帝国側としては今回の会談をどのように位置付けて開催するのかという段階から考えなくてはならなかった。

帝国側で大いに議論が紛糾し、本国に何度もお伺いを立ててさらに議論を重ねる。

そんなことで二日も消費してしまい、グロリエは遂に自分の手元にいる文官たちの能力を見限った。

彼女はややうんざりとした顔で文官たちに言った。

「――――今回の会談、我が軍の陣地で行う。つまり我らが招待主で彼らが客人だ、客人は上に据えるのが道理、それでいいじゃないか」

しかも自分とレクティファールの立場はここにいる帝国軍という集団と皇国軍という集団の最高責任者として、政治的な立場は一切考慮しないと明言した。これならば両者の立場は対等であり、招待主と客人という立場を設定すればことは済む。

文官たちはグロリエの言葉を文書に纏め、皇国側に送った。即日、皇国側から受諾の返事が届き、会談の予定は確定した。

グロリエの決定から丸一日で、文官たちを大いに悩ませた問題は解決してしまったのだった。

そして会談決定から二日後、レクティファールは近衛軍のみを護衛に付けてパラティオン要塞を北に向けて出発した。

彼自身は知らなかったが、彼は帝国建国以来で最も北に足を踏み入れた皇国の主となった。

帝国建国時の皇王でもある先代皇王は、自分たちを敵視する帝国の感情を鑑みてパラティオンより北に足を標したことはなかった。当代皇王など、殆ど皇都から動かなかったから論じるだけ無駄であ

る。

そんな歴史的一歩を踏み出したことを知らず、レクティファールは殺気立つ近衛軍の真ん中で前方に見える帝国軍陣地を眺めた。

皇国のそれとは違い、炸薬で砲弾を飛ばし、信管で砲弾を炸裂させる重砲。同じように天を穿つ対空砲や両用砲も、今は天高くを指向していて、要塞に向けられている砲口は一つとしてない。

これまで両軍の兵士たちの遺骸で埋め尽くされていた地面も片付けられ、ここに多くの無念が渦巻いていたと想像させるものは埋めきれなかった砲撃の痕跡くらいだった。

遠望してみれば、帝国軍の兵士が遠巻きにこちらを伺っていることが分かる。

彼らは総じて青白い顔で一点を見詰めており、その視線の先でレクティファールは嘆息するのを必死で堪えた。旧帝国帝都を“消滅”させた概念兵器、それを内に宿したレクティファールは帝国軍の兵士にとって悪魔そのものなのだろう。ひと度レクティファールが力を振るえば、自分たちなど一瞬で冥府に送られてしまうに違いない。兵士たちはずっとそんなことを考えていた。

実際には“皇剣”を使いこなしていないレクティファールにそんな器用な真似が出来るはずも無く、せいぜいが“皇剣”を暴走させて旧帝国帝都と同じ地形をここに造ることぐらいしか出来ない。対個人用兵装としてならともかく、戦術的に使用するには経験が足りなかった。

それでも十分な脅威ではあったが、敵味方を無差別に、無思慮に

殺傷する兵器は兵器とは呼べない。単なる事故だ。

レクティファールはそれを自覚しており、とりあえずこの場で“皇剣”の力を発揮するようなことは考えていなかった。

彼は嘆息することも、威儀に反するためきょろきょろと興味に従って周囲を見回すことも出来ず、ひたすら前だけを見て馬を進ませた。

やがて帝国軍の陣地深くに入り、周囲を固める近衛軍の緊張感が大いに高まった頃、皇国人たちは目的地となっているグロリエの天幕に通じる道に辿り着いた。天幕の前まで伸びる人を生垣とした道。その道の始端で馬を降りたレクティファールは、手綱を従兵に預けて歩き始めた。生垣と化していた帝国兵が一斉に捧げ銃の体勢を取る。

背後と横に帝国側から指定された人数の護衛が付き、周囲の動き一切逃さぬといった気迫を滲ませた。この護衛の中には侍従武官であるメリエラと、『龍殺し』としての戦闘能力を期待されたウィリィア。同じく巨人族に相応しい徒手格闘技能を持つガーリーが含まれている。

彼らを従えたレクティファールが一歩踏み出すたび、生垣の周囲に屯する帝国兵がその姿を追った。

敵意もある。だが、やはり恐怖が一番濃い。

その光景を見て、人間種にとって他種族がどれ程恐ろしい存在であるのか、レクティファールは朧気ながら理解した。

元々が単なるヒトであったから、帝国兵の気持ちが多少ではあるが理解出来たのだ。

例えばメリエラがここで龍の姿になり、その力を振るうだけで、少なくともレクティファールの視界に入っている兵士たちは悉く殺される。

しかし、レクティファールが持つ“皇剣”の力とは、その程度に収まらない。

ほんの一割程度の性能を行使するだけで、ここに居る兵士たちは骸さえ残らず消え去る筈だ。

レクティファールにその意思がないとしても実現可能であることに変わりはなく、帝国軍兵士の恐怖はどれだけ荒唐無稽なものであっても決して的外れではない。

生きるものは総じて自分を害するものを恐怖する。それは生きるために必要な本能だ。

その気になれば徒歩ですら越えられる線を引いてそれを国境と呼び、馬鹿げた軍事力を張り付かせている知恵ある者たち。この世界に対する圧倒的な干渉能力を持ちながら現世では自らの形を保つことさえ出来ない神族も、自分たちの領分に入り込む異物には徹底的な排斥を行う。その根底にあるのも、やはり恐怖なのだろう。

攻撃の裏には常に怯えがある。

滅びたくないという恐怖が、相手を滅ぼす攻撃衝動へと変化するのではないか。レクティファールは帝国兵の姿にそんなことを思っ

た。

そしてそれは、彼の中で正解のような扱いを受ける。

レクティファールは前だけを見て歩き、彼らの恐怖を受け止めた。

それが“皇”だと、諦めたが故に。

丘と言える小さな高台に、グロリエの天幕はあった。

幾重もの防護柵に囲まれ、重砲さえ配された堅固な陣地の真ん中に存在した帝国帝室の紋章を飾った大きな天幕は、それがこの巨大な軍事力を手足の如く操る権利を持つ姫君の仮初の家であると、言外に示しているようだった。

レクティファールは帝国軍の陣地を登り、天幕へと歩み寄る。

やはり道なりに配置されている兵士は、ひょっとしたらレクティファールが気紛れに陣地内へと足を踏み入れないようにそこにいるのかもしれない。

まあ、レクティファールに帝国軍を刺激する意図はない。大人しく彼らの身を呈した誘導に従って丘を登り、天幕へと赴いた。

やがて天幕の前に紅色の豪奢な軍服を纏った女性の姿が見えてきた。

朱金色の髪が風に靡き、レクティファールの目を引いた。背後に婚約者がいなければ、素直に感嘆の声を発していたかもしれない。少なくともレクティファールの美的感覚的には、その朱金の姫君の姿はただただ美しかった。

これから殺し合う相手だというのに、それが惜しくなる程度には。

レクティファールは出来るだけ無表情を装いながら、一つ溜息を吐いた。

「――――ふむ……」

＜――――見惚れるときは、もっと上手く誤魔化しなさい＞

「――――！」

突然、頭の中に響く低い声。

どうやらレクティファールの思考は背後の龍姫にはバレていたらしい。

精神ラインで叩き付けられた呪詛に肩を震わせるレクティファール。何故バレたと狼狽した彼だが、龍族でも女性でもない彼には到底理解できない類の感覚が、婚約者たるメリエラに備わっていたというだけのことだ。

龍族の女は非常に嫉妬深い。

自分の庇護下にある子供を守るために発達した防衛本能は、自分の領域を守るという生物的な本能と合わさって嫉妬という感情に変化した。自分のモノが他者に奪われる、龍族を始めとした知恵ある者共はそれを許したくないと思考する。

龍族は単純に動物的な本能だけを持っているわけではないから、その嫉妬深さが異性に向けられることも現代では多い。龍族というのはその種族的性質として浮気というものをしないが、別種族の配偶者が万が一にも不貞を働けばどうなるか――――至極簡単である。

大切なモノを奪われないようにする、ただそれだけだ。

奪おうとするモノを消すか、奪われようとするモノを消すか、それだけの違いである。

勿論龍族にも理性というものがあるからそこまで極端なことはここ数百年起きていないが、表沙汰になっていないだけで実は発生している可能性もある。

レクティファールはメリエラの低い低い声を聞いた瞬間に、知識が無くとも理解した。

（――――うむ、この世には逆らっちゃいけない何かというものがあったりなかったり……！）

まだ嫉妬なんて可愛らしいものじゃないか。

ほら、嫉妬なんて裏を返せば愛情の大きさを示すようなものだし。

男は黙って女性の総てを受け入れ、包みこむべきではないか。

そこまで考えたレクティファールだが、元々が一平凡な市民である彼にはそれが限界だった。

（もう、あとで怒られればいいじゃないか）

投げ出した。

背後の婚約者だとかその侍女だとかに対する諸々の対応を投げ捨てた。

だって、綺麗な人は綺麗な人だもの。

他人のことなら幾らでも頭の回転を早められる彼だが、反面自分のことは上手く思考出来ないらしい。その果てにあるのが諦めだというのなら、なるほど、彼は諦めなければ生きていかれないのかもしれない。

彼の最大の弱点とは、自分に関わる諸事を、他者を介在させない限り思考出来ないことだった。

それでも前方の朱金の姫君に向けて足は動いているのだから、人とは良く出来た生き物だ。レクティファールは意識の何処かでそう思った。

やがて、天幕の前でレクティファールを待つ姫君まであと二〇歩となったとき、風が二つ吹いた。

「――――獣共に食われた我が同胞の仇っ！」

「――――帝国に栄光あれ!!」

レクティファールの左右を埋め尽くしていた兵士たちの中から、二人の帝国兵が飛び出した。

それぞれに左右から同時。共に帝国では珍しい術式処理された長剣を構えて生垣となっていた同僚の脇を駆け抜けた。

そこからレクティファールまではほんの数歩。

彼らはその距離を人間種としては十二分に鍛えられた健足でもって駆け、レクティファールに迫った。

護衛の近衛軍将兵がレクティファールを守ろうと剣を抜き、二人の進路に割り込むべく動き始めた。

だが――――それを手を掲げるだけで制した男がいる。

「――――――――」

レクティファールだった。

彼は自らに飛び掛る兵士の内の一人を銀の瞳に捉え、軽く腕を振った。

もう一人の刺客などいないかのような態度に護衛たちが慌てるが、それは次の瞬間には驚愕へと変わる。

「――――え？」

レクティファールが捉えた兵士は、虚空に設定されたとある一線に飛び込んだ瞬間に粉微塵に消し飛び――――

「――――は？」

その背後から飛び掛る形となった刺客は、空中に口を空けた真っ黒い“裂け目”に自ら飛び込み、身体を真っ二つに縦断された。

吹き飛んだ兵士の残骸はその先に犇めいていた帝国将兵に降り注

ぎ、その姿を真っ赤に染める。ほぼ同時に両断された兵士がぼとりぼとりと落下し、血肉を撒き散らした。

その瞬間に風以外の音の一切が失せ、誰も動きを見せない時間が生まれた。

そのまま数秒、やがてその静寂をやや掠れた扇情的な声が切り裂いた。

「よくぞ参られた我が敵手殿、余は貴殿の来訪を心より歓迎する。小さな手違いはあったが、歓迎の準備が出来ている。招待を受けてもらえるか？」

その右手で紅の大剣――――『神殺しの神剣』を地に突き刺したグロリエが、不敵な笑みを浮かべてレクティファールを見下ろしている。

レクティファールは自分の手で殺した兵の残骸を一瞥し、次にグロリエを見た。

「喜んで」

「うむ！　では密談を始めよう」

グロリエは自分が縦断した兵士の骸の垂れ流す血を一目見て、レ

クティファールに言った。

「そこな赤より美味い果実酒を用意してある。話が済んだら酒宴を開こうぞ」

美酒を思い浮かべたのか、形の良い自分の唇を舐めるグロリエ。

その仕草にレクティファールは毒気を抜かれ、少し呆れたように頷いた。

背後でじっと自分の背中を見詰める婚約者のことは、出来るだけ気にしないことにした。

レクティファールを天幕内に案内したグロリエは、会談を始める前にほんの数分席を外した。

彼は会談場所となった天幕から出ると、入り口脇に控えていた祖母を呼ぶ。

「お婆さま、下手人は分かったか？」

「第八軍の一中隊長が功名欲しさに部下を唆したようで、すでに兵を送り捕らえました。第八軍のゲッパルテ大将がその中隊長の助命を願っておりますが、どうなさいますか？」

祖母の顔はすでに答えを知っている者のそれだった。

グロリエは祖母の手のひらで踊らされている感覚を味わいながらも、その予想を超えるような回答はやはりしなかった。

「――――余は愚かな兵は愛するが、愚かな将校は愛さない。彼らは自ら思考することを許された者共だ。その思考の結果が帝国と余の意志に反するというのならば、斬るまで」

「では？」

「斬り捨てろ。ゲッパルテが余のその結論を聞いてさらに抗うならば――――」

「ゲッパルテも斬る、でよろしいですか」

「うむ、それでいい」

グロリエはつまらないことで時間を取られたと言わんばかりに表情を歪め、天幕内に戻った。

祖母はその後ろ姿に困ったような苦笑を送ったあと、全軍の憲兵を統括する憲兵司令官の元へと向かう。自らが動けば余計な波風が起こる。彼女はそれをよく知っており、一歩退くという処世術も知っていた。

孫娘のために今は余計な面倒を引き起こすまい。

彼女は老人とは思えない軽やかな足取りで丘を下っていった。

戻ってきたグロリエに対するは、摂政レクティファールとその侍従だった。

侍従はメリエラとウィリィアが選ばれたが、それは彼女たちの個人戦闘技能を鑑みてのことだろう。

本来“皇剣”使いに付く護衛とは、その“皇剣”使いに強大な“皇剣”の力を振るわせないための制御装置でしかない。単に生き残

るということに全力を傾ければ、レクティファールは護衛など付けずともパラティオンまで戻ることが出来るだけの能力を持っていた。

そのレクティファールに対し、グロリエもまた大きな矛槍を持つ二人の近衛重装騎兵を背後に侍らせていた。

金で飾られた重厚な紅の鎧は帝国の技術の粋を集めた魔動式甲冑であり、これを身に付けた者はたとえ非力な人間種であっても他種族の戦士を圧倒するだけの戦闘能力を有することが出来るという。彼らの持つ魔動式武具もまた、帝国としては異例の魔法技術の結晶だ。ただし双方とも、代償として帝国内では滅多に手に入らない希少金属や鉱物を多用しているために大量生産を行えないという欠点がある。

現在グロリエの下に配属されている近衛重装騎兵団二〇〇〇を除けば、帝王親衛隊の一部が同じ方式の魔動式甲冑と武具を配備しているだけだった。

このとき皇国近衛軍中隊は天幕の外で警戒に当たっており、先程のような不逞の輩が現れないとも限らないという緊張感の中で仕事を全うしていた。

しばらくお互いを観察していたレクティファールとグロリエの間に、ようやく言葉が生まれた。

「――――さてと、そう多く時間も取れないだろうから、話をしようか我が敵手殿」

「お受けしよう、我が敵手」

グロリエの言葉にレクティファールが答え、会談が始まる。

口火を切ったのは、グロリエだった。

「すでに先代の皇王にも使者を発したが、我々が諸君らに求めることはただ一つだ」

「――――ほう」

レクティファールは興味深げにグロリエの顔を見る。

その表情は余裕の笑みさえ湛えており、グロリエは時分の内の戦意が滾るのを止められなかった。

「我らが求めるのは、大陸の主、我がアルマダ帝国への諸君らの帰順と従属。元々諸君らは我が帝国に反旗を翻し、不当に南部を占拠している無法者に過ぎない。我が帝国は諸君らを対等な国家として認める必要は感じないし、その意思も無い。この要求が受け入れられるのであれば、我が国は諸君らの占拠している地を皇王領として認める用意がある。ただ、そのとき、仰ぐべき旗と法は我が帝国のものとなる。逆に拒否すると言うのであれば、我が帝国の威信と誇りにかけて反逆者共を一匹残らず駆逐する」

これこそが帝国の建国以来変わらぬ意志であり要求だった。

自ら以外を認めるつもりはない。それがたとえ主君である自らを殺そうとしている――と、帝国の民は思っている――レクティファールたち皇国への恐怖から来る自己防衛本能であったとしても、到底皇国や他の大陸国家が認められない要求だ。

帝国以外の国家は人間種と他種族を同列に扱っているか、或いは人間種以外の種による単一種族国家でしかない。もしも帝国に組み込まれてその法を受け入れるということになれば、彼らは自分たちを人として扱わぬと宣言するも同じことだった。

奴隷として扱われるならばまだ良い。帝国の法では個人所有物として登録されている以外の他種族は、奴隷どころか知恵ある者としてさえ認められていないのだ。

殺そうと嬲ろうと犯そうと、一切罪には問われない。

帝国との戦争で捕虜となった兵士がどのように扱われるかなど、アルマダ大陸の人間種以外の種族では禁忌にさえなっている話題だ。いや、兵士だけではない。帝国の兵士にとって他種族は恐るべき相手ではあるが、それは大人など力ある者に限られる。力の弱い女子供なら、人間種の男でも十分に圧倒出来た。そして自分たちでも勝てる相手を見つけた兵士たちが女子供をどう扱うかも、また禁忌に近い話題だった。

皇国とその他の国家が帝国と戦い続けている理由はここにある。

自らを守るための主張が大きく食い違い、少しも妥協点を見出せ

ずにいた。さらには帝国と戦うことに自己防衛以外の意味を見出せない諸国にとって、帝国とは自分の身を大きく削ってまで討ち滅ぼす対象でもなかった。

もし仮に帝国が概念兵器を復活させたとなれば話は変わるだろうが、今の帝国にそこまでの価値はない。

帝国の国土は大半が雪と氷に覆われており、一部の種族以外では住むことも難しい。魔珠石などの魔法材料も殆ど採掘出来ず、たとえ採掘したとしても採算が取れない。その他の鉱物は豊富なのかもしれないが、それは他の国でも産出しているため、わざわざ傷を負ってまで帝国で採掘する必要はないのだ。

それに、帝国は間違いなくアルマダ大陸最大の国家。まともに戦うことが出来る国家などそう多くはない。そしてその数少ない国家も帝国に攻め入る大きな理由がないため、現状のような一進一退の小康状態が続いているのだった。

「さて、答えは如何か？」

グロリエは心底楽しそうにレクティファールに問い掛けた。

この男がどんな答えを返すのか、彼女は高揚する胸を抑えながら待った。

果たして、その時間は短いものだった。

レクティファールはきょとんとした顔でグロリエを見ると、その

表情を多分に残したまま、次の瞬間には答えていた。

「――――ここは夢の中ではない。寝言は寝てから言うものだと私は思っていたのだが、帝国では違うのか？」

一国家からの要求を“寝言”と斬り捨てる。

それもその国家の帝族の前で、である。

あまりの無礼に場が凍り付き、すぐにグロリエの背後に立っていた二人の近衛重騎兵が矛槍を鳴らして一歩踏み出した。それに呼応するようにレクティファールの背後の二人が得物に手を掛け、同じく一歩。

そのまま緊張を伴った沈黙が降り、それはグロリエがくぐもった笑い声を発するまで続いた。

「くくく……っ！　寝言か、そうだな寝言だな」

グロリエは近衛重騎兵を手で制して下がらせると、レクティファールも同じように二人を下がらせた。どちらも先程の緊張が予定調和であると認識しており、それは間違いなく正解だった。

「我が帝室とて、元々は何処の馬とも知れない小国の王だ。たまたま国内で旧帝国時代の遺跡が出て、そこから様々な遺失技術を得る

ことが出来たから帝国を作り、帝王となれたに過ぎない。その点では皇国も同じかもしれんが、皇国はすでに二〇〇〇年の長きに亘って民草を治めている。そんな皇国に我が帝国が主だと言っても、認められるはずもない」

グロリエは卓上に置かれた硝子杯を口に運び、そこに満たされていた水で口を湿らせた。

レクティファールはそんなグロリエの姿を見ながら、何故この姫君が自分を呼んだのか理解出来ずにいた。自分はたまたま摂政という地位にいるが、本来は一介の市民に過ぎない。それに対してグロリエは生まれた瞬間から帝族であり、人の上に立つことを宿命付けられた女だ。単純に軍事責任者同士の会談であるならグロリエは帝国の興りなど話さなかっただろうし、何より先のレクティファールの発言で会談を打ち切っていただろう。

レクティファールは現段階で帝国と交渉するつもりは一切なかった。

今回の会談に応じたのも、多くは時間稼ぎの為だ。本格的に降雪が始まれば帝国軍は引き上げる、皇国にこれだけの帝国軍を正面きって押し戻せる軍事的体力は残っていないから、自然休戦に任せるしかない。

ただ、レクティファールとしてはもう一押し欲しかった。

帝国が、少なくとも皇国の体力が回復するだけの間侵攻を躊躇うような何か、そう、この朱金の姫君が率いる軍勢が敗北するというような軍事的衝撃が。

とはいっても今の皇国軍にそんなことを達成するだけの力は残っていない。ならば交渉という別の手段を、という思惑もあって会談に応じたのだが、帝国の皇国に対する感情を知ることが出来ただけでそれ以上の収穫はない。

国家そのものが他種族に対する憎悪と嫉妬で固められているような帝国相手に、交渉する余地はないのかもしれない。個人としてならグロリエのような広い視野を持った者もいるのだろうが、帝国という枠組みから抜け出せない以上下手な期待は禁物だろう。

グロリエが硝子杯を置くまでの間に、レクティファールはそんな思考を巡らせていた。

「それで、摂政殿はこちらにどんな要求がある？」

「わが国土からの撤退と絶対不可侵、これ以外はない」

これもまた、これまで皇国が帝国に求め続けたことだ。

主権国家として最低限の要求。皇国としては帝国とことを構える必要性は薄く、これが守られるなら公式な国交を結んでも良いとさえ思っている。帝国が旧帝国のような状態にならない限り、皇国が帝国を攻める理由は存在しないのだから。

しかし、その皇国の要求に対する帝国の答えは先のグロリエの要求だった。

帝国としては自分たち以外の支配者が大陸に存在しているというだけでも許せないらしい。その根底にあるのが恐怖だと、レクティファールは知っている。そして、その恐怖を拭う手段は時間以外にないということも。

「当然、この要求が違えられない限りこちらから貴国に攻め入る理由はない。必要ならば技術提供もするし、人道支援を行うことも出来る」

「傲慢だな、かつて主人を北に追い遣った者共の末裔だけはある」

帝国では、都市部とそれ以外の地域の貧富の差が大きくなり始めている。重工業鉄鋼業で財を成した一部の有力商家が経済を牛耳り、労働者を低賃金で使役する。低賃金で雇われている以上労働者は小さく身を縮めて生活するしかなく、彼らが落とす金も少ない。そんな彼らを相手にする個人商店も常に背後に死を感じるような商売を続けねばならず、高所得層と低所得層ではそれぞれの経済情勢に大きな差が出来ている。

高所得層の経済は低所得層の経済から活力を吸い取ったように元気に回転し、活力を吸われた低所得層の経済はますます鈍化する。鈍化した経済に浸った労働者は、追い打ちを掛けるようにさらなる巨利を追い求める雇用者側に劣悪な労働環境に追い込まれてしまう。

帝国は建国から三〇〇年が経ち、人間種という短命な種が支配するが故に早くも老化していた。

その現状を打開するためにも、帝国は南を求める。

「北に追い詰められた我が先祖が南の緑の平野と青い海にどれだけ焦がれたか、鍬が入らないほど固く凍った地面を耕し、凍り付かない地面をどれだけ切望したか、何ヶ月も陸に揚げられたままの船を見上げ、氷に閉じ込められない港をどれだけ欲したか、貴様らには分かるまい」

グロリエは無表情に言う。

彼女自身は帝族として何不自由ない生活を送ってきたが、軍に入って各地を転戦する度に嫌でも故国の現状を見せつけられた。

街道の端に転がったまま凍りついた子供の死体など見飽きた。兵士たちに身体を売って端金を得る一〇の半ばにも届かない小娘を何度も見た。口減らしの為、涙ながらに子供を冬の川に投げ落とす母親の話を幾度も聞いた。家族のためと兵士になり、二度と故郷に帰れなくなった父たちの葬儀を何度も催した。

「帝国の窮状が、かつて自分たちの先祖が行った所業の報いであると理解はしている。しかし、帝国に当時のことを知る者はいない。そんな彼らが抱くことは、かつての故郷を奪い取った蛮族への憎悪と怨恨だけだ。皇国に住む長寿の者共であれば旧帝国の時代を昨日のことのように覚えているだろうが、帝国ではもう歴史に語られることでしかない」

グロリエは微かに目を伏せ、悲しげに、自嘲気味に笑った。

「――――分かって欲しいとは言えない。我らも貴様らの受けた屈辱を理解できないからな。そして、今でも帝国では貴様らの同胞（はらから）が虐げられている。それを知っている以上、許せとも従えとも、自分の言葉としては余は口が裂けても言えない」

今の帝国と諸外国の諍いが寿命の差によって起きた悲劇であるとレクティファールは知った。

自らの身に与えられた屈辱をつい最近の記憶として持っている種と、すでに遠い過去の歴史として扱っている種。彼らが同じ事柄を真摯に語り合える筈もない。

「さて、これで我が国と貴様ら皇国が言葉で分かり合うことの困難さは分かった。まだ続けるか？」

「――――少なくとも“今は”これ以上語る意味はないだろうな」

レクティファールはグロリエの言葉に頷くしかなかった。

後々の対帝国交渉の為に少しでも情報を得、同時に与えておきたかったが、少なくとも今日明日の交渉でどうにかなるような単純なことではない。いや、原因こそこれ以上ないほど単純ではあったが、

それを解決する為には原因と反比例する複雑な方法が必要なのだ。

ここで一軍事組織の責任者同士が顔を突き合わせて話し合うことは、もうない。

これまでの戦いで発生した捕虜の交換に関する諸々を打ち合わせ、今後の戦いでの捕虜の扱いを取り決めることで会談は終わった。

実りがあったかどうか、後の歴史家はこの会談を見て大いに悩んだ。

ただし、この会談の当事者二人にとってこの会談は相手との出逢いであり、終生忘れられない事柄ではあった。それが個人的な重要事であり、国家としての重要事であったかどうかは、彼ら二人の判断するべきことではない。

多くの兵士の血を吸った地で、大国の姫君と次期君主が酒宴を開く。

酷く劇的なその光景を演出した朱金色の姫君は、護衛も無くたっ

た二人という状況になっても全く変わらなかった。幾ら強力な武具と身体能力を持っていても、本気で相手を殺しに掛かった“皇剣”使いに勝つことは酷く困難な筈だ。先程の刺客への対応を見れば、そのことはグロリエにも理解出来ているはずだった。

レクティファール自身の身体能力など高が知れている。立場が立場なので多少の護身術は学んでいるが、それも一線級の兵士には遠く及ばない程度の技量でしかない。それでも、“皇剣”は両者の間にある巨大な壁を消し飛ばし、力関係を逆転させる能力を有している。

グロリエが護衛なしの宴を申し出たとき、レクティファールはその豪胆さに内心舌を巻いた。

もっとも、その中には嫁入り前の若いお姫様が敵国の男と二人きりになるという非常識極まりない行為に対する驚きもあったが。

「うむ、やはりアルメリアリスの九〇年モノは美味いな。苦労して皇国から密輸した甲斐があった」

「――――――――」

果実酒――――葡萄酒（ワイン）を楽しむグロリエを正面に、レクティファールは供された血の滴るステーキを口に運んだ。

つい最近まで綺麗な死体しか見たことのなかったレクティファールではあるが、ステーキを見たところで特別嫌悪感を抱くようなこ

とはなかった。これが“皇剣”の力であるのか、元々本人に備わっていた才能であるのか。気にするものはいなかった。

うんうんと満足そうに頷いたグロリエは、一度も杯に手を付けていないレクティファールを見て首を傾げた。

「どうした、酒にも毒は入っていないぞ。――――ああ、杯の方が心配か」

グロリエは得心したように手を打つと、自分の使った杯に酒を注いでレクティファールに手渡した。

「余の飲んだ場所から飲めば良い。それなら毒が塗ってあっても大丈夫だろう」

気の良い笑みを浮かべたグロリエ。

これから殺し合う相手にここまで気を許せる理由は分からないが、レクティファールは杯を受け取ることにした。実のところ毒など心配していない。

“皇剣”を持っている以上、レクティファールは酔おうと思っても酔えない。酒精は喉を滑り落ちるときにはすでに分解され、酒という種類の飲み物はレクティファールを酔わせることが出来ない。“皇剣”の機能を制御出来るようになれば酔うことも出来るようになるだろうが、今の彼には出来ない。

それと同じように、毒物は効果を発揮する前に無害化されてしまう。

たとえ“皇剣”が知らない毒物であっても、身体の中に入って効果を発揮する頃には分析が終わり結局は無害化されてしまう。

「――――いつも、そんな態度なのか？」

レクティファールは杯を弄び、口に運ぼうとはしなかった。

最近大分馴染んできた口調で、グロリエに問う。

グロリエは一瞬何を訊かれたのか理解出来ずに呆けていたが、意味を理解すると不思議そうに答えた。

「態度？　態度なんて変わるものなのか？」

「――――――――いや、君が正しい」

この姫は、相手によって態度を変えるということを知らないのだろう。少なくとも、意識して変えることはないらしい。

それが許される立場で、それを許すだけの度胸があった。レクティファールには到底理解できない感覚ではあるが、決して間違いで

はない。

レクティファールは小さく笑みを浮かべ、杯に口を付けた。

酔うことは出来ないが、美味い酒だった。

「――――あ」

「――――何か？」

何かに気づいたように呟くグロリエ。

レクティファールの手にある杯を見て、目を丸くしている。

「しまった、口付けは恋人とするものじゃないか」

「ぶっ！？」

今更か。

今更なのか。

レクティファールは口の端から垂れる酒を拭い、グロリエを睨んだ。

「今更何を言うんだ」

「いや、色々本を読んでいてな。その中には恋の話も多かったんだ。その中に恋人と同じ杯で毒を呷るというのがあってだな、ちょうど思い出した」

グロリエは困ったようにレクティファールを見る。

困っているのはレクティファールの方だが、彼女はちっとも気づく様子がない。

「所詮、物語のことだろう。君と私は、互いの背に守る国家のため明日には殺し合う敵だ」

「敵だから恋焦がれないという道理もないじゃないか。少なくとも余は、貴様以上の男を兄上以外に知らない。つまり一番良い他人の男だ」

「――――それは、君の眼が変に厳しいんだ。私以上の男など世に掃いて捨てるほどいる」

「それはそうだろうが、余の前で堂々と啖呵を切った男は貴様が初

めてだぞ？」

「何？」

グロリエは幼子のような目をレクティファールに向けて、何でもないという風に言った。

「明日にはお前を殺す――――憎しみも恨みもなく、あんな真っ直ぐに言い切られたのは初めてだ」

憎しみも恨みもないから、ただそれだけのことだ。

しかし、グロリエは初めて向けられた言葉に戸惑っているらしい。

愛を囁く男はそれこそ顔も憶え切れないほど多くいたが、その愛の言葉以上の感情を込めた殺害予告は初めての体験だった。それもグロリエ個人のことなど歯牙にも掛けていない、いうなれば単なる障害物としての宣言である。

それでいて、レクティファールはグロリエをグロリエとしか見ず、グロリエがそこにいるなら帝国の姫君でなくとも同じだけの感情をぶつけていただろう。

敵であるなら、レクティファールにとって総ては平等。

「――――うん、面白い。やはり貴様は面白いぞ」

「どういう理由で面白がられているのか、聞いても良いのか」

「いや、訊かれても答えられない。余にもよく解らんからな」

本能で喋っているのかと思うほど、グロリエの言葉は真っ直ぐで容赦がない。同時に理論的な説明を求めるとこうして「解らない」と返してくるのだから、この姫君とは姫と呼ばれるだけの野生生物に近いのかも知れない。

「別に殺すとは言い切っていない。君が私を殺す可能性だってあるだろう」

「余が貴様を殺すには、余も貴様に殺される場所に立たなくてはならないだろう。同じことだ」

「――――そういうものか……」

「そういうものじゃないのか？」

「いや、君が言ったんだろうに」

疲れたように頭を振るレクティファール。

見た目は異常なまでに魅力的な女性なのに、言動は子供のそれだ。しかし知識は間違いなく帝族で、戦運びも達者。本人の性格と持って生まれた才能に直接の関わりはないと言うが、グロリエを見ていると確かにそうだと思う。

「お、この肉美味いな」

「――――――――良ければ私のも食べるか？」

「貰う！」

小動物のような動きで自分の前から料理を持っていくグロリエに、レクティファールは何とも言えない表情を浮かべた。

今までに会ったことのない種類の女性――――とうよりも、人で、どうやって相対するべきか非常に悩む。

敵国の次期君主の前で阿呆面晒して肉を頬張る姫君を、どうやっても国家のために憎しみ恨むべき対象には出来なかった。

「いつもお婆さまが後ろで監視してるからな。こんなに楽な食事は

久しぶりだ」

「それは大変だな」

「うむ、戦場のど真ん中で兵士たちと食事を取っている方がよほど楽だ。楽しい話も聞けるからな」

こんな姫君だから、兵士たちも命を掛けて戦おうとするのだろう。

彼女は自分の敵に対しては何処までも残酷だが、守るべき対象には無限の愛情を注ぐ。帝国を愛し、民を愛しているからこそ、彼女は彼女として幾つもの戦功を挙げられた。それは事実だ。

「ほら、まだ酒は残っているぞ」

「――――ああ、貰うよ」

だが、彼女を見ていると思う。

人はその気になれば簡単に笑い合えるのに、どうしてそれをしないのだろうか、と。

「どうだ？」

「うん、美味いよ」

一歩進むだけで手が届く距離で、人は殺し合う。

だが、殺し合える距離とは、同時に手を携えることの出来る距離の筈だった。

黄昏の中、レクティファール一行は帝国軍の陣地を後にした。

丘の上。夕日に照らされ輝く朱金の髪を棚引かせ、グロリエは少しずつ遠ざかっていく白い背中を見送る。

今までの時間は楽しいと思えた。それと同時に、明日からの殺し合いに胸が高鳴る。

そして、ふと湧き上がった自分の欲求に気づいた。

隣に立つ祖母に、彼女は正直な感情を吐露した。

「――――お婆さま。余は、楽し過ぎて困った」

「困る、とは？」

「あの男は、多分本気で余を殺しに来る。しかも憎しみも恨みも無く、ただそう望んで、だ。余は憎まれ恨まれ、殺してやると言われ続けた。だが、あの男は余が余だから殺しに来る。いや、余が余でなくとも必要なら殺すだろう」

ただ、殺すことが手段だからそうする。

他の感情が介在しない、純然たる殺意。

それを受けたグロリエは、本当に楽しそうに笑った。

「余も、あれのことを想う。龍の力を持つあの男を、この手で狩りたい。『龍殺し』の本能が、余の本能が、総てがあの男を求めているんだ。だから困っている」

「――――気持ちは、少しだけ分かります。私も、若い頃は自分と対等な獲物を前に酷く高揚しましたから」

真っ直ぐに視線を受け止められる相手。

見下ろすのではなく、見上げるでもなく、ただ真っ直ぐ先にいる敵手。

『龍殺し』の本能ではない、グロリエの本能が獲物を定めた瞬間だった。

「お婆さま、余はあいつを狩るぞ」

「――――簡単ではないですよ。力も、才覚も姫様以上かもしれません」

「是非もなし。あれが余の前に立つ限り、余はあれを求める。星の瞳を持つ龍の皇をな」

グロリエは目を細め、自らが『星龍皇』と名付けた新たな皇国の主を見送る。

後の帝国でこの名がレクティファールの二つ名として大々的に喧伝されるとは、このときの彼女に分かるはずもない。

彼女が求めていたのは、そんな二つ名ではなくただの、たった一人の男なのだから。

帝国軍陣地を馬に揺られて後にするレクティファール。

背後を振り返るようなみっともない真似はしなかったが、夕日を眺めていると背筋に何とも言えない感覚が走った。

その感覚はあの朱金の姫君を前にしたときの感覚と似ていて、彼は人知れず笑みを零した。

「――――殿下」

「ん、どうした？」

隣を進むメリエラの声に、レクティファールは視線をずらす。

月に似た白銀の姫君の姿を見て、彼はグロリエの姿を太陽のようだと思った。

メリエラがそんな彼の思考に気付けば間違いなく怒っただろうが、生憎と彼女は精神ラインを閉じたままだった。

「あの『戦狂姫』のこと、どう思われますか？」

「――――――――」

今更の問い掛け、とは思わない。

実際に会って顔を突き合わせて、それでどんな感想を抱いたか、というのは臣下として気になることだろう。非公式ではあるが他国の帝族との会談はレクティファールの外交デビューとして見ることも出来る。

レクティファールはそう考えて納得すると、少し考え込んでから答えた。

「うーん、難しいことを抜きにしてということなら、“虎”みたいな人だった」

「とら、ですか？」

メリエラが目を見開く。

虎というと、彼女の中では大きな牙を持った剣歯虎だ。高い知能を持つ幻想種の一つであり、牙の短い他の虎の先祖ではないかと言われている。

「虎っていうのは、戦うときは獰猛で恐ろしいけど、それ以外のときは意外と愛嬌のある生き物らしいし、彼女もそんな感じに見えた」

敵と戦うとき以外は家猫と大して変わらない姿を見せる虎。

確かに体躯が大きい分仕草の一つ一つが大きく見えるが、やっていることは家猫と大差ない。

だが、その獰猛な本能は間違いなく存在する。

「敵として戦うなら、かなり怖い相手だな」

「――――殿下、あまりそのようなことを人前で言わないように」

「うん、済まない」

レクティファールは小さく頭を下げ、苦笑して前方に向き直る。

メリエラとしてはまだまだ言いたいことがあったが、レクティファールの表情に本人の気付いていない疲れが見えたので黙っていた。

戦いが終われば少しくらい休めるかしら――――未来の夫の健康状態を維持するため、彼女は皇王府と軍にレクティファールの休暇を相談してみようと思った。

「ああ、あと……」

「え？」

レクティファールが思い出したように、声を上げる。

メリエラは入り込んでいた思考から引き戻され、婚約者の顔を少し間抜けな顔で見ることになった。

「太陽みたいな女性だったよ。メリエラが月みたいな人だから、そう思ったのかも知れないな」

「――――えと、それって……」

褒めてるの、それとも敵の姫君を立てるために貶しているの、メリエラは少しだけ膨れてレクティファールの背中を睨んだ。

パラティオンの部屋に戻ったら、徹底的に問い詰めてあげると決意するメリエラ。

そんな婚約者の決意に気付かず、レクティファールは先程まで顔を突き合わせていた姫君を思い浮かべた。

（――――太陽の髪を持つ虎の姫君、か……）

何とも恐ろしいことだ。

レクティファールはこれから全身全霊を以て相対する敵手を想い、困ったように笑った。

皇国戦史に刻まれるこの一連の戦いを『龍虎戦役』と呼称するのは、このとき抱いたレクティファールの印象が『陽虎姫』というグロリエの新たな二つ名を生み出したことに起因するという。

『星龍皇』と『陽虎姫』の戦い。

後に両国の戦史に深く刻まれる大規模戦闘は、この翌日から始まる。

第二一話「胎動」

皇国海軍第三艦隊所属駆逐艦『ハーミヤ』はこの日、皇国本土東の大洋、レムリア海の海上にあった。レムリア海はイズモ神州連合と皇国の間にある海で、両国の国境がある。その北方に帝国の領海が伸びてきており、レムリア海は三カ国の領海が接する海であった。

帝国との国境紛争勃発に伴い陽動として派遣された第三艦隊と第七艦隊は、第七艦隊司令官バルボック・チェルノア・ハーヴェイを司令長官に据えた第二連合艦隊――第一連合艦隊は海軍総司令官を司令長官として既存――を編成。この動きに呼応して出航してくるであろう帝国艦隊を待ち受けていた。

『ハーミヤ』などの快速艦部隊――駆逐艦と軽巡洋艦は主力部隊前方に広がり、いち早く敵と接触して情報を得るべく見張員を檣楼に何人も上げていた。駆逐艦であるため大した大きさの檣楼を持たない『ハーミヤ』でさえ、正規の見張員二名のほかに手空きの水兵を一名檣楼に上げていた。三人はお互いの肩が触れるような狭い足場の上で、据え付けられた高倍率双眼鏡と手持ちの双眼鏡、望遠鏡をそれぞれ持って前方の海を睨み付けていた。

実は『ハーミヤ』にも水上・対空兼用の探測儀は搭載されていた。だが、これらは対空に対しては探測儀から発される探測波の出力のみが探測範囲を決定していたが、水上に関しては探測波の出力に加えて探測儀本体の取り付けられている高さが探測範囲に大きく影響する。駆逐艦程度の構造物の高さでは、もしかしたら見張員が望遠

鏡で見る範囲の方が広いかもしれなかった。

丁度このとき正規以外の見張り員として檣楼に上がっていたのは、チチルルという十代の混血種の二等兵であった。少数部族出身で苗字を持たないから、乗組員全員に『チチルル』『チチルル二等兵』とだけ呼ばれていた。皇国ではこういう理由で姓を持たない者がそれなりの数いた。

このチチルルという少年水兵は、日頃同僚と何処かに遊びに行くということもせず、趣味といえば部族の風習らしい星空の観察であった。その趣味のために何ヶ月分も給金を貯め、このときから遡ることひと月前に皇都の有名工房の一点物の望遠鏡を手に入れていた。高倍率ということではなく、潮風でも錆びず、衝撃に強いという海の上で生活する水兵のための望遠鏡だ。

チチルルがこのとき檣楼に持ってきていたのも、この望遠鏡であった。

彼は同僚二人に軽く挨拶すると、その私物の望遠鏡を手に前方警戒を始めた。

海鳥を追い掛けたり海上を跳ねる飛び魚を視界に入れてみたりと、仕事熱心とはとても言えない態度だったが、チチルルにしてみれば見張りも動物の観察も大差はない。彼は元々給養員で、本来であればこのような任務には就かない。その為このような態度になってしまったが、二人の正規見張員は自分の仕事に集中していてチチルルの仕事態度には全く気付かなかった。

チチルルは同僚に注意されることもないまま、仕事と遊び半分ずつの時間を過ごした。

しかし、見張りに就いて一時間経つか経たないかの頃、彼は水平線の向こうに黒い影を見た。

始めは雨雲かとも思った。しかしそれは遠くにある雨雲にしてははっきりと見え、さらに水平線の下から煙のように立ち昇っている。

訝しげに思った彼は、給養員として働いている食堂で航海科の士官が話していた内容を思い出した。

「帝国の艦（フネ）は、魔法動力じゃないから煙が出る」

皇国の艦は小型艦まで含めて魔動機関を積んでいる。

大型艦の魔動機関は術式と触媒を使用して汽缶を熱し、高圧蒸気を生み出して動力としている。それとは別に小型艦の魔動機関は術式で直接動力を得ているが、どちらも魔法術式と触媒しか使用しないので黒煙というものは出ない。

それに対して帝国軍艦の動力は、燃料や質の悪い紅珠石を砕いたものを術式で燃やして熱を得、それで汽缶を沸かしているため黒煙が出る。

どちらも最終的に得られる力に大きな差はないが、前者は機関そのものが軽い上に触媒以外の部品交換が長期間必要なく、後者は構造的に頑丈で整備がし易いという特徴がある。同じように前者には専門技能者しか整備出来ず、しかも一箇所術式が壊れると一気に仕事効率が落ちるという欠点が、後者には機関が非常に重く、燃料な

どが不可欠という欠点があった。

ともかく、チチルルは帝国軍艦の特徴を思い出して蒼褪めた。

（あれは帝国軍の軍艦から上がっている煙だ）

動揺した彼は慌てて檣楼に据え付けられた通信機を取り上げ、二人の同僚が驚くのも無視して艦橋に伝えた。

「水平線上に敵艦見ゆ」

ろくに確認せず、しかも本来報告を上げる役目を負っていた正規見張員をもすっ飛ばして叫んだ言葉だったが、その言葉が艦橋に詰めていた艦長以下の『ハーミヤ』首脳陣に届いて驚かせ、彼らが各々チチルルの報告した方向に双眼鏡やら望遠鏡やらを向ける頃には確固たる現実となっていた。

濃灰色に塗られ、赤地に『交差する三叉の槍』という帝国軍艦旗をはためかせた帝国軍艦数十隻が、単縦陣を組んでこちらに迫っていた。

パラティオン要塞のレクティファールの部屋というと、寝室があり日頃寝起きしている将官室と応急で作られた執務室の二つあった。

無任所参謀であるが故にレクティファール付き参謀となったリーデは、執務室の中央虚空に投影された映像を前にしてレクティファールに映像の内容を説明する役を担っていた。パラティオン要塞の概略図と帝国軍の侵攻ルート、戦闘状態に入った各部署を整然と映し出したその映像に、レクティファールは執務机に座ったまま、無言で見入っている。

その情報の中には中継映像が入っており、その映像の乱れによって戦闘の激しさをほんの少し察することが出来た。

愚直に突き進む帝国兵の集団に、魔動式弩弓から放たれた矢が次々と突き刺さり死体を量産する。別の映像では一つの特火点（トーチカ）に爆弾を抱えた帝国兵が飛び込み、特火点を内部から破壊した。

要塞砲の砲撃で吹き飛ぶ帝国軍の集団。皇国側からの弾雨を掻い潜って壕を掘る帝国工兵。その巨体に砲火を受けつつ鉄条網を踏み越え、のそりのそりと突き進む帝国の戦闘用自動人形（コンバット・ゴーレム）。魔法や砲弾を帝国の壕に落し込み、逃げようのない屠殺場を作り上げる砲塁。堡塁の中に侵入した帝国兵と白兵戦を繰り広げる巨人族の兵士。要塞に向けて一点突破を図る帝国の騎兵に対して横撃を仕掛ける皇国兵。

そんな数多くの人々の死も、戦場全体で見れば小さな小さな欠片に過ぎない。皇国側からの映像しかないためこの程度だが、帝国からこの戦場を見ればまた別の世界が広がっていることだろう。

「今敵に落とされた砲塁は七〇二砲塁です。この地点が敵に突破されたとなると、我らはより後方の陣地に後退するしかありません。もしも後退が遅れれば、敵に包囲され全滅するか降伏するかの二択しか残らないでしょう」

「――――降伏の許可は？」

「要塞司令官からは戦闘継続が著しく困難な場合は降伏を許可するという命令が出ています」

「そうか」

レクティファールはそれっきり黙り込み、再び映像に集中する。

リーデはレクティファールの顔色が良くないことに気付いていたが、敢えて何も言わなかった。

同じように、執務室の入口付近に控えている男女二名の近衛兵も主君の顔を時折ちらりと窺うのみで、誰もレクティファールをこの現実から引き離そうとはしない。

何よりも、レクティファールがこの小さな欠片の現実から逃げることを良しとしなかった。

両軍共に死者が殆ど出なかった皇都奪還戦とは違い、今回の戦いは彼の指揮下――実際はガラハやその幕僚が指揮を執っているが――でこれだけ多くの人々が死んでいく。敵も味方も、男も女も関係なく冥界への門を潜っていってしまう。レクティファールがそれをどのようにして受け止めているか、その顔色を見れば察することは出来た。

戦闘が始まってからずっと、レクティファールはリーデの説明を聞きながら映像をただ黙って見詰め、時折皇都から送られてきた書類を決済しながら時間を過ごしている。

リーデはガラハからレクティファールの監視も命じられているが、最近ではその必要があるのかとさえ思い始めていた。レクティファールはこの要塞に着いてすぐに指揮権を掌握したが、それを実際に行使するようなことはせず、ガラハたちが動き易いように手を回すだけで直接作戦に口を出したことは一度もない。

ガラハがレクティファールとの初対面を終えて司令室に戻ったとき、リーデもその場にいてレクティファールの言葉を伝え聞いている。自分が素人だと認め、さらに責任だけ負って後は他人に総て任せるという方針に、司令室にいた自分よりも経験を積んだ参謀たちがほっと息を吐いたのを彼女はよく覚えている。

幾ら彼ら幕僚が優秀で、軍司令官が有能であってもそれを動かす最高司令官が無能では話にならない。皇都奪還戦の戦い方を調べてみれば、レクティファールが無能と言われる部類の人物ではないことは分かる。だが、あの奪還戦の作戦がレクティファール自身のも

のであるという保証はないし、攻勢に長けた将と守勢に長けた将は別物だ。戦いの本質を理解するほど経験と知識が豊富であるなら攻勢にも守勢にも対応出来るだろうが、この摂政は経験と知識について大きな不安を抱えている。

実のところ、リーデはレクティファール付きを命じられたとき、内心厄介払いされたとさえ思った。

所詮は素人の案内役。すでに近衛軍の侍従武官が付いているというのなら、自分がするべきことなどないではないか。そう思いながらも、彼女は上司の顔を立ててレクティファールの傍に付いた。

実際に言葉を交わしてみれば、レクティファールという男は酷く平凡な男だった。

今パラティオンを襲っている帝国の姫君と比べれば、市井の者と大差ない物腰と覇気。これで一国を代表する立場にあるというのだから驚きさえ覚えた。

リーデ自身は先代皇王の時代に生まれたが、皇王と呼ばれる存在と顔を合わせて会話したのはこれが初めてだ。これが標準的な皇王の姿であるとは彼女も思っていないが、多少の不安を覚えることは事実だった。

「――――指揮所で指示を出されないのですか」

思わず口を衝いて出た疑問の言葉は、レクティファールが僅かに振り返ったことで彼女自身認識した。意識していない問い掛けだっ

た。何よりも甚だしい越権だった。少しだけ後悔した。

「失礼しました。お忘れ下さい」

「いや、疑問に思っていることを解こうとする態度は参謀として相応しい。惜しむらくは、問い掛けをしても答えを得られるとは限らないということだ」

「では、殿下自身お答えを持っておられないと」

レクティファールは頭を振った。

「持っているさ、でも、君に伝えても君の知識にはならないよ」

「――――構いません。殿下付きの参謀として、小官には殿下の思考を知る義務があります」

「義務、か……」

レクティファールは苦笑いでリーデを見上げた。

リーデはその銀色の瞳をじっと見つめ返し、やがて主君を嘆息さ

せた。

「知識欲の虜だね、参謀というのは」

「そうでなくてはやっていけません。少なくとも小官は」

「――――そうか、それは大変だ」

レクティファールは映像から目を離し、天井を見上げた。

その視線の遥か先、長城の最上部には白の皇王旗が翻っている筈だ。

「私は、自分の身の程を弁えているだけだよ。私にはあの戦場で散っていく人々が少しでも意味のある死を迎えられるように手を尽くす義務がある。殺す義務も、生かす権利も、殺す権利も、生かす義務も負っている私には、何をしようと何処にいようと最善の手を選ぶ義務がある。そして今回この戦場で私が負うべき仕事は、専門家たちの仕事の邪魔することじゃない。こうして大人しく寝床に引っ込み、必要になったときに必要なだけの責任を全うすることだ」

滔々と語られるレクティファールの言葉。

リーデだけではなく、近衛兵の二人もその姿に見入っている。

「私は、君主の仕事は“飾り”になることだと思っている。人々が仰ぐに足る“飾り”であること、人々が誇れる“飾り”であること。子供が玩具を自慢するように、胸を張って堂々と他者に示せる“飾り”。戦いことも政をすることも所詮はその為の手段の一つに過ぎない」

天を仰ぎ、表情を変えずにレクティファールは締め括る。

「――――君主とは各個人の意志の集合体、心にある存在だ、私自身のことじゃない。私自身は君主を演じる役者であって、人々の求める君主が現実に存在しないことを気付かせないための道化。道化は舞台の上でこそ存在を許される。道化は、現実の世界に居てはならないんだよ、参謀」

レクティファールは言い切ると、再び映像に戻った。

その表情は先ほどと何ら変りない。

自分の語った“現実”に対して少しの疑問も憤りも無く、当たり前のことのように受け入れるその態度。

リーデはもう一度だけ問い掛けた。

「――――殿下は、もう諦めたのですか」

自分が自分として生きることを――――口の渇きを煩わしく思いながら、彼女は問うた。

その答えは酷く簡素なものだった。

「諦めたよ。でも、こうすることが私の願いに一番適う」

一瞥さえこちらに向けない主君の背後で、リーデはそれ以上の問い掛けをやめた。

参謀としての役割はここまでだと、気づいたから。

正午を過ぎ、昼食を終えたあともレクティファールの態度は変わらず、仕事ぶりも変わらなかった。

映像を見ながら執務を進め、時折訪れる要塞防衛軍参謀の提言に

頷いたり、疑問を述べたり、或いは退けるということを繰り返した。

ガラハは日に一度戦況報告を持ってくるだけで、レクティファールに何らかの決断を求めるのは参謀たちだった。

実際にはレクティファールの手元に来るまでにガラハが一定の裁可を与えており、彼の仕事は最低限の命令を与えるだけだ。レクティファールはガラハにそれだけの権限を与えており、それによって防衛戦は有利に進んでいる。

このまま二ヶ月過ぎれば良い。

一兵卒から司令官まで、パラティオンの将兵は揃ってそう願っているだろう。

しかし――――

「――――解せない」

「何がでしょう」

レクティファールがぽつりと零した言葉にリーデが反応する。

“実”はともかく“名”はこの若者が最高司令官だ、疑問を感じるならそれを解き明かす必要がある。

「何故グロリエ姫は動かない。いや、彼女の軍は、と言うべきか」

レクティファールの視線は虚空の一点に向けられている。

それは帝国軍の配置を示した図。グロリエ直率の六個軍は、その一角に戦闘開始の頃より殆ど配置を変えずにあった。

「時間が無いのは向こうも承知している筈だ。ならば何故あの巨大な圧力で以てこちらの防衛戦を食い破らない」

「――――こちらの出血を待っているのではないですか？　たとえあの軍でパラティオンを突破しても、本国に入ってから北方総軍や中央総軍の主力と戦わなくてはなりません。その余力を残すために敢えて本国侵攻の主力である子飼いの六個軍を温存している、一応の説明は出来ます」

「その通り、おそらくラグダナ中将も同じ疑問を抱き、同じ答えを得ているだろう。しかし、私と同じ不安も抱えている筈だ」

「敵が何かを狙っていると？」

リーデはその思考を全回転させてレクティファールの疑問に答えを与えようとする。

参謀としての職務が、彼女の思考を支配した。

「この状況で、しかも正面戦闘による防衛戦突破を捨ててまで行うに足る策――――可能性が多く考えられることは三つです。一つは更なる援軍の到着。一つは大規模魔法陣による戦略級魔法の使用。一つは我らの知らぬ侵攻ルートによる当要塞の突破」

しかし、どれもが可能性の域を出ない。

こちらとしてはどの手段を敵が取っても後手に回るしかないのだから、想定する以上のことは出来ないのだ。

先代皇王の意向により、皇国は帝国に対して一切の攻勢を自制している。パラティオンを攻められて追い返しはしているものの、追撃を行って帝国領に侵入したことは未だ嘗てない。

それに――――

「パラティオンの戦力では敵陣に攻撃を仕掛けるなど自殺以外の何ものでもない」

敵の八分の一程度の戦力でここまで持ち堪えているのは、一〇〇〇年以上掛けて建造された皇国絶対防衛線――――『パラティオン要塞』があるからだ。

要塞そのものに刻まれた術式によって発動する対物／対魔障壁は

あらゆる攻撃を減殺、無効化する。備えられた要塞砲は常に磨き上げられ、常に最大の砲火を相手に送ることが出来た。要塞そのものに与えられた防御力も高く、並の重砲では傷を付けるのがやっとだろう。

一〇〇〇年の長きに亘って国防予算の一部の常に投じられたこの要塞は、皇国が作り上げた建造物の中で最も巨大で、最も効率的で、最も罪深い代物だった。

「パラティオンを出れば、我が軍は粉砕される」

というのは、要塞防衛軍の総てが知っていることだ。

さらに援軍を求めて積極的防勢に出る、ということも検討されたが、北方総軍がそれだけの援軍を編成してパラティオンに入れる前に雪が降るのは確実だということで見送られた。何よりも軍の上層部がそっくり入れ替わった現在の皇国軍に、数十万の敵と会戦を行う力はない。

西方の連合諸国の動きも牽制しなくてはならないし、東方や南方も皇国の混乱に乗じて何らかの行動を起こす可能性がある。軍としてはその質にばらつきのある貴族軍抜きで戦略を考えなくてはならないから、国内の戦力を大きく動かすことに消極的だった。

「ふむ」

レクティファールは執務机の晶盤に自分で色々呼び出した皇国軍の情報を矯めつ眇めつ唸る。

リーデとしてはこういうときこそ頼って欲しいと思ったが、やはり口には出さなかった。こういうときの積極性のなさが彼女を無任所にしている一因かもしれない。

どこをどう工面しても現在の帝国軍と正面切って戦えるだけの戦力を抜き出すには二ヵ月以上掛かるということをレクティファールが認識し、再び嘆息した。

「――――少ない訳じゃないんだけれどもなぁ……」

だが、内乱でガタガタになった軍を過信すると痛い目を見ることは確実だ。

当代皇王が自らの権力を固めるため、自分の親派を軍の上層部に据えたことがここに来て足を引っ張っている。

北方総軍の司令官だった大将など帝国軍に内通してパラティオンを背後から襲おうとしたほどで、レクティファールの命令で身柄を拘束されなければ今頃要塞の皇国側で骸を晒していたことだろう。

ともかく、今の皇国軍に帝国と正面から戦う戦力はない。初動の遅れと言うべきか、最初から皇国侵攻を目論んでいたらしい帝国と、これまでとても優秀とは言い難い君主によって滅茶苦茶に引っ掻き回されていた皇国では、その軍の動きに差があって当然だ。

しかし、そのたった一つの挙動の遅れが国を滅ぼしかねない。

レクティファールは“皇剣”の情報を手当たり次第に漁り、何らかの答えを得ようと必死に思考を巡らせる。この戦いに直接関わっていないレクティファールが出来ることは、この戦いを如何にして引き分け以上に持ち込むかという一点にある。

そもそも皇国側の大戦略は、帝国の攻撃を凌いだ上で何とか自分たちの体勢を立て直す時間を得ることである。その為にはここで要塞を抜かれることは当然避けるべき事柄で、レクティファールとしては一切の妥協をそこに求める気はなかった。しかし現状帝国の動きに先んじるということは不可能であり、結局は綱渡りのような対処を行うしかない。

レクティファールは“皇剣”の情報を引き出しては戻し、さらに意識内で幾つもの思考を同時展開する。“皇剣”の機能としては極々低度なもので、ここ最近でようやく使えるようになったものだ。

しかし――――

「――――――――――くそ、頭痛い……」

ぎりぎりと締め付けるような痛みがレクティファールの思考を邪魔する。

“皇剣”の能力を使用して並列思考を行っても、その“皇剣”の使い方が下手なレクティファールでは彼自身の身体に余計な負担ばかり掛かる。

“皇剣”に演算を丸投げしても問題はないのだが、そもそもその丸投げの方法が良く分からない。従ってこれまでの思考と同じく自分の中だけでそれを済まそうとする為、レクティファールの意識に掛かる負担は加速度的に上昇していた。

すでに“皇剣”抜きでは不可能なほど無茶な思考演算を繰り返しており、頭痛で済んでいることが奇蹟のようなものだ。

「殿下、無理をなさっては……」

男性の近衛兵が心配そうな表情で言った。

隣の同僚も同じような表情で、レクティファールはその表情を見て申し訳なさを覚えた。

「いや、問題ない――――――ことも無いが、まだ保つ。便利だよ“皇剣”は」

そういうことではないと思う――――――リーデは困ったような顔の近衛兵を見て内心嘆息した。

この摂政の自己管理の下手さ加減は不味いかもしれない、あの侍従武官にそれとなく忠告して何らかの対応を取って貰うべきだろう、そう結論した。

もしも帝国が動きを見せたとき、旗頭となる君主が不例となれば軍の士気に関わる。

「殿下、今日のところは……」

リーデが執務の中止を提案しようと一歩踏み出したとき、執務室の扉が二度叩かれた。

近衛兵が緊張し、腰の剣に手を添える。

リーデはレクティファールを窺い、映像を消した彼がしっかりを頷いたのを見て「どうぞ」と声を発した。

「失礼します」

入ってきたのはこの要塞の近衛軍を取りまとめる大尉だった。

彼は入口近くで一礼すると、レクティファールが小さく頷いて答礼するのを確認して執務机に歩み寄る。

そして脇に挟んであった冊子をレクティファールに差し出した。

冊子の表面には皇国海軍の紋章。その中を見る権限のないリーデは、軽く天井を見ることで冊子から意図的に視線を逸らした。

「皇都より先程通信がありました。内容は小官には判りかねますが、第一種機密情報ということでしたので……」

暗号通信を解読して書面に直した近衛軍の通信士官以外この冊子の内容は知らないということだ。

「良い、ご苦労」

「はっ」

大尉はそのまま反転し、執務室を後にしようとする。

だが、冊子を開いたレクティファールが眉を僅かに動かしてその動きを止めた。

「待て」

「はっ」

再び反転する大尉。

レクティファールは手早く机の引き出しから皇王家の紋章の入った紙と綴じ込み（バインダー）を取り出すと、紙に何か書き入れて

綴じ込みに挟んだ。それを大尉に差し出す。

「皇都の海軍総司令部と海軍参謀本部に届けよ。摂政令である」

「ははっ」

大尉は執務机に頭をぶつけそうになるほど深く頭を下げてそれを受け取った。

レクティファールはそれを見て頷くと、一言「下がれ」と言った。

「失礼いたします！」

大尉が執務室を出ると、レクティファールは再び眉間に皺を寄せて唸った。

「――――――――本当に頭痛いな……」

レクティファールの見た冊子には、レムリア海で皇国海軍が帝国海軍と戦闘状態に入ったことが記されていた。実際に砲弾を交換する交戦状態には陥っていないものの、艦隊総てが第一種戦闘配置に就いて次の瞬間にも砲火が開かれる状態になっているらしい。

皇国海軍は大陸有数の規模だが、帝国海軍も弱軍ではない。戦端が開かれればこちらも無傷とはいかないだろう。そして東方の守りが多少なりとも薄くなれば、東のイズモ神州連合が何らかの動きを見せるかもしれない。

内乱中のイズモが早々大きな動きを見せるとはレクティファール自身思っていないが、かの国には世界最強の遺跡戦艦『天照（アマテラス）』がある。あの強大な旧帝国時代でさえもイズモの独立を守り抜いたのは、おそらくこの発掘兵器が存在したからだ。

これが東を脅かすだけで、皇国は軍の再編を遅延することになる。その遅れが致命的にならないと誰が断言できようか。

「ああもう、いっそ身体が二つ欲しい……」

レクティファールはそう小さく呟き、気分を変えるため要塞内を視察することにした。専門知識のないレクティファールにとっては視察と言うよりも各部署の激励だが、それでも要塞の兵士たちの士気は上がる。

レクティファールはよいしょと立ち上がると、背後のリーデを振り返った。視察する部署は要塞防衛軍の参謀たちによって決められているので、リーデに訊くしかないのだ。

しかし、彼が振り返ると同時、何故か世界が傾いた。

「――――お？」

正確に言うなら、レクティファールの身体が傾いた。

何とか体勢を立て直そうと意識を向けるも、身体は全くと言っていいほど反応しない。

「殿下！？」

慌ててリーデがレクティファールに駆け寄り、その身体を支えようとする。

しかし特に力の強い種族でも無く、体格も一般的な女性より一回り小柄なリーデにレクティファールを支えきることは出来なかった。近衛軍の二人が慌ててこちらに駆け寄るのが見えたが、その姿もどんどん傾く視界の中で執務机の影に消えた。

「お……？」

レクティファールの口から大した意味を持たない言葉が漏れ、リーデはレクティファールの身体に押し潰されるように床に倒れ込んだ。

意識していたのか無意識であったのか、身体を捻ってリーデの頭を抱えるように倒れ込んだレクティファールのお陰で痛みは腰と肩だけだ。しかし痛みで顔が歪み、目尻に涙が浮かんだ。眼鏡も落と

してしまったらしく、視界ははっきりとしない。

「で、殿下、大丈夫ですか？」

それでも自分を押し潰した男を心配したのは軍人としての責務だった。

レクティファールは何処まで行っても文官であり、武官が守るべき対象だ。さらにはこの国の要であることに疑いようはなく、先程考えたように、この青年に万が一のことがあればこの戦いも一気に不利に傾く可能性があったからだ。

しかし、リーデの問いに意味のある言葉は返ってこなかった。

「殿下……？　え、ちょっと本当に……」

珍しくその瞳を大きく揺らすリーデ。

近衛軍の二人もリーデたちにの周囲に屈み込みはしたが、それ以上のことが出来ずに困り果てた。

倒れた原因が分からない以上、レクティファールを迂闊に動かすことが出来ないのだ。

「大尉、すぐに軍医が来ます。もうしばらく辛抱して下さい」

女性の近衛兵がリーデに言う。

リーデは早くこの状況から脱したかったが、近衛兵の言い分が正しいこともあって頷くしかない。

彼女は自分の目の前にあるレクティファールの胸板に手のひらを当て、その鼓動を感じて少しだけ落ち着きを取り戻した。脈拍に異常はない、恐らくだが過労に近いのではないだろうか。

この摂政が夜遅くまで執務を行っているのは彼女でさえも知っている。

夜間に行うのは皇都で必要とされる仕事であるからリーデ自身は関わっていない。だが、日に日にレクティファールの雰囲気が憔悴していくのは何となく――――そう何となくではあるが感じていた。

“皇剣”を頼って無茶をして来たツケが回ってきたのだろう。リーデはやれやれと嘆息し、本気であの侍従武官に、この際限なく仕事を追い求める阿呆摂政の健康管理を求める決断をした。

レクティファールが倒れたというのはリーデの判断で秘された。

近衛軍の一部以外では要塞防衛軍の将兵も近衛兵も事実は知らず、いつものように仕事を続けている。

ただその立場上ガラハには知らせておく必要があると判断したリーデは、その夜ガラハの執務室にいた。

「――――今このときで良かったと見るべきだな。“皇剣”の判断か、今のうちに休んでおけということだな」

「それは……私には何とも……」

「だろうな。まあいい、お前はこれまでと同じように摂政殿下に仕えよ。こちらから特別の指示がない限り、あちらを優先しろ。今ならまだいいが、帝国軍が本気で動いたときには殿下のお力も必要となるやもしれん」

ガラハはそう言って机の上に広げられた戦略図を見下ろした。

「殿下は、帝国十三姫の動きを気にしていたそうだな」

「はい、時間が迫っているのは向こうも気づいている筈と」

ガラハはリーデの報告を聞き、顎にて当てて楽しげに顔を歪めた。

面白い、とその表情が言っている。

「ふん、摂政にならなくとも軍人で食って行けたかもしれんな」

「ですが……」

「経験など時間があれば勝手に積み重なっていく。あとは経験からものを生み出す発想力、こればかりは天与の才だ」

まあ、実際に軍人でやっていくには些かひ弱ではあるがな――ガラハはそう言って嘲り笑った。リーデにはその薄汚い笑みを止めるだけの権限はない、覆しようのない事実としてレクティファールはこの大事な時期に倒れたのだ。

それに、ガラハとてレクティファール個人を攻撃する意志はないだろう。単にそれだけひ弱な青年に、国家の大事を託さなくてはならない自分への嘲りと侮蔑がこうした形で顕れているだけ。

もしも自分にあと少し力があれば、と考えてしまうのはヒトの悪癖だろうか。

あと少し、あと少しと上を追い求め、結局本当に必要なものを見失ってしまう。

ならば、自分が為すべきこととは何かと考え、リーデは決意した。

「――――閣下、殿下に皇都にお帰り頂くことは出来ませんか」

「――――――――――」

ガラハは僅かに目を見開いてリーデを見る。

明らかに驚いた風であるが相手はあのガラハ・ド・ラグダナだ、一筋縄ではいくまい。

「万が一、このパラティオンが抜かれることも考えられます。そのとき殿下がここにいらっしゃれば確かに士気は上がりましょう。ですが、今殿下を失えば皇国は終わりです」

「だから、殿下には皇都に退いてもらえと？」

「は……」

これが最善手であるとは思えない。だが、あの青年は戦場には不

向きだ。

いや、向きすぎていると言っていいかもしれない。

彼ならば少し戦場に立つだけでその空気を理解するだろう。それが“皇剣”の能力、皇としての才能だ。

これまでの皇の殆ども、それまで戦いとは全く縁のない立場であったにも関わらずすぐに戦場に順応したという。

使用者を守るという“皇剣”は、もしかしたら使用者の精神さえも作り替えているのではないか。リーデはそう考えていた。

戦いは軍人がするもの、リーデはその考えの信奉者だ。だからこそ自分たちは他者に比して多くの力を与えられ、人々に敬われている。怪我や老いで退役した軍人が手厚い保障を受けられるのも、結局はそれまで自分の命を懸けてきた代価なのだろう。

ならば、その代価を受け取れない人々は戦うべきではない。

しかし、ガラハの言葉は酷く冷たかった。

「無理だな」

「何故ですか……！」

リーデにはあの青年が弱すぎるように見えた。

打たれ弱く、国家を背負えるとはとても思えないほどに。

「お前は殿下を侮りすぎている、だからだ」

「そんなことはありません！」

「ならば何故、己の職分で以て殿下を退かせない。お前が論理立てて殿下を説得出来れば、俺とて反対などするものか」

「それは……私の権限ではそこまで言上することが……」

「出来ない筈はない。あの殿下は甘く思慮深い男だ、お前が多少職分を越えてもそれが正論ならば受け入れる。なのにお前はそれをしない、殿下を侮り、所詮戦いに怯える弱者だと思っているのだろう？」

「――――……！」

憤怒に染まりそうになる顔色を必死に制御する。

参謀職に激情は要らない、必要なのは総てを冷静に受け止め、臆病なまでに慎重であること。

リーデは騎士学校で学んだ参謀心得を思い出し、ガラハの言葉に耐え抜いた。

「――――たとえその通りだとして、殿下をこの要塞に置いていく危険性は閣下もご承知でしょう。ならば……」

「短慮だ、だからお前は無任所なのだ」

「――っ！！」

ガラハの吐き捨てるような台詞に、今度こそリーデの表情は怒りに支配された。

騎士学校で短慮だなどと評されたことはなかった。いや、これまでの自分の人生で短慮などと言われるようなことなどなかった。

「怒りか、なるほど、お前の方があの殿下よりは扱い易いな」

「か、っか……！」

嘲笑。

ガラハの表情にはそれがある。

しかもこれは間違いなく、リーデ自身に向けられたものだった。

「もう一度命じる。お前はあの殿下のお傍に侍ろ。そしてあの殿下の抱える闇を理解せよ。それがお前の今後の人生で大いに役立つ」

「――――な……」

闇。

ガラハのその言葉にリーデの表情が困惑へと変わる。

あの酷く実直そうな青年の闇が何故自分の将来に関わるのか、理解出来なかった。

「お前は参謀にとって一番大切なことを理解していない。だから無任所のままだ」

「わ、わたしが理解していないこと……」

ガラハは頷く。

「いいか、忘れるな。我らの相手は何処まで行っても“ヒト”だ。その“ヒト”を自分の物差だけで判断するような馬鹿は参謀に要らん……！」

「くっ……」

ガラハの発する威圧感にリーデは身体が震えた。

未だ二〇代の半ばを越えたばかりの彼女に、ガラハの持つ強大な精神的圧力は強力過ぎた。

しかし、すぐにガラハはその威圧感を解き、彼にしては珍しく微かな穏やかさを見せた。

「――――お前は我が友ガリアン・アーデンより預かった大切な娘。そのお前が軍人を志したことも、参謀を志したことも決して間違いだったとは思っていない。二五年前俺が生き残れたのはお前の父のお陰だ。お前が父の顔も知らず、愛情も知らずに育ったことは俺の責任。だからこそ、お前には自分が望んだ道で納得の行く人生を歩んで貰いたい」

「――――――――父のことは、関係ありません」

リーデは困惑から憮然へと表情を変えた。

父の名は何処までも彼女に付いてくる。二五年前の紛争の英雄、強大な帝国軍を退けた天才参謀と。

リーデが参謀を志したのは父を追うためではない、父が死んだときと同じぐらい熾烈な戦場で勝ち、その上で生き抜いて父を追い抜きたいからだ。

父は英雄なんかじゃなく、ただの無駄死だったと証明するために。

母が泣いていたことは決して国家に賞賛されるべきことではないと証明するために。

父が死んだのは国家のためではなく、母を守るためだったと証明するために。

「ならば余計にあの殿下から目を離すな」

「――――何故ですか」

リーデの問い掛けに、ガラハは困ったように苦笑した。

「あの殿下が、ガリアンと同じ匂いを纏っているからだ」

ガラハの執務室を後にしたリーデは、自分の部屋に戻って寝台に倒れ込んだ。眼鏡を寝台横の台に置き、枕に顔を埋め、幼き頃に見た母の泣き顔を思い出す。

「……母さん」

再婚することもなく、一人でリーデを育ててくれた母。

ガラハの支援があったことは騎士学校入学の頃に知ったが、それで父やガラハを許すことは出来なかった。

さらに言えば、母を泣かせた帝国も、そして皇国も許せなかった。

だからこそ、自分で父の行いが取るに足らないことだと証明しようと思った。

父を英雄などに祭り上げ、母の涙から目を背けた連中を見返したかった。

「レクティファール」

あの男が、父と同じだというのならむしろ好都合だ。

彼女は枕の中で笑う、目から溢れる涙に気付かぬ振りをして笑う。

「――――逃がさない」

父の代わりに越えるべき壁になって貰う。

お前が皇都で築き上げた武功が取るに足らないものであると、このわたしが証明してやる。

「くくく……はは……ははははは……」

どんどん溢れる涙に、彼女は気付かない。

気付かぬまま、笑い続けた。

『ヴァーミッテ』に作られた皇国空軍の基地。

そこに飛竜を収容する竜舎がある。その竜舎から、今一頭の飛竜が引き出されてきた。

「パラティオンへの定時連絡だって？　いいなぁ、楽しそうな仕事で……」

飛竜を離陸場まで引っ張ってきた飛竜飼育員が、そこで待っていた飛竜の騎兵に声を掛ける。

騎兵は飛行服の装具を点検しながらその言葉に笑った。

「楽しそうでも何でも、俺みたいな新米が出来る仕事なんてそれくらいなもんだよ。俺は偵察騎として訓練してるけど、実際には偵察ぐらいしか出来ないってことなんだよなぁ」

騎兵は飛行眼鏡を額に掛けると、自分の相方（パートナー）である騎竜の鼻頭を撫でた。

まだ若いこの飛竜は『竜の吐息』と呼ばれる亜竜種の得意とする攻撃が出来ない。つまり翼下や胴体に懸吊した兵器で戦うしかないのだが、身体の大きさ故に大した量を持ち運べない。

つまり、いまの彼らに出来る任務は偵察と連絡ぐらいだった。

「こいつもアシだけは速いんだ。もうちょっとでかくなれば、花形の戦闘騎にだってなれるさ」

飛竜飼育員が騎兵を慰めるように言う。

彼もこの飛竜付きの飼育員で、この若く小さな飛竜を自分の弟のように可愛がっていた。

「だといいんだけどな、俺も皇都奪還戦みたいな大規模戦闘に参加してみてぇよ」

「パラティオンにはその皇都奪還戦をお膳立てした摂政殿下がいるんだ。もしかするともしかするかもしれないぜ」

「おいおい、今の俺たちじゃ上がった途端に落とされて終わりだよ。もっと先じゃないとな」

「違いない！」

二人の笑い声が離陸場に響き渡る。

やがて騎兵の持つ通信機から、管制官の声が聞こえてきた。

＜――――ケール〇九、離陸準備＞

「おっと、時間だ。じゃあちょっと行ってくるよ」

「おう、山の方はちょっと吹雪くみたいだから気を付けろよ」

「はいよ」

騎兵は自らの飛竜に跨ると、離陸場の中心へと飛竜を進ませる。

そこで装具の最終点検をした。

＜――――ケール〇九、離陸を許可する。風は北東、風力二・五＞

「ケール〇九了解。これより離陸する」

飛行眼鏡を下ろし、身体を飛竜に密着させる。

軽く腹を蹴ると、飛竜は羽ばたき始めた。

その羽ばたきがどんどん大きくなっていき、やがてその身体は大地を離れた。

＜――――離陸を確認、高度一二〇まで上昇後、北に向かえ。幸運を＞

「高度一二〇、進路北、了解。じゃあ、行ってくる」

彼とその飛竜は、空へと昇っていく。

飛竜飼育員は帽子を振ってそれを見送った。

騎兵の名はバルクノイン・ガンツ。

飛竜の名はカルテン。

彼らはこのとき知る由もない、自分たちが祖国に齎す衝撃を。

そして、その衝撃によって発生する大規模な戦闘という歴史も。

第二一話「胎動」（後書き）

リーデさんは病んでます。多分、一番病んでます。こういうキャラが傍にいると私も執筆中に変な緊張感が……

第二二話「皇国軍始動」

一晩銀色の姫君の添い寝――眠っていたので本人は非許可――付きでぐっすりと眠ったレクティファール。それで身体の調子を取り戻したのだから、“皇剣”はやはり高性能だったということだろう。

執務室に戻ってきたレクティファールは、出迎えのリーデに微かな違和感を覚えた。

小さく会釈する態度や所作そのものに変わりはない。だが、レクティファールをじっと見詰めるようなその視線がこれまでとは微かに違っているように思える。

そう、敢えて言葉にするならば、これまでの視線が監視で、今の視線は何かを試すような、摂政としてのレクティファールではなく、レクティファールという個人を見ているかのような視線だった。

だが、その直感ともいえる感覚を口にして説明することは出来ないし、仮に説明出来たとしてそれが問題であるかと問われれば、否である。

リーデ・アーデンというこの要塞の参謀からしてみれば、レクティファールという男は常に監視対象であって考試対象でもあった。当然、レクティファールの一挙手一投足に注目してそれを然るべき相手に報告する必要があるだろう。

それに、昨日執務中に倒れた男を見る目としてはまだ優しげがあるのではないだろうか。

徹底して冷たい視線を向けられるのだろうと思っていたレクティファールとしては、むしろ幸運だったと言って良い。

「――――仕事始めてもいいのか？」

「どうぞ」

しかし、幸運だから何かをするということもない。

ただそれだけの言葉を交わして、レクティファールは執務机に積まれた書類の決裁を始めた。

グロリエは天幕の自分の席に座り、気怠げに頬杖をついていた。

そんなグロリエを、背後に立った祖母カリーナがじっと見詰めてい

る。

先程から上がってくる報告は、いずれもパラティオン要塞を形成している堡塁や砲塁のどれどれを陥落させたとか、どの部隊がどの地点まで進出したとか、或いはどの部隊がどこで全滅したなどといった代わり映えのしないものばかりだ。

あの青年が要塞に入ってから要塞側の戦術が変わったということもなく、彼女がここに来てから延々と続けてきた“お決まりの軍事運動（ルーチンワーク）”を繰返している。

しかし、それに対して帝国側が有効な対抗手段を講じることが出来たということもまたなく。こちらも兵士たちを決まった数要塞に献上しているような格好だった。

これを無意味だとは彼女とて思っていない。

決まりきった動きは相手の思考を麻痺させ、突発事態に際して取りうる手段の幅を大いに制限するだろう。さらに膨大な鉄と血を支払っているだけあって、要塞の防備を日々薄皮一枚ずつ剥いでいる。その薄皮一枚が戦場で明暗を分けるということを、彼女は祖母から嫌になるほど教え込まれた。

だからこうして退屈そのものの日々に耐えている。

自分が出て行って要塞を切り裂きたいと祖母に言ったこともある。だが、幾ら強大な力を持つ個人であっても、所詮個は群に勝てない。もしも個が群に勝てるとしたら、今頃この世界は大きな力を持つ種族のどれかに支配されていただろう。

グロリエも、確かに龍人族としては優秀だ。しかしその『龍殺し』としての力を除外したとき、彼女が一武人としてどの程度の実力を持っているか、彼女の祖母は良く知っていた。

なまじ大きな力を持ってしまった為、力を除いた戦い方というものが理解できないという弊害がグロリエにはあった。

その精神面には常に驕傲があり、相手を自分の下に見るという痼疾がある。これが今まで彼女の命を脅かさなかったのは、単純にその弱点を本人よりも理解している祖母がいて、グロリエが自分を仕込んだ祖母だけは自分よりも上の存在だと認め、無条件に従っていたからだ。

しかし、カリーナも既に齢六〇を越えようとしている。帝国の人間種の平均寿命まであと一〇年と少し、軍務に耐えられるのはあと五、六年が限度だろう。それまでに何とか、孫娘に“退く”ということを覚えさせたいとカリーナは思っていた。

そんなとき現れた次期皇国皇王――――レクティファール・ルイツ＝ロルド・エルヴィッヒ。

帝国の民にとっては伝説や神話の存在に等しい概念兵器の使い手と相対すれば、グロリエも幾らかの遠慮を覚えるのではないかと密かにカリーナは期待していた。

カリーナ自身、二五年前の戦争で皇国相手に『龍殺し』の力を揮った女傑である。

生憎と皇王自身を戦場に引き摺り出すことは叶わなかったが、その権威によって束ねられた皇国軍の精強さは骨身に沁みている。西

方戦線ではグロリエの心に良い変化を与えるような敵手には出会えなかったが、東方戦線でなら或いは――――敵に期待するということに可笑しみを覚えながらも、カリーナは孫娘の不機嫌そうな背中を見守り続ける。

伝令が持ってきた報告を聞き終えたグロリエが小さく溜息を吐いたとき、天幕が風で揺れた。

カリーナは肌を刺すような寒気に少しだけ眉を顰める。

「――――吹雪くかもしれませんね」

彼女の予感は当たった。

轟々と耳の側で鳴る風の音は、先程からずっとそこにある。

飛行眼鏡に次々とぶつかる雪も、先程からずっと変わらない。

そして、目的地を見失ったという事実も相変わらずだった。

「ちっ、方位が分かっても現在地が分からなきゃ意味ないか」

竜騎兵バルクノインは首から下げた方位磁針で方位を測り、それを同じく首から下げていた地図と照らし合わせる。しかし、吹雪で周囲が全く見えなくなってしまった現状に於いて、その行為は通常の数分の一程度の意味しかなかった。

進んでいる方向さえも、風で流されているため正確に判別出来ない。

相方（パートナー）の鼻先は間違いなく北に向いている。だが、山のせいで乱れた風に流されてはそれに逆らい、逆に追い遣られては方向を戻すということを繰り返しており、すでに北に向いているということにどれだけの意味があるというのか。

「しかし寒いな」

魔法障壁を張る技能は竜騎兵に必須の技能だ。彼も当然使えるが、その障壁の出力はやはり経験に左右される。温度を遮断する術式と物理的に風を遮断する術式のバランスを上手くとれるかどうか、竜騎兵の技量を計る一種の基準だった。

その技量を審査基準にしてみれば、彼は未だ半人前にもなってい

ない。

障壁の密度が低く、風も温度も遮断しきれていない。さらには効果範囲の設定が甘く、必要のない場所でまで障壁で覆っていて効率が悪い。これが一人前以上の竜騎兵になると自分の身体と相棒である飛竜の身体だけを障壁で守るようになり、使用する魔力も術式が占める意識内容量も最低限になる。

「頑張れ相棒、あと少しだ」

バルクノインの言葉に、カルテンが甲高い鳴き声を返す。

飛竜としては若い部類に入るカルテンにとって、吹雪の中を飛ぶことは恐ろしく体力を消耗する難事だ。それでも主人にして相棒であるバルクノインの意志に従い、彼は翼を打ち続ける。

雲の上を飛べればこれ程苦労することはないだろう。しかし、騎兵騎竜揃って未熟者の彼らにそんな技量はない。

偵察騎と言えば高高度を飛行し敵情をつぶさに観察することが仕事だが、実際にそこまでの技量に到達するのに早くても一〇年掛かる。訓練を除いた飛行時間が二〇〇時間足らずのバルクノインには、まだまだ先の話だ。

「雲の上、どんな世界なんだろうな……」

彼は灰色の天を見上げて呟く。映像としてなら見たことがあるが、部隊の先任に聞けば映像などで推し量れるような世界ではないという。空を往く者たちを隔てる一つの大きな壁、それが雲だった。

ほぅ、と溜息にも似た吐息を漏らすバルクノイン。

だが、すぐに風に煽られたカルテンを御する為に全身を駆使する羽目になった。上下さえも曖昧になりそうな運動を繰り返し、何とか安定を取り戻す。

再び吐息を漏らした。今度は安堵の息だが。

「頼むぜ、本当に」

バルクノインはやや肩を落としてカルテンを撫でる。

バランスを崩して墜落、となれば自動的に遭難である。装具の中には緊急事態用の装備――サバイバルキット――も当然含まれているが、流石に雪山で何日も生き延びることが出来るほど多くの装備がある訳でもない。それに、天狼山脈も白狼山脈も皇国と協定を結んだ二つの氷狼族がそれぞれ支配している。不可抗力とはいえ、協定に準じた入山許可を得ていないバルクノインがどのような扱いを受けるか甚だ不透明だ。

ひょっとしたら助けてもらえるのかもしれないが、逆に殺される可能性もある。

皇国側は両部族の実質的自治領である両山脈に対して許可された

者以外の人物を山に入れず、両部族から協力を求められたときはそれを可能な限り受け入れる。逆に両部族は許可された者以外の入山者――主に帝国側からの入山者――を敵として排除し、両山脈を通過させない。

こと雪山に関する限り、両部族に優る戦闘能力を有する種族はほんの一握りに過ぎない。彼らが部族を挙げて全力で戦えば、たとえ数十万の軍勢でもその力を発揮出来ず万年雪の下でミイラとなる筈だ。元々雪山は、その環境に適応した種以外ではとても戦闘など出来たものではないのだ。

協定の中には遭難者の人命を守るという条文もあるが、それも許可されて入山した者の話。バルクノインには当て嵌らない。

「――――本当に頼むぜ相棒」

凍死であればまだ綺麗な死体になれる。だが、氷狼族に食い散らかされてバラバラになるのは御免だ。知恵ある者共の一である氷狼族が人を食らうとは思えないが、身体機能的に食えないことはないだろう。

まあ、それを言えば自分だって人肉を食べられないことはないのだが。

（――――やべぇな、生き残っても査問会行きコースじゃ……）

自分の未来に暗澹とした雲が湧き上がってきたのを感じ、バルクノインは手綱を持つ手が震えた。

この震えが寒さによるものであると自分に言い聞かせ、彼は前を見る。その先に明るい未来があると信じて。

「――――お？」

本当に明るい未来があった。

いや、正確には吹雪の中でも煌々と輝く光が見えた。

幾筋もの光が天に向かって伸び、蠢いている。

（探照灯か……？）

飛竜乗りがあの光を知らない訳がない。

帝国の領空侵入と空襲に備えてヴァーミッテ空軍基地にも、『ヴァーミッテ』そのものにも設置されている設備だからだ。

夜間無視界飛行訓練では、あの光を目標に飛んだこともある。

だから、あれが何処かの軍事施設から照射されている探照灯であると気付いた。

そして、国境近辺であれだけの探照灯を一所に設置している施設は一つ。

「やった！　パラティオンだ！」

迷人がようやく安住の地を見付けたかのように光に向かって突き進むバルクノイン。カルテンも探照灯の光を認めていたらしく、主人の手綱に従ってぐんと加速した。

しかし、彼は一つ大きな見落としをしていた。

皇国と帝国の国境線に存在する大規模な軍事施設は一つではなく、二つであるということを。

彼は喜び勇んで吹雪の中を飛んで、探照灯の照射元を視界に捉えてそれに思い至る。

「――――違う……！？」

円を描くように造られた城壁とその中に内包された都市。

彼の知るパラティオンはあのような形状ではない。そもそもパラティオンは純軍事要塞であり、要塞都市ではない。街に匹敵するような生活施設はあるものの、都市そのものを内包している訳ではない筈だ。

では『ヴァーミッテ』に戻ってきたのか。

『ヴァーミッテ』は帝国との戦いに於いて北の守りを司る要衝。パラティオンは純軍事要塞であるが故にそれを支える後方の都市が必要不可欠だった。その為に地理的に好条件であった『ヴァーミッテ』は要塞都市化され、パラティオンと並んで皇国の北を守護する防人となっている。

『ヴァーミッテ』は都市部を円形の城壁で覆っている都市だ。だからバルクノインは眼下に広がる都市を自分の飛び立った『ヴァーミッテ』であると考えた。

しかし、その考えもすぐに否定される。

『ヴァーミッテ』と彼が考えた都市の横に、巨大な建造物が存在したからだ。彼が出発するとき、そんなものはなかった。

南に向いて傾斜した塔。

そうとしか表現出来ないそれは、都市と比較してみれば確かに小さい。だが、上空から見ても判別出来るほど巨大な建造物が僅か数時間で都市の横に現れるはずがなかった。だから彼はその要塞都市を『ヴァーミッテ』ではないと判断したのだ。

しかし、ならばこの目の前の都市は何だ。

「――――――！！」

あった。

たった一箇所。今まで自分が飛んでいた時間で到達出来る大規模要塞都市が。

「――――『ウィルマグス』！！」

帝国の対皇国戦線の要。皇国に突き付けられた鋒。

幾らでも言い方はあるが、間違いなく敵の支配する都市。

「くそっ」

バルクノインは下げていた高度を一気に引き上げた。

帝国の対空探測儀の性能が劣悪であるということは知っている。しかもこの吹雪では、探測波が多少妨害されているとも考えて良いだろう。大気中にも魔力は含まれるから、探測波は大気状態に左右される。その“ゆらぎ”ともいえる探測波の穴を埋める技術は元々魔法技術で他国に劣る帝国にはなかった。

その代わりに正面兵器開発では他国の追随を許さないほど次々と新技術を編み出しているのが帝国だ。おそらく、『ウィルマグス』にあるあの巨大建造物もその一つ。

バルクノインは偵察騎としての役目を全うするため、装具の中か

ら写真機を取り出した。

雪が次々とレンズを汚し、それを拭いながら彼は巨大建造物をファインダーに収めた。ピントを合わせ、ぼやける視界を整えると一気にシャッターを切った。

そのまま何度もシャッターボタンを押し、カルテンを駆って様々な角度で構造物を捉える。

敵に察知されるかもしれないという恐怖は常に彼の頭の中にあった。だが、青年軍人にありがちな『自分が国家を守っている』という英雄意識がそれを麻痺させた。

自分の写しているものが重要なものではないという冷めた意識はある。しかし、これが皇国に対して帝国が持ち出した切り札であるかもしれないという意識もあった。

だが、バルクノインは初志を貫いた。

何度も写真機のフィルムを巻き、シャッターを切る。敵が来る、敵が来るという恐怖を“英雄”という麻薬で抑え込んで、彼はひたすら自分の仕事を果たした。

やがて、フィルムを一本使い切ったところで彼は写真機を仕舞い込み、その空域からの離脱を図る。

上手くいった、敵が自分に気付いた様子はない、無事に帰れると彼は思った。

だが、その期待はあっさり裏切られる。

「――――空襲警報！」

バルクノインにとって心底耳障りな警報が眼下の要塞都市中に響き渡る。

地上を照らしていた探照灯までもが一気に上空へと向けられ、バルクノインを追い掛けてきた。

高度を下げることは出来ない、ならば――――

「皇国航空騎兵嘗めんなよっ！！」

意識内に魔法術式を展開。

そこに魔力を流し込み、彼は撃発呪文を唱えて魔法を顕在化させる。

「“アクセラレイト”ッ！」

自分の周囲に現れた魔法陣が、彼とその騎竜の身体を加速させる。

前方に次々と現れる魔法陣を潜り抜け、軋む身体と意識をねじ伏せてバルクノインは雪空を翔ける。

カルテン自慢の健翼と加速魔法、そして今まで自分が培ってきた航空騎兵としての技量。

それらを駆使して『ウィルマグス』から上がってきた邀撃騎との生死を掛けた追撃戦が始まった。

『ウィルマグス』上空に侵入した正体不明の飛行物体を失探したとグロリエに報告が齎されるのは、それから二時間後。

それはパラティオン要塞に重傷を負った騎兵と騎竜が降り立ち、その騎兵が持っていた写真機の写真が現像されて要塞司令部に提出されたのとほぼ同時だった。

奇しくも、皇国と帝国は数分と時を違えずに“決戦近し”ということを認識した。

偵察騎が持ち帰った写真は要塞司令部で分析を受け、すぐにその正体が発覚した。

数名の幕僚を伴い、提出された報告書を手に、ガラハは戦闘指揮で疲れきった身体を引き摺ってレクティファールの執務室へと向かう。

衛兵の誰何を受け、身分証を提示して執務室のある区画へと入る。

余計な口出しをされては困るという幕僚の意見を容れて司令施設とは少し離れた場所に摂政の執務室を作ったのだが、あの摂政の態度を見る限り意思の疎通を不便にしたという負の結果しか感じられない。

さらに言うなら、この疲れているときに階段を何回も昇ることは彼の怒りを駆り立てる原因にしかならなかった。次に摂政が要塞に居座ることになったら、今度はもう少し近くに執務室を作ってやると決意し、彼はようやく辿り着いた摂政執務室の扉を叩いた。

僅かの間。

しかし、すぐに彼のよく知る若い女の声が入室を許可した。

扉を開け、数歩部屋に入ったところで背後の幕僚が扉を閉めた。

「夜分遅く失礼いたします、摂政殿下」

敬礼を送り、答礼を待つ。

「ご苦労」

答礼を受け、ガラハはレクティファールの下へと進む。

レクティファールはガラハの背後に立つ参謀たちの姿を認めると、「ついて来い」と一言告げて執務室の一角にある会議用の大机に移動した。

上座に座ったレクティファールとその背後に立つリーデ。

対面に回ったガラハは参謀の一人にパラティオンから帝国領『ウィルマグス』まで記した地図を大机に広げるよう指示した。

彼自身は頭を垂れながら、先の偵察騎の齎した報告書をレクティファールに差し出す。

それをリーデが受け取り、封筒から取り出すとレクティファールに手渡した。

「――――列車砲……攻城砲か」

レクティファールはその報告書に添付された写真を一瞥すると、すぐにそう呟いた。

ガラハは内心驚く。軍事的には一般人より少々優る程度の知識しかないと聞いていた摂政が、その正体を一瞬で看破したことにだ。

皇太子となる前の経歴は不明だが、もしかすると同業者だったのではないかとさえ思った。人伝に聞いた評価などあてにならないものはないとも実感した。

「ご賢察の通りにございます殿下」

「ならば前置きはよい。これはどの程度の脅威だ」

ガラハは自分がこの執務室に直接訪れた理由を、レクティファールがほぼ正確に推察していると感じた。

話が早くて助かる――――内心笑みを浮かべ、ガラハは机上の地図の一点を軍司令官に与えられている指揮杖で指し示す。

「この攻城砲が確認された地点はここ――――帝国の要塞都市『ウィルマグス』の近郊。この写真を撮った者の報告を信じるのならば、砲身はこの要塞に向けて固定されています。おそらく旋回砲塔とす

るには巨大過ぎたのでしょう。写真を分析する限り、この砲に回転台はありません」

「――――予想される威力は如何程だ」

ガラハは報告書の一枚をレクティファールに示した。そこには要塞防衛軍の砲術士官数名と砲戦参謀がまとめた分析結果が記されている。

「砲身長、口径を周辺物との比較で計算、さらに構造から使用炸薬量を推量しました。結果を述べるのならば、我が要塞の持つ対物障壁を貫き、要塞そのものに打撃を与えることが可能かと思われます」

レクティファールは背凭れに大きく背中を預け、仰け反るように天井を見た。

リーデがちらりとレクティファールを見たが、その瞳はじっと観察する以上の色を見せていない。

「伊達に何百年もパラティオンに血を支払っていないということか……」

レクティファールは天井を見上げたまま独りごちた。

パラティオン要塞の持つ対物理防御能力を正確に把握している帝国だからこそ、あれ程馬鹿げた兵器を実用化したのだろう。通用すると確信出来ないままに建造出来るほど小さいものではない。

さて、どうするべきか――――レクティファールは思考を巡らせる。

「――――殿下」

「ん、済まない」

思考に沈み込んだレクティファールを引き上げたのはリーデの声だった。

僅かな時間とはいえ、自分の世界に没頭してしまったことを謝るレクティファール。

ガラハたちを正面に見据え、威儀を正す。

「策は？」

レクティファールは問う。

ガラハは背後の参謀の一人に目配せする。その参謀が地図に一本の線を書き込んだ。

天嶮白狼山脈を越える一本の線を。

「――――なるほど」

記された線を認め、レクティファールは頷く。

その一本の線で総てを察したらしいレクティファールの仕草に、ガラハは微笑んだ。本当に話が早い、油断するとこちらの思考総てを読まれてしまうような錯覚さえある。

「殿下は軍人としてもやっていけますな。まるで驚かれることを知らぬようです」

「何、故郷の偉人が何人か同じような策を過去に行っているだけだ。目新しければ驚く」

「ほう、是非その将の名を伺いたいものですな。小官の記憶にはない」

その言葉にレクティファールは少しだけ目を伏せた。その態度を見たガラハが訝しげに目を細めると、すぐに不敵な笑みを見せた。

一瞬だけ浮かんだ表情を糊塗するかのような笑顔だった。

「――――名前は忘れたよ、すまないな」

その言葉に答えようと口を開いたガラハだが、結局言葉にならない音が漏れただけだった。

レクティファールの瞳が、微かに龍の瞳に見えた。その瞳がガラハの舌を凍り付かせたのだ。

いや、ガラハの心の何処かがそう見せかけただけなのかもしれない。ここから先に踏み込むべきではないと。

「――――――――――――いえ、小官も忘れているだけかもしれません」

ガラハは退いた。

別段恐怖が勝ったという訳ではない。ただ、ここで論じるべきことではないと思い直しただけだ。

「ですが、この策には大きな問題が一つございます。殿下にこうして御目通りを願ったのはその解決のため……」

レクティファールは再び首肯した。

ガラハの存念は理解している。

静かに、感情を感じさせない声でレクティファールは言う。

「白狼山脈を越える。それすなわち、我が皇国が帝国領へと侵攻するということ――――帝国建国以来、一度足りとも帝国を侵さなかった我が国が初めて帝国に直接刃を叩き付ける」

帝国は皇国を侮り切っている。

建国以来一度も領土を侵されなかったから、紛争の結果として領土の割譲を求められなかったから。

しかし、その油断をレクティファールは突く。

「良い、むしろ先代皇王陛下が我々に残してくれた千載一遇の好機と私は考える」

帝国の国民は皇国が自分たちの国土を侵すなど考えてもいないだろう。

その危険性が十分以上にあるにも関わらず、生まれたときから一度も侵されてないというだけで。

しかし、寿命の短い人間種の国家では、皇国にとってほんの少し

だけ昔という数百年の時間は歴史という名に変わる。

皇国が我が帝国に侵攻しないのは歴史が証明している、と彼らは思っているだろう。

実に、拙い国防政策だ。というよりも、攻撃に偏重し過ぎていると言うべきか。

「彼らは我らを甘く見過ぎた。いや、嘗ての帝国を夢想し始めた時点で彼らの目は曇ったということだろう」

広大な国土、強大な軍事力、それらが帝国を支えてきた。そして、成長させてきた。

それを否定することはレクティファールにも出来ない。

だが、一度レクティファールの治める皇国に血を払わせた時点で帝国は――――

「敵」

レクティファールという男は基本的に敵以外の存在に対して甘い。

味方であれば、そして守るべき対象であれば自分の総てを懸けて守る覚悟がある。

「吾はアルトデステニア皇国摂政レクティファール。吾が宿命はこの国家を守ること、この国の民を安寧の内に看取ること、子らが成長し、男が田畑を耕し、女が子を育て、老いし者が笑顔で死ねる国をこの世に造るが役割」

国家を守る。それくらいしなくては、守りたいあの女性(ひと)たちは笑顔を見せてくれないだろう。

小さな男だと笑われてもいい、手軽な喜びだと笑うなら笑え、だが、守ることとはそういうことだろう。

彼女たちが笑っている光景を思うだけで、この世界に屍山血河を創ることさえ容易い。

「私はもう諦めている。この身は個に非ず、国であると。なれば諸君らも諦めよ、その身は個ではなく、この皇国の盾であり剣であると」

血で贖う平和は虚しいと人は言う。

ならば、血で贖わない平和とは何だ。

レクティファールは血を代価に作られた平和しか知らない。

平和の礎は、常に血ではないか。

それ以外の何かがあるというのなら、それを教えてくれ。

「私は自分のために自分の守りたいものを守るぞ。帝国が自分たちのために戦っているように、私も自分のために戦う。それを厭うならば、即刻ここで職を辞せ。私が直接辞表を受け取ってやる」

レクティファールはそう言ってガラハとその幕僚たちを睥睨した。

これがレクティファールの本来の性格といえるのか、定かではない。だが、この男の一側面であることは確かだ。

彼は元世界で味方を作らなかった、作れなかった。

だから、この世界で自分の傍らに立ってくれた彼女たちを無条件に愛している。

その愛が一方的なものであると理解して尚、その愛が狂気よりも狂っていると理解して尚、守りたいものを守り抜きたいと願う故に。

「私は私の守るべきものを侵すあらゆるものを許さん」

これだけは、決して諦められない最後の一線。

他をどれだけ諦めても、諦めることを諦めても、これだけは諦める訳にはいかない。諦めることが出来なくなった。

あの温かい女性たちを守るため、そして、あの女性たちが守りたいと願うものを守るため。

レクティファールにとって、国家さえもが総て手段。

国家を守ることもあの女性たちを守る手段、あの女性たちを守ることも自分の意地を満たすための手段、目的とはただ一つ。

あの女性たちを守りたいと思う自分の欲望を満たすこと。

レクティファールはあの骸夥しいミラ平原でそう思い始めた。

あの蛆虫で嘲笑を浮かべた骸を見て、そしてここに来る途中の街で、メリエラとウィリィアの笑顔を見て確信した。

「帝国の増長、この辺りで叩き折る。私の命が必要ならば命を下そう」

レクティファールは大机の前に座るガラハと、その背後に整列する幕僚たちに向けて言い放った。

「帝国軍を討て」

――――『帝国軍討つべし』――――

そんな摂政令が要塞防衛軍を、ひいては皇国軍全体に響き渡った。

先代皇王の温和な対外政策とは一転して苛烈な命令。

戸惑う者も確かにいた。

だが、皇国中枢に向かうにつれその数は減った。

皇国の中枢を担う者たちは摂政の選択に確かな理があると感じ、それを受け容れた。

皇国は弱体化している。ここで少しでも退く素振りを見せれば、帝国はこれ幸いと皇国への攻勢を強めるだろう。

一度や二度なら皇国はそれを退けることも出来る。だが、三度四度と繰り返されるだろうその攻勢を弱った皇国が受け止めきれるか、考えるまでもない、間違いなく不可能だ。

今皇国に必要なのは傷を癒す時間、その時間を手に入れるには、血の代価を支払う必要があった。

摂政レクティファールが下した決断は、その血の代価を支払うこ

と。

帝国と皇国の民をその決断で殺し、その血で以て時間を買うこと。

そして皇国軍は、自らが主として戴いた青年の決断を現実のものとするべく動き始めた。

次々と舞い込んでくる書類を決裁し、レクティファールは一日を過ごすようになった。

皇国は他国への侵攻を放棄している訳ではなかった。だが、先代皇王が慈愛と融和で他国との共存を目指したこともあり、ここ四〇〇年ほどは他国の領土を侵していない。

人間種であれば歴史の彼方となるような時間だが、皇国の長命種族にとっては久しぶりという程度でしかない。軍はすぐに摂政の命令に対応し、パラティオンへ増援部隊を向ける準備を整えつつあった。

だが、偵察騎が齎した情報から、帝国の巨大攻城砲が発射間近で

あるということは分かっている。

増援部隊の編成を待っている余裕はない。

念のために増援部隊の派遣は中止しないが、しかし今回の作戦にはすでにパラティオンにいる軍のみを使うことが決定された。この決定は皇国軍上層部というよりも、実際の作戦指揮を摂政より託されたガラハの意思によるものだった。

彼はこれまでの経験から時間こそがこの作戦の最大の敵であると感じており、摂政に許可を仰いだ上で敢えて帝国軍に比べて圧倒的寡兵である要塞防衛軍のみを使うと決断した。

摂政令からガラハの決断まで僅か二日だった。

「ガラハ、何か私に願うことがあるのではないか」

レクティファールは打ち合わせのために自らの公室に訪れたガラハに対し、そう切り出した。

今日は白龍の姫君とその従者が近衛として部屋におり、ガラハはその部屋の中で話を切り出されたことに若干の怒りを感じた。

ガラハの願いは、彼女たちにとってとてもじゃないが愉快なことではない。ここで口に出せば、間違いなく彼女たちの機嫌は損なわれ、ガラハに視線の刃を突き付けるだろう。

しかし、レクティファールから話題を与えられた以上、無視する

ことは出来なかった。

ガラハは姫君たちの不機嫌が摂政自身に向かうことを願いつつ、重い口を開く。

「はい、帝国巨大攻城砲破壊作戦の際、私は白狼越えの軍の指揮を執りたいと考えております。しかし、それではパラティオンが手薄になり、帝国側に我が軍の動きを察知されることにもなりかねません」

白狼山脈を越えるために山脈内を無数に走る渓谷を進むことになるのだが、その分時間は掛かる。山脈に住む先住たちの助けを借りられたとしても丸二日は掛かるだろう。

その間、要塞にガラハがいないと帝国側に感付かれることは避けたい。

帝国軍が良将ガラハを恐れているからこそ、帝国軍の攻撃があの程度で済んでいるという面もある。帝国軍は摂政レクティアファールの持つ“皇剣”は恐れていても、レクティアファール自身はそれ程脅威とは思っていないだろう。

だが、帝国側がガラハたち白狼越えの軍に気付くことはどうしても避けたい。

同時にレクティファールの命令で二〇〇〇〇もの兵力がそちらに回されることになったが、それでは要塞の守備に穴が出来る。その穴に気付かれてしまえば、パラティオンは大打撃を被るだろう。

それを避けるためには、一つ策を講じなくてはならない。

「殿下に要塞前に陣を敷いてもらい。そこに帝国軍を引き付けて頂きとうございます」

摂政を囮にして、攻撃を引き付ける。

その策にレクティファールは笑い、メリエラたちは気色ばんだ。

「閣下！　それは摂政殿下をいたずらに死地に追い込む策です！閣下のお言葉は臣下としてのものではありません！」

メリエラが吼える。

瞳を龍眼へと変じさせながらの怒声は、空気を震わせ人の肺腑に良く響いた。

レクティファールでさえも、僅かに腰が引けた程だ。

「しかし、他に策はない。援軍を待てば要塞は敵攻城砲の威力の前に瓦礫と化すだろう。あの威力に耐えうる術式に切り替えるには少なくとも四半年は掛かる。現状最も効果的かつ即効性のある策は、これしかない」

ガラハが要塞に残るという作戦も立てられたが、それでは帝国の要塞都市『ウィルマグス』を陥とすことは難しいのではないかと考えられた。これはガラハの戦術家としての能力を評価してのことであるが、現実的に考えればそれはそれで納得できることだ。

要塞の守りを考えれば、白狼越えは二〇〇〇〇程度の兵しか回せない。

しかし、並の将ではたった二〇〇〇〇の兵で要塞都市を陥落させるなど出来る訳がない。

この作戦に参加出来る将の中でもっとも優れた能力を持つ者を作戦担当者に充てる、作戦成功率を引き上げるためにも至極当たり前のことだ。

「良い、中将の好きにせよ。戦の差配は任せたのだ、その中で必要だというのなら、私が帝国軍を引き付ける囮になろう」

「レクト！！」

あまりにも自分の身を軽く見過ぎているレクティファールにメリエラが怒鳴る。

完全にお互いの立場を忘れたその怒声に、密かにガラハは笑みを零した。何とも愛されている青年だと。

「レクト……もとい殿下に何かあったら要塞どころの話ではありません！　危険に身を晒すことは皇王の義務ではなく、貴族の義務です！」

「それは、まあ、その通りなんだが……」

レクティファールはしどろもどろになって言い訳する。

これまでの態度を脱ぎ捨てた腰の低さだ。辛うじて口調は維持しているが、目が泳ぎまくっている。

「良いですか！？　殿下はそもそも摂政としての自覚が足りないのです！　ここに軍を率いてきたことは良しとしましょう。しかし帝国の姫と一対一で会談し、今度は帝国軍に対する囮になる？　殿下は殿下の下にいる国民をどうお考えなのですか！？　いえそれだけではありません！　殿下は遠からず皇王となってこの国家を背負うことになるのですよ！　軍を率いて戦うなど将の職分、皇の職分ではありません！　皇とは将を信じて用いることが役目、皇が将の真似事をして良い結果になったとして、それを後世に教訓として遺すお積もりですか！？　もしもそうだというのなら甚だしい勘違いです！　負の遺産です！　皇として臆病であれとは言いませんが、蛮勇と勇猛を履き違えたような行動は謹んで下さい！　そもそも殿下の役目は国家を守ることであって一個の要塞を守ることではないでしょう！？　確かにパラティオンが抜かれれば皇国本土に帝国軍が押し寄せることは必定、避けなくてはなりません。しかし殿下ご自身が前線に立つ必要はありません。いいですか、摂政とは――――」

怒涛の勢いだった。

反論する暇さえ与えられず、帝国で開発された機関砲のように連続で発射される言葉の弾丸。レクティファールは何とか反論の緒を見付けようとしたが、元来持っているメリエラへの苦手意識に阻害されてどうしても見付けられない。

いつの間にかメリエラの顔がどんどん近付いてきて、すでに接吻を交わすことさえ可能な距離になっている。

このままでは不味いと考え、誰かに助けてもらおうと部屋を見渡すレクティファール。

しかし、別の誰かと言っても、ウィリィアはメリエラの言葉にいちいち頷きながらそろそろとその背後に移動しており、まるで説教の順番待ちといった感がある。いや、多分、絶対その通りなのだろう。その目は出来の悪い弟を叱る姉の目だった。

ではリーデに、と背後を振り返るが既に誰もいない。

何処へ行ったと探してみると、公室の応接区画でソファに座ったガラハにお茶とお茶請けを出していた。

ガラハはメリエラに対する説得をレクティファールに丸投げする腹積もりのようで、こちらにちらりと目を向けるとにやりと笑った。笑いやがった。

畜生てめぇ逃げやがったな、とガラハを睨むレクティファール。

温和な彼でも流石にこの裏切りは許せなかったらしい。

しかし、そのガラハにお茶を出していたリーデが彼に一礼し、そろりそろりとウィリィアの後ろに立つのを認めるとレクティファールは瞠目した。

お説教要員が増えた。

何故、どうしてと思うレクティファール。

「殿下！　聞いてますか！？」

しかし、そんなレクティファールをメリエラは逃がさない。

リーデと言えば涼しい顔でレクティファールを見ており、諫言するのは参謀として当たり前のことですと言わんばかりの態度だ。

ああ、味方はいないのかと部屋を見渡すレクティファール。

しかし、現実は非常に厳しい。

彼は逃げることも出来ず、嵐のような説教に耐えるしかなかった。

結論から言おう。

レクティファールは深夜まで及んだお説教に耐え抜き、根負けした三名から前線に立つ権利をもぎ取った。

しかしその条件として三名を自らの陣に置くことを認めさせられた。

敢えて勝ちか負けかで言えば、限りなく勝利に近い引き分けと言えるだろう。

この結果が次なる戦いでどのような結果を齎すか、今の彼らに知る術はない。

第二二話「皇国軍始動」（後書き）

こういう戦いの準備の回って、好きな人と嫌いな人が別れると思う。

まあ、こういう下準備がないと次の話を書けない人もいるということで一つご容赦願いたいです。

しかし、短いな今回の話……

閑話ノ壱「女たちの戦場」

明るい光の中で、彼は優しく微笑んでいた。

少女の総てを受け容れるように、少女の背負う重荷を受け容れるかのように。

他の誰にも出来ない、彼だけの笑顔。

この国で生まれ、この国で育ち、少女を知る者には決して浮かべることが出来ないその表情に、彼女は惹かれた。

知らぬ故に少女自身を見詰め、理解出来ぬが故に少女自身を理解しようとするその姿に心打たれた。

役目を果たし、彼の内なる世界で揺蕩う彼女を呼び起こした声。

久しく聞いていなかった名前。

姉以外の誰もが口にしなかった彼女の名を、彼は呼んでくれた。

あの声を聞き、自分は自分なのだと思えた。

抱き上げられ、自分は此処にいてもいいのだと思えた。

リリシア、と。あの人に呼んでもらえるのなら、他に何もいらない。

巫女姫の肩書きさえ、彼の隣に侍る道具に過ぎないのだから――

――

皇都イクシード。

当代皇王とその支持貴族によって戦火に晒された皇国最大の都市は、新たな皇国の主である一人の青年の出現によって再びその栄華を取り戻そうとしていた。

都市外へと疎開していた住民たちが我が家へと帰り、鎧戸を固く閉じていた商店は次々と店を開く。学校や公園には子供たちのはしゃぐ声が蘇り、路面電車や乗合馬車、乗合魔動車には明るい表情の住民たちの姿があった。

住民や商店を相手にする卸業者の隊商もまた皇都へと舞い戻り、市場は多くの人々で賑わっている。呼び込みや値段交渉の声は幾重にも重なり、市場に店を開くとある屋台の商店主は、懐かしささえ感じるその喧騒に目尻を濡らした。

そんな彼の屋台に、真昼間から酒を楽しむ二人の男がいた。

「皇太子殿下は北に向かわれたそうだのう……」

「んだ。帝国のグロ――何とかとかいうお姫様が軍隊を引き連れて攻めてきたらしい」

「おうおう、おっかねぇなぁ。そういや、うちの婿の実家が確か北の方での、向こうの旦那が今年は雪が早いとか言っておったわ」

「んだら、皇太子さまのお帰りも早いかもしれんな」

「だと良いのう。お城には巫女姫さましかおらんで、さぞ寂しかろう」

「大層めんこい子じゃったに、皇太子さまもさぞかし向こうで心配しとるじゃろ」

「そりゃそうだ」

呵々と笑い、祝の酒を交わす二人。彼らは今朝方皇都に荷物を届けに来た商会の人間だった。

大分老いを重ねた彼らにしてみれば、皇太子も巫女姫も孫と言っていい程の年齢だ。皇太子に対する忠誠心も巫女姫に対する崇敬もあるが、まず彼らに対して抱くのは若い雛鳥に向ける愛情。見ていて思わず微笑んでしまうようなそれだ。

出来るならば、雛たちには健やかに過ごして貰いたいと思う。

この皇都を襲った未曾有の惨禍に終止符を打ち、今また外からの脅威に立ち向かっている皇太子。

その皇太子を支える宿命を負い、ただ一人広大な皇城に残された巫女姫。

人々は、彼ら自身が思っているよりも彼らのことを想っていた。

幸せな夢だった。

今は遠く北の大地にいるあの人が、自分の隣にいる夢。

だからだろう、目が覚めたときに酷く虚しい気持ちになったのは。

隣に誰もおらず、目を開けてもただ窓掛けが朝日に揺れるばかり。

清々しいまでの青空さえ、憎く見えた。

「――――起きよう……」

上半身を起こし、ともすれば沈み込む思考を晴らそうと、少し強く頭を振る。

さらさらとした薄絹の夜着が肌に擦れた。身体を締め付ける下着は安眠に良くない、と神殿付きの女官に教えられて以来、就寝時には下着を着けなくなった。それから大分経つから、鋭敏な素肌を夜着が擦るのも慣れた感触だ。

肩からずり落ちた夜着を整えることもせず、彼女は寝台の上に座り込む。

透けるように白い肌と艶やかな翡翠の髪、そして身に纏う衣は薄い夜着だけという非現実的なまでに扇情的な姿は、間違いなく世の男どもが夢想して已まない理想の女の姿。それが今年十四になったばかりの少女が現実のものとしているとは、彼らとて想像出来ないだろう。

だが、少女自身がそうあろうとしている訳ではない。

彼女は、彼女が心の底から想うたった一人の男のためにこの姿を

手に入れた。彼女にとって最も大切なことはその男であり、自身の容姿など所詮副次的なものだった。

美しく在りたいという気持ちはある。

しかしその願いは人から『美しくあるべき』と教えられたからこそで、当然、彼女が自ら見付けた願望ではなかった。

彼女が本当の意味で自分の容姿に気を配るようになったのは、やはりあの青年に心惹かれるようになってからだろう。

雪のような素肌に布の痕がつかないようにと夜着を選び、それこそ件の青年以外の異性に見せることはないであろう身体の隅々にまで目を配る日々。神殿にいた頃から付いてくれている女官など、少女のそんな姿に「あらあら」と笑みを浮かべたほどだ。

元々の資質もあったのだろうが、今の少女は絵画に残しても誰一人異論を唱えることが出来ないほど美しくなった。

未成熟であるが故に滲み出る艶。

熟れきった者にも、成熟の途上にある者にもない独特の艶気は、密かに後宮の職員たちの間で噂になっていた。

「あんなにも可憐な巫女姫様を娶られる摂政殿下は大陸一の果報者」

そう後宮の者たちが評するのも無理はない。

少なくとも今の少女は、皇都近くの離宮にいるもう一人の女性――――美しく在ることこそが存在意義の『蕾の姫』に匹敵するだけの麗姿を持っているのだから。

「レクティファール様は、今何をしていらっしゃるのでしょう」

そんな彼女だが、浮かぶ表情は憂いを多分に秘めたものだった。

コンコンと部屋に響いた軽いノックの音に振り返る最中も、その憂いが消えることはない。

そして、どうぞ、とノックの主を招き入れるその声もまた、何処と無く沈んでいた。

「失礼します、猊下」

音も立てずに扉を開け、一つお辞儀をした女官。重厚そうな扉だが、閉める音もなかった。

「メチェリ、おはよう」

「おはようございます、お目覚めでしたか」

メチェリと呼ばれた女官は、隙のない所作で少女――――リリシアの座る寝台へと歩み寄る。

深い紫の髪を頭頂部で一纏めにし、端正な顔立ちの彼女であるが、何よりも一番人の目を引くのはその鋭い眼だろう。まるで抜き身の刃のようと評されるその眼は、今は主人であるリリシアをじっと見詰めていた。

「いい夢を見ていたのだけど、やっぱり夢は夢だった。起きたら少し寂しくなってしまったの」

「良い夢ほど現実との落差に虚しさを覚えるものです。――――おそらく、これから幾度も同じ経験をなさるでしょう」

「ええ、きっとそうでしょうね」

リリシアはうっすらと笑んだ。

空虚と言う他ないその顔は、メチェリの眉をぴくりと跳ね上げた。

「猊下……」

呼んではみたものの、続ける言葉が無いメチェリ。

彼女は後宮を守る皇族最後の盾――――『機甲乙女騎士団』の一員として多くの妃を見てきたが、これほど若い第一妃候補は初めてだった。それどころか、未だ皇太子と正式に婚儀を行っていない妃“候補”を迎えたことも初めての経験で、リリシアとどのように接するべきか悩む部分も未だ多い。

メチェリの懊悩を悟ったか、リリシアは小さく微笑んで言った。

「沐浴の準備をお願い」

「――――は」

両手を揃え、頭を垂れるメチェリ。

近衛軍大尉としてリリシア付き侍女頭を任されて以来、彼女はずっと悩み続けていた。

この少女の笑顔が、どうしても泣き顔に見えたから。

沐浴を済ませたリリシアは、朝食までの時間を中庭にある大聖堂で過ごしていた。

後宮の中心にある中庭は広く、そこに点在する庭園では多くの樹木草花が皇妃たちの目を楽しませてくれる。

石造りの遺跡庭園もあれば、イズモ様式の枯山水もあり、さらには南国の気候を再現した温室もある。中庭の中央近くの湖には多くの野鳥が訪れ、さらには庭園で放し飼いにされている鳥たちも季節折々の姿を見せてくれた。

しかし、そんな優美な印象とは裏腹に、後宮とはただ皇王とその妃が暮らす施設ではない。皇王と皇族を守る最後の砦だ。その証拠に、この後宮で働く二〇〇〇人の侍女女官は総て、近衛軍の軍人、『機甲乙女騎士団』の団員だった。

洗濯物を洗う侍女、後宮内を掃除する女官、庭師たちでさえも『機甲乙女騎士団』の一員。

彼女たちはいずれも男を知らず、騎士団のその名の通り“乙女”としてこの後宮で働き続けている。

近衛軍部隊で最も平均年齢が低い所以、それは男を知り、その名を“乙女”から“女”へと変えた女性はこの騎士団から別部隊へと異動になるからだ。

近衛軍は個人の恋愛に口を出さないが、結婚せずとも“女”となれば『機甲乙女騎士団』に所属することは出来なくなる。それは後

宮にいるべき男が皇王と、女皇の配偶者のみで、彼らの手が付いた場合を考慮してのことだった。

女皇の配偶者の手が付いた場合、それは問題にはならない。生まれてくる子供には皇族としての資格は当然無く、ただの私生児に過ぎない。

だが、皇王の手が付いた場合はどうなるか。

これは言うまでもなく、皇族名簿に記載される立場となる。無論、母親の意向によっては名簿に記載されること無く生涯を閉じることになるだろう、だが、母親である団員が皇妃となれば子供は準皇族となり、有力な貴族に養子として出される場合も考えられる。

そんなとき、父親が皇王でないと発覚したらどうなるか。

これまでも皇王の手が付き皇妃や側妃となった団員は存在した。それらの産んだ子供たちは貴族や有力な名家の養子となっており、万が一父親が別に存在するとなれば、間違いなく皇王家の権威は大きく傷付くことになる。

いや、実はこれまでの歴史でそのような事例が一度だけ存在した。

当時は『機甲乙女騎士団』が存在せず、近衛軍の女性のみの部隊が後宮の警護役だった。

ときの皇王はその中の一人を見初め、召し上げた。

皇王の手が付いた時点では、確かにその団員は男を知らず、近衛軍を統括する皇王府もまた、皇王の意向に沿って彼女の皇妃入りを

認めたのだ。

彼女はやがて皇王の子供を身篭り、出産。

しかし、その後の検査にてとんでもない事態が発生した。

皇妃の産んだ子が、皇王の子ではないと発覚。

皇国の象徴たるべき皇妃の一人が、あろうことか他の男と姦通していた――――皇王府も政府も、他の皇族も大いに揺れた。

議会は荒れ、流れた噂によって国民も動揺した。

何よりも、皇王自身が心に多大な衝撃を受け、床に伏せてしまった。

皇妃は後宮から離宮へと移され、蟄居。

皇妃の元上司である近衛軍総司令官は責任を取って辞任し、その数日後、自宅で自刃。皇妃の実家も夜逃げ同然に国を出奔し、この事件は皇国史上最悪のスキャンダルとなってしまった。

皇王府と近衛軍の捜査によって明かされた真実は、大して珍しくも無いことだった。

皇妃となった女性には、幼馴染の許嫁がいたのだ。

幼少の頃に結婚の約束を交わしており、それは両家も承知の上。

ある家具職人の弟子になっていた男が社会的に自立したら、正式

に夫婦となる予定であった。

しかし、近衛軍に属していた女は皇王に見初められ、流されるままその愛を受けてしまった。

それだけであればただ手が付いただけ、女が身を引けば大きな問題にはならなかった筈だ。だが、女の実家が欲を出してしまった。皇王から娘の皇妃入りを求められた際、それを受けてしまったのだ。

女は悲しみを押し殺し、家のため後宮へと上った。

だが、悲しみは癒えることなく、彼女は独り立ちし、一人前の家具職人となっていた幼馴染に家具を頼みたいと言い。当時は皇王の許可さえあれば一部の部外者も立ち入ることが出来た後宮内へと彼を招き入れた。

元近衛軍の女には、後宮内の警備の穴を突くことなど難しいことではなかった。

彼女は幼馴染と、後宮内で密通した。

幾度も、幾度も、新しい家具を作りたいと、少し家具に手を入れたいと言い。男を招いた。

おそらく、彼女と幼馴染の密通に気付いていた近衛軍の軍人もいただろう。

だが、彼女の境遇に同情した元同僚たちは、その密通を上司に報告することも、止めることもしなかった。

そして、あの後宮史上最悪の事件が起きた。

事件後、すぐに近衛軍は『機甲乙女騎士団』を設立。所属団員の厳正な選抜と厳格な服務規程を定め、このような事件が二度と発生しないよう現在の後宮の形へと制度を切り替えた。

例外なく、一切の部外者の立ち入りを禁止。

皇妃たちには専属の護衛隊を付け、いかなる状況下であっても傍を離れることがない警備体制を作り上げた。これは皇妃自身が望んでも覆らない。

実際、リリシアが就寝している隣の部屋には、常時一個分隊の護衛が待機しており、彼女の行動を監視し続けていた。

このとき、リリシアが礼拝を行っている最中も、護衛隊は大聖堂の中に散らばり己の職務を果たしていたのだ。

「――――侍女大尉殿、本日の予定のことなのですが……」

礼拝堂の入口近くに立ち、礼拝の為祭壇の前で跪くリリシアの姿を視界の端に捉えていたメチェリの下に一人の部下が駆け寄ってきた。メチェリと同じく侍女服姿だが、襟元の階級章は准尉のものだった。

「どうした、何か変更か？」

「は、実は――――」

メチェリの耳に口を寄せ、囁く准尉。

その言葉を聞いたメチェリの目は大きく見開かれ、表情は強張った。

「まさか、パールフェル妃殿下が……」

「どうなさいますか？　司令部からは猊下の意向を是とせよとの命令が届いておりますが……」

准尉の問いに、メチェリは疲れたように頭を振った。

「ならば、猊下に直接伺うしかあるまい。――――今上陛下の第一妃、パールフェル殿下がお会いしたいと仰っていると」

リリシアの答えは是だった。

今上皇王は公的に未だ皇王である。

ならばその妃は後宮を退いても皇王第一妃であり、未だ正式な皇妃ではないリリシアにその誘いを断ることは出来ない。

ただ、パールフェルの誘いよりも前に決められていた予定に関しては、これを優先することにした。

予定とは今回の騒乱で傷付いた国民の慰撫であり、都市外に建設された難民避難施設の慰問を行ったり、神殿の運営する病院などに足を運んで入院患者を見舞うことだった。

これをパールフェル側に打診すると、これを承諾するとの返事が返ってきた。

すでに国民からの敬意を受けるには汚れ過ぎているパールフェルだが、国民の象徴である皇妃としての役割は未だ果たす積もりでいるらしい。

パールフェル自身は今回の騒動で何らかの罪を犯してはいないが、実家グリマルディ侯爵家が事実上の取り潰しとなった現在、皇妃としての実権など何一つ持ってはいないのだ。

それでも皇妃としての毅然とした振る舞いを忘れないパールフェルに、リリシアは密かに憧憬の念を抱いた。

自分があのように振る舞える日はいつになるだろうか。そんなことを考えた。

難民の避難施設に着いたリリシアはまず、一緒に運んできた支援物資の配布から始めた。

これは皇王府が用意したものだったが、リリシアが運び、そして配布することで、国民の意識に「リリシア“皇妃”は自分たちの味方」という印象を植え付けるための策だった。

民を騙すようだとリリシアは思ったが、それで幸せを得る民が過半を占めるならやるべきだとも思った。

総てを救うほどの力はない。

なら、救えるだけの人々は救うべきだ。リリシアはそう決断した。

そういう意味では、レクティファールよりもリリシアの方が余程政治的判断を行えるのかもしれない。

政治は民のためにある。

リリシアの趣味嗜好や矜持のためにあるのではないのだ。

「おお……お妃様……」

「皇太子様といい、此度の皇族様方は慈悲深い方ばかりじゃ……」

今朝焼いたばかりのパンを配り歩くリリシアの手を握り締め、涙さえ流す老夫婦。

夫は車椅子に乗ったまま幾度もえずき、妻は歩くための杖を地面に放り出してリリシアの前に膝を付いていた。

「お二人とも、これまで大きな苦労を掛けました。以後、皆様の安寧はわたしと、摂政殿下が保証いたします」

「リリシア様……ありがとうございます……！」

「皇太子様の御武運、この老骨たちにも祈らせて下さい……」

「ありがとうございます。殿下はきっと、皆様のお心を剣鎧として勝ちましょう」

優しく微笑むリリシア。

老夫婦だけではない、周囲の人々さえ彼女の言葉に声を詰まらせた。

今上皇王によって大きな傷を受けた人々。

彼らは皇王家に対して不信感を抱きながらも、同時に皇王家を信じたいという願望を抱いていた。

二〇〇〇年の間に人々の間に芽生えた皇王家への崇敬の念は、一度の裏切りで消えるものではない。

裏切られても、それでも信じたいと願う人々の心を、リリシアは感じた。

「皆様――――」

だから、彼女はもう一度自分たちを信じて欲しいと言うつもりだった。

しかし、その言葉は突然の怒声に掻き消された。

「この裏切り者……！」

一人の若い女性が、真っ赤に血走った目でリリシアを睨みながら叫び、人垣を割って現れた。

リリシアの周囲にいた人々は口々に女性の不敬を詰ったが、当のリリシアがそれを制した。

「――――……」

「反論しないの？　やっぱり裏切り者なのね！　あんたたちは！」

女性はぱさついた赤茶色の髪を振り乱し、リリシアの襟元を掴んだ。

護衛のメチェリ以下数名が侍女服の中に隠し持っていた短剣を抜こうとしたが、リリシアの咎めるような眼差しによって動きを止める。

「遅すぎるのよ！　あんたたちがあと三日早ければ、あの子は死なずに済んだのに！　あの人は殺されずに済んだのに！」

「――――……」

唾を飛ばし、今にもリリシアの喉笛に喰らいつきそうなほど、女性の眼は狂気と悲しみに満ちていた。

リリシアは反論もせず、黙って罵声を受け止める。

「知ってる！？　あの子は優しくて賢くて、いつも私の作るご飯を美味しいって食べてくれたのよ！　あの人はぶっきらぼうだけど真面目で、他の兵士さんたちにも頼りにされていたのよ！」

女性は、皇都守備を担当していた皇国軍兵士の妻だった。

彼女の夫は支持貴族軍が皇都を占拠したあとも傭兵たちの無法を許さずに取り締まり、住人たちの信頼篤い実直な兵士だった。いつか助けが来ると信じ、同僚たちと街を守り続けていた。

だが、そんな兵士は当然傭兵たちに恨まれる。

職務中幾度も暴行を受け、怪我をしない日はなかった。

それでも彼は心配する妻に大丈夫だと告げ、毎日の仕事に向かった。

そして、レクティファールによる皇都奪還の三日前。

彼は自宅へと帰路、傭兵たちに尾行された。

家族を人質に取って彼に立場を知らしめてやろうという傭兵たちの、唾棄すべき策だった。

彼が自宅に辿り着いたとき、扉が開いたことを確認した傭兵たちは一斉に彼の家に踏み込んだ。

多勢に無勢。そう言う他ない。

彼は何人もの傭兵たちに取り押さえられ、家族を人質に取られた。

抵抗は、そこで止んだ。

彼は家族の安全を求めたが、傭兵たちがそれを飲む筈はない。

このとき皇都を支配していたのは彼ら支持貴族軍であり、近衛さえ彼らには手出し出来なかった。

傭兵たちは下卑た笑い声を上げながら、彼の前で妻を陵辱した。

やめてくれと叫ぶ彼の言葉にも、やめてという妻の悲鳴にも、泣き叫ぶ子供の声にも耳を貸さず、傭兵たちは幾度も妻の身を穢した。

自分たちこそが支配者であると示すため、都市外を包囲する始原貴族軍の威圧から一時的にせよ逃れるため、彼らは己の欲望だけを晴らした。

そんな悲劇が二時間ほど続いただろうか。

子供を押さえ付けていた傭兵が油断した隙に、子供が拘束から抜け出した。

子供は助けを呼ぼうと家の外に飛び出し――――

「私の目の前で、傭兵に斬り殺されたわ！」

事態の発覚を恐れたのか、それとも急変した事態に動揺しただけなのか。

傭兵たちは子供を斬り殺し、それに怒りの声を上げた父親の首を落とした。

「あの人の首は、床に押さえ付けられていた私の目の前まで転がってきたわ！　そして彼の首は私の目を見て、動かなくなった！」

それから三日間、彼女は延々傭兵たちの慰み者にされた。

家族の思い出の詰まった家に監禁され、そこで昼夜を問わず嬲られた。

心が何度も砕けそうになった。

そのたび、傭兵たちへの怒りで持ち堪えた。

いつか復讐してやると思い、必死で耐えた。

「あんたたちが来たのは、あの人の首が腐り始めた頃……！」

突如騒がしくなった皇都。

傭兵たちはこの三日間一度も衣服を身に付けることが出来なかった彼女を放り出し、逃げるように家を飛び出した。

その直後、傭兵たちの悲鳴が聞こえた。

命乞いの声も聞こえた。

しかし、彼女の心は晴れない。

この手で殺してやると思い、陵辱された姿のまま夫の剣を持ち出した。

そして玄関の扉を開けた彼女は、これまで散々自分を穢した傭兵たちの死体と対面した。

一人だけ生き残った傭兵は既に拘束されており、彼女の夫とは違う軍装の兵士たちに連行されるところだった。

彼女は奇声を上げ、その傭兵に斬りかかった。

「でも、殺せなかった！」

彼女はすぐに一人の女性兵士に取り押さえられ、剣を取り上げられた。

殺す、殺すと叫び続ける彼女に対して傭兵たちを屠った兵士たちは沈痛な表情を浮かべ、魔法によって彼女の意識を刈り取った。

次に目覚めたとき、彼女は皇都の病院だった。

家族を失った悲しみと、復讐を果たせなかった虚しさ以外、何も残っていなかった。

「だから私はずっとあんたたちを追い続けた！」

慰問の予定は、慰問先以外に知らされていない。

警備上の問題だが、それは女性にとって不都合以外の何物でも無かった。

リリシアが現れたと聞いてその場に向かっても、既にリリシアの姿はなく。そんなことを何度も繰り返した。

そして今日、ようやくリリシアの慰問の情報を掴み、想いを遂げるためここに現れた。

「これは、あんたたち皇族が招いたこと！　自分たちさえ律することが出来なかったあんたたちが人を支配しようとしたからこんなことになった！」

女性が懐から短剣を取り出す。

きらりと輝く白刃に、リリシアの蒼褪めた顔が映った。

「猊下をお守りせよ！」

メチェリたちが慌ててリリシアから女性を引き剥がそうとする。

しかし、女性の動きの方が僅かに早い。

「報いなのよ！　これはッ！！」

女性は短剣を逆手に構える。

そこに至り、リリシアは女性の真意に気付いた。

彼女は――――

「――ッ！　だめぇえええええええええええええッ！！」

「民の血に塗れ、地獄に堕ちろッ！！」

自分の喉に、短剣を突き刺した。

「ああ……あああ……」

「――――ごぶっ……」

吹き出す鮮血。

女性は血の泡を吐きながら、リリシアの目を睨み続ける。

崩れ落ちそうになる女性の身体をリリシアが支えようとするが、彼女の力では支えきれない。共に地面に倒れ込んだ。

リリシアはメチェリたちが治癒魔法の術式を編んでいることに気付いたが、もう間に合わないと悟る。

既に、女性の目から生気は抜け落ちていた。

ただ、その唇だけが震えるように音を紡いでいる。

リリシアは意を決し、女性の口元に耳を寄せた。

「――――――ちの……あかが……あんたら……には……おにあい……」

「――！」

リリシアの頬を伝った血が、口に入り、錆の味を感じさせる。

他の誰にも聞こえなかったその言葉が、女性の遺言だった。

予定を取りやめようというメチェリたちの言葉に、返り血を浴びたままのリリシアは力無く首を横に振った。

ここで退いては、きっとあの彼女の言う通りになってしまう。そう感じたのだ。

リリシアは急ぎ後宮に戻って着替え、次の予定へと向かう。

その足取りは重く、メチェリたちは護衛以外にも心を砕かねばならなかった。

それでも何とか予定を消化し、ついにパールフェルとの面会に漕ぎ着けた。

だが、その頃にはもう、リリシアの目にあの女性と会うまで確かにあった眩しい輝きはない。

まるで生きる屍のような空虚な瞳で、パールフェルの待つ離宮へと向かうこととなった。

リリシアがパールフェルに抱いた最初の印象は、『儚い』。

パールフェルがリリシアに抱いた最初の印象は、『脆い』。

お互いに疲れ切った表情で、二人は離宮の庭園にて対面した。

「こうして顔を合わせるのは二度目ですね、猊下」

「はい、先日は碌にお話する時間もありませんでしたから……」

パールフェルは喪服である黒衣を纏い、ベールの向こうからリリシアを見詰めてきた。

その瞳に在るのは、ただ諦念と疲労のみ。

他の多くの皇妃が実家へと帰参する中、ただ一人帰る場所もなくレクティファールが用意した離宮へと下がることしか出来なかった彼女にとって、これまでの総てがただ疲れるだけことだったのだろう。

この国で彼女の味方は殆どいない。

いや、総てが敵と言っても過言ではない筈だ。

此度の騒乱の原因は、間違いなく彼女の夫にあるのだから。

「――――今日は、猊下にお伝えしたいことがあってお招きいたしました。ご多忙の中、御足労頂き感謝いたします」

深々と頭を下げるパールフェル。

イズモの血を色濃く受け継いでいるらしい黒髪が、ベールの向こうに見えた。

「こちらこそ、ご挨拶に伺おうと思っていながら、此度の遅参、お許し下さい」

リリシアも謝罪の言葉と共に頭を下げる。

立場としてはリリシアの方が上であるが、パールフェルは皇妃であり、リリシアにとって義母のようなものだ。礼を失する態度は取れない。

パールフェルはリリシアの言葉に苦笑し、テーブルの上に置かれたお茶を勧めた。

「亡き陛下がよくわたくしに送ってくださった茶葉です。向こう見

ずなところもあった陛下ですが、わたしくしたち妃にはお優しい方でした」

「――――頂きます」

そっとお茶を口に運ぶリリシア。

香りも良く、口に含んだお茶から広がる味わいも深く、芳醇。

恐らくリリシアが知らない種類の茶葉だが、一口で彼女の心を掴んだ。

「イズモ産の落葉茶と申します。お気に召されましたか？」

「はい……とても……」

パールフェルはリリシアの答えに微笑み、自分も一口お茶を含んだ。

しばし懐かしげにカップの中を見詰め、庭園へと目を移した。

「お話したいこととは、陛下のことです」

「――――はい」

リリシアは居住まいを正した。

いつか来ると思っていた話題だが、やはり感情が波立つ。

先程の女性の姿が、幾度も心にちらついた。

「世では陛下は裏切り者、愚皇と呼ばれているようですね」

「はい……」

答えながら、俯くリリシア。

民にとって全く正当な評だが、目の前の女性にとってはまた別だ。

「お気になさらず、猊下が気に病む必要はありません」

パールフェルは諦めきった表情で俯いたリリシアを慰める。しかし、その目に映る悲しみは隠しきれていない。

「陛下の為したことを思えば、わたくしたちが犯した罪を思えば、確かに正しい言葉です。民たちに何と言って詫びればいいのか、正

直考えつきません」

パールフェルが表に立てば、民たちの怒りは再燃する。

レクティファールはそれを恐れ、騒動の罪をグリマルディ侯と当代皇王に被せることで事態の沈静化を図った。

だからこそ、パールフェルは民に石もて追われること無く、この離宮で静かに暮らしていられる。

「ですが、摂政殿下にだけは陛下のお心を知って頂きたいのです。されど、わたくしが殿下の下に参じれば、下手な勘繰りをする者も現れましょう。殿下の評判に傷を付けることにもなりかねません」

「――――だから、殿下が北にいる間に、わたしをお呼びに……？」

「ええ」

パールフェルはレクティファールが北に向かっている間に、総ての決着を付けるつもりだった。

これからの皇国の舵取りを少しでも容易にするため、そして、亡き夫の願いを叶えるために。

「陛下は――――あの方はこの国を心から愛しておられました」

リリシアは黙り込み、パールフェルの言葉をひたすら受け止める。

「北の帝国、西の連合国、どちらも我が国にとって大いなる脅威。東のイズモとて、『天照』を擁し油断ならない相手です」

パールフェルは静かに続けた。

「ですが、先代陛下はそれらの国々と友誼を結ぶことに執心され、我が夫はそんな父親の姿勢を批判し続けていました。そんな弱腰では相手に付け入られると」

それは、確かに先代皇王の外交姿勢の一側面だった。

事実、帝国は先代皇王の外交姿勢で勢い付き、こうして大規模な軍を差し向けてきたのだ。

「だから、あの方は自分がこの国を守るのだと」

父が頼りないのなら、自分がこの国を守る。今上皇王はそう決意した。

現れたはずの“白”を害したという噂も、そこに原因があるのだろう。

皇太子たる“白”の教育は当代の皇王が担当する。

ならば、当然当代皇王の政治姿勢が“白”に色濃く継承されることになるだろう。

つまり、父の薫陶を受けた“白”が皇王となれば、この国はこれまでと変わらず他国に対して弱腰で居続ける。

だから彼は、“白”を廃して自らが立った。それが事実では無いとしても、人々はそう思った。

「今から思えば、先代陛下のお考えも理解出来ます。ですが、当時の夫にも、わたくしにもそれは理解出来なかった。先代陛下は国を滅ぼしてしまう、本気でそう思っておりました」

守りたい。

そう願い、今上皇王は権力を求めた。

誰にも虐げられることのない、絶対的な権力を。

「――――陛下はその想いを、貴族たちに利用されたのかも知れません」

先代皇王の御代、非主流派であった今上皇王の支持貴族。

彼らは自らが権力を手に入れるため、今上皇王を誑かした。

「貴族たちは言葉巧みに陛下を陥れました。言っても信じては貰えないでしょうが、多くの忠臣を遠ざけたのは陛下の意志ではなく、彼らの思惑だったのです。彼らの忠誠心は見事なれど、今は陛下の想いの妨げになる、と」

今上皇王は彼ら忠臣を疎みはした。

だが、その皇国への愛情に疑いなど持たなかった。

だから、いつか分かり合えると思い続けていた。

「結果として、陛下は多くの忠臣を遠ざけ、自分の成すべきことに協力的な者たちを権力の座に就けました」

この処遇は、一時的なものとなるはずだった。

今上皇王の願いを忠臣たちが理解することが出来れば、すぐにでも中央に呼び戻すつもりだった。

「ですが、事態は最悪な方向へと動き始めました」

それは、連合の侵攻と、始原貴族の皇王に対する裏切り。

「陛下は、このとき壊れてしまわれたのかもしれません」

疎み、それでも信じていた始原貴族の裏切り。

だが、その始原貴族もまた、今上皇王に裏切られたと思っていた。

彼らの行き違いは、致命的な齟齬となって皇国を未曾有の惨禍に叩き込む。

「陛下は何としても連合の侵攻を阻止しようと軍を集めました。しかし、その策も失敗だったのでしょう。このとき陛下が胸襟を開いて始原貴族たちと話し合っていれば事態は好転していたかもしれません。ですが、始原貴族を信じられなくなっていた陛下は自らを支持する貴族たちに軍を集めさせ、それを連合にぶつけた」

結果は、惨敗。

さらに今上皇王の思惑を越え、始原貴族たちも軍を発する動きを見せ始めた。

「始原貴族たちの裏切り、陛下はそれを嘆いておられました。そし

て幾度も敗退を重ねる自らの軍、既に陛下のお心は限界でした」

やがて連合が皇都を包囲したとき、今上皇王は命を落とした。

それから始まったのは、まさに悲劇とした言いようの無い出来事だった。

「陛下がお隠れあそばされたとき、わたくしは『やはり』と思っておりました。ですが、陛下がどのように命を落としたのか、未だ真実は分かりません。自ら命を絶ったのか、貴族の謀反によって弑されたのか、或いはそれ以外の何かが起きたのか」

パールフェルはリリシアに向き直り、再び頭を垂れた。

「陛下の罪は消えません。ですが、陛下の願いだけは殿下にお伝え頂きたいのです。あの方は間違いなくこの国を愛し、守りたかった。その想いだけは、殿下に受け継いで頂きたいのです」

皇太子たる“白”の教育は当代皇王の役目。

ならば、レクティファールに想いを繋げるのは今上皇王であるべきだとパールフェルは思った。

「どうか、殿下にお伝え下さい。この国の皇王は、ただ一人の例外

もなく皇国を愛していたと」

「――――――――」

リリシアは瞑目する。

頷くことは出来る。

だが、それは民の想いを踏み躙ることにはならないだろうか。

今上皇王の想いを肯定することは、民たちの苦しみを肯定することにはならないだろうか。

「どうか、お願いします」

パールフェルは震える声で懇願する。

彼女にとって、これが妻として夫に出来る最後のことだった。

それは、リリシアにも理解出来た。

「――――分かりました」

「あ、ありがとうございます……！」

そして、ここで自分に出来ることは、ここで頒いた罪を背負うこと。

あの女性の血を纏い、生き続けること。

「我が名に誓って、陛下の想い、殿下にお伝えいたします」

あの方の為、罪を背負い続けること。

「きっと、あの方も理解してくださるでしょう」

民たちの怨嗟を受けながら、微笑み続けること。

第二三話「烽火」

『ウィルマグス』近傍の上空に正体不明の飛行物体が現れたという報告を受けてから、グロリエの機嫌は目に見えて悪くなった。これが皇国側の偵察騎であるという確証はついぞ得られなかったが、彼女は最悪の事態を想定してことを推し進める決断を下した。

“雷霆”の存在はついに皇国の知るところとなった。

当然、その危険性を正当に評価出来るだけの頭脳を皇国が持っていれば、その破壊か奪取に動くだろう。

だが、この段階になっても帝国軍にそれに備えようという意見は極々少数であった。

理由は大きく二つ。

一つ目、皇国側が“雷霆”に対して何らかの軍事的行動を起こすためには、どうしてもパラティオン要塞前面に展開している帝国軍を突破しなくてはならない。要塞の援護を受けられると仮定しても、それだけの打撃力が皇国軍にあるとは考えられなかったのだ。『ウィルマグス』という都市は白狼山脈の山裾近くに建設されており、東の天狼山脈と西の白狼山脈の隙間にある北西から南東に細長いファルベル平原からは、山脈を形成する山が邪魔になって直接その姿を見ることが出来ない。

ファルベル平原にあるパラティオン要塞の要塞砲も射程が足りず、大規模戦略級魔法による直接射撃も山脈があっては狙えない。さらにいえば、大規模戦略級魔法ともなれば“雷霆”の至近にある『ウィルマグス』にも影響が出るだろう。非戦闘員が暮らしている街に向けてそんな魔法を放てば、周辺国が黙っていない。レクティファールが当代皇王の二の舞になることは明白だった。

二つ目、皇国軍の援軍は未だ編成途中。これが実効戦力としてパラティオンに入るのは、早くても一月半掛かる。援軍が得られない以上、寡兵を分割して運用するとは軍略上の常識として考えられなかった。仮に少数部隊を隠密機動させて帝国軍陣地を越えることが出来たとしても、実際に“雷霆”を陥落させるには圧倒的に戦力が足りない。

玉砕覚悟の決死隊であったとしても、『ウィルマグス』には二個旅団五〇〇〇が予備戦力兼都市防衛戦力として残されている。これを撃破して“雷霆”に肉薄出来るほどの戦力が隠密裏に帝国陣地を越えられる筈がないと彼らは判断した。

グロリエも彼らの判断を支持した。

彼女自身、皇国側が有効な対抗手段を持っていないと考えていたからだ。

というよりも、これまで必死に“雷霆”を隠してきたのは、皇国側にその存在を察知されて何らかの対処をされないようにするためだった。“雷霆”の建造開始時期は皇国の内乱の最中であり、帝国としても最大の好機と見ていた。資材部品を運び込み、三ヵ月を掛けて完成間近となった。各試験は本国内で済ませてあるから、試運転を行えばすぐにでも実効戦力として通用する。

この時点で帝国は皇国に対して九分九厘勝利を確信していた。だからこそグロリエを激戦区である西方戦線から引き抜き、皇国に止めを刺す役目を与えたのだ。

今更新たな皇王――正確には次期皇王――が出てきたところで何が出来る。それが帝国軍の総意だったと言っていい。その中には、グロリエさえもが含まれていた。

それでも彼女が『ウィルマグス』駐留の五〇〇〇の防衛部隊に警戒態勢を下令したのは、つい数日前に顔を合わせた一人の青年の姿が脳裏から拭い去ることが出来なかったからだ。

それがどのような結論を彼女の前に差し出すのか――――未だ刻は満ちていない。

パラティオン要塞地下訓練場。

長辺一〇〇メイテル、短辺八〇メイテルの巨大空間は、日頃要塞防衛軍の守備兵が汗を散らして訓練に励む施設だ。しかし今、その

訓練場を埋め尽くす声と汗はパラティオン兵のものではない。

訓練に励む者たちの灰色の訓練着に縫い付けられた紋章は盾と交差する剣、そして中央に十字星――――近衛軍の紋章だった。

「――――よし！　次、場内一〇〇周！　身体暖めろ！」

「応ッ！！」

男女の別なく、訓練教官資格を持つ最先任下士官、中年の特務曹長の掛け声に応える近衛軍将兵。

訓練教官と訓練生以外の立場がない訓練である以上階級すら関係なく、時間のある士官も参加して、彼らは来るべき戦いに向けて鈍りきった身体を作り直していた。

これまで近衛軍がしてきた訓練は正規軍のそれと変わらない。だが、実戦に出ても結局は手伝い戦と戦場を嘗めていたことに変わりはない。摂政殿下を守って最前線に立つというここ数百年無かった栄誉に向けて、彼らが取り戻すべき“感覚”は多かった。

そんな近衛軍将兵たちが密かに注目している一角がある。

そこに立つのは二人の男女。

片や、白の髪を一本に束ね、動き易い近衛軍の訓練着を纏った摂政レクティファール。

片や、日頃ボタンひとつ緩めず着用している陸軍の制服を脱ぎ、全体的にほっそりとしたその身体を陸軍の訓練着に包んだ摂政付き大尉参謀リーデ・アーデン。

どちらも細剣を構え、じりじりと相手の隙を窺っている。

「――――――――」

「――――――――」

万全の体温調整が可能な“皇剣”の機能故か、汗一つ浮かんでいないレクティファール。

対してリーデの顔には幾つもの玉の汗が浮かんでいるが、その表情は涼しいままだ。

お互いに細剣を構えた腕は少しも乱れず、鋒の揺れも相手を誘う手段に過ぎない。呼吸に合わせて揺れる鋒、時折相手の呼吸を乱そうと揺れの拍子を変えてくるが、両者ともそれに乗るような性格では無かった。

自分の呼吸を相手のそれに同調させ、さながら一個の生命のようにそこ立つ二人。

近衛軍の将兵は訓練場を周回しながら、二人の闘いに注目せざるを得なかった。

別段二人の実力が高いということではない。腕に覚えのある現役の兵士や騎士であれば、二人に勝ことはそう難しいことではないだろう。ならば何故二人が注目を浴びているのか――――

「おい、あの二人どれくらいあの状態だ」

「もう一時間半。見てるこっちが窒息しそうだよ」

答えは至極単純なものだ。

二人は一度も剣を交えることなく、ひたすら互いに剣を突き付けている。言葉にすればそれだけのことだった。

「何の訓練なんだ、あれ」

「知らん、騎士学校出の参謀様の考えることがオレたち兵隊に分かるかよぅ」

「まぁな」

さらに半時間が経過した頃、リーデの首に掛けてあった時計が時報を鳴らした。

一対一の徒手格闘訓練の最中であったにも関わらず、その音に振り返る近衛軍将兵。当然のように特務曹長の怒号が轟き、罰として場内三〇〇周とさらに腕立て三〇回、腹筋三〇回、屈伸三〇回合計一〇セット命じられる。

悲鳴を上げながら走り始める近衛軍将兵――連帯責任で士官を含む全員――の中心で、リーデはゆっくりと細剣を下ろした。呼吸を整える彼女の前で、レクティファールも同じように深呼吸と浅呼吸を繰り返している。

息を整えたリーデが顔を上げると、レクティファールが手拭を差し出していた。

「――――ありがとうございます」

「いや、訓練に付き合って貰ったのはこちらの方だ、当然だろう」

さらに飲み物も手渡す。柑橘系の果汁を絞ったものに砂糖と塩を少量溶かしたものだ。

レクティファールの許しを得て壁際に座り込み、ストローで飲み物を啜りながら、リーデは訓練中汗一つ掻かなかった主君の顔を見上げる。近衛軍の訓練を眺めているその表情に、緊張から来る硬さは見られなかった。

場合によってはあの帝国の戦狂いと真正面から戦うことになるか

もしれないというのに、この落ち着きはどこから来るのだろうか。今回の訓練も、実際に剣で打ち合うことを目的としたものではなかった。

レクティファール曰く、戦場で緊張感と集中力を途切れさせないための訓練だという。

常に張り詰めたままの緊張感は、個人差はあれどそう長く持続出来るものではない。それまで優勢であったにも関わらず、集中力が途切れただけで一気に形勢をひっくり返されることもある。

特に盤上遊戯などではこの傾向が強いと、レクティファールは経験で知っている。

戦争は遊戯ではないが、戦争から遊戯的要素が完全に排除されることはありえない。遊戯的要素と賭博的要素、この二つは戦争に欠かせないものだろう。

そして、この二つを如何にして制するかが勝敗を分けると言っていい。

だからレクティファールは、リーデを相手に先程のような訓練を行っていたのだ。メリエラやウィリィアという候補もいたのだが、彼女たちは地下訓練場ではなく要塞の南にある平原で訓練を行うという。

龍族と龍人族が真正面から全力で訓練するには、地下訓練場では狭いらしい。

（――――それを聞いてしまえば、訓練の相手頼まなくて良かったって思いますよねぇ……）

訓練で全く出てこなかった汗が一筋、額を滑り落ちた。

そもそも、参謀であるリーデを相手にしているという点が彼のひ弱さ加減を如実に表している。参謀とはいえ、リーデも『将は兵の規範たるべし』をモットーとしている騎士学校の出であるから、そこらの新米兵士よりはよほど体力的技能的に優れている。

幹部が最良の兵士であってこそ兵士たちの信頼を得られるという考えの下、騎士学校の歩兵科では三昼夜ぶち抜きの登山行軍訓練が毎年夏に、同じく三昼夜ぶっ通しの孤島遭難訓練が毎年冬に行われているという。勿論専攻している科ごとに催される訓練は違うが、陸軍総合大演習と呼ばれる騎士学校全科と歩兵学校、騎兵学校、砲兵学校など各科兵学校合同の大演習の際は、もはや戦争と呼んでも過言ではない戦いが繰り広げられるらしい。

ともあれ、リーデ自身も騎士学校参謀科卒業とはいえ間違いなくレクティファールより強い。

強さの種類にも色々あるので、この場合は個人戦闘技能ということだが、他の技能でもレクティファールは殆ど負けているだろう。これが専門教育を受けた者とそうでない者の差ということだ。

（――――色々なものが一段落したら、何処かの学校に裏口……もとい、潜り込ませてもらおうかな……）

ある種一般常識から最も遠い戦場という場所に出突っ張りの今だからこそ、日常生活に支障が出ていないのだろう。このまま摂政や皇王として皇都で暮らすと、多分二度とこの世界の常識を知ることは出来ないかもしれない。

（それは流石に遠慮したい）

常識のない君主など、道化というより害悪だ。そんな存在にはなりたくなかった。

そんなことになれば守りたい人も守れない。

「殿下」

近衛軍の訓練風景を見ながら並列思考で別のことを考えていたレクティファール。リーデの声で我に返った。

リーデは壁際に座り込んだまま、レクティファールをじっと見詰めている。

「何だ」

摂政としての口調で答えると、並列に存在する思考の一つがその

役割に沿った情報を走らせ始めた。

「随分と落ち着いていらっしゃるのですね。流石、皇都奪還戦を演出したお方です」

褒め言葉にしては淡々とした調子のリーデ。彼女らしいと言えばその通りかもしれない。

「――――演出、演出か……確かにその程度のことしか出来なかったな」

レクティファールはリーデの隣の壁に寄り掛かると、腕を組み、苦笑いと共にそう自嘲した。

リーデはその回答が不満だったのか、微かに眉を顰めた。

「謙遜も過ぎれば侮辱です。立太子の数日後にあれだけの戦いを演じて、あの程度と仰られては……」

参謀としての職責ではないのかもしれないが、君主の過ちを正すも臣下の役目。リーデは顰めた眉をそのままにレクティファールを諫める。

だが、レクティファールは困ったように笑うだけだ。気弱にさえ

見えるその表情に、リーデは内心怒りさえ覚えた。

「謙遜じゃない。本当に、私のしたことはあの場にいて、メリエラの背に乗っていただけ。戦ったのは将兵、死んだのも将兵だ。そして、巻き込まれたのは民たち」

死ぬ筈ではなかった人々が死んだ。

あの戦いはそんな一側面を持っていた。

今上皇王が少しでも分別のある者であったなら、皇王の傍に侍っていた者共が真の臣下であったなら、あの戦はなかった。あの戦で命を落とした皇国、連合の将兵も死なずに済んだ。そして、あの戦によって生じる損害を補填するために国庫が払底するようなこともなかっただろう。

さらに言うなら、戦いと直接関係なかった無辜の市民が死ぬこともなかった。経済的にも人的にも、あの内乱は無用の争いだった。強いて意味を持たせるのなら、レクティファールという存在を無理やりこの世界に認めさせることだけ。

しかしあれだけ死んだあと、馬鹿げた戦いを止めて傑物扱いされることはレクティファールにとって決して喜ばしいことではなかった。むしろ自分の無力さ、無能さを突き付けられたようなものだ。

「正直、あのとき君みたいな参謀がいたらと思うよ。あのときの作戦は、私の方針を貴族軍の幕僚たちが形にしてくれた。その方針の

段階で、君みたいな専門家が意見を出してくれたら、もっとましな結果になったかもしれない」

「――――それは、参謀という者と買い被り過ぎています」

リーデはストローから口を離し、俯いた。

「参謀とは所詮考えるだけの生き物です。自分に権限がないから好き勝手に考えるだけ考え、司令官に決断と責任を丸投げする。小官も、小官の父もそうです」

「――――お父上も参謀だったのか」

レクティファールは僅かに驚いたような声を発した。

騎士学校での成績や思考の癖などは参謀として貸し出された際に聞かされていたが、流石に個人的な情報までは知らなかった。聞けば答えてもらえたのだろうが、必要のないことだから説明しないのだろうと今まで何も聞かずにいた。

「ええ、すでに皇国に殉じましたが。この要塞から少し北に行った場所、今では軍事境界線の非武装地帯になっている場所で」

淡々と、自分の親のことではないかのように話すリーデ。

レクティファールからはその表情を見ることは出来なかったが、それでも彼の目に困惑が見え隠れした。彼自身親という存在に特別な思い入れがある訳ではない。

この世界にこうして存在している以上、元世界の諸々はきっぱりと諦めた。

何より、この世界に親よりも大切な人たちが出来てしまった。実の親と彼女たち、どちらを選ぶかと問われれば――――悩むことさえ今の彼にはあり得ない。

（――――なるほど、私も彼女も同じ種類の人間か）

血の繋がった実の親よりも大切なものを見付けてしまった。二人ともそういう種類の人間なのだ。レクティファールはそう思った。

「軍人になったのは父上の影響か」

「――――――――――ええ、きっと」

確かな逡巡の後、リーデは頷いた。

その躊躇いの中にどんな気持ちの葛藤があったのか、レクティフ

ァールは気付かなかった。

たとえ気付いていたとして、彼に何が出来たということでもないのだが。

ガラハが元々の要塞防衛軍と援軍から部隊を選抜して短期の慣熟訓練に入った頃、白狼山脈に皇国軍人の一団がいた。

彼らはいずれも厚い防寒着を身に纏い、入山許可の証である紋章を首から下げている。その姿は個性に乏しく、遠目には男女の区別さえつかない。

しかし、彼らを遠望する者たちにとって個人の区別などどうでもいい。

一団を高みより観察する者たち――――それは蒼銀色の毛皮を持つ巨狼、人々に白狼山脈の先住と呼ばれる者たちだった。

彼らは一頭の氷狼を先頭に、音もなく山を下り始める。

身軽に、深い新雪に足を取られることさえなく、まるで飛ぶように山肌を駆け下りる彼ら。それはこの山脈で食物連鎖の頂点に立つ王者としての風格さえ滲む動きだった。

戦いの場が雪山である限り、彼らは最強と言っていい。

皇国建国以来、北からの侵入者を狩り続けた実績がそれを示している。彼らは協定によってそれを役目としているが、彼らがそれを行うのは協定だけが原因ではない。彼らは、自分たちの領域に侵入する異分子を徹底して排除することを本能に従って行っている。

それは皇国を構成するあらゆる種族が持つ本能だが、氷狼族が白狼山脈と天狼山脈を始めとした自治区以外で暮らさない理由はその本能にある。彼らの排他的ともいえるその本能は、他種族に比して大きく強い。とても他種族を自治区に住まわせることが出来ないほどに、だ。

それが種族を表す特徴となるほど、彼らの異分子に対する敵愾心は強い。パラティオン要塞の歴代司令官が就任後、真っ先にすることが彼らへの挨拶であるというのは、その特徴を念頭に置いてのことなのかもしれない。

やがて、山を駆け下りた氷狼たちは軍の集団をすぐ眼下に見下ろす崖の上に到着した。

それに合わせた訳ではないだろうが、軍人の一人が懐から銀色に輝く小さな笛を取り出し、それを思い切り吹き鳴らす。しかし、その笛から放たれた音は人間種や大多数の混血種には聞こえない音。

しかし、氷狼族にとっては山ひとつ越えても聞き取れる音だ。

単なる笛であればそれほど広い範囲に音は拡がらないが、この笛は内部に術式を刻んだ魔道具。皇王家が氷狼族と接触を図りたいときに限り使用されるものだった。

つまり、この笛を鳴らした者は皇王家が認めた使者ということになる。

氷狼族たちは、その音に答えるように崖を飛び降りた。

摂政レクティファールより白狼山脈に住まう先住たちへの使いを仰せつかったその軍人たちは、音もなく、十数歩先の純白の世界に現れた若い男に目を奪われた。十数頭の氷狼を従え、軍人たちを睥睨している。

蒼銀色の毛皮の厚掛け、同じく蒼銀色の髪、白皙の端正な顔立ち、そして、切れ長の碧眼。

纏う雰囲気は王者のそれで、他者から隔絶した気配が自然と頭を

下げさせる。

「小官は皇国摂政レクティファール殿下より使者の任を仰せつかりました、皇国陸軍参謀少佐、ハンスリー・ビドウィックと申します。白狼山脈の先住の長、氷狼アロンズ様とお見受けいたします」

「――――ああ、確かにワシがアロンズだ。皇国の使者よ」

喋るだけで空気が凍り付く、そんな声だった。

人間的な温もりを一切持たないその声音、なるほど氷狼族の一部族を率いる族長に相応しい。

「我が主、摂政レクティファール殿下より、アロンズ殿に書がございます」

「うむ」

ビドウィックは集団から一歩進み出る。彼は懐から一通の封書を取り出すと、それを差し出した。

それを見て頷いたアロンズが軽く手を振る。

すると、封書がひとりでに浮き上がり、ゆるりと宙を走ってアロ

ンズの手に収まった。

無言で封書の封印を切るアロンズ。こうして封書という形で皇国の代表から何らかの接触があるのは、久しぶりのことだった。

「――――――――――ほう」

ざっと書状を眺めたアロンズは、微かに声を零した。

摂政という珍しい相手からの書状には、酷く珍しい文面が記されていた。

一つ、白狼山脈を軍が通過することを容認して欲しい。

一つ、二〇〇〇〇人の兵が行軍可能な最短経路を教えて欲しい。

一つ、軍の先導をして欲しい。

そして、この三つの条件を果たすのならば、戦後然るべき対価を用意する。

逆に果たされない場合も、然るべき対価を用意する。

「――――然るべき対価、か」

アロンズは無表情のままビドウィックを見据える。

氷狼族族長の厳寒の視線に晒された憐れな使者は、その視線に捕らえられたかのように身動きひとつ出来ない。元々氷狼族は幻想種の一種だが、彼らと同格の幻想種など片手の指で足りる程しか存在しない。

そのどれもが、強大な力を持つ種族として恐れられていた。少なくとも、ビドウィックのような極一般的な混血種が一対一で相対して平然としていられるような相手ではない。

だからだろう、次の瞬間放たれた言葉にビドウィックは凍り付いた。

「摂政殿は我らを脅そうというのか、使者殿」

まさか、と思った。

あの摂政はこの状況で氷狼族に喧嘩を売るような馬鹿な真似をするような人物ではない。付き合いなどなく、人物評も直接顔を合わせたことのある同僚からの又聞きだが、仮にそのような人物であれば皇都は救われず、とうの昔に灰燼と化していた筈だ。

皇国軍の将兵は、大なり小なりビドウィックと同じような印象をレクティファールに対して抱いている。次期皇王という存在に都合のいい幻想を抱いていると言ってもいいだろう。

だが、アロンズは違う。

摂政とは皇国の代表であり象徴であるという認識しかない。

皇国と氷狼族の間には協定がある。だが逆に言えば、皇国がそれに記された条項に反していないからこそ彼らもまた協定に反しないだけの関係だった。消極的不干渉とでもいうべきその関係は、一方が迂闊に歩み寄るだけで簡単に崩れ去るほど脆いものだ。

そもそも、氷狼族は皇国がどうなろうと知ったことではない。彼らにとってのあらゆるコミュニティは閉鎖された部族内でほぼ完結しているのだから、国家というものに対しての帰属意識が芽生えるはずもないのだ。

同部族という名の身内とそれ以外という異分子。彼らはそれだけで十分生きていけるし、これまで皇国もそれを認めてきた。

皇国としては白狼山脈が天然の要害であり続ければ良い――――これまではそうだった。

「我らは皇国がどうなろうと構わない。帝国に滅ぼされようが自ら滅びようが、この山々が我らのものである限りはな」

アロンズもそのつもりだった。

氷狼族は皇国に干渉しない。協定に協力を求める権利を保証されていても、これまでそれを行使したことはなかった。

不干渉を貫き、必要なときだけ必要な分の繋がりを持っていればそれでいい。

「――――北の蛮人共とて、わざわざこのような雪山に攻め入ろうとは思うまい。彼らが求めるような富も栄誉も、この山では手に入らないのだから」

痛手しか得るもののない戦いを望むものがいるとは、アロンズには、氷狼族には到底思えなかった。

しかし、彼らはそれが自分たちの常識であることに気付いていない。

人には、富や栄誉がある“かもしれない”というだけで十分だと気付かない。

種族の性格上不必要な富を求めず、自給自足が完全に確立された氷狼族の社会で過ごしてきたからこその、ある種の弊害。彼らは彼ら自身が人間種にとっての富と栄誉そのものであることを知らなかった。

氷狼族の肝は万病に効き、その毛皮は寒さを完全に遮断する上にいつまでも美しい光沢を保ち続ける。牙や骨は帝国にとって喉から手が出るほど欲しい最上級の魔法材料で、彼らの身体はその毛一本に至るまで値打ちがあった。

だが、本人たちはそれに決して気付かないし気付けない。

二五年前の紛争で皇国軍の龍族が犠牲になったとき、その遺骸を争うように奪い合った帝国兵らがいたことも彼らは知らない。遺品

を剥ぎ取るだけではなく、その骸そのものまで奪い去る帝国兵。余りにも凄惨なその光景を、皇国の兵士たちは戦慄と共に記憶している。

ビドウィックもまた、その一人だった。

「アロンズ殿は帝国を甘く見ておられる……！　彼らは確かに我々と同じように国と国家を愛していましょう。ですが、彼らの愛情はときとして恐ろしいほどに狂い、敵を容易に蹂躙いたします。アロンズ殿は白狼山脈氷狼族の族長、一族を守るためにどうか……！」

ここでアロンズに断られるようなことになれば、皇国軍は絶望的な敵中突破を実行しなくてはならない。

皇国の興廃の懸かった戦いともなれば摂政レクティファール自身も最前線に立つことになるだろう。それが最も兵士の士気を高め、最も作戦の成功率を高めるからだ。

しかし、そうなれば皇国は二重の意味で存亡の危機に立たされる。

たとえ戦いに勝っても摂政を喪えば遠からず皇国は内外からの侵食で滅びる。逆に摂政が生き残っても戦いに負けてしまえば帝国は皇国本土を蹂躙し、大いに皇国の寿命を縮めるだろう。

この戦い、どうあっても負けられないのだ。

しかし、アロンズはこれで話は終わりだと言わんばかりに、ビドウィックに背を向けた。

「――――我らの縄張りを通過することは認めよう。それ以上はせぬ」

「アロンズ殿！」

二〇〇〇〇万の兵士が道案内もなく、大して土地勘の無い雪山に踏み入って無事でいられる訳がない。

何よりも時間こそが最も重視される現状、軍が道に迷うようなことになればそれこそ本末転倒。摂政率いる囮の要塞部隊は二〇〇〇〇の兵を欠いた状態で帝国軍から正面衝突するか、敵攻城砲の発射を手を拱いて見ているしかない。どちらにせよ、勝利は絶望的だ。

ビドウィックは自分に与えられた役目を全うするため、その場を立ち去ろうとするアロンズに手を伸ばす。

しかし、アロンズの歩を止めたのはビドウィックではなかった。

「――――グードルデンか」

グードルデンと呼ばれた一頭の氷狼が、アロンズの前に立ち塞がったのだ。

氷狼は狼の姿のまま、流暢に言葉を発した。若い男の声だった。

「――――族長、私とて先の戦いで父母を喪った身、帝国の残忍さと執念深さはよく知っています」

アロンズはグードルデンを睨むようなことはしなかった。しかし、感情のない極寒の視線が貫くように差し向けられる。

「確かにお前の両親は、あの戦でこの山を越えようとした帝国軍と戦い見事散った。たった二頭で帝国軍の侵攻を断念させた勇者よ。ワシとて彼らを尊敬し、一族を守る英霊として崇めている。お前を一族の子として育てたのも、彼らの心意気に応えるためだ。だが、此度の戦、帝国軍は我らが縄張りに手を出してはいない。我らには戦う理由がない」

「いいえ、あります、族長」

アロンズの言葉を即座に否定するグードルデン。他の氷狼たちが微かに身体を震わせて驚きを示した。

二五を越えたばかりと氷狼族の中では未だ若いグードルデンが、既に一〇〇〇年近く生きているアロンズにこれほどまでに食い下がるとは予想だにしていなかった。

「私とて子の親、我が子が老いて死ねる世界を作る義務がございま

す。義務を果たせるかどうかは別にしても、義務を怠ることは決して許容出来ません」

グードルデンは一族の里に妻子がいる。

ここで帝国が勝ことになれば、自分たち一族がそう遠くない未来に滅びることは彼にはよく分かっていた。

「――――ふん、よく山を下りて人里に出入していたやんちゃ坊主故の言葉か、人間種のことはよく知っていると見える」

父母を殺し、自分たちの数を大きく減らしながらもその仇敵の死体さえ持ち去った人間種がどんな存在か、グードルデンは実際に自分の目で確かめたことがある。

『ウィルマグス』に人の姿をとって潜り込んだグードルデン。そのとき彼が見た人間種は、自分たちと同じように家族を持ち、一族を持ち、社会を持つ知恵ある者共以外の何ものでも無かった。

だから理解した。

彼らも譲れない何かがある、故に戦うのだと。

そして戦うからこそ、狂ってしまうのだと。

「族長、仮に一族が此度の摂政の求めに応じないというのであれば、

私が個人として彼らの求めに応じます」

「一族の決定に逆らうと言うか」

アロンズはやはり表情を変えずにグードルデンを見下ろす、その光景を離れた場所から見ることになったビドウィックは、両者の間に横たわる高密度の殺気に気付き、震えた。

幻想種有数の力を持つ氷狼族。その力の一端を見せつけられた。

しばしの沈黙が続き、次に口を開いたのはアロンズだった。

「――――よかろう。此度の一件、貴様にすべて委ねる。貴様に万が一のことあらば、妻と子は一族が面倒見よう」

彼はほんの少しだけ微笑み、ぴくりとも動かないグードルデンの背を叩いてその場を立ち去った。すぐに氷狼の姿を取り戻し、山を登っていく。

グードルデン以外の氷狼たちもアロンズに続いて姿を消し、やがてその場に残ったのはグードルデンと使者の一団のみ。

彼らはここで、ようやく互いに目を合わせた。

呆然としたままの使者たちを見て、グードルデンが鋭い牙を見せて笑う。

「――――そういうことだ。さっさと戻って軍を連れてきてもらおう。俺の子供の未来が掛かっているからな」

しかし、ビドウィックはグードルデンに問わずにはいられなかった。

「何故、そこまで……我らのために……」

「短期的にはお前らのために見えるが、俺が欲しい結果はお前らのためじゃない」

グードルデンはビドウィックに歩み寄り、その顔を見上げた。

「帝国が勝てば俺の妻や子供は毛の一本まで奴らに毟り取られる。――――仮にお前の子供が同じような目に合うとしたら、お前はそれを許せるのか」

「――――私に子供はいない。妻はいるが……子供は授からなかった」

「そうか……ならお前の細君でもいい。お前の帰りを待っている細

君が帝国に殺され、髪の毛一つ残さず奪い尽くされるのを許せるか」

グードルデンは帝国の人々の行動そのものを非難しても、彼ら自身を否定するつもりはなかった。

彼の両親の血肉は、きっと帝国の誰かの家族を養ったのだろう。

ひょっとしたら、死ぬはずだった誰かが、今も生きているのかもしれない。

「我が一族に墓は無いが、死んだ者の牙はその家族を守護する大切な品として扱われている。だが、俺の両親は一欠片として俺の手元に残っていない。思い出さえもな」

両親が死に、誰かが生き延びた。

それは良い、今更仇を討とうは思わない。

しかし、新たに妻子が奪われるかもしれないという避けようの無い現実。それを甘んじて受けるかどうかは全く別の問題だ。

「摂政殿には勝ってもらわなくてはならない。少なくとも、俺と俺の家族のためにはそうして貰う」

グードルデンはそう言い、ビドウィックに背を向ける。

ビドウィックはその背に声を掛けた。

「――――今の妻なら、私が帰っても大して喜ばないだろう。だが……」

子供が出来なかったことで、今の夫婦仲はあまり良いとは言えない。

妻にはビドウィック家の跡取りを産めなかったという引け目があり、ビドウィック自身には軍務に追われてそんな妻を支えられなかった引け目がある。

しかし、これまでの妻との思い出は彼にとってどんなものにも代え難い。

「一緒にいられたなら、いつかあの日のように戻れると信じている」

あの、気恥ずかしくも暖かい日々に。

氷狼族の協力が得られたという報告は、すぐさまガラハとレクティファールの下に届いた。

その報告を受け、レクティファールは今回の一連の軍事行動を先導を務める氷狼族の名を取り『グードルデン作戦』と名付けた。ガラハに作戦名を授けるように要請されたレクティファールが、殆ど思い付きで名付けた名前だが、関係者には意外と好評だった。

“グードルデン”という言葉が、古代語で“守護する者”を意味する言葉が変化したものであったからだ。

作戦名も決まり、ガラハは率いることになる皇国第一軍団――皇国軍に於いて軍団は臨時編成のみの単位、平時編成では師団の上に軍が位置する――の訓練の仕上げに入り、レクティファールは少しでも“皇剣”の力を引き出すべく寝る間も惜しんで修練に励む。

最前線に立つとはいえレクティファール自身が戦うことは流石にないと思われたが、このとき彼は妙な予感を覚えていた。

あの獰猛な帝国の虎姫が、自分という獲物を前にして足踏みするだろうか、と。

このときの彼が“皇剣”を使用して使える魔法は多くない。

グロリエとの会談の際、暴漢から身を守るために使用した指向力（ベクトル）操作・粒子運動操作複合型攻撃魔法とそれの応用魔法。さらに初

歩的な対物理、対魔力防御魔法と治癒魔法が幾つか。

そして、グロリエの『神殺しの神剣（ディヴァイン・スレイヤー）』に対抗するために急遽“皇剣”の情報を基に組み上げた魔法である。

レクティファールはグロリエとの戦いを決意してから、彼女の持つ『神殺しの神剣』の能力を徹底して調査した。

皇国側の持つ資料と“皇剣”の情報を合わせ、ようやくその概要を掴んだのは調査開始から僅か一日後。“皇剣”の膨大な記録の中にレクティファールの求めていた情報があったのだ。

グロリエとの会談の際、彼女が『神殺しの神剣』を使用していたこともその情報を補強した。

『神殺しの神剣』の持つ“断裂”の能力とは、“無”を司る冥界の力を術式に拠ってこの世界に顕し、物質間――存在と存在の間といってもいい――の因果を断ち切ること。存在と存在の間に“無”――つまり“何もない”空間を発現させ、その存在の因果を断裂させることだ。

当然、物理的にも魔法的にもこれを防御することは出来ない。

魔法とてこの世界に存在する以上、存在そのものを“無”で断ち切ることは出来る。

さらに、“何もない”空間はあらゆるものを通さない為、能力的には防御手段としても非常に優秀だった。

その汎断裂兵装の弱点といえば、“何もない”空間が“存在する

”という矛盾を世界が即座に修復してしまうため、効果は修復までのほぼ一瞬に留まるということ。術式の複雑さと使用する魔力の多さ故に発動装置そのものが巨大化してしまうこと、そしてその巨大化した装置でも、術式の使用には稼働時間や出力に多くの制限があること。

その情報を基に、レクティファールは対策を立てる。“皇剣”の持つ四界の力を使用することで“何もない”空間を作り出すことが可能であると結論付け、それを自分の意思で発動出来る段階にまで持っていった。

“何もない”空間によって断ち切られるなら、同じく“何もない”空間をぶつける。

そこに“何もない”以上切り裂く因果は存在しないということだ。

当たり前だが、その発動を専門にしている『神殺しの神剣』と初心者の使う“皇剣”では発動出来る魔法の出力に差が出る。『神殺しの神剣』の発動範囲が限りなく二次元に近い“面”であるのに対し、“皇剣”のそれは小さな“点”に過ぎない。

その一点を見定める為には膨大な計算が必要になる。その為レクティファールは“皇剣”の持つ演算機能を如何にして効率良く運用するか大いに悩むことになった。

使えはする、だが、使いこなせはしない。

未だ“皇剣”初心者のレクティファールにとり、グロリエとの戦いは非常に厳しいものと言わざるをえなかった。

まさに命懸け、お互いに生死を賭けることになりそうだ。

「――――で、レクトはわたしに何の用事があるのかしら」

ガラハのグードルデン第一軍団の出陣式を翌日に控えたこの夜、レクティファールは珍しくメリエラを夜の散歩に誘った。

当然、パラティオンの夜は冷える。寒さに強い二人でも、流石に分厚い厚掛けで身体を覆っていた。

彼らは二人並んでパラティオンの第一長城の最上部に立ち、澄み切った夜空に浮かぶ月を見上げていた。

今日見える月は、五つだ。

「何って……――――何だろう？」

首を傾げるレクティファール。ふと思い立って誘ってはみたが、それ以上考えていなかった。

「もう……わたしとしては散歩に誘ってくれただけでも嬉しいけど、やっぱりもうちょっと気を使うこと覚えて欲しいわ」

「今度からは気を付けるよ」

白い息が、微笑んだレクティファールの口から漏れ出た。同じように笑ったメリエラの口からも白い息。厳しい寒さというにはまだ少し早いが、十分に寒い。二人は少しだけ身を寄せた。

「こういうときは戦いに怯える恋人……ううん、婚約者に気を使ってキスの一つもするものだと思う」

「まだ早いと私は思う。そういうことはもうちょっと雰囲気の良い場所と時期にやるものだと……」

「普通の恋人たちはね。わたしたち、明日明後日にはあの先にいる怖いお姫様と殺し合いするのよ。生きて迎える最後の夜かもしれないっていうのに、ここで男を見せなくてどうするの」

わたし怒ってますと言わんばかりにぶんむくれる御年二三歳のメリエラ。そんな怖いお姫様を前に、レクティファールは苦笑した。

「私が生きているのなら君は死んでいないよ。そして君が生きているなら私も死んでいない。そうだろう」

「でも、それなら二人一緒に死ぬ可能性はあるじゃない」

「ああそうか、そういえばそうだ」

やはり笑ったままのレクティファール。

メリエラはむくれている自分の顔をちょっと恥ずかしく思いながらも、怒っているという態度を崩さない。

「わたしはあなたを守り切る。でも、いざとなったらあなたわたしを見捨てなければいけないのよ」

皇だから、自分の為に臣下を見捨てることも必要だとメリエラは言う。

それに対するレクティファールの答えは非常に明確だった。

彼は少し緊張しながらもそれを隠し、メリエラの冷たくなった頬を撫でながら言った。これが彼の精一杯の見栄だった。

「皇なら臣下を見捨てるよ。でも、男なら大事な女性は見捨てないだろう？　多分」

「――――……ッ、お、お馬鹿様ね、本当に」

「あっはっは、だから馬鹿に様付けても尊敬語にはならないと……」

さらにむくれるメリエラ。

本当にひどい顔で、先程よりも頬が赤かった。

でも、目だけは少しだけ嬉しそうに潤んでいた。

「本音を言うなら、明日は皇としての役割だけで済めばいいと思っている。だけど、そう簡単にはいかないだろうな。あの姫様は中々に手強い気がする」

「そりゃそうでしょう。西方戦線の戦狂姫って言ったら有名よ」

「――――怖い怖い、ああ、本当に怖い」

「怖いならわたしが退治してあげるわよ」

メリエラが挑戦的な笑みでレクティファールを見上げる。

『龍殺し』が相手ではあるが、レクティファールが倒せというなら出来る気がした。

だが、レクティファールは頭を振る。

「賭け事は少ない方がいい。戦い自体が賭博みたいなものだから、これ以上の賭けは御免だ」

「そう、まあ、どちらにしろ必要になったら出るけど」

「なるべくそうならないよう祈りたいものだね、祈る相手いないけど」

歴代皇王に祈っても、この世界出身者ではないレクティファールの願いを叶えてくれるかどうかは疑問だ。

もっと願いの幅が広く皇国を勝たせて下さいという祈りなら聞いてくれるかもしれないが。

「祈るのはリリシアの仕事よ。あなたは祈るより頭と身体と“皇剣”使いなさい」

「了解、我が姫様」

レクティファールは少し崩した敬礼でメリエラに答える。

メリエラはそれを見て可笑しそうに笑った。

「わたし、その内お妃様になるんだから」

だから、勝とう。

勝って未来を夢見よう。

未だ夢想の域を出ないこの願いを叶えよう。

「皇都に帰ったら婚礼の儀の衣装選び始めるからね、ちゃんと時間取ってよ」

「――――頑張ります」

「ちょっと、今微妙に目を逸らしたわね。こっち向きなさい」

「だってほら、戦後処理って忙しいし」

しどろもどろになるレクティファール。

「大丈夫、わたしが色んな衣装来て公室に行ってあげるから」

それに対し、自信満々に胸を張るメリエラ。

婚約者の本気を感じ取ったレクティファールは真剣な表情で拝み倒しの体勢に入った。

「やめて下さい。本当に」

そんなことになったら元世界で言う『バカップル』ではないか。

仕事中に花嫁衣裳で乗り込んでくる新婦など、後世に笑いの種を残すだけだ。

「えぇ～～……」

「お願いします。本当に」

嫌そうなメリエラと拝み倒し実行中のレクティファール。

二人の遣り取りは、結局深夜まで続くことになる。

まあ、その後殆ど勢いだけでメリエラがレクティファールの部屋に居座って翌朝を向かえ、怒り狂ったウィリィアが再び押し掛けてくるのはどうでも良い話である。

ソファで寝たレクティファールが微妙に寝違えたことも。

朝日が差す中行われたグードルデン第一軍団の出陣式。

帝国の偵察を誤魔化すために軍団の殆どは昨夜の内に出陣してしまっていたから、実際に式典と呼べるようなことはしなかった。最後に残ったガラハ以下一個大隊が要塞前に整列し、レクティファールからの言葉を受ける。

一段高い場所に立ったレクティファールは兵士たちを見渡し、大きく頷いた。

「皆、皇国を背負うに相応しい戦士たちだ。若輩の私にさえも諸君らの気迫が伝わってくる」

本当ならば、こんなことを言う資格もないのだろう。

レクティファールは彼らに異国の地で死ねと命じているに等しいのだ。

だが、資格なきことも平然と口にしなくてならないのが彼の仕事だ。

「諸君らは長駆白狼山脈を越え、帝国領『ウィルマグス』を攻める。ここ三〇〇年一度たりとも我が皇国の軍が足を踏み入れたことのない場所だ。諸君らが皇国の先導者となることは疑いようがない」

壮行の言葉を述べるレクティファールの背後にはリーデもいた。

彼女はガラハをじっと見詰め、その姿を目に焼き付ける。

赤ん坊の頃父を喪った彼女にとって、ガラハは一番父に近い存在だった。

「しかし、恐れることは許されない。諸君らの背後にはもう皇国本土しか残っていないのだから」

目標だと言ってもいい。

いずれ超えるべき相手。それまでは目の前に立ち塞がっていてもらわなくてはならない。

「諸君らに私が命じることはただ一つ――――」

レクティファールが一つ呼吸する一瞬、ガラハがリーデを見た。

その瞳はこれまでになく静かで、細波一つない湖面のよう。リーデはそれを見て、総毛立った。

死地さえもただの戦場と看做す戦人の姿が、そこにあった。

「進撃し、敵を討て」

レクティファールに応える兵士たちの無言の歓声の中で、リーデだけが蒼褪めた顔で立っていた。

彼女から視線を外したガラハもまたレクティファールを見上げ、兵士たちと同じように静寂の気迫で以て君主の命を受ける。

彼の心に去来するのは亡き親友への友情か、それとも戦いへの恐怖か、或いは――――

「――――死への、渇望……」

リーデの呟きは、呟きとして音になったのだろうか。

風に消えてしまった声を聞いた者は、その場に一人としていなかった。

第二四話「龍虎戦役　前編」

レクティファールがパラティオンの中枢である中央司令室に入ったのは、このときが二度目だった。

最初は挨拶を兼ねた顔見せ程度のもので、そこでこのパラティオン要塞の何たるかを説明されただけに過ぎない。言うなれば客人として、事実上の部外者としての扱いだった。

だが、二度目の今回は違う。

摂政として、皇国陸軍の最高司令官として、この場の最高位者として入った。

「摂政殿下、御入来！」

番兵が声を張り上げ、雛壇構造の司令室にレクティファールの入室を知らせる。

机や制御卓に向かって仕事をしている者を除き、総てが二階後方にある入り口から姿を見せたレクティファールに敬礼。答礼を返すレクティファールの表情は、これまでと変わらず、少なくとも表面上は落ち着いたものだった。

「各々の仕事に戻ってくれ」

レクティファールの許しを得た司令部要員が各々の配置に戻る。

二階の中央部にある司令官席にレクティファールが座ると、その左右に配置されている十二の幕僚席の半分に、各兵科の主任参謀の証である金色、専任参謀の銀色、そして無任参謀の銅色の参謀飾緒を掛けた参謀たちが腰を下ろした。それぞれ主任参謀が二人、先任参謀が三人、そして無任参謀が一人だ。

無任参謀であって唯一この場に座る権利を有したのは、レクティファール付き参謀から臨時に昇格したリーデ。この状況こそが、使える手札は総て使うというレクティファールとガラハの方針を如実に示していた。

グードルデン第一軍団の軍団幕僚としてガラハの行軍に幕僚の半数近くが同行している現在、無任であっても、それ以下の扱いでも、能力的に使えると判断された参謀たちは、参謀としては最下位の見習い参謀――――少尉参謀であっても司令室に入ることを許されていた。

無論、彼らのような見習いのすることといえばレクティファールの周囲に座る各参謀の補佐でしかないのだが、それでも中央司令室に入って摂政の近くで働けるということに感動している者も多い。

だがそんな彼らとて、自分たちがここに入れるほど事態が逼迫しているということは間違いなく認識している。

身体の震えが、実は恐怖が原因であった見習い参謀もいたかもしれない。

だが、今は無駄飯食らいを要塞に置いておける状況ではない。傷病兵であっても、比較的軽度で医務官の許可を得た者は職務に就いていた。

このときパラティオン要塞に残された兵士は四一〇〇〇。

対するグロリエ麾下の帝国軍はこれまでに到着した増援を含めて実に三七〇〇〇〇、その兵力比はおよそ一対九だった。

さらに帝国軍の背後にはこのパラティオンを粉砕するだけの力を秘めた巨大砲があり、ただ守るだけではそう遠くない未来にこの要塞は抜かれるだろう。自然休戦までここを守るだけであるならば、もしかしたら幾つかの幸運で可能であるかもしれない。だが、そんなことを許すような戦狂姫ではないと誰もが気付いている。

だからこそ、レクティファールはこの窮状にあって敢えて攻めに転じることを決めたのだった。

白狼越えという史上初の試み、それ故に用いる軍団は選りすぐりの精兵が集められていた。当然個人ごとではなく部隊単位だが、それでもグードルデン第一軍団はこのとき皇国で最も優れた軍事集団だっただろう。

しかし、ガラハが唯一連れていかなかった兵種がある。

砲兵だ。

今回の白狼越え、鈍重な砲を牽いていては間に合わないと判断したのか、ガラハは砲兵の総てをレクティファールに預け、その代わりに高威力魔法を行使出来る高位の魔導師を軍団に組み入れた。

元々数の限られる魔導師の代替として発達したという歴史を持つ皇国砲兵は、野戦や攻城戦などで大きな戦果を挙げてきた。やがて軽量で馬が牽く騎兵砲や動力車に載せられた砲も作られ、機動力を求められる騎兵部隊にすら砲兵は不可欠な存在となっていた。

しかし砲兵がどれだけ機動力を培っても、砲という彼らの存在意義が大荷物であることには変わりが無い。厳しい環境を乗り越えなくてはならない白狼越えには普通の馬に乗る騎兵さえ連れていってもらえず、寒さに強い陸竜や幻想種の天馬、一角馬、八脚馬などを運用する騎兵部隊のみがガラハの指揮下に入った。

普通の将ならレクティファールに遠慮して軍団を編成するものだが、ガラハは軍団編成の許可を得るとそんな遠慮や心遣いなど一切無く、これ以上無いというほど厳格な基準で部隊を選び出して軍団とした。

それだけの精兵が揃っているからこそ、僅か数日の訓練で軍団として纏まったのだとレクティファールは思っている。そう考えると、ガラハの判断は正しかったのだろう。

「帝国軍の動きは」

レクティファールの問いにこの場で筆頭の参謀――――要塞防衛軍次席参謀ハルエリオ・ハルアリオ大佐が答える。

要塞防衛軍の参謀長はガラハに同行してしまい、彼女が参謀たちの中で最も上位になる。ハルエリオ・ハルアリオは起立すると、レクティファールの前方に幾つかの情報を投影した。

真っ赤に染め抜かれた帝国軍と青く塗り潰された自軍の配置図。

要塞前方に布陣している圧倒的な数の赤に対し、青は余りにも少ない。レクティファールはその配置図を見て、少しだけ顔を顰めた。

「帝国軍はこれまでと同様に我が要塞前方に布陣、波状攻撃を仕掛けてきております。隠蔽砲塁も幾つか破壊されていますが、第三防衛線を突破されてはいません。ただ、このまま攻撃を続けても敵の損害は増えるばかり、恐らく『ウィルマグス』の巨大攻城砲――『ムジョルニア』の発射を待っているのではないかと考えられます」

便宜上『ムジョルニア』という名を与えられた帝国側の対パラティオン用の巨大攻城砲。これが帝国の切り札であるということは皇国側の常識になっていた。

しかし、要塞から直接『ムジョルニア』を攻撃することは出来ないし、正面の帝国軍を突破することも出来ない。

手も足も出ないとはまさにこのこと。それでも何とか『ムジョルニア』を無力化しなくてはならない。その為に白狼越えという前代未聞の大博打を打つ羽目になったのだ。成功すれば大陸の戦史に残る作戦だろう。

グードルデン第一軍団が白狼山脈を越えて『ウィルマグス』に攻撃を仕掛ける予定日まであと三日。それまでは何が何でもパラティオンを突破されるわけにはいかない。

たとえ『ムジョルニア』を破壊してもパラティオン要塞が突破されれば意味はない。逆にパラティオン要塞がどれだけ正面の帝国軍相手に持ち堪えても、結局は『ムジョルニア』を落とさなくては結局負ける。皇国は土壇場に追い詰められていた。

「防衛部隊の配置は」

「各堡塁にそれぞれ一個中隊以上、さらに要塞前に第二〇三、二〇四の各師団を中核にして防衛線を敷いています。要塞には第二〇六七旅団を始め三個旅団を配置しました。それに伴い、予備はもう一個師団分もありません」

「予備は旅団規模で運用するしかないか。苦労をかけるな」

「いえ、司令官閣下の軍団が抜けた穴を埋めるには出し惜しみなど無理なことです。殿下のご采配に間違いはありません」

ハルエリオ・ハルアリオの言葉に何名かの参謀が頷く。ちらりと見てみれば、リーデも小さく頷いていた。

元々の要塞防衛軍は二〇〇〇〇を超える程度であったが、今の四一〇〇〇が多いということはない。帝国軍の数が予想の数倍に増加した時点で元々の戦力で対抗することは不可能になったのだ。

レクティファールが援軍を率いてこなければ、パラティオンは『ムジョルニア』の登場を待つことなく陥落していたかもしれない。ガラハが良将であることに疑いはないが、たった一人の将帥に総てを任せるような軍隊が国家を守れる筈もないだろう。

「各部署には私の名前で督励を。引き続きこれまでの方針通りに防衛線の維持を続けるように」

「了解しました、殿下」

ハルエリオ・ハルアリオが頭を下げ、部下たちに指示を出していく。

レクティファール自身は何の軍事教育も受けていないから、彼自身が直接指示を出すことは出来ない。尤も、司令官とは決断の責任を負うための存在だから、大凡の方針さえ示せば後は幕僚たちの仕事だ。

にわかに慌ただしくなる司令室の光景を見ながら、レクティファールはこうして相対することになった敵将のことを考える。

グロリエ・デル・アルマダ。

まさに戦う者として生まれてきたかのような戦歴の持ち主で、帝国が祀る軍神“アーリ”の娘とも言われているらしい。レクティファールのようになし崩しに軍の司令官に座った訳ではなく、幼少の頃から“そうなる為”に教育されてきた、まさに戦いの申し子。

戦況図を見ても、手持ちの火力を一点に集中させてこちらの拠点を一箇所一箇所的確に潰してきていることが分かる。

要塞というのは各拠点が相互に支援を行えるように配置されているから、何処かの拠点が失われれば当然その分の負担は別の拠点に掛かる。そしてその過剰な負担で動きの鈍化した拠点を次の目標にして火力を集中、そしてその火砲の援護の下歩兵が突撃し拠点を落とす。

言葉にすればこれだけのことだが、拠点の配置などから最も効率のいい侵攻路を選び取っている辺り、これは教育の賜物というよりも生まれ持っての勘――――言うなれば天賦の才に近いものだとレクティファールは思っていた。

こんな人物を相手にして戦わなくてはならない自分の運には呆れるばかりだが、一度責任を負ったからには投げ出すことは許されない。

今使える総てを使ってこの状況を打開する。

それが今のレクティファールの仕事、酷く難しい仕事だった。

グロリエは本陣の中心に置かれた自身の天幕で唸っていた。人払いを済ませた天幕に彼女以外の姿はない。

戦況に変化はない。しかし、変化がないということが彼女に言い様のない不快感を覚えさせていた。

彼女は『ウィルマグス』上空に侵入した正体不明の飛行物体が皇国の偵察騎であったのだと半ば確信している。これは“勘”と言うしかないようなものであったが、彼女はこの“勘”で数多の戦場を勝ち抜いてきた。

祖母の言葉を信じるなら、この“勘”は本能と言うより経験に裏打ちされた無意識の計算のようなものだということだ。

これまでに経験した情報が意識内で無意識に演算され、現在の状況とその演算結果を照らし合わせている。その照合結果が“勘”という形でグロリエに危険を知らせている。

祖母の言うことであるから的外れではないのだろう。だが、彼女にはそれを容易に認めるだけの経験はない。

いや、たとえ認められてもそれは彼女の戦術にどのような影響も与えなかっただろう。

グロリエの基本戦術はその性格に似合わず実直そのもののそれで、敵の数倍の戦力を用意してはそれを相手の最も弱い場所に叩き付けるというものだ。

ただ、その叩き付け方が尋常ではない。

相手が最も嫌がる場所を見つけ出し、敵が最も嫌がる時期に叩き付ける。

これをほぼ完全に成し遂げられるからこそ、この年齢でこれだけの地位にいると言っても過言ではない。

だが、そんな彼女だからこそ今回の皇国の動きが何とも不気味に映るのだろう。

こちらの必勝策を知っていながら手を出してこない。少数部隊による浸透戦術でも使うつもりかと警戒は強めているが、これまでの報告を纏めてみればその動きもないという。

「――――嫌な相手だ」

もう一人の帝族元帥である兄バレストローラによく似た戦い方。

彼女の兄は徹底して外堀を埋めてから直接戦闘に打って出るタイプで、実際に戦闘が始まる頃には既に戦い全体の決着が付いている。

兄の思惑に気付いたとしても、その時点から戦局をひっくり返す

など殆ど不可能に等しいのだ。

そんな兄を見てきたからこそ、グロリエはいっそ狂信的と言っても良いぐらいに戦力の一点集中戦術を多用する。例え戦場全体で不利な状況に陥っていても、一箇所ごとに有利な状況を作り上げていけばやがて戦場全体の戦局も変えられると考えたからだ。

兄はそんなグロリエの戦い方を見て朗らかな笑みを浮かべていたが、その実彼女を見る目は鋭いままだった。いつか帝位を巡って争う運命にある妹の成長を兄がどのように思っているか、想像することは容易い。

帝国の帝族の歴史とは、そのまま血みどろの帝位争いの歴史だ。

親が子を、子が親を殺し、兄弟同士、親戚同士でも謀略暗殺が日常的に行われてきた。

グロリエの父であるクセルクセス一〇世も、兄弟姉妹を手に掛けた上、当時の時期帝王最有力候補であった前帝王の弟、つまりは叔父を暗殺して玉座についた男だ。

今でこそ父王の威光が皇子や皇女の争いを抑え付けているが、その父王も既に齢六〇を越える。例え崩御しなくとも、病臥するようなことになれば彼の子どもたちは跡目を巡って争うことになるだろう。

クセルクセス一〇世はグロリエを一等気に入っているが、それでも自らの後継者に指名するような真似はしない。そんなことをすれば他の皇子皇女が手を組んで自分とグロリエを排斥しようとするかもしれないからだ。

自分を暗殺し、その濡れ衣をグロリエに着せる。

それだけで自分たちの手元に帝位が転がり込んでくるのだから彼らは間違いなくやる。

まだ時期帝王である皇太子が決まっていないからこそ、水面下の争いで済んでいるのだ。

「――――我が国の現状を知ったら、あの摂政とて声を上げて笑うかもしれないな」

実は、つい一〇年前まで帝国には皇太子がいた。

現帝王の第一皇子、ディトリア・ファス・アルマダ。

当時時期帝王確実とまで言われた彼は突如として皇太子の地位を捨て、この皇国との最前線に接する王国の国王となった。

国王といえば聞こえは良いが、所詮『ウィルマグス』を始めとした帝室直轄領に国土の二割を奪われた帝国内の小国の王に過ぎない。

或いは、ディトリアがいれば時期帝王を巡る争いも小さなもので済んだかもしれないが、彼は既に帝位継承権を放棄している。それによって次期帝王争いは幾人もの帝族が犇めき合う団子状態に陥り、未だ数名の有力候補を出すに留まっている。

その有力候補であっても、他の候補から隔絶した勢力を持ってい

る訳ではない。

グロリエは軍の一部若手将校と父王の権威で有力候補の一人とされているが、所詮は最小派閥。第四皇子バレストローラは軍の過半の支持を受け、さらに第一皇女パルイエットが有力貴族たちの支持を、第二皇子ガルガイアンは大商会とそれと取引のある職業組合の支持を受けている。

およそ次の帝王はこの四名の何れかだと思われているが、他の帝位継承者が有力な後ろ盾を手に入れることが出来ればまだ状況は変わるだろう。

さらに、帝位継承権を放棄したディトリアには息子と娘がいる。

嘗てディトリアを支持しており、現在も旗色を明らかにしていない有力貴族や軍高官はこの子供たちを神輿にしようとしているという話だ。

帝孫ともなれば当然帝位継承権はある。

元皇太子のディトリアが本気で子供を帝位に付けようと思えば、他の有力候補を推している勢力のいくらかはそちらに靡くかもしれない。息子か娘が帝位に付けばディトリアは帝父となり、帝国の実権を握ることも出来るのだから無理もないだろう。

しかし、ディトリアはその気配を見せていなかった。継承権の放棄以来自分の国に引き篭もり、細々と国を取り仕切っているだけだ。

グロリエとしてはいっそディトリアに立って貰いたいとさえ思っていた。

この拗れに拗れた帝位継承争い、これを終わらせることが出来るのは父王かディトリアのどちらかしかいない。

だが、それは土台無理な話だ。

ディトリアが帝位継承権を放棄した本当の理由――――帝国では人として認められていない獣人の娘を妃として娶ったという現実がそれを邪魔する。

父王こそそれを擁護しているが、頭の固い貴族などは公然と国是に反したディトリアを暗殺しようとさえした。

獣人族とはいえディトリアの妃は軍で大いに活躍した英雄。しっかりとした段階を踏めば正式に皇太子妃として認められていたかもしれない。だが、ディトリアは妃とその腹の中にいた娘を守るために帝位継承権を放棄し、望んで辺境の王国に封じられる結果となった。

この結果に何人の兄弟姉妹がほくそ笑んだのか、グロリエには分からない。

当時一〇歳にもならなかったグロリエは、大人たちの権力争いから遠ざけられていた。

ただ、ディトリアが帝都のイードヴェリウム宮を去ったあの日、彼女は兄が何処か晴れやかな顔をしていたのを覚えている。

今なら当時の兄の気持ちが多少理解出来る。兄は身内のくだらない争いに嫌気が差し、そのくだらない争いに自分の家族が巻き込ま

れることを恐れたのだ。

自分の身一つで片が付くなら良い。

だが、生まれてもいない子供や細君が巻き添えとなることは許容出来なかった。きっとそういうことだ。

そこまで考え、グロリエは天を仰いで眉間を揉み解す。

「――――今そんなことを考えても仕方がないか」

さらに軽く頭を振ったグロリエは、ともすれば脇道に逸れようとする思考を無理やり引き戻し、目の前に置かれた戦況図に目を落とす。

これまでの攻撃で要塞の防衛線を幾つも突破している。

しかし、相も変わらずパラティオンそのものが揺らぐ様子はない。確かに要塞前方に点在する防衛拠点は落としているが、要塞本体には殆ど傷を負わせていないのだから当たり前だ。理想を言うなら、“雷霆”の投入前にある程度の決着を付けておきたかった。

要塞に肉薄した状態で“雷霆”を投入し、相手が抵抗出来ない内に要塞を突破する。

一度要塞内に突入出来れば、数に物を言わせて内部から要塞を乗っ取ることだって出来るだろう。

グロリエとしては、出来るだけ兵士たちに死を強要したくはなかった。

彼らの仕事が死ぬことだとしても、無意味に殺して良い兵など一人もいない。死ぬのなら意味のある死を与える、これこそが彼女の仕事の筈だ。

しかし、彼女の仕事を単純に勝利することだと思っている将帥のなんと多いことか。

自分に気に入られるためだけ、たったそれだけのために自分の下にいる兵士たちに無意味な死を強要している数名の将軍の顔を思い浮かべ、彼女は大きく溜息を吐いた。

官僚的と言っていいだろう。

許されている限度一杯まで権利を行使する割に、義務は最低限しか果たさない彼ら。グロリエ個人としては部下を好き嫌いで判断したりはしないが、あれが父の臣下であると思うと暗澹たる気分にもなる。

次期帝王に決まった訳でもないのに国家の行く末を案じる自分に苦笑しつつも、今のこの国の状況は冗談では済まないかもしれないとも思い始めていた。

日々皇国と相対し、皇国兵の姿を見てその気持ちは大きくなるばかり。

徴兵され、基本のみの速成訓練を受けただけの新兵さえも最前線に投入する帝国と、年単位の訓練を終えた志願兵のみで構成された

皇国軍。

その軍隊としての質の差は最早隠しようもない。

グロリエは時間さえあれば自分の軍集団に訓練を課して質の向上を図っているが、ある程度育つと他の方面に引き抜かれてしまう。

何度軍本営に抗議しても「大元帥陛下のご意思」と切り捨てられ、父に直談判して軍を掣肘して貰おうと思っても、その強固な官僚社会にはあまり効果が現れない。

軍の反応が鈍い理由の一つとして、娘の求めという弱い根拠では帝王とてそうそう強い態度には出られないということもある。

帝王は帝国の絶対的専制者だが、軍の総てを知っている訳ではない。軍人たちの逃げ道など幾らでもあるのだ。

「戦が長引けば、いずれ我が国は内部から崩れる」

グロリエは密かにそんな考えを持っていた。

西方戦線と東方戦線。帝国の抱える大きな戦線はこの二つだが、もっと小規模な戦場は無数にある。

皇国の西にある民主主義国家群とも小競り合いが続いており、このアルマダ大陸は帝国にとっての従属国家か敵対国家の二つのみが存在していると言って間違いない。

皇国も厳しい状況だが、帝国も常に崩壊の危機を内包している。

外征を行って領土を増やし、その土地から搾り取った富を国内にばらまいているからこその繁栄。

帝国は敵を作り国内を纏め上げる。敵がいなければ幻の敵を見せてでも、だ。

「国家が国家として生きるということは、有意義に見せかけた無意義を国民に見せ続けること」

グロリエにそう語ったのはディトリアだ。

彼は続けてこうも言っていた。

「そして良き元首とは、見せかけだけの無意義を有意義に変貌させる者を言う」

グロリエは自分の頭を撫でながらそう教えてくれたディトリアに、

「兄上は良き元首になるのか」

と問うた。

ディトリアは幼い妹の言葉に目を見開き、すぐに苦笑でそれを隠してしまった。

すでに次期帝王としての未来が決まりかけていた当時のディトリアにとって、グロリエの問い掛けはそれこそ有意義に見せかけた無意義だったのだろう。

良き元首とは“なる”ものではなく、あとから“なった”と評されるものだからだ。

どれだけ努力したとしても結果がどうなるかは分からない。

諸外国から見た良き元首が国内では独裁者であることも十分にあり得るし、逆もあり得る。

万人にとっての良き元首、良き君主とは存在しない。

皇国の民にとっての英雄、輝ける未来の象徴であるレクティファールが帝国にとっての悪魔、冥界への導き手であるように、グロリエは帝国の民にとって英雄として相応しい存在だが、皇国の民にとっては地獄の使者となる。

これこそが世界に充ち満ちる大いなる矛盾。

人々が“個”を得た瞬間にこの世に生まれた魔物。

多くの生命を喰らう、亡霊。

だが――――

「――――それは、人が人として繁栄するために不可欠な福音」

相手を殺し、犯し、奪い、虐げ、辱め、そして、産み、愛し、与え、慈しみ、讃えるための根源的欲求。

「ふふふ、兄上、最近余は少しだけ分かった」

他人を他人と思い、尚欲する心。

それこそが繁栄と崩壊の一因。

「滅ぼすか滅ぼされるかの戦いだというのにこうも心が満たされる理由……」

それは、欲する心が満たされ始めたから。

戦いたい、思う存分、自分の総てを賭して。

「――――兄上は義姉上を欲したから、義姉上で自分を満たしたくなったのだな」

自分はこの力を全力で揮える相手を欲し、あの男で自分を満たし

たくなった。

嗚呼、そのなんと愚かしく甘美なこと。

「欲することこそ人の根源であるというのならば、余は人としてあの男と戦うまでだ」

グロリエは立ち上がり、大声で従兵を呼ぶ、おっかなびっくり顔を出した従兵に自ら前線視察を行う旨を関係各所に伝えるよう言い付ける。

さらに外套と馬を引くよう命じると、彼女は天幕の外へと歩き出した。

「さあ、戦争の時間だぞ星の龍皇！」

天幕から踏み出した彼女の目に、青空が広がった。

グードルデン第一軍団は氷狼族の先導を受け、白狼山脈の中を縦横無尽に走る洞穴の中を進んでいた。

明かりを灯した兵士たちは閉塞的な行軍路に辟易としながらも、遥か遠くの帝国軍に聞こえるはずもないのに声を落として囁き合っている。さらに大型の駆動輪を持つ軍用車の奏でる機関音が静かに響いていた。

流石に精兵と言われる兵たちばかり集められているだけあって、行軍に乱れはない。さらに、この戦いに負ければ自分たちの国が蹂躙されることはよく分かっており、その士気も行軍中としては異例なほど旺盛だった。

国家の命運を懸けた大事な作戦に選ばれたという喜び。

それは彼らの自尊心を充たすだけではなく、感染病のように周囲に拡がっていく。その病の熱に浮かされた兵士たちの表情を行列の中央付近で眺めながら、私物である一角馬に乗ったガラハが隣を歩く氷狼に声を掛けた。

「まさか、こうして氷狼族と轡を並べて戦うことになろうとは……正直想像さえしていなかった」

「私も同じだ。こうして我が一族の土地に軍を入れるだけではなく、道案内まですることになろうとはな」

狼の姿ではあったが、流暢な人語が返ってくる。

ガラハには氷狼の見分けは出来ないが、この氷狼がグードルデンという名であるということは知っていた。

白狼山脈に入ってからずっと、この氷狼はガラハの傍にあったからだ。

「諸君らの頑固さと気紛れは前任者からよく聞かされたものだ。麓の子供が山に迷い込んだのを村まで送ってきたかと思えば、次の日には墜落した竜騎士と飛竜を死体の状態で要塞前に置き捨てる。付き合うには骨の折れる相手だと言っていた」

「我が一族とて、君たち皇国軍には手を焼いた。何処から迷い込んだのかは知らないが、我々を敵と勘違いして襲いかかってきたことがある。当時は帝国なんてものは無かったらしいが、北の蛮族とは戦争を続けていたからな。君たちの先達はよく山に迷い込んでいたよ。族長が本当にこれで国を守れるのかと心配したと聞いている」

辛辣な物言いではあるが、二人に悪意はない。

周囲の皇国兵はグードルデンの言葉に眉を跳ね上げたり肩を震わせたりと非常に分り易い反応を繰り返していたが、ガラハは常に同じ表情で淡々としていた。

グードルデンも同じように、淡白なものだ。

「ただ、北を氷狼族が守っていてくれたから、今の皇国はある。小官はそう思っている」

「私も、個人的には皇国の者共が嫌いじゃない。麓の猟師たちとは時折鍋を囲んだりもしているしな」

「ほう、それは……」

ガラハが面白がる様にグードルデンを見下ろす。氷狼はそんなガラハの表情に気付かない振りをして、言った。

「戦いが済んだら、一度麓の村に行ってみるといい。白狼雷鳥の肉などは非常に美味だぞ」

「氷狼族は必要最低限の獲物しか取らないと聞いていたが、何事にも例外はあるらしい」

ガラハはくく、と喉を鳴らした。

人にも個性がある。なら、氷狼にも個性があるのだろう。

そもそもこのグードルデンという氷狼は、人の姿になっては麓ま

で降りてきていたという。

ひょっとしたらガラハも何処かで顔を合わせたことがあるかもしれない。

「例外といえば、新たな皇王も例外的な皇王らしいな」

グードルデンの笑いを含んだ声。

ガラハはその問い掛けの意味に気付き、その表情を歪めた。

「ああ、皇王としてはいっそ珍しいほど――――」

そして、吐き捨てる。

「――――甘く、優しく、果断で……なのに限りなく残酷になれる、皇王に向かない男だ」

片や明確な侵攻意図を持って、片や国家の存亡を賭けて、共に全力で激突した両軍の損害は加速度的に増えた。

帝国側の膨大な物量に皇国は地の利と高い質で対抗し、帝国はその抵抗を圧し潰さんとさらにその重圧を高めていく。

新たに徴兵された帝国兵は所詮皇国など時代遅れの武器兵装ばかり使う蛮族に過ぎないと教えられ、実際に皇国兵が弩弓などを持っているのを見て密かに安堵していた。彼らはその安堵から来る優越感を胸に敵陣に向けて突撃を仕掛け――――しかし予想に反して次々と討ち取られた。

彼らは知らなかった。皇国兵の個人携行武器が弩弓であるのには明確な理由があり、それは皇国軍事技術の根幹を成している付与式の魔法術式だということを。

この技術には大前提となる一つの法則がある。付与出来る術式の量は付与対象となる物体の質量と材質に影響するというものだ。刻める術式の量は対象となる物体の質量に比例し、また無機物よりも有機物の方が刻める量が多い。

つまり銃の弾丸よりも弩弓の矢の方が多くの術式を付与でき、その分威力や命中性能が優れるということだ。

無論弾丸や弓を発射する装置の側にも術式を刻むことは出来る。しかし一度発射した弾や矢はそれそのものに刻まれた術式に従って威力を発揮するので、発射装置に刻まれる術式とは基本的に発射速

度の向上と弾道の安定化に重きが置かれる。

無論、銃などは発射速度が上がれば威力が増すという面はある。しかしその質量の小さい弾丸に付与出来る術式は少なく、最終的には弩弓と矢の方が高威力となった。

弾丸の場合は相手兵士の持つ護法術式を突破するのに何発も撃ち込まなくてはならなかったが、術式付与された矢は一発で相手の護法術式を貫くことが出来る。さらに弾丸を誘導することは出来ないが、矢なら刻んだ術式で敵を追尾することが可能であった。

しかしながら、それだけの術式を刻めば兵器一式辺りのコストは上昇する。

低コスト低性能の銃か、高コスト高性能の魔動式弩弓か。

帝国のように質よりも数を優先する軍隊なら前者の方がその体質に合っており、皇国の場合は高コストであっても兵士一人辺りの戦闘能力が高くなる後者を選んだ。

帝国の場合は術式付与技術に劣っているという面も確かにあったが、何よりも皇国兵に比べて“死に易い”兵士一人一人に金を掛けることを避けたという側面もある。

経験の浅い帝国兵が思っているように帝国の銃が皇国の弩弓に比べて優れているということはなく、彼らがそれを知るにはまず生き残らなくてはならない。そして生き残ることが出来たのなら、今度は自分たちの武器が相手より劣っているという劣等感、そして恐怖と戦うことになるのだ。

古参の帝国兵は自分たちの持っている武器が、信用は出来るが、決して優れている訳ではないと知っている。だから生き残れるし、皇国の弩弓は装弾数が少ないという弱点を突くべく、攻撃に晒されながらもそれに耐えて反撃の機会を窺うことが出来るようになる。

そんな古参兵に率いられた帝国兵の一団は皇国の攻撃が緩んだ瞬間に壕を飛び出し、その銃を乱射しながら突き進んで行く。

混血種相手であるなら、人間種でも十分に戦える。混血種と人間種の違いなど、寿命と僅かな使用魔力の差くらいしか無い。

皇国の守る壕に飛び込んだ帝国兵たちは銃剣を振り翳して皇国兵に躍りかかり、次々と死体を生産していく。

生産される死体は皇国兵であったり、帝国兵であったり、一切の不公平なく均等に死が量産された。

死は常に平等で、これだけは誰にでも訪れる。

帝国兵はそれを実感しながら皇国兵を殺し、次の瞬間には別の皇国兵に殺された。

そんな光景が繰り広げられ、パラティオン要塞前の激戦区には血と硝煙の匂いのする空気が充満した。時間が経てばこの匂いは腐った肉の匂いに変わり、そして最後には人々の記憶から消え去る。

雄叫びを上げながら巨人族の兵士に飛び掛る帝国兵。その帝国兵はすぐに巨人族の巨大な腕に捕まり、背骨をへし折られて絶命した。だが、仲間の仇を討つというよりも、自分が死にたくないと願う別の帝国兵たちが次々と巨人族の身体に飛び掛り、その体に銃剣や短

剣を突き刺していく。結局巨人族は十数人の帝国兵を道連れに息絶えたが、その姿を賞賛する者はいない。

死にたくない。だから殺す。

生物的に至極真っ当な欲望の花が乱れ咲き、殺し殺されるという光景は珍しくないのだ。

どれだけ英雄的に戦おうとも死ねばそこで終わり、相手に慈悲を掛ける余裕もなく。相手を殺して殺し多分自分が長生きするだけ。

初めて人を殺した衝撃に怯える帝国の少年兵は僅か数分後には歓喜の声を上げながら次々と皇国兵を殺す英雄となり、つい数分前まで部下を率いて英雄的に戦っていた帝国軍士官は、部下が全滅するや皇国兵に命乞いをする俗物に成り下がる。

英雄が生まれ、英雄が殺され、英雄が堕ちる。

戦場では賞賛される英雄が現れ、そして賞賛されない英雄が消える。

争いを知らぬ人々が英雄譚で読むような美しく身奇麗な戦いは、ここには存在しない。

戦場とは飢えれば屍肉を喰らい、渇けば血を啜る悪鬼の宴。

悪鬼は後に英雄と呼ばれるようになり、或いは殺人鬼と貶められるのだろう。

だが、ここには殺す者と殺される者の二種類しかいない。

まさに究極の不平等であり、至高の平等。

たった二人の指揮官が望んだ地獄がそこにあった。

レクティファールが前線視察という名目で各陣地を激励して回る間にも皇国軍の兵士は次々と死んでいく。

グロリエが馬を駆って兵士たちにその姿を誇示している間にも帝国軍の兵士は次々と物言わぬ骸に変わっていった。

これは正義の戦いだと両者は言う。

大義は我らにあると誇る。

敵を蛮族や獣と貶め、自らこそが正しいと叫ぶ。

どこの戦場でも繰り返された空虚な言葉の数々、それでも兵士たちはその言葉を信じて戦い続ける。

何故か、決まっている。

戦うに足る理由があるからだ。

生きるため、名誉のため、譲れないもののため、どれであっても命を賭ける価値がある。

相手を殺す価値がある。

相手の総てを否定する価値がある。

「ここより背後には諸君らの守るべき国、守るべき人々しかいない。そうだ、これほど分り易い戦いはない。退けばそれだけ我らの守るべきものが侵される、倒れればそれだけ我らの大切なものが奪われる、殺されればそれだけ我々の救いたい人が殺される。私を許せとは言わない、だが、今は後顧せず戦って欲しい。私は諸君らの奮戦を忘れない、この生命ある限り諸君らの命に報い続ける」

レクティファールは摂政としての仮面の下で、それでも嘘を吐かずに訴える。

言葉によって国民を殺すことはしよう。

だが、言葉によって国民を欺く真似はしない。

たとえ人々がレクティファールを虚言者として罵倒しようとも、自ら嘘は吐かない。

「我が帝国より約束の地を奪った魔獣共に正義を示せ。貴様らの献身に我が帝国は応えよう。諸君らが勝ち取った地は、誓って諸君らのものである。我らは奪うのではない、奪還するのだ。古に我らの先祖が奪われた肥沃な地、多くの知識、大いなる繁栄。ヒトの形を真似たヒトならざる者共から、あの日の暖かな日々を取り戻せ」

グロリエは帝国が掲げる理想を謳い続ける。

それが自分の理想であると信じ、兵士に理想に殉じろと命じる。

凍えぬ土地、豊かな資源、碧い海。

帝国の欲する総てがパラティオンの向こうにある。

「戦え」

二人は命じる。

互いに退けない理由があった。

退けば滅びる。

二人とも、それを許せる立場ではない。

戦わなくてはならない。

殺人者と罵られても、悪魔と貶められても。

それが時代の大きなうねり、逆らえぬ時の潮流。

戦いこそが今の時代。

戦いこそが正義。

少なくとも、今このとき、この場所ではそうだった。

軍靴の鳴らす地響きと喚声。

そして着弾の振動と悲鳴。

レクティファールは戦場の最中にあってそれを睥睨する。

眼下では帝国兵が吹き飛び、皇国兵が串刺しにされていた。

獣、そう獣のような争い。彼らを知恵ある者共などと呼ぶには抵抗さえ感じる。

「第一一二四砲塁は放棄。要塞第一〇九砲塔に援護要請。――――第四四地区より中隊規模の敵影」

「第四戦闘区域のベルゲイン中佐の大隊を差し向けろ、絶対に通すな！」

「は」

淡々と戦況を報じる情報分析官は機族の女性大尉。

機族は元々感情の起伏が乏しく、荒事を専門とする軍や衛視庁では情報分析官として非常に重宝されていた。予想外の事態に動揺するようでは分析官は務まらない。

彼女の言葉を聞きながら指揮を執っているのがこの最前線の陣地の責任者である陸軍少将。

初老の混血種で、手堅い指揮で定評のある男だった。

レクティファールの前線視察にこの陣地が選ばれたのも、おそらく彼の堅実な指揮官ぶりが評価されてのことだろう。

「――――殿下、ここもその内砲火に晒されます。パラティオンにお戻りを」

しかし、その少将を以てしても戦線を支えきれないらしい。

レクティファールは指揮官の役割として前線視察を行っているが、少将にとって戦えない人間は邪魔なのだろう。戦おうと思えば戦えないことはないのだろうが、レクティファールの仕事はそうではない。

戦況の把握は指揮官の大切な役割であるが、兵士の真似事をする

ことは指揮官の職分から逸脱している。

レクティファールもそれに気付いていたから、背後で自分を窺うリーデに小さく頷いてみせた。

「では、帰還の準備を始めます」

リーデがそう言って指揮所から去っていく、レクティファールはその後姿を見送ると少将に問い掛けた。

時間がないため、その質問は非常に簡潔なものだった。

「いつまで陣地を保持出来る？」

少将はレクティファールの言葉に少し考える素振りを見せたが、それでも気分を害したようには見えなかった。

彼も軍人として上役の不躾な質問には慣れていた。だが、こういう場面では実の伴わない激励よりも冷たい現実の方が有り難い。

「――――今日一日は保証致します。ですが、それ以上は保証しかねます」

これが少将の精一杯だった。

戦場に楽観論はいらない。

必要なのは最悪に近い現実を直視することで、それ以上でもそれ以下でもない。

レクティファールは少将の言葉に頷き、外套を翻して出口に向かう。

自分に出来る最上級の仕事をしている少将に余計な言葉は必要ない。

だが、レクティファールは出口で立ち止まり、呟くように一言だけ漏らした。

「あなたは良い指揮官だ。そして、あなたの部隊は良い部隊だ」

レクティファールのような素人が口に出来る賞賛など彼らにとってどれ程の意味があるのか分からない。

しかし、自分の命令で死ぬ人々にレクティアファールは最大の賛辞を送りたかった。

少将は特に感情を表さないまま頷き、レクティファールを促す。

「部下にも伝えましょう。御武運を、殿下」

「ああ」

少将は小さく頭を下げ、すぐに指揮に戻った。

レクティファールは随員を伴って指揮所をあとにする。

カツカツと打ち鳴らされる靴音が廊下に響き渡る中、随員の一人がふとレクティファールの顔を覗き込む。

その表情に変化はなかった。

愚直なほど真っ直ぐに前だけを見ている。

しかし、何かに急かされているようにも見えた。

レクティファールは誰にともなく問う。

「ガラハ中将の軍団が『ムジョルニア』攻撃を開始するまであとどれくらいだ」

随員の一人、少佐参謀が答えた。

「あと一日半と言ったところでしょう。遅滞なく進行中とのことですので」

「――――そうか」

レクティファールは短い諒解の返答だけでそれ以上の言葉は発しなかった。

それから丸一日、ガラハ率いるグードルデン第一軍団が白狼山脈を越えて『ウィルマグス』を眼下に収めた頃、事態は動き始める。

彼ら第一軍団の前に威容を見せ付けていた巨大な斜塔。

帝国軍の切り札である“雷霆”――――皇国側名称『ムジョルニア』が突如火を吹いたのだ。

第二五話「龍虎戦役　中編」

グードルデン第一軍団が白狼山脈を越えた。

双眼鏡を構えたガラハの眼下に広がる雪原に鎮座する城塞都市は『ウィルマグス』、そしてその傍らに巨大攻城砲“ムジョルニア”。

“ムジョルニア”の砲身は巨大で、ガラハに同行していた参謀の何名かはその姿に呻いている。

熱を持っているのか、或いは冷却水が蒸散しているのか、濛々とした水蒸気を纏った“ムジョルニア”の威容はまさに圧巻。

砂粒のような作業員の姿と比べれば、その大きさが嫌でも分かる。

「計算出ました。砲身長一二〇メイテル超、本物のバケモノです」

携帯測距儀を覗いていた砲術参謀がガラハに報告する。

恐らく現在の帝国が建造出来る兵器としては最大級だろう。これ以上の大きさでは構造物の強度が足りず砲身がへし折れる。実際“ムジョルニア”も鉄骨で組まれた架台に砲身を横たえており、これでは可動式にするのは不可能だ。

これだけの兵器を持ち出させたパラティオンを褒めるべきか、それともたった一つの要塞を突破するためにこんなものを建造した帝国を賞賛するべきか、正直ガラハは判断に迷った。

「侵攻路はどうする」

ガラハは双眼鏡を覗き込んだまま幕僚に問うた。

問われた作戦参謀と戦務参謀が幾つか言葉を交わし、作戦参謀がガラハに策を上げる。

「この位置からでは『ウィルマグス』が邪魔です。当初の予定通り、都市内の協力者と合流して『ウィルマグス』の占拠から始めるべきかと。“ムジョルニア”攻略中に背後から攻撃されては全滅の危険性もあります」

ガラハは作戦参謀の策に頷いた。

彼の思い描いていた絵図と一致したからだ。

『ウィルマグス』の住人には亜人種も多い。そんな亜人種の中には城塞都市『ウィルマグス』の建設当初から帝国への抵抗運動を続けている者たちもおり、ガラハを始めとしたパラティオン要塞司令官は代々彼らと繋がりを保ち続けてきた。

件の城塞都市は対皇国の最前線基地というだけあって、皇国方面

へ向かう人や物資は必ずと言っていい程この街を通る。皇国側がこの街に間諜を配置するのは当然の成り行きだった。

しかし、今回の“ムジョルニア”に関しては殆ど情報が入ってこない。“ムジョルニア”周辺の警備が厳重で、協力者や間諜が情報を集められなかったのだ。

皇国の“ムジョルニア”に対する破壊工作を警戒しているのだろう。常に警備兵が周辺を巡回しており、ただ迷い込んだだけの街の住人さえ問答無用で射殺されるほどの警備らしい。

予定では今夜、都市に住む協力者と合流する。その協力者の手引きで数個分隊を潜入させ、主要施設の動力源を絶ち、城門を内部から開く手筈になっていた。

「装備の点検を急がせろ、早ければ今夜、奇襲を仕掛ける」

「は」

時間がない。

ガラハは正しくそう認識していた。

そう、認識していたのだ。

だが、彼の思惑はその数時間後にあっさりを覆される。

彼の下に駆け込んできた伝令が、“ムジョルニア”周辺に動きありと報告したのだった。

「状況は！？」

報告を受け、すぐに“ムジョルニア”を見下ろせる崖の上に現れたガラハは既にその場にいた砲術参謀に問い掛けた。その表情は焦燥に染められており、冷静沈着を地で行くガラハにしては珍しい表情だった。

砲術参謀も密かにそんな感想を抱き、それでも自身の職務を全うした。

「見張りの兵からの報告ですと、五分ほど前に警報が鳴り、作業員が一斉に退避したとのことです。私がこの場に来たときにはすでに作業員の姿はなく、観測機器が“ムジョルニア”を中心として半径五〇〇メイテルの魔力の収束を確認。現在も魔力の収束は続いています」

「発射の前兆ということか」

ガラハは苦虫を噛み潰したかのような表情で呻いた。

皇国の魔力変換技術であればこんな広範囲の魔力を収束させる必要はない。だが、帝国の技術ではひたすらに広範囲の魔力を集め、

皇国に較べて非効率的な変換をしなくては十分な出力を得られないのだ。しかも帝国の軍事技術で魔動機関は補助に過ぎない。

ガラハは双眼鏡を覗いて“ムジョルニア”を見下ろした。

巨体が小さく蠢いているのは、恐らく照準の微調整をしているのだろう。完全固定砲台といっても架台に油圧の変位制御装置でも取り付けてあれば微調整位は出来る。

このとき身動ぎする“ムジョルニア”を見たガラハの心には、一種の諦念が浮かんだ。

（間に合わない）

幕僚たちが急いで攻撃の準備を整えていることは知っている。

しかし、分解して運んできた装備や軍用車の整備にはまだまだ時間が掛かる筈だ。

歩兵と騎兵のみの突撃で落とせるほど、『ウィルマグス』は柔ではあるまい。

「閣下！　攻撃を！」

息急き切って走ってきた作戦参謀がガラハに訴える。

ここで攻撃を仕掛ければ砲撃を中断させられるかもしれない。

だが、それは所詮可能性。

全滅の危機を孕んだまま攻撃を仕掛けるにしては、危うい賭けだ。

「――――――――……」

幕僚たちの懇願するような視線を受け止めたガラハは、それでも頭を振った。

まさに断腸の思いだった。

「――――――――攻撃はしない、予定通り今夜の攻撃に備えろ」

「閣下ッ！」

作戦参謀が尚も言い募る。

「パラティオンと殿下に何かあれば、ここで我らが勝利したとて無意味！　ここは我らが悉く討死しようと攻撃を仕掛け、“ムジョルニア”を破壊せしむるが上策かと！」

「上策、確かに今この瞬間ならそうかもしれん。だが、パラティオンはあの程度の木偶に容易く破壊されるほど脆くはない」

ガラハはその場の幕僚や兵士たちを睥睨した。

分かる。

帝国と相対している総戦力の三分の一、二〇〇〇〇もの兵力を持っていながら味方が砲撃されるのを隠れて見ているだけという苦痛は。

それでも、ガラハは確実に勝たなくてはならない。

ここで全滅すれば、次はないのだから。

「パラティオンを、我らが戦友を、摂政殿下を信じろ。そして、我らは我らの戦場で勝つのだ」

そう告げるガラハの背後で警報が鳴り響く。

物悲しい、悲鳴のような警報だった。

皆が一斉に“ムジョルニア”に目を向けた。

「――――あぁ……」

誰かが悲嘆の声を上げた。

そして――――

「――――――――――頼む」

持ち堪えてくれと誰もが願うその先で、“ムジョルニア”は大地が揺れるほどの轟音と巨大な砲炎を吐き出した。

南に向かって天空を駆け登る光弾。そして、“ムジョルニア”を中心に拡がっていく衝撃波。

ガラハたちの下に衝撃波が届く頃には、光の砲弾は空に消え去っていた。

「くッ」

誰かが膝を付いて蹲っていた。

己の無力に身を震わせ、拳を地面に叩きつけている。

「――――パラティオンに状況を確認しますか？」

通信参謀がガラハに尋ねる。

現在は通信封止が厳命されており、ガラハの許可無くしてパラティオンに通信を送ることは出来ない。

先程発射前に警告を発せなかったのも同じ理由だ。

通信が傍受されてこちらの存在が暴露されることは避けなくてはならない。防御体制を取った城塞都市をたった二〇〇〇〇で落とせるなどと思い上がるガラハではない。

「良い、攻撃の準備を進めろ」

ガラハはそう言ってその場を後にした。

背後では“ムジョルニア”の周辺に作業員が集まり、再度の発射に備えて点検と整備を行っている。次弾発射までの時間は分からないが、数分ということはあるまい。

恐らく数十分、長ければ一時間程度掛かるはずだ。

「――――……」

あの青年に持ち堪えられるのか、ガラハは自問した。

「愚問か」

そう、愚問だ。

答えなど決まっている。

「ここで負けるような男なら、それまで」

どちらにせよ国は滅びる。

ガラハは寒空の下、攻撃開始のときを待ち続ける。

パラティオン要塞側が正体不明の飛翔体に気付いたのは着弾の数秒前だった。

長距離対空探測儀に警戒速度以上の速さで飛び込んできた飛翔体に対し、要塞の対空機構を統括する演算器が自動で警告を発した。

耳障りな警報が要塞中に木霊する。

中央司令室でリーデを傍らに置いて戦況図を眺めていたレクティファールがその警報に気付き、司令室の天井近くに投影された探測儀の映像を見上げる。そこには高速で要塞に接近する光点。

「――――正体不明の飛翔体接近！　耐衝撃体勢ッ！！」

一階の制御卓の前にいた対空管制官が手元の受音器に向かって怒鳴る。

要塞中に響くその声にレクティファールが反応するよりも、光弾が映像の中央――――パラティオン要塞に接触する方が早かった。

「――――くッ」

接触の瞬間、身体が浮き上がるような衝撃と轟音が同時に襲ってきた。照明灯が非常灯に切り替わり、機器から火花が散って、投影された映像が大きく乱れる。

一階を見下ろす二階の端にいたレクティファールは、その衝撃を落下防止の手摺を掴むことで耐えた。

薄目で周囲を見渡してみれば、何処にも掴まっていなかった管制官や分析官が転倒するのが見えた。それだけではない。

「あっ」

レクティファールの隣にいたリーデが、バランスを崩して小さな悲鳴を上げていた。

彼女は手摺を掴もうとするが、何処かで爆発でも起きたのか再び大きな揺れが司令室を襲う。

「――え？」

その揺れのせいで彼女の身体は大きく揺れる。手摺に向けて手を伸ばしていたのが災いしてか、身体が前方に弾かれた。

伸ばした手は空を切り、彼女の身体は腰を支点にして手摺を乗り越える。

ぐるりと回転する視界に、リーデは混乱した。落下していることにも気付かなかった。

「……っ」

視界の下の方で――――つまりは上のほうで誰かが舌打ちをしたような気がした。

一体誰だろうと思う間もなく、彼女の身体を何者かが掻き抱く。
再びぐるんと回った視界が、全身に感じる温かさが、見上げた先の月色の瞳がそれを彼女に教えてくれた。

彼女がその人物に思い至った瞬間、ふわりと軽い重力が弱々しくその身体を地面に押し付けようとする。

細く軽い彼女の身体を抱えて一階の床に着地したその人物は、リーデの顔を確認して一言訊いた。

「大丈夫か」

下半身を彼の膝に乗せ、上半身を抱えられた彼女は嫌でもその瞳を見詰めることになる。

怖いくらいの無表情の中に、少しだけ揺らぎが見えた。

その揺らぎが何であるか、彼女は理解出来ないまま答える。

「ご迷惑をお掛けしました。大丈夫です、頭も打っていません」

「そうか。だが、念のため後で医務室に出頭するように」

「はい」

月色の瞳の男はリーデが立ち上がるのを見届けると、その場で叫んだ。

「損害報告ッ！！」

それを切っ掛けにして司令室内が動き始める。

椅子から投げ出されていた管制官と分析官が痛む身体を引き摺って自分の仕事場に戻り、次々と報告を上げ始める。

どの報告もパラティオン建造以来の大損害を伝えていた。

「第一長城の第二三区画に貫通孔確認。第二長城地下構造にも損害があります」

「緊急閉鎖機構が作動し、一次から三次までの動力供給線が各所で寸断されています。復旧予定まであと二分」

「飛翔体は第一長城を貫通後、第二長城地下構造まで到達した模様。第二長城地下連絡路にて融解した砲弾を確認しました。周辺を閉鎖後、爆発物処理部隊を急行させます」

「応急修理班を回せ！　手空きなら誰を連れていっても構わん！

暇そうなら上官でもいいから連れて行け！」

要塞保守を担当する保全参謀が声を張り上げて命令を下している。

彼もガラハに同行しなかった主任参謀の一人だ。彼の仕事場はパラティオン要塞以外になかった。

「殿下！　ここは危険です、地下の緊急司令室に移るべきです」

地下には分厚い装甲板と混凝土に囲まれたもう一つの司令室がある、リーデは自分の職務としてそう進言した。

司令部が一箇所に集中していては万が一の時に指揮を執る者がいなくなる。

レクティファールはその言葉に考える素振りを見せたが、ややあって頷いた。

「――――分かった、移動する者の人選を」

まさかパラティオンが血の匂い漂う最前線になるときが来ようとは――――リーデは唇を噛みながら上階へと戻る階段へ駆けた。

身体が勝手に動いていた。

いや違う、確かに手摺を乗り越える段階までは自分の意思だった。

だが、すぐに身体は全く別の意思に制御されるように慣性制御、運動制御などの魔法を使用してリーデを確保、そして緩やかに着地した。

本来なら無意識の本能とでもいうべきものが、恐ろしいまでに精緻な計算と演算によって成り立っている“何か”にすり替わっていた。そんな印象だ。

本来ならば――――これまでのレクティファールの身体能力であればこんな無茶は出来なかった筈だ。たとえ身体がそれを可能とするだけの能力を持っていたとしても、それを制御する意識が追い付いていないのだから。

しかし、今のレクティファールには一つだけこの動きを可能にする要素が加わっていた。

（これが“皇剣”か……）

使用者の意思さえも超越して無意識の願望を実現してしまう合一体の存在に、レクティファールは驚きと恐怖を感じた。

リーデを救いたいと願ったのはレクティファールだ。だからその願望を“皇剣”が助けただけなのかもしれない。

しかし、“皇剣”がレクティファールの意思を無視した可能性は否定しきれなかった。

“皇剣”はただ落下した使用者の身体を保全しようとしただけで、リーデを助けられたのは運が良かっただけなのかもしれない。

どちらにせよ、使用方法を知らない使用者にとって“皇剣”とは諸刃の剣以外の何ものでもないということだ。

“皇剣”は使用者以外の保全を目的としていない。ならば、使用者を守るためなら他の総てを切り捨ててでもその目的を達成する筈。

（――――冗談ではない……！）

レクティファールは自らの身など重要視していなかった。

彼が守るべきは他者であり、自分とはその為の手段でしかない。

対して、“皇剣”はレクティファール自身こそが守るべき対象であり、目的だ。

この致命的なまでの齟齬が表面化するようなことがあれば、レク

ティファールは自身の手で守るべき対象を害するかもしれない。まさに冗談では済まされない。

ならば――――

「――――――――手懐けろと、この力を……」

大都市を一瞬にして“消滅”させるだけの力を、この世界に対して絶対的な干渉能力を持つ神族さえも殺しうる力を、条件さえ揃えれば一〇〇万の軍勢さえも手玉に取るこの力を。

その事実に、レクティファールは意識がずしりと重くなったような気がした。

それでもやらなくてはならない。

やらなくては、諦めた意味がない。

無意味な諦めは、ただの放棄に堕するのだから。

「――――いいでしょう、面白い」

諦めの良さに関しては自分でも異常なほどだと思っている。ならば、最初から諦めたつもりでいれば怖いものなどあるだろうか。

諦めればこれ以上落ちる心配はない。後は適当に登っていくだけ

だ。

ひゅう、という風切り音が聞こえて来てすぐ防護障壁が輝き、パラティオンの城壁に大輪の花が咲いた。

期せずして巻き起こる兵士たちの大歓声。

グロリエは望遠鏡でパラティオンの姿を見ていたが、黒煙に包まれた着弾部分を確認することは出来なかった。

「――――どうだ」

砲兵幕僚に問うグロリエ。

自分の隣で同じようにパラティオンを遠望していた砲兵幕僚は無骨な印象を受けるその表情を変えることなく、自分の意見を述べた。

「防護障壁は抜きました。ですが、その為に砲弾はひたすら貫通力を求めた護法徹甲弾。爆発による二次被害はあちらの応急保全技能次第でしょうな」

「だが、難攻不落のパラティオンに傷を付けたのは事実だ！」

「傷だけです」

相手に与えた大損害に興奮し、既にパラティオンを落とした気になっている同僚の幕僚に答える砲兵幕僚の声は冷たい。

まだ傷だけ、グロリエも同じ感想だった。

「傷を広げることは可能か」

「無理です。同じ場所に砲弾をぶつけるには空前絶後の運が必要でしょう。というよりも試写に近かった第一射が命中したことが奇蹟の範疇です」

「次弾発射までどれくらいだ」

「点検整備、ずれた照準の修正、次弾装填を含めて一時間と言った

ところでしょう」

砲兵幕僚の声に別の幕僚たちが気色ばんだ。

ここで一気に畳み掛けるべきだというのに、次の発射まで一時間も掛かるのが許せないらしい。

「もっと急がせろ！　一時間も相手に時間を与えては……」

「奴らは獣だ、手傷を負わされれば暴走しかねん」

先程までの興奮は何処へ行ったのか、幕僚たちの顔には逆襲を恐れる子供のような表情が見え隠れしている。

彼らは気付いたのだ、これで帝国は皇国を本気にさせたのだと。

最早先の皇王のように温和な外交政策は期待出来ない、殺すか殺されるしかない殲滅戦争に突入したのだ。

少なくとも彼らはそう思った。

「怯えるな。我らは勝利する、必ずだ」

グロリエも幕僚たちの考えが理解できない訳ではない。

だが、彼女にとっては今更のことだ。

皇国が温和に帝国に接していたのは先代皇王の意向。だが、次代の皇王はそうではないだろう。

あの男の本質はもっと危うい筈だ。柔和で滅多に“敵”と分類する相手を作らない反面、一度“敵”と認めた者に対しての慈悲など、欠片も持ち合わせていないはずだ。

一度顔を合わせただけだが、グロリエにはそれが理解出来た。

自分も同じだからだ。

「全く、敵手としてはこの上ないな」

グロリエは小さく呟く。

その声は誰にも聞こえないまま、空に融ける。

「砲兵幕僚、時間は気にするな、“雷霆”に予備がない以上、慎重にな」

「は、了解しました」

そう、帝国も後が無い。

“雷霆”の完成品はあれ一基。二号、三号と建造計画があったのだが、必要となる莫大な予算が確保出来ずに頓挫したと聞いている。

万が一にも“雷霆”が失われれば帝国の優位は一気に崩壊しかねない。

「さあ、我慢比べだ」

どちらかが先に倒れるか、グロリエは獣じみた笑みを浮かべた。

パラティオン要塞の損害は予想以上のものだった。

着弾の衝撃で要塞各所に魔力、電力、動力を含めた各種動力源を伝達する供給線が寸断され、帝国軍を有効射程内に収めている第一長城要塞砲の三割が発射不能となってしまったのだ。鉄壁を誇った防護障壁も動力源が満足に供給されていなければその能力は著しく

低下する。

地下の司令室に移ったレクティファールは要塞保全に全力を尽くすよう命令を下すと同時に、第二射、第三射の着弾に備えるよう要塞総てに通達した。

要塞兵はいつ自分の頭の上に砲弾が降り注ぐかという恐怖の中、必死の補修作業に走り回る。その甲斐あって要塞の機能が少しずつ修復され始めた頃、“ムジョルニア”の第二射が要塞上空を通過、要塞後方の平原に巨大な着弾痕を刻みつけた。

この砲撃によって要塞側は“ムジョルニア”の発射間隔をおよそ一時間と推定し、それに基づいて対処行動を取ることにした。具体的には発射推定時刻に近付いたら誘爆の危険性のある弾薬庫や重要区画を隔壁で閉鎖するなど、要塞に砲撃が命中した際に被害を最小限に食い止めるための行動だ。

ただ、この対処行動によって要塞側の動きは制限された。

保全参謀の下複数編成された応急修理班は隔壁で閉鎖され迷路のようになった要塞内を右往左往する羽目になり、医務官や看護兵は救護要請を受けても現場に辿り着けない。弾薬庫から弾薬を輸送するにも倍の時間を要するようになり、この事実はたった一発の砲弾が要塞に与えた衝撃とは、単純に破壊を伴うそれだけではないのだとレクティファールに示した。

続いて第三射が要塞に向けて放たれた。

巨大な破壊力を秘めた一発は防護障壁との衝突角度が深すぎたらしく、障壁を突破出来ずに要塞の手前に落ち、幾つかの堡塁に損害

を与えたが要塞本体に損害を与えるものではなかった。この事実に皇国は大きく安堵の吐息を漏らし、帝国側は帝国史上空前の巨大兵器の命中率の低さに地団駄を踏む。

“ムジョルニア”は確かにパラティオンに対して決定的な破壊力を有している。

だが、直線距離で三五キロメイテル以上離れたパラティオン要塞に命中する砲弾は二割。完全固定砲台、完全固定目標という攻撃側絶対有利の状況下での命中率としては低いと思われるが、実際には妥当な数字だ。

どれだけ第一射と同じ条件を揃えても、気候条件など人の手の及ばない要素は幾らでもある。ほんの少し気圧が変化して風が吹いただけで、砲弾は目標を逸れてしまうのだ。極端な話、少し回転の速さが変わっただけでも砲弾は動きを変えてしまう。

それでも帝国側絶対有利ということに変化はない。

このまま攻撃を続ければパラティオンが陥落することは確実で、帝国軍は要塞側の抵抗が減衰した瞬間を狙ってグロリエ麾下の第三軍集団主力を叩き付ければいい。

そうすれば鉄壁堅牢を誇ったパラティオン要塞は薄紙のような儚い抵抗の後、帝国の陽虎姫の牙によって貫かれてしまうだろう。それを防ぐためにも、皇国側は何としても要塞の防衛機能が生きている段階で“ムジョルニア”を無力化しなくてはならない。

レクティファールは事前にガラハと打ち合わせていた一つの策を実行するべく、決断を下した。

「打って出る」

レクティファールは臨時に招集された作戦会議の席でそう告げた。

事前に相談を受けていた数名の参謀以外、誰もが瞠目して口を半開きにしていた。呆れるというより、レクティファールの言葉を理解できないという表情だった。

九倍の兵力を誇る相手に対し、打って出る。

いや、要塞の維持を考えれば一二〇〇〇は残さなくてはならないから、さらに戦力差は開くことになるだろう。

非常識極まりない。

「殿下、それは本気で仰っているのですか。或いは本気だとして、既に決定事項なのですか」

ハルエリオ・ハルアリオ大佐が蒼白な顔そのままにレクティファールに詰め寄る。

レクティファールの相談を受けたと思われる数名の参謀――リーデを含む――を横目で睨むのも忘れない。

そんな要塞次席参謀の剣幕に、レクティファールは静かに反論した。

「おそらくガラハ中将は今夜『ウィルマグス』に夜襲を敢行するだろう。予定通りならな」

「ならば何故、今更打って出る必要があるのですか」

既に時刻は正午を過ぎる。

このまま持ち堪えていれば皇国は勝てるのだ。

ハルエリオ・ハルアリオに同調する参謀が頷く。

しかし、反論する参謀もいた。

事前に相談を受けていた参謀ではない、銀色の参謀飾緒を着けた

砲術科の参謀だった。

「殿下は『ウィルマグス』襲撃の報を受け取った帝国軍が救援に向かうことを恐れているのではないですか。グロリエ皇女の持つ最強の手札、重装近衛騎兵団は快速の上、重武装、そして練度も高い。この部隊がグロリエ皇女指揮の下『ウィルマグス』の救援に向かえば――――」

「帝国軍陣地から『ウィルマグス』までの道中に障害はない。さらに物資輸送のため道路も整備されている。騎兵の機動力は十全に発揮されるだろう。そこに歩兵部隊を追従させれば救援後に『ウィルマグス』の防御を固めることも出来る。そうなればもう陥ちない。我らの敗北だ」

砲術参謀の言葉を継いだレクティファールの言葉に場が静まり返る。

レクティファールは元々こんな会議で発言出来るほどの知識は持ち合わせていなかったのだが、参謀たちと打ち合わせを重ねるごとに“皇剣”の情報が引き出せるようになった。その情報によって現状に危機感を覚えた彼は、この策を事前にガラハと検討していたのだ。

グロリエの率いる近衛重装騎兵団の過去に一つの輝ける戦歴がある。

それは西方戦線で帝国側戦線が崩壊の危機に瀕したとき、近衛重

装騎兵団が長駆救援に駆けつけたときのものだ。

近衛重装騎兵団は一二〇キロメイテルもの長距離を僅か二時間半で移動し、勝利間近と油断していた敵方に大打撃を与えた。この損害により敵方は撤退を余儀なくされ、この戦いは帝国側の勝利で終結することになる。

近衛重装騎兵団の騎馬は総じて幻想種で、通常の馬では考えられない耐久力と持久力を持っている。これを専用の魔法馬具で増強しており、魔動式甲冑を纏った騎兵と合わせて帝国最強の称号に相応しい実力を誇っていた。

この最強戦力を『ウィルマグス』攻撃中のグードルデン第一軍団に向けさせる訳にはいかない。

グロリエと近衛重装騎兵団の相手は、要塞の援護を受けられるレクティファール側が請け負うべき仕事だ。

「これは皇国軍最高司令官としての決定事項だ。素人の策だと批判するも結構、だが、己の職務は全うして貰う」

素人の策。

確かにそうだ。だが、事前に参謀たちの意見を聞いた上で作成された作戦案に独特の素人臭さはない。

生来の性格か、レクティファールは自分の能力に関して適当に信用はしていても過剰な信頼はしていない。専門家と呼べる人がいる

ならその人物をまず信頼するし、その意見を受け入れる。

しかし、その前提とするのは自分の意見でなくてはならない。依存と信頼は違うからだ。

特にこのような状況下では、最高責任者が全責任を負わなくては部下が動揺する。失敗を恐れるような消極的な動きが出てきては、全てを崩壊させかねない。

レクティファールが最高司令官として命令を下した以上、この戦いで発生する諸々は総てレクティファールの責任となる。部下の失策も敗戦も、総て。

「――――――――」

レクティファールの策を認めたということだろうか、自分たちの職務を果たすために地図を広げ始めた参謀たちを前に、レクティファールは背後に信頼する二人の女性がいないことを寂しく思った。

彼女たちは近衛軍の士官と下士官であるため、この場に出席する権利を有していない。同じ理由で司令室にも入室出来なかった。

彼女たちは近衛軍部隊と共に待機しているだろうか。

レクティファールはそんなことを考えた。

この策を実行に移すとなれば当然、グロリエにとっても帝国軍にとっても最高の餌であるレクティファールが出陣する。近衛軍は設

立後初めて、手伝い戦ではなく最前線に立つ正統皇位継承者の護衛という最高の舞台で戦うことになる。

たった一個中隊の近衛軍部隊をこの場に集まった参謀たちが重視しているということはなく、部隊の布陣を検討しているときもあっさりレクティファールの本陣へと配置が決まった。一応最強種の一つとして名高い龍種とそれを殺し得る龍人族がいるのだが、一個人としての技量など万の軍勢がぶつかり合う戦場では邪魔者扱いらしい。常識で考えるなら、確かにそうだ。

それでも、本人たちが聞いたら顔を顰めるだろうな、とレクティファールは思う。

彼女たちはその性格はもとより、軍人だけあって自分の分というものを弁えている。しかしこうもきっぱりと“要らない”と断言されてしまえば気分を害することは間違いない。ただ、それを表に出さないだけだ。

（まあ、納得はしてくれるんだろうけど……）

メリエラはレクティファールの護衛という役目さえ果たせれば自分の評価は余り気にしないだろうし、ウィリィアも仕事に私情を挟んだりはしない。何よりこの戦場にはグロリエという、現在その存在が確認されている龍人族の中で最強の個体がいる。龍種であるメリエラも、龍人族であるウィリィアも戦況に影響を与えるだけの働きは出来ないだろう。

強いて言うならグロリエにぶつけるという戦術が考えられるが、

正直二人には荷が勝つ。

メリエラは龍種としては若すぎて未だ天敵に対抗しうる力を持っていないし、ウィリィアも個体としての能力が違い過ぎるという。これは本人たちが言っていたことだから間違いないだろう。

彼女たちの存在で近衛軍一個中隊をその実数以上に考えられるのは有難いことだが、過剰な期待は出来ない。参謀たちがレクティファールの護衛以上のことをさせようと考えなかったのも妥当な判断だった。

彼は参謀たちが次々と自分の立てた計画に肉付けをしていくのを見ながら、この瞬間に死んでいく兵士たちのことを考えた。

彼の策が実行されれば、要塞に篭るよりも多くの兵士が命を落とすことになるだろう。それが最終的に皇国軍全体の損害を抑えることに繋がるとはいえ、死なない運命の人物が死ぬことになるのは間違いない。

それも、作戦が上手く行った場合の話であり、作戦が失敗すれば今度は皇国総ての国民がその対象となる。

国家全てを賭けて賭博を行う。

君主たるものに許された、許されてしまった至高の賭け事だった。

それに気付いても尚その賭けを止めようとしないレクティファールは、このとき既に狂っていたのかもしれない。

要塞側の動きはすぐに帝国側にも知れた。

否、知れたというのは正確ではない。

要塞正面の門から続々と部隊が吐き出され、要塞前の平原に凹の字型の陣を敷いたのだから気付かない方がおかしい。

グロリエがその姿を遠望するまでもなく、要塞正面の本陣に摂政の紋章旗が翻る。

『摂政レクティファール此処ニ在リ』――――その旗は皇国帝国を問わずそれを示した。

それに気付いたグロリエは、馬の上で身体を折り曲げる。

「――――は、はは……ははははははっ！」

これ以上ないという程の歓喜が彼女の身体を充たした。幕僚たちが訝しげな視線を向けるも、彼女はそれを一顧だにしなかった。

狂おしいほどの情念に火照る身体を掻き抱き、彼女は白の紋章旗を見詰めた。恋焦がれる乙女の潤んだ瞳の先に、彼女の求めて止まない男がいる。

彼女自身、自分がこんなにもあの男を求めているとは思っていなかった。

戦って勝ちたいという武人らしい欲求の筈だった。

それがどうだろう。少し離れていただけでこうも苦しくなる。再び相見えることが出来ただけで歓喜に溺れる。まるで幾とせも離れていた想い人に再会したかのようではないか。

「敵、ああ、お前は余の敵だ！　だが何故、お前はそんなところにいる！」

余はここに居る、もっと近くに来い。

そんな遠くでは手が届かないではないか。

そんな遠くでは声が聞こえないではないか。

そんな遠くでは――――

「余の剣が届かないではないかぁ――――っ！！」

犬歯を剥き出しにし、彼女は吼えた。

そして背後に携えた『神殺しの神剣』を抜き放ち、遥か彼方の紋章旗に差し向ける。

熱に浮かされたその姿は絵画に描かれた戦女神のようで、周囲の兵士たちはグロリエを見詰めたまま視線を外せなくなった。幕僚たちもそれは同じで、彼らはグロリエの発する雌の匂いに興奮さえ覚えた。

グロリエがただの女であれば、彼らは果たしてその興奮と欲望を抑えきれただろうか。それ程の匂いだった。

男の本能を刺激して止まないグロリエはしかし、たった一人の男にその熱を向ける。

星の龍皇。

皇国次期皇王レクティファール・ルイツ＝ロルド・エルヴィッヒ。

「待っていろレクティファール！　お前が来ないなら余が行ってやる！　お前の血肉を喰らいにな！」

グロリエの咆哮に突き動かされるように、これまで温存されていた帝国軍主力がレクティファール目指して進軍を開始した。

このとき皇国歴二〇〇九年、黒の第三月一二日。

雪に染め上げられたファルベル平原にて、二九〇〇〇対三七〇〇〇の戦いが始まる。

龍虎戦役を構成する一つの戦い、第六次ファルベル平原会戦の幕開けだった。

第二六話「龍虎戦役　後編」

夕刻のファルベル平原に、剣戟の音、砲弾が炸裂する爆音、魔法が放たれる風切り音、そして兵士たちの喊声が響く。

会戦の開始から既に三時間が経過し、双方共に無視出来ない損害を負っていた。

「第四三七魔導中隊整列！　使用魔法『破砕弾（ブレイクブレット）』！　一点射三連！　構え！」

「使用魔法『破砕弾（ブレイクブレット）』！　一点射三連！　了解！」

中隊長の号令一下、レクティファールのいる本陣前の砲撃陣地に魔導師たちが整列。半数が膝立ち、残りが立ったまま前方に右手を翳す。左手で右手の手首を掴み、腕のぶれを防ぐ皇国軍魔法部隊の標準型射撃姿勢だ。

ずらりと並んだその右手の先に魔法陣が展開し、光弾が収束した。

バシバシと魔力が空気を叩く音が聞こえる。

「目標前方敵歩兵隊！　狙えぃ！」

「目標前方敵歩兵！　了解！」

魔導師たちが狙う先、帝国軍の歩兵部隊はこちらの意図を知ってか知らずか愚直なまでの直進をやめようとはしない。摂政という最上級の餌を前にして、当然と言えば当然の行動だった。

これまでの要塞戦とは違い、この会戦ではこれ以上ない程明確に目標が設定されている。設定したのが味方の指揮官ではなく敵方の指揮官であることが問題ではあるが、兵士たちにとってみればそんなことは関係ない。

富と栄誉が目の前に転がっている。取るべき行動は一つだった。

「帝国万歳」

「獣共に死を」

「グロリエ殿下に栄光あれ」

口々にそう叫び、軍靴で地面を揺らし、要塞砲や砲塁からの砲撃を散々食らいながら、真っ直ぐにレクティファールの首を狙ってくる。

帝国の民は皇国の民を野獣と呼ぶ。だが、この光景を見ても同じことが言えるのだろうか。

そもそも互いの命を求め合い、奪い合う姿に差などあるのか。

殺すことに正義や不義があるのか。

「ッ！！」

震える声を極限の意思で捩じ伏せ、中隊長は目の中に入り込んだ汗に痛みを覚えながら、敵を殺す命令を下す。

殺すか殺されるか、彼は選んだのだ。

言うまでもなく、殺す方を。

「――――テェッ！！」

一個中隊一二〇名の魔導師が一斉に放つ橙色の光弾。

それらは術者の意志に従い敵集団に突入、一定範囲の物体を例外なく、悉く吹き飛ばした。

連続する爆発。その度に巻き上がる砂利と礫、そして人間とその破片。

至極真っ当な破壊生成装置と魔導師を評する者がいる。

なるほど、確かにその通りだと思う。

身一つで幾つもの兵器を持っていることと同格の破壊活動をこなせる魔導師は、ある種の戦術兵器だ。

国家が総力を挙げて魔導師の教育を行うのは、兵器開発と同列にそれを考えている証左。自国の安全保障上欠かすことの出来ない要素だからだろう。魔導師の数を確保出来ない帝国が、魔法に拠らない兵器開発に多大な労力と予算を注ぎ込むのも妥当な判断だ。

「続いて使用魔法『集束拡散弾（クラスターショット）』！　曲射三連！　構え！」

「『集束拡散弾（クラスターショット）』！　曲射三連！　了解！」

復唱と共に、中隊魔導師が一斉に意識内の術式を入れ替える。

彼らは一個の兵器として、実に命令に忠実だった。

自分たちの放つ魔法が容易に他人の人生を狂わせることを知り、しかし。それを命令によって糊塗出来る彼らは幸せなのかもしれない。少なくとも、覚えた罪悪感の内何割かは他人の責任とすることが出来る。言うまでもなく、彼らの仰ぐ主君の責任に、だ。

「――ッテェッ！！」

中隊長の命によって術者の軛から解き放たれた光弾は、血のような鮮やかな赤。

その赤い光は帝国軍の兵士たちの頭上に侵入すると、一瞬停滞し、兵士たちが怪訝な表情でそれを見上げた瞬間、幾つもの子弾をばらまいた。

先程よりも広範囲で連続する爆発。

子弾一個あたりの破壊力は決して高くない。

しかし、兵士たちの四肢を引きちぎり、戦闘行為を不可能にさせることは出来る。当たり所が悪ければ死ぬこともあるだろう。

レクティファール目指して突っ込んできた帝国軍兵士がばたばたと倒れ、すぐに後続の同僚に踏み潰される。助けを求める声は富と栄誉を求める喊声に掻き消され、それでも自分の役目を全うしようとした衛生兵はそんな彼らの波に飲まれて職務を果たせない。

皇立軍事魔導研究所で開発された効率の良い軍事魔法は、確実に研究者たちの企図した通りの戦果を皇国に齎したといえるだろう。

だがそれでも、皇国側だけが敵方の死者を量産している訳ではない。

帝国軍第三軍集団所属の第〇八六重砲兵連隊は、パラティオン要塞前の皇国軍陣地のうち前線に近い一部を射程内に治めると、機械のように無感動な砲撃を開始した。

皇国側の展開した防御障壁を突破した何割かの砲弾が皇国軍陣地に爆炎の花を咲かせると、それを見ていた歩兵と騎兵がその陣地に向けて一斉に突撃する。

一個旅団一二〇〇名が守る皇国軍陣地に対し、このとき攻め掛かったのは約一〇倍の一一〇〇〇。砲兵の援護を受けながら皇国軍陣地に肉薄した工兵が柵や有刺鉄線、感知式地雷を取り払うと、その攻撃はさらに激しさを増した。

さらには重々しい足音と共に自動人形が進撃を開始すると陣地内の統制はいよいよ乱れ、命令の届く範囲が分隊単位以下の乱戦となった。

身体能力に優れる種族の兵士に対しては部隊単位で当たり、対して人間種と能力差が無い兵士に対しては近接距離の個人戦闘を仕掛ける帝国軍兵士。

兵士一人一人の装備では皇国側が上回っているが、それでも一〇

倍の敵を相手にして戦える程性能が隔絶している訳ではない。腕に覚えのある猛者はそれこそ一〇倍の相手を前に一歩も退かないが、混血種のように寿命以外人間種と変わらない兵士たちは次々と討たれた。

やがて旅団司令部だった堡塁にも帝国兵は侵入し、凄惨な屋内戦が展開される。

圧倒的な物量に押し流される司令部要員。

司令室という施設の最奥まで追い詰められた状態でもなお抵抗を続けるのは、人間種以外を人と認めていない帝国軍に投降することが死よりも辛いことだと知っているからだろう。幾らレクティファールとグロリエの間で捕虜に関する取り決めが為されていたとしても、最前線の兵士がそれを守ることは難しい。

彼らは思う。知られなければ良い、殺してしまえば良い、相手は人間ではないのだから、と。

自分たちを殺しに来る彼らを殺して何が悪い、と。

管制官として旅団司令部に配置されていた数名の女性士官が獣と化した帝国兵に組み敷かれ、それを防ごうとした別の皇国兵が殴り倒される。負傷し、それでも帝国兵と近接戦を演じていた獣人族の旅団長は、自分の部下である女性兵の悲鳴を聞いた瞬間決断した。

彼はすぐさま傍にいた通信兵を呼び寄せると、部下たちに陣地を放棄するように下令し、さらに上級司令部に送る通信文を伝える。

「『第九八陣地ハ失陥ノ危機ノアリ。カクナル上ハ、敵兵諸共当陣地ヲ砲撃サレタシ。我ラ命ヲ賭シテ皇国ノ礎トナラントス』」

要塞砲の砲弾には分厚い混凝土さえも貫く魔導徹甲榴弾がある。

旅団長はレクティファールのいる本営に対し、これまでは味方の損害を恐れて使用できなかったそれを自らのいるこの場所に撃ち込めと送ったのだ。

彼は窺うように未だ若い通信兵を見た。

通信兵は青白い顔で、小さく頷いた。

「――――『皇国万歳。摂政殿下ニ栄光アレ。――――以上、通信終ワリ』」

それだけ告げ、旅団長は自分に挑み掛かって来た帝国兵に拳を叩き込んだ。同時に施設の別の場所で戦っていた皇国兵が司令部要員の救出のため司令室に突入、帝国兵を殺戮し始める。

やがて司令室に雪崩込んできた帝国兵を一掃すると、旅団長は部下たちの中から撤退指揮官を指名。さらに撤退の時間を稼ぐ為の決死隊を編成、自身はその指揮官となった。

幕僚たちの反対を押し切り、ここが皇国軍人としての死に場所だと言い切った彼に賛同する十数名が、帝国の目を釘付けにする囮として反撃に打って出た。彼らは施設内に入り込んだ帝国兵と熾烈な

戦いを演じ、地下の非常用連絡路から脱出する部下たちの盾となる。

獅子奮迅の働きを見せた彼らだが、帝国の物量の前に一人、また一人と討ち減らされていく。やがて一発の砲弾が彼らの頭上を突き抜けて着弾したとき、嘗て兵士たちと共に戦場を駆け巡った一人の獣人の人生は、この混凝土の密室で終わることとなった。

第九八陣地のような事実上の自爆要請は珍しくない。

同じように砲撃を要請してきた陣地は片手の指では足りなくなり、備蓄していた爆発物や陣地に施された自裁術式による自爆も既に八箇所。これはレクティファールのいる本営まで上がってきた要請の数であり、本営以下の司令部が許可を出した要請もあっただろうし、許可を得ることなく現場の判断で自決した部隊もあるので、実際にはもっと多くの部隊が帝国兵を道連れに玉砕しているということになる。

許可を求められたレクティファールはその都度、自分の言葉で自裁の許可を出した。

これだけは誰かに代行させるわけにはいかないと、唯一我侭を言った。子供じみた自己犠牲の発露ではないかと自分でも思う。それでも、メリエラとウィリィア、そしてリーデの前で虚勢を張った。

難しい理屈は兎も角、彼らに報いるためにこうするべきだと考えたのだ。

死んでくれと命じることから、逃げたくはなかった。

「一進一退と言ったところか……」

「は、我が軍の敷いた陣の中に侵入して来た帝国軍を優先的に叩いていますので、辛うじて」

リーデの言葉には隠しきれない焦燥があった。

顔色こそこれまでと変わらないが、これまでと違って全身を敵前に晒していることに緊張を覚えているのだろう。まさか初陣ということはないだろうが、参謀という職業柄前線視察以外にこういったことを経験する機会はなかったのかもしれない。

むしろ、幕舎の入口近くに立っているメリエラとウィリィアの方が落ち着いて見える。軍歴は二人の方が浅い筈なのだが、これが種族的な感覚の差なのだろうかとレクティファールは思った。

「グロリエ皇女は動いたか」

「は、近衛重装騎兵団と共にいることは確実なのですが、未だ動きはありません。我らとしては右翼か、左翼のどちらかに攻撃を仕掛けると予想していたのですが……」

凹の字の両翼には正面から帝国軍が寄せているという報告がない。

帝国軍部隊の殆どが凹の字の奥にあるレクティファール本営に向けて突撃を仕掛けているというのだ。

これを皇国側の油断を誘う策であると見る参謀もいたが、両翼の外側は荒地で大規模な運動をすることはまず不可能。歩兵部隊ならば時間を掛けて踏破出来る程度の荒地だが、大規模部隊で進軍するには向いていない。騎兵ならなおのことだ。

この効果を狙って意図的に荒地を造成していた皇国側だが、帝国軍の動きは一見愚直なだけにも見えて、それでいて不気味だった。

両翼どちらかに近衛重装騎兵団が現れれば、むしろそれは帝国軍の最強部隊を釘付けにする絶好の機会となる。総予備として置いている二個魔導連隊と歩兵二個旅団を用いて、それ以上の運動を掣肘する手筈を整えていたのだ。

だが、皇国の思惑とは裏腹にグロリエは近衛重装騎兵団を動かさない。

機動してこその騎兵部隊だというのに、手元に置いているだけだ。

参謀たちが何名かが腕を組み、唸りながら机上の地図を見下ろした。帝国軍の動きが余りにも単調で、逆に彼らの不安を煽っている。

しかし、一人だけ帝国軍の――――グロリエの意図を正確に察している者がいた。

「――――殿下を狙っているのでしょう」

「アーデン大尉？」

リーデは微かに震えの残る声でそう言った。レクティファールは首を傾げ、自分の隣で地図を見下ろすリーデを見る。

驚いたように自分を見る先輩参謀たちに気圧されながら、彼女は言った。

「帝国側も戦機を窺っているのでないでしょうか。我々が『ウィルマグス』に部隊を送り込んでいることを知らないと仮定して、“ムジョルニア”によって我が軍の疲弊を強い、機を見て一気に攻め寄せる。帝国側とて無駄な損害は出したくないでしょうから」

「しかし、中央に攻めて来ている帝国軍はどうなる。このままでは両翼の陣からも、要塞からも攻撃を受け続けることになるぞ」

元々皇国側はそれを目的にこの陣を敷いた。

レクティファールを囮に、帝国軍の侵攻路を限定して砲撃の効果を高める。つまり砲を目標に向けるのではなく、目標を砲の着弾地点に誘き寄せるための陣形だった。

目標を設定し、その諸元に従って砲の調整を行うというだけでもそれなりの時間を要する。逆に照準するという手順を省くか簡略化出来るなら、それだけで砲一基の時間当たりの砲撃回数は増える。砲撃回数が増えるということは、結果的に砲の門数が増加することと同じだ。

只でさえも“ムジョルニア”の砲撃を受けて使用可能な要塞砲が激減した皇国軍。それを補うために砲術参謀がレクティファールに具申した策がこれだった。

レクティファールも要塞砲の減少は痛手だと認識していた。

帝国軍の物量を抑える要がパラティオンの持つ圧倒的な砲戦能力にあることは、皇国軍内の常識と言っていい。それが著しく減衰した今、小手先の策で以てそれを補うしか方法はなかった。

レクティファールという囮はこれまで期待通りに作用し、帝国軍の動きを制限することが出来た。しかし、パラティオンが手負いであり、皇国軍が劣勢であることに変化はなかった。

この戦場でどれだけ戦果を上げても、皇国は勝てない。

「“ムジョルニア”への攻撃予定時刻まであとどれくらいだ」

「あと、四時間三九分です」

リーデが懐中時計を確認してレクティファールに答える。

攻撃が予定通りなら持ち堪えることは可能だ。だが、万が一にもグードルデン第一軍団が攻撃を断念するようなことになれば、パラティオンは絶望的な戦いを強いられるだろう。

そうなれば、レクティファールも満足に扱えない“皇剣”の力を振るうしかない。

扱い切れない力が味方を焼くことはほぼ確実で、彼は国土と圧倒的多数の国民を守るためにパラティオン要塞防衛軍という少数を犠牲にすることになる。

果たして、味方殺しの皇に国民は付いてくるだろうか。

答えは言うまでもない。

レクティファールは勝利と引き換えに国民の信頼を失い、それを回復する前に帝国の再侵攻を受ける筈だ。そしてそのときこそ皇国は終わる。

どれだけの大義名分があろうとも、戦略兵器としての“皇剣”を使うことは避けなくてはならない。せいぜい対個人、対少数部隊用の戦術兵器として用いるぐらいだ。

史上最強にして最凶の概念兵器。

世界の在り様さえも書き換える絶対的な力。

しかし、使えない兵器は欠陥品に過ぎない。

この場合、欠陥品とは“皇剣”を指すのか、レクティファールを指すのか。或いは両方なのか。

レクティファールは半ば流されて受け継いだ力を持て余していた。だからこそ、そんな自分に執着するグロリエが理解出来なかった。勇者と戦いたいなら、それこそ彼の麾下に数多くいる。強者（つわもの）と戦いたいというのなら、これこそ皇国の誇る強者だという人物を挙げてもいい。

だが、間違ってもレクティファール自身は勇者でも強者でもない。

皇である限り、その二者には決してなれないのだから。

「――――グロリエ皇女が動くことを前提に防御を固める」

防御を固めると言っても、実際に働くのは部下たち。レクティファールは此処でこうして相変わらず戦況図を睨みつけているだけ、グロリエのように戦場に立ち、兵を率いて先駆けとして戦うなど不可能だ。

理解不能。そうとしか言えない。

グロリエほどの傑物が何故“皇剣”と立場以外に特別な要素のない自分に固執するのか、最強最悪と謳われた“皇剣”という概念兵器と戦いたいからなのだろうか。

「グロリエ皇女は必ず動く、気を緩めるな」

レクティファールは言葉を最後に、このときの会議は幕を閉じた。

彼は天幕の片隅に置かれた椅子に座り込むと、目を閉じて大きく息を吐いた。

グロリエは苛立っていた。

六時間以上砲撃を続けた“雷霆”が出した命中弾はたった二発。

要塞側も当然応急補修を行う為、目立って皇国の防衛機能が損なわれた印象はなかった。

レクティファールという明確な餌と“雷霆”の目立つ援護射撃もあって将兵の士気は高く保っているが、グロリエの求めるような要塞機能の喪失などあとどれくらいの砲撃を撃ち込めば達成出来るのか分かったものではない。

いや、彼女の苛立ちの理由はそれだけではない。

彼女の配下の将軍たちの動きだ。

「――――あの愚物どもめッ！　レクティファールが出てきた途端に前に出よって！！」

これだからろくに戦場を知らぬ貴族将軍は嫌いなんだ――――グロリエはその場にいる将たちが顔を顰めるほど苛烈に、そして口汚く件の将軍たちを罵る。

ついこの間まで自ら要塞砲の射程内に入ることを怖がっていた将軍たちが、一斉に自らの軍を率いて前に出てしまった。そのせいで帝国の指令系統は混乱し、遊兵と化した部隊さえ存在する。

しかし、それでも帝国軍が崩れないのは、前に出た将軍たちが無能ではないからだ。

彼らは確かに功を焦って前に出たが、そこで失策を仕出かすような無能者は一人もいなかった。彼らは自分たちの指揮下にある部隊を鼓舞し、見事にレクティファールという最上の餌に喰い付かせた。

その甲斐あって皇国軍の防衛線は散々に引き裂かれ、各所で孤立

した部隊が虚しい抵抗を続けている。グロリエは降伏した者には礼を以て当たれと訓示しているが、それが最前線の兵士たちに守られるとは到底思えない。

特に徴兵されたばかりの新兵や、経験の浅い兵士たちは自分たちの欲望に非常に忠実だ。強者となった自分たちに酔い、相手を容易く虐げてしまう。それがいつか自分たちに跳ね返ってくると知らないからだ。

皇国軍の兵士たちが帝国兵を不当に虐げたという話を滅多に聞かないのは、彼らの持つ倫理観というよりそれを許さないという軍そのものの気風があるのだろう。稀に現れるそのような皇国兵は、総じて処刑されるかそれに準ずる重い刑罰を課せられる。

皇国は何より、軍人の倫理観の低下を恐れていた。

志願制で能力の違う各種族の集合組織という皇国軍の性質上、軍としての規律はそのまま軍としての体制を維持する大黒柱だ。規律が緩めば種族の差から容易に分裂が始まり、やがてそれは皇国軍そのものの質の低下を招く。

先代までの皇王はそれを恐れ、軍人に対して非情ともいえる厳しい規律を課した。その代償として他の国家職員とは一線を画す報酬を与え、万が一殉職した際は家族に対する厚い保障を約しているのだ。

義務と権利は表裏一体。

厳しい義務を課すならば、多くの権利を与える。この当たり前の考えが、第五代皇王ナギ＝イチモンジの時代から続く皇国軍の理念

だ。この理念によって皇国軍は、兵の数こそ決して多くないが精強をもってなる第一線の軍隊となった。それまでは貴族たちの保有する兵力を戦時にのみ纏め、運用する封建制軍隊が皇国軍としての地位を保持していたが、このときの改革によって国家と皇王に属する皇国国軍という組織が形作られたのだった。

諸々の結果生まれた皇国軍という軍隊は、今日では諸外国でも知られるほど厳格な規律を持った軍隊となった。多種族を良く纏めた組織として他の多種族国家の軍隊にもその仕組みが導入されたほど。

グロリエも機会があれば皇国の軍隊組織について詳しく調べたいと思っていたが、こうして実際に戦ってみるとその質の差は驚くべきものだった。

「皇国の兵は西方の亜人どもとは違う。奴らはそれが判らんのか！」

西方の戦いでは帝国の物量に圧し潰される小国家が殆どだった。

一部の例外を別にすれば、君主が戦場に出てきた時点で帝国の勝ちは決まったようなものなのだ。

だからこそグロリエ配下の将軍たちはこの戦いの勝利を既に決定事項のように扱い。それまでに少しでも手柄を立てようと軍を前に出した。

その判断が間違いだとはグロリエも思わないし、帝国軍がそういった功名心を利用して士気を維持していることも理解している。だが、判断に至るまでの前提条件が間違っていれば結果も当然、誤り

となる。

「くそっ！　余が出る前に皇国に下手に動かれでもしたら戦線が崩れるぞ」

グロリエは皇国を侮っていない。

あの男が指揮官を努め、良将と名高いガラハがそれを補佐しているのだから手強くない筈はない。

ここで勝っても損害が大きければあとの戦いに影響が出る。この戦いはあくまでも前哨戦であって、皇国を屈服させる最後の決戦ではないのだ。

「馬を走らせ、伝令を飛ばせ！　決して皇国軍を侮るなとな！」

グロリエの命令に従兵が走り去る。

そんな彼女の後姿を見詰め、カリーナは微かに微笑んだ。

あの猪突猛進を地で行く孫娘が敵の手を恐れている。それは成長に他ならない。

自分を上回る力を持つ相手に対して執着し、それ故に相手を知ろうとする。その姿勢が慎重を生み、いずれ孫娘に老獪さを与えてくれるだろう。

「――――あの摂政には感謝しなくてはなりませんね」

グロリエ以上の力を持つ存在など限られている。

無論単純な数としてなら相当数存在しているだろうが、そのような存在はこんな争いに興味を示さないのが常だ。

運良く敵手として現れてくれたことに彼女は本気で感謝していた。

この日の夜、『ウィルマグス』に残された五〇〇〇の兵は平時と変わらない勤務を行っていた。

彼ら帝国軍人にとっての最前線とは帝国領ではなく他国領であり、『ウィルマグス』が帝国領である以上、彼らの心に緊張感などあってないようなものだった。

街に出掛けては酒と女を楽しみ、仕事中でもそれらのことを考え

て笑みを漏らす、そんな生活を送っていた。パラティオン要塞で皇国と死闘を繰り広げている同胞たちとはまるで違う世界に住んでいるかのような、気楽な生活だった。

グロリエから下された『皇国軍の侵入に警戒せよ』という命令も、五〇〇〇という自分たちの数以上の敵が現れるとは思っていないために半ば無視されている。無論指揮官格の将校ともなればそれなりの危機感を抱いて仕事をしているが、兵士たちにまでその緊張感を持てというのは難しいだろう。

彼らの常識とは、常に自分たちは攻撃者であるというもの。攻め入り、勝ち、そして得る。これこそが当たり前であり、攻められ、負け、奪われることは常識の埒外にある。

勝敗とは常に均等であり、何処にも不平等はない。彼らはそれを知るべきだった。

勝ち続けていれば何処かで必ず負けるのだ。

夕闇に染まる『ウィルマグス』。

街や軍組織には明かりが灯り、街の外に建造された“雷霆”の周辺では、煌々と灯された照明の下で動き回る帝国兵の姿が見えた。

夜間に入り、気温が下がったことで“雷霆”の発射間隔は広がった。蒸発した水分が各所で凍り付き、機器の動きを阻害していたのだ。

作業員は凍り付いた氷柱や氷塊を手作業で落とし、それが終わる頃には別の場所でまた凍り付く。延々と同じ作業を続け、作業員たちは疲れた表情を隠しきれなくなっていた。

そんなときだ。

“雷霆”を含めた『ウィルマグス』一帯の明かりが一斉に消えたのは。

「――――――！？」

“雷霆”は『ウィルマグス』の動力施設から引いている動力源とは別に自前の動力施設を持っている。非常時のみ作動するそれが運転を開始するまでの数分間、帝国の城塞都市一帯は闇に包まれた。

その数分間こそが、帝国にとって運命の転換点だった。

「て、敵襲っ！！」

誰が叫んだのだろうか、警報と共に齎された凶報に“雷霆”周辺の作業員たちに動揺が広がる。

しかし、彼らの動揺など『ウィルマグス』に駐留していた帝国軍部隊に比べればまだ軽いものだった。

帝国兵たちは突然の暗闇に狼狽えた。

特に城門の警備に当たっていた帝国兵の動揺は夥しく、各所で悲鳴と怒号が飛び交った。

そんな喧騒の中、協力者の手引きによって都市部地下から都市外に通じる導水渠から侵入した皇国部隊が、都市南側城門の管理を司る城壁上の小屋に突入。そこに詰めていた帝国兵を一瞬で無力化した。

悲鳴を上げることさえ許されずに無力化された帝国兵。彼らの死体を無感動な目で一瞥すると、皇国部隊の指揮官は部下たちに命じて門を開けさせる。

城門上に設置された巻き上げ機が作動し、轟音を立てて鎖が下ろされていく。堀の上へとゆっくりと下りていく跳ね橋。指揮官はそ

れを確認して頷くと、小屋の維持に数名を残して城壁の上を移動し始めた。

街の中、城門前の監視小屋にいた帝国兵は城壁上の管理小屋が制圧されたことなど知らず、従って突然城門となっている跳ね橋が下ろされたことに驚いていた。

二人一組の内、一人が状況の確認のため市街地にある軍司令部に走る。残された一人は銃を抱え、ゆっくりと下りていく橋を恐々として見詰めていた。

やがて橋は下りきり、帝国兵は一面の雪景色が広がっている筈のそこに死神を見た。

「ひっ！」

彼らは全身を白い服で包み、顔まで白い布で覆った兵団。帝国兵は恐怖の余り銃を構えることも忘れ、その集団と対峙する。

たった一人の帝国兵の前に居並んだ白い集団は、少なく見積もっても数千。その気配の濃密さから、もっと多くがその背後にいるのだろう。

帝国兵はがたがたと震える身体を抑えつけようと必死になったが、無理だった。

白の集団の中央に立つ、一人の男。

周辺の兵士たちと同じ姿格好だというのに、その身から溢れる鬼気の濃密さは何の冗談だろうとさえ思った。まるで存在の格が違う。自分とは明らかに別の場所に立っている。そんな気がした。

「――――――」

男がゆっくりと手を翳す。

その動きに合わせて白の兵団が一斉に得物を構えた。

剣、槍、打棒、弩弓。

そのどれもが自分に向いているような錯覚を覚え、帝国兵はみっともなく失禁した。

軍袴を滴る液体の冷たさだけが、彼に現実感を与えてくれる。

だが、その現実感は彼の意識を恐怖に逃れさせてはくれなかった。

「――――――」

男が手を振り下ろす。

帝国兵が最後に見た光景は、自分に向かって押し寄せる白の集団の姿だった。

ガラハ率いるグードルデン第一軍団は『ウィルマグス』と“雷霆”に同時攻撃を仕掛けた。

都市内部に存在する動力施設を破壊、非常用動力源が照明を灯すまでの数分間で大勢は決した。

協力者である亜人たちの扇動によって都市の支配層以下の住人たち、特に亜人を中心とした下層住人たちが決起。帝国からの移民が多くを占める中層区以上の階層に向けて動き始めた。

彼らは城壁で隔てられた中層区に突入すると、そこにあった商店や民家を襲い始める。彼らにとって帝国からの移民が持つものは自分たちが嘗て奪われたものであり、それを取り戻すことに罪悪感など覚える筈が無い。

住民たちは南門から決起の動きが広まっていると噂で聞き、北へと向かって逃げ出したあとだった。この情報は皇国軍部隊が意図的に漏らしたもので、ガラハの指示だった。

五〇〇〇の帝国軍は“雷霆”と都市部に分散して配置されていた

が、都市部に配された部隊はこの住民の避難を警備するために多数が割かれてしまった。帝国からの移民の中にはこの都市の運営を司る官僚も含まれ、帝国軍に顔の利く者も多い。彼らは自分たちを守らせるために軍の部隊を手配させたのだ。ガラハは寡兵である帝国軍の動きをさらに制限するために情報を漏らしたのだろう。

高層区、中層区の住民が北へと逃げ出し、その結果ぽっかりと空いた街を埋めるように下層区以下の住人たちが押し寄せる。彼らは皇国軍に誘導され、結果として帝国からの移民とは衝突しなかった。住人同士の争いに関わっていられるほどの余裕は皇国軍にもない、ガラハは意図的に帝国からの移民を逃がして無用の争いを避けた。

逃がされた市民は家財道具を動力車に載せ、動力車を持たない市民は荷車に大荷物を載せて『ウィルマグス』を脱出した。

駐留の部隊は都市に突入した皇国軍と戦い敗走。城壁に守られた籠城戦なら兎も角、一度都市に侵入された以上勝ち目はない。各部隊の指揮官は次々と撤退を決め、やがて都市防衛司令部も撤退を決めた。このとき攻撃開始から僅か一時間一五分後。ガラハはこれまで皇国を苦しめ続けた城塞都市をたったこれだけの時間で落としてしまった。

都市部への攻撃と同時に行われた“雷霆”への攻撃は、こちらも事前の準備の甲斐あって予想よりも順調に進んだ。

魔導師中心で組まれた“雷霆”攻撃部隊の攻撃能力は凄まじく、目立つ“雷霆”は皇国魔導師たちの遠距離砲撃に晒され、次々と爆発を起こした。魔導師たちからしてみれば、動かない目標など砲撃演習の的でしか無い。事前の打ち合わせで“雷霆”の弱点と成り得る箇所を徹底して叩き込まれた魔導師たちは、次々と目標を破壊。

制御施設に突入した部隊の活躍もあっておよそ一時間程度の戦いで“雷霆”を無力化した。

爆薬を仕掛けられ、架台を破壊された“雷霆”は自重に耐えられずに折れ、その巨体を支えていた基部も魔導師たちの執拗な攻撃の前に崩れ去る。

無傷で確保するべきだという意見もあったが、ガラハはそれを却下した。

欲をかいて大魚を逃すよりも、目的である小魚を得るべきだと判断したのだ。

「制圧を急げ」

都市部の制圧を行うべく、ガラハは帝国が『ウィルマグス』総督府としていた行政施設に臨時司令部を置いた。

レクティファールと彼の考える戦後処理に『ウィルマグス』は欠かせない。さらにここを占領することこそがこの戦いの趨勢を決すると言ってもいい。

帝国軍の補給線を一手に担う要衝。

ここを抑えられている以上、帝国軍は長期の作戦を展開出来ない。

さらに彼らの切り札である“ムジョルニア”はすでに破壊され、残骸を晒すのみ。

勝てる――――そう思った。

だが、彼はまだ知らない。

グロリエ・デル・アルマダという傑物の恐ろしさを。

グロリエの下に『ウィルマグス』陥落の報が届くと同時、レクティファールにも同じ情報を得た。

これで“ムジョルニア”の砲撃はない。

それだけで皇国側に明るさが戻る。

しかし、レクティファールは沸き立つ天幕の外に出ると、厳しい表情を崩さず帝国側の陣地を睨んだ。

これで済む筈が無い。

あの姫君はこの程度のことで敗北に塗れるほど生易しい女でない。

「来るか、帝国の虎」

果たして、彼の予感は的中した。

「――――元帥殿下、『ウィルマグス』が落ちました」

祖母のその言葉に、グロリエは天幕の中心に置かれた大机を拳で叩き砕いた。

木片が飛び散り、幕僚たちの顔から血の気が引いていく。

グロリエは俯いたまま肩を震わせ、呪詛のように何かを呟くのみ。

幕僚たちはお互いに顔を見合わせ、姫君の怒りを解くべく思考を巡らせる。

しかし、都合良く彼らの願いを叶えるような策がある訳がない。

グロリエの怒りとは単純なものではなかったからだ。

勝手な行動で彼女の策を乱した将軍たち、思うほど戦果を挙げられなかった“雷霆”、そして結果的にあの男に負けた自分。

どれもが彼女の心を苛み、責め立てる。

ここまで彼女が払った兵士たちの血と魂は無駄だったということなのか、自分を指揮官と仰ぎ死んでいった兵たちに何と言って詫びればいいのか。

『ウィルマグス』が落ちたということは、帝国軍は二つの要塞に挟み込まれたということになる。

どちらも国家の防人として建造された堅牢な要塞。皇国が『ウィルマグス』をどうやって落としたのかという疑問はあるが、そんなものはあとで考えればよい。今するべきは、これからの方針を示すこと。

どうやってここに居る兵たちを祖国へと帰還させるかということだ。

この期に及んで皇国に勝てるとは思えない。

“雷霆”が落ちた以上、パラティオンを落とすことは不可能だろ

う。

パラティオンを落とせなくなった今、皇国本土への侵攻という戦略目標は果たすことは出来ない。

「――――いや……待て……」

パラティオンを落とす必要が無くなったならば、別の目標を掲げるべきだ。

現状可能な次善の策。

そう、皇国が立ち直れないくらいの痛手を与え、来季の戦いを有利に運ぶための策。

「――――なるほど」

まだ、まだだ。

まだ終わっていない。

この戦いを無に帰することなく、次の戦に繋げる方法はある。

「くくく……っ！」

いや、むしろ自分向きのいい策ではないか。

グロリエは笑いを漏らすと、がばりと顔を上げて幕僚たちを睥睨した。

「近衛を出す！　余も出るぞ！」

彼女の目に、諦念はなかった。

帝国軍の攻撃が緩み、皇国軍の兵士たちは『ウィルマグス』の陥落を知った。

潮が引くように撤退行動を開始する帝国軍に対し、皇国軍の陣地からは歓声が木霊する。

「勝った」

そう叫んだ彼らは隣の戦友と抱き合い、生を噛み締める。

生き残った、九倍の敵を前にして生き残った。

追撃の命令が出る可能性を考慮しながらも、彼らは目の前まで迫った死の恐怖から逃れたことに歓喜する。

それこそが、帝国の仕掛けた罠であった。

「――――っ！？　こ、近衛重装騎兵！！」

皇国兵たちの前から退いた帝国軍部隊に代わり、深紅の鎧にその身を包んだ一団が現れたのだ。

兵たちは慌てて壕に潜り込み、その圧倒的な存在感を放つ集団に備える。

しかし、もう遅かった。

皇国兵が防備を整え切る前に近衛重装騎兵団は突撃。

これまで散々帝国軍に耕された皇国の中央陣地をぶち抜き、迎撃すら満足に出来ないほどの速さで摂政レクティファールの本営へと直走る。先頭を駆けるは、他の騎兵とは明らかに違う意匠を持つ鮮血色の鎧の美姫。

輝く陽の色の髪を靡かせ、巨大な剣を手に黒の巨馬を操るその姿に皇国兵は恐怖した。

「――――突撃ぃいいいいいいいいいいいいいいいいっ！！」

皇国兵の肺腑に響く掛け声。

絶世の美姫でありながら、さながら物語の戦女神のように戦場を駆けるグロリエ。

帝国兵はその姿に感奮し、これまでの消沈振りが嘘のように活気を取り戻す。

再び始まった帝国の猛勢にぼろぼろの皇国陣地は悲鳴を上げた。

「殿下！　お逃げ下さい！」

近衛軍から派遣された中隊長がレクティファールに詰め寄る。

本営からもグロリエの突撃は嫌になるくらいよく見えた。

深紅の暴風が、自軍の陣地を薄紙のように貫いて迫る様は悪夢だ。

本営近くの陣地には迎撃体制を整えるだけの時間が与えられたが、正直あの暴風を止めきれるかどうか分からない。

中隊長はその暴風の前に主君を差し出すような真似はしなくなったのだろう。レクティファールの背後に控えたメリエラとウィリィアを視線で呼び付けると、二人にレクティファールの護衛を改めて命じた。

「殿下をお守りし、要塞まで送り届けろ」

「は」

二人は敬礼。

中隊長はそれを見て満足そうに頷くと、自身はレクティファール撤退の時間を稼ぐために部隊と合流しようとする。

「待て」

中隊長を呼び止めたのは、やはりグロリエに視線を固定したままのレクティファールだった。

「あの皇女に小手先の策など通じない。背を見せればこれ幸いと追撃を掛けてくるぞ」

レクティファールの自信に満ちた声に顔を顰めたのはメリエラだった。

その言葉からグロリエに対するある種の信頼を感じ取り、それが自分には決して向けられないものであると気付いたから。

そして敵手に対して絶大な信頼を寄せている主君に、僅かな怒りを覚えたから。

「殿下、しかしこの場に殿下がいては兵士たちが存分に戦えません」

言葉の選択がきつくなるのも仕方が無いことなのかもしれないが、このときのメリエラの言葉は余りにも失礼だった。中隊長は目を剥き、ウィリィアは涼しい顔をしていても額に一筋の汗が流れる。

しかし、レクティファールが怒りを露にしなかったことで場は一応治まった。

「分かっている。だから近衛は前に出ろ。ここは私がいれば良い」

「なっ！？」

主君を見捨てよと命じるレクティファール。

本人にその意識は無かったのかもしれないが、三人はその言葉に

衝撃を受けた。

確かに敵騎兵団はここに居る近衛の一〇倍を超える。だが、主君を守るという絶対的な忠義こそ近衛に求められるモノ。それを否定するような命令は受け入れ難い。

「殿下！　それは承服いたしかねます！」

中隊長がそうレクティファールに掴みかかるのも無理はない。

前に出ろ、盾になれという命令なら幾らでも受け入れられる。だが、レクティファールはここから退かないと言う。ならば近衛が前に出て守るべきものは何なのか。

主君の身を危険に晒して、それで戦うことが近衛の存在意義ではない。

主君の身を守ることこそ彼らの存在意義であり、これまで実戦から離れていた近衛軍が未だ高い練度を維持してきた理由だ。

「別に私を見捨てろとは言っていない。ただ、グロリエ姫以外をここに近付けてもらっては困るというだけのことだ。流石にあの数を相手に“皇剣”を制御しきる自信はない」

「グロリエ皇女と戦うお積りで！？」

確かに“皇剣”の力を使えば可能だろう。

だが、レクティファールが未だその段階にまで至っていないことはメリエラとウィリィアも知っている。

故に二人はレクティファールを守ろうとした。

戦う必要が無いように、“皇剣”にレクティファールが呑まれないように。

しかし、レクティファールはそれを否定する。

「戦える者が戦う。当たり前のことだ。そこに戦う者の役職は介在しない」

レクティファールは二人を見ると、小さく笑って二人の顔を順に見詰めた。

「二人には部隊を率いてこの陣の守りに就いてもらう。中隊長は残りの部隊を率いて近衛重装騎兵団を絶対に通すな」

ここであの突撃を押し止める。

そうすれば両翼の部隊がグロリエの退路を絶ち、今度はこちらが彼女を討つ機会を得られる筈だ。

「肉を切らせて骨を切る。向こうから来てくれるというのなら、こちらはあの分厚い帝国軍を抜かなくてもグロリエ皇女に手が届くということ。ここが正念場だ」

レクティファールの意思は固い。

彼は自らが次期皇王であるからこのような策を講じたのではない。

ただ、この戦いの目的を果たすために最も確実な策を選んだに過ぎない。

「来るぞ」

レクティファールが見詰める先に、深紅の軍団がいる。

グロリエは愛馬に鞭打ち、摂政の紋章旗目掛けて一直線に突き進む。

未だ紋章旗が下ろされていないのは、そこにレクティファールがいるということ。

彼女は最愛の宿敵が自分を待っていることに狂喜する。

飛び掛ってきた皇国兵を真っ二つに斬り捨て、こちらに背を向けて逃げようとした兵士に向かって漆黒の刃を撃ち放つ。

通常は細かく座標を固定しなくては使えない空間の断裂だが、ある程度薄めたものならば飛ばすことは出来る。飛ばせるのは“何もない”断裂と言うより、空間の歪(ひずみ)程度のものであるが、それでも十分な威力を持っていた。

高出力な防壁ならば防ぎ切れるが、逆に言えば個人の持つ量産型護法など薄紙以下の防御能力しかない。

彼女はそれをまき散らしながら、レクティファールの下へと駆ける。

壕を飛び越え、馬防柵を切り裂き、魔法防御壁さえも叩き切る。

グロリエを止められる者など存在しない。

少なくとも、彼女の背後で暴れる近衛重装騎兵たちはそう思った。

故に、あと少しで摂政レクティファールの首に手が届くというときにグロリエを襲った極太の光条に瞠目した。

グロリエは『神殺しの神剣』を盾替わりに構えると、剣の腹でそれを受ける。

斜めに構えた『神殺しの神剣』に光は弾かれ、水飛沫のように小さな光を撒き散らした。

しかしそのためにグロリエの動きは鈍り、次に空から降ってきた影に気付いたときにはもう、選べる選択肢は殆ど無かった。

「――――ぁぁぁぁあああああああああああああっ！！」

ぎゅいい、という金属の擦れる耳障りな轟音。

それを引っ提げた影がグロリエの頭上から降ってくる。

「くっ！」

グロリエは馬から飛び降り、地面を転がることでその一撃を躱した。

その背後で盛大に吹き上がる土砂。

地面は大きく揺れ、後続の近衛重装騎兵たちはその土煙の中に飛び込む羽目になった。

「姫様っ！」

「お前たちは先に往け！　余はここで準備運動を済ませてから追い付く！」

グロリエの言葉に、近衛たちは緩めた速度を再び上げた。

主君の意思はここで足を止めることではない。先に進み、彼女の進む道を切り開くことだ。

「姫様、御武運を！」

「任せろ！　この程度、身体を暖めるには調度良い！」

グロリエの言葉に焦りはない。

本当に準備運動程度にしか思っていないのだろう。

「――――……」

グロリエは晴れた土煙の中に二つの影を見る。

一人はスカートの裾を翻してグロリエを睨む、瀟洒な白の礼装に白銀の鎧を纏った銀色の髪の龍族。

もう一人は巨大な剣を持ち、装甲付きの侍女服を着た女。

どちらも戦場に相応しい姿とは言い難いが、その身体から溢れる気迫にグロリエの顔が緩む。

「あのときの近衛の娘たちか」

レクティファールとの会談の際、その背後に控えていた近衛の女だ。

こうして戦場で相見えることは予想していたが、ここまでのものとは思っていなかった。

「ここから先は通せません。あなたとの再会をレクトが望んでいても、わたしがあなたをここで仕留めます」

「――――む、レクト……レクティファールのことか……」

グロリエはメリエラの言葉に眉を顰める。

そして自分を睨むメリエラの姿をじっと見詰めると、やがて哂った。

「なんだ、貴様レクティファールの女か。余に男を取られるのがそんなに怖いか？」

「っ！！」

メリエラの瞳が細く変わり、詠唱もなく、一瞬で五発の光弾が放たれる。

光弾はいずれも不規則な軌道を描き、グロリエに迫った。

「甘いっ！！」

しかし、グロリエが二回『神殺しの神剣』を振るうと、それらは一瞬で黒い空間に切断されて飛び散る。

その速度は、あの巨大な剣の動きとは思えない。

「これでは程度が知れるぞ、女。レクティファールがお前をどれだけ気に入っているか知らんが、所詮その顔と身体で惑わしただけだろう」

「黙れッ！！」

ウィリィアが『岩窟龍断ち』を手に突撃。

一〇メイテルの距離を一瞬で縮め、その剣を振り下ろす。

「ははッ！　お前も同じか！　レクティファールはつくづく女運が無いな！」

グロリエはウィリィアの攻撃を受けることさえせず、軽やかに後方へと身を翻す。

くるりと空中で一回転すると、その眼下を『岩窟龍断ち』が通過した。

「おっと」

すぐにウィリィアの第二撃が放たれる。

こちらも重量級の『岩窟龍断ち』を軽々と扱い、第三撃、第四撃と続けていく。

縦、横、斜め、上下とあらゆる角度から迫る刃を躱し、それでもグロリエの余裕は崩れない。

むしろウィリィアの表情の方が焦りと疲労で歪み始めた。

「遅いな、同族」

グロリエが呟く。

ウィリィアの連撃に生まれた一瞬の空隙、それはグロリエにとって十分過ぎる隙だった。

『岩窟龍断ち』を潜り抜け、『神殺しの神剣』の柄頭をウィリィアの鳩尾に叩き込む。

「がはッ！？」

口から唾液を撒き散らしたウィリィアが吹き飛ぶ。

グロリエはそのウィリィアを追い、さらに追撃を与えた。

未だ空中に浮いたままのウィリィアに、グロリエの踵が迫る。

「弱い、弱いぞ同族。所詮数を揃えるための低コスト簡易量産型の子孫か」

「ぐッ！！」

大きく身体を回転させた勢いをそのままに踵を落とし、それを両腕で辛うじて受け止めたウィリィアの顔に、今度は『神殺しの神剣』を叩き付ける。

ウィリィアはそれを『岩窟龍断ち』で受け止めたが、圧倒的な質量に押し負けた。

「ぁッ！？」

地面にめり込むほどの力で叩き落とされたウィリィアの口から悲鳴にもならない呼気が漏れる。

「ごはッ！　ごほッ！」

内臓が傷付いたのか、呼吸しようとした彼女の喉から咳と共に粘つく鮮血が溢れた。

それでも立ち上がろうと身体に力を入れたが、返ってくるのは痛みだけ。

身体を引きちぎられたかのような痛みに、ウィリィアの呼吸が止まった。

「ッ！！」

そんなウィリィアの胸に、グロリエの具足に包まれた足が勢い良く降ってくる。

今のウィリィアにそれを受け止めるだけの余力も、避けるだけの気力もなかった。

「ぐあぁッ！？」

内臓が押し潰されそうな衝撃。

白龍公より下賜された戦闘用侍女服の衝撃吸収機能をあっさりと超えたその衝撃にウィリィアの目が大きく見開かれ、口が空気を求めてぱくぱくと開閉する。

口の端から漏れるのは、血液と唾液、そして吐瀉物だ。

「ウィリィア！！」

メリエラの声は切羽詰っていたが、それでも従者が齎した機会を失う愚は犯さなかった。

彼女は詠唱を済ませた粒子加速魔法をグロリエに向け、吼える。

「ウィリィアから離れなさい！　この売女ッ！！」

私怨が多分に含まれた掛け声と共に放たれる光は、先程の光条よりも遥かに密度の高い光だった。

撒き散らされた熱量がグロリエの皮膚を焼き、彼女は少しだけ顔を顰めた。

「なるほど、前衛と後衛で役割を分けたか」

龍族と龍人族では相性が悪すぎる。

だが、龍族が体内器官で練り上げる龍族特有の龍魔法ではなく軍事魔法として開発された通常魔法ならば、竜人族の放つ対龍族用魔力形成妨害波動に影響されない。

しかし、龍族特有の龍魔法は極短い詠唱で放つことが出来るが、通常魔法は術式を編んで詠唱を行うという手間が掛かる。先程のような低威力の魔法ならともかく、これだけの魔法ともなればそれなりの準備が必要だった。

ウィリィアはその時間を稼ぐため、明らかに性能の隔絶した同族に勝負を挑んだのだ。

主人の想いを叶えさせるために。

「――――だが、弱い」

そう、グロリエにとってみればそんな動機は単なる弱さの言い訳にしかならない。

強ければいい。

強ければ他人の力など借りずとも敵を討てる。

メリエラとウィリィアの共闘など、所詮は一人で勝てない者たちの悪足掻きに過ぎない。

「はン」

ウィリィアが命懸けで稼いだ時間。

その時間でメリエラが練り上げた魔法がグロリエに迫り――――

「ぬるいッ！」

『神殺しの神剣』の一閃で弾き飛ばされる。

軌道を逸らされた魔法はくるくると迷走、やがて地に落ちて大爆発を起こした。

「な……！」

メリエラの驚愕。

それはやはり、グロリエにとって隙でしか無かった。

「何処を見ている、レクティファールの女」

『神殺しの神剣』を振り翳し、グロリエがメリエラに迫る。

「ッ！！」

慌ててメリエラが展開する防護魔法の盾。

光り輝くその盾は、グロリエの攻撃の前には大した意味を持たなかった。

「クズが」

一閃。

それだけで乾いた音を立て、光の盾は砕けた。

「なッ！」

グロリエは驚くメリエラの顔に手のひらを押し付けると、そのまま裂帛の気合と共に地面に向けて振り抜く。

「かはッ！！」

従者と同じように地面に叩き付けられるメリエラ。

だが、龍族の彼女にとってこれ位の衝撃で気絶するようなことはない。

すぐに意識をグロリエに向けると、手のひらをそちらに差し向けようとした。

「何故、そこまで弱い」

グロリエはその動きを見て、心底詰まらなそうに『神殺しの神剣』を振るう。

すたんという軽い音がした。

「え」

呆けたようなメリエラの声。

彼女はグロリエに向けた自分の腕を見詰める。綺麗に肘から先を切断されたそれを。

「ひッ！」

吹き出す真っ赤な血。

メリエラは慌てて治癒魔法を腕に施した。

「そうだ、お前は龍族なんだからその位すぐにくっつくだろう。本当ならその綺麗な顔を切り裂いてやりたいが、時間が惜しい」

「ぐ……あ……」

脂汗を垂らし、腕を押さえながらグロリエを睨み上げるメリエラ。

戦闘能力は奪われたが、その龍眼だけはグロリエに対する戦意を失っていない。

いざとなれば噛み付いてでも戦ってやるとその目が叫んでいた。

「――――ふ、レクティファールの女だけのことはある。生き汚く、己の欲望に忠実だ」

「ぐ……か……勝手なことを……」

メリエラは苦しげに浅い呼吸を繰り返しながらも、グロリエを睨み続ける。

そんなメリエラの表情に、やはりグロリエは笑ったままだ。

「余を殺さない限り、余はレクティファールの許に現れ続けるぞ。そしていつか、あの男の総てをこの身に刻みつけ、あの男に余を刻む」

「――――き、きさまぁ……」

メリエラは切断された腕をグロリエに向けようとする。

魔法を放つのに手は必要ない。必要なのは、目標を指向するための照準だ。

「無理はしないことだ。あまり無理をすると、一生そのままの姿で

暮らすことになるぞ。果たして、お前はレクティファールにその姿を晒すことに耐えられるかな」

「くッ！」

メリエラが悔しげに目を伏せる。

腹立たしい限りだが、今のメリエラはグロリエに勝てない。

圧倒的な実力差が、両者の間にはあった。

「まあいい、いずれ戦う機会もある」

グロリエは指笛を吹くと、愛馬を呼び寄せる。

幻想種らしい巨大な黒馬はグロリエの傍らに身を寄せると、一声鳴いた。

「うむ、あの男の下に行くぞ」

ひらりと黒馬に跨るグロリエ。

メリエラは地面に座り込んだままそれを見上げた。

悔しさに涙が出そうになったが、敵にそれを晒すことだけは許容出来なかった。

「ではな、龍族の女」

黒馬の腹を叩き、グロリエはその場から去っていった。

メリエラはそれを見送ると、地に伏したまま動けないウィリィアの許へと這い寄った。

惨めだった。

これ以上ない程、惨めだった。

「無事……？　ウィリィア……」

「――――ひ……めさま……」

ウィリィアの声は弱々しい。

龍人族でなければ一発で潰れていた攻撃を何発も受けたのだ、無理もない。

メリエラはそんな従者に治癒魔法を掛けると、レクティファールのいる本営をじっと見詰めた。

「――――レクティファール……」

負けるとは思わない。

連れ合いを信じることが出来ない女にもなりたくはない。

「――――――――」

だから彼女は、小さく頭を垂れて祈った。

これまで散っていった英霊たちに、これまで皇国を守り抜いた英雄たちに。

今だけ、あの人をお願いします、と。

「――――ぉぉおおおおおおおおおおおおおおッ！！」

本営目掛けて怒涛の勢いで飛び込んでくるグロリエ。

すでに近衛重装騎兵団はレクティファールの本営までの道を切り開いており、今はその道を維持するために本営の周辺で戦いを繰り広げていた。

目の前の戦場を睥睨していたレクティファールは、今まで杖替わりにしていた“皇剣”を眼前に構えると、それをゆっくりと引き抜く。

刀特有の刃紋が、光を反射した。

「――――――――――」

その光を振り払うように一度“皇剣”を振り抜くと、彼は半身を下げてグロリエの前に立つ。

受け切る。

それだけを考えた。

「うおぉぉおおおおおおおおおおおおおお

『神殺しの神剣』を振り翳すグロリエ。

その刀身には、間違いなく漆黒の断裂。

レクティファールは刃を構え、大きく息を吸い込んだ。

「レクティファァアアア

一撃のみでレクティファールの横を駆け抜けるグロリエ。

二人は睨み合い、無言の暇が生まれる。

第二撃に備えて再び“皇剣”を構えるレクティファールの耳に、聞き覚えの無い声が飛び込んできた。

「殿下！　これ以上は支えられません！　包囲されます！」

鎧も纏わぬ女将が二人の戦場に飛び込み、叫んだ。

よく見ればグロリエに何処と無く似たその女将は、レクティファールに一瞥をくれるとすぐにグロリエに向き直る。

「敵を侮ったのはこちらも同じということか、お婆様……」

「はッ、此処から先の戦いは、次に預けるべきかと」

「――――ちッ、あの女どもに時間を取られ過ぎたか」

グロリエは不満そうに口を尖らせ、自分に向けて放たれた矢を斬り捨てる。

近衛に守られたここも安全とは言い難い。

時間を掛ければそれだけ脱出が困難になるだろう。

彼女は決断した。

「――――退くぞ！　摂政に一撃を入れたのだ、我らは敵に一矢報いた！」

「ははッ！」

地を蹴立てて去っていく二人の後ろ姿を見詰め、レクティファールはこの戦いの終わりをようやく感じ始めた。

だが、感じ始めただけでまだ終わりではない。

まだ、終われない。

「誰かある！」

レクティファールはグロリエとの戦いに巻き込まれないよう退避させていた従兵を呼んだ。

しかし、彼の呼び声に答えたのは従兵ではなく一人の参謀だった。

「アーデン大尉」

「何かございますか」

「ああ、追撃に移るぞ」

レクティファールはリーデの顔が強張るのをしっかりと見て取った。

九倍の相手、今は多少討ち減らして八倍強といったところか。

それでも圧倒的多勢であることに変わりはない。

「危険です、殿下」

「危険は承知、だが、このまま逃がしてはすぐに体勢を立て直してしまう」

ここで出来るだけ討っておかなくてはならない。

さらに言うなら、『ウィルマグス』に余計な手出しをされても困る。ここは帝国軍を追い立て、その気を失せさせなくてはならない。

グロリエならば、無駄な犠牲を嫌って一直線に撤退するはずだ。

「騎兵を出せ。撤退する敵勢を削ぎ落とす」

「は」

リーデはすぐに走り去り、代わりに従兵が厚掛けを持って現れた。

「馬はどうなさいますか、殿下」

「言うまでもない、回せ」

「は」

従兵は同僚に目配せする。それを受けて頷いた別の従兵が、レクティファールの馬を引くために厩舎へと走った。

「――――これで終わりにしよう。グロリエ皇女」

レクティファールは整然と引き上げる近衛重装騎兵団を見送り、呟いた。

ファルベル平原会戦が終結し、龍虎戦役の最終幕、皇国軍による帝国軍追撃戦が幕を開けた。

皇国側の追撃はグロリエの予想を超えて苛烈だった。

騎兵を主とした快速部隊が幾つも帝国軍の最後尾に攻撃を仕掛け、慌てて迎撃体制を整える頃にはその姿はすでにない。

再び撤退を開始するとその快速部隊はまたどこからか現れ、帝国軍を散々引っ掻き回して引き上げていく。

決して帝国軍と正面から戦おうとはせず、その戦力を少しずつ削ぎ落としていくかのような戦い方。グロリエは追撃を受ける度に神経をすり減らし、それでも撤退速度だけは落とさないよう麾下の部隊に命じた。

ここで皇国軍を待ち受けるようなことをしても、恐らく皇国は攻撃を仕掛けてこない。

そうなれば砲撃でこちらを討ち減らす算段でもしているだろう。グロリエはその考えを正確に読み取り、ここは早期の撤退こそが肝要であると決断した。

そんな帝国軍に更なる不幸が降りかかったのは、兵士たちが破壊された“雷霆”の残骸に半ば呆然としながらも『ウィルマグス』の近傍を通過したときだ。

彼らの前方に、数万の集団がいた。

最初は『ウィルマグス』を落とした皇国軍が待ち受けていたのかと緊張した帝国軍だが、すぐにそれが『ウィルマグス』から脱出した帝国からの移民であると気付いた。

彼らはグロリエたちがここまで引き上げてくるのを待っていたのだ。

帝国本土への道には凶悪な魔獣が多く潜んでいる。とてもではないが数万にもなる住人を五〇〇〇に満たない数で守り切るのは不可能。

都市防衛司令官を任されていた将軍は、そう言ってグロリエの前に跪いた。

グロリエは司令官の苦労をねぎらうと、すぐに住人たちを行軍に組み込むよう命じた。

住人たちは帝国の民、グロリエが守るべき存在だった。

しかし、彼女のそんな気持ちは、彼女が守りたかった住人たちに

踏み躙られる。

「都市奪還の兵を出せ」

住人たちはそう言ってグロリエに詰め寄った。

あそこには彼らの財産が残されている。それを捨てることが出来なかったのだ。

しかし、グロリエがそれに是と答えることは無かった。

ここで『ウィルマグス』の皇国軍と戦えば、すぐにレクティファール率いる本隊が現れるだろう。

もしそうなれば、彼女は背後からの攻撃を受けながら都市を落とさなくてはならなくなる。

今の疲弊しきった帝国軍に、これ以上の戦いは無理だった。

さらに行軍の中に都市の住人が増えたことで物資の残りも心許なくなっている。

余計な時間を費やせば、最悪餓死者が出る。グロリエはそう都市住民を説得し、撤退を続けた。

彼女のこのときの行動が種火となり、帝国を揺るがすことになるのはこれから五年後。

この龍虎戦役で皇国が得た猶予期間が終わりを迎えるときでもあった。

しかし、このときのグロリエはそれを知らず、当然レクティファールも知らなかった。

もしどちらかがその事実に気付いていれば、五年後に大陸を襲う悲劇は回避されたのかもしれない。

章末話「所謂ひとつのエピローグ」

今次戦役に於けるアルトデステニア皇国陸軍の損害報告書より、人員損失報告。

負傷者四一九八三人――――内、負傷、精神疾患による除隊、退役、予備役編入は五五八三名。

戦死者――――三九〇四名。

レクティファールは嘗て『ウィルマグス』総督府と呼ばれていた、巨大な煉瓦造りの建物で一冊の報告書を読んでいた。

ひと月前に一応の終結を見た、対帝国国境紛争の損害報告書だ。

「――――多いのか少ないのか、正直判断しかねますね……」

勲章と賞詞の授与者選定の際、戦死者に贈られる皇国勲二等紫色大十字章と負傷者に贈られる戦傷章受賞者の数に暗澹たる気持ちになった彼だが、こうして明確な数として目の前に示されると、再び黒々とした何かが心中に湧き上がってくる。

これだけの犠牲を払って得た勝利。しかし、これを犠牲の数に相応しい勝利とすることが出来るかどうかは、現在両国の間で行われている休戦交渉次第といったところだろう。既に交渉の前段階として両国国境は非武装地帯に指定されているが、それも所詮砂上の楼閣。

レムリアの海に展開した両国海軍も同海域から引き上げたが、どちらにせよ、交渉の結果次第では再び剣槍を持って対峙することになるだろう。現に両艦隊は母港に戻らず、互いの姿が見えない海域に待機している。

しかしそんな中でも、出来るならこのまま終戦まで持ち込みたいというのがレクティファールと皇国政府の本音だ。

帝国が帝国として存続することに皇国側は問題を感じていない。問題は帝国側が皇国と敵対し続けることであり、武力衝突に至ることだ。戦争とは浪費以外の何物でもなく、何十年何百年も継続して行うには少し無駄が多すぎる。

帝国建国以来――――いや、旧帝国崩壊以来、皇国は延々と北からの侵略者と戦い続けていた。

あるときには少数部族の共同体、またあるときに複数国家の連合軍、さらには単一国家の国軍と段々規模を増し、現在では大陸の三分の一強を支配し、さらに複数の冊封国を内包、多くの従属国を従

える大国の正規軍である。

皇国側の領土が建国以来殆ど拡がっていないのに対し、帝国の領土は皇国が地図を作るたび拡がっている。

五年ごと更新された地図を較べて見れば、その国土の拡がり具合は一目瞭然だ。

膨張主義の結果と言ってしまえばそれまでだが、周辺国にしてみれば迷惑なことこの上ない。

「膨らみ過ぎれば破裂するだけだっていうのに……――――さてさて、どうしたものかな」

限定的であるなら帝国資本の国内流入を認めることは出来る。しかし、限定的という便利で安易な言葉に帝国が納得することはないだろう。彼らの望む未来とは、自分たちの繁栄と幸福以外にない。そして彼らの幸福が他者にとっての不幸であることはこれまでの歴史が暗示していた。

帝国が何故他国との協調を嫌うのか、レクティファールには理解し難い。

独り勝ち以外勝利ではないという彼らの考えは、いずれ彼ら自身を滅ぼすだろう。

それが正しいこと、国家の繁栄に最も適した策だとしても、だ。正しいことだけで世界が回るなら、今この世界に知恵ある者共は存

在していない。

「まあ、彼らの相手は専門家にお任せしますか」

考えても仕方が無いことは後回し。これも諦めの一種だろう。だが、幾ら考えてもレクティファールが今回の帝国との交渉に参加出来る筈も無く、さらには外交感覚に乏しい彼が横から口を出しても直接折衝に当たっている外交官に余計な枷を掛けるだけだ。

一度信任したからには、彼らを信じ抜くしかない。

「――――ふう」

レクティファールは嘆息し、報告書を机の上に置くと別の書類の決裁を始める。

そこでレクティファールはこの都市に到着したばかりの頃を思い出す。

帝国の『ウィルマグス』総督が使用していたという執務室に通され、執務机とその周辺を埋め尽くす書類の山脈を見たときの衝撃。そこかしこに彫金が施され、すごい人が作ったらしい家具が配置され、高価なのであろう絵画が掛けられた執務室に物申す前に、人間としての色々なものをへし折られたレクティファールは、さめざめと泣きながら書類を片付けたものだ。

片付けても片付けても書類が減らないという地獄を味わったレクティファール。文官たちには優しくしようと少しだけ思った。

「しかし、本当に死ぬかと思った。すごいな、“皇剣”って……」

心の底からそう思った。

『ウィルマグス』行政の殆どが帝国から派遣された行政官で成り立っていたことも予想外だったが、自分が官僚数十人分の仕事をこなせたことが驚きだった。都市から脱出した大多数の行政官の代わりを確保するまでの八日間、レクティファールは寝る間も惜しんで仕事に明け暮れた。それこそ仮眠以上の睡眠を取れないくらいに。

義務感からか、都市を逃げ出すことを良しとしなかった行政官たちが僅かながら残っていたことも幸運だった。但し、彼らの大半は決裁権の無い下級役人であり、都市全体の行政を司るほどの官吏は残っていなかったのだが。

軍による占領統治は基本的な都市機能の維持以上のことは考えられていない。軍は政治に関わらないという大前提があるからだ。それでも必要最低限の都市機能は維持出来るが、いつまでもそんな統治では住民たちの不満は高まるばかり。

レクティファールはすぐにでも本土から行政官を派遣しようとしたのだが、北方の行政官は今次の帝国侵攻で超過労働気味。他方面の行政官も常に人手不足というのが皇国の現状だ。

いや、行政官も単純な数で言うなら充足している。

しかし占領直後の都市を鎮撫するような難しい仕事に対応出来る官僚、行政官というとやはり不足気味だ。

優秀な行政官は貴族たちが囲う。それは皇国の常識のようなものだった。

皇王家が自分たちの働きを監視している中、優秀な行政官はどれだけいても多すぎるということはない。特に自分たちの領地で生まれ、金をかけて育てた官吏は中々手放そうとしない。

皇王家の直轄領、つまり天領にも能吏は多いが、そもそも天領そのものが広大――法的には皇国国土の貴族領と自治領以外は総て天領――だ。面積当たりの人数としては他の貴族領の半分ほどになるだろう。

そんな中でも皇王府や皇国政府、各貴族に協力を求めて何とか必要な行政官を確保したのだが、そこまで五日も掛かった。さらに行政官をこの『ウィルマグス』まで輸送するのに三日。合計八日間である。

「まあ、『ウィルマグス』を皇室直轄領に組み込んだのは正解だったな」

貴族領ならば貴族と皇国政府が。

自治領ならば自治政府と皇国政府が。

そして天領ならば皇王家と皇国政府がそれぞれ予算を負担する。

『ウィルマグス』は天領に組み込まれたから、その復興予算は皇王家が負担することになった。

これは度重なる戦乱で予算が尽きかけている皇国政府からの切実な願いを叶えた結果だが、確かにレクティファールの意向一つで莫大な予算を投じることが出来る天領という選択肢は正解だった。

こういうときは拙速こそが肝要。

時間を掛ければ掛けるほど統治は難しくなっていく。特に『ウィルマグス』は住民たちが自分たちの手で勝ち取った都市、皇国軍が手助けしたのは間違いないが、少なくとも住民はそう思っているだろう。

『力があれば勝ち取れる』

この都市の住民たちはそれを知ってしまった。

気に入らないことがあれば、破壊して一からやり直す。変えるのではなく、壊す。

破壊とは確かに単純で効果的な手段ではあるが、そんなことを繰り返せば治安は乱れ、物流は滞り、投資も激減し、金は回らなくなり、最終的に都市は滅ぶ。

レクティファールはそれを避けるため、住民たちの牙を気付かれ

ない内に丸く矯めることを決めた。

たとえ不満を持つ者が現れても、現状に満足している者が大多数であれば良い。行動を起こして得られるものが現状よりも少ないなら人は動かないものだ。

ここ最近では頻発していた犯罪の類も大分落ち着き、都市機能も以前の水準まで戻った。

住民たちが帝国に奪われていた土地、資産も判明している限り元の持ち主に返還し、住民たちの生活水準は帝国統治下の頃のそれとは比べものにならないほどに向上している。

さらに皇王家が投下した資本によって都市経済は息を吹き返し、緩やかにではあるが資本の循環も始まっている。この資本が巡り巡ってレクティファールの手元に戻るのはまだ先だろうが、その頃にはこの都市も活気を取り戻していることだろう。

「民が豊かになり、そして統治者が豊かになる、か」

民が富まない限り、統治者が富むことはない。

統治者が富を求めるのなら、まずは民を富ませなければならないのだ。

ここで投資を惜しんでは結局自分が損をする。レクティファールは相続しただけで自分が稼いだ訳ではないと皇王府が許す限り資本を投下した。やり過ぎては問題があるが、それも皇府――皇王府総

裁の別称――をはじめとする皇王府の専門家たちが助言してくれた。

「――――しかし、皇王府の総裁って一度も会ったことが無いんですが……」

これだけ金をせびっておいて顔を見たことも無いというのは余りにも失礼な話だが、仕方がないといえば仕方がない。先の皇都奪還戦のあとは互いに多忙で、部下同士を行き来させて連絡を取り合った。

通信でなら顔を見ることもできる筈だが、そこまでする理由がない。

お互い実利を求める性格なのか、向こうも必要以上にレクティファールに関わろうとはしなかった。

「まあ、いいけれども」

レクティファールの場合、害のない、或いは少ないことは軽視しがちだ。

これは為政者としての彼の短所であり、同時に長所でもあった。おそらく、自覚して矯正しようとするまでは直らないだろう。

レクティファールはうんうん唸りながら書類を捌いていたが、やがて執務室の扉がノックされると書類から顔を上げた。

扉の前に待機していた近衛軍の武官が腰の剣に手を掛けつつ誰何する。先の戦いでレクティファールが直接剣を抜いて戦ったという事実は近衛軍に対して衝撃を与えたらしく、彼らの勤務態度は行き過ぎな程に熱心だった。

「陸軍中央総軍所属第〇八野戦医療連隊連隊長、フェリエル・ララ・スヴァローグ軍医大佐。着任の報告に罷り越した」

そういえば、新たにこの都市に着任した医療部隊の元締めが挨拶に来ると文官の一人が言っていた。これまでは占領部隊付きの医療部隊がその任に当たっていたが、やはり人手が足りない。本来なら市民の健康維持など都市にある医療施設が担うべきなのだが、やはりというか医者のような社会的地位の高い職業は帝国国民が担うのが当たり前らしく、一部の町医者を除けば、殆どの医師は先の戦いで逃げ出してしまっている。

その医師不足を解消するために陸軍の医務衛生本部に打診したのが、単一で野戦病院を運営出来る規模の部隊、つまり医療連隊の派遣だった。

誰が着任したかまでは確認しなかったが、何処かで聞いた声だとレクティファールは思った。

「入れ」

レクティファールの許可を得て入室する軍医大佐。

軍支給の白衣を纏ったその姿を見て、レクティファールは無意識の内に立ち上がった。

さらに相手も大きく目を見開き、レクティファールを指差している。

「ああ！」

そんな声を上げたのは、果たしてレクティファールであったのか相手方であったのか。

どちらにせよ、近衛軍武官が困惑したように二人の間で視線を彷徨わせたのは確かなことだった。

「――――失礼致しました。殿下の御尊顔を拝する栄誉に浴したというのに……」

祐筆を務める文官が淹れたお茶を飲みながら、二人は思わぬ再会に笑みを浮かべていた。

「構わない……というよりも、出来るだけこの間のように接して欲しい。あのときの印象が強くてね、こうして畏まった会話というのは疲れる」

「公務ならば致し方ないかと。――――まあ、わたしと殿下の間柄は他人というには些か近い。そのような間柄の接し方であれば意思の疎通を円滑にするという名目も立ちましょう」

ソファに座ったフェリエルの眼鏡の奥の金瞳が、悪戯を思い付いた子供のような光を宿している。

対面に座るレクティファールはそれを苦笑しながら見つめ返し、頷いた。

「そうしてくれると助かります。ここに来て以来、公務ばかりで気が休まらない」

「ふふ……わたしとは二度目の対面だったと記憶しているが、そん

なに気楽な態度でいいのか？」

「あなたか妹殿か、どちらかは私の隣に立って貰うしかありません。となれば、私たちの関係は決して遠くないものになる。今から気を張っていては保たないでしょうし、正直遠慮したい」

レクティファールは本心を吐露した。

どちらの関係になるかどうかは分からないが、長々と気を遣うには近すぎる間柄だ。ならば最初からある程度気楽な関係を構築するべきだとレクティファールは判断した。

それに、レクティファールにとってフェリエルは信頼に足る人物だ。あの野戦病院での姿を見て、そう結論した。

「あなたなどと他人行儀な呼び方はやめてくれ、フェリエルで良い」

「ならば私は――――」

フェリエルが身を乗り出し、レクティファールの口に人差し指を押し付けた。

「レクト、でいいだろう。メリエラから聞いている」

やはり面白そうに揺れる金瞳。

レクティファールは戸惑ったように口を開いた。

「もう会われたのか。彼女に」

「会ったとも。少し離れているとはいえ彼女とは親戚だし、何より龍族の治療は龍族の医師が担当するのが一番良い」

龍族の身体構造は微妙に人間種や大多数の混血種とは異なる。

日頃暮らしている分には気にならない差異だが、こと医療分野では無視出来ない。医療教育現場で各種族の特徴を学ぶ期間が設けられている程だ。

「見舞いがてら顔を出したんだが、驚いていたよ。まさかここに派遣されてくるとは思っていなかったとね」

「こちらは陸軍に要請しただけで部隊までは指定しなかったから、偶然といえば偶然でしょうね」

「確かにな。だがまあ、偶然も起きてしまえば必然だったということさ。メリエラもそう言っていたよ」

レクティファールは優雅にお茶を飲むフェリエルの顔を見ることが出来なくなった。

後ろ暗いというか、申し訳ないという感情が首を擡げてきたからだ。

「一度も見舞いに来ていないそうだな」

「――――――――ええ、色々ありまして」

病院の面会時間は総て仕事で埋まっている。

休日もなく、まさか深夜の病院に見舞いに行くなどという非常識を皇太子が実行する訳にもいかないだろう。

見舞い状こそ何度か送っているが、返事が返ってきたことはなかった。

「いや、向こうも怒ってはいないんだ。むしろ来てもらった方が困ると言っていた」

「は、はあ……」

何を言われているのか分からないといった風のレクティファール。

フェリエルは困ったように曖昧な笑みを浮かべた。

「好いた男には見せられない姿ということだよ。詳しく口にするのは憚れるが、まあ、若い女の見栄とか意地とかだと思って欲しい。いい男はそういうものを笑って受け入れるものだぞ」

「受け入れるのは構いませんが、ならば私は当分見舞いに行かない方が良い、と」

「そうだな、向こうが来て欲しいと言うまで行かない方が良いだろう。多分、あとひと月は掛かるな」

「そんなに……」

来て欲しくないと言うのだから行くつもりはないが、彼女の怪我の何割かはレクティファールの責任である。責任の果たし方に見舞いは含まれないのかもしれないが、それでも気遣い無用と言われて納得出来るほどレクティファールは今の立場に慣れていない。

「あ、従者の方も見舞いはやめておけよ」

「ウィリィアさんもですか……」

がっくりと肩を落とすレクティファール。

自分の守りたいと思った人が入院しているというのにこの自分の状況である、彼でなくても肩を落として当たり前だ。

彼女たちが怪我を負ったことについて、“守れなかった”とは思わない。

彼女たちの怪我は彼女たちの望んだ結果であり、レクティファールの願いとは全く別次元の問題だ。レクティファールも彼女たちの願いを押し退けてまで自分の願いを成就させようとは思っていないし、何よりそれは“守る”ことではない。自分が守りやすいように彼女たちを縛っただけだ。

それが分かる程度にレクティファールは大人だが、同時に理解と納得が別物であると知っている大人でもある。

「従者の方は面会謝絶と言うべきだな、意識はあるが身体中無事な部分を探すことの方が難しい。龍人族でなければ死んでいただろうさ」

「龍人族……――――グロリエ姫と同じ種であると聞いています」

レクティファールとしては、ウィリィアが一方的に叩かれたということがまず信じ難い。

直接戦っている姿は見ていないが、ウィリィアが一騎当千の強者であるということは彼女の父から聞かされている。さらに近衛軍からも、その能力を高く評価する報告が上がっていた筈だ。

本人はメリエラの従者として振舞っているが、望めば軍で栄達することも出来るだろう。力だけの猛者ではない、自身の力を生かすだけの知識も持っているのがウィリィアという女性だった。

「種族的には確かに同じだ。但し、個体としての能力はやはり大分違う。グロリエ姫は我が先祖――――初代紅龍公の父君を殺した生産性度外視、限界まで高性能を追い求めた上位龍人族の末裔。対してウィリィアは下位龍種に対抗するために数を揃えた後期簡易量産型の子孫だ。こう言っては何だが、個体性能が違い過ぎる」

四龍公の一角を占める紅龍公の一族。龍族の中でも間違いなく最上位に位置する強種だ。

それを殺せるだけの性能を持たせた個体の子孫ともなれば、たとえ先祖の持っていた力より劣っていても、あの結果は当たり前ということ。勝とうと思う方が烏滸がましい。

「メリエラなどは非常に悔しがっていたよ。龍種が『龍殺し』に勝つなど、彼我の能力がよほど隔絶しているときか、一生分の運を使い果たしたときだけだというのにな」

「そこまでですか、彼女たちの力は」

フェリエルも龍族だ。当然、『龍殺し』を前にしての対処方法は教え込まれている。

その対処方法とは――――己が出しうる全力の一撃当ててから尻尾を巻いて逃げろというもの。その一撃で倒せる相手ならそれで良し、受けても生きているような相手なら、それは勝てないということなのだ。

だが、総ての龍族がそれを鵜呑みにしている訳ではない。

メリエラのように龍族以外の種族が編み出した技術で対抗することも出来るし、そもそも戦わないという選択肢を選び続けることも不可能ではないのだ。

何より、龍人族はその数が少ない。

これは人形種総てに言えることだが、彼らは人に生み出され、産み落とされたあとも大なり小なり調整を受け続けることを前提にした種だ。本来は整備調整不要の完全兵器として設計されたのだが、特に強大な力を持つ個体ほどその傾向が顕著で、グロリエ程の力を持つ個体が極稀にしか発生しないこともそれに由来する。

ウィリィアと同程度の性能の量産型であれば調整も不要だが、そのような個体は他種族の脅威としては些か弱い。だからこそ、人形種は他の種族に受け入れられたのだろう。他の種族とて、自分たち

を脅かす擬物の命を放置する程馬鹿ではないのだから。

「グロリエ姫とて、調整を受けられない以上先祖のような力を発揮することは出来んだろう。だが、我らの世代の四龍姫の中で最も戦闘能力が高いメリエラを一蹴する程度のことは出来る。まあ、父たち四龍公を相手にしても一対一なら負けはしないだろうな」

「――――むぅ」

一軍に匹敵する四龍公相手に負けない個体。レクティファールは唸った。

しかし、龍種にさえ勝てる龍人族とて、軍という“群”相手であればまず勝てない。どれだけ龍人族が強大な力を持っていても、それはあくまで龍や竜に対してのみ効果を発揮するものであり、グロリエが他の種族にさえ脅威を与えているのは、彼女が持つ『神殺しの神剣』が、その使用対象を龍や竜に限定された兵装ではないからだ。

「しかし、グロリエ姫は本国に召還されたのだろう？　帝国軍も甚大な被害を被った。例え帝国軍総兵力の百分の一程度のものであったとしても、だ。――――君がどの程度まで手を広げていたのかは知らないが、“君が意図した通り”、我が皇国は帝国の侵攻の意志を完全にへし折ったということだ」

フェリエルはレクティファールの顔を覗き込んだ。まるでその意図をその金色の瞳で読み取ろうとしているかのように。

レクティファールはその視線に僅かにたじろぎ、それでもじっと見詰め返した。

「――――ふふ……」

フェリエルが落ちてきた眼鏡を押し上げると、その不思議なにらめっこは自然と幕を閉じた。

帝国側の死傷者は皇国が把握しているだけで八〇〇〇を越える。その内の何割が永久損失として計上されるのかは分からないが、少なくとも帝国軍の皇国侵攻を数年間躊躇わせることは間違いない。

否、むしろ、今の帝国にそんな余裕はないと言って良い。

嘗てグロリエが指揮を執っていた西方戦線が、西方諸国の猛反撃によって押し戻されたのだ。

帝国が皇国に敗北したという一報が大陸全土を席巻したのと、全くときを同じくして始まった西方諸国の大反攻。これまで散々に打ち負かされていた西方諸国軍が、国境線を開戦当初の線にまで押し戻したという。帝国側は先ごろまでの指揮官であったグロリエ敗北の報に動揺し、屈辱的な敗走を繰り返した。

これを皇国側の工作ではないと疑わない者は、大陸のどの国家の

政治家にもいなかった。

「――――私がしたことなどそう大したことではないでしょう。単に西方の主力を担っていた帝国陸軍第三軍集団とグロリエ姫を引き付け、それを追い払っただけ。西方諸国が反撃に必要な戦力を残し、その機会を逃さなかった、彼らこそが勝利者です」

「そうだな、勝利者は彼らだ。つまらないことを言った、許してくれ」

フェリエルはレクティファールの言葉を鵜呑みにした訳ではない。だが、彼女は自分がこれ以上足を踏み入れても、どちらにも不利益しか齎さないと悟ったのだ。

レクティファールが西方諸国との細い外交経路を最大限活用していたということは、父――――紅龍公フレデリックからの情報で知っている。ただ、それが実を結んだことは多分に運の要素が強く、こんな外交は公にしてもまず褒められることではない。

何より、レクティファールがそれを公にしてしまえば不利益の方が大きくなるだろう。

西方諸国とはあくまでも利用し、利用される関係が望ましいのだから。

国家間の関係には、決して踏み入れてはいけない一線というもの

がある。その一線は相手によって常に変動するが、それを見極められない国家は滅びるという点では一致している。

ここで皇国が西方諸国に近付けば、彼らは皇国の持つその力を利用しようと様々な外交を仕掛けてくるだろう。

共に帝国と戦う同志として笑顔で近付き、自分たちが帝国から受けるであろう被害の何割かを皇国に押し付けるに違いない。

（いや、今考えることではないか……）

レクティファールは難しい顔で眉間を揉み解す。

フェリエルが目の前にいるというのに、考えることはこれからの皇国のことばかり、申し訳ないと思う余裕もない。

「外交とは得てして難しいものだが、何、皇都には専門家がいる。君がそう難しい顔をして目の下に隈を作る必要はないと思うぞ」

「むぅ……」

苦笑し、手の掛かる弟を見るような――――以前のウィリィアやメリエラと同じような表情でレクティファールを見るフェリエル。

実際に妹のいる彼女なら、なるほどこのような表情が板に付いて

いることも納得出来る。

「――――実は、挨拶ついでに君が無理をしていないか見てきてくれとメリエラに頼まれたんだ。副官のようなことをしてくれていたパラティオンの参謀ももういないのだろう？」

レクティファール付き参謀としてその任を全うしたリーデは、その役割を終えたということで三週間前にパラティオン要塞へと戻った。去り際に彼女が見せた戸惑いを多分に含んだ表情が気にはなっていたが、レクティファールはその労をねぎらう言葉を掛けるだけで慰留はしなかった。

確かにリーデは得難い参謀だった。若いがその分既成概念に囚われておらず、レクティファールの詐術紛いの策ですら冷静に分析することが出来た。経験さえ積めば、そう遠くない未来に英雄である父を越えることが出来るだろうと他の参謀も認めている。

近衛軍からも「殿下が望むのであれば陸軍からの転属も可能」と言われていたのだが、彼女の後見人であるガラハがそれに待ったをかけた。

「あの娘は殿下の傍に侍るには未熟。あのように未熟なまま殿下のお傍に寄ることとなれば、いつかその地位に呑まれましょう。あの娘の己の中の信念というものは未だ、細く、脆いもの。軍人として誰かに従う内はよろしいでしょう。ですが、誰かの上に立ち、その責任を総て負うにはこの上なく未熟であります」

ガラハはレクティファールの前に跪いて続けた。

「もしも、もしも殿下があの娘に軍人以外の役割を望まれるというのであれば――――小官は何も申しませぬ。あの娘の意志次第、あの娘の決断を支持いたします。必要であれば、このまま小官が後見に立ち、あの娘の身を保証いたしましょう」

『ウィルマグス』入城のその日、日が暮れて暗くなった執務室に現れたガラハはそう言ってレクティファールのリーデ引き抜きを拒んだ。

本来であればこのような直訴は罪にさえなるのだが、レクティファールはガラハのその真摯な態度に深い意図を感じ、彼を罪に問うこともリーデを引き抜くことも実行しなかった。

当然、ガラハの言うような『軍人以外の役目』も選択することは無かった。

ガラハはああ言っていたが、実際にレクティファールがその選択肢を望めばリーデのような一介の士族に選択の自由はなく、彼女は本心を隠したままレクティファールの下に上がることとなっただろう。

それは、レクティファールによるリーデへの裏切り以外の何物でも無い。

「彼女は本来の役目に戻っただけです。ここでの仕事は彼女の職分ではないでしょうから」

「それで何週間も休みなく働いていると？　――――あれか、君は医者に喧嘩を売っているのか」

フェリエルの眼鏡がきらりと光を反射する。

レクティファールはびくりと肩を震わせたが、何とか逃げ腰になることだけは免れた。

「いいかね、医者とは怪我や病気を治す仕事だと思っているようだがそれは間違いだ。確かにそのような側面はあるが、医者の本分とは人々が健やかに暮らせる状況を作り出すことにある。病気や怪我を治すというのはその手段であって目的ではない。さらに医者とは病気や怪我を予防することも仕事なんだ」

「はあ」

目を瞑って滔々と語るフェリエル。答えるレクティファールは気のない返事だ。

「はあ、ではない！」

「おおうッ！？」

くわっと目を見開くフェリエル。

今度こそレクティファールは一歩退いた。男として負けてはいけない戦いに負けた気分だった。

「いいかね、君が倒れたらどうなる？　国民には動揺が走り、他国は必要がないのに無駄な動きを見せるだろう。その無駄な動きによって損害を被るのは無辜の民だぞ？　それが元首の行いかと問われて、君は胸を張って是と答えられるのか」

「む……それは……」

「ちなみに出来ると言ったら殴る」

「聞いておいて選択肢ないじゃないですか！」

レクティファールの前で拳を握り締めるフェリエル。

医者とは体力仕事である、彼女をそこらの女性と一緒にしたら間違いなく痛い目を見るだろう。

「それ以前に、医者なのに患者殴るのはいいんですか！？」

「何を言う、まだ殴ってないから患者じゃない」

「何という暴論……！」

「仮に患者になったとしても、何、痴情の縺れと言えば誰もが納得するだろう。元々龍族の娘が皇王に嫁ぐのは、万が一のときに夫をぶん殴ってでも止めるためだからな」

「知りたく無かった……そんな事実……」

得意げに笑うフェリエルとテーブルに突っ伏して泣くレクティファール。

確かに彼女たちに勝てるなんて思ったことはない。

そもそも、その意見を無視することの危険性は嫌というほど理解しているのだ。

「まあ、ファリエルの方は多少手加減してくれるだろうな。あの子はああ見えて身内には優しいから」

「――――――――」

ああ見えてって、何気に酷いこと言うなこの姉。直球ど真ん中じゃなかろうか――――レクティファールはそう思ったが、賢明なことに口に出したりはしなかった。

最近、怒られないことに関してはその他のどんな技能よりも上達が早いレクティファール。人とは、自分に必要と思われる諸々の技能の習得には並々ならぬ才能を発揮するらしい。

「そういえば、ファリエル――――妹君は？」

「ん？　ああ、うちの部隊に居るが、君に会いたくないと言ってついてこなかった」

「――――――――」

どうやら嫌われているようだ。

以前に会ったときも親の決めた結婚に納得していない様子だったから、まあ、仕方がないと言えば仕方がない。

むしろ今回の結婚を全く気にしていないフェリエルの方がおかしいのだろう。幾ら以前から決まっていた習慣とはいえ、少しくらい

悩んでもいいものだが、フェリエルのレクティファールに対する態度は終始一貫して変わらない。

レクティファールには正直理解し難い。

悩むレクティファールの内心に気付く由もないフェリエルは、お茶を一口飲むとレクティファールの前に一枚の小さな紙片を差し出した。

「我が連隊の第二大隊大隊長兼第二救命班班長、軍医少佐ファリエル・ララ・スヴァローグ。宿舎はここに書いてある。君から会いに行くことは止めないから、これ以上の自己紹介は本人に頼んでくれ」

「――――行ったら罵声に加えてメスでも飛んできそうですね……」

紙片を取り上げ、眉根を寄せるレクティファール。

フェリエルはにやりと笑った。

「何だ、よく知ってるな。妹のメス投げの腕前は飛ぶ鳥落とすほどだぞ。まあ、昇進が遅れる程度には罵声も飛ばすが」

「――――……」

対空メスということですか――――げんなりと肩を落とすレクティファール。

皇国の軍医たちは皆この技術を会得しているのだろうかと本気で気になった。

「気にするな。さっきも言ったが、一度身内と認めれば妹ほど情の深い女もいない。龍族の女ということを差し引いても、良い妻、良い母になると思うぞ」

「ちなみにあなたは……？」

思わず問うレクティファール。

「それなりだ。だがまあ……――――」

フェリエルは立ち上がると、自分を訝しげに見上げるレクティファールへと歩み寄る。

懐に手を入れた彼女の動きは自然で、出入口の左右に控える近衛兵もその動きをただ見送ることしか出来なかった。何より、まさか紅龍公の姫君が摂政を害するなどとは夢にも思うまい。

されど、その手に切物が煌めくことは、夢でも幻でも無かった。

「――――わたしは身内ほど手加減出来ない性質でね。父にも手加減を覚えろと言われているんだが、中々難しい。だから、言わせて貰うぞ……！」

ウィリィアが普段持っている細剣とは違う、片刃の短刀。

スヴァローグ公爵家の紋章が刻まれたそれをレクティファールの眼前に突き付け、フェリエルは弾劾する。

「甘ったれるな小僧。貴様の命は貴様だけのモノではない。好き勝手に仕事をするのは構わんが、身も心も傷付いた婚約者に無用の心配を掛けることが摂政や大の男がすることか！」

「――――――――」

近衛兵が剣を抜こうとすると、レクティファールはそれを手で制した。

これは公爵家令嬢による摂政への傷害ではなく、ただの喧嘩だ。軍人が関わるべきものではない。

「――――そこまで、彼女は気に病んでいるのか」

レクティファールの口調はこれまでの気安いそれではない。

纏う雰囲気さえも、嘗てファルベル平原で帝国の虎姫と相対したときと較べて少しの遜色もなかった。

「病むとも、自分が不甲斐ないばかりに君に直接敵の手が届いた。守るべき者を守れない、それは我ら龍族の女にとっては自分の身が汚されるよりも辛いことだぞ」

「――――――」

フェリエルの怒りの対象は、そんな友人の心の中をこの男が全く理解していないことなのだろう。

見舞いに行かなかったことは別に責めるべきことではない。

ただ一つ、自分を守れなかったことを“責めないこと”が問題だったのだ。

「『騎従の契約』を結んだ以上、貴様はあれの主人だ。騎龍の不手際を責めず、ただ放置するは主人の行いに非ず、外道の行い」

「あれだけ傷付いた彼女を責めろと？　自分の身が危険に晒されたから」

レクティファールは地の底から響くような低い声で問う。

すでにこの男はただの弱者に非ず、帝国の誇る姫騎士と斬り結んだ皇だ。

近衛兵がレクティファールの発する怒気にあてられ、蒼褪めた顔で二人を見る。

「そうだ」

フェリエルの言葉を聞き取った瞬間、レクティファールの頭の中で、何かが切れた。

「――――ッ！」

刹那の間さえ無かった。

あの帝国第十三姫の一撃に較べれば鈍いことこの上ないが、レクティファールはその衣裳の裾を翻したかと思うと、一瞬で“皇剣”を引き抜き、フェリエルの首筋にそれを突き付けていた。白刃に、フェリエルの端正な顔が映り込んだ。

訓練以外で敵でない者に刃を突き付けたのは、これが初めてだった。

その証拠に、“皇剣”を突き付けられたフェリエルよりも、突き付けた本人の方が内心動揺していた。

自分の行いが信じられないかと言うように、その顔から血の気が引いた。

「――――良いんだ。君の怒りは正しい。ここでわたしを斬り捨てても、父上は君を責めない」

フェリエルはこれまでの怒りを掻き消し、レクティファールを優しげに見詰める。

その表情は慈母のそれで、レクティファールは尚も混乱した。

「な、ぜ……」

「何故？　君の怒りは、君の大切な何かをわたしが傷付けたからだろう。他人の大切なものを傷付けたら、怒られるのが当たり前だ」

「――――ならば、君の怒りも正当だろう」

レクティファールは大きく息を吐くと、“皇剣”をフェリエルの首筋から引く。

そのまま一振りすると、“皇剣”は光の粒となって霧散した。

「君の怒りは大切な友人を蔑ろにされたから。それだって十分正しい、少なくとも私はそう認識する」

「――――――――」

フェリエルはぽかんとレクティファールを見上げる。

大した差ではないが、レクティファールの方が背が高かった。

「ええと、つまりどういうことだろうか」

「今回はお互い様ということでしょう。だけど、まあ……――――」

痴情の縺れで刃傷沙汰は気分が良くないし、何より外聞が悪い。もうこれっきりにしよう――――レクティファールはそう言って短刀を持つフェリエルの右手を押さえる。

フェリエルの手は医者らしく少しかさついたものだったが、レクティファールはそれを握り締めて笑った。

「君は医者でしょう。刃物を人に向けるときは、その人を救いたい

からじゃないのですか」

「――――む……！」

フェリエルがばっとレクティファールから離れる。

わたわたと短刀を懐に仕舞い、乱れた白衣を整える。ついでに呼吸も整えていたようだが、レクティファールは何も言わなかった。人は学習するのだ。

フェリエルはこほんと小さく咳払いすると、少し俯いたまま、上目遣いでレクティファールを睨んだ。

「き、君は、意外とあれだな。節操がないな……」

「――――非道いな、その評価は」

本当にそう思った。

節操なしと言われるようなことはしていないと胸を張って言える。

「いや、節操なしなのは別に構わないんだが……」

「じゃあ、さっきの評価はなんですか」

どうにもフェリエルとの会話がちぐはぐだ。

レクティファールは、これが世に言う価値観の相違かと思った。

フェリエルはしばし唸ったあと、一つ頷いた。

「――――うん、よく分からん。なので出直す」

「は？」

フェリエルはそのまま逃げるように執務室を飛び出す。

レクティファールは呆けたようにその後ろ姿を見送り、やがて机の上に一綴の報告書があることに気付いた。

内容は今後の野戦病院の運営計画。どうやらフェリエルが去り際に置いていったものらしい。

あの一瞬でどうやって、と思ったが、やはりその疑問はレクティファールの心の中だけで適切に処理された。

「あ――……」

そう呻きながらフェリエルが部屋に入ってきたとき、その部屋の主はリハビリを兼ねた簡単な裁縫をしている最中だった。

ノックもなく部屋に入ってきたフェリエルに対して嫌味の一つも言ってやろうと口を開いた主だが、どうやら本当フェリエルが悩んでいるらしいと気付き、嫌味を言うのを止めた。

「どうしたの、フェリエル。難しい顔をして」

「ああ、メリア……ちょっと殿下に目通りしたんだが……」

「レクトに？」

はて、レクティファールとはフェリエルがそんなにも悩むような

種類の男だっただろうか。

「は！？　まさかレクトが……――――――！」

摂政の立場を利用して変なことをしたのではないだろうか。

意識的にそんなことをするような男ではないが、無意識ならあり得る。

「ど、どうしたのフェリエル？　辛いことなら訊かないけど、わたしに出来ることなら……」

「いや、いやいや、そんなことしてもらわなくてもいい」

フェリエルは寝台横の椅子に腰を下ろすと、メリエラの頬に掛かっていた銀髪を払ってやった。

そしてメリエラの姿をざっと確認する。医者としては患者の観察は欠かせない。

「――――――――」

フェリエルはメリエラに気付かれないよう、内心で嘆息した。

こう言ってはなんだが、レクティファールを遠ざけたのは正しかった。

それ程、今のメリエラの姿は嘗ての彼女からかけ離れている。

「殿下も心配していたよ。早く治して安心させてやれ」

「そう……」

レクティファールの名前を聞いた瞬間、フェリエルはメリエラの表情から生気が失せたのを見た。

患者用の飾り気のない院内服。

病的な白さを見せるかさついた肌。

水気を失い、バラバラと散る髪。

嘗ての瑞々しさを失い、割れた唇。

隠しきれない汗の匂いと、塗り薬の匂い。

そして――――包帯に包まれた右腕。

美姫と名高いメリエラの姿は、そこには無かった。

大きく息を吐き、メリエラは口を開いた。

「――――やっぱり怒ってないんでしょうね、あの人のことだから」

「ああ、怒ってない。心配しているだけだった」

そう言ってフェリエルは寝台横の小机に置かれた数通の封書を見遣る。

どれもレクティファールからメリエラに送られた見舞いの手紙だ。

多忙で見舞いに行けないことを詫びる内容と、そしてメリエラの身体と心を心配する内容で占められている。

何処にもメリエラを責めるような言葉は、無かった。

「一度文句を言ったんだが、駄目だな。あれは君の望むような叱責をする類の男ではない」

「そう、フェリエルが言うならそうなんでしょうね……」

フェリエルは医者という職業上、メリエラよりも人を観察することが上手い。

嘘を嘘として見抜くことも医者に必要な技術だ。

「正直、メリアもあれに甘え過ぎだと思うぞ。あれはどうやったところでお前を責めたり出来ない。――――自分は大いに責めているようだったがな」

「――ッ」

フェリエルの最後の一言に肩を震わせるメリエラ。

もう一ヶ月も顔を合わせていないが、その表情が容易に想像出来た。

「あれはその内心か身体の何処かが壊れるぞ。“皇剣”があるから致命的なことにはならないだろうが、医者としては“皇剣”なんて兵器に頼るのは御免だ。出来るなら人の手で何とかしたい」

「――――方法があるの？」

メリエラの声には懇願の響きが多い。

フェリエルとしては今回の事態をメリエラとレクティファール双方の未熟が招いたことだと思っていたが、それは正しかったのかも知れない。

二人は、互いを想うには幼すぎたのだ。

どちらかがもう少し大人になればいいだけなのに、どちらもまるで初恋をした子供のように相手を気遣うばかり。

メリエラがレクティファールに見せた我侭な態度など、子供が相手の愛情を推し量るためにする悪戯と大差ない。

フェリエルとて経験が豊富ということもないが、少なくともメリエラの十倍以上は生きている。

「簡単で効果的な解決方法はある。ただし、これはメリエラの許可を得たい」

「どんなこと!?」

メリエラがフェリエルに詰め寄る。

その気迫に気圧されながらも、フェリエルは年上の威厳を保ったまま告げた。

「簡単なことさ。レクティファールをさっさと大人の男にする」

「――――は?」

「ついでにレクトが我侭を言って、甘えられる相手を作る。メリエラにとってのウィリィアのように、わたしにとってのファリエルのように、自分の弱さを見せられる相手というのは人にとって必要不可欠なんだ」

その手段として、レクティファールに適当な愛人を作る。

後腐れなく、それこそレクティファールの立場を承知した上で影に徹してくれる女を探し出し、それをあてがうことで心の均衡を保とうということだ。

「別に男女の仲になる必要はないが、女であることは外せない。まあ、レクトが男色家であれば別だが……」

「レクトは普通よ！」

吼えるメリエラ。

フェリエルは肩を竦めた。

「普通ならば、まあ女をあてがうべきだな。心当たりはないのか？」

「あ、あなた……！」

フェリエルはメリエラにこう言っているのだ。「お前の婚約者にあてがう愛人に心当たりはないか」と。

流石のメリエラも米神に青筋を浮かべた。

フェリエルは彼女にとって姉のようなものだが、こればかりは許せることではないらしい。

こふぅこふぅと荒い息を吐くメリエラの肩を叩き、フェリエルは諭すように言う。

「簡単で確実な方法といっただろう。時間があれば幾らでも他に方法があるんだが、時間が無いなら手っ取り早く欲望を充たして心も充たす方法が適している。まあ、レクトみたいな立場の人間にしか通用しない手ではあるがな」

流石に治療の一環で愛人をあてがうような真似は出来ない。

これはあくまでも君主の心の平穏を保つ臣下としての策であって、医者としての治療法とはまた違う。

「男は幾つになっても甘える相手が必要なんだ。そして女には幾つになっても甘えてくれる相手が必要だ。まあ、逆も確かにあるが」

「だ、からって……レクトに……！」

「わたしたちが相手をする訳にはいかないだろう。今上陛下の喪が明けるまで戴冠の儀も婚礼の儀も出来ん。一応わたしたちは婚礼の儀を済ませるまで生娘でいなくてはならないのだから……」

それは四界神殿の教義だとか、道徳的な問題という訳ではない。もっと単純に、万が一子どもが出来たときにその養子縁組で揉めるのを避けるためだ。

婚礼の儀を済ませていない以上、その子供は法的には私生児ということになる。

だが、血統上は間違いなく皇王と四龍姫の子。

これは大いに揉める。

皇子や皇女を養子に出して国内の結束を高める皇国では、間違いなく無用の争いを招くだろう。

それを避けるため、皇王と皇妃候補の間に子供がいては困るのだ。

これが皇太子であっても、正式に婚姻していない限りは同じこと。

さらに、姫君が生娘であるということには他の男と肉体関係を持たないという意味もある。皇妃と皇王以外の別の男との間に子供が

いれば、これもまた火種になってしまう。

皇王の座は世襲ではないが、その系譜は間違いなく皇国の屋台骨と言えるのだから。

「――――分かるだろうメリア。将来的にわたしたちにレクティファールを支えることは出来るかも知れないが、今彼を受け止め、受け入れることはわたしたちには出来ない。不甲斐ないことではあるがな」

「――――――――」

メリエラも分かっているのだろう。

だから悔しそうに唇を噛み、まだ満足に動かせない右手を左手で握りしめているのだ。

フェリエルは嘆息し、メリエラの右手を触診しながら静かに言う。

「――――すぐにやるべき策でも無い。一応、心の準備だけはしておいてくれ。必要ならわたしから父や他の三公に提案させてもらうから」

「――――分かったわ……」

四龍公ならば適当な女を探し出すだろう。

いや、離宮に入ったアリアを呼び寄せるかもしれない。

アリアなら、フェリエルの言った条件を総て満たしている筈だ。

「く……」

悔しかった。

自分とウィリィアが傷付いたとき、レクティファールも同じように悔しかったのだと今なら痛いほどに理解出来る。自惚れではない、レクティファールを想うから、想われていることが理解できるのだ。

大切なものがこの手から零れ落ちていくような感覚は、叶うなら経験したくない。

「フェリエル……」

「何だ」

自分の服を脱がせようと脇腹の紐を外していくフェリエルに、メリエラは漏らした。

「――――レクトとは、お互い普通の立場で出会いたかったな……」

摂政として、白龍の姫としてではなく。

一市民として、ただの男と女として出会いたかった。

そうすれば、こんなにも苦しまずに済んだのに。

「無理だな。普通の立場では君たちは出会えなかった」

しかし、フェリエルの言葉は冷たい。

「君たちは君たちだから出会えたんだ。今以上の“もしも”なんて存在しない」

「フェリエル……」

「医者をやっているとな、常にそう思う。今以上の“もしも”なんて考えている間は医者として半人前、今を“最高”にすることが出来て初めて一人前なんだって」

戦場で医者をしている以上、助けられない命はそれこそ星の数ほ

ど。

もしかしたら彼らを救う未来があったのではないかと考えるのではなく、これから自分の元に来る患者を救う方法を考えるべきなのだ。過去は後悔するためにあるのではない、未来に進むためにあるのだ。

少なくとも、フェリエルはそう思って日々を生きている。

「後悔出来るのは幸運なんだ、人はその幸運に溺れてはいつか後悔すら出来なくなる。大切な人も、二度と届かない場所に行ってしまう」

フェリエルの経験がそう言わせているのか、メリエラには分からない。

だが、姉のような人の寂しそうな表情を見て、彼女は心に小さな棘が刺さったような気がした。

自分もいつか、レクティファールを失って同じ表情をするのではないかと――――

「あ、結構胸大きくなったな」

「フェリエルぅうううううううううううッ！！」

叫びながら、心の何処かでそう思った。

閑話ノ弐「男たちの黄昏」

パラティオン要塞軍司令官ガラハ・ド・ラグダナより、『ウィルマグス』のレクティファールの下へ一通の封書が届けられた。

内容は――――今次戦役の戦死者総ての皇都への移送準備が完了したというもの。

本人の希望による臓器提供のための解剖や、探査魔法によって死亡を確認していても、崩れた施設内に埋没し、遺体を収容することが出来なかった死者たちの遺体収容作業が終わったということだ。

レクティファールはその事実を告げる書面に向かい、目を閉じて小さく黙礼した。

一分ほど経っただろうか、レクティファールは目を開け、祐筆役の文官を呼んだ。

そして、パラティオン要塞で執り行われる軍の葬送式に参加する旨を伝える。

文官はその言葉を聞くと黙って一礼し、退出した。

式典の予定は八日後。

此度の紛争の休戦から、五〇日目だった。

軍務院によって特別予算が組まれ、急ピッチで修理が行われているパラティオン要塞。

遮光膜に遮られなかった溶接の光が輝き、不整地用に改造された多脚重機が唸りを上げるその光景に、一つの異分子が加わった。

無骨な軍用車両と騎兵に守られるようにして北の平原から現れたのは、皇国国旗をはためかせ、車体の各所に対魔対物護法発生装置を搭載した一輌の軍用魔動車。

要塞の修理を行っていた何人もの工員がそれを認め、驚いたように目を見開いた。

このパラティオン要塞より北にあって、あの仕様の軍用魔動車に乗り込む立場にある者など、たった一人しかいない。

「――――……」

工員たちの注目の中、軍用魔動車から降りたレクティファールを出迎えたのは、ガラハとリーデの二人だけだった。

式典の内容が内容だけに、華美な歓迎は慎むべきと判断したのだろう。

戦死者の上司であるガラハと、この戦いでレクティファール付きの参謀であったリーデ。最低限の出迎えだった。

「――――遠路遥々御足労頂き、誠に恐悦至極。この雪原に散った我が戦友たちも報われましょう」

「いや――――彼らは我が戦友でもある。戦友を見送るためにならば、私はいかな苦労とて厭うつもりはない」

「は……」

ガラハとレクティファールの遣り取りは、それだけであった。

居合わせたリーデにしてみれば素っ気ないその言葉の交換。だが、レクティファールとガラハは数秒間視線を交錯させただけで、万言に優る意思の疎通を成し遂げていた。

戦場を知った男という、ある種愚かな生き物だけが至れる境地がある。

多くの想いが飽和し、散っていく戦場を越えた者が見える世界がある。

特別なことではない。ただ、己という存在が無垢な赤子ではなく、罪深き咎人であると知っただけのことだ。

「部屋を用意してあります。式典は明後日夜明けと共に」

「分かった」

皇国軍の葬送式は払暁に行われることが通例となっていた。

理由はただ一つ、死者の門出は、その死者たちによって齎された夜明けこそ相応しいと考えられたからだ。

生者は死者に別れを告げ、夜明けの先にある明日へと歩む。過去の存在となる死者と、現在(いま)より先の存在となる生者の道は、夜明けに分かたれることになる。

レクティファールはガラハに先導され、再びパラティオンに入った。

車両や重機、建設資材や廃材などが積み上げられた城門付近の、先の戦役時とは違う騒がしさ。

行き交う兵たちの顔にあの頃に見られた緊張感は見られないが、それでも明日の式典と要塞の修理に追い立てられていることに変わ

りはない。それでも彼らの動作に何処か清々しさを感じるのは、おそらくその背に負った重さを感じなくなったからなのだろう。

彼らが背負っている『国防』という責任は変わらない。だが、目の前に敵がいて、号令一下敵に立ち向かい、明日には生きているか死んでいるか分からないという緊張からは脱することが出来た筈だ。

明日の式典で送られる英霊たちによって生かされた彼らには、その生を甘受し、また全うする義務と権利がある。レクティファールはそれを思い、少しだけ引き結んだ唇を緩めた。

彼は自分のすぐ後ろを歩くリーデがその表情に気付いたとは考えもせず、ただガラハの後に続く。

だが、レクティファールの表情に驚いたような表情を見せたリーデは、だがすぐにその背を睨み付け、そして俯いた。

先程のレクティファールと同じ表情を、彼女は記憶している。

実家に置いてあった一枚の写真。

あの二五年前の戦いのさなかに従軍記者が撮影し、後に父の部下が母に手渡した、彼女の父を写した最後の写真。

まるで、兵たちの喧騒を別世界の物語のように眺める観客のようなその笑顔。

笑顔に見せかけた――――諦めきった最低の表情。

「――――っ」

あの写真を見て、父は自分と母を捨てたのだと確信した。

軍人として、同僚を救って散った“英雄”。

そう、父は“英雄”になるために自分たち家族を捨てたのだ。

国家の“英雄”になり、父は自分たちの家族ではなくなってしまった。

何処へ行っても、誰もが父のことを知っている。

“英雄ガリアン”としての、軍人の鑑としての父を誰もが。

その代償に、リーデは自分の知っている父を捨てなくてはならなかった。

母に聞かされた自分の知っている、自分と母だけの父は、人々が噂する、人々が知る父に塗り替えられてしまった。

父はリーデの父親ではなく、英雄を父に持つ、英雄の子リーデの父親になり、同時にリーデは単なるリーデ・アーデンではなく、英雄の子リーデ・アーデンになった。

この瞬間、リーデが夢見た家族の肖像は粉微塵に砕け散ったのかもしれない。

レクティファールを居室に送り届けたとき、ガラハはリーデの様子に気付いた。

成長するにつれ大きく禍々しくなり、それでも普段は巧妙に隠されているその鬼気が、ほんの少し顔を見せている。

所作に乱れはない、表情も至極真面目な参謀としてのそれだ。

だが、その瞳に常人にあってはならない歪みがある。

時折戦場に現れる、血と鬼気に踊らされた狂人と同じ歪み。

何故、と思わない。

やはり、と思うだけだ。

親友の娘に狂気を植え付けたのは自分自身。

親友は、娘を狂気に委ねるために散ったのではないというのに、

今の彼にはそれを引き戻すことさえ出来ない。

ガラハは既に狂気の側にいる存在。どう足掻いても親友の娘をあの濁りきった泥濘の中から引き摺り出すことなど、出来はしないのだ。

分かっていた。こうなることは。

親友が散り、“英雄”となってしまったあの日に。

国家のため、ひいてはこの皇国に住まう総ての国民のためにと、軍人であるガラハは親友が“英雄”に祭り上げられることを許容した。それが間違いであったとは今でも思わない。

当時の皇国はこれまでの歴史に類を見ない北からの大攻勢に動揺していた。援軍の集結は遅れに遅れ、最悪の愚策である戦力の逐次投入でもって辛うじて戦線を維持した。

一〇万を超える大軍勢とそれを率いる有能な将。

即時投入可能な切り札として送り込まれた、複数の力ある龍族でさえ帝国の『龍殺し』に総て滅ぼされた。

今の時代のグロリエ皇女と較べれば確かに見劣りする能力であったが、その『龍殺し』は一個の兵器として、軍の一部としてはまさに完成された『龍殺し』だった。

通常の兵器でも龍族は滅ぼせると帝国が学習したのも、おそらくこの紛争だったのだろう。

最強種と名高い龍族を滅ぼされ、皇国軍はパラティオンまで押し込まれた。

親友が死んだのは、このパラティオン要塞への撤退戦の最中だった。

『龍殺し』擁する強大な敵主力打撃群を前に、質で贖えないほど数で圧倒的に劣る皇国軍現地司令部は要塞での籠城戦を決断。しかし帝国軍の動きは予想を遥かに超えて早く、撤退の遅れた一部の皇国軍部隊が帝国軍に捕捉される事態となった。

その部隊が、当時中佐であったガラハの率いる臨時混成支隊であった。

敗残兵を結集し、一応頭数だけは揃えられた混成支隊はしかし、戦力としては甚だ不安の残る部隊だった。

しかし、支隊と呼ばれるだけあって数だけはいる。そして、敗残兵とは緒戦の負け戦を生き残った古強者を多く含んでいた。

ガラハは全滅を避けるため、一部部隊を殿軍として総退却を決意。

その殿軍の指揮官として立候補したのが、支隊の先任参謀であった参謀大尉ガリアン・アーデンであった。

ガラハはガリアンとその妻との結婚式で友人としての言葉を述べていたし、新しく産まれた家族をよく知っていた。

だから、何度も翻意を促した。

家族のいない自分が残ると言った。

だが――――

「お前はこれから先、もっと必要とされる」

ガリアンはそう言い、自分が残るという自分の考えを決して曲げなかった。

先の戦役を思えば、ガリアンの言葉はガラハによって正しかったと証明された。ガラハは圧倒的不利な状況でも帝国軍の攻撃に耐え、ついに反撃の機会を掴んのだのだから。

ガリアン・アーデンは間違いなく優れた参謀であり、死して尚二五年後の皇国をも守り抜いたことになる。

しかし、親友と志願者で編成された殿軍を置いて撤退を始めたとき、ガラハは未来のことなど欠片も考えられず、ただ親友を贄とする自分の所業を嫌悪し、親友の家族を想って罪悪感に襲われた。

殿軍が玉砕したという報告を命からがら逃げ込んだパラティオン要塞で聞き、彼の心は後悔で埋め尽くされた。

後に良将として歴史に名を残すガラハ・ド・ラグダナは、このときに生まれたのだろう。

この戦いを契機にガラハは将としての頭角を顕し、親友の眠る非武装地帯を望む巨大要塞の司令官となった。

ここから後ろは親友の守った国土。親友の守りたかった総てが存

在する場所。

その想いを胸に、彼は先の紛争を上回る敵軍に対してさえ皇国本土を守り抜いた。

されど、払った代償は親友の守りたかった筈の家族。

これまで危うい均衡の上で保たれていたリーデの心は、あの戦いの狂気によって暗い泥に沈み始めている。

親友とよく似た青年が、親友と同じように強力な敵の前に身を晒し、そして“英雄”と呼ばれるようになってしまったから。

リーデは“英雄”を憎んでいる。

母から夫を奪い、自分から父を奪った“英雄”を。

人々を守るのは“英雄”などではないと軍人になっておきながら、やはり“英雄”によって救われた。

その結果、リーデの心は憎しみという業火によって総てを浄化せんとする煉獄となっている筈だ。

憎んで已まない“英雄”が、目の前にいる。

しかし、その“英雄”の姿を知ってしまった。

“英雄”が只人のように間違い、苦悩することを知ってしまった。

「――――殿下、一つお願いの儀がございます」

今をおいて、大切な親友の忘れ形見を救う機会はない。

ガラハは六つの月が夜天の支配権を賭けて争う頃、人目を忍んでレクティファールの居室を訪れた。

そして傅き、心の底から願った。

あのとき自分を救ってくれた親友に報いるためにも、親友の“本当に”守りたかったものを守るためにも。

“英雄”を憎んでいるのなら、“英雄”にしかその憎しみは解かせない。

毒は、毒によってしか解かせないように。

この一ヶ月でさらに降り積もった雪の上を、一輌の雪上車が走る。

パラティオン要塞と『ウィルマグス』間の連絡路は軍事的にも重要な輸送路でもあるため常に整備されているが、今雪上車が走る雪原は主要輸送路からも外れており、装軌式の雪上車でもなければとても走行出来ない。

偵察目的で開発され、皇国軍では中型車に分類される雪上車に乗っているのは二人。

運転席でステアリングを握るレクティファールと、助手席で押し黙ったままのリーデだ。

二人の真ん中前方に設置された透明な球体には、これから雪上車が進むべき方向が光で示されており、レクティファールはそれに従って雪上車を操っていた。この球体は基地からの誘導波を受けて車両を誘導する装置の端末で、軍用車両の装備としてはごくありふれたものだ。

特に目印の少ない雪上を走る雪上車には欠かせない。

甲高い独特の発振音をたて、進行方向を示す誘導装置。

車内の音といえばそれだけで、二人の間に会話はなかった。

五人乗りの車両で後部座席には大した荷物もなく、車内は酷くがらんとしていた。

運転手であるレクティファールは当たり前だが、リーデも暖房で眠気を催すという性格でもなく、ただ無言であった。

（――――ふむ、ガラハの言うことも分かるような気がしますがね……）

ちらりと見たリーデの表情はただの無表情というより、明らかに何かを抑え付けて無表情になってしまっているような印象を受ける。

親友の忘れ形見を心配しているのだということは、昨晩ガラハ本人に聞いた。

要塞に来たことで大した仕事もないことは確かだが、それでも紛うこと無く摂政であるレクティファールに、こうして“墓参り”への同行を頼むほどに事態が逼迫しているということも理解出来なくは無い。

リーデには先の戦役時大いに世話になったから、恩を返すと思えば納得も出来る。

だがそれでも、この沈黙は胃に悪い。

“皇剣”によって守られているからこそ、自分の胃は無事なのだろうと思うほどに。

「――――大尉」

話し掛けたのは、これで三度目。

「――――はい」

諸々の感情を押し殺した返事が返ってきたのも、三度目だ。

「道は合っているか？」

「――――は、誘導が間違っていない限りは、正しいかと」

元世界では乗用車両の運転免許を持ち、さらには建設重機や運搬車両の免許も持っていたレクティファールである。雪上車の運転も慣れればどうということはない。というよりも、“皇剣”が運転を知っていた。

されど、リーデの不機嫌さを塗り固めたかのような声を聞くたび、運転を誤りそうになる。

ごうごうと雪を押し固めて進む無限軌道の音が憎く感じることさえある。

車輪式車両よりも圧倒的に劣る移動速度が憎い。

「そうか」

「は」

早く着いてくれと心から思う。

レクティファールも一応無表情を保ってはいるが、密かにこめかみから冷や汗が一つ。

リーデ自身が苦手ということはない。

ただ、明らかに今のリーデの雰囲気は以前とはかけ離れている。

ガラハはその理由について明かさず、ただ「共にあの娘の父の眠る地を訪れ、殿下が何を想って帝国と戦ったか、あの娘に説いて頂きたい」と言うだけだった。

何を想って戦ったか、それを話すことに問題は感じない。

しかし、理由が分からない。

戦場での経験であればガラハの方が遥かに豊富で、リーデの父親のことであっても彼の方が詳しいことは疑いようも無い。リーデと仕事以外での付き合いがなく、その父親に至っては名前しか知らないレクティファールが彼女の“墓参り”に付き合うことに何の意味があるのか。

考えても考えても答えは出ない。

それが当然なのだが、レクティファールはガラハの考えに何か意味があるのではないかとさらに深く考え込み、自分で這上れないほどの深みに嵌り込んでいた。

下手の考え休むに似たりとは言うが、結婚もせず子供もおらず、さらには二三という年齢のレクティファールが考えてところで理解出来ないことはこの世に多く存在する。

無論、レクティファールの個人的な性格も、この疑問に答えが出ない一因ではあるのだろう。

彼がもう少し遺される者の立場と気持ちを考えることが出来たのなら、或いは一欠片の答えを見つけられたのかもしれない。しかし彼は遺される者ではなく、遺す者であり、それは生涯変わらないのだろう。

そういった性格という観点から見れば、おそらくレクティファールとリーデは余り良い相性とは言えない。

双方共に仕事と私事を分ける種類の人間であり、仕事上の関係であればこそ上手くいっていたに過ぎない。

やがて考えることを諦めたレクティファールはひたすらに雪上車を進ませることだけに腐心することに決め、無言のままステアリングを握り直した。

先の紛争後、非戦闘区域には両国間の休戦協定によって両国からの慰霊団が派遣された。

味方を逃がすために決死隊となった皇国軍五八五名が眠るこの小高い丘にも、当然慰霊団は訪れている。

しかし、慰霊団の派遣に合わせる形で、北方に領地を持つ黒龍公の寄贈品として雪花黒曜石の慰霊碑を設置するための工兵隊がこの場に訪れたとき、この丘には皇国兵の遺体は一つもなかった。

彼らは当然、同胞たちの遺体は野晒しになっていると考えおり、軍も遺体と遺品の回収部隊を同行させていた。

彼らは監視役として同行していた帝国軍の係官に問う、この場にあった筈の同胞の骸は何処にあるのかと。

帝国軍係官の答えは冷たく、惨いものだった。

「我が軍がこの場から撤退する以前より、この場に皇国兵の遺体と遺品は存在しなかった。おそらく、この丘を攻撃した部隊の兵士が戦利品として持ち帰ったものと考えられる」

当時の帝国軍には、「皇国兵の死体は高く売れる」という噂が蔓延していた。

その噂は、おそらくこの丘での戦い以前に発生した、皇国軍の龍族と帝国の『龍殺し』の戦いによって戦死した龍族の遺体のことを指していたのだろう。

だが、噂はいつしか誇張され、皇国兵総ての死体が価値のあるものだというものへと変わっていった。

結果、この丘で戦死した皇国兵の遺体は帝国兵によって奪い去られ、遺族の元に帰ることはなかったのである。

皇国は帝国に遺体と遺品の返還を要求したが、当然帝国側はそれを拒否。

当時この丘に攻め寄せた帝国軍は二〇〇〇〇に達しており、遺体窃盗の犯人特定は不可能であるというのが帝国側の言い分であった。

皇国も実際問題として遺体と遺品の返還は難しいと考え、引き下がることしか出来なかった。当時の両国は休戦状態にあるだけであって平和条約が締結されたということでもなく、依然として緊張は続いていた。

ここで余計な火種を抱え込むことは避けるべきだと、当時の皇王は判断。この件は闇に葬られた。

「父の遺体は、何処にもありません。遺品といえば軍から返却された品物と、中将が持ち帰った数点の品のみ。――――あとは、先代陛下より戴いた勲章ぐらいでしょうか」

そう告げるリーデは、うっすらと皮肉げな笑みを浮かべていた。

英雄になった父の証ともいえる勲章。どれだけ美しく、価値のある勲章であっても、彼女には道端の石ころの方が余程ましであった。

リーデの独白を聞きながら、レクティファールは雪上車から持ってきた花束を慰霊碑に捧げ、ほんの数秒瞑目する。悼みはしないし、そもそも立場上することが出来ない。だから、今の皇国は今を生きる人々が守っていると報告した。

「――――花は手向けないのか？」

「ええ、手向ける相手がいません。ここに眠っているのは英雄ガリアン・アーデン。わたしの父ではありません。わたしの父はあの戦の前、母とわたしを置いて戦場に赴いたあの日に死んでいるのです」

「――――――――」

ここに父はいないと言い切ったリーデの瞳は、冷たい刃のようであった。

憎しみが憎しみによって固められた刃。

近しいものだからこそ憎いという、家族というものに対する感情が希薄なレクティファールには到底理解出来ない、深い憎悪だった。

「父上が憎いのか」

「いいえ、父は憎くありません。それは確かなことです」

レクティファールに向き直り、リーデは銀の瞳を真っ直ぐに射抜いた。

眼鏡の奥の瞳に偽りはなく、彼女の中に迷いは一欠片もないと示していた。

「ならば、“英雄”が憎いのか」

「憎いです。“英雄”などという不確かなものに頼る今の皇国も」

摂政を前にしての言葉ではない。

しかし、リーデの言葉が、良識ある皇国軍人が常に危惧している問題点であることは確かだ。

「国家は国家の盾である軍によって守られるべきです。その為に軍は存在し、民の血税を用い、兵を鍛えているのですから。いざとなれば誰かが自分たちを率いて勝利を齎してくれるなどと考える輩に、民たちが自分の命を預けると思っておいでなのですか?」

リーデが言うほど、皇国軍人が“英雄”という偶像に頼っているとは思えない。

だが、大なり小なり彼女がそう考えるようになっただけの現実が、皇国軍にはあった。

「初代皇王陛下が“英雄”として、力あるが故に独立を志向していた諸氏族を纏めたのは事実です。初代陛下がそうしなければ皇国は皇国として纏まることもなく、大陸東部の諸氏族は終わりの見えない争いを続けていたことでしょう。四龍公とて、初代陛下に従わなければああして並び立つことはありえませんでした。ですが、だからこそ“英雄”は軽々しく現れてはならないのです」

“英雄”が量産されるようなことがあってはならない。

リーデはいつしかそう考えるようになった。

“英雄”などという便利な言葉で死を飾ってはならない。

本当の“英雄”は、死して生まれるものではない、と。

「殿下ならばお分かりでしょう。国が個人に頼るようになれば、それは亡国の証。滅びて当たり前の国です。皇国がそのようになることは、それこそこれまでこの国のために散った英霊たちに合わせる顔がありません。ですからわたしは――――」

「――――もう良い」

「――っ！」

滔々と紡がれるリーデの言葉を遮ったのは、小さな声だった。

だが、良く響く声だった。

リーデの喉はその言葉を聞いた瞬間に凍り付き、音を発せなくなった。

これまで黙ってリーデの言葉を聞いていたレクティファールが、静謐な眼差しを以て彼女の瞳を貫く。

「君はそうやって自分の本心を鎧ったのだな。自分と母を置いて散った父に対する憎しみを、父に死を強いた国に対する恨みを、聞こえのいい言葉で隠したのだな」

「殿下……！　わたしは――――」

「良い。君の意見は尤もだ。正しいかどうかは別にして、それも事実の一面なのだろう。それは認めよう」

だが、と前置きをして、レクティファールは先程花を手向けた慰霊碑を見た。

「ここで散った者たちが、そんな小難しい理屈で死んだとは思えない。“英雄”は所詮偶像であると君は言った、ならば、これ以上無いほどの現実である戦場で、果たして“英雄”は生まれることが出来るのか？」

レクティファールは思う。

“英雄”は戦場で散ることはあっても、戦場で生まれ出るものではないと。

だが――――

「偶像の“英雄”は戦後、人々の心が支えを欲して生まれる。だから戦場では生まれない」

「ならば、父はやはり“英雄”として散ったのではないと？」

「いいや、君の父上は“英雄”だった」

リーデは困惑した。

レクティファールの言葉に迷いはない。

だからこそ、彼女はその言葉遊びのような理屈に困惑した。

「何を……――――」

言っているのか――――リーデの言葉はレクティファールの声に遮られた。

「君の父上は偶像としての“英雄”ではなく、戦場の、現実の“英雄”として散ったのだ」

「そんな馬鹿なこと……！　“英雄”は戦場で生まれないと殿下は先程仰ったではありませんか」

「偶像としての“英雄”は生まれないと言っただけだ。現実としての……本人の意思の果てに生まれる“英雄”は存在すると私は考える」

「詭弁です！　父は“英雄”として散り、そして母やわたしの知る父ではなくなった！」

リーデは啼いた。

痛みを堪えるように、涙さえ浮かべて。

レクティファールは彼女の姿に――――短い期間ではあったが、自分の副官だった女性の姿に後悔の念を抱いた。

彼は、彼女と同じ考えには至らなかった。

それは戦場で近しい者を失ったことが無いからなのか、或いはそもそも考えの根底にあるものが違うからなのか。

ガラハが護衛の存在を徹底的に隠し、たった二人でこの場に赴かせた理由がようやく分かった。

彼女を知る者に、この姿は見せてはならない。

きっと彼女は、この悲しい姿を自らと関わりのある者に見られることを望まないだろう。

レクティファールはリーデを部下としてしか見ない。

それ以外の存在として見ることを許されていない。

だから、この場にいられる。

リーデとの関係は遠く、同時に近く、“英雄”と呼ばれ、本人は気付いていないが、リーデの父ガリアンに良く似ているからこそ、彼女を追い込み、その手を無理やり掴む役目を負った。

（――――どう考えても、役者不足ですが……！）

レクティファールは自分に難題を押し付けたガラハに呪詛を送った。

確かに目の前の女性のためと言われれば、これまでの義理もあるから悪役ぐらい請け負おう。

しかし、目の前で泣かれて何とも思わないほど良い性格はしていない。

「断言は出来ない。私は君の父上ではないし、君のことも知らない。だが、もしも私が君の父上と同じ立場に置かれたのなら――――」

「煩いッ！　黙れぇッ！！」

リーデは駄々っ子のように頭を振り、耳を塞ぐ。

レクティファールはその姿を見て気付く。リーデ自身は既に、答えを知っている、と。

「母は、母は最期に父を呼んで死にました！　会う人会う人に父の死を讃えられ、影で泣いていた母は、最後の最後にようやく父の本当の姿を思い出せたんです！　でもわたしは、母のように泣くこと

は出来なかった！」

ガリアンが死んだとき、リーデは僅か一歳。

父との最後の別れのとき、彼女はさらに幼かった。

そんな赤子が、父を憶えているはずが無い。

彼女の中の父とは、母の語る姿でしかなかった。

「母の語る父は、優しくて、わたしが産まれたときも涙を流して喜んでくれるような人だった。でも人々が私に誇らしげに語る父は、雄々しく、軍人としての鑑のような人。わたしや母なんてどうでもいいというように、ただ国家のために総てを捧げるような人だった！」

彼女の母は夫の武勇伝を聞くたび、人々が“英雄”と讃えるたび、一人で泣いた。

国家によって作られた“英雄”という偶像が、彼女の愛した男を穢しているように感じたから。

「皇国は、父を“英雄”にすることで国民を勇気付け、多くの死者たちを象徴とすることで国を保った」

だから、彼女は“英雄”とそれを作り上げた皇国を否定した。

“英雄”である父は、母を泣かせた。

“英雄”を生んだ皇国は、母と自分から本当の父を奪った。

「静かに、ただ静かに父との思い出を聞かせてくれるだけでよかった！　どれだけ勇敢だったか、どれだけ勇猛だったかなんて、母やわたしにはどうでもいい！　ただ在りし日の父の思い出を語り、静かに暮らしていたかった！」

何故、そっとしておいてくれないのか。

何故、母の涙に誰も気付かないのか。

何故――――

「何故――――わたしは独りになってしまったの！？」

失意の内に歴代皇王の下に召された母。

そして、リーデは独り残された。

「親戚たちは英雄の娘であるわたししか見なかった！　父のことを聞けば、軍人としての父の姿しか教えてくれなかった！」

彼らに悪意があったということはない。

ただ、両親を喪った幼子に、生きるに足る光を与えたかった。

その為の手段として、“英雄”という偶像は手堅く、そして確実なように思えたのだ。

「わたしは父を知らない！　父が分からない！　わたしは誰の娘なの!?」

慟哭。

これまで積み重ねられた想いが、彼女の理性を容易く粉砕した。

涙を流し、鼻水を垂らし、嗚咽を漏らす。

凛とした参謀としてのリーデ・アーデンの姿はそこにはなく、ただ、父を求める幼子だけがそこにいた。

「――――――――」

そこに至り、レクティファールは自分の失敗を悟った。

リーデの過去に、義理などと言って軽々しく触れるべきではなか

ったと。

摂政などと持て囃され、驕った果てに一人の女性の想いを踏み躙るような真似をしてしまった。

彼女が求めていた相手は自分ではない。

ただ、彼女の父を知り、語ってくれる相手だったのだ。

「――――大尉……」

「殿下は“英雄”です！　父と同じ！　いつかきっと、遺された人に悲しみを背負わせる！」

「――――……」

遺される人。

レクティファールの胸にその言葉が突き刺さる。

そうだ、いつか自分も大切な、守りたい人を遺していく。

遺された人たちは、今のリーデのように晴らすことの出来ない悲しみを抱えるのか。

ぐるぐると思考を埋め尽くす自問。

レクティファールはその考えに没頭する余り、リーデが涙を拭き、自分を睨みつけていることに気付かなかった。

「殿下」

「――ッ」

慌てて顔を上げるレクティファール。

その視線の先にいたのは、泣き喚く幼子ではなく、冷静な参謀でもなく、ただ独り、彼の背負う“英雄”と国家を憎む女だった。

「わたしはこの皇国を“英雄”以外の存在として守るために軍人になりました。だから、一つお答え下さい」

「何だ」

動揺を必死に隠すレクティファールに、リーデは一つ呼吸を挟み、言った。

「もしもわたしとこの国を選ぶとしたら――――いいえ、わたしとこの国、どちらを守りますか？」

「な……」

瞠目するレクティファール。

それだけ衝撃的な問いだった。

予想外と言ってもいい。

「わたしとて、国家のためとあれば死ぬ覚悟は出来ています。雑兵に陵辱されることも、捕虜という名の玩具にされることも」

真っ直ぐな目だった。

それ故に、レクティファールは言葉に詰まる。

「“英雄”ならば国家を取りましょう。摂政でも同じこと。いいえ、そうでなくてはなりません」

その表情は、諦念。

いや、侮蔑だ。

お前には所詮、一人の女さえ救えない。

多くを守ろうとすれば、個は零れ落ちてしまうのだとその眼が語っている。

「大尉、私は――――」

「このような問い、殿下にする方がおかしいのだと分かっています。ですが、殿下は答えるべきです」

国家を率いる者として、人々の象徴として。

人々に、死を強いる存在として。

「葬送式のあと、殿下は要塞に一泊されると聞いております」

「――――ああ、その通りだ」

レクティファールの答えに、リーデは酷く疲れたような笑顔で言う。

「――――ならば、答えは明日聞かせて下さい。わたしとて二〇年以上掛けて答えを出したのです。即答しろとは言いません」

「――――――」

答えを出せないレクティファールは、ただ黙って頷くしかなかった。

復路は、往路よりも静かだった。

どちらも声を発さず、ただ窓の外を見詰めるだけ。

それでもリーデの表情が少しだけ和らいでいるように思えたのは、レクティファールの錯覚であったのか。それとも、彼女の心境に何らかの変化があったのか。それとも、諦めてしまったのか。

どちらにせよ、二人は互いを空気のように扱いながら帰路を進んだ。

要塞に着いてからも、二人の間にあったのは仕事の会話のみ。

元々会話の多い関係では無かったが、他の参謀やガラハが二人の態度を訝しんだことは間違いない。ただその変化が酷く淡白であったため、その理由を問うことは出来なかった。

そしてその夜、レクティファールは寝台に寝転がってようやく気付いた。

昼間の問いは、リーデの優しさが多分に含まれていたのだと。

これからも多くの人々を死に追いやる彼が、いつかぶつかるであろう壁。自分がその壁の一つになり、レクティファールが少しでも早く覚悟を決められるようにという優しさ。

三歳年下の、軍人としても後輩のレクティファールに対する、彼女の不器用な優しさ。

心底恨んでいる“英雄”であっても、リーデはそれをレクティファール個人に当て嵌めたりはしない。

父の死によって大いに苦しんだ彼女だからこそ、偶像としてのレクティファールと、思い悩む本当のレクティファールをしっかりと区別出来たのだろう。

レクティファールはそれに気付き、自己嫌悪に陥った。

どんな関係であっても、どんな状況であっても、リーデは参謀としてレクティファールを補佐し、支えてくれる。

そんな彼女にどんな答えを返すべきなのか、彼女の望む答えが何であるのか、彼は空が白むまで考え続けた。

脳裏に、子供のように涙を流す彼女の姿を思い浮かべながら――

――

閑話ノ参「ヒトたるモノの暁」

白銀の大地と、果て無き蒼穹。

英霊たちが齎した明日は、涙が零れそうなほど美しい空だった。

パラティオン要塞の皇国側城門前。特一種摂政大軍装に身を包んだレクティファールを中心に、黒い喪章を胸元に着けた第一種軍装の軍人たちが二三〇〇〇人並ぶ。レクティファールのすぐ背後にガラハ、そのさらに背後、参謀たちの並ぶ列の中にリーデの姿もあった。

寒々しい風が吹く中、彼らは外套も着用せず嘗ての戦友たちの葬列を見守る。

幌付きの軍用輸送車に積み込まれた棺には、いずれも純白の布が掛けられていた。

死して歴代皇王の下へと参じる死者たちに与えられた、礼装だ。彼らはここから『ヴァーミッテ』へと運ばれ、皇家が仕立てた特別列車で皇都へと帰還する。

何百台と連なる軍用車を前にレクティファールはただ一人、静寂の中で口を開いた。

「――――我が戦友たちよ」

拡声魔法によって葬列の隅々まで、それを見送る軍人たちの端々まで、レクティファールの声は拡がっていく。

だが、軍人たちはレクティファールへと視線を向けない。

ひたすら正面を、葬列を見詰め続ける。

「君たちが命を賭して守り抜いたものは、我らが今ここで受け継ぐ。君たちがその胸に抱き続けた誇りは、我らが今この胸に引き継ぐ。君たちが得た勝利は、この国がこの国である限り天で輝き続ける」

レクティファールは腰に佩いた“皇剣”を鞘ごと引き抜き、それを捧げ持つ。

一度目を閉じ、レクティファールは“皇剣”をゆっくりと引き抜いた。

煌めく刀身に、死者たちの守り抜いた大地と空が映った。

「この“皇剣”に映る全てが、君たちの守り抜いた世界だ。そしてこの“皇剣”に映る全ての先には、さらに多くの世界がある。人々の笑顔、人々の歓声、人々の喜び、君たちが君たちの手で守り抜いた世界だ」

レクティファールはこの戦いで、多くの軍人たちに死を求めた。

その死は、彼が背負うべき罪科、背負うべき栄光の証だ。

だからこそ、彼は一つの後悔もなく告げなくてはならない。

個人としてなら命を絶ちたいと思うような選択であっても、公人としてのレクティファールに後悔は許されない。

一欠片でも後悔してしまえば、その選択によって命を落とした者たちの死に間違いがあったということになってしまう。

「私、アルトデステニア皇国国事国政全権代行職たるレクティファール・ルイツ＝ロルド・エルヴィッヒはここに宣言する」

その言葉に、彼の背後に立つ軍人たちが一斉に威儀を正す。

この宣言はレクティファールだけのものではない。彼らもまた、戦友たちに誓うのだ。

「諸君らの死には、一欠片の間違いも、僅かな徒（むだ）もない。君たちの死は正しくこの皇国の礎であり、そこには貴賤も貧富も存在しない」

レクティファールは勢い良く“皇剣”を鞘に戻した。

凛とした鍔鳴りの音が、空間総てに響き渡る。

「私はここに誓う」

レクティファールは大地を踏み締めると、“皇剣”の石突を地面に突き立て“皇”という絶対の孤独の中で咆哮した。

今のこの瞬間だけは、レクティファールに並び立つ者はいない。

誰がどれだけ望んでも、この孤独だけはレクティファールが皇である限り消えることはないのだ。

「君たちが守り抜いた世界、この身と命を賭して守り抜こう。君たちが守りたかった命、この信念と力を以て守ろう。諸君らは、ただ安寧の内に歴代陛下の下へと向かわれよ。諸君らの背は、我々が守り続ける……！」

その言葉を合図に、道幅一杯、二列に並んだ軍用輸送車が一斉に発動機に火を入れる。低い駆動音が幾重にも重なり、空へと昇っていった。

レクティファールは再び“皇剣”を腰に佩くと、拡声魔法を使わず叫んだ。

如何なる魔法を使っても超えることの出来ない、魂に響く叫び。

「総員、我らが戦友たちに向け――――――敬礼ッ！！」

二三〇〇〇の衣擦れの音――――――袖が風を打った。

軍楽隊が葬送曲を奏で始めると、葬列はゆっくりと動き始めた。

喇叭の音に背を押されるように、少しずつ、少しずつ、一台ずつ、一台ずつ、除雪された街道を、棺を載せた軍用車が進んでいく。

レクティファールたちは微動だにせず、それを見送る。

戦友を想い涙が溢れても、鼻を啜り、嗚咽を噛み殺して。

歴代皇王の下へと向かう彼らの背を守るため、彼らの背が守ったものを守るため、彼らはここで踏み留まらなくてはならない。戦友たちの死に引き摺られるようなことがあってはならない。

彼らは誓った。戦友の背を守ると、戦友の守ったこの国を守ると、戦友の守りたかった総てを守ると。

故に、彼らは無言で英霊となった戦友たちを見送る。

――――――いずれまた、歴代陛下の下で共に戦おうと。

葬送式のあと、レクティファールは細々とした行事に参加した。

要塞主催の昼食会ではその豪奢な大軍装に着られながら、葬送式のためにこの地を訪れた軍高官と意見を交わす。彼らは総じて軍備の再編と拡張をレクティファールに訴えた。彼らは本来、軍人として政に参加することは出来ないが、文官から意見を求められたときならば現場の意見として発言することは許されている。

今次の戦役に於ける戦死者の何割かは、皇国側がパラティオン要塞の堅牢さに驕傲したが故のもの。ここで今一度気を引き締め、軍として国防体制を確固たるものにすることが急務であると彼らは言う。

レクティファールはその言葉に頷き、逆に質問し、或いは反論して彼らの意見を自分の中に取り込んだ。

臣の言葉を鵜呑みにするようでは君として三流以下。それくらいのことは、“皇剣”の中の歴代皇王の記録のごく表層に記されていた。

君の役割は臣の言葉を己の内でしっかりと鍛え直し、自分の意見とすることだ。

臣の言葉のままでは他の臣には届かず、また間違うことも多々あ

る。

しかし一度自分の中で原型を留めない程に溶かし、再び鍛えることでその言葉は君の言葉となる。

レクティファールは不慣れながらも、それを必死にこなした。

葬送式での誓言はレクティファールのものだ。その誓いを果たすために、彼は命を懸けなくてはならない。

「皆の意見は分かった。されど軍備にのみ注力すれば内政が滞る、それも理解出来るな？」

「は、殿下の仰ること誠にその通り。しかし――――」

「良い、それも含めて理解している。諸君らの想いはしかと受け取った。後は私を信じてはくれまいか」

レクティファールの言葉は表向き問いかけの形であったが、その実、“否”という答えを許すような隙は見られない。

この場にいる軍人たちの代表としてレクティファールに軍備再編と予算拡充を訴えていた陸軍中将は、その瞳に内包された圧倒的な存在感に頷くしかなかった。

ここで抗弁すれば自分の軍での立場が危うくなるという打算もあ

った。

だが、それよりももっと根源的な恐怖が彼を動かしたのだ。

“強者に従え”という生物としての本能と、逆らっては死ぬという恐怖。レクティファール本人は確かに二度の実戦を経験しただけの未熟者に過ぎないが、その生来の諦めの良さと“皇剣”という不老不死の力を保有することから、己の死というものに鈍感になっているきらいがある。

“死”に対して鈍感である存在は、果たして生物として真っ当なものであるのか。

中将が抱いた恐怖とはそこにある。

“死”を恐れない生き物は、生き物ではない。

つまり、理解出来ない存在。

不可知の次元に座するモノ。

自分とは違う次元にいるモノ。

だから、恐怖する。

自分の存在する場所を超越した場所にいる“モノ”――――絶対的不可知存在として。

軍人としては有能であるが、一武人としては目立ったものの無い中将は自分が蒼褪めた顔をしていることに気付かぬまま、自らの賛

同者を促してレクティファールの前から去っていく。

去り際に一礼する程度の精神的余裕は残っていたようだが、それ以上は無理のようだ。途中円卓から水の入った硝子杯を取り、一気にそれを飲み干している。

周囲の軍人たちはレクティファールを窺いながらも、自分たちの頭目の様子に困惑しているらしい。

やがて彼らはレクティファールから逃げるように人ごみの中に紛れ込んでいった。

「――――ふう……」

そそくさと立ち去る軍人たちの背を見送り、大きく息を吐くレクティファール。疲れたような表情を見せる彼は、リーデという副官がその背を見詰めていることに気付きながらも、それに気付かぬ振りを続けている。

未だ問に対する答えが出せないから。彼が彼女を無視する理由は、たったそれだけのことだ。

だが、リーデがそれを斟酌する理由はない。

「よろしいので？　下手な対応は余計な反発を生みますが」

「――――」

レクティファールはリーデの問いに肩を竦め、彼女を誘うように縁台へと出た。

近くのテーブルから持ってきた飲み物をリーデに差し出す。

「酒精は入ってない」

「――――頂きます」

リーデの性格なら、仕事中に酒精を含んだ飲み物は飲まないだろうというレクティファールの考えは正しい。リーデは冷紅茶の入った硝子杯を受け取ると、それを一口含んだ。

甘い。

しかし、この砂糖の甘さではない。そうなると――――

「氷糖ですか」

「良く知らないのだが、そうなのか」

どうやら氷とは別に氷糖が入っているらしい。

レクティファールは適当に酒精の入っていない飲み物を持ってきただけだった。

「甘いものは苦手か」

「いいえ、疲れたときは甘いお茶もお菓子も頂きます」

「そうか」

レクティファールはそう呟き、縁台の手摺に凭れかかった。

昼食会の会場となっている建物は要塞第三長城の屋上にある。寒々しい風が、暖房に温められた二人から体温を奪い始めた。

「それで、先程の質問だが……」

「はい」

「彼らは自分の分を弁えている方だ。あそこで退いたのなら、これ以上反発しようとも思わないだろう」

「――――根拠をお聞かせ願います」

レクティファールは遥か彼方の雪原に目を向けたまま、答えた。

「北方総軍が分を弁えない阿呆を、この場に差し向けるとは思えない。彼らは今回の戦で大きな傷を負ったのだ、それを前面に押し出せば、多少の予算増加は認められるし、『ウィルマグス』がこちらの手に落ちた以上、その要塞化は最早国策だ。今更彼らがどうこう言う必要はない。パラティオンも、今回の戦いではその重要性をさらに強固なものにした。修復も今更だな」

「ならば、彼らは何故殿下にあのようなことを……」

「自分たちの存在を誇示したかったのだろう。今回の戦いではガラハが大いに活躍し、その立場を確固たるものにした。彼らとしては総ての手柄をガラハに持っていかれた形になる。今後の昇進や人事にも影響があると見たんだろう」

的外れな不安だとは言い切れない。

ガラハを昇進させ、北方総軍の総司令官にという声は中央で多い。

レクティファールの摂政就任時に復職した現在の北方総軍総司令官は高齢で、この戦いの結果を以て勇退という選択肢もない訳では

ない。帝国軍撃退の功績はガラハの上司である北方総軍総司令官の功績でもあるから、有終の美と言っていいだろう。

何より、次の帝国の攻勢は今回の比ではないだろう。おそらく、西方戦線に十分な抑えを置き、その上でこちらに回せる戦力を全力で投入する筈だ。

当然、皇国側も北の防備を固めなくてはならない。

その責任者として、ガラハは適材だった。

「まあ、ガラハ本人はこの要塞から離れるつもりはないようだが……」

それとなく中央の意向を伝えてみると、彼は――――

「小官は暑がりでして、これ以上南に下がることは辛いものがありますな」

と言って笑っていた。

ただ、その言葉を別の視点で解釈すると、北に上がるという選択肢は残っていることになる。

「『ウィルマグス』。そちらに一軍を編成する予定がある」

「――――では、中将はそちらに」

「帝国との最前線が北に押し上がっただけという見方は大凡間違いない。しかも、『ウィルマグス』は純粋な軍事要塞ではない、都市だ。その扱いは難しい」

万を超える民間人を抱えたまま、数十万の軍勢と戦えるのか。

仮にそれが可能だとしても、それを実行する軍司令官は間違いなく一流以上の実力を持つ人物でなくてはならないだろう。

さらには、その軍司令官を従える皇王の名代――――総督も並の人物では務まらない。

「さて、中央に戻れば乱れた国内も纏めなくてはならない。休む間もないとはまさにこのことだな」

「――――……」

辛い辛いと言いながらも、レクティファールの表情は穏やかだ。

リーデはレクティファールの背負う重責を思い、何故そんな表情が出来るのかと不思議に思った。

「――――――――――何故、そのような顔を……」

「ん？」

「――――いえ……」

思わず口に出てしまった言葉は、どうやらレクティファールには良く聞き取れなかったらしい。

リーデは慌てて口を噤むと、持っていた紅茶を一気に飲み干した。

同時に風が吹き、彼女はぶるりと身体を震わせる。

それに気付いたレクティファールは、苦笑しつつ彼女を室内へと促した。

「すまない、気遣いが足りなかった」

「――――いえ、申し訳ありません」

リーデは自分の醜態に顔を伏せながら、レクティファールに招かれるように再び会場へと戻る。

暖かい室内に落ち着き、ほっと息を吐く。

「暖かいものを貰ってこよう。紅茶でいいか？」

「あ、いえ、そんなことまで……」

「いいんだ、部下の面倒をみるのは上司の給料の内だからな。――――いや待て、そういえば、私に給料なんて無いな」

無賃労働か――――レクティファールはぼやきながら給仕役の兵士の元へと向かう。

話しかけられた兵士がびくびくしているのを見て、リーデはレクティファールの立場を考えない行動に頭を抱えた。

下々まで気を遣い、立場を超えた付き合いをすることは別段止めようとは思わない。

だが、ああして余計な混乱を招くことは今後避けて貰わなければならないだろう。

「――――？」

そこまで考えて、彼女はふと気付く。

今後などあるのか。

ただ一刻、彼の下で働くことになっただけの自分に。

「――――――――ふ、わたしもまだまだだね……」

この刹那が、まだ続くものだと錯覚してしまった。

あの摂政と道が交わることなど、今後ある筈も無いというのに。

リーデは再び溜息を吐くと、盆に載せた硝子杯からお茶が零れないよう、慎重にじりじりと歩くレクティファールを苦笑しながら見詰める。

あの白龍姫が、レクティファールを弟のように扱う理由が少しだけ分かった気がした。

出来るなら――――もう少し早くそれに気付けば良かった。

レクティファールの仕事は、結局その日の夜まで続いた。

中央との通信会議で午後はまるごと潰れ、さらに後宮にいるリリシアとの通信で三時間費やした。

リリシアの様子が少し暗いことが気になったが、彼女が自分で大丈夫だと言ったこともあり、レクティファールはそれを信じることに決めた。どちらにせよ、リリシアと話すのは皇都に戻ってからでも遅くない。この北への出征が終われば、レクティファールの戦場は皇都の政治の場へと移るのだから。

彼はじわじわと室内を侵食する夜の闇の中で執務を続けた。

やがて従兵が照明を灯し、彼の元を訪ねる人々も少なくなった。

要塞の修復工事の音も聞こえなくなり、執務室には静寂の帳が落ちた。

「――――ふむ、やはり帝国も一枚岩とはいかないらしい」

レクティファールは外務院から齎された報告書を片手に持ち、残った片手を顎に当てて唸る。

その報告書は、帝国国内の動きを物資の流通量、金の流れから推察したものだ。

主だった大商会が今回の軍事的大敗――東と西、両戦線の敗北――の煽りを受けて大打撃を蒙り、さらには兵力を提供した貴族たちも大いに動揺しているらしい。弱小貴族などでは取り潰しの憂き目を見た家もある。帝国中央は兎も角、辺境や属国などでは帝国からの独立運動が高まりを見せ、外務院に接触を図ってきているという。

外務院としては未だ規模の小さい独立運動を積極的に支援する考えはないようだが、帝国の国力を削ぐ手段としてそれらを利用するべきという意見が外務院総裁の意見として添えられており、その支援に必要な予算の見積も記されている。

但し、この運動の支援に投じる予算は当院に無いとも付け加えられていたが。

「――――これはあれですか、金寄越せという遠回しな要求ですか。どこもどなたもお金お金と、全く困ったもので」

さりとて、先立つものが無いと身動き一つ取れないのは何処の国の国家機関も同じ。

金が無いのに動く機関は信用出来ないから別にそれは良いのだが、それでもこの報告書に添付された予算額は人を馬鹿にしているとしか思えないものだった。

どう考えても、内務院財務庁長官が発狂する。

ただ一度だけ、先の王都奪還戦のあとに顔を合わせることがあっ

た気難しそうな中年の男の顔が、レクティファールの脳裏に浮かんだ。

細かい計算や計画は人間種のお家芸とされているが、彼はその中でも一等細かい性格をしていた。

北へ向かうレクティファールに目通りを請い、現在歳出しうる予算を提示して政府の困窮ぶりを訴えた。まかり間違っても帝国との全面戦争になるようなことだけは避けてくれとも言われた。

「――――まあ、すでにパラティオン要塞がこんなことになっているんだから……」

きっと、既に額に青筋浮かべて算盤を弾いていることだろう。内務院の敷地内に置かれた財務庁庁舎では連日徹夜で職員が働いているとも聞いている。

中央に戻れば、まず最初に顔を合わせる閣僚は彼だろうと思う。

「あとは、海軍と空軍か」

陸軍は今回の帝国との戦で攻伐があるからまだいい。軍備の再編は国民の納得を得られるだろう。

しかし、海軍と空軍はそう簡単にいかない。

海軍はレムリア海で帝国艦隊と睨み合っただけ、空軍に至っては通常の防空体制を維持していただけに過ぎない。

双方共レクティファールの立場で考えれば十分以上に働いていると分かるのだが、国民の目にはただ座して帝国軍が引き揚げるのを待っていたと映っているだろう。

これは非常に不味い。

レクティファールとしては、今後の国防は三軍のどれが欠けても果たせないと考えている。

帝国軍が試験飛行を成功させたという飛行機械――――今は発動機の出力不足から大した武装を積むことは不可能と考えられているが、旧帝国時代にはイズモの『天照』を仮想敵に据えた高機動・高火力の飛行機械が存在していたという。

まさか僅か数年間でそんなものを作り出せるとは思えないが、用心に越したことはない。

まず空軍の主力である飛龍や飛竜に統一した装備を与え、その能力の底上げを図る必要があった。たとえば、航空管制騎が搭載している汎空間測位機構を小型化し、それを装備させるだけで空軍騎の戦闘能力は大きく向上するだろう。防御魔法を展開する魔道具も改良する必要がある。さらに航空騎兵学校の規模を拡張し、数の少ない航空騎兵の定数も増やさなくてはならない。

先の皇都奪還戦を見て、各国も航空戦力の重要性を認識した筈だ。今後の戦争では護衛のために地上に張り付くような航空戦力ではなく、それ自体が高い攻撃力を持った航空戦力が現れるだろう。

三軍では最も歴史が浅く、規模の小さい空軍。

その規模拡大と質の向上は急務だった。

「――――しかし、海軍がなぁ……」

アルマダ大陸の海岸線の一割四分強を国土として領有している皇国にとって、海軍は欠かせない存在だ。帝国との戦いでは確かに主戦力にはなり得ないが、イズモと南方諸国の存在を考えれば軍備縮小など冗談にもならない。

だが、海軍とはある種の技能者集団だ。

士官ならば決められた教育課程で一応形になるが、その士官の手足となる水兵や下士官は促成栽培出来ない。兵学校で学べることは所詮初歩の初歩、それから十年以上の経験を積んでようやく一人前と言える。縁の下の力持ち、汗を掻いて働く彼らこそが海軍を支えている。

しかし、予算削減となったとき、真っ先に切り捨てられるのは彼らだ。

現にレクティファールの下に届けられた財務庁の予算計画を見てみれば、海軍など士官と一定数の下士官さえ確保していれば問題ないと考える財務官僚の何と多いことか、レクティファールは頭を抱えた。

海軍総司令部――――“大提督”から送られた別の報告書を見てみれば、レムリア海に於ける帝国軍艦隊発見から捕捉、そして数日間の睨み合い亘る経過報告が詳細に記載されている。この報告書は皇国海軍将兵の日々の努力によって海軍そのものが形成されていることを幾度も強調しており、予算削減をすればこの熟成された海軍が壊死してしまうと言っている。

「――――皆さん、私にどうせよと仰っているのか……」

復興予算を確保するために役立たずの軍の予算を削れと言う官僚と、今回の帝国との戦いを勝利で終えることが出来たのは今現在の三軍の力の証拠であると主張する皇国三軍。

そして、前者の意見は国民の意見とも言え、後者は議員たち政治家の意見と言える。

国民は自分たちが知り得た情報からこの意見を練り上げたのだろうし、政治家たちは軍が縮小されれば今後の国防に齟齬をきたすと理解している。無論、総ての国民が軍を突き上げるような意見ではないだろうし、総ての政治家が軍を擁護しているということもあるまい。

そして、この皇国は皇王に主権がある。

どちらの意見を容れるか、その権利と責任は皇王の代理であるレクティファールにあるのだ。

「――――――――胃が……胃が……」

机に突っ伏し、うんうん唸るレクティファール。

復興は確かに重要だが、軍部再編は予算があったところですぐに実行できるものではない。優先順位は確かに復興が上だが、軍の再編が遅れればそれだけ後に響く。軍の再編が終わる前に再度の侵攻があれば、そのときこそ皇国は大打撃を被るだろう。さらには、貴族軍を形成していた民兵たちの扱いも慎重を要する。

もっと突き詰めれば、この二つだけが今の問題ではなく、他にも反乱貴族の処遇や、反旗を翻した従属国の扱いもある。

もう頭が痛いでは済まない。

出来れば優秀な相談役が欲しいところだが、そもそも閣僚の顔さえ覚えていないレクティファールにそんな存在がいる筈もなく。総て自分ひとりで片付けなくてはならない。

皇都に戻れば皇王府と三院からの補佐官がいるのだが、今はまだ無いものねだりだ。

「――――そして、リーデさんの問いもある、ときた」

実は、これが一番の難題だった。

“皇剣”によって分化された並列思考の一つは延々とこの問い掛

けの答えを模索しているのだが、さっぱり答えが見えない。

国家か個人かと問われれば、当然レクティファールの立場での答えは決まっている。

しかし、決まっている答えだけが総てではない。

少し視点を変えるだけで、答えは容易に変わってしまう。

個人を守り切ることが出来れば最終的に国家を守れるという考え方もあるし、国家を守りきればそこに住む個人も守れるという考えもある。

個人を見捨てているのに国家を守ったことになるのかという疑問もあれば、国家と個人がそもそも比較対象になるのかという疑問もある。

まさに千差万別、その時々の気分でさえ答えが変わってしまう。

「今日中と言っていましたよねぇ……」

いつまでと具体的な時間まで決められてはいなかったが、おそらくそれはレクティファールが多忙であることを良く知っているリーデの気遣いだったのだろう。暇があれば聞きに行くつもりでいたに違いない。

結果としてこんな夜遅くになってしまったのだが、自分付きの参謀でなければとても若い娘を部屋に入れられるような時間ではなか

った。一応、機密文書を扱うということで部屋の外での護衛に切り替えてもらった近衛軍の兵士には来客の予定を伝えてあるのだが、この時間に訪ねてくるとなれば余計な勘繰りをされるかもしれない。

「――――嫁入り前ですしねぇ」

変な誤解を避けるためにもう一度、釘を刺しておこうか。至急必要な資料を集めてもらっているということにしておけば言い分は立つだろう――――レクティファールは立ち上がり、椅子に掛けてあった上着を肩に引っ掛ける。

経費削減というよりも、ただレクティファールが貧乏性であるが故に暖房は必要最低限になっている。扉を開ければその最低限の暖気も抜けていってしまうだろう。風邪でもひいて執務に支障が出るのは申し訳ない。

さて、と呟き、レクティファールが一歩踏み出した瞬間――――

「――――殿下、アーデンです」

ノックと共に、来て欲しくなかった待ち人の声が聞こえた。

レクティファールの執務室に現れたときリーデは両手に資料を抱え、まさに仕事に来ましたといった姿だった。

扉の外にいた近衛兵もリーデの来訪に疑問を抱いた様子はなく、ただ荷物を持ちましょうかと問うだけだった。

リーデはそれを断り、扉だけ開けてくれるように頼んだ。

近衛兵がノックすると、彼女は扉の向こうにいるであろうレクティファールに入室の許可を求めた。

「殿下、アーデンです」

一拍、無音の間があった。

しかしすぐに、扉の向こうからいつもと変わらないレクティファールの声が聞こえた。

「――――入れ」

その声に、リーデは安心したようにほぅっと息を吐いた。

近衛兵は気付かなかったようだが、ひょっとしたら入室さえも拒まれるのではないかと考えていたのだ。

彼女の知る限りのレクティファールの性格ではあり得ないと思われる可能性だが、そう簡単に人の総てを理解することは出来ない。だからこそ、彼女はその可能性を棄てきれずにいたのだった。

そう考えるだけ、あの雪原で見せた醜態はリーデ自身にとっても衝撃的だった。

「大尉、どうぞ」

「ありがとう」

近衛兵が扉を開け、リーデを促した。

礼の言葉を一言添えると、近衛兵は黙礼とともに「ごゆっくり」と言って扉を閉じた。

「――？」

その言葉に少し違和感を覚えたリーデだが、レクティファールが目の前にいるという状況では、それ以上の思考は流石に無理だった。

彼女は持ってきた資料を執務室の片隅に置かれた作業台の上に置くと、一つ一つ表紙を確認して分類し始める。

レクティファールはその背をしばらく見詰めていたようだが、すぐに自分の仕事に戻った。

どうやらリーデがすぐに答えを求めるつもりはないと分かり、残った仕事を片付ける方を優先したらしい。

（生真面目というか、融通が効かないというか……）

リーデはそんなレクティファールに苦笑する。

彼女とて答えは欲しい。

しかし、余計な詮索を避けるために仕事を持ってきてしまった以上、それを放っておくことが出来なかっただけだ。

そういう点では、この二人は良く似ていた。

「殿下、こちらの資料はどちらに置けばよろしいですか」

「ああ、すぐ使うからそこに置いておけばいい」

「はい」

レクティファールは別段仕事が出来るという訳ではない。

ただ、一度覚えれば忘れないというだけのことだ。

資料の見方、資料の使い方、文法、仕様と一度覚えたことはすぐに自分の技術として扱える。

リーデも色々なことを教えたが、同じことを二度聞かれた記憶はなかった。

（――――今更、こんなことに気付くなんてね）

これまで見えてこなかったレクティファールの姿が見えるようになったのは、きっと今の関係に終わりが見えたからだろう。

以前までは、父を奪った国の領袖、或いは王都奪還戦で頭角を現した“英雄”としか見えなかった。

先の会戦での戦いぶりが国内で評価されれば、やはり“英雄”なのだと敵視もした。

しかし、近くにいると別の面も見えてくる。

“英雄”を憎む自分に、敢えて父を“英雄”であると断言する無謀さ。

それは何処か子供じみた頑固さに見え、意地っ張りという印象を彼女に抱かせた。

「――――殿下」

「何だ」

「――――――――いいえ、失礼いたしました」

「――――気にするな」

こうして話しかけてみれば、びくりと肩を震わせる姿も見ることが出来る。

それは学校で教師に指名されることを嫌がる子供のようで、逆に微笑ましいとさえ思った。

本当に、今になって気付くとは思わなかった。

立場や肩書が、その人物を決定付ける要素にはなり得ないことに。

もっと早く気付いていれば、この若い摂政ともっと少し良好な関係を築けたかもしれない。

こんな喧嘩別れにも似た別れ方をせずに済んだかもしれない。

（――――――――本当、今更……）

リーデは気付く、既に自分の中で答えが出ていることに。

そして、その答えに対して自分が少しの反発も感じていないことに。

（――――――――ありがとうございました……）

もっと前に、自分の総てを吐き出していれば良かったと思う。

父の散ったあの場所で、リーデは自分という存在をレクティファールという青年に見せることが出来た。

取り繕った自分ではなく、ただの自分を。

何故今まで出来なかったことが、あの場所では出来たのかと考えれば、答えは簡単だ。

あの場所で、目の前にいるのが彼であったから――――目の前に彼以外の誰もいない、父の最期の地。だから、取り繕う必要がなかった。青年はいずれリーデの前から消え、おそらく二度と道は交わらない。一介の参謀にとって、摂政や皇王は雲上人だ。今こうして副官の真似事をしていることも、多くの偶然が重なった結果に過ぎない。摂政が直々に出征したこと、年齢の近いリーデが無任参謀で

あったこと、さらにはレクティファールが軍事に対して素人であることを自認し、リーデを若さや性別で軽視しない性格であったこと、リーデ自身がレクティファールという素人に対して優越感を持たなかったこと。

もう二度と、こんな偶然は起きない。

二人は嫌い合うことがない程度に相性が良く、好き合うことがない程度には相性が良くなかった。

そんな性格上の不一致も、あの雪原での遣り取りに影響を与えているだろう。

おそらく、二人の立場が少しでも違えばこの出会いは有り得なかった。

リーデはこの偶然に感謝しつつも、黙々と自分の仕事を片付ける。

明日にはこの仕事も終わり、彼女はまたこの要塞の一参謀に戻る。

最後までしっかりと、手を抜かずに締め括りたかった。

最後に纏めた資料を机の上で揃え、それを綴じる。

外観を確認し、彼女は一つ嘆息した。

気のせいだろうが――――寂しいと思えた。

「殿下、こちらは終わりました」

「ああ、私もこれで最後だ」

レクティファールは最後の一枚に、承認の花押を記しているところだった。

彼はそれを書き切ると、決裁済みの書類箱にそれを放り込んだ。

「――――さて、どうするか」

レクティファールは虚空を見上げつつ呟いた。

それが問い掛けであったのか、或いは独り言であったのか、リーデには判断出来なかった。

だが、銀の視線がちらりと自分に向けられたとき、彼女の口は自然と開き、言葉を発していた。

――――酒宴の支度をいたしましょう、と。

酒宴とは言っても、参加するのはただ二人のみ。

宴というには些か静かで、晩酌というには少し趣が違う。

片やこの国の主、片や一介の無任参謀という点でも、後世の史家がこの酒宴の意味を見出すことは難しいだろう。

だがそれでも、この一夜が双方にとって人生の一転換点であったことは確かである。

「ふむ、美味いですね」

「意外そうですね、そんなにわたしが料理するというのは可笑しいですか？」

「いやいや、まさか」

酒の席ということで、レクティファールは摂政としての面を外すことにした。

こうしておけばこの席でどんなことがあってもそれは個人同士の問題となり、リーデの立場を危うくするようなことはない。

リーデもそれが分かっているのか、いつも一つに纏めていた髪を下ろし、風に遊ばせている。その表情は穏やかで、レクティファールは内心驚いていた。

そもそも、今二人がいる場所はレクティファールが普段起臥している執務室隣の寝室だ。

その寝室は軍事要塞の中でありながらまるで一等高級な旅館の一室のようで、この部屋で寝起きを始めた当初はレクティファールも随分苦労した。

落ち着いて寝ることが出来なかったのだ。

無論、今でこそ勝手知ったる要塞の一室ということで毎日快眠しているが。

「士官学校や騎士学校は全寮制で、週一回同窓たちと開く酒宴では持ち回りで料理を作ったものです。仕送りをしてくれた中将も、週一回の酒宴は人間関係形成の一助になると言って、その分の食費を上乗せしてくれたんですよ」

「ふむ、伝統のようなものですか」

「恐らく、士官学校が出来た頃から延々続いていると先輩も言っていましたし」

「そうか……楽しそうですね」

「楽しかったですよ、気の合う仲間と延々騒いで、朝になると皆青い顔で……」

リーデはレクティファールの用意した酒を少しずつ減らしながら、楽しそうに思い出話を続ける。

レクティファールはその話を面白そうに聞きながら、リーデの笑顔の裏に隠された泣き顔を見ていた。

「わたしは余り友人が多くなかったので、いつも同じ仲間とばかり飲んでいました。皆色んな場所から来て、色んな歳で、色んな過去があって、それでも仲間で……」

「――――――――」

「あの娘たちは、わたしがガリアン・アーデンの娘だからって特別視したりはしなかった。士官学校でも騎士学校でも、教官たちはわたしをガリアンの娘としか見ませんでした。二五年前の紛争の話が出る講義は、唯一わたしが嫌いだった講義です」

だが、そんな仲間たちにもリーデは本心を晒せなかった。

怖かった。

自分を、自分だけを見てくれる仲間だったから。

近しい友だったから――――憎悪に塗れた、醜い自分を見せることが出来なかった。

「近しいから、見せられない姿があるのだとあの頃知りました。ですが殿下は、明日になれば遠くに行って、もう二度とこんな近くで会うことはない。だから――――」

摂政という立場は、国を恨む気持ちを向けるには十分で、若き英雄という肩書は、“英雄”を憎む気持ちを向けるにはこれ以上無いほどの適役だった。

故に、ぶつけた。

二十余年の間に溜まった澱を、吐き出せなかった想いを、他の誰にも受け止めることが出来ない心を。

「ご迷惑をお掛けしているという自覚はあります。殿下が一言告げれば不敬の罪で裁かれるであろうことも。ですが、それを承知でお聞きしたかった。わたしたちは、一体何のために父を失ったのかを」

問う相手も、問い掛けそのものが間違っていることはとうの昔に

理解している。

しかし、問わなければ進めない。

今を逃せば、目の前にいる、自分の問いに答えを出せるただ一人の人物との繋がりは消えてしまう。

摂政として、皇王として、こんな小さな問題に関わり合っている暇はなくなる。

こうして膝を突き合わせる機会など、もう二度と得られない。

「――――……」

リーデは背筋を伸ばし、レクティファールの目を真っ直ぐに見詰めた。

銀色の瞳は月明かりさえも反射して、彼女には眩しかった。

その銀色の瞳が一度瞼に隠され――――

「――――分かりました。私なりの答えを返します」

再び開かれたとき、その瞳に迷いは無かった。

リーデはじっと自分を見詰め返すその瞳に息を呑み、膝の上に乗

せた両手を強く握り締める。

一秒程度、無音の間があった。

冷たい風が二人の間を吹き抜け、互いの匂いを相手に届けた。

「――――……」

レクティファールはすっと息を吸うと、両手をテーブルの上に置き――――

「すみません、分かりません」

頭を下げた。

白の髪が、さらりとテーブルの上に落ちた。

「はっ？」

リーデの目が丸くなる。

素っ頓狂な声は、恐らく自覚していないものだったのだろう。

彼女の意識は、夜空のかなり高いところまで吹き飛ばされていた。

「考えました、必死に。でも、答えなんて出なかった」

レクティファールは頭を下げたまま、リーデの表情に気付かないまま続ける。

「私はあなたの父上が何を思ってあの雪原に散ったのか、殆ど理解出来ません。ですが、少しだけ理解出来たことがあります」

「――――――――」

リーデは呆けたように開いていた口を引結び、右手の拳を左手で握った。

手が、震えていた。

「あなたの父上は、多分この国家のために死のうと思ったんじゃありません。少なくとも私なら、死の直前に国家のためとか、軍人としての役目なんて考えない。最後の最後に浮かぶ想いなんて、自分が、自分の手で守りたい存在のことだけに決まっています」

しかし、戦場の狂気に染まり切っていたというのなら、その前提はあっさり崩れるだろう。

だが、ガラハの話を聞く限り、ガリアンは最後まで理性を失わずに戦い抜いた。戦い抜いたからこそ、あの丘で帝国軍を足止めし切ることが出来た。狂気に任せた戦いでは、あの結果はあり得ない。

「最後まで、ガリアン殿は自分が守りたい存在のために戦い抜いた。自分が一秒でも長く帝国軍を足止めすることが、自分の守りたいものを守る手段だと知っていたから」

そして、そんなガリアンの本心を知っていたからこそ、ガラハはレクティファールという一人の青年に大切な大切な、親友の忘れ形見を託した。

「あなたの父上、ガリアン・アーデン殿は、最後まであなたとあなたの母上を想っておられました。自分の心を埋め尽くす死の恐怖を抑え、狂気に堕ちそうになる自分をその一念で支えきった。だからこそ、あの二五年前の戦いは我が国の勝利で幕を閉じることが出来たし、今回の戦いで勝利することも出来た。ですが、それはあなたの父上が皇国の言う“英雄”だったからではないと思います。あなたの父上は、あなたとあなたの母上を守る“英雄”であられた。だからこそ――――」

レクティファールは、顔を上げた。

そして立ち上がり、二歩踏み出すと、目の前で震えているリーデの肩を掴む。

「――――あなたは、ここで私の目の前にいる。あなたの父上が、あなたを守りきったからこそ、私はこうしてあなたという“本物の英雄”の娘に会うことが出来た。国家の象徴ではない、人の願いが生んだ“英雄”の子と、こうして言葉を交わすことが出来たんです」

リーデは目を瞑ったまま、顔を伏せていた。身体の震えは止まらず、掴んだ肩からその震えが伝わってきた。

レクティファールは一瞬、躊躇した。

自分がどれ程馬鹿な行いをしているか自覚していたからこそ、躊躇した。

彼女の父と面識もなく、ただ一度花を手向けただけのレクティファールにその死を論じる資格はない。

同時に、こうしてリーデの心に土足で立ち入るような資格もない。

今までリーデが背負ってきた憎悪や怨恨を、こんな軽い言葉で断じる資格などある筈も無い。

しかし、資格があろうとなかろうと、どれだけ罪深いことであろうと退けないときがある。

罪の意識に負けて引き返すことを諦め、罪を負わずに生きることを諦める。

そして、目の前の女性に恨まれないという人生も今、諦めた。

「私は、あなたの父上の生き方を肯定します。遺される人々の気持ちも考えず、ただの自己満足に過ぎないと分かっていても、あなたには言わなくちゃならない」

そこで、リーデは顔を上げた。

真っ赤に染まった目が、レクティファールの心を抉り貫く。

胸が、軋んだ。

「あなたの父上、ガリアン・アーデンは、あなたとあなたの母上の“英雄”です。他の誰の“英雄”でもない。あなたたち二人だけの“英雄”です。他の誰が認めなくても、私はそう認める。あなたが、それを認めなくても、です」

「――――――――」

ガリアンの本心は、レクティファールには分からない。

だが、もし自分が同じような立場に置かれたら――――自分はきっと自分の守りたいもののために命を懸けるだろう。

立場や肩書は、そんなとき付録程度の役目しか果たせない。

ガリアンが皇国を守ったのは、それが自分の大切なものを守る手段になり得ると判断したから。

あの戦いは、目的ではなく手段だったのだとレクティファールは思う。

「皇国を恨む気持ちは至極尤もです。あなたたちの“英雄”であった父上を奪い、国家の“英雄”にしてしまったことは拭いようのない罪です。あなたが私を恨むことは、私自身が正当であると認めましょう。恨んで下さい。存分に、その涙の責任は私が請け負うべきものです。幾らでも恨まれます、憎まれます。それであなたの気が少しでも軽くなるのなら。それは私が私として背負うべき責任です」

「――――――――ほん、とうに……」

リーデは、えづきながら問う。

赤い目でレクティファールを見上げ、小さな声で。

「――――本当に……恨まれてくれますか……？」

「はい」

「重いんです。べたべたして――――どろどろして、心の中に張り付いて……ふとした瞬間に顔を出すんです」

「はい」

「――――だったら、もう一度あの質問、してもいいですか？」

「――――はい」

リーデは涙を拭い、肩の上に置かれたレクティファールの手に自分のそれを重ねた。

逃げることは許さないと、そう言っているようだった。

「わたしとこの国、選んで下さい。あなたが死ねと命じれば、わたしは軍人として死んでみせます。生きろと命じれば、それがどれだけ犠牲を生むことだとしても生きます。――――どちらを、守りますか」

リーデの表情にこれまでのような狂気はない。

どちらを選んでも、リーデはレクティファールを責めるようなことはしないだろう。

だが、これは彼女が“英雄”という呪縛から抜け出すための第一歩だ。

レクティファールという今の“英雄”によって、“英雄”という呪いにも似た連鎖を断ち切るための。

答えなくてはならない。

「――――私は……」

答えることに、躊躇いはなかった。

「――――分かりません」

「――――本当に？」

リーデの表情に失望はない。

だが、その真意を探ろうとするように、その瞳がレクティファールを見据えていた。

その瞳を前にしても、答えは変わらなかった。

「はい」

「何故ですか？　殿下はこの国の摂政です、いずれ皇王になられるお方です。軍人を見捨てられなくては、国は守れません」

リーデは静かに、諭すように、レクティファールの目を見たまま言葉を紡ぐ。

同じように、レクティファールもその目をじっと見詰めたまま答えた。

「いずれそのようなことが起きたら、私は躊躇いなく決断を下します、誓ってもいい。しかし、今ここでそれを肯定しては、まるで言い訳ではないですか。あなたを見捨てますと言っておけば、後で後悔することはない。今の内に言い訳をしておくようなものではないでしょうか」

「それが罪にはならない立場です、あなたのいるその立場は」

「いいえ、罪にはなります。ただ、罰が与えられないだけで、罪だけが残るのです」

罰せられないからこそ許されない罪として、永遠に自分の中に残る。

その罪を軽くするために、最初から見捨てることを肯定することは、レクティファールには出来ない。

「そのときに負うべき罪は、そのときに負います。今から自分の中で、『仕方がない』とか、『役目だから』なんで言い訳は作りたくない。今回喪われた命の対価は、私が負うべきものです。言い訳は、その対価を軽くすることにしかならない」

そして、対価が軽くなるということは――――

「対価が軽くなれば、その分喪われた命の重さが軽くなります。彼らが最期の瞬間に抱いた想いも、願いも、軽くなってしまうんです。――――私は、それが耐えられない」

弱いのだろう。

立場を弁えず、子供じみた意地を押し通そうとしているだけなのだろう。

しかし、それが自分なのだ。

摂政であり、同時にレクティファールである青年の。

「あなたの質問に対する答えとしては、あまり相応しいものではないでしょう。逃げたと思ってもらっても構いません。ですが――――

―」

「――――……いいえ」

レクティファールの唇を、リーデの指が押さえた。

そして、微笑みを浮かべたまま、彼女はレクティファールの首に両の腕を回した。

ぐいと、引き寄せられた。

「十分な答えです、殿下」

耳元で紡がれる、微かに甘い声音。

喜びに満ちたその声に、レクティファールは身体が震えた。

「もしわたしが死んでも、殿下はそうやって逃げることなく受け止めてくださるのでしょう。――――良かった、後悔が一つ減りました」

「――――私は、多分後悔します。あなたを死なせたと」

「それも、わたしにとっては嬉しいことです。わたしの死を悲しんでくれるひとが確実にいる、それは嬉しいことですよ。それが後悔であっても、思い出してもらえるならわたしは嬉しい」

「ならば、私が死んだらあなたは悲しんでくれますか？」

ちょっとした意趣返しのつもりだった。

ここで悲しまないと答えられても、それは十分納得出来る。

悲しいと答えて貰えたら、死ぬ理由が一つ増える。

それだけだ。

「――――悲しみますよ、きっと」

「それは――――」

国の主を喪うからですか――――そう問おうとしたレクティファールの唇は、再び塞がれた。

「分かりません」

リーデはそう言って、レクティファールの肩に顎を乗せた。

ほうっと息を吐き、レクティファールを抱き直す。

「ですが、少しだけなら分かります」

リーデの表情は見えない。

だが、その全身から伝わる温かさが、総てを雄弁に物語っている。

「もしも殿下が薨去されたら、わたしはきっと、今日この夜のことを思い出して涙します。こうして殿下の温もりを感じていたことを思い出し、泣きます」

「――――――――」

レクティファールは、ただ無言でリーデの細い身体を抱き締めた。

ウィリィアとは違う、匂いと温もりを感じた。

「殿下は、今日のことなどお忘れになるのでしょう。――――いいえ、忘れるべきです」

「はい」

「わたしは所詮、一介の軍人です。こうして殿下の腕に抱かれていること自体がおかしいんです」

「はい」

「――――ですが、わたしは……」

ぐすりと、鼻をすする音が聞こえた。

「わたしの記憶している限り、こうして母以外にひとに抱かれるのは、初めてのことです。その初めてが殿下であったことが、嬉しいと思っています」

「はい」

ぎゅっと、先程よりも強くリーデの身体を抱く。

すると、リーデも同じように抱き返してくれた。

「――――もう二度と、こんな日は来ないのですか？」

「分かりません。ですが――――」

あなたが望むのなら、未来は如何様にも変わります。

偶然の交わりが、必然の交差に変わることもあります。

レクティファールの囁きがリーデの耳朶を嬲る。

リーデは背筋に走る心地よい痺れに、深く吐息を漏らした。

「――――望んでも、良いのでしょうか」

「――――――――」

レクティファールはゆっくりと腕を解き、リーデの身体を自分の正面に置いた。

自分を見上げるその瞳に、きらきらと光る星の欠片が見えた。レクティファールはその輝きを指で拭った。

「人が望むことを止められる存在などいません。少なくとも個人としての私は、あなたの望みが私に叶えられることであるなら、それを叶えたいと思います」

公であれば、レクティファールは国家の為にしかその力を使えない。

しかし、私であれば、その手の届く限り人々の願いを叶えられる。

「――――なら……望んでもよろしいでしょうか」

「何を――――」

レクティファールの問い掛けに、リーデは小さく囁いた。

小さな小さな、それでも彼女にとって大切な願いが紡がれたとき、レクティファールは目の前の女性を再び引き寄せた。

「――――――――……」

ガラハは大きく溜息を吐き、脳裏に展開していた映像を閉じた。

その映像は、軍用魔法の一種によって彼の脳裏に投影された中継映像だった。

投影されていた映像の中心には二人の男女。

どちらも彼より遥かに若く、危ういほどに純粋な者たちだった。

しかし、ときに人を傷付けるであろう純粋さは、同時に人と人を強く結び付けることも出来る。

ガラハはその実例を見せ付けられた。

「――――ガリアン。これで約束は果たしたぞ」

亡き友は、遺される家族を何よりも案じていた。

特に幼い娘の将来に関しては、自分の命よりも遥かに重く考えていた。

故に、自分の死が避けられなくなったとき、彼は親友に総てを託した。

娘が、自分の手で幸せを手に入れる手助けをしてやって欲しい、と。

「少なくとも、今のリーデは幸せだろう。ここから先は、あの娘次第だ」

硝子杯に満たされた琥珀酒を呷り、ガラハは酒肴の置かれたテーブルに用意されたもう一つの硝子杯を見る。

自分の飲んでいるものと同じ琥珀色の酒は、友人の好んだ銘柄だった。

「――――子供は、あっと言う間に大人になる。お前が毎日毎日俺に見せていた写真の赤ん坊が、こうしてお前以外の男の腕に抱かれているのだからな」

もし生きていたら、お前はどんな顔をしているだろう。

怒っているのだろうか。

それとも喜んでいるのだろうか。

ひょっとしたら、泣いているかもしれない。

「全く、余計な仕事を残してくれたものだ」

近衛軍の兵士にそれとなく今宵の逢瀬を匂わせて人払いをし、リーデが普段起臥している士官居住区の監督官には高い酒を贈った。リーデと仲の良い士官たちには虚実織り混ぜた噂を流し、あの娘が変な気を回さずに済むよう手を回した。

「くそっ、俺がそっちに行ったら一杯奢れよ」

がつんとテーブル上の硝子杯に自分の硝子杯をぶつけ、ガラハは琥珀酒を一気に飲み干した。

そして、寝台横の小机に置いてある一枚の写真を見る。

「――――本当に、余計な仕事だ」

赤ん坊を慣れない手付きであやすガラハと、それを見守る若い夫婦。

二六年前の、あの忘れえぬ日々の記憶がそこにあった。

「――――――――お前が守ったこの国は、やっとお前以外の誰かが守る国になった。此処から先は、あの若い連中の時代だ」

時代という長い長い道を歩く自分の横を、今あの青年が駆け抜けていった。

これまで自分の手を握っていたリーデという前時代の父母が守った宝物を自分の手から拐い、明日という新たな時代へと。

「生きた、生きたさ俺も。お前が死んだあとも、お前の守りたかったものが壊れるのを見たくなくて」

だが、その願いは受け継がれた。

一つの言葉もなく、ただ無言で受け継がれた。

「――――明日からは、あの若い奴の背中を押す日々だ」

溜息に似たその吐息は酒臭く、何処か寂しげであった。

「――――レクティファール、ひとつだけ忠告させて下さい」

「何か」

お互いの吐息が頬に掛かる距離で、二人は囁き合うように言葉を交わす。

気恥ずかしさを覚えたのは最初だけで、慣れてしまえばこの距離は心地よいものだった。

「レクティファールは公人として、摂政殿下であり続けます。いずれ皇王陛下と呼ばれることになるでしょうが、それでも公人であることに変わりはありません」

「その通り」

「今はただのレクティファールとしてわたしの目の前にいてくださいますが、それ以外の場所では何処までも摂政殿下であり、皇王陛下です。いずれわたしの問いのように、理不尽で答えの無いような問題に直面することもあるでしょう。しかし――――」

リーデの眼鏡に隠されていない素のままの瞳は、どこまでも優しげにレクティファールを見詰めている。

その中に多くの悲しみを抱いていたとしても、その優しさは少しも曇らない。

「次の問いに、『分からない』という答えは無いとお考え下さい。人は一度味をしめると、次も同じように振舞おうとする。ですが、殿下の直面する問題に、一つとして同じ解答はありません。同じように見えて全く別の答えであることが当たり前なのです」

「――――――」

リーデはレクティファールの頬に手を添え、悲しげに顔を歪めた。

「そのような場面で、わたしのような者は何も出来ません。殿下は常にお一人、お一人であるが故にこの国を統べることが出来るのです」

リーデの言葉は、一臣民としての言葉ではない。

レクティファールという青年を知る者としての言葉だ。

「ですから、摂政や皇王としてではなく、レクティファールとして

存在しているときぐらいは甘えることを覚えて下さい。わたしのような者では支えきれないときでも、きっと巫女姫様やメリエラ公女ならば……」

彼女は自分の立場を弁えている。

こうして目の前にレクティファールがいることそのものが、夢のようなものだと。

「私人として、上手に甘えることを覚えて下さい。公人としてのレクティファールを支えられない姫様たちは、きっと私人としてのレクティファールを支えたいと思っている」

「――――さあ、それはどうでしょうか」

レクティファールは自嘲するように笑う。

自身が彼女たちに支えられるほど何かを為したとは思えない。

ただ流されて、諦めて、諦めた果てに戦って、傷付けた。

「彼女たちの気持ちは彼女たちにしか分かりません。少なくとも私には……」

理解出来ない。

理解しようとも考えない。

人の心を理解できる程、自分を理解しているとは思えないから。

「私は彼女たちを縛っている。だからこそ、その贖罪のために足掻いているだけかもしれませんよ」

自分に自信など持ちようも無い。

諦めばかりの自分にある価値など、他人に与えられたものだけ。

その価値でさえも、実のところ“白”であるからこそなのかもしれない。

レクティファールのそんな内心を察したか、リーデは小さく頭を振った。

「レクティファールは、レクティファールが思うほど小さい存在じゃない。摂政という立場に押し潰されないだけでも、わたしは尊敬する。わたしは、押し潰されたから……」

「――――潰されてなんて……」

「いいえ、あなたの目の前で、わたしは確かに押し潰されていた。でもそのおかげで、こうして憎しみの泥濘から抜け出すことが出来たのだから、全部が全部悪いことだとは言い切れないわ。それは、きっとあなたも同じ」

リーデはレクティファールの頭を自分の胸元に抱き寄せる。

「いい？　人を理解しようなんて思ったら駄目。そう思ったら最後、きっと理解なんて出来ない。理解は結果よ、相手のことを知り、自分の相手に対する想いを知って初めてその相手を理解出来るの。わたしは、それを知らずに相手を理解したつもりになっていた」

父と、父の守りたかったものを理解したつもりになっていた。

だが、それは理解ではなかった。ただの思い込みだった。

「思い込みほど自分を貶めるものはないわ。だから、あなたもまずは相手を知ろうとして、相手に知って貰うの。そうすれば、きっといつか姫様たちを理解出来る。理解出来たら、もっと近くなれる筈だから」

「――――ならば、リーデとは近くなれないのでしょうか」

「これ以上近くなったら、きっと姫様たちは怒ると思う。何事にも

順番と段取りはあるもの」

リーデは苦笑した。

自分としては、恐らくこれ以上ない程レクティファールに近付いている。

しかし、依存することは出来ない。

だから、今はまだここから先に進むことは出来ないのだ。

「いつか、あなたの隣で胸を張って笑えるように、わたしは自分の仕事をしっかりと果たしたい」

「――――リーデらしい言葉です」

「そう、だったら嬉しいわ」

心の底からそう思う。

少しではあるけれど、レクティファールが自分のことを理解してくれているという証拠だから。

摂政が『ウィルマグス』に帰還するとなれば、やはりそれなりの見送りは欠かせない。

先の出迎えは葬送式の直前であったからあのような形になったのであって、その葬送式が終われば少々規模を拡大した式典が執り行われることが当たり前と言える。

それ故に、嘗てこの要塞に訪れたときと同じように城門前に勢揃いした要塞主要人員の見送りを受け、レクティファールは北へと向かおうとしていた。

「次に会うときは、おそらく殿下が皇都に凱旋されるときでしょうか」

「恐らくな」

ガラハの質問に頷くレクティファール。

その答えを受け、ガラハはにやりとお世辞にも行儀の良いとはい

えない笑みを浮かべた。

「――――ならば、そのときまでにあの娘の支度を整えねばなりませんな」

「――――何？」

ガラハの言葉の意味が分からないレクティファール。

見送る側の列の中にも、約一名同じような表情を浮かべている者がいた。

「出来るなら、もうしばらく手元に置いておきたいのですが……」

「――――中将、貴官は何を言っている」

当惑気味にレクティファールの表情が揺れる。僅かながら、声も震えていた。

ちなみに先程の約一名は、隣にいる同僚に脇をつつかれて困惑している。

「近い内に、技能継承のため、近衛軍に何名か実戦経験のある人員

を転属させることになっております」

「ああ、それは知っている」

レクティファールが近衛軍に働きかけた結果だ、知らない筈が無い。

「先ごろは未熟故、近衛に引き抜くことはお許し願いたいと申し上げましたが――――」

「――――ああ、彼女のことだな」

レクティファールがガラハの背後に並ぶ幕僚たちの列をちらりと見遣る。

その視線の先にいた人物は、やはり複数の同僚に肩を叩かれて目を白黒させている。

ガラハはそんな様子を横目で確認しながら、他の誰にも聞こえないような声で言った。

「昨夜の一件であれも一回り以上成長いたしました。あれの成長を妨げていたのは、ひとえにあれ自身。殿下にはあれの被っていた殻を粉微塵に砕いて頂き、感謝の言葉もありません」

「――――――――知っていたのか」

「小官はこの要塞の責任者にございます。そして、あれは私があれの父より託された大切な預かり者、知らぬ道理はありません。無論、知っていてもそれを相手に悟らせない程度には歳をとっておりますが」

「――――――――」

黙り込んだレクティファールに、ガラハは朗らかな笑みで畳み掛けた。

胡散臭いと心底思った。

「何、あれもいい大人です。自分のことは自分で決められましょう。しかし、ただの女子（めご）として送るにはまだまだ足りぬ部分も多いかと思います。ですから、近衛軍参謀として多くの研鑽を積み、殿下のお役に立てるようにとの、まあ、親心のようなものです」

「――――――――責任を、取れと？」

「殿下にそのように聞こえましたら、それもよろしいかと」

レクティファールの顔が引き攣る。

責任を問われるようなことをした自覚はある。

だが、翌朝、しかもこのような場所でそれを求められるとは思ってもいなかった。

しかし、ガラハを軍人として、これらの遣り取りを軍事行動として見れば、この神速の進軍は納得出来る。

敵として相対したとき、ガラハという男ほど恐ろしい相手はそういるものではないのだとレクティファールは学習した。

「殿下としては、『ウィルマグス』に残した部下たちのことも心配でしょう。早くお戻りになり、今も苦労を重ねている部下たちを労ってやっては如何か？」

「――――――――――そうだな」

部下たち、ガラハのその言葉が指す人物はそう多くあるまい。

恐らく、三名ほど。

将来的にレクティファールの傍らに立つ可能性のある人物たちのことだ。

彼女たちは独占欲の強さで大陸中に知られている種族。日常的にそれを抑えるだけの理性は持っているが、常に理性が本能に勝てるとは限らないのだ。

何よりリーデを想うガラハにとってみれば、将来の不安は出来うる限り取り除いておきたいということだろう。

「――――――――」

ガラハは暗にこう言っているのだ。

こっちはこっちで準備を進めるから、そっちはそっちで頭を下げる相手に頭を下げろ、と。

レクティファールの背中に嫌な汗が浮かんだ。

「では、殿下。今後のご活躍をお祈りしております」

「――――ああ……」

レクティファールには見たことも無いようなガラハの満面の笑顔が、地獄の悪魔の笑顔に見えた。

幕僚の中の一人が、いつの間にか真っ赤に染まった顔で同僚たち

を睨んでいたのが、妙にレクティファールの印象に残った。

閑話ノ肆「第一次痴話戦争という名の惚気話」

メリエラに対して何か悪いことをしたという罪悪感はない。

ただし、それはあくまでも自らの主観によるものであり、それが相手と一致しているとは限らないとレクティファールは知っている。

故に、今彼は追い詰められていた。

「――――ねえレクト、正直に答えて欲しいの……」

接吻さえ容易い距離にあるのは、紛うこと無き龍の眼。

金色の瞳は真っ直ぐに裂け、その内に多くの悲しみとそれに包まれた怒気を孕んでいる。

しかし彼が言葉に詰まる理由はそれらの感情だけではない。

震える声を視覚的に現した、龍眼に浮かぶ涙である。

「――――――――」

しかし、その怒りと悲しみの理由が理解出来なければ謝罪することも、彼女が求める詳しい事情を説明することも出来ない

涙さえ流す程に怒り狂った相手に理性的な対応を求めるのは困難であるし、何よりそんな真似をすれば火に油を注ぐだけだ。

「――――レクト」

だから、彼はひたすら冷や汗を垂らしながら無言を貫く。

目の前の女性の怒りと悲しみが少しでも落ち着き、理性的な話し合いが出来るようになるまで。

「――――そう、そういうこと……」

だがまあ、時間が経てば経つほど怒りが増し、悲しみが増すということも十分に考えられる。

彼はそれを知るには些か若すぎた。或いは、その身に降り掛かった不幸の原因の総ては彼が若いことなのかもしれない。

『ウィルマグス』に戻ったレクティファールは、休む間もなく執務室でフェリエルと向かい合う羽目になった。

野戦病院の仕事が忙しいのか、フェリエルはやや疲れたような表情を浮かべていたが、それでもレクティファールの帰還を喜んでくれた。

この執務室に入ることにも慣れたらしいフェリエルは、寛いだ姿勢でレクティファールの祐筆が淹れたお茶を啜った。

「公の行事としては余り参加したくないものだろうが、これもお役目と思って諦めることだ」

「諦めることは確かに得意ですがね、実は慣れることは苦手です」

「人は得意でも苦手でも、結局最後は慣れる生き物だ。しかし、人の死には慣れるものじゃない」

フェリエルは寂しげに笑う。

医師として多くの戦場を渡ってきた彼女にとってみれば、人の死

は日常の一部。しかし、日常として慣れてしまえばその時点で彼女は望んで人を救う医者ではなくなる、ただ役目として人を癒すだけの医者に成り下がるだろう。

「別段この仕事に不満はないが、時折自分が死に慣れてはいないかと不安に駆られることはある。君の仕事も同じ様なものなのだろう。わたしのように身内と同じ職場なのは、そういう意味では幸運だな。お互いが死に慣れていないか気を配ることが出来る」

「――――なるほど、参考になります」

レクティファールはフェリエルの言葉に深く頷いた。

フェリエルは恥ずかしげに頬を染めながら、お茶請けとして供された焼き菓子を齧った。

「君だってすぐに同じ考えに至るさ。むしろ、わたしが君と同じ年齢の頃に今の君と同じことが出来たとは到底思えない。君が今のわたしの歳になったとき、今のわたしを超えていることは間違いないだろう」

「さて、それはどうでしょうか」

「ふむ……？　何かあったのか」

フェリエルは身を乗り出し、曖昧な笑みを湛えるレクティファールの目を覗き込んだ。

しかし、その銀の瞳はこれまでと変わらず、深すぎて底が見通せなかった。異なる場所を起源とするが故の厳然たる壁――――不理解が二人の間には存在するのかもしれない。

「私は所詮、言われるがままに流されているだけの俗物です。いざ自分の考えを問われれば、明確な答えを返すことも出来ない。――――無論、一度答えを返したからには後悔はしていませんが」

レクティファールの脳裏には、涙を浮かべて自分の胸に抱かれていた女性の姿があった。

彼女に対して返した答えに後悔はしていない。だが、彼女はそれ以外の答えを求めていたのではないかと思うことはある。

そして、彼女を自分の下に招くことは本当に正しいことなのか、と悩むことも。

「――――うむ……」

フェリエルはレクティファールの言葉を肯定することも否定することもしなかった。

彼女にはレクティファールの言葉の真意が理解出来ない。理解出来ないことに対して憶測で言葉を発することを、彼女は良しとしない。

「君がどんなことで悩んでいるのかわたしには理解出来ないが……」

当たり前だ、レクティファールは何も語らない。語られないことを理解することが出来るのは、言葉ではなく精神感応で会話するごく一部の種族だけだ。

「誰かに相談してもいいと君が思ったなら、わたしは喜んで相談に乗ろう。結果までは保証出来かねるが……」

「いえ、それで十分ですよ。感謝します」

レクティファールは小さく笑み、軽く頭を下げた。

「――――ああ、そうしてくれ」

日頃の物腰とは裏腹に仕事以外では人に頼るということをしないレクティファールの言葉に、フェリエルはほっとしたように微笑んだ。

彼女は戦場で多くの患者を見てきた。

その結果、ヒトとは心ありきの生き物であるということを学ぶ。

戦場で心が死んだ者は身体がどれだけ健康でもゆっくりと腐り、死んでしまう。

対して身体が深く傷ついても、心が健やかであるなら生き残る可能性はぐんと高くなる。

彼女自身は医者であるから精神論のみを信奉することはないが、それでも心の力というものを信じていた。

レクティファールという青年が、肉体的には“皇剣”の恩恵によって不死身に近い耐久性を持っているとしても、心は“皇剣”の力だけで守れるとは思えない。

“皇剣”の使用者精神防護策と言えば、大きな心の振幅は精神構造に多大な負荷を与えると考えて出来るだけ精神の起伏を抑える精神平均化がよく知られているが、使用者そのものの精神構造に影響を与えるほどの劇的な変化はない筈だ。

世界を滅ぼせるという概念兵器でさえ、ヒトの心の深遠に踏み込むことは出来ない。

心を操る魔法技術も存在するが、それとて完璧とは言い難いのだ。

「――――レクト」

「――ん？」

だからという訳ではない。

元々この日の面会の目的とはこちらだったのだから。

「メリエラが呼んでいる」

傷を舐め合うということを蔑む者は多い。自らの傷さえ乗り越えられない者が、他者に頼られることは間違いだという者も確かにいる。

だが、舐め合うことで早く癒えることもあるのではないか。

少なくとも、フェリエルはそう思っていた。

――――レクティファールに会える。

身内でもある主治医に許可を貰い、自分でもそろそろ会っていいだろうと考え、最終的な日取りまで決めたというのに、彼女のその日は朝から非常に慌ただしかった。

長い寝台生活で鈍り、痩せ細った身体はどうしようもなく女性としての魅力を失い、月の銀糸とまで謳われた美しい銀髪は見る影もなく、その白皙には皺や隈が目立つ。

ゆったりとした服で体型を隠し、直前に湯浴みをすることで無理やり肌と髪に潤いを持たせ、さらにはこれまでは薄く最低限だった化粧を念入りに施した。

枯れた、老婆のような声を聞かせるのは恥ずかしいとのど薬を処方して貰い、喉に良いという薬草茶も飲んだ。

その準備をしている彼女は、怪我を負う前の彼女と何ら変わらぬ美しさであったと担当の看護師は話す。

逢瀬を夢見て恥ずかしげに微笑み、寝台の上に衣裳を並べてはあれでもないこれでもないと悩み続ける。病室内にこれ程の数の衣裳があったことがまず驚きだった。

総ての準備を終え、姿見でその姿を確認した彼女はようやく納得したように寝台に戻った。

彼女は自分の努力が実って今の姿を手に入れたと思っているようだが、実際には彼女の心ひとつだったのだろう。

明るい気持ちであれば美しさを、暗い気持ちであれば醜さを、ただそれだけのことだ。

「ファリエル、どう、変じゃない？」

「変じゃないわよ、さっきから何度同じこと訊くの？」

「でもほら、今まで食っちゃ寝の生活だったし……」

「重症患者は食っちゃ寝が仕事よ。良いもの食べて栄養を取り、身体と心を休ませ、深く寝て癒す、治療なのよ治療」

「でもでも……」

「――――うがぁあああっ！！　何これ！？　メリエラってこんなに面倒くさい性格だった！？」

紅蓮の髪を掻き毟り、天に向かって吼えるは紅龍公が一子ファリエル。

双子の姉が摂政を迎えに行っている間、メリエラの傍で待つように言い付けられたのだ。

実は近いうちに摂政の下に挨拶に行けと姉に散々言われていたのだが、結局のらりくらりと今日まで逃げてきた。業を煮やした姉がついに強硬手段に出たらしい。ファリエルとて、子供の頃から知るメリエラに付いていてくれと言われてそれを突っぱねられる程酷い性格はしていない。

「面倒くさいって……ヒドイわ……」

心底傷付いたと言わんばかりの表情を浮かべるメリエラ。

実際には毫も堪えていないのだが、そこは幼馴染の付き合いの古さで補っている。まあ、幼馴染とは言っても、その年齢差は十倍を優に超える程なのだが、二人は同世代の四龍姫として人々に認識されている。

ちなみに、彼女たちの世代の四龍姫――――つまりはレクティファールの妃として後宮に上がる予定の五人の中で最年少は蒼龍公の公女二一歳、最年長は黒龍公の公女四三八歳である。

「女友達は男が出来ると面倒臭くなるって聞くけど、本当ね」

「失礼な噂だわ。それは愛を知らない女の僻みよ」

「――――――――やっぱり面倒臭い」

ファリエルとしては、別にメリエラが誰と昵懇の間柄になろうと構わないし、幼馴染が幸せなら祝福してもいい。だが、メリエラの“男”とは、そのまま自分か姉の“男”になる人物でもある。面白い筈がない。

「ぽっと出の、それも“皇剣”を継承するまではただの人間だった男、さらには身元不明だった男のどこがいいの？」

だからだろう、ファリエルの声はこれまでメリエラが聞いたことがない程刺々しい。

メリエラは気にした素振りを見せないが、それでも契約を結んだ主君を貶められてはいい気分ではあるまい。

しかし、それを分かっていてもファリエルは口を噤むことが出来ない。

「ぽっと出ってことは、これまで何の功績も挙げてないってことだし、今回の戦いだってラグダナ中将がいなければ……」

ファリエルは自分の声に熱が篭り始めたことに気付いた。

何故と自分でも思う。

それでも止まらない。

故に、これまでは意図して口にしていなかった言葉が溢れてしまった。

「そもそもその摂政がしっかりしていれば、あなたがそんな酷い怪我をすることだって――――」

「ファリエル！」

「――――っ……ごめんなさい……」

自分の口にした言葉に驚き、メリエラの咎めるような視線に俯き、そして彼女は小さく謝罪した。

言ってはならないことを言ったと、自覚していた。

今の自分の言葉は、守るべきものを守ろうとした目の前の女龍の矜持を侮辱することだ。

同じ女龍として、恥ずべきことだった。

「――――どうしたの？　会ってもいない人のこと悪く言うなんて……」

ファリエルらしくない――――そんなメリエラの言に反論することなど出来よう筈もない。

自分でも同意見なのだから。

「――――気に食わないのよ、どうしても。自分でも良く分からないんだけど」

「フェリエルを取られるから？」

「そ……っ！　そんなこと……」

無いとは言い切れない。

ファリエルの姉は摂政に嫁ぐことに何の疑問も抱かず、この街来て、摂政と実際に言葉を交わしてからもそれは変わらない。

むしろ、乗り気になってしまったような気さえする。

宿舎に戻ってから摂政のことを話す姉は楽しそうで、ファリエルはその度に不満を募らせていた。

「別に悪い人じゃないわよ？　ちょっと馬鹿で天然で、無茶して無理して、無謀なこと大好きだけど」

「――――――――悪くないっていうだけじゃない、それじゃあ」

「あ、そう言えばそうね」

あっけらかんと笑うメリエラ。その笑顔を見て、ファリエルは気付く。

よくよく考えてみれば、この幼馴染も昔はもう少し影を背負っていたような気がする。

公爵令嬢としての、四龍姫としての役目を果たそうといつも張り詰めた表情をしていた。

だというのに、今は何とも締まりのない顔をして男の来訪を待ち望んでいる。この変化の原因は何だろうか。

「――――――――」

やはり、件の摂政は恐ろしい男なのかもしれない。

あの仕事一筋の姉と、この生真面目な幼馴染を篭絡するなんて並の男じゃ出来ないのだから。

「ファリエルだって会ってみればすぐにレクトのこと分かるわよ。単純だから」

「――――――――」

「あれ？　ファリエル？　人の話聞いてる？」

まさか、何処ぞの国で訓練を受けた非正規工作員か。

或いは別世界から落ちてきた別世界人か。

ひょっとしたら第一次文明の落とし子という可能性も――――どちらにせよ、自分だけは騙されないようにしなくては。

「――――駄目ね、聞いてない」

やはり一度詳しく調べてみよう。

敵を知らねば勝利を知ることは出来ないという言葉もある、まずは父を問い詰めることからだ。

「――――よし……！」

一つ気合を入れて拳を握り締めるファリエルを見て、メリエラは嘆息した。

「――――はぁ……こういう人の話を聞かないところ、レクトにそっくり」

幸運なことに、メリエラの呟きはファリエルの耳には届かなかった。

ノックをして、入室の許可を得るまでは上手くいった。

だが、実際にそれ以上の行動を起こそうとすると身体が重くなった。

把手を握る手のひらには汗、そして額にも同じものがある。

隣で自分の様子を面白そうに見詰める未来の妃候補を恨めしげに睨み、一つ深呼吸をして把手を引いた。

遣戸の滑車がからからと音を立て、目の前には久し振りに見る銀色の姫君の姿。

入院生活で少し痩せたように見えたが、それでも以前の美しさが消えることはない。

白を基調とした病室には、見舞い客の持ってきた花が所狭しと飾られていた。

「――――お元気そうで、何より」

「お蔭様で、随分長い休暇を頂いたから」

「そうですか」

そう言って、微笑み合う。

「そうですとも」

その笑顔を見て、レクティファールは胸の問えが消えるのを感じた。

されど、彼が安心して部屋に一歩を踏み入れた瞬間、メリエラとは別の女性の声が彼の歩みを押し留めた。

「あああああぁぁぁっ！？」

「っ！？」

びくっと肩を震わせて声の主を探すレクティファール。

果たして、メリエラの寝台の傍らにその人物はいた。

彼女はレクティファールを指差し、震える声で叫んだ。

「あんたはいつかの放蕩貴族！」

「――――――――フェリエル、私のことは彼女に……」

確かに久方振りではあるけれど、彼女の姉とは随分前に再会している。当然、ミラ平原の野戦病院で出会った自分が摂政であるという情報は彼女たち姉妹が共有していると思っていた。

しかし――――

「ん、言ってない。どうせ会うことになるんだ。自分で自己紹介ぐらい出来るだろう」

「まあ、その通りですけどね」

うぅむ、と唸るレクティファール。

メリエラなどは余りの展開に目を白黒させ、行き場もなく視線を彷徨わせている。

「情けないけど根はいい奴だと思ってたのに……！　わたしの純情を返せっ！」

「何を人聞きの悪いことを……」

「どっかの貴族かその息子だと思って色々調べても誰だか分からないからおかしいとは思ってたよ！　でも、まさか摂政だったなんて……！　変装してわたしたちのこと偵察してたのね！」

「そんな訳ないでしょう」

「ふンっ！」

荒く鼻を鳴らしてそっぽを向くファリエル。

どう考えても彼女の意見は間違っているのだが、果たして今突っ込みを入れてそれが通じるだろうか。

「――――フェリエル」

「ん、ああなると人の話は聞かない。放って置くのが一番だ」

「姉さんっ！」

どうしてそいつの味方をするのか――――妹のそんな視線をあっさりと斬り捨て、フェリエルはレクティファールの背を押した。

「気にするな、珍しく気に入った貴族の男が摂政だったと知ってショックを受けているだけだ」

「姉さん！？」

裏切り者、と自分を責める妹の視線をばっさりと一太刀。

もうこの姉は頼りにならないと悟ったファリエルは、びしりとレクティファールに指を突き付けた。

「いい？　あのときは――――」

「――――貴族なのにたった一人の兵士のために自分の腕を落とそうとするなんて、今時珍しいくらいに民の心身を守るという貴族の義務が分かっている。自分ならああいう、身分じゃなく気持ちの尊い男に嫁ぎたい、と言っていたぞ。どこの馬の骨とも知れない摂政より億倍ましだとな」

「ね、姉さん……っ」

がくりと膝を突くファリエル。

完全に姉の玩具にされている。

「わたしもな、正直面白い男だと思ったよ。いやしかし、あのとき話していた女とはメリエラのことだったのだな」

「ええまあ、もう一人はまだ面会謝絶ですが」

「あっちはまだまだだ。皇都で本格的な治療をしなくてはな、とても男の前には出せん」

「――――なるほど、分かりました」

「うむ、分かって貰えて何よりだ」

暗にさっさと皇都に帰る準備を整えろと言うフェリエル。

レクティファールが帰還すれば、近衛がこの街に留まる理由はなくなる。

主人の傍を離れたくないという本人の意思を鑑みてこの街での治療を続けているが、流石にこの街に皇都ほどの設備はない。元々が医療技術では後進国の帝国の街だったのだから仕方が無いのだが、フェリエルとしては顔見知りの治療さえ満足に出来ないという状況はさっさと改善したい処である。

実際、上位組織である陸軍医療統括局にさんざん上申しているのだが、どこも人手と物資は不足しているらしく希望が聞き届けられたことはない。

「――――姉さんも、あんたも……人のこと無視して……」

「無視しているなんて……」

滅相もない――――そう続けようとしたレクティファール。

しかし、にこやかなに微笑むフェリエルがそんなレクティファールの努力をあっさりと圧し潰す。

「ああ、ただ面白がっているだけだ」

「フェリエル……」

「姉さん!?」

「はっはっは、お前たちは仲が良いなあ」

朗らかに笑うフェリエルと、顔を真っ赤に染めて両手の拳を震わせるファリエル。

レクティファールといえば困ったように苦笑しているだけで、既に事態の収拾を諦めているようだ。

彼の処世術の一つに、女同士の揉め事には一切近付かないというものがある。

これは学生時代の友人から実体験を交えて教授されたもので、彼のこれまでの人生では大いに役に立った。

しかし、今後も役に立つという保障は無い。

現にファリエルは上目遣いでレクティファールを睨め付けており、その視線に気圧されるようにレクティファールが半歩後退った。

「――――ひとつ教えてあげるわ……」

地獄の底から響くような低い声。

見目麗しい女性から発されているとはとても思えない声だが、彼女が龍族であることを考えれば納得出来ないことはない。龍族は自在に龍と人の姿を行き来することが出来、その応用技術として身体の一部を変化させることは少々歳を取った龍族なら誰でも可能だからだ。

おそらく、この声は声帯を変化させているか、或いは魔法で変化させているに違いない――――

「――――――――」

――――とりあえず、レクティファールはそう納得することにした。そうしなければ怖いから。

ファリエルは自分がそれ程恐れられているとは気付かないまま、びしり、とレクティファールを指差した。

「ええと――――……そう！　死にたくなかったら、今日から毒見

役を増やすことね……っ！」

「――――そ、それはどうも……」

あれ、意外と親切だなぁ、と思うレクティファールだが、何故かファリエルも自分の言葉に首を傾げている。どうやらもう少しキツイことを言おうと思っていたらしいのだが、咄嗟には思い付かなかったようだ。結果として、脅しなのか医者としてのただの親切なのか、或いは心配しているのか分からない言葉になってしまった。

「やはり、お前たちは仲が良いなぁ。ひょっとしてわたしよりもファリエルの方が好みか、レクト」

「いえ、別に」

「そこは即答なのかっ！？」

にやにやと笑いながらレクティファールに問い掛けたフェリエルだが、返ってきた答えに思わず叫んでしまった。心底そう思っているらしいレクティファールは、きょとんとフェリエルを見詰め返す。

彼にとってはフェリエルもファリエルも大した違いは無い。

婚約者候補である以上、受け入れもするし、守りもするが、それ

以上の関わりは現時点では望むべくも無いのだ。メリエラたちと、二人の扱いは良く似ているようで全く違う。レクティファール個人として大切に思っている者たちと、摂政、或いは皇王として大切に思っている者たち。メリエラ、ウィリィア、リリシア、アリア、リーデは前者であり、紅龍公の双子公女は後者に分けられる。

無論、友人であるフェリエルは前者に限りなく近いだろう。だがそれも、所詮は友人としてのことだ。女としてではない。

「困ったことに、そういうことは詳しくないもので……」

「――――む、そうなのか」

「ええ、そうなんですよ」

困ったな、と呟くフェリエル。

彼女としてはもう少しレクティファールの異性の好みというものを知りたかった。

そうすれば自分たち姉妹のどちらが嫁ぐべきか一つの判断基準になるし、仮にファリエルが後宮に上がることを拒否してもフェリエルがその好みに近付けばいい。

論理的な考えを好むフェリエルらしい思考だった。彼女は一つ頷き、この話題を打ち切る。

三人を見詰める一対の瞳が、少しずつ怒りを帯び始めていた。

「――――まあ、今はそれでもいいさ。それに関してはまた話そう。そろそろメリエラの機嫌が限界のようだからな」

「あ」

迂闊にも今気付いたという風な声を発してしまったレクティファール。

そんな間抜けな声を聞き咎め、とある人物の眦が一気に釣り上がる。

しかし彼女は怒りを落ち着けるように何度か深呼吸を行い、何とか静かな声を捻り出した。

「――――――――――レクト」

だが、静かであるが故に押し殺した怒りを容易く察することが出来てしまうということも、またある。

レクティファールはまた一つ、女性の心理というものを学習した。実際に役立つかは別問題だが。

「――――はい……」

周囲に援護を求めても、その先にあるのは面白そうにこちらを観察する瞳と意図的に逸らされた瞳のみ。つまり援軍はない。

彼は一気に重さを増した足を引き摺り、婚約者の前に立った。気分は断頭台に首を捕らえられた受刑者である。

メリエラは居住まいを正すと、レクティファールを視線で椅子に座らせた。

そして、出来の悪い弟を叱る姉のように、右手の人差し指を立てて説教を始める。

「お見舞いに来てくれたのは嬉しいのよ、ええ嬉しいわ」

「……はい」

「でもね、一応目的がお見舞いである以上その目的を忘れちゃいけないと思うの」

「……はい」

「いいのよ、二人とは知り合いだって言うし、今後も長い付き合いになるから」

「……はい」

「でも、いいえ、だからこそ目的というものはしっかりと認識しておかなくちゃいけないわ。そうしないと知らず知らずの内に礼儀を失するようなことになりかねないし、あなたの立場ならそれは国家間の問題にもなるの」

「……はい」

「だからね――――――……っ！？」

そのときメリエラは、大した意図もなくレクティファールに顔を近付けたのだろう。

レクティファールの目を見詰め、自分の意思を声と視線で伝えるために。

しかし、彼女の動きはそこで止まった。

大きく目を見開き、驚いたようにレクティファールを見詰める。

「――？」

レクティファールはそんなメリエラの様子に首を傾げた。

フェリエルとファリエルも困惑したように視線を交わしており、互いが答えを持っていないことを確認すると再びメリエラへと視線を戻した。

三人の視線を受けることとなったメリエラはそれに気付かぬように目を瞑り、何かを確認するように二度三度鼻を動かした。

その動きを見て、動揺した人物が約一名。

言わずもがな、レクティファールである。

「――――――――」

まさか、と思う。

以前から女性問題で何度も説教を受けてきたが、流石に何日も前の匂いが残っているなどということは――――

「――――レクト……」

「はいぃっ！？」

不味い、バレた――――レクティファールはメリエラのあらゆる感情を押し隠した小さな小さな声を聞いた瞬間、総てを悟った。

「――――何処の女……？」

「うえおあっ！？」

ゆっくりと目を開いたメリエラの表情に怒りはない。

だが、それ以外の感情もない。

さながら人形のようなその顔を見て、レクティファールの舌はその機能の過半を喪失した。

意味のない奇声だけが今の彼の総てだ。

「――――なるほど、女か」

「――――本当、最っ悪ね……」

レクティファールの背後で、妙に納得したようなフェリエルの声と吐き捨てるようなファリエルの声が交差する。

その二つの声に、レクティファールの肩が大きく震えた。

ぎりぎりと、潤滑油が切れたブリキ人形のように背後を振り返ったレクティファール。そこにはうんうんと何度も頷くフェリエルと、自分を道端に転がる動物の糞のように見下すファリエルがいた。

納得されたことにはいくらか疑問を抱いたが、それでも大した衝撃は受けなかった。しかし、明らかに自分を蔑んでいるファリエルの視線には大いに傷付いた。

蔑まれる理由に心当たりがあるだけに尚のことである。

「レクト、こっちを向きなさい」

「……はい」

しかし、メリエラから発せられる声にはファリエルの視線以上の攻撃力があった。

感情を読み取れるような抑揚に乏しく、怒っているのか悲しんでいるのかすら判断出来ない。

レクティファールとしてはせめて感情を示して欲しかった。謝るにしても、謝り方というものがあるのだ。

「いい？　わたしの立場ならここで怒ることは出来ないし、怒るつもりもないわ」

「――え？」

この状況で怒っていないというのか。

先程から肌に突き刺さる怒気は気のせいだと。

いやまさか、いくら自分でもそこまで生存本能を捨ててはいない。

「――――何？」

「いえ……！」

しかし、捨てていないからこそ、踏み込んではいけない領域もある。レクティファールは自分の心に湧き上がった疑念を、一瞬の内に意識領域の彼方に蹴っ飛ばした。

しかし、彼のすべきことは己の生存本能に従うことだけではない。目の前にいる、怒れる龍姫を宥めることだ。

彼は決死の覚悟を胸に、何とか反論を試みる。

「あの……」

「――――なぁにぃ？」

「――――……やっぱりいいです……」

眼光一つで撃墜され、がくりと肩を落とすレクティファール。

己の決死の覚悟など、所詮メリエラの怒りの前では川に流される木の葉に等しいと彼は気付いたのだった。

フェリエルは目の前で繰り広げられる痴話喧嘩を観戦しつつ、レクティファールという男の間の良さに感嘆の吐息を漏らす。

摂政就任からそれなりの時間が経ち、そろそろ女の一人も侍らせなくては摂政としての沽券に関わると思い始めていただけに、彼女は今回の一件を大いに歓迎していた。

レクティファール個人が過剰な色を好まないとしても、今の状況は良いとは言えない。

これまでの皇太子は摂政に就任した時点で既に伴侶を得ており、皇王に即位したときには子供さえいた。

当然、皇子や皇女を貴族や市井に婿入り嫁入りさせ、それによってある程度政治的地盤を固めており、皇王としての権勢を振るう際の後ろ盾としてそれらの繋がりを用いていたのだ。

だが、レクティファールにはそれが無い。

メリエラを始めとした四龍公の姫君の腰入れは決まったようなものだが、それも所詮婚約止まりだ。現在の正式な妃候補は二名。後宮に巫女姫リリシア、離宮に『蕾の姫』アリア。これは男性皇太子としては史上最も少ない妃である。

この状況を危惧する貴族や有力者は多く、同時に好機と捉えている者も少なくなかった。

前者は皇太子の政治基盤の脆さに危機感を抱いており、内乱と帝国の侵攻で疲弊した国内を纏めることに支障があるのではないかと考えていた。それに対して後者は自らの縁者を妃として摂政の側に送り込むことを考えており、これはおそらく自らの立場を“皇王”の権威によって高めようということなのだろう。

そして、レクティファールが皇都奪還戦及び対帝国国境戦で名を上げると、これらの動きは変化し、より活発化する。

前者の危機感は後者のような輩が分不相応な力を持つことに対するものに変化し、後者の胎動はこれまで水面下に留まっていたものが少しずつ水面の上にも現れ始めた。

レクティファールはこの時点で、望む望まないに関わらず国家の命運を左右するだけの影響力を持ったと言っていい。

（――――まあ、本人には自覚がないようだが……）

フェリエルはメリエラに責められて小さく縮こまっているレクティファールの背中を見て溜息を吐く。

彼女の父、紅龍公フレデリックはレクティファールに対する態度とは裏腹に白龍公カールと並んで前者の最先鋒だ。目の中に入れても痛くない愛娘のフェリエルとファリエルを、決して仲が良いとは言えないレクティファールの婚約者として認めたこともその証明だろう。

自分の好みは別にして、皇国四公爵の一角としての責任は果たさなくてはならない――――フレデリックは皇都の屋敷で娘二人を前にそう語った。

ファリエルは一方的に自分の将来を決めてしまった父に対して嫌悪感と反発を抱いたようだが、フェリエルは大貴族の娘としてその程度のことはとうの昔に覚悟しており、ただ来るべきときが来たとしか思わなかった。

そして彼女は『ウィルマグス』にて“摂政”レクティファールと

直に顔を合わせ、生涯の伴侶としては中々悪くないという感想を持つ。

“皇剣”を継承した段階である程度の器量を持つ人物であるとは思っていたが、彼女自身が『悪くない』と思える人物であったことは非常に大きい。

彼女自身、誰と結ばれたところで適当に幸せになり、適当に満足して死ぬ自信があった。

しかし、適当以上を望むことが出来るのならそれに越したことはない。いつか迎える最期のとき、心の底から笑って死ねるような人生を願う程度には、彼女も人の子だった。

「――――ねえレクト、正直に答えて欲しいの……」

今自分の目の前で怪我人に圧倒されている青年がそれを実現させてくれるかどうかは定かではないし、何より彼女自身にも確信はない。

されど、確信がないからこそ彼女はレクティファールを『悪くない』と評した。

万が一、妹が心変わりしたのなら、それはそれで良い。

頑固な妹を心変わりさせた男と関わる人生は面白いものになるだろう。

紅龍公の名跡を継ぎ、皇王となったレクティファールの下で働くこともそう悪いことではない。

自分と妹、どちらが嫁いでも退屈しない人生になる。

その人生が良い人生になるかどうかは、レクティファールの責任ではなく彼女の責任だ。どうとでもしてみせる。

「――――そう、そういうこと……」

その為にはまずレクティファールにこの修羅場を潜り抜けてもらわなければ――――フェリエルは心の中に湧き上がる期待を押し殺しながら、じっと二人の遣り取りを見守った。

詰問され、さてどうやって説明したものかと思案するレクティファール。

しかしこのとき、レクティファールの懊悩はメリエラに一つの答

えを抱かせることになる。

それはレクティファールの予想を遥かに越えるもので、結果的に致命的な思考の遅れを招いた。

「――――……、わたしのせいなのね？」

自分の醜態に呆れ、愛想を尽かせた結果がこれなのではないか――――彼女はそんな答えに至った。

『騎従の契約』を結んだにも関わらず主君を守ることさえ出来ずに敗退し、結果として主君に剣を抜かせてしまった。しかも自分が守らなくてはと思っていた主君は敵将と刃を交わした上でそれを退かせている。

敵の攻勢が限界に達し、敵将が自ら退いたことはこの際問題ではない。

最終的に主君の命を守ったのが、主君自身であることが問題なのだ。

「こんな騎龍はいらない？　若くて、大した力もないわたしは必要ないの？」

「メリエラ、それは……」

「いいの、わたしが不甲斐なかったのは事実。見捨てられても仕方が無いわ」

言葉こそ気丈ではあるが、その目には確かに涙が浮かんでいる。

彼女たち龍族の女にとって、己の不始末で連れ合いに見捨てられることほど惨めなことはない。

連れ合いが他の女に気を取られているだけなら、彼女たちはここまで悲しむことも怒ることもなかっただろう。幾らでも己の名誉を挽回する機会はあるし、愛すべき主君の隣から身を引く理由もないからだ。

しかし、自分でも認めるしか無いほどの不始末を為してしまったメリエラには、レクティファールの不義理を責めることは出来ない。

レクティファールの立場を思えば、今、妾の一人や二人作ったところで世間はどうも思わない。ただ、メリエラやその他の個人が納得出来るかどうかの問題にしかならないだろう。そして個人の問題となれば、メリエラ自身がレクティファールに引け目を感じている以上何も出来ないし、何かしようとも思えない。思えば、それだけ自分の卑しさを見せつけられるのだから。

現に今、レクティファールの態度に怒りの炎の大半を消し止められた彼女には、弱い自分を責める気持ちと、唯一無二の男の傍らから追い落とされることへの恐怖しか残っていない。僅かな怒りは悲しみを増幅させる意味しか無く、俯いた彼女は膝の上で両手を固く握り締め、それらの感情に耐えた。

震える彼女の両手に、レクティファールは恐る恐る手を伸ばす。

本当なら肩に触れたかったのだが、薄い寝間着の肩に触れる勇気が彼にはなかった。

触れれば、今いる場所に戻れなくなる気がした。

「メリエラ……」

それでも意を決して手を伸ばし、自分のそれよりも一回り以上小さな、小刻みに震えるメリエラの両手を包み込む。

レクティファールの体温を感じたメリエラは、恐る恐る顔を上げた。

「レクト……」

何かを恐れ、期待する瞳。

感情の昂りによって龍眼へと変化した金色の瞳に見詰められ、レクティファールは居心地の悪さを感じた。

それと同時に恐怖ではない感情が、彼の中に少しずつ溜まっていく。

それを認識すると、目の前の女性にもっと触れたいという願望が彼の内で大きくなった。

「――――――」

その願望に従うまま、彼はメリエラの頬へと両手を伸ばす。

「れ、レクト？」

触れた頬は化粧に隠されていてもやはり乾いていて、レクティファールはメリエラが化粧をしてまで自分の前にいることにようやく気付いた。

彼女が化粧を余り好まないことは知っていた。

白龍宮での寧日、雑談の中でメリエラがそう語っていたことをレクティファールは憶えている。

憶えているからこそ、そうまでさせた自分が憎くなった。

同時に、無性に嬉しくもなった。

「大丈夫――――」

不謹慎だと思いながらも、緩む頬を抑えきれないぐらいに。

「――――私にはメリアが必要だから、メリアがいらないなんてことは絶対にあり得ない」

それは、嘘偽りの無い本心だった。

背後にいる二人の姫君の威圧感に負けたということは無く、自己嫌悪に屈したということも無い。

ただ、そう思っただけの本音。

取り繕う暇もなく、口から漏れたただ一つの音だ。

メリエラの目から零れた涙が、レクティファールの両手に落ちた。

「私の行動でメリアが不安になったのなら謝る。私の側にいたくないなら、それも構わない」

「レクト……？」

メリエラは両の頬に触れるレクティファールの手に気恥ずかしさを感じながらも、目の前で発せられるその言葉から意識を反らすことはなかった。眼前にいる、この何処か抜けたところのある青年が全力で自分に語りかけていると理解出来たから。

「君が聞きたいと思っていること――――彼女と何があったのか、彼女の了解が得られない以上ここで話すことは出来ない。だけど、君と彼女を同じように見たことは無いと誓えるし、彼女を君と同じように扱うこともないと誓う」

「――――――――」

なんて都合のいい台詞だ、とメリエラは思った。

気の多い男の言い訳だと、自分を軽んじる唾棄すべき言葉だとも思った。

しかし目の前の男はそんな台詞を真正直に、真正面から自分に投げ掛けてきた。

逃げられない場所で、逃げられない状況を自分で作って、だ。

「――――馬鹿ね……あなた……」

そう、馬鹿だ。

もっと良い言い訳があるというのに、ただ立場を考えた結果の行動だと言えばいいのに、他にもメリエラが納得する“しかない”言葉は幾らでもあるというのに、彼は馬鹿な台詞を自分の前で吐いた。

自分を見詰めながら、別の女が大事だと、こんな場面ですら気遣うほど大切な女だと、レクティファールは言外に白状したのだ。

これを馬鹿だと言わずに何と言えばいい。

阿呆か、無礼者か、女の敵か。

或いは――――

「でも、それくらいじゃ無いとわたしが支える必要はないかもしれないわね」

「――――――――メリア」

――ただの、愛すべき馬鹿者か。

「いいわ」

支えるべき連れ合いか。

「それも含めて、わたしがちゃんと支えて、守ってあげる」

導くべき弟か。

「でも、今度からは事後承諾は駄目」

慕うべき主君か。

「わたしにも心の準備が必要なんだから」

答えは、未だ出ない。

だがそれと同時に、彼女はこうも思う。

「今度やったら、本気で怒るわよ？　分かった？」

「――――が、頑張ります……」

答えが出ないままなら、いつまでもこの青年の隣にいられるのではないか、と。

このときのレクティファールの言葉は、結果から言えば一ヶ月と経たずに反故にされる。

摂政の皇都凱旋以降、内政へと舵を切った皇国。

若き国主の下で傷を癒す皇国に二つの縁（えにし）が齎されたとき、『第二次痴話戦争』の幕は上がる。

第一話「（凱旋＋平和）×蠢く人々＝新たな戦闘開始」

摂政凱旋の報せが皇都に届けられたのは、黒の第四月の半ばであった。

そのとき関係各所に通知された帰還予定日は一週間後。行政官庁及び皇王府、そして皇都周辺の陸空軍、アルカディス湖を根拠地とする海軍皇都防衛艦隊はその準備に追われた。

戦火を逃れて皇都から疎開していた住民たちもこの時点で大部分が帰還を果たしており、彼らも巻き込んだ凱旋式典の準備は、さながら祭の準備のような騒がしさであった。

いや、住民たちはこの凱旋式典を大祭の一つとして捉えていたのだろう。

住民たちは摂政の帰還が知らされたその日から昼夜問わずに酒を呑み、歌を唄い、踊り回って、生きていることへの喜びと喪われた命への弔いを全身で表し、さらに明日への活力を養っているようだった。

そんな住民たちを相手にする商会は薄利多売の精神でどんどん安売りを始め、政府と皇王家が投下した資本も加わって皇都経済は一気に活性化した。そんな皇都の賑わいを見て他国の商人も皇都で店を広げるようになり、いつの間にか皇都の人口は皇都奪還戦の頃の一〇倍強、五二〇万にも達することとなる。

たとえそれが一時的なものだとしても、まさに未曽有の復活劇。

一度は暴行、略奪、殺人などの陰惨な情景が当たり前の亡霊都市に成り下がった皇都は、このとき世界規模の大都市へと生まれ変わろうとしていた。

それだけではない。

四界神殿は摂政の戦勝を祝福するために総大主教を聖都より派遣すると発表し、皇国と友誼を結ぶ各国は国家元首級の要人を続々と皇都入りさせた。さらには先ごろまで干戈を交えていた連合参加国、先の戦では先陣に立ったアルストロメリア民主連邦の国務長官、シェルミア共和国の象徴たる国王、そして一度は皇国に属しながらそれを裏切り、連合側に付いた中小国家の元首が皇都に入った。

これは各国が摂政レクティファールの皇国元首就任を認めたことと受け止められ、住民たちの熱狂はさらに度合いを増した。

その熱狂振りをして、皇都で辣腕を揮う白龍公は皇都への帰還の途についている筈の娘に「まるで建国祭の最中のようだ」と書き送っている。

夜になってもなお喧騒は続き、不夜城の様相を呈した皇都を、星天宮の敷地内にある尖塔の一つから見下ろす二つの影があった。

「――――賑やかですね、猊下」

「本当に……。殿下が帰還するというだけであんなにも人々の顔が明るくなるなんて……」

「それもこれも、猊下がここまで皇都の傷を癒したからです。自ら包丁を握って炊き出しに参加した巫女姫など、わたしは聞いたことがありません」

「いいえ、殿下は自ら“皇剣”を振るって帝国の姫将軍と斬り結んだと聞きます。それと較べればどうということもありません。何より皇国の民は殿下の赤子、ならばわたくしにとっても我が子ということ、我が子のために母が料理を作ることに何の不思議がありましょう」

言葉を交わす二人は、それぞれがこの国の主の妃となる運命を持った者たちだ。

巫女姫リリシアは既に国民に皇太子妃として扱われ、彼女を一目見ようと皇城に足を運ぶ者も多い。しかし、彼らは普段リリシアが過ごしている後宮に入ることは出来ない。皇城内も一般に開放されている場所以外は立ち入れないから、一日に一度、リリシアが皇城の正門近くにある白色殿の縁台まで出向いて市民に顔を見せることになっている。白色殿は正月や建国祭などの祭事の際に皇王が住民に顔を見せる施設として知られており、ここでもリリシアが時期皇王の妃として扱われていることが分かる。

対して『蕾の姫』アリアは星天宮内にある後宮とは別の離宮にて世間に顔を出すことも無く静かに暮らしており、同じ男の傍に侍る

者として二人の生活は大きく異なっていた。

この尖塔に来るときも、アリアはベールで顔を隠して馬車に揺られてきた。近衛たちの誰何を幾度も受け、その度にアリア付きの侍女が摂政からアリアに贈られた皇王家の紋章入りの首飾りを身分証代わりに見せる羽目になった。

レクティファールが人々に崇められ、摂政としての地位を確固たるものにする程に、リリシアは妃として認められていくのだが、却ってアリアという側妃の存在は人々の意識の中から消えていくようだった。

リリシアとしてはそれが心苦く、同時に羨ましかった。

だからこそ、彼女はこうしてアリアを皇城近くに立つ尖塔の一つに招いた。他の妃がいれば離宮の側妃を後宮に入れることに反対する者も出てきただろうが、今後宮にいる妃候補はリリシア一人。他に反対するだけの権限を持つ者はいなかった。

ちなみにこの尖塔は皇城と呼ばれる政府庁舎の建物に付属するものではなく、皇家の私的住居である後宮の施設内に立つ建物なのだが、人々には政府施設としての皇城とその他の施設の区別など出来ないだろう。

ただ確実なのは、リリシアの妃候補としての権限が及ぶのはあくまでも後宮内のみであり、政府庁舎としての皇城に立ち入ることも、誰かを呼び寄せることも出来ないということだ。

「――――猊下の仰る通りです。しかし、何故今日はわたしをお呼

びに？」

アリアは、所詮自分はレクティファールの愛妾の一人であると認識しているし、それは多分に事実だ。近い将来第一妃になるであろうリリシアが自分のことを気に掛けている理由が分からなかった。

「人々の笑顔を見ながら盃を交わすというのも悪くないでしょう。――――というのは建前で、実は相談したいことがあったのです」

「は、はあ……」

リリシアの真剣な眼差しに射竦められ、アリアは居心地悪そうに身動ぎした。悪いことをした記憶はないが、まるで尋問でもされている気分だった。

「実は――――」

しかし、リリシアの口から語られた言葉に、アリアのそんな気分はすぐに消し飛んだ。

なるほど、その相談事とは彼女ら二人に大いに関わりのある事柄であった。

摂政の凱旋を翌日に控え、カールは皇都中を駆け回る勢いで仕事をこなしていた。

皇国貴族筆頭として、本人は認めていないが摂政の後見役として、カールにしか出来ない仕事というものは非常に多い。

むしろ、そういった仕事に関して多くの経験があるカールに与えられた仕事は、レクティファールのそれよりも遥かに数が多く、種類も雑多であった。

自身が強い影響力を持つ貴族議会の取り纏めから始まり、関係官庁には貴族議会の一員として接触、有力商家には皇王府総裁と共に復興への協力を求め、軍には退役軍人として意見を送った。

そんな中で、ただ一つ彼が大手を振って手出し出来なかった組織がある。

大貴族であり、摂政の後見役とも目されている彼が手出し出来なかったその組織とは、貴族議会と並び皇王の輔弼機関として存在する国民議会だった。

国民議会は世襲制の貴族議会とは違い、六年に一度、議員総てを対象として選挙を行い議員を選ぶ。

その選挙の投票権は皇国国籍を持つ成人に与えられているから、国民が政治に関わる最も大きなものが国民議会選挙と言えるだろう。州知事、都市長も選挙で選ばれるが、彼らの職能とは自治体に属する官僚の首長としてのそれであるから、国家全体の政治に関わるとは言えないのだ。

ここで話は逸れる。

皇国の選挙制そのものは初代皇王が熱心に推進した政策で、彼は元々国家という意識に欠ける各種族を皇国という共同体に統一するためには不可欠な制度だと主張していた。

帝国崩壊戦争時、初代皇王に協力していた有力種族の殆どは貴族としての地位を得たが、それでも過半の少数民族は、自分たちが運営する共同体の中で生活の総てが完結している場合が多かった。

彼らは皇国成立後もその独自の風習を残したままで、ときにその風習が他の種族との衝突を招くことも少なくなかった。

皇国の黎明期、初代皇王とその忠臣たちは文化風習の異なる各種族を統一国家として纏めることに総てを投じていたと言っても過言ではない。

彼らは各種族に皇国という国家を認識させ、そこに属しているという自覚を持たせるため、国政に参加させることを考えた。しかし、これまで政治というものに殆ど興味を示していなかった国民に、政治を理解しろと言っても不可能なのは分かりきっている。

何よりも、この時点で雑多な皇国の国民が国民として纏まっていられたのは、単純に自分たちを率いて帝国を打ち倒した初代皇王という英雄がいたからだ。

彼らは元々“強い個体に従う”という種族的特徴を色濃く有していたから、一応皇国は皇王を頂点とした国家として纏まった。しかし、それでは初代皇王が崩御したときに再び皇国は分裂、各種族が好き勝手に縄張りを決め、好き勝手に争い合う戦乱時代の幕開けとなる。

そうなったとき未熟な赤子国家の皇国は、周辺国の草刈り場と化すだろう。

実はこの頃、各種族の首長たちは程度こそ違えど同じ危機感を抱いていた。

周辺国だけではなく、北へ追い込んだ人間種が、再び自分たちを支配しようと――――いや、一度逆らった自分たちを根絶やしにしようと舞い戻ってくるのではないか、という危機感、恐怖である。

彼らも生物であるから、死というものは恐ろしい。

特に子々孫々に遺すものが一切無く、種族全てを絶滅させられることは筆舌に尽くし難い恐怖であった。

嘗ては支配され、次は滅ぼされる。

知恵ある者どもの首長たちは考え抜き、この最悪の未来を避けるため、皇国という国家を自分たちを守護し得る共同体に育て上げる

ことを決意する。

この時点で、彼らにとっての皇国とは単に成り行きで属した共同体ではなくなった。

自分たちを守る、という生物の自己防衛本能に拠って立つ、相互防衛共同体となったのである。

現在まで続く皇国の基礎は、この時期に形作られた。

各貴族が有する、その貴族が首長を務める一種族の軍隊は時間の経過とともにその貴族が支配する領地から徴募された兵士で形成される貴族軍となり、皇王に従い直接帝国と戦った各種族の連合軍は各種族の混在編成のまま規模を拡大して皇国正規軍へと名を変えた。

同時に皇国の国土は幾度かの行政区分変更を経て二五の州へ、さらに一州は二五郡へと分けられた。この州や郡は行政としての区分であるが、貴族の領地はこの区分を基準にしている。領主の交代が国民に与える影響を少なくするためだ。

貴族は領地の徴税権や土地所有権は認められている。ただし、それは皇国の国法が許す範囲でのことだ。初代皇王はこれを『限定的封建制』などと呼称したが、当時の臣下のうち、この言葉を理解しきれた者がどれほどいただろうか。

だが、初代皇王が貴族たちに領地を与えたのは、これを支配させる為では無い。それどころか、褒賞ですら無かった。この頃の貴族に与えられた義務と権利とは、領地を統治し、税を得る代わりに領地を保全すること。

常に最大の税を得られるよう、最適な状態に領地を守ることだったのだ。

この手段として領主には国法の許容する範囲での法の制定が許可されていたし、領地を守るための軍隊の所有も許可された。前者は規範であるが故に粗が目立つ国法だけで対処出来ない法の抜け道を塞ぐため、後者は正規軍だけでは対処し切れない小規模な軍事行動に従事させるためと、正規軍が動きを見せるまで領地を守り抜くためだ。

さらにこのときに成立した三院は今にまで続く皇国行政の基礎となり、皇国司法院、皇王府などの機関もこの頃に発足している。以降政府官庁は数を増やしたが、三院の下に総ての行政官庁が位置することに変化はない。

皇国歴八年から始まったこの大改革は二〇年続き、建国時は各種族の緩やかな共同体であった皇国は、皇国歴二八年の時点で統一国家と呼んで差支えの無い国家に成長した。

その主導的立場であったのは言うまでもなく、この頃には“英雄皇”と渾名されるようになっていた初代皇王。

彼はそのときに皇国の全成人を対象として選挙を行うことを決定し、同時に自らの輔弼機関として皇国議会を設置する。

貴族議会は世襲制で男爵以上の爵位を持つ各家の当主が議員となり、国民議会は皇国国籍を取得してから三〇年を経過した者ならば被選挙権を得ることが出来るとされた。移民国家でもある皇国では、移民者が国政に参加するのは当然だった。

初代皇王とその臣下たちは二〇年を掛け、皇国に選挙という制度を浸透させる。

一部に一〇〇〇年を超える寿命を持つ種族が暮らす皇国とて、一〇〇年前後の寿命しか持たない種族が大半である。二〇年という年月を掛けた選挙制度は人々に政治を考えさせる一つの手段となった。

否、主権が皇王にある皇国に於いて、選挙の目的はそこにあった。

ただ盲目的に上位者に従うのではなく、自らが自らの未来を考える。その手段として、初代皇王は選挙という制度を作ったのだ。だからこそ、国民が国家という存在を感じ、その未来について思考するようになった時点で皇国の選挙制度は完成したと言っていい。

第一回の国民議会選挙に続いて各州知事、各郡の長を選ぶ地方選挙が行われ、一定以上の人口を持つ都市では都市長を選ぶ選挙も行われた。

政治と国家いうものを考える手段としての選挙は、この時点でその意義を全うし、国家が危機に瀕したとき、国民がそれを知らずに過ごすことは無くなった。

それから一〇年後――――北からの侵略が始まる。

各種族の首長が抱いた危機感はここに現実のものとなったのである。

しかし、皇国は皇国としてそれらと相対し、これを撃退。

その直後に西方から侵攻してきた別国家の正規軍の撃退にも成功

する。

当時、北と西で戦った兵士たちは、自分たちを各種族の戦士としてではなく皇国の兵士として認識していた。象徴という意味での各種族の戦士という概念は残ったが、軍組織の一員としてそれらを持ち出す兵士は存在しなかったのである。

アルトデステニア皇国の誕生をこのときと考える史家、研究家は多い。

皇国の国民が、共同体としての己の国家を守るために戦ったのだ。それを統一国家の誕生と見ることに困難はない。

一つの事実として、この戦いの結果を見た初代皇王は「肩の荷が降りた」と皇妃たちに語っている。

彼を指して、当時の臣下たちはこう語った。

「陛下ほど国家について無知なものはいなかった。しかし、陛下ほど国家について識っている者もいなかった」

国民が国家という存在を認識している国家。

それがどれ程稀有な国家であるのか、初代皇王は知らなかった。

彼は当たり前のように「国民は国家を知っている」と思っており、為政者や統治者だけが国家や集団を知っていると考えていた臣下たちは大いに驚いた。

少なくとも、建国当時の皇国国民は自分たちの属する集落や小さな共同体のことは認識していても、それ以上の視点で自分たちの暮らす国家を見たことはなかった。

それで十分だったのだろう。

しかし、初代皇王の考えは違った。

国民は国家に属するから国民である。ならば、国民は国家について無知ではいけない。

国家について無知な国民というのは、自分の立っている場所を知らぬ旅人と同じこと。誰かについていくのならそれでも良いが、それでは自分が本当に行きたい場所に行くことは出来ない。そもそも、行きたい場所を思い浮かべることも出来ないのだから。

或いは、初代皇王は国民たちに夢を与えたかったのだろう。

誰もが何者にもなれる国。

農人にも、商人にも、文人にも、軍人にも、官僚にも、そして為政者にさえもなれる国。

そうすれば、あらゆる分野で才能のある者が現れる。国家を支える土台が出来上がる。

もしかしたら、そんな国家を夢見た初代皇王こそ、皇国で最初に夢を見た人物だったのかもしれない。

そして彼は、自分の夢を叶えた。

国民が、自分たちの手で自分たちの国を守ったのだ。

そしてそれを見届けたかのように、皇国最初の戦争から四年後――初代皇王はこの世を去る。

未だ歳若く、次代皇王の育成もようやく終わったばかりの頃であった。

多くの涙が流された英雄皇の葬儀は、三日三晩続いた。

このときばかりは誰もが初代皇王の棺に触れることが出来、完成したばかりの皇城には人の列が途切れること無く続いた。

やがて最後の一人が皇王に別れを告げ、その骸が皇城地下の廟へと治められたとき、皇国の黎明は終わり、歴史が始まったのである。

そして、話は戻る。

先の皇都奪還戦の直前、国民議会は四龍公からの協力要請に応え、貴族議会と共にレクティファールの摂政就任を認める声明を発表した。

結果、レクティファールは国民の総意に近い形で摂政に就任することが出来、以降の国家運営は今上皇王のそれよりも余程円滑に進んだ。皇都に凱旋するよりも先に北へ向かい、帝国軍と相対することが出来たのもこのときの両議会の声明に拠るところが大きい。

だが、両議会の声明を以て摂政に就任したと国民に認識された以

上、今後の国家運営にはある程度の期間両議会の後ろ盾が必要になる。

カールに課せられた使命とは、その後ろ盾がレクティファールの考える戦後政策に悪影響を与えないようにする、その一点にあった。

だが、国民議会にどれだけ働きかけようとも、カールが求めるような結果は得られない。

国民議会に対する幾度目かのアプローチの末、彼は確信した。国民議会の中に明らかに自分の動きを妨害している存在がいる。

それも、自分の影響力に対抗できるだけの力を持った存在が。

彼がそんな対抗者の存在を確信した翌日、事態は急変した。

如何にして対抗者に相対すべきかと思案を巡らせていた彼の下に、件の対抗者から面会の申し出があったのだ。

完全に主導権を握られている。カールはときに慎重過ぎると他者に評される自分の動きの鈍重さを呪いながら、その申し出を受けた。

相手が指定してきた面会場所は、皇国議会議場に程近い、小洒落た酒場であった。

完全会員制のその酒場は、その立地条件もあって皇国議会の議員たちの密談場所として頻繁に使用されていた。

かくいうカールも幾度か利用したことがある。いずれの場合も、その密談はカールが望んだ結果になった。

しかしこのときだけは、カールも最悪痛み分けに持ち込めれば良い、という考えで会談に臨むことになる。

酒場に入り、カールはすぐに二階の個室へと案内された。このとき彼は自分の名を名乗っていない。

議員御用達の酒場だけあって、従業員は議員総ての顔を憶えているのだ。

完全防音の個室に通されたカールは、そこに予想していた通りの人物の姿を見た。

「――――キャベンディッシュ」

その人物は、カールの姿を見ると席を立ち、深く一礼して答えた。

「お久しゅうございます、リンドヴルム公」

痩せぎすの躯体を黒い背広で覆い、白髪の目立つ頭を整髪油で撫で付けた中年の男。

顔を上げると、そこには柔和な笑顔と鈍く蝋燭の明かりを反射する片眼鏡（モノクル）。

黒い瞳と黒髪は、イズモ地方出身者の特徴を色濃く示していた。

キャベンディッシュはカールに席を勧めると、食卓の上に置いてある呼び鈴を鳴らした。

この呼び鈴は完全防音の部屋でも使えるよう、特定周波数の魔力波を発生させる魔道具だった。呼び鈴が発した魔力波を受けた親機が、別の場所で鳴動している筈だ。

「酒と肴は適当に頼んでおきましたが、構いませんか？」

「構わん、毒酒でも儂には効かぬからな」

「はっはっは。なるほど確かに、公を害することは並大抵の苦労ではないでしょうな」

キャベンディッシュは声を上げて笑いながらも、その瞳から知性を消すような醜態は見せなかった。

笑みで隠されているその瞳に狩猟者の眼光を宿らせた男の本質を、カールは知っている。

「国民議会最大派閥の首領がこの時期に儂を呼び付ける。さぞ面白い話を聞かせてもらえるのだろうな」

カールは革張りの椅子に深く腰掛け、食卓の上に置いてあった硝子杯を手に取った。

匂いを嗅ぎ、それが水だと分かるとそれを一気に飲み干す。つまみらしき揚げ菓子を口に放り込んだ。

「下らぬ話であれば、すぐに引き揚げるぞ」

「いやいや、とんでもない。お忙しい公を招待したのです。土産の一つにもならぬ話をする筈がないでしょう」

「どうかな、卿は議員になる前から享楽的な面がある。殿下の足元を掬うことに面白みを見出しても、儂は驚かん」

お前が自分の邪魔をしていることには気付いている、と暗に示したカールのその言葉にさえ、キャベンディッシュは笑みを崩さない。

恫喝にさえ聞こえるカールの言葉は、キャベンディッシュにとってまさしく予測の範囲内であった。

彼は余裕を見せたまま、カールの空けた硝子杯に水差しから水を注いだ。

「殿下のお考え――――貴族軍の解体と、正規軍、近衛軍の増強でしたか。ふむ、結構なことだと思いますよ」

「ならば、何故だ」

何故、自分の動きを妨害する。

キャベンディッシュは、その問い掛けに笑みを深めた。

「それだけではありますまい、殿下のお考えは」

「――――――――――」

カールは硝子杯を持ったまま、キャベンディッシュを見る。

数秒間無音の間が続いた後、ノックの音と共に初老の従業員が酒と肴を持って現れた。

キャベンディッシュがそれを受け取り、従業員に小さな袋を掴ませる。

ちゃり、と金属の擦れる音がカールの耳に届いた。

従業員は深く一礼すると、個室を後にした。

「――――高いチップだな」

「妥当な対価ですよ。まあ、貴族の皆々様には、安全な会話というものの価値がお分かりにならないかもしれませんがね」

国民議会議員は六年でその席を追われるのだ、小さな傷も致命傷になりかねない。

キャベンディッシュはそれをよく知っていた。

「我々は来年に選挙を控えているのです。国民議会に再選はありませんが、殿下の覚えが目出度ければ準男爵以上の貴族として貴族の末席に座ることも可能でしょう」

そしていずれは、貴族議員となることも出来る。

キャベンディッシュが誇らしげに語る未来図をカールは一笑に付した。

「――――ふん、卿らしくもない。そんな幻想は成り上がりの商人議員が考えることだ。まさか、卿はそんなものに成り下がりたいのか？」

「ふふ……やはり分かりますか。しかし、こんなくだらない幻想でも、一部の議員に与える餌としては十分です。そして餌を与えてや

れば、彼らは容易く我が意に従うもの」

キャベンディッシュは硝子の瓶に入った琥珀酒を硝子杯に注ぐと、それを一気に呷った。

「貴族には分からない、泥臭い政争こそが我が国民議会の裏側。殿下はいつそれを知るのでしょうね」

「――――すぐに気付くだろう。あの方は、そういうことに聡い」

カールは自ら注いだ琥珀酒を、嘗めるように味わう。

上等な琥珀酒らしい、芳醇な香りが口一杯に広がった。

「もしかしたら、既に気付いているやも知れぬ。摂政就任のとき、敢えて卿らに声明を出させたことを考えれば、無茶な考えでもあるまい」

「――――なるほど。しかし、公がそれ程までに心酔するとは、やはりレクティファール殿下は面白い方のようですね」

キャベンディッシュは硝子杯を食卓に置くと、懐から一通の封筒を取り出した。

封蝋はなく、白い封筒の口は開いたままだ。

「うちの者が、面白い情報を掴んできましてね」

黒い瞳が、カールの金瞳をじっと見詰めている。

そんな視線を露程も感じていない仕草で、カールは封筒を手に取った。

そして封筒に触れる直前、カールはキャベンディッシュを見ずに呟く。

「――――忠告しておく。鼠をあまり派手に動かすな。うっかり踏んでしまっても、文句は聞かぬぞ」

「構いません、鈍重な龍に踏まれる鼠に用はありません。むしろ処分代が浮いて助かります」

「――――――――」

本気なのだろう。

キャベンディッシュの表情は変わらず、笑顔のままだ。しかしそ

の笑みの中に、鋭い刃が隠されていた。

カールは目の前の男が持つ実利主義者としての顔を思い出し、しかし何の反応も示さなかった。皇国議会の片割れを支配する男だ、凡愚である筈もない。

実権皆無の皇国議会とはいえ、議員に与えられる名誉は計り知れない。

貴族議会こそすでに貴族に列せられた者たちが籍を置くだけだが、国民議会はただの平民が貴族に成り上がる数少ない機会の一つだ。議員として皇王の目に留まれば、議員となったときに与えられる勲爵士――上級士族或いは下級貴族として扱われる身分――以上の地位を得ることも夢ではない。

事実、国民議会を主導して皇国内鉄道網再整備事業を成功させた鉄道侯マウリッツなど、その称号の通り侯爵の地位を与えられた。現在でもマウリッツの家は続いており、今では皇王家に続く皇国旅客鉄道株式会社の大株主だ。

それだけの栄達が可能である国民議会議員という地位に対し、野心を抱く平民や士族は多い。

軍人として、軍で栄達するには才能が必要になる。

しかし軍才は誰にでもあるものではない、ならば別の道でと考えたのだろう。

カールとしては理解出来ない考えだが、それこそ彼らはどんなに後ろ暗いことをしてでも議員の椅子に座ろうとする。それはある意

味才能だが、そのような行いをして議員としての任期を全う出来た者はいない。少なくとも、カールはそのような人物を知らなかった。

そして目の前の男は、それらの手段を行使しながらも最後の一線で踏み止まる才能を持っている。

非合法な手段を合法化し、合法的な手段を限りなく非合法に近付ける才能。

議員になってから二年で議会の過半数を自分の派閥に引き入れた実力は、そんな才能によって支えられているのだ。

彼と敵対した議員の内、不名誉な理由で議員の職を辞した者は片手の指では足りない。

しかし、それが無実の罪で職を追われたのかというと、そうではない。カールも裏を取り、何度も確認している。キャベンディッシュは、それが己の美学であるとでも言うかのように、決して偽りを弄さない。総て真実のみで敵手を降してきた。

だからこそ、カールは敵対することも多いこの男を、心のどこかで信用していた。

故にキャベンディッシュが差し出した封筒の中身を確認し、深く嘆息した。

そこには、レクティファールが戦後計画として、同時に来るべき次の争いに備える戦前計画として進めている政策の概要が記されていた。

カールもその起草者の一人だ。だから、この情報が漏れていることを嘆き、溜息を吐いた。

「――――これを知ってどうする？　まさか、反対するとでも言うのか」

「まさか！　殿下のお考え、誠に結構だと思います。ただ、そこに計上されている予算を国庫から拠出することには……」

「反対なのだろう。確かにこの予算、今の政府には出せまい」

「将来的にも、です。その計画以外の復興にも莫大な予算が必要になる。来年、再来年の予算も既にぎりぎりでしょう。国債の発行をこれ以上増やすことも出来ません。何より、国債を購入してくれる筈の国民が貧しさに喘いでいるのです。まあ、殿下が望むなら、国民は『国と殿下の御為に』と買うかも知れませんが」

「ふむ、卿は財務庁にでも入りたいのか？　見事な金勘定だ」

「議員引退後の再就職先としては魅力的ですね。ただ、議員経験者は二度と公職には就けません。軍なら、また別なのでしょうが」

彼はカールから封筒を返してもらうと、それを懐に仕舞った。

これでこの封筒の価値は無くなったと彼は考える。並の人物であれば以降も同じものを使って相手から譲歩を引き出そうとするが、キャベンディッシュはそれをしない。

強い切り札ほど一度で使い切るのが、彼の信条だった。

カールはそんなキャベンディッシュの思い切りの良さを知っており、同時に感心していた。人は一度成功した方法に固執するようになる。それがやがて自分を滅ぼすとも思わず、愚かなほどに過去の成功を懐かしむものだ。

「『五カ年計画』――――殿下はこの五年で皇国の傷を癒し、再び来る戦禍に備えようとしておられる。都市の建造による雇用創出。軍備の再編による国軍の質の向上。外交の見直しによる新たな国防計画の策定と貿易の拡大。国内の安定化と秩序回復。いずれも猶予はない、卿にも理解できよう」

「ですが、その計画に必要な予算は我が国の年間予算の一割に達します。それが五年も続けば、国民は政府や殿下を恨むようになりましょう。国を守るための計画が、国を滅ぼすのです」

「――――それを防ぐために、我ら臣下がいる。殿下の計画は確かに常識外れだ。『ウィルマグス』の要塞化は兎も角、あと二箇所新たに都市を建造しようというのだからな。国内や国外から貴賤を問わず有望な若者、学者を受け容れる『学究都市』、あらゆる国家の船舶が立ち寄るだけの魅力を持った貿易拠点にして、重戦艦さえ建

造可能な海軍工廠を併設した『港湾都市』か」

金や資源を小出しにしても効果は薄い。

ならば、莫大な資金と資材を纏めて投入するべきだ。

レクティファールは深い傷を負った皇国を癒すため、自分にしか出来ない方法を選ぼうとしている。

「それに加えて各都市の再開発も行うとなれば、なるほど確かに国民の熱狂的な支持を受ける殿下にしか出来ますまい。おそらく、安定志向の先代陛下にも同じ策は実行出来ないでしょうな」

「殿下は皇国を良く知らぬ。だからこそこれまでの習慣にも権益にも頓着しない。殿下の方法は確かに、今までの方法で確実な益を得ていた者たちの反発を買うだろう。卿のような者たちが現れることも、承知の上だった筈だ。――――実を言えばな、殿下はこの計画の予算を国庫から出そうなどとは考えておられなかったのだ」

カールにとっても、おそらくレクティファールにとってもキャベンディッシュは味方ではない。

キャベンディッシュはいっそ清々しいほど、自分以外の総てを味方と考えない男だ。

敵か自分かそれ以外か、彼の世界ほど分り易いものはないのかも

しれない。

キャベンディッシュはカールの硝子杯に琥珀酒を注いだ。

「ほう、では連合や帝国からの賠償金、そして内乱の罪で取り潰される貴族の資産でも使いますか」

「それも投じるが、予算の半分は――――」

カールは琥珀酒を一口含み、ニヤリ、と笑った。

「――――皇王家の資産だ。キャベンディッシュ卿」

皇王家が建国時から貯め込んだ資産が幾らなのか、実は皇国の謎の一つとして国民の話の種になることは多い。

貴族や国内の資産家の資産は非公式ながら幾度か公開されているが、皇王家の資産は一度も公開されたことがないのだ。

そもそも、皇王家の資産は総て皇王個人の資産である。

皇王家が国民から得た税金を自らの資産として金庫に入れたことがないことは、皇国の国民なら常識の一つだ。だからこそ、皇国政府が皇王家の予算について口を出すことは出来ないし、法を順守して金を稼ぎ、法に定められた税を国民と同じように納めている以上、どれだけ大きな資産があってもそれを批判することは出来ない。

ここで一つ面白い例を挙げる。

皇都と呼ばれている島がある。実はこの島、皇王家の所有物だ。私有地と言ってもいい。

何故このようなことになったかというと、建国してしばらくの頃、皇都を大陸最大の要塞都市として整備するために島の地上地下を問わず大規模な工事を行う必要が出てきた。

しかし当時の島には多くの地権者がおり、総ての地権者と交渉していてはいつまで掛かっても皇都という要塞が完成しない。そこで当時の第二代皇王が取った手段が、総ての土地を皇王家が買い上げるという手段だった。

このときも、莫大な予算が皇王家の資産から支出された。既に小規模国家の国家予算に匹敵すると言われた当時の皇王家の資産の半分が飛んでいったというのだから、その金額は推して知るべし。しかし、その英断があってこそ皇都は誰の反対を受けることも無く開発され、整然と並べられた街並みが観光客の目を楽しませている。

しかし、実はその整理された街路そのものが魔法陣になって都市防衛機構の一端を担っているのだから、この皇都が要塞都市である事実は微塵も揺るがない。

今皇都に住んでいる者たちは、その土地を皇王家から借りている。それは公民の別なく、行政官庁ですら一〇〇年契約で土地を借りているに過ぎない。

この例を挙げるまでも無く、実は国の持ち物だと人々に思われているものが皇王家の所有物だったりするのが皇国の面白いところなのかもしれない。

「より正確に言うなら、予算半分と同額の国債を皇王家が購入するということだ。皇王家は皇国の親のようなものだが、いつまでも親の脛を齧っている訳にもいくまい。まあ、利子もごく僅かの一〇〇年後に完済する気の長い特別国債だがな」

「――――――――よく、皇王府が頷いたものですね」

「殿下が打診したら、『では出しましょう』の一言だったらしい。皇府殿は国民の歓心を金で買えるなら安いものというお考えだからな」

「『平和が金で買えるなら、これ以上安い買い物はない』とは、私が大学にいた頃講師としておいでになった皇府殿のお言葉です。あの方は金で買えるものほど安いものはないという考えの持ち主です

よ」

拝金主義者と陰口を叩かれることもある皇王府総裁だが、金で買えるものは安い買い物と言って憚らない。彼女にとっては、逆に金で買えないものほど高いものはないということなのだろう。

民に金をばらまくのではなく、仕事を与える為ならば喜んで協力すると彼女は言う。ばらまいた金は一時的な消費にはなるが、仕事で得る報酬ならばその仕事に就いている限り続き、彼らの生活費になる。継続的に金を使う民ほど良い民はいないのだ。

金は使えば使うほど、回れば回るほど価値が上がる。

金持ちの金庫に眠る一〇〇ギルの金は端金、小童が菓子を買う一〇リッツの小遣いは生きた万金なのだ。金額がどうとかではない。為政者にとっては、後者の方が何倍も価値がある金だった。一〇リッツでも、駄菓子屋が問屋に支払い、問屋が生産業者に支払い、生産業者が労働者に支払い、労働者が子供に与えるという風に世間で回ればいずれは一〇〇ギルの価値になり、一〇〇〇ギル、一〇〇〇〇ギルになっていくのだから。

「――――――――……」

キャベンディッシュは琥珀酒に映る自分の顔を見た。

いつもと同じ、貼り付けたような笑顔が崩れそうになっていた。

「半額でも皇王家が払うなら、どうだ。国民議会は反対か」

「――――反対すれば、選挙で負けましょう。皇王家は民を救済しようとしているのに、議会は反対すると言うのだから」

もしも反対したならば、彼の率いる派閥が新たに議員候補を立てたとしても、次の選挙では負けるだろう。

摂政レクティファールは現段階で皇国の民に熱狂的な支持を受けている。その政策、しかも自分たちを助けようとして摂政が進めた政策に反対する派閥が民の支持を得られる筈もない。

その派閥がたとえ将来を見据えて反対したのだとしても、だ。

「公よ。殿下はお分かりにならないのでしょうか。このような過保護を続けていてはいつしか国は堕落すると」

「そのように考えている者が多勢ならば、そう殿下に申し上げよ。しかし、卿らの派閥が恐れているのは先の内乱に何の手も打てなかった議会の権威失墜。このまま行けば、次の選挙は苦しい戦いになろう。しかし、ここで殿下を上手く操り、先の摂政就任支持の声明を全面に押し出して議会の威信を守ることが出来れば、次の選挙はまだ戦い易い」

議員でいる間に不当な利益を得ては職を追われ、人々から蔑まれることになるが、議員を終えたあとならば別だ。

議員を退いたあとに報酬を受け取る約束で、特定の個人や団体に有利な政治活動を行う議員がいない訳ではない。発覚した場合は勿論刑罰の対象となるが、現役の頃に較べれば抜け道は多いからだ。

特に、勲爵士の地位のまま任期が終わった議員にそのような者は多い。

「――――――」

キャベンディッシュの本心などカールには分からない。

彼が愛国者であるのか、ただ地位と名誉を求める俗物なのか、それとも別の何かなのかすら分からない。

ただ、彼という存在がカールの主君となった若き摂政にとって味方でないことは確かだ。

しかし敵ではない以上、カールはキャベンディッシュを主君の敵として看做すことは出来ない。敵でないなら、みだりに争う意味も無い。

「キャベンディッシュ、卿がどちらを選んでも殿下は己の道を進むだろう。先の内乱で議会を利用したことは、ただ戦いを有利に進めるための方法の一つだ。連合を退ける為には、殿下が皇国の民に支

持されていることを示すことが一番確実なことだったからな」

「――――民の国であるかの国ならば、民衆の声を軽んじることは出来ませんからね。なるほど、我々も殿下に利用されたクチですか」

「お互い様という奴だろう。先頃は殿下を利用した卿らが利用されただけ、次は知らん」

「忠臣とも思えぬ言葉ですね。殿下に知られては困るのではないですか」

キャベンディッシュの言葉に、カールは珍しく曖昧に笑う。

いつも顔を顰めているようなカールだが、このときばかりは笑みを浮かべずにはいられなかった。

「忠臣ではない。ただ、約束させられただけだ。殿下か儂のどちらかが死ぬまで続く約束をな」

「――――左様で。本当に、貴族の方は気の長い約束が好きですね」

「確かに道楽のようなものかもしれん。明日の命も知れぬ戦いを生業とする我らにとってはな」

貴族議員であろうと、士族議員であろうと、国政に関わる彼らには市井の人々とは比べ物にならない責任がある。

議員として報酬を得て、人々に尊敬されるだけでは議員は務まらない。

ときに後ろ暗いことも行い、派閥争いに勝ち、それでようやく皇王に己の意を伝えるだけの力を得る。

議会は皇王に法案を上奏する権利を持つが、それ以外にも現職議員は皇王にいつでも謁見を求める権利を有している。それを受けるかどうかは皇王次第だが、直に自分の言葉で意見を上申出来ることは大きい。だからこそ、多くの人々は議員に近付こうとする。

皇王に近い議員に近付くことは皇王に近付くこと、と判断して。

しかしだからこそ、彼らは多くの敵を持つ。

現職中、或いは引退後に暗殺された議員は一〇〇人を超えている。

しかも、死したあとに不名誉な扱いを受けることも珍しくない。後ろ暗い理由があったから殺されたと噂され、その名誉は傷付けられる。

軍人のように華々しく散るなど、議員には無理な相談だ。

「命懸けの戦いが一つではないことを、殿下に教えることも必要だ

と儂は思う。だから卿の好きなように動けばいい。それが皇国の益にならぬと判断しない限りは、儂は止めるつもりはない」

「――――――――よろしいのですか、公に気付かれぬよう、一度で総てを決める戦いをするかも知れませんよ」

「一度で倒されるほど、儂も殿下も柔ではない。もしも一撃で討たれるようならば、それは実力が足らなかっただけのこと」

生き残るだけの理由がある者は、どんな死地からでも生き延びるものだ。

あのパラティオン要塞戦を生き残ったレクティファールは、次は政の戦場で生き残らなくてはならない。

生き残らなければ、この国を導けない故に。

「卿が敵でないことを祈っている」

カールはそう告げると、黙り込んだキャベンディッシュを残して酒場を出る。

このときのカールはまだ知らなかった。

自分の言葉通りにかの男が敵に回ることがついになかったことを、同時に最後まで味方になることもなかったことを。

彼はその夜、あの娘の選んだ男がこの皇都でどのような戦いぶりを見せるのか、ただそれだけを肴に酒を飲んだ。

摂政凱旋。

その日から、再び物語は動き出す。

第二話「嫉妬＋後悔＝自責、そして動き出す現実」

皇都イクシード内、星天宮の皇城の一室に小さな影がある。

影は窓際の椅子に座り、分厚い、赤茶色の装丁の本を膝に乗せていた。

「――――――――」

一枚、ページを捲る。

「――――――――」

今のこの国には、勝利者と呼ばれる男がいる。

内乱を速やかに鎮め、外敵の侵攻を阻んだ上に返す刃で敵国に楔を打ち込んだ。

その手腕は諸外国に衝撃を与え、これまではその特殊な政治体系に忌避感を持つが故に、この国に対して敵対とは言わないまでも否定的な方針をとっていた国々までもがこぞって大使や公使をこの式典に送り込んできた。

彼らは有形無形の供物を携え、公的には無位無官の自分にさえ遜った態度を見せている。

彼らが何を求めているのか、それを察するのは容易い。

あの電撃的な戦いを演じた男が、その矛先を自分に向けることが無いよう願っているのだ。そして出来るなら、その鋒を自分と敵対する存在に向けて欲しいと思っている。

外務院総裁からそれとなく聞いた話に拠れば、彼の帰還前に既に我が国との安全保障条約の締結を望む国家が相当数現れているということだった。

それが小国であればあるほど、特に彼らの必死さは外務院総裁から見ても悲痛なものであったという。

彼らは自国の安全保障を自国だけでは購えない。大国と接した国境を持つ国は特にそうだ。

彼らを守っているのは、単に手に入れる旨みが少なく攻める理由がないという事実のみ。

歴史を見てみれば、希少な鉱石を始めとした希少資源が国内で産出した小国は、半ば無理やり難癖を付けられてその主権を侵害されてきた。逆に特筆するような産物や産業がない国は、その国を目的とした侵攻に晒されるようなことは稀だ。ただ、その国家の先にさらに本来の目的があるときのみ、彼らは侵略を受けた。

大国の利己主義に翻弄され、絶えず命の危機に晒されてきた彼ら

が、今回の戦いに時代の潮目を嗅ぎ取ったことは不思議ではない。

特に北と西の国家にとっては、まさに国家の存亡を懸けた一大事だろう。

かの男が奪取し、後の停戦交渉で我が国の国土となった北の都市『ウィルマグス』とその周辺地域はこれまでの国境を北に押し上げ、その国境に隣接することとなった幾つかの小国を我が国寄りに方針転換させた。

連合が引き揚げたあとの西も、建前上は皇国という共通の敵を失った連合参加国が再びお互いを牽制し合う状況に変わり、こちらもまた皇国に擦り寄る国家が現れている。

相手が小国であれば、その国家には申し訳ないが大した手間はない。

これまでと同じように、ほぼ習慣となった遣り取りで諸々の条約を締結してしまえば良い。

しかし、今外務院に持ち込まれている似たような案件の内、二つだけはこれが適用出来ない。

なにせ、それを持ち込んできた国家は、片や皇国の数倍に垂んとする国土と皇国のそれを上回る国力、そして大陸最強の陸軍力を持った大国、片や国力こそ皇国に劣るものの、他国に『栄誉ある孤立』と称される非同盟半鎖国政策を持ち、その上でアルマダ大陸最大規模の海軍を保有してその存在を堅持し続けている海洋大国だった。

彼らはかの男との個人的繋がりを国家間の利益に結び付けようと、

外務院の職員たちを不眠不休の超過労働に追い込んできている。

前者とは明確な国交がない故に臨時の外交官を派遣し、後者は相手国に駐在中の大使が交渉の任に当たっているが、共に中々侮れない敵手のようだ。

出来るなら、かの男の帰還までにある程度形にしておきたかったが、本人に色々確認すべきこともある。この国の外交権は、たった一人に握られているのだから。

「――――全く、面白いったら無いわね」

呟き、読んでいた本を閉じると、彼女はふわりと浮かび上がる。

窓から差し込んだ光が、彼女の姿を映し出す。

「どいつもこいつも、てんやわんやで余裕のないこと」

濃い緑の髪と、同じ色の瞳、そして、子どものような小さな体躯と薄紫の特徴的な翅脈を持つ三対六枚の透き通った翅。

――――妖精。

彼女はそう称される一族の者だった。

幼少の頃、彼女の産まれた一族と、それと交友のある人間種の一

族との取り決めで“取り替え子（チェンジリング）”となり、以降ヒトの社会で暮らし続けてきた。

既に二〇〇〇年、この国を見詰め続けている。

昔は気楽な立場であったが、いつの間にか要職に就けられてしまった。それでも暇を潰すには都合がいいということで、今の仕事はかれこれ四五〇年程度続けている。

これまで、かの男の前任者三人に仕え、内一人は早々に見限った。

これで四人目となるが、さて、どうなるだろうかと彼女は思う。

「――――あいつみたいな阿呆、もう二度と現れないのかなぁ……」

人々が初代と呼ぶ男。

彼女がヒトの社会に放り込まれた頃に出会った男。

初めて、自分の番として意識した男。

そして、自分を置いてさっさと逝ってしまった男だ。

「まあ、いいか」

くるりと部屋の中を一周し、彼女は扉に向かう。

扉を開けて振り返ると、そこにはいつか、この部屋で自分を膝の上に乗せて物語を読み聞かせてくれた男の幻が見える。

太陽のような笑顔と、真っ直ぐな気性。

馬鹿だ馬鹿だと仲間に言われ続け、それでもこの国を創り上げた。

多くの男女が彼に惹かれた。

それは友としてであり、想い人としてであり、そして連れ合いとしてであったが、彼女が自分の内にあるもっとも大きなそれがどれであるのか気付いた頃には、もう彼は逝く直前であった。

自分の内の想いに気付き、少し大人になった彼女は、それでも出会った頃のままの少し馬鹿な妖精の振りをして彼を見送った。

彼を最後に笑顔にしたのは、彼女だった。

いつも通り馬鹿なことを言い、彼を笑顔で逝かせた。

それが、それからの彼女の誇りになった。

やがて、彼と共に戦った人々が一人、また一人と旅立った。

ある者は世界を見に、ある者は故郷に帰り、ある者は死出の旅に。

いつしか、この皇城には彼女以外に彼を直接知る者はいなくなった。

そんな彼女自身も、生まれたばかりの頃のことなど今は大して憶えていない。

ただ、彼の最後の笑顔だけが心に焼き付いて、色褪せずに残っている。

「じゃ、行ってくるよ――――」

口の中だけで彼の名を呼び、彼女は扉を閉めた。

向かう先は星天宮の正門。

星天宮の新たな主を、皇王府総裁として出迎えるために。

色とりどりの紙吹雪が舞い、国家が斉唱される中、レクティファールは白い礼装姿で鎧を纏った軍馬の上にいた。

彼を取り巻く近衛軍の将兵の数名が掲げる国旗と皇王の紋章旗、そして近衛軍の軍旗が、誇らしげに紙吹雪の空に翻っている。

王橋を渡り、皇都外環線の線路を眼下に見ながら、城門を潜って皇都に入った時点で彼の耳は人々の歓声と歌声に支配されており、既に正常な聴覚を維持しているのかすら分からない状況だった。

今レクティファールがいるのは皇都の目抜き通り。正門から皇城へと向かう皇都で一番幅員の広い大通りは、集まった市民によって埋め尽くされている。手作りの小さな国旗を力一杯振り、市民たちは口々にレクティファールの名を呼んだ。

市民の声に応えるようにレクティファールは視線を巡らせ、手を掲げた。

そして市民の間を連鎖する万歳の声。

五〇〇万の市民が彼を讃え、狂ったように叫んでいる。

生き残った。死んでいない。まだ、生きている。

それだけで彼らは喜ぶのだと、レクティファールは身を以て理解した。自分の名を讃えるのは、自らの生を実感する一つの手段に過ぎないのだろう。

死にたくない。だから、生きていることが嬉しい。

生命として当たり前のことだが、人々は死を目の当たりにしないとそれに気付けない。

生きていることが当たり前になってしまったから、死に鈍感になってしまっていた。

そんな彼らに生きることの喜びを教えたのは、二世代の皇王。

今では名前さえ出すことが憚られるようになってしまった今上皇王と、市民に「万歳」と讃えられる次期皇王レクティファールの二人だった。

両者の扱いはまさに天と地。

今上皇王と同じ名前である市民は神殿に乞うて聖名を授けて貰ってそれを名乗るようになり、逆にレクティファールという名はここひと月で産まれた新生児の男子に付けられる名として最も多く、名前総てを頂くなど恐れ多いという理由で一部だけを貰うという親もいる程だ。

国主という同じ立場でありながら、片や名前さえ葬り去られ、片や代理の立場でありながら歴代の皇と同じだけ敬われ、慕われている。

その理由は何か。

簡単なことだ。認められたか、否か。それだけの違いに過ぎない。

才気に溢れ、人々に認められようとした男と、ただ流され、必要なとき必要なだけ必要なことをやっただけの男。

皇という立場に掛ける想いと、この国に対する想いは、間違いな

く前者の方が大きかった筈だ。

しかし、認められたのは後者。

認められようとは一度も考えなかった男だった。

「――――それが運だとは、思いたくないけれども……」

万感の想いを込めたその呟きは、人々の歓声の中であっさりと掻き消される。

ほんの少しだけ違った道の先、そこには天国と地獄が広がっていたということなのだろうか。

それ個人の想いではなく、状況こそが人の生き死にを決めるということなのだろうか。

皇都に入る前、ミラ平原を通過している時点で皇都に続く街道は人々に埋め尽くされていた。比較するのも馬鹿らしい戦力差をひっくり返し、帝国領に逆侵攻した英雄を一目見ようと国中から市民が集まっているのだと、ミラ平原に入る前に近衛軍中隊の中隊長がレクティファールに話してくれた。

君主と共に凱旋するということがどれ程軍人にとって名誉なことなのか、彼はレクティファールが困った顔をしていることにも気付かず延々と語り続け、副官に窘められてようやく正気に返った。

自分の行動を振り返って恐縮する中隊長を宥め、レクティファー

ルは馬上の人となったのだ。

そうして馬に揺られて幾時間、彼は大歓声の中をゆっくりと進んでいる。

隣に陸軍の第一種礼装を纏った女性参謀を伴って。

「リーデ、まだ慣れませんか」

「――――は、はい。流石にこうも人の目が多いと……」

彼女は要塞を離れられないガラハの名代として、そしてレクティファールと共に戦った勇気ある側妃候補としてこの式典に参加している。

同じ妃候補であるメリエラが傷に負担をかけないために馬車での移動となったことで、急遽彼女がレクティファールの随伴者となることになったのだった。

予定では式典後に側妃となることを正式に発表する筈だったのだが、既に陸軍の女性参謀が側妃入りするという噂が流れていることもあり、改めて発表する必要もないかもしれない。

時折、「妃殿下万歳」の声も聞こえてくることもあるので、リーデの顔は先程から真っ赤に染まったまま元に戻らない。あっちにふらふら、こっちにふらふらと視線を彷徨わせ、全力で羞恥心を抑え込んで小さく手を振っている。

もう少し大きく振らないと遠くの人には見えないのではなかろうかとレクティファールは思ったが、年上の女性が必死になって羞恥心と戦っている最中に言うことではないだろうと自重した。

それでも微妙に生暖かい視線をくれてしまうのは、まあ、仕方の無いことなのだと思うことにする。

「殿下……その……馬車に入っても……」

「駄目でしょうね。ガラハ中将の名代でもありますし」

「あうぅ……」

実のところ、先の紛争の英雄ガリアン・アーデンの娘が皇太子の寵を受けたことも市民の熱狂の一因となっていた。

英雄を父に持ってはいるものの一介の士族であり、立場としては平民とさほど変わらないリーデ。そんな彼女が新たな英雄であるレクティファールと想いを交わし、こうして側妃として星天宮に上がることはごく普通の市井の女性にとって舞台で演じられる物語のようにも思えるらしい。従って彼女たちがリーデに憧憬と嫉妬の入り交じった視線を向けることは、ある意味では仕方の無いことだった。

ヒトとは夢を見る生き物だ。

いつかきっとと高い所を見上げ、そこに立つ自分を空想する。

皇太子や姫君という立場は容易く手に入れることは出来ないが、リーデのように一介の士族から皇太子の妃に登ることは不可能ではない。そう、不可能ではないのだ。

彼女たちはそれに気付いたからこそ、リーデに憧れと妬みを向ける。

自分はそこに立つことが出来ないと思っているのなら、妬みなどという感情が湧くことはない。自分にも可能性があるからこそ、彼女たちは嫉妬するのだろう。

「――――殿下、すごく見られている気がします……」

「見られていますねぇ……間違いなく」

「で、殿下は平気そうですね。緊張しないコツでもあるのですか？」

リーデとて軍人だ。それも参謀という職にある。故に、人の前に立つことには多少慣れているつもりだった。

だが、そんな自負などちっぽけなものだったらしい。

一〇〇万単位の市民を前にして堂々としていられる度胸など、彼女には無かった。

それに対してレクティファールと言えば、いつもと変わらない表情と態度で市民の声に応えている。まるで緊張など感じていないかのようなその姿に、リーデは密かに感嘆していた。出来るならその秘訣を教えて貰いたい。

だがまあ、返ってきた言葉はある意味予想通りで、全くの役立たずだった。

「――――いえ、どうせ逃げられないだろうからってすっぱり諦めました」

「――――――――――はぁ……」

深い溜息。

会話によってとりあえず気は紛れたが、精神的な疲労感はどっと増した。

彼女は知らないが、レクティファールという男は基本的に人前で緊張感を抱くような細い神経の持ち主ではない。いや、神経そのものは細いのかもしれないが、細いだけで弱い神経ではない。その諦めの良さで、緊張感を覚える前にいつもの落ち着きを取り戻してしまうのだ。勿論例外もあり、それは異性関係に関することなのだが、とりあえず今のリーデには何の参考にもならないし、今後も参考になることはないだろう。

「ほらリーデさん、あそこで子どもたちが手を振ってますよ」

「あ、はい」

レクティファールの声に視線を動かしてみれば、確かに彼の視線の先で子どもたちが手を振っている。衛視隊によって張られた規制線のすぐ後ろに立ち、近くに引率らしい大人の姿があることから、どうやら学校の授業の一環としてこの凱旋式典を見にきたらしい。

子どもたちは行進の何処に誰がいるかなど分かっていないだろう。引率の教師が説明しようとしても、この喧騒ではおそらく聞こえない。

そのため、子どもたちは誰彼構わず手を振り、この盛大なお祭り騒ぎを楽しんでいるようだった。

手に手に手旗を持ち、力一杯振っている。

「あ、お姫様だっ！」

そんな子どもたちの一人、ぴんと耳の尖った女子がリーデを見て声を上げる。

白い服を着た人が皇太子、つまり皇子様だということを覚えていた彼女は、その隣にいるリーデをお姫様と呼んだのだ。何より軍服

姿のお姫様は、皇国では別段珍しくない。

彼女の声に釣られたらしい子どもたちが、一斉にリーデに視線を向ける。

「お姫様――――！」

「キレ～～！」

「きゃあ～～！」

「わたしも眼鏡かけようかなぁ……」

そこまでは何とかリーデの耳にも聞き取れたのだが、さらに発生源が増えてしまうともう何を言いたいのかさっぱり分からない。女性というのは、幼くとも姦しいらしい。

それに対し、男子はリーデの隣にいるレクティファールに注目していた。

彼らにとっては初めて目の当たりにする本物の英雄ということになるのだが――――

「え、あいつが皇子様？　冴えねぇやつ～～！」

「こら！　皇子様になんてこと言うんだ！」

「だって、弱そうだぜ？　父ちゃんより背小さいし」

「だからって……」

こっちは中々に厳しい意見だった。

女子とは違い、はっきりとした口調の子供の声ということもあって、レクティファールの耳にはそれらの意見が何故か良く聞こえた。思わぬ意見に内心肩を落とすレクティファール。

自分が威風堂々という言葉から程遠い容姿をしていることは自覚していたが、子どもたちの正直な感想は流石に堪えたらしい。本音としては、出来ればもう少し優しい言葉で表現して欲しかったというところだ。

「――――殿下、笑顔が引き攣っています……」

「――――君こそ」

二人はお互いの顔を見詰め、苦笑いを浮かべる。

双方共に、こういった催し物の主役になることは考えていなかった。

人生とは思わぬことが起こるものだが、リーデはレクティファールと初めて顔を合わせたときには自分がこんな立場になるとは少しも考えていなかった。ただ、与えられた役割を果たそうと思っていたに過ぎない。

間違っても、あの頃の彼女は誰かに心を許すようなことはなかった。しかし、ただ自分を保とうとしているうちに、いつの間にか深い関係になってしまっていた。

リーデにはそれが信じられなくもあり、恥ずかしくもある。

今まで誰にも見せなかった部分を曝け出してしまったのだから恥ずかしがる必要もない筈なのに、こうして人々に自分の新しい立場を祝福して貰うと、やはり恥ずかしさというものは湧き上がってくるものだ。

嘗ての彼女であれば、こんな風に熱狂する人々を冷めた視線で眺めていただけだろう。自分は彼らとは違う、彼らはどこかおかしいのだと決めつけて。

しかし、今なら彼らの気持ちの一片くらいは理解出来る。

（ああ……あの人たちは嬉しいんだ……）

だから笑顔を浮かべ、こうして自分に手を振ってくれる。

嬉しいから笑い、嬉しいから歌い、嬉しいから踊る。

普通なのは、彼らの方だった。

いや、どちらも普通で、おかしいなんて何処にもなかった。

彼らは自分ではないし、自分は彼らではない。違うのが当たり前で、違うことが普通だった。

（――――お父さん……お父さんが守りたかったのは、わたしがあんな笑顔を浮かべられる世界だったの？）

自分を『お姫様』と呼んだ子どもたち。

遠きあの日に命を落とした父は、自分があの子どもたちのように笑顔で生きることを望んだのだろうか。

笑顔で出会い、泣きながら別れ、再び笑顔で出会う当たり前の人生。

父は、そんな当たり前が尊いものだとあの戦場で気付いたのかもしれない。

（お父さん――――）

ああ、そうだったのか、と彼女は思う。

自分が何故、父に似たレクティファールを恨み、そして惹かれたのか。

それは、単に自分がそう望んだだけのことだった。

恨みたいと思ったから恨んだ。惹かれたいと思ったから惹かれた。

原因は相手にあったのではなく、自分の心の中にあったのだと彼女は知る。

「――――リーデさん、どうかしましたか？」

自分を見詰め、首を傾げるこの青年の往く先は平坦ではないだろう。

血に塗れ、泥に汚れ、怨嗟でぬかるんだ道を彼は進む。

白の龍姫も、神殿の巫女姫も、そしてあの紅の双子龍も、自分さえも無傷ではいられないと、総てを知った上でレクティファールという男の傍らに侍ろうというのだ。

それに対し、自分はどうだろうか。

軍人として多くの血を見てきた自分はどうだろうか。

参謀の悪癖、現実を客観的に見詰め過ぎて現実を現実と認識出来なくなってはいないか。

自分は自分の意思で、ここにいるのか。

（――――愚問、よね……お父さん）

父が躊躇い無く散ったとは思わない。

心残りも、後悔もあっただろうと今なら思う。

その中には、きっと自分や母のことも含まれていた筈だ。

だから、今ここで父に誓う。

父が守った、愛しき男が守った人々の歓喜の中で誓う。

「わたしは、自分の意思でここにいます」

子として父の背中を追うことも無く、ただ愛しき男の背を見送るだけの女に成り下がるつもりも無い。

自分の意志で、自分の道を、自分の手で切り拓く。

「――？　リーデさん？」

「殿下、ほら前を向いてください。みんなが殿下を見ているんですから、わたしばかり見ていては駄目です」

「あ、はい……」

レクティファールの銀色の瞳が、自分から逸れていく。

安堵と寂しさを感じながら、リーデは背筋を伸ばしてレクティファールと同じ世界を見る。

（お父さん、わたしはあの人と同じものを見て生きていきます）

彼と共に戦うだけの力もなく、疲れた彼を支えるだけの優しさもなく、皇王として政を行う彼の隣に立つことも出来ない自分に出来ること。

それは、同じ世界を見詰め続けること。

参謀として、ただのリーデとして、目を逸らさずに生き続ける。

最後の最後、自分の命か、彼の命が潰える時まで。

集団の中で、レクティファールたちから少し離れた地点を静かに進む馬車がある。

軍馬に牽かれたその馬車は、傷病人を乗せるよう乗り心地を最優先に作られたものだった。

その御陰か、まったくと言っていいほど揺れを感じない馬車の中で、白龍の姫君は沈痛な表情を浮かべていた。

「――――ふぅ……」

外見だけならば既に傷は癒えた。

龍人族であるウィリィアとは違い、生粋の龍族であるメリエラにとってこれまでの療養期間は、外傷を癒すには十分過ぎるものだった。

だが、外見は癒えても身体の内側はそう簡単に癒せない。

特に対龍族に特化した龍人族に与えられた傷は、その龍人族が発

する対龍族魔力妨害波によって治癒が遅くなりがちだ。

力のある龍族ほどその傾向はより顕著で、それは彼らが龍族特有の波形を持つ魔力を身体の維持に費やしていることに起因する。

龍族特有の魔力は龍族が用いやすいよう魔力の周波数、波形を変化させたもので、彼らがその魔力を用いて体内で術式を展開することで、詠唱を破棄した状態でも高威力の魔法を放つことを可能にした。龍族が口腔内から放つ高威力の魔法やブレスの正体はこれだ。

しかし、特有であるが故に旧帝国の創り上げた龍人族には対処されてそれが通用せず、妨害波によって魔力の運動が抑制されることとなった。

外傷が内傷に較べて早く癒えるのは、古の頃、龍族が未だ戦いに明け暮れていた頃の名残なのだろう。完治していなくとも、外見だけでも完全な状態であると敵に思わせればそれだけ生き残る可能性は高くなる。

龍族を相手とする数々の敵とて、完全な状態にある龍族とは出来るだけ戦いたくないのだ。

しかしだからこそ、身体内部の傷というのは厄介だ。魔力の流れこそ通常の状態に戻っているが、傷を負ってからしばらくの間自己治癒力が落ちていたため、傷の治りが遅いという事態に慣れていなかった身体が不調を訴えていた。

なまじ治癒力が高いせいで、その治癒力が損なわれたという状況に身体がついていけないらしい。

それでも他の種族に較べて治りが早いのだから、完全な状態の龍族とはまさに化物ということだろう。

だが、そんな治癒力の高さはこの女性にとって自分を惨めにする要因の一つにしかならない。

情けない。

彼女はただ一人だけの馬車の中で、唇を噛み締めた。

そして前方の車窓を遮る窓掛けを少しだけ開け、御者の背中越しに見える外の光景に目を細める。

「――――リーデ・アーデン……ガリアン・アーデンの娘か……」

小さく、それでも龍族の視力では問題にならない程度の距離に白い青年と、陸軍の礼服を着た女性の姿が見える。

何か言葉を交わしているらしい二人の姿に、彼女の心は波立った。

「くっ……！」

本来なら、リーデのいる場所は彼女がいる筈の場所だった。

騎龍として、未来の皇妃の一人として、あの場所にいる筈だった。

身体中を掻き毟りたくなるほどの怒りさえ、容易に込み上げてくる。

リーデを恨むことは筋違いで、レクティファールを恨むことなど有り得なくて、そして残ったものは自分。

弱かった自分。

龍族としての力に慢心し、天敵である『龍殺し』に圧倒された自分。

未だ復帰の目処すら立たないほどの重症を負ってまで自分に千載一遇の機会を与えてくれた従者に対して、何も報いることが出来なかった自分。

そして結果的にリーデに立場を奪われ、レクティファールの騎龍としての役割を果たせなかった自分。

総て自分が原因だった。

あと少しだけ、父までとは言わないまでもそれに準ずる程度の力さえ持っていれば、あの『龍殺し』にあそこまで一方的に叩かれることは無かった。

聞けば、レクティファールとあの『龍殺し』は一太刀しか刃を交わさなかったという。

つまり、あと少しだけ時間を稼いでいればレクティファールに剣を抜かせることは無かった。

「――――――――」

『ウィルマグス』の病室でレクティファールに啖呵を切ったというのに、未だに自分はあのことを悔やみ続けている。

龍族としての矜持などではない、ましてや皇妃候補の一人として誇りなどあり得ない。

ただ、同じ女としての憎しみだ。

あの戦場の中で、あのとき自分と『龍殺し』は同じ場所に立っていた。

従者が倒れたことで一対一。

お互いに自分以外の要素で勝負が決することのない戦場だった。

しかし、自分は人が言う勇戦奮闘などという言葉が侮蔑に聞こえるほど惨めな敗北を喫した。

他人は、天敵である『龍殺し』に対して敢然と立ち向かい、そしてレクティファールの命を救ったと言う。

それこそ、悪い冗談だった。

自分はただ敗北し、敗者として隠れるように皇都に帰還した。それが事実ではないか。

勝者たるレクティファールの隣には自分以外の女性の姿がある、それこそが今の自分の立場を明確に示していた。

敗者は敗者でしかない。

自分の中の別の自分がそう囁く。

そしてそれに対して頷いてしまう自分もまた、彼女の中に存在した。

「――――レクト……っ」

名を呼ぶたび、身を引き裂かれそうな痛みを覚える。

手が届かないから、声が聞こえないから、辛い。

あの白龍宮での日々のように、目の前に彼がいて、すぐ近くにウィリィアがいてくれたらこの痛みなんて気にならないのに。

「レクト……レクト……レクト……」

先程の光景が、脳裏にこびりついて離れない。

自分以外の女性に、自分に向けたような笑顔を向けるレクティファール。

それを止めることさえ出来ず、何故自分はこんな暗い馬車の中で一人泣いているのか。

「――――ごめんなさい……ごめんなさい……」

分かっている、自分が弱いからだ。

誰かが悪いのではない、自分が悪いのだ。

だから苦しい、だから辛い。

自分を苦しめることで気が晴れることもなく、ただ辛さが増すばかり。

「レクト……！」

ああ、今この瞬間、あなたが目の前にいて笑いかけてくれればそれでいいのに。

それだけで、二度とあのような惨めな戦いは演じないと誓えるのに。

でも――――

「何故、あなたはここにいないの……」

彼がいるのは、紙吹雪と人々の歓声の中。
あの病室のように、自分の前にはいない。

「――――こんなにも苦しいのに……」

いつの間に、自分はこんなにも女々しくなってしまったのか。
嘗ての自分は貴族としての矜持と、軍人としての使命を第一に考えていた筈なのに。
それはたった三月前のことだというのに、今の自分はまるで別人のよう。

「――――わたしは、弱くなったの……？」

メリエラは小さく呟き、顔を伏せる。
雌龍としての自分の本能に翻弄され、身体を震わせて嗚咽する彼女の声は、喜びに満ちた喧騒の中でただ消えていくだけだった。

皇城までの道程は、レクティファールにとっては新たな発見の連続だった。

建物の建築様式からその雑多な種族の容貌まで、ひいては彼らの唄う歌や掛け声までもが目新しい。

彼はそんな中を進み、星天宮の正門までやってきた。

満々と水を湛えた堀と、その上に架けられた橋。その橋の右端には有力貴族たちが縦列を組んで居並び、左端には議員を始めとした文武官が列を作っている。

主君の姿を見て一斉に頭を垂れた彼らの間を、凱旋の集団から抜けた一群が通過していく。

言うまでもなく、レクティファールと彼の供回りたちだ。

ゆっくりと進む一群の先に、数名の男女が待っていた。

「――――お帰りなさいませ、摂政殿下」

四龍公と皇国両議会の議長、そして三軍から派遣された代表者と近衛軍総司令官。彼らの中央、下馬したレクティファールの腰辺りの高さから子どものような声が発せられた。

レクティファールは少し驚いた表情を見せながらも、その発生源となった小さな女性に歩み寄る。

服装こそ文官然とした薄灰色の長衣であったが、その背にある翅が彼女をただの人間種や混血種とは一線を画した種族であると物語っている。

（――――妖精……？）

レクティファールは、“皇剣”の中の情報でしか彼女の種族を知らなかった。

これまで彼の周りにいた人々の中に、彼女のような、レクティファールが妖精と聞いてすぐに思い浮かべるような姿を持つ者はいなかった。

そして他方、彼女から見てレクティファールほど摂政として未成熟な者もいなかったのだが。

お互い、それを察するには付き合いが浅すぎた。

「出迎え大義だった。――――して、君は……」

ここに居るということは皇国の中で、或いは皇王個人として欠くべからざる者ということになる。

しかし、彼の中の“皇剣”は、彼女の正体について何も明かさない。

それは“皇剣”にとって彼女の役割が取るに足らぬものであるからなのか、若しくは知っていて当たり前のことなのか。

「申し遅れました。わたしは殿下の下で皇王府を取り仕切らせて頂く、ルキーティ・フェル・フェアリオスと申します」

「――――――――つまり……」

レクティファールは自分の背丈の半分程度しかないルキーティの顔をじっと見詰める。

彼女の言っていることが事実であれば、彼女の肩書きとはこれまでレクティファールが一度も面識を持たずに、それでも信頼していた人物のものということになる。

レクティファールは表情を固く引き締めたまま、内心で大いに動揺していた。

彼の中でこれまで形作られてきた一つの人物像に罅が入ったが故に。

果たして、ルキーティは長衣の裾を軽く持ち上げ、一つ会釈をした。

「二代前の皇王陛下の御代より、皇王の直臣たる皇王府、その総裁を任されております」

先入観というのは実に危険なものだと、レクティファールはまた一つ学習した。

皇王府総裁とは、文字通り皇王府を束ねる実務者の最高位である。

皇国の公的機関である三院とは違って皇王府は皇王の私有機関という位置付けになっており、予算の九分九厘は皇王の個人資産から拠出されていた。残りの一部を皇国政府が負担することで、辛うじてその政治的中立を保っているに過ぎない。

これは皇王を一人の貴族として考えた場合、皇王府はその貴族が

召抱えている家臣団、近衛軍は貴族軍という見方をすることも可能だ。

だが、その規模は他の皇国貴族と較べるのも馬鹿らしい。たとえ貴族筆頭の四龍公だとしても、その規模は段違いだ。

「――――とは言うものの、今の皇王府は昔ほど大きな組織ではなくなってしまいました」

療養のために白龍公の皇都屋敷に戻ることになったメリエラと別れ、実に四半日も掛けて凱旋式典を終えたレクティファールは、ルキーティの案内で星天宮の各施設を回りながら、彼女の率いる皇王府について説明を受けていた。

そういえば、メリエラの様子がおかしかった気がする――――レクティファールの中に存在する並列意識の一つがそんなことを考えたが、レクティファールという総体にその思考が伝播することはなかった。

彼にとって、最優先しなくてはならない事柄とはこれから自分がやらなくてはならない諸々の仕事のことだ。メリエラのことが気になっていても、それを優先するだけの能力が今の彼にはない。

（――――近いうちに、もう一度お見舞いに行くべきかな……）

並列思考はそう考える。

本当ならウィリィアも含めて自分の手元で治療したいのだが、今のような中途半端な立場では守れるものも守れない。

今の仕事を一通り終わらせて、真正面から会いに行こう。

レクティファールの並列思考はそう結論付けた。

ルキーティの言葉は続いている。

「さて、その原因ですが……」

ふわふわと浮かんでレクティファールを先導するルキーティ。どうやら彼女は、他の種族とは歩幅が違い過ぎて地面を歩くことを諦めたらしい。

実際、彼女のようにあまりにも他の種族と身体的な差が大きい種族の場合、空を飛んだりすることは失礼には当たらないということだった。

「言うまでもなく、今上皇王の暴政に嫌気が差した職員の離職辞職が原因です。今は以前の職員がだいぶ戻ってきてくれましたが、やはり大々的に新規職員を募集するべきでしょうね。殿下がいれば、三院から人を引き抜くことも可能でしょうし」

ふっふっふ、と邪悪な笑い声を上げるルキーティ。

皇王府の職員は税金を予算として使っている建前上、公務員としての籍を持ち皇国の職員ということになっているが、実質皇王の直臣ということになる。

彼らには、皇国の公僕であると同時に、いや皇国の公僕である以前に皇王の直臣であるという自負があった。

それらを示す例として、一つ挙げる。

星天宮で働く者たち、つまり政府官庁としての皇城を除いた施設で働く職員は総て皇王府の職員ということになっているが、親や兄に連れられて星天宮に訪れた貴族の子弟や、仕事で星天宮を訪れた商人などが、星天宮の職員を自分の使用人のように扱うことがあった。

酷い場合だと、星天宮内で働く侍女に不埒な行為を強要しようとしたという例もある。

だが、そんな彼らは皇王府という組織に関して無知だったとしか言いようがない。

確かに皇王府は皇国の税によって動く機関の一つではあるが、行政機関ではない。

皇王が私的に雇い、私的に運用する事実上の独立機関なのである。皇国から皇王府に与えられている予算など、その独立機関を繋ぎ止めておくための方便に過ぎないのだ。皇王府は皇国からの予算が止まっても、その機能にほんの一欠片の障害も起こさないだろう。

そんな皇王府の職員に手を出すということは、その雇用主である皇王の面子に泥を塗るということと同義。

無知な行いをした彼らは、高い授業料を支払って自分の浅慮を学ぶこととなる。貴族であれば実家から勘当されたり、嫡子であれば廃嫡されたりすることもあるし、商人の場合はどれだけ大きな商会であろうと出入り禁止を通告され、刑事事件として訴えられることとなる。

これらは別に皇王府を相手にした場合に限らないが、相手が国家元首であったとなれば当然世間の目は厳しくなる。

彼らに与えられる本当の罰とは、世間的な信用の失墜なのかもしれない。

「殿下の認識としては、皇王府は自分個人の家臣。皇国の職員は国家元首としての家臣だとおもっていただければ良いかと。まあ、担当する範囲の差ですかね」

「――――つまり君は、私の個人的な使用人ということか」

「はい。わたしからすると国家に雇われた公務員ではなく、皇王家や皇王府に雇われた会社員みたいな感覚ですね。実際には公務員みたいなものですが」

「ふむ、なるほど」

レクティファールは廊下を歩きながらしみじみと頷く。

今二人がいるのは皇王府の庁舎であるが、確かに三院の庁舎と比較して見劣りするものではない。むしろ、纏っているその風格などは勝っていると言って間違いないだろう。

「次に案内するのは星天宮が誇る大庭園“白”です。他に“紅”“蒼”“黒”がありますが、これは四公爵家が皇王家に献上した庭だからその名が付けられました。四公爵家の所領にある自然の風景を模した庭は、一般の客も立ち入れる数少ない施設の一つです。今日は殿下をご案内するということで“白”のみ公開を中止いたしました」

「観光客には悪いことをしてしまったな」

「部外者がいては護衛がやりにくいでしょう。無論、殿下がそう仰るのであればすぐにでも一般公開を再開しますが」

「――――いや、そのままで結構」

ルキーティとしては、別にどちらでも良かったのだろう。

近衛としても、摂政の護衛という晴れ舞台が多少面倒になったと

ころで文句は出まい。

ただ、一般人には受けが良くないだろうと推察される。

自分たちが静かに庭を見て回っているときに騒がしい集団が――レクティファールやルキーティではなく、周囲の人々――現れたら、いい気分ではいられない。だったら最初から公開中止にして別の日か、別の場所を見てもらった方が良いだろう。

うんうんと自分を納得させるように何度も頷くレクティファールを横目に、ルキーティは自分たちの周りに護衛以外の存在がないことを確認した。

「――――……。――――明日は此度の戦の論功行賞、そして反逆罪となった諸侯への皇王家としての判決があります。既に罪状はお報せしてあると思いますが……」

「ああ。今日中に判決の内容を伝える」

下手な部屋で話せば、何処に耳があるか分からない。

ならば、こうして何気ない会話の最中に重要な案件を忍ばせるという手もある。

「ならば良いのです。こちらも根回しが必要なもので」

「理解している。明日の判決に呼応して不審な動きを見せている諸侯もいるだろうからな」

「はい、所領で兵を集めている者、この皇都に配下の者を忍び込ませた者もおります。――――いずれも今上陛下によって今の地位に就けられた者であるのは、ある意味では幸いでした」

何代も続く名門貴族の反逆となれば、それは現体制の不備を物語るものだ。完璧な体制など無いが、人々に限りなく完璧であると見せ掛ける必要はある。

その点、ぽっと出の成り上がり貴族であれば処分は容易い。既に汚泥に塗れた名誉しか持たない今上皇王の責任とすることが可能だからだ。

レクティファール個人としては死者に鞭打つような真似は出来ればしたくなかったが、これも皇王の権力を行使した代償だと思う。

「――――此度の戦、最大限利用しなければ。この戦いで落命した総ての人々に報いるためにも」

「御意」

レクティファールはただ呟き。

ルキーティはただ頷く。

今の両者の間にはそれだけで十分だった。

摂政を後宮内の自室に送り届けると、彼女は部屋に戻り、本の続きを読み始める。

昔は普通の文字すら読めなかったというのに、今では古代語まで簡単に読めるようになってしまった。

全く、時間の流れとは偉大なものだと思う。

「――――それにしても、あの猊下が乙女になってるとはね……流石に笑い転げそうになったわ」

くくくっ、と低い笑い声を漏らすルキーティ。

後宮で待ち受けていたリリシアは、レクティファールの首っ玉に齧り付いたまましばらく離れようとはしなかった。

全身でレクティファールを堪能したあと、手作りの夕食を共にするということで喜色満面のまま彼を攫っていった。

一応、レクティファールには手を出さないよう言い含めておいたが、あれでは行動が子どもに過ぎて手を出す気にはならないだろうとも思った。

星天宮内にある小さな離宮に入ったあの陸軍参謀であれば、手を出しても特に問題はない。後宮の侍女たちには夕食後その離宮に案内するよう通達してあるが、あの巫女姫がそれを許すかどうかは別問題だ。

とりあえず、レクティファールがリリシア相手に本気にならなければそれはそれで構わない。

「あの白龍公の姫もだいぶ女らしくなってきたし、面白くなりそうね」

摂政と別れるときに見せた、あの子供のようでいて、その実、狂おしいまでの情愛を秘めた表情。

これまでの四龍姫も同じように、愛すべき男がしかし、実は自分を愛するという義務は負っていないのだと気付いたときには同じような表情を浮かべていたものだ。

「若いよねぇ、本当」

自分の気持ちに折り合いがつけられない。

自分の感情を自分で制御し切れない。

そういう意味では、あの摂政は実に見事に自分の感情を御している。

「まあ、自分という認識が薄ければ自然と抱く感情も淡白になるんだけど……」

淡白というよりも、あの男の本質はもっと別にあるのではないか。

たとえば――――

「――――もう全部決めてある、とか」

自分の中で決まったことなら、それに関する他のことは視界にも入らない。

その決断方法がどのようなものであったにしても、人は一度決めた物事にある種の信仰を抱くものだ。

そしてその信仰が、それからの道を決定する大きな一因となる。

「あんなのが国主になるんだから、面白い国よね、本当に」

そもそも最初の皇からして、彼女から見れば面白い以外の何ものでもなかった。

本来なら一個に纏まる筈も無かった諸種族を一個の国家に纏め上げる。

大した力もない人間種と、神さえ殺せる龍種が同じ国に、同じ街に、同じ家に暮らす国。

いいや、天敵とさえ言える人間種と龍種が、エルフとダークエルフが、魔族と天族が、嘗て殺し合った種族でさえ愛し合い子どもを成せる国だ。

これを面白いと言わずに何と言う。

「『みんな仲良く笑顔で』――――か、そりゃあんたはそれを見て楽しいでしょうが、それを維持するのは大変だよ」

初代皇王の究極の我侭。それが、血を見るより笑顔を見たいというものだ。

彼は自分の国を作り、それを成し遂げようとした。

結果として、書き割りではあるが彼の望んだ国は完成した。

そして、歴代の皇王は少しずつ、既成事実という糊で書き割りの隙間を埋めた。

様々な種族が一緒に暮らすことが当たり前の国へと、二〇〇〇年掛けて育て上げた。

「――――――――そして、今になって妙な“白”が現れた、と。さて、四界の主たちは何を考えているのかな」

嘗て初代皇王に協力し、“皇剣”を創り上げた四界の主たち。

彼らの協力がなければ、アルマダ大陸は今の平穏を得ることは出来なかっただろう。

その平穏が勢力の均衡によって作られたものだとしても、だ。

「普通に考えるなら、二〇〇〇年前のように四界の主が直接何らかの動きを見せなくてはならないような事態が近付いている。或いは、もう事態は動き始めているということだけど」

ルキーティは窓の外、空に浮かぶ灰色の一等大きな月を見上げる。

大気に含まれる魔力などの不純物の割合で季節ごと色の変わる月

たちだが、今の灰色の月というのはときに不吉な物事の前触れとして見られることがある。

逆に吉兆と見ることもあるから一概に悪いものだとは思えないが――――

「さて、今のお月様はどっちかな」

ルキーティは本を閉じ、それを本棚に戻す。

その背表紙には『興國記』とあった。

古の大帝国を創り上げた、人間たちの戦いが記されている。

「人々の願いは容易に世界を動かす。ただ、あの場所に行きたいという小さな願いでもね」

彼女は背表紙を撫ぜ、薄く笑みを浮かべて独語する。

「――――あ、そうだ、初代の龍公たちにも手紙を書こうかな。面白いヤツが来たって」

彼らなら、喜んで冷やかしに来るだろう。

それこそ今の皇国軍の総てを相手にしても戦争が出来るだけの力を持った連中だ。あの二〇〇〇年前の戦いの再現が起こるなら、どうしてもその力が必要になる。

「嫌な想像ばっかり、当たるんだものなぁ」

それこそ、大陸の力ある者たちが死力を尽くして戦った大戦。

その再現は、正直今の皇国には荷が勝つ。

今の皇国は国として纏まり過ぎ、あの頃のように皇王の率いる一集団とは言えない。

あの頃と同じような事態になるなら、ひょっとしたら対処しきれないかもしれない。

「――――ま、予感なんて外れることの方が多いけどさ」

むしろ、外れて欲しい。

今、彼の夢見た皇国で生きている人々がこれ以上傷付くのは、彼女には到底認められない。

それは彼の最期の笑顔を汚すことだから。

「――――――――」

ルキーティは窓に両手をつくと、その緑の瞳で月を見上げる。

「――――せっかく月の人なんて名前なんだから、不吉な兆しも幸運の兆しに変えて欲しいな」

それが、それだけが、彼女が今レクティファールに願うただ一つの個人的な願いだった。

第三話「罪×罰＝罪人たちの宴」

ただ謁見の間と呼ばれる広間は、星天宮内に幾つもある。

その中でもとりわけ巨大で、格式ある広間といえば五つだ。

緻密で繊細、それでいて雄大な彫刻に白い柱と壁を彩られ、建国の時代を描いた大絵画が掛けられている“白水晶の間”。

黒曜石と、星見石と呼ばれる夜空を写し取ったかのような黒水晶の中に不純物が混じった石材で作られた“黒曜石の間”。

緑あふれる広大な庭園のただ中に建ち、その庭園と広間が一体となって独特の美しさを人々に見せ付ける“紅玉石の間”。

アルカディス湖の湖畔にあって、四季折々の湖の風景を四面の壁画とした“蒼玉石の間”。

そして、今日この日、人々の前に新たな皇国の主がその座に就く記念すべき大間は、星天宮最大の大広間にして、皇国史上もっとも美しく荘厳な謁見の場と呼ばれる“金剛珠の間”だ。

「――――――――」

壁際に等間隔で交互に配置された斧槍を持つ近衛騎士と剣と盾を

持つ近衛騎士。それらの背景を含め、“金剛珠の間”は、ただ皇王の威厳と神聖性を示すためだけに当時のあらゆる分野の英知を結集して建設された。

緻密な計算に基づき、素材の一つ一つまで厳選され、名のある職人が魂を削って彫り上げた壁面と天井の彫刻。

壁や天井、柱に施された金銀装飾、散りばめられた宝玉、瑞々しく美しい花を咲かせた観葉植物と魔法によって清められた空気。

広間の中央を貫く赤絨毯は金糸で刺繍され、それでも一度使われたらもう二度とこの広間に敷かれることはない。廃棄される赤絨毯は貴族が買い求めることもあれば、皇王が下賜して行政庁舎に敷かれることもあった。珍しい例では、他国の資産家が皇王府主催の競売で手に入れ、自らの所有する客船の内装として使ったこともあった。

そして、この謁見の間を一個の舞台装置としている照明。

影の発生角度から照明の色、そして時々刻々と変わる室外の明るさまでも計算した照度。照明そのものも同じものはないという一点物で、天井のシャンデリアは大きなものは二メイテルを超え、そこに使用されている硝子はどれもが精緻な削磨が施されていた。

照明に照らされた天井を見上げれば、そこには皇国の建国史を描いた彫刻と現在の皇国を構成する諸侯たちの紋章旗が懸下されている。

天井から吊下げられた諸侯の紋章旗は三〇一二。

二列に並んだそれらの最前列は、皇国に服属する六つの国家の王家の紋章旗。それに続いて四公爵家の紋章旗と始原貴族八家の紋章旗が続き、以降宮内序列に従って各貴族の紋章旗が並ぶ。さらに謁見の間の中央奥、皇王が座する至尊の座の背後には、一際高いところに皇国国旗たる星龍旗。そして左下に皇王家の紋章旗が掲揚されている。ただこのとき、右下には何も掲げられていない。

未だ、ここに掲揚されるべき旗、エルヴィッヒ家の紋章旗は明確に決まっていないからだ。

皇国紋章院に属する紋章学者と皇王府お抱えの紋章学者が議論を重ねている最中であり、人々はエルヴィッヒ家当主が背負っている栄光に相応しい紋章を心待ちにしていた。

それら諸々の要素が玉座に座るただ一人の偉容を示すために存在している“金剛珠の間”には、摂政により召喚された諸侯と国民議会議員、文武官、そして摂政に招待されはしたが、平時であればこの広間に縁など無い市井の者たちが皆一様に緊張した面持ちで列を成していた。

彼らの緊張も無理はない。

摂政がこの謁見の間の使用を決めたということは、この式典がただの摂政就任の挨拶ではないということだ。挨拶だけであるなら、先日の凱旋式典で諸国の大使や公使、皇国諸侯や国民に披露してある大それたものは必要ない。それこそ、明日に予定されている各国の代表を招いた園遊会で事足りるだろう。間違っても、正妃との婚礼の儀、戴冠式にさえ使用される大広間で行われることではない。

ならば何故、摂政はこの場に諸侯や文武官を集めたのか。皇国で

最も格式あるこの大広間を使うとなると、自ずから答えは限られる。

つまり、皇国にとって重要な事柄が摂政によって通達されるということ。

先の戦いに於ける諸侯、議員、文武官に対する論功行賞と、市井の者への褒章授与、皇国を混乱に陥れた者たちへの処罰である。

「――――……」

つい三日前に皇王府からこの式典への招待状が届いた西の地方都市『ハルケン』の学校職員、ポール・ハントは小さく生唾を飲んだ。本当なら思い切り咳でもしたいところだが、場の雰囲気に呑まれてしまってそれどころではなかった。

彼は連合軍侵攻の頃、私財を擲って身寄りをなくした子どもたちを保護していた功績を評価されてこの場に招待された。正確には同じ褒章を受け取る五三名の代表としてここにいるのだが、家で一番高価な礼装を着てきたというのに浮いている気がしてならない。

（は、早く終わってくれ……！）

彼の周囲には同じように褒章授与の為に招待された人々が並んでいるのだが、彼らの顔といえば総じて蒼白く、緊張の余り額に脂汗を浮かべている者も少なくない。

彼らは褒章を授与されたのち、すぐにこの場を去る段取りになっている。

控え室で他の参加者の話を盗み聞いたところによると、褒賞授与のあとには諸侯や文武官に対する論功行賞と皇王自ら下す裁定が待っているという。

正直、何故同じ日に同じ場所で賞と罰を行うのか疑問に思った。

これは市民への褒章を優先し、さらにそれを格式高い謁見の間で行い、諸侯や文武官を後回しにすることで、先の戦いに対する憤りを抱く民衆を少しでも宥めようという政府と皇王府の提案が摂政に受け入れられたものだったが、今謁見の間にいる民たちにとってはありがた迷惑そのものだ。

通常、こういった市井の者への褒章授与は黒色殿と呼ばれる星天宮内の宮殿の一つで行われる。ここに招待されたとき、そちらで式典が行われると思っていた者も多かっただろう。

しかし現実は、明らかに招待客を戸惑わせる謁見の間での褒章授与。

これが新たな皇国の主たる青年の茶目っ気であるなら、或いはポールは子どもたちにあの摂政のような大人になってはいけません、と教えなくてはならないかもしれない。

出来るなら、そんなことはしたくなかった。

「――――んんっ」

結局耐えきれず、軽く咳払い。

近くにいた出席者の何人かが肩を震わせたが、今の彼にそれらに気を配る余裕はなかった。

ポールが居住まいを正し、大きく息を吐いたそのとき、謁見の間に皇王府所属の式部官の声が響いた。

「――――摂政殿下ぁ、御入来っ！」

これまで正面の星龍旗を仰いでいた貴族と議員、文武官、そして市民が中央の赤絨毯に身体を向けて一斉に頭を垂れる。

各々の役職に定められた最敬礼を行い、深々と頭を下げた彼らの耳に赤絨毯を踏み締める音だけが届いた。

これが皇王の主催する式典であったのなら、主役たる皇王が赤絨毯を通ることはない。玉座横の入り口から謁見の間に入り、玉座に着くだけだ。

だが、摂政はあくまでも摂政であり、皇王の代行職に過ぎないのだ。間違っても皇王と同じ作法で入室することは出来ない。

摂政は頭を下げたままの出席者が耳を澄ませる中、カチンカチンと小さな金属音を規則的に奏でて赤絨毯を進む。そして空の玉座と星龍旗に一礼し、玉座前の階段を昇り始めた。

本来なら玉座へと昇る前に皇王の許可を得るのだが、現在、皇王は不在である。

摂政は無言のまま玉座の傍らに立つと、出席者を振り返った。

「――――皆の者、此度の参集大儀である。面を上げよ」

放たれる声は、舞台装置としての謁見の間により拡声されて出席者に届く。

市民の中には一瞬遅れる者もいたが、それでもすぐに全員が顔を上げて正面に向き直った。

「――――――――」

白を基調として銀糸で装飾された大軍装を纏い、腰に“皇剣”を佩いた摂政の姿に出席者の何割かが息を呑む。

銀の瞳は明確な大望を抱いているように見え、次期皇王の証とも言える白の髪は灯りに照らされ輝いている。

謁見の間という舞台装置を得て、玉座の傍らに立つ摂政の姿はその場にいる総ての者に対して威を放っていた。それが人工の、見せかけの威であると否定することが出来ないのは、あの青年がこれまでに成してきた諸々の事柄故か。

確かに最強種と名高い龍種でさえも、兵器としての“皇剣”に及ぶものではない。

“皇剣”とは元来そのために造られたものであり、それ自体には何ら疑問はない。だが、今の摂政が“皇剣”を満足に使いこなせないことは、ある程度の立場にある者ならば摂政が皇都に帰還する以前より承知している。

それでも、あの摂政の身から発せられる“何か”に気圧されるのは、彼らの目の前にいる青年が、彼らの知るどのような生き物より異質で、異常な存在だからなのかもしれない。

“皇剣”を継承した者は、その時点でヒトではなくなる。

彼らは自らをヒトとは考えず、認めもしない。

ただ、ヒトの姿と能力を残した兵器であると自認するだけ。

「――――では、摂政殿下より褒章の授与を……」

式典を進める式部官の声。

先程まであれほど堂々と聞こえていたその声が、たった一人の青年が加わっただけで空虚なものに変わった。

玉座に座している訳でもない。ただ、その隣に立っているだけの青年がこの大間にどれだけの存在感を示しているのか、その場にい

る誰もが身を以て理解した。

なるほど、これが君主だ、と。

褒章授与は、大きな問題も無く終了した。

二度、摂政を目の当たりにする緊張感からか足を縺れさせる者が現れたが、それ以外に問題は起こらず、授与式は三時間という予定通りに幕を閉じる。

しかし、一度挟んだ小休止の後、市民たちを除いた諸侯と文武官のみが再び“金剛珠の間”に列したときには、先程までとは違う緊張感が謁見の間に満ちていた。

先程の緊張は未知のモノに対する興味と不安が元となった緊張感であったが、今大広間に揺蕩うそれは明らかに恐怖をその根底に持つ緊張だ。

諸侯にも文武官にも、摂政たる若者に対して恐怖を抱かざるを得ない理由がある。

内乱での不手際はたとえ明確な逆徒とならずとも彼らの失点となるし、皇都を占領されても何ら有効な手を打つことが出来なかった議員や文武官も、結果的に叛逆者に利する行動を取ったと責められても不思議ではない。

諸侯たちの中には壁際の近衛たちは自分たちを討つために配置されているのではないかという荒唐無稽なことさえ考える者まで存在した。

内乱が必要最低限の犠牲で終結したことは、現時点では推測でしかない。確かに皇国は致命的な傷を負う前に摂政の手で正常な機能を取り戻したし、その後の対帝国戦役も多大な犠牲を払って辛勝した。

だが、人とはもっと良い結末があったのではないかと考えずにはいられない。

特に、身内を失った者たちは貴賤を問わずそう思うだろう。

誰かがあと少し、あと少しだけ早く行動していれば、あと少しだけ自分の良心に従っていれば、あと少しだけ“利”よりも“義”を重く受け止めていたら、自分の大切な人は死なずに済んだかもしれない。

それがどれだけ難しいことだとしても、不可能ではないなら望んでしまう。そして望んだが故に、実現させることが出来なかった者を憎み、恨む。

大した実績もないレクティファールという青年がたった数日で戦

局を変えてしまったことも、それに拍車をかけていた。

「摂政になって日の浅い殿下に出来たことが、何故何百年と貴族の地位にいる者たちに出来なかったのか」

人々のそんな考えは、形を変えて諸侯と文武官たちに重く伸し掛る。

余りにも劇的な摂政レクティファールの勝利により、彼らと民衆の間には隠しきれない亀裂が生じてしまった。

そしてこの謁見の間に並ぶ諸侯の中には、その亀裂の責任を摂政に求める者もいる。

彼らは彼らの出来る限りのことをした。それこそ貴族として、自分たちの身を守った上で出来うる限りのことを。

確かに、始原貴族軍として支持貴族と相対しなかった者も多い。中立を保ち、ひたすらに自領の治安維持に努めた貴族もいる。特に西方・北方と他国と直接国境を接する領地を持つ者は、みだりに兵力を動かせなかった。

武官たち正規軍とて、他国の軍勢が首都に迫っている段になっても動けず、唯一北方国境のパラティオン要塞守備軍のみがその役割を果たすに留まった。

そして文官たち。皇王に大権を与えている皇国の官僚が、その皇王不在時に出来たことは現状維持のみで、荒れていく国土と傷付い

ていく国民を守ることは出来なかった。

恨まれて当然、憎まれて当たり前のことをしてきたと、諸侯と文武官には自覚があった。

これまで怨嗟を向ける対象として民衆の前に存在した今上皇王と支持貴族は、前者は皇城で謎の死を遂げ、後者は“英雄”たる摂政の手で裁かれた。

ならば次は誰だ。今の自分達の境遇に対し、責任を負っているものは誰だ。

民衆は考える。無意識の内に自分たちの救世主をその候補から外し、そしてついに見つけ出した。

それが、今謁見の間に居並ぶ者たちだ。

「――――摂政殿下、総大主教猊下、御成りにございます」

「――――！！」

予想していなかった総大主教の登場に、出席者たちに動揺が広がる。

一部の者たちは予想していたのか大した動揺を見せることはなかったが、それでも大多数の者は隠しきれない驚きをその表情に浮かべていた。

神殿は政に関わらない。

その大原則を知らない者はこの場に一人もいなかった。

「――――――」

玉座横の大扉が開かれると、諸侯と文武官が一斉に最敬礼する。

先程とは違い、玉座の横にある扉から入室したレクティファールはそのまま国旗と玉座に礼をすると、ゆったりとした足取りで壇上へと昇っていく。

さらに、先程の式典では姿を見せなかった四界神殿総大主教ミレイディアが宝冠を被り、権杖を持ち、祭服を完装した姿でその後に続いて壇上へと昇る。彼女の持つ権杖が、床に突き立てられるたびに硬質な音をたてた。

レクティファールが玉座の左横に立ち、ミレイディアが玉座の右横、一段低い位置で立ち止まる。

彼らは壇上で一度視線を交わすと、レクティファールが出席者に向けて口を開く。

「面を上げよ」

許しを得た出席者が顔を上げ、並び立つ摂政と総大主教を視界に収める。

一部の例外を除いた総ての者が、二人の持つ威圧感に圧倒された。

共に皇国の“まつりごと”を、“政”と“祭事”を司る最高権力者である、その存在感は龍族にさえ劣らない。

「まず、今上陛下について総大主教ミレイディア殿よりお言葉がある。心して聞くように」

重々しい口調で、ゆっくりと言葉を紡ぐレクティファール。

これまでレクティファールに対して少なからぬ反感を抱いていた諸侯も、総大主教まで敵に回すようなことは出来ない。静かに、その言葉を聞くしか無かった。

ミレイディアが一歩、前に出た。

彼女の声に、出席者が意識を集中させる。

「――――四界神殿は、此度の今上陛下の民たちに対する行いを皇王としてのそれとは認めません。よって、今上陛下を皇国の主、皇王として認めることは出来ません」

「――――――！！」

それは、余りにも予想の埒外にある言葉だった。

四界神殿が、皇王を生む存在である神殿が皇王を認めない。

つまり、親が子を認知しないことと同じ。

「ですが、皇王の権能を持たざる者が国家を主導したという事実を四界神殿は認めません。これは皆様方も同意するところと思います」

出席者は無言でその言葉を肯定した。

正統な皇王ではない者が、皇国を動かした。

たとえそれが事実であったとしても、これを認めることは皇国の政体を否定することに等しい。

行政、立法、司法、軍事、外交、あらゆる権限を持つ皇王が存在を否定されるということはあってはならない。そんなことになれば、国が保てなくなる。

「故に、摂政殿下は今上陛下の皇籍を剥奪。その名をあらゆる記録より永久に廃することを神殿に提案なされました。そして神殿は、この要請を受け入れることを決定いたしました」

どよめきが大広間に広がる。

神殿は皇王を生むという役割上、その生涯を記録として残している。

これまでの皇王の生涯は神殿によって記録され、編纂され、人々に公開されていた。

神殿がその名を永久に廃するということは、皇国の一切の記録から皇王の名を削除しなくてはならないということだ。公文書はもとより、民間の記録からもその名は消される。

今上皇王は確かに存在しながら、同時に存在しなかった皇王として記録に残る。

これらの裁定の結果、後の世に“無名皇”と呼ばれることとなった今上皇王に、出席者は同情の念を抱いた。

皇国が続く限り、今上皇王は名を知られることはない。

悪名だけが残り、本当の名を抹消された主君に対し、彼らは悲しみさえ感じた。

どれだけ暗愚であっても、近しい者に踊らされた結果だとしても、この処分は余りにも重い。

しかし、国家の土台である民衆の怒りを思えば、それを声に出すことは憚られる。自分たちも同じ立場にならないとも限らないのだから。

「此度の沙汰、神殿はこれを全面的に支持いたします。皆々様はそれを良くご理解ください」

ミレイディアの言う此度の沙汰というものが、これから自分たちに下されるものも含んでいることに彼らは気付いた。

神殿は彼らに下される論功行賞に関して何ら干渉することは出来ない。

しかし、久しき時間の間に積み重ねられた神殿の、空虚であるが重厚な権威が新参者であることを否定し切れない摂政の、鋭く強大ではあるが何処か薄い権威を補強していることは間違いない。

だが逆に言えば、それだけの権威を必要とする言葉が摂政の口から発せられるということだ。

「――――異論はあるか」

問われ、それに気付いた出席者は一斉に「御意のままに」と、それ以外の道を閉ざされた状態で答えた。

彼らの内に自分への逆心があることに気付かぬ振りをして、レクティファールは鷹揚に頷いた。

元々主君とは、臣下に全面的に認められるようなものではない。必要なときに必要なだけ、必要な忠誠心を得られれば彼らの関係は

回り続けるだろう。それ以外では恐れられているぐらいが丁度良い。

「では、次にミッドガルド、エイメルシア、アストリアの三侯とそれに従った者たちに沙汰を申し渡す」

「はっ」

名の挙がった三名と、彼らの主導する始原貴族軍に属した貴族たちが赤絨毯の中央まで進み出る。

三侯を前に、その背後に貴族たちが横一列に並んだ。彼らは揃って膝を突き、胸に左手を当てて頭を下げた。

如何なる罰も受けるというその潔い態度に、出席者から感嘆の吐息が漏れる。

レクティファールも満足げに頷き、先程よりやや明るい口調で彼らに言葉を掛けた。

「――――うむ。まずは先の戦の後、平原の死者を弔い、戦火に追われた民たちを慰撫したこと、よくやった」

「はっ、これも殿下の差配あってのこと。それに我らの功など、民の苦労に較べれば余りにも小さきことでございます」

アストリア侯が跪いたまま、レクティファールに答えた。

彼女の口調には謙遜するような響きはない、自分の言葉こそが事実であると考えているのだろう。

「良い。民たちの苦労には我が皇王家も報いねばならん。そなたらだけに総てを背負わせるような真似は歴代皇王の業績にも汚点を残すことになる」

だが、と前置きをして、レクティファールは一度言葉を区切った。

「功は認めるが、罪を雪ぐは罰しか無い。分かっているな？」

「――――は」

問い掛けに頷く彼らに、最早これ以上罪から顔を背けて生きようという意思はない。

彼らは皇王の許し無く領地の治安維持という諸侯軍の分を超えた軍事行動を起こしている。エイメルシア侯などは無名となった今上皇王を止めるためという大義名分はあるにせよ、他国の軍勢を引き入れた罪もある。

いずれも、貴族の地位を逐われるには十分過ぎる罪だった。

「うむ、では沙汰を申し渡す」

レクティファールはカツンと一歩踏み出し、跪いたままの始原貴族軍諸侯に向けて言い放った。

「ミッドガルド侯アルブレヒト。現爵位を没収、資産の一割を戦後復興基金に上納。現在のエルベンハイト辺境伯領を召し上げ、皇室直轄領である『ウィルマグス』郡を除いた旧帝国領の三郡を新たに与える。以後、この領地をノールトヴェンツェル辺境伯領とする」

下された裁定に、これまで閑寂が支配していた謁見の間にどよめきが満ちる。

旧帝国領三郡は現在のミッドガルド侯の領地であるエルベンハイト辺境伯領よりも遥かに広大で、戦役後に行われた地質調査では地下資源も豊富だという。

これでは処罰というよりも、むしろ褒賞に近い。

「先の勝利により、帝国との戦いはより熾烈さを増すだろう。侯には帝国に睨みを利かせ、さらに新たに皇国の民となった領民の鎮撫を命じる。尚、この地位にある限り、新設の北方国境守備軍軍の指揮権を貸し与える」

「はっ！」

ミッドガルド侯は空気が震えるような、低い声で答えた。

帝国と国境を接する大領の領主ともなれば、これは国主の信頼無くして封じられる場所ではない。

彼はこの裁定の内に込められたレクティファールの意思を感じ取り、深々と頭を垂れた。

これは褒美であると同時に、罰でもある。

皇国を守りたいという望みを叶えると同時に、決して退けない戦場に放り込まれるということだ。

帝国ばかりに気を取られれば民衆が不満を募らせ、逆に民の慰撫にばかり力を入れては帝国侵攻時にまともな迎撃体制をとることは出来ない。さらに、新たに『ウィルマグス』に本拠を置く国境守備軍総司令官となる予定の陸軍中将ガラハ・ド・ラグダナを部下として扱える者は皇国でもそう多くはないだろう。

ミッドガルド侯はその点、元軍人で軍令軍政に明るく、何よりガラハ個人が上司と仰いで不足ない人物と公言してやまない。

政・軍一体となって復興と来るべき新たな戦いに備えなくてはならない『ウィルマグス』周辺地域にとって、この人事は至極真っ当なものだった。

「アストリア侯タチアナ。資産の一割を戦後復興基金に上納。領地の徴税権、土地所有権を向こう三年間皇王府派遣の代官に委譲。皇国情報院特別顧問に任ずる。尚、任期は無期限とする」

「――――は」

領地の徴税権を皇王府の代官に譲るということは、その税で賄われているハルゼ子爵家の財政は実質皇王家に握られることになる。しかし、ハルゼ子爵家の家格は決して高くないが、それでも始原貴族に列せられている家柄だ。抱えている家臣の数も多く、彼女としてはそれらの家臣が路頭に迷わないだけこの処分は良心的だと思った。

さらに土地所有権が代官にあるということは、彼女は代官の許し――つまり皇王家の許可――無く公共事業を行うことも、土地の売買も出来ない。この二つを代官に押さえられたハルゼ子爵家は、実質皇王家に家の総てを取り仕切られる立場になったと言って良いだろう。

ただ、ハルゼ子爵家は元々皇王家から代官を招くことが多い家だった。

皇国に於いて代官を招くことは別段恥ではないし、代官の不手際による損失は皇王家が保障してくれるから、自分たちで領地を経営するよりも余程旨みがある。無論、代官を受け入れるということは領地の総てを皇王家に丸投げするようなものだ。特に自分たちの手で領地を経営し、栄えさせることを家の誇りであり役目と考えてい

る貴族も多く、代官制度そのものは当主が国家の要職に就いている場合であるとか、或いはその任に耐えられない事情――当主が幼い、逆に高齢、心身に障害があるなど――がある場合で、領地の経営を任せられる家臣もいない家が利用することが多かった。

ハルゼ子爵家は代々有能な軍人を輩出する家系であるためか、当主に領地経営に関する才覚が乏しく、それを理由に代官を受け入れている。自分たちの力不足で領民に負担を掛けられないというこの姿勢も、子爵家が皇王家に信頼される理由の一つだ。

アストリア侯に続き、始原貴族軍諸侯に次々と処分が下っていく。

いずれも戦後復興基金に資産を納めることと、徴税権や土地所有権を皇王家に委ねることが課せられたが、家によっては領地替えもあった。これらの転封には共通点があり、そのどれもが今後数年以内に戦場になる可能性のある土地に移されている。処分を受けた諸侯も当然それに気付いていたが、むしろこれを皇王家からの信頼、信用の証であると考えた。

少なくともレクティファールは、彼らが必要とあれば裏切り者となっても国家を守ろうとする者たちであると知っている。ただ皇王家に誠忠を尽くすだけの貴族では国境は任せられない。皇王家の藩屏ではなく、皇国の防人として相応しい人物として彼らを見てみれば、これほど優れた人材はいないだろう。

だからレクティファールは、彼らを敢えて許した。

許されたことで彼らの中に皇王家への忠誠心が蘇るなら良し。たとえ皇王家に対して不信感を残したままでも、目の前に敵国がいるような状況ではその不信感が暴露するような事態にはなりにくい。

何よりも、どこの国民もこの類の人情味溢れる話を好む。レクティファールは彼らを許すことで優秀な護人を手に入れ、同時に国民の歓心も得ることが出来るのだった。

ただ、皇王家は彼ら始原貴族軍諸侯を優遇した訳ではなかった。

最後の一家に対する処分だけは一切の温情の見えない、厳しいものとなったのである。

「――――エイメルシア侯ハイデル。爵位剥奪、公職からの追放、領地召し上げ、資産の国庫への上納……」

処分がレクティファールの口から告げられるたび、ミッドガルド侯とアストリア侯を始めとした始原貴族諸侯の顔から血の気が失せていく。唯一、処分を言い渡されているエイメルシア侯だけが、瞑目したままそれを聞いている。

公職や領地、爵位など惜しくはなかった。

いや――――

「現当主ハイデルを極刑に処し……」

そう自分の死を宣告されても、彼の心には小さな波紋さえ起きなかった。

彼には皇国が命ながらえた今、自分の命さえもその供物として捧げる覚悟がある。

誰かが生贄にならなければならない。

始原貴族軍の誰かが、支持貴族軍と争い国を混乱に陥れた責任を取らなくてはならない。

支持貴族軍の貴族がその命で以て罪を贖ったのなら、その相手である支持貴族軍も血を流さなくてはならないのだ。

喧嘩両成敗。勝利者たる皇王家がどちらかの陣営に肩入れしては、それは国民に対する裏切りになってしまう。

国民は支持貴族軍や程度こそ違うが連合軍に対しても悪感情を抱いており、それらと戦った始原貴族軍や摂政軍に対しては好意的な感情を持っている。しかし、始原貴族軍とて官軍である摂政軍にとっては賊軍であり、一つの結果として限りなく勝利者に近い立場を占めることが出来ただけだ。

だからこそ、摂政レクティファールは始原貴族軍諸侯に温情を見せ、国民が納得し易い形で処分を決めた。

だが、エイメルシア侯が犯した外国軍の誘引という罪は温情でどうにかなるものではない。これは連合軍がミラ平原の国民に強いた数々の屈辱の原因であり、この内乱の長期化の原因でもあるのだから。

エイメルシア侯は、それが理解出来たからこそ黙って罪を受け入

れた。

自分ひとりの命であの愛国の同志が助かるのなら安いものだと。

彼らがいれば、将来必ず起こる戦乱でもこの国は生き残れると。

しかし、最後の処分を聞いた瞬間、彼の表情が変わった。

「五親等までの一族郎党の極刑に処す。尚、ここ一年で一族から除かれた者もこの沙汰の対象とする」

「――――っ！！」

エイメルシア侯が目を見開き、遥か頭上にあるレクティファールの顔を見上げる。

そこでエイメルシア侯が見たものは、ただ冷厳と、峻烈に摂政の任を全うしようとする青年の表情。

何も無い、ただの無表情であった。

身体が震えた。

「――――……っ」

納得も、理解も出来る。

自分の犯した罪を、あの摂政はこの国を滅ぼしかけた最低最悪の罪と断じた。

摂政はそうすることで、二度と同じことをする者が現れないように、もしも同じことが起こるとしても、それだけの罪を背負う覚悟を持っている人物が行うように仕向けた。

他国の介入がどれほど国に深い傷を負わせるのか、ここにいる諸侯総てが理解できるように、敢えてエイメルシア侯とその一族を生贄にする決断を下した。

これは君主としての判断。

エイメルシア侯を慕う者たちから悪鬼と罵られ、詳しい事情を知らぬ者からは悪魔と蔑まれることを承知の上で、勝利者以外に下すことが出来ない処分だ。

それでも――――

「恐れながら……っ！」

エイメルシア侯は最後の最後で、反抗することを決めた。

「我が一門には未だ言葉さえ話せぬ幼子もおりまする！　せめてその子等と、我が一族より放逐された者にはお慈悲を……！」

彼は賊軍となることを決めたとき、子や孫の配偶者を離縁させ、彼らに罪が及ばないよう手を打った。

実家に戻り、その一門となれば族滅の対象とはならないからだ。当然、幼い子どもたちは彼らに託してある。

皇国貴族として、エイメルシアの当主として、彼は一族を守る長だった。

「ならん」

だが、レクティファールの表情に慈悲などという言葉はない。

余りにも厳しい処分に謁見の間が騒然となり、エイメルシア侯の隣に跪くミッドガルド侯などは小さく罵りの言葉を吐いているようだった。ただ、その対象はおそらく摂政ではなく自分だろう。今の彼に、エイメルシア侯を救うだけの力はない。

アストリア侯も、黙って顔を赤絨毯に向けることしか出来ない。彼女にとって、エイメルシア侯の失脚と処刑は予想の範囲を超えるものではなかった。予想外だったのは、エイメルシア侯の罪が一族にまで波及したことだ。

皇国では、一市民であれば本人の罪が他者に及ぶことはない。子どもや配偶者にまで罰を求めるような法制度ではないからだった。

だが、皇王自らが下す裁定に於いてはこういった例外も起こり得

る。

司法権は皇王の持つ権限の一つであり、皇国司法院はそれを貸し与えられているだけに過ぎない。皇王自らが国民を裁くことは、持っている権能を行使しているだけだった。

「殿下……！」

それでもエイメルシア侯が退けないのは、彼の肩に多くの命が懸かっているからだろうか。

脳裏に子や孫の顔が浮かんでは消え、そのたびに彼はただ退けぬという気持ちになった。

「――――――――」

レクティファールは、エイメルシア侯の請願を黙ったまま見詰める。

彼自身、自分が極刑に処すると宣言したエイメルシア侯の一族の氏素性は承知している。

中には、つい先頃生まれたばかりの幼子まで含まれていることも。

それでもやはり、彼にも退けない理由があった。

どんな戦いでも、もっとも良い退け時というものは存在するのだから。

「――――ハイデル、貴様の言いたいことは理解しよう。されど、今貴様が吐いた言葉、おそらくこの戦いで多くの者が叫んだ言葉だったろうな」

金品を強奪されるだけではなく、家を焼かれ、家族を奪われ、最後には己の命さえ閉ざされた者をレクティファールは知っている。

彼の下に届けられた報告書に添えられた鮮明な写真は、過酷な現実に命奪われた者たちの最後の叫びをほんの少し写し取っていた。

性別も判然としない人の形をした炭。ばらばらに切断され、井戸に投げ込まれた幼い少女。ミラ平原に住む魔獣が柔らかい内蔵を好んだのか、腹の空洞を晒した妊婦と周囲に散らばった嘗て胎児だったモノの欠片。互いの存在に縋るように手を繋ぎ、ただ男どもの欲望をその身に刻まれたまま息絶えた姉妹の怨嗟の表情。

忘れるという機能を持たないレクティファールの記憶には、それらの写真が少しも色褪せずに飾られている。

憎むな、とレクティファールは自分に言い聞かせる。

憎む心は“私”に過ぎない。“公”である摂政として、その憎しみは誰にも悟られてはいけない。

「それは……！」

「良い。如何な言葉であろうとも、彼らに謝罪すること叶わぬ今口にすることはただの裏切りに過ぎない」

レクティファールの口調は淡々として、その感情を読み取らせるような情報は殆ど無かった。

ただ、日頃の彼を知る者が見たのなら、様々な感情を押し殺したような声音に眉を顰めたかもしれない。

この謁見の間にそれほど彼と関わりのある人物がいなかったのは、睥睨する者と膝を屈する者、どちらにとっても幸いだった。

「ハイデル」

「――――は……」

レクティファールに名を呼ばれ、何か言おうと開いた口から小さく一言だけ言葉を返すエイメルシア侯。

彼自身、自分の罪が自分ひとりの命で贖えるとは思っていなかった。皇王でもない自分がこの皇国を亡国の縁に追い遣った罪は、一族の命で償うのが妥当なのかもしれないとも考えた。

（――――すまぬな、皆）

思えば、自分が立ったのは今上皇王に対する怒りが原因だった。

この愛する国を滅ぼそうとする、自分の愛する家族を危険に晒すあの男が許せなかったから、起った。

その結果、別の誰かの家族に死を強要したというのなら、それは今上皇王と変わらない。

ならばせめて、あの男とは違い潔くこの命を捧げようではないか。

唯一の心残りは、一族を巻き込んでしまったこと。

可愛い盛りの孫や曾孫の顔を思い浮かべながら、彼は摂政の言葉を受け容れるべく額を絨毯に押し付けた。

しかし投げ掛けられた言葉は、彼が考えるほど甘いものではなかった。

「なれば、貴様がもっとも嫌う罰を代わりに与えよう」

慌てて顔を挙げるエイメルシア侯。

その目の前で、レクティファールは謁見の間に朗々と響く声で告げた。

「その罪、私が預かる」

「な……！」

その叫びは、果たして誰のものであったのか。

誰もが叫び、誰もが驚愕した。

「エイメルシア侯ハイデル。エイメルシア号を剥奪、爵位と領地没収、全資産の八割を国庫へ納入、そして今このときを以て、皇国宰相に任ずる」

「殿下っ！　それでは……っ！」

国民が納得しない。

そう声を上げたのは当のエイメルシア侯――――否、皇国宰相ハイデルだった。

それもその筈で、皇国宰相は法的には文官の頂点に位置し、行政の権限総てを皇王より預かっている。但し、この役職は常設ではなく皇王や摂政が必要に応じて任命するものであり、事実ここ三〇〇年は存在していなかった。

確かに、経験の浅い摂政だけでは国政の総てを統べることは難しく、一部の議員や貴族は、摂政の信頼篤い白龍公カールがその役に就くのはないかとも考えていた。

だが、レクティファールはその予想を大きく裏切る決定を下した。

間違いなく国家の大罪人と呼ばれる男を、その地位に据えたのだ。

国民は大いに反発する、誰もがそう考えた。

しかし――――

「ふむ、よろしいのではないですか」

一人、そう呟いて拍手を始める男がいた。

「きゃ、キャベンディッシュ卿……」

隣に並ぶ議員が慌てたように彼の肩を叩く。

この議員はキャベンディッシュの派閥の幹部の一人だった。

自分たちの閥の領袖が取った行動が信じられないらしく、顔面は蒼白だった。

「いやなに、確かに国民はこの決定に反発するかもしれません。ですが、それも誘導することが出来る怒りです。幸い……と言っては失礼ですが、今上皇王が明確に除名された今現在、怒りの矛先は容易に変えられます」

摂政が身を呈して庇った男なら、とこの戦いで直接大きな被害を受けなかった多くの国民は考えるだろう。

そして直接被害を受けた一部の国民も、英雄としてのレクティフアールの威光の前に黙り込むしかない。その不満は確かに危険だが、それもハイデルが結果を示せば収まる筈だ。

原因は今上皇王にあると誰もが知っている今ならば、この半ば無茶な人事も押し通せる。ハイデルを忠臣の鑑とまつり上げ、彼の行いが国家の為であったと喧伝することで、だ。

だが、謁見の間にいる者の中でも、国民を騙すような真似に反感を抱いた者は少なくなかった。

これまで抱いていた信頼を損なうような振る舞いを見せる摂政に対して、露骨な不信感を抱く者さえ現れ始める。

しかし、キャベンディッシュは続ける。囁くような声ではあったが、妙に響いた。

「リッテンハイム卿の忠義は本物。ここで宰相の任を辞退するようなことになれば、温情を見せた摂政殿下の顔に泥を塗ることになり、

宰相となって結果を残せなければ、これもやはり摂政殿下の評判を落とすことになるでしょう。果たして、卿はこの屈辱に耐えられるでしょうか」

忠義故に罪人となった男に、忠義を示せと求める。

ハイデルはこのとき、選択肢など持っていなかったのだろう。

彼が選べる道など、ただ一つしか無い。

多くの命を奪う大罪の片棒を担ぎ、今また自分に手を差し伸べた若き主君を裏切るような真似は、ハイデルには出来なかった。彼に出来ることは、ただ国民が納得するような結果を残すこと。

レクティファールが自分を宰相に任じたことが間違いではなかったと天下万民に遍く示すことだけだ。

「――――……」

キャベンディッシュの言葉の正しさを証明するように、ハイデルは無言のままに跪き、レクティファールに臣下の礼を取る。

ハイデルの年齢では、恐らくそう長い期間宰相の地位を占めることは出来ない。五年程度、皇国政府が帝国との戦いが再燃すると予想している時期まで保つかどうか、と言ったところだろう。

たった五年。彼に与えられた時間はそれしかない。

宰相として、摂政に担わせるには躊躇いがある後ろ暗い案件を処理し、必要とあれば同輩の恨みを受け止める。ハイデルは、行政の頭としての役割とは別に、自分の宰相就任の意味をそう見出した。

おそらくだが、レクティファールやそれに近い者たちはそれを望んでいる。

使い捨てという言葉がハイデルの脳裏に浮かんだが、彼はそれも良いと思った。

一族の助命が叶い、再び身を粉にして働ける場所まで与えられた。

ただ、今の自分の双肩には、自分の名誉だけではなく摂政レクティファールの名誉も掛かっている。

国家の裏切り者となった自分に、国家の重責の一部を委ねる。なるほど、白龍公が放っておけない訳だ。あの青年は躊躇うより早く決断の下す拙速のきらいがある。今はまだ英雄としての名声がそれを覆い隠しているから良いが、いずれその拙速さが政治的致命傷を負わせる原因にもなりかねない。

（――――それがしが生きている内に、殿下を為政者として独り立ちさせねばならん）

それが、一族と自分を救ってもらったせめてもの恩返し。

たとえ摂政本人に疎まれるようなことになろうとも、自分の残り

の人生はあの青年に総て懸ける。

（これはこれで、死ぬよりは悪くない人生になりそうだ）

いつの間にか、拍手は謁見の間中に広がっていた。

ミッドガルド侯は何度も頷きながら大きく手を叩き、アストリア侯は玉座の傍らに立つレクティファールを細めた目で眺めながら拍手する。

若い摂政は謁見の間に満ち満ちる音の嵐の前でも泰然として、前を見ているだけだった。

アストリア侯は思う。

これはある種の賭けであると。

確かにレクティファールの政治基盤は未だ不安定で、ハイデルの持つ豊富な人脈とその政治手腕は彼にとって大きな力となるだろう。

されど、ハイデルは一度罪人として国民に認識された男。これを簡単に許すようでは、諸侯が摂政を侮り国家の秩序が乱れることもあり得る。

この動きを掣肘するためには、急ぎ摂政と宰相の力を示す必要がある。果たして、策はあるのか。

（それとも、今は策より力押しか……？）

彼女が見詰める先で、レクティファールは小さく笑みを浮かべているようだった。

「――――では、ハイデル」

レクティファールはハイデルに段を昇るよう促した。

ハイデルは立ち上がって階段を昇ると、玉座よりも二段下で立ち止まって振り返った。

玉座に向かって左、臣下が臣下として立つことを許されたもっとも高い場所だ。

「もう一つ、この場で皆に申し渡す」

レクティファールの言葉に出席者が拍手をやめ、居住まいを正す。

「先の戦いを鑑み、貴族の私設軍保有を禁ずる」

貴族たちの列から、うめき声が上がった。

いつか来るだろうと彼らも思っていた貴族軍解体の摂政令が、ついに現実のものとなった。

先の内乱で諸侯軍が挙げた功績といえば、四公爵軍が摂政軍として連合を粉砕した程度。ただ、これは諸侯軍としての功ではなく、摂政レクティファールの武功と考える方が自然だろう。諸侯も国民も、そう認識しているのだから。

「但し、領内の治安維持に必要な最低限の武力保有は、これを認める用意がある。無論、その保有上限数や兵種は領内の治安状況や領地の広狭を勘案し、こちらから指示する」

レクティファールは続ける。

解体される貴族軍に所属する者の中で特に希望する者はしっかりとした入軍試験と入営後の訓練を受けた上で正規軍や、今後創設される予定の正規軍の下部組織、“州軍”に移籍することが許される。

さらに――――

「近衛軍を拡充し、陸海空の三軍編成とする」

近衛海軍は諸侯軍随一の海軍戦力を保有していた蒼龍公軍、近衛陸軍は諸侯軍最大最強と恐れられる黒龍公軍、そして近衛空軍は紅龍公軍と白龍公軍を現在の近衛軍を嚮導部隊として再編成される。

三軍を指揮下に置く総司令官は正規軍元帥と同格の扱いとなり、引き続き元帥府の一席を占めることとなった。

レクティファールはそこまで告げると、諸侯の列の最前に立つ四人の龍に向かって口を開いた。

「四公には様々な苦労を強いるが、公らの軍が新たな近衛の主戦力と言っても過言ではない。先の戦いで見せた精強振り、近衛でも見せてくれると信じている」

「――――は。我らが鍛えた精兵、きっと殿下のお役に立ちましょう。存分にお使いください」

同時に膝を突く四公を代表して、最年長の蒼龍公マリアが答えた。

この返答によって、嘗て今上皇王の所業に怒り、皇王家から独立した三公爵家も再び皇王家の臣下としてその列に復帰することになる。独立を維持するには精強な軍備が欠かせない。それを差し出すということは、再び臣として礼を尽くすということだからだ。

四公爵以外の諸侯はこの式典が始まる前から三公爵家の皇王家への臣従が決まっていたことを悟り、この諸侯軍解体に異を唱えることが出来る勢力が消え去ったことを知った。

ただ、それはまだ明確にはされていない。実質的に皇王家に従属したとしても、独立宣言を撤回した訳ではないのだ。おそらく、互いに妥協した結果だろう。

これからの摂政の行いを見て、いずれ独立宣言を撤回するに違いない。

しかし、これで皇国建国以来、皇国の軍備の一翼を担った諸侯軍は確実に消滅する。

建国初期の頃、領地の治安維持を任務としていた頃に戻るだけと考えることも出来るが、それでも自分たちを守る鎧が一部欠けてしまったような不安感はそう簡単に拭えるものではなかった。

「諸侯らの軍が抜けた穴は、正規軍と近衛軍、そして各州軍で埋める」

そう言ってこの軍備再編を主導する存在がレクティファールであるからこそ、諸侯らは黙って従うしかない。

実質的に四公爵と議会を従えた摂政は、多少不満がある程度ではとても逆らえる相手ではない。そもそも、不満程度では逆らうほどの理由にはなり得なかった。

先の内乱のときの支持貴族のように、惨めな最期を迎えるようなことにはなりたくない。この摂政は必要とあれば一族を皆殺しにすることさえやりかねないのだ。

「皆には今後もこの国のために身を粉にして働いてもらう。そして、私はそれに報いることを約束しよう」

一斉に跪く諸侯と議員。

文武官は各々の形で最敬礼した。

「では、諸君らの献身に期待する」

式典後、レクティファールの退出と共に三々五々散っていく出席者。

明るい表情を浮かべる者もいれば、不安を隠しきれない者もいた。

そんな彼らに共通することは一つ。

彼らは心の中の大部分を、たった一人の青年によって占められているということ。

そして唯一の違いは、その青年に抱く感情が正であるか負である

かということだった。

皇国歴二〇〇九年黒の第四月、一人の青年が政治の表舞台に躍り出た。

皇城の執務室で夜半まで仕事と戦い、ようやく一段落したということで居住区である後宮に戻ることになったレクティファールは、明日の園遊会で行われる婚約発表について頭を悩ませていた。

理由は、紅龍公姫の二人が出席を見合わせ、白龍公姫メリエラの出席も主治医の権限で禁止すると通知してきたから。

その理由を訪ねるレクティファールに紅龍姫の使いはただ一言、

「自分で聞きに来い」

という伝言を一言一句そのまま伝えるだけだった。

さて、今度はどんな理由で怒られるのか、心当たりが多すぎて悩むレクティファール。

悩んでいてもどうにもならないので、重い足取りで後宮へと向かうのだった。

「――――はあ……」

非常に大きな溜息を零しながら。

第四話「馬鹿（恋＋愛＋嫉妬）＝惚気＋痴情の縺れ」

龍の逆鱗と云えば、古来よりそれに触れれば龍種を激怒させるとして非常に有名だ。

ただ、これが実際に龍種の身体にある鱗の一つかと問われれば、彼らは揃って「否」と答えることだろう。

龍種の逆鱗とは、他の種族に対して比較的――あくまで他の力ある種族と較べて、だが――温厚で、餌や生存するための障害としての敵以外に興味を示さない彼らを容易く怒り狂わせる要素を指している。これは物であったり、人であったり、或いは形のない何かであったりするが、それは大凡にして個体ごと、時期ごとに異なり、何かを特定して“これ”が龍種の逆鱗であると呼べるものは存在しない。

だから、古来より力無き種族は龍種の逆鱗に触れないように静かに暮らし、逆に高度な理性文明を持った龍種も自らの逆鱗に触れられて怒り狂うことを恥と考えるようになり、これを一層巧妙に隠そうとした。

しかしどうしても、いつの間にか本人も気付かぬ内に相手の逆鱗に触れてしまう者がいる。

中には怒りで理性を失う龍種もおり、そんな彼らは多くの国や共同体を滅ぼして同種に粛清されたり、彼らを殺すに足る力を持った

別種族に滅ぼされたりした。

直接的な破壊力という一点に於いて、龍種に勝る種族はいない。

龍種と並び称される神族でさえ世界に干渉することで破壊という現象を引き起こすに過ぎず、一生命体として直接行使できる破壊力では、おそらく龍種を超える種は今日まで存在しなかったに違いない。

故に人々は龍種を畏れ、そして憧れるのかもしれない。

知恵ある者どもは、程度の差こそあれ常に破壊願望を抱えているのだから。

皇都の白龍公の屋敷と後宮で療養するようになったメリエラだが、その怪我が思うように治癒しないことに最初に気付いたのはやはりというか、主治医の一人であるファリエルだった。

彼女は調べる度に悪化する数値を疑問に思い、本来なら簡単に治癒する傷でさえ中々治らないメリエラの身体を徹底的に検査した。

グロリエという“龍殺し”が、これまでの“龍殺し”とは違う特殊な能力を持っている可能性も否定しきれなかったから、その検査は丸一日というこの時期の検査としては長い時間を掛けて、徹底的に行われた。

その間のメリエラといえば、思わしくない体調に気持ちまで萎えたのか、常に消沈した様子を見せていた。

ファリエルとしては妹分のそんな姿は見たくない。何としても原因を突き止めようと躍起になるファリエルだが、彼女の知識を以てしても原因は分からない。唸りながら頭を抱えるファリエルだが、彼女の助手を務めていた女性医官が一つの仮説を思い付いた。

彼女は内乱発生直前に結婚し、ここ最近ようやく新婚らしい生活に戻れた人物で、その境遇故にメリエラの不調の原因に辿り着けたのかもしれない。

彼女は自分の経験に今のメリエラの状況を照合し、十分仮説としては成り立つと結論付けた。

そして、彼女は上司である紅の龍姫に意見する。

「メリエラ様は、摂政殿下に蔑ろにされていると思い込んでしまったのではないでしょうか」

その言葉を聞いた上司はしばし目を瞬かせ、思考が回復するとすぐに件の摂政を罵倒した。

ファリエルも龍族の女であり、そして未婚で恋だの愛だのに多少の幻想を抱く年齢であった。男と女では恋愛観も結婚観も異なると彼女は知っているが、こうも身近でその悪い例を見せ付けられれば腹が立つ。

彼女はすぐに姉に連絡を取ると自分の立場を利用して後宮へと上がり、そこで巫女姫リリシアと面会してメリエラの置かれている状況を説明した。現在の後宮の名目上の責任者は主である摂政を除けば第一妃候補のリリシアであり、彼女を差し置いてファリエルがことを進めることは不可能だった。

実際のところ、好いていない男の婚約者として振舞うなど嫌悪感で気が狂いそうになったが、患者のためと思うことで何とか堪えた。

そんなファリエルの葛藤が報われたのか、リリシアは彼女の言葉を真摯に受け止め、その立場の総てを賭してメリエラを救うことに協力すると約束した。同じ男を伴侶とする彼女も何か思うところがあったのだろうか、所詮仮説であるとファリエルの言葉を笑うこともせず、むしろ納得したように何度も頷いてみせた。

斯くして、レクティファールの知らないところで包囲網は形作られ、やがて彼の伴侶となるべく皇都に集まった女性たちによってそれは完成を迎えるのであった。

ひょっとしたら、その事実こそがレクティファールという青年の問題点を最も的確に証明しているのかもしれない。

すなわち、女性に対してありとあらゆる意味で積極性が無いという問題点である。

呼び出されたにも関わらず、レクティファールという男は自分のどの点に問題があったのか正確に察することが出来なかった。彼にとって自分とはどこまで行っても欠陥ばかりが目立つ存在で、何処が悪いと一つに原因を絞り込むことは難しかったのだ。

さて、どれが原因だろうと考えながら後宮に入ったレクティファール。後宮に足を踏み入れた途端、後宮護衛部隊である『機甲乙女騎士団』の女性騎士に取り囲まれたときは思わず「何がやらかしたか」と顔を引き攣らせたが、彼女たちが必要最低限の礼を示すだけで、それ以上の干渉をしてこなかったこともありレクティファールはほっと安堵した。

今後宮には彼しか男がいない。

何処か空気までも違うように感じられ、彼は家主でありながら自分の家で疎外感と味わうという妙な状況に陥っていた。

護衛たちに話しかけようにも切っ掛けがなく、仕方なく乙女騎士団の騎士たちに気付かれぬ程度に周囲を観察するレクティファール。

後宮とは言っても、建築様式そのものは皇城と何ら変わりない。ただ、こちらは生活空間として設計されているらしく、皇城よりは柔らかい印象を受けた。

調度品は皇城のそれよりも温かみを感じる意匠のものが多く、内装も暖色系で纏められている。各皇妃の居住区画ともなれば彼女たちの好みに応じて内装や調度品が変更されることが多いが、今レクティファールが歩いている廊下などは共同空間ということもあってこれといった特色は見られなかった。

「――――――」

次にレクティファールが視線を向けたのは、護衛の女性騎士たちだった。

女性らしい丸みを帯びた身体を各々個人に支給された軍装と軽鎧で包んだ彼女らは、他国の王侯貴族や高官と顔を合わせる機会の多い皇族の護衛という役目柄、純粋な戦闘技能の高さだけではなく優れた容姿も選抜基準になっているだけあって非常に華やかな印象を受ける。

実際には華やかさだけではなく皇国随一の武技の腕も持ち、近衛軍の中で武道大会を開けば並み居る男共を薙ぎ倒して優勝することも少なくない。それが原因か、市井の男たちは彼女たちに憧れにも似た感情を持っているが、近衛軍や正規軍の男たちは彼女らだけは絶対に妻にしたくないと思っているらしい。

そんな世の男共の戦乙女評を知らないレクティファールは、ただ

綺麗な人たちだなぁと思うだけだったが。

侵入者対策に入り組んだ廊下を五分ほど歩き、やがてレクティファールは一つの扉の前に案内された。

「ここは？」

「本来はお妃様方が集まる談話室です。姫様方はこちらで殿下をお待ちになっています」

「――――ほう」

そう言われると、何故か磨き上げられた高級木材の扉が地獄への門に見えてくるという不思議を味わうレクティファール。まるで問題を起こして職員室に呼び出された学生のような気分だった。

出来るならこのまま自室に引き篭もりたいのだが、ここで逃げるとあとが怖すぎる。ウィリィアは療養中だったが、彼女を上回る戦闘能力を有する人々がこの扉の向こうにいる筈だ。

「仕方がない、か」

諸々の覚悟を決め、レクティファールは一歩踏み出した。

その仕草を見て女性騎士の一人が軽く扉を叩くと、レクティファールにちらりと目配せした。

「開けてくれ」

レクティファールの言葉を受け、女性騎士が重い扉を押し開ける。

蝋燭の薄明かりに照らされた広い談話室の中央に、七つの影が見えた。

「――――何故ここにミレイディアさんまでおられるのか」

「いや、だって乙女の敵をボコり倒すって聞いたから」

「――――――」

そういうあなたはいい年して乙女でしたね、とは流石に口に出さない。

まあ、口に出さなくともミレイディアはレクティファールの失礼な思考に気付いたらしく、額に青筋浮かべて拳を震わせていたが。

「麗しのお義姉さまに向かってなんか失礼なこと考えてないかい？」

「滅相もない」

最近表情の隠し方を覚えたレクティファール。

しれっと答えてミレイディアの影にいる者たちに近付いた。

彼女たちは談話室の中央にある長椅子の周囲に集まり、レクティファールを待っていた。

「リーデさんとアリアさんまで呼ばれていたとは、正直驚きました」

「わたしも驚きました。――――後宮に来るのは始めてですし……」

士族出身で、上流階級独特の教育を受けてこなかったリーデにとって、後宮とは余りにも場違いに感じられる場所らしい。対してアリアはリリシアに招かれたこともあり、落ち着いた様子でレクティファールに笑い掛けてきた。

「こうして同世代と話すというのは、やはり楽しいものですよ。殿下のお許しがいただけるなら、これからもここに集まりたいくらいです」

「私は構いません。ただ、後宮のことはリリシアさんが取り仕切っているので……」

「わたくしも構いません。レクト様を支えることに身分は関係ありませんし。――――ああ、レクト様、こうやって温もりを感じるのは久し振りです～～……ごろごろ……」

いち早くレクティファールに抱き着いたリリシアが弛んだ表情で答える。

その頭を撫でるレクティファール。その表情は婚約者というより妹を見る兄のそれで、リリシアが正気であったらむくれてしまうかもしれない。ただ、今のリリシアは木天蓼を目の前にした猫のように喉を鳴らすだけで、とてもそこまで頭が回る状態ではなかった。

当代の巫女姫は猫系の獣人ではなかった筈なのだが、その姿はどう見ても猫だった。

「――――本当、どこでも女引っ掛けるのね。本当は何処かの貴族の放蕩息子なんじゃない？」

「ははは、私は何処にでもいる善良な摂政です。多分、両親も平凡な小市民だったと思いますよ」

ファリエルの冷たい視線も笑って済ませてしまうレクティファール。慣れた対応だった。

親に対する情など、この世界に来た段階で放棄してしまった。本能的にもう帰れないと思ってしまったのか、それとも単に諦めてしまったのか、或いは両親に対する執着心など最初からその程度のものであったのか。

少なくとも、両親と今目の前にいる女性たちのどちらかを選べと言われたら、たとえ両親を選べば元世界に帰れるとしても、今このとき自分の手が届く範囲にいる彼女たちを選ぶだろう。

レクティファールは諦めの良い男だが、諦める必要がなければ別にその選択肢を選んだりしない。彼にとって、彼女たちは血の繋がった両親よりは大切な存在だった。

だが、彼はそれを彼女たちに伝えたりはしない。

彼女たちを選ぶことはあくまでも自分の問題だと割り切り、自分の中で総てを結論づけてしまう。

それがときとして、自分の大切な存在を脅かすことになると気付くには、彼はまだ幼すぎた。

「さて、そろそろ本題に入ろうか、レクト」

不機嫌な妹を宥めるようにその肩に手を置き、フェリエルが示したのは談話室の長椅子に浅く腰掛けたメリエラ。メリエラは俯いたままでレクティファールの顔を見ようともせず、硝子碗の中で揺れる琥珀色の飲み物を見詰めているだけだ。

その態度に、レクティファールの眉がぴくりと動いた。

初めて見る光景だった。

「はっきり言おう、皇都帰還よりこっちどうもメリエラの容態が思わしくない。日常生活には支障がないが、このままの精神状態だと、メリエラの女としての、母としての将来に影響するかもしれない。我々龍族の身体は、そういう風に出来ている」

「――――――――」

女、母としての将来というのが何を意味しているのか、そちら方面の単語には疎いレクティファールにも大凡察することは出来た。

出生率の低い龍族の女性にとって、それは己の存在を否定されることに等しいだろう。

だが、フェリエルの言っていることは、これまでの龍族の歴史から導かれた厳然たる事実だった。

知恵ある者どもの中でも特殊な生態を持つ龍種は、その生命体としての基盤を精神に置いている。精神が健康であれば身体もそれに引っ張られるが、精神が病んだ状態ではやはり身体もそれに引き摺られてしまう。

『ウィルマグス』にいた頃よりメリエラの容態が良くならないというのは、あの頃よりもメリエラの精神状態がよくないということ。そしてメリエラの母としての将来に影響するような事柄に深く関わっているのは、間違いなくレクティファールだった。

「――――理由をご説明願えますか」

レクティファールは自分に抱き着いたままのリリシアを引き剥がすと、自分を見上げるその視線から逃れるように彼女をメリエラの斜向かいに降ろし、自分はその隣に座った。

真正面に座るメリエラが、びくりと肩を震わせるのが見えた。

「本来ならこのような場で、メリエラを晒し者にするようなことはしなくないんだが……」

フェリエルとファリエル、そしてリーデとアリアが残った長椅子に座ると、口の字に顔を合わせる形になった。上座に座るレクティファールとリリシアの右手に、フェリエルたちがいる。

その位置のせいで、レクティファールから見えるフェリエルの表情はよく判らなかった。

怒っているようにも、悲しんでいるようにも見えた。

「ここにいるのは、おそらくレクトが今後同じことをしたときにそれを止められる面子だ。だから、敢えて集まってもらった」

「――――やはり、私が原因ですか」

「原因というのは少し違う。正確には、切っ掛けというべきだろうな」

原因を挙げるとするなら、それはレクティファールとメリエラの双方に、そして今の二人の立場にあった。

メリエラの肩を抱くように、ミレイディアがその隣に腰を下ろす。

そして妹の隣に座る男を睨んだ。

「あんたは別に悪いことをした訳じゃない。ただ、無知過ぎたんだ」

「無知、とは」

「あんたにとって自分が取るに足らない存在だっていうのは、あんたの問題だから口出ししない。けどね、そんなあんたが必要な奴もいるということをあんたは知ろうとしなかった。多分、知る意味を見出していなかったんだろうけどね」

自分に価値がないと思っているから、自分に価値を見出している人の想いに気付けなかった。

レクティファールという青年が抱える致命的な精神的欠陥は、自分に価値を見出せないこと、同時に自分に向けられる想いもまた、理解出来ないことだった。

「メリエラはあんたの騎龍だ。身も心も、全部あんたに預けている。だけどあんたは、メリエラを縛ることが出来なかった」

「確かにその通りです。ですが、私は所詮人とは違う、いつ耐用限界を迎えるかも分からない“兵器”ですよ」

“皇剣”に適合した皇太子や皇王とて、永遠に“皇剣”を制御しきれる訳ではない。いつかその身体は“皇剣”を制御するための機

能を劣化によって失い、“皇剣”によって滅びる。それは、どうやったところで避けようがない。

特にレクティファールの場合は無理やり、短時間で“皇剣”を継承した経緯がある。耐用限界を迎えるまでの時間が他の皇王より短い可能性も否定し切れない。

だからレクティファールは、必要以上に他人に近付くことをしなかった。

いつ消えるかも分からない自分が、他人に不必要なまでに接触することを避けたのだった。

「それも理解している。わたしもファリエルもそれは納得しているんだ。多分、他の者もな」

ファリエルの言葉に、メリエラ以外の女たちが頷いた。

彼女らにとっては、それは受け入れた上で折り合いを付けなくてはならない事柄だった。

たとえ彼女たちがレクティファールをどれだけ必要としても、また彼女たちがレクティファールに必要とされても、そんな遠慮に似た距離が彼らには必要だった。

「だが、メリエラは違う」

「――――――」

何となく、レクティファールには理解出来た。

いや、出来てしまったと言うべきか。

メリエラという女性を知る彼には、その理由が判る。

「――――メリエラにとって、君は皇太子や摂政以前に男だったんだ。手の掛かる弟、心配ばかり掛ける息子、そして手綱を手放したらどこかに飛んでいってしまう異性。メリエラとわたしたちの間には、恐ろしく深い理解の溝がある」

ただの使命感で済ませるには、二人の距離は近すぎた。

だからメリエラは婚約よりも先に『騎従の契約』を結ぶことを決意し、レクティファールもまたメリエラを一番近くに置いていた。

互いを守るために。

「君はメリエラを守るため、メリエラを遠ざけようとした。帝国の姫に傷付けられたメリエラの姿を知り、メリエラを失う可能性に気付いてしまった」

「――――――」

「あのとき、あの熾烈な要塞防衛戦でメリエラを直接救わなかったことは正しい判断だよ。あのとき君がメリエラを救っていたら、メリエラは一生自分を責め続ける人生を送っていた。摂政の騎龍であるのに、摂政としての君の邪魔をしたとな」

助けなかったのではない、助けられなかったのだ。

あのとき、グロリエに翻弄されるメリエラの姿を捉えていたとしても、レクティファールにはそれを救う術がなかった。

摂政として、あの場の最高責任者として、個人的な感情で動くことは許されない。動けば、自分にとってのメリエラと同じ、誰かにとって掛け替えのない誰かを徒に殺すことになる。自分のためにも、メリエラのためにも、動くことは出来なかった。

「君は臆病だ。だから、メリエラが戦うことを嫌う。本人の意思を無視してまでな」

そして、レクティファールはその我侭を通すだけの力がある。方々に手を回してメリエラを戦場から遠ざけることは、レクティファールにとって難しいことではない。

レクティファールは疲れたように大きく溜息を吐き、そして俯いた。

人を理解しようとしなかったツケが回ってきた、そう思った。

「――――それが、原因ですか」

「一因だ。それだけが総てではない」

フェリエルにとってみれば、メリエラは余りにも若すぎて、一途すぎた。本人の性格もあったのだろう、龍族の女の典型のように、ただ一人を過分なほど強く想うようになってしまった。

だから、その男に否定されたと思い込んだ途端、身体に変調をきたした。

女として必要とされていないと考えれば、その生殖能力を低下させ、騎龍として必要とされていないと考えれば、怪我の治りが遅くなった。

「――――そこにいるリーデと君が情を交わしたこと、それもメリエラにとって納得し難いことだったのだろうな」

「――――――――――――！」

リーデとメリエラが、フェリエルの言葉に身体を戦慄かせた。

「龍族の女は嫉妬深いが、皇妃としてそれでは不味い。だから、メリエラは無理やりにでも自分を納得させたのだろうな、結局、納得し切る前に身体が変調をわたしたちに伝えてきたんだが」

「では、わたしが殿下のお側に上がったことが、メリエラ様にご心痛を強いたと……」

「馬鹿な、それが事実でもメリエラの件はリーデのせいではない。そこにいる馬鹿摂政が、捕らえた獲物に止めを刺すことも治療することもしなかったせいだ。傷なんて勝手に治ると思い込んでな」

フェリエルの言葉には、レクティファールの立場に対する理解は確かにあった。

だが、レクティファール個人に対する怒りもまた確かに存在した。

項垂れたまま、床の絨毯を見詰めるレクティファール。

そんな彼を労るように、静かに語りかける者がいた。

「殿下、殿下はわたしを必要としてくださいましたね」

「アリア……」

顔を上げ、微笑を見せるアリアに向き直るレクティファール。

そこでようやくレクティファールは気付いた。その笑顔が、嘗てのような作り物じみたそれではなくなっていることに。

「殿下はわたしに、自分だけの花になれと仰りましたね。自分だけの庭に咲く花になれと、わたしは、それが嬉しかった。ただ一人のためだけの花というものが、あれほど甘美な未来像であるとはわたしも知りませんでした」

それは分り易い人生ではある。

ただ一人を想い、ただ一人に尽し、総てを受け入れ、総てを相手の願い通りにすれば良いのだから。

しかし、それも所詮、他人から見た姿に過ぎない。

「わたしは何があろうとも、殿下の花で在り続けましょう。世話をする者がいなくなれば枯れ、共に逝く花でありましょう。誰がなんと言おうと、わたしはそれで満足です」

「――――――――君の人生はどうする？　君だけの願いは何処にある？」

「殿下がわたしを“アリア”という名の花として愛し続けてくださるのなら、それはわたしの生きた証、生きる理由には十分です。いつか殿下の子を生み、育てられるのなら、それもまたわたしの生きた意味になるでしょう。それに、殿下に一番初めに必要とされた女だと、自負出来ます」

アリアの笑顔に翳りはない。

造られた庭でしか生きられない花の人生さえ、それは捉え方一つで大きな幸せに変わるのだと彼女の笑顔は語っている。

「リーデ様も、同じではないですか？」

「――――確かに、アリア様の仰る通りです」

アリアの言葉に、リーデは深く頷いた。

彼女にとっては、レクティファールという男が進む道を共に進むことが何よりの幸せだ。

父の遺志、母の父への想いを理解した彼女にとって、レクティファールが必要としたときに必要とする役目を負うことは自分を満足させる手段の一つだった。

それが参謀としてなのか、女としてなのかは問題ではない。必要とされるということが、ある種の自己満足への第一歩なのだ。

「――――――――あんた、本当に面白い女の趣味してるわ。あたしもその一人なのかと思うと、ちょっとヤだけど」

ミレイディアはアリアとリーデの側妃候補二人の言葉を聞き、レクティファールを珍獣でも見るような顔で眺めた。

そんな視線を受けて、レクティファールは苦笑する。

「――――大丈夫、ミレイディアさんは多分含まれていませんから」

「そいつは重畳。じゃあ、後はあんた次第だよ、メリエラ」

そう言って、ミレイディアはぽんと隣りに座るメリエラの肩を叩いた。

これまで黙っていたメリエラが、恐る恐るといった風に顔を上げた。

「レクト、あのね……」

何故だろうか、ここでメリエラの言葉を聞いてはいけないとレクティファールは思った。

言わせてはならない、言わせる前に自分から言わなくてはならないと強く思った。

だから、彼はメリエラの言葉を遮った。

本人も自覚していない、男としての小さな矜持に従って。

「メリア、この間言った通り、私には君が必要だ。これは誰かが代わりになることは出来ないし、君が誰かの代わりになることもない」

「でも、わたしは弱いわ。父の十分の一も力を持たない、弱い龍よ。“皇剣”使いの騎龍として、それは致命的なことじゃない」

メリエラの口調は、どこか投げ遣りだった。

彼女にとって、龍族であり、力ある種族であるというのはレクティファールの傍にいるための免状のようなものだ。それ以外には、何も無いと思っているから。

それでも『ウィルマグス』で自分を必要だと言ってくれたレクティファールがいたから、彼女はこうして皇都に戻ってきた。だが、そこで彼女はリーデという側妃を初めて目の当たりにする。

力のない種族である筈のリーデは、力があるメリエラが渇望して已まない場所にあっさりと居座ってしまった。

レクティファールの隣という特等席に。

それは、メリエラにとって自身の存在意義を脅かされることで、存在を否定されることと同義だった。

しかし、それはレクティファールにとっては毫ほどの意味もないこと。どうでもいいことだ。

「なるほど、ならばそんな騎龍は私はいらない」

「――――っ、ならわたしは白龍宮に……」

レクティファールの言葉に衝撃を受け、涙を浮かべたメリエラは長椅子から立ち上がった。

しかし、レクティファールはその手を強く握り締め、引き寄せた。

「――――だから……」

すとん、とメリエラの身体がレクティファールの腕の中に収まった。

驚いたメリエラの顔が、すぐ近くにある。

「君は単なるメリエラとして私の傍にいろ。ここにいろ。私が帰る、この場所にいろ」

「レクト……っ、でもわたしは……」

「弱いなんて私には関係ない。でも君が弱いことを嫌うなら、強くなればいい。私はそれを待つぐらいどうとも思わない」

レクティファールにとって、メリエラが弱いか強いかはどうでもいいことだ。

強かろうと弱かろうと、レクティファールがメリエラを守ることに変わりはないし、レクティファールがメリエラに抱く感情が変わることもない。

「どうせ、今上皇王の喪が明けるまでは正式に婚礼の儀を挙げることは出来ないんだ。それまで悩んで、それでもここにいたくないというなら、私が責任を持ってカールに君を返す。君の経歴に傷も付けないし、必要なら嫁入り先を探そう」

「――――何でそこまで……そこまでしてくれるならいっそ……」

ただの騎龍として扱ってくれた方が楽なのに、強くなれと命令してくれたほうが楽なのに。メリエラはそんな言葉を視線に込めた。

レクティファールはそれを性格に読み取り、答える。

「私が傍にいて欲しいのはメリエラという女性だ。龍族であっても無くても、軍人でなくとも、貴族でなくとも関係ない」

もっと早くこう言うべきだった。

レクティファールはここでようやくそれに気付いた。

他人と積極的に関わってこなかったから、人に何かを伝えるということを怠るようになってしまった。

これは改善すべきことだな――――レクティファールは自嘲気味に小さく笑った。

「――――どうする、メリア」

拒まれることも当然考えた。

この腕の中の愛し人を失うことも考えた。

だが、愛しいと想うなら手放すことも怖くないと思えた。

こんな泣き顔から彼女を開放できるなら、自分は――――

「――――――――分かったわ、レクト」

「ああ」

――――神さえ殺す。

「あのとき言った通り、わたしはあなたを支える」

「助かる」

そして、この笑顔を得るためなら――――

「だから、わたしを見ていて、どちらかが死ぬまで」

「望むところだ」

――――神を殺す自分さえ殺してみせよう。

「ずっる～～い！　ですっ！　わたくしも……」

ぽーんとレクティファールの背中に飛び乗ったリリシアがぶんむくれた顔で抗議の声を上げた。

それに続くように、談話室の面々が次々と声を発する。

「まあ、君の趣味は理解した。ちょっと弱った女性が好みなんだな、分かった、精一杯努力しよう」

「姉さん、こいつは女を弱らせてものにする外道よ。策に嵌っちゃ駄目」

「うーん、初代といいあんたといい、皇王ってのは女にだらしないってのが選考基準なのかねぇ……」

「わたしとしては、ちゃんと花に水をやってくだされればそれだけで結構ですわ。だけど、水をくれないとこちらから出向くかもしれません」

「――――れ、れくと……って、わたしにはやっぱり言えないっ！でも言えないと不味いって参謀としての勘が叫んでる……！」

何とも姦しい女性陣に、レクティファールは苦笑するしかない。

彼の腕の中のメリエラも同じように笑っており、二人は顔を見合わせてさらに笑みを深めた。

自分の周りで好き勝手に喋る彼女らを前にして、レクティファールは“皇剣”の力を望んだ。

少しでも、ほんの少しでも多くの力を、と。

「あ」

だが突然、レクティファールの脳裏に昼間持ち込まれた案件の一つが急浮上してきた。

それはおそらく、その案件が彼女たちに無関係ではないからだろう。

彼は忘れないうちに、それを伝えることにした。

「あの、皆さんに一つ報告が……」

「何？　どうしたのレクト」

腕の中から問い掛ける声。

レクティファールは何故か噴き出る冷や汗を背中に感じながら、彼女らの視線の先で口を開いた。

「――――実は帝国とイズモから、正妃を迎えることに……」

「ふんっ！！」

言葉の途中で小さな裂帛と共に、ごりっ、と鳩尾に重い一撃が入った。

「――っ！？」

痛みで声も出ないレクティファール。

その一撃を決めたメリエラはぴょんとその腕の中から飛び出すと、今さっき自分に愛の告白をした男を睨んだ。

「空気の読めない男って、痛い目を見るの。覚えておいてねレクト」

「～～～～～～～っ！」

何度も頷くレクティファール。頷かないと追撃は必至だ。

「とりあえず、お詫びを込めて今晩は徹夜で愛を囁く方向でよろしくね」

「――――明日、仕事、あるんですが……」

途切れ途切れに反論するレクティファール。“皇剣”があって良かった、無ければ、きっと今頃自分の鳩尾は風通しが良くなっている。

だが、そんなレクティファールに対するメリエラたちの反応は冷たいものだった。

「妻に愛を伝えることは、夫の仕事よ。恋人に愛を囁くこともね」

「――――――――仰る通りです……」

反論したら第二撃だと本能で察し、さめざめと涙を流すレクティファール。

とりあえず明日のために精力剤でも貰おうかと思った。

閑話ノ壱「思惑と呼ばれるものたち」

レクティファールにとって、後宮と離宮で過ごした昨夜はあの北地での戦いに匹敵する苦行であった。

後宮では婚約者とその候補者相手に一人ずつ、睦言には少し色気の足りない言葉を交わし、ときには居心地が悪いほどお互いを意識し、ときに無い頭を捻りに捻った言葉にあっさり駄目を出されたりした。

日付が変わる頃までは後宮にいたレクティファールだが、そこでの役割を終えるとすぐに二つの離宮を梯子する羽目になった。

星天宮の敷地内にあり、後宮に最も近い離宮、摂政の命令で新たに庭園に植えられた花に因んで『マリエの離宮』と呼ばれるようになったそこでは、レクティファールそれこそありとあらゆるものを搾り出すことになった。彼自身、彼女と想いを通じることに抵抗は殆ど無いが、先程まで別の女性と夜の寝室で語り合っていたという事実を忘れることが出来るはずも無く、微妙な罪悪感を終始覚え続けることになった。

しかしそこで燃え尽きることなく、深夜の星天宮をもう一つの離宮に向けて突っ走ったレクティファールは果たして勇者なのか馬鹿なのか、或いは空気の読めない単なる道化なのか。向かった先で側妃候補の女性が彼を歓迎して夜食を振舞ってくれたことに涙を流しそうになったレクティファールだが、彼は飴と鞭という言葉をこの

あと身を以て学習することになる。

流石英雄の娘で、皇国随一の戦上手に育てられた女性だ。レクティファールが自分に対して負い目を持っていると感じ取るや否や、一気に攻め込んでこの夜一番の戦果を挙げた。具体的には、一番睦言らしい睦言を思う存分堪能した。

そんな風に怒涛の一夜を過ごすことになったレクティファールだが、翌朝最後まで一緒にいた側妃候補の手作りの朝食を食べ、さらに柔らかい笑顔と「いってらっしゃいませ」の言葉で見送られたお陰で気分は最高潮に近かった。

げに悲しきは男の性質（さが）。あれだけ精神的に痛めつけられても決してめげず、新妻に見送って貰えるという小さな幸せで新婚気分に浸り、足取り軽く鼻歌でも歌いそうな摂政を見た皇城の職員たち――特に男たち――は、哀れみの視線を隠しきれ無かった。

ひょっとしたら、この男、近いうちに皇国史上もっともお手軽な皇王として名を残すかもしれない。

皇城でレクティファールを待っていたのは、昼に迫った各国代表を集めた園遊会の準備と、新たに宰相となったハイデルのしかめ面、そして山積する仕事だった。

「――――殿下、早速で申し訳ありませぬが、イズモと帝国、両国との縁組について皇国としての方針を決定していただきたい」

ハイデルには官僚たち三院の頂点、宰相として摂政の意志を確認する必要があった。

他国との縁組となれば当然それは外交に含まれ、その交渉を担当する外務院はハイデルの麾下にある。ハイデル個人としては先の戦いでの罪責を雪ぐ為、そして自分を宰相に任じたレクティファールの名誉を守る為、仕事上の小さな失敗も許すつもりはなかった。

そのせいで、彼の表情は昨日からずっと険しい。

レクティファールとしては、もう少し肩の力を抜いて欲しかった。

「ハイデル、とりあえずもう少し力を抜いたらどうだ。そんな顔では部下も萎縮するのではないか？」

「この程度で萎縮する部下ならとりあえず必要ありませぬ。いずれ時間が出来たら、鍛え直しまする」

「――――――――――そうか、まあ、お前の部下だ。潰さない程度にな」

「御意」

やはりというか、頷くハイデルの表情は厳しいままだった。レクティファールはハイデルの言葉をとりあえず信じることに決め、執務用の机に広げられた二つの資料を見下ろした。

共に、今回レクティファールに腰入れする予定の姫君たちの資料だった。外務院情報局、そして皇国情報院が纏めたものだ。

「しかし、方針と言ってもこれは――――」

どちらの資料を見ても、両国の考えが透けて見える。但し、その考えも皇国側の解釈次第で一八〇度見方が変わってくるのだから恐ろしい。

例えば帝国側。

「――――新たに我が国と国境を接することになった帝国内の一王国の姫君……帝位継承順位は末席に近いが……」

「帝位継承権を持っていることに変わりはありませぬ。もしこの姫

君の間に子が生まれれば、我が国は帝国の帝位に干渉することが可能になりますな」

「だが、万が一にも我が国の内部で彼女が害されれば――――」

「我らの意図しない時期に、帝国との戦端が開かれることになりましょう。無論、帝国ならばこういった類の理由がなくとも我が国に攻めて来るでしょうが」

だが、開戦の大義名分の有無は大きい。

大義名分を得た帝国側は士気も旺盛で周辺国との連携も取りやすく、対して皇国は準備も足りず周辺国の顔色を覗いながらの戦いになる。これだけで負けるほど皇国は脆弱ではないが、余計な損害を蒙ることにはなるだろう。

その余計な損害が、最終的な勝敗を左右する可能性も低くない。

そう考えれば、ここで余計な火種は抱え込みたくないものだが――――

「我が国の現状を思えば、選択肢などあるまいな」

「は、この縁組で我が国と帝国は縁戚関係になりまする。なれば、大義無きまま我が国を攻めることは帝国にとっても痛手。今は互い

に傷を癒すときでございましょう」

「時間稼ぎか、この姫も災難だな」

レクティファールは資料の一枚目に張り付けられた写真を見る。

気弱そうな、それでいてどこかあの『龍殺し』に似た雰囲気がある小娘だった。

「姫にとってこの輿入れが災難になるかどうかは、殿下次第にございます」

「――――あの帝国の姫を、我が国民が歓迎するか？」

「それも含めての、殿下の役目、殿下のお考えでございます」

ハイデルの口調にも、表情にも、帝国の姫君に対する隔意は見えない。その老練さ故に、上手く隠しているのかもしれないが、この老人の性格を思えばその可能性は低い。

もしもこの姫君がレクティファールの妃となれば、彼女が皇国に背く行いをしない限り、彼は命を賭して忠義を尽くすだろう。

レクティファールは嘆息し、頷いた。

「分かった。良いようにせよ」

「は」

ハイデルは頭を垂れ、主君の言葉を受け取った。

レクティファールはそんな忠臣の仕草にほんの少しの感銘も受けた様子はなく、ただ次の資料に目を移した。

ハイデルは主君の歓心を得ることを望んでいないと、レクティファールは本能的に理解していた。

彼にとって、宰相の職務と地位、そして功績は総てが贖罪の一側面に過ぎないのだから。

レクティファールは国家への忠義が人の形を取ったような宰相から視線を外し、机の上のもう一つの資料を見た。

「そしてイズモ。こちらは体の良い厄介払いとも取れるが……」

「確かに、天子陛下の妹君とはいえ、生活に影響が出るほどの障害を持つ者を他国に輿入れさせるなど、通常であれば考えられませぬ。ですが、イズモは最後の神々の国、かの皇女もまた、神々の血を受け継いでおりますれば」

「ただの厄介払いということは考えられない、と」

レクティファールは資料に記された内容を確認し、ハイデルの言葉が事実であることを知る。

皇国情報院が添付してきた資料の中に、それはあった。

（――――ふうむ、イズモ皇族でも珍しい能力の保持者か……）

“浄天眼”――――この世界に対して無限に近い干渉能力を持つ神々が、世界中を見通していた力の欠片。

それは世界の何処でも見通すことが出来、何時如何なる場所に術者が居ても、妨害されない限りは神々の力を借りる神霊魔法が発現可能な理由でもあった。

（何とも恐ろしい種族だ、神とは）

レクティファールは神々の力の片鱗を“皇剣”の情報群から幾つか見つけ出し、嘆息した。

神々とは、嘗てこの世界を支配していた種の一つと言われている。

彼らは大いなる力を持ち、自分に対して向けられる精神的なエネルギーを糧として生きていた。精神という曖昧なものが糧になる理由は、おそらく龍種などの高位知性体と同じ理由なのだろう。つまり、この世界に存在する肉体と、薄布一枚挟んだ異次元に存在すると考えられている精神。その精神側に存在の比重が偏っている為、精神側こそが彼らを構成する主な要素に成り得たということだ。

こういった、精神側に重きを置いた種族というものは、意外と多い。

精霊種や妖精種、吸精種などは肉体的要素が辛うじて精神的要素を上回っている種族だが、それでも人間種や混血種、獣人などと比べてその存在比率に於ける精神的要素が多い。彼らは肉体的な損傷を精神的要素によって修復することが可能であり、その不死性から、嘗て文明が未成熟だった頃はごく一般的に“化け物”“魔物”と呼ばれていた。

もっとも、今では彼らの生態は多くが解き明かされており、その神秘性や不明性は過去のものとなっている。そして、彼らは国家の一員として市民権を得た。

「神々の血と、力を受け継ぐ現“帝”の妹姫。正直に申し上げれば、それがしも最初この話を聞いたときは新手の外交攻撃かと思いました。殿下の下で皇国が団結する前に、この国に対して一定の影響力を確保しようと考えているのでは、と」

「それも考えられなくはないな。建前上皇妃は軍務以外の公職に就けないが、何、皇王の寵愛を利用すれば十分に政に手を出せる」

「――――仮にイズモ側がよからぬことを考えていても、それを殿下が自覚している時点で、イズモ側の策略の何割かは封じたことになりますな」

ハイデルは難しい顔のまま、低い声で言った。

レクティファールは一瞬きょとんとした顔を見せたが、すぐに苦笑する。

「所詮、素人の考えることだ。向こうにも手練はいる、いつの間にか骨抜きにされている可能性も否定出来ない」

「幻術魔法や薬物は“皇剣”によって完全に無効化される筈。個人的な依存であれば、それは殿下のお心一つでは？」

「――――それはあれか、暗に女には気を付けろとそう言っているのか」

「臣として、お家の中のことにまで口を出す気は毛頭ありませぬ。ただ、主君としての職務に影響があるようであれば、それをお諫めするも臣下の務めでございます」

「なるほどな、肝に銘じておくとしよう」

レクティファール個人としてならば、異性と何らかの問題が発生してもそれは他者の介入するようなものではない。民事に行政が不必要に介入しないのは、皇国の常識だった。

「では、イズモの申し出は受けるということでよろしいですな？」

「――――“天照”を祀る神子を嫁がせると言ってきているんだ。断れまい」

イズモの皇族のうち、天子――――“帝”の直系のみが世界最強の異世界戦艦を制御することが出来る。当然、皇国へと輿入れすることになる皇女もまた、その資格を有していた。

他国に自国の国防の要を引き渡すというイズモの申し出に対し、皇国もまたそれなりの返答をしなくてはならない。

幸いなことに、皇国とイズモは争いの種を随分昔に萌芽させ、刈り取ってしまった。

それは天子に近しい一部の者たちがイズモ地方出身者が皇王になったことを利用して、皇国領土の一部であったレムリア海の島嶼を不法占拠したことに起因する諍いであったが、その際、両国は自らの争いが他国に利することはあれど、自分たちに益は齎さないと学んだ。

“皇剣”と“天照”が激突するようなことになれば、それはアルマダ大陸東部に未曾有の災厄を発生させ、ただ両国を傷付けるだけ。そして多大な損害を被って得られる国益も、想定される損害を補うには大分不足している。

星さえ砕ける概念兵器と、星の海の軍船（いくさぶね）。この二つは、決して敵として相見えてはならない。この二つは、本来我々のような未成熟な子どもが扱うべき代物ではない――――当時、両国の軍勢が睨み合うレムリア海で、イズモ水軍の提督にして“天照”の艦長代理を務めていた春日宮伊周（かすがのみやこれちか）はそう兄である当時の天子に書き送っている。

実際にイズモの誇る最新鋭艦を容易く海の藻屑に変えた“皇剣”の戦闘能力を目の当たりにした春日宮親王は、“皇剣”に対し、“天照”の能力を総て解き放ちようやく五分以上の戦いになると認識したのだ。

弟の送った書翰を読んだ当時の天子は、“皇剣”という旧帝国の遺産を甘く見ていた自分に気付き、そしてそんな自分と同じ認識で以て物事を判断して皇国との戦争を望んだ者たちを更迭、急ぎ皇国との和議に走った。

元々、皇国側は独立時より“皇剣”を含む超兵器の危険性をある程度認識していたから、和議が纏まるのは早かった。

その和議の条件として、両国は当時のお互いの領土をそれぞれ承認し合い、今に至っている。

超兵器保有国同士の戦争がある種の禁忌になったのは、この一件以来だった。

「――――或いは、“天照”では対処できない問題に我々の手を借りようという可能性も否定できませぬが……」

ハイデルは別の資料を机の上に広げた。

それは幾つもの色に塗り分けられた、八つの洲から成るイズモの全国地図だった。

「イズモの首都、『天陽』の周辺は、現イズモ政権――――つまり“帝”の一族による世襲に否定的な瀬川氏が支配しております」

地図の中央辺り、『天陽』と記され、紫色で塗り潰された港湾都市の周辺は赤で塗り潰されている。この赤が瀬川氏の支配地域ということなのだろう。

嘗てはごく一部の有力諸侯が占有していた“執政”の地位。その有力諸侯が衰えた結果、今のイズモは実質的な内乱状態にある。

国家の総ての権限が“帝”に集約されていることもあって国体が揺らぐような事態には陥っていないが、今後の動静次第ではイズモという国家が潰えるかもしれない。

そして『イズモ』という国家が消えるということは、皇国は東方にも多大な圧力を背負うことになる。

今でこそ陸軍は最低限、空海軍が主力の東方だが、現有戦力で東方が守りきれるかどうかは定かではない。何せ、イズモには皇国空海軍の全戦力を投入しても抗しきれない超兵器、天子が艦長を務めるが故に天空御所との異名をとる空中戦艦“天照”があるのだから。

「瀬川氏は現当主の母が先代の“帝”の妹君。つまり天子陛下の従兄弟です。“天照”を完全制御するほどの管理権限は持っていないでしょうが、都に攻め上がり、“天照”を完全制御可能な皇族を手中に納めれば……」

「――――“天照”を手に入れられる」

“天照”を手に入れるということは、イズモ神州連合を手に入れることと同義。

他の諸侯が反発しても、“天照”を用いればそれを圧し潰すことは容易い。

「我々としては、嘗ての戦訓を共有している現政権が存続することこそが国益に適うこと。特に瀬川氏は近年一気に勢力を拡大した新興の家です。当主は武に優れ、知に秀でていると聞きますが、少し性急なところがあるとのこと。特に大陸に対する強硬姿勢はそれがしでも知っている程です」

“天照”とその海軍力を用い、大陸の諸国家に対する圧倒的な優

位を確立するべきという意見は、イズモ国内でも根強い。確かにレムリア海、大陸の南に広がる大霊洋を押さえることが出来れば、イズモはアルマダの国家群に対して一定以上の影響力を持つことが出来る。海洋路を確保することは、そのまま大陸の外洋交易路の大半を掌に収めるということだからだ。

「イズモに相対することが出来るほどの海軍力を保有している国は、実のところ存在しませぬ。我が国の海軍とて領海と交易路を保全する程度の任務には耐えられるでしょうが、真正面から世界最強のイズモ海軍と戦える戦力は有しておりません」

ハイデルの言葉は些か皇国海軍を過小評価している。少なくとも、アルマダ大陸の他国家がこの言葉に素直に頷くとは思えない。その程度の戦力は、皇国海軍も保有していた。

しかし、相手がイズモ神州連合という海洋大国であれば、ハイデルの言葉は少々の謙遜はあっても間違いではない。

「空中戦艦“天照”を元に設計された艦船で固められた海軍か、正面から戦うのは御免だな」

「は、それがしも同意見でございます」

ハイデルの答えを聞くと、レクティファールは大きく天を仰ぎ、目を瞑った。

現状の皇国にとって、イズモの政変は歓迎出来ることではない。

ならば、かの国に介入する一つの手段として今回の縁組を進めるべきだろう。

未だ皇国を取り巻く情勢は予断を許さない。迫る危険を少しでも減らすために、出来ることは総てやっておくべきだった。

「――――よろしい、それでは外務院に話を進めさせろ」

「は、御意のままに」

レクティファールは静かに頭を下げるハイデルを横目で見ながら、自分はこれから何度人生の墓場に突撃しなくてはならないのだろうかと考える。

このような職業に就いている以上、結婚は義務の要素が大半を占める。

それは相手も同じで、そんな相手にどう思われるかだけがレクティファールの意思次第――――何とも気疲れのする話だ。

「――――はぁ……園遊会の時間まで仕事でもするか」

自分の置かれた立場を悩むことなど、時間の浪費に過ぎない。

彼はさっさとその思考を諦めると、持ち込まれた書類の決裁を始めた。

そんな青年の姿を、老練な宰相が小さく細めた目で、じっと見守っていた。

星天宮内の庭園の一つ、小さな湖の畔に広がる『エメレットの庭園』で各国の代表とその連れ合いを招いた園遊会が華々しく開催された。

エメレットとはこの庭を設計した建築家の名で、彼は生涯最後の作品としてこの庭を完成させた。そんなエメレットの熱心な愛好者であった先代皇王が、直々にその名を庭園の名称として遺したのだ。

元々この場所に存在した湖に少しも手を加えず、ただその畔の一分をカンバスにして描かれた庭は、さして建築や庭園芸術に興味を持たない者でさえ、ふとした瞬間に感嘆の溜息を漏らしてしまうという。

「いや、実に見事な庭だ。大国アルトデステニアの主が住まうに相応しい」

湖を眺めながら、二人の男が言葉を交わしている。

アルトデステニア国主代行レクティファールと、西方の強国シェルミアの国王だ。

お互いの手には飲み物、顔には愛想笑い。

複製して貼り付けたような、華麗なる外交の場に相応しい光景だった。

「ありがたいお言葉ですが、私のような若輩が主では、この庭の設計者も冥界で嘆いていることでしょう」

「そんなまさか！　今の貴国にレクティファール殿よりもこの庭に相応しい者はいないだろう」

「武人として名高いシェルミアの国王陛下にそう言って頂けるとは、欣快に存じます」

レクティファールが笑みを浮かべて軽く頭を下げると、相手は照

れ臭そうに苦笑した。その表情だけは、これまでのような仮面じみたものとは違うように見えた。

朽葉色の髪をざっくりと短く切った第一四代シェルミア国王は、笑うと未だ青年と言って良い容貌をしている。肉体的にも未だ衰えを感じさせず、国王としての経験もそれなりに積み、まさに国主として油の乗り切った時期なのだろう。

機人族として人間種の平均より長い寿命を持っている彼は、今年四五になっている筈だ。一国の主としては、世襲制の国家を除けば若い部類に入る。

当然、レクティファールも同じ部類なのだが。

レクティファールは、機人としては異常なほど表情が豊かなこの男が、いざ戦いとなればそれこそ大陸有数の力を持っていると知っていた。

「正直、俺――――いや、私も此度の一件で自分の未熟さを痛感した。君のような若人が国を守ろうと戦場に赴いたのに、私といえば首都の王宮で貴国を切り分ける算段をしていた家臣の動きにも気付けなかった。本当に、我が国の行動によって命を散らした人々には申し訳ないことをした」

そう言って小さく頭を下げるシェルミア王。

今二人の周囲には他の客はいないが、それでも一国家の国王が容易くしていいことではなかった。

議会が国家の全権を持ち、国王が象徴でしか無いシェルミアとて、君主を戴く君主制国家には違い無い。

「陛下……」

「これは私個人の気持ちだ。シェルミアとしては、また別の言葉を示すことになるだろう」

シェルミア王は硝子杯の中に浮かぶ自分の顔を見て呟いた。

嘗てアルマダ帝国の研究都市があったシェルミアでは、今も当時の施設が遺跡として出土する。

それ以前の第一次文明の遺跡も多く、それの探索を生業とする冒険者や傭兵たちが集う国家として有名だ。国家の成り立ちも、それらの荒くれ者を支援し、管理する各職業の組合（ギルド）がいつしか合議によって政治を担うようになったことがシェルミアという国家の始まりとされる。

元々シェルミアは各遺跡の近郊に、そこに潜る探索者を相手にする人々が住み着いて生まれた小さな都市の集まりで、少なくとも国家としては纏まりに欠けていた。そんな国家が大国と渡り合う為に生み出した象徴が、現在のシェルミア首都でもある第一次文明遺跡『ヘリオス宮』から発掘された古代の装甲機兵を駆る国王。つまり今、レクティファールの目の前にいる男だった。

機人族以外に装甲機兵を操れるものが存在しない以上、基本的に彼らの婚姻は国家によって取り決められている。機人族としての能力を失うような交配は避けなければならないからだ。

そういう意味では、単なる象徴である筈のシェルミア王の方が、余程世間で言われる『国王』としての婚姻を全うしているのかもしれない。

「――――さて、湿っぽい話はここまでにしよう」

シェルミア王が、その顔に笑みを戻してレクティファールに言う。それに頷くレクティファール。謝罪の言葉は重ねるものではない。

「しかし、返す返すも残念だ。この集まりで君の婚約者を見ることが出来ると期待していたのだが……」

「我が連れ合いの一人が未だ戦傷で臥せったままなのです。彼女を置いては表に立てぬと第一妃が申しまして」

「それは……君としても心配だろう。いや、私も見世物を強請るような物言いは不躾だったな、すまない」

シェルミア王はその後幾らかの言葉を交換すると、「奥方の傷が

早く癒えることを願っている」との言葉を残して連れ合いである王妃の元へと戻っていった。

王妃は標準的な機人族らしく感情の起伏に乏しいので、積極的に他国の重要人物と言葉を交わしている様子はなかった。夫が戻ってきたときも、ちらりとレクティファールを一瞥し、軽く会釈するに留まった。

しかし、今日のレクティファールの連れ合いも感情の波が見えないという点ではシェルミア王妃と大差ない。

ただ――――

「おお……！　黒龍公が三四杯目の大皿を片付けたぞ……！」

「あの小さな身体の何処に入るのかしら……」

「今度はイズモの炊き込み飯を櫃ごとだと……ッ！？」

「会場の食べ物を食べ尽くすつもりか！　なんと剛毅な！」

招待客から浴びせられる視線と言葉だけは、彼の今回限りのパートナーが圧倒的に多い。

会場の中心近く、円卓に並べられた料理を無言で食らい尽くして

いる小さな龍公に、レクティファールは歩み寄った。

「――――味はどうか？」

「――――良い」

「ふむ、土産はいるか？」

「――――居る」

「如何程」

「――――全部」

「――――――――承った」

何とも言えない言葉の応酬。

黒龍公アナスターシャはレクティファールを見ようともせず、ただ目の前の料理を摂取しながら答えた。

婚約者が一人も参加出来ないレクティファールだが、流石に招待

主が連れ合いを伴わない訳にもいかない。一度は総大主教ミレイディィアが参加してはどうかという意見も出たのだが、ミレイディィアがそれを辞退。本人はこれ以上政治に関われないと言っていたが、単に妹の機嫌を損ねることを避けたのだろうとレクティファールは思っていた。

「――――話は、済んだ？」

アナスターシャが櫃のお代わりを所望し、給仕の女性がそれを取りに行っている間、二人はお互いの状況を確認する。

とは言っても、アナスターシャはこういった場所に馴染みが薄く、ひたすら食べているだけだが。

「ああ、済んだ。しかし、アナスターシャがこういう場所に出てきてくれるとは思わなかったな」

「娘の代理。本当なら、もっと前に、紹介するつもりだった」

アナスターシャは温かい紅茶を啜り、少しだけ目を細めた。どうやら気に入ったらしい。

「あなたが、北で足止め、されてたから……」

「それは悪いことをした」

「別に、娘も面倒臭がって、呼んでも、来なかったし」

「――――――――」

それはどういうことだろう。

つまり、北で足止めされていなくても結局会えなかったということではないだろうか。

「あの子、夢中になると、ご飯も寝ることも忘れるから」

「――――難儀なことだ」

「わたしも……本を読んでると、何故か、一週間とか経ってる」

「――――そうか」

似たもの親子ということだ。

レクティファールはまだ見ぬ黒龍公女タチアナの姿を想像し、なるほど個性的な女性なのだろうと自分を納得させる。

「わたし、適当に、楽しんでるから……仕事してきていいよ」

「食べてるだけだろう……君の場合」

「こんな場所じゃ、食べる、以外の楽しみ、ないよ」

庭も、招待客との歓談も彼女にとっては食事以下ということらしい。

連れ合いが見付からなくて困っていたレクティファールに彼女を伴ってはどうかと提案してきたのは皇都でレクティファールに任された仕事と格闘していた蒼龍公マリアだったが、彼女は一体どのような意図でアナスターシャを推挙したのか。

独身で、それでも摂政の相手として不足ない大身というだけなのだろうか。

単に自分に大量の仕事を回すレクティファールに対する意趣返しという可能性も否定出来ないが、それは考えないことにした。

「――――腹痛など起こさないように」

「大丈夫、まだ三分目」

「――――――――そうか……」

最強種たる龍種に襲われ、城の厨房が戦場になっていることは間違いないだろう。

レクティファールは厨房の料理人たちにあとで慰労金を渡すことを決め、すごすごとその場を立ち去った。

大きく肩を落とした彼の横を、台車に載せられた大量の料理が通り過ぎて行った。

レクティファールはそのあとも、各国の国主や重要人物との会談を繰り返した。

外交の場に初めて放り込まれ、パートナーは食べることに夢中と

いう四面楚歌の中、彼は各国の思惑が予想以上に皇国を縛り、そして自分の身も束縛していると気付く。

会談中には何度も他国の姫や名家の令嬢との縁談をそれと無く要請されたし、何よりもこの場にそういった若い娘たちが幾人も姿を見せていた。

彼女たちはレクティファールととりとめのない会話を楽しみ、これまでレクティファールが見てきた姫君たちとは違う“箱入り”ぶりを彼に見せ付けてくれた。

彼女たちの大半は勉強に使う本より重いものをもったことがなく、ごくたまに、現在の婚約者たちの職業からレクティファールの趣味がそちら方面なのではないかと推し量った者たちが、軍人や騎士としての籍を持っている娘たちを送り込んでくる程度だ。

レクティファールは彼女やその親の誘いを持ち前の――時折想い人たちを怒らせる――優柔不断さで躱し、あっちにふらふら、こっちにふらふらと園遊会の会場を徘徊した。

しかし、園遊会の本当の目的を知るレクティファールとしては、それでも十分に役割を果たしたことになる。

今頃は華々しい外交の裏側で、血で血を洗う陰惨な外交戦が繰り広げられている筈だった。レクティファールは各国大使館や会員制の酒場など皇都各地に散った外務院や皇王府の渉外担当官の健闘を祈る。

彼らは賞賛されることもなく、それでも国家のため、皇王のために結果を出してくる。

ある担当官は賠償金を、ある担当官は利権を、ある担当官は血筋を。

外交とは舞台の上で、照明の中で行われるだけのものではない。

酒の席、閨の中、表舞台の光が生むあらゆる影の裡で行われているのだ。

レクティファールはそれを知りながら、知らない振りをし続ける。

国主とは、知ってはならないことも多いのだから。

「――――ただまあ、心の中で賞賛するくらいはいいでしょう」

影の裡ですら忠義を示す渉外担当官たちに、彼は密かに感謝する。

彼らのような影働きの者たちを忘れたら、それはきっと国主としての敗北。

自分を生涯の伴侶として笑顔を向けてくれる彼女たちを、自分を国主として認めてくれている臣下たちを裏切る行い。

レクティファールは、それを恐れる。

「笑顔が泣き顔になるって、すごい嫌なことだものな」

とりあえず、レクティファールに泣き顔を見て喜ぶ趣味は無い。

嬉し泣きならともかく、悲しくて、許せなくて涙を浮かべた女性は趣味じゃない。

「――――うん、この世界に来てから女性の評価基準が高騰しっぱなしですね」

嫌な大人になったなぁ、と呟きながら、彼は笑顔で話し掛けてきた何処かの国の大使の元へと意識を向ける。

“皇剣”の情報を意識内に広げ、戦闘準備を整えながら――――

第五話「輿入れ×輿入れ＝三国の胎動」

敗軍の将となったグロリエにとって、敗戦の責を問われ、結果自分の育てた第三軍集団を取り上げられることは予想の範囲内の出来事だった。それが納得出来るかは別にして、ではあるが。

帝都方面に撤退するまでもなく、彼女の第三軍集団は皇国と国境を接する封冊国の一、『アクィタニア王国』の王都近郊に於いて、今期の西方と東方の戦い――もう一言付け加えて負け戦と称することも出来るが――によって各所が寸断された帝国国境防衛線の補修材にされ、その実戦力の大半を喪失する。

非積極的はあっても消極的ではない、良将の名に相応しく実に理性的で効率的な皇国の追撃を振り切り、財産の大半を残してきたが故に都市奪還を強く求める『ウィルマグス』の旧支配層を宥めながら自国の勢力圏に帰還したグロリエとその軍団は、命を捧げてきた筈の祖国に裏切られた形となった。

大半の兵士はその処遇に渋々納得したものの、一部のグロリエ恩顧の将兵は帝国政府、ひいてはグロリエの父でもある新生アルマダ帝国帝王に対して憎しみに近い感情さえ抱いた。彼らにとってグロリエとは、自ら望んで兵士たちと泥の河を渡り、新兵と鍋を囲んで雑草を食し、一兵士の結婚式にさえ祝いの品を贈るほどに自分たちを愛してくれる雲の上の帝王などより余程絶対的な君主であった。それが一介の兵士から軍歴を歩み始めた祖母の教育の産物だったとしても、帝都や自分の領地に引っ込んでは享楽に耽り、ときに子ど

もが新しい玩具を欲しがるように人を攫い、自分たちの贅沢のための税ばかり課してくる有象無象の帝族とは違う。少なくとも将兵たちはそう思っていた。

そしてそう思っていたからこそ、第三軍集団は大陸軍国、新生アルマダの中でも最強の軍団と恐れられるようになったのだ。

将兵が将の将たるグロリエを信じ、グロリエもまた自分の愛する軍団を信じて用いた。その信頼関係こそが彼らの強さだった。

こと将兵と君主との間に形成される信頼関係に限ってしまえば、グロリエは勝軍の将であるアルトデステニア皇国摂政レクティファールに何ら劣るものではない。むしろ、その信頼関係の醸成に多くの時間を費やしてきた分、優っていると言える。

今回のグロリエの敗北は、彼女と彼女の軍団の敗北ではなく、もっと大きな――――皇国と帝国の戦いに向ける意識の違いから導かれた結果に過ぎない。

皇国は内乱を僅かな時間で治めた摂政レクティファールの下で勢いに乗り、祖国を護り抜くという気持ちで望んだ。これまでの内乱では抑え込まれていた軍部の鬱憤を帝国軍へと向けたレクティファールの采配が当たったというべきだろうか。

対して帝国は、皇国の内乱に乗じて攻め入り、本来の指揮系統を変更してまで西方の諸国を相手に戦っていたグロリエを東方戦線に送った。そして、大陸を横断するに等しい距離を長駆した第三軍集団に疲れがなかったとは思えない。

帝国が戦力で上回り、皇国が地の利を得、将の厚みも大きな差が

ない両国の勝敗は実はそういった直接的な武力衝突以外の面で決定付けられたのかもしれない。

「――――君の敗北を聞いて驚きはしたが、それを恨むようなことはしない、グロリエ」

「お言葉、痛み入ります。ディトリア兄上」

植えられた木々が様々に色付き、雪に閉ざされる前の最後のときを楽しむことが出来るアクィタニア王城の庭園に建てられた四阿は、おそらく一〇名程度であれば雨風を気にすること無く過ごせる広さを持っていた。

その中央辺りで、駒を配した赤黒の遊技盤と円卓を挟んで向き合う二つの影、先程の言葉を発したのはそれらだった。

『アクィタニア』国王と、帝国第一三姫。

グロリエという女性を知る者なら、その謙虚な言葉遣いに驚いたことだろう。しかし彼女とて、自分の責任に於いて他者に迷惑を掛ければ、それを『悪』と判断してそれ相応の態度を取る。特に自身が尊敬する相手がその対象であれば、態度はより分り易いものになる。

アクィタニアを統べる国王、帝国の封冊国であるが故に『陛下』とは呼ばれないが、その体に纏う威厳だけはグロリエの父――――現新生アルマダ帝国帝王、クセルクセス一〇世と較べてもそう劣る

ものではない。

しかし、ディトリアは単に覇気と威厳があるというだけではない。彼には、努力や教育では届かない次元の“華”というものがあった。

朽葉色の柔らかな髪と鼻筋の通った美しくも優しげな面立ちは男としては異常なほどの美貌で、それ故に皇子や皇太子と呼ばれていた頃は数多の貴族令嬢や有力商家の娘たちと浮名を流し、気に入り落籍させた娼妓の数は三桁に届くという。そんな彼だが、今の妻を娶って以来それらの噂は完全に途絶えた。

それらの愛人の中には彼の子を身篭ったという者もいたが、彼はそんな彼女たちを含めて女性関係を総て清算してしまった。愛人やその子どもらは、彼らの望んだ場所で、女は新たな伴侶を得て、子どもは本当の父の顔も名も知らずに過ごしている筈だ。

当時から帝国帝王家の次期総領としての才能を開花させつつあったディトリアが気に入っただけあって、愛人たちは自分たちの立場を良く弁えていたのだった。

他方、多くの女性と関係を持った彼をして『生涯唯一の恋』と言わしめた現アクィタニア王妃リールとの大恋愛は、密かに幼いグロリエにも影響を与えた。

皇太子という立場や輝かしい未来を捨ててまで自分の意志を貫くというその姿勢は、間違いなくグロリエの中で息衝いている。それが彼女特有の、傲慢さにも似た強烈な自信に繋がっているのだ。

しかし、突然その自信を突き崩す存在が現れた。今のグロリエのしおらしさは、そんな事実も一つの原因だろう。

「『ウィルマグス』から逃れた民たちは、私が責任を持って預かろう。元々あそこは我が国の一部、帝室直轄領になったからといって彼らを他国の民とは思わない」

「はい」

『ウィルマグス』から脱出した都市の旧支配層は、ある程度状況が落ち着くとグロリエや帝国に対して財産の補償を求めた。『ウィルマグス』失陥は帝国軍、ひいては帝国政府の失策であると声高に叫ぶ彼らに対し、グロリエは私産を削って当面の生活費を支給した。

グロリエに続いて帝国政府も彼らに対する損害の補償を決め、彼らの財産の内、現金や土地など政府に保管された資料に記載されているものは七割が補填されることになった。

ただ、彼らが非公式に蓄財していた表に出せない資産――――脱税した所得や賄賂などの不正に手に入れた物や金――――は当然補償の対象外となった。

さらに奴隷や家畜といった時間の経過と共に評価額が変わるものについては、直近の政府評価額に基づいて補償されることになる。

グロリエは、彼らに対し誠意を以て当たった。

これまでの傲岸不遜な態度を軟化させ、自分に出来る精一杯の補償を彼らに与えた。

だが結論から言えば、旧支配層はグロリエや政府の与えた補償に満足することはなかった。

彼らの資産の過半が『ウィルマグス』という都市によって築かれたものだからだ。

都市の支配層であるからこそ得られた物は、都市を失った彼らの手から次々と零れ落ちていってしまう。例えば『ウィルマグス』で展開していた為、都市失陥と同時に倒産した企業の証券などに政府は価値を見出さないし、支配層という立場があったからからこそ得られていた金になる情報ももう手に入らない。

商人は店を失い、職人は工房を失い、教師は教え導く子と学び舎を失い、官僚は運営するべき都市を失った。

彼らが『ウィルマグス』という都市で今まで作り上げてきたあらゆるものが、都市の喪失によって失われたのだ。

単純な損害の補償で、それらは埋められない。

しかし、彼らが築き上げてきた諸々は、明確な形を持たないが故に補償することは不可能。一方、旧支配層からしてみれば不可能という一言で納得出来るものではない。

そして最大の問題は、自分の敗北が、帝国の国内に新たな騒乱の火種を点したとグロリエが気付かなかったことにある。

彼女はどうしても帝族であり、また無意識に他者の上に立つ種類の人間であった。

「――――しかし、件の摂政も侮れないな。その上、『ウィルマグス』とその周辺の帝室直轄領が根刮ぎ皇国に落ちた今、我が王国は皇国との争いの最前線となったということか……」

『アクィタニア』単独では、当然皇国に対抗することは出来ない。しかし皇国はその勝利によって帝国国内を大いに聳動させ、国内の独立派を活発化させることで戦力の再編成を困難なものにしてしまった。

グロリエの第三軍集団が解体されて各戦線に送られたのも、独立派と対することも考慮した結果と言える。兵士の帝国への忠誠を期待することが出来、その上である程度の練度を持った部隊が必要とされたからだった。

兵力、号して一〇〇〇万。

後備、予備を含めた数ではあるが、世界中を見ても、それ程の陸軍力を持つ国は珍しい。

しかしその大兵力も、大半が徴兵によって集められた平民に過ぎない。平民たちの間で密かに広がる帝国政府への反発と、その政府からの独立を目指す動き、ディトリアはたった一度の敗北で動揺する祖国を見、心の内で大いに嘆息した。

帝国はいつの頃からか、国家としての老いが表面化するようにな

ってきた。民衆の間では現政府に対する不満が蓄積され、特に執政側の横暴が夥しいと言われる辺境地域では武力による民衆蜂起も珍しくない。

これまで帝国は、民衆の不満という内側からの圧力を外に向けること――つまりは周辺国に対する外征で発散させてきた。この方法は一番手っ取り早く、結果が誰にも分り易く、そして政府が比較的容易に制御出来る不満の解消方法であった。

武功を挙げれば上に行ける。楽な暮らしが出来る。誰かを虐げることで自分が虐げられることが無くなる。

そんなことを思う若者たちが帝国軍という巨大な軍事力を形成し、それは諸外国への軍事的圧力だけではなく国内の叛乱勢力に対する有力な圧力として機能することにもなった。そしてそれは、帝国政府が望んだこと。

しかれども、その帝国政府の政策は建国から三〇〇年の今破綻しかけていた。

国土が広がり、国力は増強された。しかし、それは帝国の場合国民生活の向上に直結しない。一部の有力者、富裕層は確かにその恩恵を受けて大いに財を増やしたが、大半の国民は度重なる外征とその外征を行う体制を維持するために必要な金や物資、人の消費に喘いでいる。

そこに、これまでにない大敗。

戦役総てで見た場合、軍の物的な損失は決して多くない――それでも、レクティファールとグロリエの直接対決となった最終局面で

の被害は、一度の武力衝突で被った被害としては異例――が、それでも常勝姫将軍たるグロリエが敗北し、封冊国の一部とはいえ国土を失ったことは帝国に衝撃を与えた。

そして、静かに破綻が始まった。

いつか訪れることが分かり切っていた『敗北』。

どんな存在でも勝利し続けることは不可能なのだ。それ故、君主や指揮官は常に敗北の可能性を忘れてはならないのに――――

（我が国は、勝利に慣れ過ぎていた）

勝利と敗北は常に背中合わせ。勝利の裏には必ず敗北があり、逆もまた然り。

だが帝国はその強大な軍事力によって齎された勝利に慣れ切り、多くの将兵が、いや帝国の国民さえもが勝利こそが当たり前であると思い、国そのものが勝利を前提に歯車を回すようになってしまっていた。

だから、たった一度の敗北が大きく響く。

相手が建国以来の仇敵であり、また敗軍の将がグロリエという帝国きっての勇将だったことを考慮しても、帝国政府、国民の動揺ぶりは滑稽を通り越して哀れみさえ抱くほどのものだった。

ただ、ディトリアの統べる『アクィタニア』では対皇国戦の最前

線になったというのに国民の動揺は驚くほど少ない。

これは王国の国民がディトリアという国王を信頼していることと、国民の三割近くが亜人で占められているからだった。

皇国が亜人を始めとした知恵ある者どもの殆どを国民として扱っていることは有名であったし、嘗ての帝国で虐げられる側にいた彼らにしてみれば、皇国という国家を憎む理由がない。

そしてそんな亜人たちと暮らすことに慣れた『アクィタニア』の人間種にとっては、皇国が帝国政府の言う『屍肉を貪る獣』や『女子どもの区別なく蹂躙する悪鬼』の集まりでないことは明白だった。

無論、『アクィタニア』総ての国民がディトリアを信じ、皇国に敵意を持っていない訳ではない。帝国本土からの移民者は皇国の侵攻を恐れていたし、『ウィルマグス』の旧支配層のように他種族を虐げることが当たり前の人間たちは皇国の民を獣同然の蛮族と看做していた。

「だが、負けたものは仕方がない。――――帝都に戻るのだろう？」

「はい、第三軍集団がなくなった今、余は元帥としての任を全うできません。父上の言葉に従い、帝都の陸軍本営に……」

陸軍本営――――大本営の内にあり、帝国陸軍を司る陸軍参謀本部のことだ。グロリエは父の言葉に従い、その参謀本部の特別軍令顧問として赴任することが決まっている。

大仰な役職名ではあるが、実際には元帥としての実権を振るうことが出来ない、グロリエを帝都に縛り付けるためだけに作られたただの名誉職だった。

第三軍集団司令官という肩書きは残され、軍令顧問と兼任という形になっているが、指揮する部隊のいない彼女には何の意味もないことだった。

「――――近いうちに帝都へ向かうことになりましょう。その前に、こうして兄上と話す時間が持てて良かった……」

グロリエは心の底から安堵していた。

彼女にとって兄は、間違いなく帝王の器を持つ傑物だった。未だに継承権を放棄したことが信じられない程に。

そんな兄があの皇国の龍に負けるなど考えたくもないが、あの戦場を経験して自分の裡の“絶対”を信じられるほど、彼女は純粋でも幼稚でもなかった。

兄が万事物事を上手く進めても、兄の目と手の届かない場所で最悪の事態が起こることもある。そしてそのたった一つの最悪が、兄の作り上げた“必勝”を一瞬で破壊してしまうのだ。

グロリエ自身、もう一度皇国摂政レクティファールと相対して勝利を収められるとは断言出来ない。彼女の知る中で最も優れた将であるディトリアと、自分を敗軍の将という立場に追い遣ったレクテ

ィファール。どちらが勝ち、負けても彼女は納得するだろう。

グロリエにとって両者とは、それ程に拮抗した存在だった。

しかし、グロリエ個人にとって両者の価値は等しくない。

彼女にとって兄はあの好敵手よりも重んじるべき存在であった。

「兄上、あの男を侮ってはなりません。あれと刃を交えるまで『所詮、何処の産まれとも知れぬ成り上がり』と、余の部下も毎日飽きもせず嘯っておりましたが、ここへ逃げ戻る道中でそれを口にする者はおりませんでした。彼らは同じ口で『皇国摂政は帝国の敵手として不足なし』と呟き、しかし余に見えぬところで震えていたのです」

彼女は二〇〇〇〇の兵による都市奇襲という奇策を最後まで読めなかった。

あれ程絶望的な戦力差の中、篭っている要塞を破壊するに足る兵器をこちらが保有していると判断した瞬間、あの男は躊躇いもせず自分の手の内にある最強の札――良将ガラハ――を切り、要塞の守りを薄くしてまでその切り札に持たせられるだけの戦力を持たせた。

少数精鋭の奇襲ならばグロリエも予想していた。

それに対処出来るだけの兵力も指揮官も残した。

だが、レクティファールはその戦いの一点に於いて確実にグロリ

エの上を行った。

最大の戦力を相手の最も弱い所に叩き付ける――――戦術にも戦略にも最上手として存在するそれを、レクティファールはグロリエ相手にやってのけた。グロリエは完全に、「相手の手は読みきった」という驕りを突かれる形となった。

レクティファールはその直後、自陣をグロリエに強襲されて同じことをやり返されたのだが、それで彼の成し遂げた戦術的戦略的勝利が揺らぐことはあり得ない。

むしろ、重装近衛騎兵の精強さを頼りにして相手を脅かしただけのグロリエと比べれば、それは一つ高い場所の勝利にも見える。少なくとも、グロリエはそのような感想を抱いた。

「兄上はあの男といずれ刃を交わすことになるでしょう。余は兄上が敗北するなどと――――信じたくはありません、ありませんが……」

「――――――――ああ、分かっている、我が妹」

ディトリアは思う。

皇国との戦いに赴く前の妹姫であるならば、兄の勝利を疑うことはなかっただろう。しかし、たった一度の戦いで愛しい妹はその価値観を一変させた。

いいや、一変させることが出来たというべきだろう。

グロリエは敗北を、それこそ自身が認めるほどの敗北を経験するべきだったのだ。そしてそれは、隣国の次期元首の手によって成された。

ディトリアはあったこともない隣国の摂政に無言の感謝を捧げた。

これで妹はまた一つ昇るべき階を見付けることが出来た。成長する余地を手に入れた。

「――――だが、お前の心配はしばらくあとのことになりそうだ」

「は……？」

グロリエは兄の言葉を理解出来ず、しばし呆然とした。

そして、そんな彼女は自分の背後に迫る影にも気付かなかった。

影は少しの間グロリエの背後でその様子を伺っていたが、自分の目的の人物が自分に気付いていないと察すると少しの躊躇いもなく動き始めた。

一息の準備。大きく息を吸い、身体を屈めて目標を定める。

「――――ッ」

だが、影が意を決して一歩を踏み出したときには、彼の目標は彼の接近に気付いてしまった。

帝国の戦姫は正しく戦いに生きる姫君であり、影のような小さく弱き者が出し抜こうと思って簡単に出し抜けるものではなかったのだ。

グロリエは一挙動で振り返ると、自分に向けて背後から飛び掛ってきた影を認め、両手を広げてそれを迎えた。

「叔母上ッ！」

「おお、マイセル。叔母上だぞ！」

影――――アクィタニア第一王子にして王国王世子たるマイセル・ファス・アルマダは幼い頃の父親によく似た愛くるしい顔を笑顔で彩り、グロリエの胸に飛び込んだ。

叔母の豊かな胸に顔を押し付け、ぐりぐりと動かす。マイセルの頭にある狼のそれに似た三角の耳を半ばまで隠す柔らかな蜂蜜色の巻き毛が、グロリエの頬を擽った。

グロリエは先程まで浮かべていた暗い表情を一変させて満面の笑みを浮かべ、甥御の頭をくしゃくしゃと少し乱暴に撫でる。

「マイセル、いい動きをするようになったな！　義姉上そっくりだ！」

「うん！　もう父上と追いかけっこしても捕まらなくなったんだ！」

「そうか、そうか！　じゃあもう少ししたら余が捕まえなくてはならなくなるな！」

『龍殺し』たるグロリエならば、野山を縦横に駆け巡る狼の獣人の血を引くマイセルの動きにも付いて行けるだろう。人間種であるディトリアは既に一年も前に逃げる息子に追い付くことが出来なくなっている。ましてや捕まえることなど出来はしない。今ではディトリアの妻と、その妻の一族から召抱えた使用人がマイセルの遊び相手として必要な条件を満たしている。

グロリエはマイセルを抱き抱えたまま、ぐるぐると回り始める。マイセルが嬉しそうに笑い声を上げると、その回転は勢いを増した。

人間種であればすぐに目を回してしまいそうな勢いで回る二人は、傍目には少し歳の離れた姉弟のように見える。そしてグロリエは、事実この甥御を弟のように見、可愛がっていた。

そんな二人に、四阿の外から声が飛んだ。

「マイセル、わたしの坊や、父上と叔母上のお話の邪魔をしてはい

けません」

良く通る女性の声。

「義姉上」と、その声を聞いたグロリエが回転を緩めていく。やがて完全に回転は止まり、グロリエはマイセルを抱えなおして声の主である義姉に向き直り、一礼した。

「――――お久し振りです、義姉上」

「ええ、本当に久し振りね。グロリエ、皇国との戦いのことは国王殿下から聞いているわ。良い負け戦だったわね」

濃い銀毛を特徴とする月狼の獣人である王妃は、その特徴通りの三角耳と尻尾の毛並みを綺麗に整えた姿だった。彼女は笑顔でグロリエに応え、先の戦いをそう評する。彼女自身元軍人であるから、その立場で感じたことなのだろう。彼女は別段兵士たちの命を軽んじている訳ではないし、グロリエはそれを知っていた。

グロリエは物事を真っ直ぐに見詰め、評価する義姉のそんなところが非常に好みだった。彼女自身は気付いていないが、その彼女が好む義姉の美点は、彼女自身にも似たような面がある。

ディトリアは妹と妻がまるで血の繋がりを持つ姉妹のようにも見え、さらに苦笑を深めた。

「はい、良い教訓を得ました。次はもっと上手く戦えます」

「ならば犠牲になった兵たちも報われましょう。彼らの命、あなたの糧になったのよ」

「はい」

義姉の教え諭す言葉に、グロリエは神妙に頷く。

傲岸不遜という言葉が良く似合うこの帝国の第十三姫はしかし、こうして人から何かを教えられることに関しては従順だった。無論、教えを授ける相手とその内容によるが。

リールはグロリエの真っ直ぐな眼差しに満足すると、ほんの少しの躊躇いの後、自らの背後に声を掛けた。頭の上に生えた銀色の三角耳が、困ったように震えた。

「マティリエ、叔母上にご挨拶なさい」

小さい、息を呑む音。

四阿の柱の影から覗いているのは、リールと同じ濃銀の尻尾だ。

その尻尾は持ち主の気持ちを示すように力なく揺れており、グロ

リエは思わず苦笑してしまった。

どうやら愛しい姪御は相も変わらず人見知りが激しいようだ。彼女は膝を折り、その場に屈んだ。

「マティリエ、そこでは顔が見えない。余に可愛い顔を見せてくれ」

両腕を広げて敵意の無いことを示す、まるで警戒心の強い動物でも誘うようなその姿に、今度はリールとディトリアが笑いを堪える。肩を震わせる両親を、マイセルが不思議そうな顔で見上げた。

「――――お、叔母上……その……」

声と同じ拍子で尻尾が揺れる。

「もう九つになったのだろう。誕生日に戻ってこれなくて済まなかった」

「いいえ……！　叔母上様は、その、戦いに赴いておられると父上にお聞きしておりましたから……」

言葉とは裏腹に、その尻尾は気落ちしたように垂れ下がってしまった。

尻尾で感情を示す獣人にとっては、言葉よりも尻尾のほうが余程正直だ。グロリエは仕方なく自分から近付くことにした。

「――――マティリエ、次の誕生日はきちんと祝いに来る。だから許してはくれないか？」

「叔母上様……」

グロリエが回りこむと、柱の影に隠れていた濃銀の狼姫がその灰色の瞳で彼女を見上げてきた。

怯えとは違う瞳の揺れは、おそらく期待。

人一倍臆病な狼は、それ故に人一倍寂しがり屋だった。

それを母性とも言うべき本能で理解したグロリエは、マティリエをそっと抱き締める。飾り布の多い衣裳に包まれた小さな身体がビクリと震えた。

「大丈夫だ、余はお前を嫌いになったりしない。お前の前から去った連中と一緒にするな」

グロリエは優しく、それこそレクティファールが知れば別人ではないかと思うような声で姪御をあやす。

帝国の姫でありながら獣人という、帝国と獣人族のどちらにも受け入れられない存在であるマティリエ。彼女は数年前、友人――と彼女が思っていた――者たちに一方的に排斥されるという経験をしていた。

それまではマイセルと同じように明るく活発だったマティリエだが、ただ獣人であるという彼女本人には如何ともし難い理由で拒絶されて以来、今のように人を怖がり、人との別れを怖がるようになった。

「余もお婆さまがいなければ単なる戦奴隷にでもなっていただろう。単に力を振るうためだけの、動物だ」

「そんな、叔母上様は……」

――――こんなにも人々に愛されている。マティリエの言葉は音にならなかった。

「良い、所詮仮定だ。今の余には兄上がいて、義姉上がいて、マティリエやマイセルがいる。余を将と認めてくれる兵もいる。余が戦うに十分な理由だろう」

「――――――――」

グロリエの上での中で、マティリエは頷いた。

「お前にもいずれ分かる。余は知らんが、母上曰く――――女は妻となれば夫を守りたくなり、母となれば子を守らずにはいられないらしい」

「――――――――――あの、わたくしには……」

「うむ、分かっている。婚約もまだのマティリエにはよく分からないだろうな。正直、余にもさっぱりだ」

グロリエは姪と顔を合わせると、小さく舌を出して笑う。

マティリエが、それに釣られるように小さく笑った。

「グロリエ、マティリエ、お茶が入りましたよ」

二人の背後でリールが呼ぶ。

二人はもう一度笑い合うと、どちらともなく手を繋いで四阿の真ん中までのほんの少しの距離を歩いた。

五人でお茶を飲んだあと、ディトリアは再びグロリエと二人だけで話す場を設けた。

彼らのいる四阿から見える庭には、グロリエの持ってきたお土産の模型飛行機械を飛ばして遊んでいるマイセルと、それに引っ張り回されているマティリエ。我が子を微笑みと共に見守るリールの姿があった。

ディトリアは自らの家族に視線を向けたまま、口を開いた。

「グロリエ、一つ聞きたいことがある」

「何でしょう、兄上」

「レクティファールという男は、どんな男だ」

グロリエはその問いに微かな戸惑いを見せた。

あまりにも漠然とした問い掛け。答えに窮した。

「それは、どのような意味でしょう」

「――――――――」

だから、敢えて問い返した。

しかし、しばらく待ってもディトリアはその質問に答えることはせず、ただ別の言葉を口にした。

そのときのディトリアの表情には、付き合いの深いグロリエを以てしても何も見て取ることは出来なかった。

「――――マティリエに、縁組の話が来ている。良縁と、まあ言えなくもない」

「なんと……！」

純粋に、ただ驚くグロリエ。

いずれはあの姪も誰かに嫁ぐのだろうと思っていたが、まさか自分よりも早く嫁ぐとは思わなかったのだ。

しかも、帝国が大きく揺れているこの時期に出てくる話ともなれば、その輿入れの目的は帝国内の連携の強化にある筈だった。特にディトリアは未だに帝国中央に隠然たる影響力を持っているのだから、その令嬢との婚約は多分に政治の領分だろう。

グロリアはそう考えた。

「相手は何処の誰ですか？　皇国に対する共同戦線を張るならば、やはり隣国の『ヴァルテア』か、『ラルス』のどちらか――――」

グロリエの挙げた二国は、『アクィタニア』と同じ帝国構成国家だ。共に『アクィタニア』と国境を接し、それなりの国力を持っている。皇国に対するならば、遅かれ早かれその連携を強化しなくてはならない相手だ。

だが、ディトリアは頷かなかった。

ちらりとグロリエを見、一息の間を空けて告げた。

「グロリエ、君が一番良く知る国、良く知る男だ」

「余が……知っている……？」

グロリエは確かに多くの貴族や帝族を知っている。

しかし、いずれもがディトリアや他の兄姉より詳しいということはない。

強いて言えば軍内部の有力者ということが考えられるが、グロリエに近い者たちにはマティリエの相手になるような年頃の息子はいない筈だ。

何よりも、ディトリアは『国』と言った。

グロリエが誰よりも一番良く知っている国、そして男――――そこまで考えて、グロリエの脳裏に一人の男の姿が浮かび上がった。

白の髪を持つ、皇国の星龍の姿だった。

「――――まさかッ！」

グロリエは円卓を叩いて立ち上がった。

それなりに大きな音が出たが、ディトリアは少しも動揺しなかった。

静かに、肯定の言葉を発しただけだ。

「父上よりの勅命だ。我が娘マティリエを南方辺境領摂政レクティファール殿の下へ輿入れさせ、息子マイセルを皇国皇立学究院に留学させよ、とな」

「そんな、それではまるで……」

人質。

グロリエはその言葉を既のところで飲み込んだ。

帝王が発した勅命に対して異を唱えるには、グロリエは未だに力が足りていない。

ここで不用意なことは言えなかった。

「――――父上のお考えもあるのだろうが、おそらく弟や妹が裏で動いたのだろう。愚弟も愚妹も多少はものを覚えたと見える」

ディトリアの後継たる二人の子を、実質的な敵国に差し出す。

それはディトリアの持つ影響力を削ぎ落とす手段として確かに有効だった。

なかんずく、中央の次期帝王候補者たちにとっては将来的に自分たちの競争相手に、それも強力な競合相手になるかも知れない二人を取り除く効果的な手段だ。現帝王の命数が尽き、自分たちが帝王になるまで皇国に留め置かれるならそれは望むところ。もしもそれ以前に皇国との争いが再び勃発するなら、二人の命は皇国で尽きることになるだろう。

そして何よりも、彼らの命を開戦の大義名分にすることも出来る。

「父上は、一体何を考えておられるのか……！　孫たちを皇国に売るつもりなのか」

憤然として腰を下ろすグロリエ。その拳は卓の上で震え、彼女の若い怒りを良く表していた。

そんな妹を見て、ディトリアは羨ましそうに目を細める。この妹の真っ直ぐな気性は、彼の好むところだった。

「父上はこの国と帝王家の明日をお考えなのだろう。弟たちが如何様に父を誑かそうとも、あの父はそう簡単に操れるものではない」

ディトリアを厭う者たちが動いたことは間違いない。

しかし、帝王自身もまた今回の勅命を発するに十分な理由を持っている筈だ。

「今の帝国の状況を思えば、皇国との間に必要以上に高い緊張を維持することはあまり歓迎出来ることではない。今回の敗北で勢い付く逆徒どもを鎮圧するには一朝一夕では済むまい。内憂に気を取られている間に背後から襲い掛かられては、如何な将とて敗北しようもの」

時間稼ぎといえばそれまで。

今回のマティリエの輿入れは、その為の最良の手段だったのだろう。

帝孫であり、嘗ての皇太子を父にもつマティリエは帝位継承順位こそ低いもののその血統は帝国内でも有数。獣人であることも帝国内ならいざ知らず、皇国相手ならば負の要素に成り得ない。

それにレクティファールの寵を受け、その心に深く根差せば帝国にとってこれ程都合のいい工作員はいない。そのときが来れば、褥で寝首を掻くことも出来るだろう。

何よりも、帝国にとっては例え喪われたとて惜しくない命だ。

個人の感情を除けば、帝国にとってマティリエは卑しい獣人の血を引く汚点。少しでも国の為に役立つなら、ここが使いどきということなのだろう。

「――――マティリエの輿入れは、確かに理解できる面も多々あります。しかし兄上の後継者であるマイセルまで皇国にくれてやる必要は何処にも……」

「あるさ、弟たちも確かにマイセルの留学を画策したが、これはむしろ私がそう望んだのだ。父上もマイセルを留学させることまでは消極的だったからな」

「な、なんと……」

ディトリアは驚く妹を一瞥し、口の端を持ち上げる泥臭い笑みを見せた。

この表情だけが、一〇年前の彼と変わらない。

他者を貶め、蹴落とすことに何の躊躇いも抱かない“帝王”としての顔。

「グロリエ、君の話を聞いて確信した。皇国摂政は利用価値がある者を一時の感情で殺すような真似はしない。例え帝国と兵戈を交えることになっても、彼はマティリエとマイセルを害するようなことはしない筈だ」

帝国の内政に干渉する道具として、マティリエとマイセルは非常に便利な存在だった。

帝国側が二人を帝籍から除こうとも、その血が入れ替わるわけではない。その帝籍剥奪さえも、皇国が帝国内部に干渉する切っ掛けとしては十分過ぎるだろう。

そして、両国が砲火を交わした結果どちらかが滅びようとも、アクィタニア王家の血は生き残れる。

「我が子等は我が帝国と皇国を繋ぐ細くも堅固な糸となろう。これによって両国は互いを無視することは出来なくなる」

お互いが相手国の内部に干渉することが可能になれば、両国はこれまでより多くの労力を外交に傾けなくてはならなくなる。人や物資の行き来も多くなるだろう。そしてそれは、民間段階での両国の接近を意味する。

多くの人や物が皇国から帝国に流れ込むだろう。それはディトリアの望むところだった。

「帝国が今のまま発展することはあり得ない。何らかの形で新たな風を招き入れ、腐った部分を取り除かなくてはならない」

それは、ディトリアが皇太子の地位から身を退いたもう一つの理由。

彼はその政治的動物としての本能で、いずれ自分の統べるこの国が決して長くないことを嗅ぎ取った。今のままの政治体制、今のままの国体では早晩瓦解すると理解した。だから、彼にとって他の代わりになる者がいない家族を連れて辺境に下った。

御国を守るにしろ、家族を守るにしろ、帝王という立場はそれに適していない。帝王は強大な権力を有しているが、その周囲を固める官僚や貴族たちは旧態の権化と言って良い者たち、これでは亡びは止められない。

ならば、敢えて国の外縁から国を変えるべきではないだろうか。

ディトリア・ファス・アルマダという男は、そう考えるほどに帝国史上もっとも現実を理解することに長けた帝族であった。

「この縁組は大なり小なり御国に変化を齎すだろう。弟どもがそれを理解し、使いこなせるようならば帝国の未来は拓ける」

「では、理解することさえ出来なんだら……」

ディトリアは、グロリエが自身を女と感じるくらい男の香る笑みを見せた。

「帝国は、再び人々の記憶に還る、それだけだ」

アルマダ大陸よりレムリア海を超えた先にある弓状列島、そこはこう呼ばれていた。

イズモ神州連合。

だがそれは対外的に彼らが自称する国号であり、国内では専ら『八洲国（やしまのくに）』と呼ばれていた。

八つの大洲から成る国土を示したその言葉の根底には、八洲民族の裡に潜む選民意識がある。

即ち、自らは嘗て世界に君臨した神々の末裔であると――――

「――――――――難しい顔をしておられるのぅ。兄上」

京（みやこ）の中央に数千年の昔から厳然と座り込む内裏の自室で、現“帝”である正周帝（まさちかてい）はその声を聞いた。この日は気分が優れず、どの后の下へも渡っていなかった。

天子が声の方へと眼を向けると、庭に面した障子に、月明かりに照らされてほっそりとした影が写り込んでいた。

「――――真子（もこ）か」

黒髪黒瞳の天子が、小さくもはっきりとした声で妹の名を呼んだ。

「半分正解、半分外れじゃな」

影が答えると、障子が一人でに開き、客人を招き入れる。

行灯の光に照らされ、金に近い薄茶色の髪を棚引かせた女性が天子の前に立っていた。その頭には、ぴんと立った獣の耳がある。

天子の顔が歪んだ。

「――――貴様か、堕神」

「そうじゃ、兄上の大事な妹君の魂に巣食った悪逆なる穢神（けがれがみ）よ」

堕神と呼ばれた女性は、正周の言葉に艶然と笑った。とても楽しそうに、広げた扇子で口を隠して。

そして彼女の言葉と同時に、ぶわりと、彼女の背後に“八本”の金色の尾が広がった。

それに対し、正周は不機嫌そうに眉を顰めるだけだ。

「何処から入った。皇国からの返答が来るまでは離宮より出るなと申し渡しておいただろう」

「輿入れ前にどこぞの男と通じられても困るからのぅ。だが心配ないわ、真子は妾と違って貞淑故な」

「貴様がこうして出歩いていれば同じこと。さっさと戻れ」

正周は虫でも追い払うように手を振った。彼は、この堕神を心の底から嫌っていた。出来るならば、顔も見たくない程に。

「良いのか、そのようなことを言うて。妾が皇国で何か仕出かせば、兄上とて困ろう……」

「貴様に兄と呼ばれる筋合いは無い！　化け狐が！」

「ほ、嫌われたものよな。妾は真子と同じくらい兄上――――ぬしを気に入っておるというのに」

妹の身体を不当に占拠している狐に対し、正周は憎悪でさえ温く

感じるような激情を抱いていた。

嘗て神々と呼ばれていた祖先の中で最も若い、彼らがこの世界に肉体を残していた頃、最後にその名で呼ばれることになった獣神は、この八洲の歴史上もっとも悪名高い神であった。

彼女は他の神々がこの八洲国で肉体を棄てて行く最中、今の“帝”家の初代当主の妻となった。それだけであれば、彼女は栄光ある“帝”家の最初の后として名を残したことだろう。

彼女はその美貌も含め、知に富み、理に篤く、情に深い民に慕われる女であったからだ。

だが、彼女は突如変貌した。

子も生まれ、“帝”家が“天照”の管理者として権勢を振るうようになった時分、夫の弟たちと通じたのだ。

夫の目を盗み、皇族の男どもを誑かして人々が目を伏せたくなるような一晩の大淫劇を演じ、結果として皇后としての地位を追われた。彼女は未だ肉体を持っていた同族たちにさえ嫌われ、その神としての力ごと御所の中にある祠に封印された。

その封印を解いたのが、正周の異母妹、内親王緋ノ宮（ひのみや）真子の母だった。

封印の開放そのものは事故に近いものだったが、既に肉体を失っていた堕神は彼女の胎内にいた真子と同化し、その生命を永らえた。そうでもしなくては、堕神はその時点で滅んでいただろう。

その事実を知った先代の“帝”は娘である内親王を離宮の奥深くに隠し、幾重にも堕神に対する封印を掛けた。その封印の結果、堕神の力の一つである“浄天眼”の力を制限された真子の目は光を失ったのだ。

それ故に、正周はこの堕神を憎んでいた。

妹から光を奪い、今こうして自分の前で好き勝手に口を開いていることが許せなかった。

堕神の姿でいるときのみ、正周の妹は世界を見ることが出来る。真子が五体満足でいられるのは、この堕神が表に出ているときだけ。妹が得るはずだった光を不当に奪った穢神は何の罪悪感も抱かずこうして世界を堪能している。正周に、それを許すことは出来ない。

叶うなら、妹の身体から堕神を引き剥がしたかった。

だが、神族の血を引いている真子は魂に存在の重心を置いている。正周も同じだ。

その魂と完全に融合しきった堕神を引き剥がすということは、真子の魂の一部を切り取るということ。完全に肉体を失った神族ならばともかく、肉体を持った現人神の一族たる“帝”家の者に耐えられることではなかった。肉体と魂の比重が崩れれば、そこには死しかない。

「貴様になど気に入られたくはない。皇国への輿入れまでの間、せいぜい大人しくしていることだ」

「ほほほ、大事な妹を他国にくれてやるなんてどんな心境の変化かのぅ。妾だけなら厄介払いとでも受け取れるが、真子は違うであろう？」

「真子とていつまでもここにはいられん。周囲の目、というよりも、本人が一番気に病んでいる」

正周は嘗て祖先に愛された美貌を睨み付けた。

「貴様がいなければ、朕が見付けた良き男の下に嫁げたであろうよ。しかし、今の真子を真子として受け入れてくれる男がこの国にいるか、力持つどの家も――――瀬川を含めて真子を皇族や朕の妹としてしか見ておらぬ連中ばかり、貴様をそんな奴らの下に送り込めば、今度こそ国が滅ぶ」

何より、今は皇国と実質的な同盟を組む必要がある。

国土の東に広がる大冥洋の先、世界有数の宗教超大国でもある単一大陸国家『北ウォーリム教国』と『南ウォーリム教国』がお互いの教義を巡って争っているのは八洲でも知られているが、万が一両国がアルマダ大陸にその矛先を向けるなら、間違いなく八洲は戦場になる。そして何よりも、国内が荒れに荒れているこの八洲で、皇族はその権威に相応しい戦力を手に入れる必要があった。この国を亡国としないために亡国の縁から舞い戻った皇国と手を組もうというのは、お互いの国益を思えば妥当な線だ。

八洲は現政権を維持して新たな千年を安寧と共に過ごす、皇国はその八洲と連携を深めてアルマダ大陸東方の貿易網を維持する。他国との貿易を国の要にしている皇国にとって、八洲との連携はそれらを保つために必要不可欠な要素だ。

「皇国ならば良いと？　かの摂政を妾が唆すやもしれんぞ」

「“皇剣”は神族の力に対して絶対的な抵抗力を持っている。元々が神族や龍種を相手にするための兵器だからな。貴様の稚拙な術など効くまい」

「術など必要ない、妾がこの声と身体があればの」

堕神の言葉に、初めて正周が笑った。

誰かを罠に嵌めたときに人が見せる、嫌な笑い方だった。

「皇国の後宮は貴様や朕の天敵である龍たちの巣だ。貴様が好き勝手に動けるほど甘い場所ではない」

「――――――――なるほどの、我が親愛なる天子陛下は妾を滅ぼせる者たちの下へ妹を向かわせるつもりであったか」

堕神の動きを掣肘する為には、彼女が動こうにも動けない状況を作り上げるしかない。それはこの国では難しい。

ならば、国益も兼ねて他国へ――――神さえ殺せる者たちの巣窟へ向かわせることも有効な手段だ。

「何よりも、真子は一文字家の那岐姫の話が好きだからな。朕は、家を失い家族さえ離れ離れになっても、遠い異国の地で新たな家族を得た一文字家の姫に肖ってもらいたいと思っている」

権力争いに敗れて異国に流れた姫君は、その地で皇となり家族を得た。

妹も、今は光を失い身体を奪われていても、いつか新たな光を得られると正周は考えている。

その切っ掛けの一つとして、この縁組は悪いものではない。

大陸に放った忍びたちの報告で、件の摂政がこちらが心配になるくらい女に甘いことは分かっている。真子のことも、おそらく大切に扱うだろう。

その結果二人の間に想いが通じれば最良だが、妥協すべきところは正周も弁えている。

「――――ほ、ま、今日のところは兄上の真子に対する愛情に免じ

て帰るとしよう。あとで真子の迷惑になっても困るからな、男にも手を出さぬようにしようか」

「当たり前だ、その身体は妹のもの。貴様の好きにされて堪るものか」

「そうだのぅ、その通りじゃ。では、また会おうぞ、正周殿」

「――――ふん」

自分から視線を外した正周を苦笑と共に見詰めながら、堕神は足音も立てずに部屋を出る。

障子を閉めると、月明かりだけが彼女を照らした。

彼女の背後で、尻尾の影がゆらゆらと揺れている。

八本の影は、まるで魔人の腕のように彼女の影を包んでいた。

「――――――――のう、真子」

彼女は少し歩くと、自分の裡にいるもう一人の自分に語り掛けた。

自分のような穢れた神にさえ愛情を向けてくれる愛らしい、愛さ

れるべき娘だった。

（どうかしたの、瑠子。陛下に言われたことなら気にしなくても……）

今となっては彼女の本当の名を知る唯一の存在でもあるその姫君は、光と人生を半身に奪われてもなお優しかった。

だから、堕神――――瑠子は真子を愛している。

「ぬしは良いのか、敵国ではないとはいえ皇国は嘗てこの国と争った大国。その頃のことを覚えておる者も少なくなかろう。それらの憎しみは、妾はともかく、ぬしにとっては辛いだけやもしれぬ。そうでなくとも、他国からの輿入れは反発が大きいというに」

（瑠子がいれば大丈夫）

「――――……」

言葉を返そうとして、出来なかった。

自分がいてくれれば大丈夫だと断言する真子の笑顔が、容易く想像出来た。

自らから多くを奪った穢神に何故こうも優しく出来るのか、瑠子には不思議でならない。

「ぬしも、大概甘いのぅ。顔も知らぬ男の下に嫁ごうというに、妾なんぞを頼りにするとは……」

（瑠子は初代陛下のお后様だったんだもの、真子の先輩でしょう）

「――――うぅむ、そうとも言えるのかのぅ。だがの、相手の男次第で女というものは変わっていくもの、妾の言葉がどれ程の意味があるかは、正直向こうの男次第だの」

（レクティファール殿、だったっけ）

「うむ」

瑠子は腕を組み、ゆっくりと夜空へと浮かび上がる。

ここから離宮まで、飛べばすぐの距離だ。この無知な姫君に男女の何たるかを教授するには短い。

彼女は少し京の空を散歩することにした。

この光景を見ることが出来ない半身に代わって、故郷の姿を少し

でも多く心に留めたいと思った。

「戦人というは昔から女心に疎いと決まっておる。しかし、そういう意味では操りやすい」

（操るの……？）

「女は男を操ってこそよ。まあ、この世は女が操っているのだから、当たり前だがの」

（――――ふーん、そうなんだ……）

真子に瑠子の言葉を疑う気配はない。

彼女にとって、この半身は信頼出来る姉のようなものだった。

「輿入れまで時間はある。ゆっくり男の操り方を教えよう、ついでに閨の作法もの」

（うっ……）

呻き声と共に小さくなる真子の気配。

瑠子は初心な半身に苦笑しながら、京の夜空を楽しんだ。

アルトデステニアの後宮で怒号が轟く。

とある人物が職務に復帰してから、ほぼ毎日だ。

「レクトっ！　この愚弟！　待ちなさい！」

「待ったら早朝解体ショーの始まりでしょうが！　――――ってこっち来ないでください！」

「待てこの変態！」

綺麗に整えられた庭をひた走るこの国の主を、唸りを上げる大剣を振り翳して侍女が追う。

後宮護衛を司る乙女騎士たちは、最初の二、三日は戸惑いを見せていたものの、既にこの騒ぎを日常の一つとして捉え始めていた。とある侍女のお仕着せを着た騎士は、自分の横を疾風の勢いで駆け抜けて行った摂政に対して礼儀正しく頭を下げた。

ご苦労様、という声だけが遠くから聞こえてきた。

溜息を吐き、騎士は仕事場である厨房へと向かう。

ここは本当に、由緒ある後宮なのだろうかと首を傾げながら。

「――――で、今日は何をやらかしたんだレクトは」

庭に面した縁台で、いつの間にか当たり前のようにここで朝食を摂るようになったフェリエルが言う。

彼女の眼前にある庭では、国主が悲鳴を上げながら逃げ惑っていた。庭師の役割を負った乙女騎士たちが、青い顔で二人を追っている。

「ウィリィアの着替えを覗いたとか。――――どうも出されていた課題の為に借りていた本を返しに行ったらしいの」

「ノックくらいしないの？」

メリエラの口から語られた余りにも馬鹿らしい理由に、やはり当たり前のように座っているファリエルが呆れたように問う。

嫁入り前の娘の部屋にノックも無しに立ち入る馬鹿が婚約者だとは思いたくないらしい。

「したのよ、でも浴室にいたから気付かなかったみたい。レクトも随分前に借りたものだし、早く返すように言われていたから誰もいないと思って扉を開けたのね」

「――――なるほど、なんてレクティファール様らしい……」

リリシアが頭を抱えた。

後宮内の部屋には、扉横の晶盤に触れることで鍵を開ける魔導式の鍵が使われている。個人の自室ともなれば普通は本人とその直属の上司だけが開けることが出来るのだが、レクティファールはその鍵の管理者権限を有しており、その関係上後宮の総ての部屋に自由

に入れる。

まあ、今回はそのせいで悲劇のような喜劇が起きてしまったのだが。

「ウィリィアも急いでたから、何も着ないで浴室の扉を開けて――――こうなった訳ね」

「不用意、とも言えないな。自室でどんな格好をしていても、それは個人の自由だ。その先は自己責任だが」

「恐ろしいのはあの馬鹿の運の良さ……悪さかしら。どちらにしろそれね」

紅龍公の姉妹はほぼ同時に大きな溜息を吐く。

毎朝のように同じような騒ぎを起こしていればわざとやっているのではないかと考えるものだが、レクティファールに関しては完全に無実だ。

何せ、本人の意志とは関係の無い場面ですら同じようなことが起きている。

例えば、たまたまメリエラに部屋に呼ばれてそこに向かう途中、風で飛ばされたウィリィアの下着を拾うとか。

「相手がウィリィアに限定されているのは、ある意味安心だけど。面白くはないわ」

「侍女の方がよっぽど恋人らしいじゃれあいをしているからな」

パンを口に放り込みながら、フェリエルが呟く。

そう、二人の追跡劇は傍目には痴話喧嘩にしか見えない。ウィリィアが実際にレクティファールを傷付けたことがないことも、その印象を補強した。

「そうなのよ！　ウィリィアのご両親も最近乗り気で、「殿下を我が家の夕食に招待したい」とかわたしに言ってくるの！」

「――――ご両親、ウィリィアが何時まで経っても結婚しないから焦っているのね」

ファリエルが哀れむような視線をメリエラに向けた。

メリエラとてレクティファールと一緒の時間をそれなりに過ごしている。しかし、その様は未だ御飯事の域を出ていなかった。対して、侍女は最近夫婦喧嘩にも見えるようになってきたじゃれあいを毎日のように繰り返している。

哀れだった。

「最初の印象があるのか知らないけど、ウィリィアもレクトには遠慮がないから……」

後宮内であれば、そこの主であるレクティファールが許せば大事も大事にならない。特にウィリィアはレクティファールの義姉としての立場も持っているから、その喧嘩は単なるお遊びとして処理されている。

姉弟喧嘩、痴話喧嘩、夫婦喧嘩などの民事に行政は関わらない。

特に、ウィリィアの持つ『岩窟龍断ち』はレクティファールを殺せないのだからその傾向は余計に強かった。

「あの動きから逃れるレクトもすごいが、ウィリィアの動きも大分良くなったな。グロリエ姫との戦いが効いたのか」

「みたいね。毎日遅くまで訓練してるわ、たまにレクトが付き合ってるみたいだし。何か、ウィリィアの動きが一番、帝国の『龍殺し』の動きに似ているとか言っていたわ」

面白くなさそうにスープを飲むメリエラ。硬いパンを齧り、じとっとした目で庭の二人を見た。レクティファールが間合いを詰め、ウィリィアがそれを上段回し蹴りで迎撃していた。

絶対、下着見えてるよね――――メリエラは思った。

「も、もしかして昨日わたくしの所に来るのが遅かったのは……」

「――――――――ご明察」

「がーんっ！」

よよよ、と泣き崩れるリリシア。

嘘泣きだと分かっている三人は、それを完全に無視した。

女は、意中の男の前以外ではなかなか泣かないものだ。

「まあ、諸々の不満はレクトに今夜ぶつけるとして、いい加減どうにかしないとあの二人はもっと過激な事故を起こしそうね」

「どうにか出来る範囲のものならば、こんな騒ぎにはなっていないだろう。いっそくっつけてしまえ、大人しくなるから」

「そ、それは駄目！」

「駄目です！」

フェリエルの提案を即刻否定する白龍姫と巫女姫。

何故だろうか、その結末は余りに敗北感が大きい。

「――――なら、しばらくやらせておくしか無いだろう。その内騒動の種も尽きる」

「恐ろしく消極的ね、姉さん」

「消極的にもなるさ、他人の色恋など必要以上に積極的になるもんじゃない」

総ての皿を片付け、フェリエルは硝子杯の水を飲み干した。

立ち上がると、庭に向かって大声を発する。

「レクト！　そろそろ時間だぞ！」

なんですって、という声が聞こえた。

気が逸れたのか、同時にその頭にウィリィアの踵が食い込む。

ぐあ、という呻き声を残してレクティファールがよろめいた。“皇剣”も命の危険は無いと判断したらしく、自己修復機能が働く気配はない。力の無駄遣いをさせるな、という“皇剣”の声が聞こえてきそうだった。

良い位置に良い角度で決まった踵を見て一番焦ったのは、踵を落とした当の本人のようだ。

意識が遠のいているらしいレクティファールの肩をがくがくと揺さぶっている。

寝るな、仕事に遅れる、と叫んでいた。

「――――目が覚めたら、さっさと皇城に向かうよう伝えてくれ……わたしは付き合いきれん」

「アタシも」

呆れたように縁台を出て行くフェリエルとファリエル。

医者がそれでいいのか、と突っ込みをいれる勇者はこの場にはいなかった。

「メリエラ、わたくしたちはどうしましょう……？」

「そうね、とりあえずわたしはレクトに持たせる朝食でも作ろうかしら。サラダサンドでも作れば良いでしょ」

「あ、わたくしも手伝います」

「そう、じゃあよろしく」

そう言い、連れ立って席を立つ二人。

それをお辞儀と共に見送って食卓を片付け始めた侍女たちは、庭で騒ぎ続けている同僚を白けた目で見た。庭師たちが破壊されてしまった庭を、滝のような涙を流しながら片付けているのが見える。

「――――あの子、まさか姉弟ってあんなもんだとか思うとるんやないやろな」

「知らないわよ。ま、わたしはあんなべたべたした姉弟知らないけど」

彼女たちが目を逸らした先には、ウィリィアの膝枕で唸っているレクティファールの姿があった。

第六話「懐古＝里帰り」

重々しい鈍色の冬の雲が本格的に皇都を覆い隠そうとする直前の黒の第一〇月初旬。

アルカディス湖とその水を利用した水路の恩恵で一年を通して過ごしやすい皇都だが、この頃になると山に遮られた雪雲が落とす小さな雪が時折ちらつくようになり、皇都で営業している乗合魔動車や乗合馬車の会社の多くでは車輪を冬用のそれに交換する作業に追われ、商店に並ぶ品にも暖房器具や固体燃料が目立ち始める。街のそこら中にある魔道具店では暖房器具の魔導術式の摩耗部分を刻み直す仕事が最盛期を迎えており、まさに皇都は来るべき白銀の季節に向けて街全体で準備を進めている最中だった。

そんな街の支配者の座す皇城でも冬に向けての準備は進められており、庭の木々に冬支度をする庭師の姿もちらほらと見られた。寒さに弱い植物はすでに冬支度を済ませてあるが、寒さに強い植物はこの頃冬支度を済ませるらしい。

皇都中が何処か騒がしい、祝祭前のような独特の気配に包まれる中、一人の男が皇城の最上階近くにある摂政執務室で温かいお茶を飲んで一言――――

「――――そして皇城の中は暖房で眠くなる、と」

一五時の小休止の締めとして、レクティファールは“皇剣”の演算領域外の、心地良い眠気という最強軍団に蹂躙されつつあるぼんやりとした頭で、ろくに考えもせずぽつりと呟いた。

「窓、開けますか？」

その台詞が聞こえたらしく眉間に青筋を立てた額から頭頂部が禿げ上がった小太りの中年男性の秘書官が、地獄の底から響いてきそうな声で尋ねた。

レクティファールは慌てて頭を振る。

「いいや、結構だ」

誰が好き好んで寒さに震えるか。

執務室の温度も皇城の他の部屋に較べれば、二度も三度も低い。魔導式の暖房は設定温度が変わっても消費する魔力が変わるだけ、魔力は魔界がある限り枯渇することはないから魔力の無駄遣い削減という訳ではないのだが、レクティファールとしては暖かすぎると判断力が鈍るとしてこの温度に設定していた。

もっとも、慣れてしまえばやはり眠気を誘う温度に違いはないのだが。

「では殿下、休憩も済んだことですし、次はこちらの案件をお願いします」

皇城に勤める侍女がレクティファールから茶碗（カップ）を受け取ってそれを片付けると、秘書官は広々とした執務机に紙で出来た塔を建設した。手馴れた動きだった。

数は八つ。午前中にレクティファールが片付けた塔と同じ数だ。

「――――最近、何故私の所にこんな数の書類が届くのか、真剣に悩んでいるんだが……」

「殿下の推し進めておられる計画に気の利く文官が引き抜かれているからです。経験を積めば殿下に御裁可頂くべき書類と、そうでない書類の見分けもつくのでしょうが……」

「若い文官たちにはなかなかそれが出来ない、と」

「何事も、手の抜き場所というものがありますからな。――――しかし、これでも大分減ったのですが」

秘書官の言葉に書類の塔を見上げるレクティファール。

その間も手は勝手に動き、書類を決済していく。“皇剣”の処理能力はこの塔を攻略するに十分過ぎた。

「新しいことを始めた頃は、どんなことでも最初はこんなものです。特に計画の発起人は苦労するものではないですか」

「――――――――うむ、必要な苦労なら私は構わないぞ。何より新しいことは一番上が『我ニ続ケ』の精神でやらなくてはな」

だが、必要以上の苦労はお断りだ――――レクティファールの目はそう言っていた。秘書官はそれを正確に読み取り、上司に対する礼儀として内心で苦笑を漏らす。

「若い頃の苦労は歳をとってからの楽に繋がるもの。殿下が陛下と呼ばれる頃には、あのひよっこどもも多少は使えるようになっているでしょう」

「使えるようになってもらわなければ困る。文官の給料は安くない」

「先行投資という言葉もあります。――――まあ、私は給料分程度働く所存でありますが」

レクティファールは秘書官の言葉に頷いた。

皇王の秘書官は大きく分けて二種類存在する。

皇王府の職員か、三院などの行政官庁から出向してきている職員か、だ。

そもそも皇王とは、皇王家の当主であって皇国の国家元首でもある。市井の多くの者たちはこの二つの立場を混同しがちだが、制度上これらは全くの別物だった。

皇王家は確かに巨大な組織ではあるが、これは国家機関としての行政機関ではない。あくまでも一つの家を運営する為の組織だ。職員も皇王の家臣ではあるが法律上国家職員とは看做されない。対して行政官庁は国家機関であり、その職員は国家の公的職員であった。

無論、皇王府職員は慣例的に国家職員と同じように扱われているし、行政職員も国家元首が皇王である以上、皇王の家臣と言えなくもない。

そして、レクティファールの目の前に居る秘書官は、皇王府所属ではなく内務院民政庁から派遣されてきた秘書官だった。彼は摂政レクティファールの進める都市建造計画に於いて、内務院と摂政を結ぶ連絡員としての役割を負っていた。つまり、今彼が作り上げた書類の塔に関する仕事は本業ではないということになる。

しかし、今の皇城では、それが当たり前なのだ。

誰もが自分の職分を越えた仕事を任されている。出来るならばやれ、というある種の暴論がここではまかり通っていた。

内乱鎮圧と帝国撃退という経験を引っ提げた摂政がそれを主導しているのだから、それを止められる者はそう多く無い。そして止められる立場にいる者たちは、それを行う意志がなかった。止める理由を持っていなかったと言ってもいい。

彼らにしてみれば今の忙しさは限りある時間の中で出来るだけの、考えられるだけの諸々を実行するためには必要な苦行であったからだ。確かに“効率的”という言葉からは程遠いかもしれない、しかし、理想がそのまま現実に沿うことは極々稀。そう考えた結果、皇城の人々は目の前にある、自分に出来る仕事をひたすらに片付けることを選んだ。

その甲斐もあってか、皇国は他国の大使や公使が瞠目する程の速さで戦後復興の道を歩んでいる。

国内での連合軍脱走兵の賊徒化や先頃までの不況で発生した盗賊などの治安上の問題も、軍務経験者を組み込んだ皇国衛視庁の特別強襲部隊と戦後新たに編成された郷土守備軍である各州軍の活躍もあり、ここひと月は小康状態を保っている。

陸、海上流通網の健全化と物資流通量の戦前水準までの回復は皇国経済を再び成長させるために不可欠な要素であり、レクティファールを筆頭とする政府はこの討伐任務の成功を近々国内外に発表する予定だった。この発表で外国資本の皇国復帰が成れば、皇国やそれを取り巻く諸外国の経済状況も多少は改善されるだろう。

恐ろしいのは経済活動が鈍化することではない。その経済状況の悪化によって治安が悪化し、そしてその治安の悪化でさらに経済に打撃を受けることだ。

皇城に勤める文官たちは、少なくともその答えに行き着く頭脳の持ち主だった。

「そういえば、マイヤーの大公が息女の輿入れを望んだとの噂がありますが……」

秘書官は現在の皇国が置かれている状況を頭の中で幾度も計算し直しながら、上司に対して、仮に事実であった場合、その計算内容を変更せざるを得ない不確定情報の真相を確認する。

問われたレクティファールはその内容が秘書官の職務に関わることだと判断し、すぐに答えた。

「ウィードベッケル辺境伯公子との縁談を纏めた。ついでに関税撤廃と皇国資本の国内市場への参入も認めさせた。ああ、あと皇国軍の駐留もな」

「――――それはまた……」

秘書官にはマイヤー大公国の大公が打ち拉がれている様子が容易く想像出来た。

マイヤー大公国は先代の御代に正妃を嫁がせたこともある皇国の同盟国だったのだが、先の戦いでは連合軍に呼応して皇国の国境を脅かした。その責を問われて一度は賠償金を支払ったマイヤー大公

国ではあるが、皇国がその力を取り戻した以上その庇護の下に入ることは国家の安全保障上避けられない。

避けられないのなら、出来るだけ自国の価値を高める必要がある。

そうして考え出された手段の一つが公女の皇王家への輿入れだった。

皇国皇王家の縁戚ともなれば、それは皇国以外の国家と交渉するときにも有効な札となる。自分たちの背後に皇国が控えていると誇示するだけで、彼らは自分たちの力以上の成果を手に入れられるだろう。

もっとも、今の大公国にはそこまで考える余裕はない。ただ、自国と自国の持つ諸々の権利を守るための申し出に過ぎなかった。

畢竟、その答えは限りなく“否”に近い“是”であったのだが。

「ウィードベッケル辺境伯家といえば先代陛下の姫君、つまりは当代陛下の妹君が嫁がれた家、名門と呼んで差支えはありませんが……」

「私との関わりは少ない。――――まあ、我が国との縁戚と見ればそう悪い縁組ではないだろう。辺境伯に『ウィードベッケルは先代陛下の信任厚い忠臣。今回の戦では中立を保ったが、これも先代陛下への忠義故なのだろう』と言ったら、今回の縁組も良縁だと言って喜んでくれた」

「――――――――それは、確かに良縁でしょうね」

大公国、辺境伯領ともに摂政の提案を受け入れる以外に生き残る術はない。しかし少し妥協すれば、双方ともにそれなりの利を得られるようになっている。大公国は皇王家と縁の深い名門貴族と縁戚になることで皇国の後ろ盾を得ることが出来るし、辺境伯は属国とはいえその縁戚に連なることで、今後もその家格に相応しい扱いを国内国外を問わず受けることが出来る――――じっとりと重い冷や汗を垂らした秘書官は、マイヤー大公国と国境を接するウィードベッケル辺境伯領も計算に含めることにした。

丁度二人の会話が途切れたそのとき、レクティファールの机の端に置いてあった送受話装置が呼び出し音を鳴らした。

レクティファールは書類を決済する手を止めること無く、片手で送受話装置の晶盤に指を這わせる。

晶盤の上に、小さな表示窓が浮き上がった。

そこに映し出されたのは若い女性、隣の秘書官室に詰める皇王府から派遣された摂政秘書官の一人だ。

「何だ」

＜――――面会予定の方が見えているのですが……＞

「分かった、通せ」

短い遣り取りを終え、送受話装置が沈黙する。

そして訪れた沈黙に、秘書官はこの部屋から出る機会を得たのだと気付いた。彼は一礼すると秘書官室へと続く扉まで下がる。

客人に対して姿勢を正した彼の目の前で、数度ノックされた扉が開いた。

「皇王府総裁兼国家特別審議官ルキーティ・フェル・フェアリオス閣下、近衛元帥ベルファイル・ハウサー閣下、皇国軍教育総監海軍少将エル・カリュケイオン閣下、お見えになりました」

「うん」

レクティファールが頷いたのを見て、扉を開けた若い女性の秘書官は先程名を伝えた三名を摂政執務室へと促した。

三人はそれぞれ一礼して入室し、レクティファールの居る執務机の前に整列した。

子どものような妖精族の長老と、何処か官僚じみた風貌の、近衛軍の再編によって元帥位に列せられた近衛軍総司令官。そして街中で駄菓子でも売っていた方が似合いそうな、小柄で恰幅のいい中年

の女性軍人。

皇国の他民族性と実力を第一と考える風潮をよく表した光景と言えるだろう。

先程までレクティファールと会話していた秘書官は、そんなことを考えながら同僚と共に退室した。

「前置きは良い。まずは近衛軍の再編状況から聞こう」

レクティファールはまず挨拶から、と口を開きかけたルキーティを制する。

三名は摂政が上辺だけの社交辞令を必要としていないと判断し、その言葉に従うことにした。

「では、小官から近衛軍の現状についてご報告申し上げます」

「うむ」

レクティファールは一歩進み出たベルファイルを真正面に見据え、先を促した。

「陸海空のいずれも当初の予定通りに再編が進んでおります。ただ、

海軍艦艇に関しては主力艦は元より補助艦艇も新たに建造する必要がありそうです。諸侯軍より編入した補助艦艇にはとても実戦には耐えられないというものも多いので、予定を前倒ししてフォークスの皇立造船工廠と民間造船会社に発注をかけました。これが発注先です」

「発注にかかる予算については、皇王府総裁として殿下よりお預かりした予備費を充てました」

用箋綴に綴じられた報告書を手渡すベルファイルの発言をルキーティが補足する。

近衛軍はレクティファールの軍隊であるから、そのレクティファールが認めているならその予算の行使のたびにいちいち皇国軍にお伺いを立てる必要はない。無論、皇国軍の行動を妨げないことが前提ではあるが、ある程度の自由はある。

今回発注された艦艇の建造も、皇国海軍の艦艇や民間船の建造を行っておらず、空いた船渠で行われることになっている。

「海軍艦艇に関しては、今年の終わりまでに新たに六隻の強襲揚陸艦と二隻の重戦艦、四隻の軽戦艦を起工する予定です。巡洋艦以下の艦艇に関しましてはこちらに詳細を記載してあります」

ベルファイルが新たに差し出した計画書を受け取り、それに軽く目を通すレクティファール。

この計画が予定通りに進めば、正規海軍と較べればその規模は小さいが、近衛海軍も一個の海軍として十分な戦力を保有することになる。レクティファールの号令一下、即応してことに当たることが出来る高速海軍として。

「陸軍は旧黒龍公軍と旧近衛軍を中心に四個師団。空軍も旧白龍公軍と紅龍公軍を中心に二個航空軍を編成しました。引き続き再編を進める予定です」

新たな近衛軍は、レクティファールの命令が下り次第大陸のいずれの場所にも三日以内に纏まった戦力を投入できる能力を求められている。海軍の艦艇に陸軍の兵士を積み込み、海軍の戦龍母艦――戦母とも呼ばれる、文字通り戦う龍の母艦――から飛び立った空軍の航空騎の援護の下で揚陸作戦を行う。または空軍の輸送騎に陸軍兵を積み込んで大陸の奥深くに拠点を構築するなど、その高い即応性で皇国側の優位を早期に確立することが主任務とされている。

旧近衛軍は皇国最後の砦として皇都に存在したが、新たな近衛軍は摂政や皇王の振り翳す剣として最前線に立つことが求められていた。これは総兵力で帝国に劣る皇国が、その展開速度と高い質で帝国軍の鼻先を押さえるために考え出されたものだ。そして戦争の短期決着は、経済的な負担を軽減することにも繋がる。

最速の最精鋭。それを実現できるのは今の皇国では皇王家の軍隊である近衛軍以外に有り得なかった。

「今ご報告申し上げた通り、近衛軍の再編は予定通りに進んでいます。また今回皇王家が支出した資金に関しても、おそらく一〇年程度で回収可能でしょう。思い切った資本投下が功を奏したらしく、皇国の経済状況は予定よりも早く持ち直しそうです。ただ、それまでは今まで以上の倹約が必要になりそうですが――」

ベルファイルの上司でもあるルキーティがそれを引き継ぐ形で報告する。

皇王府は皇王家の資産を捨てるような資産運用はしない。長い時間を掛けてでも、投資したもの以上の利益が出ると判断したときのみその財布の紐を解くのだ。それを理解していない民たちは、皇王家が私財を擲って自分たちを救ってくれたと思っている。ただ、その民衆の支持は金を払ってでも買う必要のあるものだった。特に、今の皇国ではそうだ。

戦争は最も効率の悪い経済活動の一つとされている。そんな戦争で金を儲けることの難しさは、ルキーティがこの皇国で一番良く知っていた。皇国が経験した総ての戦争を知っているのだから、当然だ。

そんな彼女の考えでは、戦争という行為そのものに利益を期待することは避けるべきことだった。

戦いに勝って賠償金や領土を得ても、損失がそれを上回っては意味が無い。出来るだけ短期間に最大の勝利を得て、戦争を終わらせることが望ましい。無論、短期決戦を念頭に置いて長期戦を想定しないということはあり得ない。常に最悪の事態を考えることも、組織の頭領の仕事の一つだ。

「――――以上の報告から、『五カ年計画』自体の進捗状況は概ね予定通りと言えるでしょう。あとは他国の動向次第、殿下のお考え次第です」

「分かった。では、その考えを培うための学習に関してだが……」

たった一人、これまでの会話に入ることが出来なかった皇国軍教育総監――皇国では軍に関わるあらゆる教育機関の元締め――がレクティファールの言葉に答えるように一歩前に出た。

軍人とは程遠い、娑婆の匂いの強いその姿にレクティファールは微かに目を細めた。

だが、教育者と軍人は似て非なるものなのかもしれないと思い直す。

「軍教育総監エル・カリュケイオンです。こうして摂政殿下とお会い出来たこと、まことに恐悦至極」

「うむ、今日は急な呼び出しで済まなかった」

「いえ、これも本職の仕事ですので」

カリュケイオンは笑い皺の刻まれた顔を笑みに歪め、年若い摂政に教育者としての目を向ける。

軍に奉職し、三度の紛争を経て以降、多くの教育部隊を率いていた彼女には、この若者の持つ将来性と才能いうものがよく分かった。そして、その多くの才能が未だ原石としての面を多く残しているということも見て取れた。

軍の士官も、その階級や所属兵科に応じて必要な教育に差がある。

兵士からの叩き上げ士官には、戦場を見る一つ上の視点。

士官学校のひよっこ候補生には兵士の規範になる教養とそれを実行するだけの身体能力。

騎士学校の高級士官候補生には軍事に限らない広範な知識と鋭い洞察力。

そして各専門兵科には、それぞれに必要な専門知識。

それぞれ必要とされる知識が違うからこそ、皇国には多くの軍学校が存在するのだ。

「打診のありました殿下の騎士学校への編入に関してですが、皇府殿、宰相閣下と検討した結果、白の第一月の一日から十二ヶ月と決まりました。短期間で申し訳ありませんが、この間殿下には騎士学校にて多くを学んでいただきとうございます」

「――――ふむ、皇王府と政府が問題ないというならそれで良い」

「ただ、やはり殿下には殿下としてではなく、軍の高等士官教育の一環として一士官の立場で編入していただくことになると……」

皇太子が軍学校に通うことは帝王教育の一つだが、既に実権を持っている摂政が軍学校に通うことはこれまでの歴史上類を見ない。その護衛や政務との兼ね合いで皇太子が就学するよりも面倒ごとが多いからだ。

他方で、このまま摂政が皇国の内実を家臣からの報告のみで知ることに危機感を抱く臣下は少なくない。自分の目で見て、自分で考えて出した結論は、他者が見て、他者が纏めた結論に多分に勝る。先の戦いで才覚の片鱗を見せたレクティファールだからこそ、ここは慎重に自分の治める国を理解するべき――――多くの政府関係者や皇王家臣下がそのような結論に達したことは、レクティファールにとって幸運だった。

真実ばかりで事実を知らぬ君主が国を滅ぼすことなど、古今枚挙に遑が無い。

国を知らぬ者が、国を治められる筈は無いだろう。幸いなことに、騎士学校は将来の高級将校を養成するために民政軍政を問わずに多くの知識を候補生たちに与える場、得た知識を元にした洞察力を養うため、学校外での実技学習も多かった。

皇国のことを短期間で知るには、非常に都合の良い場所だと言え

る。

「レクト・ハルベルンとして編入する、ということか」

「はい。ハルベルン家のご当主には既にお話を通してあります。陸軍にも」

優秀な士官を騎士学校に入れることは、軍では日常的に行われていることだ。外部の高等教育機関や士官学校から直接騎士学校に入学する者もいるが、一度軍務を経験してから編入という形を取る学生も多い。

レクト・ハルベルンという陸軍少尉は実際にあの『龍虎戦役』を生き残った陸軍士官で、勲章も授与されている。騎士学校に編入したとて誰も怪しまない。

「政務はどうする？」

「宰相閣下は、現状のまま事態が推移するようであれば通信や騎士学校で行える範囲の執務で問題ないと。皇府殿は――――」

「こちらも、重要なものは陸軍からの仕事という形にして騎士学校に届けさせます。騎士学校でなら、軍の仕事と学業を両立させている学生も珍しくありません。それに、“皇剣”の機能を使えば、皇

城の演算端末内に殿下の並列思考の一つを常駐させること位は可能です」

「――――それはつまり、並列思考を分割してこっちに幾らか残していけ、と」

「御意」

ルキーティは恭しく、優雅に頭を垂れた。もっとも、話している内容は“皇剣”所有者以外には不可能な芸当だった。

並列思考は意識上の分身とも端末とも言える、独自の意識を持っている訳ではないが、部屋に篭って執務をこなすというだけなら十分に対応可能だった。無論、この場合はレクティファールの名前で花押を書き入れることは出来ないから、それでも問題のない案件に限られてしまうことになる。

それ以外の重要な案件は、直接騎士学校にいるレクティファールの元に持ち込むということになるのだろう。

「まあ、問題がないというならそのまま話を進めてくれ」

レクティファールは額を押さえながら、呻くように言葉を漏らした。

この仕事から抜け出すことは、どうやら何処にいてもどんな立場でも不可能らしい。

立場というものは捨てられるが、責任というものは捨て難いものだ――――彼は心の奥深くで独白した。

「――――で、何故摂政殿下はわたしの家に向かっているのでしょうか」

「“レクト・ハルベルン”として色々と……あるんですが……その、ウィリィア義姉上」

「ふ、ふンッ！」

レクティファールの慣れない「義姉上」という言葉を聞き、不機

嫌そうに顔を逸らすウィリィアの頬が実は朱に染まっていたことに気づかぬまま、レクティファールは皇都の一角にある商店の立ち並ぶ通りを肩を落としたまま歩く。人通りの多い場所だったが、“皇剣”のお陰で人にぶつかるようなことはなかった。

この日、騎士学校への編入が決まり、ハルベルン家の三男として振舞わなくてはならなくなったレクティファールが、以前から何度も招待を受けていたハルベルン家に向かったのは必然だったと言えるかもしれない。

そしてそのハルベルン家の長女が同じ職場に居るというのなら、それを伴うことに不思議はないだろう。もっとも、ウィリィア本人とメリエラが難色を示したところ、彼女らの上司である近衛軍総司令官にして近衛元帥たるベルファイル・ハウサーから『里帰り命令』が下っただけなのだが、それをレクティファールは知らなかった。

「しかし、ハルベルン卿には無理を言ってしまいましたね」

「――――父も母もそんなこと気にしないわ。きっと今頃鼻歌でも歌いながら準備してるでしょ」

ハルベルン家の現当主夫妻は、突然の『里帰り』にも快く応じてくれた。

むしろ彼らが不満に思ったことはレクティファールの訪問がこれ程遅れたことに関してだけであり、突然の『里帰り』そのものには何の文句も無いようだった。

「賑やかなことが好きな人たちだから」

そう言って笑うウィリィアは不満げでありながらどこか誇らしげで、レクティファールにはその表情がひどく眩しい物のように感じられた。

家族への信頼と呼ばれるものが根底にあるのだろうと考えるレクティファール。

元世界に残してきた両親や兄弟のことを少しだけ思い出そうとしたが、彼の中の家族の記憶は“皇剣”の情報に埋もれて容易に掘り返せなかった。

そして、それでもいいかと思える自分に気づいたとき、彼は何度目かの諦めを経験した。

（――――所詮、戻れぬ世界に価値はない）

“皇剣”の情報を探ってみれば、異世界間の時間の流れは一定ではないという答えがそこかしこに見られる。この世界と四界と呼ばれる四つの異世界は同じ時間の速さであるらしいが、それ以外の世界との時間の流れはとにかく一定ではない。同じ世界であっても、先程まではこの世界に比べて一〇〇分の一程度の速度であったものが、突然一〇〇倍の速さに変わっているということもある。

これは相手の世界との相対速度が一定ではないからだという説が“皇剣”開発時期の定説だったらしいが、今ではそんな研究をしている者も少ない。

ただ、異世界から無機物や生物を含めた有機物を召喚する技術は存在しており、それらの技術を使う技師たちがその説を裏付ける発見を次々と発表しているのだから、一定の信憑性はあるのだろう。

だが、それはつまり――――

（――――あちらの世界は、あれから一秒も経っていない可能性も、既に消滅している可能性もあるということか）

宇宙にさえ寿命があるのなら、元の世界が消滅している可能性も否定し切れない。

同時に、自分が命を落としてから一秒の時間も流れておらず、こちらから観測する分にはまったく時間が止まっているということも考えられる。

「まあ、どちらにせよ、“皇剣”を継承した私にこの世界から逃げる術はないのですが……」

“皇剣”は四界の力を以て様々な事象を引き起こす。それは“皇剣”自身の機能の維持も含まれており、四界の力が無ければ“皇剣”はその機能を維持出来ない。

絶対兵器たる“皇剣”は、その根底にどうしようもない欠点を抱えているのだ。

「――――何？　どうかしたの？」

俯いて、小さく独語したレクティファールの声を聞き咎めたのか、先を歩いていたウィリィアが振り返る。

その目には、ただ純粋に弟を心配する姉の感情があった。

嘗ての彼女はレクティファールに対して過剰なほどの反応を見せたが、それはレクティファールをメリエラに近付く不逞の輩と見ているからに過ぎない。二人が婚約し、一つ屋根の下で過ごすようになった今では、その態度はレクティファール個人に対する不満などを原因とするものでしかなかった。

メリエラという妻がありながら、自分のような使用人に手を出そうとする神経が許せない。ウィリィアは自分が抱くレクティファールへの怒りをそう結論付けている。

さらにもう一つ、ウィリィアの性格上、これまでの態度を変えるということ自体が難しいという理由もあった。一度突き放した人物に、どうやって近付けばいいのか分からない。そんな彼女の不器用さも毎朝の騒動の一因だろう。レクティファールがウィリィアに対して、妙な手出しをしていることは勿論否定出来ないのだが。

一方、レクティファールを弟として見たとき、ウィリィアは彼の

存在を守ろうとする。

自分より弱いものを守ろうとするのは、ある意味人形種の因子に刻み込まれた宿命だ。人間という最弱の種を守るという宿命因子が、今ではひどく弱体化しながらも自分より脆弱な存在を守ろうという意識を生み出している。

造物主たる人間種を守るべき対象とは認めないと決めたのは彼女たちの祖先であるが、その宿命からは逃れられないのかもしれない。

「いえ――――初めて来る場所だったので……少し」

「ふぅん、そう……」

ウィリィアはレクティファールの答えに納得した様子は見せなかったものの、それ以上追求するようなこともしなかった。

レクティファールを心配しているという態度を見せることが恥ずかしかったのだ。

「じゃあ、買い物だけ済ませましょう。夕食の材料と、お酒ね」

ウィリィアは先程通信で頼まれたらしい買い物を書き留めた紙を指で弄びながら、レクティファールの三歩ほど前を進んでいく。

彼女は背後を振り返ることをせず、レクティファールがきちんとついてきているかという確認さえしない。ただ、時折、振り返ろうとしてそれを堪えるような動きを何度も見せていた。

そんな不器用な姉の姿に、レクティファールは落ち込んでいた気分が浮き上がってくるような錯覚を抱いた。

何故だかは理解出来ない。

ただ、この人は優しい人だと――――自分の中の、一番大切な部分がそう認識しているということが何よりも重要だった。

そして、そう認識しているからこそ、彼はあの不器用な姉を守ろうと思う。

守ることばかりに気を取られて、守られることを忘れてしまっている彼女を守りたいと思う。

それで十分だろう。

レクティファールは足早にウィリィアに近付くと、その肩越しに買い物の内容を確認する。

ウィリィアの身体から漂う甘い匂いを感じながら目を落とすと、綺麗な字で、野菜や酒の名前が記されていた。

「姉さん、まずは何処から行く？」

「――ッ！？　ね、ねねね……姉さんって……」

「姉上の方が好みだっていうなら、そっちにするけど」

「うっ……！」

レクティファールの、何処か意地の悪い問い掛けに対し、ウィリィアは拳と肩を震わせることで何とか怒りを堪えた。

明らかに自分を試そうとしているその態度が気に食わない。

だがしかし、自分に有効な反撃手段は無い。心底憎たらしいことだが、やっぱり無い。

「――――ね、姉さんでいいわ」

「イエスマム、了解しましたよ姉さん」

「くうっ！」

殴りたい、この得意げに笑う子憎たらしい弟を思いっきり引っ叩きたい。教育的指導、そう折檻してやりたい。

でも、そんなことをしている暇はない。

既に夕日が城壁の向こうに隠れるような時間だ、夕食の材料を買うにはそれなりに危うい時間ということになる。

「まずは野菜！　サラダ用の葉物が無いらしいの！」

「じゃあ、あそこか」

そう言ってレクティファールは一つの商店を指差す。

老境に差し掛かった男性が、買い物に来たらしい主婦と雑談を交わしている。

「じゃあ、さっそく行こう。時間もないし」

レクティファールはそう告げ、ウィリィアが反応するより先に彼女の腕を取って歩き出した。

「ええっ？　ちょ、ちょっとレクト……！」

「値切りってどうやるんだろうか……――――“皇剣”に情報ないもんかな……」

「話を聞きなさい！」

「あ、あった……ってこれ野菜じゃなくて魚じゃないか、応用できるのか？」

「待ちなさい――――って誰！？　誰が魚値切ったの！？　皇王陛下が魚値切ったの！？」

「ま、何とかなるだろう。――――おじさーん、このクシャル菜下さいな」

「おう毎度！　おっと、えらい美人なお姉さんじゃねぇの、兄ちゃん兄ちゃん、おっちゃんのこと“お義兄さん”って呼んでみたくないかい？」

「はっはっは、――――後ろの美人な奥方が良いって言ったらね」

「ぬぁにぃっ！？」

背後を振り返る店主と、こめかみを痙攣させたい体格の女性。

二人の視線がぶつかり合った瞬間、苦笑するレクティファールと困惑するウィリィアの頭上を怒号が飛んで行った。

買い物を済ませた二人は、皇都の中心街から少し離れた農業地区に向かった。

この路線の乗合魔動車は基本的に農業地区の住人が街に向かうために使うことが多く、日も落ちたこの時間ではそんな彼らも既に家に戻っているらしく客もまばらだった。

紙袋を抱えた二人は三〇分ほど魔動車に揺られ、目的地に到着する。そこは農業地区の中でも、一際奥まったところにあった。

「何代か前の当主が自分から希望して構えた屋敷らしいわ。土地は広いんだけど、交通の便は悪いわね」

「ほうほう」

石畳の道路を歩く二人。

会話は途切れないが、街路灯もない田舎道はお互いの姿さえ容易く隠してしまう。

二人は隣にある気配に向けて声を発しながら、道の先に見える明かりに向かって歩き続けた。

やがてその明かりが外壁を蔦で覆われた屋敷の姿に変わると、二人はようやく目的地に着いたのだと実感した。

小振りではあるがしっかりとその機能を残した鉄格子の門の隣、人一人がやっと通れる小さな通用口を潜り、二人は屋敷の玄関前に立つ。

玄関前には良く整えられた庭があったが、こう暗くては良く見えなかった。

「――――――――」

「――――？　どうしたの姉さん」

扉横の呼び鈴の鎖を掴んだまま動きを止めたウィリィアを見て、レクティファールは首を傾げる。

さっさと中に入って買ってきた品物を渡さなくてはならないとい

うのに。

しかし、ウィリィアは銅像のように固まったまま呼び鈴を鳴らす気配はない。

怪訝に思ったレクティファールだが、このまま立っていても仕方がないのでウィリィアの手から鎖を抜き取るとそれを引っ張った。

呼び鈴が涼やかな音を奏でると、びくりと肩を震わせたウィリィアがレクティファールを見た。

「れ、レクト……」

「何姉さん、その余りにも久し振りの里帰りでどんな顔をして両親と会えばいいか分からない、という感じの表情は」

「そのままよっ！　何、わたしってそんな判りやすい！？」

「うん、概ね」

「――っ！？」

至極あっさりと返されたレクティファールの言葉に、ずん、と肩を落として落ち込むウィリィア。

レクティファールは、この女性ってこんなにも判りやすかっただろうかと疑問に思いながらも、その姉が持っている紙袋が落ちないよう支える。

しばらくして屋敷の中から足音が聞こえ始め、その足音は扉の前で止まった。

鍵の外れる音が聞こえ、ウィリィアが慌てて姿勢を正した。

「おかえりなさい、ウィリィア！」

扉が開くと同時、そこから飛び出した細い影はウィリィアに抱き着いた。

ウィリィアを抱き締めて離さないハルベルン夫人――――ルイーズの姿を見たレクティファールは、ウィリィアがもしも人間と同じように老いたらこんな姿になるのだろうな、という感想を抱いた。それ程に、二人の容貌は良く似ていた。

もう五〇を超えたというルイーズは、人間種らしく白髪混じりの髪を三つ編みにしており、白い前掛けが良く似合っている。

そんな母に抱き締められたウィリィアは、恥ずかしそうに頬を染めてレクティファールを見た。

「お、お母さん……殿下が見てる……」

「あらそうだったわね！　でも、殿下じゃなくてレクトでしょう？」

「――――まあ、そうなんだけど……」

今回の訪問は摂政レクティファールとしての行啓ではなく、ハルベルン家の養子レクトとしての里帰りだった。

ルイーズはそれを理解し、レクティファールに対する態度も息子に向けるそれを崩さない。

「おかえりなさいレクト殿。お仕事ばかりで疲れたでしょう、夕食の準備ももうすぐ終わるから居間で主人と待ってて」

「あ、はい」

レクティファールの返事に満足そうな笑みを返すと、ルイーズはああ、忙しい忙しいと楽しそうにぼやきながら娘を引き摺り、レクティファールの抱えていた紙袋を強奪して台所へと戻っていった。

ウィリィアも既に諦めていたらしく、抵抗らしい抵抗を見せず、静かに引き摺られていく。

残されたのは、この家の居間が何処にあるか分からないレクティ

ファールだけだ。

「――――困ったな、うん、困った」

とりあえず、人のいる部屋を目指そう――――“皇剣”の探測機能を展開してレクティファールは一歩を踏み出した。

“レクト・ハルベルン”にとっても、“レクティファール・ルイツ＝ロルド・エルヴィッヒ”にとっても初めての里帰りは、こうしてゆっくりと幕を開けたのである。

第六話「懐古＝里帰り」（後書き）

事実上の前後編となりました。

本当なら一話に纏めるべきなのでしょうが、早足で纏めるよりも細かく書きたい場面なので前後編となっております。

第七話「後悔＋葛藤＝現在」

レクティファールは黙々と仕事をこなしていた。ごしごしと、壁面にへばり付いた黴を海綿で擦り落とすという仕事を。

洗剤は出来るだけ使わず、力の入れ具合と適切な角度で黴や汚れを掃討していく。日常生活というのは、“皇剣”の未だ限界の見えない演算能力を使いこなす訓練には調度良かった。最近は惑星の発生から崩壊までを計算しながら、別の意識で日常生活に関する演算を九九種類並列して演算することにしている。

例えば、お湯が沸騰するまでの時間や、お茶が冷めるまでの時間、書類に文字を書くときの筆圧や紙を切る場合に最適な角度と速度、自分の発した声の反射量と反射角度、窓から入ってくる光の減衰量と日照量などだ。

「――――惑星っていっても色々あるからなぁ……今度は巨大気体（ガス・ジャイ）惑星（アント）の恒星化でも……いや、彗星の軌道計算というのも中々……」

そこまで訓練内容を考えて、レクティファールはとあることを思い出す。

（――――――――しかし、あれはやっぱり、誰にも話せないこと

ですよねぇ……）

日常で“皇剣”の演算機能やその他の機能を使用する訓練を行っていると、時折既存の機能の新しい使い方を見つけ出すことがある。勿論、新しいとはいっても歴代の皇王が知らなかったとは考え難いのだが、レクティファールにとっては新しい使用方法だ。

今回見付けたその使用方法とは――――

（――――魔法を使わずに人の身体寸法を測れるとは……流石に驚いた。いや、機能的には納得だけれども……）

温度感知機能や、不可視光線、可視光線、電磁波、音の観測で服の上からでも人の身体の大きさを計測出来るというその機能は、自分を中心とした周辺環境を様々な形で観測するための機能を応用したものだ。

その機能の恩恵で“皇剣”保有者や闇夜でも周囲を見渡すことが出来るし、閉所でも方向感覚や平衡感覚を失うことはない。こと戦闘に於いては、自分の置かれた状況を正しく把握することこそ勝利への第一条件と言える。そう考えるなら、“皇剣”の観測機能が優れていることに疑問の余地はないのだ。

（歴代の皇王陛下も気付いてる筈だけど、ルキーティさんや他の誰もそんなことが出来るとは言っていなかった。知ってたらそれなりに釘を刺してくるだろうし……やっぱり知らないということなんだ

ろうなぁ……）

女性皇王ならばともかく、男性皇王がこの機能を下手に使えば大問題だ。

（これまでのみんなの言動を見るに、この国の倫理観はそれなりに発達している。異性に対する犯罪が明確に法に定められているのなら、当然この機能は問題になるだろう。それとも昔は違ったのか？）

どちらにせよ、歴代の皇王はその機能を隠した。

そもそも、日常生活では使う必要のない機能だ。封印しておいても問題はないだろう。

（歴代陛下も変な苦労してるんだなぁ……親近感は湧くけど、この機能って絶対一度は誰もが使っているような気がする……！）

特に男性皇王。

（――――――――まあ、正直、私も使ってみたし……。しかし、あの二人は理解があって助かる……結果的には今度服贈らなきゃいけなくなったけど……）

誰とは言わないが、協力者を得て観測値と実測値の誤差確認をしてみたレクティファール。

この機能を使えば、贈る服の寸法を間違える心配はないということが確認出来た。

装飾品も同じように寸法を間違えることはなくなるだろう。

（というか、寸法なら後宮の人に訊けば教えてくれるか）

贈り物をするといえば寸法から意匠まで適切な助言を与えてくれるだろう。日頃から婚約者候補たちの世話をしている者たちなら、その好みや最近の個人的流行も把握しているに違い無い。更には宝石言葉や花言葉など、女性の好む話も聞ける。

（しかし、兵器としての機能的には無駄じゃないけど、実生活では無駄の塊ですよねぇ……“皇剣”って……）

このまま機能の確認を進めていけば、相手の体調や体重、健康状態も観測出来るようになるだろう。

それをうっかり他人に漏らした日には、もう太陽の下は歩けない気がするレクティファールだった。

そして、悟る。

（皇王に一番大事なのって、実は自制心なのかもしれないな……）

そう、諸々の意味で。

“皇剣”の機能について並列思考の一つで延々と悩みながら、それでも浴室掃除を続けるレクティファール。

壁面が終わり床に差し掛かった頃、背後にある引き戸の向こうから声を掛けられた。

この屋敷の主人、ハルベルン家当主アルフォード・ハルベルンだ。

「――――いやぁ、仕事上がりにすまんな、本当なら風呂掃除は俺の仕事なんだが……」

引き戸を開け、アルフォードは頭を掻きながら謝罪の言葉を口にした。

今日ここにいるレクティファールは、摂政皇太子“レクティファ

ール・ルイツ＝ロルド・エルヴィッヒ”ではなく、ハルベルン家の三男“レクト・ハルベルン”という扱いだ。アルフォードのレクティファールに対する態度もそれに準じたものになっている。

何処にレクティファールの命を狙う者がいるか分からない以上、レクティファールという名の摂政とレクトという名の士族が同一人物であるという答えが導き出されるような情報は少ない方が良い。

アルフォードもその辺りは良く心得ていた。彼の今のレクティファールに対する態度は、摂政に対するものとは到底思えない。何も知らない他人が見れば、父親が久し振りに帰省した息子に声を掛けた、としか思えないだろう。

「いえ、これくらいどうということもありませんし、腰を痛めてるならこの仕事は辛いでしょう」

腰膝を曲げ、汚れが落ちるまで延々と同じ動作を繰り返す浴室掃除。仕事で無理をして腰を痛めたというアルフォードには辛いだろう。

何よりこの屋敷の浴室は当主自慢の広々とした――五、六人でも窮屈な思いをせずに入れるほど――もので、掃除は重労働だ。ならば、下級貴族とも呼ばれる士族らしく使用人に任せれば良いという意見もあるのだろうが、泊り込みではなく通いの使用人しか居ないこの屋敷では、屋敷の住人が夕食の準備や浴室掃除をすることが当たり前になっていた。

それ故に、この家の三男坊という扱いになっているレクティファ

ールが風呂掃除をすることに、何の問題もない筈だ。

「こんな腰痛、昔ならすぐに治ったんだがなぁ……流石に帝国の十三姫と同等の回復力とはいかんか」

「彼女は現在生存している『龍殺し』の中で一、二を争う能力の持ち主ですから、較べても仕方がないのではないですか？」

アルフォードは現在、新たな近衛軍にて訓練教官を務めている。元々白龍公の直臣として公爵軍にも籍を置いていた彼だが、その主君直々の頼みで近衛軍に軍属として出向することになった。

何故、彼が近衛軍に出向することになったのか、その理由は至極簡単で、先の戦いで帝国の『龍殺し』が摂政レクティファールに肉薄し、結果一太刀刃を交えたという事実が近衛軍にある種の強迫観念を与えたからだった。

曰く――――強大な一個体は状況如何では一個軍にも容易く勝る。

それに対処するためには、強力な個体を相手に戦える群体を鍛え上げるしか無い。

「その為に『龍殺し』を初めとした力持つ種族の武人を集めることは納得出来るんだが、俺はいい加減年寄りだ。息子のどちらかでいいんじゃないかと思うんだがね……」

ウィリィアの兄二人は一人は陸軍に、もう一人は海軍陸戦師団に所属している。共に武人である父の背を追って今の仕事に就いたという、アルフォードにとっては自慢の息子たちだ。

『龍殺し』としての実力も、間違いなく妹以上。それならば、彼らを近衛にとアルフォードが思うのも何ら不思議なことではない。ただ。近衛軍や皇王府、政府の考えはアルフォードのそれとは大分異なる。

「ご子息、つまりは私の義兄たちということになりますが、彼らの力は確かに若く、強い。しかし、こと自分の『龍殺し』としての力を使った戦い方となると、アルフォードさんに敵うものではありません。自分の力がどの程度のもので、どのように使うことが一番効率のいい戦い方か、或いはそれを相手に教えるにはどうしたらいいか、これらの経験無くして理解出来るものではないでしょう」

「年寄りなりの戦い方、ね」

アルフォードは脱衣所の椅子に座り、腕を組んだ。

それなりに納得したらしく、何度も頷いている。

「まあ、ここまで生き残らせてもらったんだ。若い連中が生き残る手伝いをすることに文句はないさ。だけどな、レクト……」

苦笑しつつ、彼は新しく家族になった青年を見る。

青年は衣服が濡れないよう、裾を折り、袖を捲った姿でアルフォードを見上げていた。

そういえば、自分も昔はこんな姿で狭い風呂場掃除していたな――アルフォードはふとそんなことを思い出した。

まだ結婚したばかり、家督である兄が存命だったこともあり、アルフォード自身はハルベルンの本家とは距離を置いていた頃の話だ。

同時に、若くして得た養うべき家族の重さに喘いでいた時期でもある。

「――お前はもう、うちのガキだよ。俺のことは『アルフォード』じゃ無くて、親父と呼べ」

そして、父の偉大さと母の強さを知り得たのもその頃だった。

「お、今日は豪勢だな。芋の衣揚げに鶏の炭火焼か」

「全部ウィリィアの好物よ。あ、レクト殿の好物は今度来たときに作ってあげるから、あとで何が好きか教えて頂戴ね？」

「はい」

浴室掃除を終えて食堂に入ったアルフォードとレクティファールを出迎えたのは、山と積まれた夕食の品々だった。

台所からウィリィアの「大人しく皿に乗りなさい！」という声と騒がしい足音が聞こえてくることから察するに、まだまだ品数は増えるようだ。

それというのも、『龍殺し』という、人間を元に作られた身体に分不相応な力を内包した種族にとって、食事はその能力を維持するために必要不可欠ものだからだ。帝国の第十三姫のように高い能力を持つ『龍殺し』であれば少ない栄養分から効率的に熱量を取り込めるのだが、アルフォードやウィリィア、彼らと同程度の能力しか持たない『龍殺し』たちはひたすら数を取り込むしかない。

今となっては、アルフォードもその力を振るうことが少なくなって世間一般の家庭とそう変わらない食事の量になったのだが、今日

は朝から『龍殺し』の力を全力で発揮した長女がいる。そのため、食卓に並べられる品々は量、種類共に自然と多くなった。

「レクト殿は余り食べないのよね」

アルフォードが引いた椅子に腰掛けたルイーズが、食卓の斜向かいに座ったレクティファールに問うた。

妻を座らせたあと、上座の自分の席に着いたアルフォードも興味深げにレクティファールの答えを待っている。概念兵器という人形種を超える戦闘種が、どれほど優れた熱量消費率を持っているのか興味があるのだろう。

レクティファールは自分の食事と、そこから引き出せるエネルギーを脳裏に浮かべながら答える。

「ごく普通の、混血種の成人男性と同じ程度の食物摂取で最大二時間全力稼働出来ます。その気になれば空気だけでも質量さえあればエネルギーに変換出来るらしいのですが、それも味気ないですし」

質量をエネルギーに変換する――――これは“皇剣”の圧倒的な能力を支える最高の魔導術式だ。

単に取り込んだ周囲の魔力を様々な力に変換するだけではなく、その魔力を使って質量をエネルギーに変換する。それ位しなくては全力稼働中の“皇剣”の機能は保てない。

もっとも、本来ならば今のレクティファールに質量消滅によるエネルギー生成は必要ない。魔導術式による魔力変換のエネルギー生成で十分に必要な量を賄うことが出来た。

そのような意味合いの“皇剣”の基本情報を比較的平易な表現で語るレクティファールだが、やはりというか魔導師や魔道技師のような専門家以外には難しい話らしい。ハルベルン夫妻は仲良く揃って疑問符を浮かべていた。

「し、質量……？」

「あなた、どういうことかしら？　わたくし魔法には詳しくなくて」

「俺に分かるかっ！　どっかの研究者でも連れて来い！」

困ったような曖昧な笑みを浮かべるルイーズと、顔面の筋肉をぴくぴくと痙攣させて怒鳴るアルフォード。

門外漢の二人にとっては、基本的な“皇剣”の情報さえ理解し難いものらしい。

（まあ正直、私も“理解した”というよりは、いつの間にか“理解していた”という方が幾らか正しい表現なのですがね……）

誰にもその詳しい扱い方を教授されないまま継承した“皇剣”とて、流石に最低限必要だと思われる情報は問答無用で頭に叩き込まれる。旧帝国帝都の悲劇を再現する訳にもいかないからだ。

先程の質量消滅によるエネルギー生成も、手のひらに乗る程度の物質を消滅させるだけで皇都を丸ごと吹き飛ばせるエネルギーを得ることが出来る。神々や龍種、幻想種その他の力ある者共を人間が凌駕する為に、その為だけに生み出された兵器としては正しい在り方だ。

（そう、亡びたくないという正しい願望。正しい狂気）

この狂いきった兵器を正気のまま扱うために、古の人々は多くの制御機構を組み込んだのだろう。知らない機能は使えない、知り得た機能はその使用を自制させる。

使えば亡びる。亡ぼされる。

全機能を使用し、その総てが白日の下に晒されれば、“皇剣”はその瞬間から世界の敵になるだろう。

嘗て都市一つを消滅させたことなどまだ生温い。神々が持つ世界への干渉能力さえ凌駕する概念兵器は、その機能を十全に発揮しなくとも海を干上がらせ、大陸を沈め、月を砕けるのだから。

（――――知恵ある者が世界を亡ぼすなんて、何処の世界でも同じ

か）

レクティファールの前世界とて、知恵ある者どもは自分たちの文明を葬るだけの力を手に入れていた。使い方を考えれば、自分たちの母星を微生物しか住めないような星にすることも可能な代物を生み出した。

（亡ぼしたくて生み出す訳ではない）

されど、結果として自分たち亡ぼす力を得てしまう。

（だが、それも当然のことなのかもしれない）

自分たちを救える力を生み出せるなら、自分たちを亡ぼせる力を生み出せるということ。世の総ては正負同等、正の事象には同等の負の事象が付属する。

人を救えるならば、人を殺せる。

人を殺せるなら、人を救える。

それは結局、本人の選択次第。

レクティファールが自分の大切な存在を守ろうと思うのは、自分がその大切な存在に向けている想いを守りたいから。人を守りたい

と思う心は、最終的には自分を守りたいという心に繋がる。

人を守れずに傷付く自分を許容出来ないから、人を守る。無償の愛なんて存在しないし、存在する筈がない。愛とは自分にしか向けられないもの、人に向かう愛は、自分に向けた愛情が反射しただけのものだ。

人は他人の想いを理解出来ない。

魔法で心を読めても、そこに込められた想いは読めない。

それ故にすれ違い、傷付けられ、傷付けられたくないから力を求め、結局その力で相手を傷付けてしまう。“不理解”こそが知恵と呼ばれる“理解”の負の事象。知恵ある者どもは、その知恵によって傷付くのだ。

哀しいことだ、とは思えない。

何故なら――――

「――――はぁ、やっと盛り付け終わった……」

「不器用ねぇウィリィアは。そんなことじゃ自分の子どものお弁当作れないわよ」

「だなぁ、いい年して料理の一つも満足に盛り付けられんとは……」

「お父さんは黙ってて！　わたしの不器用はお父さんのせいなんだから！」

「――――おぅ……分かった……」

理解と幸せは等価ではない。

理解出来ないから不幸などという等式は成立しない。

幸せは自らの内から溢れるもの、理解は自分以外の何かを受け入れること。理解は過程であり、幸せは結果だ。

理解の果てに幸せがあることもあるだろう、だが、不理解の先にも幸せはある。理解せずとも感じられる幸せも存在するのだから。

「――？　何笑っているのレクト、ああ、お父さんの情けない姿がそんなに面白い？　ならもっと晒っていいわよ」

「ちょっと待て我が愛娘！　今何か別の意味合いで『わらう』って……」

「さあ！　準備も出来たことだし夕食にしましょう！　ウィリィア、席に座りなさいな」

「うん」

家族に軽んじられ、食卓に突っ伏して嗚咽するアルフォードを横目にウィリィアはルイーズの正面、レクティファールの隣に座った。

「食べ方が分からなかったら遠慮無く訊いて」

「了解、姉上」

微笑み、頷くレクティファール。

こんな家族の団欒は、久し振りだった。

「――――味は、出来るだけ気にしない方向で……特にあの一角」

ウィリィアはそう言って、微妙に盛り付けの崩れている一角を示す。

そこにある揚げ物や焼き魚の餡掛けは、よく見れば焦げたり形が崩れたりしている。

「――――――――姉さん作ということですか」

「うるさいわね、お茶菓子や軽食とは勝手が違うのよ」

「いえいえいえ、形と味は別物ですから」

「暗に形は駄目って言ってるわね」

「はっはっは」

「笑うな！」

怒鳴り、食卓に並べられたナイフを握るウィリィア。

しかし、彼女の動きは偉大なる母によって制された。

「では皆さん、いただきましょう」

言って指を組み、小さな声で食前の祈りを諳んじるルイーズ。

アルフォードは無言で妻の食前の祈りが終わるのを待ち、ウィリィアは慌てて居住まいを正した。

ハルベルン家では、ルイーズのみが食前の祈りを捧げるようだ。

「――――――――よし、と。ごめんなさいねレクト殿、昔の習慣なんだけど、こればかりは抜けなくて」

「こいつは精霊信仰の村出身でな、その信仰によると食物には精霊の命の欠片が宿っているらしい。その欠片を食って、自分たちは生きているってな」

「ほうほう」

食物に命が宿るというのは珍しい考えではない。

しかし、一つの家族の中でも信仰が分かれるという点に、レクティファールは皇国の宗教事情の一端を見たような気がした。

信仰の結果が神霊魔法などの目に見える形で現れるこの世界では、他者に合わせて信仰を変えるということは少ないのだろう。自発的な信仰以外に、良い結果は伴わない。

「さあ、腹も減ったし今度こそ食べよう」

言うが早いか、アルフォードが目の前に鎮座する鶏の照り焼きをフォークで一刺し、そのまま口に運ぶ。そのまま子どものような笑

顔を浮かべ、次々と料理を平らげていく。

「さ、レクト殿も」

「あ、はい」

ルイーズに促され、レクティファールも料理を取り皿に移すべく動き出す。狙うはただ一つだ。

「――――っ、なんでいきなりわたしの料理に手を出すか愚弟っ！」

「ええ、だって食べないなんて失礼なこと出来ないでしょう」

「もっと後！　お母さんの料理の後！　どうしてあんたはいきなり高難易度に挑戦するのよ！？」

「そこに山があるから」

「意味が分からないわよ！」

ぎゃいのぎゃいのと顔を真っ赤にして吠える義姉を横目に、レク

ティファールは平気な顔で少し衣の取れた揚げ物を取り皿に移す。

ルイーズが苦笑しながら渡してくれた木の実のソースを掛けると、いつの間にやら静かになっていたウィリィアの注目を浴びつつそれを口の中に放り込んだ。

「――――――」

四人揃って無言。

アルフォードは面白そうに、ルイーズは微笑みながら、レクティファールは神妙に咀嚼し、ウィリィアは判決を待つ被告人のような表情で。

そんな時間が十秒ほど続き、レクティファールはぽつりと呟いた。

「――――普通」

「……っ！？　でりゃあっ！！」

神妙な顔のまま、まさにどうにもならない感想を述べたレクティファールの後頭部に義姉の鋭い蹴りが飛来した。

食後の腹ごなしというには尖すぎる動きで、レクティファールは木剣を振るう。

ハルベルン邸の庭に、虚空を切り裂く擦過音が連続する。

排熱が追いついていないのか、珍しくその身体からは汗が飛び散り、肩の出た黒い肌衣姿のレクティファールの全身からは湯気にも似た残留魔力が立ち上っている。

“皇剣”を構成する超微細生体機械群は基本的に魔力や身体に取り込まれた熱量をエネルギーに変換している。他の生物と同様、その稼働には発熱が伴い、排熱の必要が生じる。

身体を動かす筋組織となっている超微細生体機械群は元々発熱が多いが、今回は意図的にレクティファールがその稼働率を引き上げていた。最近はこうして少しずつ身体の扱い方を覚えている。

摂政として表に立つ機会が増え、それに伴って“皇剣”の緊急防御機構だけでは安全を確保出来ない事態も想定されるが故だった。

「次、刺突三十四式」

「はい……！」

上段からの斬りの動作を皇国陸軍教練書に記載された三十四種類済ませ、レクティファールはアルフォードに言われた通り刺突の動作に入る。

中空に的を思い浮かべ、レクティファールはそこに向けて木剣の鋒を突き込む。何度も、何度も。

「……ふっ、……はっ、……ッ！」

基本的な三十四種類の動きをひたすら繰り返すことは、肉体的な修練と同時に精神的な鍛錬を兼ねていた。

同じ動きでも少しずつ誤差は生まれる。その誤差を極力減らすためには、やはり同じ動きを繰り返して発生する誤差の傾向を“皇剣”に学習させる必要があった。

この世界で使用する限りは最強の完全兵器である“皇剣”と言えど、肉体という装置を介して結果を反映させる以上、武術の鍛錬からは逃れることは出来ない。

「せいッ！」

木剣の動きによって発生した気圧差は風となり、レクティファールの背後にいるアルフォードには音として認識された。『龍殺し』の中でも経験豊富な彼は、その音だけで幾つかの指摘事項を頭に思い浮かべることが出来る。

動きが大きい。

戻しが雑。

呼吸が動きに対して不規則的。

「はい」

指摘された箇所を修正しながら、更に動き続ける。

一つ一つの動作の精度を上げることで、最終的な結果をより良いものに。

何千何万と同じ動作を繰り返し、小さな無駄、小さな誤差を修正していく。それが“皇剣”の使い手の修練。

そして、一時間の後。アルフォードはレクティファールの動きの精度が頂点に達したときを見計らって声を発した。

「――――そこまで」

ぴたり、と足元から振り上げられた木剣が動きを止める。

レクティファールの呼吸が、身体の動きを最優先したものから排熱を最大効率で行うものに変化した。筋細胞から吐き出された残留魔力と熱が、皮膚の表面から排出される。傍目には、身体から湯気が立ち上っているようにしか見えないのだが。

「良い動きになったな。本来なら感覚を身体に覚え込ませるものだが、“皇剣”使いの場合は“皇剣”に覚えさせるのか」

「動作の最適化は演算領域内の計算だけでは上手くいきませんからね。実際に身体を動かして計算との誤差を……」

「分かった分かった、俺には理解出来ないことが分かった」

「――――義父上」

呆れたようなレクティファールの表情に、アルフォードは慌てたように言い訳を吐き出す。

「ば、馬鹿にするなよ、俺みたいな年寄りは身体に動きが染み付いているから若いもんの感覚が分からないって言ってるだけだからな」

「ええ、分かってますとも……」

頭ではなく身体で理解したからこそ、理屈では理解出来ない。しかし、それは決して悪いことではないのだ。

考えるより先に身体が動くというのは、それだけ動きの無駄が少ないということにもなる。

「――――けッ、いいさいいさ、どうせ俺は脳みそまで筋肉で出来た猪騎士だから」

「脳が筋肉で出来ているとなると、脳の機能は何処で補うんでしょうね」

「ん？　――――股間じゃないのか？　俺も昔は『下半身で龍を殺すアルフォード』と呼ばれ恐れられたもんだ」

「――――――――」

息子との会話で下の話全開。

冗談だと言うことは分かるが、レクティファールにはついて行けない。

「黙るなよ、俺が道化みたいじゃねえか」

「大体その通りかと」

「――――――――だよな」

レクティファールに手拭いと陶製の容器に入った水を放り投げて庭に座り込むアルフォード。

どうせ俺は、とぶつぶつ愚痴を垂れているその隣に、レクティファールは腰を下ろした。

ちらりと隣の新たな息子を見たアルフォードは、独語するように呟いた。

「俺が道化っつーのは間違っちゃいない」

「――――……」

レクティファールは水を口に含み、額の汗を拭ってアルフォードの言葉に無言で耳を傾ける。

「娘が怪我したって訊いても、『ああ、やっぱりな』としか思わなかったんだ。娘が望んだ結果がこれなんだろうなって納得した」

悔悟。

自嘲。

その二つの感情がアルフォードの表情を支配する。

「別にお前を責めようってつもりはない。娘が自分で戦って、自分で負けた。相手も強かった。お前を責める要素は何一つ無い。きっとお館様も同じ気持だろうさ」

しかし、もしもあの戦いのあと、クティファールが無理やり彼女たちを戦場から遠ざけるような真似をしていたら、彼らは怒り狂っただろう。女としての矜持は理解出来ない彼らだが、武人軍人としての意地ならば理解出来る。

敵への敗北は、武人が戦場を去る理由にはなり得ない。

目標の不達成は、軍人がその職を放棄する理由にはならない。

「だが、お前は俺と同じ男だ。同じ馬鹿だとも言える。いつか絶対に間違えちゃいけない選択を間違える」

――――俺と、同じように。

アルフォードは冷えた空気を肺いっぱいに取り込み、意識を研ぎ澄ました。

自分の想いを伝えるべき相手が、隣にいる。ならば――――

「――――独り言、聞いてくか」

「――――よろしければ」

「馬鹿野郎、独り言に良いも悪いもあるか」

「それもそうですね」

武人が戦場を去るのは、戦場に懸けるべき命がなくなったから。

軍人が職を失うのは、ただそれが軍人として正しい行いだから。

「――――昔な、ウィリィアが姫様のお側付きになったばっかりの頃の話だ」

ハルベルン家は、白龍公の臣下としてはそれなりに高い地位にいる。

『龍殺し』としての能力は元より、その実直で裏表のない気性が公に好まれたからだった。

アルフォード・ハルベルンも急死した兄の代わりに家督を継いだ割にはその気性を色濃く持っており、やはり白龍公に信頼された。一度信じると決めた相手は絶対に裏切らない、そんな家風のある家だった。

「ウィリィア！　今日は近くの森に行こう！　今日辺り珍しい花が咲くんだって薬学の先生が言ってた！」

「でも姫様、森に行くにはお館様か奥様に許可を貰わないと……」

ちょっと散歩に行くというだけでも、護衛を手配し、メリエラが着くまでに森の中に潜む危険要素を排除しておく必要がある。しか

し、未だ四歳と幼いメリエラにはそれらの下準備が時間の浪費に思えたのだろう。

彼女は幼馴染であり、同時に親友と呼んで差し支えのないウィリィアだけを伴って水精湖の畔にある森に向かってしまった。白龍宮の姿が見えなくなるほど遠くということもない、だからウィリィアも渋々幼い主君の命令に従ったのだ。

念のためにと主君の部屋に置き手紙を残し、修練を始めたばかりの剣を持って。

「――――姫様、花は何処ですかぁ……」

「んーと、何処だろう」

「そ、そんなぁ……」

幼いメリエラが覚えていられたのは、単に「珍しい花が咲く」という部分だけで、詳しい場所などは覚えていなかった。ひょっとしたら、講師の方もメリエラが幼子特有の好奇心を発揮して花を見に行かないよう、意図的に詳しい場所を教えなかったのかもしれない。

ともかく二人は薄暗い森の中で、辛うじて人が歩けるよう整備された細道を進む羽目になった。

進んでいけばそのうち見付かるだろう、その程度の考えだった。

このあとに起こる悲劇を考えるなら、二人のこのときの決断はそれほど多くの罪を持ち得ない。

彼女たちの身に降り掛かった悲劇は、彼女たちの決断よりもほんの少しの運命の悪意が優先された結果だった。

森の中に二人の童女が足を踏み入れた丁度その頃、その運命の悪意は白龍宮に伝えられていた。

「奥様！」

背後から自分を呼ぶ侍女の声に、白龍公妃アロエはゆっくりと振り返った。

子どもを産んでも陰りを見せない大陸一とも謳われる白皙の美貌と、そこに輝く翠玉石の瞳には疑問が浮かんでいる。その艶やかな

黒髪が彼女の動きに従って波打っていた。

「何かあったのですか？」

嘗ては白龍公カールの背に跨る騎兵として空軍に在籍していた彼女だが、出産を機に軍から身を退いた。軍人としての役割を軽んじるつもりは無かったが、夫である白龍公が現役を退いた以上彼女が軍に残る強い理由はなかった。

何より、娘との時間は軍人として国に捧げた時間よりも大切に思えた。それが母になることなのだと、彼女は思う。

息を荒げる侍女を落ち着かせ、アロエはその報せを聞いた。

「はい、先程空軍から連絡がありまして、この付近に帝国の飛竜が迷い込んだと」

「――――え」

聞いた途端、ぞわり、と全身の毛が逆立った。

彼女の中の皇国航空騎兵の部分が、警鐘を掻き鳴らす。

「領空侵犯した帝国の飛竜を撃退した際に騎兵を失った一騎が迷い

込んだようです。この時期は野良飛竜の移動もありますから、直接その飛竜を見た一般市民からの通報で今回の一件が発覚したと……」

鞍を背負っていたのか、或いは識別用の数字でも翼に描かれていたのか、通報を受けて皇国の騎竜が一騎もその空域に存在しないことを確認した空軍は慌ててこの地の領主である白龍公にそれを伝え、周囲の村や街に警戒を呼び掛けたのだった。

白龍公の領地は皇国本土の奥深く、まさかこんな所まで帝国の騎竜が入り込むとは思っていなかった軍の怠慢と取ることも出来る、事実このときの“大総統”と防空責任者は厳罰に処せられた。

しかれども、アロエにとっては軍の責任などよりもっと大切なことがあった。

「――――子どもたちは、今何処」

「え……姫様とウィリィア様でしたら、お庭で遊んでいると……」

「すぐに城の中に入れなさい！　龍種も『龍殺し』も飛竜を引き寄せるわ！　あと警備兵に対空戦闘の準備を！」

「は、はい！」

足を縺れさせながら走り去る侍女を見送ると、アロエは衣裳の裾を掴んで走り始めた。

この城には白龍公の眷属が多く居る。飛竜がその生存本能に従って同族を求めているのなら、向かう先はこの白龍宮の可能性が高い。

しかし、『龍殺し』という天敵が居るならそちらに意識が向く可能性もある。『龍殺し』の発する対龍、対竜に特化した魔力波動は、大した知恵のない亜竜にとっても敵と認識するに十分な要素だ。

「メリア……！　ウィリィアちゃん！」

庭に居るなら大丈夫、そう、大丈夫な筈。

なのに何故だろうか、彼女の胸には苦しくなるほどの焦燥があった。

自室に飛び込んで軍装を引っ張り出し、それに着替えた彼女に、その焦燥の答えが齎される。

「姫様たちが城内の何処にもいません！」

「――――！！」

泣きそうな侍女から報せを聞いたアロエの脳裏には、食い散らか

された娘とその友人の姿がありありと浮かんだ。

それは、彼女が軍人時代に見た現実の光景。帝国との戦いの最中、国境近辺の村を帝国の騎竜が襲ったときの情景だった。

「くッ」

壁に掛けておいた細剣を取り、部屋を飛び出すアロエ。

あの地獄のような光景の中に自分の娘が存在するなど、到底受け入れられなかった。

「わたしの馬を回せ！」

廊下を全力で駆け抜けながら、彼女は自分の予感が外れることだけを祈った。

ウィリィアがそれに気付いたのは、何の気無しに空を見上げたときだった。

木々の隙間から見える狭い空に、小さな黒点が見えた。

「――――何だろう？」

彼女の近くではメリエラが泥だらけになりながら花を探している。

最初は服が汚れることに抵抗を感じたウィリィアだが、主君が率先して地面に張り付くようになったこともあり。既に服のことは諦めた。自分が叱られれば済む話だと。

「どうしたの、ウィリィア」

「あ、姫様、何か空に居るんですけど……」

「え？」

ウィリィアの示す先をじっと目を細めて観察していたメリエラだが、その目にある種見慣れたものが映ったことですぐに興味を失ってしまった。

「ただの野良飛竜だよ。渡りの季節だからね」

どうということもないと、すぐに花探しを再開したメリエラだが、ウィリィアだけはぐんぐんと近付いてくる飛竜から目を離せなかった。

よく見れば、翼に何か描いてあるような気がした。

「――――……渡り？　一頭で、ですか？」

「え、だって……」

震えるウィリィアの声を聞き、再び空を見上げたメリエラも龍種としての本能で気付いた。

あれは、皇国の竜じゃない、と。

「皇国の野良飛竜は、背中に鞍を載せて、帝国の文字を翼に描いているのですか……！」

件の飛竜は、その背中の鞍も翼に描かれた帝国の数字も識別できる程に近付いて来ている。

そしてそのまま、一直線に、彼女たちに向かっていた。

「――ひッ！」

「姫様！」

逃げよう。

ウィリィアは怯えたように空を見上げるメリエラの手を引き、走り出した。

だが、『龍殺し』としての自分が心の奥底で冷静に告げていた。

自分たちの足では逃げ切れ無い、と。

アロエと彼女の率いる兵たちは、城の近くの森に飛竜が降下していくのを見た。

あそこに二人がいると、全員が悟った。

好奇心旺盛な姫を、その侍従が抑え切れないことなどこれまで何度もあった。きっと今回も、同じことが起きたのだろう。

「城の飛竜隊を森に向かわせて！　急いで！」

「はッ」

引き連れてきた城の警備兵の一人が答える。

城に通信を送っても、間に合うかどうかは分からなかった。

何よりも緑深い森に降りた飛竜を探すことは容易いことではない。

飛竜は空を飛ぶものだが、陸上でも子どもの足よりかは速い。

「――――――――ッ」

飛竜が森に降りたばかりの今ならまだ二人は無事だろう。

そして幸いなことに、自分たちは森の入口まで数分の場所にいる。

彼女は数秒の逡巡の後、決断した。

「――――森に突入します」

「奥様！？」

彼女の率いている部隊には、力のある『龍殺し』が一名含まれていた。

名を、アルフォード・ハルベルン。白龍公の忠臣。

公爵軍の仕事で城に詰めていた彼は、娘と主君の姫が危険と知り、自ら馬を駆ってアロエに追従してきたのだ。

「危険です！　私が参ります故、奥様はここでお待ちを！」

「あの森の中では子どもたち捜すだけで一苦労です。人手は多い方が良い」

「ですが……！」

アルフォードとて、娘が心配だ。

龍種のメリエラはひょっとしたら飛竜が見逃すかもしれない。竜

が同属の仲間を喰らうなど、余程空腹のとき以外に考えられないからだ。しかし、天敵である『龍殺し』は間違いなく殺される、メリエラという同属の仲間を救おうと、飛竜が近くにいるウィリィアを敵と認識して襲いかかることも十分考えられた。

本当なら、形振り構わず森に入って娘と姫君を救いたい。

だが、主君の大切な令室を守ることも騎士の勤めだ。

彼は馬をアロエの前に進ませた。ここから先に進ませる訳にはいかないという意思表示だった。

「奥様、このアルフォードを信頼してくださいませ」

「あなたのことは夫と同じくらい信頼しています。ですが、わたしはあの娘の母なのです。力のない種の、いずれ短い命を終えるわたしがこの世界に残せる数少ない証の一つなのです」

アロエは意地でも押し通るつもりだった。

皇国の飛竜ならともかく、帝国の飛竜相手に出来ることなど自分には何も無いと分かっている。

それでも、進まなくてはならなかった。

「アルフォード、わたしに命令させないでください」

アロエの言葉を聞き、アルフォードの顔色が変わった。

『命令』――――その言葉が彼の顔から血の色を奪っていく。

「――――――奥様、後生です。この生命に代えても姫様をお救いいたします。誓います。ですからその先は……」

「アルフォード！」

「奥様！　お願いいたします！」

馬を降り、アルフォードは膝を屈した。

主筋に忠義を示すその所作が――――彼の生涯の後悔になった。

「――ッ、許してくださいアルフォード！」

「お、奥様ッ！？」

アルフォードが、大切な家臣が頭を下げているというのにそれを棄てて行く、正当な理由もなくそれを行うという、主君としては恥

ずべき所業にアロエは許しを乞うた。

奥様がまさかそんな無体な真似はするまいと思っていたアルフォードは、完全に意表を突かれアロエを通してしまう。

慌てた彼が同僚を伴い、森に入ったのはアロエから遅れること一〇秒程度後。

その一〇秒が、運命を分けてしまった。

自分に背を向けて走り去るその姿が、アルフォードの見たアロエの最後の姿だった。

飛竜から逃げる二人は、幾度も転び、傷を作った。

膝だけではなく、手のひらや顔にも擦り傷を作り、そこから流れる血の匂いが飛竜に二人の居場所を教えてしまう。

何度隠れても飛竜は二人を見つけ出し、追い立てた。

「姫様、頑張って下さい！」

「う、うん……」

息を荒げ、妹のような主君を引っ張るウィリィア。

もしかしたら、彼女だけで逃げた方が助かる可能性は高いかもしれない。

飛竜が同属の仲間を喰らわないという前提なら、ウィリィアだけが逃げて囮になった方が生存確率は上がる。森の中に救援の部隊が到着していると彼女が知っていたら、主君を隠し、自分を囮にして救援部隊と合流しただろう。

救援部隊と合流出来れば、飛竜を撃退することも可能な筈だった。

しかし、ウィリィアは救援が来ていることなど知らない。自分だけがメリエラを守れると思い込んでしまった。

だから、その手を引いて必死に逃げた。

剣を持って戦うなんてことは考えられなかった。

未だ幼いウィリィアの『龍殺し』の本能など、圧倒的な恐怖の前には何の役にも立たない。みっともなく逃げるしか無かった。

「きゃッ！」

「姫様！」

逃げること十数分、二人にとっては何時間も経ったように感じられたそのとき、メリエラが木の根に躓いて転んだ。

ウィリィアが慌てて助け起こすが、立ち上がったメリエラの表情が苦痛に歪む。

「い、いたい……！」

軽い捻挫だったのだろう。

平時であれば少し冷やし、安静にしていれば一晩で治まる程度の。

だが、このときの二人にはそんな余裕はない。

ウィリィアは近くの茂みに主君を引っ張り込み、自分も蹲った。

「ウィリィア……」

メリエラの表情が不安気に揺れる。

見捨てられるかもしれない、そう思ったのだろうか。

追いかけてくる飛竜が自分を守ろうとしているという可能性など、この頃のメリエラには想像も出来ないことだった。

だから、姉のような侍従に見捨てられるのが怖かった。

「大丈夫です、姫様」

そして、侍従の答えも決まっていた。

妹のように育った主君を見捨てるなど、思考の隅にも上らなかった。

「さあ、わたしの背中に掴まって」

「うん！」

背を向け、そこに主君の重さを感じると彼女はすぐに立ち上がる。

先程まで背後で聞こえていた飛竜の足音は聞こえない、何処か見当違いの場所にいるのか、自分たちを探して足を止めているのか、どちらにせよ行くなら今しかないと思った。

「姫様、しっかり掴まっていて下さい！」

「分かった！」

茂みを飛び出した二人。

あと少しで森を出られる筈だった。

確たる理由もなく、森から出られたら助かるような気がしていた。

しかし、白龍宮から応援の飛竜が森の入口付近に到着していたこのとき、彼女たちの曖昧な希望は十分に叶えられる下地が出来ていたのだ。

唯一の誤算は――――

「――！」

飛び出した先にあった小さな広場に、自分たちを追い掛けていた飛竜がいたこと。

上空に現れていた白龍宮の飛竜の姿を見付け、追い掛けていた獲物のことを一時的に忘れていた飛竜が、飛び出してきた二人を見てその存在を思い出したこと。

そして最後の一つ、

「メリア、ウィリィアちゃん！　退がって！」

自分たちと飛竜の間に、アロエが飛び出してきたことだった。

「母上！」

「奥様！」

嬉しそうに顔を綻ばせる二人。

されども、アロエには二人に笑いかける余裕はなかった。

「『火焔弾（フレイ・バレット）』！！」

手のひらに浮かんだ魔法陣から六つの火炎弾を発射したアロエは、すぐさま二人を抱えて後方に飛び退る。

火炎弾は狙い違わず総て飛竜の身体に吸い込まれ、炸裂した。

「――――！」

皮膚を焼かれた飛竜の甲高い悲鳴に続き、爆風が三人に襲いかかる。

二人を抱えたアロエは爆風を背に受けたまま走り、広場から少し離れた木の陰に隠れた。

爆風が巻き起こした粉塵が風で流されれば、飛竜はすぐに三人の匂いを嗅ぎ取るだろう。

爆発音を聞いた救援がこの場に現れるまでおそらく五分と掛からない、しかし、それを座して待つことが出来るほど飛竜という生き物は弱くはなかった。

「二人共、無事？」

「は、ははうえぇ～～」

「おくさまぁ……」

緊張が解けたのか、顔を歪めて泣き始めた二人の頭を優しく撫でると、アロエはほんの一瞬だけ母親の顔で微笑んだ。

しかし、背後では飛竜が唸り声を上げて自らが未だ健在であることを誇示している。

時間は、残されていなかった。

「――――二人共、聞いて」

「母上？」

自分の母が浮かべる軍人としての顔、それに怯えたようにメリエラは目を潤ませた。

「二人で森の城側の入り口まで逃げなさい。アルフォードたちが来ているから、すぐに助けてもらえるわ」

「お父さんが！？」

ウィリィアの顔がぱっと輝く。

家では母の尻に敷かれている父だが、その強さは彼女の憧れだった。

「じゃあ、母上も一緒に……」

メリエラは怯えを含んだ瞳のまま、母の袖を掴む。

母と離れてはならない、そう思った。

「――――いいえ、わたしは行けない」

「母上！　なんで！」

だから、頭を振る母の腕にしがみついた。

自分を抱き締めてくれた優しい腕、自分を包んでくれた優しい匂い、自分を守ってくれた優しい声。

それらが、自分の手から零れ落ちていく。そんな錯覚を抱いた。

「わたしはもう少し時間を稼いでから行くわ。メリア、あなたは怪我をして走れないでしょう」

「でも……！」

「大丈夫、母上はすぐにあとから追いかけるから」

腕を掴んだままのメリエラを宥め、その手を引き剥がす。

手を離す最後の一瞬、メリエラの手を握るアロエの手に力が込められた。

本当に、一瞬だけ。

惜別さえ、時間の無駄だと思うしか無かったのだ。

「ウィリィアちゃん」

もう一人の娘、『龍殺し』の眷属にして白龍の友であるハルベルンの姫の肩に、アロエは手を置いた。

その手が震えていることに、ウィリィアだけが気付いた。

「この子を、メリエラをお願い」

アロエの目に、涙が溜まっていた。

母上、母上とアロエを呼ぶメリエラは、おそらく自分の流す涙でそれに気付けない。

ウィリィアだけが、アロエの涙を見た。

「この子を守って、いつか、この子が誰かを守りたいと思うその日まで――――この子が一緒に幸せになりたいと思う人が見付かるま

で」

「奥様……」

「――――――――」

ウィリィアの呼び掛けに答えず、アロエは立ち上がった。

最後の最後、二人を見下ろすその相貌には、気高い戦女神としての表情だけがあった。

自分の守りたいものの為に命を懸ける、美しき戦女神の姿。

ウィリィアは、それを目に焼き付ける。

彼女の女神は森の出口の方向を指し示し、冷厳に告げた。自分の中の様々な感情を押し隠した声だった。

「――――おいきなさい」

「――ッ！　はい！」

逆らうことの許されぬ言葉に従い、ウィリィアはメリエラを背負って駆け出す。

母を呼ぶ幼き主君の涙声を聞きながら、彼女は走った。

十三秒後、背後から襲ってきた衝撃波に吹き飛ばされて意識を刈り取られるまで、彼女は流れる涙を堪えることも出来ず、獣のように叫びながら走った。

彼女は、弱さは罪になるのだと、このとき知った。

第八話「過去＋現在＝未来」

時間としては半時間程度、娘と自分の過去を語ったアルフォードは、一分の感情さえ見せぬ無表情でレクティファールに一言「風呂に入れ」と告げた。

昔語りそのものに後悔は無い。

ただ、感情を顕にすることがひどく面倒で、辛かったのだ。

感情だけではなく総てを押し殺す方が、自分を保つには楽だった。一々考えず、まとめて心の奥底に閉じ込めてしまえば、それでこと足りるのだから。

「――――……」

溜息を漏らし、しかしレクティファールは大人しくアルフォードの言葉に従った。彼にとってアルフォードとウィリィアの過去とは、ただ聴くものであって論評する類のものではない。求められたのならば別だが、レクティファールという男は頼まれずとも行うという種類の積極性は皆無に等しい。

レクティファールの後宮や離宮に暮らす女性たちがその積極性の乏しさを苦々しく思っているのは、未だ本人には届いていない。

「――――……」

ただ、非積極的な性分の彼をしても、アルフォードの昔語りを聴いて考える処は多くあった。

過去に存在したアロエと云う名の女性が、今現在の彼が守りたいと思っている二人を守り抜いた。その過去があったからこそ、彼はあの二人に出会うことが出来た。

しかし、直接顔を合わせたこともなく、義母と呼ぶには余りに彼女のことを知らない。彼にとって尊敬に値する人物である筈なのに、その敬意を向ける先がない――――彼の思考は延々と円を描き、終着点を見付けられずにいた。

「――――はぁ……」

それが原因と言えば、まさにその通り。

彼は驚異的な演算機能を誇る“皇剣”の所有者でありながら、その演算を可能にする並列思考の比率分配を誤った。演算機能を、自分の現在状況を確認するという作業に振り分けることを忘れてしまったのだ。

勿論、緊急事態に対応する為の演算領域は常に確保されているが、所有者の周囲に脅威度の低い事象しか存在しない場合、その緊急用演算領域が使用されることはない。さらに所有者の身体機能の常時

管制を行う演算領域も“皇剣”の内部に存在するが、これらは通常、所有者の無意識化にある領域であり、所有者が意図しない限りはその与えられた仕事以上のことはしない。

つまり、分り易く、平易な表現をするならば――――

「――――……」

彼はぼぅっと呆けていたのだった。

だから脱衣場に入って服を脱いでいる間も、棚に置かれた籠の中に女物の衣服がきちんと畳んで置いてあることに気付かず、浴室の中から水の流れる音がしていることにも気付けなかった。

さらには彼が丁度浴室に続く扉に手を掛けたとき、扉の向こうに薄い肌色が見えたことにも、当然のように気付かなかった。

総てに気付かなかった、気付けなかった彼がこの結果を引き寄せたことは、有り体に言って至極当たり前のこと。それ以外の結果は有り得なかったと言っても良い。

がらりと滑車の音を立てて開かれる引き戸。

「――――え？」

扉を開けた瞬間に、彼の目の前に広がる光景。呆けた声を発した

のは果たしてどちらだったのか。

「――――――――」

次に訪れたのは無言と硬直。

色素が薄いせいで傷が目立つ肌はお湯の熱でうっすらと色付き、眼に入る光によって結ばれたその像は全体的に細く、それでいて優美な曲線で描かれている。身体を動かすために最適な量の筋肉を秘めた体躯は、元々はお湯だった筈の水滴だけを纏っており、強いて言えば結い上げた髪から逸れ、ほつれてしまった蒼い髪がほんの少し肌に張り付いていた程度。

誰かが入ってくるとは思っていなかったのだろう、彼女も余りに唐突な招かれざる客の闖入に思考が停止しているらしく、自分の身体を隠そうともしない。

そしてレクティファールが扉を開けてから二秒後。一応、年頃の娘さんならば隠すぐらいしようよ――――彼の頭にそんな無意味な思考が湧き上がったその瞬間、二人の時間は再び動き始めた。

「――――ッ！！」

これまで以上に全身を真っ赤に染めたウィリィアが手近にあった風呂桶を両手に引っ掴み、

「――げ」

命の危険を感じ取ったレクティファールが慌てて扉を閉めようとする。

ただ、これまで呆けていたが故に発生した一瞬の思考の遅れが彼の動きを阻害した。

そして、その一瞬が最終的な結果を齎す。

「いい加減にしろ、この破廉恥愚弟がぁあああああああああああああああああああッ！！」

浴室から、夜の空と屋敷内に轟くこの家の長女の怒声。

その声を、この屋敷の主夫婦は食堂でお茶を啜りながら聞いた。

「あら、レクト殿ったら積極的ね」

「――――まさかウィリィア、今風呂に入ってたのか……」

妻はほほほ、と上品に笑いながらお茶のお代わりを注ぎ、夫は自分の為出かした過ちに戦慄する。

自分がレクティファールを風呂に向かわせたと知られれば、娘の反抗期は延長戦に突入する。むしろ、今度こそ完璧に嫌われる可能性も否定出来ない。

「ま、拙い……！」

娘に汚物を見るような目で見られることを喜ぶ父親はいない。アルフォードは自分の過ちを棚に上げ、レクティファールが一撃で仕留められて余計なことを言わないように祈った。

「別に姉弟でお風呂に入るくらい普通でしょう」

「あの歳になってから一緒に入ることが、普通か？」

「普通よ、仲が良くて嬉しいわ」

「そう、なのか？」

アルフォードは妻の言葉に懐疑的だ。女心と母心は彼には理解出来ず、従って強く反論することは不可能だが、それでも少しおかしいのではないかと思う。

物が飛翔し、激突し、破壊される音が食堂にまで聞こえてくることもアルフォードが妻の言葉に得心が行かない理由の一つだ。ついでに娘の恥ずかしさが大いに混じった怒声――「待ちなさい！　性犯罪者！」――と、割と本気で逃げ惑っているらしいレクティファールの情けない悲鳴――「事故ですって事故！　痛い痛い！　誰が好き好んでウィリィアさんの裸――って掠った風呂桶で頬が切れた――――ッ！？」――も彼の耳に届いている。

もしかしたら、妻にはあの浴室を駆け回る足音と、浴室が破壊されていく音が聞こえていないのだろうか。アルフォードはにこにこと嬉しそうにお茶を飲むルイーズを見てそう思った。

そんな夫の視線に気付いているのか、いないのか。ルイーズはのんびりと夫に話し掛ける。

「本心のぶつかり合いなんて、若い頃にしか出来ないし、信じてる相手としか出来ないものよ。特にウィリィアみたいに素直じゃない処のある娘は、一生で一人そんな相手に出会えれば良い方じゃないかしら」

「うむむ……そう言われると、そんな気もするが……一応嫁入り前だし、嫁入り姿も見たい訳だし……」

「見たら泣く癖に」

ぐ、と言葉に詰まるアルフォード。

そのまま唸り始めたアルフォードだったが、彼の妻は慌てるという言葉を何処かに置いてきてしまったように、穏やかに浴室の騒ぎを聞いている。

その表情は心の底から楽しそうで、アルフォードは自分の方がおかしいような気がしてきた。

「どっちにしても、二人共大人なんだから自分たちでどうにかするわよ」

「――――いやお前、大人だったらそもそも一緒に風呂に入らないだろう」

「あら？　そうでもないわよ」

「え」

だってほら――――妻に促されて耳を澄ませてみれば、いつの間にか騒ぎは収まっていた。

どちらかが浴室から出たような様子もなく、あの馬鹿騒ぎだけが終息している。

「レクト殿があなたとの修練で擦り傷ぐらい作ってるだろうと思って、今夜は薬湯にしておいたの。あの娘も気付いてる筈よ」

「――――ええと、それはつまり……」

「あの娘が自分で怪我させた相手を放っておくなんてことはないわ。優しい娘だもの」

今頃、薬湯を掛けられ、染みる染みると泣き言を言う義弟を情けないと叱り付けていることだろう。

「それに、あの娘がレクト殿を嫌っている筈がないわ」

「どうしてそう言い切れる」

「簡単よ――――」

ルイーズは一口お茶を啜り、微笑んだ。

「女が準備もなく嫌いな男に裸を見られて、あれだけ大騒ぎ出来る訳ないじゃない」

うぎゃあ、と余りにも気の毒な悲鳴を上げながら、レクティファールは青痣の残る背中を擦られていた。

逃げ出した彼の背中に命中した風呂桶や洗剤の容器は合計六発。いずれも一般的な人間種や混血種であれば必殺の威力であった。

「――――何故、治りが遅い……」

「不埒者への罰」

「ぐは」

海綿で背中を力一杯擦るウィリィアからの返答に、レクティファールは呻いた。

散々攻撃され、追い回された挙句這々の体で浴室から出ようとしたところをウィリィアに呼び止められたのだ。

「お、お詫び代わりに背中流してあげる。あなたが入ってきたことに気付かなかったわたしも悪いし……」

何やらもごもごもにょもにょと更に言い訳を追加するウィリィアだが、レクティファールが聞き取れたのは半分程度。それでもウィリィアが自分を気遣ってくれているということは理解出来た。

だから彼は木で出来た小さな椅子に座り、腰に手拭いを巻いた状態で大人しく義姉の言うことを聞いている。

「ほら、動かないの」

海綿で背中を擦るウィリィアは脱衣場から持ってきた一枚の大判手拭いで身体を隠していたが、その顔は羞恥に染まったままだ。軍に居れば裸同然の姿を異性に見せることもあるが、流石に自宅の浴

室となると恥ずかしさも一入だった。

そんな恥ずかしさでくらくらする頭を何とか支え、彼女は想像していたよりも広く筋肉質だった義弟の背中を擦る。

その背中には、創傷や擦過傷など彼女が知らない傷がそこかしこにあった。

「――――結構、傷があるのね」

「男娼でも無ければ傷ぐらいどうということもないでしょう。身体機能に影響が無ければそれで問題ありません」

レクティファールが自衛のためと、“皇剣”機能の把握のために近衛軍の訓練に参加することは珍しくない。

実戦形式とまでは言えないがそれなりに厳しい訓練で、これまで訓練中の事故で軍を去らなくてはならなくなった者もいる。レクティファールの背中の傷は、その殆どが一対多の格闘訓練で負ったものだった。一対多数の訓練の場合、多数側は相手の隙を狙って背後から襲ってくることも多い。特にレクティファールは“皇剣”に頼って防御を疎かにしがちで、訓練教官たちは密かに頭を悩ませていた。

通常なら死ぬような怪我でも短時間で治癒してしまう“皇剣”は確かに素晴らしいものだ。ただ、その性能に頼った戦い方は余りにも非効率的で、最終的には味方の損害を増やしてしまう可能性があ

る。

レクティファールの返答に、ウィリィアも訓練教官たちと同じ懸念を抱いた。

「負傷するということはそれだけ動きの効率が悪いということよ。無駄があるから相手にそれを突かれる」

「同じ場所を同じ方法で攻撃されたことはありませんよ。同じ間違いを二度は犯しません」

「――――――――もう……そういうことじゃないのに……」

ぼやきながら、ウィリィアはレクティファールの背中をお湯で流した。

先程の大立ち回りで負った傷が染みるのか、お湯を掛けた瞬間に背中が震えた。

「染みる？」

「ええ、我慢出来そうで出来ない類の嫌な痛みです」

深手ならば痛覚遮断を実行するが、軽傷であるなら痛みを残しておいた方が身体の損害を知るには都合が良い。

「――――一応、乙女の裸を見たのよ、只で。まだ足りないくらいじゃなくて？」

「只より高いものはない、と。そういうことですね」

いや、勉強になりました、と苦笑し、レクティファールは椅子から立ち上がる。

そのままウィリィアを視界に入れないよう移動し、浴槽に足を入れる。

「――ッ」

ゆっくりと薬草の入った薄緑色の湯に浸かれば、やはり傷口が染みた。

温度が高めのお湯は傷口から突き刺すような痛みを脳に送り、レクティファールは微かに顔を顰めてそれに耐える。

痛みは治癒の証だと理解しているが、痛みを悦んで受け容れるような趣味を彼は持ち合わせていなかった。

「――わたしも、失礼するわ」

彼が全身を沈めて一息つくと、すぐにウィリィアが入ってきた。

慌ててレクティファールはくるりと身体を回転させ、ウィリィアに背を向ける。何故ならば、彼女は浴室での伝統を順守し、身体を隠す手拭いを取り払っていたからだ。

どうしてこういう処まで無駄に真面目なんだろうか、と思うレクティファール。それでも義姉に倣い、自分の手拭いも取って頭に乗せた。

「ふう」

熱の篭った吐息を漏らし、ウィリィアはレクティファールの背中に寄り掛かる。

すると二人は浴槽の真ん中で、背中合わせに座り込む形になった。

「――あぁ……っと、義姉上さま？　何故に私の背中？」

「壁は硬いのよ」

「――――左様で」

まあ、別に減るもんではないしいいけれども――――レクティファールは愚痴を零しながら、背中に掛かる重みに目を細める。

軽いとも、重いとも言えない重さだ。

実際の体重云々ではなく、彼女の命の重さ。

彼女自身が自分の命を軽く考えていたとしても、彼女以外の者にとっては重い。特にこの家の者たちにとっては、掛け替えの無い生命の筈で――――

「――――メリアの母上のこと、聞きました」

「――――……そう……」

こうして自分の言葉に大きく震えたその身体は、やはり自分にとっては重く、替えの効かないものだった。

少なくとも、昔語りにあったような悲劇を繰り返したくはないと思う程度には。

「――――メリアの母上のこと、聞きました」

弟になった青年の一言に、彼女は目の前が真っ白になった。思わず立ち上がりそうになり、しかしそれ以上力が入らず身体を震わせるに留まる。

「――――……そう……」

彼女はやっとの思いで、その一言だけを発した。だがそれだけで、心臓が軋み、胸が苦しくなる。

いつか誰かが明かしたであろうメリエラと自分の過去。しかし、出来ることならそれはこの青年に知られたくなかった。理由は――――判らない。ただ、知られるのが怖かった。

「お父さんが……？」

「ええ、辛そうな顔を隠して話してくれました」

「――――そう、だと思うわ」

声の震えには気付かれてないだろうか。

身体が震えていることには気付いていないだろうか。

彼は何も言わない。

――――それとも、気付いていて気を遣っているだけなのだろうか。

「お父さんにとっても、奥方様の死は辛いものだもの。皇都から戻ったお館様の前で這い蹲り、涙と鼻水だらけの顔で謝罪する父の姿を、今でも昨日のことのように覚えているわ」

本当なら、自分が父の代わりに謝らなくてはならなかった。

だが、あのときの自分は幼い子どもで、カールは自分の娘とそう違わない歳の小娘に罪を背負わせることは出来なかった。いや、元々ウィリィアに罪があるなどとは考えもしなかっただろう。カールは、あの事故で誰かに罰を求めるようなことは一つも行わなかったのだ。

空軍の“大総統”が白龍宮に謝罪に訪れたときも、再発防止を訴えるだけでそれ以上を求めることはしなかった。

唯一カールが罪を認め、罰を課したのは彼自身のみ。皇都にあって連れ合いの命も守れず、娘の心に深い闇を植え付けた自分だけを大いに怨み、憎んだ。

「帝国側も、あの事故は予想外だったのでしょうね。その美貌に惹かれた帝国貴族は元より、敵方にあって強力な白龍を操り、自分たちを多いに苦しめた奥方様に憧れを抱いていた帝国軍人も多かった。奥方様の葬儀には、そんな帝国人も非公式に参列したわ」

彼らは大陸の美しき宝玉が砕け散ったことを嘆き、偉大なる敵手を失ったことを悔やんだ。

そんな彼らがいたからこそ、もしかしたら帝国と皇国の間に偽りの平穏が訪れたのかもしれない。

「奥方様のご友人だった先代陛下や他の三龍公、主だった政府高官や官僚。軍人たちや領民も、皆悲しんでいた」

その悲しみの責任の一端を負っているのが、自分。

あの日、外に行きたいというメリエラを止めていれば、或いはメリエラを逃がせる程度に強ければ、いや、今の半分でも実力があれば、あの飛竜に後れを取るようなことは無かった。あの飛竜は決し

て強い種ではなかった、父であれば鎧袖一触薙ぎ払えたであろうし、兄たちでも十分に勝機があった。

――――つまりアロエを殺したのは、自分の心と身体の弱さだ。

「ねえ、レクト」

そして今でも、自分はこれ程に弱い。

背中に感じる重みが無ければ、泣き出してしまいそうなくらいに。

「姫様の大切な人として、奥方様の最期、聞いてくれる？」

こうして誰かに過去を語らなくては、心が潰れてしまうくらいに。

爆風に吹き飛ばされたウィリィアは、気を失ったまま地面に転が

っていた。

頬に小石が与える小さな痛みを感じ、彼女は目を覚ました。

「――――うう……」

朦朧とする意識の中、彼女は気絶するまでの状況を必死に思い出そうとする。

森に来て、飛竜に襲われ、アロエに間一髪の処を救われた。

そして――――

「奥様……！　姫様は！」

アロエが、自分とメリエラを逃がしてくれた。

たった一人で、『龍殺し』でもないのに。

「姫様……ッ」

それも総て、自分の娘を守るため。

彼女が命を賭して守ろうとした姫君を、ウィリィアは必死に探し

た。

幸い、メリエラは彼女のすぐ近くにいた。

ウィリィアは慌ててメリエラに這い寄り、その傷を確認する。

「――――良かった……」

傷は浅く、致命的なものはない。

ただ気絶しているだけで、呼吸も安定していた。

ウィリィアは安堵の溜息を漏らし、しかしすぐに自分たちの置かれた状況が安心出来るようなものではないことを思い出す。

すぐ近くに飛竜がいることは確実で、しかしその鳴き声も羽撃きの音も聞こえないことに彼女は訝しげな表情を浮かべた。

「奥様……？」

もしかしたら、アロエが飛竜を撃退したのかもしれない。

ウィリィアは気を失ったままのメリエラを近くの樹の根元に寝かせ、先程アロエが飛竜と戦っていた場所へと戻った。

焼け焦げた木々が白い煙を棚引かせ、炭化した木の枝がウィリィ

アの足の下で乾いた音を奏でた。

地面は黒く焼け焦げ、この場で使用されたのが高温を発生させる類の魔法であったことを物語っている。

「奥様、何処ですか……？」

森の中に広がる空隙、爆発の中心に辿り着いたウィリィアはアロエを呼ぶ。

時折咳き込みながら、煙に染みる涙目を凝らした。

そして、やっと煙の向こうに倒れる細い影を見付けた。

その影が小さく身動ぎするのを確認し、ウィリィアは走った。

「奥様！」

煙を抜け、影に駆け寄る。

しかし、彼女が見たものは、彼女の想像したものではなかった。

「――――ひッ！？」

「――――――――……」

そこに転がっていたのは、下半身を炭化させ、左の脇腹を爪でごっそりと抉られた肉塊。

その顔だけは辛うじて血と泥に汚れているだけだが、もはや治療などという言葉を吐くことは躊躇われる姿だった。

「お、おくさま……」

抉られた脇腹からは血が止め処無く溢れ、“それ”が生き物であるのか、嘗て生き物であったものであるのかすら判別出来ない。

怖かった。人がこんな姿になるなどと知らなかった彼女にとって、その物体は生物としての根源的な恐怖を呼び起こすものだった。

しかし、もう一度逃げ出すことは許されなかった。

ウィリィアは幼心に勇気を奮い立たせ、一歩一歩その物体に近付いていく。

あと一メイテルまで近付いたとき、その物体が再び小さく動いた。

「――――！」

生きている。

そう確信したウィリィアは今度こそアロエに駆け寄る。

自分の着ている服の裾を破り、出来るだけ綺麗な部分を探して傷口を押さえた。

生きているなら、まだ助かるかもしれない。

軍の高等医療魔導師ならば、死の直前に居る患者でさえ救えると彼女は聞いたことがあった。

だから、諦めなかった。

「奥様、姫様はご無事です！　だからもう少し辛抱なさって下さい！」

必死にアロエを励まし、傷を押さえた。

あの爆発なら救援に来た父たちがすぐに駆け付けるだろう、そうしたら城の龍にアロエを病院に運んで貰える。

ウィリィアはこのとき、アロエが助かる未来しか想像しなかった。

どうということもない日常に戻れる、あの笑顔の溢れる日々に戻れると信じて疑わなかった。

信じる者にしか望む未来は訪れない、それは正しく世界の真理で

あり、ウィリィアが望むことだった。

「――――――――――ぅ……」

だから、ほんの少しだけ世界は奇蹟を少女に与えた。

アロエの目が細く開き、その瞳がウィリィアを映し出した。

「奥様ッ」

ウィリィアは喜びの声を上げる。

良かった、これで助かると思った。

「奥様、姫様は無事で――――」

しかし、奇蹟はここまで。

「――――――――――……」

アロエは力無く笑みを見せると無事だった右手を伸ばし、ウィリィアの頬を撫でる。

「あの、奥様？」

そして戸惑うウィリィアに、掠れた声で小さく囁いた。

「――――――――」

無事で良かった、私の可愛い娘――――と。

「おくさま……？」

言葉が尽きると同時に、アロエの腕は力無く地面に落ちた。

そして、その身体から魂と呼ばれる生命情報が乖離した。

今度は奇蹟など起こらず、ただ粛々と。

「お、くさま……？」

呆然とするウィリィアを遺し、アロエと呼ばれた魂は冥界へと送られる。

ただ世界の理に従い、事務的に、一切の斟酌無く。

彼女の抱く身体は、真に嘗て生命を宿していた肉塊に成り果てた。

「おくさま……おくさまぁ……」

ウィリィアは涙するしか無い。

彼女に死者を呼び戻す術はなく、また涙を零す以外に死者を見送る方法を知らなかった。

だから、ひたすら泣いた。

自分の背後で大きな影が蠢き、立ち上がることに気付かないまま。

「おくさまぁ……おくさまぁ……めをあけてください……ひめさまがまってますからぁ……――――」

鼻水を垂らし、何度もえずきながらアロエを呼ぶメリエラ。

そんな彼女に影は忍び寄り、ついにその牙の届く範囲に収めた。

「おくさまぁ……おねがいです……おくさま……」

泣いたままのウィリィアは、影に気付かない。
影は、悦んでその顎門（あぎと）を開いた。

「――えッ！？」

牙同士が擦れて発生した音に、ウィリィアは振り返る。
そこにあったのは、全身を己の血で染めた飛竜の姿。
自分を飲み込もうと迫る真っ赤な口腔だった。

「――ッ！」

ウィリィアは咄嗟にアロエの骸を抱え込む。
これ以上、アロエを傷付けさせはしないという彼女なりの意地だった。
それが他人から見て無意味な行為であったとしても、彼女だけは意味を見出している。
ただ、それだけで十分だった。

「ウィリィアぁッ！！」

――――奇蹟ではない、人の想いが現実になる瞬間を迎える為には。

「俺の娘から離れろッ！　この蜥蜴野郎がぁあああああああああッ！！」

煙の向こうから現れたアルフォードの腕で咆哮する『岩窟龍断ち』と呼ばれる大剣。

大剣は並んだ小さな刃を高速で回転させ、空気を震わせた。

「冥界へと昇れぃ！」

裂帛の気合と、刃の奏でる多重奏。

それらは的確に飛竜の首に食い込み、両断した。

「――――――――――！」

断末魔の悲鳴さえ許されず、飛竜は苦しげに大口を開けて斃れる。

その首は少し遠くに転がり、広場の隅に咲いていた花を押し潰し

た。

潰された小さな白いその花は、メリエラが探していた花だった。

「最期の瞬間、奥様はわたしと姫様を間違えた。結果として姫様は無事だったから奥様を騙したことにはならないけど、あのときの笑顔を送られるべき相手はわたしじゃない」

最期に娘に向けた筈の愛情を横取りしてしまったという事実は、ウィリィアが罪悪感を覚えるには十分過ぎた。

「奥様には色んなことを教わって、たくさん遊んでもらって、お母さんと同じくらい好きだった」

手作りの焼き菓子をメリエラと一緒に頬張る姿を、アロエは幸せ

そうに微笑みながら見ていた。

軍人として命の消える現場に立ち続けた彼女が、ようやく見付けた平穏だったのだろう。

二人が成長する姿は、彼女にとってどんな英雄譚よりも心踊る物語だったに違いない。

だが――――

「――――わたしが、殺してしまった」

ほんの少し、あとほんの少しだけ自分に思慮があれば、力があれば助けられた。死なせずに済んだ。

ウィリィアはレクティファールの背に自分のそれを押し付け、膝を抱き寄せた。

湯に浸かっている筈なのに、ひどく寒かった。

背中に感じる情けなく小さな温もりだけが、彼女を支えている。

「怖いよ。姫様が同じように死ぬんじゃないかって、あの帝国のグロリエ皇女との戦いから、何度もそんな光景を夢に見る」

グロリエの目的がレクティファールで無ければ、あと少しグロリ

エに時間があれば、メリエラは殺されていた。

メリエラ自身が望んだ死だとしても、ウィリィアはそれを受け入れられなかっただろう。今度こそ、心が殺されていた筈だ。

「――――レクトが強いことは認める。でも神殿で姫様と同じ寝台で寝ているのを見たとき、わたしは姫様を取られると思った。奥様から預かった大切な姫様が、何処の誰かもわからないあなたに連れ去られると思った」

神殿の夜。ウィリィアは同じことを言って泣いていた。

アロエの最期をメリエラから奪い、罪悪感を常に抱えていた彼女にはそれが耐えられなかった。

「本当は、神殿の人たちだって怒ってたんでしょう？　ようやく現れた皇太子を剣を振り回して追い回す侍女なんて、認められる訳がないもの。あなたが神殿の人たちに『身内の喧嘩』だって言ってくれたから、わたしは少し注意されるくらいで済んだ。――――違う？」

「――――違わない、でしょうね」

レクティファールにとって、あの朝の出来事はある意味仕方のないことだ。

ウィリィアのメリエラに対する愛情を何となしに理解していた彼にとって、彼女が自分に向ける怒りは正しく真っ当で、文句を言えるようなものでなかった。

だから、庇った。

正しい怒りで、それがレクティファールの手のひらに治まる程度の騒ぎだったから。

「君がメリアのことを譲れなかったように、私もウィリィアのことを譲れなかった」

彼女を自分から遠ざける要素は総て許せなかった。

子どもじみた、稚拙な独占欲だ。

だが、そんなみっともない独占欲でも彼女の過去と戦う原動力には不足ない。

「――――――――――ウィリィア」

どうしても、譲れない一線は誰にでもある。

ウィリィアにとってのメリエラのように、レクティファールにも絶対に退けない一線が存在する。

「――何？」

それは、恐ろしく小さくて、拙い愛情。

ただ一人、この世界で初めて見付けた光に向けるもの。

「わたしが初めてここで見付けた光は、メリエラではなく君だ。目が覚めて、自分さえ不確かな世界で、君は確かに存在していた。――君がいなければ、私はここを自分の居場所だと認識出来なかった」

「れ、レクト？　姫様はあなたの――――」

「婚約者だ。だがそれが、“私の”抱く“君への”想いにどのような関係があると言うのです？」

レクティファールは目を瞑り、くるりと身体を捻った。

「え！？　ちょっとレクト……！　わぁ！」

背中合わせに座るメリエラの細い腰を捕らえると、レクティファ

ールはそれを持ち上げて身体を元の位置に戻す。

先程まで背中合わせだった細い身体は、今レクティファールの腕の中にあった。

見えはしないが、その感触はきちんと認識出来る。

「こ、この性犯罪者め……」

「姉弟の団欒と言って欲しいですが」

「こんな不健全な団欒がある訳ないでしょう？　放しなさい」

「放してもいいですが、もう二度とアロエ殿のことで泣かないと誓ってください」

「――――――――」

懊悩による沈黙。

一方的なレクティファールの要求を受け容れる必要などウィリィアにはないのだが、状況が彼女の思考を鈍らせているらしい。

レクティファールは失礼しますと一言断ると、ウィリィアの肩に

顎を乗せた。

くすぐったがるようにウィリィアが身体を捩らせる。

「――――本当に、訴えるわよ」

「大丈夫、私が法です」

それは正しい。

この皇国では、皇王が法だ。その代わりに皇王は法に守られないのだが。

「最低」

「最低、大いに結構。これ以上下がらないなら怖いものなどない」

「――――本当に、最っ低」

「誠、結構なことです」

例えば、レクティファールに彼女の武人としての誇りは守れない。

しかしそれ以外の部分で、自分の手のひらに収まる部分だけは誰にも譲らない。

彼女自身が誰かを選び、その誰かに守られることを望むまでは。

「多分、アロエ殿は気付いていたと思いますよ」

「――――――――」

自分なら、最期の瞬間だからこそ絶対に間違えない。

守りたいものがあるなら、それこそだ。

「アロエ殿は分かっていたのでしょう。君が無事ならメリアも無事だと。そしてメリアが無事だからこそ、もう一人の娘である君の無事を心から喜んだ」

「でも、わたしがもう少し強ければ、あの方は今でも姫様と一緒にいられた！」

「それは、所詮今となってはあり得ない現実です。アロエ殿は既に身罷られているのですから」

「くっ」

気付いていた。どれだけ自分が後悔しても、戻ってくるものなど一つもないと。

だが、後悔以外にアロエの死を悼む方法が無かった。

「――――じゃあ、どうしろっていうの？　あなたに奥様の気持ちが理解出来るとでも？」

「勿論、無理です。アロエ殿が何を思っていたかなど、アロエ殿本人にしか分からない」

「ちょっと……！」

じたばたと暴れるウィリィアを、レクティファールは押さえ込んだ。

まだ話は終わっていない。

積極性の乏しい彼にしては頑張っている方だが、そう長い時間こんな真似は出来ない。急ぐ必要があった。

「分からない、理解出来ない、だから、勝手に許可無く想像しました。間違っていたら、いつか何処かで怒られる覚悟で」

「え……？」

愛する娘とは、メリエラとウィリィア二人のことなのだと思う。

大切な者が、自分の目の前で笑っていた愛すべき者たちが無事ならば、きっと笑って逝ける。

「君がどう考えようと、アロエ殿はきっと何も言わないでしょう。ただ、君が最期に笑って逝けることだけを望んでいる」

本人の幸せとは、本人にしか分からない。

親兄弟であっても理解することは難しく、結局は想像するしか無いのだ。

「メリアが幸せであることが君の望みなら、私は全力でメリアが幸せだと思えるような未来を作る努力をします。但し――――」

「但し？」

レクティファールは少し躊躇い、しかしなけなしの男気を振り絞って腕に力を込めた。

このとき諦めたのは、適当な距離でウィリィアと接すること。

互いに傷付け合ったとき、傷が深手にならない距離を彼は諦めた。

「君の幸せは私にはよく分からない。メリアの幸せも。だから、教えて欲しい」

「――――レクト……」

無知であることは罪。

知るべきと思ったことを知らぬままで放棄することは、レクティファールにとって大罪だった。

「恥ずかしながら、私はこんなことをしてしまう程度に女性心が理解出来ません。そのせいでリーデやアリアには毎晩のように怒られ、呆れられている次第で……」

「――――そうね、理解していないわね」

自分を抱きしめながら、メリエラはともかく別の女性の名を出す

ことは余り良いことではない。

較べられていることは、良い気分ではないのだ。特に、自分より優越していると思っている女性と較べられることは。

これが自分の方が優っていると言われているなら、逆に良い気分なのだが。

「とりあえず、ウィリィアが一番頼りになるような気がするので、色々ご教授願いたいのですが」

あの、白龍宮での日々のように。

言葉にならないレクティファールの声は、確かにウィリィアの耳に届いた。

「――――ん」

故に、彼女は頷いた。

笑み、同時に密かに涙を溢れさせた顔で頷いた。

「姫様の幸せ、ちゃんと理解出来るように授業してあげる」

あの、平穏な日々のように。

彼が何も知らず、何も背負っていなかった頃のように。

ほんの少しだけ、過去を懐かしんで。

ウィリィアが着替えを済ませて脱衣場を出たのを確認し、レクティファールはようやく風呂から上がった。

湯中り寸前の身体は無駄に熱を発しており、“皇剣”は排熱機能をかなり高い水準に引き上げていた。

「――――あぁ……恥ずかしかった」

庭で排熱を待つレクティファールは、ぼけっと立ったまま夜空を見上げていた。

うっかり顔を下げると、鼻血が出てしまいそうだった。

「くそう、“皇剣”に記録消去機能はないのか。あっても私には何処にあるのか分からないけれども」

浴室での一件は、出来るなら忘れてしまいたいことだった。

勿論、総て忘れるようなことは出来ないから、ごく一部だけ、主にウィリィアの裸身に関して。

「――――――――」

記録を見れば、かなり細かい処まで鮮明に見える。

写真と較べても遜色はないだろう。

だから、逆に辛い。

「――――別に義姉ならいいのか？　いや、どうなんだ？」

もしウィリィアに好き合う相手が出来たとき、自分のこの記録は消去出来るのか。

自分に置き換えてみれば理解出来た、他人が自分の連れ合いの生まれたままの姿を知っているのは余り嬉しいことではない。

いや、はっきり言って面白くない。

「ああもう、記録消去はどうやるんだ？　ええい、このフォルダか！？　ってこれは二代陛下の畑の記録ぅ――――っ！？」

場の空気を読まない“皇剣”に文句を垂れながら、レクティファールは出てきた記録を閉じて元あった処に戻した。

とりあえず家庭菜園をやるつもりはない。

「早く消去方法見付けなければ――――と、これは……印刷機械への記録出力方法って、私は何処の変態だっ！！」

地団駄。

焦れば焦るほど場の空気を読めない“皇剣”は変な記録を出してくる。

というよりも、戦闘能力以外に“皇剣”の機能が多過ぎるということなのだろう。

それなりに有用な機能ならば、片端から搭載されているに違い無い。

「――――――――“皇剣”って、やっぱり私にとっては永遠の敵ですよ……」

ぐったりと肩を落とすレクティファール。

使いこなせない道具は自分の身を傷付ける。出来るなら、使いたくない代物だった。

「でも、使わないと生きていけない訳で……」

しばし沈黙。

使いたくないのに使わなければならない葛藤。そして自分には扱いきれない道具への苛立ち。

それらが先程の一件で増大した羞恥心と混ざり合い、彼を叫ばせた。

「――――畜生、畜生め、“皇剣”のばかやろぉおおおおおおおおおおっ！！」

月まで届けこの想い。

でも誰かに知られるのはちょっと困るレクティファール。

彼のそんな叫びに応えたのは、月ではなく自室の窓を開けて怒りの形相を見せた義姉だった。

「うっさい愚弟っ！」

「あいたっ！」

見事な動きで投擲される筆立て。

レクティファールの後頭部に直撃したそれは、かこぉんと甲高い音を立て、空に向けて跳ね返った。

角が当たったせいで痛みに唸るレクティファールと、それを見て慌てて部屋を飛び出すウィリィアの姿を、筆立ては地面に落ちるまで見詰め続けていた。

第八と半分の話「ハルベルン家の朝」

朝、というものは本来寝る必要のないレクティファールにとって単なる日照の始まりに過ぎない。夜明けが昼行性の生き物にとっての一日の始まりという認識は持っているが、それも仕事の関係上認識している概念だ。

それでも周囲の生活に合わせるため、彼は眠るという行為を義務として行っている。勿論、緊急を要する仕事があるならその義務が履行されることはないが、後宮や離宮では相手に合わせて眠ることにしている。そうでもしないと、相手は自分を気遣っていつまでも寝ようとしない。概念兵器である自分と、生き物である相手。どちらに合わせるのが妥当か、考えるまでもなかった。

他方、“皇剣”はレクティファールの自意識が眠っている間も働き続けている。

第一に直接的な運動機能に関して、睡眠によって身体機能の大部分が低負荷状態（アイドリング）に入っていることを利用し、身体機能を維持するために体内組織の摩耗を修復、或いは強化。さらに体内の循環機関を全力稼働させて各部位に溜まった老廃物を除去、分解している。

第二にそれら身体機能に直接関わる機能とは別に、“皇剣”の存在意義の一つである情報の蓄積を担う部位でも睡眠による低負荷状態は利用されている。最適化と呼ばれる、重要情報の選定と新規情報の整理、利用頻度の低い情報の圧縮と収納だ。

その最適化に於いて、レクティファールの自意識の一部が使用されていた。自意識と記憶・記録は相互に深く干渉しており、どちらが欠けても情報の最適化が行えないからだ。ただし、情報最適化そのものは眠っていなくても行える。ただ、眠っていた方が少々効率が上がるという程度の違いに過ぎない。

その情報の最適化の最中、眠っているときのみレクティファールは『夢』に似た幻想の投影を見る。

ひょっとしたらあるかもしれない未来、在り得たかもしれない過去。“皇剣”の演算の結果、可能性の一つとして処理されたそのどちらもが、情報の最適化の最中に忽然と現れる。

夢を見る必要のない兵器が何故夢を見るのか、理由はひどく現実的だった。

通常であれば情報の最適化は“皇剣”所有者の思考系統とは別の形で行われ、それを所有者の思考によって理解することは出来ない。ただ、最適化の途中で断片化された情報だけは所有者の意識でも認識可能になる。

それが、概念兵器の見る夢の正体だ。完全に“皇剣”と同期してしまえばその処理速度に対応することも出来、夢を見ることもない。処理能力も最大限使用出来る。しかし、彼らが夢を見るということは、未だ彼らが人としての意識を残している証左に他ならない。完全なる兵器と、人としての側面を持った兵器。どちらが“皇剣”という兵器に相応しいかと問われれば、歴代の皇王は揃って後者と答えるだろう。

“皇剣”は概念兵器という兵器であると同時に概念兵器という人である。そして、人であるが故に夢を見る。

そしてこの日、当代の概念兵器たる青年は一つの可能性を見た。

それは、母となり、自らが産んだ子を抱く義姉の姿。

夢の中の彼女は幸せそうに微笑んでおり、近くに立っていた彼を呼んで子どもを抱かせてくれた。

剣を置き、侍女服を脱いだ彼女は何処から見ても“母”であり、誰かの“妻”であった。

彼はそんな義姉の姿を眩しそうに見詰め――――いとも容易く現実へと引き戻された。

身体機能の正常化と情報最適化が終了し、眠る必要が無くなったのだろう。彼は余韻少なく目を開き、ハルベルン邸に設けられた自室の天井を見上げた。

身体機能の異常も少なく軽度なものが殆どで、処理すべき情報も少なかったこともあって彼の睡眠時間はほんの二時間程度だった。傍らに誰かがいるならここからさらに何時間か睡眠を取るのだが、時計を見た彼はこのまま起きることにした。壁に掛けられた時計は午前四時三〇分を指していた。

「――――珍しい」

起き上がりながら、夢の感想を述べるレクティファール。

珍しい、というよりは余りにも非現実的に思えた。

“皇剣”の見せた『夢』は、『夢』という名の可能性である以上、それは現実に起こり得る。

ウィリィアが誰かと共に歩むことを決め、母になる可能性をレクティファールは否定しない。ただ同時に、ウィリィア・ハルベルンという女性が自分の未来を最優先に考えることはひどく考え難い。

おそらく彼女は主君たるメリエラを第一に考え、これからも生きていくことだろう。

メリエラの幸せこそ自らの幸福。メリエラの喜びこそ自らの歓喜。メリエラの願いこそ自らの願望。

あの日、レクティファールの知らぬあの過去の日に彼女は死に逝く人に誓ったのだろう。

その女性が護りたかったものを、代わりに護り抜いてみせると。

されども、レクティファールから見てそれは只の逃避にも思え、意図せず口から言葉が漏れた。

「――――果たして、それは贖罪なのか……」

本人の前で、同じことを口にするつもりはない。そんな勇気も、

意志もない。

他人の過去に口を出すことは、果たしてどれだけの意味があることだろうか。

変えようもない過去に対し、本当の意味で過去を知らぬ者が何をほざく。自己満足にも充たない、只の我が儘ではないか。

「もしも口を出すのなら、それなりの覚悟が要るでしょうね」

それこそ、相手の今の総てを否定するに等しい所業。その代価は、己の総てが妥当だろう。

殺されたとしても、文句は言えない。

「――――だけど、まあ、私にはそんな覚悟はありませんがね……」

ごろり、と寝返りを打つ。

寝台横の窓から、白み始めた空が見えた。

「夜明けも遅くなったものです。――――ということは、この世界は地軸の傾いた惑星ということなのでしょうかね。四季もあるし」

普通に生活する分には大して意味のないことを呟きつつ、レクティファールはのそりと起き上がる。

長男のお下がりだという寝間着を脱ぎ、今度はアルフォードのお下がりだという普段着に着替える。

白の上着に褐色の細袴。両方共さして上等な布ではないが、丈夫で肌触りの良いものだった。物の価値が値段ではないことを、この家の財布を預かる者は知っているらしい。

「うん、私は良い養母に恵まれた」

ウィリィアを見ていれば、子育てにも長けた女性だと分かる。

夫のアルフォードも騎士としては中々の人物で、白龍公カールがこの夫婦を自分の養父母として推した理由が分かった気がした。

「健全な環境無くして健全な精神無し」

そして、健全な精神無くして健全な為政無しということか。

レクティファールは小さく微笑み、姿見でそんな自分の姿を確認して今度は苦笑した。

「――――さて、義母上の手伝いをしないと」

職員たちが登城する頃には皇城に戻らないと拙い。

まず宰相が無言で怒り狂い、次に皇王府総裁が笑顔で怒り狂う。

それも、部下たちに気付かれぬよう心の奥底で。

唯一人、己が主君にのみその怒りが届くように怒る。

「まあ、仕方のないことだけど……」

自分を中心とした現体制は未だ立ち上がったばかりの仔馬のようなもの。不安定で、いつ転ぶとも知れず、さらに傷付き易い。それを支えるために、老練な彼らを柱石として体制を纏めているのだ。

ただ声望があるだけでは組織は纏まらない。どれだけ組織を支える柱が太く頑丈でも、その柱を支える土台が脆弱ならば組織は容易く崩れ落ちるものだ。

その点、レクティファールは大いに恵まれている。

国家を割ってしまうほど――つまりは諸刃の剣と言って良い程の愛国心を持つ者たちと、この国の歴史をその目で見詰め続けてきた妖精の長老がすぐ近くにいる。彼らは自らの欲を制御する術を心得ていたし、何よりも主君を諫めることを躊躇わない。

レクティファールの国主としての技量が稚拙なことは確かだが、臣下たちの存在はそれを補って余りある。

「国とは民、国とは臣、国とは君」

国主としての学問を学べば、一番初めに教えられるのはそんな言葉。

国を成り立たせる要素として、君主は民と臣に劣るという意味だ。

君主あっての国家と思っていれば、いつか足元を掬われる。それを戒める言葉なのだろうとレクティファールは考えていた。

「どちらにせよ、私は一人じゃ生きていけない訳で……」

困ったことに、こちらの世界の自分は只まんじりと生きていれば良いというものではない。

しかし、自分ひとりでは大したことは出来ない。

元首とは国家の束ね、多くの国民を束ね、国家としての形を作り上げることをその役割としている。元首単独で何が出来るかと問えば、多くの者は言葉に詰まり、それ以外の極小数は殆ど何も出来ないと返すだろう。元首とてただの人、役割が特別なだけであり、出来ることが人より特別多いということではないのだ。

「まあ、今更独りに戻ろうとは思いませんが、ね」

そう嘯き、レクティファールは再び笑んだ。

彼の目の前に立つ鏡の住人たる青年は何処か頼りなく、同時に何処か楽しげに笑っていた。

一家の食を預かる厨房に顔を出してみれば、そこには既にルイーズの姿があった。

飾り気の無い前掛け姿で、鍋の灰汁を少し、また少しと掬っている。

「おはようございます」

「あらレクト殿、おはよう。早いのね」

「ええ、いつもならもう一眠りするのかも知れませんが、家に戻ってまでそれもどうかと思いまして」

「寝ててもいいのに、いつもお仕事大変なんでしょう？　ここに居るときぐらいのんびり過ごせばいいのに」

「いつもは全部他人任せですからね。たまには自分でやらないと」

「そう、じゃあ――――」

ルイーズは生真面目な息子を苦笑を浮かべながら、食堂に行って食器を並べてくれるよう頼んだ。

レクティファールは頷き、隅に置いてあった食器入りの台車を押して厨房を出る。

「――――ああ、あと、表の郵便受けから新聞も取ってきてくれるかしら～～？」

「はい」

何とも、穏やかな朝だ。

レクティファールは食堂へと続く廊下で、朝日を見ながらそう思った。

つい数カ月前まで血煙舞う戦場に居た筈なのに、今はこうしてあの命の遣り取りを性質（たち）の悪い夢だったのではないかとさえ思える生活を送っている。

城に戻ればそこには新たな家族が居て、新たな仕事場がある。しかし、そんな日常はあの戦場では考えもしなかったし、考えられなかった。だからレクティファールはこう考えもする。あの戦場で、こんな穏やかな日常を永遠に失った同胞（はらから）が存在したことは覆しようも無い事実で、今のこの日常こそが彼らが自分に遺した呪いなのではないかと。

微温（ぬる）く、甘い日常を教え込み、それを奪う。

散った戦友たちの死に責任を負うレクティファールには、似合いの復讐だ。

「あると分かっている罠でも、逃げられないからなぁ」

今の日常を捨てられない以上、レクティファールは分かっていて罠に掛かりに行くしかない。

その上で、罠を喰い破る。

「私って、こんなにも能動的じゃない筈なんですけどね」

それでもやらねば、望む望まないに関わらずこの腕の中に収まってしまった大切な者たちを失う。

一度腕の中に入れたものを失うというのは、諦めの良いレクティファールといえども納得し難いことだった。

「――――ということで、ウィリィアさんは守りますとも」

いつの間にか辿り着いた食堂の扉に手を掛けつつ、彼は誰にともなく呟いた。

応える声は――――彼の背後から。

「おう、そりゃ良かった」

レクティファールが振り返った先、アルフォードは鉄芯を仕込んだ大振りの木剣を肩に乗せ、口の端を小さく引き上げる笑みを浮かべている。

「おはようございます。――――修練ですか？」

「ああ、仕事が詰まってると朝と夜ぐらいしか自分の修練の時間が

取れなくてな」

「なるほど」

近衛軍の訓練教官として忙しい日々を送っているアルフォード。自身の訓練も怠る訳にはいかないから、自然と仕事前、仕事後に訓練を行うようになったのだろう。もしかしたら、近衛軍に出向する前からの日課なのかも知れないが。

「お前もやるか？」

とんとん、と木剣で肩を叩くアルフォード。

その申し出に、レクティファールは頭を振った。

「義母上に頼まれた仕事があるので、また次の機会にお願いします」

「そうか……じゃあしょうがないな」

朝の爽やかな空気の中で義息と剣を振れると思っていたアルフォードは、残念そうに眉を寄せた。しかし、先約があるというならばそれは仕方がない。

「じゃあ、俺は庭にいる。朝飯が出来たら呼んでくれ」

「はい」

アルフォードは木剣を担ぎ、レクティファールの肩を叩いて去っていった。

それを見送ったレクティファールは気を取り直し、食堂の扉を開けるのだった。

ハルベルン家の朝食は、皇国貴族筆頭のリンドヴルム公爵家に属する騎士家としては質素なものだった。

そのため朝食を作るための手間はさして多くもなく、ルイーズは実質一人で朝食を作り上げてしまった。レクティファールに出来た手伝いといえば葉野菜をちぎり、高い位置に置いてあった皿を下ろした程度。居ても居なくてもさして違いはなかっただろう。

それでもルイーズはレクティファールに礼を言い、労った。その上で、彼女はレクティファールに一つ頼みごとをした。

「じゃあ、最後にもう一つ頼んでもいいかしら」

「はい、何でしょう」

彼はこのとき気軽に答えたことを、後々まで後悔することになる。

「ウィリィアを起こしてきてくれないかしら。あの娘ったら家にいるときは寝坊助さんなのよ」

しかしながら、この時点で彼はこのあと自分に降りかかる苦難を知らなかったし、知る術も持っていなかった。

そして、「お願いね」と自分を見送るルイーズが、何かを期待するような眼差しを自分に向けていたことにも気付けなかった。

「ああそうだ、ノックして返事がないようだったら部屋に入ってもいいわよ～～」

「はい、分かりました」

背後から聞こえるルイーズの声に答え、彼は義姉の部屋へと向か

う。

昨夜思いっきり筆立てをぶつけられたこともあり、義姉の部屋の位置は覚えている。彼は屋敷の中を迷うこと無く進み、ウィリィアの部屋の前に到着した。

扉の向こうに、眠っているせいか希薄になったウィリィアの気配がある。

彼はその気配を確認し、扉を叩いた。

「義姉(ねえ)さん、朝です。朝食の準備が出来ますよ」

無言。

寝返りを打つ気配はあったが、起きる様子はない。

「――――義姉さん、起きないと部屋に入ってしまいますよ。どうせ怒るんでしょう。だったら早く起きてくださいよ」

部屋に入れば、例えルイーズの許しを得ていてもウィリィアは不機嫌になるだろう。不機嫌になるということは、八つ当たりの被害は主にレクティファールに向けられるということ。少なくとも、城に戻らない限りレクティファールはウィリィアの義弟に過ぎないのだ。

レクティファールは義姉の理不尽な折檻を予防するべく、必死に扉を叩いた。

「義姉さん、本当に入りますよ」

何度呼んでも、無言。

たまに呻き声とも喘ぎ声ともつかない声は聞こえるのだが、やはり起きる様子はない。

「――――――――」

彼は、覚悟を決めた。

義母の命に従い、決死の任務に赴くのだ。

「――――怒っても、謝りませんからね」

謝るべきは部屋に入った自分ではなく、起きなかった義姉である。

でもやっぱり、怒られたら謝ってしまうんだろうなぁ、と肩を落としつつ、彼は義姉の部屋の扉を開けた。

「――――――――おはよう、ございます」

妙にいい匂いのする部屋に入った途端、何故か囁き声になるレクティファール。さらに言えば、別に足音と気配を殺す必要もないのだが、義姉に怒られるという恐怖が、彼をイズモの忍者にした。足音、呼吸を殺し、気配を消す。“皇剣”の機能を全域に亘って使用した、無駄に優秀な隠密の誕生である。

彼は窓掛けが引かれたままの薄暗い部屋の中に鎮座する寝台に向かって、無音で近付く。

そこには、掛け布団に包まって非常に安らかな寝息を立てる義姉上様がおられた。寒いのか、身体を丸めてレクティファールに背を向けている。枕も既に意味を成していない。

「むにょむにょ……」

意味のない声がウィリィアの口から漏れた。

その気持よさそうな声に、一瞬、レクティファールの眉間に青筋が浮かぶ。

彼は義姉の肩を掴み、揺らした。

「――――――――義姉さん、朝です。朝ごはんです。義姉さんは休みですが、私は仕事なんです」

余りにも気持良さそうに寝ているウィリィアの姿に、罪悪感を覚えないといえば嘘になる。

だが、起きてもらわなければ困る。

「義姉さん、義姉上、ウィリィア」

様々な呼び名で呼び掛け、肩を揺する。

掛け布団がずれてウィリィアの肩があらわになったが、レクティファールは冷静に乱れた寝間着を直すのみ。

ついでに外れていた胸元のボタンも閉め直す。

「起きてください、というか、さっさと起きなさい」

段々と強い口調に変化し始めたレクティファール。

肩に触れる手にも、力が篭ってきた。

「ウィリィア、いい加減にしないと……」

「もにゃ……」

若干怒りの色が増したレクティファールの声に反応したのか、或いは偶然なのか、ウィリィアはごろんと寝返りを打って仰向けになる。

掛け布団は彼女の身体の下に巻き込まれ、危うくレクティファールの手も巻き添えを食うところだった。

「義姉さん、起きたんですか？」

「く――――――……」

返答は、寝息である。

「――――――――――……」

どうしてくれようかこの義姉。

日頃あれだけ自分のことを厳しく躾ているというのに、自分は朝に弱いのか。

いや、実家に戻っているという安堵故に気が緩んでいるのだろう。

それは勘案するべきだ。

よく考えろ、この女性はいつも気を張って心身を追い詰めているではないか、家に居るときぐらい穏やかな日常というものを満喫させるべきではないか。

それこそが義弟としての優しさではないか。

「むにゃ……」

見下ろしてみれば、肌蹴た寝間着の裾からへそが覗いている。

その下には白い下着が見えているし、とても家族以外に見せられる姿ではない。

「――――――――」

つまり、それだけこの女性が安心しているということ。ならば義弟たる自分がすべきは――――

「――――いや待て待て、どちらにしろ起こさなきゃならんじゃないか」

朝食抜きは健康にも良くないだろう。

さらにはルイーズから義姉を起こしてくれと頼まれている訳であるし、その職務を放棄する訳にもいかない。

起こすことに罪悪感はあるが、君主たるものやらなければならないことはどれだけの怨みを買ってでもやらねばならないのだ。

彼は決意すると、行動に移った。

「義姉さん！　起きてください！」

先程よりも強い力で義姉の身体を起こし、両肩を掴んで揺さぶる。

ついでにウィリィアの耳元に口を寄せ、そこで声を発した。

「義姉さん！」

ウィリィアの顔が、不快そうに歪む。

どうやら少しずつ意識が覚醒し始めているらしい。

「朝です！　朝食の準備が出来ています！」

「むぅ～～……」

唸り、身を捩るウィリィア。レクティファールの腕を解こうとしているらしい。

しかし、そうはさせまいとレクティファールがさらに力を込める。

「義姉さん！　起きなさい！」

「むむぅ～～……！」

そして耳元でもう一声。

そこで、ようやくウィリィアの目が開いた。

「あ、起きましたか」

「――――――――」

レクティファールはウィリィアを支えたまま、問い掛けた。

寝台の上に座り込む形になったウィリィアは、惚けた顔で義弟を見上げる。

「――――れくと……？」

「ええ、そうです」

頷くレクティファール。

良かった、起きた、と思った。

しかし、彼の試練は終わらない。

喜色を浮かべるレクティファールに、ウィリィアは両手を伸ばす。

「――――だっこ」

「はっ？」

素っ頓狂な声を発するレクティファール。

義姉が何を言っているのか、理解出来なかった。

無言のまま自分を見下ろしている義弟に、ウィリィアは焦れたようにもう一度両手を差し出す。

「――――ん！」

早く抱き上げろ愚弟。

そんな声が聞こえてきそうな態度である。

レクティファールも思わず手を伸ばしてしまう程度に、その声は不機嫌だった。

「――――むふぅ……」

ひょいと横抱きに抱えられたウィリィアは、満足そうな声を漏らして義弟の首に両手を回し、首元に顔を埋める。

対してレクティファールは、自分が無意識に義姉を持ち上げたことに驚いていた。

「あれ？　なんで私……」

どうにもすっかり強気な姉に振り回される弟としての習慣が染み付いているらしい。

その事実に落ち込みながら、自分の腕の中で上機嫌に身体を揺らす義姉を困ったように見詰めるレクティファールであった。

「あらまあ、随分ご機嫌ねぇこの娘は」

レクティファールに抱えられたウィリィアを見たルイーズの第一声は、それだった。

彼女の言う通りウィリィアの機嫌はすこぶる良く、安眠を妨げられたとは思えないほどだ。

今もレクティファールの首っ玉に齧り付いたまま、鼻歌を歌っている。

「そうだレクト殿、折角だからこのままお風呂に連れて行って上げて頂戴な」

「何とっ！？」

「いつもはわたくしが寝惚けているこの娘の手を引いて連れて行くんだけど……」

「だったら下ろしますよ」

そう言って腰を落とすレクティファール。

だが、自分が下ろされようとしていると気付いた姫様は至極不機嫌であらせられた。

「――――いや！」

「こ、この義姉……！」

力尽くで引き剥がそうとすると、いやいやと頭を振ってレクティファールを離さないウィリィア。寝惚けている割には、力が弱いということもない。

ルイーズは面白そうに義姉弟の遣り取りを見ていたが、しばらくしてレクティファールが諦めると彼女は再び言った。

「ね、この娘のたまのお願い、聞いてあげて」

「――――……」

そう言われると、反論出来ないレクティファール。

ウィリィアが日頃どれだけ苦労しているか知っているからこそ、渋々頷いた。

「――――分かりました、では脱衣場まで」

「それでいいわ、そこから先は自分で出来るから」

「はい……」

敗北感を背負い、去っていくその肩に上機嫌な娘の顔。

ルイーズは思わず吹き出しそうになり、慌てて口を隠した。

それでも隠し切れない笑みが、朝食の匂いを嗅ぎ付けて現れた夫の目に止まる。

アルフォードは妻の表情に首を傾げながら、食前のお茶を求めた。

「どうした、随分楽しそうだな」

「楽しいわよ、良い息子が出来たんだもの」

「――――まぁな、だが、余り構うなよ」

年頃の異性の子どもは難しい。

最近、ウィリィアという年頃の娘と満足に会話も出来ないアルフォードは妻に釘を刺した。特に、レクティファールは特殊な立場にいる。下手に母親面をすれば、レクティファールではなくその周囲の者が良い顔をするまい。

アルフォードは妻が権力の類を求めるような女ではないと知っているが、それも近しい間柄だからこそだ。貴族筆頭であるカールはルイーズを良く知っているが、それ以外の者は彼女の性格など知りはしない。

「分かってるわよ、レクト殿はわたくしの息子だけれど、レクティファール殿下は雲上人。それくらいは弁えています」

「だったら……」

「でもね、あなた――――」

ルイーズは夫を振り返り、先程の笑みとは違う、ひどく寂しげな微笑で言った。

「どちらもあの子なのよ。笑って怒って困って、わたくしたちと同じ心あるヒト」

「――――ヒトではない、この国を護り、亡ぼせる兵器だ」

アルフォードの、事実を事実として突き付ける冷たい声音にも、ルイーズは小さく首を振る。

「いいえ。この国を護り、亡ぼせる兵器だけれど、やっぱりヒトなのよあの子は」

「――――――――」

皇王は兵器かヒトか、それを議論する場は既に皇国に存在しない。

それは皇王自身が自らを兵器として認めているからであり、今更それを議論しようという者もいないからだ。

兵器であるかヒトであるかではなく、彼らは皇王という兵器であり、ヒトである――――国民は自らの主君をそう定義付けている。

だからこそ、アルフォードは妻の言葉に何の反論も出来なかった。

皇王がヒトでないという定義は、何処にも存在しないが故に。

「――――好きにしろ、程々にな」

「ええ、好きにします」

答えるルイーズの顔には、明るい笑みが戻っていた。

脱衣所に辿り着くまで、レクティファールは異性に感じるような独特の柔らかさと温かさを持つウィリィアの身体を持て余していた。

悪いことをしている訳でもないのに酷い罪悪感があり、その罪悪感は彼の眉間に深い皺を刻み込んでいる。

道中ウィリィアが上機嫌だったのは果たして幸運だったのか不幸だったのか、彼は答えを得られぬまま脱衣場に到着した。

「着きましたよ、義姉さん」

「うん」

ウィリィアは素直に頷く。

レクティファールは脱衣場の鏡の前に置かれた椅子に、思ったよりも軽かった義姉の身体を下ろした。

今度は素直にレクティファールを解放するウィリィア。

しかし、やはりというか彼女はさらにレクティファールの精神を削りに掛かる。

「じゃあ、私はこれで……」

「んん！」

ウィリィアの不機嫌そうな声と同時に、がし、と掴まれる裾。

連動し、レクティファールの首が絞まった。

「ぐえ――――って何をしますかこの義姉は！」

「ぬぐ」

「は？」

じっとレクティファールの顔を見上げるウィリィア。

その表情にいつものような凛々しさは微塵もなく、無垢な瞳が彼を見詰めていた。

「脱ぐ、とは？」

「ん」

レクティファールの問いに答え、両手を天高く伸ばすウィリィア。

その体勢のまま、レクティファールに何かを期待している。

「――――脱がせと、私に」

「うん」

「――――――――……」

床に崩れ落ちるレクティファール。

女性の服を脱がせることは初めてではない。初めてではないが、何故にこんな朝から脱がさなければならないのか。しかも、年上の義姉の服を。

「ん～～」

しかしながら、両手を上げたまま苦しげな声を発する義姉を放り出す訳にもいかない。

レクティファールは人生の不条理を噛み締めつつ、両目を閉じてウィリィアの寝間着に手を掛けた。

「――――はーい、上げますよー」

「ん」

寝惚けているという段階（レベル）の話ではない。

既に別人格ではないかと思えるほど、今のウィリィアは小さな子

どもの様だ。

普段の彼女であればレクティファールに抱き着くようなこともないし、脱衣場に一緒に入るようなことは許さない。ましてや自分の服を脱がせるなどという暴挙はあり得ない。

しかしながら、今のウィリィアは非常に素直にレクティファールの言うことを聞き、ぽんぽんと寝間着を脱いでいく。

「下は、どうすれば――――ってもう脱いでるしっ！」

「ん」

目は見えずとも“皇剣”の空間認識機能で動きは分かる。

レクティファールは下穿きまで脱ぎ始めたウィリィアに慌てた。

ちなみにウィリィアは寝るときに上半身の下着は着けないらしい。

「はいる」

「あーはいはい、ごゆっくりどうぞ」

若干やさぐれたままの義弟を残し、着ていたもの総てを脱ぎ捨て

たウィリィアは意気揚々と浴室へと消えていった。

レクティファールは扉の閉まる音を確認すると、手早く義姉の衣服を畳んで棚の籠に放り込み脱衣場を後にするのだった。

「ん～～……」

満足気な声を漏らしながら、ウィリィアは湯船で揺られていた。

湯船に辿り着くまでに二度ほど転んだが、寝惚けていたので気にしなかった。

「きもちいい……」

心地よい眠りから起こされたときは腹が立ったが、こうして風呂

まで連れて来てくれたことには素直に感謝している。

中々落ち着く匂いの持ち主で、父親とは違う人物だと寝惚けた頭でも理解出来た。

「むぅ……」

むいむい、とお湯で顔を洗い。彼女は覚醒する意識に快感を覚える。

次第にいつもの思考回路が回復し、これまでの状況を正確に認識し始めた。

その過程で、幾つかの疑問が浮かんだ。

朝、誰かが起こしに来て――――誰が来た。

自分はその人物に抱き上げるよう求め――――誰に求めた。

さらにそのまま食堂に連れていかれ――――誰の腕で。

この浴室まで連れて来てもらい――――誰の温もりの中で。

さらに服を脱がせてもらった――――誰に脱がせてもらった。

「――――んん？」

疑問が生まれ、それに答えを出すために思考が回る。

回転を始めた思考は、次々と答えを弾き出した。

「――――――――」

誰が来た――――――レクティファールが。

誰に求めた――――――レクティファールに。

誰の腕で――――――レクティファールの腕で。

誰の温もりの中で――――――レクティファールの温もりに抱かれ。

誰に脱がせてもらった――――――言うまでもなく、レクティファール。

以上。

「――――――っ！！」

思考が完全に回復して答えが出ても、このときのウィリィアには悲鳴さえ上げる余裕はなかった。

「じゃあ、飛龍が迎えに来るのか」

「はい、ちょっと先の平原に」

「この辺は牛も居ないからな、まあ、大丈夫だろう」

ウィリィアを待っていてはレクティファールが仕事に遅れるということで、三人は一足早く朝食を摂ることにした。

焼いた豚の燻製肉をナイフで切り分け、レクティファールはそれを口に入れた。

「すみません、忙しくて。でも義姉さんは休みですから、ゆっくりさせてあげてください」

「ええ、もちろんよ。何なら今日の夕食もこっちで食べる？　好き

なもの作ってあげるわよ」

「いえ、今日は城で……」

流石に二日連続で後宮を空けるのは不味い。

主にリリシアが不機嫌になり、次いでメリエラが険しい顔になる。そうなるとリーデやアリアが二人に遠慮し始め、フェリエルとファリエルが自分を冷たい目で見るようになるのだ。

「――――余り空けるとその、精神的に、ちょっと辛いものが……」

「ああ、そうよねぇ、浮気は良くないわよねぇ、でも実家に帰ることは浮気じゃないわよ？」

「――――……」

いや、別に浮気をしているつもりはないんだけれども――――レクティファールはそう言おうとしてやめた。

この奥様は言っても笑って取り合うまい。浮気は男の甲斐性、男の浮気を制御することが女の甲斐性とでも言いそうだ。

「仕事もあるんだ、余り我が儘を言うものじゃない」

「あなたはいいわよ、仕事先がお城に近いもの。会いに行こうと思えば仕事帰りに行けるでしょう？」

「いやお前、城に行くって……」

どんな顔して会いに行けというのだ。

城のレクティファールは摂政殿下、対する自分は単なる士族。手順を踏めば面会は出来るだろうが、それはとても気楽に会いに行くというようなものではない。

「そうだ、お昼ご飯お弁当にして届けてあげましょうか。わたくしもお城に行ってみたいし、丁度良いわ」

「いやいやいや……！」

さも名案を思い付いたというルイーズに対し、父と息子は同時にそれを否定する。

「ほら、あれです義母上。今日の昼食は仕事上の会食を兼ねていまして、お弁当はちょっと……」

「あらそう？　じゃあ三時のお茶にお菓子でも……」

「いやいやいや……！」

父と息子、再び。

「ほら、あれです義母上。今日は昼食後に視察に出なくてはいけなくて、お茶の時間なんてとても……」

「あらぁ、残念ねぇ、美味しい焼き菓子作ってあげようと思ったのに……」

「そ、それはまた今度でいいじゃないか……」

「ああ！　そうだったわ！」

夫の言葉に、ぱんと手を叩くルイーズ。

何だ、今度は何だと父と息子が身構えた。

「今度の帰省はいつかしら？　ご飯の用意とか、お部屋の掃除とかの都合もあるし」

「あ、ええと……」

「れ、レクトも忙しいんだ。今すぐには答えられないだろう。帰れるときは連絡を貰えば……」

「それじゃあ困るのよ、手の込んだ料理は一週間ぐらい掛かるんですもの」

「じゃ、じゃあそれくらい前に連絡しますから、ね、義母上」

「そう？　じゃあそうして頂戴ね、レクト殿」

「はい……」

内面はぐったりと、しかし外面上は笑顔を崩さぬままレクティファールは頷いた。

そして思う、ああ、この母親からあの娘は生まれたのだと。

さらに言えば、この親子は自分の精神に多大なる負荷を与える血

統なのだと。

「じゃあ――――」

ルイーズが次の話題を、と口を開いたその刹那。

アルフォードとレクティファールは同時に顔を上げ、廊下に通じる扉に向き直る。

扉の向こうから、連続する、削岩機のような轟音が近付いてきていた。

とある人物が、床を踏み抜く勢いで走ってきているらしい。

「――――義父殿」

「――――ああ、ウィリィアだ」

目覚めてしまったのだ、眠れる獅子が。

レクティファールは近付いてくる足音に腰を浮かせた。

「――――義父殿、義母上、ちょっと早いですが仕事に行きます」

「うむ、気をつけてな」

「あら、もうそんな時間だったかしら？」

事情を総て理解し、冷や汗を垂らしながら頷くアルフォードと、首を傾げて時計を確認するルイーズ。

「義母殿、また近い内に帰りますので」

「ええ、お待ちしています。怪我などないようにね」

「はい」

レクティファールは答えると、転送魔法で自分の私物を部屋から呼び寄せる。ついでに服も着替えた。

呼び寄せたものは上着とちょっとした小物だけだが、それを身に付けると彼は食堂の窓を開けた。

終末の足音は、もう近い。

「では、行って参ります」

「おう、行って来い」

「行ってらっしゃい、でも、そこは窓よ？」

「窓から出勤したい気分なのです、義母殿」

「そう……変な子ねぇ」

「ははは……ではっ！」

素早い身のこなしで窓枠を飛び越え、庭に降りるレクティファール。

すぐに身体中の筋組織に第一戦闘段階（コンバットレベル・ファースト）での稼働を命じ、水蒸気の残滓を残す速度で走り始めた。

きゅおん、と彼の居た場所に空気が落ち込み、音を立てる。

「忙しい子ね、大丈夫かしら？」

「大丈夫だろう、むしろ心配なのは……」

アルフォードが戦々恐々と扉を見ると同時、食堂の扉は破壊寸前の衝撃を受けて開かれた。

「れぇえええええええええええくとぉおぉおおおおおおおおおおおおっ！！」

そこに居たのは、薄い湯着だけを纏った怒れる獅子。

いや、怒れるというよりは――――

「何ウィリィア、そんなに顔を真っ赤にして、体重でも増えた？」

「お母さんっ！　今日起こしに来たのお母さんよね！？　ね！？」

「何言ってるのよぅ、レクト殿にあんなに甘えてたのに」

「ぃいやあああああああああああああああああっ！！」

照れているというか、羞恥心に殺されかけていると言うべきか。

床にぺたりと座り込んだウィリィアを見て、アルフォードは涙を

流して何度も頷いた。

「――――うんうん、立派に育って……お父さんは嬉しいぞぅ……」

「見るなっ！」

きゅご、という音を曳いて放たれる熊の置き物。

ウィリィアの手近にあったそれは、不幸にもこの家の当主の眉間に直撃するのだった。

「ぐ――――」

悲鳴さえ残さず椅子ごと倒れるアルフォード。

ルイーズは夫の無残な姿にも笑みを失わず、息子が飛び出していった窓に歩み寄る。

「いってらっしゃい、レクト殿」

空を見上げてみれば、今日も、良い天気になりそうだった。

第八と半分の更に半分の話「ハルベルン家のその後」

ハルベルン邸の一室で、一人の女性が唸っている。

寝台の上で丸まって布団を被り、小山となって唸っている。

「う～～～～～～～っ」

窓掛けを閉め切り、朝の清々しい光を一切拒絶した引き篭もり状態。

時折布団の中から、「姉弟だから大丈夫姉弟だから大丈夫姉弟だから大丈夫姉弟だから大丈夫……」だとか、「あれはわたしじゃないあれはわたしじゃないあれはわたしじゃない……」等々の呪詛も聞こえてくるが、一〇分前に娘の様子を見に来た母はと言えば、ただ一言、

「ウィリィアの分のご飯、冷めちゃうからお父さんが食べたわよ」

と事務的に報告するだけで、娘の苦悩には無関心であった。

ただ、その無関心は娘の苦悩やら葛藤を軽視しているからではな

く、今の娘には何を言っても逆効果になるだけだと理解しているからなのだが。

とりあえず「昼食までには起きてくるように」と娘に告げ、母は娘の部屋を後にした。彼女はこの屋敷の留守を預かる奥として、出勤してきた使用人たちに必要な指示を与えなくてはならなかった。

「うう～～～～～～～……」

顔を真っ赤に染め、枕を力一杯抱き潰し、目の端に涙を浮かべながら布団の中に引き篭もった彼女は唸る。

総ては自業自得。責めるにも相手に非は少なく、彼女が怒りを覚えることの殆どは自分の行いが原因である。

「れくとめぇ……おぼえてろぉ……」

それでも半ば八つ当たりと自覚しつつ、義弟を罵る彼女。

しかし実際に罵り言葉を口にしてみれば、思い浮かぶのは困ったように笑う義弟の顔。そういえば、義弟はいつもいつも自分の八つ当たりを、このような表情で受け止めてくれていた。

死なないからと、ただそれだけの理由で自分が『岩窟龍断ち』を持ち出しても笑って許してしまう。笑って許せる程度の喧嘩だと周囲に示さなくては義姉の立場が危うくなるからという理由もあるの

だろうが、お人好しにも程がある。

しかし、お人好し故に他人の気持ちを慮ることは不得手。

相手の立場になって考えることは出来ても、相手の気持ちになって考えることは出来ない。

きっとあの義弟は、自分が時折猛烈な自己嫌悪に陥っていることなど知らないだろう。

護るべき主君を取られたくないという子どもじみた癇癪を、自分がどれだけ後悔しているか想像も出来ないだろう。

彼は、甘すぎる。

「――――ばぁか……」

抱き込んだ枕に顔を埋め、彼女は呟く。

単なるお人好し、八方美人、裏切られるのが怖い臆病者のくせに、それでも自分のような女を傍に置いている。

それが一層自分を傷付けると気付かず、「私は決して敵にはならない」と行動で示し続けている。

自分に近付き、笑い掛けてくれる。

他の誰にも代わりは務まらない、一人の“家族”として自分を見

てくれる。

「ほんっとに、ばかだぁ……」

甘い彼も、甘える自分も。

馬鹿が二人揃って、馬鹿なことをやっているだけ。

だから――――

「――――んふふふふ……」

楽しい。

思い切り自分の本音を叩き付けられるあの瞬間が楽しい。

矜持とか、体面とか、忠義とかを考えずに済むあの時間が楽しい。

楽しいと思えるようになった。

「ばぁか、ばぁ～～か」

あの頼りないお人好しな義弟に出会う前には考えられなかった。

自分が何かを楽しむなど。

自分に大切な娘を託したあの人に報いなくてはならないと思い詰め、主君のためだけにこの生命使おうと思っていた。

それだけで総てがこと足りた。

だが、今は違う。

生きなくてはならないと思う。

死んだら、守れないと思うようになった。

守りきれないことに恐怖を覚えるようになった。

「れくとのばぁか」

生きて、あの方の未来を見たいと思うようになった。

あの方の隣に彼がいる光景を見たいと思うようになった。

そうすれば、自分も傍らに在ることが出来るから。

「――――……」

どちらの傍らか。

決まっている。

「起きよ……」

自分を必要としてくれる者の傍らだ。

そろりそろりと起き出してみれば、居間にいた母は満面の笑みで一枚の用箋（メモ）を差し出してきた。

「何これ」

馬鈴薯の甘辛煮。だし巻き卵。筍ご飯。鶏肉の照り焼き――――等々、紙には四季の食材に応じた料理の数々が記されている。

ウィリィアは首を傾げ、母に問う。

母は、やはり変わらぬ笑顔で答えた。

「レクト殿の好物だって、あなたが作ってあげなさいな」

「ええっ！？　何で！」

なるほど、自分の質問の答えとしては納得した。

だが、自分が作るという点では納得出来なかった。

「だって、次の里帰りなんていつになるか分からないでしょう？　だったらいつも一緒に暮らしているあなたが作ってあげれば良いじゃない。――――あ、でもきちんと栄養の配分を考えないとだめよ？　あなたもレクト殿も身体が資本なんだから」

「一緒に暮らしてる訳じゃないわよ！」

「でも、同じ屋根の下でしょう？」

「後宮って広いのっ！」

「広くても一つの建物でしょう？」

「厨房は別の部隊の管轄なのっ！」

「自分の部屋にも小さい炊事場があるって言ってたじゃない」

「わたしの部屋にレクトを呼べって言うのっ！？」

そんなことをしたら――――ウィリィアにとって非常に良くないことになる。

まず主君が拗ねる。次に主君が大人の余裕を見せようとして失敗する。そして最後には、主君が「自分も作る」と言い出す。

それに、厨房を預かるのは旅団輜重大隊。後宮と離宮の厨房を守ることに命を懸ける乙女たちだ。彼女たちの領分を侵すには、ウィリィアの立場は曖昧に過ぎた。

妃候補たちなら手慰みに料理を作り、それをレクティファールに食べさせることは問題ない。両者の関係を円滑にするちょっとした行事と解釈出来る。

だが、後宮にいるレクティファールはウィリィアの義弟ではない。

義弟ではないレクティファールに料理を食べさせる――――冗談ではない。

「怒られるじゃ済まない、そんなこととしたら！」

主君たち妃候補ならば、おそらく下手な勘違いはせず、単にウィリィアという“姉”がレクティファールという“弟”に手料理を振舞ったとしか思うまい。そう思った結果どのような反応を示すかは別にして、騒ぎは彼女たちの間で収まるだろう。

しかし、ウィリィアの属する旅団はどう思うか。

旅団の乙女騎士たちの口から話を伝え聞いた者たちはどう思うか。

ああ、やはり二人はそういう仲なのか、と勘違いするのではないか。

ウィリィアは先の国境戦以降、『機甲乙女騎士団』に属するようになってから同僚にレクティファールとの仲を疑われている。

二人の間に何らかの繋がり――――特に男女のそれに近いものがあるのではないかと思われているのだ。

その理由は、毎朝のように繰り広げられるレクティファールとウィリィアの追跡劇であり、それを単なる“じゃれ合い”として済ませてしまうレクティファールの態度であった。

確かに、二人の関係は主従と言うには近過ぎ、恋仲であるには遠過ぎた。だから周囲はあれこれと憶測を並べ立てることが出来、その憶測によってさらに二人の仲を誤解する者が増えるのである。

ウィリィアとしては、レクティファールとの関係を単なる主従に留めておきたかった。

レクトとウィリィアであるなら家族でも義姉弟でも良い。だが、レクティファールとウィリィアならば――――主従であることが一番良い。ウィリィアはそう考え、事実その通りに行動していたつもりだった。

「誤解されて困るのはレクトなの。姫様と上手くいかなくなったらお母さんだって嫌でしょう？」

「困らないわよ、わたくしは。ウィリィアちゃんがお妃様になって困る訳無いじゃないの」

「お、お妃、様っ！？」

話が噛み合わない。

ウィリィアは戦慄した。

この母は自分と義弟との間が変な方向に進んでも問題ないと考えているらしい。

リンドヴルム公爵家の忠臣たるハルベルン家の長女が、主家の姫を差し置いてその夫と深い間柄になることが問題ないと。

「そんなこと出来る筈が……！」

「出来なくはないわ。だって、レクト殿は別にウィリィアちゃんが嫌いな訳じゃないでしょう？　ウィリィアちゃんはレクト殿が嫌いなの？」

「嫌いよ！」

即答だった。

即答しなくてはならないと本能が叫んでいた。ここで母に攻め込む隙を見せたら、一気に攻め落とされる。休暇を終えて城に戻ったら立場が侍女から妃候補になっている可能性だって否定しきれない。

ハルベルン家は騎士階級ではあるが、有象無象の貴族より余程名が通っている。そこの“姫”ともなれば、有力な後見人さえ見付かれば正妃の座に就くことさえ難しくないだろう。

だから、ウィリィアは全力でレクティファールとの仲を否定する。

「レクトは弟。それ以上でもそれ以下でもないの」

「じゃあ、弟に料理作ってあげてもいいじゃない」

ええい、そう来るか。

「城じゃお互い立場があるの！　お母さんだって白龍宮に勤めてたんだから分かるでしょう」

「それは分かるけど……」

「じゃあ、この話はここまでっ！　今度レクトが家に戻ってきたら、わたしも一緒に作るから」

手料理を食べさせることは別に構わない。

手間の掛かる料理ばかりだが、好物だと言うなら作ってやろうじゃないか。それくらいのことは姉としてやってあげても良い。その代わり、レクティファールにも弟として色々やってもらう心積もりだが。

「しょうがないわねぇ……じゃあ、ちゃんと練習しておいてね？」

「分かった、分かったから」

幸いいつも仕事のあとには少し時間が取れる。自分の食事を作る

ついでに、料理の練習をすれば良い。

己の矜持に誓って、不味いなどと言わせるつもりはなかった。

もし言ったら「旨い」と言うまで同じもの出し続けてやろう。

「――――全く、あいつは手間ばかり掛けさせて……」

そうぼやくウィリィアの表情はしかし、言葉とは裏腹に穏やかなものであった。

ぐるぐると肩を回し、用箋を覗き込んで笑みを漏らす。

「買い物、行ってこなきゃ」

こんな休日も、たまには良いだろう。

レクティファールのハルベルン邸訪問以来、後宮の朝の光景は少しだけ変化した。

「殿下……言い訳はございますか？」

「言い訳というか、単なる事故――――」

「殿下は事故で人の胸に顔を埋めるのですかっ！」

「いえあの、ウィリィアさんが転んで飛び込んできたんじゃ――――」

それに、埋めるほどないし――――とは心の中に留めた。賢明である。

「殿下がそこに居たから悪いんです！」

「ええ――――……？」

変化というのは、問答無用でレクティファールを追い回していたウィリィアが、一応とはいえその言い分に耳を貸すようになったこ

とだ。

ただその結果に変化は見られない。この日は山のような洗濯物を抱えていたウィリィアが小さな段差に躓き、倒れ込んだ先にレクティィファールが居て……云々という事故としか言いようがない出来ごとが発生したのだが、怒ったウィリィアがレクティファールを正座させ、問い詰めている。

後宮の他の騎士たちはといえば、遠巻きにその光景を眺めて自分の職務をこなすだけで、誰もレクティファールを助けようとはしない。彼女たちはこれがいつものじゃれ合いで、今更自分たちが出しゃばる必要はないと知っていた。

ただ、そのじゃれ合いで発生する被害を如何にして低く抑えるか、それだけが問題であった。

「殿下」

「――――はい……」

「わたしも一応、女ですので」

「はい……知ってます……」

「ならば、覚悟はよろしいですね？」

ウィリィアは部屋から持ってきた『岩窟龍断ち』を携え、レクティファールを睥睨する。

理不尽だとレクティファールの目が訴えていたが、麗しの義姉上はそれを容易く視線で圧殺した。

嫁入り前の乙女の身体は安くないのだ。

何を今更、とは言ってはいけない。ときとして、人は理不尽な生き物になる。

「――――あの、仕事が……」

「大丈夫、すぐに終わりますから」

そう言い放つウィリィアの額に、青筋が浮かび上がる。

怒りを制御し練り上げていると、レクティファールは気付いた。

彼は少し腰を浮かせ、逃亡の準備に入る。

「――――――――」

「――――――――」

両者、無言。

乙女騎士たちが損害制御（ダメージコントロール）のため、身構えた。全く以て迷惑な話である。

「――――っ！」

ウィリィアが引き金を引き、『岩窟龍断ち』に火を入れる。

轟々と鳴り響く豪剣の雄叫びが、この日の追跡劇の始まりを告げた。

＞ｉ１２０７９―１７００＜

後宮の朝。ハルベルン家の姫君はこの逢瀬に密かに胸を踊らせながら、今日も元気に手の掛かる男を追い回している。

第九話「新たなる波＋新たなる意思＝再誕」

月夜の後宮を、二つの足音が往く。

一つは堂々と。

もう一つは粛々と。

互いの立場の違いを示すように、足音は響く。

「――――『マルドゥク王国』で武力政変（クーデター）か……」

「は、軍情報部、皇国情報院、皇王府情報局の何れもが同一の情報を得ました。まず間違いないと見て良いかと」

堂々と歩くは、銀糸を編みこんだ長衣を纏った白髪の男――――アルトデステニア皇国国事国政全権代行職、摂政レクティファール。

粛々とそれに追従するは、白を基調とした近衛軍軍装の女――――皇国近衛軍第一特別護衛旅団旅団長、近衛准将マリカーシェル・ド・リア・マセリア。

「西方戦線の雄がこんな形で崩れるとはな」

「は……」

『マルドゥク王国』――――アルマダ大陸西岸に国土を有する有翼人種の国である。

この国は大陸西部に於いて、都市国家の集合体である『統一連邦メニェル』、海棲種族の国『神聖グリニッド王国』と並んでもっとも強大な国力、軍事力を有しており、新生アルマダ帝国に対する戦域では主力を担っていた。

そのマルドゥクで、軍の一部将校が現体制に不満を持つ貴族の支援を受けて蜂起。国王を始めとして国内に居た王族を総て処刑し、政権を奪取した。

帝国に対するため、軍の主力が国土の東方に引き抜かれている隙を突かれた形であった。

がら空きの首都は、容易く陥ちた。

「アルストロメリアに留学していたマルドゥク国王の第四子、第三王子パトゥーリア殿下はアルストロメリア政府の保護下に入った模様。現在はアルストロメリア国内に臨時政府を樹立し、各国に支援を要請しています」

マリカーシェルは従順な下僕のように、レクティファールのあとを付いて行く。

彼女は護衛旅団の旅団長であると同時に摂政付き護衛中隊の中隊長であり、レクティファールが後宮に居る限り唯一の軍事的輔弼者だった。だから従兵のように寝室まで迎えに上がり、参謀のように情報を分析して意見を述べ、軍司令官の如く主君の命令を全うしていた。

近衛軍で最も多忙で、余人には到底全うできない役職とは、この第一特別護衛旅団の旅団長であるとは軍内での常識の一。もしもマリカーシェルが旅団を離れることがあれば、彼女のその才覚を求める人々が軍内外から殺到するに違い無い。

だが、今のところ、彼女にこの旅団を離れる考えはない。

未だ生まれたばかりの新たな元首を守るには、ある程度の経験を積んだ職業軍人――――軍官僚が側に侍っていた方が都合が良い。それは、マリカーシェルは元より近衛軍総司令官ベルファイル、レクティファールさえも同意するところだった。

「支援、そう支援。全く以て厄介な話になるだろうな」

「何かお考えが？」

マリカーシェルは問う。主君の考えを聞き、その上で意見を述べることは、まさに彼女の職分。問い掛けは当然のことだった。

しかし、問われたレクティファールは小さく首を振るだけ。

「無いこともない……が、その程度ならばわざわざ言うまでもない。これから私が向かう先にはこの類の問題に関する専門家が集まっている。ならば、私はそこで意見を纏めれば良いだけだ」

「――――は、御意のままに」

少なくともこの若い摂政は、自分を過大評価しているということはないらしい。

マリカーシェルとしてはそれが一安心であり、また物足りなくもあった。若者らしいぎらぎらした刃のような野心というのも、場合によっては大きな武器になる。この青年はその性格からして野心や野望というものから程遠いように感じられるが、果たして現実はどうか。

「それでは、小官はここまでに」

後宮と皇城の境界線となっている星天宮内を流れる小川。その上を渡る架空回廊の皇城側に、摂政を待つマリカーシェルの同輩がいる。

レクティファールは歩を緩めること無く他の誰にも越えられない

境界線を跨ぎ、後宮の主からこの国総ての主へと立場を変える。

「ご苦労だった。“あれ”たちを頼んだ」

振り返りもせず告げられたその言葉に、マリカーシェルは深く頭を垂れた。

“あれ”と呼ばれた妻とも奥とも言えぬ曖昧な関係の女性たち。しかしながら、マリカーシェルには彼女たちの為に命を賭す覚悟があった。

それが――――『機甲乙女騎士団』。

皇国内にあって皇国軍ではなく、近衛の中にあって近衛でもない花園の騎士団。

それは、この国の国主が頼るべき真の最後の砦である。

皇城の一室、一部が欠けた三重の円卓を中心に置いた『白の大円

卓』には、深夜にも関わらず皇国の重鎮が集結していた。

上座の壁には皇国国旗と摂政旗が掲げられ、その前に用意された一段高い席だけが唯一空席であった。

その空席の隣に座る皇国宰相。

外務、内務、軍務三院の総裁と副総裁。

元帥府の陸海空近衛の四元帥。四軍参謀本部の参謀総長たち。

貴族、国民両議会の議長と副議長。

彼ら十七名は中心に最も近い円卓に座り、その背後。二重の円卓には彼らの補佐役が座している。

このとき、大円卓の間に集った人数はおよそ五十名。

いずれも正装を纏い、威儀を整えて皇国の主の登場を静かに待っていた。

やがて、扉の前で直立不動のまま彫像と化していた近衛陸軍の衛兵が、扉の外に立つ同僚から待ち人の到着を伝えられ、声を張り上げる。

「摂政殿下、御入来でございます」

円卓に座っていた者たちが一斉に起立。上座――――そこに掲げ

られている国旗に向き直った。

近衛兵はそれをぐるりと確認し、きびきびとした動きで扉に向き直る。

彼は扉を開くとすぐに脇に避け、胸に拳を当てる敬礼を以て自らの主君を出迎えた。同時に、広間に集まった者たちが揃って最敬礼を行う。文官武官で違う形ではあるが、何れもが最上級の礼を示していた。

「――――……」

それらの中を無言で進む摂政。

彼は毛足の長い絨毯に足音を遮られながらも、歩を進めるたびに風を叩く長衣の音や装身具の奏でる協和音で存在を誇示する。

そして若き皇国の主は、自分の発する音以外に何の音もない広間を進み、円卓の上座に設えられた己の席に座った。彼の身体に合わせて拵えられた天鵞絨張りの椅子は、欠けたものを補うかのようにその身体を包み込んだ。

「皆、遅くの参集ご苦労。楽にしろ」

レクティファールの許しが出ると中心の円卓から順に参加者が着席していく。最期に最も外の円卓にいた軍務院の若い官僚が腰を下

ろすと、レクティファールは議事進行役を勤める皇国宰相ハイデルを顎で促した。

首肯し、手元の用箋綴を開くハイデル。それが、この“御前会議”の開始を告げた。

「――――諸卿らに集まって貰ったのは他でもない。つい四時間前に発生したマルドゥクの武力政変に関して我が国の方針を決定する為である」

ハイデルは告げ、一度参加者たちを見渡した。誰もがハイデルの言葉を予想していたらしく、驚いている者は皆無であった。

最後に見たレクティファールは己の臣下たちの沈着振りを見て満足気に頷き、ちらりとハイデルに視線を送った。先に進めよ、という合図だった。

「まず、我が国とマルドゥクの関わりについて、外務卿」

「は」

レクティファールに比較的近い席を占めていた若い男が、ハイデルの求めに応じて立ち上がった。

外務卿マルファス。黒髪と紅瞳を持つ吸精種で、その発達した犬

歯が特徴的だった。彼は見た目こそ若いが、実際にはハイデルよりも年嵩の一二二歳である。

彼はレクティファールに一礼すると、口を開いた。

「我が国とマルドゥクの間に、直接的な関わりは多くありません。国交こそ得てはおりますが、かの国には大使も公使もおらず、メニエルの公使がその役目を兼任しております。通商協定もなく、第三国を通しての交易のみがマルドゥクとの繋がり、よって、この武力政変の直接的な影響に関しては、限定的なものと考えられます」

「ならば、動く必要はないということか」

レクティファールはマルファスの言葉を聞き、訊ねる。動かないことも外交の一手段、それを採ることも選択肢の一つとして十分に考えられる。仮に動いても得られるものが無い以上、それは妥当な判断だ。

しかし、マルファスは頭を振る。

「いいえ殿下、この機会にマルドゥクとの関係を進めることこそ、我が国の国益に適うことかと」

「――――腹案があるか」

「は」

レクティファールに問われ、マルファスは肯いた。

マルファスは宰相ハイデルに視線で意見上奏の許可を求め、無言の肯定を受けた。次に彼は、レクティファールに向き直って己の意見を述べる許可を求める。

御前会議に於いて、出席者は問われたのならば答えられるが、己の意見を摂政に具申することは許しが必要となる。許しがなくとも事後承諾という形は取れるが、理想的なのは事前に関係各位に許可を得て上奏を行うことだった。

非常に面倒だと感じる者も多いこれらの遣り取りは、皇王という総攬者が的確な判断を下すために必要な儀礼として今も廃れる気配がない。但し、これらの遣り取りを経た決定には大きな力が与えられる。それが、たとえどれだけ短い時間で弾きだされた結論だとしても、それは皇王の認めた結論となるのだ。

「申せ」

「は」

レクティファールからの許しを得、マルファスは隣の外務院副総裁から渡された資料を捲る。

「此度のマルドゥクからの支援要請は、パトゥーリア第三王子殿下よりのものです。マルドゥク王の生存が絶望的な今、王子殿下は我が国がマルドゥクの正当な政府と認めた国王政府の正当な継承者。摂政殿下がマルドゥクの簒奪政権をマルドゥク唯一の政府と認めない以上、我が国がマルドゥク政府と認めるに足るのはパトゥーリア殿下のみです。なればパトゥーリア殿下を正当な国家継承者と認め、殿下にマルドゥクを再び統べて頂くことこそが最良の道」

新たに国交を構築することがどれほどの労力と時間を必要とするか、今更言うまでもない。そして得た国交がどれだけの益を齎すか不明瞭である以上、新たに構築するよりも今まで培ってきた繋がりを重視するのは妥当な判断だと言えた。

「それは分かっている。私はマルドゥクの簒奪者をマルドゥクの政府とは認めない。これは我が国の外交方針と一致するものと考えるが、どうか？」

レクティファールは議場の総てに問う。

参加者たちは銘々の意見を近隣の者と交わし合い、そのざわめきがしばし続いた。

そのざわめきが収まった頃、ハイデルが告げた。

「殿下のお言葉に異論、意見のある者は挙手せよ」

二、三の手が挙がった。

ハイデルはレクティファールをちらりと窺い、その表情に変化がないことを見て取ると、それを意見を述べる許可と判断して一人を指名した。

指されたのは国民議会議長の背後に座る一人の議員。国民議会議員キャベンディッシュだった。

実質的な国民議会の領袖でありながら、この男は敢えて表に立とうとはしない。一歩退いた場所こそが総てを見通すには都合がいいと、彼は知っていた。

だからこそ、同じく貴族議会議員の一人としてこの会議に参加していた白龍公カールは、自ら意見を述べようとするキャベンディッシュの姿に眉を顰めた。いつものあの男ならば、目の前に座る傀儡議長に意見を上げさせる筈だと思った。

「殿下のお言葉、至極真っ当なものと臣は考えます。ただ――――」

キャベンディッシュは、レクティファールの銀瞳を覗き込むように視線を動かした。

「簒奪政権が我が国により大きな利益を齎すならば、そちらを選ぶのも手の一つではないかと」

「キャベンディッシュ卿！　それは容易いことではない！」

マルファスが円卓を叩きながら怒鳴った。

ハイデルが制止する間もなく、マルファスは端正な顔を怒りに歪めて咆哮する。

皇国の外交を取り仕切る彼としては、政府の重鎮が容易に他国の政府を裏切る発言をするということそのものが非常に危険なことのように思えたのだ。万が一にもこの会議の議事録が外に漏れるようなことになれば、皇国の外交的信用は大きく損なわれるだろう。

意見の一つとしてなら十分に議論の余地はあるが、それはもっと慎重に進めるべきものだ。外務院に事前の相談もなくいきなり述べて良い意見ではない。

キャベンディッシュはしかし、マルファスを冷ややかな目で見るだけであった。

「現政府首班であるパトゥーリア殿下。さて、彼にマルドゥクが治められましょうか。殿下は未だ十五の若者、アルストロメリア連邦政府の協力を取り付けたとは言いますが、果たしてその連邦政府の操り人形ではないと誰が保証出来ましょうか」

キャベンディッシュの言葉に、重々しい沈黙が漂う。

アルストロメリア民主連邦といえば、先の内戦時に皇国と干戈を交えた国。未だ皇国との間では脱走兵の問題などで対立することもあり、友好国という互いの掲げる看板も今ひとつ信用に欠ける面がある。

その国が、果たして皇国のマルドゥクへの干渉をどう考えるか。

もし皇国がマルドゥクの問題に積極的に干渉するなら、かの国を舞台に両国の外交合戦が始まることは間違いないだろう。

もちろん、マルファスもそれは承知している。その上で、敢えてマルドゥクとの関係改善を上奏したのだ。

そこにある目的は単なる大陸の彼方の国家との関係改善だけではない、アルストロメリア民主連邦という国家がマルドゥクという国家を足掛かりに、大陸西方への影響力を強めようとしていることへの牽制が含まれている。

その牽制の手段として皇国がマルドゥクに大きな影響力を持つ必要はない。ただ、連邦の動きによって大陸内の均衡が崩れるようなことだけは避けるべきだと判断したのだった。

皇国には再び連邦と争う意思はない。しかし、連邦が大陸西方への影響力を強めた場合、皇国の交易路に連邦の横槍が入ることも考えられる。

大陸内に多くの顧客を持つ皇国にとって、他国に交易路を侵されることは国土を侵されるにも等しい。

それらの考えが出席者全員に浸透した頃を見計らって、キャベンディッシュはさらに続けた。

「殿下、マルドゥクに対する連邦の方針は明確です。今回の武力蜂起を切っ掛けにして西方への影響力強化を図り、対帝国戦を含めた様々な外交にその影響力を行使するつもりでしょう。さらに連邦は、我が国に頼ること甚だしい交易体質を改善したいと常々願っておりました。マルドゥクは大陸西岸にパーパルス地帯という広大な工業地帯とそれに付随する大規模貿易港を持っておりますし、その周囲には未だ未開発な土地がございます。連邦がパトゥーリア殿下を国王に据え、それらの港に対する使用権を得ることを考えていないとは思えません」

「――――ふむ、確かに卿の意見にも一理ある」

レクティファールは素直に認めた。

マルファスは思わずレクティファールを睨むような目で見てしまったが、すぐに自分の行いに気づいて顔を伏せた。但し、その拳は机の下で震えているに違い無い。

そんなマルファスの態度に気付かぬ振りをしたまま、レクティファールはキャベンディッシュをじっと見据えた。

「だがなキャベンディッシュ。それは簒奪政権と交渉する理由にはなるまい」

レクティファールのその言葉に、キャベンディッシュは心の内で喝采を上げた。

まさに彼の求めた通りの反応をレクティファールが示したからだ。

（そう、それでいい）

表情にも、微かな笑みが宿る。

「ご賢察の通りです、殿下。それならば、我が国がパトゥーリア殿下にもっとも信頼されれば良いだけのこと。連邦が未だ明確に支援の内容を示していない今、我が国がすぐにでも大規模な援軍を組織し、反逆者を討つという姿勢を見せるだけでパトゥーリア殿下の多くの信頼を得ることが出来るでしょう。さらに物資、金銭的な援助を表明すれば連邦に先んじることが可能です」

専制国家故の意思決定の早さ。それは連邦には真似出来ないことだろう。

皇国は皇国が得意とする戦場で、連邦を圧倒すれば良いだけなのだ。

しかし、レクティファールは大きく首を振った。

「それは出来ない」

「――――はて、何故でございましょうか」

キャベンディッシュは心底不思議だという表情で主君を見る。

その表情が演技であると気付いたものは、そう多くなかった。

だが、その多くない者たちの中に、レクティファールが含まれている。

「我が国に、大陸の西部にまで派遣できる戦力はない。そうだろう、軍務卿」

レクティファールに問われた一人の小柄な老人が、起立した。

軍務卿ガーラント。亜人種の一つ、洞窟小人（ドワーフ）と呼ばれる種族の老人だった。彼は鋼色の針金のような髪と髭を揺らしながら、豊かな眉に隠れた目でレクティファールを見詰める。

「――――殿下の仰る通りにございます。正規軍、近衛軍ともに再編中の我が国にはそのような派遣任務に耐えうる戦力はございません」

ガーラントはそう答えると着席した。これ以上の説明はレクティファールには不要だ。

彼の下には毎日のように軍の再編状況を報せる書類が上がってくる。彼が敢えてガーラントに意見を求めたのは、他の出席者に軍の現状を教えるためであった。

「仮に軍を派遣せよと私が言った場合、派遣可能な戦力は如何程か」

レクティファールは更に元帥府と四軍の参謀本部の者たちに問うた。

彼らは隣の者たちと意見を交わし合い、三〇秒ほどで一つの答えを提示した。おそらく、レクティファールの問い掛けは事前に予想され、その答えも用意されていたのであろう。

起立したのは、“大提督”イザベラ。

「可能な限り早い時期に派遣ということになれば、我が海軍の陸戦師団を擁する揚陸艦隊二個のみが派遣可能です。元々、それを想定した艦隊ですので」

とはいえ、近衛軍が作り上げようとしている即応軍とは規模が違い過ぎる。海軍の陸戦師団は揚陸作戦を主任務とする揚陸艦隊一個に一個師団という割り当てで、この時点で四個師団四四〇〇名に

過ぎず、防衛政策上総ての師団を遠隔地に派遣することは不可能だ。

だからイザベラはその四個師団の内、二個師団までなら派遣可能だと答えたのだった。

レクティファールはイザベラの答えに何度か頷き、彼女が着席すると再びマルファスに目を向けた。

「マルファス」

「は……」

「私としては、キャベンディッシュの言も一理あると思っている。だが、まだ私は卿の腹案を聞いていない」

その通り、マルファスは未だ外務院としての意見を述べていない。レクティファールは、それを述べよと言うのだ。

マルファスは何度か深呼吸をすると、再び立ち上がった。一瞬キャベンディッシュに向けて鋭い視線を向けたが、相手が自分を曖昧な眼差しで見ていることに気付くと、すぐにレクティファールへと身体を向けた。

「――――外務院としては、連邦と協同してのマルドゥクへの支援を具申いたします。マルドゥクとの関係を進めるにも連邦と足並み

を揃えることが肝要。キャベンディッシュ卿が仰った通りに連邦が海を求めているならば、我が国がそれを得るための後押しをするべきだと考えます。その際に我が国がマルドゥク、連邦両国の間を取り持ち何らかの協定を結べたのなら、両国に対して借りを作ることが出来ます」

マルドゥクとしては、皇国を仲介とすることで国力に勝る連邦に交渉の主導権を握られずに済む。そのとき皇国がマルドゥクに求めるのは、両国間の大々的な交易路の設置と関税の優遇で十分。根拠地である港をマルドゥク内に得られれば、そこを起点にして大陸西方の交易に食い込むことが出来る。

連邦としても、皇国を間に置くことで自国の民衆に恫喝外交と思われること無く港を得られるし、港を得たときに皇国の海軍力を海上交易路の安全確保に役立てることが出来るだろう。何よりも、一人勝ちをして余計な恨みを買うことが避けられる。皇国としても連邦との交易路がひとつ増えることになるし、この一件を利用して両国の宜を深めることも出来る。

「つまり、軍事力は使用しないと」

「は、海軍の一部艦船を交易路の安全確保のために派遣する程度で十分かと思われます。あまり大規模な軍を派遣すれば、それは我が国の大陸西方に対する侵略の意思とも取られかねません」

「ふむ……」

レクティファールは腕と足を組み、天井を見上げる。

硝子細工の照明が、きらきらと光っていた。

彼はその輝きを見詰めたまま、口を開いた。

「――――キャベンディッシュ、卿の意見は先程のもので良いか？」

「は」

「マルファス、外務院からの上奏はこれで終わりだな」

「はい、細かい点に関しましては後ほど資料をお持ちいたします」

「ん、分かった。――――他に何かあるか？」

レクティファールの問いに、今度は一つの手も挙がらなかった。

先程挙手した者たちの意見も、おそらくこの二つの意見に近いものだったのだろう。或いは、どちらかの意見が自分のものより現状に適していると判断したのかもしれない。

外務院の非軍事外交を主とし、関係国との協調路線を重視した方針。

キャベンディッシュ、つまり国民議会の直接軍事力を全面に押し出し、皇国が今回の一件で主導権を握ろうという方針。

とにかく、この議場での意見はこの大きく二つに絞られたことになる。細かい点は、あとで如何様にも修正されるだろう。遠隔地での出来ごとであるが故に情報が不足していることも確か、さらなる情報収集に努めることを含めて方針を決定するべきだろう。

「うむ、よく分かった」

レクティファールは天井から視線を戻し、議場を見渡した。

自分よりも遥かに長いときを生きた者たちの注目を浴びながら、レクティファールはそれでも平然と言い放った。

「あとは我が責任に於いて決定を下す、良いな」

その言葉に、出席者全員が“是”の答えを返したのだった。

この時点で彼らの役割は変わる。

摂政が己の考えを醸成する助けとなることから、摂政の出した結論を実現することへと。

レクティファールを見送ったマリカーシェルは、皇城側の担当者に引き継ぎを済ませるとつい先頃まで彼が居た白龍姫メリエラの居室を訪れていた。

この部屋の隣には、万が一にも二人が男女の関係にならないよう監視を行う侍従の待機部屋がある。二人が夫婦になるまでの役割であるが、今はまだ必要なものだった。

マリカーシェルが急ぎの報を携えてこの待機部屋に入ったとき、二人は寝台の上でアームロアに興じていた。

龍の姫君の膝枕に片頬を埋めたまま駒を操るレクティファールと、その彼の白い髪を撫でながら盤上の趨勢を見守るメリエラ。言葉は少ないが、その姿は間違いなく睦まじい恋人たちの逢瀬であり、マリカーシェルはそれを壊すことに僅かな躊躇いを覚えたほどだ。

しかし、マリカーシェルはその逢瀬を破壊し、レクティファールに急報を届けた。

メリエラの居室に入ると、二人は先程の姿勢のままで彼女を出迎えた。しかしマリカーシェルが火急の用と伝えると、二人はすぐに摂政とその妃へと姿を変える。

レクティファールは寝台を下りて洗面所に入り、摂政を演じるに必要な舞台装置としての化粧を施す。その間にメリエラはレクティファールの正装を用意し、彼が部屋に戻るとマリカーシェルと共にその着替えを手伝った。

最後にメリエラはレクティファールの姿をぐるりと一周して確認し、自分の目で見て、目の前に居るのがこの皇国の摂政であると認めると、ただ一言「いってらっしゃいませ」と頭を下げた。

薄衣の夜着に一枚羽織っただけのその姿はそれでもやはり白龍の姫で、何処か凛として張り詰めたものをマリカーシェルに感じさせた。レクティファールはその張り詰めたものが何か知っているようで、一つ姫君の頬を撫でるだけで何も答えようとはしない。ただ、彼に頬を撫でられたメリエラが、頬を染めて陶然と、しかし悲しげに目を伏せたことがマリカーシェルの心に残った。

二人の間にあるものが、ある種の偽りに満ちていることはマリカーシェルにも理解出来る。

二人は限りなく夫婦に近いが、心はともかく身を繋ぐことは許されていない。

男女の繋がりが肉体的なものだけではないことは間違いないだろうが、それでも不確かな“心”というものだけで繋がる二人の間には、目に見えないが故に偽りの上に成り立つものも多いのだろう。

言葉、仕草は簡単に偽れる。

どれだけ二人が心を通じようとも、通じようと努力しようとも、やはり偽りは廃せない。

それを証明するように、再び訪れたマリカーシェルの姿を認めたメリエラは、その瞳を龍眼へと変じていた。

「――――みっともないでしょう、マリカーシェル」

怒りを抑え切れない、とメリエラは呟く。

自分と彼の、欺瞞に満ちた逢瀬を壊した総てが憎いと彼女は言う。

「レクトが望んで、レクトが望まれて彼は城に戻った。わたしはそれを笑顔で見送る役目を負っているというのに、それを成し遂げられない」

「メリエラ様、殿下は――――」

マリカーシェルは炯々とした龍眼に睨まれ、口を噤んだ。

それ以上言って欲しくない、メリエラは龍眼でそう訴えていた。

「わたしは一介の近衛中尉で、もう表立って摂政としてのレクトの助けになることは出来ないわ。戦場に立つレクトの隣には立てるけれど、今となっては彼が戦場に立つことは簡単なことじゃない」

彼の戦場は、皇都の政治の場。

政に関われない妃に、その支えになることは出来ない。

「――――あの人の、無力な頃を知っていることがこの苦しみの原因かもしれない」

メリエラは寝台に身を伏せ、残ったレクティファールの匂いに意識を集中させる。

「あの人が、いつでも無理をしているように思える。自分を傷付けているように思える。本意ではないことを強いられているように思える」

それが事実であるかどうかは、今は問題ではないのだろう。

ただ、そう思えることが苦しみなのだから。

「助けたいと思った。あの人もわたしに助けて欲しいと言った。自分の帰りを待っていてくれと言った。だから、一緒に居たいと思っ

たのに……」

レクティファールはメリエラを必要としている。それは間違いない。

メリエラが居なければ、レクティファールが摂政としての任を全うできたかどうかも怪しい。

しかし、メリエラという雌龍は、それを知りながらも本能を制御出来ずに懊悩している。

「あの人が摂政としての役割を一つずつ果たすたび、苦しくなる」

飯事のような逢瀬で、本当に彼を支えていることになるのか。

肉体的な繋がりというのは心の繋がりよりも単純で分かり易い。

そして単純な分、ときとして強く心に作用する。

市井の恋人たちが想い人の肉体を求めるのは、単純な生物的欲求を愛情にも昇華出来るからなのかもしれないとメリエラは考える。

「悩んでもいいとあの人は言う。わたしが答えを得るのを待つ、と」

しかし、やはり不安になる。

待たせている間に、自分から心が移ろうのではないかと。

「――――本当に、みっともないわね」

メリエラはそう自嘲した。

彼女の瞳は、もう龍の瞳ではなかった。

「ありがとうマリカーシェル。気を使ってくれたんでしょう？」

「いえ、実は殿下にメリエラ様たちを頼むと」

「ああもう、レクトったらまたそんなことを……」

レクティファールの言葉を伝えると、メリエラは憤慨したように頬を膨らませた。

過保護過ぎる摂政の態度に憤っているのだろうか。

しかし、その姿は先頃までの彼女とは随分違う。ただ一言の言葉を伝えるだけでこうも変わることがマリカーシェルには可笑しかった。

「まあ良いわ、帰ってきたらお説教するから」

「はい、そうなさるのがよろしいかと」

マリカーシェルはほっとしたように微笑む。

二人の間にあるべきは、欺瞞に満ちた美しい繋がりではなく、醜く拙いながらも真の繋がりだと思えた。

「では、わたしはこれで失礼いたします。殿下がお戻りになられたら、こちらに伺うよう託けておきますね」

「え、あ、そ、それはいいわ……」

「――？　何故でしょうか？」

マリカーシェルは首を傾げる。

そんな彼女の目の前で、メリエラは朱に染まった顔を隠すように敷布に顔を埋める。

「――――だって、託けられたらその分わたしとの時間が減るじゃ

ない……」

こちらから出向いた方が、一緒に居られる時間は多くなる。その差は僅かなものだとしても、メリエラにとっては失うに惜しい時間だった。そしておそらく、レクティファールにとってもそれは同じこと。

この二人は、若さ故に無知であり、ほんの少しの客観的視点があればすぐに理解出来るようなこともまだ知らない。

相手が自分を求めていることに気付けず、こうやって一人悩んでいるのだ。

二人よりも少しだけ長生きをしてきたマリカーシェルには、レクティファールもメリエラを求めたくて耐えているように見える。彼がもしもメリエラの言うような男であるなら、誰かの支えなしに摂政という重責を担うことは難しいだろう。

あの男は、誰かの存在無しに自分を成り立たせることが出来ない。

そしてそれが事実であるなら、今の彼を成立させている要素の内の幾らかはマリカーシェルの眼前でもごもごと意味のないことを吐き出し続ける女性と、この後宮と離宮に居る美しくも強かな姫君たちということになる。

「では、メリエラ様」

「――――うん、ありがとう」

マリカーシェルはこちらに顔を見せてくれないメリエラに苦笑を浮かべつつ一礼して、静かに部屋を出た。

そのまま廊下を進んで庭園を望む回廊に出ると、月明かりの中に浮かび上がる皇城の姿があった。

深夜にも関わらず灯りが消えることはなく、そこで誰かが働いていることを示している。

あの灯りのどれかの元にレクティファールという若き主君が居るのかと思うと、マリカーシェルは笑みが溢れるのを止められなかった。

あの若者はきっと、心の何処かでメリエラという決して手折ってはいけない花のことを考えながら、職務に励んでいる。

自分の下す決断が自分ひとりの身に納まらないことを知っているなら、彼は間違えずに決断出来る筈だ。

それが彼女たちへの彼の想い。

正しくこの国の摂政で在り続けることが、彼の見せる彼女たちへの愛情。

「では殿下、お先に休ませていただきます」

マリカーシェルは襟の階級章をひと撫でし、皇城に向けて深く腰を折った。

「おやすみなさいませ、殿下」

月明かりに照らされるその姿は己の職務への誇りと自信に満ちており、まさに皇国の誇る戦乙女たちを束ねるに相応しい美しさを伴っていた。

この日の早朝、皇城で一つの決定が下された。

それはマルドゥクの内乱に関し、皇国は非軍事外交での解決を模索しつつも、軍事力の行使を躊躇わないというもの。

大陸西部だけを見た戦略ではなく大陸全土を見た戦略を骨子とするその方針は、三院や軍、議会を席巻して一つの流れを作り上げた。

即ち、皇国は再び大陸の一角を占める大国の座に返り咲く。

内乱と帝国侵攻の傷が癒えつつあることを内外に示すため、皇国は未だ健在であると遍く世界に示すため、そして、来るべき戦乱に向けて己の持つ刃を鍛えるため。

ときに、皇国歴二〇〇九年黒の十一月。

あとひと月で年が変わるというこのとき、皇国は再び世界に目を向けた。

第十話「帝国の兄弟たち≠皇国のお妃様たち」

城内に設けられた皇王府総裁の執務室の中には、幾つもの映像がまるで万華鏡のように展開されていた。

「――――……」

それらを見守る小さな影は、この部屋の主のもの。彼女はその身には大きすぎる机に座り、映像を無言で見詰める。

虚空に投影された表示窓の殆どは、皇国のとある場所の現在の光景を映し出していた。

その場所とは、皇国南岸の港湾都市＜リーゼル＞。昔も今も、皇国屈指の港湾都市として貿易業・造船業の中心地である。その一角にある軍港『マルセナル』には、とある艦隊を構成する大小の軍艦が錨を下ろしてその身を横たえていた。

いずれの艦も既に主機関である魔導炉に煌々と火を灯し、それの発する振動で小さく身動ぎしている。

彼女らは、公的には皇国平和維持軍海軍西方派遣艦隊と称され、処女航海を終えて一年余りの新鋭戦龍巡洋艦＜セフィリア＞を艦隊旗艦として編成されていた。この艦は新たに海軍に制式採用された

巡洋艦搭載用の飛竜射出機を備えており、二四騎の飛竜を擁している。

そんな〈セフィリア〉を筆頭に、防護軽巡洋艦一隻、汎用駆逐艦四隻、艦隊海防艦四隻。そして陸兵と陸上兵器の輸送の任を負う輸送艦四隻と艦隊工作補給艦一隻が艦隊の全容である。

これらの艦隊の姿を見て、皇城の影の宰相とも噂される妖精は小さく独語した。

「――――無事を祈る、ことさえおこがましいかな」

彼女の言葉には、明確な理由がある。

当初皇国は重戦艦や大型戦龍母艦、或いは強襲揚陸艦を主力とした艦隊を派遣する予定であったが、有力な海軍を有する皇国の介入に消極的――或いは猜疑的――なマルドゥク王党政府、アルストロメリア民主連邦両政府との協議の結果、その陣容は「巡洋艦以下の艦艇を中心として一〇隻以下の主力戦闘艦艇を基幹とし、若干の補助戦闘艦艇を含む」と決定された。その政府決定に、彼女も少なからず関わっている。

勿論、この政府の決定には海軍からの反発もあった。巡洋艦以下の艦隊ということは、万が一いずれかの国の重戦艦、大型戦龍母艦を有する強力な艦隊と戦闘状態に陥った場合、それに対抗することが難しくなる。陸軍が主体のマルドゥクの海軍でさえ、二隻の重戦艦と一隻の中型戦龍母艦を有し、駆逐艦以上の戦闘艦艇は六〇隻を超えている。これが総て簒奪政権に掌握されているなら、皇国海軍

はマルドゥク海軍に貴重な一〇隻の戦闘艦艇をくれてやるようなもの、と彼らは訴えた。

大陸西域には親新生アルマダ帝国を標榜する国家もあり、当然それらの国は皇国を敵対国家として見るだろう。それらの海上兵力と戦闘になったとき、果たして派遣艦隊の安全は確保出来るのか。海軍の疑問は皇国の懸念事項として両国政府に伝えられた。

マルドゥク王統政府はマルドゥク周辺海域の制海権は自らとその友好国が保持しているとして、それらの懸念を杞憂であると返答。連邦もまた、それを支持する回答を行った。さらに彼らは、返答と同時に皇国に対して陸軍の派遣を要請する。

派遣要請の理由として挙げられたのは、マルドゥクの政治混乱によって弱体化した対帝国西方戦線の補強に皇国・連邦の連合軍を充てるというものだ。帝国の対皇国戦線は大きく後退しており、帝国軍の保有する戦力も先の皇国の逆襲と帝国領への逆侵攻によって再編成を余儀なくされている。ならば、マルドゥクの政治混乱が収束し、再び西方戦線を維持出来る状態になるまでの繋ぎとしてその戦力を供給することは出来ないか、と両国政府は皇国政府に打診した。

しかし、この要請は皇国政府によって拒否される。

先の内乱と帝国侵攻によって被った損害は決して軽くはなく、今回派遣する海軍艦艇では西方諸国に居住する皇国国民の安全確保以上の任務に対応出来る陸上兵力の輸送は危険が大きすぎるというのが皇国の言い分だった。

事実、このとき皇国が大陸西方の治安維持名目で派遣出来る兵力は陸軍混成一個旅団一八〇〇名に過ぎず、この兵力もマルドゥクの

周辺各国に分散配置されると考えるなら、これは間違っても帝国と戦えるような戦力ではない。皇国と友好関係にある西方諸国も、皇国の陸上兵力に対帝国戦線への参加を期待するようなことはなかった。

彼ら友好国にとって、皇国の陸上兵力はあくまでもマルドゥク簒奪政権への牽制以上のものではなく。“アルトデステニア皇国”という大陸東方の大国が自分たちの背後に控えていると思わせるだけで良い。締結された友好協定の中に「当事国、或いはその周辺国で自国民の命を脅かすような事態が発生した場合、それを収束させるために自国国軍を派遣することが出来る」という条文があったことも、友好国がその態度を決定した一因だった。

皇国の国軍派遣はあくまでも自国民の命と財産を守るための軍事行動であり、それ以上の目的は存在しえない。西方戦線が突破されて帝国軍が周辺国に攻め入るような事態に陥れば話は別だろうが、現在のところ帝国が西方戦線を突破する気配はなく、皇国も対帝国戦を想定した派遣は行っていない。

マルドゥク王党政府と連邦政府は、その言い分を不承不承認めるしかなかった。

もし両国政府が皇国陸軍の派遣をさらに強く求めれば、皇国は海軍派遣艦隊の増強をその対価として要求してくるだろう。それを認めることは、何よりも皇国のその海軍力を恐れている両国政府には困難だろう。陸上兵力を安全に輸送する為に皇国が完全編成の一個艦隊でも派遣するような事態になれば、大陸西方の海域は実質的に皇国が取り仕切ることになる。

それは、皇国海軍が総ての制海権を握ることを意味している訳で

はない。西方諸国の内、どれか有力な海上兵力を保有している国家に力を貸すだけで十分だ。その国家は皇国の軍事力、経済力を後ろ盾に大陸西域の海を支配。皇国はそれを背後から操るだけでいい。

マルドゥクと連邦から見れば、皇国とは味方に付ければ万軍に勝り、敵に回せばそれ以上の脅威になる国なのだ。同時に皇国も、大陸西域に必要最低限の影響力を残しておきたい。無用の恨みを買う程の力は要らないが、自国の権益を守るにも力は欠かせない。

こうしてマルドゥク、連邦、そして皇国の三国は一応の利害の一致を見、協力関係を構築するに至る。

無論、その三国の間にあるのは友好ではなく非敵対。

国家間には友情も信頼も存在せず、厳然として在るのは打算と利己のみであり、結果同じ目標を掲げようとも、互いに敵の敵であって、味方ではない。とどのつまり、他国とは自国の為に利用するべき存在でしか無かった。

そして、西方派遣艦隊の乗員たちはその国家間の利害関係に巻き込まれる形で遠い異国の地に赴く。

ルキーティの、彼女個人の感覚で考えるなら、それは国家が国家であるための人身御供。生贄だ。彼らの命はら以外の国民の為に費やされることになる。

＜――――浮かない顔だな、皇府＞

天井を見上げていたルキーティが視線を落とす。

声と共に机の上に小さな表示窓がひとつ増え、そこには白の長衣を着たレクティファールの姿があった。

但し、その姿は現実に忠実ではない。

「可愛らしいお姿ですね、殿下」

三頭身に簡略化された“それ”は、ルキーティの言葉にしたり顔で答えた。

＜並列思考の対人端末にまで無駄な処理容量を使いたくない＞

そう言って胸を張る小さなレクティファール。

威厳など欠片もありはしないその姿は、先程まで無表情に映像を見詰めていたルキーティに笑みを与えた。まるで小さな子どもが上手く描けた絵を自慢するようだと彼女は思った。

当然のことながら、思っただけで口には出さない。彼女のその小さな唇は、その心の内とはまるで違う言葉を発した。

「視察は如何ですか？」

小さなレクティファール――――レクティファールの並列思考の一つで、皇城の演算器に常駐しているそれは、問いに対して眉を顰めるという反応を示した。

＜如何も何も、私が見に来たことで仕事が滞っては困るんだが……＞

レクティファールはつい先程まで、マルセナルに於いて開催された西方派遣艦隊の壮行式典に出席していた。＜大提督＞イザベルと共に壮途に就く艦隊の乗員たちを激励し、今はそのイザベラを案内役としてマルセナル海軍工廠に赴いている。

本来なら出航まで見届けるべきなのだろうが、レクティファールもイザベラも余り暇な職業ではない。暇ではないという理由で命を国家に預ける者たちを軽んじるべきではないという意見も確かにあるが、ルキーティが映像を見た限り乗員たちは各々家族や友人知人との最後かもしれない会話をしている最中で、そこに皇国三軍最高司令官や海軍元帥は必要ないように思える。

それに壮行式典の最後、艦隊が＜リーゼル＞の湾内を離れて外海に出た頃、レクティファールとイザベラは連合艦隊旗艦＜カルマイク＞の艦上からそれを見送る予定になっている。

出航して外海に出るまでは凡そ三時間程度掛かるということで、その間に海軍の誇る海軍工廠の視察を――――という運びになったのだった。これは海軍が、現在余り自分たちと関わりを持っていない摂政に自分たちを売り込む良い機会と判断したのかもしれない。陸軍と空軍――正確には公爵軍――は先の内乱と帝国戦でその力を

摂政に見せ付けたが、海軍はその戦いの際目立った戦果を挙げることが出来ずに終わった。その失点を挽回したいということなのだろう。

レクティファールが海軍を軽視しているという事実はないが、当の海軍がそう思い込んでいてはあとに響く。レクティファールとしては視察という形でも海軍の顔を立てておこうと判断した。

それに、この視察にレクティファールが参加することにはもう一つの意味がある。

「マルセナル海軍工廠といえば、我が国の三大海軍工廠の一つです。そして海軍艦といえば、その国の造船技術の集大成。少しの妥協も許されない世界で鍛えられた技術を見ることは、殿下の後学に役立ちましょう」

＜まあ、その通りなんだろうが……＞

小さなレクティファールは気難しげに腕を組んだ。

やはり、可愛らしいだけだった。

＜――――私の名を艦名にするというのは、やはり覆らんか？＞

「無理です」

＜そうか……＞

現在マルセナル海軍工廠の第一船渠で建造されているのは、“皇王”レクティファールの御座船であり皇国海軍の総旗艦。そして近衛海軍の総旗艦をも兼ねる皇国全海軍の象徴。その名を――――＜イグ＝ゼノリウム・レクティファール＞。

＜イグ＝ゼノリウム＞は歴代の皇王の御座船、つまり皇国海軍の総旗艦に与えられる名だ。初代皇王が旧帝国の貴族から譲り受けた艦にその名を付け、己の御座船としたことが始まりとされている。以降、皇国海軍の総旗艦には、その名と皇王自身の名が付与されることが慣習となっていた。

総旗艦の艦体そのものは、この時点で既に設計が完了している重戦艦や大型戦龍母艦の内、もっとも設計に余裕のあるものが選ばれる。＜イグ＝ゼノリウム・レクティファール＞は＜カルマイク＞級重戦艦後期型の設計を流用し、司令部機能の強化と皇王御座船、皇国海軍の象徴に相応しい装飾を施されて完成する。それ故に、海軍では公文書の上で彼女（イグ＝ゼノリウム・レクティファール）を＜カルマイク＞級重戦艦の九番艦、後期生産型の五番艦として扱っていた。

「その艦の建造を発表したとき、多くの臣民が建造資金を寄付してくれました。確かに、寄付が無くとも建造は出来たでしょう。しかし、臣民にとってその艦は単なる一隻の重戦艦ではないのです。いずれその名は新たな艦に譲られるでしょうが、きっとそのときにも

臣民は己の財を建造資金に、と寄付してくれるでしょうね」

＜――――分かった、もう言わん＞

＜イグ＝ゼノリウム・レクティファール＞の建造資金の内、海軍の予算はほぼ皆無だ。半分は皇王府が提供した皇王家の資産で、残り五割の内三割は他国からの寄付、最後の二割は寄付の呼び掛けに応じた国民から集められたもの。国民にとってこの艦は、自分たちの国の象徴の一つであり、自分たちと皇王を繋ぐ“絆”なのかもしれない。

レクティファールは、それをルキーティの言葉で理解した。

そして、自分が結局のところ、一人では成り立たない存在なのだとも再確認した。

“皇”は国民あってのもの。“皇剣”を宿し、皇王以外の何かになれない彼は、最早国民無くして生きることは出来ないのだった。

「それに、その艦の建造を殿下が視察したという話はすぐに各国に知れることでしょう。その為に各国の駐在武官を同道させたのですから」

＜マルドゥクの武官も、な。先程、建造現場を見ているときの彼の顔は見ものだったぞ＞

自分たちが下手を打てば、この艦の準同型艦やその他の重戦艦。戦龍母艦が自国の近海に現れる。自国の主力重戦艦はたったの二隻で、さらには性能もまるで違う。国防費の桁がそもそも違うのだから仕方がないと言えばその通りなのだが、皇国の海軍力を見せ付けられた駐在武官が本国に何と報告するのか、レクティファールもルキーティも大凡予想は出来ている。

皇国海軍、未だ健在なり――――マルドゥク王党政府はそれを改めて学習することになるだろう。

「実際のところ、我が国に正規艦隊を送る余裕はありません。二個艦体を派遣可能というイザベラ殿のお言葉は、派遣に掛かる予算を度外視したものです。無論、国防上必要であり、殿下が望むのであれば、送ることは可能なのでしょうが」

＜分かっている。見せ掛けでもはったりでも、皇国が本気であると証明出来なければことは上手く運ばない＞

「いずれ気付く者が現れるかもしれません」

＜気付かれたら、今度こそ本当に艦隊を派遣する＞

「転地訓練という名目で揚陸艦隊に物資を集めていることも、見せ金ですか」

ルキーティにしてみれば、余りにも予算が浪費されているように思えて仕方がない。元々大陸西域に対しては余り積極的な動きを見せなかった皇国が、何故今になって――――という想いもある。

大陸西域には皇国の友好国も多い。その国家の背後に立ち、マルドゥクや連邦と対する方が国に掛かる負担は少なく済むだろう。直接皇国が出向く理由を、彼女を未だ見出せずにいた。

国益の為にと言われれば納得もしよう、政府の説明が不十分ということもない。だが、やはり解せない部分がある。

＜――――納得出来ないか、皇府＞

小さなレクティファールはルキーティを見上げ、無表情のまま問う。

その瞳だけは、本当のレクティファールと寸分違わぬように見える。

「彼らは何の為に、遥か彼方の他国に赴くのでしょう。彼らにも家族はおります。先の戦いのように、負ければ国が亡びるということでもありますまいに」

＜確かにこの西方への派遣は政治の問題だ。しかし――――＞

「いえ、殿下、そうではないのです」

ルキーティは己の主君を見る。

その目には、この国を見詰め続けてきたが故の悲しみがあった。

「殿下のお考え、政府の思惑、わたしにも理解出来ない訳ではないのです。交易路を連邦に侵されれば、我が国は直接戦場で血を流すこと無く消耗しましょう。交易で家族を養っている者の中には、おそらく職を失う者も現れる筈。そう考えるなら、国益を守る殿下や政府の考えが間違っているということもございません。ですが……」

彼女は映像の一つ、若い水夫の妻との別離の光景を見た。

彼らは互いの身体を固く抱きしめ、涙さえ流している。状況次第では、この別れが今生の別れにもなると彼らは知っていた。

軍人の家族として、妻は笑顔で夫を見送りたかったであろう。だが、それを為すには余りにも若い妻で、夫もまたそんな妻を受け止めきるには若過ぎた。

だから、互いに悲しみの涙で別れを演じるしか無かった。他にも多くの見送り人が居る中で、そんな二人を嗜める者が周囲に居ないのは、二人の別れの姿が決して間違ったものではないからだろう。笑顔で見送ることも確かに間違いではないが、心からの涙で見送る

こともまた正しい人としての姿なのだとルキーティは思う。

「――――彼らは、政治の為に死ぬのでしょうか」

死ぬと決まった訳ではない。何の問題もなく、六ヶ月後の交代まで過ごすのかもしれない。

だが同時に、死ぬかもしれない。

南洋諸国の私掠船団に襲われるかもしれない。病気に罹るかもしれない。事故で命を落とすかもしれない。

もしかしたら、西方諸国との間で発生する海戦で死ぬかもしれない。

「可能性の問題です。ですが、無意味にその可能性を高めているのではないかと思うことがあるのです」

＜――――なるほど＞

小さなレクティファールはルキーティの顔を見上げ、ただ頷いてみせた。

彼の立場では、何を言っても言い訳にしかならない。国のため、ただその一言で無理やりルキーティを納得させるようなことを、彼

はしたくなかった。

他方ルキーティも、レクティファールがそんな想いを自分に向けているのだとすぐに気付いた。彼女は只の妖精ではなく、皇国を見守り続けた妖精だ。多くの総ての皇王をその目で見てきた彼女がレクティファール如きの感情に気付かない筈がない。

「――――失礼致しました、殿下」

＜構わない。良く言ってくれた＞

総てを見送り続けた彼女が見送ることに臆病になっているのだと、レクティファールは誰に言われずとも理解していた。

辛い立場なのだろうと想像することも出来た。彼の中には、彼女に見送られた者たちの記録が息衝いているのだ。

レクティファールはその記録に従い、小さな小さな皇国の長老に告げた。

＜彼らを見送ったら戻る。だがその前に、君の苦痛の万分の一でも理解出来るように努力しよう＞

「いえ……勿体無いお言葉です」

ルキーティが顔を伏せ、それを上げたときにはもう小さなレクティファールの姿は無かった。

彼女は大きく溜息を吐き、泣きそうな顔で笑う。

「――――まったく、あんなお人好しで生きていけるのかな。今までの面子もそうだけど、今度のは一際甘い気がするね。それに付き合うアタシも、大概甘いけど」

彼女が今も想い続ける初代皇王から現代まで、当代を除いた八人の皇王は総じてルキーティを大切に扱った。

それは彼女が皇国の歴史に根を張った政治的怪物だからではない。彼らはルキーティが、この国の“母”に近い存在であると知っていたからだ。

見詰め続け、見送り続け、見届け続け、そして今も見守り続ける。

小さな身体に多くの想いを背負う彼女を恐れることが出来た皇王はこれまでに当代皇王一人だけだ。千歳に倍するときを内包する“皇剣”を背負った皇王には、ルキーティが唯一の同族に思えたのかもしれない。

「ああもう、あんたがアタシに『あとは頼む』なんて言うから……死ねなかったじゃん」

妖精の寿命は長い。否、長いというよりも、寿命という概念が希薄であると言うべきだろうか。

半精霊の彼女らは、その気になれば無限に近いときを生きることも出来た。

「ま、でも、その内飽きたらそっちに逝くよ。――――妖精は飽きっぽいんだから、逝っても怒らないでよね」

彼女らが死ぬのは、この世に飽きたときと誰かに滅ぼされたときだけ。

生きることに飽き、生きる意志が無くなったとき、彼女たちは死ぬ。

骸さえ残さず、まるでその存在が夢であったかのように彼女たちは消える。

だが、彼女たちはそれで満足だった。

消えるまで生きていられたのなら、それは天寿を全うしたことと同じ。この世界に心残りの無い証明。

「よしっ」

ルキーティは、掛け声と共にひょいと机を乗り越えた。机の上に置いてあった数枚の書類が、風で揺れる。

「さてと、とりあえずはリリシアお嬢様の機嫌でも取ろうかな。あの殿下め、姫様たちに騎士学校の件隠してやがったし」

お陰で今日の後宮は大荒れの天気だ。

言わなくても大丈夫だろうと高を括ったのか、怖くて言い出せなかったのか。

どちらにしても良い迷惑だ。

彼女はぐんと背筋を伸ばすと、ふわりと天井近くまで浮かび上がった。

目指すは大時化の後宮。ちょっとした切っ掛けで籠城でも始めそうな巫女姫のご機嫌取りだ。

「ああ畜生、めんどくさいなっ！」

そう叫び、右手を振って表示窓を総て消すルキーティ。

勢い良く扉を閉めた彼女の部屋に残ったのは、今では誰も知らない少しだけ泣き虫だった頃の彼女の面影と、机の上に放置された『マルドゥクの武力政変に関するアルマダ帝国陣営からの干渉の可能

性』という題名の報告書だけだった。

グロリエ・デル・アルマダは、この日非常に不機嫌だった。

帝都に呼び戻された挙句、大した仕事もない閑職に追い遣られていたことも原因の一つだが、それはあくまでも原因のごく一部に過ぎない。このときの彼女の不機嫌の原因の大部分を占めるのは、今現在彼女がいる場所と、同じ卓を囲っている者たちだ。

「あら、どうしたのかしらグロリエ。エバエル産の紅茶はお気に召さなくて？」

「無理もない。グロリエは民草の好むような安価な紅茶の方が好みという話だから」

第一皇女イードヴィッグ大公パルイエット・ミディ・アルマダ。四〇近いとは思えぬ程若々しい姿だが、厚い化粧と何処か作り物じみた美貌が幼い頃に人形に感じた恐怖を想起させる。帝族の血を引く有力貴族の男を婿に迎えて大公家を興し、若い男を何人も愛人として侍らせているが、子を産んだことはない。

第二皇子ラドクルス大公ガルガイアン・ルドリア・アルマダ。眼鏡を掛けた痩身は、まるで何処かの田舎学校の教師を思わせる。しかしその実、若い頃は気に入った娘を拐かしては心身を破壊して捨てるということを繰り返しており、何度か父クセルクセス一〇世の勘気を被ったことがある。帝国五大公家の一つ、ラドクルス大公家の当主。

そして、あと一人。

「――――下らん。紅茶の味など分からずとも、国は治められる」

第四皇子マクステル大公バレストローラ・フェルド・アルマダ。姉や兄と同じように五大公家の一つ、マクステル家を率いる。

筋骨隆々とした体躯を軍装で包んだその姿はまるで歴戦の戦士のようだが、彼の本当の恐ろしさはその苛烈さと冷厳さを合わせ持った知謀にある。グロリエが帝都に呼び戻された一件は、この男が絵図を描いたと噂されており、その噂は彼が持つ軍内部への繋がりが、グロリエのそれよりも太く、深い場所まで伸びていることを示している。

「ふん、茶の一つも理解出来ぬ無教養者に文化の苗床である国が治められるものですか」

「文化は後の世に生まれるもの。今、我々の生きている時代の文化は、所詮過去の遺物よ。大きな口を叩きたいのなら、一〇〇年後まで生きていることだな」

「ちっ」

羽飾りの付いた扇で口元を隠してはいたが、パルイエットの舌打ちは三人にも良く聞こえていた。しかし、お互いそれを指摘するような無意味なことはしない。

彼らは知っている。兄弟姉妹らしく、何処か似通った風貌を持つ自分たちは各々を敵として看做す間柄だと。

「まあまあ、今日はグロリエの帰還祝い。少しは仲良くやりませんか、ねえパリィ姉上、バル」

子どもの頃の呼び名で二人を宥めるガルガイアンだが、その瞳にあるのは互いの主張をあっさりと露にする二人への侮蔑。水面に波一つ立てないまま行われる水面下での遣り取りこそもっとも優れた政治的攻防だと信じている彼には、二人の見せる戦いが何ともみっともなく見えた。

「くだらんと何度も言わせるな、ガルガイアン。所詮表に立つことも出来ぬ臆病者が」

だが、そんな彼の姿勢は武人然として物事の矢面に立つことを好むバレストローラには受け入れ難い。

そのため、兄の政治手法を『臆病者の戦い』と評して憚らなかった。

「ははは、酷いなぁバル。昔は可愛かったのに」

「――――昔か、それこそくだらぬ記憶だ」

出された茶にも、菓子にも手を触れず、バレストローラは腕を組んだまま石像のように動かない。動くのは、罅割れた唇と鮮血色の瞳のみ。

グロリエはそんな兄姉の舌戦に顔を顰めながら、自分がこの席に呼ばれた本当の理由を探っていた。

この場所――――帝都近傍、嘗ての皇太子ディトリアの屋敷に。

「ああ、そうだ……」

思案を巡らせる彼女に気付かぬ様子で、ガルガイアンが言葉を発した。

「グロリエ、兄上に会ったそうだね。兄上はご壮健であらせられたかい？」

やはりそうか――――グロリエはその一言で姉たちが何を考えているかすぐに看破した。

同時に姉たちがこの場所を選んだ理由も、すぐに理解する。

この屋敷は皇太子の持つ別邸の一つ。皇太子のみが使用を許される屋敷だ。

そして今、この屋敷にいるのは四人。

その四人だけがこの国の皇太子に、ひいては帝王に相応しいと彼らは言っているのだ。

帝都を落ち延びたディトリアではなく、未だ帝都に君臨する自分たちこそがその座に就くべきだと。

しかし、グロリエにとっては皇太子の地位など無意味だ。己の道を進んだ結果得るならば良いが、それを目的に道を歩むことをしようとは思わない。

「――――お元気そうだった。義姉上も、姪たちも」

グロリエは表情の一切を消したまま、ガルガイアンの問いに答えた。姉たちに表情という余計な情報を与えたくはなかった。それにこの姉たちを素直に兄姉と認める程、彼女は弱い女ではない。自分よりも優れた能力を持ち、それをより優れた心で扱う者こそ、兄や姉と呼ぶに相応しいと彼女は考えている。

ただ血統と見せ掛けの力に翻弄されるだけの愚物。グロリエの三人に対する評価はそれに尽きた。

同時に、グロリエに愚物と評された三人の自分以外に対する評価も、それと大きな差異はない。

自分以外を徹底的に貶めることが、相対的に自分の立場を高めることに繋がっていた。

「義姉……？　犬奴隷の間違いでしょう？」

ディトリアの妃リールを帝族と認めない者は多い。

獣人である彼女を奴隷と呼ぶ貴族も、そして帝族もグロリエは知っている。

その中の一人が、このパルイエットだ。

「獣人如きが王妃など、まさに天に唾棄する暴挙。さっさと捕らえて処刑したいくらいだわ」

「処刑など、怖いことを仰らぬようになさいませ姉上。何処で誰が聞いているとも知れませんよ」

ガルガイアンは柔和な笑みを浮かべ、パルイエットを窘める。

だが、その本心がパルイエットよりも余程リールに峻烈であることを、グロリエは知っていた。

この男は、妃として帝族に列する以前のリールを誘拐したことがある。

未だ皇太子であったディトリアが気に入った獣人を『味見』してみようと画策したのだが、このときばかりは本気になったディトリアに散々打ちのめされた。以降、ガルガイアンはディトリアに怨みを抱き、その大切な宝であるリールやマイセル、マティリエを害そうと何度か刺客を送っているらしい。

だが、その思惑の悉くがディトリアに防がれていると、この場に居る全員が知っていた。

「――――お前がそんなことを言うの、ガルガイアン？」

「言いますとも、ディトリア兄上には“恩”がございますのでね」

“恩”ではなく、“怨”の間違いだろうとグロリエは心の内で罵った。

リールはガルガイアンの放った刺客によって毒を受け、生死の縁を彷徨ったこともある。

敬愛する義姉をくだらない自尊心から害そうとしたガルガイアンを、グロリエは許そうとも思わない。

「そういえば、兄上の娘はもうすぐ南の蛮族に嫁ぐそうね。蛮族同士、お似合いだわ」

「――――兄上も良き縁組と喜んでいた」

「良き縁組？　ふん、何を考えているのやら……。獣は獣同士まぐわっていれば良いのよ」

「――っ！」

ぱきり、と小さな音がグロリエの手から発せられる。

自分でも制御出来ない怒りに拳を握りしめたグロリエだが、その強靭な筋肉の圧力に負け、特殊鋼材並みの強度を持つ骨が折れたの

だった。だがすぐに治癒が始まり、痛みが引いていく。当代最強の＜龍殺し＞の名は、伊達や酔狂ではない。

彼女はその痛みに冷静さを取り戻し、パルイエットを透明な目で見据えた。

紅蓮の如き怒りさえも、心の奥深くに沈めた表情。

それは、直情に支配されていた以前の彼女が浮かべることの出来なかった表情だ。

「人間とて獣には違い無い。なるほど、姉上の言う通りだな。姉上も最近はお盛んのようで」

「グロリエッ！　あんた……！」

パルイエットの歯軋りの音がグロリエの耳に届いた。

自分の屋敷に見目麗しい貴族子弟を連れ込み、毎夜の如く楽しむパルイエット。帝族とはその立場から奔放な性生活を送っていると思われがちだが、実際にはごく一部の帝族の趣味に過ぎない。グロリエは未だに男を知らないし、ディトリアはリールのみを愛している。バレストローラとて、その妃と寵姫以外には興味を示さなかった。

許されるから、そう振舞う。

これこそが、帝族の忌まわしき慣習であるとディトリアとグロリエは考える。

権利に目が眩むようになり、義務を忘れてしまうことこそが、為政者の最大の罪ではないか。

「せいぜい、足元を掬われぬようになさるがよろしかろう。最近姉上が気に入っているピグマー伯爵公子ですが、ガルガイアン兄上と仲の良い金貸しに大きな借金があるとか」

「なんですって!?」

パルイエットは椅子を蹴倒して立ち上がり、素知らぬ顔で紅茶を口に含んだ弟を睨み付けた。

「ガルガイアン、あんた一体何を企んでいるの!」

「これはこれは、姉上。グロリエの言を信じるので?」

「信じる理由なんて、今のあんたのその言葉で十分よ……!」

「ははは、なるほど、そういう考え方もありますか」

ガルガイアンは、自分を真っ赤に充血した目で睨め付ける姉を一目見、苦笑した。

「別に、姉上好みの男を見付けましたのでね。ちょっとした贈り物ですよ」

「手紙も添えずに贈り物？　はッ、所詮は下賤の女が産んだ子ね。礼儀も知らない」

「――――――――」

パルイエットの嘲りにガルガイアンの表情が失せる。

彼の母は、元々城に出入りしていた古物商の娘だ。偶然にもクセルクセス一〇世の目に留まり、貴族の養子となって後宮へと召し上げられた。

しかし、平民出身の女であるという理由で他の貴族出身の妃たちから陰湿な嫌がらせを受け、ガルガイアンを生んだ直後に自らの命を絶った。彼の父である帝王は、母の葬儀に姿を見せなかった。

「死者を愚弄するは小者のやることだ。自重しろ、パルイエット」

「バレストローラ……！　この下賤な血を引く兄を庇うのか？」

「庇う？　それこそ小者の勘繰りよ。死してものを言えぬようになった者を嘲弄するような者なら、理解出来ぬやもしれんがな」

「くっ」

パルイエットは衣裳の裾を整え、椅子に腰を下ろした。

忌々しいと今にも言わんばかりの表情を見て、グロリエは密かに嘆息する。

彼女が物心つく前から、この兄弟姉妹は互いを敵としていがみ合ってきた。帝王という至尊の座を巡って争い合う運命に翻弄され、まるで前世からの天敵であるかのようだ。

そんな場にこれ以上居たとて、気分を害するだけ――――そう結論付けた彼女は静かに立ち上がった。

「――――余は、そろそろ仕事に戻る」

おそらく姉たちは、自分がディトリアの元を訪ねた真意を問い質したかったのだろうが、別に特別な理由など無い。ただ、兄と義姉、甥と姪に会いに行っただけ。何を説明する必要があるだろう。勘違いをしているなら、させておけば良い。

帝位継承権を放棄した兄を未だに恐れる者たちを、グロリエは心の底から蔑んだ。

「そうだな、くだらぬ時間を過ごした」

グロリエに続き、バレストローラが席を立つ。

彼は兄姉を一顧だにせず、椅子の背に掛けておいた外套を羽織って部屋を出た。

グロリエは衣裳掛けに提げておいた外套を手に取ると、自分を睨み付ける姉と無関心を装って紅茶の入った磁碗を弄ぶ兄に小さく頭を下げ、足早に退出した。

暖房で暖められた部屋から出ると、廊下の冷たい空気が心地良く、彼女は少し大きく息を吸い込んだ。肺の中に入り込んだ空気が、あの部屋で自分の中に溜まった澱を洗い流していくようだった。

グロリエはようやくひと心地ついたと言わんばかりに肩を竦め、窓の外に視線を移した。

「――――また、白の季節が来るか」

窓から見える空は灰色に鈍く輝き、内に溜め込んだ雪を今にも地上にばら撒きそうに見えた。

彼女は雪が降り出す前に自分の屋敷に戻るべく、少し歩調を早めた。

レクティファールは、目の前の光景に溜息を吐いた。

彼の目の前には皇城と後宮を繋ぐ架空回廊に構築された応急防壁（バリケード）。その防壁は家具や室内戦に備えて倉庫に眠っていた鋼鉄製の楯で形作られ、彼の後宮への立ち入りを頑なに拒んでいた。

今朝までは普通に通れた筈なのだが、どうも昼間の間に籠城の意思決定が下されたようだ。

その防壁を守るように立ちながら、それでいて申し訳なさそうに自分を見る乙女騎士に気にするなと手を振り、彼は再び嘆息する。

「――――え～……と、要求は何でしょうね」

「さて、わたしには判りかねます。リリシア猊下は『わたくしもレ

クティファール様と一緒に騎士学校に行く！』等と駄々を捏ねておられましたが」

隣に立つルキーティの言葉は非常に冷たい。彼女は自分の部下でもある皇城勤務の近衛兵に椅子と卓を用意させ、長期戦の準備を着々と進めている。

後宮に妃が篭城するなど前代未聞だ。さらには篭城している場所が後宮であるため、こういった物事の専門家である衛視庁や軍に協力を求めることは出来ない。

一応、という形で皇城勤務の近衛将兵の中から女性ばかりを集めたが、彼女たちは困惑しきった表情で回廊の向こう半分を占拠している――少なくとも立場的には――特別護衛旅団の同僚と見詰め合っている。

「その内、向こうから要求を伝えてくるでしょう。向こう側にマリカーシェル准将が居れば、滅多なことにはならないと思いますよ」

「――――まあ、そうでしょうね」

「というか殿下、口調が平時のものになっておりますが」

「いえ、何かもう、真面目に仕事しているのが馬鹿らしくなってきて……」

日々仕事に勤しみ、疲れた心身を引き摺って帰ってきたら自宅で籠城事件である。やる気も一気に失せた。

ルキーティは「そうですか」と答えて卓に着き、近衛が淹れたお茶を啜りながらレクティファールに隣の椅子を勧めた。

レクティファールはがくりと椅子に崩れ落ちる。

「――――何故こんなことになっているのでしょうね」

「それは摂政としてのご質問で？」

「答えが貰えるならどちらでも」

「なるほど。――――では答えを一つお教えしましょう」

「ほう」

レクティファールは対して期待していない様子を隠そうともせず、相槌を打った。どうせ答えを教えられても理解出来ないと思っているようだ。

「簡単に言えば、姫様方を放ったらかしたからでしょうね」

ルキーティの言葉は明朗簡潔だったが、やはりレクティファールには理解出来ないらしく首を傾げるばかり。

「別に放置した記憶はありませんが」

「それは殿下の主観です。こう言ってなんですが、世間一般の新婚家庭や婚約者同士というものは、もっとこう、さながら人為的災害のように他人の迷惑も顧みずにべたべたとくっついたり、他人の目など気にも留めず乳繰り合ったりするものです」

「――――それは、結構極端な例ではなかろうかと」

「皇府は嘘を言いません」

「そうですか……」

レクティファールは近衛兵に礼を述べつつ、茶を一口。

ルキーティの説明に納得している様子は見えない。

「本当に嘘ではないのですよ、殿下。初代に始まり先代まで、どの皇王も政務と後宮生活の両立に苦労してきたのです。特に殿下は一時に纏めて正妃様、側妃様を迎えられます。順序というある種の序列が適用されないのですから、上手く立ち回らないと後ろからぶすりと刺されますよ」

「――――ちなみに今まで刺された人は……」

「おりません。良かったですね、初の快挙ですよ」

「それって快挙ではないですよね、確実に」

痴情の縺れをその原因とする殺傷事件はあとを絶たない。皇都でも三日に一度はそれに類する刑事事件が発生していた。

「男は女心を理解出来ませんし、女は男心を理解出来ません。出来るのは、推察することだけです」

「ふぅむ、つまり私は推察さえ出来ていないと」

「ええ、全くその通りです」

頷くルキーティと周囲の近衛将兵。

レクティファールは余りの居心地の悪さに、思わず咳払いした。

良く考えて見れば、今自分は女性たちに囲まれている。つまりは敵中孤立、四面楚歌。

自分の置かれている危機的状況を理解した彼は心中で叫んだ。

（――――誰でも良いから、大至急援軍を……！）

分が悪いどころの話ではない。

「ええと、その点に関しましては改善に向けて今後一層努力をする所存でありまして……」

レクティファールの額にじんわりと嫌な汗が滲む。

そんな彼の言い訳をばっさりと斬り捨てる女傑がここに一人。

「努力するだけでは女は幸せになれないのですよ、殿下」

「――――誠に仰る通りです……」

一撃必殺。

レクティファールは今度こそ立ち直ることなく、ぐったりと椅子に崩折れる。

ルキーティの言葉に心当たりがあったこともあり、その言葉は理屈や屁理屈といった防壁を容易く突破してきた。

努力だけで良い結果が得られるなら、きっと世界はとうの昔に滅んでいる。良いことも悪いことも均等に発生するからこそ、この世界は円滑に回っているのだ。

「ですがまあ、努力を怠ればすぐに女は気付きます。努力をして、その上で結果も出さないといけません」

「厳しいですね……」

「これを厳しいと思っていたら、結婚する前に姫様方に刺されますよ。勿論、死にはしないでしょうけれども」

「死なないなら問題ない、とは言えませんねぇ……その問題は」

「とりあえず、今回の姫様方の要求を聞いてみることでしょう。良い女というのは、その男が努力してようやく叶えられる最上級の要

求というものを知っているものです」

「ふぅむ、なるほど。――――しかし、向こうの要求がその条件に当て嵌らなかった場合は？」

レクティファールは腕を組み、唸る。

そしてふと思い付いたように問うた。

ルキーティはやれやれと頭を振り――――

「相手も要精進ということです。殿下が努力するばかりでは公平ではありませんから、それもよろしいでしょう」

しかし、横合いからの声にその発言を掻っ攫われた。

「――――」

面白くなさそうに眉を顰め、ルキーティはその脇に用箋綴を抱えた女将を見据える。

「マリカーシェル、君が来たか」

「はい殿下、このような事態になり誠に申し訳ありません。処分はあとで如何様にも」

「いや、後宮の外に事態が及んでいないのなら、それは内輪の話だ。処分など必要ない。誰も親兄弟夫婦の喧嘩で処分などすまい、度を過ぎない限りな」

卓の側に立ち、次いで膝を突いて深く頭を下げたマリカーシェル。だが、その姿を見たレクティファールは、ただ彼女の前に手を差し出し、そう言って笑うだけだ。

職務に関しては生真面目とさえ言えるマリカーシェルはその手を取ることを躊躇ったが、迷うように自分の手の上を泳ぐ彼女の手をレクティファールが捕まえると、諦めたように息を吐いた。

「苦労を掛けたな」

「仕事ですので」

「そうか」

「はい」

マリカーシェルの手を引くレクティファール。

二人は互いに曖昧な笑みを浮かべ、その心の内に小さな連帯感を抱いた。

「それで、彼女らは何と」

「は、こちらが姫様方からの要求です」

手渡される用箋綴。

留め金を外してみれば、中に六葉の封筒。それぞれ、別の封蝋で封じられており、それを見ればどの封筒が誰もののかすぐに分かるようになっていた。

リリシア、メリエラ、フェリエル、ファリエルはその立場から自分の紋章というものを許されており、封蝋の紋章もそれを一部簡略化したものを使用している。対してアリアとリーデは、離宮に上がったときにレクティファールから与えられた紋章を使用していた。

「ふむ」

六つの紋章を見比べるレクティファール。

彼は、どれから開けるべきか迷っていた。

どれを開ければ受ける衝撃が少ないか、じっと封筒を見詰める。

「――――殿下、お悩みならばこちらから開けては？」

レクティファールの額に浮かんだ汗に気付いたのか、マリカーシェルが一葉の封筒を示す。

マリエの花と十字星の封蝋。アリアの紋章だ。

「内輪のこととの仰せですし、誰から開けても良いというならこちらを先にするとよろしいかと」

「では、そうしよう」

「え、本当に良いのですか？」

思ったよりもあっさりと決断を下したレクティファールに、マリカーシェルの方が焦った。摂政を補佐することは彼女の役割だが、こんなにも簡単に決めてしまって良いものか。

しかれども、レクティファールは自分を納得させるように頷くばかりで翻意することはなかった。

「うむ、優柔不断で何が悪い。――――何をしても角が立つって、辛いのですよ」

「は、はあ……」

近衛兵が用意した紙切刀を手に取ると、レクティファールは封蝋を剥がして便箋を取り出す。

マリカーシェルが自分を見て呆れたような顔をしていることには、気付いていないということにした。

「さて、アリアは何を欲しがっているのか」

三つ折りの便箋を開くと、その中央辺りに品の良い文字が一文。

内容は――――

「『全身を、殿下の見立てた衣裳で飾りたい』」

「さすが、＜花の妃＞ですね。さして手間も掛けず、殿下も自分も満足出来る願いです」

ルキーティが感想を漏らした。

マリカーシェルも同意を示すように頷いている。

「ええと、これはつまり……」

「下着から装飾品の小物まで、殿下が総て選んでアリア様にお贈りするということです。殿下が良いというのなら、明日にでも腕の良い職人を城に上がらせましょう。後宮の職人も腕は良いですが、贈り物ならば外の店を使った方が良いと考えます」

ルキーティは皇王府と付き合いのある何軒かの店を脳裏に浮かべながら、ここで必要になる予算を計算する。弾き出された数字は、とりあえず側妃に投じる分には許容範囲であった。皇王府にとって、皇王或いは摂政の必要とする予算を用意出来ないというのは不名誉極まりない。特に、その妃や子に投じる予算には余裕を持たせてある。

「皇王府としては問題ないと」

「はい」

「では、そのように差配を」

「はい」

レクティファールは金庫番たるルキーティが問題ないと判断したことを受け、アリアの要求を受け容れる決断を下した。明日までに贈る品物の方向性をある程度定めておこうと心に決めながら。

次にレクティファールが選んだのは、三日月に十字星の紋章。

彼が贈った、リーデ・アーデンの紋章だ。

「さて、リーデは何と書いてあるのか」

先ほどと同じように便箋を開くと、隅の方に小さく、申し訳ないという彼女の心を表すかのような文字が一文。

「――――性格が出るな、これは」

「でしょうね」

ぽつりと漏らすレクティファールと、何を当たり前のことを言っているんだ、という風のルキーティ。

二人は便箋を覗き込み、内容を確認した。

「『最近、眼鏡の度が合わなくなってきたので、新しい眼鏡が欲しいです。――――それで、出来れば一緒に……』」

「ここで書くのをやめていますね。書き直さなかったのが、リーデ様のせめてもの我儘なのでしょう。――――如何致しますか？」

ルキーティに問われたレクティファールだが、彼はその便箋に残った書き損じの痕跡に意識を向けていた。どうやら前の便箋に別の願いを書き、それをやめてこちらを新たに書いたということか。

この痕跡が気になったレクティファールは光学処理で痕跡を洗い出し、その内容を把握した。

（『子どもが欲しい』――――うむ……）

リーデも、こればかりは確率の問題でどうにもならないと気付いたのだろう。それこそ“皇剣”の機能を使用すればほぼ確実に子を成すことも可能なのだろうが、それでは余りにも生まれる子に申し訳ない。

そして何よりも、書いてみてその恥ずかしさに耐えきれなくなったに違い無い。

「殿下？」

ここまで想ってもらえるなら答えは決まっているだろう、とレクティファールは自信を持って首肯する。彼とて、少しくらいは男としての見栄と矜持がある。女性にここまでやらせて断るなどという真似はしない。

「街に出る手配を頼む」

「はい」

ルキーティもレクティファールの答えを予期していたのか、特に反論もなく手近な近衛に白紙の命令書を持ってくるように命じた。摂政と側妃が街に出るには、例えお忍びでも護衛を付ける必要がある。見れば、マリカーシェルも同じように部下に耳打ちしていた。

ルキーティとマリカーシェルがそれぞれの仕事を始めたことを横目で確認しつつ、レクティファールは次の封筒に手を伸ばした。

十字星を刻んだ盾と翼持つ龍。盾の下に薬草らしきものがあしらわれているので、紅龍姫ファリエルの紋章だ。

「『図書館が欲しい』――――って、いきなり可愛く無くなった」

「――――なんだとぉっ！？」

レクティファールがぽろりと本音を呟いた瞬間、回廊の向こうから聞き覚えのある怒号が轟いた。

慌てて口を両手で塞ぐレクティファール。ルキーティとマリカーシェルが若干蔑むような目で彼を見る。

「な、何故に聞こえているのか」

「音の伝播を制御して遠隔地の音を拾う魔法は難しいものではありません。室内なら、風の影響も少ないです」

マリカーシェルがレクティファールの疑問に答える。

“皇剣”を漁ってみれば、なるほど似たような説明がそこかしこに散見された。

「――――で、可能なのか、これは」

しばしの沈黙のあと、無理やり話題の転換を図るレクティファール。

先程の失言はなかったことにしたらしい。

ルキーティは溜息を一つ吐くと、主君の問い掛けに答えた。

「後宮の文庫の使用許可を出しましょう。本来は皇王のみが入れる場所ですが、殿下のお許しがあれば可能です」

「危険はないのか」

「危険な書物は奥の禁書庫に納めてあります。そこまでの立ち入り許可はファリエル様も求めないでしょう」

「そうか、ではそのように頼む」

「はい」

再び命令書を書き始めるルキーティ。

マリカーシェルも慌しく部下に指示を出す。皇王や皇太子以外が文庫に立ち入ることで、警備に関して色々変更するべき点があるのだろう。

「次は……」

ファリエルのものと良く似た紋章。だが、盾の下には蛇が絡まっている。毒蛇の毒は薬にもなることからフェリエルが好んで紋章に含めたとレクティファールは聞いている。

「『後宮内に研究室が欲しい。出来れば爆発に耐えられるような丈夫なもの』」

いきなり危険度が跳ね上がった。

「――――離れの一つを改装すれば、何とか……」

「け、警備はどうしましょうか」

「近くに退避壕を作っておきなさい」

「はい……」

流石に爆発などと言われてはルキーティもマリカーシェルも冷静では居られない。

二人でこそこそと言葉を交わし、レクティファールに揃って頷いてみせた。

「大丈夫なのか」

「はい」

これも同時。

そんな二人に圧倒されつつも、レクティファールは「ならば、そのように」と命令を下した。

ルキーティとマリカーシェル。二人の仕事量が加速度的に増えていく中、レクティファールは続けて別の封筒を手に取った。

紋章は、十字星の盾を支える龍と水精湖に咲く水精花。レクティファールにとっては見慣れた、メリエラの紋章だ。

「『一日一緒』」

短いながらも、妙に力強く大きな字で書かれたその要求に、三人はしばし硬直した。

何と言えば良いのか、互いの顔を見る。

それでも誰も何も言わない。

やがてレクティファールが諦めたように、ルキーティに訊いた。

「――――可能か」

「――――はい」

「――――そうか、じゃあ頼む」

「――――はい」

疲れた顔を互いに晒しながら、二人は最後の一葉に意識を向ける。

十字星ただそれだけの紋章は、リリシアのそれである。

「では……」

封書を開こうとする手が震えるのは、危険だと警鐘を鳴らす本能のせいか。

レクティファールは何とか震える手を抑え付け、ルキーティ、マリカーシェル、そして周囲の近衛たちが注目する中で便箋を開いた。

「『一緒に騎士学校に行きたいです』」

結局これか。

その場にいた全員の気持ちが一つになった。

もう何度も駄目だと言われている筈なのに、諦めないその姿勢はある種敬意に値する。

だが、どうやっても無理なものは無理なのだ。

摂政と巫女姫が双方とも城を空けるなど、実務的にも心情的にも許されることではない。

「却下だな」

レクティファールが便箋を折りたたんで封筒に仕舞う。

「却下ですね」

ルキーティが命令書の執筆に戻る。

「却下が妥当と考えます」

マリカーシェルは部下たちに新たな命令を次々と発していく。

そして――――

「何ですか!?　どうしてですか!?　最近ないがしろにされています!　抗議します!　あの唐変木様に厳重抗議です!　――――って皆さん、放してください!　今日という今日はレクティファール様に一言言ってやらねば気が済みません!　あ、メリエラさん、自分はお願い聞いてもらえたからって何ですかその勝ち誇った顔!　いいです!　いいですよ!　その勝負受けて立ちます!　そんな大きくも小さくもない中途半端な胸張られたって、悔しくないんですからね!　とりあえずどっちが先にレクティファール様のこ――――いたっ!　何するんですか!　あ、可哀想な胸って言うなぁああ!」

どったんばったんと回廊の向こうから聞こえてくる破壊音。

どうやら何処かの巫女姫様が暴れ、その他の妃様たちがそれを押さえ付けているらしい。

三人はその騒動の発生源の方向に一瞥だけくれると、すぐに自分たちの仕事に戻った。

今日の星天宮は、まさに平和そのものである。

第十一話「彼の想い人＋彼の想い＝彼の本気」

誰を恨むべきか、レクティファールはその蒼い髪を掻きながら天を仰いだ。

皇都の喧騒は心地良く、空から降り注ぐ日差しは束の間の春のよう。しかし、彼の心中は曇天である。

「さぁレクト様！　まずは三三番街に参りましょう。今日は広場で市場が開かれていると侍女の方が教えてくれました！」

「ちょっと待ちなさい、市場なんて人通りの多いところに行ったら、わたしたちはともかくあなたは迷子になるでしょう。ここは五番街の人形通りで――――」

「あの、リリ様、メリア様、レクト様が困っておられます」

自分の手を引いて今すぐにでも何処かに飛んでいきそうなリリシア。偽名は『リリ』で、商家の末娘という設定。髪型を変え、つばの広い狩猟帽で印象を変えているため、周囲の誰も彼女がこの国の次期第一妃だとは気付いていないようだ。

そんなリリシアとは逆の腕をしっかりと抱え込み、三三番街とは逆の方向に進もうとするメリエラ。偽名はメリア、リンドヴルム公爵家に連なる小貴族の令嬢であり、両親同士の繋がりからリリとは幼馴染ということになっている。色こそ変えていないが、髪を馬の尻尾のように一つに纏め、さらに眼鏡を掛けることで人々の持つ『白龍姫』の印象からは大きく遠ざかっている。

そして最後の一人、レクティファールの背後から二人を止めようと必死になっているリーデ。二人のように積極的に容姿を変えることはせず、ただ軍装を普段着に着替えただけだ。もっともそこは『軍装の側妃』という印象が強いリーデ。普段着であることが一番の変装になっている。設定としては、ハルベルン家と長い付き合いのある軍人の娘で、士族としての生活に不慣れな『レクト』の教育係。

ちなみにレクティファールは、いつもの如く『レクト・ハルベルン』の姿である。ハルベルン家は名の通った士族であり、自身も陸軍中尉――先の国境戦の功績で昇進したことになっている――の肩書きを持っているので、万が一何か起きたときには適度に動きやすく、誤魔化しやすいと皇王府が判断したようだ。

「――――ふ……」

動きやすい、はて、何処がであろうか。

両手は姫君二人にしっかりと確保され、気安く動けるような状況ではない。周囲に目を向けてみれば、可憐な二人の女性を侍らせているレクティファールに刺々しい視線を向けるそこかしこの男共。彼らの目には、何処かの貴族の放蕩息子が愛妾を連れて街に遊びに来

たように見えているのではないか。

たとえそれがレクティファールの被害妄想だとしても、四人が目立っていることに変わりはない。

今四人が居る場所は星天宮前の広場で、地方や諸外国からの観光客も多かった。さらにはその観光客を相手にする屋台などもひしめいており、皇都の住人もまた、地元の憩いの場の一つとしてこの広場を認識している。

そんな広場の一角で、四人は延々と騒いでいるのである。

（そもそも、何故“四人”なのだろうか？　一人ずつなら、こんな大騒ぎする必要もなかっただろうに）

レクティファールは伸び始めたリリシア側の袖を気にしながら、現実から逃避するために思考に没頭する。

とはいえ、没頭するまでもなく答えは明々白々。単に、レクティファールの予定が一日しか空けられなかっただけだ。

騎士学校への編入を間近に控え、政府や皇王府、軍との合議はその頻度を増している。話し合いそのものの時間も伸び、後宮や離宮に戻らない日もある。ただ、そうなると姫君たちの機嫌が恐ろしいことになるので、翌朝の朝食は後宮で摂るようにしていた。

深夜まで皇城に残る日もあれば、泊まり掛けで視察に赴くことも、更に行啓という形で遠方まで足を延ばしては近衛軍の飛龍で夜通し

の帰還。そしてその翌日は早朝から列車で移動などという日程も珍しくない。

（――――改めて考えると、なんて恐ろしい……）

＜皇剣＞の助けがなければ、とうの昔に過労死していただろう。

（いや待て、＜皇剣＞が無ければこんな無茶をすることもなかったのではなかろうか）

ぐるぐると円を描いて、己の存在意義に関する疑問が思考領域に展開される。

第三級思考二四〇本を使用したレクティファールは二秒ほど黙考し、結果、答えに意味を見出せないということで思考を打ち切った。既に彼は＜皇剣＞であり、今更＜皇剣＞ではないという仮定は意味を成さない。

その代わりに、昨夜の自分を一頻り罵る。

（一日しか時間が取れないなら、全員纏めてで良いじゃないかなんて、本当に昨日の自分って馬鹿ですよねぇ……）

メリエラの、一日一緒。

リーデの、新しい眼鏡。

そしてリリシアとの交渉と妥協の産物、一緒に何処かに行く。

時間がないからと三つ纏めてこなそうとしたツケが、今の状況である。後悔してもしきれない。

今朝など、意気揚々とレクティファールの前に現れた三人が、待ち合わせの場所にお互いを見付けて浮かべた表情と言ったら――――筆舌に尽くし難い。

三人の護衛を担当する近衛たちは皇国最精鋭とは思えぬほど怯えた顔を見せ、たまたまその場に通りかかった別の近衛侍女は奇声を発して逃亡した。

別段、怒っていたとか、不機嫌そうだったということではない。

三人が三人とも、底冷えのする無表情を浮かべていただけ――――否、何も表情が現れていなかっただけだ。だというのに、三人の纏う雰囲気の恐ろしさは歴戦の近衛さえ怯えさせる。

（――――人生の墓場、大いに結構）

墓場に居るなら、何処で死んでも問題ないということ。レクティファールは無理やり自分を説き伏せ、三人を連れて街に繰り出した。

若干後悔していることは、幸い三人に悟られずに済んだようだ。

しかしこれが家族の団欒であるなら、いつまでも怯えている訳にもいかない。

彼は意を決し、最初の目的地を告げた。

「とりあえず、リーデの眼鏡から行きましょうか」

残り二人はこれといった目的がない。

最初に明確な目標を攻略するのは、彼の性分かもしれなかった。

彼の言葉にリリシアとメリエラが渋々頷き、背後のリーデが戸惑いを見せる。最初に自分の頼みを聞くとは思っていなかったのか、彼女の動揺は激しかった。

「あの、殿下、わたしの眼鏡など後日でも。後日でなくとも、お二人の用事の合間で構いませんので……」

「いいえ、度が合っていない眼鏡は危険です。完成するまで何日か掛かるでしょうし、少しでも早い方が良いでしょう」

リーデの眼鏡はメリエラの変装道具のそれとは違い、生活の必需品だ。優先順位は高い。

レクティファールのそんな意見にリーデ以外の二人も同意したの

か、揃って両手を解放した。

「そうですよ、リーデ殿ももっと早く言ってくだされば良かったのです」

「眼鏡というと、十二番街の宝石通りに良い職人がいるわね。公爵家の御用職人も店を構えているし、良かったら紹介するわ」

「あ、え、は、はい、ありがとうございます」

レクティファールを放り出した二人は、今度はリーデの手を引く。

広場前には乗合魔動車の乗換施設があり、そこで乗合魔動車に乗るつもりらしい。リリシアは乗合魔動車というものを知らなかったが、メリエラは騎士学校時代に良く利用していたそうだ。レクティファールは姦しい三人の会話を聞きながら、今月の交際費が幾らになるか計算し始めた。

宝石通りという通称は、装飾品などの店が多く軒を並べることから付いたものだ。この皇都には同じ通称の通りが三つあるが、十二番街の宝石通りといえば高級店や老舗が並ぶことで知られている。

大貴族用達の店も多く、この界隈で買物をすることはある種の社会的地位の証明であった。

とはいえ、ごく普通の平民であっても婚約指輪や結婚指輪など、人生の節目節目で使用される大切な装飾品に関してはこの十二番街の宝石通りで買い求めることが多く、近寄り難いということは無かった。

リンドヴルム公爵家用達の装身具店は、そんな十二番街宝石通りの片隅に小さく店を構えていた。

「いらっしゃい、初めてのお客様――――じゃないわね」

お忍びかしら、と言って微笑む店員の女性。人間種であれば六〇を越えた辺りだろうか、品の良い笑い方は客に安心感を抱かせる。給仕服に似た衣裳を纏った店子が三名、その背後に控えていた。他に客の姿はない。

得意客であるメリエラは変装していても一目見てその正体に気付いたようだが、彼女の連れであるレクティファールやリリシア、リーデの正体に関してそれを確認しようという意思は無いようだ。特に、既に後宮入りしているメリエラが連れて歩く男などごく限られ

た者だけ、正体をわざわざ問う必要もないと判断したのかもしれない。

彼女はレクティファールに微笑みかけると、メリエラたちに一通り視線を巡らせて口を開いた。

「大切な女性への贈り物ですか？」

「ええ、彼女に新しい眼鏡を、と思いまして」

レクティファールはそう言い、リーデを示す。店員の女性は一つ頷いてみせると、容姿からエルフらしいと推察できる一人の店子に、視力を測定し、さらに幾つか眼鏡の見本を持ってくるように命じた。その際幾つか名前を出していることから察すると、既にある程度の候補が挙がっているようだ。

「他のお嬢様方には何か贈られますか？」

「――――ふむ」

レクティファールは女性の言葉に考え込む。

折角ここまで足を伸ばしたのなら、メリエラとリリシアに何か贈るもの良いかもしれない。

勿論、彼女たちに何か贈るならば後宮にいる残りの姫君たちにも贈り物をしなくてはならないが。

「何かありますか」

「そうですね、同じ意匠を使い、別の宝玉で仕上げた首飾りなどは如何でしょう。小さく質素なものですが、その分どんな衣裳にも合いますし、必要以上の自己主張も致しません」

女性はそう説明しながら、レクティファールを首飾りの並ぶ一角に案内する。

硝子の商品棚に陳列された首飾りは、何れも値札に類するものが無かった。

「こちらです」

それらの品々の中で彼女が示したのは、まるで虹のように色合いを変化させる十二の首飾り。

どれも小振りだが、その分細かいところまで手が入れられていて見れば見るほど新たな発見がある。

「どの石も、店主が自ら足を運び手に入れたものです。この十二本の中に、他に劣るものは一つとして存在しません」

「なるほど」

レクティファールが＜皇剣＞の解析機能を使用して見れば、これらの首飾りが希少な宝石を使用したものだということはすぐに分かった。中には加工の難しい石も含まれており、この店がリンドヴルム公爵家の用達だということに疑問の余地はない。

女性は薄い手袋を着けると、極々薄い青色の光を内包した無色に近い首飾りを取り出してレクティファールに差し示した。

「これなど、あすこにおわす銀髪のお嬢様に良くお似合いかと。舞踏会などでも清楚な衣裳を好まれるのでしょうから、余り強いものは避けた方がよろしいでしょうね」

「うん」

確かに、メリエラは余り派手な衣裳は好まない。

元々の印象が月のような女性なので、レクティファールとしては非常に本意だった。

「もう一人の可愛らしいお嬢様には、こちらの色がお似合いかと」

先程の首飾りを棚の上の底浅の箱に置き、女性は別の首飾りを取り出した。

宝石の色は輝く翠。

新緑の持つ、独特の生命力を封じたかのような石だ。

「鎖の長さを調節すれば、身の丈や体型が変わっても困ることはありませんし、色々な衣裳に合わせ易くなります。色も先程のものより強いですから、あのお嬢様の活発な印象には合うのではないでしょうか」

レクティファールは女性の説明に相槌を打ちながら、この首飾りを着けた二人を想像してみる。

件の二人といえば、店子の一人を捕まえて色々試着している最中らしく、レクティファールに意識を向けている素振りはない。ただ、素振りを見せないだけで内心レクティファールの行動に強い興味を示していることは間違いないだろう。

彼は美しい細工の指輪を嵌めて陶然としているリリシアとそれを見て苦笑しているメリエラに目を向け、さらに店の奥で視力測定を行っているリーデを思い浮かべて小さく頷いた。

脳裏には、彼の“家”にいる女性たちの姿も映し出されている。

「――――頂きましょう」

こんな特別でも何でもない贈り物で良いのか迷う部分も多くあるが、少しでも相手に自分の気持ちが伝わるならそう悪い買い物ではない。

物を一つの手段として考えるなら、どんな贈り物でもそれは意味を持つ。相手に自分の感情を伝える一助になるなら、無意味ではないのだ。

「どちらにお送りすればよろしいですか？」

女性はレクティファールの内心を知ってか知らずか、先程よりも笑みを深めて訊ねる。

レクティファールは近くに置いてあった用箋束にハルベルン家の住所を書き付け、それを手渡した。

「こちらにお願いします」

「かしこまりました。お客様のお名前も頂いてよろしいでしょうか」

「レクト。レクト・ハルベルン」

女性はレクトの名を用箋に記すと、「皇都内ですので、本日中にお届けいたします」と請け負った。

ハルベルン家には既に連絡を入れておいたから、特に混乱することもないだろう。

「あの、レクト様、良かったら選んで頂けますか」

店の奥からレクティファールを呼ぶリーデの声。

視力測定が済み、眼鏡そのものを選んでいるようだ。

レクティファールは女性に先導され、応接室らしき部屋に入った。

黒光りする卓の上には、六つほどの見本の眼鏡。そのどれもが手の込んだ芸術品と呼んで差し支えのないもので、リーデはその卓を前に困惑そのものの表情で座っていた。彼女は部屋に入ったレクティファールを見ると、ほっと安堵の吐息を漏らした。

レクティファールはそれに気付き、曖昧な笑みを見せた。そのまま特に何も言わずに彼女の隣に腰を下ろし、見本を一つ一つ確認していく。

「リーデはどれが良いのですか」

「わたしは、これなど良いと思っているのですが……」

リーデは、見本の中の一つを指した。

黒く細い縁を持つその眼鏡は、普段リーデが掛けているものと大きな差はない。ただ――――

「――――実は、一番、その……」

「高いと」

「はい……」

リーデの性格から、一番高い物が欲しいとは言えなかったのだろう。レクティファールの意見が聞きたいというのも嘘ではないだろうが、勝手に決めることが出来なかったということだろうか。

「あ、でもわたしが自分で買えばいいだけですので、レクト様がこれで良いと仰るなら……」

「いや、眼鏡はこれで良いと思いますが」

そう言ってレクティファールはリーデの顔から眼鏡を外すと、見本の眼鏡を代わりに掛ける。レクティファールの指が肌に触れると、彼女の身体が小さく震えた。

度が入っていないこともあって、リーデからはレクティファールの表情が良く見えない。それでもじっと見詰められ、きっと今の自分は顔を赤らめているのだろうと確信しつつ、リーデは想い人が納得するまで顔を伏せずに堪えた。

「うん、これで良いじゃないですか」

そう聞こえた瞬間、リーデは顔を伏せて眼鏡を交換した。

彼女自身、この程度のことで恥ずかしがること自体がおかしいのだと理解しているが、周囲に人が居る中でじっと見詰められるというのはどうしても恥ずかしい。

年下の想い人に徹底的に振り回されていることを自覚しつつ、彼女は聞こえてきたレクティファールの言葉に面食らった。

「じゃあ、さっきの品物と同じ場所に届けてください。支払いも同じように」

「れ、レクト様！　わたしは自分で……」

「――？　何を言っているのですか」

慌てるリーデに対し、レクティファールは何処までも冷静。その冷静さがいっそ腹立たしいと彼女は密かに思った。

「一応ですが、私にも若干の意地と見栄があるのです。その点、一つご考慮ください」

正式な立場ではないが、二人の関係は夫婦のそれに限りなく近い。それ故に、レクティファールにとって多少散財することになっても絶対に退けない一線というものは間違いなく存在する。

＜皇剣＞を中核に据えた彼の思考は常人のものより機械的だが、感情については人と大きな差はない。近くにいる女性が綺麗なら嬉しいし、自分の贈り物がそこに華を添えるならなお良い。

自尊心を満たすための稚拙な行動だと自覚している。だが、やめるつもりは毛頭ないし、度が過ぎれば誰かが止めるだろうと思っていた。

「ということですので、よろしくお願いします」

「はい、承りました」

「ああっ！？」

伝票を纏め、そそくさと退室する店員の女性。

店子がお茶を出してくれたが、リーデはそれに気付くことさえ出来なかった。

対してレクティファールは一仕事終えたかのように満足気な表情でお茶を飲み、請求書に記載されるであろう金額についてルキーティへの言い訳を考え始めるのだった。

十二番街宝石通りをあとにした四人は手近な店で昼食を摂り、皇都観光に繰り出すことになった。

これは余り皇都に馴染みの無いリリシアとレクティファールの為であり、同時にメリエラが憧れる男女の付き合いを現実化したものでもある。

メリエラは白龍宮で過ごした時間も多いが、騎士学校は皇都近傍の別の島にある。休日は皇都で学友たちと遊び回ったものだ。同じく騎士学校の卒業生でもあるリーデは皇都の生まれであるし、自然とこの二人が案内役を務めることになった。

「――――皇都外環線という路線は、実際には陸軍の誇る装甲列車＜メガセリウム＞を運用する為に敷設されたものです。ぐるりと皇都を回る環状線なのは、東西南北どの方向、どの位置にも＜メガセリウム＞を展開出来るように……」

「ほうほう……」

皇都外環線に乗って港の方に向かう途中、四人掛けの座席に座ったレクティファールたちはリーデの観光案内に耳を傾けていた。その内容は軍事関係に明るく、そちら方面の趣味を持つ者たちには好評なのだろうが、実務的にそれらを知る必要のあるレクティファール以外の二人には余り受けが良くない。

「リリ、はいお茶」

「ありがとうございます、メリアさん」

「あ、あそこで催し物やってる」

「え、何処ですか？」

「ほら、一〇四番街の広場。あの辺りは精霊種の住人が多いから、そっちのお祭りかしら」

リリシアがじっと目を凝らしてみれば、広場では妖精やエルフの住人が祭壇を囲って盛り上がっている様子だった。彼らにとっては自然そのものが信仰対象であり、その自然の一部として自分たちが生活しているという概念が定着している。その為、こうして季節が変わる頃には祭事を催し、日々自然から与えられる恵みに感謝しているのだ。

多くの民が暮らす皇都であっても、その近くには多くの自然が残っているし、湖の恵みもある。海に通じる大運河から海の恵みも齎され、彼らが自然の恩恵を感じる機会は多い。

「騎士学校時代にはああいうお祭りにも参加したわ。同窓にはエルフの子もいたし」

「へえ、わたくしも行ってみたいです」

「時間が取れたら行ってみるのもいいかも。リリは精霊系の混血種だから、きっと楽しいと思う」

「そのときは一緒に行ってくれますか？」

「そうね、今度は皆で行くっていうのはどう？　レクトに死に物狂いで仕事片付けてもらって」

「いいですね！　楽しみにしています」

ぱちん、と手を叩いて歓びを表すリリシア。

メリエラの台詞の中に不穏当な一言があったことに気付いて二人に視線を向けたレクティファールだが、リリシアの嬉しそうな顔を見せられては何も言えない。元々彼にとってリリシアは妹に近い存在だから、世間一般で問題ないと判断される我儘くらいは叶えてやりたいと思う。

その代償が自分に降り掛かる類のものだとしても、仕方が無い。自分の手の届く範囲で収まるなら、多少無理をするのも良いだろう。

巻き添えを食う形の秘書官たちには悪いと思うが、仕事が早く片付くに越したことはない。

「レクト様、どうかなさいましたか？」

レクティファールの意識が自分に向いていないことに気付いたら

しいリーデが、説明を止めて彼を見る。何か起きたのだろうか、と僅かに緊張を見せていた。

「いいえ、明日からまた忙しくなるなと思いまして」

「無理はなさらないようにして下さい。――――何か食べたいものでもあれば、作って待ってますので……」

「ありがとう。何か考えておきます」

「はい……」

リーデはレクティファールの答えに満足したのか、車窓から見える皇都の街並みに目を向ける。城壁のすぐ外側を走っていた列車は、いつの間にか街の上を通る高架を走っていた。そのせいで見える風景は変わり、その中に目的地であるイクシード港を認め、彼女は三人を振り返った。

「もうすぐ港に程近い駅に着きます。降りる準備を致しましょう」

「はい！」

元気よく右手を挙げてリリシアが答え、残りの二人はリリシアの様子に苦笑しつつも各々手荷物の確認を始める。

見れば他の客も下車の準備を始めており、四人は目立たずに下車することが出来そうだ。

「忘れ物はありませんね？」

リーデの声に、三人は揃って答えた。

イクシード港といえば、軍港と交易港の二つの区画を持っている。

一般人が立ち入れるのは交易港の部分だけで、軍港区画は催し物の一環として一般公開されているとき以外はほぼ完全に閉鎖されていた。

四人が降りたのはそんな軍港区画を眼下に見下ろす駅で、ここからは歩いて港に向かうことになっている。

「あちらの道を進むと、軍管理区域に向かうことになります。今日は一般公開の日ではないので、この駅を利用するのは軍の関係者かその家族、もしくは軍施設を相手に商売をしている者たちだけでしょう」

閑散とまでは言わないまでも、同じ列車から降りた者を除けば、駅に余り利用客は居なかった。ただ、平日の午後ともなればこんなものなのかもしれないと考えたのは、レクティファールとメリエラだ。

もう一つ先の駅ならば、港を利用する者たちで賑わっているのだろうが、余り人が多いと警護がやり難い。特に港という不特定多数の者が利用する施設ともなると、何処に不逞の輩が潜んでいるとも限らない。

「そうね。でも、ここから先は色々見て回る場所もあるし、歩いて行くのも良いと思うわ」

それらの事情を察したメリエラがリーデに同意した。

護衛される側の立場を良く心得ている彼女としては、不用意に危険に近付かないことが一番だと知っている。

レクティファールやメリエラ、リーデもそこらの暴漢などに遅れは取らない。レクティファールやメリエラに至っては、それこそし

っかりと訓練を積んだ正規軍を連れてこなければ相手になるまい。

尤も、レクティファールが本気になったとき、それを相手に勝負を成立させるには帝国の戦狂姫やシェルミアの国王、或いはイズモに住まうという神々の何柱かは必要になるだろう。四騎の龍公爵を連れてくるのも良いかもしれない。

「ここから先は他国の者も多く、中には法を法とも思わない無頼の輩も居ります。リリ様、レクト様、くれぐれもお気を付けて」

「分かりました！」

「うん」

一応注意はするものの、リーデもメリエラもそれ程心配はしていない。

彼らの進む先には護衛の者たちが先回りして安全を確保する手筈になっていたし、レクティファールが摂政の座に就いてからは犯罪の発生数も激減している。それでも注意を喚起したのは、余り護衛を過信して勝手な行動を取らないようにというリーデの考えからだ。

リリシアはそれなりに護衛に慣れているだろうが、レクティファールと出掛けることが出来て些か浮かれている。今までのように冷静な判断が出来ているか、不安な面があった。

「では、軽く何か食べながら港に向かいましょう。港には大きな市場がありますので、そこでお土産を買うのも良いかと」

「お土産……姉さんにも何か……」

リリシアはレクティファールの手をそれと無く握りながら、聖都に暮らす姉への土産を考え始める。

メリエラがリリシアの行動に一瞬眉を跳ね上げたが、すぐに反対側の腕に自分のそれを絡める。ついでに身体を寄せ、レクティファールが歩き難そうに顔を曇らせることにも気付かない振りをした。

「――――リーデ、行きましょうか」

長く居ると、また目立ってしまう。

レクティファールの切実な願いに答え、小さく苦笑したリーデは三人を先導し始めた。

実際には、まずは、そこらの店で軽く食べられる甘味でも買おう。そうすれば、二人の姫君の意識も分散される筈、上手く立ち回ればもっとレクティファールに近付く機会を得られるかもしれない。晩ご飯の約束も取り付けたし、今でも頼りにされていると分かるが、あと少し得点を重ねたいところ――――等と、リーデの参謀としての頭脳が決して他人には明かせない計算を始めていたのだが、一人

の幸運な男はそれに気付かずに済んだ。

もしかしたら、彼の幸運とは、今回のように彼自身が気付かぬところで顕れているのかもしれない。

「レクト様、一緒にお土産選びましょうね」

「レクト、父上にお酒を買おうと思うの。試飲してくれる？」

「――――――――――はい、喜んで」

だが、人とは幸運よりも不幸の方が目に付く生き物なのであるが。

彼らはイクシード港の片隅に根城を構えていた。

つい先頃崩御した当代皇王に傭兵団として雇われていた彼らは、あの皇都奪還戦で殆どの仲間を失い、さらにはそれまでの悪行が暴

かれて皇国やその友好国に指名手配される立場にあった。

そんな彼らが未だ皇都に留まっているのは、下手に動くよりも人々からあの奪還戦の記憶が薄れるまで皇都に留まる方が安全である、という論理的な考えからではない。戦いの混乱に乗じて火事場泥棒よろしく逃亡資金を盗んでいる間に逃げる機を逸してしまったのだ。

彼らが気付いたときにはもう、衛視隊に顔写真が配られ、港や駅に懸賞金付きの張り紙が掲示される始末。陸路で逃げようとしても皇都は島都であり、常に衛視がその目を光らせている橋を渡らねばならず、水路を使おうにも船を雇う金子がない。いっそ船を強奪しようとも考えたが、すぐ隣の軍港に皇都防衛艦隊の一部艦艇が停泊しているのを見れば、その気も失せてしまった。皇都防衛艦隊の本隊は湖の別の島に停泊しているが、もし騒ぎが広がれば戦龍母艦から飛竜が飛んでくるだろう。とても逃げ切れるものではない。

それらの事情が重なった結果、彼らは港の打ち捨てられた倉庫を勝手に借り受け、ときに日雇いの仕事をこなし、ときに盗みをして日々の糧を得ていた。

奪還戦からもう八ヶ月が過ぎ、そろそろ彼らの緊張感も途切れ始めていたのかもしれない。

「――――お、いい女」

港で夜中から朝に掛けて荷役をしていたその男は、猛烈な眠気に襲われる中、仲間たちと共に住処に向けて歩いているところだった。

嘗ては傭兵団の一部隊を任せられ、この港から色々な“荷物”を送り出していた彼だが、今となっては仲間内で作った零細荷役業者の元締めだ。元締めといっても部下たちと共に汗を掻き、それ故に傭兵団の潰れた今も彼らを纏めることが出来ている。奪還戦のあとも、懸賞金目当てに手下たちを売って自分だけ助かろうなどと考えない点は、彼が根の部分でそれなりの義侠心を持ち合わせていることの証明だろうか。

「どうしたんすか、兄貴」

部下の一人が彼に声を掛ける。

仕事上がりに一杯引っ掛けてきただけあって、その顔には酔っ払い独特の光沢があった。

「おう、ほらあれ、いい女だろう？」

そう言って彼が顎で示したのは、一人の男と二人の女、そして一人の少女だった。

少女と女の一人が男の腕に絡み付いているところを見ると、どうやら良いところの坊ちゃんが平日の昼間から女連れで遊び歩いているようだ。男の背後に控える女は、見たところ同業――――いや本業だろう。身ごなしが軍人のそれだ。

「貴族の坊ちゃんが、女連れで……羨ましいもんだねェ」

彼は無精髭の生えた顎を擦り、女を順に品定めしていく。

男にくっついている女は少女と言っても良いくらい若く、その白い肌と銀髪が女日照りの彼らには生唾を飲むほどに美しく見える。顔もそこらの娼婦とは比べ物にならないほど整っており、もしもあれが何処かの店で働いているというなら、毎日通っても良いとさえ思えた。

そして男の背後の女。余り目立った容姿ではないが、身体は女性らしい曲線を描き、それでいて軍人らしく無駄な肉が一切無い。だというのに、一目見るだけでその身体がいい具合に熟し始めていると分かるし、あの凛とした立ち居振る舞いを乱れさせたいと思うのは男として真っ当な欲望だ。

残るは男の腕に纏わり付いている少女だが、これも趣味がそちら方面であれば垂涎の品だろう。あの清らかな雰囲気は、あの時分の女にしか存在しない。もしも彼女があの男の情婦だとしても、まだ手を出しておらず、食べ頃を待っているのだろう。

「ちっ、人が汗水垂らして働いてるってのに、いい気なもんだ」

別の部下が唾を吐き捨て、貴族の男に憎悪の篭った視線を向ける。

皇都が未だ彼らの手にあった頃はそこらの貧乏貴族の令嬢なども攫って来たものだが、今となってはそんな真似は出来ない。娼館に

足を運ぶのも、せいぜい月に一、二度。それ以外は自分で処理するか、向こうから誘ってくる、薬物で目が濁ったどんな病気を持っているか分からないような女を食うことで誤魔化している。

「おいおい、お前ら余計なこと考えるなよ。あんなんでも軍人の女を護衛に付けられるようなお坊ちゃんだ。下手に手を出せば俺ら全員縛り首だぞ」

「でも兄貴、お貴族様が女を取られたってお上に訴えると思います？　あの高慢ちきで自分の体面のことしか考えないような奴らが」

「そうっすよ兄貴、あの後ろの女はやばそうですけど、残りの二人は攫ったところで大したことないんじゃないですか」

彼らの言い分には理由がある。

貴族という生き物は、己を中心に物事を考える癖のようなものを持っている。これは一概に悪癖と言い切ることは出来ないものだ。まず自分の目の届く範囲で物事を判断し、それをさらに大局的な判断の材料にする。そこで得た判断をさらに大きな判断の材料にする――――これを繰り返すことで、人は高位の視点で物事を判断出来るようになるのだ。

貴族というものは大きな視点での判断を求められることが多いから、特にその傾向が強いのかもしれない。

無論、例外的に自分とその周辺しか目に入らない貴族もいるが、それらの貴族は殆どが先の内乱で断絶の憂き目に遭っている。つまり、彼らを雇っていた者たちがこの種類の貴族だ。

「だがなぁ……」

「兄貴、大分官憲共も大人しくなってますし、もうすぐ金も貯まります。船にはもう手を付けてありますし、ここらで一つ航海に花を添える女を手に入れてはどうです？」

下卑た笑いを浮かべる男共の期待に満ちた視線に、彼は正直後悔していた。

自分があそこで余計なことを言わなければ、自分と手下どもはもう塒に着いて軽く酒を楽しんでいた頃だろう。

手下どもの粘ついた視線の先にいる四人は、そこらの店で売っている焼き菓子を手に持って何か話しているようだ。自分たちに気付いた様子は見せていない。

「お前ら――――」

だが、ここで手を出す程彼は馬鹿ではなかった。

ここは皇都であり、あの摂政の膝元。何処に衛視がいるか分かっ

たものではない。それに、あの貴族の坊ちゃんも内乱を生き抜いた家の者。もしかしたら自分たちが思っているような軽い貴族ではないのかもしれない。彼はそう酒精で停滞気味の思考を巡らせ、手下たちを窘めようと口を開いた。

だがそのとき、彼らの鼓膜を激しい爆音が揺らした。

「――!!」

騒然となる周辺。

男が慌てて視線を動かせば、朝まで自分たちが働いていた辺りで黒煙が上がっているではないか。

何処かの船で燃料か積荷でも爆発したか――――彼がそう考え、手下たちを落ち着かせようと振り返ると、部下の一人が慌てて彼に駆け寄って来た。

「兄貴！　ガイスたちが！」

「何っ!?」

慌てて手下の示す先を見れば、先程まで女どもを舐め回すような視線で嬲っていた男たちが酔っ払いとは思えない動きであの女たちの元へ走っている最中だった。

「あの馬鹿共がっ！　戻れ！！」

良く見れば、先程まで男の腕にくっついていた少女が男から離れている。地面に手を伸ばしているところを見ると、あの轟音に驚いて何か落としてしまったようだ。

「不味い、間に合っちまう……！」

男たちに気付いていないのか、少女は地面に屈みこんだ。

手下どもはそこから僅か十歩程度の距離にいる。例え護衛の女が気付いたとしても、手下たちの方が早い。

彼は、決断した。

「おいタレス、爆弾だって叫んで回れ。ガズはあの馬鹿共をこっちまで連れて来い」

「え、兄貴……」

「早くしろっこのウスノロ！！」

「へ、へい！」

彼の元から走り去った手下は、爆弾だ爆弾だと叫んで周囲の人々の混乱を煽っている。

護衛の女もその叫びに気付いたようで、護衛対象らしい男に駆け寄る素振りを見せた。

（よし、これで逃げられる）

少女だけは戸惑ったように周囲を見回しながら、ただ立ち尽くしているだけ。

そんな少女に、部下の手が届いた。

「きゃああっ！！」

少女の叫びに、貴族の男と驚いたような表情の女たちがこちらに顔を向けた。

「――！」

一瞬、貴族の男と彼の視線が絡まり、すぐに逃げ惑う人々に遮られる。

だが、彼はその一瞬で自分たちの為出かしたことの危険性に気付く。彼が何人も知る、殺しを生業とする者たちと似たような眼を、あの貴族の男は持っていた。

何人も殺したことのある、ある種の諦観の滲んだ眼だ。

「ずらかるぞ！」

彼は手下どもを引き連れ、混乱に乗じて遁走に掛かった。

幸運なことに、追手は無かった。

轟音に驚いて手拭いを落としてしまったリリシアがその直後に発した悲鳴を、レクティファールは何処か冷え切った意識で聞いていた。

爆発音という要素が＜皇剣＞の警戒段階を引き上げ、彼の思考から感情を奪い取っていたのだった。

「リリっ！」

メリエラが慌てて手を伸ばすその先、リリシアは見覚えの無い男の肩に担がれていた。その周囲には似たような風体の男たちがリリシアを担ぐ男を守るように居り、さらに周囲の混乱もあって男共を追いかけることが出来なかった。

リーデが慌てて何処かに通信を送っているのを認め、レクティファールは波紋一つ起こらない意識で男たちの逃げる先を見る。

体格の良い、無精髭の男が自分たちを見ていた。

「――――」

すぐに人々に遮られその姿は見えなくなったが、レクティファールはその男の顔をしっかりと記憶していた。

黙り込み、リリシアの連れ去られた先を見詰めるレクティファールに、近寄ってきたリーデが囁きかける。

「レクト様、相手は土地勘があったと考えられます。護衛たちも先

程の爆発による混乱しており、リリ様を見失ったようで。念のために持っていただいていた信号の発信器は――――」

リーデの手にあるのは、リリシアの上着。

その内側に、発信器は埋め込まれている。

「申し訳ありません。普段なら肌衣に縫い込んである発信器もあるのですが、今日に限っていつもは着ない肌衣をお召になられたそうで……」

「良い、分かった」

レクティファールと出掛けるということで、普段は着ないようなものを引っ張り出したのだろう。もしかしたら、新しく仕立てたものかもしれない。

どちらにせよ、こうなっては衛視隊か軍の魔導師に探測魔法を使用してもらうしかリリシアを探し出す方法はない。

レクティファールは全く動揺していない自分を至極当たり前の自然のものとして捉え、さらに思考を加速させる。リリシアを奪われたことに関する感情の起伏は、＜皇剣＞に完全に制御されていた。

あの男共がリリシアをリリシアと認識して拐かしたのなら、無事でいるだろう。自分との交渉の札として使うには、その身が無事で

なくてはならない。他人の手で穢された巫女姫を、神殿は巫女姫と認めないだろう。つまり、その時点で彼らの手札は意味を失う。

だが、彼らがリリシアをリリシアと知らずに連れ去ったのなら、ことはもっと深刻だ。

身代金目当ての犯行なら、まだ先程の条件が適用されるだろう。人質の価値は出来るだけ高い方が良いに決まっている。

しかし、彼らの目的が金ではなくリリシア自身であったなら、こちらと交渉する気が一切無いのなら――――リリシアは遠からずレクティファールの元に帰れなくなる。

「――――さて」

「レクト、どうしよう。皇府殿に連絡して、近衛を――――」

「それでは、間に合わないかもしれない」

近衛の精兵がここに到着するまで一時間と掛かるまい。しかし、それでは間に合わない公算が高い。彼の周囲には既に護衛を務めていた近衛兵たちが集まってきているが、その数も決して多くない。おそらく二十名には届かないだろう。周囲の警戒に回っている者たちが居ることを考えれば、一個小隊三〇名程度の護衛が居る筈だが、それでも人海戦術を採るにも絶対数が足りない。

一応、護衛部隊の責任者を務めているという乙女騎士に探測魔法の使い手がいるか確認したが、発信器の無い状態で探すには時間が掛かるという答えが返って来た。

発信器が無いということは、人が持つ固有の振動波で個人を特定、捜索することになる。その振動波は個人でそれ一個という固有のものだが、その人物の状態で発せられる振動波の強さが変わり、更に対象が地下や屋内に居ると探知が難しくなる。不特定多数を探査するならばそれ程問題はない探測魔法だが、個人を探すにはその魔法に特化した専門家か、多くの時間を必要とする。

「――――ふん」

総ての状況を把握し、それでもやはり無表情のまま、一つ鼻を鳴らすレクティファール。

その態度に護衛たちは身体を強ばらせたが、レクティファールは彼らを歯牙にも掛けない。

「よろしい」

レクティファールは彼らの前に立ち、一切の感情のない声音で告げた。

「私は彼らを相手に戦争をしよう。私の腕の中からものを奪うとど

うなるか、諸君らに見届けてもらう」

ひたすらに冷たいその声音に、メリエラとリーデは密かに怯えた。

彼女たちが知るレクティファールという青年とは、まるで違う生き物。

それこそ、血の通わない兵器のよう。

「それでは、援護を頼む」

本来彼を守る筈の者たちからの反論は、一つも無かった。

男は焦燥に身を焦がしていた。

手下どもが拐かした少女が、あの巫女姫であるとすぐに気付いたからだ。

彼は内戦時から皇国の重要人物の顔を覚えるように努めており、リリシアの顔も聖都に篭もりきりであるとはいえ念のために総大主教ミレイディアと共に記憶していたのだった。

それに、巫女姫はあの戦いのあと幾度か市民の前に顔を出している。新聞などでも、その顔を何度も見た。

「くそっ、最後の最後でどじ踏んだ！」

男は地団駄を踏み、根城の一室に監禁した少女を睨んだ。

手足を乱暴に縛られた彼女は男を見ても怯えた様子はなく、ただじっと彼を見上げた。

「――――どうやら、わたくしのことを知っていらっしゃるようですね」

「ああ知ってるとも！　何で巫女様なんてのが街中をうろうろ遊び回ってんだよ！」

「あら、巫女とて一人の人、一人の女ですもの。好いた殿方と街を歩いて何が悪いのですか？」

「くっ！」

男はまるで自分の置かれた状況が理解出来ていないように見える巫女姫を大人しくさせようと手を振り上げる。このままこの女を喋らせておいては手下たちが動揺する。自分たちが皇国相手に喧嘩を売ったと気付かせることは、何としても避けなくてはならない。

彼は、毅然とした表情で自分を見詰める少女目掛けて、拳を振り下ろした。

「――っ！！」

押し殺した悲鳴と共に、ごつり、と拳に骨の感触が返って来た。

手加減したとはいえ、相手はまだ子どもだ。これで十分大人しくなるだろう。

「黙ってろ！　あんまり騒ぐとあの皇太子さまの処に帰れない身体にするぞ！」

「――――く……も、もう、わたくしは死んだつもりです……死者は、帰れません」

「このアマっ」

唇の端から真っ赤な血を流し、その頬に痛々しい傷を付けられた少女は、それでも男を見上げてそう告げた。

リリシアは巫女姫の候補者となった頃から、万が一のときの自害の方法は教えられている。舌を噛み切る方法から、心臓を破裂させる術式、脳を破壊する術式など、その方法は片手の指では足りない。

「だったら望み通り、死ぬまで俺達の相手してもらうぞ！　どうせ俺達はもう終わりだ！」

男はリリシアを引き立てると、弱々しく抵抗する彼女を引き摺って部下たちのいる部屋へと向かった。

そこでは、手下たちが男の登場を――――そして久し振りの美味い女を待っていた。

「あれ、兄貴、もう済んだんで？」

部下たちは、男が戦利品の女を真っ先に楽しんでいるのだと思っていた。それが彼の権利であるし、部下たちもそれに文句をつけるつもりはなかった。

だから、思ったよりも早い男と少女の登場に、戸惑っているようだ。

「たまにはお前らにもいい思いさせてやろうと思ってな、俺はうるさい口を大人しくさせる程度でやめておいた」

「へえ！　そりゃありがたい」

手下どもが少女の顔を見て、納得したような表情を見せる。

その頬には明らかに暴行の痕跡が残っており、男の言葉に信憑性を与えていた。

「でも兄貴、あの貴族にこの女の代金請求するんじゃ……」

「手ぇ出してもいいんですかい？」

手を出せば、得られる金は減る。

ひょっとすると交渉にさえならず、一リッツの儲けもなくなるかもしれない。

「どうせすぐ俺達はこの国からとんずらするんだ。下手に相手と交渉するより、飽きるまで俺達で可愛がって、どっかの国で売った方が良い」

「なるほど、さすが兄貴」

「じゃあ、早速……」

手下たちは、男の許しを得たと判断したのか、その手から少女の身体を受け取った。

華奢で女性的な肉付きは望むべくもないが、白磁のような肌と少女特有の匂いが男たちの情欲に火を灯す。

「おい、誰からやる？」

「ガイスでいいんじゃねえか、この女連れてきたんだし」

「お、いいのかよ」

「たまには美味しい思いさせてやらぁ、でも今度は俺だからな」

「分かった分かった。――――ほら嬢ちゃん、こっち向けよ」

にやにやと黄ばんだ歯を見せて笑う男の顔を、少女は睨み付けた。

そんな少女の態度に男はさらに嬉しそうな笑みを浮かべ、細い顎を掴んで引き寄せる。

「気の強い女は好きだぜ、あんたがもうちょっと大人ならもっといいんだがな」

「あなたに気に入られるなど、願い下げです」

「はっは！　すぐにそんな口叩けないようにしてやるからな」

そう言うやいなや、彼は少女の衣服に手を掛け、一気に引き裂いた。

絹の裂ける音が室内に木霊し、少女が息を呑む。

曝け出された肌と、その身を辛うじて覆っている肌衣。

少女は眼を閉じ、意識内に自裁術式の一つを展開した。

体内の主要な血管を使用して全身を破裂させるその術式は、死後その肉体が何らかの形で再利用されることを防ぐためのもの。当然、身体は大きく傷付き、誰であったのかさえ定かではない姿になってしまう。

それでも、もうこの身体を傷付けられることはなくなる。

（――――最後の最後まで、わたくしはレクティファール様だけのわたくしでありました。いつか冥界でお会いしたとき、また頭を撫でてくださいね）

彼女はたった十四年の人生の果て、自分のため、他人のためにその生命を終わらせる決断を下した。

意識内に術式が展開され、男の手がその肌に触れようとする。

（さようなら、出来れば、わたくしのこの姿を見ても怖がらないでくださいませ）

出来るなら、綺麗なまま棺に入りたかった。最後にそれだけを思い、そして――――彼女は何処からから吹く風を頬に感じて眼を開けた。

「――――――――始めてですよ」

部屋の入口が、静かに開く。

「ここまで、＜皇剣＞に感謝したのは。怒りで我を失わないのは、

非常に助かる」

一歩、部屋の中に足を踏み入れたのは、“白”の髪を持つ軍装の青年。

男たちが、突然の乱入者に色めき立った。

「誰だてめえは！」

「ここが何処だか分かってんのか！？　死にたくなければさっさと――――」

だが、彼らの言葉は最後まで続かない。

「黙れ」

その言葉と同時に、二人の男が白目を向いて昏倒する。

不可視の振動波を直接体内に叩き込まれた彼らは、抵抗も出来ず意識を完全に持って行かれた。

「な、こいつ魔法を……！」

「手加減するな！　こっちがやられる！」

「女を隠せ！」

男たちは仲間が倒されたことを認識すると、すぐに各々の得物を取り出した。

部屋の中には少女を除いて十二名。既に二人無力しているから、あと一〇名。

青年――――この国で唯一の＜白＞は、自分に挑みかかってくる男たちを冷めた眼で見詰めていた。

「死ねぇ！」

突出された短剣は、一直線に彼の心臓を狙ってきた。

素人特有の、相手の命を奪うことに抵抗を感じているような動きではない。

殺すことに慣れている者の動きだ。

だが、

「――――ふん、それでは義姉さんの影にさえ触れない」

青年は短剣を持つ男の手を左腕でいなすと、流れるような一挙動で右掌を男の顎に叩き込んだ。

青年の小さな足捌きは、埃を僅かに巻き上げるだけ。

「ぐぎっ！？」

顎を砕かれ、さらに天井近くにまで打ち上げられた男は、屠殺される豚のような悲鳴と共に床に落ちてきた。

これで九人。

「くそっ！　相手の間合いに入るな！」

「下がれ！　弩なら……」

「狙え！」

短槍を持った男が逸る仲間たちを抑え、機械連発式の弩を構えた二人の男が青年に狙いを定める。

室内なら逃げ道は少ない。弩の射手たちはそう踏んだが、青年は彼らに気付いていないかのように近付いてくる。

自分たちの存在を完全に無視したその行動に、射手が切れた。

「野郎っ！　舐めやがって！」

「撃て！」

引き金を引き絞ると、機械機構が六発の弓を連続して放つ。

矢は空を裂き、青年の顔面向けて突っ走った。

「微温い」

だが、矢は彼の顔に突き刺さることもなく、ただその一言で虚空に停止する。

魔法を使用した形跡はないが、見えない壁に阻まれているのか、或いは不可視の手に掴み取られたのか、矢はしばらく虚空に留まり、そして床に次々と落ちた。

＜黒点＞と青年が呼ぶ、何も存在しない一点による絶対防御。男たちがそれを知る由もない。

その為目の前の光景を信じられない二人の射手は、一足飛びに間合いを詰めてきた青年の拳によって意識を刈り取られた。悲鳴さえ上げることは許されなかった。

これで七人。

「くそっ！」

叫びと同時に繰り出された短槍も、青年が触れると一瞬で光の粒に分解された。

男は残った短槍の柄を放り投げると、両刃の剣を持った二人の仲間と共に青年に飛び掛った。

「少ない」

短槍の男の拳を掴むと、青年は見かけからは想像も出来ない膂力でそれを放り投げる。放り投げる先は、剣を持った男たち。

剣を持った男たちは仲間に刃を向けることが出来なかったのか、慌てて剣を引っ込めた。そのまま進んだら、仲間を串刺しにしてしまうと思ったのだろう。だが、そんな無駄な動作を行えば、相手に隙を見せるだけだ。

青年は放り投げた男がその仲間の視線を遮ったと確認すると、両手に魔力の刃を展開して意識と肉体を加速。投げた男が落下する前

にその下を潜り、驚いた顔の男二人の鳩尾に両手の魔力刃を叩き込んだ。魔力刃に封じられた魔力に体内を焼かれ、崩折れる男たち。そんな男たちを踏み台に、青年はさらに奥へと飛んだ。

これで四人。

「この！」

悲鳴とも雄叫びともとれる叫びと共に振り下ろされた血脂で曇った剣を掻い潜り、青年はその剣の腹を掌の一撃で砕く。魔力を使用した形跡はない、ただ、破壊するに最も適した位置を狙い、必要な衝撃を与えただけだった。

それでも男は素手で剣を砕いた青年に怯え、半歩退いてしまう。それが男の運命を決めた。

「退くな」

ふわりと浮き上がった青年の膝が男の顔面にめり込んだ。

鼻の骨と歯が折れ、血が飛ぶ。

これで三人。

「くそ、くそ！」

こうなっては統制などあったものではない。

仲間を次々と失った男たちには、ただ我武者羅に得物を振り回す能しか残っていなかった。

「稚拙」

青年は振り下ろされる山刀の柄頭を叩いてそれを弾き飛ばすと、そのまま身体を半回転、男の腕を抱え込むようにして投げ飛ばした。男は壁に叩き付けられ、一言呻いて動かなくなる。

「あああああっ！」

青年の見せた背中に向けて短剣を突き出した男は、短剣がその背中に突き刺さると確信した瞬間。青年の姿を見失った。床の埃が僅かに舞っており、男は次の瞬間背後に現れた気配に恐怖する。

しかし、その恐怖はごくごく短い時間だった。

首筋に吸い込まれた手刀は男を意識のない人形とし、恐怖など感じない身体にしてやった。

これで、一人。

「おい、おいおいおい……もう終わりかよ……」

最後の一人は、その青白い顔をぎこちなく歪め、醜い笑みを作っていた。

その腕には、少女と片刃の剣。

「――――――――」

「レクト……さま……」

男の腕に首を捕らえられた少女は、掠れた声で青年を呼んだ。

それでも青年の表情は動かず、ただ、少女の姿を確認している。

暴行を受けた傷は確認出来るが、それ以上の危害は加えられていないと＜皇剣＞は判断した。

「あの……余り見ないでくださいませ……」

「――――失礼した」

少女は羞恥に顔を染め、青年は謝罪と共に頭を下げた。

そして顔を上げたとき、青年の眼は真っ直ぐ男に向けられていた。

「投降か、抵抗か」

青年が問う。

男は、恐怖を誤魔化すことも出来ずに叫んだ。

「手下どもが抵抗したってのに、カシラが手ぇ上げられるか！　この女の生命が惜しければ――――」

その叫びが、最後まで発せられることはなかった。

男が抵抗の意志を表明し、剣を少女の首に近付けたその刹那、青年はその腰に構えた左手に一本の刀を顕し、右手でそれを抜き放った。自然なその動作に、余計な力は一切入っていない。

「ふ」

鞘の内部に展開された反発場によって加速された刃は、狙い違わず男の剣の刃を“斬り裂いた”。

きいん、という音を残して弾け飛ぶ刃。

「え？」

男はそれを呆然と見詰め、次に自分の顔目掛けて飛来する青年の拳を見た。

それが、この男が見た最後の映像であった。

緊張の糸が切れたのか、大声でわんわん泣き叫ぶリリシアを抱いたレクティファールが姿を見せると、暴漢たちの根城を包囲していた近衛たちから歓声が上がった。

リリシアはその歓声に驚いて一瞬泣き止み、その歓声の中心に見慣れた二人の女性が居ることを確認すると、再び大声で泣き始めた。

「リーデ、メリア、あと頼んでも良いですか？」

「――――あの、レクト様……リリ様は……」

泣き叫んでいるリリシアの様子では、無事なのかはっきり判らない。レクティファールも未だに感情を見せない無表情であるし、リーデとしては多少訊きにくいことであっても直接訊ねるしかなかった。

「顔に怪我があったから、治しました。それ以外は特に外傷なし、その他の怪我も無し」

「そうですか……！」

「良かった……」

ほっと胸を撫で下ろす二人。

同性として、こればかりは心の底から安堵した。

「ただ――――」

だから、続くレクティファールの言葉に緊張した。

まさか、もっと不味いことになったのか。薬物でも投与されたか、精神系魔法でも掛けられたか――――悍く二人を尻目に、レクティファールは少しだけ困った表情で言った。

「――――さっきから離そうとしているんですが、離れません」

ぐいっとリリシアの身体を引っ張るレクティファール。

でも、離れない。

「嫌ですぅうううううううっ！　離れません！　絶対離れません！　今日はレクティファール様とずっと一緒です！」

「――――――――――ああ……」

「――――――――――なるほど……」

リーデとメリエラは疲れたように溜息を漏らした。

こういった経験をすると、女性の中には男性を極度に怖がるようになる者もいるという。

その点リリシアは、少なくともレクティファールを怖がる様子は

ない。

将来に関する懸念の一つが解消され、二人は揃って頷いた。

「まあ、本人が離れたくないというなら仕方がありません。もうすぐ手配した飛龍が来ます、そのまま後宮までどうぞ」

「後宮に入浴の準備するように伝えておいたから」

「――――え」

硬直するレクティファール。

今度の無表情は、ただ固まっているからか。

「今日はその子と同じ部屋ね。手、出したら縊るけど」

「ミレイディアさんと同じことを……！」

「空気を読みなさい。これで手出したら、あなたのこととりあえず軽蔑するから」

「とりあえず？　最終的には何ですか！？」

「――――言えないわ、そんなこと」

「言えないことっ！？」

レクティファールの叫びが轟く黄昏に、一騎の飛龍が降下してくる。

リーデはそれを見上げ、誰にも見えないように微笑んだ。

自分もとりあえず、説教二時間から始めよう、と。

第十一と半分の話「マリエの花のお妃様」

レクティファールがマリエの離宮に足を運ぶのは、もうこれで何度目になるだろうか。

後宮にほど近いこの離宮は現在、本来数名の側妃が住むところを一人の寵姫が暮らすだけで、あとは近衛から派遣された乙女騎士一個中隊と、その予備候補生たち数十名が女官として働いているに過ぎない。

乙女騎士たちはともかく、予備候補生たちはこの離宮勤めを後宮勤めへの通過点と考えているらしく、その仕事振りは余り良いとは言えなかった。

上司である乙女騎士たちの見ている前では凛とした騎士候補生を演じているのだが、上司の目が無くなればすぐに年頃の娘たちに戻ってしまう。色恋や上官の悪口、待遇への不満などを口々に囀り、騒がしいことこの上ない。

実際には上司たちも候補生たちのそれらの態度には気付いているのだが、元々は自分たちの通った道、気付かない振りをしてやることが先達としてのせめてもの優しさだった。何故それが優しさになるのかというと、離宮勤めを全うしても後宮に入る為には厳しい訓練に耐え抜かなければならず、更に候補生たちの一〇人に一人も後宮勤めにはなれないという現実があるから。それくらい厳しい世界にいるのだから、今の内に夢を見させておいてやろうということだ。

しかし候補生たちも乙女騎士たちも、揃って職務に精励する日があった。

今日のように、摂政レクティファールが寵姫の元に渡ってくる日である。

「ご苦労」

「はッ」

離宮の正門で自分を出迎えた当番小隊の騎士に声を掛け、レクティファールはマリエの離宮へと入る。

背後で騎士が自分の背中を恐恐と見送っている気配を感じながら、彼は悠然と歩を進めた。彼はこの離宮の主であり、これらの行動は総て摂政としての職務に含まれている。いっそ傲慢と言っていいほど堂々とした態度を見せ、騎士たちが主君と恐れ仰ぐに相応しい姿を演じきらなければならないのだ。

自分に随行してきた護衛の乙女騎士を従え、レクティファールは迷うことなく離宮の庭園に足を踏み入れる。冬の訪れも近い庭は、春や夏と違い落ち着いた色に染め上がっていた。

目的の人物を探してぐるりと視線を巡らせると、花壇の一角で土いじりをする良く知った後ろ姿を見付けた。麦わら帽子がもそもそと動いている。

「――――……」

農作業でもするような格好で黙々と朽ち落ちた花弁を集めるその姿に、レクティファールは思わず笑みを漏らした。

彼女をこの離宮に閉じ込めた張本人として、その心身の健康こそが彼のせめてもの願いだ。それ以上を願うには、彼は些か経験が足りなかった。

「アリア」

振り返る彼女に、レクティファールは微笑んで見せる。

驚いたようなその表情に、彼はようやく、摂政から只のレクティファールに戻った気がした。

昼を少し過ぎたばかりというのは、彼がこの離宮を訪ねるには少し早い時間帯だった。

いつもなら日が落ちて月星が夜天を支配してから、例外的に早い日があっても、それは黄昏時だ。

日がまだ高い時分に自らの主が訪れたことに、土いじりをしていたままの姿でアリアは困惑していた。

顔に付いた土汚れを手拭いで落とし、作業しやすいようにと用意してもらった作業衣に付いた土も払い落とす。

「今日は随分とお早いお越しですね……」

「すまないとは思っているんですけどね、たまには、というのと君を驚かせたいという気持ちがあったもので」

「まあ、女性を驚かせる趣味がおありなのですね。大変良い趣味ですこと」

「男ですから」

主を出迎えるには色々準備があるものです、と少し機嫌の悪かったアリアだが、レクティファールが悪びれもせず、反省もせずに笑

っているのを見て溜息を吐いた。

少し嫌味混じりの言葉を吐いてみても、やはり彼女の男は笑みを崩さずに言葉を返してくる。

しかし男だから、という言葉は彼にして珍しく、アリアは密かに驚いた。

「――――何かあったのですか？」

「何、という程のことでもないのですが……それなりに」

アリアはまだこのとき、彼が三人の想い人を連れて街に出たことを、そしてそこで一つの騒動が起こったことを知らなかった。

離宮というのは基本的に後宮よりも遥かに情報伝達の優先順位が低く、正式な側妃となっていない側妾はその情報を得ることが出来ないことも多い。側妃はあくまでも側妃であり、摂政のあれこれに干渉できる権限を持っていないのだ。

正妃候補であれば、或いはもう一人の側妾のように軍人であり、当事者であれば彼女が現状に取り残されるようなことはないのだろうが、アリアという側妾はそのいずれの条件にも当て嵌らない。

口さがない近衛兵の言葉をそのまま流用するなら、『何の力も持たない、ただ身体だけを求められる飾り物のお妃様』ということになる。正妃であれば社交界やそれぞれが属する組織にそれなりの影

響力を持っている。だが、君主の妾に相応しい教育を受けはしたものの、単なる公妓出身の側妾にそれらの社会的影響力を期待することは難しい。

当の本人もそれは十二分に理解しており、表に立たず、声を発さず、まるで世界を知らぬ籠の鳥のような生活を送っている。

「それなり、ですか」

「ええ、それなりです」

レクティファールはそんなアリアの現状を知って尚、変わらずに接してくる。

大神殿の夜、アリアに自分だけの花になれと命じた彼は、まさしく花に接するようにアリアを扱った。

花壇のような離宮に住まわせ、愛情という水や離宮予算という肥料を与え、そして咲き誇る花を愛でる。過ぎた水や肥料は花を枯らしてしまうと知っている彼は、アリアだけはそれらの現世（うつしよ）から遠ざけていた。

自己満足であると自覚し、それでも彼はアリアを解き放つことはない。

どれだけ遠くとも皇都という温室の中、それよりも外に出るとしたら別の籠に移し変えて連れて行く。

明らかに他の妃候補とは違う扱い、それを差別と見るか特別扱いと見るかは人それぞれだが、アリアはそれを甘んじて受け入れていた。

彼女は知っている。

自分は決して目の前の男の庇護無しには生きていけないのだと。

一度その庭に植えられ、手折られた以上そこ以外に生きる場所はないのだと。

「でも出来るなら、事前に一言頂きたかったです。こんな土だらけの姿では……」

「何を言いますか、むしろ新鮮です」

はあ、と一つ重々しい溜息を漏らし、アリアはレクティファールを上目遣いに睨んだ。

それでもやはり、レクティファールは笑顔のままだった。

「殿下、わたしは女です」

「知っています」

「殿下に男としての見栄があるように、わたしにも女としての見栄があるのです。それとも……」

アリアはレクティファールに一歩近付き、その頬に触れた。

「殿下は、わたしに単なる愛玩動物になれと仰いますか？　もしも殿下が望むなら、わたしはそれに喜んで従いますが――――」

どうしますか――――アリアの目はそう言ってレクティファールを挑発する。

決して言葉には出せないそれらの言葉を、彼女の男は正確に読み取った。

「まさか」

レクティファールはアリアの身体を抱き寄せると、その耳元に囁く。

引き寄せる力、手を回す場所、そして声の調子。いずれの動作も、アリアがレクティファールに教えたものだった。

「私はアリアという女性を想っているのです。アリアという名の愛玩動物などに興味はありません」

アリアの身体から発せられる汗と土の匂いに気付き、レクティファールは自らの女の首筋に顔を押し付ける。

彼の選んだ、彼の女の匂いがした。

麻薬にも似たその匂いに、レクティファールの意識の一つが酩酊にも似た状態に陥る。

彼はその酩酊を楽しむだけの精神的余裕をこの女性に教わった。＜皇剣＞の並列思考は女性の教えを簡単に実現するだけの機能を有していた。例え意識の一つが狂っても、他の意識がそれを楽しみに変えてしまう。

「頼んでいた服や小物が届いたと皇府が教えてくれましてね。仕事も珍しく早めに片付きましたので、折角だから直接手渡そうと思ったのです」

「――――まあ、それは意地悪なことですね。人の驚く姿を楽しもうだなんて」

アリアはレクティファールから逃れるように身を捩らせ、それでも拘束が解かれないことを知ると、身体の力を抜いた。

自らの身体と声をを楽しむ男から漂うインクと香水の匂い。

彼女はその匂いに、身体が少しだけ熱を持った気がした。

「着て貰えますか？」

何処か芝居じみたレクティファールの囁き。

アリアは自分の耳朶に触れる吐息の主の顔を脳裏に思い浮かべると、嫣然と微笑む。

早めの夕食を摂ると、アリアは自室に女官と共に消えていった。

庭で待っていて欲しいという彼女の望みに従い、レクティファールは銀色の光が降り注ぐ庭園に出る。

二つの月が東と西の空に輝き、空気は冷たく澄んでいた。

もう冬も近いと皇城内の誰もが口を揃えるが、レクティファールといえば、その実感が少しも無かった。

異なる世界に来て初めての冬。彼の精神が知る季節よりも長く、のんびりとした四季の移り変わりは、彼の中に明確な違和感として存在している。

（いずれ、慣れるんだろうけど）

最初は戸惑った時間の感覚も、今では殆ど気にならなくなった。

気にならないというよりは、＜皇剣＞の情報処理速度に較べればどちらの時間感覚も大差無いということに気付いただけなのだが、それでも十分に大きな変化だ。

そのおかげで、近しい者たちと季節感を共有することが出来るようになったのだから。

彼は月を見上げ、最近読んだ詩篇の一節を詠う。

「秋に収穫を喜び、冬に春を想う。須らくときは流れ、万象は過去の彼方に消えて行く。そして残るは――――」

「――――培った思い出と、それを仕舞う人の想い」

自分の言葉を繋いだ背後からの声に、レクティファールは振り返る。

黒を貴重とした夜会服と、ただ銀のみの装身具たち。

宝石など一つも使わず、そこにあるのは唯、黒と銀と薄桃。

それらを纏ったアリアの彼を見るその瞳が、微笑んでいた。

「ラウファの詩篇、第三集でしたね」

「良くご存知で」

「殿下の下へ上がる前は、そのようなものばかり読んでおりましたから」

ラウファと言えば、性別さえもが未だに分からない恋の詩で有名な作家だ。

凡そ一〇〇〇年前に没した人物だが、今も彼の――或いは彼女の――詩は人々に愛され、読まれている。

「ラウファが誰を想っていたのか。ラウファはときに男性を、ときに女性を想って詩を書いていました。だから、男性であるか女性であるか判らない」

アリアはレクティファールの横を通り過ぎ、月の光の下に歩み出る。

きらきらと煌く装身具の中で、彼女の白皙と薄桃の髪が光って見えた。

「殿下は、ラウファは誰を想ってこの詩を書いたと思いますか？」

「――――さて、恋多いラウファの想いを私が理解出来るかどうか」

「ですが殿下は、たとえ恋多く無くとも、愛多くなければなりませんよ」

彼は多くを愛さねばならない。

人を、国を、そして世界さえも。

「為政者として国を愛し、国民を愛し、そして象徴として世界を愛す。ですが、愛とは憎しみに最も近い感情」

レクティファールから四歩離れた場所で、アリアという女性が詠っている。

愛することを宿命付けられた者だからこそ、彼女は愛を詠うことが出来た。

「憎しんでいますか、あなたを愛多き地位に追い遣った国を、人を、世界を」

「――――いいえ」

憎む暇など、何処にも無かった。

せめてこの人たちだけは、と想い願う者を護る為に無我夢中で戦い抜いた。

そして、少しだけ立ち止まる時間が出来た。

「では、いつか怨み、憎みますか？」

問われ、レクティファールは言葉に詰まった。

怨むことも、憎むことも、人には簡単なことだ。

ほんの少しの切っ掛けで、愛情は憎悪へと変化してしまう。

だから、いつか自分も――――レクティファールは、小さく答え

た。

「そう、かもしれません」

怨もうと思えば、怨むべき者など幾らでも思い浮かぶ。

憎もうと思えば、憎むべき国など幾らでも考え付く。

そしてこの世界さえ、レクティファールには怨讐になり得る。

「では、殿下、一つお願いがございます」

「何でしょうか」

レクティファールの女の一人は、彼の目の前で優しげに微笑んでいる。

されど、瑞々しい口から発せられた言葉は、決してその微笑に相応しいものではなかった。

「もしも殿下が総てを敵とするときが来たら、そのときはわたしを殺してから総てを亡ぼしてください」

「――――……」

レクティファールは場違いにも、アリアが酔っているのだと思った。

それ程にアリアの表情には影がない。己を殺してくれと頼んでいるにも関わらず、である。

「わたしは世界のついでに殺されたくはありません。殿下はわたしの総てです。だから死ぬときくらい、殿下の総てを受け止めたいと思ってはいけませんか？」

何故、彼女はこんなことを言っているのだろう。

何故、彼女はあんなにも美しい笑顔で居られるのだろう。

何故、彼女は――――

「先ほど、わたしは殿下に訊きました。何かあったのですか、と」

アリアはくるりとその場で回り、風を巻き上げた。

弱々しい風が、レクティファールの頬にぶつかった。

「知っております。何があったのか」

「――やはり、そうでしたか」

「騙していた訳ではないのですよ、殿下」

事実、レクティファールがこの離宮に現れたときは知らなかった。

着替えに戻った自室で、ルキーティからの通信を受けたのだ。

ルキーティという一人の妖精は、レクティファールを慰める相手としてアリアを選んだ。

「皇府閣下が教えて下さったのです。殿下が自分を責めていらっしゃると」

「そうですか、彼女が……」

城に戻った彼を一目見て、ルキーティはその内心をすぐに看破した。

歴代皇王の誰もが、一度は経験する圧倒的な無力感。

絶大な力を持つ故の無意識の驕傲。それが引き起こすその様々な

悲劇に、総ての皇王が苦しんだ。

ある者は親を殺し、ある者は将来を誓い合った者を奪われ、ある者は故郷を自ら消し去った。

『力』という絶対的な価値観が、その代価として求めるもの。

それを目の当たりにしたとき、力ある者は総じて為す術がない。

「リリシア猊下のご様子は如何ですか」

「私の前では特に変わった様子はありませんでした。ですが、メリアが聞いたところ、夜は余り眠れなかったようです」

それが命を失い掛けたことによるものか、或いは犯されそうになったことが原因なのか。レクティファールには判断出来なかった。

彼に出来たことといえば、紅龍姫二人を後宮に泊め、それとなくリリシアを支えてくれるよう頼むことだけ。それでも恥を忍んで何か出来ないかとフェリエルに問うてみれば、「とっとと仕事しろ、そして仕事が終わったらいつもみたいに甘やかせ」との言葉を投げ付けられた。

その後張り切って仕事を片付けたはいいものの、結局どうすればいいのか分からなくて後宮の廊下をうろうろしていたら、今度は文庫から出てきたファリエルに見付かって叱責された。

ファリエルはレクティファールの意気地の無さに心底呆れ果てていたが、彼が助けたことが多少は良い方向に働いたと教えてくれた。もしも彼以外の誰かに救出されていたら、リリシアは今ほど軽い傷で済まなかっただろうとも言われた。リリシアはレクティファールに恋をすることで自分のこれまでの人生を肯定している。未来の皇王を支えるべく生きてきた彼女には、それしか自分を成り立たせる手段が存在しないのだ。

巫女姫は所詮象徴に過ぎない。

皇王以外の誰のものにもなれず、伴侶に出会わなければ後継者に自分の力を継承してその地位を退くだけ。

巫女姫とは、皇王以上に様々なものに縛られた役目だった。

「リリシア様は殿下のことを本当に好いておられます。他に道がなかったとはいえ、わたしとはまるで違う……」

思えば、アリアも似たような境遇であった。

誰かに売られる為に育まれ、生きてきた。

もしもレクティファールに拒絶されていれば、今頃はどこかの妓楼で身を鬻(ひさ)いでいただろうか。

公妓として国に身分を保証されているとはいえ、これまでの人生総てを否定されることに変わりはない。否定されても、自分が自分のままで居られるかどうか、アリアには分からなかった。

「わたしは殿下を愛する義務を負い、その義務に従って殿下を愛しております。もしも別の方に売られていたら、その方を愛していたことでしょう」

だが、リリシアは違う。

彼女は幼き心に従い、レクティファールに恋をした。

恋とは己の内から溢れるもの、愛とは互いに与え、そして与えられるもの。

似て非なる両者の間には、決して越えられない一線がある。

「リリシア様は殿下だからこそ恋をし、いつか愛するのです。わたしとは違う」

アリアは俯き、そっとレクティファールの胸に逃げ込む。

頬に触れるいつもと変わらない温かさが、彼女の涙腺を刺激した。

「正直に申せば、わたしはリリシア様が羨ましいのです」

自分なら、見捨てられていたかもしれないと思ってしまう。

代わりの居る、表に出ることが出来ない側妾など、危険を冒して救う必要はない。

レクティファールならそんなことをしないと理解していても、ひょっとしたらと万が一の可能性を考えてしまう。

幾らでも替えが利くという覆しようのないその事実が、アリアに絶対的な恐怖となって伸し掛ってくる。

「殿下、もしもわたしが何処かに連れ去られたら……」

訊いても無駄だ、と自分の中のもう一人の自分が嘯く。

答えなど決まっている。

「助けに行きます」

他に答えなどないとでも言うように、はっきりとした口調。

見上げてみれば、その銀色の瞳は真っ直ぐに彼女を見ていた。

だから――――辛かった。

「それは、わたしがアリアだからですか」

自分の腕の中に居るから、自分の庇護下にあるから、それだけの理由ではないか。

レクティファールは甘い、甘すぎる。甘いだけと言ってもいい。ただ甘やかすことしか出来ない。

それ故に君主としては及第点であるが、男としてはそれに程遠い。

君主ならば臣下が足りない部分を補うことも出来よう。しかし、男ならば自分一人の資質が総て、誰かに補ってもらうことなど出来はしない。

レクティファールは優しい。

だが、優しいだけではアリアは安心することは出来ない。

優しさは人を想う感情。しかし、少し才能があれば複数の者に向けることもそう難しくないだろう。

現にレクティファールはアリア以外の女をその腕に抱いている。

役目だと、それが勤めだと納得しているレクティファールが、アリアの感情を理解することは不可能だ。

「――――お優しいのですね、殿下は」

一筋の涙が、アリアの頬を伝う。

レクティファールの表情に変化はなく、黙ってその涙を拭うだけだった。

「でもそれで良いのです、殿下。殿下は誰にでも優しくあるべきなのですから」

人に総てを等しく愛することは出来ない。

レクティファールであっても、最強の兵器であってもそれは絶対不可能なこと。

この世界に平等は存在するだろう。だが、感情の介在する場所に平等は存在しない。

「いつの頃からか、わたしは殿下から受ける愛が嬉しくなりました」

自分だけの花であれ。

その言葉が嬉しかった。存在意義だった。

花として想いという水を欲し、やがて与えられ、潤った。

しかし、その愛情も過ぎれば、花の根は腐る。

見返りを求めない情は、ときとして相手を傷付けてしまう。

「だから、わたしも殿下を愛したいと思った。でも、殿下はリリシア様たちを愛するようにはわたしを愛してくださらなかった」

リリシアたちとアリアの絶対的な違い。

それは、見返りを求めるか否か。

愛情の対価をその役割という形で支払うリリシアたち正妃候補とリーデに対し、アリアはただそこで生きていれば良いだけ。

それが嬉しいのは間違いない。

それが誇りであることも間違いない。

だが、今回のリリシアの一件でアリアは気付いた。

自分でなくとも、この役割は果たせるのだと。

「殿下、殿下、殿下、わたしはここに居て良いのですか」

わたしで無くとも良いのではないですか。

わたしである必要は何処にあるのですか。

「お答えください。二度は訊きません。一度お答え頂ければ、もう……」

どんな答えでも受け入れる。

疑問に思うことも止める。

ただ、一途に想い続ける。

「アリア」

レクティファールに、その想いは通じたのか。

苦しげに顔を歪めるこの優しすぎる青年に、アリアの願いは本当に理解出来るのか。

アリアは黙って、彼の口から答えが発せられるのを待った。

数秒か、数分か、沈黙が二人を包み込んだ。

そして――――

「――――二度は、言えない」

「はい」

レクティファールは固く結んだ口を解いた。

「私は考えることが苦手だから、君の望んだ答えではないと思う」

「はい」

アリアはじっと答えを待つ。

そしてふと、初めてレクティファールと出会った夜のことを思い出した。

「アリア」

「はい」

今のレクティファールの表情は、あの夜と良く似ている。

自分の中の感情を上手く伝えられないもどかしさと、その感情の強さに翻弄されている。

「二度とそんなことを言わないで欲しい」

震えた声だった。

「私は弱い。嫌になる程、自分を殺したくなる程に」

アリアを強く抱き寄せ、レクティファールは慟哭する。

「リリシアを失うかもしれないと思ったとき、私は自分の立場が憎くなった。だがもう、私はこの立場から逃げられない。だから、立場の代償である力を振るった」

彼の力――――＜皇剣＞。

それがあったからこそ、彼はリリシアを救うことが出来た。

「本当に良かったと今でも思う。リリシアが連れ去られたとき、本当なら何も持つことが出来なかった私が何かを得た罰ではないかと思ったから」

嘗て何も手にすることが出来なかった自分がまだ心の何処かに居る。

その自分がずっと叫び続けている。

「大切なものが出来てから常に『奪われるな、失うな、後悔するな』と、誰かが叫んでいるのです」

以前、リーデに問われたときは「分からない」と答えた。

あれからたった数カ月だというのに、今の自分の中には明確な意思が存在しているのだ。

奪われる恐怖、失う恐怖、その果てにある後悔。

摂政としての彼の中で息衝く、個人としての感情たち。

手に入れてしまったから、ただそれだけで総てが惜しくなった。

この世界に来て、ようやく彼は自分の総てを懸けても良いと思える存在を得たのだ。

だがそれは同時に、彼の望みが決して叶わないことを意味している。

「護るなんて気軽には言えない。言えなくなってしまった」

彼の手に入れたものは、彼には決して護りきれないものばかりだった。

摂政として必要になれば、彼は自分の護りたいものを躊躇いなく見捨てなくてはならない。それが護りたいものを手に入れた代償であり、それを認められないなら、その時点で彼は総てを失ってしまう。

余りも酷い取引だ。

護りたいなら護ればいい、但し、いざというとき見捨てられないなら総てを取り上げられる。

「だからアリア、もう二度とそんなことは言わないで欲しい。私は弱いから、こうして頼むしか方法がないけれど……」

単純な力だけなら世界でも頂点を争うであろう自らの男の言葉に、アリアはその背中に手を回すことで答えた。

この男が決して他人には見せない姿を自分に見せたのだと、彼女の中の女が確信したから。

「分かりました。もう、二度と……」

「ありがとう」

アリアの耳に、レクティファールの穏やかな声が届いた。

優しすぎる、何処かのんびりとしたごく普通の青年の声だった。

「殿下」

だから、アリアは安心して身体の力を抜く。

力を抜いてみれば、自分を包む温もりが心地良く感じられる。

相手の体温が自分の体温と混ざり、ある種麻薬のような高揚感をアリアに与えた。その高揚感に浮かされたまま、彼女はレクティファールの胸を押して一歩下がった。

夜風は冷たい筈なのに、不思議と寒くはない。

アリアは陶然と微笑み、胸元に手を添えて目の前の男にちょっとした意趣返しをすることにした。

「殿下、リリシア様のこととともう一つ、皇府閣下に頼まれたことがあるのですが」

「――？」

はて、何かアリアに頼むようなことがあっただろうか。レクティファールはここ最近の国や行政の動きを思い出してみる。

しかし、皇王府からアリアに何か求めるようなことがあったとは思えない。

「なんでしょう」

だから、素直に聞いてみることにした。

しかし、彼はその選択をすぐに後悔する。

「皇王府に、殿下のお子を養子に迎えたいという申し出が既に数十件持ち込まれているそうなのです」

「――――ほう……それは初耳です……」

敢えて言わなかったのだろうな、と思う。

あの皇府は、時折こうして妖精らしいたちの悪い悪戯を仕掛けてくる。

「一応、子どもが出来やすくなる魔法や産み分けの薬も用意して頂きましたが……因みに、今日はそれなりに良い日です」

どうなさいますか――――小首を傾げ、可愛らしく問い掛けているが、その内容は非常に生々しい。

余りの落差にレクティファールはその場に崩れ落ちそうになった。

私は種馬か……うん、種馬だな、そんな自己完結も虚しいものである。これも君主の勤めと思えば納得も出来るだろうが、もう少し幻想に浸りたかったという切実な想いもある。

「あ――と、そういった魔法や薬は母体によろしくないと聞いた記憶があるのですが」

「そうですね、自然妊娠に較べると多少は」

それでも無視しても良い程度の低い確率なのだが、何処か臆病なところのあるレクティファールにとっては、やはりというか許容出来る範囲を超えたものらしい。

蛇足ではあるが、これらの魔法や薬品はそれぞれの種族ごとに一から作られており、未だもって龍種に対応した魔法や薬品は開発途上である。

「では、そいったものは無しの方向で」

「はい」

不貞腐れたようなレクティファールの言葉に満面の笑みを浮かべるアリア。彼女としても、余り使いたくないものだったようだ。

人の死にはひどく冷淡なところのある皇王府だが、人の誕生に関しては自由意志が最優先であると考えている。これが倫理観に基づくものであれば良いのだが、皇王府は単に皇室内部に余計な火種を持ち込みたくないだけだった。

魔法や薬で作られた子どもと、自然に生まれた子ども。

たとえどれだけ人の道徳観が優れていようとも、この二者を真に差別しない者が果たして世界に存在出来るのか。

一度生まれてしまえばやり直しは利かない、ならば、必要最低限、妊娠し難い体質の妃や妃や皇王自らが望んだ場合にのみ使用するべきだろう。皇王府のこれらの魔法や薬品に対する立場は、これに尽きた。

そうなれば、子どもが必要――これも余り妃たちには受けの良い言葉ではないが――なときに取るべき手段は一つである。

つまりは、物量作戦。

「――――――――少しぐらい、幻想を抱きたかった」

男女関係に幻想を抱く男は多い、レクティファールもその一人で

あった。

但し、彼の相手はそうではない。

彼女はレクティファールの言葉にくすくすと笑い声を零し、悪戯好きの童女のように言った。

「折角の服ですから、皺にしたり、汚したりしないでくださいね」

ぽかんとしたレクティファールの顔が、何とも可笑しかった。

この夜を境に、アリアはレクティファールから一つの仕事を任せられるようになる。

それは自国や他国の貴族、或いは有力者の子女を離宮に行儀見習として招くことであり、その教育を任せられたアリアは裁縫の手解きから夜の作法まで幅広い知識を教え子たちに与えることになった。

警備上の問題から昼の間、星天宮の外から通うことになったようだが、アリアがレクティファールの寵愛を受ける側妾であることを意識してか、諸侯家や有力家は積極的にマリエの離宮へと自らの子女を送り込んできた。上手く娘や孫がレクティファールの目に留まればしめたもの、後宮や離宮に召し上げられなくとも妾としての地位を得るだけで家に箔が付くというものだ。

とはいえ、レクティファールはすぐに騎士学校に編入してしまい。子女たちは時折レクティファールの命令で皇王府から届けられる茶葉や菓子などでしかその存在を感じることは出来なかった。

何故、アリアにこのような仕事を任せたのか、という疑問の声は皇王府からも政府からも出た。

彼らは別に公妓出身のアリアを蔑視していた訳ではない。何故、アリアを選んだのかということだ。

良家の子女は婿を取るか、或いは何処かの家に嫁ぐことになる。そんなとき、彼女たちがアルトデステニア皇室に親愛の情を持っていたらどうか。特別な外交や複雑な権謀を尽くさずとも、良縁を得ることが出来るのではないか。総ての子女がアリアを慕わずとも、その半分でも皇室に好意的な感情を抱けば、これは外交的に十分通用する手札となる。

アリアの手によって繋げられた縁は、後々まで皇国に利益を齎すことになる筈だ。

皇王府も政府もそれを理解していたから、疑問に思ったのだろう。

アリアは確かに優れた教育を受けてきたかもしれないが、それは

所詮妃になるためのもの、子女たちの教育はそれだけでは務まらないのではないか。

そんな不安の声に対し、レクティファールは曖昧な笑みを漏らして一言「まあ、しばらく様子を見てみよう」と答えるだけ。

とはいえ、摂政の決定を覆すだけの材料を持っていなかった彼らは、その言葉に大人しく従った。

此の後、レクティファールの判断が正しかったと証明されるまではしばらくの時間が必要になるが、アリアが教え子たちに慕われ、その縁が遥か未来にまで続いていったことは後世の一つの出来ごとが証明している。

アリアの没後、彼女の教え子の孫が監督となって制作された映画＜アリア――日蔭の妃――＞。

その映画で彼女の生涯は、レクティファールという不世出の君主を支え続けた影の第一妃として描写された。

側妃でありながら最も個人としてのレクティファールに近く、その心の中を最も良く知る女性として。そして、一番レクティファールを甘えさせることが上手かった女性として、そして彼女が唯一の主となった離宮に因んで、後世の人々はアリアをこう呼んだ。

――――マリエの花のお妃様、と。

第十二話「摂政＋龍姫＝騎士学校」

皇都より凡そ三〇キロメイテル離れた地点に、＜ユーノス＞と地図に記される島がある。

三日月型の島はその弧の内側に港を持ち、その港に寄り添う街を持っていた。

街の名は＜エルグリスト＞。

軍の揺り籠とも別称され、アルトデステニア軍の未来を担う若者たちが日々研鑽を積む、皇国軍全兵科軍学校の集合都市である。

港を見れば海軍の練習艦隊に所属する艦艇が並び、街から離れた島内には陸空の教育施設が見える。沖合上空には訓練飛行中の飛龍が周回しており、時折教官役の飛龍が鼻先で小突き回している様子が見えた。

＜エルグリスト＞の街中を覗けば学校関係者の家族や学生が行き交い、その光景は皇国の他の街と何ら変わらない。強いて相違点を挙げるとするならば、その街の特性上異常なまでに犯罪率が低いことであろう。

この島は軍の研究施設も多い為、部外者は一切上陸出来ない。海軍の運行する貨客船だけが、この島と外海を繋いでいた。

そんな＜エルグリスト＞の郊外、国立魔導学究院と敷地を共有し

て皇国騎士学校は存在した。

『廊下は走るべからず』――――そう記された張り紙を横目に、彼女は全力で走っていた。腰に佩いた細剣の金具が規則的にかちゃかちゃと鳴り、一層彼女を追い立てる。規則違反であることは承知の上、既に大半が形骸化している就学規則ではあるが、彼女はそれを積極的に破ることを是とする性質（たち）ではなかった。

そんな彼女が何故規則違反を犯してまで校内を走っているかというと、先程終わった兵站学の講義の終了後に講師である主計科大尉が彼女に担当教官からの伝言を告げたからだった。

それによると十四時三〇分に教官室に出頭するようにとのことだったのだが、講義が長引いたせいで伝言を聞いた時点で既に十四時四五分。大いに焦った彼女は、学友に筆記用具と講義資料その他を預けて担当教官室に全力疾走する羽目になった。

じくじくと胸の辺りを細い針で刺されるような罪悪感を覚えつつ、彼女は目的地である教官室まで無言で走り抜く。

そして見えてくる教官室の扉。扉横には、彼女の担当教官である『エリ・デルスマイヤー』の名が掲げられている。

彼女はほっとしたように速度を落とし、扉の前で二度深呼吸。息を整えた。「将校が焦っていては兵が動揺する、将校たるもの常に冷静沈着であることが望ましい」とは士官学校一年目で学ぶ内容である。

「――――よし」

頷き、二度扉を叩く。

一拍置いて、扉の向こうから入室の許可が下りた。

「お入りなさい」

いつもと変わらぬ担当教官の声。

その声は何処か甘ったるく扇情的で、間違っても軍最高学府の教官とは思えない。だがそれは、間違いなく彼女の担当教官の声だ。

「失礼致します」

扉を開け、一礼する。実家では家臣らに傅かれることが当然の彼

女であるが、ここでは一介の学生に過ぎない。

そして顔を上げると、そこには見慣れた教官室の風景と二つの人影があった。その内の一つは彼女の教官である陸軍少佐エリ・デルスマイヤー、もう一つは彼女の記憶にない青年中尉のもの。中尉は陸軍の軍装を着こなし、その胸には略綬がある。

教官の客人だろうかと、彼女は疑問を心の中に秘めたまま部屋に足を踏み入れた。自分の存在が不都合であれば、そもそも入室を許可することはないだろう。

そのまま進み、二人の元に向かう。二人の元までは六歩程度、しかし、その六歩の間にエリ・デルスマイヤーの口から驚愕すべき台詞が飛び出した。

「中尉、彼女があなたの所属する第〇八九班の班長、フェリス・ルル・レヴィアタンよ」

夕食の献立と何ら変わらぬ調子で紹介された彼女――――レヴィアタン公爵家第二公女、フェリス・ルル・レヴィアタンは最後の一歩で躓きそうになるくらい驚いた。

慌てて教官に詰め寄る彼女。騎兵科教官にあるまじき香水の匂いが鼻を突いた。

「教官！　どういうことですか！」

「どういうことも何も、〇八九班は欠員が出たでしょう。現役士官の」

「それは……確かにそうですが、小官に少しの相談もなく欠員補充を行うなど……」

言い淀み、俯くフェリス。

短く切り揃えられた淡い紅紫の髪が、二人の視線から彼女の表情を隠した。

「あなたの気持ちも理解出来るわ、だからラ・ディアス少尉――――大尉の殉職からしばらく時間を空けた。だけどね、レヴィアタン候補生、いつまでも〇八九班だけを特別扱いする訳にはいかないの。それとも、班全員の修了を遅れさせるつもり？」

「そんな……！　そんなことは……」

顔を上げた高級士官候補生の女性はしかし、龍種の証とも言える金色の瞳にうっすらと涙を浮かべていた。その表情を見た青年中尉が小さく目を見開いたことに、彼女は気付かない。

気付かぬまま、再び彼女は顔を伏せた。

「あなたの真っ直ぐな気性、あたしは好きよ。ときに人を裁く『士官』としてはどうかと思うけれど、人としては正しいのでしょうね」

デルスマイヤーは敢えて『軍人』とは言わなかった。人に好かれる士官がいれば、嫌われる士官もいる。フェリスは確かに理想的な上級士官候補ではないかもしれないが、そんなことは彼女を上官と仰ぐ者たちが決めれば良い。この世には、軍人に向かぬと散々言われ続け、それでも軍人になり、皇国軍最高学府の教官になった者もいるのだ。

自分らしく生きることが許されるなら、許されるだけそうすれば良い。

しかし、そんな教官の想いを知るにはフェリスという候補生は幼きに過ぎる。

「――――では……」

「そう、あなたの訴えは却下するわ。これはあたしの決定ではないの、騎士学校ひいては皇国四軍の総意、命令と心得なさい」

命令と言われ、逆らうことは出来ない。抗命するに足る理由もなく、フェリスは拳を握り締めた。

「中尉、御覧の通り真っ直ぐな良い娘です。いつか中尉と轡を並べる頃には、良い士官になっているでしょう」

「――ええ、確かに、その通りだと思います」

フェリスは二人の会話を沈黙の内に聞く。

青年の声は思ったよりも静かで、軍人というよりも何処かの書生と言った方が人々の理解を得られるような気がした。

「ただ、人は平等に未来を得られない。あなたの前任者のように、志半ばで倒れることもあるでしょうね」

「はい」

「――――こんなこと、あの戦役を戦い抜いたあなたに言うことじゃないわね」

デルスマイヤーが自嘲気味に笑み、フェリスを振り返る。

若き蒼龍公の姫君は、その身にやり場のない想いを満たして震えていた。

「レヴィアタン候補生、〇八九班班長として彼を宿舎に案内なさい。中尉は明日付けで正式に学校に編入し、校内ではあなたと同じ候補生となります。だから上官として扱う必要はないわ」

「――――はい、了解致しました」

答えるフェリス。辛うじて、声の震えは抑え込む。彼女なりの意地であった。

「では、退出を許可します」

「は」

二人は担当教官の許可を得ると、揃って教官室を出た。

扉を閉めても互いに無言。しかしそこで、フェリスは隣に居る青年の名を知らないことに気付く。

そして、担当教官の策だとすぐに察した。

名を尋ねるということは、ほんの僅かでも自分から相手に近付くことを意味する。嘗ての仲間を忘れられない自分がこの青年に対して距離を取ろうとすることを、あの教官は見抜いていたに違いない。

未熟、ひたすらに未熟。

こんな自分が何故班長として一班を率いているのか。将来の上級将校を育成するこの騎士学校で班といえば、一般的には騎士学校を修了してからも付き合いの続く間柄だ。班長とはそれら未来の上級将校たちの束ね、纏め役と言える。到底自分などが務まるとは思えなかった。

もしかしたら、家の力ではないか――――彼女は過去に何度もそう考え、その都度考えることをやめた。その疑念が事実であろうと、彼女はそれを受け入れるしかない。それ以外に生きる術も、生きる理由もないのだ。

「中尉、失礼かと思いますが、お名前を伺ってもよろしいでしょうか」

彼女の言葉に青年は一瞬虚を突かれたような表情を浮かべ、すぐに自分が名乗っていないことに気付いたようだ。居住まいを正し、制帽を脇に抱え直してフェリスに向き直った。

「皇国陸軍皇都防衛軍所属、陸軍中尉レクト・ハルベルン。明日からよろしく、レヴィアタン候補生」

そう言って差し出された手。

フェリスは躊躇いを見せつつもその手を握る。

ざらりとした感触が、返って来た。

星天宮は皇国宰相ハイデル・リッテンハイムの執務室。そこは皇王府総裁ルキーティの部屋と並んで人の出入りが激しい場所であった。嘗てはその二つに摂政の執務室が加わっていたのだが、今は摂政が長期の視察に出掛けているということで、摂政不在でもその仕事が減らない摂政官房以外は随分静かになっている。

皇国の両輪――――ここ最近市井の者たちにそう呼ばれるようになった皇王府総裁と皇国宰相。

彼らの下には、毎日のように国内外の有力者が詰め掛けていた。

「ですから、特定の商会を優遇することは出来ないと申し上げている」

「そこを何とか、とお願いしているのです、閣下。マルドゥク市場

への参入、我がギャルカスプ商会は南洋諸島にも多くの拠点を持っております。必ずや皇国に大きな利益を齎して見せましょう」

「それならばご自分でマルドゥクに赴き、商売の手を広げてくればよろしい」

「ですが――――」

これまでの繋がりがあるからと気軽に面会に応じたのが失敗だったと、ハイデルは後悔した。連日の超過労働に疲れ、判断力を失っていたのかもしれない。

海洋貿易商社としてはそれなりの規模を誇るこのギャルカスプ商会は、嘗て大貴族であったハイデルとは長い付き合いだ。彼が貴族として領地を経営し始めた頃からの相手であるから、もう四〇年以上になるだろうか。

先代の商会長とは仕事以外で会うことも多く、立場を抜きにすれば友人と呼んでも良い程だ。

そんな男の跡取りである商会の現商会長、歳は確か四三になっただろうか。未だ初等学校にも入っていない頃、この男を肩車したこともあるハイデルは、そんな男とこんな話をすることになったことに運命の皮肉を感じた。

「今のそれがしは一介の宰相、官僚に過ぎぬ。皇立の商社と協力関

係を結びたいのなら皇府殿に直接申し出ることだ」

「その際、閣下のお口添えは……」

男の、何処か媚びるような視線を無感動に斬り捨て、ハイデルはやはり無感動に告げた。

「そのような真似はせん」

「か、閣下……我々と閣下の間にある友誼は、閣下の立場が変わられたとてなんら変化するものではありません。閣下が求めるならば我が商会、商会員総て路頭に迷う覚悟でお応えいたします」

その躊躇い一つ見せないハイデルの態度に面食らった男は、それでもすぐに気を取り直してハイデルに擦り寄る。この辺りの神経の太さは純粋に敬意に値するな、とハイデルは思った。その神経の太さが自らの主君にも――――と思いかけたが、万が一それが備わったら今度こそ手に負えないと思い直した。

「ビート、それでは商会の者たちに我が主君が恨まれる。それがしはもう貴族ではなく、ただ皇国と皇室に忠誠を誓う一人の平民なのだ」

「平民などと、リッテンハイムの名はそのような軽いものではありますまい」

ビートと呼ばれた男は、ハイデルの言葉を慣れない冗談だと思ったようだ。あの大貴族リッテンハイムが平民などと、たとえ貴族でなくとも最上級の士族であり、そこらの一山一リッツの貴族が束になっても敵わぬ力を持っているではないか。

「確かに殿下はリッテンハイムの名を取り上げることはせなんだ。しかしそれは、殿下が我が家門の名と忠義を惜しんでのことではない。ただ、リッテンハイムの名の下に集う者たちも居るだろうという慈悲の御意(みこころ)から、我が家門とそこに集う者たちがこれまでに皇国に捧げてきた血と汗を認めてくださったからに過ぎぬ」

「ではやはり、殿下は閣下を頼りになされているということではありませんか」

「そうではない、ビート。お父上ならば、そんな答えには辿り着かん」

ハイデルは苛立たしげにビートを睨み、固く閉じられている扉を指し示した。

「今日の所は個人的に古い知り合いが訪ねてきたということにして

おく。先程の話は日を改めて皇府殿にするがよい」

「閣下、何故故に……」

何故、自分たちと共に利を得ようとは思わないのか、これは不当な財を得ようとしての行動ではない。

「何故……だと？　それすら理解出来ぬとは……ロジェスも先代陛下と同じように、子の教育には失敗したということか」

ハイデルは重苦しい溜息を吐き、頭を振った。

「閣下、一体何を仰っておられるのか私には」

「良い、まだ若いからと思うことにする。それがしもロジェスも、若い頃は周りが見えないこともあった。それがしの言葉の意味が判らぬなら、家に戻りロジェスに問うが良い」

告げ、ハイデルはビートの反駁を許さずに彼を部屋から追い出した。

退出するビートを迎えに来た秘書官が不思議そうな顔を見せていたが、今のハイデルにその秘書官に答えられることは何一つ無い。

ビートが退出し、いきなりがらんと広くなった執務室。ハイデルは自分の仕事机に戻り、深く息を吐いた。

「――――若造め」

今の自分は決して摂政に頼りにされている存在ではない。ビートはそれに気付かなかった。

確かに自分の能力を高く評価し、それに見合うだけの待遇を与えてはいるが、それも自分やその下に居る者たちを有効に使う為の手段でしかない。ハイデルや彼に同調する者たちは恩に怨を返せるような性質を持ち合わせておらず、摂政の厚遇にはそれ以上の功績を返さなくてはならないと考えるような者ばかり。摂政が自分たちを重用すればする程、自分たちはあの摂政に逆らう手段を失っていくのだ。

元々ハイデルは、一族を人質に取られている。

一度は撤回されたあの処分が、自分に対する摂政の意思表示であると彼は知っていた。皇国と自分に対する忠義を失わない限り、あの摂政は自分たちを裏切らない。だが、少しでも自分に逆意あらば、今度こそ――――

「見事なものだ。まさに皇王……」

必要とあれば、大功ある重臣とて族滅に処す。

だが逆に必要がないのならば、絶対に自分からは裏切らない。

何と分り易く、膝を屈するに足る男か。当代皇王のように自分の才気を過信し、自滅した男とはまるで違う。

現に先頃発生した巫女姫の拉致事件では、結果的に受理こそされなかったものの近衛元帥と特別護衛旅団の旅団長が辞表を提出したという。そもそも国家の治安に関わる大事であり、おいそれと拉致の事実を明かせない以上辞表の受理は難しかったのだが、直接護衛に当たっていた乙女騎士たちは揃って無期限の降格処分となり再教育を課せられ、近衛元帥と護衛旅団の旅団長は譴責と向こう三年間の減俸処分となった。

軍の再編成が始まったばかりであり、重要な地位にいる者を処分出来なかったことは確かなことだが、件の巫女姫自身が関係者の処分に温情を、と要請したこともあってこの比較的軽い処分に落ち着いた。

処分の軽減に関しては危機管理に関して大きな教訓になったという理由であったが、何処まで信じて良いものか。

ハイデルには別の意図があったようにも感じられた。現に巫女姫を拉致した者たちの行方が分からなくなっている。拉致の事実が存在しないならば、当然被疑者も存在しない。さて、彼らは何処に行ってしまったのか。

事件直後に皇王府が妙な動きを見せていたという噂もあり、そこに摂政の意志が介在していないなどということはあり得ない。あの

摂政が私怨から彼らを極秘裏に抹殺したという可能性も否定出来ないが、大逆人である自分でさえ職務という牢獄に閉じ込めた男がそんな無駄なことをするものか。

あの男は、誰かが自分の意図を裏切ったときに大きく反応する。

今回は近衛元帥や特別護衛旅団旅団長が対象であったが、この原則は彼らだけに適用されるものでもないだろう。

あの摂政は、他人を良く見ている。

「――――だが、それは逆説的に自分を全く信じていないことの証明か」

自分を信じないから、目の前に居る相手を鏡にして自分を見る。だから、相手から裏切らない限り何もしない。何も出来ない。ことが動き出して始めて自分も動くことが出来る。

慎重というよりも臆病。あの戦役を潜り抜けてそんな自分を隠す術は覚えたようだが、果たしてどこまで通用するか。摂政に近い白龍公を筆頭とした四龍公は彼の虚勢に気付いているであろうし、少し人を見る目がある者ならば今後気付く可能性はある。

「自信を付けてもらうしかないが、果たしてそう上手くいくものか」

自信とは、自らを信じること。

己を過信することは厳に慎むべきだが、己を疑っては己に裏切られる。ハイデルはこれまでの長い人生経験で、その程度のことは理解していた。

「今回の騎士学校への編入、もしかしたらそういう意図があったのかもしれんな」

摂政の騎士学校への編入は何よりも本人の希望であるが、それだけで実現出来るものではない。確かにこの国は皇王の意志が絶対的な力を持つが、それとて不可能なことはある。国内情勢が未だ安定せず、国外情勢も予断を許さない現状で騎士学校編入が思ったよりも早く実現した理由は、皇王府や四龍公がそれを望んだからではないか。

摂政を出来るだけ早く国主に相応しい人物に育て上げる為、国の現実を教え込む為、そして――――

「――――騎士学校には蒼龍公の姫君、国立魔導学究院には黒龍公の姫君がおられたか」

あの二人は、他の四龍姫とは違う。

蒼龍公の姫君はその生い立ちが。

黒龍公の姫君はその考え方が。

「ことは単純であり、単純ではない」

美しい水鳥が水面下では醜く水を掻いているように、美しい花も根は毒草と大差無いように。総ての事象は悉く裏の面を持っている。ならばこの編入、あの摂政にその物事の裏を教える為のものではないだろうか。

裏の裏、掘り返した根の更に下、本当に見るべきはそこにあるものだ。表を支える裏、根を支える土にこそ真実が隠れている。

「ふ……それがしも殿下も、嫌な相手に見込まれたものだ」

微苦笑を浮かべたハイデルは机の上の晶盤に手を伸ばし、浮かび上がった表示窓の向こうの秘書官にお茶の用意を命じた。

喉の渇きを癒せば、少しは気分も晴れるだろうか。

フェリスに案内されて騎士学校の一角にある煉瓦造り三階建て宿舎に行ってみれば、送った荷物は部屋の真ん中にでんと積まれていた。

士官学校からの進学組とは違い軍からの編入組、特に軍の職務をこなしながら騎士学校で学業に勤しむ現役士官には個室が与えられることになっている。これは彼らが程度の差こそあれ、既に軍事機密に触れられる立場にあり、只の学生とは負っている責任の重さが違うからだった。

宿舎そのものは他の学生も寝起きする建物であるが、部屋に入る為の扉に個人認証の鍵が取り付けられていることがその立場の違いを明確に示している。

「――――とりあえず、この部屋が中尉の部屋になります。朝食は〇四〇〇から〇八〇〇まで、昼食は一〇〇〇から一四〇〇まで、夕食は一六〇〇から二〇〇〇まで食堂が使えます。浴室は部屋に備え付けのものもありますが、屋上と地下に大浴場が設置されています。こちらは日毎に男女の使用が分けられていますので、間違えないように。勿論、覗き等の公序良俗に反する行為は校内の憲兵委員に逮捕され、然るべき処分が下されます」

「ほうほう……ちなみに寮監の方などは」

「今の寮監は戦史研究科のバルドルマイ教官ですが、教官は仕事があるので各班の班長が寮監代理の権限を与えられています」

「というと、班ごとに宿舎が宛てがわれているということですか」

「――――通常であればこの宿舎には四つの班が寝泊りしている筈なのですが、今のところ我々第〇八九班以外の班はおりません」

レクティファールの問いに少し躊躇い、フェリスは答えた。

はて、何か答えに詰まるようなことを聞いただろうかとレクティファールは首を傾げる。

「何故でしょう？」

やはりフェリスは少し悩んだ素振りを見せ、しかし質問には答えてくれた。

「――――実はこの宿舎は老朽化を理由に半年前に取り壊される予定だったのです。小官たちもそのとき退去する筈だったのですが、あの内乱で工事が中止され、一足早く退去命令が下った班はこの宿舎から退去して新しい宿舎に移ったのですが、我が班に退去命令が下ることはなく……」

嫌な沈黙が二人の間に流れる。

「――――――――――つまり、取り残された、と」

「――――――――――はい」

取り壊しが中止になったあと、軍は経費を削減し多くの予算を復興に回すことになった。内乱時の軍の責任を問う声が多く、それに押し負けた形であるが、その削減された予算の中にこの宿舎の取り壊し工事の予算も含まれていたのだろう。ならば取り壊さずにフェリスたちだけ新しい宿舎に移れば良いのだが、誰も住んでいない取り壊し待ちの宿舎を維持するという半ば無駄なことに予算を投入することも出来ず、来年新たに学生が増えるまでは現状維持という決定が下された。

「なんともお役所的な……」

「ですが、仕方が無いことなのです」

宿舎の維持はその宿舎に暮らしている者たちの仕事だ。学校側は無駄に予算を投じて宿舎の維持補修と行うくらいなら、そこに学生を住まわせて彼らに宿舎を維持させるほうが安上がりであると判断したのだった。

「ちなみに先程の食堂とは」

「新しい宿舎がここから歩いて四〇分のところにあります」

「――――……」

絶句。

レクティファールは恐ろしい現実に慄いた。

日々の糧を得るためには過酷な対価が必要ということか、と。

「ですので、最近は班員が持ち回りで食事当番をしております。無理にとは言いませんが、中尉も協力して頂けると助かります」

軍務もあるレクティファールに食事当番は酷だろうとさすがに思ったのか、フェリスは可能な限りという条件を提示してきた。そこまで気を遣われて断れる程、レクティファールは素晴らしい性格をしていなかった。

「――――出来る限り、ご協力いたします」

現実とはいつも過酷、彼はひしひしと感じる寒さにそう思った。

フェリスに案内されたレクティファールが談話室に入ると、そこは思ったよりも広く、そして取り壊さなければならないほど老朽化しているとはやはり思えなかった。軽く魔法で走査しても居住に問題はないという判定が出たが、もしかしたら完成から一定年数を超えた建物は取り壊さなければならないという決まりがあるのだろうか。一応軍の建物であるし、有り得る話だ。

彼はそんな類のことを思考しつつ、先導するフェリスに続く。

「皆、集まってたんだね」

フェリスが談話室に集まっている班員たちに声を掛けた。

男女が一人ずつ、男はソファで本を読み、女は床の絨毯の上で編み物をしていたが、フェリスの背後に別の影があると気付いて姿勢を正した。

「中尉、我が班の班員を紹介します。まずルフェイル・ゴードン」

先程までソファで読書をしていた男だ。

ざっくりと刈り込まれた深緑の髪と同じく深い緑の瞳を持ち、立ち上がるとレクティファールよりも背が高かった。さらに肩幅も広く、その身体は見事な筋肉で鎧われている。

「ルフェイル・ゴードン。騎兵科砲兵専攻」

むっつりとそれだけ告げ、彼はレクティファールに手を差し出した。

左手だった。

「――――左利きなのか」

「いいや、右利きだ」

「――――――――そうか」

「うむ、そうだ」

差し出された手を握ってみれば案の定万力のような力で握り返してくる。

どうやらかなり良い性格の持ち主らしい。初対面の人物に利き腕ではない手を差し出し、さらにこの所業である。

レクティファールはさらに強い力で握り返してルフェイルを睨んだが、睨んだその顔が何処か悲しげに見えて力を弱めた。

「お前の前任者は良い奴だった。すぐに歓迎しては奴に申し訳ない」

「――――ふむ、なるほど」

レクティファールはルフェイルの言葉に頷き、手を潰されない程度に抵抗するだけに留めた。この男は礼儀を知らないのではなく、その優先順位に死者も含めているだけなのだ。

しばらく待つと手に加えられていた圧迫感は消え去った。

ルフェイルは左手を下げ、改めて右手を差し出した。

「改めて歓迎する。良く来た」

「うん、よろしく頼む」

今度は握り潰されなかった。

ごつごつとした手のひらがしっかりとレクティファールの手を掴んでいる。

レクティファールも、今度はきちんと握り返した。

「何かあったら俺に訊け、女には訊けないこともあるだろう」

「――――ああ、助かる」

無表情のまま、女性二人の前でそんなことを言い始めるルフェイル。確かに事実ではあるが、後でも良いじゃないかと思う。

「次に移っても？」

黙って二人の遣り取りを見詰めていたフェリスが、呆れたような口調で確認してくる。余計な気を回しているのだとすぐに気付いた。

「勿論」

しかし、訂正はしない。

事実は事実である。泣きそうにはなるが。

フェリスはレクティファールの男としてのちっぽけな意地に気付きもせず、話を続けた。

やはり、ちょっと泣きそうになった。元々距離を感じてる上に、この扱いは辛い。

「パトリシア・ウィンテル。専ら食事当番をしているのはこの娘です」

フェリスの紹介に、編み物をしていた女が進み出る。

垂れ目でふわふわした卵色の髪の女性だ。満面の笑顔を湛えたその表情はとても軍人には見えない。そこらの保育所で働いていたら、さぞ似合うことだろう。

「主計科のパトリシア・ウィンテルです、よろしくお願い致しますぅ」

「ああ、よろしく……」

気の抜ける笑顔、さらに間延びした口調でこちらのやる気を削ぐこと夥しい。

レクティファールが抱いた感想は一つ、何とも濃い面子だ。

「あともう一人居るんですが……パティ、タチアナはどうしたのかな」

「学究院の資料室じゃないかしらぁ……一応、呼びには行ったんだけど」

「俺がな」

「ありがとぅねぇ、ルフェイルちゃん。今度の玉子焼きは甘くしてあげるね」

「――――」

ぼそりとパトリシアの言葉を補足したルフェイルだが、返って来た礼に口を噤んだ。余計なことを言うんじゃなかったと後悔しているようだ。

「ルフェイル」

「言うな」

レクティファールが一応慰めの態度を示したが、ルフェイルは無表情のままそれを拒絶した。

同じ男としてそれ以上の情けは却って相手を傷付けると判断したレクティファールは、只、ルフェイルの肩を軽く叩くだけであった。

「それは困ったね」

「うん、でもねぇ、わたしが呼びに行ってもやっぱり来ないと思うの」

「――――まぁ、そうだよね」

フェリスはパトリシアの言葉に頷くしかない。

過去の戦績を見てみれば、パトリシアがあのタチアナを連れ帰れたことなど一度もない。

この班の中であの本の虫を捕獲して連れ帰ることが出来るのは、今のところフェリスだけである。一度ルフェイルが力尽くで連れ帰ろうとしたのだが、身体に触れた瞬間電撃で気絶させられたという。

どうも、異性が触れると作動する自動防御術式が常時展開されているようだった。

「仕方が無い、呼びに行ってくるよ。中尉もご一緒に如何ですか、学究院への道も案内したいですし」

「うん、それで良い。あ、あともう一つ良いですか」

「何でしょう」

「私のことはレクトで良いです。あと敬語も結構、明日からは仲間ですし」

既にルフェイル辺りは同じ班の仲間と看做している節がある、パトリシアは誰に対しても常にあのような態度なのだろう。

フェリスはレクティファールの提案に目を白黒させていたが、すぐに目を伏せて了解の意を示してきた。

妥協しただけ、と考えるべきだろう。

「――――分かった、そうさせてもらうよ。ボクのことも好きに呼んで良いから」

「分かった、フェリス」

「うん。パティは夕食の準備をお願い」

「はぁい」

パトリシアの返事にこくりと頷き、フェリスは再びレクティファールを先導して宿舎を出る。

目指すは騎士学校と敷地を共有する国立魔導学究院。

徒歩三〇分の道程である。

学究院に辿り着く頃には、既に日は落ちていた。それでも学究院は煌々と灯りを点けており、まだ多くの研究者や学生が残っていることを二人に教えてくれる。

街灯の灯りを頼りに進んできた二人だが、帰りは学究院の魔動車を借りることで意見が一致した。敷地内を走るために小型化され、最高速度も制限されたものだ。一定の規模を持つ施設には常備され、目的地に着くと自動的に元の場所に戻る。

「無駄に高い技術力ですね……」

「そう？　確かに今の形になったのは最近だけど、技術そのものは二〇〇〇年前からあるよ」

「はは、そうですか……」

「可笑しな人だね。そんなこと中等学校で教わるだろうに」

フェリスは細剣の金具を鳴らしながら学究院の施設を進む。

レクティファールはこの世界の技術体系に思いを巡らせながらそのあとを追った。

「これから会うのは、あの黒龍公の姫君。無礼討にされることはないと思うけど、その力は戦い方次第では陸軍の一個師団にも劣らないって言うよ。気を付けるようにね」

「何をどう気を付ければ良いのか……」

「それは本人に聞いて、ボクが外からどうこう言うことじゃないと思うから、ね？」

困惑を隠し切れないレクティファールに笑い掛け、フェリスは何処か悪戯好きの子どものような表情を見せる。

「けど、そうだね、いざというときの為に甘味でも用意しておくと良いよ。特に餡子がおすすめ」

「餡子ですか」

「うむ、そしてボクはクリームで。パティは果物が好みかな」

「――――――――」

「どうしかしたの」

「いえ、別に」

そんなことは聞いていない。が、今度機会があればご馳走することになるだろう。

円滑な人間関係の形成にはある程度の予算が必要なのだ。

「む、ここみたいだ」

何度か学究院の研究者や学生とすれ違い、フェリスが立ち止まったのは第十二資料室と書かれた部屋。

レクティファールが探ってみれば、確かに生命反応が一つあった。

「またお篭りかぁ……タチアナももう少し協調性があればなぁ」

そうぼやきながら扉を開くフェリス。

薄暗く、黴臭い空気が部屋に入った二人を包んだ。

フェリスは灯りを点けようと扉横の晶盤に手を伸ばしたが、天井の灯りそのものが壊れているのか反応はなかった。

仕方が無いといった風に溜息を吐き、フェリスはその場で叫んだ。

「タチアナ、晩ご飯の時間だよ。あとついでに明日からうちの班に

配属になる中尉も連れて来た」

「――――あれ、夕食のついでなのか私」

探し人の名前を呼ぶフェリスと、微妙な表情を浮かべるレクティファール。

二人は反応がないことを確認すると、揃って資料室の奥にある閲覧机に向かった。

そこに居たのは、弱々しい卓上灯の光で分厚い資料を読む小さな少女。

真っ黒い新月の夜空そのものの髪を床まで垂らし、分厚い外套で身を包んだ彼女は、すぐ背後にいる二人に気付いていないようだった。

「タチアナ、ご飯だよ」

「――――あの、タチアナさん？」

やはり無言。

気付いていないのか、意図的に無視しているのかは不明だが。

フェリスはタチアナの“暗黒”色の瞳の前で手を振り、気付かないと判断するとその手にある本を閉じた。

「――――あ」

ここでようやく少女が声を発した。

無論、彼女の実年齢を考えれば少女などではないのだが、その声や態度は幼い少女のそれである。

彼女は少し険しい表情で背後を振り返った。

「フェリス、何で邪魔するの」

「晩ご飯。あと、新しい班の仲間」

「――――やっぱり私はついでか」

壁に手を付けて項垂れるレクティファールをフェリスが指し示す。

酷い扱いである。

「レクト・ハルベルン中尉、明日からはハルベルン候補生」

「――――ハルベルン？」

レクト・ハルベルンという名を聞いたタチアナが不思議そうに小首を傾げた。

彼女はレクティファールを見詰め、次にフェリスを見上げた。

「ハルベルン？　本当に？」

「そうだよ、それがどうかした？　メリエラ姉のところの騎士さんだよ」

「――――ふぅん、ハルベルン、そう……」

ふぅん、だとかへぇ、だとか色々な反応を示しつつ、タチアナは椅子から降りると、壁際のレクティファールの背中に手を触れた。

振り返るレクティファール。

自然と、自身の胸の下辺りまでしか身長のない漆黒の姫君を見下ろす形になった。

「タチアナ。タチアナ・ロロ・ニーズヘッグ」

真っ直ぐに自分を見上げるタチアナの瞳に、レクティファールは何処か言い知れない迫力を感じた。龍族である筈の彼女が何故金色の瞳を持っていないのか、そんな疑問を抱くことさえ出来ない程、まるで底の見えない井戸を覗いているかのような、言葉に出来ない不安感が湧き上がってくる。

しかし、目の前の小さな女性が名乗ったのであれば、それに答えることは何よりも優先されるべきことだ。

「レクト・ハルベルン。陸軍中尉です」

「――――ハルベルン？」

「ええ、今は」

レクト・ハルベルンがハルベルン家の養子であることはすぐに調べられる。元々は違う姓であったのなら、今は、と答えるかもしれない。フェリスはレクティファールの言葉をそんな意味で捉えた。

しかし、タチアナは別の意味で捉えた。

「そう、ハルベルン、――――あっちでは別？」

そう言ってタチアナが示すのは、皇都の方角。

「――――――――」

より正確にその指先に在るものを認識するなら、そこに存在するのはこの国の主が住まう城。

星天宮、だ。

「――――ええ、別ですね」

気付かれた。

レクティファールはそう判断し答えたが、タチアナはそれ以上何も訊いては来なかった。

「そう、わたしはそれでもいいけど」

「そうですか、助かります」

「ん」

タチアナは数冊の本をレクティファールに手渡した。

どうやら持ち帰るものらしい。レクティファールはそれを受け取り、ずっしりとした質量に若干困惑した。

「これって、持ち出しても良いものなんですか？　結構古いものみたいなものですけど」

「落とさないように」

すたすたと出口に向かうタチアナ。フェリスがすぐあとに続く。レクティファールはそれを追い掛けた。さらに問う。

「いや落としませんけど、持ち出しても良いものなんですよね？」

「落とさなきゃ壊れない」

「え、ちょ、本当に持ち出し可なんですかこれ？」

レクティファールの疑問に、結局タチアナは答えなかった。

フェリスがほんの僅か気の毒そうな顔で彼を見ていたことを考えるなら、答えは明白であったが。

皇国歴二〇〇九年、白の第一月二日。

皇国国事国政全権代行職摂政レクティファール・ルイツ＝ロルド・エルヴィッヒ。

皇国陸軍中尉レクト・ハルベルンとして騎士学校編入。

運命を切り拓く最後の牙たちと、出逢う。

第十三話「紅＋蒼＋黒」

要塞都市＜ウィルマグス＞。

あの戦役の後、アルトデステニア皇王家の直轄領となり、周辺三郡の中心都市となった街。皇国側から新たに鉄道が敷設され、＜ヴァーミッテ＞に代わって皇国鉄道網の最北端となっている。さらに北に向けて鉄道の敷設が始まっているが、これが来るべき帝国との戦いに備えてのものであるとは誰に目にも明らかだ。ただ、その建設の名目は帝国領アクィタニア王国への交易路確保だった。

遡ることひと月前、皇国摂政と王国の第一王女の婚約が発表され双方の国民を驚倒せしめたことは、両国の歴史から見て至極当然のことだと言える。血で血を洗う凄惨な戦いを続けてきたアルトデステニアと新生アルマダの両国が姻戚関係を結ぶと聞き、一部の愛国主義者が抗議集会を開いたことは、程度の差こそあれ両国民が互いを敵として認識していることの明確な証だろう。

しかれども、その国民の興奮は長続きしなかった。皇国とアクィタニア王国政府との間で交易協定が締結され、人材（ひと）、物資（もの）、資金（かね）の流れが生まれたことがその理由の一つだ。

元々アクィタニア王国は皇国と国境を接していながら、本国と協調して積極的に皇国と敵対することはなかった。大した軍備を持っていなかったということもあるだろうが、何よりもその住人の多く

が亜人やそれと関わりのある者たちであり、皇国に対して本国ほどの敵愾心を抱けなかったことが最大の要因として挙げられる。

そして戦役後、現国王ディトリアの打ち出した親皇国政策の数々が実を結ぶにつれ、王国は元より皇国でも王国王女と摂政の婚約を歓迎する声が日増しに大きくなっていき、これまで婚約に対して断固反対の立場を崩さなかった皇国議会の婚約反対派はその論調を消極的反対へと変えた。最終的に彼らは条件付きで婚約を認めるまでに態度を軟化させたのだが、その政治工作の切り札が、皇国領からアクィタニア領まで敷設されることが決定した鉄道である。

両国間の交易拡大を目的に王国側から打診された鉄道整備事業だが、皇国側はこれを近い将来発生するであろう戦いに向けての戦略の一つと位置付けた。

これまで皇国側の補給網は、その最北端を＜パラティオン＞要塞に設定していた。鉄道こそ敷設されていないものの加工石材で舗装された道路は軍用車両の通行にも耐えられるよう設計され、これまで十分にその役割を果たしてきたと言える。

しかし、先の戦いで＜パラティオン＞そのものの不滅神話に傷が付き、帝国側が数十万の軍勢を＜パラティオン＞の鼻先に展開出来ることも明らかになった。

今回の戦いは運が良かった。帝国側は要塞突破後の戦いを想定して戦力の温存を図り、結果的にそれが皇国側に時間という代用の利かない戦略物資を与えてくれた。皇国はその与えられた時間で内乱を鎮圧し、さらに摂政を含む大規模な増派部隊を編成、これを＜パラティオン＞に送り込むことに成功した。

だが、帝国側が最初から要塞突破とその周辺のみの占領を目的として軍を動かしていたらどうなっていたか。

答えは一つ、帝国側の戦略目標達成と、皇国側の戦略的敗北である。

皇国は確かに勝利した。されどその勝利が罅割れた薄氷の上で得た勝利であると気付いたとき、皇国は対帝国戦略の見直しを迫られた。皇国に深く根を張っていた＜パラティオン＞要塞への過信を取り除き、＜パラティオン＞を拠点の一つと想定した広域防衛圏の確立を目指したのはその戦略の見直しの結果だった。

皇国側の公式名称として『北部国境広域防衛圏構想』と名付けられたその国防計画は、＜パラティオン＞要塞を絶対防衛線とし、＜ウィルマグス＞を防衛圏全体の中核に据えたものだ。良将と名高いガラハ・ド・ラグダナ陸軍中将率いる北方国境守備軍を＜ウィルマグス＞と周辺三郡に配し、各地に空軍基地を含めた軍事基地を建設。それらを結ぶ高速補給線を構築することで防衛圏全体の防御力向上を図った。

この高速補給網を担う存在が今回敷設されるアルトデステニア・アクィタニア鉄道だった。

勿論帝国本国側はこの思惑に気付いており、アクィタニアに圧力を掛けた。しかし、アクィタニアは本国からの圧力に対し、この鉄道網が帝国領に与える恩恵を強調。特に皇国側の技術を手に入れるまたとない機会であると訴えた。

それが建前であると、誰もが知っていた。しかし、皇国戦の切り札であった＜ムジョルニア＞を破壊された上、最強と謳われた第三

軍集団に敗北の汚泥を塗り付けられ、帝国本国は皇国とことを構えるだけの力が残っていない。対皇国戦の敗北によって国内や従属国では独立の気運が高まりを見せ、帝都では皇太子の位を巡って帝族たちが水面下での争いを続けている。

それらの理由で身動きの取れない本国は、結局アクィタニアの要望を受け容れた。

アクィタニアはその代償として朝貢金の増額を命じられはしたが、その金額は決して大きくない。アクィタニア国王ディトリアが本国に働き掛けた結果だ。彼の影響力が未だ健在であると示し、この一件は幕を閉じた。

凋落著しい帝国本国と距離を置き、皇国と接近するアクィタニア王国。

この一連の動きが果たして何を目的としたものなのか、ディトリアという男が余りにも巨大であるが故に人々は真実に近付けず、ただ傍観に徹するしか無かった。

帝国の技術の粋を凝らした巨大兵器＜ムジョルニア＞。その跡地は現在に至るも未だその多くが立ち入り禁止区域となっている。

残骸の全周に渡って張り巡らされた三重の鉄条網の周りを陸軍部隊が警戒し、空には空軍の飛竜が複数見える。帝国側の破壊工作を警戒し、警備は恐ろしく厳重だった。

残骸には白い蔽いが掛けられて中を窺うことは出来ず、残骸を積み込んだ軍用車はやはり陸軍の部隊によって護送され、＜ウィルマグス＞の基地へと向かう。この光景はあの戦役後の休戦交渉後から続いており、都市の住民にとっては最早日常の一部と化していた。

そんな残骸の運搬も佳境を迎え、この日は＜ムジョルニア＞の最重要部位である動力炉の解体が進められていた。地下に設置されたそれを回収する為には地上部分の残骸や瓦礫の撤去を行う必要があり、結局、動力炉の解体は最後の最後になってしまったのだ。

「――――帝国がこれだけの動力機関を作り上げるとはなぁ」

軍の第一国防研究所から派遣された中年の研究者は、防護服を纏ったまま本体が崩壊しても尚原型を留めたままの動力炉を見上げて呟いた。

機能凍結されたままの鋼色の円筒は彼の身長の五倍はあるだろうか、周囲の長さもそれに見合った大きさでその点だけを見ればまるで家屋のようだ。

ただ、その中に内包されている動力源は未だ不明で、機能を回復させるか動力炉本体を解体する以外にその正体を掴む方法は無い。関係各所との協議の末、軍は第一国防研究所の一角に戦略級兵器の爆発にも耐えられる施設を建て、そこでこの動力炉の解体を行うこ

とを決定した。

研究者は、動力炉を研究所まで運搬する責任者の一人としてこの場に居た。

「我が国の重戦艦だってこんな大きさの機関は積んでいないぞ」

彼は作業員たちの手によって次々と伝送管が外されていく炉に片手をつき、その材質や構造についてあれこれと想像を巡らせる。

皇国の技術と異なる点は何処か、帝国の技術力の特徴は何処か、この炉を無力化することは可能か。

考えれば切りがない。

この炉一つ取っても皇国と帝国には大きな技術的差異が存在しており、その差異がときとして致命的な戦略的失点を招くことがあると彼は考えていた。

たとえば、＜ムジョルニア＞が一基である保証はどこにも無い。これまで回収された残骸は設備さえあれば再生産可能なものであると判明しており、この炉が複数生産可能であれば＜ムジョルニア＞そのものが量産出来るということだ。

量産によって更に改良が進めば、直接本土を砲撃することが可能になるかもしれない。

彼の脳裏には、＜ムジョルニア＞の砲撃によって火の海と化す祖

国の大地が映し出されていた。

「冗談じゃない」

そんな光景は御免被る。

少なくとも、自分が生きている間は。

彼は防護服姿の部下が駆け寄ってくるのを認め、炉から離れた。

「主任、ちょっといいですか」

「どうした」

「持ってきた魔力波の探知計が妙な波を捉えたんです」

そう言って差し出された数枚の記録紙には、確かに見慣れない波形が記録されている。

彼は顔を顰めた。余り歓迎出来ることではなかった。

「この炉からか？　帝国で造られたこの炉から魔力が検出されたのか？」

「はい。ラグダナ中将からの報告書でも稼動状態の＜ムジョルニア＞が周辺から魔力を集めていたという記述がありましたし、もしかしたらこの炉は……」

「帝国の魔導炉ということか、しかも我が国の都市動力炉に匹敵する大きさの」

彼は血の気の引いた顔で巨大な動力炉を見上げた。

もしも帝国が皇国に準ずる程度の魔導技術を手に入れたなら、圧倒的な物量こそが帝国の最大の武器だというこれまでの定説は根底から覆る。

国防計画も変更を余儀なくされるだろう。そしてその変更を行えるだけの時間が、果たして皇国に残されているのか。

「どうしますか、もう少しここで調べてから――――」

「いや」

彼は部下の言葉を遮り、「今すぐにでも皇都へ送れ」と指示を出した。

そのまま運搬の準備を進める作業員たちに駆け寄り、自ら指示を出し始めた。

彼の表情には、今となっては明確な焦燥がある。

「＜ヴァーミッテ＞からの列車の手配はどうなっている。可能な限り早く、そして安全に運べ。向こうにもこの情報（データ）を送って受け入れ態勢を取ってもらえ」

研究者とはいえ、主任研究者ともなれば多少は政治のことを理解出来る。

この帝国の置き土産は、どう転んでもこの国を聳動させるだろう。そのとき彼が自分や国の為に出来ることといえば、、少しでも多くの時間を得ることだ。

ここに来て一日二日の近いは無いも同じかもしれない。

だが、急がずにはいられなかった。

「――――主任、あの、ちょっといいですか、実は……」

先程彼を動揺させた記録紙を持ってきた部下が、件のそれとは別の記録紙を手に耳打ちしてくる。

彼は少し不機嫌そうに部下の言葉を聞いていたが、部下の言葉が

続くにつれ今度こそ血色を失った。

「寄越せ」

部下から記録紙を二枚とも奪い取り、彼はそれを見比べた。

そこには、良く似た波形。

「――――――――」

彼の両手ががたがたと震えた。

目は泳ぎ、防護硝子の向こう側の顔には玉のような汗。

「こ、この情報は研究所にはまだ送るな」

「え、ですが……」

「先に別の、そう別の場所に送らねばならん」

彼は部下に記録紙を押し付け、怒鳴った。

「星天宮へ、摂政殿下の元に」

それ以降の言葉は、大きく震え、部下には聞き取れなかった。

だが、部下は上司の指示に従い、地上にある軍の通信所へと向かう。

その手に、＜ムジョルニア＞と“蒼龍公”と“紅龍公”の魔力波形記録を持って。

広い講義室は、はっきり言ってしまえば人が少なかった。二〇〇人は座れるであろう席は一割も埋まらず、講義を受けている候補生たちは講師の話などまともに聞いていない。ある者は別の講師に提出する研究報告書（レポート）を堂々と書き、ある者は高鼾、ある者はひたすら内職に励んでいる。

「――――この調査の結果、我々の文明以前に更に高度な技術を持った文明が存在していた可能性が生まれた訳であるが、この文明が存在していた証拠だと考えられている遺跡はこの調査以降に世界の各国で発見されるようになった。このアルマダ大陸にもその遺跡は複数存在しており、我が国の南部にも非稼動状態ではあるが、第一次文明の遺跡が確認されている。皇国歴六九〇年の南洋諸国間の大戦争は、南洋諸島の小さな島で発見された稼動状態にある第一次文明の遺跡が原因だ。彼らはその遺跡から得られる技術を求め、乱戦状態に陥った。そしてその五年後……」

講義科目は古代戦史であったのだが、いつの間にか講義内容が逸れて今は何故か第一次文明の話になっている。

元々退屈な講義であり、必須科目で無ければ受けようとも思わない者が多いのだろう。雛壇状の座席の最上段、その更に隅の方で講義を聞いているレクティファールとタチアナは誰憚ることなく講義内容とあまり関係の無い話をしていた。

この二人にとって、耳から入る情報が一つである必要は全くない。

「――――じゃあ、『タチアナ』っていうのは」

「偽名じゃないけど、幼名。母の後輩が同じ名前だった」

「何でまた」

彼女の名が彼女の母親から聞いていたものと違うことには、自己紹介を受けたときに気付いていた。

そのときは何か理由があるのだろうと思っていたが、あれから三日経ったこの日も彼女は動きを見せなかった。

だから、レクティファールは講義が重なったこのとき、その理由を問うたのだ。

「護り名とも言う。一種の呪い（まじな）」

「ほう」

「名前はその存在を表す第一の記号。それを使って相手を呪うこともあるから、それを防ぐために護り名を名乗っていた」

タチアナは講義内容を書き記しながら、一つ分空けた隣に座るレクティファールの質問に答える。

すらすらと記される文字は少し歪だった。

魔導学究院の研究者である彼女が何故騎士学校の講義に参加しているかといえば、それを騎士学校が認めているからだろう。嘗て同

じ組織であった頃の名残だという。

「でも、今では廃れた」

「――――実際には意味が無い風習だからですか」

「そう。昔、呪い（まじな）は名前を媒介にしていると思われていたけど、実際には呪術を掛ける術者が相手の姿を意識内に描いているだけ。実際に名前で呪いが掛けられたら、同姓同名の複数人が呪われてしまう」

「まあ、そんなところでしょうね」

今現在では呪術そのものが廃れ始めている。系統立てられた技術としての魔法が主流となり、嘗てのような呪術的な魔法は不確実で非効率的なものとして過去の遺物になった。

タチアナの言う護り名という風習も、今では黒龍公の領地のごく一部で細々と続いているだけらしい。

「本当の名前は名乗らないのですか」

「知っている人はみんな知っている。班のみんなも知っている。学

究院の人も」

「――――――――」

じゃあ、何故自分には『タチアナ』と名乗ったのか。

レクティファールの疑問は無言の問い掛けとなり、視線に混じった。

タチアナはちらりとレクティファールに一瞥をくれ、すぐに正面の黒板に向き直った。

「――――礼儀。偽名を名乗った人に、何故本当の名を名乗らなければならない」

「――う。そ、それはそうですが……班の他の人も……」

「初対面の人に他人の本当の名前を明かすのは礼儀知らず」

「な、なるほど」

言われてみれば、まさにその通りである。

レクティファールが偽名を名乗っている限り、タチアナは本当の名を明かさないということなのだろう。

何とも分り易く、そして清々しい態度か。

「ちなみに、タチアナさんはどちらがお好みで」

「本当の名。当たり前。偽りの名を喜ぶ人は犯罪者ぐらい」

「そうですよねぇ……うん」

タチアナの言うことは一々正しい。

さすが四龍姫最年長、人々からは黒の賢龍の娘と呼ばれることもあるというが、十分納得出来る話だ。言葉そのものが正しいのではない、放たれるその言葉が正しいと人に思わせることが彼女の才能だ。

「しかし、名乗っていいものなんでしょうか、私って」

「今更。でも、それはあなたの勝手」

「勝手と言われると、少し困りますねぇ」

レクティファールは一時記録領域に取り込まれていく板書の内容を確認しながら、天井を仰いだ。＜皇剣＞は帳面いらずで非常に便利である。

ただ、あとで纏めて提出を求められることもあるそうなので、それ専用の研究報告書は書いているのだが。

「名乗っちゃいけないと言われた？」

「判断はこちらに任せるそうです。必要ならば名乗っても良いらしいですが、この生活は続けられなくなりそうで」

「それは間違いない」

「ですよねぇ」

レクティファールとしては、今後長い付き合いになるタチアナといつまでも偽りの名を名乗り合う訳にもいかない。何より、タチアナが護り名を名乗り続けるということは、それが必要な理由があると周囲に示していることになるのだ。

今はまだ良いが、いつか二人の間を邪推し、勘繰る者も現れるかもしれない。

「いつまでもこのままじゃ、周囲に隠しごとしてますって宣伝しているようなものか」

「人は誰でも隠しごとの一つや二つある。でも、護り名を名乗り続けることは、余り嬉しくないし良くない」

再びレクティファールに向けられたタチアナの瞳は、今度は黒板に戻らなかった。

じぃっとレクティファールを見詰め、離れない。

この暗黒色の瞳も、或いは護り名と同じ役割を負っているのか。

偽りの名には偽りの名を、偽りの姿には偽りの姿を、と。

「嫌ですか」

「わたしは、自分に嘘を吐くのは嫌い」

はっきりと告げられたその言葉に、レクティファールは苦笑を浮かべる。

なるほど、この女性は本当に真っ直ぐな人だと思った。

自分が正直であるが故に、他人（ひと）にも正直であって欲しいと願う。
ある種浮世離れしたその願いを、レクティファールは微笑ましいものとして認識した。

「それは……申し訳ないですね」

「そう思うなら、謝るより先にやることがある」

「まあ、その通りです」

レクティファールは嘆息し、一瞬だけ変身を解いた。

認識を阻害する簡易結界を張った上での行為だが、危険であることに変わりはない。

だが、やらなくてはならないことだ。

「改めて名乗りましょう」

レクティファールは色素の存在しない白髪を晒し、銀の瞳でタチアナを見た。

時期皇王と黒龍姫。決して人々の意識に上らない白と黒のコント

ラストが講義室の片隅に現れる。

「私はレクティファール。レクティファール・ルイツ＝ロルド・エルヴィッヒ。この国を総ての民より預かる者」

名を聞いた瞬間、タチアナの瞳が金へと変じた。

彼女は自分の名と姿を、偽りの名と姿に対する礼儀と言った。

それが必要無くなった今、彼女もまた己の内の礼に従い本当の姿を見せたのだ。

「――――オリガ。黒龍の公爵アナスターシャの娘にして、その血を受け継ぐ唯一の者」

金色の瞳にレクティファールを映し、彼女は詠うように告げた。

気のせいか、これまで少しも動かなかったその細面に微笑さえ浮かんでいるように見える。

「オリガと呼んでも？」

「お好きに。わたしは、レクトと呼ぶ。お互いの為に」

「では、私もオリガと」

「ん」

タチアナ――――オリガは心なしか満足そうに頷き、黒板に視線を戻した。

先程よりも鉛筆の音が軽やかになったと思うのは、レクティファールの錯覚であろうか。

彼は再びレクティファールからレクトへと姿を変え、結界を解いた。

少しだけ心が軽くなったのも、錯覚なのかもしれない。

講義を終え、レクティファールとオリガは昼食を一緒にしようと約束していた班の面子との待ち合わせ場所に向かう。

途中、砲兵学の講義を終えたルフェイルと合流し、三人は待ち合わせの場所である第一講義棟の談話室に足を踏み入れた。

途端に三人を包む喧騒。

それは、三人の前に存在する人の壁から発せられたものだった。

「うん？　今日何か催しでもあったか」

「私は聞いていませんが……」

「わたしも」

ルフェイルの疑問に答えるレクティファールとオリガ。

三人は揃って首を傾げ、人垣を避けるように先に進んだ。

その最中、「またか」であるとか、「良く飽きない」とか、「そろそろどちらか退学処分になるんじゃないか」などという不穏な言葉が聞こえ、レクティファールは人に気付かれない程度に眉を顰めた。この騒ぎの理由が分かったからだ。

何処の学校でも、学生同士の喧嘩というものはなくならないらしい。

「あ！　みんな！」

人を掻き分け進む三人――オリガはレクティファールの掻き分けたあとについて行くだけだが――の耳に、聞き覚えのある声が届く。

声の聞こえた方向を見れば、パトリシアが一人人混みの中で身体を縮こませていた。

彼女は三人を見付けると半泣きの歪んだ顔で駆け寄ってくる。

「パティ、どうした。何の騒ぎだこれは」

「あのね、フェリスちゃんが……」

「――――巫山戯るな！　ボクはそんなことしてない！」

ルフェイルの求めに応じてパトリシアが騒ぎの原因を説明しようとしたそのとき、騒ぎの中心からやはり聞き覚えのある怒号が轟いた。

「うちの班長ですか」

「……うん」

声紋から声の主を確認したレクティファールが、パトリシアに確認する。

そこで頷きが返ってくれば、パトリシアの説明を聞くまでもなく三人は大凡の事態を把握した。

彼らは騒ぎの中心に向け、再び人を掻き分ける作業に入る。

「どうだか、どうせマリア様の力で班員を揃えたんでしょう。前はともかく今度は現役の中尉、しかもあの戦役の生き残りで勲章授与者。出来すぎとは思わない？」

フェリスと口論をしている相手の声が聞こえてきたが、こちらはレクティファールには覚えのない声だった。

しかし、ルフェイルとパトリシアはその主を知っているらしい。

「――――またあいつか、参謀科は暇なのか、暇なんだな」

「うーん、多分暇じゃないと思うけどなぁ」

「じゃあ何であいつはいつもいつもうちにちょっかい掛けてくるんだ。わざわざこっちの講義棟まで来て」

「それは、知らないよ……わたしあの人苦手だもん」

「だろうな、前に思いっきり泣かされてたし」

「はう！」

さらに二人の会話から察するに、この騒ぎは何度も繰り返されているものらしい。

レクティファールは背後のオリガを振り返ってみるが、暗黒色の瞳は無垢なまま彼を見詰め返すだけで、決して彼の求めるような答えは与えてくれなかった。

だから、直接言葉に出してみる。

「オリガさんは相手をご存知で？」

「知ってる」

「誰でしょう」

「言いたくない」

「――――――――」

会話終了。

オリガの頑固さはレクティファールも何となく理解出来ていたから、それ以上の質問は無意味だろうと判断した。

代わりに彼は一つ溜息を漏らし、次の瞬間、人垣を“空間ごと飛び越えた”。

向かう先は、勿論騒ぎの中心――――

「だからボクは何もしてないって……！」

「それが信じられないと言うの！　マリア様は＜大提督＞の姉君、軍にも顔が利くでしょう」

総てを知るには最も都合が良い場所。

「それは――――っ！？」

「――！？」

口論をしている、二人の真ん中であった。

皇国軍騎士学校参謀科所属、ウェルチ・フォード。

蒼龍公に仕える海軍騎士一家、フォード子爵家の長女として海軍に在籍している。

大尉に昇進後、参謀となるべく騎士学校へと編入した彼女は、そこで主家の姫君と再会した。

主家の姫であるフェリスと彼女の関係を表すとするなら、少し歳の離れた姉妹か、親友と言っても良いだろう。少なくとも、フェリスが騎士学校に入学したばかりの頃であればそんな関係であった。

そもそもフェリスとウェルチの関係の始まりは、フェリスが公爵家に引き取られた十六年前に遡る。

引き取られたばかりのフェリスはマリアにも心を開かず、ただ蒼龍宮の中で日々を過ごすだけの人形だった。フェリスの過去に何があったのか知る者はごく限られており、家中ではマリアとそれに近しい重臣だけ。

その重臣の一人が、ウェルチの父フォード子爵。

彼は主君であるマリアに、自分の娘とフェリスを会わせてみてはどうかと提案した。

大人があれこれ気を回すよりも一人仲の良い友人が居た方がフェリス様の心も癒されるのでは、という彼の意見はマリアに受け容れられ、士官学校入学を決めたばかりのウェルチは入学前の余暇にフェリスと始めて顔を合わせた。

兄弟姉妹の居ないウェルチにとって、フェリスは憧れて止まない『妹』だった。

ウェルチは余暇の間中毎日フェリスの部屋を訪ね、フェリスが困惑するのも構わずにひたすら彼女を妹として扱った。可愛らしい服を着せ、自身も覚えたばかりの化粧のやり方を教え、踊りの作法を仕込んだ。

まだ五歳のフェリスはウェルチの感情など理解出来なかっただろうが、それでも余暇が終わる頃には笑顔を見せるようになり、ウェルチとの別れのときには涙を流して嫌がった。

ウェルチがフェリスを己の姫として守りたいと思ったのは、幼い姫君の涙を見たそのときだった。

ただ漫然と家の為と考えていた士官学校での生活は幼い主君を守るための修練の場となり、その修練に懸けるウェルチの想いは、彼女を士官学校首席という地位にまで押し上げた。

それからの彼女の生活は、順風満帆と言って良かった。

二〇歳で婿を取り、次期フォード子爵として軍での出世街道をひた走る彼女。

彼女が指揮官ではなく参謀の道を選んだのは、おそらく軍を退役した後に蒼龍公の海軍で己の主君の幕僚となる為だろう。

そんな彼女がフェリスと同時期に騎士学校に入ったのは、偶然ではあるまい。

しかしフェリスの騎士学校入学から一年、彼女らの関係は以前のような暖かなものではなくなっていた。

「班長、こちらの方は？」

突然目の前に現れた青年は、そう言ってウェルチを一瞥した。

その問い掛けの先が自らが定めた姫君であると気付いたウェルチは、この男が新たに第〇八九班に配属となった陸軍中尉であると確信する。

ウェルチはフェリスの口が自分の名を吐き出す前に、先んじて名乗った。

「――――ウェルチ・フォードよ。あなたはどちらの候補生かしら」

「おや、ご存じない？」

「名乗られていないもの、知らないわね」

「ふむ、先程の物言いからすると、私のことなどとうに知っていると思ったのですが」

「――――……ふん」

知っている。

知らない筈がない。

フェリスの周囲に居る者たちの氏素性を総て諳んじることが出来る彼女にとって、目の前の男が誰であるかなど既に常識の一部であった。

しかし、それを悟られるのは面白くない。

「皇国軍人、しかも騎士たる士官が己の名も名乗れぬとは……陸軍の教育はどうなっているのかしら」

「いえいえ、名乗れぬとは申しておりません」

青年はまるで演劇の中の貴族の子弟のように大仰な動きでお辞儀をし、驚くウェルチに微笑みかける。

「皇国騎士ハルベルンが一子、レクト・ハルベルン。以後、見知り置き下さい。フォードとハルベルンは仕える主と家格こそ違えど互いに公爵家に仕える臣、色々ご指導願えればと思います。ただ、我が班長は未だ年若く公爵家を背負うには未熟、同じく未熟な臣である私が言うのも恥を晒すようでございますが、ここは一つ、長い目で教え導いては貰えませんか」

ウェルチはレクティファールの名を聞き、そしてその言葉に言い

ようのない嫌悪感を抱いた。

この男は心の底から自分に微笑みかけているのではない。ただ、その背後に居る姫君を守ろうとしているだけだ。

ウェルチのフェリスに対する誹謗を単なる主君筋への諫言に落とし込み、レヴィアタン公爵家家中に不和など存在しないとここにいる次世代の軍高官に示す為に。

「フォード候補生が仰りたいこととは、この時期に私のような者を同じ班に所属させることは公爵家の軍への干渉と取られかねず、危険であるということでございましょう。しかし、私の第〇八九班への派遣は公爵家からの働きかけではなく、単に欠員の居る班が第〇八九班だけであったというだけのこと。疑う者こそ現れましょうが、何、調べればすぐに分かることです」

ウェルチとて、公爵家に対する忠義を失った訳ではない。

彼女の心の中にあるものは、ただフェリス個人への憤りだけだ。

だから、彼女はレクティファールの策に乗った。

「――――そう、それは良かった。でも、嗅ぎ回られたという事実も公爵家の名に傷を付けるわ。次からは留意なさるように」

「ご忠言、痛み入ります」

再び頭を下げるレクティファール。

彼はその頭を下げる一瞬の間にフェリスへと目を向け、彼女に合図を送る。

合図を受け取ったフェリスは、慌てて小さく頭を下げた。

「――――っ、感謝します……」

「いいえ、家臣として当然のことをしたまでです。こちらこそ、分を弁えぬ物言い、失礼致しました」

動きにぎこちなさが見えるフェリスとは違い、一度レクティファールの策に乗ると決めたウェルチの所作は堂々としたものだった。

家臣としての立場を強調し、場を収めに掛かる。

「では、わたしはこれにて失礼させて頂きます。フェリス様、公爵家の名に恥じぬ活躍を期待しております」

「……はい」

フェリスの返事を聞き、ウェルチは颯爽とその場を立ち去る。

三人を取り囲んでいた人垣は彼女の歩みに斬り裂かれ、自然と散り始めた。

解けた人垣から班の仲間が姿を見せると、レクティファールは傍らに居るフェリスに小さく微笑む。それに対し、フェリスは強張った、とても笑顔は言えない微妙な表情を見せた。

そんなフェリスを見て、レクティファールが思い起こすのは騎士学校へ編入する直前の出来ごとだった。

騎士学校への編入前日、レクティファールは白龍公を除いた三龍公から夕食に招待された。

指定された場所は蒼龍公の皇都での住まい。

アルカディス湖に程近い大邸宅は、その日の黄昏時は酷く人気が少なかった。

湖面を黄金色に染めた夕日の差し込む大食堂で、四つの影が食卓を囲んでいる。

「――――何かあって呼び出されたとは思いましたが、さて、お三方が揃い踏みとはある意味恐ろしいですね」

「それだけの軽口が叩ければ十分だ。俺も腑抜けた婿は認めたくない」

「はは、フレデリック殿はご息女に良く似ている。いや、ご息女が公に似たのか……」

レクティファールは食中酒として供された葡萄酒を一口含み、自身が酒に酔うことはないと再確認した。意図的に酔わない限り、彼にとっての酒とは場の雰囲気を楽しむためのものでしかないようだ。しかし、皇国最強の三龍に囲まれた雰囲気を楽しむ図太さを今の彼は持ち合わせていなかった。

レクティファールは招待主の一人である蒼龍公マリアを正面に、威儀を正した。

「マリア殿、私を呼んだ理由をお訊きしてもよろしいか」

レクティファールの請いに、マリアは困ったように笑う。その笑

顔はこれまでのような温和なものではなく、何処か生きることに疲れたような、老人のそれであった。

珍しいマリアの姿に、レクティファールは密かに驚く。

「大した理由などございませんわ、殿下。ただ、少し母としての役割を果たそうと思っただけです」

「つまり、騎士学校におられるご息女のことだと」

マリアの答えに頷き、レクティファールは同じ卓に着く黒龍公アナスターシャを窺う。

騎士学校と敷地を同じくする魔導学究院には、アナスターシャの娘も居る筈だった。

「――――わたしは、別に」

マリアとは対照的に、アナスターシャは黙々と前菜を片付けていく。

同僚の態度に微苦笑を浮かべたマリアは、自らも酒の杯を手に取った。

「龍族は、得てして我が子を愛し過ぎるものです。子の少ない種族故の性か、元々そういった種族であるのかは知りませんが」

艶然と微笑み、程良く熟れた唇で杯に口付けする。嚥下した葡萄酒が熱を誘い、マリアの頬に朱が差した。

「殿下にはいずれ知られることですので、今のうちにわたくしから我が娘の事情をご説明しようと思い、こうして殿下を招かせて頂きました」

「ほう」

マリアは硝子杯を置き、同じ卓に座って黙然と腕を組むフレデリックの様子を窺う。彼はこれまで、食卓の上の料理に一度も手を付けていなかった。

「フレデリックちゃん」

「勝手にやれ、愚妹の尻拭いにはもう飽きた」

「そう、ありがとう」

「ふん」

フレデリックは鼻を鳴らし、ようやく料理に手を付ける。アナスターシャと同じく、マリアの邪魔はしないという意思表示だろう。分かり難い不器用な意思表示にマリアが笑う。

朋友二人から場の主導権を預けられた彼女は、レクティファールに金色の瞳を差し向けると口を開いた。

「我が娘フェリスは、血縁上はわたくしの娘ではなく孫に当たります」

「養子であると」

「はい」

頷き、レクティファールの言葉を肯定するマリア。

貴族ともなれば養子縁組は当たり前で、四公爵家も例外ではない。正妃として上げられた四龍姫が総て公爵家当主の嫡流であったことなど、初代皇王を除けば一度もなかった。レクティファールはその点、珍しい皇王ということになる。孫とはいえ、フェリスは間違いなくマリアの血を継ぐ嫡孫であるからだ。

「フェリスはここに居るフレデリックの妹君シヴェイラと我が息子ケルブとの間に生まれた子。紅龍公と蒼龍公の血を受け継ぐ者なのです」

しかし、レクティファールはシヴェイラという姫君もケルブという公子も知らない。

皇王府や紋章院に納められている皇国貴族の名簿に、二人の名は無かった。

「殿下の疑義はご尤も。シヴェイラ殿も我が愚息も、既に皇国には居りません。いいえ、この世界の何処にも居ないでしょう」

「つまり……」

「ええ。二人はこの皇国から出奔し、そして異国の地で果てました。切っ掛けはおそらく、シヴェイラ殿に持ち込まれた婚儀」

ケルブとシヴェイラは歳こそ離れていたものの、非常に仲の良い友人であったという。

共に軍人の道は選ばず、ケルブは教育者として、シヴェイラは作家として日々を送っていた。ケルブは皇都の大学校で教鞭を執り、やがて第一次文明研究の第一人者として諸外国にまで名を知られるようになった。シヴェイラはその名を隠していたが、やはり名の知

られた劇作家になった。

「公爵家の総てが軍を志す訳ではありません。愚息が研究者として身を立てたとしても、わたくしは家督を譲ることに躊躇いなどありませんでした。シヴェイラ殿との仲も、お互いが望むなら、と思っていたのです」

二人が友人から恋仲になったのは、シヴェイラが二〇を超えた頃。休暇を合わせて遠出をし、互いの家族を交えて食事をした。マリアも、フレデリックも二人の仲を認めていた。

「ですが二三年前、突然シヴェイラ殿に婚儀の話が持ち上がったのです。相手は、帝国大公爵の一人」

二五年前の戦いでは、皇国も相応の被害を被った。

先代皇王が帝国との和平を進め、帝国側がその条件として提示したものの一つがその婚儀であった。

「始めは未婚の皇女殿下がお一人、嫁ぐことになっていたのです。しかしその皇女殿下がご病気で薨去され、先代陛下にはもう年頃の皇女は一人も残っておられなかった。そこで陛下は、シヴェイラ殿と愚息の関係を知りながらも、シヴェイラ殿を自らの養女として帝国に嫁がせることにしたのです」

先代皇王とて、望んで二人を引き裂いた訳ではない。

現に先代皇王は二人を呼び、直に謝罪した。それが二人の逃げ道を塞ぐことであると知って尚、先代皇王は躊躇しなかった。

結果、追い詰められた二人は皇国を棄てるしか無かった。

「正直に申せば、わたくしが先代陛下を憎んだのはあのときだけでございました。しかし、シヴェイラ殿が出奔したことで婚儀の話は立ち消え、帝国との間に微妙なしこりは残りましたが、それでも両国は二五年間の偽りの平和を得ることが出来たのです」

思えば、先代皇王は二人を守りたいがためにあのような行動を取ったのかもしれない。

追い詰め追い詰め、二人が互い以外を棄てなければならないような状況を作り上げた。シヴェイラ出奔の後、和平が大した停滞もなく実現したことがその証明ではないだろうか、と。

あのとき帝国にシヴェイラを差し出していたら、おそらく彼女の存在は帝国の外交の道具になっていただろう。スヴァローグ公爵家の跡目争いに帝国が干渉してきた可能性もある。少なくとも、帝国が皇国の政治に口を出す手段になっていたことは間違いない。

「陛下は二人を貴族名簿から除き、それ以外の咎を与えようとはし

ませんでした。わたくしたちも、二人が望んだことだと諦めたのです。次代の蒼龍公は、一族の者から選べば良いのですから」

しかし、それから七年後。マリアの元に二人連れの旅人が現れた。

一人は異国の剣士で、もう一人は――――

「それが我が孫、フェリスでした」

フェリスの両親に生命を救われたという異国の剣士が言うには、ケルブやシヴェイラは正体不明の武装集団に襲われ、フェリスだけを彼に託して自らは囮になった。龍族二人は確かに戦力としては十分であったが、その武装集団は対龍族の装備を整えた＜龍殺し＞を複数擁しており、二人が生き残れた可能性は限りなく低いという。

剣士は只の混血種であり、フェリスを伴っていたことから龍族と龍人族の戦いに介入することは出来ず、ただ二人に頼まれた通りに皇国へ、蒼龍公の元へ辿り着いた。

「愚息たち家族が暮らしていた場所が、シェルミアの山奥であったということはそのとき始めて知りました。あの国は冒険者や傭兵たちが多く、人の出入りも激しい、国を棄てた者が暮らすには都合が良かったのでしょうね」

剣士はフェリスに自分の細剣を与え、両親の分まで生きるよう告

げて蒼龍宮を去った。

その剣士の足取りは、シェルミアで途絶える。

「フェリスが我が孫であることはすぐに分かりました。その顔立ちはシヴェイラ殿に良く似ていましたからね」

「――――……」

マリアの言葉を聞き、フレデリックが一瞬、フォークを持つ手を止めた。

しかし、すぐに食事を再開する。その眉間の皺が、深くなったような気がした。

「あの子は、未だ両親のことを引き摺っておりましょう。この国を恨んでいるかもしれません」

レクティファールの脳裏に、一人の側妃の姿が浮かんだ。

彼女は自分から家族を奪ったこの国と、そこに住まう者たち、そして父を恨んでいた。

それは多分に彼女自身の心の問題であったが、今度は違う。

フェリスには、十分以上にこの国を恨む理由がある。

「先代陛下がシヴェイラ殿に婚儀を持ち掛けなければ、我々が故郷を棄てなければならないほど追い詰めなければ、二人は未だ存命であり、殿下の良き臣で居られたでしょう。愚息は蒼龍公として、シヴェイラ殿は蒼龍公の公妃として」

フェリスという女性がどんな人物であり、実際にこの国を恨んでいるかどうかはこのときのレクティファールには分からなかった。ただ、その気持は自分のように過去を持たない者には到底理解出来ないことは分かった。

彼に出来ることは、理解しようと努めることだけだ。

「あの頃の皇国は、帝国との戦いによって荒んでおりました。我々四公でさえ、多くを失った時期でした」

白龍公は妃を失い。

蒼龍公は息子を失い。

紅龍公は妹を失った。

黒龍公でさえ、己を捨てて国の為に奔走した。

「殿下は過去を持ちでないと聞き及んでおります」

「ええ、確かに」

人々の過去を知るたび、自分が薄っぺらいように感じた。

過去も、家族も、信念さえ希薄な自分が、過去を持つ人々を導けるのかと思った。過去は、未来への礎だ。

「いいえ、殿下はそれで良いのです」

しかし、マリアはそれで良いと言い。残る二人の龍公もそれに頷いた。

「過去を持たぬなら、ここで得る総てが殿下の過去になる。この国の総てが殿下の過去であり、殿下はこの国の子となる。殿下に過去が必要ならばこの国が殿下の過去であり、家族が必要ならばこの国が家族になりましょう。その先に得た信念が、殿下の信念です」

「――――」

過去を持たぬが故に誰かを傷付ける。

傷を傷と理解出来ないから、痛みを痛みと理解出来ないから、弱さを弱さと理解出来ないから。

「――――始めて三方とお会いしたとき、私はあなた方の心の裡を理解することが出来なかった。何故、皇都を焼くような真似をするのか、何故、自らが守りたいと思う国を傷付けようとするのか」

あのとき、三人が軍を発していたら、今ここにレクティファールは居なかっただろう。

おそらくは＜皇剣＞の力で以て帝国や連合と戦い、自滅していた筈だ。それがあのたった一晩の邂逅で、未来が拓けた。

「私にはまだ大した力はありません。ですが、少なくとも恩は忘れません」

人の想いを背負うほど強くはないけれど、想いを背負う人を支えるくらいはしてみせよう。

レクティファールは唯一つだけ、それだけを誓った。

「――――でね、フェリスったら生卵をオーブンに放り込んだの。わたし、あのとき焼き卵って初めて見た」

「玉子焼きなら見たことあるし、食べたことあるけどな」

「うん、奇っ怪なオブジェだったよねぇ」

「地獄の生き物だな」

「夢に出そうだったよ」

「――――う、うるさぁあああいっ！　初めて料理したんだからいいじゃないか！　食べ物なんて口に入ればあとは消化されて排泄されて終わりでしょ！」

「フェリス、食事中に排泄とか言わないで」

「あ、ゴメン、オリガ」

食堂で騒がしく昼食を摂る第〇八九班の面々を、レクティファールは楽しそうに見詰めた。

あの日の三龍公との会話は、今も彼の心に重く沈み込んでいる。

フェリスを見る目は常に探るように変化してしまうし、オリガに対しても身構えてしまう。

あの場にアナスターシャが居た意味、それは騎士学校ではオリガにも気を掛けて欲しいという彼女なりの意志の現れだったのではないだろうか。何も無い、と言いながらも、本当は言うべき言葉が見つからなかっただけではないか。

だからあの日、蒼龍公の屋敷を出るレクティファールに、アナスターシャは何かを求めるような視線を向けていたのではないか。

勿論、これはレクティファールの想像に過ぎない。

だが、それが真実であると彼の中の何かが告げている。

＜皇剣＞か、それに内包された記録たちか。

総てが定かではない中で、彼はその何かに従うことを決めた。

現実がどれ程冷たく、厳しいものであったとしても、彼はそれを破壊するだけの力を与えられている。

「あ、レクト君もこれ食べませんかぁ？　フェリスのお気に入りなんですよぅ」

「あ、頂きます」

「はいどうぞ、あーん」

「あーん」

「って、やるの？　躊躇わずにやっちゃうの！？」

「――――慣れてる」

「く、勝ち組か……！」

この騒がしくも穏やかな日々を破壊するものがあるのなら、それを破壊することが＜皇剣＞に込められた願い。

そして、レクティファールの願い。

第十四話「妓楼＋女傑＝ある意味、レクティファールの試練」

巨大な影が砂塵を巻き上げ、地響きと共に疾駆する。

砂色に塗装されたそれは、陸軍機甲科学校に練習機として配備されている二体の〇七式近接型高等練習自動人形。

つい二年前に制式化され、ここ一年で配備が開始された細身の甲冑の如き姿の巨人はそれぞれ肩に〇一、〇二と記されており、共に機甲科学校の学生に操られていた。

二体は接近しては樹脂製の近接演習剣で互いを斬りつけ、決定打を与えられなければ再び距離を取って相手の隙を窺うという動きを幾度も繰り返している。

元々自動人形は拠点攻略と拠点防衛の為に、古代の遺物である装甲機兵を解析して作られたものだ。その性能は未だ装甲機兵には遠く及ばず、少し力のある種族の個人なら十二分に撃破出来る程度のものでしか無い。

だが、皇国が仮想敵国としている国々の多くは自動人形を配備している。それは単純に、皇国兵が世界でも有数の個体能力を持っており、それに対抗する為の手段として選択されたから。自動人形はそれ相応の資金と設備があれば製造することが出来る。つまり、金さえあれば誰にでも手に入れることが出来るということだ。

但し、自動人形を上手く扱える管制士――自動人形の操作を担当する者――は少ない。

自動人形の性能が上がるほどその傾向はより顕著で、どの国でも自動人形管制士と魔導師だけは個人の持って生まれた才能が重視されていた。

「つまり、俺は夢だった自動人形の管制士にはなれなかったってことだ」

「なるほど」

演習場を双眼鏡で眺め、二人の男が言葉を交わす。

彼らは演習場脇の丘に魔動車を止め、繰り広げられる人形舞踏を眺めていた。

「だが、俺は管制士になる才能は無かったが、砲兵士官としては才能があった。人生は分からん」

「そんなものでしょうに」

才能があるだけまし、とは言わない。

彼はこの世界に才能のない者など居ないと考えていた。この世界に居るのは才能に気付けた者と気付けなかった者、それだけだと。

「お前はどうなんだ」

「――――さあ、どうでしょう。帝国の陽虎姫の姿を間近で見て、それで生き残っているのだから、無能とは思っていませんが」

さりとて、有能とも思っていない。

レクティファールが大過無く摂政職を全う出来ているのは、ただその身に宿した＜皇剣＞が高い性能を持ち、彼の配下たちがその職分に相応しい能力を持っているからと言って大凡間違いないだろう。

無論、その配下たちから見れば別の意見もあるのだろうが。

「――――美人だったか」

「美人でしたよ」

ち、という舌打ち。

「俺も見たかった」

心の底から吐き出されたと思われるその台詞に、レクティファールは苦笑した。

「映像だってあるでしょう」

「生がいいんだ生が、女は生が一番だ」

「――――幾つか意味があるように聞こえますね」

「助平め」

「お互い様です」

共に微笑を浮かべた二人の男はそのまま演習が終わるまで双眼鏡を掲げ続け、演習を終えた自動人形が蔽いに隠されるまでそこに留まっていた。

その間交わされる会話は特別重要なものではなかったが、無意味なものでもなかった。

そもそも何故二人が連れ立って学校の外に足を運んだかというと、始まりはその日の正午過ぎだった。

レクティファールはその日、午前中だけの講義を終えて自室で本業の書類を決裁していた。毎日欠かさず届けられる書類は城にいた頃よりも枚数こそ減っているものの、扱いに悩むものが殆どであった。

むしろ、余人では到底判断し切れないものだからこそレクティファールの元に届けられるのだろうが、彼は騎士学校の講義が終わったあと、夕食と自己鍛錬の時間を除いて明け方まで書類の処理をしなくてはならなかった。

この生活が始まった直後、明け方まで部屋の灯りが点いていることに気付いたフェリスが角を生やして部屋まで訪れたことがあったが、彼女の班長としての叱責もなんのその、適当な返答と曖昧な態度でそれをはぐらかし、レクティファールはその後も明け方まで内職を続けていた。

注意しても事態が改善されないことに苛立ったフェリスが騎士学校を通して陸軍に抗議したということだが、軍の担当者はただ「職務上必要なことである」と答えるに留まった。彼にはそれ以上の回答が用意出来なかったのだ。

陸軍には確かにレクト・ハルベルンという中尉が存在しているが、

その正体が摂政レクティファールであると知っている者は少ない。せいぜい、陸軍元帥と参謀総長とその他の担当者数名程度だろう。陸軍は実質、元帥府や皇王府からの指示で＜レクト・ハルベルン＞という士官が存在していると見せ掛けているだけで、レクティファールに何らかの命令を与えることはしないし、出来ない。逆にレクティファール側からこういった命令を出すように指示され、言われるままにそれに従っているだけだ。

故に、フェリスからの抗議は事前に用意された台本に則って処理され、結局一つの変化も齎さなかった。

これではいけないとフェリスがレクティファールの仕事を手伝おうとしたこともあったが、それも機密保持の観点から見れば無理なこと。本来の立場で二人が顔を合わせれば不可能ではないのかもしれないが、今の二人は単なる同窓に過ぎない。

「まあ、フェリスも悪い女じゃない。上官にするには疲れそうだが、それも悪くはない」

と、ルフェイルはレクティファールに語り、

「フェリスちゃんは真面目だからぁ……かわいいでしょ？　あ、レクト君も無理しちゃ駄目よ？」

パトリシアはそう言って微笑んだ。

ちなみにオリガと言えば、

「――――？　何か問題あるの？」

研究に没頭すれば昼夜なんて関係無いという生活を送る彼女にとって、レクティファールの行動は何の問題も感じないようであった。

フェリス以外の班員には黙認されることになったレクティファールの内職であるが、フェリスはやはり認められないらしく、一日に一度は顔を出し、早く寝るように一言注意するか、眠気を誘うような飲み物を差し入れるようになった。

レクティファールとしても邪険に扱うことは出来ず、されるがままになっているのだが、フェリスの思惑が上手くいく気配はない。眠気さえ制御できる＜皇剣＞の前に温めた牛乳など無意味だった。

ただ、余りフェリスに心配を掛けるのもどうかと考えたレクティファールは内職の時間をずらすことにした。夜が明ける前まで仕事をしたあと、一度眠り、早起きをして仕事をする。

フェリスはレクティファールの睡眠時間が増えたと喜んだが、実際には――――ということだ。

そしてこの日の午後一時、内職をしているレクティファールの下に、同じく午後に講義の予定が無いルフェイルが訪ねて来た。

彼は日頃余り変わらない表情を珍しく暗いものに変えており、付き合いの浅いレクティファールは心底驚いた。

「――――レクト、すまない」

「え、あ、うん、なんでしょう」

何故謝る、そう思ったレクティファールは次の瞬間猛烈な寒気に襲われた。

＜皇剣＞使いが風邪をひくなど冗談にもならない、ならば何故か、それは精神から身体に警告が発せられたと考えるべきだろう。なにせ、謝罪の言葉を口にしたルフェイルはいつの間にかその手に一抱えほどの紙箱を持っており、それをレクティファールに押し付けてきたのだ。

「預かってくれ……！　頼む」

「何ですか、これ」

「見てみろ」

「はあ……」

紙箱の蓋を開けると、そこには肌色。

肌色、肌色、肌色だった。

「――――……」

沈黙するレクティファール。

ある種見慣れた、でもこんな昼間から目にするのはどうかと思う品々。

「ルフェイル」

「分かってくれとは言わん。趣味を押し付ける真似はしない。だが……！」

呆れたように溜息を吐くレクティファールの肩を引っ掴み、ルフェイルは血走った目で訴える。

「パティが俺の部屋を掃除すると言って聞かん、うちの阿呆母に頼まれたと言ってな。あいつは馬鹿だが、勘が鋭い。部屋に隠しておいては間違いなく見付かってしまう」

「見付かって困るようなものですか」

艶本など、年頃の男なら持っていて何の問題もあるまい。

レクティファールは周囲が許してくれないので持っていないが。

「見付かることは別に構わん。高等学校時代、いつの間にか綺麗になっていた部屋の机の上に重ねて置いてあったことも今では良い思い出だ。だが、だがな……」

ルフェイルは震えていた。

泣いているのかもしれない。

「パティがことあるごとに俺の大事なお宝の内容を持ち出し、こういうものが好きなのかと訊いてくることには耐えられん！　分かるか！　幼馴染に趣味嗜好の総てを握られていることの苦しみが……！　こういうの好きだよね、と書店で指差されることの痛みが……！　くそっ、パティもいい歳だぞ、見掛けも悪くないんだぞ、なのに何であいつは全く恥ずかしがらないんだっ！」

「――――へぇ」

どうでも良かった。

心底どうでも良かった。

それでも一応、レクティファールも男である。決して突き放すことは出来ない。

「虚しい、虚しいぞレクト。俺の兄貴は幼馴染とくっついて結婚まで行ったのに、俺の初恋の人だったのに、畜生、何で俺ばかり貧乏くじを引かなくてはいけないんだ……」

「あ――――と、うん、大変だった。大変だったね」

「分かってくれるか」

がばり、と顔を上げるルフェイル。

その鉄面皮に喜色が交じっていた。

レクティファールは微笑み、告げる。

「いや、全く」

「勝ち組め！」

「何故罵倒されねばならないんでしょう。僻みですか」

「――――うむ」

素直に頷くルフェイル。その程度には追い詰められているらしい。

レクティファールは仕方が無いとでも言うように嘆息し、押し付けられた紙箱を備え付けの衣装棚に押し込んだ。

「あとで別の場所に移しますが、とりあえずここで」

「感謝する……！　今日から俺を親友と、いや、魂（こころ）の義兄弟と呼んでくれ」

「緩い親友やお手軽な義兄弟ですね」

「須らく切っ掛けとは些細なものだ」

「まあ、確かに」

頷くレクティファール。言われてみればその通りだと思った。

今の自分の立場とて、あの湖の出会いから始まったのだ。人生とは何があるか分からない。

「それで、用事は済みましたかね。私はまだ仕事が残っているので――――」

「まぁ待て」

そう言って扉を閉めようとするレクティファールだが、ルフェイルは身体を扉の間に挟んでそれを妨害する。

困惑と怒りが混じり合った微妙な表情でルフェイルを見詰めるレクティファールだが、当の本人はいつもの無表情だ。

「仕事、あるんですが」

「そんなもの、夜でも出来るだろう」

「それはそうですが」

「丁度良いから今日は俺が色々島を案内してやる」

「はあ」

そういえば、島の地理は事前に覚えたものしか知らない。

班の仲間と食事に出たこともなく、街はこの騎士学校に来る前に通過しだけだ。

今後この島で暮らすなら、知っておいて損はないかもしれない。

「それはありがたいですが、何故突然」

「前に言ったろう。女には相談出来ないこともある、と」

「言いましたね、そういえば」

「うむ、ついでに島の郭（くるわ）にも連れていってやろう。軍の荒くれ者を相手にするだけあって、中々良い女がいるぞ」

「は？　何ですと？」

「心配するな、騎士様のご子息が行っても問題ない合法の店に連れていってやる」

言うやいなや、レクティファールの腕を取って歩き始めるルフェイル。

レクティファールは慌てて部屋の扉を閉め、自動的に鍵が掛かったことを確認した。この部屋にだけ取り付けられている自動施錠装置だ。油断すると部屋から締め出される。現に一度、フェリスが締め出された。

レクティファールは懐に部屋の鍵が入っていることを確かめると、自分を引き摺るルフェイルに向かって、力無く訴える。

「あの、引っ張らないで欲しいなぁなんて……」

「恥ずかしがる必要はない。向こうは専門家だ」

「いや、そうではなく」

「街娼なら非合法な女も多いが、何、俺に任せれば側妃アリア様にも負けない女の居る店だって楽しめる」

「だから、人の話を聞いてくださいって言うのに」

ルフェイルはずんずんと宿舎の廊下を進んでいく。

「実は知り合いから車を借りた。機甲科学校の演習場で新型の自動人形が演習中らしいから、まずはそこから行こうと思う」

「自動人形、好きなんですか」

「男の浪漫だ」

ふん、と鼻息荒く答え、ルフェイルは力強く歩を進める。レクティファールといえば、もう半ば諦めたように脱力していた。抵抗する理由を見付けようとしたが、見付けられなかったのだ。

最後の抵抗とばかりに、レクティファールはルフェイルに問うた。

「門限までには帰れますかね」

「門限破りも男の浪漫だ」

「――――」

ああ、やっぱり――――レクティファールは嘆息し、そして完全

に諦めた。

アルストロメリア民主連邦首都アニュアの中央に鎮座する歴史的建築物。

その建築物――――大統領官邸はその外壁の色と形状から、＜瑠璃宮殿＞と呼ばれていた。＜瑠璃宮殿＞は元々この地を治めていた国王の居城を改修したものであり、宮殿という呼び名は決して間違いではない。ただ、その政治形態から宮殿という呼び名は相応しくないのでは、という意見があり、公的には大統領官邸とのみ呼称されている。

その連邦大統領官邸の一室で、初老の女性が大きく溜息を吐いた。

彼女の手には国務長官の花押入りの報告書がある。

「――――国務長官は、わたしに何を求めているのかしらね」

「皇国に対して、余計なことをするな、と言って欲しいのではないですか」

彼女の愚痴に近い呟きに答えたのは、彼女が最も信頼する補佐官だった。

竜胆色の髪を撫で付け、銀縁の眼鏡を掛けた青年と呼んでも差し支えのない風貌だが、その鋭い視線と理知的な雰囲気はその年齢を一回りも上に見せている。

勿論、彼女――――アルストロメリア民主連邦大統領たるキアラ・バルバロスにとっては、見慣れた補佐官のいつもの姿でしかないのだが。

「マルドゥクに関わるな、と、私が？　皇国に？」

「はい」

補佐官は感情の一切を感じさせない声音で肯定した。

しかし、信頼する補佐官の言葉にキアラは頭を振り、報告書を手渡すことで説明の手間を省く。

疲れたように眉間を揉みほぐし、彼女は口を開いた。

「無理よ。私たちは皇国に大きな借りがある。でもそれは、国民が思うような感情的なものではないわ」

国家は感情を持たない。

感情を持つのは所詮その国の国民であり、国民の感情はときとして国家の感情のように錯覚されるが、それはどれほど強くなろうとも錯覚の域を出ることは出来ない。

アルストロメリア民主連邦がアルトデステニア皇国に抱いているそれは確かに人が持つ罪悪感に似たものであったが、それは国家間の交渉で何らかの役目を果たせるようなものではない。ただ変えようのない現実として、アルトデステニアはアルストロメリアの現政権を今の立場から追い落とすだけの情報――先の戦いでの連合軍将兵の犯罪行為――を手札として握り、それを未だ切っていないのだった。

そんな両国の関係を人同士のそれに置き換えたとき、アルストロメリアはアルトデステニアに引け目を感じているとも、アルトデステニアがアルストロメリアの弱みを握っているとも言える。アルトデステニアに好意的な見方をするなら前者であり、アルストロメリアに同情的な見方をするなら後者だ。

「摂政殿下はあの戦いで我が軍を叩いたけれど、人的な損害は殆ど無し。そのせいでわたしたちは皇国の言う『自衛権の行使』を認めるしかなかった」

皇国摂政軍が連合軍を攻撃したという事実は、連合軍に兵士を送っている各国の市民にすぐに知られることとなった。当事者である皇国がそれを宣伝したからだ。当然、市民は憤慨した。自分たちは皇国の国民を守る為に軍を送ったのに、何故攻撃されなければならないのか、と。

しかし皇国はこの攻撃を『各国政府の統制を外れつつあった連合軍への牽制と、国民の生命を守る為の正当防衛である』とした。

各国政府からの訓示で皇国国民への犯罪行為は厳に戒められていた筈なのに、一部の扇動者はそれを意図的に破り、不必要に両者の緊張を高めた。その結果両者は互いに望まぬ戦闘状態に突入し、いつしか互いを憎しみ合うこととなった。

摂政軍が介入した時点で、連合軍は一方的に始原貴族軍を攻撃していた。摂政軍の攻撃はそれを停止させる為の正当防衛であり、連合軍の殲滅を目的としたものではない。皇国側の説明はこれに尽きる。

そして連合各国は、結果としてこれに追従することとなった。

連合軍が始原貴族軍に対する攻撃を行う直接的な原因となった所属不明部隊が、皇国の部隊ではないと証明されたからだった。

その決定的証拠となったのは、連合軍に従軍していた写真家の撮った写真だった。彼は自分たちに向かってくる部隊を写真に残しており、戦闘後、それを公表した。

調査の結果、彼らの装備は確かに皇国軍で採用されているものであったが、それは貴族軍のものではなく、“正規軍”のものだと判

明した。それも既に廃棄されつつある旧式装備である。

「参戦していない正規軍が、何故連合軍を攻撃出来るのか。自分たちは正規軍の無実を証明する明確な根拠を有している」

皇国側はそう主張し、軍事機密であるにも関わらずその装備を持つ全部隊の行動記録を連合軍に提出してその精査を求めた。結果は、皇国側の主張を全面的に支持するものだった。

その結果を受け、連合各国は一斉に所属不明部隊が皇国の部隊ではないと発表。

更にあのミラ平原での戦いは連合と皇国に対して悪意を抱く何者かの策謀であり、連合と皇国の間には既に敵意は存在しないとも付け加えた。

両者とも、もう終わりにしたかったのだ。

皇国は帝国との戦いが控えていたし、連合はもう戦う理由を失っていた。双方とも戦って得るものは無く、それ故に戦う意味を持たなかった。

だから、互いに一番傷の浅い決着で手打ちにした。

「皇国は市場としての我が国を捨てられず、我が国は多くの資源を皇国に依存している。我々はもう、互いを滅ぼすには難しい間柄なのよ」

滅ぼすには、それこそ相手国の総てを手に入れるだけの力が必要になる。相手に確実に勝つだけの力を手に入れ、戦火で荒廃した国を復興させるだけの力を蓄えなければ戦うことは出来ない。そして、今のアルマダ大陸にそんな悠長なことを考えられる国は存在していない。

その国内総生産額で大陸の三大国と呼ばれる新生アルマダ、アルトデステニア、アルストロメリア。それ以外にも東方には海軍大国にして貿易大国のイズモ。南洋諸島の小国とて多くの海洋航路をその手に握り、決して劣弱国と侮ることは出来ない。

世界には既に大陸を制した超大国も存在しているというのに、未だこのアルマダ大陸は戦乱の潰える気配を見せていない。その戦乱が大陸の活力となっていることは確かだが、それもいつまで続くか分かったものではない。イズモに挑発行為を続ける南北のウォーリム教国を始めとして、この世界にはまだまだ外の世界へと拡大しようと企む国家が多く居る。アルストロメリアのように大陸の中で三番手、四番手に甘んじているような国が果たして一〇〇年後、一〇〇〇年後の世界で生き残っていられるのか、想像するだけで気分が悪くなった。

「あの摂政が時代の先を見ているならその考えに乗るのもひとつの手段、とお考えですか」

アルトデステニアは明らかに帝国との戦いを念頭に国力の増強に努めている。軍の頭脳集団が彼女に提出した報告書によると、次に

発生する帝国との戦いは長きに渡る両国の戦乱の歴史に終止符を打つ程の規模になるのではないかとのことだ。

二度も三度も総力戦は出来ない。

ならば、たった一度の戦いで総てを決することが最良。

間違いなく、アルトデステニアはそれを目指している。

「ええ、あの若い摂政が皇王になっても今のままの考えであるなら、それがこの国を生き永らえさせる唯一の手段だと思う。アニュア・ハイストが夢見た国民の為の国民の国家、その形が一つだけなどと、誰が決めたの？」

「――――仰る通りです」

頭を下げた補佐官は、しかし自らの大統領の考えに完全に同意した訳ではない。

妥協は怠惰に繋がる。自国の運命を他国の君主に委ねるなど、この国を作り上げた先人たちに対する裏切りではないか。

確かに現状、この国を亡国としない為には大統領の言う策が一番適しているだろう。

しかし将来、現大統領が政権から退いたときはまた別の考えがこの国を導く。皇国のように何百年も同じ元首が国を導くということ

はこの国ではありえない。それがこの国の長所であり、短所でもある。

誰しもが頂点に立てる国。

だがその足元には――――

「大統領、上院院内総務との会食の時間です」

「分かったわ」

もしかしたら、あの若き支配者の統べる国よりも多くの骸が弔われることなく野晒しになっているのかもしれない。

ここは、敗者が顧みられない国だから。

喧騒。ひたすらに喧騒。

黄昏も既に過ぎ去り、陽の光は山の向こうに残るのみ。街灯が点り、島の色街は稼ぎ時を迎えていた。

艶やかに着飾った公妓たちが店先に立ち、その艶姿で男たちを絡め取る。郭に入ってから幾度も街娼に声を掛けられたレクティファールだが、なるほど、彼女たちはそこらの娼妓とはひと味違うと思えた。

国家公認の遊女ともなれば彼女たち自身の努力なしに地位を保つことは不可能で、それらの努力こそが彼女たちの身から溢れ出る色香になっているのだろう。男たちはいつの時代も、ただ艶やかで自分の思うがままに狂わせられる女よりも、自らの総てを賭して狂わせたいと願う女に惹かれる。彼女たちは、まさに男が願う女の姿であった。

「どうだ。中々のものだろう」

無表情に街娼の誘いを躱したルフェイルが、隣を歩くレクティファールに囁く。

レクティファールは素直に頷き、苦笑した。

「気後れしますね」

「俺も最初はそうだった。――――いや、今でもそうか」

彼は迷いのない足取りで通りを進み、一件の妓楼の前で立ち止まった。

その間にも幾度か客寄せに声を掛けられたが、目的地の決まっている二人はそれをのらりくらりと潜り抜けてきた。目的地と言ってもそれを知っているのはルフェイルだけであったが、レクティファールとしてはこれからそれなりの付き合いになる彼を信用しない理由は無い。常に表情が変わらず、捉え所のないルフェイルであるが、友人として見るなら少なくともレクティファールには付き合い易い男だ。

「ここだ。この島に来てからもう六年だが、ずっと世話になっている」

「ずっと、って何歳から出入りしているんですか」

「十八だな」

「――――こういう女遊びを覚えるには早くありませんか？」

「いや、同期の兄の友人という人がすごくてだな、俺を寮から拐った挙句、妓楼を五軒も梯子するような人だったんだ。決して俺の意思じゃない」

ルフェイルが饒舌になるのは、こうした言い訳のときだ。出会ってから間のないレクティファールが気付いているのだから、他の班員が気付いていないとは考え難い。パトリシアならひょっとして、と考えてしまうが、幼馴染という話だったのでそれもないだろう。

「信じてないな」

「ええ、全く」

「――――」

ルフェイルは何か言いたげに何度も口を開いたり閉じたりしていたが、やがて諦めたように溜息を吐いた。

「そうだ。俺とて初めて色街に来て浮かれていた。最初の女がいい女でな、しばらくは毎週のように通った」

「それがここですか」

「うむ」

レクティファールは妓楼を見上げ、小さく笑った。

不慣れな同輩を早く今の生活に馴染ませてやろうというルフェイルの不器用な気遣いは、もう笑うしか無い。本人に言っても否定されることは分かり切っている。

「では、よろしくお願いします」

「任せておけ」

レクティファールの言葉に顔を背け、ルフェイルはのしのしと妓楼の表口へと向かう。両開きの店の扉に嵌めこまれているのは曇硝子で、中の様子を見ることは出来ない。

ルフェイルは手慣れた様子で把手に手を掛け、

「――――ん？」

そこで動きを止めた。

レクティファールはルフェイルの様子に気付き、訝しげに眉を顰める。

何があったのか、そう問い掛ける前に答えは分かった。

扉の向こうが、騒がしかった。

男女が大声で怒鳴り合っているらしい。

「――――喧嘩、いや、客と揉めているのか」

「ふむ」

ルフェイルは声の主のどちらかに心当たりがあるらしく、眉間に深い皺を作って「今度の相手は誰だ」と呟いている。

レクティファールといえば、また厄介ごとかと諦めの色を瞳に滲ませて体内の＜皇剣＞を暴徒鎮圧用の非殺傷戦闘状態へと移行させた。

視界に赤外線探査画像を重ね、扉の向こうの状態を確認する。

「あ」

丁度、人の形をした何かが、扉の向こうから飛来してくるのが見えた。

レクティファールは間抜けな声を漏らし、ルフェイルはそれを一瞥する。何があった、とその目は訊ねていたが、彼は友人の首根っ

こを掴んで引き倒すことで答える。

「レクト、何を……」

突然引き倒されて驚きの声を上げるルフェイル。

だがレクティファールが答える前にるフェイルのそのすぐ背後、妓楼の正面玄関が内側からの衝撃で吹き飛んだ。

木材が折り飛ぶ音と硝子の砕ける音が通りに響き、さらに扉を突き破った物体が地面に落ちて呻き声を上げる。

「――ぎゃ……っ」

蛙の潰れたような声とは、こんな声をいうのだろうな。レクティファールは自分の通う騎士学校の制服を着たその物体に冷めた視線を向けた。

「な、おい、大丈夫か……！」

ルフェイルが慌ててその物体に駆け寄ろうとするが、レクティファールはその肩を掴んで動きを制した。

今度こそ困惑したような視線をレクティファールに向けるルフェ

イルだが、吹き飛んだ扉の向こうから聞こえてきた声に動きを硬直させる。

ほっそりとした靭やかな身体を薄手の衣装に包んだ女が、レクティファールたちの前に現れた。

「うちの娘たちはあんたの国の娼婦とは違うんだよ。冗談半分の値切りなら笑って済ませてやる。強引な求めににだって答えてやらないこともない。だがね、面白半分に刃物を持ち出すような馬鹿はお断りだよ」

深緋（こきひ）の髪は結い上げられ、気の強そうな吊り目は真紅。その衣装も濃紅で、レクティファールにはその女が炎を纏っているように見えた。

「どこぞの国の貴族様とて、店に入ればただの男。敬って欲しければ敬うに足る男になり、侍らせたければ侍るに足る男になり、組み敷きたければ組み敷かれるに足る男になりな」

女はそう言って自分がふっ飛ばした物体に歩み寄り、その襟首を掴んで持ち上げる。

そこで初めて、レクティファールは吹き飛んできた物体が自分と同じ学校に通う候補生であると確信した。

確か、皇国の隣にある小国の貴族。騎士学校には留学生として所

属していた筈だ。

「これは返すよ。衛視にも通報しない、だが、その性根を直さない限りアタイの店は出入り禁止だ」

その眼前に短剣を突き付け、女は貴族の男の顔を恐怖一色に染め上げる。

貴族の男はもごもごと言い訳をしていたが、ずいと鋒を押し込まれて黙り込んだ。

「失せな」

男を解放し、その革帯に短剣を押し込んだ女は店に戻ろうと踵を返す。

しかし、それでは終わらなかった。

「――――っ」

レクティファールは、立ち上がった男が革帯から短剣を引き抜いたことを認めて一歩を踏み出した。ルフェイルも同じことに気付いたらしく、その巨躯に似合わぬ俊敏な動きで走り始める。

怒りに染まった男の顔は、その短剣を何の為に抜いたのか彼らに教えてくれた。

「この……っ」

二歩目。レクティファールの踏み込んだ石畳が陥没し、ルフェイルの足元で擦過音が生まれる。

三歩目。石畳を耕し一気に加速するレクティファール。ルフェイルは身体を低く保ち、速度を上げた。

四歩目。二人は丁度横一列に並び、視線で会話する。

五歩目。機を合わせた二人は同時に地面を蹴り、虚空に躍り出る。

「クソアマっ」

罵声と共に、男が短剣を女に向けて突き出した。

その直後、

「――――ぐぎゃっ！？」

男は、二人の男の飛び蹴りを受けて再び石畳を熱い抱擁を交わす

こととなった。

錐揉みしながら吹き飛んだ男は何度も石畳の上で跳ね、近くの酒場の壁にぶつかって動きを止めた。

「――――」

白目を向いた男を、騒ぎを遠巻きに見ていた野次馬たちが囲む。

彼らは男が気絶しているのを確認すると、振り返ってレクティファールとルフェイル、そしていつの間にか彼らのすぐ背後に立っていた女に向けて笑顔を見せた。

「おーい、リーサちゃん。奴さん飲み過ぎだな。よく寝てらぁ」

「この馬鹿のことはこっちで適当に済ませとくさぁ、リーサちゃんはそこな色男どもの相手してやんな」

「ルフェイル、お前イイトコ見せたなぁ……」

「てか、ルフェイルの隣にいんの誰よ」

やいのやいのと騒ぐ野次馬たち。彼らは貴族の男を何処からか持

ってきた縄でふん縛ると、神輿のように担いで通りの外れにある衛視詰所に運んでいく。手慣れた様子に、レクティファールは少々面食らった。

どうやら、ここではよくあることらしい。治安は大丈夫かと少し心配になった。

「――――世の中とは、中々刺激的のようで」

その呟きは、誰にも聞こえなかったようだ。

リーサと呼ばれた女はやれやれと頭を振ると、二人に話し掛けてくる。

「ま、アタイ一人でもどうにかなったんだけどね。一応礼は言っておくよ」

「強がり――――ではないか」

ルフェイルはリーサの手に花の装飾の施された鉄扇があるのを見て、納得したように頷く。

そういえば、この女はこの程度の暴漢にどうこう出来るほどか弱くはなかった。

「そういうこと、うちに来たんだろう？　色々おまけしてやるから楽しんでっておくれ」

「うむ、そうさせてもらう」

「で、こちらさんは？」

リーサはレクティファールを見上げ、じっとその顔を観察する。

その手に鉄扇が握られたままなので、レクティファールは少しだけ引き下がってしまった。

「俺の同輩だ。島に来たばかりでな」

「ふぅん、人を案内できるくらい偉くなったってことかい。出世したねぇ、初めてのときは何も知らないでアタイにいちいち――――」

「余計なことを言うな」

異常なまでの威圧感を纏い、ルフェイルはリーサに詰め寄る。

リーサははいはい、と笑ってルフェイルから逃れ、店の中へと二

人を導く。

「アタイはリーサ。この街じゃ、それだけで十分さね」

そう言って満面の笑みを見せるリーサ。

ルフェイルは疲れたような顔で彼女のあとに続き、レクティファールは困惑したままルフェイルのあとを追う。

ふと見上げた妓楼の店先に、『ハルモニクス』という店の名が掲げられていた。

第十五話「色街からの帰還＋姉、襲来＝……」

案内された店の中は、想像したよりも静かだった。

表口を抜けたロビーは広くはないものの落ち着いた色調の内装で統一され、ここが春を売る宿であることを忘れそうになる。人の声を遮らない程度の優雅な背景音楽が耳を擽り、仄かな甘い香が身体を包み込んだ。

「ようこそいらっしゃいました」

リーサがひとつ手を打つと、奥から数名の女性が現れて恭しく頭を垂れる。彼女たちはそれぞれ趣こそ違えどいずれも美しく着飾っており、レクティファールは演劇の一場面を観ている気分になった。それくらい、現実離れした光景だった。

彼は彼女たちにどのような視線を送るべきか悩んで隣のルフェイルに目を向けたが、彼は慣れた様子で上着を脱ぎ、それをリーサに預けている最中だった。

「いつもの通り？」

「ああ、あいつも同じでいい」

上着を受け取ったリーサはルフェイルの言い草に眉を顰めた。レクティファールの名さえ知らない彼女にしてみれば、その言葉は余りにも冷たい。

店に入った以上レクティファールの相手をするのは彼女の責任であるが、もう少し言い方というものを考えて欲しいものだ。

「もう少し気を遣ったらどう？」

「いい歳した男が同年代の男に妓楼で気を遣われるなど、苦痛以外の何ものでもない。――――そうだろう、レクト」

その鉄面皮に若干のからかいを含ませ、ルフェイルはレクティファールに問う。彼にとっては、これも友人に対するある種の気遣いということか。

レクティファールはやはりこの男は不器用だ、と思い。苦笑した。

「その通り、ということにしておきましょう。お互い、良い夜を過ごすためにね」

「うむ、では、またあとでな」

「ええ」

二人の前に並んでいた娼妓の内の一人を伴い、ルフェイルは店の奥へと消えていった。

レクティファールはそれを見送ると、改めてリーサに会釈する。

「名乗りが遅れて申し訳ない。私はルフェイルの同僚、レクトと申します」

「これはご丁寧に。アタイたちからすると、名乗りは余り重要じゃないんだけどね」

偽名も当たり前の業界だし――――呟いたリーサは一人の娼妓を手招きすると、二言三言耳打ちする。それを受け娼妓はレクティファールに一礼すると、近くの扉に姿を消した。

「初めてのお客さんだし、少し凝った趣向にしようと思うんだけど」

「それは構いませんが、ルフェイルが言っていた『同じでいい』というのは？」

「ああ、あれはこっちに全部任せるってこと。勿論、何か希望があるならそっちにするけど……」

「いえ、折角の不器用な気遣いですし」

レクティファールのその台詞に、リーサはにたり、と口を歪めた。

その通りだとでも言うように何度も頷く。

「ま、あいつなりの友情の証ってやつさ。いきなりこんな店に連れてくるのも、あの馬鹿らしいと言えばその通りかもね」

「やはりそうですか」

「うん。だけどまぁ、前の人みたいなことにならないことを祈らせてもらうよ。アタイらの商売は、常連客が大事だからね」

『前の人』という一言にレクティファールの表情が一瞬硬直する。

一方リーサに自分の言葉を気にしている素振りはなく、彼女の中ではレクティファールの前任者は既に完全に過去の存在になっているようだった。

顔を合わせたこともない前任者が、容易く時間という濁流の中で過去に押し流されていく。その事実に言葉に出来ない感情を抱くレクティファールの様子に気付かぬまま、リーサは彼に向き直った。

ふと見れば、先ほど遣いに出した娼妓が戻ってきている。

「相手の準備が整ったみたいだから、案内するよ」

「――――お願いします」

頷き、店の奥へとレクティファールを導くリーサ。

優雅に歩く彼女の紅の衣裳が揺れる度、レクティファールにはその揺らめきが幽幻の炎に見えた。

レクティファールが案内されたのは、妓楼の中庭に建てられた離れの一つだった。

同じような建物があと一つ見えるが、その離れに明かりはなく、人の気配もない。

良く考えてみれば――いや、良く考えてみなくとも――今日は平日、七曜帳の上では何の色も着いていない日である。普通の、ごく真面目な男どもは妓楼になど来ないだろう。

（――――まぁ、摂政だなんて阿漕な仕事している私が普通で真面目ということもないですけど）

ある種、一番普通からは遠い仕事である。書類一枚で殺し生かし、指先一つで虐げ救い、口先一つで欺き約す。まさに阿漕と言うほかない仕事だ。

ただ、今の彼は善良な一軍人である。平日に妓楼に足を運んで気後れしないといえば嘘になるのだった。だから中々扉を開けられない。

決して後宮や離宮に居る面々を思い出し、足が竦んでいる訳ではない。

だがしかし――――

（週末の帰省、やめようかな……）

定期的に帰省するようにと厳命されているにも関わらずそんな気の迷いがふと現れる程度には、彼も追い詰められている。

だって、怖いんだもの。地を割り、海を裂き、天を穿ち貫いて、終いには神さえ殺すような奥方候補が怖くない筈がない。

自分がそれ以上の力を持っていたとしても、怒られるのは嫌なものだ。もしも怒られなくなったら、それはそれで自分に対する諸々の感情を失ったということで、怒られる以上に嫌なのだが。

（人生って、ままならないものですよねぇ）

それなりに諦め、結果順応してきたレクティファールだが、感情というものに関してはそう簡単にはいかない。特に人と人との関わりを起こりとする様々な感情は、ときに国家さえ傾け、亡ぼすことさえある。城に篭ってばかりでは人を人たらしめる感情を理解出来ない――――おそらくそれも、レクティファールがこうして城の外に出た理由の一つなのだろう。

彼の家臣たちは、良く気が利き優秀だった。

レクティファールはこれも人生勉強だと諦め、扉を開いた。

「いらっしゃいませ」

扉を開けた彼を待っていたのは、滑らかな小麦色の肌を持つ女性

だった。

女性は薄手の布を幾枚も重ねた、ゆったりとした衣裳を身に着けており、レクティファールに向かって深々とお辞儀をしている。

「今宵のお相手を勤めさせていただく、シ＝ウェフと申します」

シ＝ウェフと名乗った娼妓が顔を上げ、レクティファールはそこでようやく彼女の種族を知ることが出来た。

ぴんと尖った耳と、整った容姿。色素の薄い髪はそれぞれダークエルフ種の特徴として良く知られている。レクティファールにはガラハ・ド・ラグダナというダークエルフの知人がいる為、すぐに彼女が同じ種族であると気付いた。

ダークエルフを始め、この大陸では様々な種族が混在している。相手の種族を初見でもある程度把握するのは、その種族の礼儀に合わせる為にも不可欠な技能だった。通常であれば子供の頃から幾度かの失敗を経て学習するのだが、いい歳をした大人でも時折間違えることはある。姿形が酷似した種族でもまるで正反対の習慣を持っているので、渉外を生業とする者たちは簡易的に相手の種族を知ることが出来る魔道具なども持ち歩いていた。

「レクト、と呼んでください」

「はい、レクト様」

レクティファールが名乗ると、シ＝ウェフはふんわりとした笑顔で彼に答えた。

ダークエルフとはかくも穏やかな表情を浮かべるものなのか、などとそれなりに失礼なことを考えたレクティファールだが、彼のダークエルフの知り合いは限りなく公人であり、私的な付き合いをしている者は居ないので、仕方がないことかもしれない。恋人の父親代わりが公人というのも不思議なものだが、彼と私的な付き合いをしたことはなかった。

交友関係の狭さだけはどうしようもないが、やはり私的な付き合いをする知人友人も作るべきだろうか。しかし、そういった関係の者をおいそれと作って良いものなのか。

レクティファールは並列展開された思考の一つでそんなことを考えた。

「では、今宵はどのように」

「あ」

折角の並列思考も、それ一つに集中してしまえば意味が無い。

慣れない場所に来たことが原因なのか、珍しく深い思考に陥ってしまったレクティファールはシ＝ウェフの言葉に咄嗟に答えること

が出来なかった。

呆けた一語を発したレクティファール。シ＝ウェフはそんなレクティファールの様子を見て、それでは、と前置きして言った。

「ご夕食がまだだと伺っております。折角ですので、わたしの故郷の味をご賞味頂けませんか？」

レクティファールに、否はなかった。

ダークエルフという種は、一説には残虐非道の狩猟種族と言われているが、無論それだけが彼らの全てということは無い。

彼らは他の種族と同じように他者を愛し、慈しみ、育てる心を持っている。

その点に疑問を持つ者は今の皇国には極少数であろうし、嘗ての天敵であるエルフでさえも今日では彼らを良き隣人として認めていた。生活様式や種族としての特徴が似通っている両者は一度和解の切っ掛けを得れば、あとはごく自然にその間にある溝を埋めていくことが出来た。

彼らの和解の切っ掛け。それは、やはり二〇〇〇有余年前の旧帝国との戦いにある。

妖精種は元々いずれの種族もその個体数が少なく、人間種に比べて出生率が低かった。そのせいで人間種に住処を追われ、旧帝国時代には人跡未踏の蛮地と呼ばれていた現在の皇国領に幾つかの氏族単位で分散し、暮らしていた。

ダークエルフとエルフが報復に報復を繰り返す抗争を続けていたのは、実はその生活領域が重なり合ってしまうことが多かったからだと考えられている。長い寿命を得る為に体内に魔力を精製する器官を持つ彼らは、ただ日常生活を送るだけでも魔力を消費する。結果、龍脈の上など自然と大気中の魔力が多い地域を選んで暮らすようになったのだが、当然、それらの土地が無限にあるということもなく、同じ種族的特徴を持つエルフと居住領域を巡って争うことが多かった。

魔力を得られなければ命に関わる彼らにとって、その戦いは生存競争だったのだろう。

亡ぼさなければ亡ぼされる。

正義も悪も存在しない、単なる種の営みの一部だった。

だが、その長い長い戦いは当時のアルマダ帝国皇帝が発した一つの勅命で強制的に終焉を迎える。

皇国独立の直接的原因となったともされる、『蛮種討伐令』――――人間種以外の一切を知恵ある者として認めず、これを討伐し数

を減らした上で管理するという命である。

繁栄の絶頂期にあった人間種の驕りと他種族への恐れが最高潮に達した瞬間でもあった。

勅命が下ったその日から、人間種以外の種族にとっての地獄が始まった。

第一次文明の技術を解析し、改良された魔導技術によって巨大な力を得た人間種はその国土に暮らす少数種族を次々と討伐。このとき、戦い力を持たなかった多くの種族の血が絶えたとされており、ダークエルフ、エルフも彼らと同じ運命を辿ろうとしていた。彼らは非常に優れた魔法技術を持っていたが、旧帝国の圧倒的物量の前には所詮衆寡敵せず、複数の氏族が皆殺しにされた。

このとき龍種を味方に付けた初代皇王が両種族の救援を決断しなければ、彼らも歴史の中に埋れていたことだろう。

初代皇王に救われた彼らは一時的に互いを敵とする関係を解消し、種の存続のために共闘することを決断する。その決断に到るまで両種族の間で初代皇王が尽力したことも歴史書には記されており、初代皇王は両種族の中で最も発言力のあった二つの氏族から正妃を迎え、これを以て両種族の和解の証としたという。

因みにそのときの正妃の系譜に連なる家の一つが、ガラハの実家であるラグダナ男爵家である。

元々貴族どころか国の概念さえ薄かった両種族が国政に参加することになったのは、既に互いを敵とする関係に倦んでいたからとも、初代皇王の持つ力に押し潰されることを恐れたとも言われている。

しかしこれ以降両種族が等しく皇国の民として生きることになったのは、間違いのないことであった。

「お口に合うか分かりませんが……」

皇国の民として生きるようになった彼らは、今でもその大多数は森の民として魔力豊富な森の奥深くに幾つかの街を作って暮らしている。

その街には魔法を使った通信装置が置かれ、外部との間に人や物の流れがあるを除けば、その生活は二〇〇〇年前と大きな違いはない。

森の恵みを得、それを素朴な方法で調理した料理は一般的に森人（エルフ）料理と呼ばれ、現在の皇国では専門店が数多く存在する程度に有名だった。

動物性蛋白質は少なく、主に森で採れる山菜や木の実などで作られる料理は年頃の女性に人気が高く、二〇〇〇年間ずっと愛され続けている。森人料理が美容や健康に良いことは、エルフやダークエルフが美男美女ばかりであることを見れば誰に目にも明らかだ。実際には種族の遺伝的特徴も影響しているのだが、食生活が無関係であるということは無い。

皇国では女性が産前産後に森人料理を食べることも多いが、これは森人料理が妊娠時の料理として非常に優れているからだろう。

身体を健康に維持するという点に関して、森人料理に勝るものは

ない――――とは、第七代皇王マリエルの言葉である。

「美味です」

実際レクティファールも、言葉少なくなる程にその味に魅了されていた。

素材の味を生かすその調理方法は余人には理解し難く、まるで食材と会話するかのように料理を創り上げる森人たちには脱帽するしか無い。

少量の簡素な調味料しか使わない筈なのに、必要以上に薄味ということもなく。更には噛み締めるときの感触まで計算されているかのような芸術品。

正直、食べるのが勿体無い品々がレクティファールの前に所狭しと並んでいた。

「騎士学校の食事は色々な種族に合わせて多くの種類があるのですが……これは中々……」

騎士学校の食堂の献立にも森人料理はあるのだが、第〇八九班にはパトリシアという専属料理人がいることもあり、これまで食べる機会が無かった。

頼めばパトリシアも作ってくれそうだが、果たしてここまでの味

を再現できるかどうか――――＜皇剣＞を使用してその成分から熱分布、さらに硬度や水分含有量などの情報を収集しながらレクティファールはその料理をひたすら食べ続ける。

シ＝ウェフは自分の料理を堪能するレクティファールを微笑みながら見詰めていたが、やがて総ての料理が皿の上から駆逐されると今度は食後のお茶を淹れ始めた。

これも森の住人であるエルフたちが好む香草茶で、味は余りしないものの口の中に残った食事の残滓をすっきり綺麗に洗い流してくれた。

「――――これは良いですね。ご馳走さまでした」

「はい、お粗末さまです。お気に召したようで、よかったですわ」

シ＝ウェフは微笑み、台所に引っ込んで洗い物を始める。

流石にこの場で手伝うなどとは言い出せず、レクティファールは妓楼に居るとは思えないのんびりとした表情で天井を見上げた。

暖房魔道具から発せられる熱が彼の表層思考から緊張感を奪い、その顔は完全に緩みきっている。

決して、この後に発生するであろう諸々の面倒ごとから逃避している訳ではない。

（皇王府からは、あとでいつ誰とどこまでやったか教えてさえくれれば特に止めないと言われているし……）

流石に何処の誰とも分からない相手と関係を持てば面倒なことになるだろうが、この島にそこまで身元不明な者が居るとは考え難い。居ればそれは、他国の工作員であったり不法侵入者であったりするので、これも結果的には問題にならない。

それ以前に、レクティファールには立場があるのでそこまで無秩序な行動は取れないのだ。

男女の関係はある種国家同士の関係にも似て複雑で、価値観の異なる両者は些細なことで争う。レクティファールも身を以てそれを学習しているから、この島に居る間は出来るだけ大人しくしていようと心に決めていた。

ルフェイルに連行されてこなければ、妓楼に来ることもなかっただろう。念の為にアリアに色々教わってきたが、それを役立てようという意図は欠片も持ち合わせていなかった。

うっかり役立てた日には、後宮に入れなくなる。

「――――ぉおう……」

第二次後宮籠城戦という単語が頭に浮かんだ。そんな自分の想像に背筋を悪寒が駆け上り、レクティファールは奇声を発する。

丁度戻ってきたシ＝ウェフが、首を傾げていた。

「何かございましたか？」

「いえ、ちょっと怖い想像をしてしまって……」

そういえば、ここはメリエラの＜龍の吐息（ドラゴン・ブレス）＞の射程圏内ではなかろうか。

魔法を使えば曲射も可能である＜龍の吐息（ドラゴン・ブレス）＞なら、間違いなくこの島全体を射程に収めている。

天から降り注ぐ極太の光軸と、それから必死の形相で逃げる自分。

やはり、非常に怖い想像だった。

「あの……顔色が悪いようですが……」

「――――すみません、疲れているだけです」

だらだらと垂れる嫌な汗と真っ青な顔色は、疲れだけではないように思える。だが、シ＝ウェフはそれ以上何も言うことなく、彼を奥の寝室へと導く。

「では、少しお休みになってください。冷たい飲み物でもご用意いたしますわ」

「ありがとう」

妓楼にまで来て、自分は何をやっているのだろうか――――そんな疑問を持ったレクティファールだが、それも結局口に出すことはなかった。

寝室でのシ＝ウェフとの会話は楽しいものだった。本来妓楼ですることもせず、ただ喋っているだけというのは可笑しいものなのかとシ＝ウェフに問うてみれば、客の望みを叶えることが娼妓の役目であり、会話を求められればそれに応えるのも仕事だという答えが返ってきた。

その答えに気を良くしたレクティファールは、丁度良いとばかりにシ＝ウェフに質問を繰り返す。ダークエルフという種族について、

強い興味が湧いたのだった。

レクティファールにとってダークエルフというのは余り馴染みの無い種族で、摂政としての役割上その種族的性質を学んだに過ぎない。歴代皇王にもダークエルフ出身の者はおらず、＜皇剣＞の情報というのも何処か形式ばったものが多かった。

生物としては同じく精霊界由来の種である妖精種エルフと対となっているようで、その生活様式から種族固有魔力波、そして医学的特徴も似通った部分が多い。両者の間に生まれたエルフ――エルフ種以外の種との混血であるハーフエルフと区別するためにリ・エルフと呼ばれる――も存在している。

何故両者が争うようになったのかという歴史的な事実は＜皇剣＞に収められていたので知っているが、彼らの実際の生活であるとか風習などは初めて知るものも多かった。

「ははぁ、ダークエルフというと夜間戦闘に長けた種族という印象があったのですが、意外とそうでもないんですね……」

「昔ならともかく、夜の森は危険ですから、むしろ森の中に溶け込んで相手に奇襲を加えるという戦い方の方が多かったと思います。魔法も併用すれば、動物や魔物の鼻も誤魔化せますし」

そういえば、以前城で見た資料の中にダークエルフの街の特産品があった。そのうちの一つが染物で、森林迷彩のような柄も存在していた。

「でも、夜目は利くんですよ。暗い森の中で狩りをするには、どうしても必要ですから」

「ふむふむ」

それらの話が混ざったり変化したりして、ダークエルフは暗闇の狩人などと呼ばれるようになったらしい。

今よりも血腥いエルフとの抗争の時代なら、もしかしたら人々が今持っているダークエルフの印象通りの生活を送っていたのかもしれないが、これは今聞くべきことではないだろう。必要なら、皇城の資料室を漁れば良い。

「――――いや、色々参考になりました」

「いいえ、お役に立てて何よりですわ。でも、こんな所でもお勉強なんて、軍人さんは大変なんですね」

「ははは、これは私個人の趣味みたいなものです。お恥ずかしながら皇都に来る前は余り人の出入りのない田舎に住んでいたもので、ダークエルフの方とはこちらに出てきてから初めてお会いしたんです」

「わたしも同じですわ。森都よりもずっと小さな集落で暮らしていたので、皇都に来たばかりの頃は人の多さに目が回ってしまいました」

森都というのは、エルフたちの都である樹海都市＜アルフィウム＞のことだろう。エルフの街では最大のもので、エルフたちが『都（みやこ）』と呼ぶのはそこしかない。

「しばらくはそのまま皇都で暮らしていたのですが、やはり余り人の多いところは落ち着かなくて……こちらの島に移ってきたんです」

「では、それからこの店で？」

「はい」

この国では、公妓という国家公認の娼妓以外を店に出すことは禁じられている。その見習いという形で店で働くことは出来るが、客を取ることは出来ない。

何故公妓などという娼妓の国家資格が生まれたかといえば、やはり一人の女性の存在が大きいだろう。

彼女の功績により、アルトデステニアでは娼妓さえごく普通の一つの職業として認識されている。

「でも、他の国では余り良い職業ではないと聞きます。先程の男性も、お国の店と同じような振る舞いをして店長に追い出されたようですし……あ、お茶を淹れますね」

レクティファールに一言断りを入れ、シ＝ウェフは寝室を出て台所に向かう。

彼女が奏でる茶器の音を聞きながら、レクティファールはこの店に入るときの騒ぎを思い出した。シ＝ウェフの言う先程の男性というのは、恐らくそのときレクティファールとルフェイルが蹴り飛ばした男のことだろう。

色街の住人たちの様子を見る限りでは、珍しいことではないようだが。

「多いのですか、あのような手合いは」

「そうですね、季節の変わり目、新しく島に来た外国の方の中にはあのような振る舞いをされる方もおります」

シ＝ウェフはそう言いながら温かい茶をレクティファールに差し出す。

軽く会釈をして、レクティファールをそれを受け取った。

「先々代様のお陰でわたしたちは胸を張って昼間の世界を歩けますが、他の国ではやはり違うのですね。あのような方たちを見る度、そう考えてしまいます」

そう話すシ＝ウェフの表情は暗い。

先々代皇王、マリエルの御代。女性たちの地位向上の一環として公妓制度は導入されたが、その大元にあるのは単なる女性保護の為の政策ではない。

奴隷解放の為の政策だ。

元々皇国は人間種に奴隷扱いされていた種族が多く暮らしている。

そのこともあって建国当初から奴隷の売買や所有は禁止されていたのだが、年季奉公や性的奴隷としての少年少女の身売りはその後も続いていた。それらの実質的奴隷を社会的に解放しようという政策がマリエル皇によって施行され、うちの一つが公妓制度制定だ。

年季奉公は国が制定する徒弟制度へと形を変え、さらに国家公認の資格制度が本格的に設定されたことでほぼ無くなったと言って良い。そもそも金銭の貸借に関してその代価を労働で返済することそのものが禁止された為、仮にそれらの行為を行えば法に従って処罰される。

何故マリエル皇が奴隷解放を目指したかといえば、恐らくは彼女自身の生い立ちが影響しているのだろう。

当時の社会情勢や社会への影響を鑑みて今でもその出自は秘匿されているが、彼女が娼妓の出であることは公然の秘密となっている。

当時の娼妓は今のように国が認定するものではなかったから、恐らくは何処かから売られてきたのだろう。彼女自身この国の生まれではないと公言していたらしい。

「――――大陸全体で見ても、当時はまだ奴隷制が多く残っていましたからね。必要悪といえば、まあ、それまででしょうが」

レクティファールにとっては余り馴染みのないものではあるが、奴隷という言葉でなくとも実質的に同じような立場に追い遣られている者は少なくない。

今でも法の目を掻い潜って人の命を売り買いする者が居ることも、彼は知っていた。

知っていても、どうにもならないことはある。

ただ綺麗なだけの水では、生き物は生きられないのだから。

「暗くなってしまいましたね。変なことを聞いて申し訳ない」

「いいえ、構いませんわ。少なくともこの国では、娼妓は行儀見習の一つとしてしっかりと認識されておりますもの」

マリエルの政策が完全に受け入れられたのは、彼女の御代が終わりに近付いた頃だった。彼女の跡を継ぐことになる先代皇王が、皇太子時代に公妓を正妃に迎え入れたのである。

彼は巫女姫と四龍姫に続く六人目の正妃として、皇太子になる以前から付き合いのあった一人の公妓を妻として迎えた。それ以前にも娼妓を側妃や愛妾として離宮に入れることはあったが、正妃となると皇国史上初の出来ごとだ。

流石に初めは反発し戸惑いを見せた国民であるが、皇王家への崇敬とその妃が見せる誠実な態度に次第に反発や戸惑いは消えてゆき、最終的には死の直前にマリエルが自分の出自を非公式に漏らしたことで娼妓という職業への蔑視は薄れ、今のように女性の仕事の一つとして認識されるようになる。

今現在、公妓が貴族の正室や継室となることは珍しくもなく。更に多くの貴族は、自分の子息が適齢になるとその子どもの教育係として公妓を迎え入れることが当たり前になっている。義務ある貴族の男として知らねばならないことを、公妓たちは良く知っていた。現摂政の側妾アリアも元はといえば、それらの教育を受けているのだ。

夫婦生活を円満にするためにも、女性の立場で貴族の子弟に様々なことを教授する公妓たちは、皇国の貴族社会で必要不可欠な存在となっている。彼女たちはその子弟が一家を持つと側室や愛妾という形で付いていくことが殆どで、子どもが生まれれば乳母としてその子どもたちの面倒を見る。

男性貴族にとって、自分に男女の諸々を教え込んだ公妓とは、母であり、姉であり、さらには情人であった。

「うちの店長も、一年ほど前にとある貴族の継室としてここを出たんですのよ？　でも、妹分たちが心配だからってこの店を旦那様に買い取って貰ったんです。――――一度その旦那様にお会いしたことがありますけど、店長に振り回されて目を回しておられました。ふふ……『手を出すならこの店の娘たちにしなさい』って店長に言われて、すごく驚いていましたよ」

「――――ははは……すごい親近感……」

シ＝ウェフの話を聞いて、レクティファールの口から乾いた笑いが零れた。

「え？」

「ああ、いえいえ、うちの義父も義母に振り回されていたなぁと」

まさか自分のことだとは言えない。

嘘を言っている訳ではないので構わないだろう。

「そういえば、シ＝ウェフさんはこれからどうなさるのですか？」

レクティファールは、目の前のこの公妓がどのような将来を望んでいるのか気になった。

自分で娶ろうなどとは思わないが、シ＝ウェフが望むのであれば信頼出来る貴族との出会いの場を取り持つことは吝かではない。

しかし、シ＝ウェフは彼の予想とは大分違う答えを示した。

「そう、ですね……いつか自分のお店を持てれば良いと思っております」

「ほう……」

妓楼を新しく造るというのは、そう簡単なことではない。

彼女自身は公妓であるから自分だけでも客を取ることは出来るだろうが、これまでの店との関係もあって中々独立というのは難しい筈だ。

「店長は時期が来たらこの店を譲ると言ってくれたのですが、そこまでしてもらうというのも……」

どうやら目の前の娼妓は、かなり優秀な部類に入るらしい。

レクティファールはシ＝ウェフの顔をじっと見詰め、彼女が不思議そうに首を傾げる。

この国の産業に関して一定の責任を負うレクティファールにしてみれば、こうして様々な業種の現場の声を聞くというのも悪くない。摂政として視察に赴いたこともあるが、相手が摂政であることに萎縮してしまう者も多く、更に上司からの口止めもあってレクティファールが望むような情報は得られなかった。

レクティファールが直接出向かずとも、内務院産業庁の産業調査担当官が各地に散って色々な情報を集めてきてくれるのだが、報告書の作成段階で担当官の主観が混じってしまい。これもレクティファールが直接顔を合わせて得るよりも情報の信憑性では若干劣る。

単なる文字にしてしまえば調査を受けた人物の表情や口調は消えてなくなり、情報は大幅に劣化してしまう。とはいえ逆に文字にすることで情報が洗練され、言葉以上の情報を含むようになる場合もあるから調査が無駄であるということはないのだが。

三院三軍総て合わせ数千人とも数万人とも言われる調査官が日々国内外を巡っていることに関して、レクティファールは不満を抱いたことはない。彼らの得た情報はこの国を動かす大切な指針であり、レクティファールが直接出向くよりも正確で緻密な情報が得られる。

ただそれでも、こうして自分が得た情報以上に信頼できる情報というのは存外少ないものだ。

皇王府から上げられる報告も、政府から上げられる報告も必要以

上の疑いを持ったことはない。とはいうものの、どれだけ信頼する人物からの情報も決して盲信するなという皇府と宰相の有り難い言葉もあり、彼はとりあえず総てを疑ってかかることにしている。

それで救われたこともあれば、単に時間を浪費しただけのこともある。

時間と少々の予算の浪費で済んだのなら、それはむしろ浪費ではなく必要な消費であったのだと二人は言ってくれるが、レクティファールとしてはその消費を少しでも抑えたいと思っている。

その為の騎士学校編入であり、社会勉強である。

「シ＝ウェフさん、ちょっとお伺いしたいのですが」

「はい？」

むくむくと湧き上がる好奇心に再び意識を委ねたレクティファールはここが妓楼であることを天高く棚上げし、皇国経済の一端を知るべく一人の公妓を質問攻めにするのだった。

顔色良く何処か満足気なルフェイルと合流し、妓楼を出たのは夜の八時を過ぎた頃だった。

宿泊も可能であるという話であったが、明日も講義があるというのにそんなことは出来ない。ルフェイルは最初泊まっていくと言っていたのだが、額に青筋浮かべたリーサに追い出されていた。彼女曰く「仕事の出来ない男は店に入れん」ということらしい。

店を出るまでルフェイルは不満そうにぶつぶつと文句を言っていたが、綺麗どころに見送られて色街をあとにし、共同駐車場に置いてあった魔動車に乗り込む頃には無表情の中に満足感と充実感を覗かせていた。

因みに車はレクティファールが運転することになったのだが、これは単純にルフェイルが酔っ払っていたからだ。レクティファールも酒は飲んでいたが、店にあった酒精量計測器で酒精量を測ってみれば、特に運転に問題はないということであった。

レクティファールは助手席に酔っ払いを乗せ、その意味の分からない単語の数々に適当な相槌を打ちながら夜の道をひた走る。

「――――ふ、男で良かった」

「そうですか」

ルフェイルに途中で買った金属瓶入りの水を与え、レクティファールは危なげない運転で騎士学校へと向かう。

騎士学校そのものに門限があるということはなく、たとえ正門が閉じられていても他に幾つか通用門がある。その内の一つ、第〇八九班専用宿舎に一番近い通用門を通ったレクティファールだが、同乗しているルフェイルに気付いた門の警備担当者に「ご苦労様です」と逆に労われてしまい、微妙な気持ちのまま宿舎に戻ることになってしまった。

しかし彼は、もうすぐ宿舎に辿り着くというところで異常に気付いた。

視界の隅に宿舎が見えるのだが、その周囲には人だかり。学校の警備担当が居ないところを見るとそれ程大きな問題ではないのだろうが、どうにも胸騒ぎがする彼は魔動車の灯りを消して宿舎近くの道端に停車した。

レクティファールは宿舎から視線を外さず、隣にいるルフェイルの肩を叩いた。

「ルフェイル」

「ふ、ふ、ふはは……」

しかし、返答は高笑い。

レクティファールは深い深い溜息を吐くと、酔っ払いに自分を上着を掛けて車を出た。

そこでふと、何故自分はこんなことをしているのだろうと思ってしまったが、敢えてそれ以上思考を巡らせることはしなかった。ただ唯一、自分が酔っていないことを呪った。

「明日の昼食はルフェイルの奢りですね……」

意識に能動的迷彩魔法の術式を走らせた彼はまるで夜の闇に溶けるように姿を消し、足音を殺して宿舎へと近付いて行く。

能動的迷彩魔法は未だ開発段階の魔法で、決して持続時間は長くない。しかし、人だかりに近付き、そこに紛れ込むくらいは可能な筈だ。

彼はそっと人だかりのすぐ後ろに付き、その顔ぶれを確かめた。いずれも、騎士学校の候補生たちだった。彼らは宿舎の前に群れを作り、宿舎の中を窺っているようだ。

「――――何かあったので？」

レクティファールは周囲の人々が自分に注意を向けていないことを確認してから迷彩を解き、まるで最初からそこにいたかのように

近くの男に声を掛けた。

時間が時間なので候補生用の制服は着ていないが、顔には見覚えがあった。戦史研究科の四回生で、戦史の講義で助手として駆り出されている。

機材を扱う手付きが怪しかったので、片付けなどを手伝ったこともあった。それ以来、食堂などで会うと互いの近況などを肴に会話を楽む仲だ。

「いや、なんか近衛の准士官が……って、ハルベルンッ！？」

彼の素っ頓狂な声に、周囲の人々が一斉にこちらを向く。

彼らは皆一様に驚いたような顔でレクティファールを見詰め、その視線には物理的な圧力さえもあるように思えた。

レクティファールはその圧力に抗するべく、思わず後退りしそうになる身体に喝を入れた。

しかし――――

「お前のお姉さんが来てるんだぞ！　何でこんなところにッ！」

その一言を聞いた瞬間、彼は全身全霊の力を以て踵を返した。

これは撤退ではない、転進であると自分に言い聞かせて。

第十六話「宴の終わり＋宴の始まり」

レクティファールは踵を返すや否や、その並列思考の内、既に使用しているものを除き総てを展開した。

走らせる情報は現状を如何に切り抜けるかという一点に尽き、＜皇剣＞はその機能の大半を使って使用者の望みを叶えようと動き始める。

「しかし、何故にウィリィアさんが来ておられるのかッ！？」

近くの道路に止めた魔動車に戻り、酔っ払いを起こさなくてはならない。

加速するべく踏み込んだ足に力を溜め、再びその力を開放せんと前方に身体を向けたレクティファールだが――――

「――――おかえり、レクト」

「――ッ！？」

背後から聞こえてきた物凄く優しそうな声に足を縺れさせ、前方にその身を投げ出す羽目になった。

実に四回転。彼は固い舗装道路に何度も身体をぶつけながら、やがて動きを止めた。

痛みを堪えて起き上がり、声の主を確認する。

「どうして逃げるの？」

「――――ぅわお」

思わずそんな声が漏れる程の衝撃。

宿舎前の人だかりを割って進む麗しの義姉君は、その瞳と声に一切の感情を感じさせない。

靴音を鳴らし、ただ歩いて来るだけのその姿にレクティファールは恐怖のあまり気を失いそうになった。軍装ではなく普段着なのだな、とそれくらいのことしか頭に浮かんでこなかった。

彼が恐怖するのも無理はない。感情を窺わせない眼というのは、人として異常だ。どんな人物でも瞳から一切の感情を取り除くことは出来ず、訓練を積んでそれを隠す技術を得るしか無い。

だというのに、あの義姉の眼には少しの感情も窺えない。レクティファールにそう見えているだけだとしても、怖いものは怖いので

ある。

「あ、ああ、あのですね……」

友人と遊びに出たことは問題ない。

妓楼に行ったことも、多分問題ない筈。

まさか門限破りが問題なのか――――レクティファールは必死に言い訳を考えた。

「別に明日の講義をサボろうだとか、どうせ四半年しか居ないんだから適当でいいや、とか思っていた訳ではなくて――――」

「レクト」

はっきりとしたウィリィアの声。

「すみませんでした」

義姉の言葉からその間僅か十分の一秒、彼は瞬間的に立ち上がり、頭を下げていた。上司に怒られる若者たちの手本となれるような見事な動きだった。

しかしながら、件の義姉君は義弟のそんな動作に感銘を受けた様子もなく、無感動にその首根っこを掴んだ。

「ぐえ」

ぐい、とレクティファールを引き寄せ、彼の身体が地面に擦れることも気にせずウィリィアは宿舎への道を戻って行く。

「――――全くもう、折角の半日休みを潰してまで手紙を持ってきたのに夜遊びだなんて……」

愚痴じみた独り言は、レクティファールにも聞こえていた。

それが事実ならば、確かにウィリィアには悪いことをしてしまった。彼女は近衛軍特別護衛旅団に籍を置き、メリエラ付き護衛小隊に属している。その勤務はメリエラの予定に左右されることも多く、皇都を離れることが出来る休みは貴重だ。

しかし、レクティファールにも言い分はある。

「いえ、あの、せめて前日に一言……」

そう、事前に一言あって然るべきなのだ。

幾ら時間の融通が利く候補生とはいえ、急ぎの用事が出来ればそちらを優先せざるをえない。

そんなとき事前に予定を聞かされていれば、まだ対処のしようもある。時間があるなら、港まで迎えに行っても良かったのだ。

尤も、それが不機嫌な相手に通じるかは別問題なのだが。

「なに？」

頭上から聞こえてきた抑揚のないその声に、レクティファールの顔が引き攣る。

おや不機嫌でいらっしゃる、そのようです、ではさっさと降参しましょう、そうしましょう――――といった風に、彼の中で展開された並列思考の過半数が無条件降伏に賛成した。せめてこれだけはと最低限の条件付降伏を提案した並列思考も存在したのだが、哀しいかな、それは圧倒的少数に過ぎない。

自分のことながら何とも弱腰だと嘆き、彼は諸手を上げた。

「いぃえぇ、何でもないです、我が愛しの姉君」

「――ふん」

ウィリィアは義弟の言葉に鼻を鳴らし、そっぽを向く。真っ赤な耳をした彼女にとっての幸運は、周囲が暗く、更に義弟が彼女を視界に入れていなかったことだろう。

しかし本来なら、「愛しの」等という言葉は彼女の主人に向けるべきだ。いつまで経っても女心というものを微塵も理解しない義弟の無思慮振りに呆れ、ウィリィアは深い溜息を吐く。決して、羞恥心を誤魔化している訳ではないと自分に言い聞かせた。

家族以外にそんな言葉を贈られた経験が無かったという事実も、鎖でぐるぐる巻きにして心の奥底に沈める。

そうして吐き出された言葉は、いつもと何ら変わらない調子だった。

「諸々の書類と一緒にメリア様たちの手紙も預かってきたから、あとで返事を書いて」

「持って帰るので？」

「出来るならね」

そう言ったものの、急いで書いた返事よりも彼女たちの手紙をじっくりと読み、時間を掛けて書いた返事の方が喜んでもらえるような気がする。

レクティファールも同じ結論に至ったのか、彼は頭上にあるウィリィアの顔を見上げて提案してきた。

「今日は泊まっていったらどうですか。許可ならこちらで取りますし、一晩頂ければ返事もきちんとしたものを書きます」

「――――うーん……」

＜ユーノス＞に泊まっていくことは難しくない。近衛軍の宿舎に連絡を入れれば良いだけであるし、明日の朝までは休暇ということになっている。早朝の連絡船であれば、十分に間に合うし、レクティファールが手を回せば、騎士学校内の宿舎に宿泊する許可もあっさりと下りるだろう。

「そうね……そうさせてもらうわ」

様々な事情を勘案し、ウィリィアはレクティファールの提案通り一泊することに決めた。少しでも多くレクティファールとの関わりを持ちたいと思う主人の意向を汲むならば、これが最良だと判断したのだった。

（それに……）

何よりも、このだらしのない義弟がきちんとした生活を送っているのか気になる。親元を離れてひとり暮らしを始めた途端に堕落する若者など掃いて捨てるほど居るのだ。

彼女個人にとってレクティファールは単なる義弟であり、主人の婚約者であるに過ぎないが、この国にとってはどうやっても取り替えの利かない唯一の君主だ。そんな理由もあって皇府ルキーティには騎士学校での生活の実態を調査するよう依頼されており、これは近衛軍司令部からの正式な命令でもある。

具体的には懇意にしている者を男女問わず報告して欲しいというものだが、実は主人にも似たようなことを命じられていた。こちらは浮気調査にも似た身辺調査が主で、それは流石に専門外である。ルキーティに対する報告内容から女性に関する交友関係を抜粋して報告するしかないだろう。

そういえば、自分の母にもちょっと様子を見てきて欲しいと頼まれている。世話好きの母らしいと思いながらも、何故皆揃って自分に頼むのかという疑問も無いことはない。

レクティファールに近い者たちの間で、自分が彼の情人扱いされているなどとは夢にも思わないウィリィアであった。レクティファールがウィリィアをある種の『特別扱い』していることなど、本人たち以外には一目瞭然。但し、その特別扱いが所謂男女間の感情に基づくものであるかどうかは、逆に本人たちにしか分からない。

「あ、着替えはどうしましょう」

「寝間着くらい酒保で買ってくれば良いでしょう。あなた持ちで」

「――――いえ、まあ、ウィリィアさんが良いなら、それでも別に良いですけど」

皇王府から送られてくる交際費その他諸々は、今回の編入に合わせて陸軍の同年代同階級の男子が受け取るのと変わらない金額に設定されている。

偽装の為に月毎に陸軍からの給料として振り込まれているその金額はこれまでの生活からすると決して多くないが、使う機会に恵まれないこともあって殆ど手付かずだ。昼食や日用品くらいしか使用用途がないので、当然ではあるのだが。

「じゃあ、夕食を済ませたら案内して」

「了解です」

レクティファールの気の抜けたへにゃりとした敬礼に頷き、ウィリィアはもうだいぶ近くなった宿舎に眼を向ける。

先程まで宿舎を取り囲んでいた野次馬たちはいつの間にか消え去り、玄関の前に仁王立ちする影が一つだけ。

額に青筋を浮かべ、細い体躯から怒気を発散している。

「あら、班長がお怒りよ」

「門限破りですからね」

レクティファールからはその姿が見えないが、言い様のない威圧感は何となく感じ取れる。

「自業自得なんだから、ちゃんと怒られなさい」

「……了解」

どんよりとした返事と同時に、ウィリィアは引き摺る腕に掛かる重さが増したような錯覚を覚えたが、自分が困ったような、でも何処か楽しそうな笑みを浮かべていることには最後まで気付かなかった。

酒を飲むと言動が豹変する人というのは珍しくない。レクティファールも元世界でそういった人物と酒を飲んだことはあるし、こちらの世界に来てからも何度かそのような場面に遭遇したことがある。

気晴らしに散歩に出た皇都の下町では夜間の仕事の従事している者たちが昼間から酒を飲んで騒いでいたし、下町に限定しなくとも、祝いごとがあれば隣近所に酒を振舞うこともある。

とかく酒とは知恵ある者どもにとって無二の友であり、付き合い方さえ間違わなければこれ程愉快な相手は居ないのだ。

「付き合い方、そう……付き合い方なんですよね……」

相手との適正な距離を保つ。これが出来ずして付き合いは上手くいかない。

距離近すぎれば相手の全身が見えなくなるし、遠すぎればその表情が見えなくなってしまう。何とも難しいものである。

「まあ、難しいことはどうでもいいって人はいますよね」

とりあえず、楽しければ良いという考えもあるだろう。レクティ

ファールもそれは否定しないし、本人が困らないなら勝手にやってくれとも思う。

「だけど、巻き込むのはやめて欲しいですよねぇ……切実に」

レクティファールはぼやき、宿舎の食堂とそこと繋がった談話室で繰り広げられる馬鹿騒ぎを半眼で見遣る。

「あっはっは、胸がなくて何がわるーいッ！　女の価値は胸だけじゃないのさ！」

「その通り、女の器量は全身全体の均衡の美しさです！」

「そうだようぅ、男の子も女の子も、中から磨かないとねぇ」

「――――どうでも良いけど、レクトお酒切れたから次の」

嗚呼、げに恐ろしきは酔っ払い。

いつからこの宿舎は魔境になってしまったのか。

レクティファールは巻き込まれないよう部屋の片隅にへばり付き、ちびちびと冷水を啜っていたのだが、オリガの求めに応じて新たな

酒樽を用意する。

龍種は蟒蛇なんて生易しいものじゃないなぁ、と心で呟き、それをオリガの前に置いた。

「飲み過ぎないように……って、もう遅いような気がしますが、病院のお世話になるようなことは謹んでくださいね」

「――――考えておく」

「お願いします」

再び部屋の片隅に戻ってきたレクティファールは女三人寄れば姦しいという言葉を思い出したが、よく考えればもう姦しいなんてものじゃないなと思った。

（一体何でこんなことになってしまったのか）

レクティファールは目の前で繰り広げられる乙女たちの馬鹿騒ぎに顔を顰めつつ、これまでの出来ごとを回想し始めた。

「しかし、フェリス様も随分軍人らしくなりましたね、マリア様も喜んでおられると思います」

「でもボクなんてまだまだヒヨっ子のペーペーだし……」

「誰もが最初はそんなものです。これから幾らでも成長する機会はありますよ」

「そうそう、頑張ってねフェリスちゃん」

「――――頑張れ」

最初のうち、ウィリィア、フェリス、パトリシア、オリガの四人の間ではそんな会話が交わされていた。ウィリィアとフェリス、オリガの二人は元々面識があったらしく、その会話に淀みはない。パトリシアも人見知りとは随分遠い性格をしているし、レクティファールが帰ってくる前にはもう、随分と話は盛り上がっていたようだ。

「やはりあれですね、酒が入ったのは不味かった」

そして、レクティファールがウィリィアの宿泊許可を得る為一時間と少し席を外し、戻ってくると状況は一変していた。

「ヒック、ボクだってなぁ……好きでこんな水の抵抗少ない身体に

なりたかった訳じゃないんだよぉ……ウィック！」

「分かる、分かるわフェリス！　近衛の男どもなんてただでかいだけの脂肪袋に誑かされて鼻の下伸ばして、本当に阿呆よ！」

「だよねぇ～～あっても邪魔だしねぇ～～」

「持つものは持たざるものの気持ちを理解出来ないーーーーわたしはどうでも良いけど……」

思わず、誰だ酒を持ち込んだのは、と叫びそうになったレクティファールであるが、それが自分の物らしいと気付いて崩れ落ちた。

名門士族ハルベルン家の養子殿とお近付きになりたい家は多いらしく、ちょっとした心付けとして希少酒や珍味やらが送られてくる。金銭でないのは、贈賄罪対策といったところだろうか。

だが、今回はそんな下心満載の贈り物が仇になった。

妙な勘違いされても困るので宿舎の共有品という形にして倉庫に仕舞っておいたのだが、それを誰かが持ち出してしまったようだ。

確かに酒が入れば話も弾む、楽しい時間が過ごせるだろう。

「私は別に楽しくありませんがね」

楽しいのは本人たちだけ、素面のレクティファールには辛いだけである。

それでも彼は耐えた。

おもむろに服を脱ぎ始めた義姉を取り押さえ、騒いだ挙句外に飛び出してそこらの男子を闇討ちしようとするフェリスを引き戻し、げらげらと笑って呼吸困難に陥ったパトリシアを介抱し、黙々と酒樽を空けるオリガにおかわりを用意した。

彼は頑張った。

だが、酔っ払ってしまったウィリィアの代わりに酒保に行って戻ってくると、事態はもう収拾不可能であった。

ちなみに寝間着は売り切れで買えず、ウィリィアはいつの間にかレクティファールの軍装のシャツを寝間着がわりに着ていた。大層酔っ払った本人曰く、「レクトのものはわたしのもの」らしい。

このとき四人は大盛り上がり。しかし――――

「だがしかし、これは惨劇です……！」

レクティファールは改めて部屋を見回し、頭を抱える。

彼の叫び通り、酒の甘ったるい匂いが充満する宿舎の食堂は、ま

るで嵐でも通り過ぎたかのような有様だった。

まず食卓の上に小さな卓が鎮座し、さらに椅子が乗っていた。その椅子の上でオリガが静かに盃を傾けているのだ。ゆらゆらとその頭が揺れている様を見ると、いつ落ちるかと不安になってしょうがない。

「というか、何故そんなことになったんですかオリガ」

「――――わたしはチビじゃないもの……」

「気にしてたんですねッ！」

危ないから降りてこいと言っても嫌だと頭を振るばかり、レクティファールは「落ちないでくださいね」と念押しし、次の惨劇の場へと向かった。

そこは食堂の隣にある談話室。そこのソファの一つで、妙齢の女性が熱に浮かされたような顔で荒く息を吐いている。

「ふわぁあ～～揉んじゃ駄目だってばぁ……」

「何、何入ってるのこれ？　脂肪じゃないの？　ただの飾りじゃないの？」

パトリシアの腹の上に馬乗りになり、その豊かな二つの塊を真剣な顔で揉みまくるフェリス。

遺伝なのかそうではないか確かなことは判らないが、彼女もその母親も、非常に水の抵抗の少ない体つきをしている。龍としての形態時でも、他の龍種に較べて水や空気の抵抗の少ない姿をしており、ならば結局種族的なものなのだろうとレクティファールは勝手に納得していたのだが、本人たちはそうでもないらしい。

血走った目は、果たして酒のせいなのか。レクティファールはそれ以上考えることをやめた。

（まぁ、男も気にするときは気にしますからね、体つきって……）

その辺りの感情には男女差はないのかもしれない。レクティファールは＜皇剣＞によってその機能を行使するに最適な体型で維持されているから、その苦労は欠片も理解出来ないのだが。

さて、と一息。レクティファールは二人の状況を確認してどう対処するか考える。

「不思議だよね、ボクなんて食べたら太くなるだけなのにパティは全部胸に行くんだから……――――オノレキョニュウメオノレキョニュウメ、ホロビヨホロビヨ、世に満ちる哀しき胸の同志たちよ……ボクに巨悪を討つ力を……というか、お尻もいい形だよね、亡び

ればいいのに」

「んんっ　そこだめぇ……フェリスちゃん……痛いよぅ～～……」

胸だけではなく尻も揉みながら物騒な呪詛を吐くフェリスと、湿った吐息とぬめる眼差しを同僚に向けるパトリシア。

パトリシアの尻に手を伸ばすべくフェリスはパトリシアの胸に頬を埋めて更に足を絡めており、狭い二人掛けソファの上で繰り広げられる光景は、傍目には物凄い絵である。

どうやって丸く収めようかとレクティファールが思案している間にも二人の身体にはうっすらと汗が浮かび、身動ぎするたびに衣服がはだけていく。酔っ払いの乱痴気騒ぎと言えば決して間違ってはいないのだろうが、双方とも異性に見せると色々危険な艶姿で、レクティファールでさえも精神的にクるものがあった。ちなみに肉体的なものは身体管制機能で抑えることが出来たので、そちらに関しては一応男としての体面を保ったと言える。

（――――とはいえ、これを続けられたら色々不味い）

今の時点でも彼の精神汚染度はかなりの高数値を叩き出しているが、さらに事態が進めば社会的にも明日からの生活的にも、良くないことになりかねないのである。

いっそ知恵ある者の三大欲の一つ――――情欲が＜皇剣＞によっ

て完全に制御出来れば良いのだが、レクティファールはまだそこまで＜皇剣＞を使いこなせていない。情欲など極端に言えば＜皇剣＞の機能自体には余り影響がないので、何故か他の二つよりも制御が甘いのである。

「レクト～～、こーり～～」

「はいはい、ただ今」

そんな状況下にありながら彼がいつもと同じ態度を取り続けられるのは、ひとえにもう一人の酔っ払いが最後の防壁になっているからだった。

ウィリィアの前で迂闊なことは出来ないという意思が彼の心に強固な鎧を与え、精神の均衡を齎している。人とは何が幸いするか分からないものだ。

「義姉さん、飲み過ぎると明日に響きますよ」

氷入れを渡して一言忠告するも、ウィリィアは赤ら顔で大丈夫と言うばかりで全く話にならない。

あの危険人物二人をどうにかしたら今度はこの人を片付けてしまおう、と心に決めたレクティファール。

さあ今度こそ、と二人を振り返り、卒倒しそうになった。

「吸えばいいのかな、そうすれば小さく……」

「んふふ……くすぐったいよう」

フェリスがパトリシアの服の中に手を突っ込み、それを脱がせようとしていた。

レクティファールの思考から、これまで考えていた穏便な方法は総て吹っ飛んだ。

「明日フェリスさんが覚えていませんようにっ！」

そう悲鳴じみた叫び声を上げたレクティファールは、変な色気を撒き散らす二人に足早に近付き、フェリスの首筋に手のひらを押し当てて圧縮衝撃波を流し込む。リーデに教えてもらった由緒正しい陸軍式の暴徒鎮圧術の一つだった。普段の彼であれば、無抵抗の女性にこんな荒っぽい手段は使わないのだが、非常事態である。

「ていや」

「うッ！」

衝撃波を撃ち込んだ一瞬身体を仰け反らせ、くたりと倒れ込むフェリス。パトリシアが下敷きにならないようにとその身体の下に腕を回し、支える。独特のその柔らかさにレクティファールは一瞬顔を歪ませ、何とか耐えた。頑張った。

彼はフェリスを抱えると、下敷きになっていたパトリシアの様子を確認する。

衣服は大いに乱れていたが、健康状態に問題はないように見えた。

「大丈夫ですか」

「んみゅ～～……」

パトリシアの返答は、言葉とは到底言い難い珍奇な鳴き声だった。

彼女はフェリスから解放されるとそのまま丸くなり、寝息を立て始める。

レクティファールは溜息と共に「まるで室内犬のようだ」と呟き、ぐったりとしたままのフェリスを小さな子ども抱き抱えるような形に抱え直した。ついでに乱れた服も手早く直す。

自然、フェリスの細い体躯と酒臭い吐息を一層強く感じることになったが、一仕事終えた達成感で誤魔化した。

そして一言、

「――――まあ、何ごとも個人差ですよね」

彼自身余り経験が豊富な訳ではないが、所詮体つきは個性で、好みも十人十色だ。本人が気にするならそれは別に構わないが、求められた訳でもない他人が口を出すことは良いことではないだろう。少ない経験でも、それくらいのことはレクティファールにも分かる。異性として全く気にならないということはないが、それを口に出すことの馬鹿らしさは皇都での生活で嫌というほど学んだのだ。

悪いところを探すよりも良いところを探した方が双方の為になる。貶すよりも褒める方が、レクティファールの好みであった。

何より、フェリスは外見云々を別にしても良い娘である。

班長としての責務を果すべくひたむきに努力する姿は騎士学校に学ぶ候補生たちの中でも一際輝いて見えるし、性格も頑固ではあるが龍族の娘らしく情け深い。彼女を慕う者は騎士学校内部でも男女問わず多数存在するし、それらの者たちと楽しげに会話する彼女をレクティファールも何度か目撃している。

こう言っては何だが、蒼龍姫であることが勿体無いくらいだ。

（世が世なら、もう少し自由な生活も送れたんでしょうけど）

彼女の運命は、もう殆ど決まっている。

言うまでもなく、今彼女を抱えている男の下に嫁ぐことだった。

嫡流、しかも年頃の姫が居るのに彼女を差し置いて一族の別の姫を蒼龍姫として後宮に上げることは、公爵家に二心ありと周囲に疑われる危険性を孕んでいる。よしんば皇王家がそう思わずとも、既に姫君を後宮に住まわせている白龍公、嫡流の姫君の後宮入りを容認している紅龍公と黒龍公の顔に泥を塗ることになってしまう。

マリアが内心どのような考えを持っているかはこの際問題ではない。

ようやく纏まり始めた国内を一等確実に治めるには、四公爵家がレクティファールが当主を務める皇王家に対して信頼と忠誠心を持っていることを示すのが一番手っ取り早く、そして効果的。一度は独立を宣言した三公爵家が再び皇王家に忠誠を誓えば、水面下に残る現皇王支持派の根を封じ込め、枯らすことが出来るだろう。四公爵家の名は、それだけ重いものなのだから。

（私が言うのも何ですが、人生自分で決めるのと、人に決められるの、どっちが幸せなんでしょうかねぇ）

幸福は事前に確信を得ることが出来ない。

ただ、結果としてそこに存在するだけだ。

「ま、私は今それなりに幸せですがね」

面倒ごとだらけの人生であるが、手の届く場所に大切なモノがある。これを幸せと言わず何と呼べばというのか――――彼が自らの本心として、この言葉をメリエラやリリシアに伝えていれば、彼の私生活はもっと穏やかになっていたかもしれない。

「とりあえずこの娘は部屋にでも放り込むとして……」

「れーくとー！」

フェリスを部屋に連れて行こうとしたレクティファールの背に、ウィリィアが飛び掛る。良く考えてみれば、この女性との間に発生する問題も彼の言葉が足りなかったことに起因することが多い。

最近は色々交わす言葉も増えたが、既に形成された関係を変えることは難しかった。

とは言うものの、こうして何かの力を借りることでその距離を一時的に縮めることは出来るようになった。

「おさけちょーだーい」

しかし、それが酒というのはどうなのだろうかと思うレクティファール。

女同士の気安さがそうさせたのか、仕事の鬱憤が溜まっていのか、今のウィリィアは以前見た寝起きの彼女に非常に近い。

「ねーえー」

耳元で聞こえる甘ったるい声。

それは日頃の彼女からは考えられないような女性らしい声音で、それを間近で聞く羽目になったレクティファールは妙な居心地の悪さを感じた。次いで酒の匂いと、ウィリィアの匂いが彼の鼻腔をちくちくと刺激する。やはり、落ち着かない。

彼は出来るだけ平静を保ちながら、背中にへばりついた義姉を振り向く。はだけた衣服の隙間から、ふくよかな曲線がちらりと見えた。レクティファールの精神はこの時点で恐ろしく消耗していた。そのせいか、口調が硬くなる。

「――――義姉さん、重いです」

「なんだとぉ！」

しかし一言文句を言ってみれば、返って来るのは抗議の声。真っ

赤に染まった顔は怒りか酒か。どちらにせよ始末に負えない。

ゆさゆさと両肩を揺さぶられ、レクティファールは仕方なくフェリスを近くの長椅子に寝かせた。落としてしまっては一大事である。

「フェリスさんを部屋に連れていきたいので、あとにしてくれませんか？」

ぶんぶんと風を切って首を振るウィリィア。

ひどく真剣な表情で義姉上は宣うた。

「いや」

「完全に酔っ払ってますね、義姉さん」

やれやれと呟き、彼は頭を抱える。今の気分は保父に近い。

日頃の精神的緊張（ストレス）の反動か、ウィリィアは年齢が半分以下になったかのような言動でレクティファールを翻弄する。

ゆらゆらと身体を揺らしてはケタケタと笑い、それに飽きれば今度は身体全体でレクティファールに抱きつく。完全に理性は吹き飛んでいるようだ。

彼女は一頻りレクティファール“で”遊ぶと、疲れたようにしなだれかかりその肩に顎を乗せた。

「このところ姫様たちが機嫌悪いんだよぉ……毎日疲れるんだよぉ……」

「それは、お疲れ様です……」

後宮からの報告もレクティファールの下に届いている。

リリシアは積極的に他国の使節と懇談して皇国経済域の拡大を図っているし、リーデは新たに設立された復興支援団体の名誉代表として各地を飛び回っていると聞く。正式に皇妃候補となっていない筈のフェリエルとファリエルさえも、軍からの命令という形で皇王府主催の夜会に着飾って出席しているという。あまり目立たないが、アリアもレクティファールのやり方に不満を持っている、若しくは中立的な立場を崩さない貴族や皇国議員の令嬢たちを離宮に招いては連日茶会を催している筈だ。

彼女たちはいずれも、自分たちに出来る範囲でレクティファールを支えてくれていた。それについては感謝してもしきれないし、ことあるごとに通信や手紙で感謝の言葉を送っている。それに対する反応は様々だが、とりあえず面と向かって不満を漏らす者は居なかった。

ウィリィアの仕えるメリエラもここ数日は近衛軍の訓練と公務に忙殺されているらしいが、やはり不満というべきものは漏らしてい

ない。

だが、本当に不満がないとはとても思えなかった。

レクティファールとしてはそれらの公務を取り仕切る宰相と皇府を信じているが、やはり最後に頼れるのは妃たちの近くにいる乙女騎士以外にあり得ない。それぞれの妃専属の乙女騎士部隊というのは、彼女たちの心身の平穏を守ることがその職務であった。

乙女騎士たち側も、それは十分に理解している。

ルキーティからの報告とは別に、それぞれの専属騎士部隊長からの報告があるのはその証明だ。彼女たちはレクティファールの意を汲み、妃たちを良く守ってくれていた。

そしてその乙女騎士の一人が、今彼の背中でくだを巻いている。マリカーシェルからの報告を読めば、ウィリィアほど苦労している乙女騎士は他に居ないという。

「レクトのせいだろぉ……一緒に姫様守るって約束したのに……」

「だからすみませんと何度も――――それに今回の一件はどうしても外せないことですし」

ぼそぼそと粘着く声で愚痴をこぼすウィリィア。

何とかそれを宥めようとするレクティファールだが、義姉は不機

嫌そうに鼻を鳴らすだけ。

メリエラが最近ウィリィアに冷たく当たったとか、二人の仲が拗れたとか、そういう話は聞かないのだが、マリカーシェルの報告には少しだけ気になる点があった。

どうも最近、ウィリィアのことをこそこそ嗅ぎ回っている連中がいるらしい。

具体的に誰であるとはマリカーシェルも言っていなかったが、妙な勘違いをしている者が動いているのは間違いない。非常に下世話な話であるが、レクティファールとウィリィアの仲を、レクティファールとメリエラの仲よりもずっと進んだものと考えている連中は少なくないのである。

潜在的敵対国家の息の掛かったものは両者をいがみ合わせて皇国の宮内に亀裂を生じさせようとしていると考えられるし、単にこの違いを自らの栄達の種と考えている者も居る。ウィリィアの妃入りを予想してハルベルン家に近付く輩が現れ始めているとは、養父からの手紙にもあった。

表に噴出しているだけでもこれなのだから、彼女の周囲、その影で蠢いているものはさぞ多かろう。龍人族らしく明敏な感覚を持つウィリィアには辛いかもしれない。

「確かに仕方がないけど、それをレクトに言われると腹立たしい」

「ふむ」

それじゃあ、と身体を捻って自分の肩に乗っているその頭を撫でると、ウィリィアは少しだけ笑みを零してその手に頭を擦りつける。

幼児退行、という言葉がレクティファールの頭に浮かんだが、たまにはこういうときも必要だろうとそれ以上の考えを中断する。誰にだって休みたいときはあるものだ。ここに来ているときくらい張り詰めている弦を緩めてもいいだろう。

細くて手触りの良い髪を弄び、レクティファールはウィリィアに囁きかけた。本心をそのまま口にする。

「頼りにしてます、本当に」

「――――本当に？」

「本当に。他の人には頼めない」

聞き返すウィリィアは、不思議そうな表情だった。

しかしレクティファールがもう一度同じ言葉で答えると、その顔はへにゃりと溶けた。

「そうかぁ……そうかぁ……」

レクティファールの肩に顔を押し当てて何度も同じ言葉を繰り返す、やがてその声が聞こえなくなると、レクティファールは残った最後のソファにゆっくりとウィリィアを降ろした。

「ふふふふ……」

寝ている。

幸せそうな顔で寝ている。思わずレクティファールの顔も綻んだ。

しかし、すぐに気付く。

「――――全員運ぶのか、私」

だけどまあ、それでもいいかと思う程度には、ウィリィアの寝顔は幸せそうだ。

膝を突き、その頬を撫でてみる。驚くくらいに柔らかかった。

「ふむ、いっつも硬い表情しているのに、不思議なもので」

表情と顔の柔らかさに直接の関係はないと知っていても、世界の

神秘の一つを見つけた気分だ。

撫でる手を止め、さてどうやって三人を運ぼうかと思案し始めたレクティファール。そんな彼を背後から呼ぶ声が一つ。

何処か切羽詰ったようなその声は、少し上の方から聞こえてきた。

「レクト」

オリガだ。

レクティファールは今度は何だろうと振り返り、ぎょっとした。

先程よりも更に追加された小さな椅子の上で、真っ青な顔をしたオリガが椅子の背凭れにしがみつき、震えながら彼を見詰めていた。その瞳は大きく波立ち、明らかな恐怖を宿している。感情を余り表に出さないオリガのその瞳を見て、レクティファールは珍しいと素直に思った。

良く見てみれば、震えているのは彼女だけではなく、積み重なった卓と椅子も大きく揺れ、震えている。

深く考えずとも、状況は一目瞭然だった。

「――――お、落ちる……」

「わあッ！　言わんこっちゃない！　動かないでくださいよオリガ！」

レクティファールは大慌てで大きく揺れている椅子を押さえる。

揺れが収まると、今度はレクティファールの身体を手掛かり足掛かりにしてオリガが降りてきた。軽く頭を踏まれたが、気にしない。

彼女は床まで無事に辿り着くと、ほっと一息吐いてレクティファールを見上げる。彼女との身長差は大きく、レクティファールは小さな子どもにするように腰を落として視点を合わせた。

「――――ありがとう」

「どういたしまして」

答えたレクティファールは椅子と卓を食卓の上から下ろし、それを元あった場所に戻していく。

そんな彼の背後で、オリガが呟いた。

「――――今度からは、もっと重心を考えて積むことにする」

「いや、もう積まないで欲しいんですが」

本心である。

龍種である以上落ちたところで大したことにはなるまいが、怪我をしないということではない。

そんなレクティファールの心配は、オリガには届かなかった。

「――――背が伸びたら考える」

「あー、応援しています」

彼女の母親の姿を思い出し、レクティファールは無理だろうなと思った。

でも、口から出たのは根拠のない応援の言葉。彼はこのことに関して、日和ることを選んだようだ。

「――――ん」

レクティファールの内心を知らないまま満足そうに頷き、オリガは食堂を出て行った。

片付けをする気はないのか――――レクティファールは疲れたよ

うに何度目かの溜息を零し、独語した。

「何ともまあ、個性的な面子が揃っている班で」

その中に自分が含まれていることに、彼は気付いていない。

気付かぬまま、黙々と酒瓶などを片付けていく。片付けておかなければ、足を取られたりして三人を運ぶときに危険だと判断した。

足の踏み場もないくらい散乱する酒盛りの残骸。余り見たくない光景ではあった。

「清酒『龍ごろし』って、龍種専用のお酒ですかね？　フェリスもオリガも酔ってたし、どれだけ酒精度高いんでしょう」

茶色のイズモ酒の瓶を取り上げ、その銘柄を確認するレクティファール。

周囲を見れば、他にも龍種さえ酔っ払うと有名な銘柄ばかりが転がっている。この世界にも龍を酔わせるという類の伝説があることを、彼はまだ知らなかった。知ったからといってどうということもないのだが。

「これは本格的に掃除しないと、明日が大変なことに……」

床は酒に濡れ、絨毯には色々な汚れが染み込んでいる。

三人を運んだから掃除をしようと固く心に決め、レクティファールは立ち上がった。

それと同時に、玄関の方から扉の開く音。そして雄叫びと足音が聞こえてくる。

「れぇえええくとぉおおッ！！」

床を踏み抜く勢いで食堂まで突っ走ってくるのは、間違いなくレクティファールが放置したあの男である。

普段は言葉も余り多くない彼だが、食堂の扉を開けたときには顔を怒りに赤く染めており、その勢いのままレクティファールの胸倉を掴み上げた。

唾を飛ばし、腹に響く低音で怒鳴る。

「お、おま……！　この時期に車の中放置されたら俺でも死ぬ……！」

もう冬である。

魔動車は雨風くらいなら凌げるが、流石にもうすぐ氷点下という

気温まではどうにもならない。

「ああ、そういえば忘れてました」

酔っ払いの相手をしていたら別の酔っ払いのことをすっかり忘れてしまっていたようだ。

＜皇剣＞とて、重要ではない情報は削除してしまう。

ルフェイルの優先順位は、哀しいかな下から数えた方が断然早い。

「この……！」

ルフェイルは激昂し、窓硝子が震えるような大音声で叫んだ。

それこそ、眠った酔っ払いが目を覚ますくらいの音量で。

「人が折角妓楼に連れて行ってやったっていうのに！」

「あ、それは……」

不味い、と止める間もなかった。

ルフェイルの口から『妓楼』という言葉が吐き出された瞬間、レクティファールの背後で熱を帯びた気配が立ち上がる。

「こんなに早く、恩を仇で返す……つもり――――か……」

勢い良く繰り出された数々の文句。しかし、その声はすぐに尻すぼみとなり、消えて行く。

ルフェイルの顔色が、赤からザッと青に変わった。

「レクト……どういうこと？」

嗚呼、起きてしまわれたのか――――レクティファールは自分の運の無さに笑ってしまった。

歪んだ笑顔のレクティファールに哀れみの眼差しを向けたルフェイルは、そそくさと眠ったままパトリシアを背負って食堂を出る。

食堂の扉が閉まる最後の一瞬、彼がレクティファールに向けていたのは紛うこと無き憐憫と哀悼。

でもその表情の奥底に安堵が見え隠れしており、レクティファールは「ちくしょう」と罵りたくなった。

そんなことが許される筈もないのだが。

「レクト、こっちを向いて説明しなさい」

「――――ええと、フェリスさんがまだ……」

背後から目を逸らしたまま、ちらりとソファを見れば、フェリスがこの騒ぎの中でも静かに眠っている。

これを放っておくのはどうだろうという意味合いのレクティファールの言葉に、ウィリィアはそれもそうね、と同意した。

腕を組み、レクティファールに命じた。

「ここで待ってるから、部屋まで送って差し上げなさい」

「はい……」

義姉の命令を受け、レクティファールはウィリィアに背を向けたままフェリスを抱える。

やっぱり軽いなぁと思いながら、出口へと向かうレクティファール。

その背に、ウィリィアの声が掛かった。

「レクト」

動きを止めるレクティファール。

その額には冷や汗が浮かんでいる。よくよく見てみれば、その身体が細かく震えていることにも気付けたかもしれない。

フェリスを落とさないよう、彼は腕に力を込めた。

「分かってると思うけど……今はまだ変なことしないように」

「いや、酔わせて襲うって、どんな外道ですか」

一応、抗弁してみる。

「お風呂で義姉を抱きしめるのが正道だと？　一歩間違えれば鉄格子の中よ」

「――――そんなこともありましたね」

あのときは色々な意味で頑張っただけなのだが、義姉にとっては余り良い思い出ではないらしい。

意外と素直な姿を見せてくれたの思ったのだが、勘違いだったのだろうか。

「そういうことだから、くれぐれも変な気を起こさないで」

「はい……」

レクティファールは萎びた声で頷き、食堂を出る。

今度この部屋に戻ってくるときは、色々覚悟を決めなくてはならないなぁと思いながら。

フェリスを部屋に寝かせたレクティファールが戻ってくると、食堂は綺麗に掃除されていた。

絨毯の染みを布で叩いていたウィリィアは一度彼を振り返ったが、

また無言で染み取り作業に戻る。

レクティファールはその背中が怒気を孕んでいることに気付きながらも、逃げることはしなかった。逃げたら、終わりだと思った。

何かすることはないかと周囲を見回し、食器がそのままになっていることに気付いた。無言で台所に入り、水槽に入っていた食器類を洗い始める。

とんとんという染み抜きの音と、水音、そして食器の擦れる音がしばし続いたあと、レクティファールは意を決して口を開いた。

「――――あの、義姉さん」

「何」

ウィリィアの強い語気に途端に目尻を下げるレクティファール。

怒っているのは分かるけれども、余りにもその態度が怖い。

悪いことをしたのだろうな、と漠然と思った。

「ルフェイル――――さっきの男子ですけど、彼の言っていたことは……」

「本当なんでしょう」

「――――はい」

認めるしかない。

妓楼に行ったことは事実であり、レクティファールはウィリィアに嘘を吐く理由がなかった。

それに嘘を吐いたとて、すぐに見破られるだろう。この義姉は、それくらいのことは造作もなくやってのける。

「別に、妓楼に行ったことは怒ってないわ」

「へ？」

思いもしなかったウィリィアの言葉に、レクティファールは呆けた声を上げた。

振り返ってみれば、先ほどと同じような格好のウィリィアが居るだけ。空色の髪が不機嫌そうに揺れている。

「それを誤魔化そうとしたことは腹立たしいけど」

「う」

ウィリィアの一言に、レクティファールは呻いた。

確かに誤魔化そうとしたし、逃亡も図った。

結果としては逃げ切れなかったが、そもそも何で逃げたのだろうかと今では不思議なくらいだ。

「姫様たちの手前、そういう店に行ったのは余り感心しないけど、あなたにとってはそれも仕事だものね」

「いや、仕事……なんでしょうか？」

「皇府様から聞いてるわ。今日もまたあなたの子どもを養子に、って申し込みがあったって」

「――――嫌なこと聞いた気がします」

権力を皇王に集めている分、その体制を維持するには色々面倒が多い。

養子縁組による縁戚関係の強化はその手段の一つとしては、極々

平凡なものだろう。

皇王家家宰であるルキーティがウィリィアにそれを漏らしたということは、もしかしたらこの義姉にもそういう関係を期待しているのかもしれない。

レクティファールからしてみれば、とんでもないことだ。

「姫様たちはそういうことちゃんと教育されているから、しっかり説明すれば納得してくれると思うわ。でも一応、自分に置き換えて考えてみることをお勧めするわ」

婚約者がそういった店に出入りしていたらどう思うか。

そう考えてみれば、確かにいい気分ではない。だから、彼は素直に頷いた。

「そうします」

最後の皿を水切り籠に入れ、レクティファールは食堂に戻った。

寝間着として貸した彼の服は、義姉には少しだけ大きかったらしい。

襟ぐりが大きく開き、その肌が顕になっている。そういえば、下着はフェリスたちのものと一緒に洗濯した筈で、この宿舎にウィリ

ィアの下着がある筈もなく――――そこまで考え、慌ててレクティファールは思考を閉鎖した。

一度はほぼ総て見たことがあるというのに変に気恥ずかしくなり、余計な思考を誤魔化すように口を開く。

「寒くないですか、何か上着でも持ってきましょうか」

「いらない」

「そうですか……」

見ているこっちは寒いんだけれどもな、と独り言ち、彼は暖房の設定温度を少しだけ上げた。

その動作に気付いただろうウィリィアは、何も言わなかった。

「手伝うことはありますか？」

「ない、もうこれで終わり」

ぐるりと食堂を見渡しみれば、確かに綺麗に片付いていた。

酒瓶や樽は勝手口の外に纏められ、乱れていた家具類も整えられている。

ウィリィアの本業は侍女だったのだと、レクティファールは今になって思い出した。

日頃剣を持った彼女に追い回され、すっかりそちらが仕事だと思い込んでいたようだ。

「お茶でも淹れますか？」

「眠気が飛ぶからいい」

「……そうですか」

手持ち無沙汰になったレクティファール。

さてどうしたものかと思案していると、今度はウィリィアが彼の名を呼んだ。

「手紙、書かないの？」

「義姉さんが寝てから書きます。一応、お客さんですし」

「別にいいのに」

「ははは、私の我儘です。日頃疲れているんですから、私のところに居るときくらいゆっくり休んでください。あ、何なら寝台横の机に安眠誘導術式の入った魔法珠が入ってますから使って貰っても構いませんよ」

休んで欲しいというのは、本心だった。

自分のせいでウィリィアが色々苦労していることは彼も申し訳なく思っているし、自分の所に来たときぐらいは心も身体も休めて欲しいと考えている。

惜しむらくは、それを上手く伝えられないこと。ウィリィアは義弟の言葉に不機嫌さを隠さない。

「我儘なら、姫様たちに言って差し上げたらどう？」

きっと喜ぶだろう。

我儘は信頼の裏返しのようなものだ。度が過ぎれば嫌がられもするだろうが、適当なものならば却って関係を進展させる。

「気後れしてしまうもので」

「リーデ様たちには言うのに？」

「立場が違いますから」

「そう……」

納得したようにはとても思えないが、ウィリィアはそれ以上何も言わなかった。

それこそ本人たちの問題だと思っているのか、政治に介入しないという軍人としての分を弁えたのか。

再び沈黙が満ち、レクティファールが何か言おうと口を開いたとき、ウィリィアがぽつりと呟いた。

「じゃあ、わたしはリーデ様たちと同じ？」

「え」

「我儘、言うんでしょう？」

振り返ったウィリィアの顔は、優しげな笑顔だった。

ずっと怒っていると思っていたレクティファールは虚を突かれ、呆然としてしまった。

表層思考が硬直し、表情が固まった。

「困った弟」

「――――すみません」

何とか、一言だけ返した。

しかし、先程の笑顔がレクティファールの記憶領域を大きく占領し、思考から消えてくれない。

幾つかの並列思考を表層思考に回し、硬直から回復するまで凡そ二秒掛かった。ウィリィアには気付かれているだろうか。

「謝らなくてもいいけど、その分の代価はちゃんと貰うわ」

「――――例えば？」

「今度の休暇には美味しい物でも食べに連れていってもらいましょ

うか」

勿論、奢りで――――ウィリィアはそう言って立ち上がり、食堂の出口へと向かう。

レクティファールは頭を掻いて、ううむと一言呻いた。どこの店なら良いのかと悩んでいるようだ。

ウィリィアは義弟のそんな様子に笑みを漏らした。

「部屋はあなたの？」

「ええ、二階の端です。名札が掛かっているので分かると思いますよ」

「そう、じゃあ借りるわ」

「さっき言ったもの以外に、部屋の物には触らないでくださいね。機密書類なんかは仕舞ってありますが、課題を見られるのも微妙な気分ですので」

「添削してあげる？」

悪戯娘のような笑み。レクティファールは嘆息し、両手を上げて頭を振った。

「結構です」

「あら残念」

くすくすと笑いながら、ウィリィアは扉の向こうに消えていった。

その足音が二階に上がっていくと、レクティファールはウィリィアが届けてくれた手紙と書類を談話室の机の上に広げた。

初めて入った義弟の部屋は、物が少なかった。

月明かりで見る部屋は、机と本棚、その反対側に寝台。

ぱっと見た限りでは、衣紋掛けに掛かった候補生の制服以外にレ

クティファールの気配は感じられない。

だが――――

「――――これは、レクトの匂い？」

部屋に漂う匂いに主のそれが混じっている。

気付いた途端に、ウィリィアは落ち着かない気持ちになった。

「べ、別にあの馬鹿のことなんてどうでも……」

自分に言い訳をし、彼女は寝台に向かって一直線に進む。

その勢いのまま寝台に倒れ込み、強くなったレクティファールの匂いに今度こそ頬を染めた。

「――――洗濯してあるのに、なんでだろう？」

きちんと洗濯洗剤の匂いがするのに、その中にレクティファールの匂いがある。

ウィリィアにはそれが不思議でならなかった。自分がレクティファールの匂いに対してひどく敏感になっているということには、思

い至らない。

「まあ、いいか」

彼女は履いたままだった部屋履きを足を振って飛ばすと、枕に顔を埋めた。冷たい枕の感触が心地良い。

「飲み過ぎた……かな」

久し振りに仕事と関わりない人々と酌み交わしたからか、些か飲み過ぎた。体質的に二日酔いなどは余り心配していないが、身体が火照ってしょうがない。

ウィリィアは胸元の釦を二つほど外し、仰向けになった。胸元から冷たい空気が入り込み、彼女の熱を奪い去る。

しかし、その潤む瞳からは未だ冷めやらぬ熱情が感じられた。

「『頼りにしている』か」

独語し、笑う。

あの何でもかんでも自分でやらなければ気が済まない義弟にしては、気の利いた言葉ではないか。

惜しむらくは、それを受けたのが自分であることか。

「姫様たち、そんな言葉を待ってるんだけど、ね……」

『あなたにしか出来ない』と言われ、喜ばない者は少ない。それが自分を利用する為の言葉であったとしても、喜んでしまうだろう。

ウィリィアもあの場では何でもない風を装ったが、密かに心が踊った。

「本当に、馬鹿な奴」

自分なんかを喜ばせてどうするのか。

「でも……」

思ったよりも、悪くない――――そんなことを思いながら、彼女は夢の中に堕ちていった。

机の上にいつもの仕事道具を揃えたレクティファール。

まずは書類を確認しようと大判の封筒を開き、その中身を取り出した。

「さてさて、何が出るか――――と」

いつもの報告書と手紙だろうと一番上にあった書類に目を通した途端、レクティファールの表情が強張った。

報告書の送付元は、皇国三院と元帥府。皇国の重鎮たちが連名で送ってきたその内容に、彼の意識は深く取り込まれる。

（――――大陸西域……旧文明遺跡……実験……）

無言で書面の文字を追い、内容を頭に叩き込んでいく。

しかし、読めば読むほど彼の表情は固く凍り付いて融けることが

ない。

それだけ、内容は衝撃的だった。少なくとも国家の主として最低限の道徳心を持っている彼にとっては。

「――――はは、なるほど……国是か、国が望むというのか……意思さえもない国風情が、意思あるものの器に過ぎぬ無機物風情が……」

やがて報告書を読み終わり、レクティファールはそれを机の上に放り投げた。そのまま仰向けに天井を見上げ、笑い声を上げる。

その声は無機質で、魔道具が発する人工音声のようだった。

抑揚に乏しく、感情を感じさせない声。

それは、＜皇剣＞が精神保全の為に彼の感情を押し殺したことに起因する。

彼の下に齎された情報は、彼をそこまで追い詰めるものであった。

「そうか……そうか……！」

がたんと椅子を蹴倒して立ち上がったレクティファール。彼は窓を開け、天井に輝く星たちに向かう。

手の届かぬ光たちが、彼の瞳に映った。

「――――ならば私が動こう。私の責任の下に」

レクティファールはそれだけ漏らし、握りしめた拳を宿舎の壁に叩き付けた。

拳の骨が砕け、血が繁吹こうとも今の彼には何の痛痒も与えない。

その軋む心は自分に向けられるものではなく、彼を気に掛けてくれる一人の心優しい女性を想ってのことだった。

第十七話「（信念＋苦悩）×罪科＝立つべき場所」

陸軍からの呼集という名目で騎士学校から皇都へ戻るレクティフアール。

目的地が同じ星天宮であることからそれに同道する形となったウィリィア・ハルベルン近衛准尉は、その道中、非常に居心地の悪い思いをしていた。

それというのも、彼女の義弟がずっと仏頂面で隣に座っているからである。

連絡船の中でも、港から城へ向かう近衛軍の車輌の中でも同じ仏頂面。何度話しかけても表情は変わらず、ついには彼女も仏頂面になった。

「では、メリアをよろしく」

「分かってる」

早朝であっても人通りのある皇城の正面玄関で別れた二人だが、最後の会話はそれであった。

互いに最低限の言葉しか発さず、次に会うのがいつになるか分からない姉弟の別れにしては寂しいものだ。

しかし両者ともそれなりに世の不条理を理解しているので、諦念と共に互いを見送った。別れたあと、もうちょっと言い方があるだろうと同じ後悔を抱いたのは言うまでもない。

「後悔はあとで悔いるから後悔なんですよね」

呟き、後宮へと向かうウィリィアを見送ったレクティファールは皇城を登る。

途中、人目を忍ぶように普段は使われてない整備用通路に入り、更に非常通路という名の抜け道を経由して隠し部屋から自らの執務室へと通じる転送魔法陣を潜った。座標計算を〈皇剣〉が司っている為、〈皇剣〉所有者にしか使えない魔法陣だ。

「おはようございます、殿下」

「うん」

転送魔法陣を抜けた先、薄暗い隠し部屋に出ると、レクティファールは転移魔法を応用して着替えを済ませ、変身魔法を解いて摂政としての姿に戻った。そんな彼を出迎えたのは、中年の秘書官のいつもの顔。摂政秘書官室に席を持つ全員が、彼の後ろに控えている。

「殿下より召喚の下知がありました皆様、既にお揃いにございます」

「分かった」

秘書官を伴い、彼は執務室に併設された会議室へと向かう。少人数での会議に使用される部屋で、普段は関係官庁との打ち合わせなどに使われていた。

摂政の執務室に併設されているだけあって防諜はほぼ完璧。会議が始まれば空間そのものを『ずらす』ことで外部からの接触を完全に断つことも出来る。普段の会議ではそこまでの機能は使われていないが、今日だけは別だ。

「では、行くか」

「は」

レクティファールの合図を受けた秘書官が扉を開くと、そこに居た面々が揃って立ち上がる。

上座から厳の表情を崩さない皇国宰相。やや疲れた表情の皇王府総裁。深い眉毛と髭に隠れて表情の見えない軍務院総裁。いつもにも増して顔色の悪い外務院総裁。そして、明らかに緊張の色を隠せ

ない皇国四軍の元帥たち。

さらにこの場に於いて一際異彩を放つのは、皇国宰相以上の席を占める四龍の公爵。

カールはただ静かに、アナスターシャはいつもの無表情で、しかしフレデリックとマリアは隠しきれない焦燥を孕んだ表情で、それぞれレクティファールに頭を垂れる。

レクティファールは出席者の顔を一つ一つ確認し、部屋の中に歩を進めた。

その背後で閉まる扉。同時に術式が展開され、会議室は完全な密室へと変わる。

レクティファールは〈皇剣〉の観測機能で部屋が物理的、魔法的に閉鎖されたことを確認すると一つ頷き、各々の立場に沿った敬礼を行う彼らに答えて自分の席に腰を降ろした。それを確認した皇国宰相以下十二名があとに続く。

全員が席に着くと、室内の空気がぴんと張り詰めた。

空気が水のように感じられる程の威圧感が満ち、その中心は、摂政レクティファール。

この会議室の中で最も歳若い筈のレクティファールが発する無言の圧力は、遥かに年長のカールやルキーティさえも縛り付ける。それを可能とするだけの力と感情を、レクティファールは抑え付けていた。

「前置きは必要ないな」

口を開くや否や、レクティファールはそう言い放ち、出席者の表情を順に確認していく。

出席者の誰一人として異を唱える者は居なかった。レクティファールは頷き、一人の出席者の名を呼ぶ。

「イザベル」

「は」

レクティファールに指名された海軍〈大提督〉イザベルが立ち上がる。

彼女は主君に一礼し、さらに出席者に一礼すると、歳に似合わぬ凛とした声を響かせた。

「ご出席の皆様には既に資料をお送り致しましたが、情報を整理する意味で今一度本職の口から現状をご説明致します」

会議室の灯りが落ち、部屋の中央に映像が浮かび上がる。

出席者総てに見えるよう四面表示された映像に映し出されているのは、アルマダ大陸西域。表記されているマルドゥクやメニェルなどの名前は、出席者たちの記憶にも新しい。

「現在マルドゥクとその周辺国に在住する皇国国民の安全を確保するため、大陸西域の各地に陸海両軍の部隊が展開しているのは皆様ご承知のことと思います」

イザベルの言葉に呼応するように地図に陸海軍部隊の展開状況が追記される。

陸軍の派遣部隊は何れも少数の小規模部隊に分割されており、展開地域は広い。対して海軍は、泊地として指定された神聖グリニッド王国の港町〈パルポス〉を中心に海上警戒行動を実施しているようだった。

両軍は政府の考え通りに任務を全うしている。それはこの場に居る誰もが承知していることだ。

故に、今問題になっているのは彼らではない。

「今回皆様にお集まり頂いた理由、その発端となったのは海軍遣西艦隊旗艦〈セフィリア〉が探知した正体不明の魔力波でした」

映像が切り替わり、〈セフィリア〉の性能を記した三面図と〈パルポス〉を左端に置いた地図が描かれる。

「ご存知の通り、〈セフィリア〉は海軍の中で最も若い戦龍巡洋艦です。飛龍たちの管制を行い、艦隊防空の一翼を担うというその役割上、龍や航空目標に対する探知・探測機器は現主力正規戦母である〈アンジェ〉級に匹敵します。その探知機が正体不明の魔力波を捉えたのが今から一週間前。以降、多少の変化こそありましたが、今に至るまで継続して同一地点より発信されていると考えられます。〈セフィリア〉からの情報を元に海軍が計算した発信地点の予想範囲が、これです」

〈パルポス〉から東北東に向けて二本の線が伸び、その先に一つの円が形成された。

それと同時に、室内に幾つかの溜息と呻き声が重なる。表示されている円の大部分は、新生アルマダ帝国とその属国の領土で占められていた。

イザベルは室内に静寂が戻るまでの十数秒、盗み見るようにレクティファールの表情を窺った。投影映像の光は青白く、その光で照らされた顔はまるで置物や死人のようにも見える。

しかしその眼は炯々として映像を見据えており、明確な意思を感じることが出来た。

ふと動いたその瞳が、イザベルを捉えた。

「――――どうした、元帥」

「いいえ、何かご質問はございますか」

「今は良い。続けてくれ」

「は」

イザベルは部屋が静まったことを確認し、続けた。

「更にこの正体不明の魔力波を精査するべく、我が海軍は第一国防研究所に魔力波標本を提出。その結果が出たのが、昨夜です」

地図が消え、次に表示されたのは二つの魔力波形図。

それぞれ別の波形を持っており、別個体が発しているものと推察出来た。そこに、国防研究所が保管していた国内外の龍種の個体魔力波形の内、もっとも近しいものが重ねられる。

出席者が固唾を呑んで見守る中、重ねられた波形は、ほぼ一致した。

「一致率は〇．九九。九割九分です」

それぞれの波形図の上に、この波形を持つ者の名前が表示される。

――――ケルブ・レヴィアタン。

――――シヴェイラ・スヴァローグ。

二人は出奔したが故に貴族としての称号を失い、ただ家名のみがその血統を示していた。

「二三年前に皇国から消えたお二人であると見て、間違いありません」

イザベルの言葉に、出席者の視線は自然と二人の公爵の元へ向かう。

視線を浴びた二人は、苦しげな表情で俯くだけであった。

そして、蒼龍公マリアの妹であるイザベルも自らの腹の底に重く暗い“何か”が沈んでいることを感じ取っていた。シヴェイラとは姪と叔母というより、友人に近い関係であり、ケルブとも面識がある。二人の結婚式では、二人の友人として有り難く長ったらしい話をしようと思っていたくらいだ。

だがそれも、あの出奔劇で叶わなくなってしまった。

彼女はレクティファールの許しを得て着席し、深い深い溜息を吐く。

主君が自分に眼を向けていることにも、最後まで気付かなかった。

「次、ハルペー空軍元帥」

「はい」

細くも堂々とした体躯が、のそりと立ち上がる。

空軍〈大総統〉アレックスは一同に頭を下げると、そのよく通る声で自らの職務を全うし始めた。

「我が空軍は昨晩、元帥府並びに統合参謀会議からの求めに応じ、殿下の御裁可を得て当該空域に超高高度戦略偵察騎四騎を派遣しました」

先程の地図と同じ映像に四本の線が追加される。

四本の線は皇国各地の空軍基地を始点にそれぞれ大陸の上空や南洋上空、北洋上空などの経路を辿り、最終的には四方向から当該区域に侵入した。勿論、友好国以外の幾つかの国家の領空を通過している。

だが、帝国を始めとした非友好国の上空は通常の偵察飛行で何度も通過しており、出席者にそれを咎めようとする者は居ない。強い

て言うなら、皇国空軍にも一個戦略偵察飛行隊――――たった十六騎しか存在しない超高高度を飛行できる偵察騎の四分の一を投入したということに僅かな驚きが見えた。

「この偵察行動の結果、魔力波の発信源はほぼ特定されました」

先程の予想円の中、中央近くの山間部に赤い輝点が点る。

表記された情報は――――旧帝国時代の先史文明研究所。旧アルマダ帝国が第一次文明の遺跡を利用して運営していた研究所の跡地だった。

「第一国防研究所と皇王府に資料が残されていました。この施設は嘗て〈龍人族〉などの人形種を生み出した施設の一つです」

アレックスの言葉に、室内は抑え切れない落胆と憤怒の呻き声で満ちる。

そんな施設に居るケルブとシヴェイラがどのような扱いを受けているか、想像するのは容易い。しかし、問題はもう一つ。

「そしてもう一つ、つい先日〈ウィルマグス〉から送られてきた帝国製魔導炉の炉心部分ですが、ケルブ、シヴェイラ両氏の〈龍の眼〉が核として使用されていることが判明しました」

今度は、沈黙が場を支配した。

誰もが言葉を発することを躊躇い、隣の者と視線を交わし合うばかり。

〈ムジョルニア〉が皇国に与えた物的精神的損害を思えばケルブとシヴェイラも単なる被害者では居られないと、その場のほぼ全員が同じ考えに至った。

「小官からの報告は以上です」

「うん、ご苦労」

報告を終えたアレックスは着席し、重苦しい雰囲気の中で天を仰いだ。

彼の中では幾つかの『最悪の事態』が想定されているが、どれになろうと皇国が傷を負うことは避けられない。

ようやく乱れた国が落ち着こうとしているのに、何とも間の悪いことだ――――彼は瞑目し、唇を噛み締めた。

「さて」

レクティファールが口を開くと、場の空気は良くも悪くも変化した。

出席者は居住まいを正し、口を閉じてことの推移を見守る。

「この一件、二人の皇国国民が不当に拘束され、非人道的な扱いを受けているというだけでは済まない」

手元灯の光を頼りに資料を捲る音が、レクティファールの手元から聞こえた。

彼は資料の一部を読み上げる。

「『帝国の魔導技術は未だ不完全であり、死亡した龍から取り出した〈龍の瞳〉を炉心核として使用可能な形に精製することは難しい。よって、今回回収された〈龍の瞳〉の状態から鑑みるに、この〈龍の瞳〉の持ち主は何処かに生存していると考えられる。しかし、提供者が生存しているならば、残った〈龍の瞳〉を兵器転用することもまた可能である』」

レクティファールは出席者を見下ろした。

全員が自分の言葉の意味――二人が帝国国内で生存している限り、新生アルマダ帝国は二人の残った〈龍の瞳〉を兵器として転用出来るということ――を理解していること確認し、彼は言葉を継いだ。

「〈ムジョルニア〉炉心を調査した結果、再び同じだけの出力を得られる炉心を製造するまでに掛かる期間は、凡そ一年。既に製造が始まっている可能性は否定出来ないが、稀少で扱いの難しい〈龍の瞳〉を失う危険性を、彼らは極力低く抑えようとするだろう。つまり、現状ではケルブとシヴェイラはこの上なく慎重な扱いを受けていると考えられる」

仮定に過ぎないことではあるが、ある程度信頼は置ける。

「さりとて、いつまでも待つ訳にはいかない。今朝方国防研究所に確認したところ、〈龍の瞳〉一つで半径一〇〇キロメイテルを消滅させる兵器が作れるそうだ」

壊滅ではなく、消滅――――息を呑み、レクティファールを見詰める出席者たち。

四元帥と四龍公だけは動揺を見せていなかったが、彼らは龍種の恐ろしさを良く知っている。今更動揺する道理はない。

「その兵器の大きさは人一人でも十分に持ち運べる旅行鞄程度、皇都に持ち込まれれば――――」

皇都は、旧帝都と同じ末路を辿る。

光の中に沈む皇都。誰もがその光景を思い浮かべ、沈黙した。

「――――この一件、我が国の安危に関わる大事である」

レクティファールの宣言が室内に広がり、消えて行く。

彼の言葉を否定する者はおらず、むしろ沈黙で以てそれを肯定する者ばかり。

「例え皇都に持ち込まれずとも、〈ウィルマグス〉、〈パラティオン〉で使用されれば我が国の国境防衛線は瓦解する。そうなったとき、我が国に帝国とことを構えるだけの力はあるか、陸軍元帥」

問われたゲルマクスは立ち上がると、しばしその髭を撫で、枯れ木の擦れるような声で答えた。

「そうですな、陸軍の兵力を倍増させ、総ての部隊に最新の装備を充足させることが出来れば、何とか五分に持ち込んでみせましょう」

「つまり、現状の陸軍では」

「不可能、とお答えするしかありますまい」

ゲルマクスは曖昧な笑みを浮かべ、そう断言した。彼とて「やれ」と命令されれば不可能さえも可能にするべく最大限の努力をする。しかし、出来るか出来ないかと問われれば正直に答えるしかない。

レクティファールが言っている通り、これは皇国の危機なのだ。見栄や遠慮は必要無い。

それに、〈ウィルマグス〉や〈パラティオン〉でなくとも、それだけの威力を持つ兵器であれば他に使いようは幾らでも考えられる。兵器として使わず、動力源として使用するだけでも十分脅威だ。〈ムジョルニア〉と同程度の威力を持ち、自由に砲身を動かせる巨大砲台が一つあるだけでも皇国は危機に陥る。〈ムジョルニア〉では出来なかったことでも、次は可能になっているかもしれない。今は無理でも、明日、明後日には出来るようになるかもしれないのだ。

「聞いた通りだ。更にこの情報が諸外国に漏れれば、我が国は外交でも危機に陥る。蒼龍公と紅龍公の血統が大陸の安定を脅かしていると吹聴する者も現れよう」

「――――」

その言葉に、フレデリックとマリアの顔色が変わる。

彼らが危惧していたのは、まさにそこであった。

「殿下」

「何だ、紅龍公」

フレデリックは椅子を蹴倒すように立ち上がり、レクティファールに向き直る。その顔は滲み出る焦燥に彩られ、常のような余裕は見えない。

それを見詰めるレクティファールには、フレデリックの内心が手に取るように分かった。そして、彼が言おうとしていることも。

「この一件、私とマリア公に預けて頂けませんでしょうか」

「ほう」

レクティファールはマリアにちらと目を向けるが、返ってきたのは首肯であった。

その顔にもフレデリックと同じ焦りが見え隠れしている。レクティファールはその表情に密かに驚いた。大貴族らしい泰然とした態度を崩さない彼女たちが、そこまで焦る理由をレクティファールは理解出来なかった。

だから、問うた。

「何故だ、フレデリック」

「――――それは……」

フレデリックは言い淀み、俯く。

彼の代わりに、と立ち上がったのはマリアであった。

彼女はレクティファールのすぐ近くまで歩み寄り、そこで膝を突く。議場がどよめいた。

「今回の一件、我らと我らの血族が望んだものではないと証明したいのです、殿下」

「――――どうする？」

レクティファールは首だけをマリアに向け、感情を感じさせない声音で問い掛けた。

出席者たちは二人の遣り取りに冷や汗を掻き、生唾を飲み込んだ。

数瞬の沈黙の後、マリアは小さく、しかしはっきりと告げた。

「――――討ちます」

諦念と決意に満ちた声。

レクティファールはそれを、ただただ美しいと感じた。

「救い出すのではなく、討つのか」

「救い出せれば良し、ですが出来なければ、そのときは我が手で始末をつけます」

「己の腹を痛めて産んだ息子を殺すと言うか、マリア」

「――――」

懊悩に揺れる金色の瞳を見下ろしながら、レクティファールは敢えて問う。人でなしと罵られても、これを聞かずに判断は出来ない。

カールとアナスターシャの咎めるような視線を、レクティファールは無視した。

「どうなのだ、マリア」

再度、問う。

マリアは一度俯き、肩を震わせて答えた。

「――――たとえ息子でも、殺します、殿下」

俯いたままのマリアの声は、様々な感情で震えていた。

産み、育て、そして見送った筈の息子を殺さなくてはならないことに、マリアは身を引き裂かれそうな苦しみを味わっていた。

情に厚い龍の女として、愛する我が子を殺すということがどれほど辛いことであるのか、余人には想像することさえ出来ない。

犯され、壊され、八つ裂きにされた方がまだましであるという感情を表す言葉を、未だ人は持ち得ていないのだ。

「フレデリック」

マリアから視線を外し、今度はレクティファールはその背後に立つフレデリックに眼を向ける。

「幼き頃より共に育った愛妹を討てるか」

「それが必要ならば」

即答と言っても良かった。

たとえ言った瞬間に後悔でのたうち回りたくなったとしても、言葉は偽りではない。

幼き日、自分のあとを追いかけて来ては散々肩車を強請ったあの妹を殺すことになったとしても、焼き菓子が上手く出来たと自慢気に胸を張っていたあの妹を殺すことになったとしても、好きな人が出来たと動揺する自分をよそに嬉しそうに笑っていたあの妹を殺すことになったとしても――――それが公爵である。

「名だけの貴族は貴族に非ず、我らは生き様こそが唯一その証明になるのだと自負しております」

「そうか、分かった」

レクティファールはしっかりと頷き、二人に席に戻るよう告げた。

フレデリックはマリアの肩に手を置き、その震えを感じて目を伏せた。

運命の残酷さは、ときとして人の想像を容易く飛び越えてしまうものなのだと、彼は今になってようやく理解した。

「マリア、立てるか」

「――――ええ、ありがとう」

フレデリックに付き添われ、マリアは自分の席に戻った。

身体が重く感じられるのは、これからレクティファールに命じられるであろうことを思ってか。

そして、議場の総てに注目される中、レクティファールはただ一言だけ告げた。

その声に、一切の躊躇いは見えなかった。

「蒼龍公、紅龍公の申し出を――――却下する」

今までで最も大きな動揺が、議場に広がった。

メリエラはその日、珍しく後宮に居た。

レクティファールが騎士学校に編入してからというものの、彼女は寂しさを紛らわせるように軍務と公務にのめり込んだ、少し働き過ぎだとフェリエルに小言を貰ったこともあるが、そのたびに「レクトはもっと働いている」と答え、状況は改善されていない。龍種がこの程度でどうにかなってしまうことはないから、フェリエルもそれ以上強い態度に出ることはなかった。

最近の彼女は影のように彼女に付き従うウィリィアに対しても、本人も理解しきれない類の劣等感を抱いており、尚の事ウィリィアと距離を置くことが出来る仕事に没頭してしまったのかもしれない。その劣等感というのがメリエラの婚約者に関することだというのは、件の婚約者以外の総ての者が知っていることだ。

メリエラが一本気で融通の利かない性格であることは彼女の親も近しい者たちも良く知っていたが、レクティファールという婚約者が出来てからの彼女は以前にも増して頑固になり、彼に近付く女性に対して敏感になっている。

四龍公随一の親馬鹿と称されるカールなどは娘が心配で仕方が無いようだが、同輩であるマリアやアナスターシャに「所詮は一過性の発熱のようなもの、結婚すれば落ち着く」と言われてしまっては何も出来ない。未だメリエラはリンドヴルム公爵家の一員であるが、後宮に上がった時点でその立場は限りなく次期皇王家であるエルヴィッヒ家に近いものとなる。

その結果、カールはメリエラに対して強気に出ることも出来ず、ここひと月は専ら酒に逃げる日々が続いていた。公爵家の家臣たちはその姿を見て、

「もしも姫様が無事お輿入れなされたら、今度はウンディーヌ・レイク程も酒を用意しなくてはならないかもしれない」

と、畏れ慄いている。カールの親馬鹿具合は、龍種の平均よりもさらに一つ上の次元にあるようだ。とはいうものの、カールのそんな気性を好み、従う家臣も多く、悪いことばかりではない。

そんな父の心配を他所に、メリエラはこの日も午前中は近衛空軍の訓練に参加し、午後は皇国空軍との合同訓練に参加する予定だった。その予定が狂ったのは、空軍側の参加部隊の内幾つかが今朝方発生した帝国空軍飛竜による領空侵犯を受け、総ての部隊が基地で待機する第二種警戒態勢に入ってしまったからだ。

今回の訓練は練度の高い北部の部隊を相手取って行うことになっており、こういったことになるのも仕方が無いのかもしれない。

メリエラは恐縮しながらそう説明する担当者を労い、後宮に戻ってきた。

半日がかりの訓練をする予定であったのでその他の公務は入っておらず、リリシアとリーデは公務で皇都の外に、フェリエルとファリエルは仕事だろうし、アリアも離宮で忙しく働いているだろう。ならば今から皇都に散策に出る、というのも選択肢の一つに上がるが、突然の予定変更は護衛の負担が大き過ぎ、決して褒められたも

のではない。

「――――むむむ」

有り体に言って、暇である。

仕方が無いので自室でレクティファールに贈る編み物でもしようかと思っていた彼女であるが、部屋に向かう途中で思わぬ光景に遭遇した。

「――――れ、レクト？」

その言葉通り、中庭にある人工湖の畔でぼんやりと佇んでいるのは彼女の婚約者で間違いない。

そもそも監視もなく後宮に立ち入ることが出来る者など彼以外にあり得ないのだが。

「おや、メリア」

素っ頓狂なメリエラの声でこちらを振り向いたレクティファールは、少し驚いたような顔で彼女を見、そして口の端をほんの少しだけ上げる笑みを見せた。

その笑顔を見て、メリエラは本能的に「ああ、何かあったのだな」と悟る。悟ってしまえば、あとは身体が勝手にレクティファールに駆け寄っていた。

肉体的には疲れを知らないレクティファールであるが、精神的にはそうはいかない。〈皇剣〉は使用者の精神を保護してくれるが、何ごとも完璧とはいかないものだ。捉え方一つで幾つもの面を見せる精神は、神さえ殺し、世界さえ壊せる〈皇剣〉を創り上げた頃の科学でも解明出来ない代物なのだ。

「――――お茶、淹れるから」

そう言い放ち、メリエラはレクティファールの袖を掴んで引っ張る。

当惑したようなレクティファールの声を背に、彼女は自分の部屋へと向かった。

自分で淹れたお茶に女官役の騎士に用意して貰った茶菓子を添え、彼女は部屋に併設された簡易厨房からレクティファールの元に戻った。

その間レクティファールはぼんやりとしたまま天井を見上げており、非常に珍しいことであるが、メリエラが戻ってきたことにも気付かないようであった。〈皇剣〉も敵意を持たない相手まで警戒することはないから、レクティファールが接近する物体を個別に認識しない限りは警戒機能も働かない。

メリエラは婚約者の知らない一面を見たようで少し嬉しかったが、それよりも心配が勝った。

「もっと前に戻って来るって教えてくれれば、色々用意したのだけど……」

暗に、帰ってくるなら事前に報せて欲しいというメリエラに対し、レクティファールは「今回のは予定にはなかった」と答えた。

その回答に眉根を寄せるメリエラ。彼女は、レクティファールが戻ってこなければならないようなことが起きたとは聞いていない。つまり、彼女では知ることが出来ない程大きな問題が発生したということになる。

また、レクティファールの負担が増えるのだと思うと、悪いことと分かっていても訊かずにはいられなかった。

「何かあったの」

お茶と菓子を置きながらそう問うても、返って来るのは曖昧な苦笑。

最近気付いた、彼女が一番嫌いなレクティファールの浮かべる表情だ。まるで自分が信頼されていないように感じる。

「レクト」

語気を強め、再度問う。

ここには二人しか居ない。監視の騎士たちとて、職務上秘密を漏らすようなことはしない。

しかし、レクティファールは答えなかった。

「――――言えないこと？」

「総てが終わらない限りは」

そう言われて、なお問い詰めることはメリエラには出来なかった。

レクティファールがどれ程苦悩していようとも、メリエラがそれ

を察することが出来たとしても、何も出来ない。

それに気付き、メリエラは胸に強い痛みを感じた。

顔を顰める程の痛みが、彼女を苛む。

「メリア？」

「――――何でもない」

伸ばされた手を振り払い、メリエラはレクティファールの向かいに腰を降ろした。

不貞腐れたように顔を背け、お茶を啜る。味など分かりはしなかった。

「怒っているのでしょうか」

「怒ってる」

やっぱり、とレクティファールは呟き、メリエラの淹れたお茶を飲んだ。

「美味しいです」

「そう」

こんな状況でなければ、大いに喜べた筈の言葉。

メリエラはその事実に悔しささえ感じた。

「怒っているメリアにこんなことを言うのもどうかと思うのですが」

メリエラの顔色を窺うように、レクティファールは切り出した。

「何？」

固い声音は、きっと彼女の抱いた悪い予感のせい。

目が泳ぎ、声が震えていた。

「何か、あるの？」

「――――しばらく、遠出をします」

音を立てて血の気が引く。

慌ててレクティファールと視線を合わせるメリエラの顔色は、誰が見ても明らかな程に蒼白であった。

視線の先に居る青年の口調から考えるならば、その『遠出』にメリエラは同行出来ないし、恐らく文の遣り取りさえ出来ない。自分の生を総て捧げる〈騎従の契約〉。それを済ませた相手が自分を置いて遠くへ行くという現実は、深くメリエラの理性を削ぎ落した。

「どれくらい……？」

涙を堪え、訊く。

これが一週間程度ならば、耐えられると思った。耐えてみせると思った。

されど、彼女の願いは容易く打ち砕かれる。

「最低でもひと月と少し、それに、準備もあるので後宮にはしばらく戻れないでしょう」

絶句し、これが夢であれば良いと思った。

彼女の内心を知らぬ男ならば、たかだかひと月どうということも

ないと言うかもしれない。女とて、彼女の受けた衝撃を完全に理解する者はそう多くないだろう。

しかし、メリエラは世界が崩壊するほどの絶望を味わい、慄いた。

「じゃ、あ……」

「リリシアたちにはあとで手紙を書きますが、準備も含めてふた月はここを空けます」

レクティファールは無表情だった。

震えるメリエラに動じた様子も見せず、彼は淡々と言う。

「向かう先は教えられませんが、フェリエルとファリエルの二人は一緒に来てもらいます」

「な……」

再度の衝撃。

メリエラは大きく開いた目を潤ませ、やがて力無く項垂れた。

「――――もしかして、フェリスとオリガも」

「一緒に行きます」

「――っ！！」

その平坦な声が、メリエラの逆鱗を撫で上げた。

「何でっ！」

蒼白だった顔を怒りの赤に染め、彼女は叫び泣いた。

立ち上がってレクティファールに詰め寄り、その胸倉を掴み上げる。

瞳は見間違えようのない龍眼。一瞬で彼女の怒りを頂点にまで押し上げたのは、レクティファールの無思慮だった。

「何でわたしは待ってなくちゃいけないの！　わたしが、わたしだけがレクトの龍なのにっ！」

メリエラは、レクティファールとフェリエルたちの男女の某かを疑ったのではない。

自分という騎龍が居ながらそれを伴わず、別の龍を供にするということに怒りを抱いた。

確かに男女の情がそこにあるというのは否定出来ないし、むしろ当然だと胸を張って答えよう。それくらいのことは大したことではない。

他の妃龍の輿入れも、それが役目と思って納得するし理解もする。しかし、今回のレクティファールの決定だけは、メリエラにとって許せるものではなかった。

そこに何らかの事情があるにせよ、何の相談もなく、事前の連絡もなく、心の準備さえ許さぬままに――――

「レクトはわたしがいらないのっ！？」

是と答えられれば、心が壊れると分かっていたのに、それでも問わずにはいられなかった。

自分など、所詮は飼い龍でしかないのか、政の道具なのか、自分を必要と言ってくれたのはそういう意味だったのか。

溶岩のように腹の底で蠢く怒りは、彼女の瞳から涙となって溢れ出た。

「メリア」

「～～～～っ！！」

名を呼ばれることさえ、普段ならこの上ない喜びを与えてくれることさえ、今のメリエラにとっては心に鑢を当てられることに等しい。

彼女はレクティファールを解放すると彼を突き飛ばし、寝室へと繋がる扉に走る。

これ以上この場に居たくない、早く彼から離れたいと思った。

「帰って！」

そう吐き捨て、彼女は寝室の扉に身体を滑り込ませた。

以前ならレクティファールとの逢瀬を楽しみに待つ部屋であったのに、今は涙で歪んで見える。

どうして、何故、そんなことばかりが意識を埋め尽くし、彼女は足を縺れさせた。

「あ」

毛足の長い絨毯であっても、受身を取れなければ痛みも相当なものだろう。

彼女は目を瞑り、その痛みを待った。

「メリア」

しかし、彼女を待っていたのは、忌まわしく愛おしい温もり。目を開けたメリエラの前にあったのは、レクティファールの胸板であった。

彼女を支えたレクティファールはしかし、それ以上言葉を発することはなかった。何か言おうとして言えずにいるのか、そもそも何も言うつもりがないのか。

（何か、言ってくれれば良いのに）

先程の自分の言葉を棚に上げ、メリエラはそう思った。

そしてレクティファールから逃れようと身を捩らせ――――自分をより強く抱き締めるその腕に押し止められた。

決して逃さないという腕の持ち主の心に侵されるように、段々とメリエラの抵抗が弱まっていく。

「うぅ」

やがて最後の嗚咽と共に閉じられた瞳。

そして次に開かれたとき、そこに龍眼はなかった。

「メリア、言い訳をしても良いでしょうか」

頭上から聞こえる言葉に、メリエラは頭を振った。

何度も何度も、顔をレクティファールの胸元に擦りつけた。

「――――言い訳なんて……聞きたくない」

くぐもった声は、やはり揺れていた。

レクティファールはその答えに嘆息し、腕の力を弱めた。そのままメリエラの膝下に腕を通し、抱え上げる。

「すみません」

メリエラを寝台に運び、レクティファールは彼女を解放する。柔らかい寝台が彼女を包み、同時に先程までの熱を奪っていく。

奪われる熱に寂しさを感じ、そこで初めて、メリエラはレクティファールの顔を見た。

「――？」

何故だろう、と思う。

何故、この人は泣きそうな顔をしているのだろう。

「では、また」

何故、自分の手をあんなにも名残惜しそうに握っていたのだろう。

何故、何故、何故、何故――――

「全部終わったら、謝りに来ます」

何故、自分は――――

「レクトっ！」

こんなにも彼が愛おしいのだろう。

引き寄せられた、と思ったときにはもう、レクティファールの身体はメリエラと共に寝台に転がっていた。

天蓋を見上げ、自分の胸辺りにある銀糸を撫ぜる。

「レクト」

「はい」

背中に回った細い腕が、ぎゅうと彼を締め付ける。

痛みはない。

自分の上にある温かいものが何故かすごく大切に思えて、彼は横にごろりと転がった。

そのまま抱き締めると、息が出来なくなったのか、彼女がもがき始めた。じたばたと暴れ、まるで小動物のようだ。

一頻り小動物を愛で、ようやく彼は彼女を解放した。彼女はしばらく息を整えたあと、彼の身体を手掛かりにして彼の目の前までよじ登って来る。

「苦しい」

「お互い様です」

開口一番の文句は拗ねたような口調で、レクティファールは苦笑して答えた。

涙の跡が残る頬を何度も撫でると、やがてそこに朱が差した。

「――――言い訳じゃなくて、レクトの本心を聞かせて」

「君が大事だと？」

「それは……ちょっと違うと思う。というか、即答でそんな言葉が出るのはちょっとどうかと思う」

嬉しそうに微笑んでも、口調は不満そうであった。

彼女は今回の一件でレクティファールが何を思ったのか知りたいのであって、別に自分をどう思っているかなどは後回しでも良い。

「何で、他の娘たちを連れて行くの」

「必要だからです」

嘘ではない。

本当なら総てを話したいのだと、レクティファールは心の底から思っている。

「わたしはいらないの」

「本当なら、一緒に行って欲しい」

これも嘘ではない。

叶うなら、連れていきたいと思っていた。

「でも、一緒には行ってはいけないの？」

「――――ええ、今回は」

息遣いさえ感じられる距離で交わされる言葉に、恋人同士の甘さはない。

そこにあるのは摂政と、その妃の無色透明な遣り取りでしかなかった。

だが、メリエラはたった十サンチ向こうの青年が自分を求めていることを本能で理解する。

彼の言葉に一切の嘘はないと、確信した。

「――――っ」

確信すると、涙が再び溢れてきた。

辛い、辛かった。

一緒に行きたい、連れていきたいと双方が願っているのに、叶わないことが辛かった。

それが自分と青年が居る世界なのだと言われているようで、息が苦しいほどの寂寥感が襲ってくる。

「メリア」

だから、彼の顔が十サンチの線を越えて来たとき、黙って目を閉じた。

相手も同じことを考えていたのだと、嬉しかった。

「ん」

触れた。

同時に、なんとも言えない感覚が二人に襲い掛かる。

抗おうとして抗えるものではなく、受け入れようとして受け入れられるものではない感覚。

認めれば逃げ、拒絶すれば寄ってくる。どうしようもなく捉え切れないその感覚に、メリエラは再度涙した。

「く、ふぅ……」

息を継ぎ、しかしすぐに塞がれる。

相手は平気なのかと思えば、どうということはない、彼女を責めるあの青年は生き物であって生き物ではなく。息継ぎなど彼女の何十分の一でも、その気になれば無くとも平気なのだ。

不公平だと不満を漏らそうと思い口を開けば、そこに侵入された。

「っむぅっ！」

驚き、抵抗しようとし、しかし叶わなかった。

侵入者は妙に慣れた様子で彼女の口腔を弄り、彼女さえ知らなかった重要拠点を次々と暴いていく。

正直、怒りたかった。

いきなり過ぎると怒鳴りたかった。

だが、薄目を開けてみれば、そこには彼女が欲している、彼女を欲する青年が居るだけ。

頭の中の冷静な部分が寝室の隣にある乙女騎士たちの待機室の存在を警告してくるが、意識の大半がそれを押し流す。

欲して、欲されることに罪などあるのか、恋仲の男女が想いを交わすことに罪などあるのか、欲しいと思われて喜ぶこの自分は罪人なのか。巫山戯るな。

「んんっ」

唇を甘噛みされ、さらに舌先で撫で上げられる。

意識が混濁し、自分の声すら認識出来ない。

自分がレクティファールに力一杯腕を回していることも、みっともなく足を絡めていることも、気付かない。

「メリア」

息継ぎの合間に名を呼ばれれば震えるほど歓喜し、

「メリア」

耳朶や首筋に触れた唇に囁かれれば震えた。

「メリア」

その声音に自分と同じような喜びがあることに気付けば、身体の熱は何倍にも膨れ上がった。

許されれば何処までも流されそうな悦楽の中、メリエラとレク

ティファールは互いの吐いた息を吸い、互いの発した熱を取り込む。

今度は何故、とは思わない。

レクティファールは言葉以外に身体で想いを伝えようとし、メリエラもまた同じだった。

言葉にすることが許されないのなら、それ以外の総てを使って伝えよう。

結ばれることが許されないのなら、許される総てを使って伝えよう。

伝えることが下手だと自覚している青年と、伝えられることに慣れていない龍乙女は、理性の許すぎりぎりの線上で踊る。

これ以上進めば堕ちると理解し、傷付くと知ってなお止めることはない。

「メリア」

呼び、

「レクト」

呼ばれることの喜び、

「――――ふ、は……」

そこに愛しい者が居ることの悦び、

「う……」

それだけで、今は耐えられる。

自分が世界に居る理由、自分が隣に居たい理由。

今はまだ多くを知らず言葉にすることが出来ずとも、いつか届くように。

レクティファールの言葉に、議場は荒れた。

紅龍公フレデリックが獅子吼し、レクティファールに詰め寄った。

それを押し留める白龍公カールでさえ、レクティファールの言葉には承服出来ない部分が多い。

「殿下、理由をお聞かせ願えますか」

蒼龍公マリアが蒼白い顔でそう難詰すれば、その肩を押さえるのは黒龍公アナスターシャ。

自身も当惑を瞳に浮かべながらも、彼女は数百年来の友人を押さえ付ける。友人を逆徒にはしたくなかった。

「理由か」

レクティファールは議場の騒ぎにも声一つ波立たせることなく、出席者総てを睥睨して答えを口にした。

余りにも場の空気に侵されぬその物言いに、少しだけ議場の熱が引いた。

「二人では、目立ち過ぎる。それが理由だ」

告げられた答えに愕然としたフレデリックが膝を落とし、マリア

が痛みを堪えるように目を伏せたのはほぼ同時であった。

レクティファールの言葉は一側面で大いに正しく、二人は納得せざるを得なかった。

感情云々を抜きにし、皇国のことだけを思えばレクティファールの言葉は唯一正しいとさえ言える。

「四龍公が動けばどれだけ隠そうともすぐに知られよう。二人の苦しみは私が想像出来るほんの一部とて大きなもの、総てを抱えるフレデリックとマリアは身を斬られるような思いだろう。だが、動くことは許さん」

他人の苦しみを想像することは罪深いことであろう。

しかし、人はときとして罪と分かっていて罪を犯さなくてはならない。

既に多くの罪を犯した今、レクティファールがそれを躊躇う理由はなかった。

「では、どうなさるというのですか」

出席者の一人、近衛軍元帥ベルファイルが問う。

彼としては仮に近衛軍に命令が下っても、それを成し遂げるだけ

の自信はあった。むしろ、新生近衛の初陣としては中々のものであろうと思っていた。相手は龍族二人、しかも任地は敵国内部。彼自身が出向くことは出来ないが、そんな危険な任務だとしても狂喜して飛び込んでいく部下を彼は何人も知っている。

皇王家に対する忠誠とレクティファール個人に対する忠誠の二つを併せ持った馬鹿共を、彼は率いていた。

「我が軍にやれと仰るならば、今晩にも部隊を送り込みましょう」

それを可能とする軍隊を、レクティファールは作った。

確かに数は少ないが、この任務には少数の精鋭が居れば良い。

ベルファイルは主君をじっと見上げ、下知を待った。

「駄目だ」

それでもレクティファールの答えは、否。

ベルファイルは落胆こそしなかったものの、疑問に満ちた視線を主君に送った。

彼と同じような疑問を抱いた者は多かった。レクティファールは机に両肘を突き、目元を隠すようにして彼らの疑問に答えを与えた。

「――――此度の一件、私と蒼龍姫、紅龍姫、黒龍姫が承る」

一瞬の沈黙の後、フレデリックの怒声が、マリアの悲鳴がレクティファールに襲いかかった。

「娘に同族殺しをさせると言うか！」

「殿下、我が孫に親殺しをせよと……！」

同族殺しと親殺し。共に、龍族の間では忌み嫌わる罪科だ。

フレデリックやマリアであれば一族の領袖として処分を下したと見ることも出来よう。だが、その姫たちでは些かその言い分を通すには弱い。

或いは、彼女たちが正式な皇妃であれば、蒼龍公と紅龍公の代理として皇王と共に親や身内を討つという言い分も立つかもしれないが、今はそれも無理だ。

「――――違う」

レクティファールは静かに、必死に内心を隠し、宣言した。

「彼女たちは見届けるだけ――――討つのは、私だ」

第十八話「騎士＋騎士＝決闘」

夕暮れ時、レクティファールは『レクト・ハルベルン』として星天宮をあとにした。

後宮から出るとき、マリカーシェルやメリエラ付きの乙女騎士が妙に赤い顔で自分を見送っていたことが気になったが、とりあえず白龍の姫の機嫌が直ったので良しとする。うっかり越えては行けない一線をぶち抜きそうになったが、そこはそれ、人は頑張れば限界を超えることが出来るのである。

レクティファールは皇都を港に向けてぶらぶら歩き、途中で買い食いをしては人々の表情を観察する。

家に帰る子どもたちが道を渡ろうとすれば代わりに車を止め、商店街で買い物を済ませた老夫婦が沢山の荷物に困っていれば家の近くまで持ってやり、恋人に逃げられた若者が居れば一杯だけ奢ってやった。

何とも騒がしい人々の営み。レクティファールが知っている、『普通』の生活がそこにあった。

舗装路を踏み締めれば歩く人々の足から伝わる微振動を感じ、耳を澄ませば老若男女の声が聞こえる。視線を一巡りさせれば喜怒哀楽総ての表情がそこにあり、生きていることは複雑で、でも単純な

ことであると彼に教えてくれた。

「――――」

脆くて、簡単に壊れてしまうから、大事なのだろうと思う。

この中のたった一人でも居なくなれば、この風景はもう二度と手に入らない。

「お母さん、ご飯なあに？」

「そうねぇ、お父さんが好きな豚肉とお芋のスープでも作ろうかしら」

今、レクティファールの横を通り過ぎた親子も、いつかは離れるときが来るのだろう。

手を繋ぎ、楽しそうに言葉を交わすことが出来る時間は有限なのだ。そのあとには、確実に別れが待っている。

それが喜びと共に訪れる別れであるのか、悲しみに暮れる別離であるのかは、あの親子次第。

しかしその選択肢を作ることは、レクティファールの仕事。

大権を有するものは大責を負う。当たり前で、簡単には覆せないことだった。

「何故か分からないけど、胃が痛いなぁ」

呟いたとて、何も変わらない。

もしも変えられるとしても、それは彼にしか出来ないこと。

「もうちょっと、物語の英雄の百分の一くらいの度胸があれば、まだ違うんだけれども」

順当にいけば義父母になる者たちを討たねばならないという重圧。

それをしなければ、この風景から何人もの人々が消えてしまう。

「上手く助け出せればそれで良し、だけどそれが出来ないなら――――」

殺さなくてはならない。

あの北の戦いのときのように、誰かの大切な人を。

「あああもう……！」

誰かの大切な人ではない、マリアの、フレデリックの、そしてフェリスの大切な人だ。

レクティファールは通行人たちが驚くのも気付かず、その場で頭を抱える。

前の戦いではあんなにも簡単に生命を散らせる命令を下したというのに、今の自分はそのときに死なせてしまった人たちを何と思っているのか。悩むことさえ彼らへの裏切りではないのか。

レクティファールはそのまましばらく頭を抱え、

「――――帰ろう」

答えを保留したまま力無く歩き始めた。

どれだけ足掻こうとも変えられない現実、それは彼が摂政であり、この国でもっとも多くの責任を背負っているということなのかもしれない。

レクティファールが騎士学校に戻ったのは、もう星と月が空を支配するような時間だった。

連絡船の中でも、騎士学校に向かう乗合魔動車の中でも、レクティファールは相変わらずの表情で、一度など連絡船に乗り合わせた陸軍医療科学校の男子学生に体調が悪いのかと随分心配されてしまった。

連絡船を降りても自分に付き添おうと言う男子学生を丁重に断り、レクティファールはようやく騎士学校に戻ってきた。その道程は、いつもの倍も時間が掛かったように思えた。

そして、宿舎の前まで来て、彼はふと気付く。

「――――顔合わせ難い」

これからあなたのご両親を殺しに行きますなどと平常心で言える筈もなく、そもそも第〇八九班の派遣は現状では極秘だ。いずれ研修という名目で大陸西域に派遣されるだろうが、今はまだ学校側にも連絡が届いていないだろう。従って、レクティファールが黙っていればいつもと変わらぬ日々がしばらくは続くというのに、それが無条件に出来ない辺りが彼の限界と言える。

さてどうしたものかと大いに悩み、レクティファールは遂に一歩

を踏み出した。

どうやったところで最後にはばれてしまう。ならばそれまでの間ぐらいは頑張ってみようという、ある種レクティファールらしい妥協とも言える決意を胸に宿舎の玄関扉に手を伸ばす。

しかし、彼の決意は扉の向こうから聞こえてきた怒声によってあっさりと吹き飛んだ。

「レクトがそんなことするはずない！」

驚き、目を見開くレクティファール。

まさか誰かが両親のことを漏らしたのか、と疑念を抱き、彼は急いで宿舎の中に飛び込んだ。

声の発生源と思われる食堂に飛び込んだ彼を待っていたのは、思いもしなかった人物。

「あら、ご本人のお帰りね。どう、間違いはない？」

「はい、確かにこの男です班長」

ウェルチ・フォード候補生と、もう一人。

「あなたは……」

名も知らぬ男。

しかし、その顔には見覚えがあった。

「昨夜は世話になったな、候補生」

昨夜色街で騒ぎを起こし、ルフェイルとレクティファールに昏倒させられた男。その男が頬に白い布を貼り付け、レクティファールを睨め付けていた。

何故ここに、それもウェルチと共にいるのか、班長ということは彼女の班の班員ということなのか、レクティファールは様々な思考を意識に乗せ、答えを求めて彼らの対面に座るフェリスを見る。

レクティファールの視線を受け止めたフェリスは、悔しそうに顔を歪めて顔を伏せた。

「向こうも見覚えがあるようね、これでわたしの言い分が正しいと証明されたわ」

「――くっ」

ウェルチとフェリスの会話の意味を理解出来ず、レクティファールは困惑を隠し切れない。フェリスの挙動から考えれば、ウェルチが何かこちらにとって不都合なことを言ってきたということは分かる。だが、その内容はまるで分からなかった。

〈皇剣〉は知恵ある者の表層意識を読み取ることが出来るらしいが、今のレクティファールにそんな高等機能は使えない。戦いに赴くからと戦闘に直接関わる部分を優先的に覚えている為、副次的な機能に関しては未だ多くを最低限の部分しか把握していないのである。

「レクト君……」

困惑するレクティファールに身体を寄せて来たのは、食堂の片隅で居心地悪そうに縮こまっていたパトリシアだった。彼女は客人二人にお茶を出したあと、フェリスが心配で食堂から出ることも出来ず、その場に留まっていたのだった。

パトリシアはそっとレクティファールの耳元に口を寄せ、彼が一番知りたかったことを教えてくれた。

「あの二人、レクト君とルフェイルちゃんが酔ってあの男の人を殴ったって言ってきたの。気絶したあの人を衛視に引き渡して、自分たちは騒ぎに関係ない振りをしているって」

「な……っ」

レクティファールが驚くのも無理はない。

昨夜の一件は、リーサが衛視に訴えなかったことで簡単に話が済んだのだ。あとで衛視に確認してみれば、被害者の訴えも無い上、酔っ払いの起こしたこととということで軽く注意をして帰寮させたらしい。レクティファールとしてもリーサがそれで良いというならそれでも構わないと思っていたし、まさかこんな事態になるとは思いもしなかった。

他国の留学生ということで自国の体面を考慮しなくてはならない相手も今後は自重するだろうと思っていたのだが、どうやら相手は生粋の馬鹿か何かだったらしい。

こんな風に他の班にまで押し掛けてくれれば、騒ぎはどうしても大きくなる。

ウェルチもそれくらいのことは判る筈なのだが――――

「どうするのフェリス、これはあなたの班の班員による暴力事件よ。しかも他国の留学生に対する」

「それは……酔った上でのことで……」

「そうね、酔った上でのことだわ。でもこう考えることも出来る。

――――そこの候補生ともう一人は、酒に酔った勢いで他国の留学生に暴力を振るい、更にそれを隠蔽した。その班の班長は皇国公爵の令嬢で、被疑者の一人は別の公爵家の重臣の息子」

「――！　ウェルチ、まさか……！」

フェリスが立ち上がり、唇を震わせる。

その瞳には困惑と恐怖、そして悲しみが見え隠れしている。

「国際問題、とまではいかなくても、そこの候補生ともう一人の未来は、まあ、大変なことになるでしょうね」

「ウェルチ！」

フェリスの悲鳴は、レクティファールに深い悔悟の情を抱かせた。

リーサが情けで騒ぎを大きくしなかったことには、特に問題はない。それは彼女たちの問題だからだ。

しかし、その後の自分たちの行動は迂闊だったと言わざるをえない。

衛視たちは住人たちの証言から男が娼妓の一人を脅したのだと知っている。だが、その被害者は居ないから注意だけをして解放した。

被害者からの訴えが無いなら、大して被害もないことからそう処理するだろう。これで誰かが負傷していれば訴えがなくとも傷害事件として扱うだろうが、そうしなかった。色街なら同じような騒ぎなど幾らでも発生するから、ある意味仕方が無いことだ。検察も起訴したりしない。

だから、加害者が被害者にすり替わる隙が生まれた。

あの男が負傷したのは自業自得で、刃物を持ち出した男を取り押さえるには多少手荒な真似も必要だった。だが、それは見方を変えるだけで簡単に覆ってしまう。

「判る？　フェリス。今事実として確実に言えることは、あなたの班の班員がわたしの班の班員を負傷させたということだけ。彼は二人の酔っ払いに絡まれて仕方がなく持っていた刃物を取り出した。二対一だもの、無理はないわ。でも結局、彼はそこの候補生に昏倒させられ、衛視に保護された」

「そんな……！」

違う。

フェリスがそう叫ぼうと、ウェルチはそれを容易く打ち破る。

「住人たちの証言？　そんなものは何の役にも立たないわ。あの住人たちの中の何人が今回の騒ぎの詳しい状況を知っていて、それを

説明出来るというの？　刃物を持ち出したのは自衛の為、女性に刃物を向けたというのもそう見えただけだわ。いいフェリス、現実は一つ――――彼が負傷し、その原因がそこの彼というだけよ」

「でも……」

「フェリス、判るわよね、これはもう単にお互いの班員同士の問題ではないの。わたしとあなたの問題でもあるのよ」

ウェルチはゆったりと足を組み換え、告げた。

「どうするのフェリス、もしもこの話が公になれば、彼は元よりあなたも、そして公爵家の名にも傷が付くわ」

「っ！？」

フェリスがびくりと肩を震わせ、怯えたような眼差しでウェルチを見る。

その一瞬、レクティファールにはウェルチの表情が強ばったように見えたが、それを確信するだけの材料を得られないままに話は進む。

「――――でもね、わたしも彼もそんなことは望んでいない」

「え？」

呆けるフェリス。

そこで生まれた精神の隙間に、ウェルチの言葉が滑り込んだ。

「うちのシュパンヘイム候補生と、そこの彼。二人の決闘で決着を付けるわ」

「決闘……？」

「そう、決闘。とは言っても学校側には訓練として申請するけど、実質は決闘だと思って間違いないわ。一種実戦装備で学校の野戦演習場を使って一対一。勝っても負けてもこの話はそこで終わり」

おかしい、レクティファールはそう思った。

これだけこちらを追い詰めておきながら、何故彼女はこんな条件を出すのだろう。

もっとこちらに譲歩を強いることも出来るだろうに、何故彼女はそれをしないのか。

「シュパンヘイム家は自由騎士国家〈ガイエンルツヴィテ〉の名門騎士。あんな馬鹿げた喧嘩ではなく、きちんとした戦いで決着を付けたい。そういうことなのよ」

嘘だ、そう叫びたかった。

だが、ここで当事者の一人であるレクティファールが発言することは、班長であるフェリスの立場を危うくするだけだ。あとでレクティファールが学校側に手を回したとしても、一度でも経歴に傷が付いたなら、その事実はフェリスに一生付き纏う。

レクティファールは奥歯をきつく噛み締め、沈黙を保った。内心で〈皇剣〉が精神保全機能を働かせないぎりぎりの怒りを抱いていても、堪えた。

騎士学校というある種の微温湯に浸り過ぎて、頭の中まで微温くなってしまった自分を責めながら。

「騎士が戦うのは、お互いの名誉を懸けてということも確かにあるわ。でもね、その名誉というのは彼ら個人のそれと、彼らの属する勢力の長のそれ、その二つがあるの。わたしは彼の上司として彼の名誉を守る為に最大限の助力をするし、彼もわたしの名を守る為に戦ってくれる。それが指揮官としての義務だから」

部下の名誉を守ることは、指揮官の最低限の義務である。

そして、逆もまた然り。

「分かるわよね、彼は自分の名誉と一緒に、あなたの名誉を守ろうとしているの」

「それは……分かってる」

「分かってないわ、だって、あなたは彼に何も出来ないもの」

「――――」

フェリスに出来る助力など、何も無いとウェルチは言う。

『レクト』は既に実戦を経験しており、学業面での成績も悪くない。特に指揮官としての判断力は実戦経験者らしく高い水準で、現状ではフェリスよりも余程指揮官としての能力がある。

「どういう気分？　箱入りの令嬢らしく騎士に守ってもらうのは」

「ボクは、守って貰おうなんて……」

「馬鹿ね」

ウェルチの罵倒に、フェリスの顔色が変わる。

血の気が引き、唇を震わせた。

「あなたが望むかどうかなんて関係ないの、あなたはそこにいるだけで多くの人々に守られていて、自分一人で出来ることなんて殆ど無い。わたしも同じよ、子爵家の跡取りなんだから当たり前だけど。でもね、わたしは『自分は守って貰おうなんて思わない』とは考えない。もう守られているのに、そんな馬鹿なことは考えられないわ」

ウェルチは憎しみさえ滾らせた眼差しでフェリスを睨み据えた。

「あなたが人に『箱入り』だなんて言われる理由はそこよ。守られるという意味も理解出来ず、従って自分の立場も理解出来ていない。箱に入ったままだから視界が狭くて、世界の広さに気付けない。他の三龍姫はそれなりに経験を積んで自立しているけど、あなたはまだ幼龍もいいところ」

フェリスは一つも反論出来ずにいた。

ウェルチの言葉はいちいち正しく、傅役としてこれ以上の言葉はない。

「別に、幼いことは罪じゃないわ。わたしだって昔は何も知らない幼子、あなたと同じ年の頃にあなたより物ごとを知っていたなんて言わない。でもね、自分の責任ぐらいは多少理解していた。――――あなたはどうかしら？」

ウェルチの言葉に引き込まれるフェリス。そういえば昔は、こうして色々なことを話して貰った。

恐らくウェルチが居なければ、彼女の世界のことを話してくれなければ、今ここに自分は居ない。

そう気付けば、少しだけ勇気が湧いて出た。

「ねえ、ウェルチ」

意を決して問えば、姉替わりであった女性の顔色に変化が現れた。

訝しみ、しかし、何処か嬉しそうに見える。

「――――本当に、決闘で全部終わりなの？　あとから別の条件を追加したり、解釈を変えたりはしない？」

「あなた相手にそんなくだらない詐術は使わないわ。でもそうね、心配なら――――彼に、騎士としての誓約でもしてもらいましょう

か」

そう言ってウェルチが目配せすると、隣に座っていた男――――シュパンヘイムが立ち上がった。そのまま冷ややかな眼差しでレクティファールを見据え、その眼前に立つ。

レクティファールはフェリスの隣に立ち、剣呑な視線を迎え撃った。

「僕、ゲオルグ・オットー・シュパンヘイムはその騎士の名と生命に懸けて、先の条件を遵守することを誓う。そして僕は、この制約を以て君への決闘を申込もう」

「――――」

レクティファールはゲオルグを睨み、自分とほぼ同じ身長のこの男が並大抵の戦闘技能者ではないと看破した。

確かにくるりと巻いた金髪は貴族然として婦女子の目を集めるだろう、更にその顔付きはレクティファールが知る中でも一際整っているように思える。貴公子という言葉を聞き、それを思い浮かべろと言われたら、この男のような姿を思い浮かべる者も多かろう。

しかし、そんな端麗な姿も、頬に貼りつけた白布が台無しにしている。

元の容姿が優れている分、たった一枚の白布が彼の姿を滑稽なものにし、場合によっては喜劇の登場人物のように見せてしまう。今日一日、彼は随分好奇の視線に晒されたことだろう。恐らく、レクティファールに向けられる物騒な眼差しには自分をそんな立場に追い遣ったことへの敵意も含まれている。

「どうする、受けるか、皇国騎士の息子」

それを証明するように、その鋭い眼差しは世間一般で貴公子と呼ばれる類の人物が持てるものではなかった。

自由騎士国家〈ガイエンルツヴィテ〉といえば、嘗て大陸中原で猛威を振るった強力な自由騎士団を母体とした国だ。騎士の持ちたる国とも称され、今でもその剽悍な国民性から優秀な傭兵として高い評価を受けており、各国に人材を派遣している。先の皇都奪還戦では、〈ガイエンルツヴィテ〉出身の傭兵団だけは最後まで頑強に抵抗し、摂政軍側に無視できない損害を与えていた。恐らく、多くの傭兵団を擁するシェルミアなどよりも傭兵の質という点では上だろう。

そんな国の名門騎士家の息子が、皇国騎士家の息子に決闘を申込む。

同じ騎士階級である以上、決闘の最低条件は満たしている。互い学生の身分であるということを考慮して実戦形式の訓練という形になるだろうが、おそらくウェルチはもう学校側に根回しを済ませている。成績優秀で未来の海軍参謀たる皇国子爵が正規の手続きを踏んで準備を整えたのだ、学校側も気を遣うだろうし、遺漏などあり

得ない。

全くもって忌々しい。

レクティファールは彼の認識出来る最も深い意識でそう呟き、フェリスに目を向けた。

「班長、実戦形式訓練を要請された以上、それを受諾するかは班長であるあなたが判断するべきことです」

フェリスにそう問えば、ゲオルグは軽侮を隠さない目付きでレクティファールを睨んだ。

「ほう、女に責任を押し付けるか。皇国の騎士には騎士の誇りもないらしい」

「勘違いしないでもらいたいのですが、私はあくまでも皇国陸軍の軍人であり、レヴィアタン班長の部下です。騎士として決闘を受けるか否かならば、私が判断しましょう。ですが、騎士学校の候補生として他の班と訓練を行うなら、それを判断するのは双方の班長と学校です」

それに、と前置きして、レクティファールは一歩踏み込んだ。

「――――騎士の誇り？　それは個人の名誉や意地なんてちっぽけなものの為に存在するとでも言うつもりですか。あなたの班長が言っていたでしょう、自分しか見えていないような者は幼子も同然だと。自分の名誉や意地しか見えないような者が騎士？　それこそ笑止、勘違いも甚だしい」

「な……っ」

『レクト』がついこの間まで騎士とは縁のない生活を送っていたということは知っているのだろう。そんな相手に騎士の何たるかを聞かされ、ゲオルグの顔は怒りで紅潮した。

しかし、ゲオルグはそれを抑え付けるだけの実力を持っているようだ。

「――――ふん、口だけは達者か」

ゲオルグは興が削がれたと漏らし、ウェルチの隣に戻った。

侮蔑を隠さぬ視線をレクティファールに向け、足を組んでフェリスの言葉を待つ。

「そういうことらしいから、あなたがお決めなさいな」

「ボクが……」

「そこの彼が言っていたでしょう。彼はこの訓練を受けるかどうか決める権限を持っていないの、でもまあ、個人としては受けるということでいいのよね？」

自分を見るフェリスとウェルチに、レクティファールは頷いて見せた。

「さ、これで本人の意思は確認したわ。――――どうするの、フェリス？」

問い詰められ、何処か思い詰めたような表情のままフェリスは答えた。

答えなど、決まっていた。

「ごめん！　ごめん！　ごめん！」

灯りを点けても薄暗い宿舎の資料室。そこに置いてある机で向かい合っているのは、レクティファールとフェリスだ。

しかし席に着いた途端にいきなり謝罪の言葉を叫び、更に目の前でぶんぶんと何度も頭を下げるフェリスに、レクティファールは心底困っていた。

実際には資料室に来る前、ウェルチたちが宿舎から帰っていったその直後からこの謝罪攻勢は続いており、レクティファールは防戦一方である。

「あの、別に謝ってもらうようなことは……というか、私の方が謝らなくてはならないんじゃないかと」

「だって事情を聞けば、どう考えたってレクトたちの方が正しいもん。それなのにウェルチの言葉を間に受けてボクったらボクったら……ああ、もう、ボクなんてレムリア海溝に沈んでしまえばいいのに……」

自己嫌悪だけでレムリア海溝に潜水しそうな勢いである。

因みにレムリア海溝はレムリア海にあり、一説ではその底に『天照』級の専用整備施設が隠されているとか。

「あの、あの状況では仕方がなかったと。私も気付けませんでしたし」

そう、あの場でウェルチの言葉に踊らされたのはフェリスだけではない。

レクティファールもまた、彼女の口車に乗せられたクチだ。

「おかしいと思わなければいけなかったんです。確かに住人たちの証言は弱いでしょうが、妓楼の人たちの証言なら別。それに気付けなかったのは私も同じです」

住人たちの証言が弱いことはレクティファールも分かっていた。だからウェルチの言葉を真に受けたのだが、良く考えてみれば彼女の言い分には本来の被害者という要素がすっぽりと抜け落ちていたのだ。

恐らく、こちらに決闘を受けさせる為、ハッタリを仕掛けてきたのだろう。まさに参謀、しかも他人の精神状態まで分析して作戦を考える有能な参謀だ。

「でもこれで、騎士学校が皇国軍の最高学府だとようやく理解出来

ました。――――しかし、これだったら皇城と変わらないじゃないか……」

「え、皇城って……」

レクティファールの愚痴を聞き咎めたらしいフェリスが、不思議そうな顔でレクティファールを見上げてくる。

小首を傾げ、心底不思議ですと目で訴えている。

レクティファールは慌てて両手を振り、曖昧な笑みで誤魔化した。

「いえ、養父が皇城は狸と狐の化かし合いばかりだと言っていたので……」

「ああ、そうだよね、お義母さまもそう言ってたよ」

怖いよね、と笑い掛けるフェリスに引き攣った笑顔を浮かべ、レクティファールは密かに傷付いた。そんな狸と狐の総元締めは――実質的には宰相と皇府だとしても――レクティファールなのだ。怖がられて喜ぶような性癖は、彼は生憎と持ち合わせていなかった。

「でも、どうしようか、レクトみたいな人の一種装備っていったら各個人で用意するものだよね」

「そうですねぇ」

騎士学校で一般的に第一種装備と呼ばれるのは、候補生たちが実際の戦場で装備するものだ。学校や軍から貸与される訓練装備とは違い、個人個人が自分の特性に合わせたものを用意することも多い。

ここで言う装備とは、例えば、歩兵なら歩兵用甲冑や剣、魔動弩。魔導兵であれば術式を織り込んだ軽鎧や魔力収束用の宝珠、杖など。砲兵であれば自衛用の弩弓や剣である。個人で携行出来ない車輌などは含まれない。

帝国軍などは将校以上を除いて殆ど総ての兵士が兵種ごとに同じ装備らしいが、皇国軍では個人が貸与品以外の装備を自腹で用意することは珍しくない。一応特徴の似ている種族や氏族ごとに制式装備は用意されているのだが、身体の形が変化する獣人や水中での活動も可能な水棲種族、さらに極限環境下でも活動出来る龍族等々、軍が一括して用意するには余りにも装備の種類が多過ぎる。

だからこそ、皇国軍は制式化された貸与品とは別に、個人が用意した装備も軍の定めた基準を通れば、制式装備として扱うというやり方をしている。基準の中には矢や弾薬などの消耗品を共通して使用出来る。本人以外でも整備が行えるよう皇国の工業規格に合致している。整備に必要な知識の中に特別長期間の習熟を必要としない等々――――全部で三九八の項目がある。

逆に一点物の装具しか使えない飛龍や飛龍などは、最初から身体に合わせて空軍が装具を用意しているとのこと。帝国などの単一種

族国家は軍を構成する種族が殆ど同じなので制式化された装備だけでも問題ないのだろうが、皇国などの多種族国家ではこれが普通なのだ。

「レクト、一種装備なんて持ってきてる？」

「持ってきてませんねぇ、見た通り普通の人間種型混血種の装備が使えるので……」

人間種型の混血種は人口に対する比率が高いので、当然軍の制式装備も充実している。しかも高級士官でもないレクティファール、自前の装具など用意してある筈がない。

装備だけなら皇城に『摂政』としての武器装具が用意してあるのだが、それとて〈皇剣〉の機能を使用することが前提の品々だ。〈皇剣〉の機能が使えない今回の決闘では無意味である。

（ううむ、皇府に言って適当なものを用意して貰うべきでしょうかね）

レクト・ハルベルンとして受けた決闘であるが、他国からの留学生と戦って無様な負け方は不味い。負けるにしても相応の負け方をしなくては、皇国騎士全体が軽視されてしまう。そう考えるならば、この決闘は皇国の名誉が掛かった戦いと言える。

（不味いですね、色々あって冷静さを失っていましたか……）

例の一件が尾を引いて、精神に余裕が無くなってしまったのか。

幾ら〈皇剣〉を持っているとしても、それを使いこなせなければ意味はないのだ。

「――――あの、さ、レクト」

（肉体的なことは別にしても、精神的に脆弱なのは問題ですね。これでは〈皇剣〉の意味が無い）

「もしも良かったら、うん、良かったらでいいんだけど……」

（今度の修練は精神修練を主に、それに付随する肉体修練を肉付けして……）

「レクト？　おーい、レクトさんやーい」

（――――うん、そうしよう）

「――――へぇ、そうか、そうなんだ……ふぅん……」

並列思考とは、思考を幾つにも分割して複数の意識を同時に存在させる機能だ。

しかし、並列思考を一纏めして同じことを考えてしまえばその機能は何の意味もない。

「すう……――――――レクトぉおおおっ！！」

「おおぅ！？」

吃驚という言葉がこれ程似合う光景もないだろう。

耳元で叫ばれたレクティファールは思わず椅子から飛び上がり、何かを警戒するように腰を落とした体勢を取った。

そして周囲を見回して脅威がないことを確認すると、ようやく自分を驚かせた犯人に気付いたようだ。

「何をするんですか」

「何じゃないよ、呼んだだけだよ」

「あんな大声でですか？」

「さっきから呼んでるのに無視するからじゃないか」

腰に両手を当て、胸を張ってレクティファールを威嚇するフェリス。

レクティファールは彼女の言い分をしばし吟味し、何度か頷いて結局頭を下げた。

「すみません、聞いてませんでした」

「分かればよろしい」

満足そうに頷くフェリス。

レクティファールとしては微妙に納得出来ない部分もあるのだが、何も言わなかった。それくらいのことは学習済みだ。

「それで、何の話でしたか」

「え！？　あ、そう、そうだよね……」

そこで視線を落として何やらもじもじと指遊びを始めるフェリス。

もしかして照れているのか、とレクティファールが訝しんでその顔を覗き込もうとしたそのとき、彼女が凄い勢いで顔を上げた。

「あのねレクト！」

「はい」

とても緊張しているらしいフェリスに対し、レクティファールは冷静そのもの。緊張している人を見ていると、何故か冷静になる男だった。

「もし良かったら、うちで装備用意する、なんて……どうかな？」

「は？」

思わず訊き返してしまったが、フェリスの言っていることは理解していた。

しかし、その理由が分からない。

「ダメかな？　うちの実家てさ、魔法動力武具の会社経営してるんだよ。流石に皇王家の持ってるような大きな会社じゃないんだけどね」

「装備云々は分かったのですが、何故そんなことを」

「う、うーん、身内のごたごたに巻き込んじゃったから……とか」

「私も当事者ですが、というか、身内ってフォード候補生のことで？」

確かにフェリスとウェルチならば、身内と呼んで差し支えあるまい。しかし、身内のゴタゴタというには些か話が大きくなり過ぎている気がする。

「身内の騒ぎにしては、ちょっと大騒ぎ過ぎやしませんか」

レクティファールが正直にそう訊いてみれば、フェリスは一切の表情を消して頷く。

寂しささえ度を越せば、虚無になる。虚しさしか残らなくなる。フェリスはそれを知っていた。

「うんゴメンね。ウェルチは頭がすごく良いんだけど、そのせいでときどきボクみたいな平凡人には分からないことをするんだ」

「じゃあ、理由は分からないと……」

「――――うん、ゴメン」

僅かに言い淀み、フェリスはぺこりと頭を下げた。

事情を知らないレクティファールは、彼女の態度に幾つもの疑念は持ちながら、しかしそれを問う理由を得られなかった。

将来的なものは別にして、今の彼と彼女はただの同僚であり、単なる同じ班の仲間でしかない。下手に歩み寄れば、取り返しの付かないことになりかねないのだ。

レクティファールという男は本質的に臆病であり、退くか進むかの選択肢を提示されればほぼ間違いなく退いてしまうような男だった。〈皇剣〉というある種の絶対的な力を手に入れた今も、その根幹は変わっていない。

現にこのときも、退いた。

「――――そうですか、分からないなら仕方が無いですね」

「うん、ゴメン」

先程と同じ台詞、しかし今度は、先程よりも寂しさが見えた。

それにレクティファールが気付けたのは、多分に偶然の要素が強い。しかし、気付けたのなら、何もしないという選択肢は無かった。

この青年は情けなくあるが、みっともなく場を誤魔化すことで、その気持ちを紛らわせようとするぐらいのことは出来た。

「ああ！　そ、そういえば、さっきの装備の話なんですけどね」

「う、うん」

じっと真面目な顔でフェリスを見詰めるレクティファール。

すると、フェリスが妙に緊張した様子を見せた。目を泳がせ、身体の前で組んだ指を忙しなく運動させている。

「何かな……？」

「ええ、実は――――」

「うん……」

互いに見つめ合い、互いにその瞳に相手を映し、レクティファールは口を開いた。

ひどく深刻そうな声で。

「――――出世払いで良いですか、ね。今月はちょっと財布が大恐慌で……」

「へ？」

目が点になるフェリス。

口は半開き、表情は崩れた人物像である。

「いや、この間までは大丈夫だったんですが、どこぞの馬鹿が魔動車の窓ぶち破って外に出たみたいで、修理費が……」

「馬鹿って、ルフェイルだよね？　何でレクトが払ったの？」

「『連帯責任だ』と言われて、ルフェイルの持ち合わせがなかった

のでとりあえず私が全額……」

「――――へぇ、そうなんだ」

部屋の温度が、一気に下がった。

フェリスのこめかみに青筋が浮いていても、レクティファールには見えない。見えないということにした。

「うん、大丈夫だよ、こちら持ちで用意してもらうから」

「いや、流石にそれは……」

フェリスの変貌ぶりに腰が引けたレクティファール。

少し逃げ腰だ。

「いいよ、どこぞのいけ好かない誰かから貰った誕生日とかのお祝いの品、売るから」

「え？」

「決闘の為に財産を投じることは恥じゃないからね。昔は決闘の為に家まで売ったって言うくらいだし、名誉はお金で買えないって、本当にいい言葉だと思うよ」

黒い。黒いよこの人――――レクティファールは真剣にそう思った。

そして、名の知らぬいけ好かない誰かに少しだけ同情した。

もう少し、贈る相手の気性を考えて贈り物を選んだ方が良いと思います、と。

「じゃあ、ボクはルフェイルのところに寄ってから食堂に行くから、パティにもそう伝えておいて」

「りょ、了解」

颯爽と資料室を出るフェリス。

その細い背中を見送りつつ、彼は友人の冥福を祈った。

そして、紆余曲折があった。

ルフェイルに徹底した矯正を行ったフェリスは夕食後、早速皇都のレヴィアタン公爵邸に連絡を入れた。珍しい義娘からの連絡に、湯浴みも途中で飛び出してきた蒼龍公マリアに姿は、フェリスを大層驚かせたらしい。

マリアからすれば、レクティファールが例の一件に関してフェリスに何らかの事情を説明し、その事実確認か、或いは精神的衝撃から自分に連絡を入れてきたと思っても不思議はない。実際には例の一件とはまるで関係の無い話で、しかし当事者はまったく同じ別件であったのだが、全知ならぬマリアにそれを知ることは出来なかった。

微妙な表情を浮かべる養母を訝しみながらも、ことの次第を説明するフェリス。色街での騒動からウェルチの来訪、そして決闘の予定まで、こと細かく説明した。

色街での騒動までは苦笑を浮かべていたマリアであるが、ウェルチが訪ねてきた段になると顔色を変える。

レクティファールが決闘を受けたのは明らかに公爵家とフェリスの名誉を重んじてのこと、マリアはそんな義娘の言葉に何度も頷き、最終的にレクティファールの装備を公爵家で揃えることに同意した。念の為にとその場で家臣の息子が決闘を行うリンドヴルム公爵家にも連絡を入れ、同意を取り付けた。

後日、カールからレクティファールの元に「もう少し、自重して

頂けませんでしょうか」という怒りが染みこんだ手紙が届いたり、アルファードから「良くやった。良く言った。それでこそ騎士だ」という満面の笑顔付きの通信が送られてきたりしたが、レクティファールはちょうどその頃、レヴィアタン兵具商会から派遣されてきた担当者十数名に身体の各寸法や魔力波形、更に戦闘方法などをこと細かく確認されており、非常に忙しかった。

その騒ぎが一段落した頃、ウェルチから連絡が届いた。内容は、野戦演習場の使用許可が下りたこと、そして決闘の具体的な期日であった。

「――――殿下、あんまりあの子をいじめないで欲しいのだけど？」

「いじめてなどいません。本当ですよ」

全身に装備した魔動式甲冑の調整を行いながら、レクティファールは背後からの愚痴に苦笑で答えた。

ウェルチ班との決闘が決まってから五日後、完成したらしい装備

品と共にマリアが訪ねてきたと聞いたときは、正直生きた心地がしなかったレクティファール。何を言われるのかと戦々恐々で、恐らくかなり挙動不審であっただろう。しかしそれも、初めて蒼龍公に会うから緊張しているのだと他人の目に映ったらしく、フェリスなどは「優しい人だから大丈夫だよ」と満面の笑みで彼をマリアに紹介してくれた。

正直、有難迷惑である。

とはいえ、それをフェリスに言う訳にもいかず、レクティファールは何とも対応に困る『初対面』を演じることとなってしまった。

マリアもそんなレクティファールの葛藤は知っているだろうに、敢えて彼の手を掴んでは「娘の為にありがとう」と何度も礼を言う始末。レクティファールはマリアに裏切られた気分であった。

そんな精神的攻撃に晒されたレクティファールを余所に、フェリスは養母の前で彼を大いに賞賛した。

学業面の成績では先に入学したフェリスが辛うじて上回っているものの、実技関係、特に徒手格闘や刀剣格闘では歯が立たないし、過去の戦史に関しては『まるで見てきたかのように』的確な意見を述べる。性格も悪くないし、自分のような未熟な者でもきちんと先任者、班長として敬ってくれると。

褒められるたびにレクティファールの顔は引き攣り、マリアの笑みは深くなっていくのだが、哀しいかなフェリスは気付かない。

精神攻撃に次いで精神的拷問を受けたレクティファールは、恐ろしく憔悴した状態で魔動式甲冑の最適化作業に入ることになってし

まった。

各個人の身体や魔力に魔動式甲冑を適合させる最適化作業は凡そ四時間掛かり、今は実際に魔動式甲冑を使った訓練を行う準備を行なっている最中だ。騎士学校の第七演習場の待機室に居るのはマリアとレクティファールだけ、フェリスや第〇八九班の面子は演習場で訓練に使う仮想標的などを設置している。

「まあ、嫌われていないだけ良かったけど……――――両親の件は、まだ？」

「ええ、どうやって伝えようか悩んで宿舎に戻ったら、この騒ぎですから」

答えつつ、腕に取り付けた魔動手甲の動作を確認する。

直線と曲線を上手く配置し、機械的でありながら何処か優美な印象を見るものに抱かせる蒼銀色の魔動式甲冑は、マリアが直接傘下企業に発注したという『特注品』だ。元々個人用魔動式甲冑は個々人に合わせて作られるものであるが、それとて基礎になるものが存在している。色や外装の形は変えても、基本骨格などは共通した部分が多いのである。

これは帝国の誇る『重装近衛騎兵』の魔動式甲冑も同じで、甲冑そのものは騎兵それぞれに合わせて一つ一つ作り上げてはいるものの、部品そのものは共通化されているし、基本骨格は殆ど同じと言って良い。当然、性能も高水準で均一化されている。

それに対し、基本骨格などから個人に合わせたものを、俗に『特注品』と呼ぶ。

『特注品』は部品こそ量産品と共通なものが多いが、各個々人に合わせて基本骨格まで調整を入れる。使用者の魔力特性や得意魔法に合わせて骨格構造材を組み替えたり、魔力伝導路を入れ替えたり、極稀に基本設計から見直すこともあるという。

今回レクティファールがレヴィアタン公爵家から『下賜』されたこの魔動式甲冑は、マリア直々に〈蒼海の月〉と名付けられ、レヴィアタン兵具商会の製作した魔動式甲冑の中でも傑作と呼んで差支えのない代物だった。

『レクト』が身体強化系魔法を主として幅広い魔法を使う魔法技能者であるということで、〈蒼海の月〉は魔動式甲冑の分類としては魔導兵が纏う魔動式甲冑と歩兵が纏う魔動式甲冑の中間に当たる。使用者の魔力吸収、変換、放出を補助する他に、魔動式甲冑そのものに術式を埋め込むことで身体機能を引き上げる仕様となっている。

手甲に包まれた腕や動作に違和感を覚えることもなく、自分や〈皇剣〉に〈蒼海の月〉が適合していることを確認したレクティファールは、ひょい、と軽い身のこなしで立ち上がった。重さを感じさせない〈蒼海の月〉に満足気な笑みを浮かべ、レクティファールはマリアに礼を言った。

「良いものを頂きました。ありがとうございます」

「それは良かった。殿下への献上品にしては些か『安物』ですので、そう言って頂けてほっとしました」

「はは……物の値段は人それぞれ、ではないですか？」

レクティファールがそう愛想笑いを浮かべれば、対するマリアは美しい花のような笑みを漏らした。

そして、その表情のまま冷たい声音で囁く。

「――――人の命の値段も、ですわね……？」

「――――」

レクティファールの表情が、消えた。

「わたくしも諦めたつもりはないのですよ、殿下。フェリスと共に息子夫婦が元気に帰ってくるという希望を捨てるには、まだ少し時間がありますから」

「約束は出来ませんよ」

「当然です。そんなことが出来るのは、全知全能の何者かだけ。神ですら無理なことでしょう」

マリアはレクティファールの正面に立ち、ふわりと微笑んだ。並の男であれば目を奪われてしまうであろうその完璧な笑顔は、レクティファールには作り物めいて見えた。

「ですから殿下には、お約束して頂くつもりはありません」

レクティファールの、甲冑に包まれた左胸に触れるマリア。

そこを撫でながら、ただし、と彼女は呟いた。

「期待はしております」

「――――それは、光栄ですね」

レクティファールはマリアの手を取り、その手のひらに指を這わせた。

まるで好き合う男女の逢瀬のようでありながら、漂う空気は限りなく鋭く、そして重い。

「上手く期待に答えて頂けたなら……そうですね。一晩、お相手をさせて頂きます。これでもわたくし、そこそこ自信がありますもの。お酒にも、札遊びにも……ね」

「ほう、それは楽しみです」

マリアは取られた手をそのままに、残った手でレクティファールの頬を撫でた。

「蒼龍の娘の啼声は、男を惑わす歌。――――蛇のように絡み付き、暗い暗い海の底に誘うと昔から云われております」

「ますます楽しみですね、それをお聞かせ下さるので？」

「……そうですね――――」

目の前の龍が発する威圧感に飲まれないよう自分を保ちながら、しかしレクティファールの意識は大いに震えた。

この上なく美しく、この上なく妖しい、マリアの浮かべる底の見えない笑顔に。

「――――殿下が望むなら、悦んで」

「あれ、お義母さま帰ったの？」

マリアがレクティファールの元を去ってから数分後、フェリスが待機室に現れた。

動きやすい作業着に着替えた彼女は、きょろきょろと義母の姿を探している。

「え、ええ、ちょっと急ぎの用が出来たとかで」

「そうなんだ……ちゃんとお礼しておきたかったのに……」

そう言って肩を落とすフェリス。

しかしレクティファールは先程のマリアの笑みを思い出し、慌てて頭を振った。

「今度の決闘、御覧になるそうですから、そのときでも良いのではないですか」

これ以上一緒に居たら、不味いことになる気がした。

良く良く考えてみれば、レヴィアタン公爵家は皇王家からの独立を撤回した訳ではないのだ。マリアはまだ、レクティファールを完全に信用していない可能性がある。

「そうか、そうだよね、お義母さまだって暇じゃないもん。仕方が無いよね」

フェリスはうんうんと何度も頷き、自分を納得させているらしい。

どうやらマリアが自分に黙って帰ったことを気にしているようだ。

「それに、『今度来るときはお弁当を持ってくるから、一緒に食べましょう』って、伝言も頼まれましたし」

「本当？」

「ええ、頑張っているフェリスを応援したいって」

これは本当だ。

でもその伝言をレクティファールに託す辺り、決闘の結果に関して明らかに圧力を掛けてきている。頑張っているフェリスの為にも勝て、ということなのだろう。

（まあ、その点に関しては言われるまでもありませんが）

この男、他人の名誉の為ならとりあえず全力を出せる男である。自分の為だと、どうしても無意識に妥協してしまうのだ。

「そうなんだ……」

フェリスは嬉しそうに微笑み、ぴょんと飛び跳ねるとレクティファールの両手を掴んだ。

「――！」

一瞬、マリアのあの笑顔が脳裏をよぎった。

先程から、まるで蛇のようにレクティファールの意識に絡み付いて離れない。

「そのときは班の皆も一緒に食べようね！」

「え、ええ、そうですね……」

言った瞬間、断れば良かったと後悔した。

しかし、フェリスの笑顔を見ていると断らなくて良かったという思いが湧いてくる。

「ボクも何か作ろうかな？　どう思う？」

「いや、いいんじゃないですか？　パティも一緒に作ったら楽しいでしょうね」

「ああ！　それは楽しそうだね！　あとでパティにも声掛けよう」

何故、この人はこんなにも元気なのだろうか――――レクティファールは真剣にそう思った。

実際には彼が疲れているだけで、相対的にフェリスが元気に見えただけなのだろうが。

「良し、今日の訓練頑張ろう！」

「お、おお――！」

どうやらこの元気なお姫様は、まだまだ蛇ではないらしい。

そんな当たり前のことが、最近疲れ気味のレクティファールの数少ない心の拠り所であった。

「あ、そういえば知ってる？」

「はい？」

「さっきお義母さまに聞いたんだけどね。うちのご先祖様って人の姿で歌を唱って船乗りを惑わしてから、龍の姿で船に絡みついて沈めてたらしいよ」

「――――――」

聞きたくなかった。

第十九話「思惑＋願い＝名も無き騎士の戦い」

騎士学校第一野戦演習場。

人工森林や重機で造成された丘陵、さらに河川までもが再現された大規模演習場であるここは、毎年青の第一月に開かれる三軍合同年次総合演習の会場の一つであり、一角に四〇〇〇人もの観客を収容出来る観覧席を持つ皇国でも珍しい演習場である。冠に騎士学校という名が付いてはいるものの、実際には陸海空近衛の四軍が使用していた。

総合演習では陸海の陸戦兵力が空軍部隊の援護の下、構築された敵拠点を攻略するという公開演習に用いられることが主で、小数部隊同士の遭遇戦闘演習もここで行われる。多くの兵士の汗と涙を吸った大地は、また新たな戦いの歴史を刻もうとしていた。

「――――広いな」

「――――広いですね」

そんな演習場のど真ん中。二人の男が間抜け面を晒している。

「――――俺は今、すごく嫌な予感がしている」

「――――奇遇ですね、私もです」

ルフェイルとレクティファール。

彼らは今日の決闘の最終確認の為、演習場をうろうろしていた。
恐らく向こうの陣営も同じように演習場の確認を行っていることだろう。戦場の情報を収集することは戦術の基本であり、不可欠なことだ。

フェリスたちが学校側担当者との打ち合わせを引き受けてくれたお陰で二人は演習場を見て回ることが出来たのだが、その広大な演習場の敷地を見た二人は同じような感想を抱いていた。

「――――向こうは明らかに、単なる一対一の個人戦闘をするつもりはないらしいぞ」

「――――みたいですね、演習場の一角でも使うのかと思ったら全部ですし」

二人の間を、寒々しい風が木の葉を伴って通り過ぎていく。

彼らの前に広がる褐色の大地は広大で、その気になれば自動人形の高機動戦闘さえ可能かもしれない。

「――――しかも、何だあの観客の数は。しかも中継機材まで持ち込んでいる」

「――――見世物扱いですか、そうですか」

演習場の片隅に設けられた階段状の観客席はものの見事に満員で、更に観客席の一部は報道機関に割り当てられており、何故か各国の新聞記者が押し合い圧し合いの場所取り合戦の真っ最中。見に来た観客たちは殆どがこの島の学生たちのようだが、彼らの座席の最上段、箱型の貴賓席にはレクティファールも見覚えのある姿がちらほらと見える。

「――――四龍公揃い踏みとか、一体どういうことだ？　蒼龍公と白龍公はまだ分かるんだが……」

「――――しかも、別の貴賓席には……」

そう言って、レクティファールは四龍公の居る貴賓席とは別の貴賓席を見る。

皇城で顔を合わせたことのある彼らは、皇国に駐在する〈ガイエンルツヴィテ〉の大使と駐在武官ではないだろうか。

共に鍛えられた肉体を持つ彼らは演習場を双眼鏡で見渡しては上機嫌に笑っており、明らかに自国の騎士が勝利することを確信している風であった。

「向こうの連中、明らかにお前が負けると思ってるな」

「それだけ自信があるんでしょうね。――――軍機だとかで、シュパンヘイム候補生に関しては満足に情報を開示していないですから」

「せこいな」

「まあ確かに、器の小さい連中です」

二人の発した言葉は些か過分な敵意の篭ったものであるが、概ね事実と思って間違いない。

〈ガイエンルツヴィテ〉と〈アルトデステニア〉は、先の内乱のあと微妙な関係が続いていた。一応友好国という形になっているが、実際にはそれ程親しい間柄ではない。〈ガイエンルツヴィテ〉は内乱時、連合軍、支持貴族軍の双方に傭兵を派遣しており、そんな彼らを死の商人と呼んで露骨に嫌う者も皇城には相当数存在する。

思えばレクティファールが皇城に来たばかりの頃、観覧席に居る大使は謁見のたびに彼を若造扱いしていた。

尚武の国〈ガイエンルツヴィテ〉の大使らしく嘗ては騎士として各地の戦場を駆け巡っていた彼は、その頃の武勇伝をレクティファールに延々と聞かせた挙句、レクティファールの最も誇るべき才能は『幸運』であると言い放って彼の護衛を務めていた近衛兵を大いに憤慨させた。

その場はレクティファールが「まさにその通り、大使殿のご慧眼には恐れ入る。幸運ほど得難いものはありません。そんな才能を得られたのなら、それこそ私は運が良かった」と笑顔で答えたことで無事収まったが、その答えが気に入らなかったらしい大使は表面上はともかく内心大いに不機嫌になり、皇城から大使館に戻った途端に大暴れしたらしい。

各国大使館には常に皇国情報院の密偵が張り付いているので、レクティファールは〈ガイエンルツヴィテ〉大使が自分をどのように評価しているかなど、改めて言われるまでもなく十二分に承知している。

そしてそんな評価が、決して少数ではないということも。

彼が手配し、先週の終わりに本国から届いた『物資』。

その偉容を思い出し、皇国駐箚〈ガイエンルツヴィテ〉大使は上

機嫌に葡萄酒を呷った。

「閣下、まだ決闘も始まる前だというのに随分と楽しそうですな」

「ふふふ、勝ちの決まっている戦いなど余興に過ぎぬ。余興は楽しむものであろう？」

大使は革張りのソファに身体を沈め、隣に座る駐在武官の硝子杯に酒を注いでやる。笑顔でそれを受ける駐在武官は、嘗て大使とは同じ騎士団で上司と部下の関係にあった。

そのせいか彼はこの駐在武官を大層可愛がっており、今日の『余興』に伴う際も上位の駐在武官を差し置いてまで彼を指名した程だ。

「しかし、シュパンヘイムの倅も血気盛んですな。わざわざこんな極東の蛮地にまで来て決闘とは」

「若い者はそれくらいで丁度良い。それに……」

大使は、喉を鳴らして愉快そうに笑う。

「この蛇を奉ずる国の騎士もどきに、真の騎士とは何かを教授するのに、精鋭たる本国の騎士を使う必要はあるまい」

「閣下――――余り声が大きいと鼠どもに気取られますぞ」

そう窘めながらも、武官の口調は明らかに大使に同調したものだった。彼らにとっては皇国軍も帝国軍も、所詮は兵士の数と力に頼った軍とも呼べぬ有象無象の集まりに過ぎないのである。

歴史的に見れば帝国も皇国も、二〇〇〇有余年前の戦い以降に国としての形を作ったに過ぎない。単一国家としての歴史は確かに長いが、旧帝国崩壊の時期であっても自国の文化を維持した中原諸国から見れば、文化的にはまだまだ成熟しているとは言い難いのである。〈ガイエンルツヴィテ〉も国の興りはつい数百年前であるが、それ以前から連綿と続く民族の歴史がある。

帝国崩壊まで華やかな文明社会と縁のなかった皇国と、一度文明を失って動物のような生活に戻った帝国。

今でこそアルマダ大陸を代表する二大国ではあるが、〈ガイエンルツヴィテ〉を始めとする中原諸国は彼らを心の何処かで見下しているのだった。

「連邦も、民主主義などという言葉に踊らされてからまるで成金長者のように振舞っておる。嘗ては旧帝国崩壊後の大陸文化の中心地であったというのに、嘆かわしいことだ」

「仕方が無いでしょう。彼らは民主主義の名の下に、それまで築い

てきた文化の大半を破壊してしまいましたから」

「ふん、連邦も所詮は成り上がりか」

大使にとって、祖国が持つ文化や伝統はその精神の拠り所であった。

だからこそ、皇国と帝国が大きな顔をしている現状が気に食わない。本来なら自分たちを師や父と呼んで然るべき新興の国々が大きな顔をしていることが、大いに不満だった。

「――――まあ良い、今回の一件で皇国やその取り巻きも我が国の真の力を知るだろう。そうすれば、我が国の立場もより強固になるというもの」

「その為の〈ヴォルスンガ〉ですか。些か大袈裟では？」

「元々シュパンヘイムの持ち物ゆえ、互いに実戦装備という条件でも問題はあるまい。シュパンヘイムは〈ヴォルスンガ〉を纏って幾つもの武勲を挙げたのだ」

本国から急ぎ取り寄せた〈ヴォルスンガ〉は、あらゆる意味で〈ガイエンルツヴィテ〉の力を示すに相応しいものだ。

自由騎士団〈ガイエンルツヴィテ〉の代名詞として各国にその名を知られる魔動式“重”甲冑。皇国の騎士がどれ程の実力を持っていようとも、負ける筈がなかった。

決闘開始まであと一時間を切り、両陣営は最終調整に余念が無い。

本国からの支援物資を受け取ったゲオルグもまた、自らの纏う甲冑の調整を行っている最中であった。

「一番から五〇番までの伝送系は異常なし、同じく五十一から一〇〇、一〇〇から一三一も異常はない」

「了解しました、では次に武装の最終確認をお願いします」

「分かった」

目の前に浮かぶ表示窓を目で追いながら、ゲオルグは自らが纏っている甲冑の性能に笑みを浮かべた。

シュパンヘイム家に代々伝わる魔動式重甲冑〈ヴォルスンガ〉。幾度も改良を重ねたその性能はシェルミアの装甲機兵には及ばないものの、各国で生産されている現行主力自動人形であれば十分に単独で撃破可能な性能を持っている。

恐らく向こうも騎士らしく魔動式甲冑を用意してくるだろうが、あちらが一定水準以上の戦闘能力持つ個体との一対一の戦闘を主眼に装着者の戦闘技能を強化する目的で作られたものなら、この〈ヴォルスンガ〉は敵の防衛線を突破することを主眼に対軍勢を想定して作られたもの。場合によっては巨人族や獣人族を相手にしてそれを圧倒し、制圧することがその存在意義である。

流石に龍種や神族相手に勝ちを拾えるなどとは思っていないが、それでも通常の魔動式甲冑を纏った騎士風情に負ける道理はない。

本国にいた頃は常にこの〈ヴォルスンガ〉を纏って訓練に励み、皇国に留学してからも帰省するたびに訓練を重ねた。

今回は時間が足りず十分な訓練が行えなかったが、何のことはない。〈ヴォルスンガ〉の癖は身体が覚えているし、〈ヴォルスンガ〉の管制機構も彼の癖を覚えていて、戦闘中は的確な補助を行ってくれる。

「――――負ける道理など、どこにもない」

今冷静に考えれば、確かに色街での自分の行いは恥ずべきものであっただろう。

女性に手を上げたことは深く反省するべきで、二度とそんな無様を晒さないよう自分を律さなくてはならない。

だが今は、それよりも優先するべきものがある。

「必ずあの男を倒して、僕の名誉を取り戻す」

彼が色街で騒ぎを起こしたと知っている者は決して多くない。しかし、ゲオルグが誰かに負けた、という噂は学校中に広まっている。騎士学校に入る前まで在籍していた皇国軍士官学校にも、おそらくその噂は広がっていることだろう。

ゲオルグがどれだけ否定しようとも噂は消えず、彼の名誉は地に落ちたと言って良い。遠く本国から離れ、この国の軍中枢に知己を得る為にこれまで勉学に励んだというのに、その結果がこんなものだとはどうしても認められなかった。

そんなときだ、彼の所属する第〇〇八班の班長であるウェルチ・フォードが今回の決闘を持ち掛けてきたのは。

彼女は彼に名誉を回復する機会を与えることを申し出、彼はそれを受けた。向こうが決闘を受けたなら、今後一切、今回の騒動に関する報復行動を行わないという条件は、そのときウェルチから提示されたものだった。

ウェルチが優れた軍才を持つ才媛であることはゲオルグも良く知っている。同胞という色眼鏡を取り除いて見るなら、本国にも彼女ほどの実力を持つ者はそう多くないだろう。

現に彼の所属する班は騎士学校最強最高の班として認識されており、彼以外にも他国の留学生を二人も擁している。それはウェルチが、誰を従えてもその任務を全う出来る人物であると学校側に信頼されていることの証明に他ならない。

正直に言うならば、ゲオルグはウェルチが皇国人であることを心の底から惜しんでいた。同胞とは言わないまでも、せめて中原国家の軍人であったなら、その才能を大いに発揮出来る機会を得られただろう。

良将煌星の如く、と言えば聞こえは良いが、実際に皇国の歴史に名を残せる程の功績を挙げられる軍人は非常に少ない。優れた将が多ければ、その分一人一人の功績は霞んでしまうものだからだ。多くの優れた武人を有する国の贅沢な悩みと言えばその通りであるが、ゲオルグのような向上心の強い若者にはそれが我慢ならない。

唯一無二の地位に立ちたい。並び立つ者が居ないくらい高い場所に行きたい。

彼の根底に流れる欲望とは、突き詰めればそれである。

絶対が存在すると信じ、その絶対とは自分のことであると疑わない。その考え自体が悪であるということはあり得ないが、当然、善でもない。

自分を信じ過ぎる故の視野の狭窄、多くの若者が経験するその只

中にゲオルグは居た。

「――――僕の名の為にも、お前を這い蹲らせてやる」

聞けば、つい先頃騎士侯である本家の養子になったばかりという若者を叩きのめす自分の姿を想像し、ゲオルグは胸の高鳴りを抑えることが出来なかった。

観客席の下に設けられた第〇八九班の待機室。建前上は第〇〇八班と第〇八九班の合同訓練という形なので、そこには第〇八九班の面々が勢揃いしている。

彼らの他にも、魔動式甲冑の整備を行う為にフェリスが協力を要請した第〇八九班専属の装備科学校の学生が自分たちの仕事をしており、彼らは自分たちの操る工具の発する騒音に負けないよう大声で言葉を交わし合い、結果、待機室内は非常に騒がしい。

そんな大音量の中、装備科の学生よりも忙しなく動いている者が居た。

その人物は騎士学校の女性用礼装を纏い、まるで小動物のように

自分の部下に纏わり付いている。汚れないよう白手袋は外しているが、白磁の礼装だって汚れればさぞ目立つことだろう。

「レクト、体調は大丈夫？　お腹空いてない？　喉渇いてない？　何か飲み物でも貰ってこようか？　あ、肩でも揉む？　それとも――――」

「お前はレクトの母親か」

そんな一言と共に、ぱしんと一発自分の班長の頭を引っ叩いたルフェイル。

「あうあう……」と言いながら涙目で蹲るフェリスに対し、彼は追い討ちを掛けた。

「――――この状況で指揮官がすることは、部下の心配をすることじゃないだろう」

「だって……」

「だって、じゃない。向こうはどんな装備を使ってくるか分からないんだ。部下の集中力を削ぐような真似はするな」

魔動式甲冑の鎧下として一般的な、高い耐熱性と耐衝撃性、さらに優れた防弾・防刃性を持つ黒い戦闘衣姿で、待機室備え付けの長椅子から二人の遣り取りを眺めていたレクティファールは、ルフェイルの態度に心底感心していた。流石第〇八九班の最年長、と密かに呟く。

思えば、ルフェイルという男はぶっきらぼうな態度と口数が余り多くないということで近寄り難い雰囲気を纏っているが、後輩や同窓には人気がある。レクティファールが騎士学校に早々に馴染むことが出来たのも、ルフェイルという男と誼を通じることが出来たからという理由が大きい。

御世辞にも素行が良いとは言えないので、騎士学校ではそう珍しくない上昇志向や自己顕示欲の強い者や生真面目な学生には余り好かれていないが、講師の中にも彼を気に入っている者は多く、このまま無事騎士学校を卒業することが出来たなら、軍の複数の部隊から声が掛かるに違いない。

少なくともレクティファールはルフェイルを高く買っているし、しばらく経験を積めば近衛軍でも通用する人材になると考えていた。

今のところ摂政として近衛軍に何らかの働き掛けを行うつもりはないが、たとえレクティファールが何もしなくても、そう遠くない未来に近衛軍士官としてのルフェイルの姿を見ることになるかもしれない。そう思わせるだけの魅力が、ルフェイルにはある。

実際、言葉少なくとも人に自分の気持ちを上手く伝えられるルフェイルに、レクティファールは羨望さえ抱いていた。

レクティファールは言葉少ないという性質ではないが、自分の気

持ちを相手に伝えるということが不得手である。そのせいで誤解を招いて義姉や紅龍の妹姫に折檻叱責されることもしばしばあり、どうにか改善できないものかと悩んでいた。

未だに改善できる目処は立たないが、ルフェイルを見ていると態度で気持ちを示すことがどれだけ大事なことか、朧気ながら理解出来た。

ルフェイルは言葉を使わない分、目や身体で気持ちを発する。相手に親愛の情を抱けば肩を叩き、嬉しければ無表情の中に喜色を滲ませた。怒れば身体中から怒気を発し、悲しみは肩を落として表現する。

慣れなければ分かり難いかもしれないが、読み取るだけならほんの少しの付き合いでもこと足りる。しかし、付き合いが深くなればなるほど、ルフェイルという人物は真正直な生き物であると分かってくるのだ。

それがルフェイルの魅力だと考えれば、彼の周囲に人が集まることにも納得がいく。

言葉よりも態度、そして態度は自分の心に正直に。

ときに正直過ぎて関係各所からお叱りを受けることもあるが、それも愛嬌の一つとして見えるのだから何とも得な男である。――――とはいえ、本人がそれを自覚しているとは思えない点が、何とも彼らしい。

「レクト……」

半泣きのまま、フェリスはレクティファールを見詰める。背後のルフェイルが怖いというより、これから起こる筈の事態に恐怖を抱いている様子だった。思えば彼女が実際に部下の命を危険に晒したことなど無かっただろうから、当然といえば当然であるのかもしれない。

どれだけ教育を受けても、いざそのときになれば理性よりも本能が勝る。こうするべき、という理性が、こうしたい、という本能に負けてしまうのだ。

経験を積み、本能をある程度制御出来るようになるまでこの状態は続く。

制御の方法は個人ごとに千差万別。メリエラやフェリエルたちは幼少時より貴族としての教育を受けてきたこともあってすぐに士官としての心得を会得したようだが、フェリスは違うようだ。個人の性格というものはなかなか型に嵌めて考えることは出来ないが、結局のところは、如何にしてこの時期を短縮するかが、その士官やその部下となる者の運命を左右することになる。

この決闘がフェリスにとって、一つの転換点になれば良い――――レクティファールは自分のことを棚に上げてそう考えていた。

「こういうとき……どういう風にどんなことを話せばいいのかな……」

「フェリスが何をしたいのか、それで随分答えが変わると思いますよ」

部下として上司の質問に答えることは吝かではない。彼女の背後でルフェイルが眉間に皺を寄せ、パトリシアが苦笑していることは気になったが、レクティファールはこの年下の上司だけをじっと見詰めることにした。

「あなたが私に何を求めているのか、それを教えてください。班長としてどうするべきなのか、あなたは分かっている筈です」

そう口に出せば、フェリスの顔は大きく歪んだ。

日頃、模範的な士官候補生として教官たちの高評価を得ている彼女とは思えない、弱々しい態度だった。

「――――訓練て言っても、事故は起こるんだよ」

「知っていますよ。訓練中の事故で死亡する学生の数は、毎年十名以上ですから」

これでも随分と減った。

一〇〇年ほど前まではこの十倍も死者が出たものだが、学生一人

一人の教育に掛かる手間と費用を考えるなら、これは出来るだけ少ない方が良い。様々な試行錯誤の末に、この程度まで減らすことが出来たのだ。

「怖くないの」

「別に、怖くはありません」

問われ、答える。

そこに虚勢は無い。

「一対一の規定の決まった戦い。それなりに面倒ごとはありますが、〈パラティオン〉での戦いより随分気楽なものです」

懸かっているのは、自分の生命と皇国騎士の名誉。

数万の生命と国家の命運に較べれば――そもそも較べるものではないが――気は楽だった。

「――――強いね、レクトは」

フェリスは呟き、自分を責めるように固く拳を握り締めた。

自分もその場に立てれば良いのに、と思っているのだろう。

「強くなどありません。――――私より勇敢で優秀な者たちは、多くがあの戦いで死にました」

そして生き残った者たちは、すぐに新たな戦場に旅立った。勇敢で優秀だから、死にやすい。

「私は自分に出来るだけのことをしようと思っているだけです。出来ないことは諦めるにしても、出来ることはやろうと、それだけです」

「それが強いってことだと思うよ、ボクは」

フェリスは小さく、力無く微笑み、黒い手袋に包まれたレクティファールの手を握った。

熱を通さない手袋は、しかしその手の感触だけは伝えてくれた。

「――――情けない班長だと君は怒るかもしれないけど」

「はい」

「『頑張って』――――今のボクが心の底から言えるのは、これだけだから……」

「はい」

フェリスの手が離れると、レクティファールはおもむろに立ち上がった。

時間だった。

「――――ルフェイル」

「うん？」

「ちょっと尻拭いしてくる」

誰の、とは言わない。

言う必要がない。

「――――借りとく」

「高いぞ」

「今度、もっといいところ連れてってやるさ」

「期待しないでおくよ」

ひらりひらりと手を振り、待機室の専用固定具に身を委ねる〈蒼海の月〉の元へと向かうレクティファール。

青の鎧を前にして、レクティファールは一刻摂政としての顔を覗かせた。

「――――さて、戦おうか」

呟き、見据えるものは唯一つ。

今の彼がすべきことであった。

レクティファールが〈蒼海の月〉を装着し始めた頃、観客席の通路で二人の女性が顔を合わせていた。

「――――ご無沙汰しております、お館様」

頭を垂れるウェルチに対し、マリアの表情は至極穏やかであった。目の前の次期子爵が日頃自分の娘に対し如何様な態度を取っているか、総て知った上での態度である。

「元気そうで何よりね。――――今回は、ちょっと騒ぎが大きくなり過ぎたみたいだけど」

「――――そろそろ丁度良い時期だと、愚考いたしました」

マリアの言葉にウェルチは静かに答えた。頭は下げたまま、しかし、マリアにその表情を察することは容易い。

「あなたから見て、まだあの娘は未熟過ぎるかしら？」

「はい。人としては尊敬出来ます。女としても、連れ合いとなるな

らそれなりに」

自分などよりも、余程夫や子どもを愛せるだろうと思う。

両親に愛され、祖母に愛されたフェリスは、その生い立ちを思えば奇跡と思えるほどに人を想うことが上手かった。

その点に関し、ウェルチは純粋に尊敬の念を抱いている。

「皇妃として後宮に上がるなら、他の皇妃様方の間に立ち、それを上手く取り持つことが出来るでしょう。得難い才能です」

本人も知らぬその才能に、ウェルチは気付いていた。

だからこそ、彼女はフェリスとの関係を変えるしかなかったのだが。

「人として、皇妃として……ならば貴族として、軍人としてはまだまだということね」

「貴族としては優し過ぎ、軍人としては脆いと」

「――――このままではいずれ、潰れるということね」

「はい、恐らくは」

ウェルチの断定の言葉に、マリアは大きく溜息を吐いた。

あの孫の両親は、恐らく娘を貴族として育てるつもりは無かったのだろう。自分の下に預けられたばかりのフェリスに聞いたところでは、自分たちが皇国人であることも隠していたらしい。

権力と義務の大きさに怯えたのではない。ただ、娘の生き方を皇国という軛で扼することを嫌った。

皇国という国家に翻弄された二人だからこそ、娘を皇国から遠ざけた。結果としてそれがフェリスを苦しめることになったが、それは両親の責任と言い切れるものではない。

「――――貴族とは、度し難い生き物ね」

「はい」

皇国貴族こそが真なる貴族と人々は言う。

自らの権力を維持することに汲々とする他国の貴族に較べて、清廉で尊敬に値すると。

しかし、マリアはそんな評価を一笑に付した。

心の底から貴族など、なるものではないと思っていた。

「祖先たちのように悠々と大海を巡ってみたいと思うのは、罪かしら」

「――――お館様ならば、罪でしょう」

マリアには大きな責任がある。

もしも公爵家を誰かに譲り、その人物が大過なく公爵家と所領を纏められたなら、彼女はある程度の自由を手に入れてその望みを叶えることも出来るだろうが、有力な後継者の居ない現状では望むことさえ罪と言える。

レヴィアタン公爵家も、領民からの税で家を維持しているのだ。領民から税という対価を与えられた以上、それと同価値の義務を果たさなくてはならない。そしてその義務を果たせるのは、公爵家の当主以外にない。

「そうね、フェリスでも、きっと同じこと」

「はい、フェリス様はいずれ皇妃となられますが、今は未だ次期レヴィアタン公爵の筆頭候補であらせられます。そして皇妃となられた後は……」

「次期レヴィアタン公爵の母となることを望まれる」

フェリスと皇王の血を引く者であれば、次期公爵として大きな問題はない。

その人物が公爵に相応しい能力を備えていると判断した暁には、フォード子爵家もその人物を推そうと考えている。

「あの娘の両親が恐れた通りの状況になったということね」

「はい」

国に守られる代償に、国に縛られる。

たとえ民主主義の国家であってもそれは変わらぬことであるが、貴族ともなればその度合いは大きくなる。

「――――どうかしら、あの娘は……それに耐えられると思う？」

「――――」

ウェルチはここで初めて、言葉に詰まった。

耐えられるかと問われれば、以前であれば半々と答えただろう。しかし今なら、あの陸軍中尉が現れた今ならどうか――――彼女はその明晰な頭脳で考える。

そして数瞬の思考の後、彼女は答えを出した。

「此度の決闘でほんの僅かでも成長が見られるなら、お館様が望む以上の人物になることもあり得るかと」

ウェルチの答えに、マリアは驚いたようだった。

その義務故に未熟に過ぎるフェリスを憎んでいるこの才媛が、ここまで娘を買う理由はなんなのか。

「――――そう、そこまで……」

「はい、今回フェリス様の下で戦う陸軍の中尉、もしかしたらフェリス様を大きく変える切っ掛けになるやもしれません」

ウェルチは件の中尉の正体を知らない。

しかしここまで言い切る辺り、もしかしたら彼女なりにその正体に見当を付けているのかもしれない。

正体を知るところまでいかずとも、只者ではないということには気付いているのだろう。

「じゃあ、期待してもいいのかしら」

「どちらに、でしょうか」

ウェルチは問う。

ようやく上げた顔には、純粋な疑問があった。

「どちらにも、よ」

微笑み、答えるマリア。

そして彼女は心の中で、そしてあなたにも、と付け加えた。

兜の錬成硝子の向こうに決闘相手の姿を認めたとき、演習場の空気が変わったとレクティファールは思った。

先に演習場に出て待機していたレクティファールは、管制官を務めることになったルフェイルの言葉に従って観客席の候補生や学生たちの歓声に手を振って応えていたが、その歓声さえも相手の登場で静寂へと変わってしまった。

相手が一歩踏み出すたびに、〈蒼海の月〉に搭載された振動感知器が地面の揺れを感じ取った。

観客席の総てがその姿に目を剥き、驚きのままにぽかんと口を開けている者も見られる。

斯くいうレクティファールも、少々驚いた。

「――――錯覚、じゃないみたいですね」

ゆっくりと演習場に進み出るその姿は、〈蒼海の月〉の探測装置が計測した限りでは凡そ三メイテル弱。標準的な体格の知恵ある者が『着込む』なら、これ以上大型のものは考え難い。

緋金の装甲板の随所には黄金色の装飾が見られ、相手を視覚効果で圧倒することも視野に入れていると考えられる。

そして一際圧巻なのは、その武装。

騎士の武器としては標準的な両刃剣と盾だが、あの巨大な甲冑が持っているとなるとそれなりの大きさということになる。

盾だけでレクティファールの姿を完全に隠せるだろうし、剣は刀身だけでレクティファールの身長の五割増し。量産型の魔動式甲冑を纏った兵士があの肉厚の刃を受ければ、一瞬で挽肉に変わってしまうだろう。

『あ――と、レクト……』

通信の先にいるルフェイルも、流石に動揺しているようだ。

もっと動揺している女子二人の声がルフェイルの声の向こうから聞こえてくるが、レクティファールは敢えて気にしないことにした。気にしたら、余計に混乱する。

「情報はありますか」

『俺が知っている限りの情報でいいか？　〈ガイエンルツヴィテ〉の軍機に引っ掛かるから、詳しいことは分からん。多分、情報開示を求めても無駄だ』

「それでも構いません。無手よりは大分ましです」

『分かった』

ぎゃいぎゃいと騒ぐ女子たちを宥めながら、ルフェイルはレクティファールの求めた情報を与えてくれた。

あれが〈ヴォルスンガ〉と呼ばれる重武装重装甲の魔動式甲冑であること、実戦に何度も投入されその都度改良を受けていること、その性能が〈蒼海の月〉と単純に数値比較して数倍であること、――そして、勝ち目が殆ど無くなったこと。

『相手は本気でお前を潰しに来たぞ』

その一言が、レクティファールの頭を大槌で殴った。

そうだ、そうなのだと理解するよりも、そうなんだろうな、という諦観が彼を支配した。

今のレクティファールは、事前に設定された『レクト・ハルベルン』という魔法技能を持つ士官としての能力しか発揮出来ない。

うっかり〈皇剣〉の力を使ったら最後、勘の良い者ならその正体にすぐに気付くだろう。

それを避ける為、レクティファールは〈皇剣〉の機能を大きく制限している。〈皇剣〉そのものが非常事態と判断してレクティファ

ールから〈皇剣〉の管制権限を奪い取らない限り、レクティファールは“ちょっと優秀な魔導師”でしかない。

そんな魔導師の部隊を相手にしても尚圧倒出来る〈ヴォルスンガ〉の性能を考えるなら、勝とうと思うことさえ馬鹿らしい相手である。

『降伏しようとフェリスが叫んでいるが？』

聞こえている。レクティファールは突発事態に弱い自らの上司の顔を思い浮かべ、嘆息した。

「落ち着かせてください」

『ああ、分かった』

ごちん、と鈍い音が聞こえ、次いで頭を抱えて蹲るフェリスの呻き声が聞こえた。

『落ち着かせたぞ。流石に硬いな、少し手が痛い』

「――――ありがとうございます」

ルフェイルに対する恨み多分に含んだ呻き声が聞こえてくるが、龍族は頑丈だ、どうということはないだろう。

レクティファールはルフェイルに礼を言うと、通信を切った。

もう相手は、眼前に居た。

「逃げなかったのは褒めてやろう」

〈ヴォルスンガ〉の頭部に拡声器が仕込まれているのだろう。少しくぐもったゲオルグの声がレクティファールを嘲笑していた。

確かに、通常の魔動式甲冑の域を出ない〈蒼海の月〉で〈ヴォルスンガ〉に挑もうなど、普通であれば考えられない。〈蒼海の月〉と同程度の性能を持った魔動式甲冑を最低でも一個分隊分揃えなければ戦いにならない筈だ。

しかし、レクティファールは逃げようなどとは考えなかった。

〈皇剣〉が〈ヴォルスンガ〉を五段階判定で下から二番目の脅威――本機を撃破すること能わず――と判断したことも理由の一つであるが、それ以前にここから逃げるという選択肢を持っていなかったのである。

勝つ目算は立たずとも、上手い負け方の目算なら立つ。

皇国騎士が他国に見縊られない程度に相手に損害を与えられれば、

それで良いのだ。

「退却の許可は得ていませんのでね」

本当はさっさと許可を出そうとした上司を強制的に“落ち着かせた”のだが、それを言う必要を彼は見出していない。

極々当たり前のように〈ヴォルスンガ〉を見上げ、哂った。

「随分見事な『玩具』ですね」

「――ッ、貴様……！」

とりあえず、相手を挑発してその動きを制限しなくてはならない。

相手が精神的余裕を失えば、戦いは随分とやりやすくなる。

しかし、レクティファールの思惑はいきなり外れた。

「――――ふ、ふん、安い挑発だ」

どうやら向こうの管制官にこちらの意図を読まれたらしい。

ゲオルグは呼吸を整えると、レクティファールの挑発を笑って躱した。

「挑発ではなく、単なる感想です」

「我が国の素晴らしき力を、皇国の田舎騎士が理解出来ないだけだ。これだから無学者は困る」

「世界には無学者でも理解出来る程素晴らしいものもあるでしょうに」

「――――……」

「――――……」

言葉の応酬は、観客たちには聞こえていない。

だが、二人の発する剣呑な気配だけは観客にも分かった。

固唾を呑んで二人の様子を見る観客たちは、やがて二人が距離を取ると大きく息を吐いた。

審判を務める騎士学校の教官が注意事項――相手の命を奪うような行為を行わないこと、訓練区域外に出ないことなど――を説明し、

二人がそれに同意したことで準備は終わる。

二人は一〇メイテル離れた位置で相対し、審判の状況開始の一言を待った。

片や巨大な力を持ちながらそれを振るうことが出来ない騎士。

片や目の前の相手が真実の存在ではないと知ることが出来ない騎士。

両者は互いを見据え、四肢に力を滾らせてそのときを待つ。

「――――」

そして一つの風が大きく砂塵を巻き上げた刹那、防護結界で守られた審判席に退避した審判が号令を下した。

状況開始。

その一言で、爆光と衝撃波、そして轟音が演習場のど真ん中に発生した。

第二十話「譲れぬ一線×歩むべき道＝そこにある今」

ゲオルグは、初撃から全力を投じた。

〈ヴォルスンガ〉の盾に施されていた紋章はその実攻撃魔法の射出口であり、そこから放たれた極太の橙色の光は正確に、そして従順にレクティファールへと殺到する。

レクティファールはこの攻撃を半ばまでは予測していたが、ただその威力だけは見誤っていた。恐らく牽制と様子見を兼ねた一撃を加えてくるものと予想していたのだ。

しかし、既に放たれたものについて色々後悔しても仕方が無い。彼はすぐさま両脚の脚甲に組み込まれた移動補助術式を展開し、その場を退いた。同時に、地面に着弾した魔法によって発生するであろう高速度の飛礫と衝撃波を防ぐ為、自身を守る防御魔法を展開することも忘れない。

果たして、ゲオルグが放った一撃はレクティファールの眼前で地面を穿ち、吹き飛ばした。

魔動式甲冑を装着していることが前提の一撃、もしも生身で受けていたら、今頃上半身の半分は大きな損害を受けていただろう。

「――――訓練か、これが！」

レクティファールは爆風に煽られながら叫んだ。彼の中の常識は市井の一般人と較べれば大分殺伐としたものであったが、この光景はその常識の更に上をいく。

少なくとも、これ程危険な訓練は皇国にはない。

強いて言えば挺身兵たちの最終試験がこれに近い危険度だが、それとて命を奪うことが訓練ではなかった。

「潰しに来た、というのは本当のようですね」

着弾地点から少し離れた位置に着地したレクティファール。呟く姿は冷静に分析しているように見えて、実際には混乱から脱しきれていない。並列思考の一部は混乱を残したままで役に立たず、彼はそんな自分に舌打ちしたい気分であった。

〈――――防御魔法『遮断壁（ファスト・シェッド）』展開完了。自動詠唱機関、冷却機構稼働率〇・〇三。各部位に損傷無し〉

顔を覆う黒い錬成硝子の内側に映し出される情報はこの攻撃がレクティファールに掠り傷一つ負わせなかったことを示していたが、そんなことは何の慰めにもならない。

現実的に考えれば、初撃とは様子見、牽制以上の意味を持たない

筈だった。相手の出方、戦術を見極める為に一撃を撃ちこんでみる。そしてその反応を見て自分の戦術を決めるのだ。

確かに初撃で相手を無力化出来ればこれ程戦術的に素晴らしいことはない。一切の損害を受けること無く目的を果たせるのだから、ある種理想的な勝利の形であろう。とはいえ、実際の戦場でそれが実現できるかと言えば、大半の作戦家は首を横に振る筈だ。彼らがどれほど緻密で精巧な作戦を立案しようとも、現実はたった一つの想定外要素で破綻してしまう。

だから彼らは常に次善の策を用意し、更に次の策をも用意している。そして最後に作戦結果を振り返ってみれば、彼らは次善策やその次の策さえ満足に実行出来なかったことに気付くだろう。破綻に気付き、手当てする。しかしまた別のところが綻び、手当てする。これを繰り返し、作戦はようやく生き物として動くが、やはりその動きは想定とは違うものになりがちである。

このときのレクティファールも探測魔法を展開しながら幾つかの作戦を構築したが、やはりというか、彼の予想を超える想定外の出来ごとにその作戦は徹底的にぶち壊された。

「――――ぉおおおおッ！」

土煙の向こうに、探測魔法が捉えた機影が映る。大きさから推察して〈ヴォルスンガ〉に間違いなかった。後背の推進器から残留魔力の粒を放出し、その巨体は地面を駆ける。

レクティファールが瞠目したのは、その移動速度だ。

〈ヴォルスンガ〉は巨体に似合わぬ速さで走り、そして右の拳を振り上げて雄叫びと共にレクティファールに迫っていた。

「ッ！」

相手の動きに呼吸を合わせる暇さえ無かった。

レクティファールは咄嗟に両腕で身体を守り、さらに物理系魔法障壁『防盾（ファスト・バリエル）』をその腕の上に貼り付けた。

その一瞬後、〈ヴォルスンガ〉の一撃はレクティファールの張った防御魔法に激突した。

「――ぐ」

そこに加えられた衝撃は明らかに『防盾（ファスト・バリエル）』の防御機能を凌駕するもので、レクティファールは魔法障壁によって多少減衰されているものの、未だ十分過ぎる力を残した〈ヴォルスンガ〉の拳の一撃を、その身に受けることとなった。

受け、声さえも出なかった。

錬成硝子に映し出された〈蒼海の月〉の情報。その中で両腕の状態は一気に要警戒段階に跳ね上がり、更に腹部に大きな衝撃が加わったことを示していた。今まさに衝撃に晒されているレクティファ

ールには大いに無意味な情報であったが、〈蒼海の月〉がこの大いなる暴力にもその機能を失っていないことを教える分には、役に立っているのかもしれない。

全くもって素晴らしい魔動式甲冑だ――――彼は意識を持って行かれそうな苦痛の中で、レヴィアタン兵具商会に心からの賛辞を送った。

「『風弾（ガストゥール）！』」

自分の腕と、〈ヴォルスンガ〉の拳との間に圧縮された空気の塊を形成、炸裂させる。

空圧制御系としてはごく初歩の魔法であるが、その威力は中々侮れない。特にレクティファールの身体は攻撃に押し出されて半ば空に浮いている状態で、空気圧の変化に伴う突風は彼の身体を一気にその場から押し出した。

一瞬遅れて、彼の居た場所を赤熱化した〈ヴォルスンガ〉の左拳が通過する。

大気が揺らめく程の熱気を感じたレクティファールは、その額に冷や汗を浮かべた。

「――――殺す気ですか」

「身体に纏った訓練用障壁で威力はほぼ相殺されるだろう。そういう“訓練”だ」

くぐもったゲオルグの声からは、僅かな優越感が滲み出ていた。

確かにレクティファールもゲオルグも訓練用の魔法障壁を身体の周囲に展開しており、それと対になる形の術式を組み込まれたあらゆる攻撃は、それこそ物理的なものから魔法的なものまでほぼ完全にその威力が減衰されるようになっていた。その機能が一定基準値以上に発揮された時点で勝敗は決定され、訓練は終わる。逆に術式を組み込んでいない攻撃は素通りすることになり、それを原因とする訓練中の事故は毎年発生していた。防がれるはずの攻撃が防がれなかったという事故だ。

訓練用障壁は身体の急所を重点的に守るように設定されており、四肢などはそれ程厚い守りを得ている訳ではない。単なる衝撃波や破片などの二次被害も、訓練用障壁では防ぐことは出来なかった。訓練用障壁とは訓練時に使う防具と同じで、それがあれば絶対安全というものではないのだ。

確かにゲオルグの拳には訓練用の術式を組み込んだ極薄の皮膜が展開されており、レクティファールの防御用障壁に接触すれば威力は拡散し、それ以上進むことは出来ないようになっていた。だが――

「尤も、魔動式甲冑を通した損害はそのまま受けるだろうがな」

「――――」

その通りだ。

ゲオルグの言葉通り、レクティファールの両腕は先ほどの攻撃を受けたことで強い痛みと痺れを発している。

使用者の身体を守りたい〈皇剣〉はレクティファールの意識内に無数の警告文を表示し、さっさと機能制限を解除するよう求めてきていた。それらをいちいち黙らせながら、彼は小さく笑んで見せたw。〈ヴォルスンガ〉が、ゲオルグの困惑を感じ取ったように小刻みに揺れた。

「決闘なのでしょう、だったらこれくらいは、ね……」

当たり前です――――告げると同時に、レクティファールは手のひらに小さな光球を浮かべ、それを地面に叩き付ける。

パン、という破裂音から一瞬遅れて、閃光と爆音がその場を満たした。

「音響閃光弾ッ！」

ゲオルグは咄嗟に右腕で頭部の光学観測機器を庇ったが、しかし優秀過ぎる〈ヴォルスンガ〉の制御機構は音響閃光弾の脅威をきちんと認識し、その音と光を遮断した。それは極々短い間で僅か半秒

程度であったが、彼の前から決闘相手の姿を消すには十分過ぎる時間であった。

「逃げるかッ！」

そう罵っても、聞こえてくるのは爆音と閃光に驚いた観客の声だけ。

レクト・ハルベルンは完全に姿を晦まし、彼は一気に勝負を決する機会を失った。

第〇八九班に与えられた管制室。演習場を眼下に見下ろすその部屋で、ルフェイルは眼前の表示窓に映る光景を見、小さく「良し」と呟いた。

背後では彼の班長と幼馴染が混乱状態でぐるぐると走り回っているが、そんなことはどうでもいい。部屋の隅で本を読んでいる黒いお姫様はもっとどうでもいい。

隣に座る整備担当の学生も〈蒼海の月〉の状態を確認して何度も頷いており、戦いがまだ終っていないことを彼に確信させる。

「損害は」

「両腕部の装甲と装甲下の伝送系、あと術式展開用の自動詠唱装置に若干の被害がありますが、まだいけます」

首肯し、ルフェイルは通信機の開閉器を入れる。レクティファールが演習場の一角を占める人工森林に身を潜めていることは、管制室でも把握していた。

空電音の後、レクティファールの声が届けられる。

『どうも、ご無沙汰しております』

まるで仕事場での挨拶のようなその言語に、ルフェイルは苦笑した。どうやら、戦っている本人もまだ大丈夫のようだ。

多少息は上がっているが、その声は冷静なように思える。ルフェイルはこの友人の胆力に少しだけ感心した。

「そっちの状況は」

『〈蒼海の月〉の損害はそっちの方が詳しいでしょうに』

「そうだな、だが、お前はどうなんだ」

くく、と喉を鳴らすレクティファール。珍しいレクティファールの態度にルフェイルは眉を顰め、耳を欹てる。

「どうした」

『いいえ、ちょっと可笑しくて』

何を言ってるんだお前は、と怒鳴りそうになったルフェイルであるが、彼が口を開く前にレクティファールがそれを遮った。

『戦場から遠く離れた皇都の膝下で、こんな風に汗だくになって息を殺していることが』

思えばこんな風に必死になることは存外少なかった。

あの北の戦場でさえ、彼は異常なほど冷静に状況を見ていたような気がする。

『これで少しは、戦友たちの気持ちが理解出来る』

そう漏らし、レクティファールはルフェイルを沈黙させた。戦場に出たことがないルフェイルにとって、レクティファールの言葉は凡そ理解し難いものであった。だが、それでもそれを否定する言葉を彼は持たないし、意思も有していなかった。

「――――そうか、状況開始から二分でそれだけでかいものを得たんだ。これでこの訓練はお前の判定勝ちだな」

『出来れば一本勝ちもしてみたいものですが』

「それはお前次第だ」

『至極ご尤も』

ルフェイルは見えもしない相手に頷いて見せると、すぐに自分の仕事を再開した。

表示窓を追加で二枚ほど展開し、そこに先ほど〈蒼海の月〉が送ってきた〈ヴォルスンガ〉の簡易精査情報と、今まさに動き始めた〈ヴォルスンガ〉の中継映像を映す。

「お前も知っての通り、あっちは重装甲強襲型の防衛線突破用重甲

胄。対してこちらは軽装甲高機動型の機動戦用甲胄だ」

〈蒼海の月〉と〈ヴォルスンガ〉は、その開発目的からして違う。

その結果与えられた性能も、まるで違った。

「正面から撃ち合えば、ほぼ間違い無く負ける」

『でしょうね、防御が抜かれたら、一撃で終わる自信があります』

全身全霊で後ろ向きな言葉であるが、嘘ではない。事実だ。

概算でその火力量は一対七。まだ向こうが隠し玉を持っていると仮定すれば、その差はさらに広がる。

「一撃、一撃だ」

それで決する。

向こうが一撃で終わらせることが出来る火力を持っているなら、こちらはその一撃を被らないよう更に早く一撃で勝負を終わらせる必要がある。

火力で劣るこちらが向こうに一発で致命傷を与えるには、それこ

そ地を這うように戦術を張り巡らせ、しかし無駄なく一つ一つを確実に成功させなければならない。無駄に策を弄して体力を消耗すれば、それは相手方に有利に働くだろう。最低限の労力で、最大限の成果を――――まさに戦術の基本だった。

しかれども、基本ほど難しいものはない。

基本であるが故に一つ間違えれば総てが水泡に帰することもあるだろう。

だから、ルフェイルは問う。

「やれるか」

気付けば、背後で回っていたフェリスとパトリシアが彼の両肩を痛い程の力で握り締めていた。

彼女たちは黙ってレクティファールの答えを待っているようだ。

しばしの沈黙の後、彼と彼女たちが待った答えは齎された。

『可能不可能なら可能と、やれるかやれないかならやれると――――そしてやるかやらないかと訊かれたら、やると答えましょう』

その答えに、ルフェイルは大きく頷いた。

「分かった。こちらも補助に入る」

『感謝します』

「馬鹿野郎、俺たちは全員で一個の班、全員で勝って『良く出来ました』なんだ」

なるほど、その通りだ、という呟きと共に通信は切れた。

〈ヴォルスンガ〉が人工森林に入ったことで、探知を避けるために〈蒼海の月〉を休止状態に落としたのだろう。重い魔動式重甲冑では不可能だが、軽装甲型の魔動式甲冑であれば装着者の力のみでも動くことが出来る。それを利用した隠密行動だ。

「よし、あいつが〈ヴォルスンガ〉を振り回している間に情報を整理するぞ」

「はい！」

元気の良い女子二人の声に、ルフェイルは小さく口の端を上げた。

勝ちを目指して動き始めた第〇八九班に対する第〇〇八班の管制室は、恐ろしく静かであった。

それもその筈、この管制室には第〇〇八班班長のウェルチと、〈ヴォルスンガ〉の管制官兼整備主任の〈ガイエンルツヴィテ〉人の女性が一人居るだけだったのだ。この女性は先頃〈ガイエンルツヴィテ〉本国から派遣されてきた人物で、まるでゲオルグの従者のように振舞うことで知られている。ウェルチが調べたところでは、実際に〈ガイエンルツヴィテ〉本国では彼の従者兼愛人として過ごしているということだった。

但し、その能力は単なる従者や愛人というには優秀過ぎた。

管制官としても整備主任としてもウェルチが素直に認められるだけの腕前を持っていたし、自己紹介の際軍人であるとは言っていなかったが、明らかに軍人としての訓練を受けた身熟しを見せている。恐らく、生身での近接戦闘でもそれなりの実力を持っている筈――そう思える程度には、一つ一つの動きが刃物の鋭さを持っている女性であった。

「ゲオルグ様、脚部への負担が大きくなっております。出来るだけ平坦な場所をお進み下さい」

『分かっている！』

軟質な地面や、傾斜した地面は魔動式重甲冑の脚部や腰部に大きな負担を強いる。高重量の巨体を支えているのだから、それも当たり前だった。

しかし、本来なら森林を進む程度の負荷で脚部に異常をきたすことはない。〈ヴォルスンガ〉が突破するべき防衛線が森林地帯にも存在することはその基礎設計段階から想定されていることだ。ならば何故、〈ヴォルスンガ〉の脚部に余計な負荷がかかっているのか。

答えは、その装着者にある。

「落ち着きなさいゲオルグ。向こうはあなたに怯えて逃げ回っているだけよ」

『ですが……！』

苛立たしげに進行方向にあった立木を薙ぎ倒すゲオルグ。

〈ヴォルスンガ〉の情報画面を見れば、ゲオルグの脈拍が随分と不規則になっていることが分かる。ウェルチは心の中で嘆息し、それでも表面上は穏やかにゲオルグを窘めた。

「騎士と兵士は違うものよ。騎士とは戦場にあっても平常心を失わ

ず、自分を律さなくてはならないのではないの？」

そういう意味では、相手の方が優れているかもしれないわね――――ウェルチは密かに呟いた。

『――――ッ、分かりました……』

そう言ってゲオルグの脈拍が少し落ち着くと、目に見えて〈ヴォルスンガ〉の各部に加わる負荷が減少した。これで余計な故障の心配をしなくて済む、ウェルチと女性はほんの少し視線を交わし、同時に微笑んだ。

「相手は恐らく、あなたを焦らせて隙を作ろうとしている。向こうが狙ってくるのは……一発で勝負を決められる急所への攻撃でしょうね」

ウェルチ・フォードという女性の本当の恐ろしさは、この思い切りの良さにある。

相手の策はこうである、といっそ滑稽な程に確信し、しかしその確信は恐ろしいほどに的確だ。だから怖い。迷うことを嫌うように「こうである」と断言し、まるでそれが唯一無二の正道であるかのように振舞うのだ。

しかし彼女が完全無欠に正解しか選ばないのか、と問えば、それ

は否。

彼女の予想とて外れることはある。しかし、それを悔いずに省み、次の判断材料にする。

ウェルチ・フォードという軍人は、そんな自分を努力によって手に入れた。

だから、人を惹き付けた。

『――――では』

「今は適当に相手を追い回しなさい。まさか魔動式甲冑無しで決定打を放てるとは向こうも思っていないでしょう。そのときが来れば、すぐに分かるわ」

ウェルチは勝利を絶対の未来として確信していた。

彼女唯一の誤算は、知恵ある者総てが彼女程の頭脳を持っていなかったという事実、そのたった一つだけだったのである。

ゲオルグがそれに気付いたのは、状況開始の声から凡そ二〇分が経過した頃だった。

観客席から聞こえてくる声の中に、彼を罵倒するものが増え始めたのだ。

「情けない」

「あんなデカブツを使ってもまだ勝てないのか」

「〈ガイエンルツヴィテ〉の騎士も、存外大したことがない」

それらの声は時間の経過と共に増え、今では〈ヴォルスンガ〉の集音機器でも十分に拾える程の音量になっている。

彼は歯噛みしながら後背を映す表示窓を睨み、しかしそれ以上の行動を選ぶことが出来ずに苛立ちを募らせた。

彼の敵はあくまでも『レクト・ハルベルン』であり、決して無力な観衆ではない。それに、今彼を罵倒している者たちが彼とレクティファールの戦いを理解しているかといえばそうではなく、単純に見世物としてつまらないと思っているに過ぎない。

観客の大半は士官学校や騎士学校のような士官を育てる教育機関の学生ではなく、兵や下士官を育てる教育機関の学生たちである。

彼らも戦術の何たるかは多少学んでいるだろうが、戦場での駆け引きなどはそういった基本的な教育で簡単に知ることは出来ない。

一つの要素がその他複数の要素に複雑に絡むということを、彼らはまだ理解していない。強いものが弱いものを一方的に叩けるなど、所詮幻想に過ぎないのだということを理解していない。だから相手よりも巨大で強力な武器を用意していながら、未だに相手を仕留めることが出来ないゲオルグを貶めているのだ。

事実として、〈ヴォルスンガ〉を持ち込んだ時点で卑怯と思う者もそれなりに居たのだろう。

確かに両者の間で取り決められた規則上は問題ないとしても、観客というある種の部外者にまでそれを理解しろというのが無茶なのかもしれない。

一定の教育を受けたものはゲオルグの行為が卑怯な行いなどではなく、ただ「相手に勝利するために使えるものは使う」という戦術的に真っ当な理由があるものと知っている。だからゲオルグを責めようとする者は居なかった。

彼自身も、自らの行いが卑怯であるなどとは思っていないし、恐らく相手も思ってないだろう。だから無知な観客たちの声にゲオルグは苛立つ、先ほどから通信機の向こうで管制官が落ち着くよう叫んでいるが、その声すらも彼の苛立ちを増幅させた。

（何故、貴様らは……！）

騎士として、互いに全力を尽くすことは相手への礼儀だ。

悔しいが、相手の策もその一つである。だから、この決闘が終わればそのことは水に流すつもりでいた。

ただ、この状況は何だ。何故自分がこうも不当に貶められなければならない。

全力で戦って、その結果勝敗どちらに転ぼうとも戦った相手を称えるのが騎士だ。自分は自分の総てを懸けて戦っているだけではないか。

（くそ、くそ、くそッ！）

彼の苛立ちはやがて怒りへと変わり、その怒りは彼にたった一つの間違いを犯させる。

それが彼の運命を分かつとは、誰も予想だにしていなかった。

ウェルチがゲオルグの異常に気付いたのは、彼女が学校側に掛け合って集めた観衆から、彼に対する侮蔑の声が上がるようになって

からだった。

フェリスが自分の力を正しく理解出来るように、部下を持つということがどれ程重いものか理解出来るように、他人の視線の中で自分を保って戦うことがどれだけ指揮官に苦痛を与えるか、それを間接的に教える為に用意した舞台が、今は彼女たちの敵になってしまっていた。

「ゲオルグを落ち着かせて」

「やっています。ですが……」

ゲオルグの脈拍、血圧は既に異常数値を示して決して下がらない。通信機の向こうからは荒い息遣いが聞こえ、時折観衆を罵る言葉も聞こえてきた。

危険な状態だ。

ゲオルグは指揮官としても魔動式重甲冑の装着者としても間違い無く優秀な男であるが、こういった下らないことに気を取られることが多い。日頃であれば他人が勝手に言っていることと割り切ることも出来るのだろうが、決闘というある意味極限的な状況では、それも叶わない。

ウェルチがゲオルグを落ち着かせるようと口を開きかけたそのとき、彼女の動きを怒声が遮った。

『聞こえるか、レクト・ハルベルン！！』

拡声器を使い、演習場に聞こえるような声で叫んだのは、言うまでもなくゲオルグ。

彼は推進器から光の粒子を撒き散らして人工森林から上空に飛び出すと、そのまま演習場の真ん中に降り立った。

ゲオルグの行動に困惑するウェルチであったが、彼の降り立った場所の選択が決して悪手ではないことには気付いていた。

遮蔽物の無い平坦な場所、相手を待ち受けるには絶好の位置である。魔法での狙撃を警戒しなくてはならないという欠点はあるが、〈ヴォルスンガ〉の探知器群であれば発射前にそれに気付くことが出来る。たとえ気付かれない程魔力拡散が少ない魔法であっても、それでは〈ヴォルスンガ〉の装甲を貫けない。

『こそこそと戦うのはもうやめにしようじゃないか』

相手の心を攻めることは、戦場での定石だ。

悪口を大声で叫んだり、ありもしない噂で相手を翻弄する。そんな手は珍しくも何とも無い。

だから、ゲオルグの行為そのものは間違っている訳ではないのだ。

ただ、彼が若く、頭に血が上っていたことが間違いであっただけ。

『それとも、あの無能者の上司と同じく、お前も自分の力では僕の前に立つことさえ出来ないのか』

ゲオルグが何を言おうとしているのか、ウェルチはすぐに察した。

だから、慌ててそれを止めようとした。

通信機を起動して集音器に口を近付ける。しかし、間に合わなかった。

『龍の姿にもなれず、魔法も満足に使えず、身体能力も大して高くないあの女！　そんな者に従うしかないお前は、やはりその女と同じく大した力もなく、ただ運だけで今まで生き延びてきたんじゃないのか！』

相手を挑発し、その精神の均衡を奪って主導権を握る。いっそ古典的な策であったが、その分効果は高い。

失うものを別にすれば、だが。

「あの馬鹿者……！」

レクト・ハルベルンに関して大した情報が得られなかった為、その上司であるフェリスを貶めたのだろうか。それともフェリスの為に決闘を決意したあの男が相手だから、こんなことを言ったのか。どちらにせよ、ゲオルグはここに来てウェルチも予想しなかった策に出た。

だが、ウェルチは考える。

これは、もしかしたら自分が思っている以上の効果を生むかもしれない。

自分の目的を果たす為に、役立つかもしれない。

「――――」

彼女は集音器の開閉器を切った。

そしてそのまま腕を組み、状況を見守り始める。

『――――ただ運だけで今まで生き延びてきたんじゃないのか！』

そんな言葉に、レクティファールは心底頷いていた。

自分は運で生き残ってきた、それは認めても良い。

運良く大切な女性に出会い、運良く力を得、運良く忠臣を手に入れ、運良く素晴らしい兵たちに相見え、運良く優秀な将を従え、運良く尊敬すべき敵将に勝った。

だからどうした。

運で生き残って何を恥じることがある。

『もしも、そうでないというなら、僕と戦え！』

反論する気など無い。

この決闘に勝つには、相手を徹底的に焦らし、こちらの領域に引き摺り込まなければならないのだ。こんな安い挑発に引っ掛かる訳にはいかない。

レクティファールは息を潜め、木立の中から〈ヴォルスンガ〉を観察する。

『――――そうか、出てこないか』

ゲオルグはそう言って声の調子を下げた。

落胆しているようにも聞こえる溜息が、拡声器の向こうから聞こえる。

『所詮、無能な上司は無能な部下しか得られないということか。そんな無能を跡取りにしなくてはならない蒼龍公に同情する』

小さな声であった。

拡声器を通しても、恐らく観客たちには聞こえなかっただろう。

恐らく、通信機の向こうに居るフェリスたちにも。

「――――」

聞こえていなくて良かった。正直にそう思う。

だが――

だがしかし――

あの男は何と言った。

「無能……？」

無能。

夜遅くまで仕事をする自分を心配し、夜食やお茶を差し入れてくれるフェリスが。

無能。

毎朝自分たちの為に、パトリシアと一緒に朝食を作っているフェリスが。

無能。

課題に頭を抱え、しかしそれでも提出期限までにしっかりと自分の答えを出せるフェリスが。

無能。

自室で班長としての仕事を夜遅くまで掛かって片付け、そのまま机で寝てしまったフェリスが。

『あの、レクト、気にしなくていいからね？　本当のことなんだから、ボクが龍の姿になれないことも、魔法が使えないことも、ちょっと力が強いだけなのも、ボクが……弱いことも』

今もこうして自分が動揺しているのではないかと気遣い、震える

声で自分を貶める女性(ひと)が――――無能？

違うだろう。

「――――班長。そんな風に自分を貶めないでください」

『でも、本当のことだよ？　ボクは弱くて……何も出来ない』

違う。

ルフェイルも、パトリシアも、オリガも、そして自分もそんな風にフェリスを見たことはない。

しかし本人がそう思っていないというのなら、

「分かりました。では一つ証明しましょう」

『え？』

それを本人が信じられないというのなら、一つ奇蹟でも起こして証明して見せよう。

彼女の率いる者たちは決して無能ではなく、そしてそれ故に彼女も無能ではないことを。

「ちょっと行ってきます」

レクティファールはそれこそ〈蒼海の月〉総ての機能を立ち上げ、木立を飛び出した。

愚かと分かっていても飛び出さなければならない場面があると、このときレクティファールは初めて知った。

退けない一線とでも言おうか、自分の踵がその一線に掛かったと気付いたとき、人は難しいことを総てを置き捨てて本能のままに戦うことがある。

それでも本能の中で理性を働かせることが出来るのが人であり、知恵ある者。

レクティファールは自分の放つこの最初の一撃を、この勝負を決める決定打と考えていた。

「来たか！」

褐色の大地の上で、〈ヴォルスンガ〉が身構えるのが見えた。

ついでに通信機の向こうで自分を罵るルフェイルや、悲鳴を上げるフェリスとパトリシアの声も聞こえた。

逆に言えば、それしか見えないし、聞こえなかった。

〈皇剣〉の機能の内、機能制限に掛からない部分。思考の圧縮と高速化の産物であった。

「『疾駆（イグザスト）』」

術式展開と共に加速するレクティファールの身体。

指向力量制御術式と防御術式が一組になった加速魔法は、水蒸気爆発を発生させる程の速度にまでレクティファールを加速させた。

それこそ一瞬で〈ヴォルスンガ〉の背後に周り、装甲の隙間である左脚の膝裏に、転移魔法で召喚した一本の両刃剣を突き刺すことを可能とする程度に。

「なッ！？」

ゲオルグの驚きの声は、レクティファールの心に何の反応も引き

起こさなかった。

殺しきれない慣性が彼の身体を締め付け、その意識を刈り取ろうと死神の鎌を向けてきている。気にしている暇など無い。

もう一度。

「『疾――――ッ！？」

「嘗めるなぁッ！」

再度の加速を行おうとしたレクティファールを、無事だった右脚で蹴り飛ばす〈ヴォルスンガ〉。その獅子吼は騎士というよりも獣で、動きもまた獣のように粗野だった。

レクティファールの一撃で左脚の制御系に異常が発生したのか、〈ヴォルスンガ〉は均衡を保てずに揺れる身体を手に持った大剣を地面に突き刺すことで維持、盾を蹴り飛ばしたレクティファールに向ける。

間を置かず放たれる複数の魔法弾は、狙いを外れること無く防御障壁を張ったレクティファールに降り注いだ。

「ぐぅッ！」

転がった地面から飛び起き、防御障壁を張るところまでは良かった。

しかし降り注いだ弾雨は彼の予想を超える密度で、その防御障壁はあっという間に削り取られる。

障壁が消えれば今度はレクティファールの身体にそれは直撃し、〈蒼海の月〉表面に張り巡らされた最終障壁がその威力を減衰させるも、やはり完全に相殺するには至らない。

訓練用障壁では消せない衝撃や熱によってレクティファールの身体には無数の傷が生まれ、一部では出血も見られた。

それでも急所を守る訓練用障壁に損害は無く、従って訓練終了の声も無い。

「っぁあああっ！」

レクティファールはその場を一気に退き、近くにあった岩の陰に身を隠す。

がんがんと岩を砕く音が彼の耳を打ち、この場もすぐに安全ではなくなると彼に教えてくれた。

「――――ああもう、もう少しいけるかと思ったんですが」

『馬鹿が！　何やってる！』

ルフェイルの怒声も、身体に蓄積された損傷で意識が薄れたレクティファールには大した意味を齎さない。

このままでは近い内に、〈皇剣〉が使用者保護のためにその意識を凍結するだろう。〈皇剣〉の回復機能を使わない代わりに、レクティファールがそう設定した。

「勝ちたいなぁと思いまして」

『それは俺も同じだが、いきなり挑発に乗りやがって』

「ルフェイルなら、耐えられました？」

ぶつぶつと文句を垂れるルフェイルに問い返してみれば、返って来るのは沈黙。

『――――お前より先に殴ってる』

「でしょう」

得意げに頷くレクティファール。

しかし、すぐにその顔は引き攣った。

『ぐす……レクトのばかぁ……』

通信機の向こうで、フェリスが嗚咽を漏らしていたからだ。

やり過ぎたと今更気付いても遅い。

この一本気な班長は、部下の独断専行を自分のせいだと思っているに違いないのだから。

「フェリス」

『――――』

すんすんと鼻を鳴らすフェリス。

普通の上官ならここで部下を一喝して然るべきなのだろうが、フェリスにそれを求めるのは少し早い。

「フェリス」

だから、レクティファールはこう提案した。

「私に、『勝て』と命令を下してください」

『――――え？』

指揮官ならこうするべきなのだとレクティファールは思う。

部下が国家ではなく上官の為に戦っているのなら、上官は部下の為に出来ることをしなくてはならない。

「『頑張れ』ではなく、『勝て』と」

それが、命令。

求めでも願いでもなく、ただ一つ正しいと思うことを命じれば良い。部下の行動を肯定すれば良い。

「その言葉で、私は奇蹟を起こしてみせましょう」

フェリスが無能ではないと証明する為に、今はまだ未熟であっても、いつかは高みに行けると証明する為に。

「フェリス。私がこんなことを言うのもおかしいですが、どうか」

独断専行をしておいて、それを認めろとは虫のいい話だ。

しかし、フェリスの力を証明する為には、こうするしか無い。

レクティファールは、彼女の命令が無ければ勝つ意味が無いのだ。

「フェリス」

『――――』

岩を削る轟音の中で、通信機は沈黙した。

それはほんの数秒であったのか、それよりも短い時間であったのか、しかし彼の隠れる岩はもう砕ける直前で、彼はそれ以上待つことが出来なかった。

このまま戦うしか無い、そうレクティファールが決意を固めたとき、通信機は静かな女性の声を彼に届けた。

『勝って』

小さな声であった。

近付いてきた轟音の中では聞き取れないくらい小さな声であった。

しかし、レクティファールの耳にはこれ以上無く鮮明に聞こえ、そして彼の心は柄にもなく沸き立った。

ああ、この声の主の為に戦うなら悪くない、と思う。

「了解」

彼はふつふつと湧き上がる感情を胸に、隠れていた岩の陰から飛び立った。

空へ、空へ、〈蒼海の月〉の推進器が許す限りの高さへ。

ただ空だけを見上げる彼の遥か下方で、岩が完全に砕け散った。

〈蒼海の月〉の機能を総て使い、レクト・ハルベルンとしての全魔力を投じた攻撃。

それは明らかに大きな隙を生むし、相手が移動すれば無意味になる類の攻撃であった。

そして外せばもう次の手はない。切り札と呼んで差支えのない、しかし、決して必殺とは言い切れないそれは、皇国で『光輝なる流星雨（グロリエス・ミーティア）』と称される魔法である。

現代の戦場ではもう殆ど使用されず、魔導師同士の戦いでもその隙の大きさから敬遠されることが多い。

しかし、レクティファールは敢えてこれを選んだ。

流星は願いを叶えるという元世界での伝承を信じ、フェリスという可愛らしい女性の願いを叶えるにこれ以上の魔法はないと思った。

「――――さて、やりますか」

高度三〇〇。

損傷した〈蒼海の月〉ではこれ以上の高度に上がることは出来なかった。

しかし、それで十分だ。

折角流星を降らせるのに、あまり高くては見えない。

「『疾駆（イグザスト）』」

告げ、レクティファールは加速した。

魔力不足で本来の加速力は得られなかったが、“地面に向かう”分には問題ない。

重力が、さらに加速させてくれる。

「さあ、終わらせよう」

自分に向けて盛んに魔法を撃ち上げる〈ヴォルスンガ〉に、レクティファールはそう言って微笑んだ。

ぐんぐんと加速するレクティファールを前に、ゲオルグは〈ヴォルスンガ〉の機能を総て解放して対抗した。

肩部や胸部の装甲板が開き、一列に並んだ収束光の発振器を露出させる。

それらの発振器は光を溜め込むと、それこそ滝が天に向けて遡上するような勢いで光を撃ち放つ。

天空へと駆け上るそれらの光を受けるレクティファールは、既に防御障壁すら展開していなかった。

一直線に駆け下りることで被弾面積を抑え、身体の前で両腕を交差させて光を防ぐ。

防ぎ切れない光が兜を吹き飛ばしても、腕を貫いても、彼は真っ直ぐに〈ヴォルスンガ〉を見据えたままだ。

機会は一度、失敗すればあとはない。

レクティファールはその一瞬を待ち、ゲオルグはその一瞬を打ち消すべく砲火を放つ。

「くそくそくそっ！」

当たっている筈だ。

損害も受けている筈だ。

なのに、何故止まらない。

たかが訓練一つで何故ここまで自分を危険に晒せる。

理解出来ない。

理解出来ない。

理解出来ないから――――恐い。

「あああああああっ！」

半狂乱になって光を撃ち続けるゲオルグ。

二人の距離は近付き、レクティファールの受ける損害も加速度的に上がっていく。

そして――――その一瞬は訪れた。

「とった」

呟いたのは――――レクティファール。

もう〈ヴォルスンガ〉の装甲に付いた傷も判別できるような距離に、彼は到達していた。

そして彼は脳裏に描いた術式を、躊躇いなく解き放つ。

「打ち抜け」

囁き。

〈ヴォルスンガ〉の頭上すぐに展開される魔法陣。

制御されたレクティファールの身体は前回転し――――

「『あの空に輝く流れ星（グロリエス・ミーティア）』」

その踵を、魔法陣に叩き付けた。

逃げようとした。

ゲオルグはレクティファールが迫ったそのとき、迷いなくその場から逃げようとした。

相手の意図が理解出来た彼は、その損害を避けるべく行動しようとした。

だが、出来なかった。

「な」

原因は、左脚部伝達系の損傷。

レクティファールの一撃は、〈ヴォルスンガ〉をその場に縫い付けていた。

「ああ……」

空を見上げれば、そこには輝く魔法陣。

どれ程光を撃ち上げてもその魔法陣を突破することも破壊することも出来ず、その向こうに迫る一人の騎士の姿が見えた。

「――――そうか」

『あの空に輝く流れ星（グロリエス・ミーティア）』

俯き、ゲオルグは呟いた。

「負けたか」

彼の前に表示されている光学映像の総てが、光に包まれた。

仰向けに倒れた〈ヴォルスンガ〉の中で、ゲオルグは意識を失っていた。

そんな彼の目を覚まさせたのは、ガツンという音と衝撃。

ゆっくりと目を開けた彼の前には、満身創痍で両腕から血を滴らせ、それでもしっかりと剣を握って自身にそれを突き付けるレクティファールの姿があった。

「――――」

動力停止状態の〈ヴォルスンガ〉に身を包まれたまま周りを見渡せば、先程の音と衝撃の正体らしい〈ヴォルスンガ〉の頭部が、少し離れた地面に転がっていた。

その両目はこちらをじっと見詰めており、主がどんな決断を下すのか見ているようであった。

「何だろうな」

「――――何がですか」

動力が死に、身動きひとつ取れないままにゲオルグが訊く。

訊ねられたレクティファールは逆にその質問の意味をゲオルグに問うた。

「僕達の違いだよ。勝敗を分けた、理由とでも言おうか」

「訊いて、意味があるのでしょうか」

戦う理由が人それぞれであるように、勝敗の理由も人それぞれだ。

その理由を知っているのは、本人しか居ない。

「だが、訊いて悪いことでもないだろう?」

「――――」

蒼い騎士の向こうに見える空は、これまでに見たことがないほど

綺麗だ。

清々しい、それこそ自分の肩に掛かっていた重さが総て消えてしまったかのような開放感がある。

「退けぬ一線、ではないかと」

「――？」

唐突に、レクティファールが答えた。

ゲオルグは彼を見上げ、続きを促す。

「あなたは言いました。騎士としての誇りと」

「ああ」

「それが悪いとは思いません。騎士としての誇り、国としての意地、民族としての矜持。大いに結構だと思います」

ですが、とレクティファールは言う。

「それは、自分の背後にある本当の『決して譲れない一線』から遠ざかる理由にしかなりません。誇り、意地、矜持と一つ、また一つと譲れない一線が増え、私たちが本当に守らなくてはならない本当の意味での『死んでも退けない一線』を隠し、見えなくしてしまう」

「――――お前の『譲れぬ一線』は、一本だけということか」

嘗てレクティファールは、何も持たない男であった。

名一つでこの世界に落ち、生きることになった。

『死んでも譲れぬ一線』など、一つ作るのがやっとだった。

「少し減らせば、あなたの本当の『譲れない一線』も見えると思います。それが踵に掛かったとき……」

「僕たちは、本当の意味での戦いに赴くことが出来る、か」

首肯し、レクティファールは力無く笑った。

「私も、さっき気付きましたけどね」

「何、勝ったのだから、それでいいさ」

「そうですかね」

「ああ」

ゲオルグはレクティファールを見上げ、目を細める。

武人としての階段を昇る為の、目標が出来た。

「負けたよ、レクト」

その一言で、勝敗は決した。

審判のレクト・ハルベルン勝利の宣言と共に、レクティファールの身体はその意識を凍結されて崩れ落ちた。

慌てて管制室を飛び出す第〇八九班の面々は、一様に慌てた顔を浮かべており、特に先頭を走る女性の形相は凄まじいものがあった。

しかし、彼らはまだ知らない。

今回の戦いが単なるお遊びであったと思える程の、凄惨で救いのない戦いが迫っていることを。

その戦いで、彼らが様々なものを得、失うことを。

第二十と半分の話「決闘のその後」

円匙を振るい、砲撃でめくれ上がった土を手押し車に放り込む。

冬の只中だというのに額に汗が浮かび、流れ落ちた。

「ふい～～……」

手拭いで汗を拭き取ると、彼は円匙の柄に顎を乗せて自分たち工兵科学校の学生が延々と土いじりをする羽目になった騎士学校第一演習場を見渡した。

「めんどくせ」

零れた言葉は、彼の偽らざる本音であった。

本来なら観客として『決闘』を観戦するだけの筈だったのに、それが何の因果かこうして穴だらけになった演習場の補修作業をしている。

演習場の保全維持は工兵科学校の領分であるが、建設重機数台を含め、実に一二〇名もの工兵科学生が出張っているというのにまだまだ作業は終わりそうもない。

「そもそも、だ。掘り返し過ぎなんだよバカヤロウ」

砲爆撃でも食らったかのように耕された地面は、そこかしこで大口を開けて彼らを待っている。

それが〈ガイエンルツヴィテ〉側の魔動式重甲冑が皇国側の魔動式甲冑に翻弄され散々攻撃を外した痕跡だと、『決闘』を観戦していた彼は知っていた。

彼の居る場所から少し離れた所では、その重甲冑によって完全に粉砕された岩を新たに設置し直す作業も行われているが、どれもこれも魔動式甲冑がたった二体で作り上げたとは思えない光景だ。

彼の中の常識では、魔動式甲冑とはあくまでも人の動きを補助してその戦闘能力を底上げし、生存確率を上げる為のものであったからだ。間違っても決戦兵力足りうる強襲型自動人形じみた破壊能力を持ち、砲兵や魔導師も真っ青の惨状を作り出す兵器ではない。

ではない、筈なのだ。

「――――ああ、だりぃ」

ぼやき、懐から取り出した煙草に古式ゆかしい油式の点火器で火をつける。現実逃避には丁度良い。

彼は結局、教官が怒声と共に投げ付けた金槌が後頭部を強かに打つまで、延々と紫煙を燻らせるのだった。

◇　◇　◇

目を開けてみれば、そこは見慣れた宿舎の自分の部屋だった。

天井を見上げたレクティファールは、起床と同時に〈皇剣〉の自己診断機能を立ち上げ、自らの身体を走査する。

全身には砕けた〈蒼海の月〉の破片が刺さったらしい刺創と火傷、そして打撲。両腕には凝集光条の貫通した痕跡があったが、そのいずれも医療系魔法で適切に処置されており、恐らく二、三日で傷が完全に癒え、一週間程度で違和感も消えるだろう。〈皇剣〉の機能を使えばそれこそ一瞬で再生可能な傷であったが、今後定期的に健康状態を検査することになるだろうし、そのときに治りが早すぎれば怪しまれる。

学校側に手を回すことも考えたが、ここは大人しく養生するのが一番面倒が少ないと思い、その案を意識領域の圧縮空間に放り込む。

「――――ぅん」

さてどうしたものかと天井を仰ぐレクティファールの耳に、自分

以外の誰かの声が届いた。

そこでようやく、彼は自分の寝ている寝台に誰かが顔を伏せていることに気付いた。

「フェリス？」

薄暗い部屋の中でも、見慣れたその姿を見間違える筈はない。彼はほんの一時ではあったが、この女性の為に戦おうと思ったのだから。

「もみゅ」

小さく身動ぎしながら寝息を漏らすフェリスは、いつも机に座ったまま眠りこけてしまったときとはだいぶ違った表情を浮かべていた。

眉間に深く刻まれていた筈の皺は無く、よく見れば涎さえ垂らしている。嫁入り前の娘としてはちょっとどうかと思われる姿ではあるが、不思議とレクティファールはそんなフェリスに嫌悪を抱くことはなかった。

普段からこういう姿を見せてくれれば、もう少し友人も多いだろうにと思うだけだ。

「ふぅむ」

身体を起こし、顎に手を当てて考え込むレクティファール。身体の調子は存外悪くないようで、少し動かした程度では痛みも無かった。

ならば、とフェリスに手を伸ばすと、彼はそっとフェリスの紅紫の髪を撫で、そのさわり心地を堪能する。

（む、個人個人で髪質というのは随分違うものですね）

メリエラやリリシアよりも短く切り揃えられた髪は、毛先まですっと一呼吸で撫でることが出来る。それでいて男とは違うしっとりとした質感を失っておらず、その感触が気に入ったレクティファールは、しばらく無言でフェリスの髪を撫でる動作を続けた。

やがて、レクティファールの指先がフェリスの耳に触れると、ぴくりとその身体が動いた。

「ん！」

やりすぎたか、と手を引っ込めるレクティファールの目の前で、ゆっくりとフェリスの双眸が開く。開かれたばかりの金色の瞳は茫漠として像を結んでおらず、しかし、その瞳はレクティファールを捉えると、すぐに驚きを表す形へと変わった。

「ええっ！？」

何故そこまで驚く必要があるのかとレクティファールが疑問に思う間もなく、フェリスは座っていた椅子から転げ落ちた。

何でレクトが、とか、いつの間に寝てたのボク、とか、あれ、ここって何処、などと若干の混乱状態にあるフェリス。自分が何故レクティファールの部屋に居るのかなど、肝心な部分を思い出せないようだ。

「フェリス」

そう言って手を伸ばしてみれば、うひゃあと尻餅をついたままかなりの速さで後退る。何故だろうかと思って自分の姿を見てみれば、なるほど、上半身には申し訳程度の包帯しか身に付けていなかった。仕方なく手を引っ込めたレクティファールであるが、フェリスはそのままの勢いで壁際の本棚に後頭部を強打し、床を転げ回る羽目になった。

「うう～～……！」

しばらく涙目で唸っていたフェリス。

その間にレクティファールは手近にあった服を着ると、フェリスの傍らに膝を突いて彼女の後頭部に手を伸ばした。

「ひゃ」

頭を抱え込まれる形になったフェリスが奇声を発する。

抱え込んだ頭が急に熱を持ったような気がしたレクティファールだが、すぐに気のせいだと思い直す。それより今は、フェリスの頭が心配だった。

「うん、瘤になってる訳でもないですし、多分大丈夫でしょう」

痛みが取れないようなら、医務室に行くべきでしょうが――――そう呟いた彼の言葉は、フェリスの耳には届いていなかった。

「きゅう」

「おっとぉ……？」

人形のように倒れ込んで来たフェリスの頭を支えるレクティファール。

真っ赤な顔で目を回しているフェリスにやっぱり当たり所が悪かったのかと首を傾げ、応急技能を持つパトリシアに診て貰おうと部屋を出るのだった。

◇　◇　◇

談話室に降りたレクティファールを出迎えたのは、パトリシアの驚きの声だった。

「あれぇ？　フェリス寝ちゃったの？」

厨房で鍋を掻き回していた彼女は慌てて火を止めると、レクティファールを促してフェリスを談話室のソファに寝かせた。

何処からか持ってきた薄手の毛布をフェリスに掛けると、パトリシアは再び厨房に戻った。

「もうすぐおゆはんの準備できるからねぇ」

「はい、何か手伝いましょうか？」

訊けば、「もう出来るからいらないよぉ、でもテーブルの準備だけよろしくぅ」との返事。

レクティファールは四人分の食卓を整えると、手持ち無沙汰のまま談話室に置き去りにされていた砲術の教本を開く。

「ルフェイルは何処かに出かけているのですか。あとオリガは」

「うーんとねぇ、ルフェイルちゃんは今回の『決闘』で賭けの胴元をしてた人たちから貰うもの貰ってくるって。オリガちゃんは研究所に戻るってさ」

「――――」

金銭を遣り取りする賭博行為は、賭博法によって国に認められた施設か、認定された仲介役しか行えないことになっている。恐らく金銭を賭けた賭博ではないのだろうが、騎士学校という場所が場所だけに、流石に外聞が悪過ぎやしないだろうかと心配になるレクティファール。

「食券賭博って言ってね、二〇〇〇年前に初代陛下が始めたんだって、ちょっと前に国技にしようとかいう議員さんもいたらしいよぉ」

「ふ……」

呼気を漏らし、項垂れる。

余興として自分の戦いが使われていたことに関してはそれなりに納得出来るのだが、時折人から聞かされる初代皇王の為人はその都度彼の精神を大きく削る。とはいえ、歴代皇王は全員が全員、何処か人として可笑しいんじゃないだろうかと思われる部分があり、それは本人が知らないだけでレクティファールにも存在するのだが。

因みにレクティファールの可笑しい点とは、ことあるごとに妃候補たちに後宮に立て篭られることだという。

「向こう一年間は食券に困らないなんて言ってたけど、そもそも食券の有効期限ってひと月だよねぇ」

「転売も出来ませんしね」

教官たちも食券の収受は若者の特権として見逃してくれるだろうが、金銭まで絡めばすぐに動き出す筈だ。

「とりあえず、レクト君が無事で良かったよ」

パトリシアはふわふわとした明るい口調でレクティファールの無事を喜んでいる。

騎士学校に居るだけあって、パトリシアも決して頭の回転が鈍いわけではないし、市井の一般人よりも魔動式甲冑について知識を持っている。だからこそ、性能的に覆しようのない差がある相手に競り勝ったレクティファールが、その無茶苦茶な戦い方から考えれば随分と軽い怪我で済んだことを喜んでいるのだ。

「無事ですけど、まあ、あとで色んな人には怒られるでしょうね」

「ああ、お父さんとか」

「うーん、養父（ちち）は喜ぶだけのような気もしますが……」

それでも、無茶な戦い方に対して多少の文句が出る程度だろう。情けないとか、身熟しが悪いとか、その辺りだ。

問題は、それよりもおっかない人々である。

（カールは怒り心頭だろうし、フレデリックは確実に嫌味苦言、マリアは心臓狙った針の一刺しでアナスターシャは止めの一撃、と）

更に皇城には宰相と皇府の皇国両輪もいる。今度の帰省では確実に諫言の雨あられだ。

「まあ、頑張って聞き流そうと思っています」

「だめだよぅ、心配してくれてる人のこと蔑ろにしちゃ」

まさに正論であるが、人が一度に聞き入れることが出来る言葉というのは上限があるものだ。それを超えれば聞き流すしかなくなる。

「む、では一応努力するということで」

「あはは、そうしてくれると嬉しいな」

ようやく鍋の火を落とし、パトリシアはサラダの準備を始める。楽しそうに厨房で踊るその姿にレクティファールは笑みを漏らし、この人の幼馴染はどうしてあんな仏頂面になってしまったのだろうと不思議に思った。こんな人が近くに居れば、もう少し優しい顔立ちになるのではないか。

「不思議なものです」

レクティファールは呟き、教本に視線を落とした。

しかしすぐに、玄関の扉が開く音が聞こえてきて、再び顔を上げ

る。食堂に近付いてくるどすんどすんという足音は、聞き慣れたルフェイルのものだ。

「――――戻った」

「あ、おかえり、ルフェイルちゃん」

「おかえり」

厨房横の扉から現れたルフェイルは、談話室で呑気に自分の教本を読むレクティファールの姿に眉を顰めた。

寝ていなくてもいいのか、とその視線が問い掛けてくる。

「医療班が待機していた分、適切な応急処置と治療を受けられましたからね。この通りです」

言って、負傷した両手を回すレクティファール。

ルフェイルはその様子をじっと見詰めていたが、やがてレクティファールに数十枚の食券の束を放った。

「分け前だ」

「どうも、とはいえ三食とも食堂では、パティの美味しいご飯が食べられなくなってしまうのですが」

この量をひと月で消化するとなると、三食を総て学校の敷地内にある食券の使える幾つかの食堂で摂らなくてはならない。軍の施設ということもあって一部の食堂は終日開いているが、レクティファールとしては食べ慣れたパトリシアの料理の方が舌に合っている。

「誰ぞにくれても構わん」

「そうしますかねぇ」

知り合いに配ればすぐに捌けるだろう。

元々元手があるわけでもないので、さっさと使い切ってしまった方が精神的にも楽だ。

「明日にでも配るとします」

「好きにしろ」

ルフェイルは上着をパトリシアに渡すと、すぐに手を洗って食事の準備を始める。

厨房から運んできた料理を並べ、お茶を淹れ、パトリシアと二人であっという間に総てを整えてしまった。

流石幼馴染、お互いの呼吸が分かっているとレクティファールは感心し、未だ眠ったままのフェリスを起こすべくその肩に手を掛けた。

「フェリス、夕食です」

「うぃー」

揺らしてみれば、返答は意味を成さない単語。

完全に熟睡しているのか、締まりの無い顔で笑うだけだ。

「いい夢見てらっしゃるのですかね」

「勝ち戦だからな」

「うちって、弱小班だからねぇ」

班単位で行われる兵棋演習では負け越し、個人成績でもフェリス以外は平均以下。最近はレクティファールの参加で少し持ち直したようだが、それでも班の総合成績は下から数えた方が早い。

そこに降って湧いたような勝利である。

建前上今回の決闘は騎士学校内の実戦装備を使用した個人戦闘技能及び後方支援部隊の能力考査訓練という名目になっていた為、最優秀班である第〇〇八班相手に弱小班の第〇八九班が大金星を上げたということになっている。

「明日には訓練報告書という大敵が待ってるがな」

「はう……」

但し、訓練である以上それぞれの職分に応じた報告書の提出は義務である。

ルフェイルとパトリシアは大いに頭を抱え、こういった分野に強いフェリスの早期復活を願うのであった。

◇　◇　◇

三人の話し声に眠りを解かれたフェリスは、そのまま夕食を摂って報告書の作成を始めた。

まず四人揃って訓練統裁官から課せられた班としての報告書を数種類書き上げ、次いでフェリスは指揮官としての戦闘詳報、ルフェイルは管制官と砲術士官としての、パトリシアは整備と需品を担当する主計士官としての報告書である。

当然レクティファールにも諸々の報告書の提出義務は課せられており、現役士官としての陸軍宛の報告書と、更に魔動式甲冑装着者としての詳報や魔法技能士官としての報告書も提出しなくてはならない。量だけで言えば、レクティファールが提出するべき書類は他の三人の報告書総てを足したものより多いことになる。

だが、最初に諸々の書類を書き上げたのはレクティファールだった。

書類慣れとでも言うべきか、最初に必要な情報を用意して総ての書類に共通する部分を作り上げて骨格とし、そこに各書類に必要な情報を肉付けしていくのである。

軍で使用される書式は一通り〈皇剣〉に記録されているし、何よりもレクティファールはそれらの報告書を受け取る立場にいた。だからどんな報告書が必要とされているか、自分なりに理解していたのだ。報告を受ける側がどのような意図でどのような情報を必要としているか、その情報にはどんな要素をどれだけ含ませるのが適当か、その要素はどのような結果を元に分析すれば良いのか――――形ばかり整っていても、欲しい報告が含まれていない報告書に意味はないのである。

「ふ、ふふ、ふふふ、毎日毎日書類山脈を踏破し続けた私を侮るなよ……」

「れ、レクト君が怖い」

パトリシアなど、レクティファールの発する黒々とした雰囲気に涙さえ流してルフェイルの背に隠れている。盾にされたルフェイルもレクティファールの余りの変わり様に腰が引けているし、フェリスも血色が良いとは御世辞にも言えない顔色だ。

以前レクティファールは、内乱の混乱によって文官の多数を失った皇城で仕事をしていた。圧政に加担することで自分の命が危ないと判断した文官も居れば、義侠心から民を苦しめる政府の方針には従えないという官僚も居た。彼らは揃って職を辞したり辺境に落ち延びたりしていたから、凱旋したばかりのレクティファールの元にあったのは現状を維持するので精一杯の官僚機構だけだった。

自分に従う貴族や皇王府から人を出して何とか復興を始めたが、やはりというか文官不足はレクティファール個人に大きな負担を掛けた。

その後、宰相となったハイデルから「旧支持貴族派の遺臣を文官・武官として登用する」という策を献じられたレクティファールは、その意見を容れて支持貴族遺臣の内、経験が豊富で現政府に対して協力的な者を国の文官や武官として受け入れた。

お陰で官僚不足という国家として最大級の危機を乗り越えたレクティファール。国内が落ち着いて野に下っていた高級官僚たちも復職し、現在の皇国官僚の質と量は、皇国史上最高の水準にあると言っていい程だ。官僚不足の時期に実力第一の気風が各部門に生まれ、それが今も継続していることも大きい。とはいえ、官僚機構というのは醸成されれば自然と固く堅牢になって行くものだから、いずれ今のような柔軟さは失われていくだろう。そうなったらまた、何らかの形で柔軟さを与える必要があるかもしれない。

ともあれ、レクティファールの書類決裁能力に関してはハイデルやルキーティも認めるところだ。最強兵器である〈皇剣〉を書類決裁の為に活用したと知ったら、当時の開発者たちは頭を抱えて苦悩するだろうが、使えるものは反逆者でも世界を亡ぼす兵器であっても使うのがレクティファールである。

「さて……と」

レクティファールは自分の書類を書き上げてフェリスに決裁印を貰うと、すぐにルフェイルとパトリシアの助けに回った。フェリスはまだ自分の書類に掛かり切りで、二人を手伝う余裕はない。

とりあえずルフェイルの書いた下書きを確認し、レクティファールは深々と溜息を吐いた。馬鹿にされたと判断したルフェイルの額に青筋が浮かぶ。

しかし、ルフェイルが何か文句を言う前に、レクティファールが平坦な声音でその名を呼んだ。

「ルフェイル」

ルフェイルの背筋に冷たいものが走る。

「書き直し」

「な、なんだと」

「〈蒼海の月〉はあくまでも個人専用の魔動式甲冑だから、それを基準に戦術を研究しても余り意味はないよ。こう言ってはなんだけど、個人で魔動式甲冑を用意するような人たちは余り前線に出ない。軍の主力魔動式甲冑はあくまでも個人用に調整された量産型なんだから」

「お」

「あと〈ヴォルスンガ〉級の魔道式重甲冑に対抗する為に同等の性能を持つ重甲冑を開発するというのも難しいと思います。でも、こっちの砲兵型魔動式甲冑で砲兵部隊の機動性を向上させるっていう提案は中々良いと私は思う。砲兵型とはいえ基本構造は通常の量産型と同じだから、費用対効果も良いし整備も全く新しい魔動式甲冑よりはやりやすい。――――ということで、こっちの対重甲冑用重甲冑は置いておくとして、砲兵型の量産型魔動式甲冑について色々

書いた方が良いかと」

「ふむ、それなら俺でも書けるな」

対魔動式重甲冑用の砲術も色々考えていたルフェイルだが、砲兵型魔動式甲冑というのは対重甲冑でも効果を発揮出来るかもしれない。レクティファールから添削された下書きを受け取ると、早速新たな下書きの作成に取り掛かった。

「次にパティ」

「ひゃ、ひゃい！」

怯えたように身体を縮こませるパトリシア。助けを求めてルフェイルを見ても、彼は下書きに夢中であった。

彼女は涙目になってレクティファールを見詰めるが、哀しいかな、最近の彼は女の武器に対する抵抗力が高くなりつつある。ルフェイルであれば十分通用するのだが、レクティファールの細君たちは自宅に立て篭もるくらいの行動派だ。パトリシアでは分が悪い。

ああ、凄くたくさん描き直しになるんだろうなぁと心の奥底で号泣し、パトリシアはレクティファールの言葉を待った。

「まず、この魔動式甲冑運用時に於ける兵站の注意点というのは凄く良いと思います。魔動式甲冑にも色々あって、特殊な機種だと製造元にしか在庫のない部品とかも使っていたりしますからね」

「え、うん」

「でも、こっちの魔動式甲冑の整備に関する報告書は書き直すべきだと思います」

「――どこが駄目かなぁ」

パトリシアは褒められたことで華やいでいた表情を曇らせた。

「まず、専門用語が多過ぎる。こう言っては何ですけど、整備兵出身者でもない人が理解出来ない言葉は意外と多いんです。意外なところでは数字の単位だって言われなくちゃ分からない。整備兵の間では当たり前の工具だって、一般世間では使われない、だから普通の他の兵科出身の指揮官は名前さえ知らないなんてこともあります」

「うん、そういえばわたしも昔は全然知らなかったなぁ」

教官にネコ――猫車、荷車のこと――持ってこいと言われて野良猫を探し出して持っていったこともあるパトリシア。教官は間違い

だけど間違いじゃないので怒るに怒れず、微妙な空気になったらしい。

「整備兵に対する教育制度の充実だとか、各製造元への出向だとかは現場ならではの視点で重宝されるでしょうし、細かい説明は訊かれてから答えるということで、大雑把に魔動式甲冑を運用する部隊と他の部隊の兵站の違いを強調しましょう」

「うん、分かった」

頷き、ルフェイルの隣の席に戻るパトリシア。

既に唸り始めたルフェイルにお茶を淹れると、彼女も筆を取って新たな戦いに赴いた。

「で、フェリス」

「え、ええ？　ボク？」

いつの間にか作業を中断してレクティファールたちの会話に聞き耳を立てていたフェリスが、自分を指差し、上擦った声でレクティファールに問う。

「この訓練がどんな評価を受けるのか、フェリスの班長としての能力も大きく関わってくることでしょう」

「だ、だよねぇ」

冷や汗を垂らし、フェリスは自分の書いた書類を再確認した。大丈夫、間違いっていないと何度も頷いた。

でも、不安は払拭出来ない。

「あのさ、レクト」

彼女は班長としての矜持を冥界の彼方まで放り投げ、自分の書いた報告書の下書きを指し示した。

「ちょっと意見が欲しいんだけど……」

「――――」

レクティファールは無言。

上司として威厳のある種類の人物ではないが、流石にそれはどうかと思う。

「ダメ？」

小首を傾げ、潤んだ目で見上げるフェリス。

その仕草はマリアにでも教わったのですか、と心の中で大いに叫んだレクティファール。動揺する内心を隠す為にふいと顔を背け、自分の仕草に絶対の自信を持っていたフェリスに衝撃を与えた。

「な、お、お義母様直伝の泣き落としが通用しない……！？　城の番兵さんたちはすぐに攻略出来たのに！」

（やっぱりか、やっぱりですか）

男の本能を擽る術は貴族子女の必須技能である。大なり小なり、何処の貴族や名家でも教えていることだ。

それこそ幼少の頃から徹底的に、男に媚びる為ではなく操る為に。

（怖いなぁもう）

心が弱ければ他者不信になってしまうところだ。

レクティファールはそれこそ毎日のようにこんな仕草を見ていたから慣れているが、世間の男性諸氏はそれこそ入れ食いだろう。レクティファールは妃候補の誰かを連れて街に繰り出すたび、彼女たちがその容姿を最大限活用する様子を見せ付けられている。

恐らく男が、その地位や名声を武器にして異性を口説くことと同じなのだろう。

「あう……どうしよう……このまま出す？　でも折角の大金星だし、ここで蹲くのも色んな人に申し訳ないし……」

レクティファールが助けてくれないと判断したフェリスは、それこそ隅々まで報告書を読み直している。時々自分で添削して書き直しているようだが、レクティファールからするとまだまだ甘い。

（ああ、そこはそうじゃないんですって、って、そっちをそうしたら……！）

上司を助けるのは部下の仕事であるが、上司の仕事を奪うことは部下の役割ではない。世の中では副官や参謀が指揮官の権力を笠に着て部隊を混乱に陥れるなんてことは珍しくないのだから、レクティファールがフェリスを助けることに躊躇するのも仕方のないことなのだが。

「あ、こっちの方が分り易いかな」

（ああ、それでは相手に違う意味と取られてしまう可能性が）

レクティファールは助けたくとも助けられないという二律背反に苦しみ、書類を書くフェリスの傍らに立ったまま硬直していた。

フェリスはフェリスでレクティファールが自分を監視していると思い込んでいたし、何とも心の通じ合わない二人であった。

◇　◇　◇

一応、という形ではあるが、第〇八九班の提出するべき書類は一晩掛けて総て完成した。

一番手間取ったのはこの類の仕事を不得手とするルフェイルで、最後は意識が四界のいずれかに飛び去ってしまいそうになっていた。意味不明の単語を連呼したり、おもむろにパトリシアの胸を鷲掴んだり、フェリスの胸を見て鼻を鳴らしたりと人格崩壊の一歩手前まで追い詰められていたようだ。

パトリシアはしょうがないなぁと一言で許したようだが、フェリスに至っては頭から湯気を出して暴れだしそうになったところをレクティファールに取り押さえられた。

耳に息を吹きかければ動きは止められるというパトリシアの助言通りにフェリスの腰を砕き、その場の平和を守ったレクティファールであるが、同時に何かを失ったような気がしたのは錯覚ではないだろう。

腰を砕かれたフェリスは真っ赤な顔のままレクティファールに抱き締められて完全に動きを止め、パトリシアは奇行を繰り返すルフェイルを何とか復帰させようと様々な試みを繰り返した。結果を言えば、彼女がルフェイルの部屋から秘蔵の艶本を持ち出した時点でルフェイルの意識は一気に回復。そのまま艶本を開こうとするパトリシアを押しとどめながら一気に書類を書き上げた。丁度、日の出の頃であった。

レクティファールはルフェイルの健闘ぶりに思わず涙し、ルフェイルもまた、自分の健闘を心の底から讃えてくれるレクティファールに感謝した。

何とも下らないことで友情を深めた二人だが、その頃にはもう、二人のお嬢様はソファで丸くなっていたのである。

「では、書類は私が班長代理として提出しておきます」

「うむ、頼んだ。あと、今晩は祝勝会だ。寝坊するなよ」

当たり前のようにパトリシアを抱え上げたルフェイルとこれまた当たり前のようにフェリスを抱えたレクティファールは、二階の廊下で片や隈の浮かんだ顔で、片やいつもと変わらぬちょっと疲れた

顔で別れた。

パトリシアはこのままルフェイルの部屋で寝かせるということだったから、とりあえず心配はないだろう。何故パトリシアの部屋に戻さないのかという疑問もあったが、単純にルフェイルの服を掴んで離さないパトリシアの姿が答えのように思えた。

とりあえず幼馴染に大しては非常に紳士的なルフェイルを信じ、レクティファールはフェリスを彼女の部屋まで連れて行ったのだが――――

「鍵が、閉まってる？」

押しても引いても動かない扉。

把手は固くレクティファアールを拒絶し、フェリスに鍵は何処かと聞いても返って来るのは寝言ばかり。

「最近、決闘の準備で疲れてたんでしょうねぇ」

そこに報告書の提出期限である。

翌日までに提出というのは、些か性急過ぎるのではないかと思うレクティファールであったが、通常の訓練であれば報告書を書く訓練も兼ねて翌日提出ということもある。分り易い報告書を素早く作成するのは、将校に不可欠な技能ということなのだと彼は勝手に解

釈していた。

「では、どうしたものでしょう」

まさかフェリスの身包み剥いで鍵を探す訳にもいくまい。

レクティファールは世間一般の常識と現状を勘案し、とりあえず自分の部屋の寝台にフェリスを運ぶことにした。

片手でフェリスを抱き留めて器用に自室に入るレクティファール。

フェリスの体重は同年代の女性の平均体重よりも軽いから、レクティファールの負担も少ないものだった。無論、本人の前で口に出すつもりはないが。

「ふむ、これでよし」

寝台にフェリスを寝かせ、自分は制服に着替える。レクティファールは姿見の前で自分の姿を確認すると、目深に制帽を被って顔を隠した。

こんな早朝から出歩く者は少ないだろうが、昨日の決闘騒ぎで変に顔が売れてしまったレクティファール。フェリスからあまり目立たないように行動して欲しいと頼まれていた。

「まずは教官のところからですね。起きてると良いのですが」

第〇八九班は数日間の休暇を貰っている。

だが、担当教官は休暇に入っていないから、学校に行けば会える筈だ。

「――――しかし何故でしょう」

それなりに働いた筈の自分が学校まで行って書類を提出し、その間仲間たちは寝こけているという現実に少しだけ悲しくなったレクティファール。

でも、泣かなかった。傍らで穏やかな表情を浮かべて眠るフェリスの顔を見ると、もう少し苦労してもいいかもしれないとも思った。

第二一話「変わり始める関係×変わり始める世界」

皇国歴二〇〇九年の白の季節。この時期の皇国は旧体制からの脱却という点で非常に活発な動きを見せていた。

その動きのもっとも大きなもの――――〈五カ年計画〉と公式に称されるその計画は、皇国を新たな形に作り替えるという点でこれまでどの皇王も行っていなかった手法を数多く取り入れていた。

第一に外交。

皇国外交の基本姿勢はこの時期、これまでの第八代皇王エーネンファウベの『融和外交』を見直し、『浸透外交』と呼ぶべきものへと密かに、緩やかに変化した。

融和外交が大陸やその外、他大陸へと根を張る為のものであったとするならば、浸透外交は大陸やそれ以遠の地域へと枝葉を広げるためのものであった。武力以外の『チカラ』、経済力や文化を他地域へと浸透させ、緩やかに、穏やかに、しかし確実に世界へと広がっていく。他国に比して圧倒的な平均寿命を持つ皇国だからこそ選べた外交の形だ。

樹木は自分から人々に関わろうとはしない。しかしその生命力は凄まじく、方法さえ間違わなければ枝一つになってもまだまだ生き続けることが出来る。そして生き続けるうちに人々にこう思わせるのだ、「彼らと上手く付き合えば、甘い果実が手に入る」と。

決して積極的に干渉することなく、しかし自国の国益に沿った形に相手を誘導するその手法は、成否が外交官の手腕に大きく左右される。

以降、皇国外交が後世に〈黄金時代〉と呼ばれる時期に入るのは、その外交手法が名立たる皇国外交官たちの華やかな舞い踊りによって形作られるからなのだろうか。

第二に経済。

摂政主導の新たな都市建設計画の一つに、巨大な港湾都市を建設するというものがあった。これは残り二つの都市建設計画と違い、他国との関わり、特に貿易額や税収を引き上げるための方策だ。その港湾都市ではあらゆる国家のあらゆる企業が税に関する優遇措置を得られ、また雇用の自由を保証される。つまりどの国家のどの商会であっても自国より安い税で拠点を構えることが出来、巨大な港湾を併設しているが故に商品を流通させることもまた容易い。

軍港と接していることで危険が多いのではないかと言う商人も居たが、逆に言えば衛視詰所の隣で商売をするようなものだ。衛視詰所を狙ってくる暴漢は防ぐことは出来ないが、商店を狙ってくる強盗は防ぐことが出来る。そしてその衛視詰所が要塞じみた防衛機能を持っているというなら、詰所を狙う暴漢も大いに減る。

さらに都市に併設される軍港が近衛海軍の拠点となることが明かされると、都市の安全性に対して懐疑的であった商人たちも前向きな態度を取るようになった。それは職業柄大陸の情勢に詳しい商人たちが、皇国に拠点を構えることで大きな利を得られると判断したという面もある。皇国はこの時期、人材や物資そして資金が多く流

れ込み、まるでこれまでの鬱憤をはらすかのように積極的になっている。「今儲けるなら〈アルトデステニア〉に行くべきだ」というのは、アルストロメリア穀物商人組合の寄り合いで一人の商人が開口一番叫んだ言葉である。

皇国経済を活性化させる切っ掛けの一つと考えられていたこの都市は、政界財界の期待を証明するかのように三都市の中で最も早く建設が開始された。帝国に対する国防の要である〈ウィルマグス〉の近代要塞化工事よりも前に測量と縄張りが始まったことを考えれば、政府や経済界がこの都市にどれだけの期待を抱いていたか容易に察することが出来るだろう。しかし逆に考えてみれば、これくらい大きな切っ掛けを得られなければ、ただ皇王家の資産を投入しても皇国経済は活性化しないと判断した者が相当数居たということになる。

ただ、都市建設に先駆けて皇王家が大規模な投資を行ったことは、国内外の投資家に一定の安心感を与えたのは確かだ。損をすると分かっている計画に金を注ぎ込む者は居ない。

計画を立案したレクティファールは知らなかったが、〈アルトデステニア〉皇王家には、各国の投資家が畏れ敬う一人の妖精が居た。ときに『幸運の妖精』『皇王家の祝福』『女神を超えた妖精女王（タイターニア）』とも称される彼女の神憑り的な先見性は、人々に『未来視』と呼ばれ、その実績は投資家としての〈アルトデステニア〉皇王家に対する信頼へと繋がっているのである。

彼女が認めているなら投資して損はない――――ルキーティがこの都市計画に全面的に協力しているという情報を商人たちから得た投資家たちはそれこそレクティファールが驚き、そして自分とルキーティの信用の差に落ち込むほど迅速に資金の投下を行い。結果、

都市計画は予定よりも前倒しして実行されることになる。投資家たちの動き、ひいては皇国に対する各国の注目の度合いを見た摂政レクティファールと皇府ルキーティ、そしてハイデルを始めとした行政府が、「この時期を逃す手はない」という一致した考えを抱いたが故の、国家事業としては異例と言っていい動きの早さだった。

人々が注目する中、皇国南岸の天領にあった〈エンピリィテ〉という名の小さな廃村が建設予定地として選ばれた。山に囲まれていて深度が大きく、干満差が僅かで、海底が軟泥であるなど自然的条件には恵まれていたこの地だが、主要街道から遠く、囲む山々が峻険で街道を通すにも時間と手間がかかり過ぎるという理由があり、これまでは一切開発が行われていなかった。

魔動車や馬車で建設資材を運び込む為の舗装された道さえ無く、村に続く唯一の道さえ生活道路とは思えないほど細く険しいため、皇王府が〈エンピリィテ〉開発を正式に発表するまで、他の候補地を抑えてこの地が選ばれると思っていた者はほとんど居なかった。

更に言うなら、皇王府が近衛海軍の揚陸部隊を用いて資材陸揚げ用の岸壁を整備すると予想した者も、軍や政府関係者以外では皆無に近かったのである。

陸路では手間ばかり掛かっていつになっても都市建設が進まない。さりとて空路では大した荷物を運ぶことは出来ない。ならば近衛海軍の揚陸部隊を使おうと言い出したのは、軍務院に務める下級官吏の一人だった。言った本人は冗談のつもりだったのだろう。だが、休憩中の彼の言葉はたまたま上司の耳に入り、その上司が偶然近衛陸軍の将軍と幼馴染で、その将軍の娘婿は近衛海軍の参謀本部に属する参謀大尉だった。何処から話が大きくなったのかは定かではないが、若い官吏の冗談からひと月後、近衛海軍は〈エンピリィテ〉

にて上陸作戦を決行した。

このとき作戦に参加した近衛海軍揚陸部隊は、輸送用飛龍を搭載した〈オーギュスト〉級強襲揚陸艦二隻を中心とした近衛海軍第三一戦隊と建設重機を満載した〈メーヴェ〉級車輌揚陸艦二隻を中心とした第三二戦隊、そして艦内に揚陸艇を抱え込んだ〈シュヴァーン〉級船渠型揚陸艦二隻を中核とした第三三戦隊の三つだった。皇王府はこの内第三一、三三戦隊を直接〈エンピリィテ〉に展開させて仮設飛行場を建設し、第三二戦隊の二隻を付近の砂浜に乗り上げさせ、仮設岸壁を建設するための大型建設重機を輸送したのである。

この『揚陸作戦』は近衛海軍が摂政レクティファールの命令を受けて初めて実行した大規模作戦であり、そのような意味では記念すべきものだった。実際、この作戦に従事した将兵には兵将校の区別なく皇王家から勲章が授与されたが、彼らは自分たちが基礎を築いた〈エンピリィテ〉が、後世の皇国史に名を残すほどの大港湾都市になるとは予想していなかっただろう。

第三に軍事。

陸海空近衛の四軍編成となった〈アルトデステニア〉軍は、内乱を切っ掛けとして様々な変化を経験した。

陸軍では北部国境が〈ウィルマグス〉より北に押し上げられたことで新たに『北方国境守備軍』を新設。軍司令官に先の帝国戦で功績のあった陸軍中将ガラハ・ド・ラグダナを補し、平時有事を問わずその軍を指揮下に置く三郡の領主には皇国の宿将アルブレヒト・フォン・ヴィーヴルを据えた。〈新生アルマダ〉の動きを掣肘するため摂政自らが陣頭指揮を取って迅速に行われたこの人事の影に隠れるようにして、陸軍の再編成と組織改革が粛々と進められること

になる。

これまでは単なる師団内単位でしか無かった旅団を、幾つかの兵科の混成とすることで独立した作戦能力を持つ形に再編し、ここにある程度の機動力を付与した独立機動旅団が新たに複数新設された。この内の一つは設立後に大陸西域に派遣され、この再編成の是非を問う試金石となった。

陸軍と同じように部隊そのものの機動性の向上を図った海軍は、従来の戦艦主体の打撃戦隊、巡洋戦艦・大型巡洋艦・重巡洋艦主体の高速戦隊、軽巡洋艦・駆逐艦主体の水雷戦隊、揚陸艦主体の揚陸戦隊に続き、戦龍母艦を主力に据えた航空戦隊が海軍基本戦隊の一つとして加えた。以降の艦隊編成は基本的に戦隊単位で行われ、所属艦隊が変更になる場合は戦隊ごと異動する形をとる。

摂政レクティファールが皇都奪還戦に於いて大規模空中打撃部隊を運用したことにより、それらの部隊を運用出来る空軍の地位は大きく向上した。元々国軍の総兵力が敵国である〈新生アルマダ〉の十分の一に満たない皇国にとって、唯一帝国側に優っている点がこの航空戦力だった。

多数の龍種を有した皇国空軍は、アルマダ大陸は元より世界七大陸の何れの国家と較べても遜色ない能力を持っており、ある意味では皇国そのものを象徴する国家の主柱だ。龍種が居なければ皇国はそもそも成立し得なかったであろうし、その後の国家の発展でも龍種を筆頭とする『空を往く者共』の存在が大きな役割を果たしたと言って間違いない。そして今回の大戦果、政府・軍事関係者は当然として、国民さえも空軍の増強こそが皇国の軍事再編の要になると認識していた。

それらの事情から、空軍は近衛を除いた三軍の中で最も多くの予算を充てられた。しかし主力を担う龍種が少数種で、飛竜もまた育成に手間と時間が必要となることから簡単に兵力を増やすことは不可能だった。それならば、と一頭一頭の作戦能力を向上させるべく制式装備の充実が軍再編の第一段階として実行される。

装具、武装、搭載兵器、搭載魔道具の更新が行われ、画一化された規格を適用して調達費用を抑え、その分の予算は新たな装備開発の予算に回された。装備の性能向上だけでなく、部隊そのものの練度向上を目指して複数部隊合同の演習が数多く企画、実行されることになる。

それら三軍の再編・改良を横目に見ながら、皇王の新たな剣として生まれ変わった近衛軍はそれこそ一から軍を作り直した。

陸海空の三部隊編成となり、近衛軍一つであらゆる条件下の作戦を行える能力を得た。それも非常に素早く、強力に実行出来るだけの実力を与えられたのである。

新たに生まれ変わった近衛軍は、陸軍より精強な歩兵部隊、魔導部隊、騎兵部隊を有し、海軍よりも素早く行動出来る艦隊を持ち、空軍部隊を凌駕する質の航空部隊を擁する。それは皇王の命令一つで最前線に飛び込むことをその存在意義としているからであり、それは同時に兵士一人一人が勇敢でなくてはならず、将校一人一人が有能でなくてはならないということでもあった。だが、皇室から潤沢な予算を与えられたことで装備類の調達は非常に円滑に執り行なわれたが、部隊の増員に関しては解体された旧貴族軍を中心にするしかなかった。正規軍もこの時期、その質的向上を至上命題としていたから、幾ら皇王の近衛軍であってもそう簡単に優秀な人材を送り出そうとはしない。命令されれば従ったであろうが、それでは結

局正規軍の質を落とすだけだ。だから、旧貴族諸侯軍を中心にするしかなかった。

陸軍が旧黒龍公軍を、海軍が旧蒼龍公軍を、空軍が旧紅龍公軍と白龍公軍を基幹として作られたことは、国内外の少し軍事に明るい者であればすぐに分かった。そこに正規軍からの志願者、四公爵以外の諸侯軍からの選抜者、新たに教育を終えた若者が加わってようやく新生近衛軍はその形を保つことが出来るようになった。

第四に政治。

内乱によって多くの貴族が取り潰された結果、皇国政府は国民の圧倒的支持を受ける摂政を中心として纏まった。正確には四公爵を従えた摂政にその他の貴族が従うことを選んだということなのだが、これは各貴族が自分たちの皇国貴族としての名誉を守る為の手段として摂政を選んだ結果でしかない。貴族の間では摂政のその軍事的才能と国民の支持、そして明確な実績と実力を持つ四公爵を恐れる風潮はあったものの、摂政を若造と侮る者が居なかった訳ではないのだ。

確かに摂政レクティファールは若者らしい迅速な行動で国の危機を救った。しかし、統治者としての能力に関して言えば、まだまだ疑問の余地は多い。老練な宰相と皇府が傍にいることである程度の安心感はあるものの、『若い』というのは経験が豊富な熟練者からすれば危うく見え、好ましいとは言えない。他の誰かであれば、若いという理由で間違いを犯すことは許される余地がある。ただ、既に摂政として国事と国政を担うレクティファールに間違いは許されず、その責任を肩代わり出来る者もまた存在しなかった。

貴族の摂政レクティファールに対する不安というのはそれだけで

はない。

彼は既に多くの影響を他国に与えた。それは敵対国家だけではなく、友好国、中立国にも及ぶ。彼が積極的に軍を運用する君主だと知られたことで、その存在を警戒する国家、利用しようと企む国家も現れた。前者は〈アルストロメリア民主連邦〉を始めとした皇国西方の国家群であり、後者はイズモ神州連合、南洋諸島国家群だ。

先代皇王の時代、皇国はその国力に見合うだけの軍事力を保持しながらもそれを積極的に誇示しようとはしなかった。対話を重視し、皇国の歴史上最も戦乱の少ない時代だった。時間を掛けて相手と対話し、相互理解を深め、ときに受け入れ、ときに拒絶し、しかし最後は軍事力を行使せずに交渉を妥結させた。中立国として紛争終結の仲立ちを行ったこともある。大規模な自然災害で大きな被害を受けた地域にはいの一番に支援を表明し、部隊を送り込んだこともある。

その成果は、他国の皇国に対する一定の信頼。皇国国民に対する他国民の親愛感情だった。

「皇国と戦えば損をする」と周辺国に思わせることで自国の安全を確保した先代皇王の手腕は間違い無く評価に価する。彼が居たから、〈アルトデステニア〉は大国であると同時に豊国と呼んで良い国になった。街に乞食はおらず、疫病が蔓延することもない。たとえば作物が不作になっても国がその穴埋めをするだけの余裕があったから、口減らし、身売りをする必要もない。

穏やかな時代であった。

国境での小競り合いはあったものの、国家の命運を懸けて戦うよ

うな大戦は殆ど起きなかった。

そんな時代を知る貴族たちの目には、レクティファールが対帝国戦を見据えて軍備を拡張していることはどう見えたのだろう。

危険な君主であると憤ったのか、時代が変わってしまったと嘆いたのか、どちらであっても貴族の中にレクティファールに対する不安と不満は芽吹いた筈だ。いずれ、それを利用しようとする者も現れるだろう。

今はまだ勢いの中にある摂政レクティファールの統治は、そう遠くない未来にその勢いを失い、真価を問われることになる。

外交、経済、軍事、政治、いずれも国の柱であってどれかを失うことは許されない。

若い熱狂の中で明るく歩みだしたように見える皇国であるが、実際には傷も癒えきらないまま進まねば滅びると、仕方がなく歩き出しただけなのだった。

そしてその国の中心に立つ摂政は、今――――

◇　◇　◇

「一番レクト・ハルベルン。景気付けに呑みます、とりあえず一樽」

「いやっほおおおおおう！！」

「きゃあああああああッ！」

男どもの歓声と女どもの嬌声、場に充ち満ちた熱狂の中、小振りの酒樽に入った果実酒を空けたレクティファール。

背後で自分を心配そうに見守るフェリスに笑い掛け、拳を天に突き上げた。

再び巻き起こる歓声。

それに手を振って答えたレクティファールは、横合いからフェリスが差し出した硝子杯を受け取ってその場を見渡した。

「さあ、皆さん、杯は持ちましたか」

肯定の叫びは、第〇八九班の宿舎で行われた祝勝会に参加している者たち。

第〇八九班付きとなっている他校学生や班員の知人友人、凡そ六〇名である。

「では僭越ながら、乾杯の音頭を取らせていただきます」

三度目の絶叫。乾杯前なのに既に半数以上が酔っ払いである。

しかしそれを気にする者も咎める者も居ない。普段は生真面目なフェリスでさえ、酔っ払いと化した級友に絡まれて苦笑するだけだ。

「では、ちょっと大変だったけど結果的には勝ったからいいよね、ついでに修理費も請求されなかったし――ってことで、乾杯ッ！」

「かんぱーいッ！！」

酒を飲む静寂が続き、そして、

「ああ！？、一気飲みしたニックが倒れた――――ッ！」

「衛生兵！　えーせーへーい！」

「担架持ってこい！」

会場の一角でそんな騒ぎがあったものの、祝勝会は概ね最高の盛

り上がりの中で始まった。

「なんか騒がしいねぇ」

「どっかの馬鹿が馬鹿をやった、それだけだろう。――――ん」

「はいはい」

ぐいと差し出された硝子杯に酒を注ぎ、パトリシアは自分の用意した料理が参加者たちの好評を得ていることに笑みを浮かべた。

誰も彼もが笑顔で料理を口に運び、隣近所と笑い合っている。

「楽しいねぇ、ルフェイルちゃん」

「――――お前はあそこで飲むなよ」

「分かってるよぅ、ルフェイルちゃんは心配性だねぇ」

他の男に酒の入った幼馴染の艶姿を見せたくないという彼の本心など、パトリシアは絶対分かっていない。飲んだあとの介抱が大変だからという彼の言い訳を信じきっている。

「でもいいの？　ルフェイルちゃんだったらあっちに行ってレクト君と飲みたいでしょう」

二人は今、庭に設営された祝勝会の会場を見下ろす二階の広縁に居る。

板敷の床に敷物を敷いて、その上に酒と料理。

「無理だろう」

言って、眼下の光景を顎で指すルフェイル。

パトリシアが覗き込んでみれば、レクティファールは多数の他校学生女子に囲まれていた。酔っ払って胸元を開けた女子や、着崩れた制服のままの女子、あと少し、あと少しで見えるんだという男どもの期待を一身に浴びる半裸の女子などに揉みくちゃにされ、それはそれは大変なことになっている。女子の一部は意図的にそのような格好をしてレクティファールの気を引こうとしている者も居るようで、ついでにフェリスの形相も凄いことになっている。

「俺でもあれは引く」

「――――はは、レクト君は養子だけど、順当にいけば騎士侯は確

実って皆言ってるからねぇ」

例え騎士侯となれなくても、『レクト・ハルベルン』が現役仕官として騎士学校に編入されるほど将来を嘱望されていることは確実。ならば今の内に親しい関係になっておこうという打算も理解出来ない訳ではない。

それならばルフェイルも大して立場は変わらないのだが、何故レクティファールばかりに注目が集まるのか。ルフェイルが平民だから、というだけではないだろう。

「四龍公から祝いの品と直筆の書状が届けば、そりゃあ、皆期待するよ」

そう、この祝勝会の直前。四公爵の使者が宿舎を訪れて多数の祝いの品を置いていった。書状はレクティファールに直接手渡されて内容は判らないが、その花押は直筆のものであったと受け取った本人が証言した。

既に宿舎に集まっていた者たちは既に酒が入っていたこともあって大盛り上がり、一部の女子は慌てて着替えに走り、粧し込んだ姿で戻ってきた。

「でも、四公から手紙を貰った本人はあまり嬉しそうじゃなかったねぇ」

「――――説教がどうとか言ってたが、実家から何か言われたのかもな」

「大変だねぇ」

「そうだな、――――ん」

「はーい」

硝子杯を酒で満たし、パトリシアは嬉しそうに笑う。

何故そんなにも楽しそうなのかとルフェイルは疑問に思ったが、言葉に出すだけの意気地は無かった。

「飯」

「うん、どれがいい？」

「お前の自信のあるヤツ」

「じゃあ、この豚の煮物だねぇ」

二人の故郷では、ナイフやフォークよりも箸が多く使われていた。

遠い昔にイズモからの移民を受け入れた土地で、その風習が残っているのだと幼い二人は故郷の老人たちに教えられた。家庭でも普通に箸が使われ、コメと呼ばれるイズモの主食がいつも食卓に並べられていた。

「おいしいよー」

パトリシアは箸で煮崩れそうな豚肉を摘み、ルフェイルの眼前に差し出す。

ルフェイルは躊躇う様子も見せずに、それを口に含んだ。

「――――うむ」

旨い。言葉にならない視線だけのルフェイルの言葉だが、パトリシアにはきちんと伝わっていた。

「そう、良かったぁ」

ほっと胸を撫で下ろし、パトリシアは次の料理に箸を入れる。

「はい、どぉぞ」

笑顔で差し出されたほうれん草の胡麻和えを、ルフェイルは無言で口に入れた。

胡麻の甘さが、丁度ルフェイルの味覚に合致して非常に旨い。パトリシアの料理は一つの例外もなくルフェイルの好みに合っていたが、これもまた美味である。

「次」

餌付けされているような錯覚を覚えながらも、ルフェイルはパトリシアに次の料理を求める。求めるたびに嬉しそうに笑う幼馴染のその表情が一番の肴であるというように、彼は酒と料理を楽しんだ。

友人の勝利を祝う気持ちがない訳ではない。

しかし今は、この幼馴染との時間を優先したいと思う。

（悪いな、レクト）

分かっているのだ。自分が何故パトリシアと共に居たいと思っているのか。

あの決闘で友人が見せたあの姿――――自分には何の力もないとただ悲しそうに告白した一人の女に、決してそんなことはないと全身全霊で示したあの姿が、瞼の裏に焼き付いて消えない。消えないまま、ならばお前はどうなのかと問い掛けてくる。

同じことが出来るのか、同じことが出来ないまでも、同じだけの覚悟で戦えるのかと。

（戦う、か。そういえば俺は、戦いを生業とする軍人だったんだな）

戦うか否かを選べる仕事ではない。

どんな形でも、戦うことが彼の仕事だ。

「――――パティ」

祝いの席だ。多少の無茶は許してもらおう。

「ん？　今度はどれ食べたいの？」

訊ねてくるパトリシアに、頭を振る。

「いや、食い物じゃない」

「あ、違うお酒持ってこようか？」

言って立ち上がろうとしたパトリシアの手を、ルフェイルはしっかりと掴んだ。

その刹那、ああ、自分はきっと戦えると何故か確信出来た。

どうということもない、友人の気持ちが分かっただけである。

「お前が居ればそれでいい」

不特定多数の者のために戦うのが英雄ならば、たった一人の女のために戦うのが男――――それはルフェイルが子どもの頃に読んだ『英雄皇伝説』の一節であり、皇国の男子ならば一度はそんな生き方に憧れたものだ。英雄になるならば前だけを見詰め続ければ良い、だが、真の男になるならば前だけではなく背後も顧みる強さが必要になる。

女は男が思うよりも遥かに強い。

そんな存在を護りたいなら、それこそ英雄になるよりも辛く険しい道を歩まなくてはならないだろう。

初代皇王は多くの妃を迎えたが、ついぞ彼女たちを守り切るだけ

の力を得られなかったという。彼は最後まで守り守られる関係に終わり、それだけをほんの少し後悔して逝った。

『英雄皇伝説』は彼の人生を物語として編纂したもので、どこまでが真実なのかは定かではない。それでもルフェイルは英雄皇の生き方を真実だと思い、彼を超えたいと願った。

「パティ」

「ルフェイルちゃん……」

引き寄せれば、思ったよりも簡単にその身体は手に入った。

抱き締めてみれば、これまで抱いたどんな女よりも心が昂った。

「パティ」

名前を呼ぶ声が震えた。

酔っている。間違い無く自分は酔っている。

まるで初めて女に触れた小僧のように動悸が乱れ、庭の喧騒が遠ざかっていくように感じた。

「俺は……」

ルフェイルは自分の心の赴くまま、今までずっと魂の奥底で育ててきた想いを舌の上に乗せた。

あとは発するだけ、音にするだけ。

「お前が――――」

されど、発することは出来なかった。

「あ」

自分の腕の中でじっとこちらを見上げていたパトリシアが、何かに気付いたようにルフェイルの腕を振り払って立ち上がったのだ。

居なくなったパトリシアを求め、ルフェイルの手のひらが何かを掴もうと二度三度開閉する。

「――――」

虚しい、心底虚しかった。

今まで自分が女遊びに耽ってきた報いだというのなら、これは余りにも重い罰ではないだろうか。

二十有余年育て上げた一世一代の告白が、こんな馬鹿みたいな結果に終わるなど。

（因果応報……か、今度からもう少し控えるとするか）

それでも女遊びを止めるつもりはない。

ルフェイルという男は、その一点に於いては真の男であった。

「誰か来たみたいだよぉ」

「誰か……だと」

気を取り直して眼下を覗いてみれば、先程まで大喧騒に包まれていた祝勝会の会場が静まり返っている。

参加者たちは揃って宿舎の門の方を見詰め、そこに居る人物の一挙手一投足を注意深く観察しているようだ。

「ゲオルグ」

ルフェイルは、彼らの注目の中に居る青年の名を呟いた。

自らに集まる視線など露ほども感じていないように、青年は会場内に歩を進めた。

◇　◇　◇

酒の勢いとは恐ろしいものだ――――レクティファールは周囲から発せられる酒と女の甘ったるい匂いに苦しみながら、そう心の中に言葉を滲ませた。

野営地で使用される範囲指定型魔導暖房器があるお陰で、たとえ全裸になっても風邪をひくことはないと思われるが、レクティファールの周囲で姦しく酒を飲む女性たちの姿は非常に目に来る。さらに匂いは鼻にも来る。

（ここはどこの世界の後宮かと言わんばかりの光景な訳ですが、何故に皆さんそんなに積極的……！？）

腕や背中にふよんふよんとした何かを押し付けるなら可愛いもの、敷物の上に胡座をかいている自分の太ももを撫でるのもまあ、我慢出来ない訳ではないので良しとしよう。だがしかし、

（私にしか見えない角度でシャツを肌蹴るその技術！　さり気無く耳元で漏らす艶っぽい喘ぎ！　女性同士で絡み合うことで擬似的な睦み合いまで見せるとは――――最近の皇国女性は皆怖いですよ！　こんな所を義姉さん辺りに見られた日には――――迅速に〈皇剣〉のお世話になることに！）

人は異性の、自分にはない異性らしい姿を見ることは基本的に好きである。これは生物的に至極真っ当なことであり、恥じるようなことではない。

それでも、度が過ぎれば逆に引くものだ。

決して、レクティファールの背後で本日三つ目の硝子杯を握り潰した麗しの班長様が原因ではない。と、レクティファールは固く信じている。

「ねぇねぇレクトくぅん、ちょっと酔っちゃったからお部屋貸してくれない？」

「ッ！？」

さわりと背中を撫でられ、レクティファールは鳥肌全開。今彼の身体に絡んでいる女性は、あろうことか彼の指導教官であった。

昔の気分に戻りたいという理由で騎士学校時代の制服を着ている

彼女であるが、騎士学校修了からどれだけ育ったのかと周囲の男どもが揃って突っ込みを入れたくなるほど胸の辺りが危険である。釦が飛ぶとかの問題ではない。既に釦など止められない。

デルスマイヤーはレクティファールの太ももの上にその形の良い尻を乗せ、上半身を目の前の教え子に預ける。レクティファールの理性はとりあえず持ち堪えたが、ちょっとぐらりと来たのは間違いない。

ちなみにこの時点で、周囲の男どもは半数以上が微妙に前傾姿勢である。

「きょ、教官、ちょっと……」

「なあに？　レクト君が連れていってくれるのかしら？」

「いや、あの――――」

レクティファールの頬を撫で、唇を撫で、デルスマイヤーは嫣然と微笑む。

肉厚の唇は酒に濡れ、瞳は酒に潤んでいた。

「じゃ、運ぶだけ――――」

「教官ッ！！」

がちゃんと硝子杯を置き、レクティファールの傍らで小さな龍姫が吼えた。

小さいと言っても身長で見ればオリガよりも大きいのだが、オリガはその年齢によって妙な迫力を得ている。ただの外見ならともかく、龍姫として小さいと表現するには無理があった。そのオリガは、レクティファールの背後、少し離れた場所で大皿に乗った料理を片付けている最中である。一度レクティファールが助けを求めたが、一瞥だけで黙殺された。

「ふふふ、どうしたのレヴィアタン候補生、お顔が真っ赤っか」

「きょ、教官の不埒な姿を見て憤っているだけです！　学生の規範となるべき教官がそんな……そんな……」

「あら、あなたもやってみる？」

「ひぐッ！？　――――いえいえいえ、そんなふしだらなまねはできませんしそれはへいたちのてほんとならなくてはならないしょうこうのすがたではないと」

機関銃の如き勢いで放たれる言葉はしかし、デルスマイヤーの余りにも年季の違い過ぎる女としての笑顔に阻まれて有効打となり得ない。フェリスが間違っていることを言っている訳ではないのだが、世の中には道理を凌駕する無茶も山のように存在しているのだ。

「可愛いわぁ、こんな騎士様に勝利を捧げて貰えるんですもの、可愛くて当然よねぇ」

デルスマイヤーの言葉にフェリスが反論するより先に、周囲の女子たちがそれこそきゃあきゃあと盛り上がる。

姫君の為に命懸けで勝利を捧げる騎士など、今の世の中そうそう居るものではない。形式的に自国の姫君に勝利を贈ると言う騎士はそれこそ掃いて捨てるほど居るが、彼らの内の何人が先の決闘のレクティファールと同じことが出来るだろう。

試合と呼ぶしかないような決闘と、決闘という皮を被った命懸けの殺し合い、どちらの勝利が女性たちの心に響くかなど、議論するまでもない。姫君と騎士の身分違いの恋は、こういう酒の場では格好の肴でしかないのだ。

当人たちがどれだけ否定しようとも、それは酔っ払いどもを増長させるだけである。

「あーあ、あたしの彼氏もあれくらい頑張ってくれないかぁ」

「ねーねー、この際愛人でもいいから、どう？」

「俺だって……俺だってあのくらい――――出来るかバカヤロー！！」

「世の中は不公平！　畜生、俺もあんな子犬系の彼女欲しいなぁ」

酒と肴が終わらない限り、この馬鹿騒ぎは延々と続くだろう。

酔っ払いの言葉にいちいち顔を朱に染めていたフェリスだが、やがてがたがたを震え始めた。

顔は危険なほどに紅潮し、持ったままの硝子杯からは果実酒が零れている。

「だから、だからボクとレクトはそんなんじゃ……」

「だそうだけど、レクト君的にはどうよ？」

デルスマイヤーに訊かれ、フェリスに睨まれ、レクティファールは少しだけ考えて答えた。

「とりあえず」

「とりあえず？」

「とーりーあーえーずー？」

デルスマイヤーの復唱に続いて酔っ払いの大合唱。

フェリスは面食らい、レクティファールは苦笑する。

そして苦笑したまま、彼は告げた。

「フェリスはとても可愛いと」

一瞬、沈黙が落ちた。

沈黙から回復したデルスマイヤーが、先陣を切って叫ぶ。

「――――総員、復唱！」

「復唱します！　『フェリスはとーてーもーかーわーいーいーッ！！』以上！」

「いやあああああッ！　やめてよぉ！」

耳を押さえたフェリスが敷物の上をのた打ち回る。

そんな彼女の悲痛な願いも虚しく、デルスマイヤーは追撃を仕掛けた。

「で、可愛いフェリスを見てどう？」

レクティファールは顎に手を当てて考え込み、酔っ払いは固唾を呑んで復唱準備。フェリスは「やめてーやめてー」と叫んでいるが、酔っ払い女子に押さえ込まれて何も出来ない。彼女の騎士は教官の言葉に従い、再び考え込んだ後に酔っ払いどもに餌を放った。

「食べたい？」

再び沈黙。

酔っ払っていないのに、凄いこと言うなこの男――――フェリス以外の全員がそう思った。

思ったまま、復唱した。

「復唱します！　『たーべーたーいぃーッ！？』以上！」

2025

「あああぁぁ～～～～……！　いっそ殺してよぅ！　もういやだよう！　助けてよレクトぉ」

涙を流してレクティファールに縋り付フェリス。こんなことをすれば酔っ払いを喜ばすことになるだけだと気付かない彼女も大概酔っ払っている。

「大丈夫です、ちゃんと私が助けますから」

「……うん」

頭を撫でられ、心地良さそうに目を細めるフェリス。そもそもの原因が目の前の男であることには気付いていない。

ついでに言うなら、周囲でにやにやととても良い笑顔を浮かべている酔っ払いたちにも気付いていない。

「フェリス」

「レクト……」

見詰め合い、お互いしか見えない二人。

レクティファールは酔っ払いのど真ん中で素面を保っているという現実から逃避しているからであり、フェリスは酒と異常な羞恥心で盛り上がった気分が原因であった。

フェリスなどは更に理性を羞恥心に食い尽くされている状態で、衆人環視の状況であることも忘れてレクティファールの瞳に囚われていた。レクティファールからしてみれば、「人と話すときはしっかりと目を見て話す」というおっかない義姉の教えを実行しているだけなのだが、それでも二人の間にある空間は少しずつ小さくなり、やがて二人は相手の呼吸さえ感じられる距離まで近付いた。

周囲は固唾を呑んで二人の成り行きを見守っているのだが、宿舎の門近くで酒を飲んでいた若者が宿舎まえの道をこちらに向かってくる二つの人影に気付いた。

「遅刻かぁ？」

若しくは、騒ぎを聞き付けて只酒にありつこうと考えたしっかり者かもしれない。

これだけ盛り上がっているのなら、一人二人増えたところで誰も気にしないだろう。

「まあいいや、おーいお前さんたち……駆け付け三杯ってことで――――って……」

近付いてくる二つの人影。

一人は男、もう一人は女。

ひどく綺麗な姿勢で歩く男の背後に、女が控えている。

そして、彼はそのどちらも見覚えがあった。

「お前たちは……！」

彼は慌てて立ち上がろうとしたが、酒が回ってそれも出来ない。

彼がよろめいている間に二人は宿舎の正門を通り、あっさりと庭まで入り込んだ。

男は庭に入ると、庭の片隅で料理を頬張っていたオリガに近付いた。

「主賓に挨拶がしたいんだが」

「……？」

オリガは自分に話し掛けてきた男が余りにも見知った人物であることに首を傾げ、それでも驚いている様子は見せなかった。

ただ、男に従う女がその手に木箱を抱えていることに気付き、ほんの少し目を瞠った。

「――――敗者が、勝者を祝う？」

「それもまた、勝負の面白い所だと思わないか？」

「別に」

「そうか」

男はオリガの返答に肩を竦め、「所詮男という生き物にしか理解出来ない自己満足か」と呟いた。オリガは分かっているならいちいち同意を求めるなという意味で男を見詰め、会場の一角を指差してから食物の摂取に戻った。

「あっち」

「そうか、感謝する」

男はそのままオリガの隣を素通りし、女は丁寧に頭を下げてから男のあとを追った。オリガは横目で二人の後ろ姿を見遣り、すぐに

興味を失ったかのように目の前の料理に全意識を集中した。彼女にとって、自分や自分の守るべきものを害さない存在など、敵とも呼べない有象無象に過ぎないのだ。敵対しないなら放置し、敵対するなら潰す。それだけである。

彼女は名も知らぬ魚の餡掛けを一欠け口に放り込み、そして動きを止めて独白した。

「――――小骨、刺さった」

◇　◇　◇

彼が一歩進むごとに、その存在に気付いた人々が動きを止めていく。

ある者は大きく口を開けて料理を零し、ある者は食道ではなく気管に酒を流しこんで咽た。

あれ程うるさく耳障りであった喧騒は少しずつ沈静化し、一組の男女が主賓の前に到達するころには会場中が静まり返っていた。

「――――招待状は必要かな」

男は主賓である勝者に尋ね、

「飛び入りは歓迎ですよ」

主賓は敗者である男に答えた。

「差し入れを持ってきたんだが」

「ほう」

敗者である〈ガイエンルツヴィテ〉騎士ゲオルグは、言って従者の運んできた木箱を示した。

木箱に押された焼印は、〈ガイエンルツヴィテ〉名産の蒸留酒銘柄の一つ『レリル』。個人経営の小さな蒸留所で作られていることもあって非常に数が少なく、好事家の間で高値で取引されている代物だ。

「随分と良いもののようですが」

デルスマイヤーを始めとした女性陣は、ゲオルグたちが姿を見せた時点であっさりと全員がその場から姿を消していた。フェリスだけがその場に取り残されていたが、いつの間にかレクティファール

の膝で寝息を立てていて起きる様子がない。

起きていたら騒ぎを大きくするだけだろうから、それはそれで好都合であるのだが。

「本当は勝利のあとの一杯として飲むつもりで本国から取り寄せたんだが」

「なるほど……」

負け時合のあとでは飲む気もしないということだろう。ゲオルグという男はそういう点で融通が利かないらしい。

「君が飲むなら、この酒は遥々長旅をしてここに来た目的を果たしたことになるだろう？」

「まあ、確かに」

「目的を持って旅をした酒は、その目的通りに飲まれるべきだと僕は思っている。何年も樽の中で最後のときを待ち続けてきたんだ。酒を飲むなら、酒に礼を尽くすべきだと思わないか？」

食べ物を口にするとき、自分の血肉になる食べ物に感謝すること

は珍しくない。

しかし、酒に感謝するというのは、レクティファールもついぞ聞いたことがなかった。

「珍しい酒ではあるが、今回の決闘の勝者のために旅してきた代物だ。君が飲むのが筋だろう」

「――――ふむ」

レクティファールは従者の女性が差し出した木箱を空け、木屑の中に埋まった酒瓶を取り出した。

たった一本。しかし、その瓶を見る周囲の酔っ払いたちの目は輝いていた。

酒飲みたちの憧れの一つ、大陸最高の蒸留酒の一つに数えられる〈ガイエンルツヴィテ〉の銘酒である。生唾を呑む者が続出した。

「では、頂きましょう」

「ああ、そうしてくれると僕も嬉しい」

ゲオルグは小さく笑うと、踵を返してその場を去ろうとした。し

かし、その背にレクティファールが言葉を投げ掛ける。

「――――勝利の美酒なら、勝利を与えてくれた者も共に杯を交わすというのはどうでしょうか」

ゲオルグの歩みが止まる。

「そこのあなた、使っていない硝子杯を一つ頂けませんか。――――ああ、ありがとうございます」

振り返ってみれば、そこには硝子杯をこちらに差し出すレクティファールの姿。

ゲオルグは差し出された杯とレクティファールの顔を何度も見比べ、やがて彼の前にどっかりと胡座をかいた。

「貰おう」

「それでこそ、騎士です」

レクティファールは心底嬉しそうに硝子杯を手渡し、酒瓶の蓋を開いて琥珀色の液体をゲオルグの杯に注いだ。

芳醇な香りが会場に立ち込める他の酒の匂いを駆逐し、レクティファールはその香りを楽しむように自分の杯を取り出した。

「僕が注ごう」

「ああ、これはすみません」

ゲオルグはレクティファールから瓶を受け取ると、それを硝子杯目一杯に注いだ。レクティファールが抗議するかのような表情を見せたが、ゲオルグはそれを無視した。

やがてお互いの杯に酒が満たされると、二人はどちらともなくそれを夜空に捧げた。

「――――勝利に」

ゲオルグが、

「――――敗北に」

レクティファールが、それぞれの酒をお互いの健闘に捧げる。

二人は一瞬視線を交差させると、同時に杯の中身を飲み干す。

その味は甘く、そして苦かった。

◇　◇　◇

宿舎からの帰り道、ゲオルグは従者に問われた。

「良きご友人が出来ましたね」と。

彼は一瞬虚を突かれたように目を見開いたが、しかしすぐに憮然として答えた。

盛り上がりの復活した祝勝会の会場で、レクティファールはいつの間にか自分の背に張り付いていたデルスマイヤーに問われた。

「男の友情って奴かしら?」と。

彼は一瞬面食らったように目を瞬いたが、しかしすぐに苦笑して答えた。

二人は奇しくも同じ言葉で、「彼は、友などではない」と。

◇　◇　◇

決闘から、二週間が経った。

その頃になると、もう決闘の余熱も冷めきり、レクティファールたちの生活も決闘前の状態に戻っていた。

「――――とはいえ、どうにも最近あの二人が気になる」

「え？　どうしたのルフェイルちゃん」

宿舎の談話室で腕を組んで唸るルフェイルと、彼の隣で編み物をするパトリシア。

デルスマイヤーからの近いうちに大陸西域への研修に赴いてもらうという通達に、慌てて防寒着を用意しているらしい。西域は皇国よりも寒冷な気候で、この時期は更に寒いと有名であった。

「レクトとフェリスだ」

「それがどうしたのぉ？」

「あの馬鹿騒ぎ以降、妙に一緒に居る時間が増えた」

今も、二人で西域へ向かうための買出しに出ている有様だ。以前なら荷物の多い買い物は五人で、ということが多かったのだが、今では二人で出かけることも珍しくない。取り立てて二人の仲が変化したということもなく、第〇八九班としての意識に齟齬が生まれた訳でもない。

「――――色々、あるから」

二人の前の席に座り、黙々と分厚い本を呼んでいたオリガが呟く。誰かに聞かせるというより、自分に向けた確認のような口調だった。

「色々、とは何だ」

「色々は、色々」

オリガの答えは素っ気なく、ルフェイルとしては納得出来るはずもない。しかし、訊いたところで答えないという確信もあり、彼は再び黙り込んだ。

しばらく沈黙が続いたが、ふとパトリシアが独り言を漏らした。

「――――変わるのは、悪いことじゃないと思うよぉ」

彼女は編み物を続けながら、誰にともなく言葉を紡ぐ。

「フェリスはちょっと真面目過ぎるし、レクト君も同じくらい変に真面目なところがあるけど、その分、相手の欠点はよく見えると思う」

パトリシアに、あの二人が特別な関係になるという確信はない。フェリスにもレクティファールにも立場があり、二人はその立場を重視する性格だ。それを踏み越えようとはしないだろう。

しかし、立場を超えない範囲でなら、あの二人は少しだけ互いの近くに歩み寄ることが出来る。そして、自分に足りない部分を補おうとするのではないか。

「フェリスは、自分が何も出来ないってことをレクト君に知られたくなかった」

決闘の際、ゲオルグが大音声で叫んだことだ。そして、フェリスもそれを認めた。

そこにはこれまでの人生で培われた諦念があり、半ば自棄にも似た気持ちだったのだろう。

しかし、レクティファールは何ら変わることがなかった。フェリスに対する態度に何の変化もなかった。

「確認してる面もあるんだと思うよ、レクト君が本当に自分のことを嫌っていないのか、本当に自分のことを仲間だと思っているのか」

距離が近くなれば、確かめることは容易になる。人に突き放されるのが怖いから、逆に近付いて確かめようとする。それは、人としてごく普通のことだ。

「わたしはレクト君のことを信じてるからぁ、フェリスが悲しむようなことにはならないと思う……」

「それは、俺だって同じだ」

ルフェイルから見れば、フェリスは人の上に毅然として立つというより、人に支えられて立つ種類の人物だ。それが悪いとは思っていないが、心配になることはある。

その点、レクティファールは勝手に立ち、勝手に何処かに行ってしまうような性質を持っているように思える。機敏であるというよりは、落ち着きがないとでも言うべきかもしれないが。

「とりあえず、今はそっとしておこうよお。準備で忙しいし」

「そう、だな」

ルフェイルとしても、別にことを荒立てようと思っているのではない。

明確な理由もなくあの二人の将来に漠然とした不安を感じ、思わずそれを口に出してしまったのだ。

取り越し苦労ならそれで良い。

「第〇〇八との合同研修。問題は他にもあるからな」

「はう」

そう、西域への派遣研修は第〇〇八班との合同である。

研修そのものが騎士学校からの課題であり、二つの班の協調性を見るという意味もある筈だ。

なんとか無事に研修を乗り切る為にも、班員一人一人が全力を尽くすことが必要だった。

「まずは、胃薬の準備からだな」

ルフェイルの独白は、大いにパトリシアとオリガの同意を得た。

第二二話「姉姫の苦悩×妹姫の慟哭」

西域へと向かう貨物船は、その内部に多くの軍需物資を詰め込んでいた。

それは武器弾薬だけではなく、現地の将兵に届けられる手紙や嗜好品、そして内乱で苦しむ〈マルドゥク〉の国民へ向けた支援物資も含まれる。それらの支援物資は事前に〈マルドゥク〉亡命政府と簒奪政府双方に許可を得て活動している皇国系の非営利団体に渡され、〈マルドゥク〉や西域各地の難民野営地に送られる手筈になっている。

簒奪政府側との交渉の窓口を失いたくない皇国にとっては、たとえ亡命政府から非公認政府への協力自粛を求められたとしても、素直にそれを受け入れることは出来ない。各国に認められる政府が亡命政府側であっても、いま現実に〈マルドゥク〉を支配しているのは非公認政府で、彼らの協力無くして西域の対帝国戦線を維持することは不可能なのである。

皇国にとって唯一の救いは、簒奪政府側が思ったよりも話の分かる者たちで占められていたことだ。彼らは帝国との戦いで中心的な役割を果たしてきたこともあって帝国の怖さを知り尽くしており、無闇矢鱈と国内を混乱させようとは思っていないようであった。無論、簒奪政府側にも強硬派と呼ばれる派閥はあり、彼らは硬直している対帝国戦線を自分たちで動かそうと水面下で活動を続けている。打倒帝国を声高に叫ぶ強硬派を抑え、さらに遠く安全な〈アルスト

ロメリア〉から国土奪還を叫ぶ第三王子と相対している現簒奪政権主流派に対し、皇国は『民間人に対する人道的支援』を名目に様々な援助を行っていた。

この方針は、今回の一件に関して摂政から全権を委任されている特使の決断で、今のところ皇国が正統・簒奪の両政府に影響力を行使出来る状況を作り出すことに成功していた。とはいうものの、〈アルストロメリア〉が全面的に正統政府側に協力する姿勢を見せており、今後の動静は未だ不確定の要素が多い。

そんな地を目指して、有事には事前集積船とも呼ばれるものと同じ船級の四隻の船は、船団を組んで海軍艦艇の護衛を受けながら西へと向かっていた。その内の一隻の舷側に、一組の男女が居る。

女は舷側の手すりから身を乗り出して海面を睨み、男は呆れた顔で手拭いと水筒を持っている。

「――――きもちわるいぃ」

「だから今朝、酔い止め飲みますかって訊いたじゃないですか」

「だって……前は大丈夫だったんだよ。連絡船だって平気だし、昨日まで平気だったし……おえ……」

「昔から何度も乗って慣れていたんでしょう。それに、前と言っても湖に浮かんだ蒼龍公の重戦艦と、海の上の貨物船を同じように扱

うのはどうかと思いますよ。それに今日は海が荒れています。しかも小さな揺れだって、酔う人は酔うんですから」

真っ青な顔をしているフェリスの背中をさすり、レクティファールは「もう酔い止めの飲める状況じゃないな」と小さくぼやいた。こうなってしまえば水を飲むことさえ一苦労だろう。船員の話では、今日一日どころか数日間は時化の状態が続くという。しかし第〇〇八班との一日一度の打ち合わせは班長同士で行うことが決められているし、不用意にウェルチにフェリスを責める口実を与えたくない彼としては、この半死人の班長をどうにかして回復させたいというのが本音だ。

「やっぱり、あの人達を頼るしか無いですかねぇ」

彼は同じ船に乗り込んでいる紅の龍姉妹の顔を思い浮かべた。

最近、妙に彼を避けるようになった妹と、そんな妹を余所に相も変わらぬ態度を取り続ける姉。

ファリエルが彼を避ける理由も、フェリエルが態度を変えない理由も、レクティファールには分かっていた。

（叔母を殺しに行きますと言われて、はいそうですかと納得出来る訳もないですよね……）

ファリエルが自分に対して抱いている敵意にも似た複雑な感情は、レクティファールにとって驚くようなものではない。むしろ妹がそのような正常な反応を見せていることで、フェリエルの方が異常に見えるほどだ。

医師や貴族として感情を押し殺すことに長けていたとしても、身内を大切にする龍族が交流のあった親戚を殺すと言われて冷静で居る筈がない。それを抑制しているフェリエルが無理をしていないか、レクティファールは少し心配だった。

（――これは、過信しすぎているのかもしれませんね）

彼の中で、フェリエルは『よく出来た人』として分類されている。多少無茶をしても理由さえあれば納得してもらえると。

しかし、それは過信ではないかと思うようになった。彼女が人よりも冷静に物ごとを判断出来るとしても、感情のない人形ではないのだ。心の何処かではレクティファールに対して思うところがあるのだろうし、それを溜め込んでいては、それこそ以前のメリエラの二の舞になりかねない。

「――それは、良くないですよね、うん」

一応という形だが、フレデリックから姉妹の身を預かっていることは間違いない。

今夜辺りにでも話をしてみよう、レクティファールは独り呟いて何度も頷いた。

「――何？　どうしたの？　って……うえぇ……」

「ああもう、ほら、医務室行きますよ」

言って、ひょいとフェリスを抱き上げるレクティファール。

うひゃあ、と変な悲鳴を上げたフェリスが、彼の首に慌ててしがみついた。

「軽いですね、体力持ちますか？」

「う、もしかして、ボクが持久走苦手だって誰かに聞いた？」

「いえ、持ち上げた感じで、何となく」

「そ、そっか……」

レクティファールの言葉に顔を赤らめたフェリスだが、またすぐに青い顔に戻る。

口を両手で抑え、身体を硬直させた。

「本格的に、不味いですか」

「――……」

こくこくと頷くフェリス。

その表情を見れば、彼女の限界が近いことは容易に察することが出来た。戻す直前といった風である。

「じゃあ、急ぎますか」

「――……」

再び、首肯。

それを受け、レクティファールは出来るだけ揺れを抑えながら、しかし足早に船の中に入っていった。

◇　◇　◇

「――――それで、その娘をここまで抱えてきたということか」

「ええ、よろしくお願いします、大佐」

「まあ、わたしは医者だからな、体調の悪い者が居ればそれを診ることはするが……」

額に手をやり、頭痛を堪えるように手荷物の中から白紙の診療簿を取り出すフェリエル。

彼女が頭を抱えるのも無理はない。ここは船に設けられた医務室などではなく、フェリエルに宛てがわれた船室であったからだ。

その船室に付属する寝室、そこでレクティファールとフェリスは部屋の主に症状の説明を行う。

一通りの説明を聞き、フェリエルは一言ぼやいた。

「医務室に行こうとは思わなかったのか」

「人の目がありますので、こちらに」

「ふむ……まあ、納得出来ない理由ではないな」

眼鏡を押し上げ、フェリエルは自分の寝台で苦しげな表情を浮かべるフェリスの額に手を置いた。

「熱はないか、ただの船酔いだとは思うが、こうなっては薬も効き難い。少し眠った方がいいだろう」

「――すみません、フェリエルさん」

フェリスの謝罪の言葉に苦笑を浮かべたフェリエル。

少し強い力でフェリスの頭を撫で、レクティファールにちらりと一瞥する。

「従姉妹に頼るくらい、いちいち気にする必要はないさ。あと、部下にはもう少し甘えた方がいい。特に、そこそこ使える部下は上手く使え」

「――――はい、ありがとうございます、お従姉さん」

フェリスの返事に頷くと、フェリエルはその額に手を置き、精神

作用系の催眠魔法を流し込む。すぐにフェリスの表情から険が消え、その呼吸が穏やかなものになった。

その呼吸が寝息に変わるまで、ほんの数分。フェリエルはフェリスが完全に寝入ったことを確認すると、大きく溜息を吐いてレクティファールに向き直った。

「さて、我が夫君」

「まだ、夫ではなかったと思いますが――――さて、なんでしょうか？」

机の椅子に座り、レクティファールにも部屋の片隅に追い遣られていた小さな丸椅子を勧めたフェリエルは、その表情に明らかな呆れを滲ませていた。

「少々、無謀ではないかと思うのだが」

「今回の作戦ですか、それとも、フェリスを連れて来たことですか」

「そのどちらも、そして、わたしたち二人も同行させたこともだな」

フェリエルは診療簿に数行の文字を書き入れると、そのまま万年

筆の先をレクティファールに向ける。

「理由は分かる、そして、今のところこれが最良の手だということも。――――近衛も、密かに動かしているのだろう？」

「ええ、二個小隊を分散、偽装して潜り込ませてあります。あの会議の場ではああ言いましたが、近衛無しではお二人の救出は無理でしょう。それに……」

「出来るなら、向こうの研究員も確保しておきたい。帝国の研究が何処まで進んでいるのか、二人に対してどのような行為が行われていたのか、情報源は多いほうが良い。そういうことではないか？」

レクティファールは苦笑いを浮かべ、「隠しごとは、そんなに苦手ではないと思っていたのですが」と呟いた。

「まだまだ甘い、研究員は万が一のときに処分されかねないし、そうなったらもう二度と情報を得ることは出来ないからな」

演算装置に記録された情報ならば、機族などの技術で復元出来る可能性もある。だが、死人は決して蘇らない。

冥界に送られた情報を引き出す術を、人はまだ得ていなかった。

「君は、それなりに頑張っている。わたしはそう思っているよ」

「――――ありがとうございます」

「ただ、今回だけは、同行者はわたしだけにするべきだったかもしれない」

フェリエルは診療簿を鞄に仕舞い、その鞄の中から写真入れを取り出す。

超硬度硝子製の写真入れに守られた写真には、二人の子どもと、一人の女性が写っていた。

「彼女が、シヴェイラ・スヴァローグ。わたしたち姉妹の叔母で、フェリスの母親だ」

落ち着いた夕日のような髪を後頭部で纏めた姫君は、写真の中で柔らかく微笑み、自分にしがみつく姉妹を愛おしそうに見守っていた。その姿に、レクティファールは心がざわめくのを感じる。

これから殺さなくてはならないかもしれない相手の、幸せだった頃の姿。

これを見せたフェリエルを、少しだけ憎く思った。

「ケルブ殿の写真もあったが、君はそれだけで十分だろう」

「――――ええ」

レクティファールが写真を返すと、フェリエルはそれをじっと見詰めて黙り込んだ。

話しかけることも出来ず、隣の寝室で眠るフェリスの気配を読み、それもすぐにやめた。

ただ黙って、フェリエルが過去の回想から帰るのを待つ。

「――――懐かしいな」

フェリエルがそう漏らしたのは、彼女が追憶の旅に出てから一〇分ほどあとのことだった。

写真を机の上に立て掛け、それを眺める。

「叔母上に読んでもらう絵本や物語が好きだった。特に、ある紅龍の姫君と〈白〉の冒険譚はわたしとファリエルのお気に入りで、多分、妹はまだその本を持っている筈だ」

物語そのものは、完全な空想であったらしい。

〈白〉と紅龍姫が旅に出たという歴史的事実は無く、物語に描かれた光景も歴史には存在しない。

「婚約者を決めるための舞踏会から逃げ出した紅龍姫が、森の中で〈白〉と出会った。そして二人は、この世界の何処かにあるという願いを叶える宝物を求めて、旅に出るんだ」

紅龍姫は運命の人を探すため、〈白〉は自分の未来を見付けるために宝物を求めた。

子ども向けの物語で、途中人語を解す巨木と出会ったり、盗賊を改心させたり、離れ離れになった恋人同士を再会させたり、果てには四界の主に出会って宝物の在り処を教えてもらったり――――フアリエルたちはそれを寝物語に聞き、夢中になった。

「最後は、どうだったかな……――ああ、確か、〈白〉が皇王になるために国に戻ることを決意する、そんな感じだった」

「そこから先は、どうなったのですか？」

「ちょうどその頃、わたしはたまたま父について領内を回ることになったが、妹は体調が優れなくて同行しなかった。多分、そのとき

に妹が叔母上から話の続きを聞いた筈なんだが……」

城に戻ってみれば、妹は物語の結末を秘密にして決して姉に教えようとはしなかった。

叔母に聞いても、妹に向けた結末とは別の結末を話して聞かせてくれた。

「『〈白〉は皇王となり、姫君と幸せに暮らした』わたしが聞かされた結末は、そんなところだ。でも実はあの物語の結末は二つあって、わたしたち姉妹はそれぞれ別の結末を与えられた。きっとそういうことなんだろう」

何の意味があって結末を二つに分けたのか、それはシヴェイラ本人にしか分からない。

そして、ファリエルが持つ物語の結末がどんなものであるかも、フェリエルは知らなかった。

「いつまでも一緒では居られない。叔母はわたしたち二人にそう教えたかったのかもしれない」

フェリエルは呟くと、レクティファールの顔を覗き込む。

無表情で顔のどこにもその意思が見えず、レクティファールはひ

どく居心地の悪い思いをした。

「今回の一件も、わたしたちはまるで違う考えを持っている。わたしは君の決断に一定の理解を持っているし、どんな結末になっても君のことを許そう。だが、妹は違う」

フェリエルは以前、ファリエルを指して「優しい」と言った。

レクティファールに大しては冷たい態度を取ることが多いファリエルが、後宮の姫君や騎士たちの間では随分と慕われていることも知っている。

彼女の本質は、きっと人を想い、慈しむことが出来る素晴らしいものなのだろう。レクティファールがもう少し周囲に眼を向けることが出来るようになれば、ファリエルも彼に対してもう少し穏やかな態度を見せられる筈だ。

「――――なぁ、レクト」

「なんですか？」

フェリエルの声と表情に、何処か請願するような色が交じる。

「あの二人、今からでもこの作戦から外すことは出来ないか？」

「――……」

否定しようとし、しかし、フェリエルの表情を見て言葉が潰えた。

これまでに見たことがない表情だった。

「わたしが居れば、名目は立つだろう。マリア様にはわたしからきちんと説明するし、父も納得させてみせる。だから……」

そこまで言葉を紡ぎ、フェリエルはレクティファールが笑みを浮かべていることに気付いた。

寂しそうに、悲しそうに笑う彼の姿。

「――――勝手なことを言った。忘れてくれ」

謝罪し、引き下がる。

自分の言ったことが不可能であると、彼女は分かっていたのだ。

もしもケルブとシヴェイラの残った〈龍の瞳〉や〈龍の心臓〉が兵器転用されてしまえば、それこそ取り返しの付かないことになる。帝国はもとより皇国さえも各国から敵視されるだろう。そして、龍

族は再び他の種族から恐れられ、同時に狙われるようになる。

レクティファールは出来るだけ多くの生命を救うために、今回の作戦を決めた。

彼自身が動いたのは、確かに紅龍公と蒼龍公に対する主筋としての義理もあるだろう。身内殺しをさせたくないという想いもあるだろう。

だが、一番の理由は、別だ。

「〈皇剣〉が、一番二人を助けられる可能性を持っている。あれは〈龍の瞳〉を元にしているから、な」

龍公が二人も動けば、他国に気付かれるという理由もあった。だがそれ以上に、二人の力が片目を失って不安定になったケルブとシヴェイラに悪影響を与えるかもしれないという懸念も無視出来なかったのだ。

皇国の研究者たちが回収した〈龍の瞳〉を不眠不休で調べ上げ、帝国側の技術がひどく稚拙なものであることは分かっている。皇国で同出力の魔導炉を作るなら、およそ一〇分の一の質量で作ることが出来るとも。

それ故に、ケルブとシヴェイラがどのような状況にあるか、大いに議論された。

帝国側の拙い技術で、片目を失った二人を安定させられるのか、

もしも不安定な状態に陥っていたらどうやって回復させるのか、それらの議論の果てに〈皇剣〉による救出が決定されたとしても、不思議ではない。

「一つだけ教えてくれ」

フェリエルの言葉はまっすぐにレクティファールに向けられていた。

それを受け止めるにも、大きな覚悟がいるほどに。

「君はまだ、諦めていないんだな？」

摂政として、レクティファールとして、そのどちらも、同じ答えだった。

「もちろん、諦めていません。諦めるにはまだ早過ぎますから」

この戦い、一度諦めたら最後、二度目の機会はない。

だからこれは諦めではなく、放棄だ。

レクティファールという男は、その諦めの良さとは裏腹に、物ごとを途中で放棄することは嫌う。

二度と取り戻せない機会を諦めるなど出来ないし、そんな選択肢すら持っていない。

「あなたは知らないかもしれませんが、私は諦めることは得意ですが、二度と手に入らないと分かっているものには、多少執着するのですよ」

言葉にしてみれば、自分さえもなるほどと納得してしまった。

いつか失うと分かっていても、今はまだ失われていないのだ。

「運命を否定することも、抗うことも私はしません。ですが……」

フェリエルを見、彼女の机の上の写真立てを見、レクティファールは立ち上がった。

そのままフェリエルに背を向け、自らの偽らざる本心を告げる。

「運命など、受け入れたあとからでも変えられるものです。運命を否定するよりも、受け入れて、知って、その上で変えれば良い」

たとえそれが義理の両親となる者たちを討つことであっても、その直前まで運命を変えることを放棄しない。

二人は未だ生きていて、レクティファールの傍には四人の龍姫が居て、彼の手には無双の〈皇剣〉がある。

これで出来ないなら、誰がやっても同じことだ。

「――――なら、いい」

フェリエルは呟き、レクティファールは彼女の部屋を後にする。

扉が閉まる瞬間、フェリエルが写真立てに手を伸ばしたのが見えた。

◇　◇　◇

姉の部屋から出てくるレクティファールの姿を見付けたとき、彼女の心に湧き上がったのは怒りよりも困惑であった。

何故、姉の部屋に彼が居るのか、今まで何をしていたのか、疑問ばかりが浮かんでは消え、やがて彼女はその場から走り去ることを選んだ。

「――はっ、はっ、はっ」

呼吸法も忘れて狭い船内通路を走り切り、彼女は甲板に通じる扉を体当たりするように押し退け、転び出た。

夕日が支配する大海を目の当たりにして、彼女はその場に崩れ落ちる。

「なんで……」

レクティファールの姿を見たことで、彼女の中にはシヴェイラとの思い出が尽きること無く溢れ出る。

一緒に花摘みに行き、花の冠の作り方を教わった。一緒に海に行き、泳ぎ方を教わった。一緒に冬の山に行き、厳しい自然の中で暮らす生き物たちの姿を教わった。

ファリエルたちの母親とも仲の良かった叔母は、紅龍宮に遊びに来るたび、まるで本当の姉のようにファリエルたちに接してくれた。双子であるが故に姉と妹という区別が曖昧な二人にとって、シヴェイラは歳の離れた姉そのものだった。

母に叱られては叔母の部屋で泣いた。父に怒られては叔母に泣きついた。勉強で分からないところがあれば、叔母に訊きにいった。

「なんで……シヴェイラ姉さんが……」

軍の医療学校で教官を勤めていた二人に送られてきた手紙には、ケルブとの穏やかな日々がいつも綴られていた。だから、いつか二人は夫婦になるものだと姉妹は勝手に思っていたし、あの先代皇王の勅命がなければそれは現実になっていた筈だ。

それもあって、シヴェイラ出奔のあとしばらくは皇王家を恨みもした。

何故二人を引き裂くような真似をしたのかと思った。

自分の中で仕方のないことだったのだと納得出来たのは、フェリスが保護される直前だった。

フェリスが蒼龍公に保護され、二人の最期を知らされたときにはもう、彼女の中の怒りは残り火となってそれ以上燃え盛ることはなかった。二人は娘を守ってその生命を散らしたのであり、自分が何を叫んだところで二人の死を穢すだけだと思った。

それなのに、運命は彼女に更なる絶望を用意していた。

「なんで……アタシが二人を殺す手伝いなんか……！」

家族同然だったシヴェイラを討つ手助けなど、本当はしたくなかった。

だが、もしかしたら二人を助けられるかもしれない。それには、自分や姉のような龍族の身体に精通した医師が居た方が都合が良い。

それに、二人が捕らえられているのは帝国の施設で、それは皇国と敵対する国の領内にある。相手国に気付かれないよう最小の人数で二人を助け出すなら、一人が多くの役割を兼ねるしか無い。

龍姫が四人も揃っているなら、こと通常の戦闘で遅れをとることはないだろう。

龍族としてのフェリスは戦力に数えられないかもしれないが、万が一のとき、二人を抑える鍵になるかもしれない。

それに――――

「もしも二人を討つなら、娘であるフェリスがそれを見届けるしかない」

間違っても皇王家が紅龍公と蒼龍公の眷属を私情で討ったなどと人々に思わせてはならない。そして、望まぬまま犯した両親の罪を娘が被るようなことがあってはならない。

そのためには、二人を救い出すか、それが出来ないときは紅龍公と蒼龍公の縁者が見届ける前で二人を討つ必要がある。

「ああ……なんで……」

レクティファールが今回の一件のために陸軍に手を回して彼女たち姉妹の西域視察を予定にねじ込んだことは知っている。騎士学校

の予定を変えてまで、第〇〇八班と第〇八九班を西域での研修に向かわせたことも知っている。四龍姫が揃うことで他国の監視が厳しくならないよう、最大戦力になり得る自身の契約龍メリエラを後宮に残したことも。

しかしその総ては、この国を守るための布石であって、決して二人を救うためではない。二人を救うことは手段に過ぎず、目的ではないのだ。

目的のためには手段を選んだりはしない、そんな男と、姉が一緒に居た。

何故と思い、どうしてと思う。

何故二人は一緒に居られるのか、どうして姉はあの男を側に置いておけるのか。

自分たちを国のための道具として扱うあの男が憎くはないのか。

「――――ファリエルさん」

「――っ」

背後から声を掛けられ、ファリエルは肩を震わせた。

心の中の声を聞かれていたのではないかと思った。

もし聞かれていなくても、必要なら自分たちを容易に殺すことが出来る男に背後を取られたことが恐怖となって彼女を襲う。

「何……？」

だが、その恐怖を彼女は押し殺した。

絶対に、そんな姿は見せてやらないと心に決めた。

「日が落ちれば、だいぶ冷えます。中に入ったらどうですか」

「まさか龍族がそう簡単にどうにかなると思っているの？　アタシたちはそんなに柔じゃない」

言って、少し後悔した。

その内容と相手はともかくとして、自分を気遣った相手に言う台詞ではない。

「それはそうですが……」

「分かったら放っておいて」

背後を見ることもせず、彼女はレクティファールの言葉を遮った。

顔を見たくない、見せたくない、そして、声も聞かせたくない、聞きたくない。

「こんなところで油売ってる暇があるなら、あの二人を助ける方法でも考えてよ。〈皇剣〉だってまだ満足に使えないんでしょう？出来る筈なのに出来なかったなんてことになったら、あなたはどうやってフェリスに謝るつもりなの？」

「そう、ですね」

背後の声が、少し沈む。

ファリエルはこれで引き下がるだろうと思い、実際その通りにことは進んだ。

しかし、次の瞬間にその身体を包んだ温もりだけは、彼女の予想を超えていた。

「え？」

「体調が悪くならなくても、寒さは感じるでしょう。支給品ですし、要らないというならどこぞにでも捨ててください」

ファリエルは自分の肩に掛かった外套を確かめ、それがレクティファールのものであると気付いた。

陸軍の士官用大外套は暖かく、レクティファールよりも小柄な彼女の身体をしっかりと包んでくれた。

「では、お身体に気を付けて」

言って、レクティファールは船内に消えて行く。

金属製の扉が大きな音を立てて閉まり、ファリエルは一人取り残された。

「――……」

大外套の襟元に触れ、それを激情に任せて取り払おうと思った。

だが、出来なかった。

「っく……うう……」

ぽたりぽたりと床に落ちる雫は、ファリエルの眼から零れたもの。

それは丸い染みを幾つも作り、やがて嗚咽と共に広がっていく。

「分かってる、分かってるのに……！」

今、ここに居る誰かが悪い訳ではないということ。

レクティファールでさえも、今回の件には殆ど責任がないこと。

でも、誰かがやらなくてはいけない。

「なんで……なんでよぉ……」

大外套の襟を掻き寄せ、ファリエルは咽ぶ。

誰が悪いということはないのに、何故運命はこうも酷い仕打ちをするのか。

国を捨てたからか、家を捨てたからか、役目を捨てたからか。

それは、こんな仕打ちを受けるほど重い罪なのか。

「ああ……あああっ！」

もしも心の底から恨めるなら、こんなに苦しまずに済んだのに。

あの男がもっと冷徹で、人の命を軽んじるような者であればこれほど辛くはなかったのに。

どうして、こんなにも温かいのか。

「あああ……！」

どうして、こんなにも世界は美しいままなのか。

「うあああああ……！」

ひたすら、泣いた。

涙が枯れるまで、喉が潰れるまで。

ただずっと、心優しき紅の龍姫は泣いた。

第二三話「戻れぬ道＋戻らぬ時間＝終末への道程」

港湾都市〈エーベ〉と言えば、皇国の商人のみならず、大陸中の交易商にとって馴染み深い西域の都市だ。

古くから商業都市として大陸内外の国家と商業協定を結び、幾度か名前と属する勢力を変えつつも、西域を代表する交易都市としての地位を保ち続けてきた。

港の一角で隣り合わせに立つ帝国商人と皇国商人の商館も、ここが国家としての利害を超えた商業都市であることの証明なのだろうか。

その皇国の商館から這々の体で抜け出してきたのは、この商館の持ち主である〈レヴィアタン貿易商会〉、その〈エーベ〉支店支店長の姪であるフェリスと、そのお供を務めるレクティファールだった。

「はー、ボク疲れたよ……」

「まあ、叔父上もフェリスを心配してのことですし」

何故二人がここに居るかといえば、その理由は〈エーベ〉近郊の別の港に到着したフェリスを〈レヴィアタン貿易商会〉の支店長直

々に迎えに来たことから始まる。

彼は蒼龍公マリアの妹婿である支店長は義姉マリアからの手紙でフェリスの到着日時を知ったらしく、軍の都合も無視して姪の出迎えに現れたのだ。支店長からすれば明日のレヴィアタン公爵家を担う総領娘を迎えるのは、自分の立場を保つためにも当たり前のことであったらしい。支店長はフェリスが職務中であると何度言っても聞かず、彼女に土産物を持たせようとしたり、街の外れにある自分の屋敷に招待しようとした。相手が叔父ということで強く出られないフェリスに代わってレクティファールがその場を収めたのだが、支店長は二人の間に割って入ったレクティファールを見て「従者は黙っていろ」と言い捨て、それに怒ったフェリスが怒声を発揮しようとした直前、支店長の元に秘書が急報を持ってきた。

支店長がその対応のために席を外した隙に、二人は止める商館の社員を振り切って逃げ出してきたのだった。

元々、大陸の海を庭としていた蒼龍公の一族は建国後皇国南海岸の一部を所領として与えられており、そのせいか伝統的に交易の術に長けていた。その資産は四公爵家の中で最も多かったが、それは公爵家一族が経営する複数の大商会が多くの資金を公爵家に齎していることが一番の理由だと言える。

その大商会の一角、〈レヴィアタン貿易商会〉は、ここ〈エーベ〉に設けた支社を拠点にして大陸西域からさらに西方の〈トラン大陸〉まで商売の手を伸ばしている。支社の入った商館近くの港には商会の旗を掲げた大型船が並び、この商会が〈エーベ〉でも有数の商会であることを窺わせた。

「心配かぁ……違うと思うな」

「ほう？」

フェリスは怒涛の接待攻撃を思い出しながら、虚ろな半眼で呟いた。

自分の息子を婿にどうかと勧めてくる貴族は珍しくないが、孫やまだ十にも満たないひ孫まで纏めて紹介しようとする者は珍しかった。

「叔父上は、お義母さまにあまり好かれていないから……代わりにボクに取り入ろうとしたんだと思うよ」

フェリスの言うことには、支店長は元々は実直で真面目な青年商人だったらしい。商売相手として何度か支店長と顔を合わせたマリアがその誠実な人柄を気に入り、歳の離れた妹の娘との婚儀を進めたのだった。

しかし、歳を経るごとに支店長は利益を第一に考えるようになり、それまでの清廉な商売からは考えられない非合法すれすれの手段まで使うようになってしまった。マリアは幾度も支店長を窘めたが、結局支店長が自分の考えを曲げることはなく、この〈エーベ〉に左遷されてしまったのだという。

「左遷とは言っても、ここはうちの商圏の一角を担う大事な場所だから、お義母さまが叔父上を本気で疎んでいる訳じゃないだろうけどね」

しばらく本国を離れて頭を冷やせということなのだろうが、先ほどのフェリスに対する接待を見る限り、彼が心を入れ替えた様子はなかった。

「あとでお義母さまに手紙書かないといけないかな、流石に軍にも謝らなきゃ不味いし……でも勝手に謝れないし……はぁ……」

大きく溜息を吐き、やれやれと頭を振るフェリス。

レクティファールは慰めるようにフェリスの頭を撫でた。

「大丈夫ですよ、叔父上も馬鹿ではないですし、ある程度軍の方も誤魔化してあると思います」

軍務中とはいえ、この日のこれからの予定といえば西域派遣部隊の駐屯地に向かい、駐屯部隊の責任者と打ち合わせをして本国から届いた荷物の整理をするぐらいだ。もしかしたら支店長は、フェリスのこれからの予定も考えに入れて行動していたのかもしれない。レクティファールの見た限り、支店長は軍――――ひいては皇国政府に喧嘩を売るような真似をする男には見えなかった。

一見俗物に見えても、実際には俗物であることを演じている、そんな印象だった。

おそらく軍では、今回のフェリスとレクティファールの行動は、西域経済市場の視察とでも扱われるのだろう。

「だといいけど……」

「マリア公には簡単な手紙を送っておけば良いと思います。叔父上に歓待されたとでも書いておけば、あとは向こうで事情を読み取ってくれるでしょう」

言って、撫でる力を少しだけ強めるレクティファール。

「むふ――……」

フェリスは満足そうに吐息を漏らし、やがてレクティファールの手のひらに頭頂部を擦りつけ始めた。

あの決闘以降、二人だけのときには妙に甘えるような仕草を見せるようになった上司に、レクティファールは小さく微笑んだ。

「街に出て土産の一つも持って帰らなければ、文句を言われるかもしれません。少し見ていきましょう」

「いいのかなぁ、そんなことで」

「いえなに、何ごとも臨機応変に、そして気負わずに、そのくらいが丁度良いと思います。通信が入らないことを考えれば、駐屯地の方も状況を分かっているのでしょう」

正確に言えば、駐屯地には陸軍総司令部から『決してレクト・ハルベルン中尉の行動を妨げることのないように、しかし彼から協力を求められたら、持てる総ての力でそれに応えよ』と命令が下っているだけなのだが、敢えて真実をフェリスに知らせる必要はないだろう。そもそも、フェリスにはそれを知る権限がないのだ。

しかし、駐屯部隊の長はそれなりに裏の事情に通じている人物であるから、もしかしたら『レクト・ハルベルン』の正体にも気付いているかもしれない。軍務だけでなく政治にも通じた人物――――今回の派遣に当たって陸軍はそういった人物を選んだのだから、当然ではあるのだが。

「では、行きましょうか」

「あ、待ってよレクトー！」

撫でていた手をどかし、さっさと歩き始めるレクティファール。

フェリスは慌ててそのあとを追い、

「ああっ！？」

石畳の段差に躓いてすてーんと転んだ。

慌てて駆け寄るレクティファールと、痛みを堪えるフェリスの姿は、とても軍人には見えなかった。

◇　◇　◇

夜半、駐屯地の営庭の片隅。

防犯のために燈された申し訳程度の灯りの中で、一つの光が同じ運動を繰り返している。

その運動は風を切る音を伴っていて、その音は小さな話し声を隠していた。

「――軍事政権側との交渉は順調です。代表であるカールス上級大将も正統政府側が自分たちの提案を受け入れるようであれば、パトゥーリア王子の政府に帰順する用意があると」

「ふむ、帰順とは言え、実際のところは、政治は自分たちに任せて王族は宮殿に引っ込んでいろということだからな。正統政府側は受け入れる筈もないか」

「御意」

光を反射する片刃の剣を一定の速度で振り続ける男と、その傍らの影の中に膝を突く黒衣の人物。

男――――レクティファールは汗ひとつ掻かないまま、しかし、常に一定の軌道に刃を乗せ続ける。その軌道の誤差は髪の毛ほどの隙間もなく、名のある武芸者がその光景を目にすれば、まず自分の目が鈍ったのだと思うに違いない。彼は外務院から派遣された男とも女とも分からない密偵の言葉に耳を傾けながら、無感情にその驚くべき運動を続けた。

「殿下のご命令通り、正統政府側にも軍事政権への協力者を何名か用意しました。どの程度使えるかは分かりませんが、正統政府が連邦の操り人形になることだけは防げると思われます」

「連邦は何を求めている」

レクティファールは刃の向きを変え、しかし同じく一定軌道を通

過する運動を繰り返す。

〈皇剣〉と身体の同調をより最適な形にするためには、どんな運動であっても無駄にはならない。細胞ひとつひとつの動きまで運動計算に含めても、〈皇剣〉の演算機能はまだまだ余裕があるのだ。

「やはり、港と〈マルドゥク〉での経済的優位ではないかと我々は考えています。連邦も皇国に近い国々は我が国の復興特需の恩恵を受けていますが、逆に中原諸国側はそれに取り残される形になっています。両地域の経済格差は、今のところはそう大きなものではありませんが、いずれ表面化して問題になりましょう」

嘗て連邦の皇国側諸国と、中原諸国側の国々は逆の立場にあった。皇国の動乱に巻き込まれるように経済活動が鈍化した皇国側諸国に対し、中諸国側の国々は帝国との戦いを続ける連邦内外の各国相手に商売を続け、好景気に沸いていた。

それが、帝国の攻勢が止んだ途端に逆転した。

「市場主義を掲げればそうなるのは当たり前だ。我が国とて、例外ではないがな」

自嘲するように笑い、しかし彼は動きを止めない。

駐屯地の営舎から見れば、ただ彼が一人で自主鍛錬をしているだけに見えるだろう。

「連邦だけではない、どこも自分たちに利益があれば警戒しつつも食い付く。食い付かねば餓死するのだから当たり前だが、それをどうやって制御するか、か……」

そう漏らすレクティファールに、密偵は自らの上司からの言伝を口にした。

「総裁はキャベンディッシュ卿の伝手を使おうとお考えです」

「なるほど、卿は連邦や中原の商会とも付き合いがあったな。つまり、マルファスは連邦内部だけでは制御しきれないと考えているか」

「は、帝国系の商会が連邦に働き掛けを行っていることも既に分かっております。彼らが今回の政変に何らかの関わりを持っていることも」

「正面から戦うばかりが戦争ではない、か。誰が陣頭指揮を執っているか分からないが、数だのみの帝国も、数がいる分優秀な人材も豊富のようだ」

全くもって忌々しい限り、と口腔内で小さく付け足したレクティファール。

戦う相手は弱い方がいいと思うのは、騎士や武道家ではない彼にとっては当たり前のことだ。

相手が自分よりも劣るなら、お互いの被害は制御することが出来る。それが出来ないのは、相手と自分の力が拮抗し、容易にそれを制御することが不可能だから。

本当の戦巧者とは、相手と自分の損害を制御出来る者を指す。将として勝つだけなら三流、勝って自分の損害を制御出来るなら二流、勝ち負けや互いの損害を制御出来ればそこでようやく一流だ。

自分がどのような分野でも三流に届かないと思っているレクティファールにとって、強敵との出会いは決して心踊るようなものではない。他国の要人が彼を評価しているほどには、彼は自分を評価していなかった。

出来るなら、優秀な敵とは戦いたくはないのだ。

「困ったものだ」

「――――」

「報告はこれで終わりか」

「は」

剣を収め、〈皇剣〉の演算を学習から分析に切り替えたレクティファールは密偵に問う。

密偵が頷くと、彼は営舎の方へと身体を翻した。

「グリニッドに居る我が国の特使に伝えよ。『勝ちは最後の手段、場を動かすのは勝利であってはならない』と」

「はっ」

影に滲み消える密偵。

おそらくこのまま、レクティファールの言葉を伝えるために〈神聖グリニッド王国〉へと向かうのだろう。

レクティファールは密偵の気配が消えたのを確認してから立ち止まり、ふと夜空を見上げてみた。

「随分、遠くに来たものですね」

言ってからやれやれと頭を振り、彼は宿舎として宛てがわれた建物へと向かう。

おそらく明日には明日の問題が発生するだろうが、今日のところはこれでおしまいにしよう。やれなければならないことは山積しているが、急いで仕損じることは避けるべきだった。彼の立場とは、失敗さえも制御しなくてはならないのだから。

◇　◇　◇

「皇国軍は女が多いって話だが、この光景をみると納得出来るよなぁ」

軍の兵員輸送車で前線へと向かう途中。第〇〇八班の一人がそう呟いた。

南洋諸島出身の候補生で、日に焼けた肌と縮れた髪が特徴的な男だ。名をエクパという。

「二班合わせて九人、内四人が女だ。うちの国じゃ考えられねぇ……」

「エクパ、それは我が国の軍制に対する批判なのかしら？」

彼の呟きを聞き咎めたウェルチにじろりと睨め付けられ、エクパ

は恐縮したように両手と首を振った。

「いえ、とんでもない。人口比から考えれば、こっちの方がいっそ健全なのかと思った次第で、へえ」

下男のように謙った態度を見せてはいるが、その表情にはウェルチの反応を面白がっている節も見える。海賊貴族の次男として皇国に留学しているこの男は、飄々とした態度でウェルチの視線を躱した。

「他の国じゃ、皇国は戦乙女の国って呼ぶこともあるくらいで……なあゲオルグ、ハンス」

そういって彼は同僚二人に水を向けるも、返って来た反応は冷たいものだった。

「男だの女だの、戦場では関係ないだろう。敵なら討ち、味方なら支えるだけだ」

「そもそも戦場が男のものだというのは、男性の方が膂力があり、戦いに向いていたからこそ出来た価値観です。皇国などの能力の雌雄差が少ない国なら、軍の男女比が他国と違っても不思議なことではありませんし、逆に性別的性格から女性の方が向いている軍務というのもあります」

ゲオルグは窓の外から視線を外さずに言い捨て、ハンスと呼ばれた書生風の男は持論を垂れてエクパの意見などあっさり押し流してしまった。

ハンスの講釈が垂々と続き、エクパは顔を大いに引き攣らせた。仕方がないとばかりに第〇八九班へと目を向ければ、そこには幼馴染の膝枕で大鼾の砲術士官と二人の龍姫の間に挟まれて政治議論を続ける皇国騎士が居るだけだ。

「――大陸第二の軍事大国って、こんなんばっかりかよ」

エクパはがくりと肩を落とし、だが、次の瞬間にはルフェイルやレクティファールに羨望の眼差しを向ける。

海賊貴族と呼ばれる彼の実家は、あの海賊女王の一族に古くから使えてきた船大工の家系だ。旧帝国が崩壊してから千年以上も海を駆け巡り、大陸の国々の商船を襲っては生計を立てるという生活を送ってきた。それが変化したのは、おそらく皇国の交易皇が南洋諸島の国々と交易を始めた頃だろう。

皇国の軍艦や私掠船に散々打ちのめされた結果、彼らは陸に上がって国を興すこととなった。

今では南洋諸国の中で盟主のような立場になっているが、それまでは海戦に次ぐ海戦で国も民も疲れ切っていた。それでも国が瓦解しなかったのは、海賊女王の一族が大陸のどの大国の君主にも劣ら

ない王器の持ち主だったからだろう。

あの一族は小さな小さな家族だけの海賊から始まり、何度も敗北と勝利を繰り返し、ときに敵の虜囚となりながらも自らに賛同し恭順する者たちを束ねて大海賊団を創り上げた。そんな海賊女王の一族に心服する者は多く、エクパも個人的に海賊女王を崇敬していた。

皇国が女性の軍人が多いと聞いたときは、果たして女王陛下と較べてどの程度のものかと密かに楽しみにしていたほどだ。

「こんなのばかりと思っていれば、そこであなたは終わり。敵を侮った瞬間、自分自身の成長も止まってしまうものよ」

「は、ご教授痛み入ります」

エクパは少し崩した敬礼でウェルチに答え。ウェルチはそれに頷いて見せた。

そして二人は同時に、向かいに座る三人の男女に目を向ける。

「フェリス様、グレン大公との会談はどのような結果になりましたか」

「あ、領主との会談の結果ということだよね」

「はい」

ウェルチに声を掛けられた瞬間、フェリスの肩が滑稽なほど跳ね上がったことをエクパは見逃さなかった。

同時に思う、「こんなごく普通の女性でも士官として生きていける皇国は、何とも余裕のある国だ」と。

それは多分に侮蔑の混じった同情だった。しかし、彼のその表情はすぐに感嘆へと変わる。

「――――蒼龍公の公子として纏められる範囲ではあるけれど、幾つか交易に関する協定を進めてきたよ。港湾施設の優先使用権と税関手続きの簡略化、あとはこっちではあまり流通していない皇国産の香草茶の宣伝とか」

「それは重畳……もしかして、そちらの中尉殿がお手伝いを?」

ウェルチはそう言ってレクティファールを見据える。

その瞳に宿る興味と敵意に、レクティファールは苦笑するしか無かった。

「部下の使いどころを考えるのが上司の役目ですし、身贔屓と言わ

れるかもしれませんが、うちの班長は良い仕事をしたと思いますよ。事前に打ち合わせはしましたが、実際に大公閣下とお話ししたのは彼女です。私は一切、会談に嘴を挟んでおりません」

「そう……我が主君を助けてもらって、感謝するわ。でも――」

ウェルチは無表情のまま零下の視線を差し向け、レクティファールは捉えどころのない茫洋とした眼差しでそれを受け止める。

現役士官同士の無言の駆け引きに車内はいつしか静まり返り、鼾を掻いていたルフェイルも何ごとかと身を起こす。

「下があまり優秀では、上が育たないと思わない？　失敗は人を成長させるものよ」

「失敗ばかりが成長を促すということもないでしょう。成功からしか学べないこともあります」

ねっとりと質量を持ったかのような空気の中で、九名は凍り付いたように動かない。

特に事態の中心に居るフェリスは何とも居心地が悪そうで、何度もレクティファールの袖を引いては彼の意識を自分に向けようとしていた。ウェルチの言葉は間違っていないし、レクティファールの言葉もまた正しい。

どちらかが間違っているということでないなら、そもそも争う必要がないのではないかと彼女は考えていた。

それが、彼女の限界なのかもしれない。

「以前から訊きたかったの」

「なんでしょうか」

「何故、あなたは騎士学校にいるのかしら？」

「軍からの命令です。あなたも同じではないですか？」

軍からの命令と、それが自分から働き掛けた結果という点で、二人の騎士学校編入への流れは似ている。

そしてその気質も、二人は面白いほどに似ていた。

「あなたほどの実力があれば、騎士学校出などという箔付けも必要ないでしょう」

「箔付けならば、確かに必要ありませんね。ですが私は、物ごとを

知る機会とは人生のうちにそう多くあるものではないと思っているのですよ。ただ漫然と知識を蓄えるだけなら軍でも出来ます、現役の経験豊富な将兵が周りにいるのですから」

「では、何故？」

問われれば、レクティファールは笑って答えた。

ウェルチの眉間に、浅く皺が刻まれるのをエクパは見た。

「知識とは現場だけで得られるものではありません、分析され、分類され、系統立てられた知識もまた、現場で得られる知識に劣るものではないと思います」

士官学校を出たばかりの頃、現場の荒くれ兵士たちに散々煮え湯を飲まされたウェルチ。研修で各地の部隊に赴くたび、軽んじられ、疎まれ、無視された。だが、彼らは彼女を侮っていたのではない、彼女が自分の知識に溺れていたことに気付いていたから、そんな彼女の心根を侮ったのだ。

彼らは常に自分たちの生命を預けるに足る士官を求めていた。自分たちの元に現れた士官がその条件に満たないなら、彼らはあらゆる手段で条件に足る士官を得ようとする。部隊に配属されたばかりの新米士官が古参の下士官兵の洗礼を受けるというのは、彼らなりの士官教育と言っても間違いではなかった。

ウェルチも一年以上、異動するたびにそんなことを繰り返した。

その中で一つ一つ、自分の中の知識と下士官兵の言動を結び付けていき、ある程度自分の中で知識と現実が結びついたとき、ようやく彼女は兵たちに侮られない士官になっていた。

知識はそれだけでは意味が無い。しかし、知識がなければ意味が無いことにも気付けない。

どこでどんな知識を得ようとも、それを活用するのは各個人の気持ち次第――――ウェルチはレクティファールもまた自分と同じ答えを得た士官なのだと、ここでようやく気付いた。そして、自分がこの男を余り好かない理由も。

この男は、自分に似過ぎている。鏡とまでは言わないまでも、似ている部分を挙げろと言われれば、軽く百は挙げられる。

そして、鏡は自分の好きな面だけを見せてくれるのではない、嫌な面も、目を逸らしたいと思う部分も、差別すること無く見せ付けてくる。

だから、好きになれない。

「――――なるほど、確かに」

ウェルチは呟き、椅子に深く腰を沈めた。

兵員輸送車の固い椅子は御世辞にも良い座り心地とは思えなかっ

たが、ウェルチにとっては座り慣れた感触だ。大きく吐息を漏らし、腕を組んだ。

「あなたがうちの班に来たら、仲良くなれたかしら」

「同じ班でなくとも、あなたが望めばいつでも」

ウェルチの言葉にぎょっとしたフェリスだが、続いたレクティファールの言葉に、今度は涙目になる。

何か言いたげにあわあわと唇を震わせるが、丁度そのとき輸送車が道に落ちていた石に乗り上げた。

がたん、という大きな音と共に輸送車が跳ね、後部乗員室に居た者たちの尻が一瞬浮かび上がる。

「ひゃあっ」

「わあっ」

パトリシアが一際大きな悲鳴を上げ、フェリスがそれに続く。第〇〇八班は全員漏れそうになる声を押し殺したようで、車内に反響した声はその二つだけだった。

だが、揺れが治まったあとに、追加で悲鳴を上げた者がいた。

「れ、レクトっ！？」

腰を抱き寄せられた、フェリスと、

「――……っ」

肩を抱き寄せられ、声にならない悲鳴を上げたオリガだ。

フェリスはその場から逃げだそうとじたばたともがき、オリガは僅かに染めた頬を隠すように俯いた。

「おや？」

ただ、その事態を引き起こした当人はといえば、自分の行動をこのときになってようやく理解したらしい。

無意識に動いたのか、或いは〈皇剣〉が自動制御で二人を抱き寄せたのか。

本人も少し驚いているようだった。

「――――ふむ、固定帯付けたほうがいいですかね」

「そっち!?　この暴挙は素通りなの!?」

「暴挙……？　一応、二人の安全を確保しようとしたのですが」

意識はしてなかったけれども、とレクティファールは心の中で付け加える。

口に出せば碌なことにならないことは、今までの経験から理解していた。

「……わたしは、別にこれでもいい」

「オリガっ!?」

どうせ、自分の身長では固定帯も満足に機能しない、そう言ってじりじりとレクティファールに擦り寄るオリガ。

先ほどまで覗き込んでいた資料に目を落とし、次、と呟いた。

「――皇国軍人は、化物ぞろいか……」

万感の想いを込めてそう呟く留学生も居なかった訳ではないが、フェリス以外の車内の面々はオリガの言動にも驚いた様子はない。

むしろ、いつものことだと言わんばかりの態度だ。

「今の石といい、こちらの道路は皇国の整備された幹線道路とは違いますねぇ」

「うちは数が少ないからな、少ない兵力を上手く使うには軍用道路の整備は不可欠なんだろうよ」

レクティファールの独り言に答えたのは、再びパトリシアの太ももを堪能し始めたルフェイルだった。瞑目し、レクティファールと軍用道路の運用法について幾つか意見を交わす。

整備の頻度、幅員や強度、打設方法から工事期間、予算、使用される重機や混凝土の種類、それを扱っている商会とその特徴など、様々な意見が二人の口から出てくる。

その間もレクティファールはオリガの求めに応じて資料を捲っていたし、ルフェイルもパトリシアの玩具になったままだ。何とも緊張感に欠ける連中である。

「それに、幹線道路があれば流通も活性化する。この間の内乱のときみたく、物資があるのに流通させられないなんてこともあるがな」

「その辺は、政府の仕事だと思いますけどね」

「――――って、ボクは無視っ！？」

相変わらず腰を押さえられたままのフェリスがレクティファールに抗議するも、その拘束が揺らぐことはない。

「危ないですし」

「危ないと思うよぅ？」

「ドジだからな」

「――もう少し、くっついた方が安全」

ついでに、班の結束も揺るがなかった。

「うっ」

助けを求めるように第〇〇八班の面々に目を向けてみれば、やれやれやってられるか畜生、と言った感じで窓の外を見る者や、隣同士で西域各国の軍備について意見を交わす者たち、そして呆れを多分に含んだ視線をフェリスに向ける者が居るだけで、彼女を助けようという意思がある者は居なかった。

「うう……なんでこんな辱め……」

と、フェリスが声を震わせた途端、再度石に乗り上げる輸送車。

先ほどよりも大きな石があったらしく、揺れはさらに強かった。

「ひゃあっ！　って、どこ触ってるのレクトっ」

「え？　どこって……」

「い、言わないでいい、言わないでいいからっ！」

わーわーと騒ぐフェリスの甲高い声を聞きながら、レクティファールは自分の中の並列思考の大半が自分を醒めた目で見ていることに気付いた。

並列思考たちは言う、いつまでも逃げていてどうするのか、と。

彼女の両親に対する作戦は、もう、間近に迫っていた。

第二四話「始まりの龍姫＋終わりの摂政＝そして舞台の幕は上がり切る」

夜空を往く飛龍の背から天を仰いでみれば、一番小さな月〈ノルティエ〉だけが、星たちの夜空で健気に輝いている。

矮月夜と呼ばれる今夜、普段は幾つもの大きな月と一緒に夜空を闊歩している〈ノルティエ〉は星たちの庭で小さく縮こまっているようにも見え、フェリスはそれが自分と同じ境遇に置かれているような、ある種の親近感を覚えた。

彼女は岩塊に親近感を覚える自分に驚きはしたが、次の瞬間にはそれも仕方がないと納得した。

何も知らないまま、引っ張られて来た。

レクト・ハルベルン。自分が班長を務める皇国軍騎士学校第〇八九班に所属する班員で、陸軍の現役中尉。

今自分がしがみついているこの男が、自分をこんな場所にまで引き摺ってきたのだ。

◇　◇　◇

皇国陸軍派遣部隊の野営地に辿り着くと、第〇〇八班と第〇八九班の面々はそれぞれ自分の専門とする部隊の運用状況を視察するために別行動を取った。

第〇八九班では砲術を専攻しているルフェイルは西域での砲術部隊運用について見識を深めるべく各地を視察することになり、パトリシアは輸送船で送られてくる物資の輸送経路を一つ一つ巡ることを軍から命じられた。第〇〇八班も、ウェルチは参謀として現地部隊の幕僚団と終日意見を交換し、さらに参謀の義務として各地の前線を回って各国軍の部隊運用やその戦略・戦術思想について多くを学んでいる。各国からの留学生も各々の本国から受けた命令に従って各地に散っており、結局西域派遣部隊の前線司令部が置かれた野営地に残ったのは、第〇八九班のフェリスとレクティファール、そしてオリガだけだった。

フェリスとレクティファールは遠隔地に派遣された部隊を如何にして効率よく運用するかを派遣部隊司令官の陸軍准将から学び、さらにその運用方法を得るまでの過程で発生した問題点やその解決方法についても事細かに聞かされた。

食文化や習慣の差で苦労したことや、皇国では少数種族である有翼人種や水棲種が、実際にどんな生活を送っているのかという本国では知ることがなかった現実、西域と皇国の気候や風土の違い、それに伴う産業の差異、同じ古代言語を元にしていながら皇国で使用される共通語とはだいぶ違う形に変化した西域共通語、挙げればそれこそきりがないほどに彼らが学ぶことは多かった。

オリガも西域各国の魔法体系について派遣部隊の魔導師たちを束ねる魔導部隊指揮官から聞き取り調査を行ったり、その興味の赴く

ままに少々非合法な手段でもってご禁制の書物などを手に入れたりしていた。

そんな候補生たちの姿を見て、自分たちの過去を振り返り郷愁の念に駆られる者も居れば、邪魔だと露骨に嫌な顔をする者も居る。積極的に関わって色々教えようとする者が居れば、自分からは余り関わりを持とうとしない者も居た。

しかし、流石に士官ともなれば後進の教育も重要な仕事である。自分の後継者を育てることは、もはや軍人にとって国家を守り敵を討つことにも並ぶ重要事だ。新陳代謝のように新旧の人材が入れ替わる軍で、『誰彼にしか出来ない』などという評価は悪評でしかない。

優秀な指揮官に率いられていた頃は精鋭だった部隊が、別の指揮官に入れ替わった途端に弱兵に成り下がることは歴史を見れば珍しいことではない。珍しくないからこそ、どの国の軍隊もそれを予防するために様々な策を講じているのだった。

皇国軍で行われている候補生の遠地研修もその一環で、西域での研修は珍しかったが、その他の地域では毎年行われていることだ。皇国軍が駐留している地域の中で比較的平穏な場所であれば、どこでも研修候補地になる。

だから、誰もこの研修の真の目的に気付かなかった。

黒龍公の姫君は西域の稀覯本を公爵家の予算で買い漁って自分と母親の趣味をその行動で喧伝していたし、蒼龍公の姫君も蒼龍公の持つ『商家公爵』の二つ名に相応しく、西域の有力商家と表沙汰に出来ない密談を繰り返していた。紅龍公の姫君二人が前線の野戦病

院を視察しても不思議に思う者は居なかったし、そんな彼女たちが居るからレクト・ハルベルンという騎士家の息子に注目する者も殆ど居なかった。

折しも皇国のマルドゥク内戦問題担当特別全権大使が両勢力に対して皇国本国で交渉の場を持つことを持ち掛けたこともあり、周辺国の耳目はそちらに引き付けられていた。

帝国勢力圏内の某小国に『少し身の熟しが良すぎる』商人たちが何人も入国したことも、蒼龍公と繋がりのある武器商人が『廃棄予定の中古車両』を皇国から輸入したことも、皇国遣西艦隊旗艦がその優れた探測機能を全力使用し始めたことも、一つ一つに気付いた者は少なからず居たが、それらがたった一つの目的に収斂していることには気付かなかったのである。

◇　◇　◇

フェリスの駐屯地での宿舎は、オリガとの二人部屋だった。

公爵令嬢であるよりも前に軍人であるし、オリガという気心の知れた相手との合室は、むしろ望むところだったと言ってもいい。

この日はお互い報告書を夜遅くまで纏め、さて寝ようということになったのは日付が変わる頃だった。オリガは一言「おやすみ」と呟いて寝台に潜り込むとさっさと寝息を立て始め、フェリスは明日着用する予定の野戦服をふたり分衣紋掛けに揃えてから寝床に入っ

た。

部屋の灯りが消え、龍姫は眠りに落ちる。

「くー」

彼女は軍の施設らしい最低限の寝心地を約束する寝台でも、日々の疲れからか随分と深い眠りに落ちていた。それこそ、部屋に侵入者があっても気付かない程に。

「――――」

かちゃりと扉を開き、細身の影が彼女たちの部屋に入り込む。

影は必要以上に動きを見せること無く、一直線にフェリスの寝台へと向かった。

「ふ～～」

枕に頬を押し付けるようにして大きく呼吸するフェリス。

寝返りを打つと、丁度侵入者に顔を向けることになった。

「――ふむ」

侵入者はその寝顔をじっと見詰め、天を仰ぎ、頭を掻き、大きく溜息を吐いた。

その姿はやりたくない仕事を押し付けられた新米軍人のようで、ある意味その年齢通りの姿であったかもしれない。

やがて彼は小さく「あー」と呟くと、もうどうにでもなれと言った感じでフェリスの寝台に侵入した。

「んん……」

フェリスの顔を間近に見ながら、その肩に触れる。

躊躇いばかりが目立つ行為であったが、眠りを阻害されたフェリスの瞼が震えた。

長い睫毛がふるふると動くたび、侵入者は物凄い罪悪感に襲われた。自分から望んで眠りに落ちた眠り姫なら、起こさない方が人の道に沿っている。

だが、彼が人の道を説くほど、可笑しなことはない。彼の進んでいる道は、人の道ではないのだ。

「ん……ふぇ……？」

「おはよう……じゃなかった、こんばんは」

「え……？　レクト？」

「はい」

しばらく瞬きをしていたフェリスだが、自分の身体を完全に組み敷いた同僚の姿を確認すると途端に焦ったように身体を捩らせた。

「え？　どうして？　なんでこんな……」

慌てて彼の押し退けようとすれば、その手を掴まれる。

そのまま頭上で両手を拘束され、今度こそフェリスの表情が困惑に歪んだ。

目尻に涙を溜めてレクティファールを見上げ、震える声でその名を呼ぶ。

「レクト、ねえ、やめてよ……」

言われ、やめられたらどれだけ良かったかと思った。

レクティファールも、こんなことはしなくないのだから。

「ボク、結構レクトのこと好きだよ。で、でも、こんなこと……オリガも居るし……」

フェリスは何度か言葉に詰まりながらも、レクティファールに必死に訴える。

ならばオリガが居なければ良いのかと自分の中の冷静な部分が口を挟んでくるが、フェリスはそれとこれとは別問題と言ってそれを封じた。

押し倒され、言葉でしか抵抗しない自分に驚いていた部分もある。本気で逃げようとしていないことにも自分のことながら更に驚いていた。大声を発し、オリガを起こせばそれで済む話だというのに。

（――ええと、なんでだろう？）

目の前の男が、様々な言葉や行動で『フェリスのことが大切だ』と主張してくれているからか。

それとも、自分は本気でこの男のことが――――

「――黙って」

「んん！？」

更に口を開こうとして、その口も塞がれた。

ごつごつとした手のひらはフェリスに余り馴染みのないもので、彼女はその感触に頬が熱を持つのを感じた。

自分の唇に家族以外の他人が触れるのは、初めてのことだった。

「んー！」

不味い、と思った。

変な気分になってきてしまった。

他人に触れられることが、他人の体温がこんなにも恥ずかしいものだとは、今まで知らなかった。

ぐるぐると色んな思考が渦を巻き、答えが導き出せなくなった。

優秀ではあるが、突発事態に弱いと評されたフェリスの頭脳は、まさにその評価の通りの動きを見せていた。

「これから、あなたに大事な話があります」

だから、レクティファールがひどく真剣な眼差しで自分を捉えたとき、何も考えずに頷いてしまった。

混乱した頭は、頷いたことに対する後悔さえも出来なかった。

◇　◇　◇

部屋から出てみれば、そこにはフェリス、オリガ、レクティファールそっくりの影武者がいた。

その三人の完璧過ぎる変装に気味悪さを感じたが、レクティファールが当たり前のように彼らに接しているのを見ると、自分だけが動揺しているのが恥ずかしく思えて結局何も言えなかった。フェリスとオリガの影武者が部屋に入るのを確認してから、レクティファールはフェリスを宿舎の外に連れ出した。肌着の上に野戦服を引っ掛けただけのフェリスは、宿舎の外に出た途端その寒さに身を縮こませる。

その姿を見たレクティファールはすぐに手荷物からフェリスの身の丈に合わせた飛行服を取り出し、それを着るように促す。

研修として海軍の飛竜の背中に跨ったこともあるフェリスは、ほんの数分で飛行服に着替えた。その間、彼女の表情は様々な困惑の入り交じったもので、何度もレクティファールに事情の説明を求め

ようとして、その直前でやめていた。訊いても答えないという確信が、何故かあった。

「準備出来たよ」

「では、行きましょう」

何処に、とは聞かなかった。

どうせすぐに分かると、不貞腐れた考えが彼女の思考を支配していた。

信頼していた部下に裏切られ、理解出来ない状況に追い込まれる。彼女は頭の回転が早かったが、その分自分が理解出来ないことに対する忌避感も強かったのかもしれない。

二人は無人の道路を歩いた。レクティファールがいつもと変わらない軍装で先導し、飛行服姿のフェリスが続く。

最近半歩分位にまで近付いたと思った二人の距離は、このときおよそ三歩分に広がっていた。

フェリスは自分とレクティファールの間にある空間を見て、自分が二歩半退いたのか、彼が二歩半逃げたのかと考える。

そして、その答えが出るよりも早く、彼女たちは目的地に辿り着いた。

「ここは……」

そこは、昼間なら駐屯地の兵士たちの声で賑やかな営庭だった。

今は片隅に装甲車が数台停められているだけで、がらんとした空間が小さな外灯の光に浮かび上がっている。

まるで怪談に出てくるような薄気味悪い光景にフェリスが少しだけ顔を顰め、レクティファールに一歩分近付いた。目の前の背中だけが、広い営庭の中で唯一彼女の現実のように思えたのだ。

「――ねぇ」

黙り込んだままのレクティファールに、意を決したフェリスが声を上げる。ただ、レクティファールはフェリスに応えるよりも早く、空を見上げて呟いた、

「来た」

今度は「何が」と声を出そうとしたフェリスであるが、次の瞬間襲いかかってきた突風に髪の毛を抑えて蹲る。

ごうごうと営庭の砂を巻き上げる風の中心は、レクティファール

の視線の先にあるようだった。

やがて風が収まり、フェリスが乱れた髪を軽く整えながら目を開くと、そこには先ほどまで存在しなかった『モノ』が一つ、鎮座していた。

「――！」

銀の鱗と硝子細工のような羽で形作られた翼。地面をしっかりと掴む両足は太く、フェリスの胴体よりも太く逞しかった。

白龍公の一族にも似たその姿から、飛竜の中でも一際名の知られた『銀竜』と呼ばれる竜。

その幼体がそこに居た。

「な、なんで銀竜が……」

銀竜と言えば、それこそフェリスのような立場でも滅多に見られない稀少種だ。白龍公の領地にある高山以外に生息域を持たない彼らは、その総数が一〇〇〇に届かない。

リンドヴルム公爵家がその保護に努めていることは彼女も知っていたが、まさかその銀竜をこんな場所で目の当たりにするとは思っていなかった。

「ゾーリャ、ご苦労様」

レクティファールが近付けば、銀竜はその鼻先を彼の服に押し付けて甘えた鳴き声を発する。

その光景に、フェリスは何度目かの衝撃を受けた。

「ぎ、銀竜を手懐けてる？」

銀竜の特徴の一つに、その獰猛な性格が挙げられる。

上位種と言って過言ではない龍種にさえ反発し、同族と自分の認めた者以外には決して心を開かない。自分の縄張りに入り込んだ異物は徹底的に排除し、そのせいか今となっては騎竜にしようという猛者も途絶えて人々の前から完全に姿を消してしまった。

その銀竜に懐かれる男。

先程までの不機嫌が何処かに消し飛んでしまったフェリスは、背後に近付いてきたオリガにも気付けなかった。

「――彼の騎龍は別にいる。あれは、予備」

「オリガ……って、何その格好」

「――？　完全装備で、って言われたから」

小首を傾げるオリガ。

だが、可愛らしいその仕草とは裏腹に、彼女が纏う装束は物々しいの一言に尽きる。

身の丈の倍ほどもある杖は先端に魔導珠の付いた軍用品で、さらに身体中にも防護術式が付与された魔導珠を配している。装備帯には魔法の媒体にするらしい液体が試験管に入ったまま幾つも並び、着ている服も防護術式の編み込まれた特注品であった。

まるで戦争でもしに行くかのようなオリガの姿に、フェリスの顔が引き攣った。

「お、オリガ……ここって一応他国だからね？　欲しい本があるなら実家の方でも探してあげるから、早まった真似は駄目だよ？」

「――勘違い」

「え」

「別に、本のために、行くわけじゃない」

オリガはそう言うと、フェリスの横を通り過ぎて銀竜の傍に近寄った。

一瞬銀竜が牙を見せてオリガを威嚇したが、レクティファールがその頭を撫でると大人しくなった。

「小さい」

「これ以上大きいと、隠密迷彩で隠しきれないんですよ。下手にこの辺りの国を警戒させるわけにもいきませんし、それでも三人くらいなら乗れます」

「――わたし、前？」

「ええ、落ちないようにちゃんと抱える所存です」

「ん」

オリガは頷くと、レクティファールに抱えられて銀竜の背に跨った。杖はレクティファールが受け取って銀竜の体の横に括りつける。

さらにオリガの身体に固定帯を回して鞍に接続すると、レクティ

ファールはフェリスを振り返った。

「フェリス、行きますよ」

「え？」

レクティファールの口調は、ちょっと買い物に行きましょうとでも言うような気楽さであったが、その言葉を向けられたフェリスは全身から嫌な汗が吹き出すのを感じた。

銀竜が彼女をじろりと見据えていることも、原因の一つではあるのだが。

「時間がありません。乗れないというなら、抱えて差し上げますが……」

「乗れる、乗れるよ！」

わたわたと銀竜に駆け寄るフェリス。

そんな彼女を馬鹿にするように、銀竜が「ふん」と鼻息を漏らした。

◇　◇　◇

駐屯地から飛び立った三人は、一路東へと進路を取っていた。

他国の防空圏ということでフェリスの神経はやすりで削られるようにすり減っていったが、銀竜ゾーリャの首に括り付けられた魔導珠が隠密迷彩術式を展開しているらしく、邀撃騎が上がってくることもなかった。

唯一の難点といえば、隠密迷彩術式を展開しているせいで防寒防壁が緩くなり、寒い寒い風が三人を襲っていることくらいだろう。

「さ、ささささ、さぶい……」

「うーん、試作品じゃこんなものですかねぇ……制式化は遠そうです」

自分にしがみつくフェリスの切実な声に、隠密迷彩術式の魔導珠を制御するための表示窓を眼前に展開し、レクティファールはぼやいた。

軍の研究所で試作された品を取り付けてみたのだが、無人ならともかく騎兵が乗った状態では余り使い物にならないようだ。さりとて龍種ほどの大きさを覆うだけの術式はまだまだ開発途中で、実戦

でこれらの装備が使用されるのは随分と先になりそうだった。

「どど、どうして、ふ、ふたりは平気なの？」」

真っ青な顔のフェリス。唇は紫になり、まるで死に化粧をしていない死体のようだ。

「うーん、個人用の遮熱術式を展開しているからでしょうか」

「――同じく」

「だったらボクにも術式掛けてよ！　寒いんだよっ！」

フェリスが最後の力を振り絞った訴えはしかし、オリガにはばっさりと切り捨てられた。

「間に、障害物があって無理」

「レクトは！」

「やれなくはないですが……オリガと違って余り上手くはないです

よ？」

「もう何でもいいよ……そろそろ腕の力も限界だよぉ……」

「そりゃ大変です、急がないと」

レクティファールは台詞と違って慌てた様子を欠片も見せず、小さく撃発呪文を呟いて遮熱魔法をフェリスの身体に掛けた。

ふっと和らぐ寒さ。フェリスは大きく息を吐き、安心したように顔を緩ませた。

「ふぁああ……生き返る……」

「確かに、先程までは死体のようでした」

「余計なこと言わないでよっ」

むきゃーと怒るフェリス。

レクティファールの背中に爪を立て、がりがりと削った。

「痛い痛い」

「ボクの苦しみの百分の一でも味わうといいよっ」

手綱を握っているせいで反撃出来ないレクティファール。フェリスはこれまでの恨みを晴らさんと引っかき攻撃を続け、鞍から落っこちそうになって慌てて止めた。

固定帯は締めてあるものの、それだって完璧ではない。飛竜の背中で余計な動きをしないというのは、もはや常識であった。

「お、落ちるかと思った」

「本当、危ないからやめてください」

「――うん、そうする」

言って、素直にレクティファールにへばり付くフェリス。

大きな背中だなぁと心中で呟き、そんなことを思う自分に赤面した。

◇　◇　◇

しばらく空を往き、フェリスが夜空を見上げるのにも飽きてきた頃、彼女はふとレクティファールから「大事な話」とやらを聞いていないことを思い出した。

自分を連れ出すための方便だったのかもしれないと思ったが、それなら単に「連れて行きたい場所がある」と言えばいい。拉致同然にここまで連れてきたのだから、黙ったまま何も言わずに連れ去ることだって出来ただろう。

「――ねえ、レクト」

「何でしょうか」

「大事な話って、まだ聞いてないよ」

「ああ、確かに」

レクティファールの背中に頬を押し付け、フェリスは反応を待った。

一瞬だけレクティファールの脈拍が不規則になったような気がし

たが、すぐに落ち着いた拍子に戻る。

「――フェリス、一応言っておきますが」

「何？」

「落ち着いて、聞いてください。出来るだけ混乱しないように」

「だから、何？」

重ねて問い掛ければ、レクティファールはこの期に及んでも躊躇っている様子だった。

フェリスはレクティファールを急かすために、その背中を抓る。

「痛いんですが」

「ボクに関わりのあることなんでしょう？　そのボクが聞きたいって言ってるのに、どうして話せないの？」

「話せない訳ではないんですが……」

ぐい、と抓る指に力を込める。
びくりとレクティファールの背中が震えた。
「話して」
「――はい」
強い口調で言えば、レクティファールは項垂れるように口を開いた。
そして、静かに、それでいてフェリスにとって衝撃的な一言を告げた。
「あなたの両親は、生きています」
「――？」
フェリスは始め、レクティファールが何を言っているのか理解出来なかった。
聞き間違いかとも思った。だが、聞き間違いにしては耳に残り、彼女は何度も何度もその言葉を反芻する。

そして大きく目を見開き、不安定な鞍の上でレクティファールの肩に顔を乗せた。

そちらの方が、レクティファールの声がよく聞こえると考えたのだった。

「どういうこと!?　お義母様は……マリア様はそんなこと一言も言ってなかった!」

「私から、口止めしたのです。マリアに非はありません」

「口止めって、それになんであなたがお義母様のことを『マリア』なんて呼ぶの？　それじゃあまるで……」

あなたが蒼龍公に命令できる立場にいるかのよう――――そう言おうとして、フェリスは口を噤んだ。その代わり、レクティファールの両手に挟まれたオリガが振り返り、フェリスに頷いてみせた。

「――多分、フェリスの考えてる通り」

「じゃあ……！」

自分は今まで、知らないまま将来の伴侶と過ごしていたのか。

ときに一緒に料理を作り、ときに一緒に課題に挑み、ときに一緒に晩酌をした。

そして彼は、自分が驚くほどに尽くしてくれていた。いつでも自分をその背に守ってくれたし、自分の名誉を守るために圧倒的不利な戦いでも勝利してくれた。

「れ、レクト……」

口に出してみれば、その名が自分の中でどれほど大きくなっていたのか自覚出来た。

自分はいつか皇家に嫁ぐ身だからと、必要以上に近付くことを恐れていた。惹かれてしまえば、別れが辛くなると思っていた。

だが、近付いても良かったのだ。

「ねえ、本当に？」

「ええ、ご両親は……」

「そっちじゃないの！　ううん、それもすごく大事だけど、もう一つ、あなたの本当の名前っ」

両親が生きているということだけでも大きな衝撃だった。

それこそ一つ一つ、心を整理していかなくてはならない程に。

だからこそ、フェリスはレクティファールに求める。

「教えて、あなたの名前」

もしも自分が考えている通りなら、ついさっき知った自分の中の気持ちも隠さなくて済む。

押し込めて押し込めて、辛い思いをしなくて済む。

幾つもの感情を抱えたフェリスはレクティファールの唇が、その名を刻んだのを見た。

「レクティファール」

告げられ、目を見開くフェリス。

こうして最後の龍姫が舞台に上がり、ここに総ての準備は整った。

第二四と半分の話「黒龍姫の摂政考察」

いずれ夫になる男の腕に挟まれて、オリガは珍しく自分の思考を持て余していた。

研究一筋。母親も似たような性格で、「黒龍公は皇国貴族の中で最も社交性がない、いや、社交性という言葉を辞書から削除している」と言われる程に、浮世の雑事には興味を示さない。だから、自然と娘であるオリガにも社交性を求めることはせず、好きなように魔法の研究をさせてくれた。

役目として摂政の婚約者となったが、その摂政もオリガの趣味については「人の迷惑にならない」ことを条件に特に制限を付ける考えはないらしい。その点では、まったくもって自分に相応しい夫君であるとオリガは思っている。

父を知らない自分にとって、そもそも夫婦生活というものがどんなものかは、書物か人伝に聞く噂話くらいしか情報源がない。そもそも母が誰と交わって自分を産んだのか、それさえも知らないのだ。

アナスターシャはオリガの祖母に当たる先代黒龍公に許しを得てふらりと旅に出ると、数百年後に一人の赤子を連れて帰って来た。検査を受け、遺伝的には間違い無くアナスターシャの子どもであるということを確認した上でで、正式にニーズヘッグ公爵家の者となったが、未だにオリガの父が誰であるのか、それは分かっていない。アナスターシャが語ろうとしないこともあるだろうが、オリガが父という存在に興味を抱かなかったというのも理由の一つだろう。

いつしか周囲もアナスターシャの相手を探ることをやめ、彼女が正式に黒龍公となる頃には誰も真実を明かそうとは考えなくなっていた。オリガがアナスターシャの娘であるということは確実で、ならばそれ以上藪をつつくこともないという、ある種の保身だろう。

鉱山資源に恵まれた領地を持ちながらその管理を自ら集めた家臣団に丸投げし、宮中の権力争いにも一切介入せず、貴族としての役割を最低限果たすだけ。オリガが見てきたアナスターシャは、そんな姿ばかりであった。

家臣団は優秀で、その質は皇王府に次ぐと言われているが、主が大した指示も出さないのに広大な領地を上手く切り回しているのだから、ひょっとしたら皇王府よりも優れた人材が揃っているのかもしれない。その家臣団の筆頭でオリガの傅役でもあった岩窟小人の伯爵は、毎日毎日アナスターシャに苦言を漏らしては研究の邪魔だと追い出され、オリガに「あのような当主になってはいけません」と言って聞かせるのが日課になっていた。

その伯爵も、今は息子に家督を譲って悠々自適の隠居生活を送っているらしい。

オリガが摂政の婚約者となったとき、一番早く祝いの報せを送ってきたのも彼だ。まるで孫娘が嫁に行くかのような気分だと書いてあったから、彼にとって母は娘のようなものだったのかもしれないと思う。

そして自分は、あの婚約を切っ掛けに広い世界を見るようになった。

これまでは書物の中、城の中、研究所の中が世界の総てだったというのに、たった一つの切っ掛けでこうも変わるものかと密かに驚いている。

銀竜の背に乗って、男の腕に抱かれ、夜空を飛ぶなんて皇都の屋敷や研究所に居た頃は予想だにしていなかった未来だ。

それもこれも、あの親戚の小娘――背丈で言えば自分よりも大きいが――に呼び出されたことから始まっているような、そんな気がする。

◇　◇　◇

内乱の頃、オリガは黒龍公の領地に戻っていた。

正確に言えば、オリガの身の安全を確保するために家臣たちが無理やり領地に呼び戻したというべきだろうか。ただ、フェリスは騎士学校に留まっており、二人が同じ場所に居ることで当代皇王に良からぬ考えを抱かせないことが家臣たちの本当の目的だったのかもしれない。

その頃、騎士学校の第〇八九班は今とは違う面子だった。フェリス、ルフェイル、パトリシアはそのままだが、現役士官枠には別の士官が収まっていた。その士官は原隊に復帰せよという命令を受けて軍に戻り、そのまま騎士学校に帰ってくることは無かった。

殉職したらしい。

らしいというのは、内乱が終わって〈ユーノス〉に戻ったオリガには彼の死の真相を知る権限がなかったからだ。それは班長であるフェリスも同じで、たかが一介の候補生に知らされる情報など大したことではないと、改めて知ることが出来た。

その後しばらくフェリスは塞ぎ込み、班も何処か居心地が良くなかった。誰も彼もが気落ちして、周囲も仲間を喪った彼らに遠慮して、何とも暗い雰囲気の中でしばらく過ごすことになった。そんな雰囲気が嫌で、研究所に篭った。

それからどれくらい経った頃だろうか、研究所に知り合いから手紙が届いた。

紋章付きの封蝋で閉じられた立派な封筒。差出人は、メリエラ・リリ・リンドヴルム。

珍しい奴から手紙が来たと、興味が湧いた。

中を見て、もっと興味が湧いた。

婚約したという内容だった。そして、オリガも同じ男と婚約することになると記してあった。その言葉を証明するように、翌日母からその旨を記した手紙が届いた。

メリエラの手紙は半分以上が惚気話であったが、むしろ、あの融通の利かないという点ではフェリスにも匹敵する娘が、こうもだらしのない文章を送り付けるということに驚いた。身内と言えばその通りだから、他の者に送ったであろう手紙はもう少し『まし』なの

だろうが。

その手紙で一週間ほど暇を潰したオリガであるが、その数日後に再び同じ人物から手紙が届いた。

今度は、惚気ではなく愚痴が書いてあった。

やれ「彼は異性に無頓着であるように偽装した女好き」だの、「近衛の護衛たちに街中での護衛方法を研究させているのは街に降りて女漁りをするため」だの、「仕事ぶりは真面目なのに対人関係では我侭な子ども」だの、「あれだけ念入りに教えておいた自分の誕生日を忘れていた」だの、結局は最後の一言がそもそもの原因だろうという便箋が延々と十数枚。

文字を読むことに苦痛を感じたのは、生まれて初めての体験だった。

途中怒りに駆られて筆圧が上がったかと思えば、今度は怒りが悲しみに取って変わったのか急に文字が薄くなり始めて何とも読み難い。また、延々と愚痴を垂れ流したあとにはその愚痴の原因を庇うような言葉が同じくらい続き、文句を書いていると思えばいつの間にか褒め言葉に変わっていたりもする。

恋愛云々には余り興味のなかったオリガだったが、このメリエラの変化にはひどく知的好奇心を刺激された。もしかしたら、メリエラの相手に真正面から意識を向けたのはこのときが初めてだったのかもしれない。

オリガはいずれ自分が嫁ぐ相手だというのに、メリエラから迷惑な手紙が送られてくるまでは全く興味を持てなかったのだ。オリガ

としては仕方がないと思うが、相手の男の立場で考えれば多分に不満もあるだろう――――少なくとも、彼女はそう思っていた。

だが、実際に顔を合わせてみれば、男はオリガの予想の遙か上を行っていた。

女好きかと思えばむしろ肝心な場面で逃げ腰になり、そのまま逃げるかと思えば急に攻勢に出たりもする。予想しない位置から攻撃されたことも一度や二度ではない。余計なことをせずに素直に真正面から向き合えばいいものを、変に相手のことを考えて無意識のうちに繞回運動を行なってしまうというのが、オリガが抱いたレクティファールの第一印象だった。

自分に会いに来るというだけなら昼間、騎士学校の講義の合間にでも顔を出せばいいのに、わざわざ学究院にオリガの予定を確認し、研究室に確実に居ることを確認してから訪れるものだから、学究院で余計な噂が立つこともあった。そして、本人がそれを全く気にしていないというのが一番の問題だとオリガは思う。

「オリガが喜ぶと思った」という理由だけで、世界に数冊しかないという稀覯本を探し出してきたこともあった。それも皇王府の力を借りず、自ら古本商を回って情報を集め、好事家から買い取ったというのだから、何とも呆れた話だ。だが、呆れつつも心底喜んだのは確かだ。

苦労を苦労と感じない才能とでも言うべきか、苦労の中に楽しみを見付けるというのはレクティファールの隠れた才能だとオリガは考えている。国主としての重責を常に感じる生活の中で、判断間違いや疲労の元となる不要な精神的重圧を発散させるために身に付けた自己防衛手段、若しくは〈皇剣〉による自己保全機能の一つなの

かもしれない。

聞くところによると、フェリスの好きな銘柄のお茶を取り寄せたり、パトリシアのために皇都まで買い物に行ったこともあるようで、さらにルフェイルさえもレクティファールから貴重な資料――最近になって軍の定める軍事機密文書から除外されたものの、数が少ない他国の砲兵運用の資料――を貰ったことがあるらしい。第〇八九班以外でも相当数の候補生がレクティファールに色々手を貸して貰った経験があるらしく、彼だけではなく彼の上官であるフェリスの評価までも候補生たちの間で急上昇しているとのことだった。

これまでフェリスは、優秀ではあっても融通が利かず、真面目過ぎるきらいがあるということで他の候補生たちから距離を置かれていた。それがレクティファールが来てからというものの、ちくちくと他人を刺していた角が取れて丸くなり、全体的に付き合い易くなったらしい。確かに最近、フェリスは学友たちと街に行くと言って出掛けることが増え、それは教官たちの間でも良い変化として受け止められている。

人付き合いの苦手な士官というのは、現場ではあまり好かれない。能力があって人付き合いが出来ない士官と、能力は平凡だが人付き合いの出来る士官なら、現場は後者を選ぶものだ。上下の意思の疎通が出来ない部隊など、とても戦力として数えられたものではない。

摂政としての立場を思えばある意味では当然なのかもしれないが、レクティファールは現状手元にあるもので出来うる限りのことをしようとする。それは人であったり、物であったり、資産であったりするが、他人の人間関係までも手段の一つとして見るのは元々の気質か、責任ある立場になったことでそのような気質が備わったのか。

前者だとすればそれはそれで問題ないが、後者だとすれば元々の性格は統治者に向いていないのではないだろうか。

「無理と無茶が大好きで、無謀を無謀と知らずに実行する」とはメリエラの愚痴の一部である。それは自分の立場と能力を把握しきっていない未熟の証明と考えることも出来るし、オリガはこれまでの付き合いからレクティファールにそういった傾向があることをほぼ確信している。

自分たちは四龍姫史上、二番目に苦労するかもしれない。

オリガはそう思い、いつもと同じ表情で、しかしいつもより少しだけ気落ちした溜息を漏らした。

「教えて、あなたの名前」

フェリスの震える声。

オリガはその声に歓びが多く含まれていることに気付いていた。

家のための婚儀が生まれたときから決まっている自分たち貴族の子女にとって、多少なりとも自分から好いた相手に嫁ぐというのは望外の幸運だ。

フェリスがレクティファールを憎からず思っているのは誰の目にも明らかで、ただ、それがウェルチ・フォードというレヴィアタン公爵家の家臣にとっては面白くないことなのだろうが、それ以外の者たちからしてみれば、年頃の娘が恋に身を焦がすというのは余り

にも健全で、場合によっては微笑ましく映るらしい。

フェリスに友人と呼べる者たちが増えたのは、そんな身分や立場の関係ない人としての『当たり前の姿』に安堵し、これまでのフェリスを前にしては拭えなかった隔意が薄れたことも大きな原因ではないか。

思えば、レクティファールは最初から自分たちを大切にしようとしていた。

たとえ始めのうちは愛玩動物に対するそれに近しいものだとしても、時間を掛けていけば感情の形は洗練され、その人にぴたりと重なる感情へと変化する筈だ。

（――――でも、わたしの扱いは変わらない）

レクティファールから受ける自分の扱いに思い至り、この身体がいけないのだろうか、と真面目に考えるオリガ。

考え方だけならレクティファールに一番近いという自負も無い訳ではないが、世の男が総て父や祖父のように小さく物静かな女性を気に入るとは限らない。

（今度、リリシアに相談してみよう）

〈四界〉の力を身体に封じていたリリシアは、今後も余り成長に

期待出来ない筈――――本人が聞けば怒り狂った挙句に大泣きしそうなことを平然と考えると、オリガは耳を欹てて背後の二人の会話に耳を傾ける。

「レクティファール」

「じゃあ……やっぱり……！」

今のうちに喜ぶといい、どうせ、もうすぐ地獄に落とされる――――意識の芯の部分が零した冷たい声、ぞっとするほど抑揚のない自分の声が脳裏に反響し、オリガは微かに眉を顰めた。

フェリスは縁戚であると同時に友人でもある。同じ立場であることに共感も出来るし、だからこそ、その真っ直ぐな慕情が成就するならこれほど嬉しいことはない。

メリエラのようにフェリスに嫉妬を抱くほどレクティファールに執着心がある訳でもなし、そもそも、急がなくても番いになるまでにはまだまだ時間がある。そんな風に考えていたから、自分の中でそんな冷たい考えが発生することに彼女は驚いた。

（……？）

まさか、嫉妬しているとでもいうのだろうか。

父の居ない自分が、まだ誰にも恋慕の情を抱いたことがない自分が、その二つを得た友人に。

（まさか）

自分にそんな感情はない。

人形とあだ名される自分に、そんな感情はない。

母と同じく、適当な相手と番いになり、適当に子を成し、適当に好きな研究をして余生を過ごすだけで十分だ。

十分の、筈だ。

（――――）

背中に感じる体温に、少しだけ苛立つ。

フェリスとの会話に意識を向け、自分のことなど忘れているだろう男の存在に嫌悪感を覚える。

何故、自分がここにいるのか。仕方のないことだと分かっていても、やり切れなくなる。

（――――おかしい）

おかしいと思いつつも、オリガは無意識のうちにレクティファールの両手を自分の身体に回していた。

手綱を握っている手を引っ掴み、自分の腰の辺りに落ち着ける。

さらに身体を後ろに向けてずらし、ぴったりと背中を貼り付けた。

「オリガ？」

頭上から、訝しげな声が聞こえる。

聞こえるが、オリガはその声を無視した。

「――ああ、身体を預ける場所が欲しかったんですね。気付きませんでした。これでいいですか？」

ぐい、と腕に力が篭った。

密着の度合いが増し、背中が少しだけ熱くなった。

「――――」

オリガは、違う、とは言わなかった。

小さな身体だから、鞍の上では安定しないのだとレクティファールは思っている。そして、オリガはそれを否定しなかった。

フェリスに対する、小さな遠慮だった。

「オリガ、大丈夫？」

レクティファールの向こうから、彼女を心配するようなフェリスの声が聞こえた。

大切な話を中断させられたのに、少しも怒っていない。

オリガは黙ったまま頭を振り、小さく「なんでもない」と答える。

二人は心の底から納得しているようではなかったが、それ以上オリガに言葉を向けることはなかった。

ほっとした。

◇　◇　◇

オリガ、とそう呼ばれるようになってから、彼女は彼女なりにレ

クティファールという男を理解しようと努力を始めた。

とりあえず女性関係からと思ったのは、ほぼ確実にメリエラからの手紙が原因であるが、しかしその手紙だけでは情報源として不十分だと考え、母にレクティファールについて色々な情報を集めてもらった。不服ではあるが、オリガは余り社交界に繋がりを持っていない。夜会などに呼ばれてもなんのかんのと理由を付けて参加せず、自分の誕生日さえ一族だけで済ませてしまう。

アナスターシャも同じようなものだが、公爵家当主として必要最低限の繋がりは持っていた。オリガは、その繋がりから情報を得ることになる。

そこで手に入れた情報は、面白いほどにメリエラの手紙と違うものだった。

社交界ではレクティファールの身持ちの固さに頭を悩ませている連中が居るくらいで、メリエラの言うような「女好き」という評判など皆無に等しい。確かに摂政に就いた直後ならリーデ・アーデンを召し上げたり、四龍姫との婚約もあってそれなりに周囲も盛り上がっていたが、それ以降、レクティファールには浮いた噂が一つもない。

どこぞの貴族令嬢が皇王府主催の晩餐会でレクティファールに迫ったという話はちらほらと聞かれたが、それが成功したという話は出てこない。摂政という立場であれば政治的交渉の一環として有力者の娘と懇意になることも珍しくない筈なのだが、知人友人としてはともかく、男女の仲になった者は居ない。

当代皇王の喪が明け、皇王即位と正妃側妃との婚礼が済めばまた

違うのかもしれないが、それでも今の段階で愛人恋人が両手の指程度は居てもおかしくはないのである。

貴族や有力者とて、明確な形の便宜を図ってもらおうなどと考えている連中はそう多く無い。今の段階なら単に摂政と繋がりがあると周囲に示せれば十分なのであって、変に摂政との縁戚関係を狙って皇王家、四公爵家に睨まれることは望んでいない。

愛妾アリアの離宮で貴族子女に対する行儀見習の機会が開かれていることもあり、貴族たちはそこに自分たちの娘や孫を送り込むことで自分たちの無言の望みを摂政に伝えているが、それもまだこれという成果を挙げた訳ではない。

国内でもそうなのだから、国外の勢力はもっと気を揉んでいる。

大国である帝国とイズモは辛うじて摂政への皇女輿入れを実現させているが、それ以外はさっぱりだ。内乱のときに皇国を裏切った小国の中には「愛妾でもそれ以下の扱いでも構わない」と言って皇王府や外務院に縋り付く輩も居るほどに、レクティファールの対人関係は潔癖に過ぎる。

一〇人、一〇〇人とは言わないからせめて片手の指程度の愛人を作って欲しい、とは、割と切実な外務官僚の言葉である。

他国の貴族や有力者の子弟と皇国貴族との婚姻は既に幾つも成立し、それを足掛かりにして各地に外交の手を伸ばしている皇国外務院だが、摂政という切り札を封じられているためこういった形の外交には余り重点を置けずにいる。現在の皇国の外交政策は先代の頃とは違っており、その差を埋めるためにも使える手札は総て使いたいというのが、外務院の偽らざる本音なのだろう。既に摂政となっ

ている以上、他国からの留学生との間に友人関係を結ぶことは難しく、喪に服しているから大々的に他国から妃を迎えることは出来ない。

おそらく、今日も明日もレクティファールに提出される書類には外務院からの切実な声が何枚も混じっているに違いない。君主制国家でその君主が切り札として不十分だというのは、外務官僚にとって悪夢に等しいのだ。

オリガはそんなレクティファールの情報を前に、果たして自分はどうしたいのだろうと考えた。

もう少し他者に興味を持てとでも言うのか、余所から文人を招いて直接政治に関わりのない分野で他国との関わりを持つように提案してみるのも良いかもしれない。

皇妃は政治に関われないが、今のオリガはまだ皇妃ではない。メリエラは軍人である上にレクティファールが関わると視野が狭くなるし、フェリエルとファリエルは医官とは言え軍人だから余り政治に関わろうとしない。フェリスは素質的には、そういった交渉ごとに向いているかもしれないが、まだまだ経験が足りない。この間のグレン大公との交渉だって、レクティファールが居なかったらどうなっていたか分かったものではないのだ。

オリガは最年長の四龍姫として、いずれ後宮を支えなくてはならない立場にある。名目上第一妃が後宮の最高位であるが、実際には最年長の正妃が後宮を取り纏めることの方が多いのだ。

オリガは目の前に横たわる現実に嘆息し、面倒臭いと思いながらもこれまでの自分の得意分野以外の研究を始めることになる。

沈黙の龍姫は誰にも気付かれないまま、深く静かに動き始めたのだった。

◇　◇　◇

オリガが思考の海で微睡んでいる間に、レクティファールとフェリスの会話は佳境に入っていた。

レクティファールの正体を知り、感情を抑えていた蓋を取り払うことが出来たフェリス。

穏やかに微笑んでレクティファールの背に抱付く彼女であるが、レクティファールの表情は固いままだった。

それに気付いたのは、オリガだけ。

「フェリス、ご両親のことで一つお話ししなくてはならないことがあります」

そう口にしたレクティファールが手綱を握る手に力を込め、オリガはその手が微かに震えていることに少しだけ驚いた。

驚きのまま振り返ってみれば、レクティファールの表情はほとん

ど感情のない人形然としたもので、いつもの穏やかな笑みは欠片も見られないし、その笑顔の裏にある余裕も見えなかった。

オリガは少し悩んで、その手に指先を触れさせる。びくりと震えた手、目を見開いたレクティファールを、彼女は黙って見上げた。

ほんの一秒足らずの視線の交錯。だが、レクティファールもオリガも、それで十分だった。

「さっきの、お父さんとお母さんが生きているっていうこと？　もしかして、上手く逃げられたのかな、お父さんたちなら、ちゃんと力も使えるし……」

「いいえ、いいえ、違うんです」

「違うって……」

フェリスも馬鹿ではない。

ここまでのレクティファールの態度を見れば、両親に何か良くないことが起きたということは理解出来た。

先ほどまで穏やかな喜びで満たされていた心に、途端に寒々しい風が吹き荒れる。不安ばかりが湧き上がり、フェリスの目が揺れた。

「ご両親は、これから向かう先に捕らえられています」

フェリスの手が、レクティファールの服を掴む。

言葉を発しようとした口が、何の音も出せずに閉じる。

ただその目が、怯えていた。

「そして、私はその救出のためにあなたたちをマリアとアナスターシャから預かりました」

言いたくない。

聞きたくない。

オリガには、二人の心が手に取るように見えた。

「ですが、その救出が成功しないと判断したとき、私は私として決断しなくてはなりません」

「レクト……」

フェリスの掠れた声は、レクティファールの言葉を止められなかった。

「フェリス。私はあなたの両親を殺すために、あなたたちを連れてきました」

レクティファールの冷たい宣告に続いたフェリスの悲痛な叫びが、オリガの神経を大いに逆撫でた。

第二五話「這い寄る闇×忍び寄る決戦＝決して賞賛されぬ戦いへ」

上空に飛竜が現れた。

その一報が上空監視を行っていた近衛兵より齎されたとき、森の中に設営された隠蔽陣地はにわかに騒がしくなった。騒がしくなったと言っても兵士たちが声を発したという訳でもなく、対空砲火が上がったということでもない。

巧妙に隠蔽された陣地の各所で待機していた近衛の精兵が、その身に戦意を滾らせ、各々の役目を果たすべく意識を集中したということだ。

ただ兵たちの纏う雰囲気が変わる分だけ、場の雰囲気も変化する。

陣地の一角にある森林迷彩の施された小さな天幕の中で、紅龍公の姫君二人は陣地の纏う空気の変化に顔を見合わせた。

「――――来たのかしら」

「分からないな。ここから出るな、と言われている以上、確認することも出来ない」

フェリエルがファリエルの呟きに答えたのと同時、天幕の外から「飛竜個体識別波動確認」の声が聞こえた。陣地の空気も少々緩み、フェリエルは今日何度目かの点検を行っていた愛用の診察具を、急いで携帯嚢に仕舞い込んだ。

「姉さん、先に行ってるから」

そうこうしている間に一言残して姉より早く天幕を飛び出していったファリエル。

なんだ、心配しているのはお前もじゃないか――――フェリエルは妹の顔に付き合いの長いごく一部の者たちくらいしか気付かない程度の焦燥を見て取り、苦笑した。医者として本心を隠す術は必須であるが、ファリエルのそれはフェリエルに較べて甘い。

しかしその甘さが、フェリエルには羨ましくもある。彼女が今更得ようと思っても得られないものだからだ。

人々はフェリエルをこれといった欠点のない人物だと見ている。医者としての能力も、龍種としての能力も、個人の好みの問題はあるが容姿でさえも完璧に近い。

だが人は、『完全』や『完璧』に憧れる生き物だが、それが目の前にあれば忌避する。自分には決して届かないから、それだけの理由で。

「――――本当に、羨ましいよ」

完璧、完全、全能、無欠、どんな言葉で表そうともこれだけは言える。

そんなものは存在しないと。

いま空から舞い降りようとしている一人の『完全兵器』さえ、その実態は欠点だらけの『欠陥兵器』なのだから。

◇　◇　◇

上空から見ても、近衛軍の隠蔽陣地はそこが陣地と分かっていなければ判別は難しかった。

森の中に溶け込み、魔法的にも視覚的にも巧妙に隠蔽された陣地。その中央にある広場に、レクティファールの操る飛竜〈ゾーリャ〉は舞い降りた。

空を叩く翼が風を生み、ゾーリャに駆け寄ってきた人々が揃って顔を覆う。やがて銀色の翼が風を生むのを止めると、彼らは飛竜とその背に跨る者に向けて、まるで時計で計ったように綺麗に揃った敬礼を行った。

レクティファールがゾーリャから飛び降りて答礼すると、敬礼の姿勢を解いた一団の中から一人が進み出る。

隠密任務であるからか、階級を表すようなものは何一つ身に付けていない。ただ、レクティファールはその顔を知っていた。

彼らが本国を出る前、皇城で密かに顔を合わせていた近衛軍の少佐だ。

「殿下、お待ちしておりました」

「うん、ご苦労」

「はっ」

手綱を担当の近衛兵に預けると、レクティファールはゾーリャの背中に乗ったままのオリガをひょいと持ち上げる。まるで子どもをそうするようにして持ち上げられた瞬間、オリガの眉がぴくりと不機嫌そうに揺れたが、生憎と夜の暗さもあってレクティファールがそれに気付くことはなかった。

オリガを地面に下ろし、さて次はフェリスだと飛竜に向き直ったレクティファールだが、彼がその手を伸ばすと、フェリスはその手をすり抜けるようにして飛竜から飛び降り、そのまま陣地を抜けて森の中に走り去ってしまう。誰もが呆気に取られるなか、いち早くそのあとを追ったのはファリエルだった。

「――……」

一瞥。

レクティファールに向けられたその一瞬の視線の中に、万感が秘められていた。

怒りと憤りがあれば、悲しみと哀れみもある。そんな複雑な眼差しに、レクティファールは無表情で頷いた。

「――……」

言葉無き会話だった。

ファリエルは一言も発さないままフェリスを追って闇に消え、レクティファールは呆然としたままの部隊の主立った面々を促して天幕へと向かう。

そんな二人を、フェリエルとオリガが静かに見詰めていた。

◇　◇　◇

天幕に入ったレクティファールたちは、絞られた光の中で数枚の

地図と建物の図面を広げた大机を囲んでいた。

どの地図にも図面にも細かく手書きの注釈が入っており、この地図と図面を作るためにどれだけの労力が費やされたのかを窺わせる。

その中の一枚、半ば山に埋まったような形で建つ建物の図面を見下ろしながら、レクティファールは口を開いた。

「――建物の構造については、これで総てか」

「はい、部隊に所属する岩窟小人の地中探索技能士に地下まで探らせました。地下の排水処理施設跡地を利用した隠し通路が二箇所、それ以降に造られたと思われる隠し通路が三箇所確認出来ました。前進偵察を行い、歩哨や見回りの時間帯も確認してあります」

旧帝国時代の遺跡ということで、この作戦が立案された時点ではまだ施設の全容が把握出来ていなかった。その情報の穴を埋めるべく、部隊の者たちはこれまで泥に塗れ、砂を噛むようにして地道に情報を集め続けた。

施設に入る輸送車の積載物、その中の食料品や生活必需品の量から施設内にいる研究者や警備部隊の数を計算し、持ち込まれる薬品の種類や近くの街に出た施設関係者の独り言や世間話から人質となっている二人の状態もある程度把握している。

この地に流れこむ情報や物資の流れから、この研究施設が帝国国外にあって帝国本国の管轄下にあることは分かっている。それも帝

国内で通称〈第二派閥〉と呼ばれる第二皇子ガルガイアンの一派がその背後にいるらしい。

ガルガイアン派と言えば、帝国に拠点を置く複数の大商会を後ろ盾に、時期帝王位争いに参加している一派だった。表向きこの研究施設はその派閥に属する大商会の一つが所有していることになっており、事実その商会が各地で研究員を集め、さらに私兵として帝国軍の退役軍人を雇い、警備を担わせている。

彼らの目的が何であるかは推測の域を出ないが、この研究施設で得た技術を元にパルイエットやバレストローラの派閥を切り崩しに掛かるのか、どちらかに恩を売るのか、両方に恩を売って両者の間で良からぬことを企むのか――――おそらくそんなところだろうとレクティファールは考えていた。自分であれば他国にまで技術や情報を売り付けるが、こういった情報は得る相手と値段を間違えるととんでもないことになる。ガルガイアンがこういった謀略に長けていることは知っているが、その余波で皇国が不利益を被ることは避けなくてはならない。

それ以前に、ここで研究されている技術や情報は、流出してしまったら大陸の勢力の均衡状態を崩してしまいかねない危険な代物だ。極端な話、連鎖的に大規模破壊兵器が使用されてしまう危険性を度外視するなら、技術的にそこそこの小国であっても一人の龍族を確保すれば、大国とある程度交渉できるだけの戦力を持つことが出来る。

レクティファールは、それを何よりも恐れていた。

一度崩れた均衡は、一国の努力でどうにかなるものではない。そして勢力の均衡を維持しようと努力すれば、その努力の分だけ別に

割り振るはずだった力を消費してしまう。その消費した分を取り戻すためには、また別のことに使う筈だった力を消費する――――これを延々と繰り返していけば、その国家は使うべきところに必要なだけの力を注げない弱国に成り下がる。元々大した力のない国なら、滅亡する。

もしも勢力の均衡が崩れてしまうなら、それはある程度予想出来、対処出来る範囲でなくてはならないのだ。

レクティファールはこの大陸の勢力関係が、数年の後には大きく変わると予想している。大陸各地では国家間に歪が溜まり、それはそう遠くない未来に大陸全土を巻き込む大乱となるだろう。その大乱を利用しようとする者は大陸内だけでなく、他の大陸にも間違い無く存在する。

こんな所で余計な力を使うわけにはいかない――――レクティファールの考えは彼に近しい者たちに共通する考えであり、ここに居る者たちが共有する思いだった。

「施設の周囲を封鎖する準備は」

「戦力の半分、一個小隊をそちらに割くことになりますが」

「構わない」

地図を見下ろし、封鎖地点を指でなぞるレクティファール。

その範囲は狭く、数も多く無いが、限られた戦力しか持たないレクティファールたちには広く、多く感じた。

「万が一にも関係者を逃がす訳にはいかない。もしも拘束出来ないなら……」

レクティファールは天幕内の一同を見渡し、無感情に命じた。

「頭を潰し、誰も情報を得られないよう完全に徹底的に破壊しろ」

脳があれば情報を引き出せるかも知れない。一度死んだ肉体はすぐに劣化が始まって満足な情報を得られなくなるが、ほんの一部でも情報が残っていればそこから全体を復元することも、成功の可能性は低いが皆無ではない。

レクティファールの命令は人道にもとるかもしれないが、間違っているわけではなかった。一同は顔を蒼褪めさせながらも粛々と頷き、医者としての嫌悪感を押し隠したフェリエルさえ黙って首肯する。

「この作戦の絶対条件は二つ。一つはこの場から一つの情報も外に漏らさないこと、もう一つは我々がここに居たという痕跡を残さないこと」

皇国がこの一件に関与しているという確信を他国に与えてはならない。

勢力の均衡を崩さないための作戦が、逆に勢力の均衡を崩すようなことになっては本末転倒だ。

「作戦後、施設は完全に破壊する。再びこの施設が使われるようなことはあってはならない」

これも、一同に受け容れられた。

同じような施設が他にもあることは否定出来ないが、帝国内の情報や物資の流れから推察するにこの施設と同等以上の研究施設があるとは考え難い。ここさえ破壊してしまえば、当座の脅威は無くなるだろう。

レクティファールはそこまで言うと近衛の指揮官に目配せし、作戦の詳しい内容を説明するよう促した。大凡の道筋は示した、あとは本職の仕事だ。

「――では、詳しい作戦内容を説明します。まずは施設内への侵入経路の確認から……」

指揮官の指先を見ようと、天幕の一同が身を乗り出す。

レクティファールも同じように地図を見詰めながら、しかしその思考の一部はまったく別のことを考えていた。

ここから少し離れた場所で停止したままの二つの生命反応。

彼が個人として守らなくてはならない二人だった。

◇　◇　◇

森に入って少し、弱々しい月の光を反射して流れる小川の辺に彼女は居た。

蹲り、肩を震わせて嗚咽する従姉妹の姿に、ファリエルの胸が軋る。

「……フェリス」

それでも声を掛けたのは、ある種の職業病か、単に泣いている子どもを放置することが出来なかっただけなのか。

ファリエルは自らもしゃがみ込むと、自分たち姉妹と同じ人物から名を受け継いだ従姉妹の肩を静かに抱き寄せた。

「ごめん、何も心の準備をさせてあげられなくて」

「――～～っ」

固く目を瞑り、大きく頭を振るフェリス。この場の誰かに責任がある訳ではないのだから、ファリエルが謝る必要はどこにもない。

単に自分の感情を抑えきれない自分が悪いのだ――――フェリスは幾度も言葉に詰まりながらも、なんとかそれだけの意味ある言葉を紡ぎ出した。

「本当に、フェリスは叔母上にそっくりね」

フェリスの頭を掻き抱き、ファリエルは震える声で言った。フェリスが生まれながらに持つ、一本芯のある優しさは、間違い無く彼女の母親と同じ性質のものだ。

シヴェイラは間違ったことをすれば姪御であっても怒鳴り付け、場合によっては兄であるフレデリックを地面に這い蹲らせることも躊躇わない。原因は何であるのか、誰が何処に責任を負っているのか、それを真っ直ぐ見通す目を持っていた。

でも、だからこそ優しかった。

正しく真っ直ぐに生きる、ただそれだけで褒められた。

「あの馬鹿が大事？」

問い掛けてみれば、フェリスは何度も頷いた。

両親の出奔に原因のある皇王家の現当主を前にして、過去を見た恨みではなく、未来を見た思慕を抱く。それこそ正しくシヴェイラの娘である証拠だ。

ファリエルは心の奥底で何度も繰り返していた皇王家への恨み言を止め、自分の腕の中にいる従姉妹を慰めることに総てを注ぐ。

「本当に馬鹿よ、あれは」

他人の心など斟酌せず、同時に自分の心さえ無視することもしばしば。

フェリスが思っているよりもずっと愚かで、救いようのない男の筈だ。

「――――でも、メリエラは本気だった」

お互い、相手にあって自分にないものを見付けたのだろうか。足りないものを欲する感情ほど、人に人を求めさせるものはない。自分の中にある虚ろを埋めたくて埋めてくて、ときに相手を傷付ける

ほど求めて、そして手に入れてこの上ない幸福を味わう。

レクティファールは、自分に無いものを知っている。

そんな妙な確信が、ファリエルにはあった。

だからあの男は誰に何と言われても自分が欲するところを欲し、真っ直ぐに相手を求めることが出来る。

同性異性関係無く、立場役割関係無く、欲するものをがむしゃらに欲する。

（じゃあ、フェリスにあってあの男にないものは？　あの男にあってフェリスにないものは？）

或いは、自分にあってレクティファールにないものは何か、レクティファールにあって自分にないものは何か。

あの大人のくせして子どもみたいに他人を欲する馬鹿者が、心の底から本当に欲しているものは何か。

考え、考え、考え、そして自分の胸で泣く従姉妹を見詰めて――

――

「――あ、ちょっと分かったかも」

そう、ほんの少しだ。

ほんの少しだけ、頭痛がするほど考えて少しだけ分かった。

あの男は、フェリスは、

「レクティファールもフェリスも、同じものが欲しいんだね」

そして、自分もそれが欲しい。

答えが出れば当たり前の、なんでこんなことで悩んでいたんだろうと思うもの。

「分かるよ、フェリス。わたしにも分かる。わたしも欲しいから」

簡単で当たり前で、でも手に入れても気付けないもの、そして気付かないうちに失うものだ。

「わたしたちは、『自分』が欲しいんだ」

自分からは決して見えず、既に持っているが故に手に入れることが出来ない。

だが、他人を介してだけ人は『自分』の欠片を手に入れることが

出来る。

自分が自分であるために必要な『自分』。

他人が持っている『自分』を求めて、人は人を求める。

「見えないから、見える形の『自分』が欲しい」

いつしか、フェリスはファリエルを見上げていた。

充血した目で、半ば呆然と。

「勝手な想像だけど、そんなに間違っていないと思う」

「――うん」

フェリスの頷きを見て、ファリエルはほっと笑った。

難しく考えず、ただほんの少しだけ相手の思考を追い掛けてみる。

すると、思いも寄らないところから妙ちきりんな、でも変に説得力のある答えが顔を出す。

「とりあえず、戻ろっかフェリス。レクティファールも待ってるだ

ろうし」

「でも、戻っていいのかな」

不安気に顔を伏せるフェリス。ファリエルは笑ってその肩を叩いた。

「戻らなきゃ話にならないでしょ、あそこにいる人たちは、みんなあなたのご両親を助けるためにいるんだから」

「でも、助けられなかったら……」

フェリスの最大の不安はそれだ。

もしも救出が不可能であるなら、両親は皇国を守るために『処分』される。

龍族の身柄を皇国の関知しない範囲で好き勝手されては、国家の存亡にも関わる。フェリスがそれを理解出来ない道理はないし、現に理解し、一部ではあるが納得もしていた。

両親が皇国を捨てたのはどんな理由があっても覆せないし、その結果国に捨てられることも自らの蒔いた種でしかない。なにより二人は、出奔するまでこういった責任を負う代わりにその他の危険から遠ざけられていた。

先代陛下が悪い、とフェリスが声を上げても、おそらく誰も取り合わないだろう。内心は彼女に同情しても、それを表に出すことを皇国の統治機構は許さない。

不安は大きくなるばかりだ。

「助けられなかったらなんて今は考えてもしょうがないでしょう」

そう言って、ファリエルはフェリスの手を引く。

弱々しく抵抗するフェリスであったが、森の中を進むに連れ、だんだんと大きくなる喧騒に顔を上げた。

やがて、隠蔽陣地に戻った彼女の目の前には、先ほどまでの静粛な陣地の姿はなかった。

「第三分隊、もたもたするなっ！　殿下の御前で俺の顔に泥を塗るつもりか！　おらおらおら！　俺らの担当する閉鎖地点は一番遠いんだぞ！」

闇色の魔動式甲冑に身を包んだ一つの分隊が足早に陣地を飛び出し、

「違う！　甲種装備だ！　出し惜しみなんぞしてる場合か！　おい

ガイヤ中尉！　お前はこっちだ！」

「はいっ」

戦乙女の如き流麗な意匠の女性用魔動式甲冑の一団は、それこそ動きの邪魔にならない範囲で、積めるだけの兵装を積み、

「皇国魔導騎士の未来は俺たちに掛かっている！　この戦場に呼ばれたということは殿下もそれだけ我々に期待しているということだ！　その期待にお応えし、『殿下の魔導騎士』ここにありと示すぞっ！」

「応っ！」

近年ようやく実験部隊が設立されたという魔導師と前衛の中間的兵種である『魔導騎士』の一団が円陣を組んで気勢を上げ、

「屋内近接戦闘の専門家として、他の部隊に遅れをとることは許さん。近衛軍特殊警備隊の意地と力、存分に見せつけろ」

「了解！」

殆ど装甲の付いていない細身の魔動式甲冑を着た集団は部隊長らしき男の訓示に何度も頷き、

「いいな、何一つ要らない情報なんぞない。全部かき集め、全部掻っ攫え！」

「お任せあれ！」

施設に侵入して研究資料などの情報を確保する部隊はそれに特化した魔動式甲冑の面を上げ、にやにやとした顔で親指を立てている。

「――……」

フェリスはその光景に、ぽかんと口を開けて固まった。

まるで戦場のよう――否、事実としてここは戦場であるが、誰一人として救助の失敗を考えている様子はない。

彼らは自分の職分において全力を尽くせば、それだけの結果が得られると信じている。望んでいた結果が得られないのは自分たちの実力が及ばなかったからであり、運さえも実力のうちと考える彼らには、その運さえも引き寄せて見せるという気概があった。

負けない。

ただその一念が、ここに集う近衛たちを輝かせている。

「どう、フェリス」

隣に立つファリエルが、何処か誇らしげに問う。

戦っているのは自分たちばかりではない、自分の実力が足りなくてもその実力の中で全力を尽くせば、周囲はそれに応えてくれる。

生命を預け、生命を預かるとはそういうことだ。

「彼らは近衛として、摂政の下で戦えることを喜んでいる。それは功名心だとか、出世欲だとかもあるのかもしれないけど……一番の理由は、必要とされたからじゃないかしら」

必要最低限、それ故に最精鋭。

この場に呼び寄せられた者たちは、それこそ皇国随一の勇士たちと言える。

「誰もあなたの両親を切り捨てたいなんて思っていないわ。むしろ、無事に連れて帰りたいと思っている」

主君に率いられて皇族の縁者を救い出す、近衛にとってこれ以上

の誉れはそうそうあるものではない。

だから彼らは奮起し、陣地はある種の熱狂に包まれている。

「これを率いてきたのが、あの馬鹿」

勇士は決して暗君には御し切れない。

しかしこの光景の中に居る勇士たちは皆、その能力を総て発揮しようとしている。

それは、レクティファールが無能でない証拠だ。

「少し、信じてみたらどう」

あなたが好きになった相手を――――ファリエルの言葉はフェリスの心に深く入り込み、自然、陣地の中央で魔動式甲冑を装着している青年へと視線を向けさせる。

整備士さえ満足に居ない陣地ということで、装着の手伝いはオリガとフェリエルだった。

レクティファールは拙い手付きで装着を手伝う二人に何か話しかけた。二人は少し手を止めてお互いを見遣ると、先程よりも幾分か落ち着いた表情でそれに答えた。

何か二人を落ち着かせるような冗談でも言ったのか、その表情には微かな笑みさえある。

「信じることは力よ」

ファリエルのその言葉が、フェリスの中にすとんと入り込んだ。

◇　◇　◇

「今日も、このまま終わりそうだな」

「ですね、そして明日もこんなものでしょう」

体格の良い中年の男に、まだそれほど歳を取っていない青年が答える。

「まあ、この場所を隠すために使った予算を考えれば、当然のことではあるがな」

施設の警備を司る集中管理室に入って早六時間。この時間帯の警

備主任を務める男とその補佐を務める三人の男たちは、各々の席に座って眠気と戦っていた。

間に休憩挟んだものの、集中力は限界に近付いている。

そもそもこれまで、この研究施設が警備部隊の手が必要なほどの相手に狙われたことはない。

せいぜい近くの街に住む住人が森で迷って漁師に扮した警備員に街まで連れていかれるくらいで、これといって侵入者を迎え撃った経験もなかった。

この研究施設は、同じ国の者にさえ秘匿されている極秘施設だ。施設の研究員も恐ろしく厳しい選考基準で選び出され、一度入れば簡単に出ることは出来ない。

街に行くことも滅多に無く、日々の生活で溜まった精神的疲労を発散する機会も殆ど無い。

強いて挙げるなら、施設に捕らえられている被験者で遊ぶくらいか。

「――そろそろ引継ぎの準備でもするか」

「そうですね、ああ、早く本国に帰りたいなぁ」

「お前はもうすぐ帰れるんだから文句を言うな、俺なんてまだ三ヶ

月も先だぞ」

「すみませーん」

青年のおちゃらけた謝罪に怒るどころか、中年の男は苦笑を浮かべるだけだった。それどころか他の二人も声を上げて笑っているばかりで、職務中であるという意識も希薄だった。

長すぎる平穏に慣れてしまえば、精鋭さえ堕落する。

これは、その一例だった。

彼らは未だ知らない、彼らの前にある映像が、他者によって作り上げられた偽物であることも。

そして、彼らからほんの少し離れた森の中に、世界さえぶち壊すような『兵器』が潜んでいることも。

何も、知らない。

第二六話「想い＋想い＝ただひとつ、あなたのためにできること」

研究施設の地下、本来は施設の排水処理を行っていたであろう地下構造物と地上の施設を繋ぐ暗渠の中で、複数の気配が息を潜めている。

光を反射しないつや消しの黒。本来の塗装を覆う不躾な色合いの中で、頭部感知器群を守る超硬硝子の覆いの向こうに、それぞれ二つの光学感知器の『眼』が炯々と輝いていた。

感知器の機種の違いで輝きの色が異なるも、その『眼』には共通するものがある。

それは、機械である筈の光学感知器にさえ宿る戦意。

無機物に宿るそれらの戦意は、彼らの纏う装甲の――――今は黒色に塗り潰された左肩の装甲に刻まれた紋章と、装甲の塗装色に由来する。

刻まれた紋章は皇王家の星龍章、塗布された色は混じりもの一つ無い純白。

それは彼らが近衛である証にして、誇りそのもの。

たとえ漆黒に塗り潰されようとも、彼の心の中に刻まれた紋章と純白は決して侵されない。

近衛、近衛、近衛。そういずれも、近衛、近衛、近衛、近衛、近衛、近衛。

溝鼠のように悪臭漂う暗渠に潜みながら、彼らの心はただそこに尽きる。

自らは只の軍人ではないのだ。国家というふるさととそこに住まう総ての生命のために戦うのが国軍軍人ならば、近衛はそれらの他にただ一人のために戦う軍人。

それが幸運であるか、余人の判断は分かれるだろう。だが、ここにいる彼らは違う。

自分は今幸運であると自分自身に宣言し、その宣言を以て自らの全身全霊を懸けて戦おうとしている。

〈――各通路、見張りの通過を確認、施設内への潜入予定時刻まであと三〇……〉

ぱしゅん、ぱしゅん、と圧搾空気の音が連続し、彼らの顔を覆う超硬硝子の上から更に装甲が下りる。

光学感知器の映像が一瞬揺らぎ、再び鮮明になると、彼らの視界の端には突入まで残り時間二〇秒の文字。

魔動式甲冑の発動機出力を、待機から巡航、巡航から準戦闘域へ。

唸りを上げる発動機から排出された残留魔力が、暗闇の中できら

きらと光る。

〈残り一〇……〉

各々得物を握り直し、別の地下通路で施設の中枢演算器に侵入を掛けている情報戦特化型魔動式甲冑からの情報を得る。

侵入予定の扉を担当する監視装置は、既に九割がこちらの手の内にある。だが、中枢演算器に繋がった警備機構には入り込めても、研究情報などを溜め込んでいる中枢演算器の、さらに中枢には侵入出来ていない。やはり重要な情報を纏めて手に入れるには、直接中枢演算器のある演算室に入り、そこから得るしか無いようだ。

そのために、複数用意された潜入部隊総てに情報戦に長けた者が同行している。

いずれかの部隊が中枢演算器と要救助者の元に辿り着けば、残りの部隊はその援護に回ることになっていた。

作戦時間は最長でも半時間。

それ以上長引けば、たとえ研究所を物理的、情報的に封鎖していても、通信が途絶していることそのものを異常と受け取った付近の帝国軍駐留部隊が動き出すことになるだろう。

帝国が国家としてこの研究施設を認識していなくても、帝国の中枢に近い誰かが背後に居るのは間違いない。その誰かが、研究施設の存在を内外の敵に察知されることを恐れ、証拠隠滅に走ることは

予想に難くない。

潜入し、情報を得、救出対象を確保し、さらに自分たちの存在を完全に消し去る。

これらをたった半時間のうちに行うことは、彼らが近衛であることを差し引いても困難だった。成功すれば偉大なる前例として――無論裏の歴史としてではあるが――その功績は後世まで伝えられる筈だ。

歴史に残らぬ歴史的作戦。

増強二個小隊総勢九八名の戦いが今、始まろうとしている。

〈……三〉

身を屈めて力を溜め、

〈……二〉

関節部の駆動装置から発せられる、徐々に大きくなる駆動音を聞きながら、

〈……一〉

内より聞こえる自らの鼓動で奮い立って、

〈……作戦、開始〉

各々施設内への扉を開き、彼らは、自分たちの戦場に飛び込んだ。

◇　◇　◇

潜入部隊が施設内へと順次侵入していく中、それらの部隊から数分遅れて施設内に入る一隊がある。

フェリエル、ファリエル、フェリスとその三名を護衛するための精鋭中の精鋭一個分隊だ。

彼らは先行した部隊が施設内を制圧するのを確認してから、使用されていない地下通路を抜けて施設内に入った。

三人は周囲の護衛部隊と違い、戦闘用の魔動式甲冑を身に付けていない無防備な姿だ。フェリエルとファリエルは野戦服の上に医療用の簡易型魔動式甲冑を装備しているが、これはあくまでも傷病者や重い医療機器を運ぶためのもので、ほとんど戦闘能力はない。

そもそも戦闘特化型魔動式甲冑はその装着資格を得るために一定

以上の訓練時間が必要であり、三人はその基準を満たしていなかった。現在皇国軍と近衛軍に採用されている戦闘特化型魔動式甲冑の中では、どれほど性能の低いものであっても三人には扱えない。三人に合わせた専用型を用意しようという意見も計画段階では挙がったが、それでも一〇〇時間程度の慣熟訓練は必要だ。結局、フェリエルとファリエルは使用に慣れた医療用の簡易型魔動式甲冑を装備させ、フェリスは防弾防刃能力のある簡易鎧を野戦服の上から着ることになった。

真っ白い施設の廊下を足早に移動する一団。緊張と慣れない装備にフェリスが体勢を崩し、蹲ると、それを支えたのは隣を進んでいたフェリエルだった。姉の逆隣に居たファリエルが護衛部隊に合図を送り、一団は周囲を警戒しながらしばし動きを止めた。

「フェリス、大丈夫か」

「う、うん」

フェリエルの問い掛けに答えるフェリスだが、その顔色は悪く、表情は固い。フェリスがふと自分の手のひらを見てみると、それは震え、薄手の皮手袋の下は汗で湿っていた。

フェリスは両手を結び、震えを抑えるように力を込める。

「――まだ始まったばかりだ、今からその調子では肝心なところで間違いを犯すことになる」

「そう、だよね……」

言葉は厳しいものだが、フェリエルの表情は従姉妹への慈しみに満ちていた。ファリエルも同じようにフェリスを見詰めている。

少し視野を広げてみれば、三人の周囲には完全武装の近衛が八人。各々の得物を手に油断無く周辺を警戒している彼らに、焦りなど欠片も見えない。自分たちの仕事を全うする、それだけが彼らの纏う気配の総てだった。

ここで死んでもその真相は永久に封印され、どれだけ気高い最期であっても人々の称賛の声を受けることはない。

近衛でありながら近衛として死ぬことが許されない彼らをここまで連れてきたのは、フェリスとその両親だ。

フェリスは近衛たちに対して拭い難い罪悪感を抱き、その姿を直視することが出来ないでいた。

「――――……」

しかし、フェリスの弱々しい視線に気付いた近衛の一人が、振り返り彼女を見下ろす。その顔は装甲と超硬硝子に隠されて窺うことは出来ないが、近い将来彼らの守るべき者の一人となる女性を困惑

と共に見つめていることは分かった。

「――姫さま、何か」

拡声器から発せられる声は、少しくぐもった若い男の声だった。

「え、あ、ごめんなさい」

慌てて謝罪の言葉を口にするフェリスであるが、近衛兵はその言葉に頭を振った。

「いいえ、何かございましたら遠慮無く仰ってください。我々は姫さまたちの御身をお守りせよと摂政殿下よりきつく申し付けられております。ご無理はなさらぬよう」

「――はい、ありがとうございます。でももう、大丈夫です。従姉さんたちも」

フェリスがそう言い、フェリエルたちを促す。姉妹は数瞬視線を交わし合うと、同時に頷いた。

「あまり休んでいては作戦に障りが出る、進もう」

その一言で、一団は動き始めた。

フェリスを困惑の視線で見つめていた近衛兵も、気を取り直し、一団の最後尾に付く。

今は隠されている肩の白色を思い出し、彼は得物の柄を握り直した。

◇　◇　◇

真っ白い、継ぎ目の無い壁と天井の通路をひた走り、近衛たちは事前に制圧命令を下された重要施設を目指す。

その間、施設の警戒機構を騙し黙らせ無力化しているのは、研究所の外にいる僅か二名の近衛兵だった。彼らは小さな天幕の中で背中合わせに座り、研究所の通信経路に侵入、潜入部隊の誘導と研究所の情報統括機構を掌握するという任務を行っていた。

情報戦の専門家として最新鋭の機材と知識を与えられた彼らにさえも、古代の遺構であるこの研究施設への情報侵入と情報統括機構の掌握は非常に難易度の高い任務だった。

当初は無線通信術式を搭載した演算器で施設の情報経路に潜り込んだが、今は潜入部隊が繋いだ有線経路を用いている。たった二人

で膨大な情報と格闘する彼らの元に、彼らが主君と仰ぐ一人の男が現れた。男――レクティファールは二人の周囲に浮かんでは消える表示窓を一瞥し、呟いた。

「――厳しいか」

青と白の線で縁どられた深紅の魔動式甲冑は有機的な曲線で形作られ、それによって与えられた悪鬼さながらの禍々しさは見る者に恐怖を植え付ける。小脇に抱えた兜も例外ではなく、子どもが見れば一生涯その姿を忘れることは出来ないだろう姿だった。

二人は自分たちの周囲に浮かんだ表示窓から視線を外さず、手元に浮かんだ入力盤や晶盤の上で両手を踊らせながらその声に答える。普段であれば敬礼の一つもするところではあるが、今はそんな余裕はないし、何よりも男がそれを望んでいない。男が彼らに求めているのは、自らの仕事を全うすることただ一つだった。

「申し訳ありません殿下、中枢演算器への侵入で手間取っています。どうやら物理的に情報的にも接続出来る手段が限られているらしく、ここからでは……」

答えた若い女の近衛が、真っ赤に充血した目で表示窓を睨む。その細く白い指は、いっそ暴力的と言っても間違いではない程の早さで踊り狂っていた。

たん、という入力盤を叩く彼女の指の動きと同時に青色に染まる

表示窓。また一つ研究所内の演算器を掌握するが、そこから得られる情報に目的のものはなかった。

舌打ちし、明るい茶色の髪を振り乱して別の演算器の掌握に乗り出す彼女の様子に、レクティファールはそれ以上の質問を取りやめた。表示窓に映し出されている情報を〈皇剣〉で軽く分析するだけで、この戦いが劣勢であることはすぐに分かる。

どうやらこの研究所の中枢演算器やそれに繋がる端末は、この研究所の遺構に残されていたものを流用しているらしい。だから、中枢演算器に繋がる経路が異常に少なく、中枢演算器と直接繋がった端末よりも下位の、現代に作られた端末には重要な情報がない。下位端末からは中枢演算器に一方的に情報を送り込むことは出来ても、それを引き出すことが出来ないのだ。そして、それが出来る端末は、研究所の情報伝達網の中でも厳重強固な警備機構区画に収められている。

これまでに発見された旧世代の高性能演算器の分析もだいぶ進んではいるが、現行の演算器よりも複雑高度な情報構造を持つこれらに対し、現代の研究者は受身にならざるを得なかった。下手に手を出して中に隠された情報を消し飛ばしては元も子もない。

しかしここに居る二人は、皇国でも古代の高性能演算器に触れる機会が多い部類に入る。古代遺物の多いアルマダ大陸の中でもさらに遺物研究の進んでいる皇国の、有数の腕前を持つ情報士官であったから、それなりに期待はしていたが――――

「くそっ、また行き止まりだ」

女性と同じように中枢演算器への潜入経路を探っていた中年の男性士官が、表示された情報の羅列を見て吐き捨てる。レクティファールの存在に気付いていながらそんな態度をとる辺り、相当追い詰められているらしい。

ただ、その間も潜入部隊が必要としている情報を研究施設の演算器や端末に送り込んでいるのだから、彼らの能力が決して低いわけではないのだろう。

レクティファールはもう一度表示された情報を一通り確認し、一つの仮説を立てた。

それは、この研究所の中枢演算器は、旧帝国よりもさらに前、人々に第一次文明と呼ばれる喪失文明の遺物ではないかということ。それならば情報士官が手間取るのも納得出来るし、何よりも研究所の情報伝達網がこんな歪な形になっている理由にもなる。これでは研究者も望む情報を簡単に取得出来ない。

レクティファールは返答を求めないまま、二人に命じた。

「では、作戦の第五案の通り、研究施設に対して陽動を目的とした強襲を仕掛ける。研究所が攻撃を受け、向こうが中枢演算器内の情報消去を行おうとするなら、間違いなく侵入経路は開く」

たとえ外部から接続出来ずとも、内部に潜入している彼らの同僚が直接中枢演算器の収められた区画に入り込めればそれでいい。中枢演算器に直接接触することが出来れば、ここの研究者たちが溜め

込んだ研究成果を奪い取り、さらに要救助者の情報も得られる。最後の仕上げとして中枢演算器は破壊する予定であったから、どちらにしても演算器のある区画に部隊を侵入させる必要があった。

「いいな、兆候を逃さず、一気に攻め落とせ」

そう言葉を結び、レクティファールは外套の裾を翻して天幕を出る。

背後からの「了解」という言葉を受けながら、彼は兜を被る。圧搾空気の音と共に兜と鎧が接続、密閉される。一瞬暗闇に包まれたレクティファールの視界は、すぐに周囲の光景と装着している魔動式甲冑――〈紅空の朔〉の状況を示す図と数字で埋め尽くされた。

必要な表示情報だけを残して情報窓を消し、周辺の暗視映像を一通り確認したレクティファールは、〈皇剣〉を通じて〈紅空の朔〉の通信機能に接続、ここから少し離れた高台に陣取るオリガに呼び掛けた。

「オリガ」

新たに表示窓が一つ開き、いつもと何ら変わらない表情のオリガが映る。

彼女は小首を傾げ、無言でレクティファールに続きを促した。

「出陣ます。援護をよろしく」

〈――――もう？〉

オリガがそう問うのも無理はない。

もっとも理想的とされる作戦の第一案では、最低でも要救助者の所在を確認した上で強襲を仕掛け、その混乱を利用して中枢演算器を掌握、研究所の破壊を行う予定であった。オリガの元には未だ要救助者確保、中枢演算器掌握のどちらの報告も齎されてはいない。ここで強襲など仕掛ければ、それは万全に近い状態の研究所の防衛機構に真正面から飛び込むことになる。

今回は研究所を消滅させればそれでいいという訳ではなく、要救助者を救出し、奪い取れるだけの情報を奪い取らなくては、作戦は成功とならない。そのためには相手に姿を晒し、注意を引き付ける陽動役が必要だった。

兵の数の限られた今回の作戦、この陽動役を務められるのは〈皇剣〉という絶対的な加護を持つレクティファールしか居なかった。

近衛から反対意見が出なかった筈もなく、皇都の近衛軍総司令部でも大いに揉めた。最終的にはレクティファールが摂政令という伝家の宝刀を抜くことで騒ぎは収まったが、心の底から納得している者など殆どいない筈だ。

これまで積極的に下の者の顔を立てることで無用の対立を避けて

きたレクティファールにしては珍しい強硬な態度に困惑し、その真意を計りかねた者も多かった。

ただ、ほんの一握り、レクティファールの態度の理由に気付いた者もいる。オリガもその一人だ。

〈無茶をしても、皇王家の罪は拭えない〉

表示窓の向こうからじっと自分を見つめる金色の瞳に、レクティファールは頭を振る。

年の功とは良く言ったものだと思った。

「ですが、私が出来るだけのことをしなければ、私たち皇王家はさらに罪を重ねることになるでしょう。拭えないなら、これ以上罪を重ねない努力ぐらいはしようと」

〈――『私たち』、ううん、『わたしたち』〉

「ん？」

オリガの呟きに、レクティファールは思わず問い返した。

表示窓の向こうの小さな小さな龍姫は、小さく微笑んで彼に答え

る。

〈わたしも、すぐに皇王家に入る〉

オリガはレクティファールの返事など聞かず、続けた。

〈わたしも、一緒に背負う〉

「――オリガに責任はないと思いますが」

〈あなたを選んだ、それで十分〉

言ったオリガの頬が、桜色に染まっていることにレクティファールは気付いた。

夜の闇の中、暗視映像を分析してその事実を突き付けてきた〈皇剣〉の性能を褒めるべきか、レクティファールは少し悩んだ。だが、オリガの気持ちを無碍にするだけの理由も度胸も、彼にはなかった。

「分かりました、では共に参りましょう」

ただ守るだけではなく、共に歩む。

そんな結論を出すことが出来るようになったレクティファールは、確かに成長していたのかもしれない。

〈んっ！〉

嬉しそうに頷くオリガの姿に、レクティファールは無骨な兜の下で笑った。

もう一つ戦う理由が出来た、そう心中で独語しながら。

◇　◇　◇

彼女は、真っ暗な世界にいた。

この檻に放りこまれてから受けた仕打ちによってその日の記憶さえまともに維持出来なくなり、その腕に抱えた我が子だけが彼女の総てだった。

「――～～、――～～」

鼻歌を歌い、身体を揺らし、腕の中の我が子に眠りを与える。

明かりも殆どない、暗闇の中で彼女は歌う。

愛しい子、愛しい子、健やかに、健やかに、彼女の願いはそればかりで、自分のことなど少しも顧みることがない。

しかしそれは母として当然のことだと彼女は思う。

愛しい我が子のためならば、それこそ自分の生命だって惜しくない。

「――～～、――～～」

毎日『仕事』をして、食事を貰い、子どもに乳を与える。

ただそれだけが、今の彼女の生き方。それ以外は、考えることが出来ない。そういう風に『調整』されている。

疑問など抱かないように、今の自分が正しい姿だと信じさせる。正しいのなら、そこから変わる必要はないのだから。

「――～～、――～～」

ときに男の相手をし、ときに機械に身を任せ、ときに身体中を弄り回される苦痛にのた打ち回った。

そしてその代価として、日々の糧を得る。

ただそれだけが、今の彼女の総て。

今までの彼女の総て。

◇　◇　◇

施設の周囲に幾重にも張り巡らされた警備装置の発する警告に気付いた担当の若者は、当初それが侵入者であると思わなかった。これまでの経験から、付近に生息する動物が網に掛かっただけだろうと考えた。

だが、その反応が先ほどよりも研究所に近い別の警戒網に引っ掛かると、ほんの少し焦りが生まれた。

おかしい、そう思い始めた。

思っているうちに、反応はさらに研究所に近い警戒網に掛かった。

警報が、耳を叩く。集中管理室にいる他の者たちも、警戒網の状況を示す天井近くの表示版を見上げていた。

反応が、さらに近付いた。恐ろしい早さ、このままではあと一分足らずで研究所の外門に到達する。

若者は、自分の呼吸が乱れていることに気付いた。集中管理室の主任が、背後で通話機に怒鳴っているのが聞こえた。外門に警戒を命じていた。

外門のすぐ近くにある警戒装置に、反応が出た。

天井近くの大型表示版に、外門からの映像が映し出される。集中管理室の全員が、それを見上げた。

最後の警戒装置に反応が現れ、直後に映像が変化した。

映像の中央に、乾いた血の色をした影が映った。

「――魔神……」

誰かが呟いた。

先ほどまでとは違い、ゆっくりと近付いてくる地獄の悪鬼のような姿。片手に凶々しい両刃剣を持ち、片手に魔法陣。

その体躯より発せられる魔力残滓は紅蓮色。

集中管理室の全員がその姿に恐怖を抱き、一人の若者などはがちがちと歯を鳴らした。

「う、あ、が、外門対空砲、いや、あるだけの砲を出せ！」

主任が通話機に怒鳴った。

外門の両側に据え付けられた四連装対空砲二基が、水平射撃の体勢を取る。さらに外門近くの兵員待機所から次々と警備兵が飛び出し、近くの倉庫から機関砲や野砲などを引っ張り出す。整備こそしてきたものの、これまで一度も使ったことがなかった装備が次々と運び出され、設置される。

装甲車両が並び、砲がその口を侵入者に向け、兵たちが土嚢の影に潜り込んで小銃を構える。僅か数分で、外門の外に即席の陣地が形成された。

警備主任の発砲命令を待つじりじりとした時間が経過し、ついに侵入者が片手の魔法陣を外門に向けた。

「ってぇっ！！」

魔法陣を向けられた瞬間、警備主任が叫んだ。

同時に夜闇を貫く複数の発射炎、連続する発砲音と爆音。軽快な機関砲の音、腹の底に響く重厚な砲音、そして空気を震撼させる炸裂音。

まるで昼間のような明るさが外門に生まれ、それは三〇秒ほども続いた。

「撃ち方止め、撃ち方止め！」

主任が通話機に怒鳴る。

その命令を受けて少しずつ、少しずつ砲火が収まっていく。

最後に数発の機関砲が発射音を奏で、外門は静寂を取り戻した。

「――……」

土煙で見えなくなった〈魔神〉の姿を探し、集中管理室の面々は映像に目を凝らす。外門の兵士たちも、同じように土煙の向こうを覗き込んでいることだろう。

一秒、二秒、三秒――――土煙の向こうには何も見えない。

跡形無く消し飛んだか、〈魔神〉の姿を見た総ての者がそんな希望的観測を抱き始める。

だが――――

「っ、まだ反応がありますっ！」

警戒装置を睨んでいた若い警備兵が悲鳴を上げた。

その瞬間、土煙の向こうで一つの魔法陣と、一対の紅眼が煌めいた。

「魔力量増大っ！」

魔力観測器に張り付いていた別の警備兵が警告を発する。

「奴に向けて魔力が収束していきます！」

「ちっ、撃ち方――――」

始め、その一言は、土煙を貫いて外門に突き刺さった光軸と、それによって発生した破壊によって遮られた。

爆光、爆音。

紅蓮色の光軸を受けた鋼鉄製の門扉が一瞬で赤熱化、屈強な大人一〇人掛かりでも動かない分厚い門扉は与えられた熱量と衝撃の前にあっさりと吹き飛んだ。

〈て、敵がっ！〉

外門からの悲鳴に、管理室に居た者たちは一斉に大型表示版を見

上げる。

そこには、一足飛びに土煙を脱し、その曲線で形作られた剣を装甲車両に突き立てている〈魔神〉の姿があった。

剣を突き立てられた装甲車両は剣の刺さった部分から炎を吹き出し、通信からは装甲車両の乗員の悲鳴。

〈あ、あつい、あつい、あつい、あああああああっ！　いやだ、いやだぁあああああ！！〉

がんがんという脱出扉を叩く音、しかし熱によって変形した扉は開かず、乗員は装甲車両の中で蒸し焼きにされる。

〈ああ、あああああ、あ――――〉

ぶつん、と通信が途切れ、装甲車両が爆発する。

〈魔神〉はその直前に装甲車両から飛び降り、新たな獲物として見定めた別の装甲車両に飛び掛かった。

〈く、来るなっ！〉

装甲車両に据え付けられた機関砲の発射音が響く。周囲の警備兵

や〈魔神〉を狙える位置にある銃砲が次々と銃弾砲弾を撃ち放つが、その殆どは外れ、運良く命中したものも〈魔神〉の周囲に展開されている魔法障壁に遮られて効果を与えることが出来ない。

剣を振り抜き、周囲の警備兵を威力を絞った速射魔法で射殺しながら、〈魔神〉は次々と装甲車両を無力化していく。

ある車両は一刀のもと両断、爆発。ある車両は振り抜いた剣から発生した三日月状の魔力刃に切り裂かれ、また別の車両は〈魔神〉の放った重火力型魔法の前に松明となった。

「対空砲っ、奴を殺せ！」

〈りょうか――〉

主任の怒声に答えた対空砲陣地であったが、その返答の途中で空から飛来した数十発の紫紺色の魔力弾の前に爆発、四散した。

残った対空砲陣地も、その直後に同じだけの魔力弾を食らって同じ運命を辿った。

さらに、外門の即席防御陣地の各部に魔力弾が降り注ぎ、次々と兵が吹き飛び、砲が破壊され、警備施設がその機能を失っていく。

「何処からだ！？」

真っ赤に血走った眼で、主任が唾を飛ばしながら吠える。

これだけ制圧力を持つ魔法部隊が近くにいるなら、それに気付かない筈がない。

主任はそう考え、魔力探測を行っていた部下を睨み付けた。

「いえ……！」

「いえ、じゃないっ！　敵部隊は何処だっ！」

「分かりませんっ！　分からないんです！　隠蔽魔法で隠れているのか、探測区域外から砲撃していることしか……！」

部下の悲鳴に、主任は獣のような唸り声を発し、掴んだままの通話機に向かって甲高い声を上げた。

「外門を放棄！　外門を放棄だ！　自動人形を出せっ！」

命令を受け、外門陣地から次々と兵士が転び出て遁走を図る。

その兵士たちに向けて無慈悲に放たれる紅蓮色の魔法弾。味方の兵士を轢き殺して外門から逃げようとする装甲車両には、天空から

紫紺色の死神が降りてきた。

戦闘とも呼べない一方的な虐殺。傷ひとつ付いていない姿を晒しながら、〈魔神〉はゆっくりと外門を越え、施設内に足を踏み入れる。

上空からの砲撃は尚もその数を増やし、小銃を手に〈魔神〉の行く手を阻もうとした兵士たちを吹っ飛ばし、蒸発させていく。

〈魔神〉は魔力弾を乱射し、ときに剣を振るい、警備兵たちは次々とその生命を刈り取られていった。背を向けて逃げようとした警備兵はもとより、銃を捨てて降伏の意を示した兵士さえ無慈悲に殺されていく。

「――化け物が……！」

警備主任はそう吐き捨て、表示版に映る〈魔神〉を射殺さんばかりに睨め付けた。

既に警備兵の三割が殺されるか重症を負ってしまっている。自動人形も果たしてどれだけ役に立つか――――主任は脳裏で今後の対応を検討し、僅か数秒の後に決断を下した。

「自動人形に足止めをさせろ！　施設内の警備兵を正門に回せ！　あとは、そこのお前！」

「はっ！」

今はもう意味の無くなった周辺警戒網を担当していた若い警備兵を呼び付ける主任。

警備兵は急き立てられるように主任の前に立った。

警備主任は若い警備兵を自分の近くに招き寄せ、薄い金属板を手渡すと、他の者に聞こえないよう囁いた。

「――いいか、これから所長の元に走り、この研究所を放棄するよう進言しろ」

「え、放棄、ですか」

若い警備兵は自らの上司の言葉に驚いた。

確かに敵は強大だが、まだまだ戦いようはある。

「ああ、放棄だ。まだ確信は持てんが……おそらくこの襲撃、そこらの武装組織のしでかしたことではない」

「では……！」

「お前の考えてる通り、何処かの国家に属する、こういった闇討ち専門の部隊だ。降伏さえ受容しないところを見ると、おそらく間違いないだろうよ」

そしてそんな部隊が出てきた以上、この研究所は落ちる。ある程度の脅威は想定されていたが、あんな化け物を投入されては耐え切れるものではない。

〈魔神〉はゆっくりと研究所に近付きながら、自分を攻撃してくる警備兵を薙ぎ払っている。剣の一振りで数名の警備兵が絶命し、魔法弾の一発で装甲車両が炎上する。大人と子ども――――いや、それ以下の龍と羽虫の戦いだった。

「いいな、所長にはこちらから連絡がとれん。あの陰険眼鏡野郎、研究の邪魔だからと通信網の設置を拒みやがった。おそらく中枢演算器から情報を得てこちらの状況は把握しているだろうが、念のためだ。お前が直接行って研究所を放棄するよう説得しろ」

「ですが、自分の言葉など……」

「陰険眼鏡だって莫迦じゃあない。自分の生命が無けりゃ研究を続けられないことぐらい分かってるはずだ。いいか、この研究所はもう保たない、それを陰険眼鏡に理解させろ。あとは向こうが勝手に判断して逃げ出す」

さっさと行け、そう警備主任に追い出され、若い警備兵は集中管理室を飛び出した。

施設外から響く爆音に追い立てられるように、彼は走る。

いつもなら気にも留めない施設内の風景が、どこかおどろおどろしく、恐怖を強いてくるように感じた。

◇　◇　◇

研究所を遠望する高台。

オリガの目の前に浮かんだ表示窓に映し出されたレクティファールの戦い方は、オリガの目から見てあまりにも稚拙だった。

圧倒的火力で以て脅威を排除するのはいい、敵兵を片っ端から殺害していることも今回の作戦目的からすれば自然なことだ。

ただ、あんなにも敵の砲火を浴び、自分の手で敵兵を殺す必要はない。

この作戦のために誂えた〈皇剣〉制御型魔動式甲冑〈紅空の朔〉の運動性を考えれば、素早い位置転換で相手を翻弄し、最低限の損害で最大限の成果を得ることが出来る。なのに、レクティファールはそれをしない。

まるで姿を晒さなくてはならないという強迫観念でもあるかのように、だ。

「――莫迦……？」

そうは言うものの、オリガにはレクティファールの行動の理由が何となくではあるが、理解出来た。

おそらくあの男は、少しでも目立つことで施設内に潜入している者たちの生存率を高めようとしている。

出来るだけ派手に、出来るだけ多く、出来るだけ時間を掛けて、敵が自分に戦力を集中するよう仕向けている。

人は圧倒的な脅威が目の前にあれば、背後の小さな脅威などに眼を向けることが出来なくなる。そんな余裕はなくなってしまう。

レクティファールはそれを狙って大いに魔法弾を撃ち上げ、派手に相手の攻撃を受け、それを物ともしない反撃で相手を釘付けにしている。

「ん、莫迦」

オリガは頷いた。

もう推測ではない、確信だ。

彼女は当代随一と言っても過言ではない莫迦婚約者を援護するべく、周囲に三三三発の魔力弾を形成、それを一斉に撃ち放った。

「おお……」

彼女の周囲で警戒を行っていた近衛兵が感嘆の溜息を漏らしていたが、オリガにとってはこんな魔法は児戯以下だった。基礎的な魔法弾を数ばかり揃えた攻撃魔法で、十分な経験と演算領域さえあれば誰でも使えるものだ。

レクティファールから送られてくる着弾情報を元に、オリガは三三三発の魔力弾を次々と敵の抵抗拠点に叩き込んだ。分厚い混凝土の壁や、研究所本来の、現代では真似出来ない材料で作られた壁材を打ち砕くほどの威力はなかったが、土嚢の影に隠れて小銃を撃つ警備兵や、生身を晒して砲を操っていた砲兵など、防備の薄いところから次々と吹き飛ばしていった。

だが、どれだけ吹き飛ばしても警備兵の数が減った気がない。

事前の情報ではこちらの戦力と相手の戦力は相手が若干上回る程度であった。この規模の施設を守るにしてはその戦力は強大に過ぎ、相手側がこの施設をどれだけ重要しているか容易に察することが出来る。

殺すなり何なりして無力化した警備兵の数からすればそろそろ抵抗も弱まっていい頃だが――――

「自動人形」

レクティファールの前に、六体もの自動人形が立ちはだかったのを見て、オリガは眉を顰めた。

これでは軍事拠点攻めと変わらない。もしこれが純粋な軍事行動であるなら、こちらはもう少し戦力を整えるべきだった。ただでさえも敵拠点の中に要救助者を抱え、さらにこの拠点そのものを抹消しなくてはならないという余計な仕事まである。せめて今の倍、贅沢を言うなら三倍は戦力が欲しいところだった。

「――今更……？　ん、今更」

そう今更だ。

現れた自動人形の胴体に腕を突き刺し、そこから連射型魔法弾を内部に撃ち込んでいるあの男なら、現状を見てもまだ作戦の成功を信じているだろう。

ぐったりと動きを止めた自動人形を盾にして他の自動人形からの攻撃を防いでいる婚約者を見て、オリガは深々と嘆息した。

「ちょっと強いの、撃つ」

だから離れろ、と告げられ、慌てて近衛兵たちが下がる。

オリガはそれを確認すると、演算領域の中で五つの術式を並列処理し始めた。

「――誓言、一四五九八六号。我、誓言を持ちてこの世あらざる技を求む。魔界に一七六号誓言、天界に〇九八号誓言、精霊界に七六六号誓言、冥界に〇〇〇号誓言」

「誓言魔法！？」

近衛兵の一人が素っ頓狂な悲鳴を上げ、さらに遠くに逃げた。それに釣られるように、他の近衛兵も逃げていく。それくらい、オリガの放とうとしている魔法は危険なものだった。

四界に対して直接誓言――ある種の暗号――を送り、通常の魔法よりも多くその力を引き出す高位魔法。

誓言魔法と称されるその魔法は近年新たに開発された新式魔法で、威力という点で従来の魔法を大きく上回る。

もちろん、これまでの魔法の中でも高威力のものはあるが、誓言魔法はその誓言さえ熟知し、扱い方を間違えない限り、ほとんど体力精神力を消耗することなく高威力の魔法を使うことが出来る。

唯一の弱点は、その誓言の扱いが難しく、一歩間違えれば四界の

力を制御することが出来ずに周囲もろとも自滅してしまうという点だろう。

その欠点もあり、現時点では軍で誓言魔法を制式採用しようという動きはない。オリガのような熟練した研究者兼魔導師でもない限り、使用する者はいない魔法だった。

「接続信号受諾――」

オリガの声に答えるように、彼女の周囲に四界の力が渦巻く。

その力は一点に収束すると、彼女の頭上に巨大な魔法陣を描き上げた。

轟々と唸る風の中、彼女は場違いなほど静かな声で撃発呪文を放った。

「〈強欲帝の鎚（エイベリティア・ギャベル）〉」

衝撃波を伴って紫紺色の柱が天に向かって屹立する。

雲を貫いた光が夜空を駆け上るのを、身を低くしていた近衛兵たちは呆然と見送った。

◇　◇　◇

警備主任からの命令を受け、中央研究区画に入った若い警備兵は、そこで何度も足止めされることになった。警備装置が働いており、研究者以外の立ち入りを拒んでいたからだ。

主任から預かった暗号鍵入りの金属板を警備装置に差し込んでは暗証番号を打ち込み、少し進んではまた差し込んで打ち込み、また少し進んでは差し込んで打ち込んだ。

同じことを何度繰り返しただろうか、ようやく彼はこの研究所の中枢とも言える場所まで入り込むことが出来た。

地下から地上部まで貫くその区画は、地下に培養施設、地上に研究施設を持っている。地下の培養施設では未来の軍事力の担い手となる新世代の人造兵が培養され、地上ではその研究が行われていた。

若い警備兵は、ここに地下にある『特別房』と呼ばれる場所にしか入ったことがない。

そこで、この施設唯一の楽しみと言える『女』を味わう、ただそれだけが彼とこの中央研究棟の関わりだった。

しかし、今日は地下に行く必要はない。地上階にあるもっとも巨大な研究室に向かった。

「――――失礼します」

同じように暗号鍵を差し込んで暗証番号を入力した彼は、扉を開き、そして絶句した。

最初に飛び込んできたのは、紫紺色の光。

そして、その光が齎した破壊の結果だ。

「っ！」

中央に巨大な金属筒のある研究室で、一〇名ほどの研究者が呆然と見上げるのは、先ほどまで彼が集中管理室で見ていたものと同じ映像。

いや、彼がここに来るまでに、状況はさらに変化していた。

「じ、自動人形が……」

年嵩の研究者が、その光景を見て蒼白になっている。

天から降ってきた紫紺色の魔力光。その魔力光に、自動人形が立ったまま、倒れるという動作を挟むこと無く一瞬で圧し潰されていた。

廃材と化した残骸から飛び散る火花が、乱れた映像の中できらき

ら光っていた。

「対魔力装甲の自動人形だぞ……なんてことだ……」

五体の自動人形を無力化した〈魔神〉は、そのまま正門を破壊して正面玄関に向かってゆっくりと進んでいた。

表示版の片隅にある時刻表示を見てみれば、あの〈魔神〉が現れてから一〇分と経っていなかった。たったそれだけの時間で、外門と正門を突破されたことになる。

タタタタタン、という軽妙な機関銃の発射音に、警備兵の意識は画面の中へと戻る。画面はいつの間にか、正面玄関の吹き抜けになった空洞を映していた。そこでは最近この研究所に持ち込まれたばかりの新型機関銃二挺が、〈魔神〉に向けて光の征矢を撒き散らしている。

銃手が悲鳴に似た雄叫びを発し、遮二無二引き金を引く。

その銃弾は間違いなく〈魔神〉に命中し、その動きを少しだけ鈍らせたようにも見えた。だが、若い警備兵は、それが勘違いだとすぐに気付かされる。

「――不味い」

二挺の機関銃が相手を釘付けにしたと思い込んだ警備兵たちが、

小銃や狙撃銃を持ち出して〈魔神〉に銃撃を浴びせている。撃たなければ殺されるという生物的に至極当たり前の判断に従い、彼らは自分の持っている限りの銃弾を銃に込め、撃ち続けた。

そんな銃弾の暴風の中で、〈魔神〉が動く。

剣を腰の鞘に戻し、両手を正面に掲げた。

両手の先にそれぞれ魔法陣が展開し、直後回転を始める。

耳障りな回転音。その回転に合わせるように強く発光する魔法陣。

〈そ、総員退避、た――〉

正面玄関にいる警備兵たちは、ようやく自らの身に振りかかる危険に気付いた。そのときには、もう遅かった。

眩しいと感じるほど強い光を持つまでになった二つの魔法陣から、先ほどまでとは逆に、警備兵たちに向けて連続した光の弾丸が放たれた。

轟という暴風に似た音と共に警備兵に向けて殺到する魔力弾。

それ一つ一つは小さく非力に見えたが、それが数百、数千もあれば非力などという言葉は出てこない。

暴力、暴虐の嵐であった。

盾にされていた応接具は粉微塵にされ、観葉植物が宙を舞い、正面玄関の壁には弾痕が穿たれた。

悲鳴を上げて逃げ惑う警備兵。戦神の名を叫んで反撃を試みる警備兵。気が触れたように蹲る警備兵。

〈魔神〉はそれらの兵を一切区別すること無く、均等に死を与えた。

「ああ……！」

若い女の研究者が同胞の最期を見、顔を覆って泣き崩れる。

そういえば、この女は同僚の一人と恋仲であったなと若い警備兵は思い至った。

そして、自分のやるべきことを思い出し、呆然と映像を見上げていた一人の痩身の男に走り寄った。

「所長」

「――――」

「所長っ」

「――あ、き、君は……」

ひょろりとした眼鏡の、青白い顔をした男を前にして、若い警備兵は舌打ちしたくなった。

ここで呆け老人のように映像を見ている場合ではない。

「主任からの伝言です。『早急にこの施設を放棄するべきである』と」

「あ、ああ……」

所長はほんの少し躊躇った様子を見せていたが、映像の中で次々と警備兵が殺されているのを見て、やがて力なく頷いた。

「――分かった、すぐに……」

「所長！」

施設放棄の決断を下そうとした所長の言葉を遮ったのは、研究室に駆け込んできた中年の研究者だった。

若い警備兵はその研究者を睨み付けたが、研究者の方はその禿げ上がった頭に汗を浮かべ、警備兵の侮蔑の眼差しには一切気付かなかった。

そして、その場にいた全員を絶望の淵に叩き落す一言を告げた。

「し、し、施設内に侵入者があります！　すでに施設の半分以上が制圧され、侵入者はこの中央棟を目指してなおも進行中！」

「な……」

若い警備兵は、そこでようやく〈魔神〉の目的に気付いた。

陽動――――たったそれだけのために、あの地獄からの使者は自分の同僚を虐殺していたのだ。

仲間たちが施設内で自由に動き回れるように、警備の目を自分に向けさせるために。

「――に、逃げ道は……」

「分かりません、ですが、連中が地下の廃棄区画から侵入したとしたら、隠し通路はもう……」

研究者たちにどよめきが広がる。

〈魔神〉が警備兵たちを悉く皆殺しにしたことを考えれば、自分たちの生命も危ういのではないか、そう考えて震え上がる研究者もいた。

そんな研究者たちの意味のない喧騒の中、所長だけが妙に静かだった。

若い警備兵が所長の様子に気付いたとき、彼の耳には所長の口から漏れる乾いた笑い声が届いていた。

（狂ったか……）

若い警備兵は所長のその姿に、帝国軍時代にその目で見た狂人を思い出した。

戦場で狂う兵士は後を絶たない。錯乱して味方を撃つ兵士も、その果てに自分の頭を拳銃で撃ち抜く士官も見た。

所長の姿は、そのときの兵や士官と同じであった。

「くくくく……」

ただ違うとすれば、この所長が常にあっても狂人に近い感性を持っていたこと。そして狂人が狂った果てというものを、若い警備兵

は見たことがなかった。

それ故に、次に所長が発した言葉を理解しきれなかった。

「――実験体どもを出せ」

所長の言葉に、研究室の空気が凍り付いた。

今まで騒いでいた研究者も、所長に驚愕の眼差しを向けている。

「地下の実験体だけではない。それ以外の実験体も総て培養管から出せ。時間を稼がせろ」

「で、ですが、実験体はまだ不安定で……」

「黙れっ！」

ぱん、という乾いた音が研究室に響いた。

所長が、護身用の拳銃を天に向けて放った音だった。

「侵入者どもの目的がここの破壊であるにせよ、奪取であるにせよ、我々が脱出するには実験体どもは足手まといだ。だったらここで時

間稼ぎにでも使った方がまだましだろう！」

実験成果を横取りされるという危険性を考えるなら、いっそのこと――――所長の考えはひどく短絡的で、しかし分かりやすかった。

破壊されるとしても、施設を奪われるにしても、実験体は処分しなくてはならない。その手段として、時間稼ぎに使うというのはそう悪い考えではなかった。

「さっさとやれ！」

所長が怒声と共に再び銃を撃てば、研究者たちは慌てて制御卓に向かって作業を始めた。

中枢演算器に緊急自壊命令を送り、残った時間で研究情報を引き出す。さらに実験体を解放するための準備を進める。

若い警備兵は、自分の足の下で何が起こっているのか、起ころうとしているのか、その思考そのものを封じた。

そして、研究室の中央付近に鎮座する金属製の筒が唸りを上げていることに気付き、本能的な恐怖を抱いた。

その恐怖は、正しかった。

「あれは……」

金属製の筒が天井に吸い込まれていく。

そのあとに残っていたのは、中にヒト型の『何か』を抱え込んだ強化硝子製の培養管。

先ほどから聞こえる唸りは、その培養管から培養液を抜き取る機械音だった。

ゆっくりと下がっていく水位、明るい黄色をした培養液が減るにつれ、その内容物の姿もはっきりしてきた。

「化け物」

若い警備兵は、内容物の姿を見てそう呟いた。

表皮には濁った鱗を持ち、ヒト型というには両手が長く、四肢は細い。爬虫類をヒト型にしたようなその姿を、若い警備兵はこれまでの人生で一度も見たことがなかった。

魔物の中には爬虫類が人の姿を真似たような種族もいるというが、帝国支配領域にその種の魔物は生息していない。

若い警備兵が自分の常識と照らし合わせてそれを「化け物」と呼んだことは、無理からぬことであった。

ただ、その評価は所長には不満だったらしい。

「化け物ではない。我々が創り上げた新たなる龍人族だ。――グロリエ皇女殿下の手前もある故、〈竜爪族〉と名付けたが、いずれ彼らが帝国を勝利に導くのだ……！」

所長が竜爪族に向ける眼差しは、親が我が子に向ける類のものだった。

愛しさが抑えきれない、そんな視線だ。

「まだまだ研究中ではあるが、そこらの兵士よりは役に立つだろう。彼らには我々の命令に従うよう因子に刻まれている。そして我々はこう命じれば良い『敵を殺せ』とな」

若い警備兵は自分たちが不当に貶められていることにも気付かないまま、竜爪族の醜姿から目を離せずにいた。

鼻と唇のないのっぺりとした顔は、濁った鱗に覆われていてとても彼の知る皇女グロリエと較べられるものではない。グロリエが強さの中に輝く美しさを備えているのに対し、竜爪族は彼の美的感覚からすればこれ以上ないほどの醜さを備えていた。

「所長、準備が出来ました」

「よろしい、では、覚醒術式を打ち込みたまえ」

「はい」

所長の命令に従い、研究者が制御卓に一連の術式を打ち込む。

制御卓を叩く音が止むと、培養管の中の液体が抜け切る前に、竜爪族が目を開いた。

「――！」

若い警備兵は息を呑んだ。

爬虫類のような濁った黄色の瞳が、自分を射貫いたように思えた。

「培養管を開けろ」

所長の命令に従い、培養管が解き放たれる。

竜爪族は危なげない動きで床に飛び降り、研究室を見渡した。

「おお……」

研究者たちの間から、感嘆の声が漏れる。

そんな研究者たちのただ中にあって、若い警備兵だけが湧き上がる恐怖と戦っていた。

不味い、不味い、不味い。

冷や汗が零れ落ち、竜爪族から目が離せなくなった。

「しょ、所長」

「ん、なんだね」

若い警備兵は、竜爪族を刺激しないよう、非常にゆっくりとした動きで所長に近寄る。

所長は先ほどとまではまるで正反対の明るい表情で、彼を振り返った。

そのときだった。

若い警備兵は、竜爪族が笑ったように見えた。

「――！　に、逃げろっ！」

そう叫ぶのが精一杯だった。

「――――え？」

研究者の一人が、呆けたような声を発した。

警備兵の警告に不思議そうな表情を浮かべ、その次の一瞬には自分に向かって飛び掛ってくる竜爪族の爪でその首を落とされた。

呆けた顔のまま、研究者の首は床に落ちる。

どちゃ、という音のあと、研究室に静寂が充ち満ちた。

「――――」

そして、悲鳴。

「――きゃあああああああああああああああっ！！」

恐怖に駆られた若い女性研究者が、一目散に扉に向かって走る。

警備兵もぽかんとした表情の所長の手を引き摺り、扉に向かって全力で走った。

「ぎゃあああああっ！」

「ま、まて、ま……あああぁぁぁぁあああああっ！」

背後から聞こえる悲鳴と、水袋を引き裂くような音、繊維質の何かを引きちぎる音、液体が撒き散らされる音、固いものが砕かれる音。

警備兵はそれらを意識の外に追いやり、無我夢中で走った。

自分に続いて走り始めた研究者が悲鳴を上げて転倒するのを、警備兵は後ろを確認したときに見た。その研究者に返り血で真っ赤になった竜爪族が飛び掛かる。

悲鳴を上げる間もなく、研究者はその首を竜爪族に咬み千切られた。

温かい血を浴びた竜爪族が、嬉しそうに彼を見ていた。

「扉を閉めろっ！」

一足早く扉の外に出た女性研究者に、彼は叫んだ。

女性研究者は研究室の中にいる同僚たちのことを思ってほんの少し逡巡した様子を見せたが、その同僚たちのほとんどが既に事切れている現実を見て、泣きそうな顔で扉横の晶盤を操作した。ゆるゆると閉じる扉。

若い警備兵と所長は、その間を潜るようにして外に出た。

「ま、待ってくれ、待って――」

扉の外に出て、研究室を振り返る若い警備兵。彼に向けて手を伸ばす研究者の背後に竜爪族が迫り――――扉は閉じた。

無音。

研究室と廊下を隔てる扉は分厚く、中と外を完全に遮断した。廊下に背中を預けて座り込む警備兵。

女性研究者は再度晶盤を操作して緊急用防壁を扉の内と外に下ろすと、若い警備兵と隣り合うようにして座り込み、大きく息を弾ませていた。

「――所長？」

そんな二人の姿など意識していないかのように、所長がゆらりと立ち上がる。

「危険です、我々と共に」

警備兵が制止しても、所長は止まらない。

幽鬼のようにふらふらと、どこかに向かって歩いていく。

その背に手を伸ばした警備兵であったが、伸ばした手はすぐに力なく落ちた。

「笑っている」

警備兵は力なく呟いた。

彼の見た所長の横顔は、満面の笑顔だった。

もう、無理だ。彼は所長を救うことを諦めた。

◇　◇　◇

中枢演算器に自壊命令が到達すると、皇国側から中枢演算器に接続することが出来るようになった。厳密には自壊命令に乗じて接続命令を流しただけだが、皇国側はようやく中枢演算器に直接触れる

ことが出来るようになった。

次々と施設内の詳細な地図が呼び出され、前線へと送られていく。その中には要救助者二名の所在も含まれており、潜入した部隊はそこを目指して突き進んだ。

中枢演算器への接続から四分後、潜入部隊の一つから全部隊に向けて一報が発せられた。

「発見！　要救助者発見！」

救出対象、ケルブ・レヴィアタン。

彼は中央研究棟の一角にある研究室で、保存槽の中に漂っていた。

痩せ細った全身に繋がれた管は数十、薄目を開けて液体の中に横たわるその姿を見て、部隊の全員が憤った。

身体中を走る切創痕。死亡寸前まで抜かれた血液。抜き取られた右目には機械が埋め込まれ、その呼吸は弱かった。

「おい！　すぐに彼をここから出せっ！」

部隊の一人が、研究室にいた若い研究員を怒鳴りつける。

魔動式甲冑の腕に装備された魔動式連装弩を向けられた研究者が、

がたがたと震えながら制御卓を叩いた。

ごうという音を立てて抜けていく保存液。保存槽の硝子が開くと同時に、部隊に同行していた衛生兵が可搬式の簡易生命維持装置をその身体に取り付けていく。龍族の生命力なら、意識さえ戻ればこれでしばらくは耐えられるはずだった。

「ケルブ様！　ケルブ様！」

衛生兵がケルブの名を呼び、肩を叩く。

その間に研究者を拘束した部隊は、撤収の準備を進めた。

「意識は！？」

部隊長が衛生兵に問う。衛生兵は生命維持装置の数字をざっと確認し、頭を振った。

「強力な魔法か麻酔で眠らされているらしく、意識はありません、それと体組織の劣化が著しく、早急に整った設備を持つ医療部隊に引き渡す必要があります」

実験手術と保存を繰り返していたため、身体組織の劣化が著しい。それでも龍族だからこそ移動させることが出来た。もしこれが混血

種や人間種であれば、ここから動かすことは出来なかっただろう。

「眠っていれば反抗される心配はない、か。ちっ、撤収だ！」

部隊長は衛生兵の説明を聞き、兜の奥で舌打ちした。

人間種以外を人と認めない帝国のやり方は今まで嫌になるほど見てきたが、これはその中でも際立った扱いだ。奴隷と実験動物、どちらがましかなど、考えたくもない。

「本部に連絡。『要救助者一名確保、コレヨリ撤収スル。要救助者ノ容態ハ危険。本部医療班ノ準備ヲ求ム』以上だ」

「は」

部下の返答に頷き、部隊長は輸送用の簡易担架に乗せられたケルブを見詰める。

痩せ細った身体は、すぐに保護用の覆いに隠された。

「行くぞっ！」

だが、部隊長の指示に従って研究室を飛び出した救出部隊は、す

ぐにその足を止められることになる。

研究室を出た最初の十字路で、異形の敵兵と接触してしまったのだ。

「――！」

敵兵のその姿に、部隊の全員が息を呑んだ。

緑色の鱗に包まれ、しかしぐちゃぐちゃに溶けた半身。零れる内蔵を引き摺りながら、その敵兵は彼らに牙を剥いた。

人間種というよりも猿や獣人に近い敏捷さで、その異形の敵兵――竜爪族――は彼らに襲いかかった。

「キャシャアアアアアッ！」

今まで聞いたこともないような掠れた雄叫びを上げ、部隊に踊りかかる竜爪族。

その雄叫びによって部隊は最初の硬直から脱し、部隊長の命令一下迎撃行動に入った。

「撃てッ！」

次々と放たれる矢。

連装弩の矢羽のない金属製の矢が、次々と異形の身体に突き刺さる。

だが、竜爪族はその動きを止めなかった。

痛みを感じていないように動きを鈍らせず、最前列の近衛兵に飛び掛った。

「ちぃッ！」

襲われた近衛兵が竜爪族の腕を掴み、力任せに壁に叩き付ける。

魔動式甲冑の関節が唸りを上げ、魔法によって強化された拳が竜爪族の頭部を打ち砕いた。

「どうだッ！」

飛び散った脳漿や体液に塗れた近衛兵は、そう言って竜爪族の身体から距離を取る。

ぴくりぴくりと痙攣していたその身体は、すぐに動かなくなった。

「――よし！」

兜の下で笑みを浮かべる近衛兵。

しかし、背後に居たはずの同僚たちは、彼の方などもう見ていなかった。

「――？」

揃って廊下の前方を見る同僚たちに釣られ、近衛兵は視線を巡らせる。

果たして、その先には――――複数、一〇体を超える異形の敵兵がこちらに向けて接近してくる光景があった。

「……」

沈黙。

部隊の誰もが無言で、それこそ要救助者を抱えた衛生兵までもが腕の連装弩に矢を装填し、それ以外の兵士は剣を構え、魔導師は魔力を練り上げる。

静かに、しかし恐ろしい速さで彼らに向かってくる竜爪族を前にして、部隊長は通信担当の兵士にこう告げた。

「『我ラ正体不明ノ敵兵ニヨル攻撃ヲ受ク、大至急援護ヲ求ム』、以上だ」

◇　◇　◇

ケルブを救出した部隊が竜爪族との死闘を始めたちょうどそのとき、フェリス、フェリエル、ファリエルを含む救出部隊はもう一人の救出対象であるシヴェイラ・スヴァローグを発見していた。

だが、その光景に部隊の誰もが、シヴェイラの娘であるフェリスでさえも声を上げることが出来なかった。

「――――あ」

フェリスの乾いた喉から絞り出せたのはそんな意味のない単語。

近くの研究室にいた研究員を脅してこの『特別房』と呼ばれる部屋に入った彼らを待っていたのは、言いようのない異臭の漂う部屋で座り込む全裸の女だった。

床や壁にはこびり付いた汚れ、医官であるフェリエルとファリエルは、この部屋に漂う異臭が、男女の交わりによって生み出される

諸々から発せられるものだと気付いた。人の欲望が渦巻く戦場では、少しも珍しくない匂いだった。

あの皇都奪還戦のあと、こんな匂いのする建物に何度も足を踏み入れた。

そこには助けを待っていた女子どもばかりではなく、精神を壊され自害した女がいた。まだ女の体になっていない、しかし弄ばれた痕跡のある少女もいた。遊び半分で手足の指を切り落とされた赤ん坊もいた。二人は、あの地獄の光景を思い出した。

「か、母さん……？」

震える声で母を呼ぶフェリスの前に、フェリエルが立つ。

その身体で、フェリスの視界を遮った。

「フェリエル従姉さん……」

「いい、見る必要はない。いや、見ないでくれ、頼む」

叔母上のためにも、お前だけは見てくれるな、フェリエルはそうフェリスを抱き締め、部隊の面々を促した。

フェリエルに促され、ファリエルたちは部屋の中央に座り込むシ

ヴェイラに駆け寄る。

明かりは最低限、男の近衛兵は自発的に周辺の警戒に入り、女性兵がシヴェイラに毛布を掛けた。

シヴェイラの身体から発せられる男の匂いに、一人の女性兵は涙さえ流していた。

「叔母上、ファリエルです。お分かりになりますか。――――っ！？」

心に渦巻く激情を総て押し殺し、ファリエルはシヴェイラの正面に回る。

そしてその腕の中にある『モノ』を見て、絶句した。乾ききった小さな骸が、そこにあった。

「これは……！」

ファリエルの驚愕に答えたのは、シヴェイラではなかった。

「その女の子ども、その成れの果てだよ」

部隊の全員が、部屋の奥に意識を向ける。

警戒を行っていた近衛兵が剣と連装弩を声の主に向け、シヴェイラを庇うようにファリエルが立つ。

「子ども……ですって……」

「ああ、そうだ。何年も何年も延々と男どもに犯させてようやく生まれた子どもだ。ま、あっさり死んでしまったがね」

その方が、結果的には良かったが――――部屋の最奥にある扉の向こうから現れた、痩せた眼鏡の男がそう笑う。

「その子どもが死んだことで、女の精神は完全に我々の手中に落ちた。あとは催眠と精神作用の魔法で、驚くほど簡単に我々に従順な奴隷を作り上げることが出来た」

男は大きく手を広げて、歌うように自らの苦労話を語る。

「最初の頃は大変だったよ。女はどれだけ犯されても我々に従わないし、男は隙あればここから脱出しようとした。まあ、女は男の前で散々嬲られているうちに泣いてばかりいるようになったし、男も女を人質にしたら大人しくなった。お互いを人質にしたら――お前が反抗したら相手を殺すと言ったら、連中はだいぶ静かになったね」

ファリエルは、得意げに語る男をその手で殴り殺したくなった。

彼女も軍人である以上、そういった仕打ちを受ける可能性を常に抱いている。自らの生命を断つ方法も十数通り会得しているし、そんな状況になったらすぐに自害出来る自信もあった。自分は普通の軍人ではなく、公爵家の血統、捕虜となることは国家に余計な負担を強いることになると理解していた。

おそらく、シヴェイラもそれは知っていた筈だ。

自害の方法も、その覚悟もあった。

フェリスという心残りがあったにせよ、自分の生命を断てなかったのはおそらくすぐ近くにケルブがいたから。

自分が死ねば夫に迷惑がかかる。そう考え、どうしても死を選べなかった。

そして、ケルブも同じだろう。

二人はお互いを想い、そしてその想いを利用された。

「そうだね、確か十五年くらい男どもの相手をさせた頃か、ようやくその女は子どもを身篭った。最初は泣いて殺してくれと叫んでいたけれど、男の名前を出したら『ごめんなさい、ごめんなさい』って言って静かになった。我々もその子どもには期待していたから、生まれるまでは男どもの相手をさせなかった。どうだい、優しいだろう？」

「――――ッ！」

一人の近衛兵が男に連装弩を向ける。

だが、その手を押さえたのはフェリエルだった。

震える腕で、その金色の瞳に憤怒を隠していた。

近衛兵は、腕を下ろす。そして、小さく謝罪した。自分などがでしゃばる場面ではなかった。

「――失礼しました」

「いや、ありがとう。おかげであの男を殺さないで済んだ」

しかし、フェリエルは近衛兵に礼を述べた。

もし近衛兵があそこで動かなければ、自分が殺していたかもしれない、と。

「でもね、その子どもは生まれてすぐにあっさり死んでしまった。環境が悪かったのか、母体の状態が悪かったのか、まあ、とりあえず死んでしまった」

男は悲しそうに顔を伏せ、シヴェイラの抱く骸を見る。

彼は頭を振って、ファリエルたちに向き直った。

「そのあとが大変だった。龍族は子どもを大事するって本当だったんだね。死んでしまった我が子のあとを追おうとするわ、狂ったように暴れ回るわ、施設を壊されても困るから、仕方がなく催眠魔法で子どもは生きているって思い込ませて、子どもの方は乾燥させて保存用の術式を埋め込んだ。そうしないと、すぐにばらばらになってしまうからねぇ」

あとは、ご覧の通り――――男はくるりと一回転し、大仰にお辞儀をして見せた。

そして顔を上げたとき、男はその手に小さな機械を持っていた。

「で、これがその保存用の術式を抜く装置。釦を押せば、すぐに術式は解除される」

「何だと」

フェリエルが男の言葉に眉を寄せた。

今更、そんなことをして何になると思った。

だが、先ほどの男の話を思い出し、すぐに顔色を変えた。

「貴様、先ほど彼女が『狂ったように暴れ回った』と言ったな」

「言ったね」

「それは、まさか……」

男が、にたりと笑う。

そして、装置の釦に手を掛けた。

「ご明察、暴走直前まで狂ったよ」

「――！　やめろッ！　やめさせろッ！」

フェリエルが叫び、近衛兵が一斉に男に飛び掛かる。

だが、遅かった。

「残念」

かちり、と、装置が起動した。

全員が、一斉にシヴェイラを見る。

ただ一人、けたけたと笑う男を除いて。

「――？」

シヴェイラは最初、不思議そうな顔をしていた。

腕の中の子どもが、すこし軽くなったような気がしたのだ。

彼女は首を傾げて――――我が子を持ち上げた。

保存術式の解除された子どもの骸は、その動きにさえ耐えられなかった。

「――――ぼうや？」

シヴェイラの腕の中で、小さな小さな骸が、黒い砂になって崩れた。

はらはらと、砂時計の砂のように崩れていく身体。

その場の、シヴェイラと男以外の全員が、その光景を前に一切の身動きが取れなくなった。

「――――ぼうや？」

最後の一欠片が崩れ去ったあと、シヴェイラは我が子に起こった悲劇を理解出来ないまま、呆然としていた。

我が子の残骸を集めようと身を屈め、その手で砂を集め始めた。

「母さん……」

フェリスは、母の姿に立ち尽くした。

無残な姿にされ、今もまた我が子を奪われた母。

人としての尊厳を踏み躙られ、偽りの平穏さえ今失った。

涙が、溢れた。

「かあさん……」

惨めな姿のまま無言で砂を集める母。

フェリスは顔を覆い、その姿に涙するしかなかった。

そして、その時間さえすぐに奪われた。

「ぼうや、ぼうや、ぼうや……」

シヴェイラの声が、段々と大きくなる。

そして砂を集める動きも、それに伴って粗雑になっていく。

「ぼうや。ぼうや！　ぼうや！！」

「はっはっは、愉快な見世物だ、だがもう――――」

男はシヴェイラの姿を見て大声で笑い、そしてフェリエルたちに向かって一礼する。

「さよならだ」

同時に、シヴェイラの絶叫が反響する。

その反響は衝撃となり、衝撃のあとには魔力を伴った嵐が吹き荒

れた。

天上は崩落し、壁はひび割れて倒れる。あの男がいた場所には天井が落下して血の海が広がり、フェリエルたちはシヴェイラの絶叫を背に脱出した。

救出部隊が全員脱出したその直後、中央研究棟から、巨大な紅光が立ち上った。

◇　◇　◇

研究所内の廊下を、息を荒らげて走る影がある。

それは一組の男女で、男は警備兵の制服を、女は白衣を着ていた。

男は女の手を引いて必死に走り、女は男の手を離すまいと必死に走った。

二人は幾度もあの竜爪族に接近したが、そのたびに女が近くにある部屋の扉を開けて逃げ込んだ。

「どうしてこんなことに」

女は部屋に逃げこむたび、そんなことを言って泣いた。

だが男は涙する女に優しい言葉など一つも掛けず、竜爪族をやり過ごしたらすぐに部屋を出て走った。

泣いていた女も、男が自分の手を引けばすぐにそのあとに付いて走った。

この男について行く以外、生きる道はないと知っていた。

「まただ」

男は前方から悲鳴が聞こえてくると、そこに竜爪族がいると判断して近くの部屋に逃げ込む。

そして来客を確認するための光学観測器を使い、外の様子を確かめた。

血塗れの竜爪族が部屋の前を通りすぎると、彼は女を連れて再び走り始めた。

「――――」

男には、生き残る確信がなかった。

あの〈魔神〉が陽動のためだけに同僚を殺していたとしたら、その陽動が成功した今なら降伏を受け入れる可能性はある。

どんな目的かは分からないが、自分の連れている女研究者なら、利用価値があるとして保護されるかもしれない。ただその場合、自分は殺されるかもしれなかった。

（だが、もう他に手はない）

独力で脱出する術など、もうない。

ここから生きて出るには、あの〈魔神〉の仲間に降服し、ここから連れ出してもらうしかないのだ。

「あ」

女が、そう漏らして動きを止めた。

何をしていると女を怒鳴りつけようとした彼だが、女が自分の背後を見ていることに気付いた。

そして、背後から何か柔らかいものを咀嚼する音が聞こえていることにも。

「――――」

男は振り返り、女を背に隠した。

廊下の先、丁字になった曲がり角から白衣を着た手が出ている。皺のない綺麗な細い手。銀の指輪が一つ。女の手だ。

その手は咀嚼音に合わせて小さく動き、まるで手招きしているように見えた。

「――――」

男は、無言で後退る。

女もそれに従ってゆっくりと後退し始めた。

「――――」

一歩、二歩、三歩。

四歩目を踏み出したとき、女が床の段差に躓いて転んだ。

「あッ！」

と、言う間も無かった。

大きく音を立てて転んだ女は、恐怖に満ちた表情で廊下の先を見る。

男も慌てて女を助け起こすと、すぐに背後を振り返った。

「ケケケケケ」

笑い声か、鳴き声か。

そう喉を鳴らす竜爪族がそこにいた。

「逃げろッ！！」

男は女の手を引いて走り始めた。

背後から爪が床を引っ掻く足音が聞こえ、心臓が早鐘を打つ。

女はぜいぜいと荒い息を吐きながらも、必死に男の手にしがみついていた。

走る、走る、走る。

代わり映えのしない廊下。見慣れた廊下を命懸けで走る。

それは生きたいという本能。死にたくないという本能。

二人はお互いの体温だけを信じてひたすら走った。

そして――――

「え」

いつの間にか、正面玄関に出ていた。

吹き抜けの玄関を見下ろす二階の廊下。

眼下に同僚たちの無残な姿を認め、男は一瞬足踏みした。

その足踏みが、大事な大事な逃げ道を塞いでしまった。

「危ない！」

女が叫んだ。

振り返ると、竜爪族がこちらに向かって跳躍するところだった。

鋭い爪、唾液の滴る牙、それを見た男の心に、絶望が広がった。

せめて、と女を背に庇い、竜爪族をじっと睨み付ける。

自分にこんな度胸があったのかと、密かに驚いた。

「くッ」

竜爪族の爪がその眼前に迫るまで、彼は目を閉じなかった。

そして閉じたときには、もう自分は死んだと思った。

しかし、覚悟した痛みも衝撃も、無かった。

その代わり、耳障りな回転音が響き、空気を震わせる発射音が連続して彼の鼓膜を叩いた。

「――！」

驚いて目を開ける男。

その眼前にいた竜爪族は、彼の頭上から飛来する魔力弾に身体を打ち砕かれていた。

まるで死の踊りを舞う竜爪族から視線を外し、男は自分の背後を見る。

「――――」

光が飛び散り、風が唸るその先に、あの〈魔神〉がいた。

男と女が背を預けている手すりの上に立ち、両手の魔法陣から紅蓮色の魔力弾を撃ち続ける。

竜爪族の身体が少しずつ奥に追い遣られれば、〈魔神〉は手すりからふわりと降りてそれを追う。

やがて竜爪族の身体を極近距離からの魔力弾で完全に撃ち砕き、挽き肉に変えると、〈魔神〉はようやく両手の魔法陣を消し去った。

「――助かった」

女が背後でそう安堵の溜息を漏らしても、男は少しも安心出来なかった。

動きが単純であるだけ、敵にするとしたら竜爪族の方がましだった。

〈魔神〉が自分たちに向き直ったとき、彼は心底そう思った。

「――……」

男は女を庇うように、身体を引き摺って移動した。

全力で走り抜いたせいで、もう立ち上がる気力さえ無かった。

「――……」

〈魔神〉は腰に佩いていた剣を抜くと、ゆっくりと二人に歩み寄る。

その頃になればもう、女も〈魔神〉が決して味方という訳ではないのだと気付いたようだった。

「――……」

剣の鋒を向けられ、男はそれでも女を庇い続けた。

もしかしたら女だけは助かるかもしれないと思ったが、自分から女を差し出すような真似だけは出来なかった。

「――……」

どたどたという慌ただしい足音が廊下の向こうから聞こえてきた。

魔動式甲冑独特の駆動音も一緒に聞こえてきたことから考えれば、〈魔神〉の仲間がこちらに向かってきているのだろう。

「ご無事ですかッ！」

足音の一団から、魔動式甲冑の兜越しの声が聞こえてくれば、男はもう諦め以外の感情を失ってしまった。

せめてもの抵抗に、その背に女を守り続けただけだ。

まともに話したこともない、顔もろくに憶えてない女を、彼は庇い続けた。

「――……」

黒い超硬硝子の向こうで、一対の光学観測器が二人を見下ろしている。

観測器が焦点をあわせる小さな音が、二人にも聞こえた。

「――」

ほんの数秒、時間にすれば〈魔神〉が二人を見ていたのはその程度の短い間だ。

〈魔神〉は興味を失ったかのように剣を収め、二人に背を向けた。

「確保しろ」

「はッ」

〈魔神〉の声は、思ったよりも若い男の声だった。

仲間――――部下たちに二人の確保を命じると、〈魔神〉は二人が逃げてきた方向とは別の方向へと向かっていく。

その背に翻る外套を見送り、男と女はようやく生命が助かったという実感を得た。

◇　◇　◇

必要な情報を総て引き出し、正面玄関に戻ってきた中枢演算器の掌握部隊に二人の男女を任せたレクティファール。施設の内部に向かおうとする彼の元に、フェリエルの悲鳴が届いた。

先ほどシヴェイラを発見したという報告が届いたばかりだった。

〈叔母上が――――！〉

何があったと問い返す前に、彼を衝撃が襲った。

施設そのものを揺るがすような大きな衝撃波が、一気に拡がっていく。

その中心がシヴェイラのいた区画であると、〈皇剣〉はレクティファールに告げた。

「――最悪の事態、か」

衝撃をやり過ごし、再び天井を見上げるレクティファール。

その遙か向こうから、途方も無い魔力波が感じられた。

〈レクト〉

通信の向こうのオリガの声は、震えていた。

やはり最悪の事態が起きたのだと、彼は確信する。

〈シヴェイラ殿が――――暴走。現在、施設上空、高度一〇〇、このままだと、近くの街に向かう可能性がある〉

「――了解。足止めを」

〈ん〉

ぶつん、と切れた通信。

それに続いて、フェリエルからの通信が入った。

〈――――レクト、すまない〉

「構いません。ケルブ殿を確保した部隊は他の部隊の援護を受けてすでに施設を出ました。そちらをお願いします」

〈しかし……〉

フェリエルにしては歯切れの悪い言葉。

シヴェイラを諦め切れない、そういうことだろう。

「シヴェイラ殿は私が何とかします。その前にケルブ殿の状態を落ち着けてください。シヴェイラ殿を止めたとき、どんな状態になるか分かりません」

〈――分かった、夫君に従うのも妻の仕事だ〉

「感謝します。でも、まだ――――」

妻ではない、そう言おうとしたレクティファール。

フェリエルが、それを遮った。

〈今の君なら、わたしたちは喜んで身を捧ぐよ。龍族の女は強い男にはめっぽう弱いからな〉

「――」

レクティファールはどんな言葉を返すべきか悩み、結局無言を貫いた。

何を言っても、今はフェリエルに勝てないと思った。

「――では、よろしく」

〈ああ、任せておけ〉

通信が切れた。

レクティファールはそれを確認し、再び天を仰ぐ。
天井の向こうで悲しく吼える龍の姿が、見えた。

「さて、往きましょうか」

身体の周囲を魔力場で包むと、彼は天井を打ち抜いて天へと昇った。
剣を抜き、魔力を練り上げ、その心に決意を持って。悲しき義母を救うために。

◇　◇　◇

飛行のための魔法を扱える魔導師というのは、存外少なかった。
それというのももともと飛行するという概念を持たない種族は、魔法を使っても上手く飛ぶことが出来ず。飛行能力を持つ種族はそもそも魔法を使って飛ぶという必要がない。
飛行出来る種族が魔法によって飛行速度や航続距離を伸ばすことはあっても、元々飛行出来ない種族が飛ぶという例は余りにも少なかった。

しかし、〈皇剣〉には最初から飛行のための諸機能が備わっていた。

空中戦さえも、完全兵器〈皇剣〉が与えられた運用目的の一つであったからだ。

どこでもどんな戦いでも可能とする汎用性が、〈皇剣〉にはあった。極端な話、この天空の彼方にある真空の巷でさえも、〈皇剣〉の行動可能域だった。

「――見付けた」

魔力場に包まれたまま、レクティファールは夜空の奥にいる龍の姿を確認した。

紅色の鱗は所々爛れ、その翼の皮膜は半分近くが破れていた。

「哀れな」

レクティファールがそう呟いてしまうほど、その姿は悲しく哀れだった。

娘と引き離され、夫の前で慰み者にされ、最後は我が子の死さえ偽られた。

その果てに狂い、こうして意味もなく破壊を振り撒こうとしてい

る。これ以上哀れな龍を、レクティファールは知らない。

「――戦闘を、開始する」

味方総てに通信を繋ぎ、そう一方的に宣言した。

すでに高度は五〇〇を越えている。眼下には真っ黒い森林が広がり、少し離れた盆地にぽつりぽつりと街の灯りが見えた。

「これ以上、あなたに何かを奪わせる訳にはいきません」

奪えば、奪われる。

レクティファールはもう、シヴェイラが何かを奪われるような事態にはしたくなかった。

だから、剣の鋒を向け、その先に魔法陣を掲げた。

彼の身長よりも大きな魔法陣に、魔力が収束していく。

「――他の誰かに、あなたを撃たせたくはなかった」

シヴェイラは、ここにきてようやくレクティファールの存在に気が付いたようだった。

大きく口を開き、彼に向かって突っ込んできた。

「フェリスにも、オリガにも、フェリエルにも、ファリエルにも、他の誰にも」

撃てば悲しみを背負う。

失った悲しみに加え、討った悲しみも背負う。

それを、レクティファールは許容出来なかった。

我侭だと理解してなお、許容出来なかった。

「だから、私に討たれて下さい」

極太の光条が、シヴェイラに向かって放たれた。

「――ッ！」

空気を震わせる爆光。

これまでとは違う純白の魔力光が夜空を裂き、シヴェイラに殺到した。

回避行動を取る暇もなく、その光はシヴェイラを直撃する。

「――！！」

シヴェイラは甲高い鳴き声を上げ、煙を曳いて落ちていく。

レクティファールはそれを追った。

「――流石に、これでは落ちませんか」

煙を曳いて落下していたシヴェイラは、空中の一点でその体勢を立て直した。

表皮の損壊は煙を上げて癒され、しかし完全には治りきらずに爛れる。

先ほどよりもなお醜い姿になったシヴェイラは、その口腔に光を集めていた。

「〈龍の吐息（ドラゴン・ブレス）〉！」

シヴェイラの口腔に集まった紅の魔力、それは一拍を置き、正確にレクティファールに向けて放たれた。

先ほどのレクティファールの魔法よりも巨大な光の奔流が、彼に向かってくる。

「龍族の本気、そういうことですかね！」

剣を縦に構え、そこに魔力を集中させることでレクティファールは光の濁流を切り裂いた。

切り裂かれた光が夜空に飛び散り、輝く。

〈紅空の朔〉の表面が、残留魔力で灼かれる。それ以外にも各箇所が異常を起こし、警報がレクティファールの視界を飛び交い、その神経を逆撫でた。

「うるさいッ！」

警報を総て切断し、レクティファールは〈龍の吐息（ドラゴン・ブレス）〉の最大出力発射によって敵を見失っているシヴェイラに迫った。

刺突の構えで剣を持ち、そのままシヴェイラへと向かっていく。

「――！」

シヴェイラは接近してくるレクティファールに気付き、迎撃の構えを見せた。

小出力の〈龍の吐息（ドラゴン・ブレス）〉を連続して発射し、彼の機動を限定する。

そして自分が望む場所に追い込んだレクティファールに向けて、その太い尾を振り抜いた。

「ちぃッ！」

横合いから水蒸気を曳いて迫る尾を認め、レクティファールは回避行動に出る。

あれで殺されることはないにしても、動きは止められてしまう。下手に自由を与えてしまえば、シヴェイラの怒りの矛先が別の対象に向けられる可能性があった。

レクティファールはシヴェイラの怒りを最後まで受けきれなくてはならない。

そうでなくては、シヴェイラは無用の罪を背負うことになってしまう。

「――ッ」

尾が風を唸らせて自分の真下を通り抜けていく。

レクティファールはそれを見送り、しかしその直後に自分を襲った衝撃に僅かな混乱を抱いた。

「何が――！」

自分と相手の状況を確認したレクティファールは、シヴェイラが尾を振り抜いた勢いそのままに翼を叩き付けてきたのだとすぐに悟った。

シヴェイラの翼はその上端に鋭い突起を複数持っている。それをレクティファールにぶつけてきたのだ。

「流石、フレデリックの妹ッ！」

恐ろしく戦闘意欲に溢れた攻撃だ。

吹き飛ばされた勢いのまま、〈紅空の朔〉の破損部分を撒き散らしてレクティファールはシヴェイラから距離を取る。

しかし、レクティファールが体勢を整える前に、シヴェイラは追撃を仕掛けてきた。

「まだ――！」

回避行動を取ろうとするレクティファール。

しかし、その視界にあるものが飛び込んできた。

「――フェリス」

地上の、涙と鼻水でぐしゃぐしゃになっているフェリスの泣き顔。

その口が、『母さん』と呼んでいるのが分かった。

「――！」

自分が戦闘に見せてはならない隙を見せていることに気付いたレクティファールが反応するよりも早く、シヴェイラの牙が彼の身体に食らい付く。

「――ッあぁッ！」

剣を持っていた右腕、さらに右肩から右脇腹に掛けて鋭い牙が食い込んでいく。

兜の内側に映る警告画面は既に視界を埋め尽くすほどに増え、レクティファールはその痛みに呻いた。

食い千切られる――――レクティファールは確信した。

「痛覚伝達……遮断ッ！」

レクティファールが痛覚遮断を行うのと同時、レクティファールの右半身はごっそりシヴェイラに食われた。

さらに追撃。今度は上空から尾が迫ってきていた。

「回避は、無理か」

その言葉は、現実になった。

食われた部分の修復に意識を費やした結果、レクティファールは回避行動を諦めた。

これまでで一番大きな衝撃を受け、彼の身体は地上に向けて一気に加速した。

◇　◇　◇

地上で二人の戦いを見守っていた一団。
その中央にいるフェリスが悲鳴を上げた。

「レクト！」

半身を失い、血液を振り撒いて地上へと落ちてくるレクティファール。

これにはケルブの処置を行っていたフェリエルとファリエルも慌てた。

「〈皇剣〉頼みの戦い方などするからだッ！　――――ファリエル、ケルブ殿の容態は！」

「駄目！　肉体だけじゃなくて精神情報も欠損がひどすぎる！　これこそ儀式魔法でも使わない限りどうにもならない！」

少しでもケルブの容態が安定すればレクティファールの援護に向かおうと考えていたフェリエルだが、妹の言葉にそれを断念する。

今はケルブの死を遅れさせるくらいしか出来ないが、それでもフェリエルとファリエルの全力を注いでいる。ここでどちらかが抜ければ、それこそケルブの生命は一気に潰える。

「オリガッ！」

「無理」

培養施設から出てきたのは、竜爪族だけではなかった。龍族の紛い物、半身が溶けたような醜い死にぞこないの龍が、地下から何体も這い出してきている。近衛軍部隊はそれらを施設内に押し留めようと必死の防戦を行っている最中だった。

オリガはそれらの部隊の援護で手一杯になっている。龍の姿に変じれば、細かい魔法の制御など出来はしない。この場を維持するためにも、今は人の姿で魔法を使うしかなかった。

「くそッ！　肝心なところで妻を不安させる男だ！　あとで徹底的に言い聞かせてやらねばな！」

フェリエルがそう吐き捨ててケルブの処置に入る。

潜伏拠点から医療資材を運び込んだが、それでも足りない。

「ああもう！　これは根本的な対処が必要だぞ！　どうにかしろレクトぉッ！！」

フェリエルの叫びが聞こえたのか、地上に落ちてきたレクティファールが再度上空に向かって上昇していく。

その身に纏う魔動式甲冑は半壊し、兜は何処かに消えていた。しかしその機能はほぼ修復されているらしく、欠損していたレクティファールの腕も元に戻っていた。

しかし、無尽蔵の回復力を持つ〈皇剣〉をしても、専門家から見ればまだ危ういらしい。

「満身創痍じゃないか、あの馬鹿者」

レクティファールが〈皇剣〉の機能の一割も使用出来ないことを知っているフェリエルは、上空を見上げ、口惜しそうに唇を噛む。せめてあと一人龍の姿になれる龍族がいれば援護も出来るというのに――――そう心の中で叫んだ。

「レクト……！」

そんな中で、ただ上空を見上げることしか出来ないフェリスは、自分の無力さを大いに呪っていた。

何も出来ない、何も出来ない、何も出来ない。

今まで散々思い知らされてきたその事実に、今度は圧し潰されそうな罪悪感を抱いた。

あそこで戦っているのは自分の母と、自分の大切な人だというのに、自分のすぐ近くで苦しんでいるのは父で、それを救うために必死になっているのは従姉妹たちだというのに、自分は何も出来ない。こうして祈ることしか出来ない。

「何で、何でボクは……」

何故、どうして、ほんの少しでも自分に力があったら。

オリガほどの魔法の才能はいらない。フェリエルたちほどの医療技能もいらない。レクティファールほどの圧倒的な力もいらない。ただ、そのうちの一つでも助けられる程度の力があればいいのに――それさえ、無い。

「レクト！」

情けない。悲しさよりも、怒りよりも、自分に対する嫌悪感が募る。

何も出来ない自分が嫌になる。

「レクト！」

こうして叫ぶことしか出来ない自分が嫌になる。

「ボクは……！」

もっと力があれば――――そう願うフェリス。

だが、そんな彼女の耳に届いたのは、その心に湧き上がる自己嫌悪さえも包み込む優しい声だった。

「――――フェリス」

「え？」

慌てて背後を振り返るフェリス。

そこには、地面に横たわったまま、自分に向けて優しげな眼差しを送る父の姿があった。

「父さん！」

慌てて父の元に駆け寄るフェリス。

相変わらずフェリエルたちがその処置を行っているが、状況は一

進一退だ。

ケルブの声も、苦しさが隠しきれていない。

だが、それ以上に、その声には喜びがあった。

「――大きくなった……それに、母さんに似て……綺麗になったな」

微笑み、フェリスの髪を撫でるケルブ。

片方しか無い目で娘の成長した姿を見詰め、満足そうに笑っている。

「父さん、母さんが……」

「知っている……先ほどから聞かせてもらっていた……」

ケルブは上空へ目を向け、光跡を残してぶつかり合う妻と、義息になる青年の戦いを見る。

「フェリスの大事な人は……強いな」

「うん、すごく強い人だよ。でも……」

フェリスはぽろぽろと涙を零し、父の手を握り締める。

「ボクは何も出来ない……レクトが必死になって母さんを救おうとしているのに、ボクは……」

俯くフェリス。

その頭を、ケルブが優しく撫でた。

「力がないからって、何も……出来ない訳じゃないぞ」

「え？」

フェリスは顔を上げ、父を見る。

ケルブは、自信に溢れた表情で頷いた。

「信じてあげなさい」

静かに、しかし力強くケルブは言う。

「これから彼がどんな困難にぶつかっても、どんな結末を迎えても、どんなに人に蔑まれることになっても、信じてあげなさい」

「しん、じる……」

ケルブは、再度上空を見上げた。

「信じて信じて、どちらかが死ぬまで信じ抜いてあげなさい。死んだあとも信じてあげなさい。他の誰にも力で勝てないなら、他の誰にも負けないくらい彼を信じ抜きなさい」

信じることは、とても強い力だ――――ケルブの言葉に、フェリスは戸惑った。

信じることは誰にでも出来る、そう思った。

「でも、父さん」

「――信じるだけなら、誰にでも出来る。それは……間違いない」

ケルブは空を見上げたまま、娘に言い聞かせる。

「でも、最後まで信じ抜くのは、強い人じゃないと出来ない」

強い力を持たないなら、強い心を持てばいい。

ケルブは、そう言ってフェリスに笑い掛けた。

「男は、自分の大事な女に信じて貰えるだけで、莫迦みたいに突き進むことが出来る」

単純で、それでいて間違えようのない真理。

「男っていう生き物は、自分の近くに誰かがいないと……本気で戦えない生き物なんだ」

「父さん……」

「僕も、シヴェイラがいたから今まで戦ってこれた」

ケルブの目から、一雫の涙が落ちる。

今まで支えあってきた妻の、その哀れな姿に涙が零れた。

「だから、あいつが戻るまでは僕も負けられない。――死んでやるつもりはない」

ケルブは、まだ死ぬつもりはなかった。

娘の成長した姿を見て、心残りが一つ減ったのは間違いない。

だが、その娘の夫となる青年の姿を見て、別の心残りが出来てしまった。

「シヴェイラは、君の結婚式を楽しみにしていた。君が生まれてすぐ、この娘の花嫁衣裳は自分が作るんだって……」

実家にいた頃のように華やかな衣裳は作ってやれないけれど、この娘に似合う最高の花嫁衣裳を――――シヴェイラの真っ直ぐな願いを、ケルブはずっと憶えている。

「もう君は大人になった。好きな人も出来た。あとはもう、その日を待つばかり」

ケルブは独り言のように呟く。

「シヴェイラは、まだ待っているよ」

フェリスの、旅立つ日を。
自分の元から旅立つ日を。

「だから、フェリスは彼を信じてあげなさい」

彼はきっと、人の願いを叶えられる人だから。
彼はきっと、君を大切に想ってくれる人だから。

「君が出来ること、君にしか出来ないこと、もう、分かっているんだろう……？」

「――うん」

フェリスは、強く強く頷いた。

父の手を握り、何度も。

「じゃあ、それを伝えなさい。それだけで、彼は君に応えて……くれる、から……」

ケルブは、その言葉を最後に再び意識を失った。

想像を絶する苦痛の中で、父として出来ることをするためだけにその意識を保ったのだ。

フェリスは父の手をその胸の上に置くと、涙を拭いて立ち上がった。

「従姉さん」

フェリスの声が、変わった。

強く、芯のある声。

真っ直ぐ自分を貫く信念を持った声だ。

「父を、お願いします」

「ん、任せろ」

フェリエルは口の端を持ち上げ、頷いた。

「あの莫迦の尻、わたしたちの分まで蹴っ飛ばしといて」

ファリエルはフェリスに視線を向けること無く、しかし力強い言葉で従妹を励ました。

「はいッ！」

頷き、フェリスは一団から離れて天を仰ぐ。

天上の戦いは、まだ続いていた。

「――――」

大きく息を吸い、腹の底に力を込める。

魔法などではない、本当の声を届けたい。

その一心で、彼女は声を張り上げた。

「――レクトぉおおお

シヴェイラとの幾度目かの近接戦。

その動きに慣れたレクティファールは、回避行動の中でシヴェイラを救う方法を模索し続けていた。

最上の手段は、その意識を奪うこと。

暴走はシヴェイラの精神状態が制御不能に陥っていることが原因だ。その意識さえ停止させてしまえば、あとはどうにでもなる。

（問題は、上手く意識を刈り取れるかということなんですけどね）

高速で動き続けるシヴェイラの動きに合わせてその意識を奪えるか、正直に言えばかなり困難だった。

頭部に触れて魔力衝撃波を撃ち込めば、どんな頑強な生き物でも意識を保つことは出来ない。威力を調節する必要はあるが、それはシヴェイラの体躯の大きさや構造からすぐに計算出来る。

問題は、その隙がないことだ。

意識を奪うだけの衝撃は、逆に言えばそれ以上の威力はない。

計算された場所に計算されただけの威力を撃ち込んで初めて効果を発揮する。

こんな高速戦闘の最中にそんな動きが出来るのか、〈皇剣〉に慣れていないレクティファールには確信が持てなかった。

（――――最悪の事態も、覚悟しなくてはなりませんか）

力があっても使い方を知らなければ意味が無い。

そんな力は無いものと同じだ。

（いっそ無いなら、諦めもつくのでしょうが）

〈皇剣〉の分析では、シヴェイラの身体も崩壊が始まっている。

出来るだけ早く決着を付けなければ、その生命が危うい。

しかし、急いてもその生命はない。

空中で体を捻り、こちらに〈龍の吐息（ドラゴン・ブレス）〉を連射するシヴェイラ。

レクティファールは低威力の魔力弾を連射し、自分を指向しているシヴェイラを牽制した。至近を通過する魔力の塊。命中軌道に入っているものは、魔力弾で撃ち落とし、魔力刃を纏う剣で斬り落とした。

（ふむ）

レクティファールはこのとき、最悪フェリスに一生涯恨まれることも覚悟した。

シヴェイラをその生命から救うには、最上級の結果を手に入れるしかない。

今現在得られる中でもっとも良い結果を得て、ようやくシヴェイラを取り戻すことが出来る。それ以下の結果は、シヴェイラを苦痛から救うことにはなってもその生命は救えず、ひいてはレクティファールやその周囲の者たちの未来に修復し難い影を落とすことになる。

その最たるものが、フェリスとの関係だ。

マリアはどんな結果になろうとも、フェリスをレクティファールに嫁がせるだろう。政治的な制約もあるだろうが、それ以上に感情の面でもフェリスをレクティファールに託すに違いない。

レクティファール以外の男に嫁ごうとも、フェリスの心は常に闇を背負うだろう。ならばその闇を知る男に、とマリアが考えるのは自然なことだ。

恨まれるだろう、憎まれるだろう、しかし、母を救えなかった相手に嫁がなくてはならないフェリスの気持ちを慮れば、それくらい甘んじて受けようと思った。

シヴェイラに向き直り、〈皇剣〉の計算領域で魔力衝撃波の威力計算を始める。

「さて――――」

少し距離を取り、レクティファールはシヴェイラの隙を探り始めた。

爪を避け、牙を避け、尾を避け、〈龍の吐息（ドラゴン・ブレス）〉を避ける。

動きを計算し、共通点を見付け、類型化する。

その果てに、一点を見つけ出す。

「決着を付けましょう」

誰にも邪魔されない高空で、未来を懸けて。

レクティファールは狙いを定め、魔力を収束させた。

そのときだ。

「――レぇクトぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！！」

地上から、空気を震わせるフェリスの声。

魔力を伴い、まるで空全体を震わせるような声だった。

「――ッ！？」

思わず地上を見るレクティファール。

シヴェイラも、その動きを鈍らせた。

「フェリス」

〈――レクト〉

今度は、通信だった。

今までのフェリスの声とは違う、凛とした声。

責任感ではなく、信念で支えられた声。

〈母さんをお願い〉

「ええ、それはもちろん……」

レクティファールの顔は、何を当たり前のことを言っているのかといった風であったが、しかし、フェリスの言葉はそれだけではなかった。

〈レクト、ボクは――――〉

フェリスはそこでほんの少しだけ言葉を止め、やがて一つ頷き、レクティファールを見上げ、頬を桜色に染めて言い放った。

〈レクトが大好きだから、レクトを信じる〉

その一言に、レクティファールは自分の意識が何処かに飛んだのを感じた。

呆然を通り越し、無の境地に辿り着きそうになった。

「え？」

思わず聞き返すレクティファールに、フェリスは再度言う。

〈君がこの世界で一番好きだから、君のことを世界で一番信じる〉

「――――」

頬を赤らめ、それでも笑顔で、決意に満ちた金の瞳で、母と殺し合いを演じている男に向かって。

フェリスのその心の強さにレクティファールはきょとんとした顔をし、しばらくすると腹の底から笑いが込み上げてきた。

抑えきれない喜悦。

その喜悦が、身体中に力を滾らせた。〈皇剣〉の状態表示が総て戦闘出力へ、さらに超過出力へと上昇する。

意識が加速し、周辺事象の未来を予測する演算領域が形成された。

「くくくっ」

〈あ、笑ったなっ〉

「いやいや、失礼」

頬を膨らませるフェリスに、レクティファールは頭を下げる。

こんな状況下でも、いざとなれば強く自分を保てる。フェリスの

そんなところが、レクティファールには羨ましかった。

「では、その信頼に応えてみせましょう。我が姫君」

〈――そこは我が姫君じゃなくて、我が妃って言って欲しかったなぁ〉

「それは、また次の機会に取っておくことにしますよ」

自分の言った言葉に照れるフェリスにレクティファールそう言い、シヴェイラに向き直る。

シヴェイラはこれまでと打って変わって、静かにレクティファールの動きを見詰めていた。

「――娘は、分かるのですか」

もしそうなら、フェリスのあの声がシヴェイラを救い出す最後の一手になる。

このフェリスとの短い遣り取りが、レクティファールの中から迷いを消し飛ばし、〈皇剣〉との意識同調が深く確固たるものに変化した。

〈皇剣〉は意識して使うのではない。それはすでにそこにある、使うという概念さえ必要ないのだと彼は知った。

「人を信じさせるにはまだ私は未熟です」

威力計算、目標座標、共にレクティファールの脳裏に答えはあった。

あとは、迷いなく撃ち込むのみ。

そのあとのことは、そのときに全力を尽くすまで。

「ですが、そんな私を信じてくれている人の信頼くらいには、応えようと思います」

〈皇剣〉に命じ、右手に魔法陣を浮かべ、拳を握る。

腰を落とし、足元に魔力場を形成し、一瞬の挙動に総てを込める。

「あなたの息子に相応しいと思われる程度には、ね」

瞬間的に収束する魔力は、レクティファールの足元と、その拳へ。

集う魔力は風を生み、風は音を生む。

高空を流れる風とは違う、意思を持った風がレクティファールを中心にして吹き荒れる。

「――往きます」

その宣言通り――――レクティファールは疾駆した。

空気の壁を打ち抜き、シヴェイラの反応さえ追い抜き、傍目には消えたと思えるほどの速度で。

躊躇いなく、真っ直ぐに、ただ一点を目指して。

「――!!」

――――シヴェイラの爪を、牙を、その攻撃の総てを掻い潜り、しかし総ては避けきれずに、それでも繁吹く血は意識の外に捨て、

「――!!」

その額の一点に、拳を打ち込み、その奥に向けて研ぎ澄まされた魔力衝撃波を撃ち込んだ。

空間さえ捻れそうなほど圧縮された魔力波が、シヴェイラの意識

中枢目掛けて突き進む。

そして魔力波は、定められた場所でその猛威を振るった。

龍族の中の魔力の流れを阻害し、破壊し、混乱させた。

物質的な破壊を伴わない、純魔力的攻撃。世界中の国が研究を重ねている対龍族用魔法の真髄が、ここにあった。

「――っ！！」

シヴェイラの甲高い絶叫が、夜空に広がり、消えて行く。

悲しげに、恨めしげに、どんよりと濁った金の龍眼をレクティファールに向け、シヴェイラは地上へ向けて落下を始めた。

光の粒を散らして人の姿へと変じるシヴェイラ。

レクティファールは気を失っている彼女を追い、降下へ転じた。

章末話「星に集った五龍姫」（前書き）

今回、あとがきに今後の更新予定とちょっとしたお知らせがあります。

章末話「星に集った五龍姫」

外套に包まれたシヴェイラを抱えたレクティファールは、軟着陸というには速過ぎる勢いで地上へと降りてきた。

それでも地面に激突する直前に速度を完全に殺し、ゆったりと地面に降り立った。

「レクト！」

一番に二人に駆け寄ってきたのはフェリスだった。

彼女が一番身軽な立場であったからというのも理由の一つだろうが、何よりも二人を一番心配していたのは彼女だった。

レクティファールはフェリスに微笑みかけると、一言「大丈夫」とだけ言った。

彼の性格から考えれば、それは自分のことではなくシヴェイラのことを言っているのだろう。確かに彼に言う通り、シヴェイラの状態はこの時点で望める最高の状態であったと言って間違いない。

それでも、フェリスに続いて二人に駆け寄ったファリエルからすれば、シヴェイラの容態は最悪に近いものだった。

「――――なんてこと」

彼女がそう漏らしてしまうのも無理はない。

人の姿に戻ったシヴェイラの身体はあちこちが欠損し、精神を司る情報さえ損傷していることもあって龍族特有の高い治癒力を使用出来ない状況に陥っていた。

これはケルブも同じだが、片目を失って魔力の流れが乱れていることも大きな原因で、早急に片目を身体に戻し、魔力の流れを整え、さらに欠損している生命体としての情報を補ってやる必要があった。

シヴェイラの状態を確認して立ち尽くすファリエルも、汗だくになってケルブの処置を行うフェリエルも、自分たちがすべきことも、その方法も分かっていた。

だが唯一、その手段がなかった。

「ファリエル従姉さん？　母さんを早く……」

医療系の走査魔法を使うためにシヴェイラの胸の上に手を置いたまま、ファリエルは硬直していた。

シヴェイラを横抱きにしたままのレクティファールも、彼女をじっと見詰めて一つも言葉を発しない。

フェリスだけが、沈黙を保つ二人の様子に焦り、声を震わせていた。

「従姉さん！」

フェリスの悲鳴に、ようやくファリエルが動き出した。

「とりあえずケルブ殿の隣に静かに寝かせて、あと生命維持装置を取り付けるから手伝って」

「分かりました」

〈皇剣〉を持ち、簡単な医療知識を持つレクティファールは助手として申し分のない存在だった。触れるだけで相手の状態を把握することも出来るし、医療器具がなくても〈皇剣〉の一部を物質化させて代用することも出来る。現に今も、レクティファールは〈皇剣〉を介して魔力を始めとした生命維持に必要な要素をシヴェイラに送り込んでいる。

シヴェイラの身体が拒絶反応を示さないようにと出来るだけ固有の波形を持たない形に調整された魔力は、その分吸収されにくいし、送り込める量も少ない。最強兵器である〈皇剣〉を以てしても、生命維持装置の代わりぐらいにしかなっていないのが現状だった。

レクティファールはシヴェイラを担架に寝かせると、生命維持装置の接続を手伝う。その間、フェリスは母の手を固く握ったまま、小さく「母さん」と呟くばかりだった。

だが、そんなフェリスを誰も責めようとは思わなかった。

他の種族ならいざ知らず、龍族は精神にその生命体としての重きを置いている。シヴェイラの意識がフェリスを認識しているかどうかはこの時点ではなんとも言えないが、フェリスが母に呼び掛けるというのは治療として十分に成立する。

ファリエルは従妹が必死に祈る横で、医療機器を使ってさらに正確な検査を行っていた。

扇状の光がシヴェイラの身体を走査し、ファリエルが睨む表示窓にその結果を表示する。そこに浮かび上がった数値は、ケルブよりもさらに悪いものだった。

「肉体欠損〇．三七、精神欠損〇．二七」

肉体情報の欠損が四割弱。精神情報の欠損が三割弱。

共に、絶望的な数値。

今生きていることが不思議な数値だった。

しかも、その数値は今この瞬間も悪化を続けている。

「――姉さん」

ファリエルはケルブの処置を行なっている姉に、その数値とシヴェイラの詳しい状況を伝えた。

妹から状態を聞いたフェリエルは、無表情のままシヴェイラを一瞥。

そしてケルブの現在の状態を、平坦な声で妹に告げる。その間、姉妹たちは慌ただしく手を動かしたままだった。

「こちらも危険だ。ここでは設備が貧弱に過ぎる。最低でも、巡洋艦の医務室程度は欲しい」

ここでどれだけ処置をしようとも、焼け石に水程度の効果しかない。二人は、本来なら皇都やそれに準じる規模の大都市にある巨大病院か、儀式治癒魔法の設備がある大神殿に搬送してようやくどうにかなるかどうかの状態だった。

フェリスが従姉二人の会話に顔を蒼白にし、近くにいたレクティファールに縋るような視線を向ける。彼女にはもう、誰かを信じて頼るしか術がなかった。

「どれだけ保たせても一時間。輸送車に載せて医療設備の整った街に向かっても――――間に合わないだろうな」

フェリエルは付近の地図を脳裏に描き、頭を振った。こんな敵地の真ん中では輸送騎による搬送も行えない。

「〈皇剣〉の力を使って皇都まで転移するのは……」

ファリエルがレクティファールに問う。

確かに単純な出力であれば〈皇剣〉にそれだけの超長距離転移魔法を使う能力はある。だが、それはフェリエルの提案を叶えることを意味しない。

「無理です。〈皇剣〉に生体情報の総てが登録されていない生物を転移させることは出来ません。もともと〈皇剣〉の転移能力は生物の転移を想定していませんし」

そもそも転移魔法自体、第一次文明の頃に較べればその技術は著しく後退している。第一次文明の頃は大陸間を跳躍することも可能だったというが、今は近距離で、しかも専用の装置同士を結ぶことぐらいしか出来ない。無機物であればその限りではないが、今必要なのは無機物を転移させる方法ではなかった。

「じゃあ、どうすれば……」

ファリエルが口惜しそうに顔を伏せる。

「これなら、施設から連れ出さない方が良かったかもしれない……」

「――そんなことはないだろう」

フェリエルは妹の零した本音を即座に否定した。

「治療のために施設から奪取した資料を読んだが、あの施設でもこの二人の寿命はあと数ヶ月と見ていた。やはり片目を失ったのが効いているらしい。連中には死にゆく龍族の生命など大した意味はない、治療など考えもしなかっただろう」

フェリエルが投げて寄越した資料を流し読みし、レクティファールは眉を顰めた。

あの施設では二人の残った眼と心臓をその機能を維持したまま摘出する研究が進められており、そこに二人の生命を永らえようという意思は欠片も感じられなかった。

「龍族の研究さえ満足に出来ていない奴らに、龍族の治療など出来る訳もない。奴らにとって龍族は兵器転用可能な『資源』で、生き物ではないんだ」

フェリエルはケルブの身体に繋いだ管に流す魔力量を調整し、そう吐き捨てた。

シヴェイラの受けた仕打ちを考えれば、彼らが二人を『モノ』としか見ていないことは容易に分かる。それは医師としてのフェリエルにとってはこの上ない怒りを覚えることであり、許し難いことだった。

だが、今のフェリエルにはその行いを責めることは出来ても、その行いによって傷付いた同胞を救うことは出来ない。彼女は自分の無力さを噛み締めながら、決断を下すしか無かった。

「――――決めるしか、ないか」

フェリエルが呟き、ファリエルがその手を止める。

「フェリエル従姉さん……？」

フェリスが二人を交互に見遣り、唇を震わせた。

二人が何を考えているか、分かってしまった。

「もうじき、ここには帝国の駐留部隊が現れる。輸送車の中でも治

療は続けられるが、おそらく皇国軍の基地までは保たないだろう」

それ以上の言葉を、フェリスは聞きたくなかった。

士官候補生として教育を受けてきた彼女には分かる。

従姉は彼女に、両親をこのまま眠らせるか、大した時間を稼ぐことも出来ない延命を続けるかを選ばせようとしていた。

それに気付いたレクティファールが、思わずフェリエルの名を呼ぶ。

「フェリエル」

「レクト、お前は黙っていろ」

フェリエルの言葉は冷たかった。

その冷たさが、無力な自分に対する嫌悪からのものだとレクティファールはすぐに思い至った。

だが、それを知ったところで彼に出来ることは何一つ無かった。

「フェリス」

フェリエルの声に、フェリスの身体が震えた。

目が泳ぎ、明らかな動揺を身体全体で表している。

「ぼ、ボク……ボクは……」

フェリスの身体の震えが大きくなり、やがて彼女は自分の身体さえ支えられなくなって倒れ込んだ。

レクティファールがその身体を支えるが、その唇は真っ青で、身体の震えは大きくなるばかりだった。

「フェリエル……」

「分かっている」

フェリエルは最悪の場合、フェリスの意思を無視してでも治療を止めるつもりだった。

これ以上治療に手間取れば帝国の部隊に捕捉される。それだけは絶対に避けなくてはならない。

「フェリス、お前が決められないならわたしが決める。それでもい

いのか」

フェリエルも二人とは血縁関係にある。フェリスが決断出来ないなら、自分がその決断をするつもりだ。それに、医官である彼女には、自分が医官階級の最上位である戦場に限れば、自分が指揮する医療行為総てに対する権限と責任がある。フェリスという血縁者がいるからその意思を尊重するつもりであったが、その意思が示されないとなれば医官としての判断で治療を中止することも出来た。

「ね、従姉さん」

フェリスはなおも答えを出せなかった。

フェリエルが苛立ち、フェリスから決断の権利を奪おうと口を開く。

「分かった」

フェリエルはこのとき、自分が総ての罪を背負うつもりだった。

レクティファールは彼に出来る最善を尽くした。妹はその職分の及ぶ限りの最善を尽くした。ならば、ここから先は自分の仕事だと思った。

「ファリエル」

彼女は妹に医療行為の中止を命じようとその名を呼ぶ。

ファリエルは顔を上げ、疲れたような表情を見せた。

「姉さん」

「ケルブ、シヴェイラ両名に対する治療を――――」

断念する――――その一言がフェリエルの口から発せられようとした。

いや、ひょっとしたらもう発せられたのかもしれない。

だが、それ以上の音がその声を覆い隠した。

だん、という地面を叩く音。

全員が、その音の方向を見た。

「まだ」

巨大な杖を地面に突き立てたオリガが、息を荒らげてそこにいた。

土と汗に塗れたその目には、レクティファールがこれまで見てきたオリガの姿の中でも一際強い意思の輝きがあった。

「まだ、やれる」

そう断言するオリガに対し、フェリエルとファリエルは当惑を隠し切れない。

オリガは医療に関しては素人同然で、そんな彼女が方法があると言ってもにわかには信じ難い。二人は顔を見合わせ、ファリエルがその真意を問うた。

「どういうこと？」

オリガはその問いに、ごく短い言葉で答えた。

「――〈皇剣〉による物質と精神の再構成、生命の創造、それをやる」

オリガ以外の全員が、顔を見合わせた。

◇　◇　◇

皇都〈イクシード〉の星天宮。

その後宮の一室で、護衛の乙女騎士の呆れの眼差しを一身に受けた二人の女が睨み合っていた。

いや、睨み合っていたというには語弊がある。睨んでいるのは片方の女性で、もう片方は静かにお茶を啜っているだけだ。

「――リリシア、これは一体どういうつもりかしら」

自分よりもずっと年下の巫女姫リリシアを睨み、白龍公の姫君メリエラは軍装のまま底冷えのする声で相手を問い詰める。

彼女が示しているのは、一枚の書類。今朝方メリエラの元に届けられた、リリシアの行動予定表だった。

「わたしの来月の予定ですが、それが何か？」

リリシアは余裕を崩さないまま、にこりと笑う。

その瞬間、メリエラの額に青筋が浮き出た。

紅茶の置かれた卓を思い切りぶっ叩き、書類をリリシアに突き付ける。

「何かじゃないわ！　どういうことよこれは！　レクティファールと二人きりでグラストリアの離宮に行くなんてわたしは聞いてない！」

「二人きりですもの、当たり前でしょう」

しれっと答えるリリシア。

巧妙に各方面に根回しを行いようやく実現直前まで漕ぎ着けた「二人っきり」の時間の実現、ここで邪魔されて堪るものか。

そんな内心を押し隠し、リリシアはのらりくらりとメリエラの追求を避ける。

「殿下も来月には騎士学校の長期休校に入ります。今回の一件でお疲れでしょうし、のんびりしていただこうと思っているだけです」

「だったら何で二人きりなのよ！」

静養ならば後宮や離宮の面々を連れていけばいいじゃないかと言うメリエラに対し、リリシアはやれやれと溜息を漏らす。

「メリエラだって二人きりならその方が良いでしょう？」

「ぐっ」

馬鹿正直に言葉に詰まるメリエラに、彼女付きの護衛部隊に属する侍女中尉メイフェルががっくりと肩を落とした。

自らの部下であるウィリィアもそうだが、己の感情に正直過ぎるのも考えものである。

「それに、あまり騒がしくては殿下ものんびり出来ないでしょう」

「だからって、あなたが一緒に行く理由には……」

「グラストリア離宮はグラストリアの四界神殿の敷地内にあります。そして、わたしは勉学のためその神殿で三年ほど過ごしました。周辺の案内なら、わたしが適任ではないですか？」

「ぐぐぐ……」

メリエラが一つ言えば二も四も言い返してくるリリシア。いちい

ち反論しにくい言葉を選んでくるリリシアを歯ぎしりと共に睨み付けるメリエラ、そんな彼女をメイフェルは多分に呆れを含んだ声で窘めた。

「姫さま、はしたのうございます」

「～～っ！」

どすんと椅子に座り直し、ふんと鼻を鳴らすメリエラ。

リリシアの勝ち誇ったような表情が何とも腹立たしかったが、この場で効果的な反撃が出来るとも思えない。

メリエラは呼吸を落ち着け、思考を巡らせる。

（静養地を変えるよう皇王府に相談してみようかしら、公爵家の別荘であれば、逆にわたしがレクトと二人っきりに……二人っきり……二人っきり――うふ……）

「ふふふ……」

「はぁ……」

メイフェルは虚空を見て変な笑い声を上げ始めたメリエラに嘆息した。

またろくでもないことを考えているに違いない。

「姫さま」

「はっ！？」

奇声を発していたメリエラだが、メイフェルの一言で意識を取り戻す。

慌てて居住まいを正し、表面上は平静を保って紅茶に手を伸ばした。

だが、

「――」

その手が、とある一点で停止した。

「――メリエラ様？」

メイフェルはメリエラの様子に気付き、その名を呼んだ。リリシアも、リリシア付きの侍女も同じように訝しげな表情を浮かべている。

三人の視線の中心で、メリエラが呟いた。

「レクト」

メリエラは勢い良く立ち上がり、ぽかんとした表情を自分に向ける三人に言い放った。

「レクトが呼んでる」

「え？」

慌てたリリシアが磁碗を受け皿に戻し、再度問う。

「レクティファール様が呼んでいるって、一体」

「ケルブ殿とシヴェイラ殿が危ない、わたしの力が必要だって……」

見れば、メリエラの髪がぼんやりと光りを放っている。

周辺の魔力もメリエラに向けて集まり始めていた。

「リリシア」

凛とした声で名を呼ばれれば、リリシアもまた背筋を伸ばし、毅然とした態度でそれに答える。

「はい」

「わたしはこれからレクトのところに『転移』します。あとのこと、お願いしてもいいかしら」

〈騎従の契約〉によって連結された主の呼び声に、メリエラは騎龍として応えなくてはならない。

原則として超長距離の生物の転移は不可能だが、例外はある。その一つが、〈皇剣〉による同一空間内の生物の亜空間経由の召喚。その存在の根底で常にレクティファールと繋がっているメリエラだけが出来る転移だ。メリエラは自分を必要とするその主人の意思によって、今まさにその下に『召喚』されようとしていた。これまで最低限しかなかった両者の繋がりだが、その繋がりとは別に物質情報用、精神情報用の情報連結が行われる。接続が行われるたび、メリエラの身体にレクティファールから四界の力が流れ込む。

メリエラは今までに感じたこともないような高揚感を覚え、ほう、と熱い吐息を漏らす。今ならば父カールとさえ真正面から戦える気がした。

〈皇剣〉に関して人よりも詳しいリリシアは、メリエラがレクティファールに召喚されようとしていることをすぐに理解する。歴史上それほど例は多くないが、こうして自らの龍を召喚した皇は存在した。英雄でもある、初代皇王だ。

総てを察したリリシアは、自分の取るべき態度を取り、メリエラに送るべき言葉を送る。

「もちろんです。あとのことは万事お任せくださいな。あ、あとレクティファール様によろしくお伝え下さい」

「分かったわ」

リリシアは花のような笑顔でメリエラを見詰める。

二人は同じ男の傍らに立つ者として、それぞれの役割をよく理解していた。

メリエラがレクティファールの龍として戦うなら、リリシアはレクティファールの名代として留守を預かる。

「メイフェル、軍には摂政令による特別任務に就くと説明しておい

て」

「は、承りました」

メイフェルは深く頭を垂れ、了解の意を示す。

メリエラはリリシアと無言で視線を交わすと、部屋の中央へと移動した。

直後、彼女の足元に古代語によって形成された魔法陣が浮かび上がる。魔法陣から吹き上がる魔力によって、メリエラの髪がふわりと揺れた。

「――レクト」

召喚に応じる意思を込めたその言葉を残し、メリエラは光となって星天宮から消え去った。

◇　◇　◇

一瞬意識が途切れ、再びそれを取り戻したとき、メリエラは大人の身長よりもやや高い中空にいた。

しかし彼女は自分の置かれている状況に焦ることもせず、眼下に愛しい男がいることに気付くと、その腕の中に勢い良く飛び込んだ。

「レクト！」

「メリア」

強く強くその身体を抱きしめる。久し振りに触れたレクティファールの身体からは、強い血の匂いがした。

血と土汚れだらけの姿でメリエラに触れても良いものかと悩んでいたレクティファールも、自分の腕の中に落ちてきた柔らかい肢体に気付けば、心の奥底から湧き上がる感情にそれを抱かずにはいられなかった。

しばらくお互いを確かめ合った二人。そこでようやくメリエラはレクティファールが血と土で汚れた戦闘衣姿であることに気付くと、顔を歪めて「無事でよかった」と小さく漏らす。レクティファールの唇が自分の耳朶を撫で、愛おしげに名を呼ぶと、彼女は大きく身体を震わせた。

「レクト……」

やがてメリエラはレクティファールに向き直り、その銀色の瞳を

じっと見詰めた。

相手の瞳に自分が映りこむ様を見て、メリエラは己の欲望の赴くままに瞳を閉じた。

触れて欲しいと震える瞼。レクティファールはそんなメリエラの様子に小さく笑うと、ゆっくりとその唇に自分のそれを近付けた。

「――――」

互いしか見えず、互いの息遣いしか聞こえない。

「――むぅ」

そんな二人の様子に、先ほどからずっと同じ場所で立ち尽くしたままのオリガがついに切れた。

「――ふンっ」

つかつかと足音を立てて抱き合ったままの二人に近寄ると、レクティファールの足目がけて杖の石突きを突き下ろす。

真上からの、少しも威力を分散させない見事な一撃だった。

「――っ！？」

レクティファールの身体に衝撃が走る。

彼は痛みを堪えてきょとんとした面持ちのメリエラを地面に降ろすと、その場で蹲った。

「お、お、お、お……」

声にならない苦悶の声。

メリエラはレクティファールが何故そんな状況になっているのか分からずに首を傾げていたが、自分を責めるような視線で見詰めるオリガにようやく自分が喚ばれた理由を思い出し、慌て始めた。

「お、オリガ、ケルブ殿とシヴェイラ殿は！？　大丈夫なの！？」

「――そっち、フェリエルとファリエルが処置中。だいぶ、不味い」

オリガに先導され、メリエラは森の中を進んでいく。

レクティファールを置き去りにしてしまったことに気づいたが、オリガの背中から「わたし、今とても怒っています」という気配が

滲み出ており、何も言うことが出来なかった。

そのまましばらく木々の間を進むと、メリエラの視界は急に開けた。

医官や看護兵が慌ただしく駆け回る光景の中心に、二人の男女が横たわっていた。

写真でしか見たことがないが、メリエラはその二人がケルブとシヴェイラなのだと悟る。

そこで忙しげに動き回るの紅の龍姫二人の姿を見付け、メリエラはその名を呼んだ。

「フェリエル、ファリエル」

「ああ、来たか」

「本当に呼び寄せられるのね。便利なものだわ」

自分の姿を見て何処か安堵の表情を浮かべる二人の下に駆け寄ると、メリエラはそこでようやくケルブとシヴェイラの状態を見ることが出来た。

「ひどい……」

メリエラは口元を両手で覆い、その光景に言葉を詰まらせた。
これが自分と同じ人の姿であると、信じたくなかった。

「お二人の様子は？」

「厳しいな、儀式まで保たせるのがやっとだ」

フェリエルが空中の制御卓を操作しながら、答える。
二人の頭上に浮かんだ表示窓には、刻一刻とその生命が消え行く様が克明に映し出されていた。

「レクトはどうした」

「え、あ、ええと」

「すぐ来る」

どう説明したものかと迷うメリエラの代わりに、オリガがいつもより平坦な声で答える。

ちらりと向けられたオリガの視線に、メリエラはぶるりと肩を震わせた。何も映し出されていない金の瞳は、恐ろしいまでに澄んでいた。

そんな二人の遣り取りに気付かないフェリエルは、レクティファールの代わりに自分の手伝いをしているフェリスの姿を探す。

「そうか、フェリスの方は――――」

「従姉さん！　脱脂綿持ってきた！」

脱脂綿の入った金属箱を抱えて現れたフェリスは、両親の元にメリエラの姿を見付けると目を丸くした。

「本当に召喚なんて出来るんだ……」

上から下までメリエラの身体を確認して呟くフェリス。メリエラはその仕草に苦笑し、しかしすぐにその肩に手を置いてフェリスの苦労をねぎらった。

「ええ、出来るみたい。――――それにしてもご両親のこと、大変だったわね、フェリス」

「はい、でも……」

フェリスは真っ直ぐにメリエラを見詰め、はっきりとした声で自分の気持ちを告げた。

「ボクはレクトを信じます。信じて、ボクの力を預けようと思います」

「――――そう」

メリエラはフェリスの頭を撫で、よろよろと視界の端で彷徨く婚約者を見た。

とりあえず、フェリスとは上手くやっているらしい。

「レクト」

そう名を呼べば、レクティファールはその場に四龍姫総てが揃っていることに気付いたらしく、足早に近寄ってきた。

「お揃いですか」

「ああ、急いで儀式を始めるぞ」

「はい」

フェリエルとの短い遣り取りを経て、レクティファールはメリエラ以外の四人にそれぞれ視線を向けた。

「念のために確認しますが、本当に良いのですね？」

レクティファールの確認に、四人が頷く。

「先ほども言ったが、むしろ望むところだ」

「姉さんと同じく。でも、メリエラと違ってわたしはあんたを甘やかしたりはしないからね！」

フェリエルは首肯し、ファリエルはレクティファールに指を突き付ける。

「――遅かれ早かれ、こうなった」

オリガは何も考えていないような無表情のまま、しかしレクティファールの服の裾を掴んで小さく答えた。

「ボクは、父さんと母さんを助けたいし、レクトを助けられるなら喜んでそうするよ」

最後にフェリスが大きく頷き、四人はそれぞれ自分の意思をレクティファールに示した。

「分かりました」

レクティファールと、四人の龍姫の視線が絡み合う。

「え？　え？」

唯一、メリエラだけが現状から取り残されて目を白黒させていたが、誰も彼女に状況を説明しようとはしない。

正確に言えば、説明する必要がなかった。

「それでは、〈騎従の契約〉を交わしましょう」

レクティファールのその一言で、総ては説明出来るだから。

「え？　契約って、え？　えええええええええええっ！？」

◇　◇　◇

レクティファールの一言に思わず絶叫したメリエラ。

何も聞かされていないのかと驚くフェリエルたちだが、すぐにレクティファールの首根っこを捕まえてメリエラに事情を説明させた。

「つまり、わたしたち五人の龍の瞳と心臓を使い、〈皇剣〉の制御の補助を行う、そういうことでいいの？」

「はい」

〈騎従の契約〉は、最低限の繋がりであれば互いの状況がある程度分かるというものでしかない。しかし今回のメリエラの召喚のように、繋がりの数を増やすことでその力を通わせることは難しいことではない。

皇王と契約した龍が、〈皇剣〉の力を借りることはこれまで何度かあったし、その繋がりを使えば、契約者である龍族が〈皇剣〉の補助をするという逆の方法も不可能ではない。

この方法はこれまでに例外のないことではあるが、理論的には既に確立された技術だった。

「で、そのためには〈騎従の契約〉をするのが一番確実で手っ取り早いと」

「はい」

〈騎従の契約〉は必要に応じて契約者同士の繋がりを増やすことが出来た。そして契約そのものが多くの実例を持ち、龍族とそれ以外の種族を繋ぐ方法としては非常に安定している。オリガは〈皇剣〉との接続方法として、〈騎従の契約〉をフェリエルたちに提案したのだった。

「――ふーん」

メリエラは何処か不満そうに口を尖らせるも、ケルブとシヴェイラを救うためと言われれば文句を言うことは出来なかった。

それにレクティファールそれを決め、実行しようとしている以上、メリエラにそれを止めることは難しい。

彼女は少し悩む素振りを見せたが、答えは既に決まっていた。

「分かったわ」

現状を思えば、これ以外に二人を救う方法は思い付かない。

なら、反対する理由もなかった。

「よし、小姑の許可が下りたぞ。みんな、準備を進めろ」

「うん」

「ん」

「はい！」

「って、フェリエル、今失礼なこと言ったでしょうっ！」

二人の様子を見守っていた四人だが、メリエラが了承したと知るやレクティファールを引き摺って契約用魔法陣の中央へと向かっていく。

四人同時契約ということで複雑な魔法陣だが、オリガが描いたのだから間違いなどないだろう。

ぎゃいぎゃいと喚くメリエラを尻目に、五人は魔法陣の中央に立った。

「さて、それはオリガ」

そうフェリエルがオリガを促す。

「ん、――――起動」

頷いたオリガが、契約用の魔法陣を起動させた。

光が吹き荒れ、五人を包み込む。

まだ喚いていたメリエラの姿も、光の壁の向こうに消え、声も風が遮ってしまった。

そんな中で、フェリエルがおもむろに口を開いた。

「ふむ、本来なら口上の一つも交わすべきなのだろうが、時間が惜しい。よって……レクト」

「――？　なんでしょう？」

フェリエルに手招きされ、レクティファールは彼女の前に立つ。

「何、簡単なことだ」

ぺろりと自分の唇を舐めるフェリエルに、レクティファールは若干たじろいだ。

「ここは一つ、わたしたちを口説け」

「な……！？」

レクティファールが思わず間抜けな声を上げ、残る三人も各々動揺したように表情を変えた。

オリガさえ、微妙に視線が泳ぐ。

「驚くようなことではないだろう。ただの婚姻ならまだしも、〈騎従の契約〉ともなればわたしたちの一生の問題だ。ここでそれなりの誠意を見せてもらわなければ、一生を君に捧げる代価だと思ってくれればいい」

フェリエルの言い分は、確かにそれなりに納得のいくものだった。レクティファールという男にしてみれば恐ろしく難易度の高い要求であったが、こんご数千年の彼女たちの人生を考えるなら、安すぎる代償だ。

レクティファールはしばし呻いていたが、ついには諦めて両手を上げた。

「分かりました、ええ、分かりましたとも」

「よろしい」

満足そうに頷いているフェリエルも、実は内心動揺していた。それなりに長く生きてきた彼女であるが、その立場上、友人以上の異性を持ったことはない。

「では、もう一点、ここで伝えておくことがある」

「今度はなんでしょう……」

レクティファールはもう、疲れ切った表情だった。

生命を懸けた戦いの方が、まだましだと思っていた。

レクティファールの予感は、大いに当たった。

「契約は口付けで行うように」

「なぁっ！？」

レクティファール、ファリエル、フェリスが揃って驚愕した。

驚いていないのは、総てを知ってこの儀式を提案したオリガだけだ。

「普通なら契約時に必要な生体情報は最低限でも構わないんだが、これはあくまでも時間を掛けて相手の生体情報を取得出来ることが前提だ。しかし今回の儀式では生体情報段階での接続が必要で、そのためには、最初から詳細な生体情報を〈皇剣〉に登録する必要がある」

「つまり、粘膜同士の接触」

皮膚同士の接触でも生体情報を読み取ることは出来るが、今回はそれでは不十分。

粘膜細胞を採取し、それを元に生体情報を登録するのがもっとも手っ取り早く、確実な方法だった。

「納得したか」

そうフェリエルに問われれば、三人は頷くしかない。

三人が納得したのを確認し、フェリエルはレクティファールに向き直った。

「では、さっそく始めようか」

「え、あの」

「ほら、さっさと口説け」

大きく胸を張って口説けと言われても、レクティファールにはなかなか厳しい。

「え～……」

残る三人が興味津々といった風で二人を見つめていることも、なかなか言葉が出てこない原因だろうか。

レクティファールは時間の限られた中で散々悩み、その果てに決断した。

「ええと、では失礼して」

「うむ、さっさと――――ってえぇっ!?」

妹のファリエルさえ聞いたことがないフェリエルの奇声。

レクティファールはフェリエルの後頭部に手を回し、さらにその腰にも手を添えた。

夜会の踊りなどよりも遥かに近いその距離に、フェリエルは驚いた。

「ま、待て、わたしは口説けと……」

「――ええ、だからこうしています」

口だけでは、上手く伝わらないでしょうし――――レクティファールはそう囁きながら、ひどく真剣な眼差しで、フェリエルを見つめている。

「フェリエル」

その声は、他の三人には聞こえていないだろう。

それくらい小さく、だが湿った声だった。

「私は君から見て未熟で、至らないところばかりだろう」

「あ、ああ」

「だから、私は君に頼みたい」

レクティファールの吐息が、フェリエルの唇に触れた。

じっと自分を見詰めるレクティファールの瞳が、口よりも余程正直にその気持ちを代弁していた。

「私の傍で、私を導いて欲しい」

「――――」

このとき、フェリエルは少し迷った。

それは自分でなければ出来ないことなのかと悩んだ。他の誰かでもいいのではないかと。

レクティファールがそんなフェリエルの気持ちに気付いたかどうかは定かではないが、彼はただ一言こう付け加えた。

その一言が、フェリエルを決心させた。

「フェリエル、誓って言える。私には君が絶対に必要だ」

「レクト……」

嘘ではない。そう思った。

こんな嘘を吐ける者ならば、きっと皇王になどなろうとはしなかっただろう。

愚直過ぎるからこそ、フェリエルはその言葉を信じた。

「――分かった」

了承。

そして、相手の体温を唇で感じる。

「ん」

物質情報、取得。

精神情報、取得。

第二段階での生体情報連結を開始――――完了。

認証――――許可。

情報連結確認――――完了。

レクティファールの脳裏にそれらの文字が踊り、二人の繋がりは離れた。

「――――」

「――――つ、次だな」

レクティファールの腕から解放されたフェリエルが、ばたばたと慌ただしげに三人の元へと引っ込む。

妹の影に隠れて熱を持った頬を冷まそうとしているその姿を横目

に、今度はオリガがレクティファールの前に立った。

「――次」

「――いきなりですね」

「時間がない、さっさとする」

ん、と言って両手を伸ばすオリガ。レクティファールが身をかがめると、オリガの両手がその首に巻き付いた。

「――――なんか、すごく悪いことをしている気分になるんですが」

自分の胸ほどまでしかないオリガを前にして、レクティファールは何ともいえない気分を味わっていた。

年齢的には何の問題もないが、外見的には――――ということだろう。

「気にしない」

「いえ、私が気にするんですが」

視線を落とせば、そこには手掛かりなしの自由落下な光景。

レクティファールの失礼そのものの視線を前に、それでもオリガは自分を見失わない。

「大丈夫、フェリスよりは『ある』」

「え!?　そうなのっ!?」

オリガの背後でフェリスが叫んだ。

自分の胸をぱしぱしと叩き、首をひねる。

「そうかなぁ……」

大して変わらないという一言は、レクティファールの心の奥底に封印された。

英断だった。

「――わたしが欲しい？」

オリガが、恐ろしく真っ直ぐな瞳でレクティファールを見上げる。

その飾り気のない言葉に、むしろレクティファールの方が戸惑った。

「それは、確かに……」

欲しいか欲しくないか、二択であれば間違いなく欲しい。

オリガという女性は、それくらいレクティファールにとって魅力的に映った。彼女ほどしっかりと自分を持っている女性は、レクティファールの知っている中でもそう多くない。

憧れに近い感情さえ、抱いていた。

ただ、そんなことでいいのかと思う気持ちもある。そんな感情で欲して良いのかと。

「わたしは、レクトが欲しい」

「――――」

だが、オリガにとってはそんなレクティファールの感情さえ自分を侵す要素にはならない。

自分は自分、相手は相手、オリガの価値観は決して揺るがなかった。

「欲しい？」

それは、ある意味で子どもじみた問い掛けであった。

それ故に、正しい問いでもあった。

「欲しいです」

だから、レクティファールも真っ直ぐに答えた。

オリガを他者に取られることが、苦痛だと思えたからだった。

「じゃ、どうぞ」

どうぞ、と言われ、レクティファールは苦笑した。

苦笑し、オリガを欲した。

「――……」

物質情報、取得。

精神情報、取得。

第二段階での生体情報連結を開始――――完了。

認証――――許可。

情報連結確認――――完了。

「――ん、終わり？」

静かにレクティファールと触れていたオリガだが、その一言は少し不満そうだった。

そんなオリガに再び苦笑いし、レクティファールはその小さな身体を下ろした。

「――また」

オリガの最後の一言は、それだった。

自分の道を見失わない、彼女らしい一言だ。

「さて」

「次、ボクなんだけど……」

オリガを見送ったレクティファールの前に立ったのは、フェリスだった。

「まだフェリエルが妹防壁解除しなくて……ゴメンね？」

「いえ、別に謝るようなことじゃないでしょう」

レクティファールはフェリスの正面に真っ直ぐに立ち、フェリスの頬に触れた。

フェリエルとは違い、その身体には一切触れようとしない。

「あ……」

フェリスが、戸惑ったようにレクティファールを見上げる。

やがて彼女は、黙って瞳を閉じた。

震える瞼が、その揺れる感情を示していた。

「――ずっと一緒に、いてくれますか？」

震える瞼に一つ唇を落とし、レクティファールは訊いた。

フェリスの涙で、唇が湿る。

「ボク、何も出来ないよ」

「これから、幾らでも見付かりますよ」

「ボク、泣き虫だよ」

「私の前で泣いてくださいね」

「ボク、きっとレクトに迷惑ばかり掛けるよ」

「私も、フェリスに迷惑を掛けると思います」

ぽろりぽろりと涙が溢れる。

レクティファールはそのたび、フェリスの涙で唇を濡らした。

「もう一度訊きます」

「……はい」

レクティファールは、フェリスの唇に触れる直前で、再度訊いた。

「一緒に、いてくれますか」

「はい……」

今度は、瞼ではなかった。

「ふあ……」

物質情報、取得。

精神情報、取得。

第二段階での生体情報連結を開始――――完了。

認証――――許可。

情報連結確認――――完了。

「フェリス」

「レクト……あの……」

レクティファールから一歩離れ、フェリスは唯一無二となった男を見上げた。

男は、一言だけ、彼女に言った。

「一緒に助けましょう」

共にいる、ただそれだけの約束。

ただそれだけの約束が、フェリスを笑顔にした。

「うん！」

跳ねるようにオリガたちの元に戻るフェリス。

フェリエルに何か言われ、真っ赤に顔を染めた。

「――何を言われたのやら……」

「さて、何かしらね」

「あ、お勤めご苦労さまでした」

「本当にね、今度はあとあとまでそっちで面倒みて欲しいわ」

「そうします」

ファリエルの文句に、レクティファールは素直に頷いてみせた。

そんなレクティファールの態度に毒気を抜かれたファリエルは、やれやれといった風に肩を竦めた。

「こんななよなよしい男に嫁ぐなんて……運命を呪ってもいいかしら？」

「ご随意に。私はファリエルさんと一緒になれれば嬉しいですけど

ね」

「ふーん、そう」

ファリエルはレクティファールの後頭部に手を回し、ぐいとそれを引き寄せた。

平素と変わらない顔色、態度、レクティファールにはそれが好ましかった。

いつものファリエルが、レクティファールにとって一番ファリエルらしい姿だった。

「なにかやったら、口より先に手出すからね」

「慣れてます」

「ふン」

ファリエルはそのまま、レクティファールの唇に触れようとする。

レクティファールは、その間に自分の手を差し込んだ。

「――何？」

「いえ、一言だけ」

「そ、じゃあ聞いてあげる」

互いの吐息を交換するような距離で、レクティファールは約束通り一言だけファリエルに贈った。

それは、レクティファールが持っていたファリエルの第一印象でもある。

「一番、可愛いですよ」

「んなっ！？」

反論よりも早く、レクティファールはそれを封じ込める。

ファリエルがばんばんと胸を叩くも、レクティファールは楽しそうに笑うばかりだった。

物質情報、取得。

精神情報、取得。

第二段階での生体情報連結を開始――――完了。

認証――――許可。

情報連結確認――――完了。

「――憶えてろ」

「可愛かったですから、忘れたくても忘れられないと思いますよ」

「だああっ、可愛いって言うなっ！」

「ははは、私は正直なんですよ」

ひょいと逃げ出したレクティファール。

ファリエルがそれを追い、二人は魔法陣の外へと走り出した。

「わたしたちも行くか」

フェリエルがそう笑いかければ、フェリスは苦笑交じりの笑顔で、オリガはいつもと同じ、でも少しだけ口の端を持ち上げて答えた。

「はい、行きましょう」

「ん」

三人は、光の消え始めた魔法陣を歩く。

いち早く外に出たらしいレクティファールがメリエラに小言を貰っている光景を見ながら、同じ方向へと。

四龍の姫君は、こうして一人の男を中心に集った。

五人の龍姫との同時期の契約という、これまでに無いことを成し遂げた男の下に。

◇　◇　◇

五人の龍姫をそれぞれ五芒星の頂点に配し、ケルブとシヴェイラを陣の中心に。

最後に術者となるレクティファールが、硝子製の容器に入った二人の龍眼を手に二人の傍らに立つと、総ての場は整った。

魔力で描かれた魔法陣は、様々な色に変化して一緒に定まらない。四界の力総てに対応するため、この魔法陣には固有の波形がなかった。その分、制御は難しくなる。

「殿下、帝国軍駐留部隊の接近を確認しました」

レクティファールの下に、伝令が駆け寄る。

竜爪族、なりぞこないの龍を完全に駆逐し、捕虜の輸送任務に就いた者と負傷者を除いた近衛たちは施設の破壊任務に当たっていた。

「間に合うか」

「はい、帝国製の爆薬ということで少し手間取りましたが、万事予定通りです」

「そうか、ご苦労。では予定通りに施設を爆破する」

「は」

伝令が下がり、魔法陣の中には八人だけが残る。

それぞれ緊張を滲ませた表情で、龍姫たちはレクティファールを見詰めた。

「――お聞きの通りです。帝国軍部隊に捕捉されるまで時間がありません」

「ん、準備、出来てる」

オリガが頷くと、残る四人も同じように頷いて見せる。

レクティファールはそれぞれの顔を確認し、やはり頷いた。

「フェリス、フェリエル、ファリエルの生体情報を元に、ケルブ、シヴェイラ両名の欠損情報を補います」

一定数値以上欠損情報が補填されれば、あとは自己修復によって二人の生体情報は安定する。

肉体の欠損に関しては、精神情報の修復が行われ、失われた片目を〈皇剣〉の能力によって元の状態に戻せば、これも龍族の治癒力で回復する見込みだった。

つまり、完全な修復というよりも、自己修復が可能な段階にまで回復させることが主な目的になる。

「フェリスはご両親のことだけをしっかりと考えていてください。フェリエルとファリエルは、龍眼の再同調と肉体情報の修復を」

「うん、分かった」

「了解した」

「こちらも了解」

フェリスが両手を組み、連結したレクティファールの演算領域に向けて両親の情報を送り出す。

フェリエルとファリエルは複数の医療魔法を展開し、儀式に備えた。

「オリガは全体の統括とメリアの補助を。メリアは〈皇剣〉の制御を補助してもらいます」

「ん」

「任せて」

オリガの杖が地面を叩き、魔法陣の輝きが増した。

メリエラの意識がレクティファールの意識に同調し、その認識領域が一気に広がる。

レクティファールは五人の意識をその内に受け容れ、〈皇剣〉の制御領域に感覚の手を広げた。

広大な、星空にも似た空間が、レクティファールの制御意識の前に広がる。

「それでは――――始めます」

唸る魔法陣。

レクティファールは、自らの中に存在するその広大な宇宙に向けて意識を飛ばし、〈皇剣〉と同化した。

五つの意識をすぐ近くに感じ取り、彼は密かに微笑んだ。

生物の創造にも等しい創造主の領域に近付こうというのに、不安など少しもなかった。

◇　◇　◇

この日、皇国海軍遣西艦隊旗艦である戦龍巡洋艦〈セフィリア〉の広域探測儀に、計測可能値を大きく上回る魔力が検出された。

その魔力は〈セフィリア〉の探測儀を一時的に使用不能に追い込み、西域各国の対空警戒網も影響を受けた。

このときの魔力は他の大陸でも観測され、アルマダ大陸は世界各国の注目を浴びることになる。

天を貫くような真っ白い柱が現れたという多数の地元住民の証言もあり、各国はその原因の究明に躍起になった。

ただ、この魔力が如何なる理由によって発生し、また如何なる結果を産んだのか、それを解明出来た国家はついに現れなかった。

章末話「星に集った五龍姫」（後書き）

この章末話を持ちまして、無事に第二章の本編が完結いたしました。

これも皆様のご愛顧とご教授のおかげです。本当にありがとうございました。

さて、第二章が終わり、今後の予定ですが、まず更新とは別に皆様にお知らせしたいことが一点、このたび、拙作「白の皇国物語」がアルファポリス様より書籍化の運びとなりましたこと、ここにご報告申し上げます。

それに伴い、五月二二日二三時五九分を以て書籍化となる第一章のプロローグから第九話までを、ダイジェスト版へ差し替えます。

なお、連載に関しましては、今のまま継続することになりますので、今後とも宜しくお願いいたします。

閑話乃弐「レクトのそれなりに平凡な日」

学生というものは面白い生態を持っている。

同じ人物の同じ講義を受けても、講義中の態度や知識の受け取り方には差が現れ、その結果真逆の持論を抱くことも珍しいことではない。

別個の自我を持つ人として当然のことと言えばそれまでだが、たった一人の教育者が与えた一つの事実が幾つにも枝分かれするというのは、それそのものが生き物の成長のようではないだろうか。

知識というのは人に伝えられていくことで、まるで生き物のように成長していく。

そう思うのは、おかしいことなのだろうか。

「――まあ、逆に言えば、伝えられない知識は成長出来ないということで」

レクティファールは独語し、開いていた論文集を閉じる。

そして本棚の林立する部屋をぐるりと見回し、嘆息した。

「勿体無いな、こんなにも面白い本があるのに」

彼の言葉を聞く者は、一人もいない。

二〇脚ほどの机と椅子が並んでいるが、そこに座っているのはレクティファール一人だけだ。

あまりにも閑散としたこの部屋の名前は、皇国軍騎士学校第四資料室。

通称、『死』料室。

第一から第三までの資料室からあぶれた論文や書籍が、無造作に詰め込まれる部屋だ。

「勿体無い、そう思える者が騎士学校（ここ）には少ないからじゃよ。ほれ、頼まれていた論文じゃ、劣化防止術式が切れとるでの、慎重に扱え」

「あ、どうも」

レクティファールの独り言に答え、一人の老人が部屋の奥にある扉から姿を現す。

奥の扉は倉庫に繋がっていた。老人は倉庫から持ってきた数冊の論文をレクティファールに手渡し、近くの椅子を引いて腰を下ろした。

「よっこらせっと。まったく、最近の若い者は年寄り使いが荒い……」

「そうは言いましても、この資料室の本は教授が管理しているものですし、私にはどこに何があるのか分かりません」

「分かっとるよ、わしも他人が好き勝手に倉庫に入るのは勘弁して欲しい。予算が足りんとかで、倉庫の本は劣化防止処理してないからの」

ぼろぼろにされてはかなわん――教授と呼ばれた老人が、そう言ってレクティファールの手に移った論文を見詰める。

その瞳は悲しげであり、本に対して哀れみを抱いているようだった。

「たった一度読まれただけで倉庫に放りこまれたものもあるが、一度でも読まれた奴はましな方じゃ。読んだもんが誰かにその知識を伝えるかもしれんからな。だが、一度も読まれんで倉庫で眠っている奴もおる」

レクティファールは教授の言葉を聞き流し、渡されたばかりの論文を開く。

表題は「補給線が断たれた場合における効率的な物資の調達について」――平易な言い方をすれば、上手い略奪の方法とでもなるだろうか。

「――そもそも、騎士学校の候補生は目先のことばかりに囚われ過ぎておる。高級将校となるには、それこそ軍の一〇年先、国家の一〇〇年先を見据えた思考と行動が必要だというのに」

教授の愚痴もなんのその。レクティファールは完全に聞き流す体勢に入り、〈皇剣〉だけが黙って教授の話を記憶している。

ぱらりぱらりと頁を捲るレクティファールと、ぶつぶつと愚痴を垂れ流す教授。見た目だけなら祖父と孫ほどにも歳が離れた二人の、ある意味日常的な光景だった。

「おい、聞いておるのか」

「ええ」

聞くだけですが、とは口に出さない。

「まったく、この資料室に足を運ぶのだからさぞ使える男なのだろうと思っておったのに……」

この教授、戦史研究では皇国でも名の知られた人物なのだが、その著書の中で毎度のごとく話を脱線させることで有名だった。編集者が何を言っても耳を貸さず、しかし相手が戦史研究の大家なので強くも出られない。騎士学校でも我が道を行く偏屈な人物として通っており、候補生たちは彼を敬いつつも何処かで苦手意識を持っていた。

だがレクティファールにしてみれば、教授もただの趣味人として見ればそう大したことはないと思っている。

皇城にはもっと恐ろしい老人が屯しているのだ。

「まあ良いわ、その論文についての学術報告書を書き上げたら次の資料を貸してやろう。せいぜい気張るがええ。――迎えも来たことだしの」

教授が資料室の扉に眼を向ける。

扉の磨硝子の向こうで、青い髪がちらちらと覗いている。

「あの娘も、さっさと入って来れば良いものを……」

呆れたように頭を振り、教授は隣の倉庫に引っ込む。自分がいるといつまで経っても扉の前の娘がその場から動かないと知っている

からだ。

「ではの、軍人なぞいつ死ぬかわからんよって、悔いのないようにの」

「はい」

論文を小脇に抱え、レクティファールは立ち上がる。

教授が倉庫に引っ込んでしばらく経つと、扉がそっと開いた。

「――レクト？　いる？」

いると分かっているはずなのに、フェリスはそう訊く。さもレクティファールがどこにいるか知らないまま、探しに来たといった風を装っている。

レクティファール個人としての感覚なら別段どうとも思わないが、周囲から見れば、あまりにも間怠っこしい態度に見えるらしい。

「いますよ」

フェリスの声に答え、レクティファールは資料室を出る。

廊下にはちらほらと候補生たちの姿が見えたが、二人に意識を向けている者はいなかった。

友人たちと雑談する者。資料を手に廊下を足早に歩く者。壁に掲示された講義の予定表を見て、自分の手帳にそれを書き入れる者。

これといった変化のない、騎士学校の日常だった。

「次の講義、始まるよ」

「次は確か、統合戦術学でしたか」

「うん、第五講義室」

フェリスを伴い、レクティファールは廊下を進む。

ふとフェリスがレクティファールの抱えた論文を覗き込み、眉を寄せた。

「また、変なの借りてきたね」

「なかなかためになる論文ですよ」

レクティファールがそう言っても、フェリスは疑いの眼差しを緩めることはなかった。

自分の班員が「効率的な略奪の方法」などという物騒な論文を抱えていれば、確かに心配になるかもしれない。

「軍人の視点で書かれた略奪の方法なんて、うっかり世間に知られたら騒がれるだろうね」

「それはそうでしょう。軍人は仕事として人を傷付ける権利を有している。その分、世間の目は厳しい」

軍という国家を護持する機関は、その目的上大きな武力を持っている。ときに大規模な災害への対応も行うが、皇国では周辺国家との紛争でその姿を見ることの方が多いのではないだろうか。それだけ皇国が他国との間に問題を抱えているということなのだが、これでも先代皇王の即位以降、紛争の火は小さく少なくなっている。

北方に巨大な松明があることで、その他の争いが小さく見えるだけなのかもしれないが。

「特に皇国軍は、他国に侵攻することがほとんどなかった。だから、こういった論文は忌み嫌われ、隠されてしまったんでしょう」

国民性とでも言おうか、皇国の民は他国の民間人に対して自国軍が無体な仕打ちをすることを心底嫌っている。それは建国前の苦しい日々を知っている者たちが未だ存命で、その当時の記憶を子々孫々に伝え続けていることが最大の理由だ。

苦しかった、生きたかった、だから起った。

そうして作られた国が他国の民に同じ苦しみを強いるなど、皇国の民には受け入れ難いだろう。

「帝国領への逆侵攻でさえ不満を持った人もいるようですし、仕方がないとは思いますけどね」

だが、軍人の視点から略奪という行為を研究した書物というのは、意外と需要がある。

もしも他国の軍人が皇国領内で略奪行為を行うなら、それは軍人としての知識の上に成り立った行動になるはずだ。

周辺の治安状況を調べ、巡回の衛視隊の規模や練度、指揮官の性格、襲う村落に内通者を作ったり、人質をとって衛視隊への通報を遅れさせるなどという方法も考えられる。そんな小細工をしなくても、一定の能力を持つ人物に率いられた軍人崩れの賊は軽武装の衛視隊には十分な脅威だ。

今も連合軍を脱走した盗賊が時折州軍や衛視隊の部隊と衝突し、ときには民間人にも被害が出ている。

ついこの間騎士学校でも話題になった武力衝突では、盗賊側が連合軍が撤退時に置き去りにした重砲を運用していたという。内乱直後の混乱で、連合から接収した兵器の管理も甘く、書類に記載された数と実際に回収された数が一致しないことも珍しくない。このときの重砲は、連合軍の砲兵部隊の指揮官が損傷がひどく輸送が困難であるため「爆破処理後、廃棄」したと軍に報告していたものだった。

実際には爆破処理せずに街道近くの山道脇に廃棄したらしいが、それを連合軍の脱走兵が回収して修理、使用していたとのことだ。

「非対称戦も戦術学の一分野として有名になってきたことですし、これからはこういった軍人崩れの盗賊に対応する研究も必要だと思っています」

「確かにそうだけど、レクトがやらなくてもいいんじゃないの？」

「やろうという意思がある者がやる。それが一番研究が捗ると思っています」

実際には軍の研究所に命じるつもりであるが、音頭を取るのは自分でなければならない。自分が国の現状を正確に認識していると軍や政府に示す必要があった。

「そう、じゃあ何かあったらボクにも手伝わせてね」

「ええ、そのときはお願いします」

「うん」

二人は今後の予定などを相談しながら、講義室へと向かう。

その姿は完全に騎士学校の日常に同化しており、誰も二人に特別な意識を向けることはない。

二人にとってあまりにも貴重な、ごく普通の日常風景だった。

◇　◇　◇

「レクト・ハルベルン」

講義室に入った途端に、レクティファールの名を呼ぶ男がいた。

その声を聞いた瞬間、レクティファールは苦笑し、フェリスは不機嫌そうに顔を歪める。

隣り合って席に座る二人。その前の席にはルフェイルとパトリシ

アが座っていたが、二人とも後方の問題に干渉する意思はないようだった。

「レクト・ハルベルン」

レクティファールの隣に座り、彼は再度自分に敗北の味を教えた男の名を呼ぶ。

「何かな、ゲオルグ」

「我が国に仕官しないか」

男――ゲオルグ・オットー・シュパンヘイムは、困った表情のレクティファールになおも強く迫った。

扇状になった席の各所から好奇の視線が注がれ、フェリスはそれらの視線に耐え、見かけだけの平静を保ったまま筆記用具を用意している。

「我が家に仕えろなどとは言わない。父と、父と懇意にしている幾つかの家の当主が紹介状を添えてくれると約束してくれた。一軍は無理だろうが、百人程度なら我が国に来たその日から任せてもいいと騎士団本営も言っている」

「それでは、不満を持つ人も出るでしょう。他国人に大きな顔をされては、ね」

〈ガイエンルツヴィテ〉は尚武の国で、才覚さえあれば栄達出来るとされている。しかし実際には古くから騎士として国を支えてきた家々が権力を握っており、封建的な国家となっている。シュパンヘイム家も騎士団の重要な役職を世襲しているというし、新参者がどこまで位を進められるか疑問だった。

「そうだな、確かにそうだ」

ゲオルグは頷き、その姿を見たレクティファールは背筋を走る悪寒に肩を震わせた。

何故か、嫌な予感がした。

そして予感は、当たった。

「だから、君に我が妹をくれてやろうと思う」

「――何をご冗談を」

レクティファールは焦った。いや、焦るというよりも、恐怖した。

ゲオルグの驚愕すべき一言を聞いたあと、自分の隣に座るフェリスが黙り込んだまま身動きひとつしない。

前の席に座るルフェイルがパトリシアを連れて避難し、周囲に座っていた候補生たちが一斉に逃げ出した。

「器量も保証するし、身体も健康だ。きっと、強い子を産んでくれる。気が強くて跳ねっ返りでそこらの男よりも腕が立つが、決して嫁の貰い手がなくて困っていたわけではないぞ」

「いや、完全に真実ばらしてます」

「――不服か？　ならば姉も付けるが。少々病弱ではあるが、見識に富んでいて我が国の高等学院で教鞭を執っておられる。嫁に欲しいという家は幾つもあったのだが、その、趣味が少々特殊でな、なに、ちょっと蒐集癖があるだけだ。魔導書の密輸で、あと少しで軍警察の世話になるなんてことはなかったぞ」

「いやいやいや、実はあなたって莫迦ですか」

自家の厄介者を押し付けようとするゲオルグに、流石のレクティファールも言葉が悪くなる。

確かにシュパンヘイム家の家格を考えれば、ゲオルグの申し出は

随分と気前の良いものに思える。〈ガイエンルツヴィテ〉の一騎士であれば、多少の問題には目を瞑って飛び付くだろう。

「莫迦ではない。僕は真剣に君を誘っている」

「その方が問題なんですけどね」

フェリスの表情は、レクティファールからは良く見えない。

ただ、少し離れた場所に移動したルフェイルたちが慌てた様子で「早く話を終わらせろ」という合図を送ってきているから、さぞ不味いことになっているのだろう。力無きとはいえ、龍族である。嫉妬心は他の種族の追随を許さない。

「私はリンドヴルム公爵家の禄を食む立場にあります。単なる誘いはともかく、婚姻などは家同士の問題もあるのでそちらに話を通すのが筋でしょう」

「――ふむ確かにそうだが、君の意思というものもある」

本人は了承しているという交渉の手札となる一言が欲しいのだろう。

それを知って、レクティファールが頷くなどということはない。

「私の意思はこれまでと変わりません。いつか誰かを娶るにしても、それはそのときの私の判断です」

「そうか、分かった」

講義室に教官が入ってくると、ゲオルグはレクティファールに頷いて立ち上がった。

これでやっと解放されると安堵したレクティファール。だが、ゲオルグの次の一言に表情を凍り付かせた。

「では、公爵閣下とハルベルン卿にお許しを頂こう」

何故そこまで――というレクティファールの偽らざる本音は、凍り付いた舌のせいで言葉にならなかった。

講義室を出て行くゲオルグの後ろ姿を見送りながら、レクティファールは盛大に溜息を吐いた。

「ハルベルン候補生、私の講義に何か不満が？」

その溜息を教官に見咎められ、詰問される。

レクティファールは隣のフェリスが自分をじろりと睨み付けていることにほんの少し怯えながらも、立ち上がって教官に答えた。

「いえ、滅相もありません」

「では、集中したまえ」

「はっ、失礼しました」

着席し、教本を開く。

レクティファールは硬筆を帳面に滑らせながら、平穏無事という言葉を遠い世界の異言語のように感じていた。

「――むう」

決闘騒ぎ以降、騎士学校の内部でも色々面倒事はあった。候補生たちの代表である自治連絡会からはそれとなく注意され、〈ガイエンルツヴィテ〉からは祝辞に紛れて脅迫とも受け取れる文章が届いた。〈ガイエンルツヴィテ〉から留学している候補生たちの一部の騒いでいるだけとゲオルグは言っているが、彼も積極的に関わり合いになりたくない連中らしい。

実際に行動に出るほどの力も度胸もないということで放置しているが、おそらく皇王府が水面下で対処する筈だ。卒業まで静かにしているなら良し、おかしな動きを見せれば適当な罪状で強制送還ということになるだろうか。他国で不穏当な秘密集会を持てば、それだけで一つ二つ罪になるものだ。

叶うならば大人しくしていて欲しいと思いつつ、レクティファールは教官の言葉に耳を傾ける。

「我が国の戦術教義はその重点を防衛に置いている。攻められれば攻め返すが、攻められずに攻めることは出来ない。我が国に将来大きな脅威を齎すと判断された国家・集団であっても、その脅威が明らかにならない限り攻勢に転じることは難しい。これが原因で発生したものが第六次南レムリア海紛争であり、我が国は南レムリアの複数の島々の租界において多くの人命と財産を失うことになった。これは主権を持つ皇王と政府の足並みが揃わず、軍を的確に動かすことが出来なかったからだと考えられている。このとき、軍の部隊は皇王の『明確な』命令を待つばかりで自らの判断で行動することが出来なかった。しかし、戦闘教義とは固定化された教条ではない。確かに我が国の戦闘教義は防衛が主だが、その防衛とは単に国土を守ることを意味しないだろう。国家とは国土とその中で巡り巡る国民、資源、経済を含んでいる。他国に国民を害されれば当然軍は動く、資源を奪われても動く、そして経済封鎖や流通網破壊などで経済活動を阻害されてもまた、動くべきである」

教官の言葉を帳面に書き留め、レクティファールは手元の資料と〈皇剣〉から『第六次南レムリア海紛争』についての情報を取り出す。

「あ、『南レムリア事変』ならここだよ」

「どうも」

レクティファールが探しているものに気付いたフェリスが、横合いから手を伸ばして資料を捲る。彼女が示した頁には、多くの数字や図と一緒に軍の研究所が提出した報告書の全文も記載されていた。

皇国海軍が旧帝国海軍とイズモ海軍を参考にしてようやくその形を整え始めた頃に発生した『南レムリア事変』。それは反皇国を掲げる南洋諸島の国家が、南レムリア海の皇国租界に対して起こした軍事行動を指す。当初は攻撃側の国家からの宣戦布告等はなく、次いで当該国の元首から急進派の一部軍将校と政治家が勝手に行なったことという説明がなされ、皇国政府はその説明を正式な回答として受け入れた。

しかし、当該国は皇国側からの撤退要請を受け容れはしたものの、実際に攻撃を行なっている部隊は政府からの命令を無視して攻撃を続けた。

彼らは「皇国によって不当に搾取された自国の富を取り戻す」として各地に点在した皇国租界を強襲、その租界を警備していた海軍の海上警備隊と砲火を交えた。その結果、装備、練度、数に劣る皇国海軍海上警備隊が全滅に近い損害を被る。

元々租界と本土を結ぶ海上交易路の警備を担当していた海軍海上

警備隊は、他国の正規軍艦隊と正面から戦えるような装備を有してはなかった。

老朽化した駆逐艦を改装した海防艦や船団護衛用の小型海防艦が主力で、中には旧型機帆船改装の警備艦まで存在したという。

巨大な装甲艦を前に警備隊は絶望的な戦いを演じることになったが、驚くべきことに皇国政府はその事実を知りながら何の手も打てなかった。

一度攻撃を受けた時点で皇国側はそれらの敵艦を撃沈する名分を得ていたが、それを行う戦力を用意することが出来なかったのである。

当時の海軍は現在の海軍と較べて規模が小さく、その主力の多くはイズモ方面に配置されていた。南洋には海上交易路を警備する小規模艦隊が遊弋し、その他は本土防衛用の近海艦隊が存在するばかり。例外的に貴族所有の私設海軍なども存在したが、正規軍と戦えるような装備も練度もない。

当時の皇国海軍に、遠征に耐えられる艦隊は連合艦隊と呼ばれた主力艦隊一つのみ。今でこそ第一連合艦隊以外にも複数の連合艦隊が必要に応じて臨時編成される体制が整えられたが、それはこの一件から二〇〇年も経ったあとのことだ。端的に言えば、この時期の皇国に大規模な海軍を編成するだけの余裕はなかった。

このときは主力艦隊から艦隊を分派させ、さらに蒼龍公を筆頭とする海中戦力を投入してようやく敵艦隊を撃退したが、それまでに軍人民間人問わず多くの死傷者が出た。

後世、この事変で被害を大きくした最大の原因は、ゼーゲンが世襲皇王であったことであると言われた。

ゼーゲンは母の跡を継いで皇王となったが、その分政府との関係が深かった。三院の総裁は元より、軍や経済界にも多くの伝手を持っていた。

この伝手は彼にとって大きな武器であり、人と人の間を取り持つことで上手く国を纏めていた。無闇矢鱈と皇王の持つ権威と力を用いなかったという点では、ゼーゲンは優秀な皇王であっただろう。しかし、このときはその繋がりが彼を縛った。

外務院は当該国との関係悪化を恐れて必要以上の正規軍を送り込むことに消極的で、逆に軍務院は当該国の皇国民保護のために積極的に軍を派遣するべきだと主張した。

当時の南洋諸島には皇国の権益が多く存在し、それを保護するためには各地の政府との良好な関係が不可欠である。また同時に、それらの権益を守るためには軍事力も欠かすことは出来ない。故に両者の主張にはそれぞれ理があり、ゼーゲンを大いに悩ませた。

あとのことを考えれば、そこが分水嶺であったのだろう。

ゼーゲンが決断を下せずにいる間に皇国の租界は略奪暴行の巷となり、そこに住む者たちに恨みを持つ現地民もそれらの行為に加わった。ゼーゲンはその被害の大きさに衝撃を受け、主力艦隊の分艦隊と蒼龍公軍、海軍陸戦隊を投入。僅か一週間で戦いは終結する。

呆気無いものだった。あと少し早く同じ決断を下していれば、死なずに済んだ生命もあっただろう。だが、それだけの被害が出たか

らこそ、皇国は大戦力を投入出来たとも言える。

結果的に皇国側は勝利したが、ゼーゲンは自分の行いを大いに後悔したし、外務院と軍務院もそれぞれの責任者が引責辞任に追い込まれた。

そして、そこから得られた教訓は、決して多くない。

これといった解決策が無かったこともその理由の一つだろう。

外交関係の悪化を承知で軍を送り込むか、自国の権益と国民の被害を堪えて外交関係を重視するか。そこには正解などなく、ただ結果だけが存在する。ゼーゲン最大の汚点とされるその事変も、見方を変えれば痛みを堪えて南洋諸島との関係悪化を防いだ英断である。

「とはいえ、この一件以降海軍は大幅に戦力を増強し、外洋を巡回する艦隊を常備するようになった。その示威行為によって自国の権益を守るという意図だろう。外務院は自前の情報機関を抱えるようになり、皇国情報院と協力して諸外国の情報収集に力を入れるようになった」

そうして得られた情報が皇国を更なる繁栄の道へと導いた。今では世界各国の情報が集まるようになり、その軍事・経済活動を支えている。

「戦闘教義が硬直した教条ではないというのは、それと同じことだ。情報とは生物にも似て常に形を変化させ、我々にも変化を要求する。

情報を元に我々が下す決断も、生物のように常に変化するのだ」

教官が講義室を睥睨し、無感情な瞳を候補生たちに向ける。

「試験で良い成績を取りたいだけなら軍人などやめろ。型に嵌った『正解』は、ときとして害悪になることを忘れないように。――以上だ」

教官の締め括りの言葉が終わると同時に、講義終了の鐘が鳴る。教官が資料を纏めて教壇から降りると、数名の候補生が帳面を手に駆け寄るのが見えた。

◇　◇　◇

「ふへー」

気の抜けた声を漏らし、食堂の机に突っ伏すパトリシアと、その隣で黙々と数字と格闘するルフェイル。

フェリスとレクティファールは並んで座り、提出用の学術報告書について意見を交し合っている。

昼食を摂るつもりで食堂に来たが、厨房の辺りがだいぶ混雑しているので時間潰しをしているのだ。幸い、四人とも午後の講義は入っておらず、昼食を食べたあとはそれぞれの勉強に備えて資料を探す予定であった。

騎士学校では、殆どの課目ごとに月に一度学術報告書を提出する。月末ともなればそのための資料を探して候補生が資料室に入り浸り、街の軍御用達の書店も大いに繁盛した。今回パトリシアとルフェイルは校内の資料室で資料を探す予定であったが、レクティファールとフェリスは街に出掛けることになっていた。

「やっぱり、ルースの『統合戦術学』は欲しいよ。諸兵科混合部隊はこれからも増えるだろうし、三軍っていう括りも時代遅れになるかもしれないしね」

「でもそれって先月出たばかりでしょう？　資料室にも四冊しか入荷しなかったのに、行って置いてあるものですか？」

「うーん、入荷予定がはっきりしなかったから、個人の予約は受け付けてなかったんだ。――こんなことなら、実家に頼んでおくんだったよ」

商家公爵と呼ばれるだけあって、レヴィアタン公爵家は手広く商売をしている。前もって頼んでおけば、本の一冊や二冊確実に入手することが出来ただろう。

「まあ、ここで言っててもしょうがないし、そろそろ向こうも空いてきたからご飯食べようよ」

「そうですね」

二人はルフェイルとパトリシアから注文を聞き、厨房へと向かう。

そんな二人の背を見送りながら、ルフェイルはぽつりと呟いた。

「ちくしょう、優等生め」

「ルフェイルちゃん、僻みだよそれ……」

学術報告書提出のたび、書き直しと補修を命じられることが慣習になりつつある男の本音と、毎度その手伝いをする女の的確な突っ込みだった。

◇　◇　◇

〈ユーノス〉は軍人の多い島だが、街に出ればそんな印象は薄れ

る。確かに軒を連ねる店々を見れば、軍人を相手にするような武具屋や鍛冶屋などの兵具店の比率が他の街よりも高いが、その他の商店も――それこそ賭博の仲介屋まで――例外なく並んでいる。

店の前まで席を並べた喫茶店や軽食屋、屋台の甘味屋も繁盛している様子で、レクティファールの隣にいるフェリスもどことなく楽しそうに歩を進めていた。

「やっぱりこういう雰囲気、好きだなぁ」

「そうなのですか？」

「うん、蒼龍宮のある〈ペイフェル〉って大きな港街でね。城にも専用の港がある位たくさんの船が出入りするんだ。白龍宮も港があるけど、うちのはもっと広くて、港の上に城が建ってるって感じかな」

そのまま魔動式の引揚機を使って直接城の中に荷物を入れることで、運搬の手間を減らしているのだという。フェリスもそんな環境で育ったからか、軍人に対しては杓子定規でも、それ以外の者たちにはひどく寛容なところがあった。

「レクトも機会があれば遊びに来るといいよ。皇都とは随分違うから、きっと面白いと思う」

「そうですね、機会があれば」

二人は他愛ない会話を続けながら、軍関係者がよく買い物に訪れる書店へと足を踏み入れる。一目で軍人と分かる風体の男女が、少し広い店内にちらほら見えた。

「じゃあ、在庫があるか聞いてくるよ」

「私は何か良さそうな本がないか見て回ってます」

「変な本、買っちゃだめだよ」

「ええ、気を付けます」

資料室から珍妙な論文を借りることで、そちら方面のフェリスのレクティファールに対する信頼は低い。選ぶ理由も話を聞けば納得出来るものだが、やはり何処か人と違う感性の持ち主であると考える方が自然だ。

フェリスはもう一度レクティファールに念押しし、店員の元に向かった。

「さて、何か面白いものは……と」

面白いもの、という基準で探すから変なものばかり選ぶのだと、この場にフェリスが居れば言い切っただろう。

しかし、今レクティファールを止める者はいない。彼は出入り口近くにある古本の棚から面白い掘り出し物を探す作業を始めた。

「ふむ、これは中々面白いが余りにも内容が稚拙で要領を得ない。こちらは綺麗に纏まっているが、言っていることは極々普通で目新しいものはない」

本を抜き出しては素早くその内容に目を通し、次の本へと移る。〈皇剣〉の能力があれば、それだけでも本の内容を一字残さず記録することも出来るが、そんな盗人じみた真似をするつもりはなかった。記録するなら、購入してからだ。

そんな風に本を流し読みするレクティファール。棚の二段目に差し掛かったとき、ふと店の外に視線を向ける。すると、表通りから裏通りへと向かう小道に、小さな露店があった。表通りに並ぶ建物の間、光も当たらない場所にある露店。そこに並ぶのは、どうやら細工物らしい。

「ふむ」

レクティファールは本を棚に戻すと、店を出て表通りを横切り、露店へと向かう。

湿った少し黴臭い空気の中で、並べられた細工物がきらきら光っていた。

「――いらっしゃいませ」

店主は、小柄な女性だった。ひょっとしたらまだ成人していないかもしれない。

栗色の前髪で目元を隠し、少し俯いているからか、その声は余計に小さく聞こえた。

「店主が作ったものですか」

「は、はい」

その場に屈みこみ、レクティファールは細工物を一つ一つ眺める。

「触っても？」

「あ、どうぞ」

許可を得て、レクティファールは一つの細工を手にとった。

簪だ。

「こういう作りの簪は、この辺りでは珍しいですね」

イズモ地方では珍しくない簪だが、皇国では第五代皇王ナギ＝イチモンジの頃に流通するようになった。一般的に本場イズモのものより装飾が多く、派手なのが皇国の簪の特徴だ。

しかし、店に並んでいたのはイズモの簪のような簡素な作りのもので、皇国の細工店ではあまり見かけない種類だった。

「す、すみません」

「いえ、謝る必要は無いんですが」

縮こまる店主に困ったような笑みを浮かべるレクティファール。

店主はしどろもどろになりながらも、なんとか意味のある言葉を吐き出した。

「その、お師匠から教わったのが、この形で……」

「ああなるほど、そういうことですか」

聞けば、この店は最近開いたばかりらしい。師の店から独立し、修行している最中なのだという。

とはいえ、細工の腕は一人前でも、接客の方はまだまだのようだ。

「表通りで露店を出すことも出来たんですけど、ええと、ちょっと怖くて……」

「ほうほう」

店主の身の上話を聞きながら、レクティファールは並んだ細工を手にとって眺める。

どれも簡素な作りではあるが、丁寧に愛情を込めて作られたものだと分かる。派手ではない分、細工師の腕が如実に現れていた。

「お師匠は自分の店でお客の相手の仕方を憶えてから独立しろって言ってくれたんですけど、これまでお世話になったのに、そんなことまでしてもらう訳にはいかなくて……」

「まあ、先生の気持ちも分からないではないですけどね」

こんな性格では、いつか痛い目を見るだろう。

客商売に不慣れな若い娘がひとりで店を出すというのは、異常に治安の良いこの街だからこそ出来ることだ。

「この街から出る予定は？」

「今のところは……お金も無いですし」

その言葉に、レクティファールはほっとした。

名前も知らない女性ではあるが、世間の厳しさを嫌な形で経験して欲しくはない。

「さて、と」

彼は店頭に並んだ簪を数本と、髪留め二つを選び、それを包んでくれるよう店主に頼んだ。

「こんなに……？」

驚いたようにレクティファールの顔を見上げる店主。
前髪の間から、濃い緑の瞳が覗いた。

「おっかない女性陣がうちにはたくさん居ましてね。これだけいいものなら一人一つ買っていかないとあとが怖い怖い」

区別はすれども差別はしない。
別人格を持っている以上本当の意味で平等に扱うことは出来ないが、レクティファールはそれぞれの女性に最大の気持ちを傾けようと決めていた。

「そうなんですか……」

「そうなんです」

レクティファールが答えると、店主は細工物の入った袋を差し出してくすりと笑った。
商品を受け取って代金を渡しながら、レクティファールは呟く。

「ああ、やっぱり笑うとお綺麗ですね」

「え！？」

手渡した金貨が店主の手からぽろりと落ち、甲高い音を立てる。

レクティファールは驚いた表情で自分を見る店主の前髪を素早い動作で纏めると、先ほど受け取ったばかりの袋から髪飾りを取り出し、固まったままの店主の髪に着けた。

「商品もただ並べるだけじゃなくて、実際に身に着けているところを見せるといいと聞きます。店主さんは綺麗な人ですし、こうした方がお客も来ますよ」

「え、あの……」

「お客が来なければ何時まで経っても商売に慣れませんし、これも修行のためだと思ってくださいな」

レクティファールはにっと笑うと、呆然とした店主を残して小道をあとにする。

表通りにある書店から出てきた女性に、先ほどと同じように髪飾りを着けていた。店を出るまでは少し不機嫌だった女性が、途端に

慌て始める。

「――」

髪飾りを着けた女性が、顔を真っ赤にしているのが見えた。

思わず、自分の頬にも触れる。

熱かった。

その熱を感じると、ふと思う。

「――表通り、行ってみようかな」

呟く。

それだけで、何かが出来るような気がした。

閑話乃参「側妃参謀と騎士旅団長」

真っ白い衣裳を纏った花嫁が、神殿から姿を見せた。

隣には生涯の伴侶となった男が同じように純白の正装で並び、女性に穏やかな笑みを向けている。

「おめでとう」

神殿の前で待っていた招待客が、揃って声を上げた。花びらを投げ、輝く粉を撒く。

きらきらと陽光を反射する空間を、二人は祝福を受けながらゆっくりと進む。招待客に一人ひとり目礼し、笑いかける。

「ありがとう」

二人は何度も同じ言葉を返し、しかしその言葉は軽くも薄くもない。身体から溢れそうになる幸福をそのまま言葉にしているからか、常にその言語には心が充ち満ちていた。

拍手と口笛、そして歌の中を二人は進む。

今日この日、歴代皇王に結婚を誓い夫婦となった二人。

招待客は二人との思い出を胸に、それぞれの表情と言葉で祝福する。

泣き、笑い、感極まって大声で歌う。騒々しくも華やかな会場の一角で、一組の男女がその光景を見守っていた。

「綺麗……」

女が溜息と共に呟けば、男はその肩にそっと手を置く。

驚いたように振り返る女に、男は小さく頷いた。

そう遠くない未来、二人も同じように真っ白い衣裳に身を包むことになる。そのときを思い浮かべ、女は頬を染めた。

しかし女は、その頬を隠すように男から顔を背ける。そして、いじけたような口調で男に言った。

「わたしがあのように着飾っても、きっとあなたは、他の方に目を奪われてしまうのでしょうね」

「さて、どうでしょう。ただ……」

男は女を引き寄せると、その頬に両手を添えた。

自然、二人は真正面から向き合うことになる。

「あなたが一番美しいなら、私はあなたに一番心奪われるでしょうね」

「他の方にも、同じように言うつもりですか？」

「さて」

男は女の唇に自分のそれを寄せながら、笑う。

女は不機嫌そうに唇を尖らせたが、男を拒絶するような動きを見せなかった。すぐ近くに多くの人々がいるという状況でありながら、二人はそれを気に留めていないように見える。

「少なくとも、あなたに贈る言葉にあなた以外の誰かへの想いが介在する余地はないでしょうね」

果実を掠め取るように唇に触れ、何か言おうとした女の両肩を掴んで今日の主役たちへと向き直らせる。

女に気づいた花嫁が、驚いたような表情を浮かべる。そしてその

肩を抱く男に気付き、戸惑ったように視線を彷徨わせていた。

「どうやら困っているようだ。これ以上主役に気を使わせても悪いし、私はこれで失礼するから、彼女によろしく伝えておいてください」

「はい」

「帰りはいつでもいいですよ」

積もる話もあるでしょうし――――男はそう言って女に背を向ける。

神殿の周りに広がる森へと消えるその姿に、女は小さく「ありがとうございます」と返した。

再び主役たちへと目を向ければ、二人は招待客の輪の中で困ったような笑顔を浮かべていた。

新郎は友人たちに手荒い祝福を受け、花嫁は号泣する父親に抱き着かれている。

女は一瞬男の消えた森に視線を送ると、二人を囲む招待客の輪の中に入り込んだ。

「おめでとう」

幼馴染の新婦を前にそう口にした彼女の表情は、男が知らないほど明るいものだった。

◇　◇　◇

それは男女のまぐわいとしては、少し趣の異なるものだった。

常に人の監視の中で行われる行為。おそらく、そういったことに耐性のない者たちは眉を顰めるだろう。

しかし、両者の立場がそれを求め、両者がそれを受け入れている。

自分の発する泣き声を、嬌声を、艶声を、最初は他人に聞かせるのが酷く辛かったリーデも、今では随分慣れてしまった。最初に離宮で交わった次の日にはあまりの羞恥に部屋から出ることが出来なかったというのに、今では婚約者を見送ったあとに監視を行っていた乙女騎士を呼んで昨夜の感想を聞くことまでするようになった。

乙女騎士たちは役目を全うしているだけ、という綺麗ごとを鵜呑みにした訳ではない。おそらく自分と男の交わりを肴に碌でも無い話で盛り上がっているのだろうし、もしかしたら自分を慰める肴にもしているかもしれないとも思う。

ただ、リーデはそんな環境を受け入れている。

過去、同じような立場で最後まで羞恥に耐えられなかった女性たちは、精神作用系の魔法を使用してそれを乗り越えた。後宮と離宮を管轄する特別護衛旅団にはそれを専門とする魔導師も在籍しているし、ゆっくりと慣れさせていけば精神に与える影響はごくごく限られたものだ。

最初からそういった教育を受けている後宮の女性たちとは違い、離宮に上がる女性は市井の、ごく普通の生活を送ってきた者である場合も多い。リーデもその分類で言えばごく普通の女性の筈だったが、軍人として共同生活を送ることが多かったからか、本人の性格か、何度か逢瀬を重ねる内に監視の目を気にすることはなくなった。密かにそれに一番驚いていたのは、彼女自身であったが。

「――はぁ」

この夜も、リーデは人の目のある中で絡み合った。

今日の監視役はついこの間入団したばかりの若い乙女騎士だから、もしかしたら羞恥のあまり碌な記録も残っていないかもしれない――リーデは隣の部屋で羞恥に悶えているであろう新人騎士を想い、苦笑する。

そんなリーデを見て、先ほどまで彼女を散々翻弄していたレクティファールが首を傾げた。

二人は寝台の上で薄手の掛布一枚だけを肌に乗せ、隣り合って余

韻を楽しんでいる。

「何か面白いことでもありましたか」

「ええ、少し隣人の評判が気になって」

リーデは隣にいる乙女騎士が新人であることを説明し、更にこういった行為を見ることも初めてであると教えた。レクティファールは監視部屋の方向に目を向け、何とも気の毒なことだ、と呟いた。そしてリーデを引き寄せると、その身体を包み込むように抱き締める。

「これで、少しは刺激が減るでしょうか」

今まで自分を昂らせ乱れさせていたというのに、今更そんなことを言うレクティファールに、リーデは困った子どもを見る教師のような表情を浮かべた。

何やかやと理由を付けても、結局自分を抱き締めたいだけ――――己惚れでも何でもなく本人に聞いた事実として、リーデはレクティファールの行動をそう結論付けた。そして、それは彼女にとってもそう嫌なことではない、むしろ、嬉しいことだ。

汗の匂いのする胸に抱かれ、その鼓動を聞く。

自分は兵器であると嘯くレクティファール。その胸がこうも心安らぐ鼓動を奏でることを知っているのは、おそらく自分ともう一人の側妾だけだろう。他にこの腕に抱かれる女が居たとしても、この鼓動を聞いてこれほど安心する者は居ない。これが世界最強の兵器の鼓動であると知って、そしてその兵器が鼓動を打つことを知って安堵したのは、あの北の地だった。

熱に浮かされるようにして痛みを伴う行為を終え、この鼓動を聞いた。

そのとき密かに涙したことを、彼女は誰にも明かしていない。

そして、将来に亘っても誰かに明かすつもりはなかった。

「殿下」

そう言って鼻先を擦りつければ、彼女の唯一の男はその腕に力を込めて細い身体を抱き締める。

軍人としての修練は毎日欠かしていないが、生来の体質か、彼女の身体は余り筋肉を付けることはなかった。士官学校時代も、騎士学校時代も、当たり前のように周囲は彼女に参謀職を勧めたほどだ。

それでも他の妃に較べれば身体は硬く、リーデは自分の身体が男が夢想する柔らかさと脆さに欠けていると思っていた。とはいえ、それを誰かに確認することはなく、さらに言えば彼女の身体を評価できる唯一の男もその考えを裏付けるようなことは一言も口にしていない。

実際のところ、レクティファールはそんなことを欠片も考えたことはなかったし、リーデがそんな悩みを抱えているとは露程も思わなかった。それは彼にとってリーデが魅力ある異性であったという訳ではなく、単にリーデとはそういう女性であると認識していたに過ぎないのだ。

幸か不幸か多数の女性を娶る立場になったレクティファールにとっては、好みの異性というのはある種の禁忌である。こんな女性が好みであると言えば、おそらくそれに合致する人物は見つかるだろう。しかし、それで終わりだ。好みの女性だからと優遇することは出来ない。下手に順位付けすれば妃の間で不和が広がり、派閥争いが発生する。皇族の身辺を管理する皇王府が、それを許す筈がなかった。

よって、レクティファールに求められているのは、総てを愛すか、総てを愛さないか、そのどちらかでしかない。前者は必要に応じて積極的に妃を迎え、多少の序列はあるにしても平等を旨とする。後者は最低限度の妃だけを迎え、それによって不平等の発生を抑止する。

ただ、妃とはいえ人である。誰かの上に立ちたいと思うし、他の誰よりも皇王に必要とされたいと思う。これまでの後宮で妃同士の派閥争いが発生しなかったのは、在位期間が短く妃の数も最低限であった初代皇王のみで、その他の時代には、程度の差こそあれ後宮内でも権力争いが起きていた。

今の後宮でも、リリシアとメリエラの争いを権力争いと見ることは出来る。

この二人の場合は、逆に当人たち自身に大騒ぎをさせることでそれ以上の拡大を防いでいるが、将来的にも同じ状態が続くとは限らない。

ただ、リーデは二人の争いが皇王府が考えているような陰惨なものには発展しないだろうと考えていた。

あの二人は権力争いをするには余りにも直情に過ぎ、その周囲に居る者たちも揃って権力や権勢というものに興味を持っていない。

四龍姫は元々権力欲の薄い龍族であるし、リリシアも巫女姫としての教育とざっくばらんな姉の影響で、象徴以上の、ある意味では皇王よりも強い影響力を持つことを嫌っているように思える。

それに、正妃とは元々そういった象徴性のみを求められる存在であり、そう考えれば巫女姫と四龍姫を正妃に据えるというのは、皇妃がその立場を利用して大きな権力を持つことを嫌った者たちが作り上げた安定機構と言えるかもしれない。そして安定機構として見た場合、今の後宮は非常に良く出来た構図になっていた。

「色々、手を回してもらっているようで」

レクティファールは先程までの情事で湿った髪を撫で、独り言のように呟く。

含まれた情報の少ないその一言を、リーデは正しく理解した。

「――軍に関して言えば、メリエラ様たちは余り動き回らない方がよろしいでしょう。軍にも閥はありますし、特に白龍公と紅龍公の軍への影響力は強うございます。わたしのような小さき者なら、軍内に起きる波紋も小さくなるというもの……」

リーデは政府・皇王府からの要請により、再編中の軍内部で意見の調整を行っていた。

軍は現在、来るべき大戦に備えて軍令・軍政の両面から組織の改変が進んでいる。

国防の一角を担う貴族軍が解体され、皇王家の私兵程度の戦力でしかなかった近衛軍が増強される。これだけでも十分に大きな問題だというのに、さらに地域防衛のために元貴族軍将兵を中心とした州軍が新たに編成され、国防体制に組み込まれた。

そして、レクティファールはこれまでの皇王があまり積極的に行ってこなかった軍の改革を実行しようとしている。

他国領土へと侵攻するための軍、外征軍の編成だ。

海外派兵も多く経験している海軍・空軍とは違い、陸軍はこれまで国土の防衛のみをその主任務としてきた。例外的に旅団規模で国外に派遣されたこともあったが、それも他国に居留する皇国国民を守るための行動でしかない。陸伝いに他国へ侵攻する戦を、皇国陸軍は久しく経験していなかった。

先の帝国領への逆侵攻以前に行われた皇国軍の侵攻戦は、およそ五〇〇年前になる。それも二万程度の軍を動かし、寸土と言ってい

い信託統治領を得ただけで、その地域も今では皇国の一地方として定着していた。

しかし、それでは今後の戦には勝てない。

レクティファールを始めとする皇国政府は、この国を取り巻く事情が以前とは大きく変化していることに気付いていた。そしてそれに対応するために、軍や行政の有り様を変化させているのだ。

ただ、変化には反発が伴う。

流通網の変化で既得権益を奪われる商人は政府の動きを妨害しようとするし、軍内部でも組織改変に対する反対意見が噴出している。それに対処するため、皇王府や商人たちに顔が利く蒼龍公が商人たちを説得して回っているし、軍内部でも様々な形で政治工作が行われていた。その軍内部での政治工作を行っているのが、リーデだ。

陸軍時代でもこれといった軍内派閥に属さず、『英雄の娘』という立場で何かを行ったことはない。彼女の後見を務めていたガラハもそういったことは彼女に求めず、また彼女から求めることもなかった。良くも悪くも『軍人』らしい軍人だった彼女は、たった一人の男の出会いによって政治の世界に引き込まれる。

そうはいうものの、彼女が軍内部で行っていることはそう難しいことではない。誰彼と会い、相手の意見を聞き、自分の意見を聞かせ、そして相手の求める言葉を幾つか吐くだけ。会う相手は事前に軍や皇王府と打ち合わせているし、相手の意見も事前に調査され、リーデの意見も用意された物に過ぎない。そして最後の言葉さえ、台詞として台本に書かれている。その台本を書いた人物に、この夜もリーデは抱かれていた。

「今の軍に、積極的に面と向かって私たちとことを構えようという気概のある者はそうそういません。裏でこそこそと動く者たちは必要な分だけ残して適当に駆除しますし、損をする者よりも得をする者たちが多ければ、いちいち私たちが火消しをするまでもなく騒ぎは収まります」

相手に損をさせなければ、得をした気にさせればそれでこと足りる。

相手が求めるものを与え、こちらが必要とするものを手に入れられれば、それ以上何かをする必要はない。必要以上に求めれば、それだけ損をする。相手を適当に勝たせれば、こちらが勝っても文句をいう者は居ないのだ。

「悪い人ですね」

リーデは苦笑する。

レクティファールは相手を負かせるような戦いを好まない。誰の目にも明らかな勝敗を好まない。

場合によっては惰弱とも受け取られかねないそんな性癖を持ちながらも、しかし彼は必要なときに勝利者になることを躊躇わなかった。

「もっと、他の方たちも頼れば良いのに」

「さっき君が言った通り、彼女たちはこういったことに向いていません。――いえ、向いているのかもしれませんが、実際にそれをやらせるには不安があるのです」

正妃は象徴として、側妃は利益として。

棲み分けと言えば聞こえは悪いが、人々が求める皇妃はそういったものだ。

正妃は人々の心に光を与え、側妃は人々の腹に糧を与える。その役割分担を間違えれば、不幸になるのはその妃ばかりではない。

「マティリエ様、真子様も国を背負って我が国にお輿入れなさいます。当然、その背後には……」

「だからこそ、正妃として両国友好の象徴になっていただく。それ以上何も出来ない様に」

象徴になるということは、象徴以外の何ものにもなれないということ。

それ以外の道を断たれるということだ。

「殿下」

思わず、リーデはレクティファールを窘めた。用意された場所以外で強い言葉を吐くことは、為政者として褒められたことではない。

レクティファールもそれに気付いたのか、言い訳代わりにリーデの身体を撫で始めた。

場を誤魔化そうという子どもじみた魂胆だが、その手のひらの動きはしっかりと大人であった。

「殿下……っ！」

リーデが身を捩れば、それに合わせて手のひらも動く。

逃げようとすれば逃げ道を塞いで痛撃を与え、防御しようとすればそれをすり抜けて一番弱いところを突いてくる。

「～～っ！」

声にならない悲鳴を上げ、リーデはレクティファールの身体を何度も引っ掻いた。

それは真面目な話をこんな行為で誤魔化そうとしたレクティファールに対する抗議であり、その策に乗ってしまった自分に対する密かな褒美でもあった。

「以後、気を付けます」

レクティファールがぽつりと漏らした。

「最初からそう言えば済む話だというのに！」というリーデのそんな文句は言葉にならず、彼女は全身で以てレクティファールとの攻防を続ける。

あらゆる意味で一方的なその戦いが終わったのは、リーデが疲れ切って言葉も話せなくなった半時間後のことだった。

「――」

「リーデは上がり目だから、睨むと迫力がありますよね」

でも、今は可愛げの方が強いですが――無言でぽかりと頭を叩かれ、阿呆な言葉を宣ったレクティファールが黙り込む。

「しばらく、後宮の方でお過ごしください」

むすっとしたリーデが、そう通告する。
お預け通知であった。
「それは流石に……」
離宮に渡らなければ変な勘繰りをする者も現れるし、レクティファールの気持ちとしても出来れば遠慮したかった。
「嫌なら、人の話くらい聞いてください」
不貞腐れたリーデから告げられた、至極尤もな一言。レクティファールはやれやれと頭を振り、頷いた。
「努力します」
「確約してください……」
どうせ、努力止まりなのだろうなと思い、リーデは諦めた。
レクティファールが子どもじみた行動を取る相手は決まっている。
その中に含まれたことを喜ぶべきか、嘆くべきか、少し悩み、リー

デは喜ぶ方を選んだ。

その方が、『特別』であると思った。

「では、許す代わりに一つお願いがあります」

「何でしょう」

首を傾げる。

次いでリーデの口から放たれた言葉に、レクティファールは大いに動揺した。

「実家に帰らせていただけないでしょうか」

◇　◇　◇

「ご心配なら、護衛の者たちに連絡を取ってみては如何ですか？」

「護衛たちの仕事の邪魔をする訳にはいかないでしょう」

いつもと同じように資料を捲り、書類を捌きながら、それでもレクティファールは少し不機嫌そうだった。

新たに二人の正妃が加わるということもあり、特別護衛旅団の再編を求める書類を持参したマリカーシェルは、皇城の執務室で眉間に皺を寄せた主君の姿を見ることになった。

後宮で着用している常装侍女服ではなく、近衛軍将官の二種正装という珍しい姿のマリカーシェル。皇城内で侍女服を着用することが許されているのは皇王府に属する侍女だけであり、マリカーシェルもその規則に従ったのだ。

「幼馴染の結婚式に出たいなんて頼みなら、別に気を遣わなくても許可したものを……」

「向こうが身内だけのささやかな式を望んでいますから。リーデ様がおいでになるとなれば、色々余計な者たちまで付いてきます」

「だからこそ、内々に、リーデの予定を偽造してまで時間を作ったんです。後宮病院の影武者には面倒を掛けますね」

健康診断という名目で後宮病院に向かったリーデはその途中で影武者と入れ替わり、式の行われる皇都城下にある小さな神殿に向かった。後宮病院では病院関係者の目を誤魔化すために今も影武者が色々な検査を受けている筈だった。

「本人も健康診断の手間が省けて良かったと申しておりましたし、ただ、お子が出来ているかの検査だけは嫌な顔をしていましたが」

くすくすと笑うマリカーシェルに、レクティファールは微妙な表情を浮かべた。

「――まあ、本人が納得しているならこれ以上は何も言いませんが。む、野外入浴装備と野外炊具はもっと増やすべきだろうに」

軍務院からの書類に再調査と再提出を命じる旨を書き込み、差し戻しの箱に放り込む。

腹が減っては戦えないでしょう、とぼやくレクティファールに、マリカーシェルは冗談交じりに一つ進言した。

「ならば、氷菓製造機も増やしますか？」

レクティファールはマリカーシェルの言葉に一瞬目を丸くすると、「それは良い提案だ」と先程の書類に数行の文字を書き込んだ。

今はごく一部の施設にしか存在しない氷菓製造機だが、軍の将兵には意外と好評だったりする。甘いものは精神の安定に寄与するというし、前線にこそこういった装備が必要かもしれないとレクティ

ファールは考えたのだ。ついでにこのとき氷菓の味の種類も増やすように書き加えたことは、後々軍の将兵に英断だったと大絶賛されることになる。

進言した本人は心底驚いていたが。

「いや、マリカーシェルさんの炯眼には恐れ入ります。今度お礼をしましょう」

「いえ、いえいえ、そんな勿体無いお言葉……」

信賞必罰ですよ、と笑うレクティファールを前にして、マリカーシェルは恐れ慄いた。

この話が広がってしまえば、自分が氷菓好きで、自分のために氷菓製造機を増やすよう進言したと思われかねない。

実際、そうなった。

この一ヶ月後、軍への甘味の大量納入の影にマリカーシェルの存在があると嗅ぎつけた業界から、彼女の官舎に大量の氷菓や甘味が届けられ、旅団内に分配された。確かに皇王や皇妃に近しい女性ばかりの部隊となれば、菓子や甘味などを商品とする商会にとっては狙い目である。特別護衛旅団には幾つもの商会から試供品が定期的に届けられるようになり、その切っ掛けを作ったマリカーシェルは旅団員から絶大な支持を受けた。結果、旅団は以後食後の甘味には困らなくなったが、同時に旅団宿舎では入浴時間中の悲鳴と破壊さ

れた体重計が量産されることになる。

マリカーシェルすら、思い詰めた顔で脇腹の肉を摘まんで悲鳴を上げるという姿をレクティファールに目撃されている。

「そ、それよりも、リーデ様の方はどうなさいますか。得た情報では、式の後に身内だけの宴も企画されているようですが」

「本人次第で」

レクティファールは一言呟き、書類に目を走らせる。

〈ウィルマグス〉周辺地域の街道整備計画だった。行軍路としてだけではなく、周辺の鉱山から産出された鉱石を加工する工場と、それを中心とした街同士を結ぶ街道だ。レクティファールは背後の本棚から資料を取り出すと、地形や地質、さらにこれまで使用されてきた街道や鉄道との接続を確認する。地質調査が不十分な場所もあるが、工事と並行して行っても問題ないだろう。

「もしかしたら、これが最後かもしれませんから、好きなようにさせてあげてください」

レクティファールの言葉には、ほんの少しの罪悪感があった。

戴冠と婚姻の儀が済めば、リーデも皇族簿に名前が記載される。

そうなれば、幼馴染たちと気軽に会うことも出来なくなるし、会う相手すら自由に選べなくなる。

レクティファールの愛妾という立場にいる今だけが、『リーデ・アーデン』として過ごせる最後の時間になるのだ。

「――」

そう考え、レクティファールは自分が笑みを浮かべていることに気付く。

何故だろうかと思考を巡らせ、すぐにリーデを独占出来ることが嬉しいのだと思い至った。

リーデだけではない、他の女たちもだ。

「殿下、どうかなさいましたか」

マリカーシェルが微かに眉を顰めていた。レクティファールの浮かべていた表情は御世辞にも品の良いものではない。

諫めるかどうか彼女が悩んでいる内に、その表情は消え去っていた。

「ふと思っただけです」

自分は思ったよりも独占欲が強いらしい、レクティファールの極々個人的な言葉にマリカーシェルは目を瞬かせたが、すぐに穏やかな笑みを作った。

「それだけ、姫さまたちが大切だということでしょう」

「それはまあ、私個人にとってこの上ないくらい大切なものですから」

他に執着するものがないという理由はあるにせよ、ああも強く自分を必要としてくれる者たちを憎く思える筈もない。

マリカーシェルは自分に言うのではなく、本人たちに伝えてはどうかと提案したが、すぐに却下された。

「本人を目の前にすると、恥ずかしいもので」

その割には本人たちもひどく真っ直ぐな言葉で口説いているではないか――後宮を守る淑女はそう思い、しかし口には出さなかった。

代わりに、ただ一つ家臣として策を献じた。弟の世話を焼く、姉の気分だった。

「ならば、行動で示されるのがよろしいかと」

その策を受け入れたレクティファールが城下の神殿に向かったのは、それから一時間後のことだった。

◇　◇　◇

リーデの幼馴染の結婚式からしばらく経った頃、レクティファールは後宮の庭園にある石造りの四阿にマリカーシェルの姿を見付けた。

彼女は旅団の幹部である乙女騎士数名と難しい顔をして中央に置かれた卓を見詰めており、何か問題でもあったのかと考えたレクティファールは、静かに四阿に近付いていった。

そこで彼が見たのは、目にも鮮やかな色彩の甘味たちである。果実や果汁寒天、乳脂をふんだんに使い、若い女性たちに人気が出そうな菓子ばかりだ。

「――おや、また新しい試供品ですか」

顔見知りの気安さからか、いつもの口調で乙女騎士たちの集まり

に混じるレクティファール。

騎士たちは一瞬驚いたように瞠目し、敬礼しようと立ち上がりかけたが、レクティファーがそれを制した。

彼は卓の上に並んだ甘味を一つ一つ目で吟味し、その内幾つかを妃たちへの土産にしようと決めた。

そして、乙女騎士たちに残酷なまでの無邪気さで訊いた。

「ふむ、食べないのですか？」

「――――！！」

空気が凍り付いた。

乙女騎士たちは一人の例外もなく肩を震わせて硬直し、レクティファールは場の変化に戸惑う。

何か変なことを言ったかと慌てるレクティファールだが、彼は別段可笑しなことを言った訳ではない。ただ、間が悪かっただけだ。

しかし、仕事に真面目な一人の侍女大佐が、恥ずかしそうに服の裾を弄りながら主君の疑問に答えた。上官に接する態度ではないが、レクティファールは気にしなかった。

「あの、最近お腹まわりが……」

「小官は頬が……」

「わたしは二の腕が……」

一人ひとりレクティファールには理解し難い言い訳を並べ立てる。

そして最後に残ったマリカーシェルが、死地に赴く戦士の顔で言った。

「総じて、我が旅団全体の脂肪の割合は……くぅ……っ！」

「旅団長っ！」

泣き崩れたマリカーシェルの元に乙女騎士たちが駆け寄る。

レクティファールといえば、普段は凛として隙のないマリカーシェルの珍しい姿に驚くばかりだ。

「ああ皆ごめんなさい、わたしが余計なことを言ったばかりに……」

「いえ、旅団長は悪くありません！　旅団長のお陰で我々はこの世の楽園を経験することが出来たのです！」

「甘い夢には代償が付き纏うもの、これから乗り越えていけばよろしいではありませんか！」

「あなたたち……」

ひしっと抱き合う乙女騎士たちに圧倒され、レクティファールは卓の上に鎮座する乙女騎士たちの敵を見た。

輝く飴、煌く砂糖、漂う甘い香り、果実の瑞々しい姿は食欲を誘うと同時に視覚をも満足させてくれる。

「――美味しそうですけど」

ぼそりとレクティファールが呟けば、固い絆で結ばれていた乙女騎士たちも恐る恐る甘味たちに眼を向ける。

しばらく固まっていた乙女騎士たちだが、厨房を預かる侍女中佐の手がゆっくりと甘味に伸びていく。慌ててそれを止めようとする仲間たちだが、次から次へと甘味の誘惑に陥落する騎士が続出した。

マリカーシェルは最後まで抵抗していたが、造反した部下たちが「せっかくの試作品ですよ」「旅団長も一緒に堕ちましょう」と悪

魔の囁きを耳元で呟くと、夢遊病患者のように甘味に手を伸ばし始めた。

やがてその場に居る全員の前に甘味とお茶が並べられ、決死隊の突撃が始まろうとしたそのとき、レクティファールはふとした思い付きを口に出した。

「どうしても食べたいなら、私が事前に半分ずつ頂きましょうか」

それなら、摂取する熱量は半分で、味を楽しむことは出来ます――レクティファールの提案に乙女騎士たちの眼の色が変わった。

「ついでに、今度から小さめの試供品を作ってくれるようお願いしましょう。その方が色々味を楽しめると思いますし」

試供品を後宮に入れているだけでは皇族御用達とは言えないし、皇王府も許可を出さない。しかし、皇妃たちに気に入られればその一文を看板に掲げることが出来るようになる。商人たちも必要な手間と割り切ってくれるだろう。

「それですっ！　流石殿下っ！」

「いえ、それほどでもないですが」

旅団の魔法連隊を預かる大佐がレクティファールの両手を掴んで涙する。

食べなければいいという提案をしないだけ、レクティファールも女心を学んだのだ。

「では早速、切り分けましょう」

そう言ってうきうきと果物刀を握ったのは、年甲斐もなくはしゃいだ様子のマリカーシェルだった。

閑話乃肆「墓参」

「力なんてものは、欲しいときには無くて、要らないときには余るほど」

自分と同化した〈皇剣〉を指して、レクティファールはそう漏らした。

アルカディス湖の上を滑る近衛海軍の御召艦〈ホールス〉。彼女は海軍所属の軍艦であることを示すために『艦』と呼ばれてはいるものの、全長三〇メイテル程度の小型艦ということもあって、甲板に立っても視点はあまり高くない。

元々湖の上で使用するための御召艦として設計された〈ホールス〉だが、ここしばらくは皇都の軍港で係留されたままになっていた。それが本来の役目に復したのは、現在の彼女の主である摂政レクティファールが、湖の中に浮かぶ小島に足を運ぶことになったからだ。

始めは摂政が舟遊びでもするのかと思った近衛海軍は、〈ホールス〉よりも大型で整備も万全であった別の御召艦を使用する予定であったが、目的地が皇王家や特別に許された一部貴顕の墓所がある島であり、さらに後宮・離宮の皇妃候補たち総てを伴った行啓と聞き、近衛海軍は大急ぎで〈ホールス〉を整備した。その島には小型船しか接岸出来ず、伝統的に〈ホールス〉と同程度の大きさの御召艦がその行幸、行啓の移動手段となっていたのだ。

真新しい塗装に、張り替えられた床材と壁材。〈ホールス〉は生まれ変わった姿で新たな主を迎え入れた。

旗柱には皇王家の紋章旗と近衛海軍旗が翻り、これが正規の行啓であると周囲に示している。先ほどまで幾つかの新聞社の船が並走していたから、明日の新聞には写真入りで摂政行啓の記事が並ぶことだろう。

これが通常の行啓であれば乗艦前に妃たちを並べて写真の一枚も撮らせるのだろうが、目的地が墓所となればそんなことは出来なかった。

「ふむ」

大外套の裾が翻り、風を打つ。ばたばたと忙しなく暴れる裾に辟易しながらも、レクティファールはその場から動こうとしない。

空を見上げれば鈍色の雲が九割の青空が一割。湖上の空気は冷たく、彼の背後で控えるお付きの海軍士官が小さく鼻を啜ったのが聞こえた。

悪いことをしたな、と思い、彼は背後を振り返って士官に声を掛けた。

「済まないが、あれたちの様子を見てきてくれないか」

あれとは、言わずもがな妃たちのことだ。

士官もすぐにそれに思い至ったのか、聞き返すことも無く見事な敬礼をして艦内に消えた。

それを見届け、再度空を見上げる。

「墓参日和と言うべきか、明るくもなく、暗くもなく、いい天気だ」

結局レクティファールは、島に着くまでずっと甲板にいた。

自分が部屋に戻ればフェリスが嫌なことを思い出してしまうかもしれない、そう考えた末の行動だった。

逃げているな、そう自嘲した。

◇　◇　◇

地図の上では〈ウォルコット〉と記載されているその島は、周囲五キロメイテルほどの小さな島だ。

普段は墓所の管理を一任された神殿の神官夫婦ふたりだけが暮らす、時間が止まったかのような静かな島に過ぎない。ただこうして

皇族が訪れるときだけ、島は息を吹き返し、時計の針を刻むようになる。

艦上からは葉の落ちた木々の合間に幾つか建物が見え、レクティファールはそれらの建物に祀られている先人たちに小さく会釈した。

「殿下、上陸の準備が整いましてございます」

「分かった」

士官の言葉に頷き、レクティファールは舷側に向かう。

そこには、彼の大事な女たちが勢揃いしていた。

リリシア。

メリエラ。

フェリエル。

ファリエル。

フェリス。

オリガ。

落ち着いた色合いの礼装を纏うそれら正妃候補の向こうに、アリ

アとリーデの姿もある。

皇族以外上陸できないということもあり、見知った顔の侍女騎士たちは舷側に並んでこちらを見守っていた。

「では、行こう」

女たちの顔を一巡し、レクティファールは頷いてみせた。中には父や母でさえ立ち入ることが出来ない場所の赴くということでいくらか緊張した面持ちの者もいたが、彼がそれに触れることはなかった。慣れてもらわなければ困る、それが本音かもしれない。

妃たちを伴い、人ひとりの幅しか無い舷梯を渡ると、木造の桟橋の上で神官夫婦が待っていた。

白髪だらけの年老いた男と、未だ老いを微塵も感じさせない若い女。人間とエルフの、皇国では珍しくもない異種族夫婦だ。

「ようこそおいでくださいました」

全員が桟橋に降りたことを確認すると、夫婦は深々と頭を垂れた。レクティファールたちもそれに応えて頭を下げる。

さらに古式に則った遣り取りをひと通り済ませると、レクティファールは再度夫婦に頭を下げた。

「此度の弔いと訪問、無理を言って申し訳なかった」

レクティファールがそう謝罪すると、夫婦は驚いた表情を浮かべて顔を見合わせた。

「いえ、殿下、私たちはお役目を果たしたまでです。お顔を上げてください」

「ここは先人たちの寝所、わたくしたちはその使用人のようなもの。殿下のお心遣いだけで十分でございます」

さあ、参りましょう――先人たちへの尊敬を忘れないこの島の新たな主人の心根を垣間見た夫婦は、穏やかな表情を浮かべてレクティファールたちを促した。

死者に敬意を払うことが出来ない者が国主になれるほど、この国は小さくない。神殿から島に訪れる皇族たちを調査するよう密命を与えられている夫婦にしてみれば、報告書に不愉快な内容を書かずに済むことは幸運なことだ。

「一部、足元が悪うございます。お気を付け下さい」

向かう先は島の中心、魔力を養分にして生きる木々の森だ。

〈ホールス〉の乗組員と侍女たちに見送られ、一団は木々の間に伸びる小路を進み始めた。

するとすぐにリリシアがレクティファールの傍らに駆け寄ってくると、彼の外套の中に潜り込んでその腕と指を絡めてくる。氷狼毛皮の防寒着と帽子で完全武装のリリシアだが、その頬は寒風で赤くなっていた。

「すみません、一緒に来てもらって」

「むしろ、呼んでもらえてほっとしております。フェリスさんだけ連れて行く、という選択肢もあったのでしょうし」

リリシアはレクティファールの外套の中で囁いた。

彼女の言う通り、今回の墓参はフェリスとレクティファールだけでこと足りる。しかし、レクティファールは敢えて他の妃候補たちも連れて来た。

フェリスの大切な家族の墓に詣でるのだから、新たにフェリスの家族になる者たちも連れていくべきだと思った。そして何より、リリシアたちにもこの地で眠る者のことを知っておいて欲しかった。ほんの少し運命が変わっていたら、彼女たちもこの地で眠る者を家族として受け入れていた筈なのだ。

「――フェリスの様子はどうですか」

訊くまでもない。だが、訊かずにはいられなかった。

「気落ちしていない、といえば嘘になります」

当然と言えば当然でしょうが――そう言って目を伏せるリリシア。絡み合った指に、力が篭った。

「レクティファール様と二人きりでいれば、確かに嫌なことも思い出すと思います。ですが、帰りはフェリスさんと一緒に過ごしてくださいね」

皇妃を束ねる者として、リリシアはフェリスを気遣う態度を見せた。

女としては決して認め難いことでも、皇妃間の調和のためには必要なことだ。リーデやアリアなどの側妃が皇妃同士の間を取り持つように、第一妃であるリリシアもそれ相応の役割を果たさなくてはならない。

リリシアには、レクティファールが自分の役目を果たせない者を傍に置いておくとは考えられなかった。もし置くとしても、それは飾り以上の意味はない。そこにあるから邪魔にならないよう置いておくだけ――そんな扱いを受けることに、リリシアは耐えられなか

った。耐えられなくなったと言うべきか。

男にとって女が毒であるように、女にとっても男は毒である。同時に、薬でもあるのだが。

「――でも、悲しいことです」

リリシアはフェリスの心の痛みを全く理解出来ない訳ではなかった。家族として暮らせたはずの者を喪う痛みは、リリシアにも忘れ難い喪失感として刻まれている。見送ることさえ姉に押し付けた、そんな罪悪感もあった。

「こうしてレクティファール様と隣り合って歩くことも、本当はとても幸運なことなのでしょうか」

場所と背後で歯噛みしている者たちを度外視すれば、寒空の散歩と見ることも出来る。こんな平穏も、来るときが来れば幸運であったと思うのだろうか。

「さて、私にはどうとも。ただ――」

レクティファールは背後を一瞥し、次いでリリシアを見詰めて溜息を吐いた。

石畳を踏み締め、曇天を見上げ、無表情に言葉を零した。

「この時間が終わってしまうことが、私にはとても恐ろしい」

◇　◇　◇

幾つかの墓所を巡り、花を手向け、祈りを捧げながら、一行は目的地の森の中へと足を踏み入れた。

魔桃樹という名の木々から発散されている独特の魔力は、それと相性の悪い者ならば気分を悪くしてしまう。幸い一行の中には、それらの魔力を心地良いと思うものは居ても、体調を悪くする者は居なかった。

森の中に入ると、これまで一定距離ごと交代でレクティファールの中に潜り込んでは神官夫婦から笑みを向けられていた者たちが、揃って一人の女を押し出した。

押し出され、困惑するフェリス。これまでずっと一行の最後尾近くを歩いていた彼女は、艦を降りてから初めてレクティファールと言葉を交わすことになった。

「――寒くはないですか」

「うん……大丈夫」

陸軍の冬季礼装に紋章入りの大外套という姿は、レクティファールと良く似ていた。少しでも二人の関係が近くなるよう密かにフェリス付きの乙女騎士が気を回したことに、二人は気付いていなかった。

フェリスを隣に置き、レクティファールは苔生した石畳を進み始める。

魔桃樹が作る魔桃と呼ばれる魔力の塊が枝を離れて中空を漂っている風景は幻想的で、フェリスは思わずその光景に目を奪われた。自分の近くに漂ってきた魔桃に恐る恐る手を伸ばし、触れた瞬間に魔桃が弾けるとその音に驚いて手を引っ込める。

「大丈夫ですか」

「うん、平気」

レクティファールに答え、フェリスは羞恥で染まった頬を隠すように俯いた。

「綺麗なところ、ここなら――」

「ええ、退屈せずに冥界に行くまでの時間を過ごせます」

レクティファールは呟き、立ち止まる。

彼の手が前方を指し示すと、フェリスはそちらに目を向けた。

「あれが、墓標です」

池の中心に立つ巨大な魔桃樹。枝々に魔桃を実らせた巨木の根元に、黒石の板が埋め込まれている。

神殿から確認されたとき、彼自身が選んだ墓標だった。

スヴァローグ公爵家、レヴィアタン公爵家の両家に受け入れられなかった御霊にせめてもの平穏をと、彼が精一杯考えた墓標。

フェリスは池の縁から魔桃樹へと伸びる橋を、レクティファールに見守られながら進んだ。

「――ごめん」

歩みを進めながら漏れ出たその呟きは、おそらくレクティファール以外には聞こえなかっただろう。

そして唯一その呟きを聞いた男は、その言葉に深い痛みを覚えた。

「もっと前に助けに行けたら、こんなことにはならなかったのに」

膝が汚れることも気にせず魔桃樹の根本に跪き、フェリスは両手の指を組んだ。

祈りと見るには痛々しいその姿に、レクティファールは立ち尽くす。

「ボクがこうしてレクトと一緒に生きていけるなら――もう少しだけ運命が違ったら、君も一緒に生きていけたのかな」

石板には、誰の名前も刻まれていない。

それどころか、家の紋章さえ、没年月日さえも。何も刻まれていない。

真っ黒い石の板が、そこにあるだけだ。

「お母さんは大丈夫だから、安心していいよ」

フェリスは解いた指を石板に這わせ、泣き笑いの表情で言った。

会ったこともない『弟』のために、彼女は泣いた。

「ごめん、きっと君は生きていたかったのに」

万感の想いを込めた言葉。

もしかしたら、自分がここに弔われていたかもしれないとフェリスは気付いていた。

生まれる順番が逆であったなら、ここで『妹』に跪いていたのは『兄』であったかもしれない。

「だから、ボクは生きるよ」

両親は生きている。

そして自分も望んだ通りの相手に嫁ぐ。

しかしたった一つ運命の手から零れ落ちてしまった『弟』にそう宣言し、フェリスは立ち上がった。

「レクト」

振り返ったフェリスの表情は、酷いものだった。

涙のあと、充血した金瞳、そして赤らんだ頬。

だが、レクティファールは無言で彼女を抱き寄せる。

その腕に抱いたものは何であろうと奪わせない――レクティファールは奥歯を噛み締めていた。

彼が個人で守り切れるものなど、結局その程度なのだ。

皇王として国を守ることは出来ても、レクティファールとして誰かを守ることには繋がらない。

皇王は皇王で、レクティファールはレクティファール。それは同じものであり、違うものだった。

「――この世界は酷いところだ」

レクティファールが初めて漏らす言葉だった。

フェリスは訝しげに顔を上げ、その表情に目を瞬かせる。

笑みとも泣きとも判別できない奇妙な表情。フェリスが知らなかった表情だ。

「こんなにも多くのものを私に与えるのに、その中に私が本当に欲するものはない」

フェリスはその言葉に一瞬怒りを覚えた。

自分はレクティファールにとって取るに足らないものなのか、と。

だが、すぐにレクティファールの言葉が全く別のことを指しているのだと知った。

「力をくれるというなら、君たちを守り切れるだけの力を与えてくれればいいのに」

〈皇剣〉は世界を滅ぼすに足る力を持っているが、誰かを守り切るだけの力は持っていない。

だから、彼は決めたのだ。

与えられないなら、自分で取りに行くと。

「――フェリス」

「うん」

「ちょっと忙しくなるけれど、手伝ってくれますか」

何処にあるかは分かっている。

どうやって手に入れればいいかも分かっている。

あとは、手筈を整え、その手に掴むのみ。

「面倒ごとですが、やるしか無いようなので」

ここに来て気付いた。

ここで皇国を見守る者たちの幾らかは、自分と同じことをしようとしたのだと。

「別にいいけど……何をするの？」

「何、簡単なことです」

レクティファールはことも無げに言ってのけた。

「手が届かないなら、届くようにすればいい」

◇　◇　◇

カール。マリア。アナスターシャ。フレデリックの四人は、それぞれの屋敷でほぼ同時に皇城からの使者を迎えた。

彼らの携えてきた皇城からの通達もほぼ同じもので、二日後の夜に皇城へと参内せよというもの。

四人はそれぞれの考えでそれを受け入れ、使者に返書を持たせた。

カールは摂政に手渡すべき腹案とそれに必要な資料を急いで整理し、一抱えほどの書類束に纏めた。

マリアは主立った家臣を皇都に呼んで今後の公爵家について議論を交わし、一つの結論を得た。

アナスターシャは自らの要塞である書斎でいつもと変わらない日常を二日間過ごし、その間に家臣が集めた情報を抱えて皇城に向かう馬車に乗り込んだ。

フレデリックは使者を見送った直後に込み上げてきた怒りに身を任せて家宝の一つである大壺を拳で粉砕し、細君に散々怒られた。

そして四人がそれぞれの思惑を胸に皇城へと登ったのは、年明けまであと三ヶ月となった雪の日であった。

章間話「いつか終わるかもしれない世界、いつか始まるかもしれない世界」

皇城に呼び出された四公爵は、人通りの絶えた正門から城内に入り、正面玄関で宰相ハイデルと皇府ルキーティの出迎えを受けた。

二人は夜も遅いというのにしっかりとした正装姿で、これから諸侯臨席の御前会議でも開かれるのではないかと四人に錯覚させた。

ある意味、その錯覚は的を射ていた。

「殿下がお待ちです」

宰相がまるで摂政の秘書官のように四人を先導して上階へと通じる階段を昇る。ある意味では秘書官と言って問題ない役職だが、それにしては人としての厚みが違いすぎる。歳若いフレデリックなどは、まるで上等学校や専修学校に入学したばかりの新入生のように、慌ててハイデルの背についていくしか無かった。

その他の三人のうち、マリアだけが何処か面白そうに笑みを絶やさず、アナスターシャはいつもの無表情で、カールは口をへの字に引き結んでハイデルの背を追った。それら四人を追うように、ルキーティが最後尾を進む。彼女は玄関広間に飾られた歴代皇王の肖像画に目を通し、僅かな好奇心に目を煌めかせて階段に足を掛けた。

初代に次ぐ若い国主が何をしようとしているのか、ひどく楽しみであった。

ここ数日、彼女は今の主人から様々なことを命じられた。帝国・連邦・イズモの動静はもちろん、大陸中の流通網に乗っている物品から各国の動きを分析し、さらに皇国製品を輸入している国であれば他大陸の国家でも調査対象となっている。特に最近妙な動き――イズモの主権海域付近まで軍艦を進めるようになった――を見せ始めた〈北ウォーリム教国〉〈南ウォーリム教国〉については現地に情報員を派遣する念の入れようだ。

ルキーティはその変化を好ましいものとして受け取っていた。人伝に聞いたところでは宰相閣下は別の感想を抱いたようだが、それもレクティファールの行動を掣肘するほどのものではないらしい。単に、身内と呼んで差し支えない人物に降り掛かった悲劇に一刻激情を持て余したのではないか、そう疑っただけのようだ。

ただその疑念も、レクティファールの働きが単なる一時的な感情から生まれたものではないと分かるにつれて薄れていった。今ではルキーティと同じように自らの職権の及ぶ限りにレクティファールの求めに応じている。

皇国の情報機関として名の知られている皇国情報院は皇王直隷の機関であるが、実は皇王府情報局と同じように政府にも独自の情報機関は存在する。専ら国内の情報収集に従事しているせいか諸外国には余り知られていないが、その分、国外から国内に流れ込む情報の分析に関しては、情報院にも引けを取らない能力を持っていた。

名を『行政府第九官房室』と呼び、今は宰相がその責任者であった。宰相が置かれていない場合、内務院総裁がその任を負うことになっている。

その第九官房室もここ最近は非常に活発な動きを見せ、ルキーティとハイデルは軍情報部、外務院対外調査部やその他の情報機関も含めれば八つの、ともすればその縄張りが重なり合う、しかし得意分野の異なる情報機関の間を調整しながら運用していた。

摂政が以前にも増してそれらの情報機関を重要視するようになった理由など、ルキーティにしてみればそもそも考える必要はない。彼女はあくまでも皇王家の家宰、皇王府の主宰でしかなく、皇国に対しての責任はそれほど重くはない。ただしそれは、彼女が皇国に対して小さな影響力しか持っていないということの証左ではないが。

（だけど、今はまだまだ甘いかな）

ルキーティは四龍公の背を追いながら、これまでの皇王との記憶を振り返る。

それらの記憶の中の皇王と較べれば、レクティファールの行動は無駄が随分多い。人任せにするべき部分までも自分で手を出したがるのは、人の使い方に関して経験が不足しているからだ。

騎士学校に通うようになってからはかなり改善されたが、未だに動きの無駄は少なくない。それはひとえに経験の不足から来る欠点であるから、時間の経過と共に改善されていくはずだが――

（時間も限られているし、そろそろ何かいい手でも考えないと）

騎士学校もそれなりに有用な手段であるが、あそこはあくまでも軍の高級将校を育てる場所。しかも本当の意味で現役士官が学ぶべきことは前線と学校を行き来してこそ身につく、今のようなお飯事じみたやり方ではいつまで経っても足踏みしたままだ。

ルキーティは幾つかの方法を頭に思い浮かべ、上階へと続く階段を軽い足取りで昇っていった。

◇　◇　◇

一日に何度も昇り降りする階段は、ハイデルの年老いた身体に優しいものではない。

だが一度、摂政に「魔動式昇降機を増設しようか」と提案されたときは頑としてそれを突っぱねた。そんなことに予算を使うなら、一人でも多くの孤児に就学の機会を与えるようにと進言した。

皇城にはすでに幾つか昇降機が設置されており、ごく普通の職員であれば不便を感じることもなく日常業務を行える環境になっている。

その代わり、立ち入るものが限られている区画――摂政や宰相、皇府の執務室のある区画はそういった利便性を高める設備が少なく、若い官吏が緊急を要する書類を携えて階段を駆け上る光景も珍しくない。重要区画であり、みだりに外部の建設業者を入れることが出来ないという理由も、確かにある。

逆に後宮や離宮は妃たちの希望に沿ってそういった設備が日々増築されている――特別護衛旅団には、そういったことを職務とする工兵部隊も存在する――というのだから、ハイデルには羨ましい限りだ。無論、それを口や態度に出さないだけの分別はあるが。

長い階段を昇りきると、今度は長い廊下の赤い絨毯の上を一歩一歩踏み締めて摂政の待つ第二中央棟へと進む。

壁には著名な画家の絵が並び、いつの時代のものとも分からないような壺や彫刻が連なる。等間隔に配置された観葉植物は三日に一度入れ替えられ、皇城を訪れる者に常に最高の姿を見せていた。

大国の政庁ともなれば、諸外国の文官・武官が足を踏み入れることもあるし、ときには他国の市民が国賓として遇されるということもある。彼らに〈アルトデステニア皇国〉の国威を示すためには、こういった――見栄や虚栄というある種の究極の無駄遣いを惜しむことは出来ない。

その分、彼らが決して足を踏み入れない一角に入れば、光景は一変する。

赤絨毯はそのままだが、壁に掛けられている絵画は皇王家お抱えの絵師が描いた皇国の歴史を示したものへと変わり、彫刻や観葉植物はその姿を消す。質実剛健をそのまま絵にしたような光景は、皇王がいつの時代でも華美な装飾を好まなかったことを証明している。

（そして今も、ここは変わらずに質素なままか）

初めてこの廊下を通ったとき、彼は今の摂政と同じ年齢だった。若く自分の才を信じきっていた頃の話だ。自信に満ち、自分がこの国を担うんだと意気込んでいた。

しかし、その自信も先代皇王と顔を合わせた瞬間に崩れ去った。篤実温厚で他国の国民にさえ慕われる先代皇王だが、自国の軍人や官僚、貴族に対しては峻厳な一面を見せ、ハイデルが初めて出席した御前会議で醜態を晒した際に投げつけたられたその言葉は、彼の肺腑と自信を抉り貫いた。

（国は貴様の玩具ではない）

自分の考え通りに人や金が動くのが面白かった。将来を嘱望され、次々と重要な仕事を任され、成功するたびに賞賛され、ときに名立たる貴族の娘たちとの縁談が舞い込むのが嬉しかった。御前会議に出席が許され、出席者の中で最年少の自分の意見に興味があると先代皇王に直言する許しを貰ったときは、天にも昇る気持ちだった。

その結果、他の出席者の面子を潰すような発言をしてしまい。先代皇王の勘気に触れた。国の運営に携わるものが他者を理解することを放棄すればどんな結末を招くか、あとになって気付いた。

そして、そのときの自分と同じ間違いを犯したのが、当代皇王だった。

同属嫌悪だったのかもしれないと思う。

先代皇王に過信を打ち砕かれないままだったら、自分が同じようなことをしていたのではないかと思った。

（しかし、そんなそれがしが宰相とは……）

あの戦いのあと、処刑されることも覚悟していた。どれだけ罪が減じられても、二度と公職には就けないだろうとも。

だというのに――今の自分は宰相の長衣を纏い、嘗ては自らの上にいた四龍公と同じ宮内序列にある。

この世は不可思議なことに充ち満ちていると、この歳になって実感するとは思わなかった。

（確かに、あの摂政に仕えるのは罰のようなものかもしれんが……）

騎士学校に身分を隠して潜り込むのは良い。後学のためと納得できるし、むしろこちらから奨めても良いくらいだ。

ただ、その後の決闘騒ぎや今回の西域での戦闘は別だ。決闘程度であればまだ摂政と皇妃の名誉のためと考えることもできよう――無論、諫めはした――が、帝国の研究施設に単独で強襲を仕掛けたと報告を受けたときは卒倒しそうになった。三軍とは違って近衛軍は宰相の権限が一切及ばない。その作戦内容も事後報告という形でしか得られず、あの晩は胃痛で一睡も出来なかったほどだ。お陰で妻には余計な心配を掛けてしまうし、馴染みの医者には「もっと身

体を労れ」と注意される始末。

皇城に戻った摂政に小言を述べれば、「以後、気を付ける」と一言。絶対に口だけだ、と思ったが、長年の経験で鍛え上げた強靭な自制心で辛うじて口に出すことは免れた。

気を付けて行動を改められるような者は、そもそも暴走した龍族と空中戦を演じるなどという無茶はしない。〈皇剣〉を満足に扱えない以上、〈皇剣〉に身体の制御を乗っ取られる可能性さえ否定出来なかった。そうなったら誰も彼を止められない。今度は一地域ではなく、大陸丸ごと――いや、世界が崩壊するかもしれない。ハイデルが知る概念兵器とは、そういう存在だった。

（やはりここは、一度じっくりお話を聞いて頂かなくてはならんか）

彼の唯一の上司は別段聞き分けが悪いという訳ではない。諫言もきちんと受け入れるし、理解に乏しいということもなかった。自らを非才物と認識して能力のある他人に仕事を任せることも出来、権力を盾に自らを押し通すようなこともないあの摂政。文官武官を問わず彼を嫌う者が少ないのは、ある意味で他の何にも代えがたい才能だ。あの青年の口から我侭と言えるほどの願いは一度も出たことはないし、何よりも名が売れている。

ハイデルから見ても、レクティファールは摂政として及第点以上の人物であることは間違いない。ただ少し、自己評価というものが不得手であるように見受けられた。

端的に言えば、自重して貰いたいのだ。

色漁りぐらいならば度が過ぎなければ何も言わない。戦場に出ることも必要だ。臣下たちと真正面から意見を交わし合うというのも良いだろう。

しかし、そうしているという自覚も薄いまま色を漁り、戦場では敵の刃が届く位置まで突出し、臣下たちに混じって酒盛りをするというのはどうなのだろう。

（ぐむむ、ここは一つ、強くお諫めするしか）

ハイデルにしても、レクティファールは個人的な恩義と忠義を抱いている。彼個人としては、それこそ国が傾くようなことがない限りレクティファールと運命を共にしようと考えているほどだ。

名宰相とも、懐刀とも、獅子身中の虫とも言われる老人は、その内心に複雑な想いを抱きながら件の上司の下へと向かう。

◇　◇　◇

廊下を進む一団の先に、巨大な扉が姿を見せた。

彫刻の施された木製の大扉。その両側に立つのは、見慣れた近衛兵ではなく巨大な斧槍を携えた漆黒の魔動式甲冑二人だった。

最近摂政が召抱えたという非正規騎士団か、四龍公は揃ってそう当たりをつけた。無頼者として城下を騒がせていた騎士崩れを摂政が召抱えたという噂は、彼らの耳にも届いていた。

魔動式甲冑は一団に気付くと扉の前に移動し、一人は斧槍を構えて一団の進路を塞ぎ、もう一人は背部から肩越しに迫り出した連装二基の魔導砲を一団に向ける。

斧槍を構え、瞳のような一対の深紅を超硬硝子の向こうに煌めかせた魔動式甲冑が、「主君より与えられた職務により、誰何させていただく」と威圧するような合成音声を発した。

足を止める一団。ハイデルが一歩を踏み出し、その体躯と歳に似合わぬ声で答えた。

「摂政レクティファール殿下のお召により、客人四名、皇府ルキーティと共にまかりこした」

魔動式甲冑の光学感知器が鳴り、知らされていた予定と情報の照合を行う。確認を終えた魔動式甲冑二人は扉の前から退き、六名の来訪を告げる。すると扉がひとりでに開き、二人の魔動式甲冑が斧槍を掲げて敬礼した。

六人は、彫像のように微動だにしない魔動式甲冑の間を抜け、〈いにしえの大円卓〉と呼ばれる広間へ足を踏み入れた。旧皇城区画に位置するこの広間は嘗て議場として使用されていたが、今では新たな会議場にその役目を譲り、白と黒の石畳模様が広がっているだ

けの空洞である。

しかし千年以上の伝統のある場所であることには変わりない。表沙汰に出来ない重要な合議などを行う広間として、皇国の政に関わる者たちにとって特別の意味がある場所だ。

六名の視線の先、嵐のように渦を巻く文字列の只中、広間の中央にレクティファールの背中があった。

帯状の文字列が幾千幾万も飛び交う広間に、六名は目を見開く。そしてその文字列の中に一つ、見覚えのあるものを見付けたのはアナスターシャだった。

「――ガリアン・アーデン」

アナスターシャに視線が集まる。

彼女は部屋中に視線を走らせ、一つの確信を得た。

「これは、殉国者の、名……？」

それは問い掛けであった。

そして、ハイデルたちもその言葉に得心したような表情を浮かべ、レクティファールに向き直る。答えを待つためだった。

レクティファールは六名に背を向けたまま、腰の〈皇剣〉の柄頭に手を置いた姿で文字列の嵐を見つめている。六人が答えを待ったのは、数秒に満たなかっただろう。だが、六人には恐ろしく長い時間に思えた。

その間、幾度も見覚えのある名を見付けた。友人と呼べる者の名もあった。一族に連なる者の名もあった。つい最近加わった名もあった。

いずれも、皇国に殉じた者たちだった。

沈黙の末、レクティファールが口を開く。

「ここには今の私よりも若い者の名もあれば、十倍以上の歳を重ねた者の名もあります。私が顔を合わせたことのある名も、ありました」

振り返った彼の顔に、感情と呼べるものはなかった。銀色の瞳は静謐で、その口調に歪もない。

それだけに、レクティファールの感情の揺れを六名は強く感じる。その平坦な声が、〈皇剣〉の感情制御によるものだと気付いたからだった。

「二〇〇〇年の間、この国のためにと生命を捧げた人々の名。私は彼らの死に意味を与えなくてはならない――違いますか、ハイデル」

ハイデルが背筋を伸ばし、声を張り上げた。

「はい、殿下。仰る通りでございます。そして、当代では殿下以外にそれを為し得る者はおりませぬ」

「そうですか。ええ、きっとそうなのでしょうね」

レクティファールは再度視線を上げ、部屋に満ちる殉国の士の名を見渡す。

理屈や現実を経た今になって、ようやく本当の意味で彼らが死してなお守りたいと思ったものがどういったものであるのか、理解できたような気がした。

北の戦場で死者を見送ったときにも感じた寂寥感。国葬の場でも感じたその感情の間隙に、入り込んでくるものがあった。

国主として、己の赤子たる子の死に悲しみ、悼み、西の地で彼らが守りたかったものを――かつて虐げられた者たちとその安住の地を守れなかったと感じ、そして得た。

同時に、ようやくこの国の主としてやるべきことが見えた。〈皇剣〉の記録の果てにある義務ではなく、課せられた責任ではなく、レクティファール個人としての願いでもなく、それら総てを内包した。巨大な望みが彼の中に生まれた。

リリシアに血を浴びせ、メリエラを傷付け、ウィリィアを苦しめ、リーデを追い詰め、フェリエルを悲しませ、ファリエルを憤らせ、フェリスを泣かせ、そしてオリガに支えられ、アリアに慰められ、やっと――この広間に満ちる名前たちに胸を張って意味を与えられる。

もはや、時間の流れは止められない。これまでの歴史の上だけでは生きられない。ならば、新たな歴史を作るまで。

「ベルファイル！」

「は」

広間の片隅に控えていた近衛元帥が、六人が入ってきたものとは別の扉を開く。

そこから姿を見せたのは、それぞれ皇妃として、白を基調とした衣裳を纏った四龍公の姫君たちであった。

「――」

メリエラ、フェリス、オリガ、フェリエルと続き、四人はその両手で一本の刀を捧げ持っている。

最後にファリエルがレクティファールの大外套を携え、広間に入

った。

四龍公は自分たちの娘の姿に硬直し、彼女たちがレクティファールの傍らに並ぶと、ようやくその意図するところを悟った。

これは、叙爵なのだ。

「カール、マリア、アナスターシャ、フレデリック。前へ」

ファリエルがレクティファールの肩に大外套を掛けると、金色の飾鎖がしゃらりと音を立てた。その背中には、きっと皇国の国章がある。

その行動の意味するところは――この国を背負うという再度の意思表示。

呼ばれた四人はそれぞれの娘の前に立ち、じっとその瞳を見つめる。

いずれの姫も、真っ直ぐに親を見つめ返した。その姿に四龍公は気付く、娘の居場所はもう自分たちの背後ではなく、目の前の青年の傍らにしかないのだと。

カールとフレデリックは途方も無い喪失感に襲われ、マリアとアナスターシャは寂寥感と満足感を味わった。四人の一つの役目が終わった瞬間だった。

「私は、〈アルトデステニア〉の主として諸兄らに告げる」

レクティファールの宣告に、六人は威儀を正した。

「私はこれまでの歴代陛下と同じように、この国と民を守らなくてはならない。『如何なる者も生きることが出来る国を』という国是の下、歴代陛下は国を造り、産業を興し、国を守り、文化を育て、軍を造り替え、交易路を拓き、平等を考え、諸外国との友誼を結んだ」

私は、とレクティファールは一拍の間を置いた。

「――如何なる手段を用いてでも、皇王の名の下に人々に生きる場を与えようと思う」

如何なる手段を用いてでも――その言葉の裏にあるものは、六人にも容易に察せられた。

「殿下、それは……」

「外交、経済、軍事、何をどれだけ使ってでもという意味だ、宰相」

ここ数十年の間に、この国を取り巻く環境は大きく変化した。

すでに七大陸の内三つは統一国家の誕生を見、一つは一個の大同盟に支配されている。一つは幻想種たちの棲む未開の地であり、残り二つだけが未だ群雄割拠の状態にあった。その二つの内の一つが、アルマダ大陸だ。

「東の大冥洋を超えた先では〈北ウォーリム〉と〈南ウォーリム〉が統一の動きを見せ、共にイズモの南方植民地に圧力を掛けてきている。西のトラン大陸は〈トラン大同盟〉の名の下に合議制が敷かれ、その中ではアルマダ大陸での利権を求める声が日々高まるばかり、トランの西、天聖洋の先にある〈統一帝國エリュシオン〉は大霊海のオルコス大陸に軍を進めた」

レクティファールの言葉に答えるように、彼の背後に一個の球体が浮かぶ。

それはこの世界の姿であり、現実だった。

「いつか、この世界総てを包み込むような巨大な争いが起こる。これは過去幾人もの者が予言してきたことだ」

争いに投入される軍事力とその範囲は拡大し、その勢いは未だ緩むことはない。兵器や魔法の性能は恐ろしい速度で発展し、戦略規模の大魔法が使用されたのも一度や二度ではなかった。そしてそれに誰かが気付いたところで、止めることは出来ない。

「帝国との争いでさえ、ウォーリムの干渉がある。彼らにしてみれば、第一次文明の遺構が多く残るこの大陸と、四界と直接交流できる我が国は是が非でも手に入れたいものだろう」

皇国建国の頃には想像できなかった大陸間の争いが、現実のものとなろうとしている。他大陸の状況を見た先代皇王はそれに気付き、皇国の外に根を張ることを選んだのだ。

いつか来る大きな戦いの中で、皇国の生き残る道が一つでも増えるように、と。

「性急にことを進めれば、歪な結果しか得られない。だが時間を掛け過ぎれば、手遅れになる。――正直に言えば、何故このときに摂政になどなってしまったのかと思っている」

他大陸との繋がりを多く抱えるマリアは、レクティファールがこれまでの皇王よりも広く高い視点を強要されていることを悟る。

あの情けなく、穏やかで、異性にだらしない青年は、今少し困ったような顔で自分たちを見ていた。

「なるほど……そういうことなのね」

先ほど彼の言った『如何なる手段』の中には、自分たち四龍公を使い潰すことも含まれているのだろう。

厳密には四龍公だけではなく、貴族も軍も、この国に殉じることを求められる総てを用いるつもりでいる。

「大陸に覇を唱える、そういうことか」

フレデリックが問えば、レクティファールは頭を振った。

「手段としてならば、それもあり得る。だが、目的ではない」

「では、皇王の名の下で民が今のまま生きるためならば、どこまでその手を広げる？」

再度の問いに、レクティファールは躊躇いなく答えた。

「世界を越えた先にさえも」

〈アルトデステニア〉の皇王として、国と民が生きるためならばどこまででもその腕を広げる。広げるための手段も、強欲なまでに一つ残らず掴み取る。

望まぬまま囚われの身となり、屈辱の日々を味わった彼らが教えてくれた。

所詮人の手が届く範囲など、ごくごく限られたものでしかない。その外に零れ落ちてしまえば、余程の幸運がない限りそれを取り戻すことはできないと。

「いつまで、戦うの？」

アナスターシャが首を傾げ、尋ねる。

この戦いに終わりはあるのか、果てのない地獄への道ではないのか。

レクティファールはそれでも、一つの可能性を見ていた。

「この国と同じように、龍族も亜人種も、人間種も、総ての種族が共に暮らすことが当たり前になれば、今特別であることが特別でなくなるときが来れば、もしかしたら終わるかもしれない」

確信はなかった。

争いの絶えない世界で、争いがなければ生きられない世界で、争いつつも互いを特別視しない日が来るのか。

「争いのない世界など見たことがない私には、そんな世界は望めない。だが、私は皇王になる」

皇王は、その名の下に集う民を守らなくてはならない。

だから、皇王なのだ。

「私は私の持つ手段を総て用いて、この国と民を守り抜く。諸兄らには、その手段になってもらおうと思う」

姫君たちが一歩前に出る。

四人の公爵の前に、銀、蒼、黒、紅の刀が差し出された。

どれもレクティファールの〈皇剣〉と同じ形だ。

「皇国の盾であり、剣である諸兄らに、『私の刃』となってもらいたい」

レクティファールの言葉は、願いであると同時に誘いでもあった。

いつ終わるとも知れない、誰が相手とも知れない戦いへの誘い。

四人は差し出された刀を見詰め、娘を見詰め、レクティファールの背後にある世界を見詰めた。

「――」

あれほど広いと思っていた世界は、随分と小さく見えた。

もしかしたら、手が届くかも知れないと思うほどに。

だから、彼らは手を伸ばす。そう自分に思わせた青年に応えるために。

「誰もが生きられる国を」と願う初代皇王の手を取った先達と同じ想いで、「誰もが生きられる世界を」と願う当代の刃に。

「我ら……」

銀の刃。

「この大任……」

蒼の刃。

「謹んで……」

黒の刃。

「お受け致すっ！」

紅の刃。

四龍公は膝を突き、その刃を捧げた。

レクティファールは四つの刃を見渡し、瞑目し、おもむろに腰の〈皇剣〉を引き抜く。

「諸兄らの決断に感謝する。――では、参ろうか」

そして振り返り様に〈皇剣〉を一閃、背後の世界儀を斬り裂いた。

世界儀を構成していた光が飛び散り、広間に舞う。

その光を受けて、レクティファールは言った。

「いつか終わるかもしれない世界を、いつか始まるかもしれない世界を見に」

それが、この国の新たな、密やかな国是になった。

第一話「三国鳴動」

南の〈アルトデステニア皇国〉をどう思うかと尋ねれば、帝国臣民の答えは幾つにも分裂するだろう。

地域、階級、年齢、性別、あらゆる要素がその質問の答えに異なる姿を与え、帝国という巨大な国が一枚岩ではないことを教えてくれる。

敗軍の将となった帝国第十三姫グロリエ・デル・アルマダの処遇にしても、これが国境戦以前の帝国であれば軍籍剥奪は当たり前で、帝籍剥奪もあり得た。グロリエを帝位にと願う一派は帝国中枢では少数派で、その内訳も若手の軍人や貴族が多い。それだけに政治的な勢力として見れば『弱小』以外の呼び方は見付からないし、数少ない有力者もグロリエ自身に帝位への野望が感じられないこともあって、これといった動きを見せられずにいた。

それだけに、グロリエが一つ大きな失敗を犯せばすぐにでも帝族としての立場を追われると考えていた者は多かった。彼女の兄姉はその機会を伺っていたし、その取り巻きたちも手薬煉を引いてグロリエの蹉跌を待ち侘びていた。

故にグロリエ敗北と聞いたとき、彼らは密かに喝采した。気の早い者は一報を聞くや否やすぐにグロリエを帝王位争いから蹴落とすべく動き始め、これはそのまま大きな流れになるかと思われた。

だが、そうはならなかった。

グロリエ敗北の報から一拍遅れて皇国軍越境の報せが届き、動き始めていた者たちは慌ててその動きを止める。

続いて〈ウィルマグス〉失陥、同地域一帯を占領されるという情報が中枢に届くに至り、彼らは急転直下、天国から地獄へと叩き落とされた。

この戦い、帝国中枢では『必勝』と見られていた。対要塞戦の切り札ともいえる新兵器と数十万規模の大軍を投入し、名将の誉れ高きグロリエがそれを率いる。その上相手国は内乱で混乱が続いており、これで負けを想定した者は余程の臆病者か、才物とどちらかだろう。

実際、才物として知られていた三人の帝王候補さえ、この戦いは九分九厘勝てると踏んでいた。その勝利の果実をどうやって掠め取るか、或いは勝利者となったグロリエをどうやって引き摺り下ろすかなど、あとになって考えれば捕ってもいない龍の鱗を数えるようなものである。三人はほぼ同時に自分の愚かさを責め、その内の何割かはグロリエへの憎しみへと変わった。

ともあれ、必ず勝つと誰もが踏んでいたから〈ウィルマグス〉に投入された資金や人は膨大だった。三人の帝位継承者の取り巻きたちはこの一戦で大きな損失を被り、三人自身も少なくない損害を受けている。

〈ウィルマグス〉は戦勝後に帝国本土と南方の辺境――言うまでもなく、皇国領のこと――を繋ぐ交易の要地となる筈で、この地に大きな利権を持つことは、そのまま帝国内での地位を引き上げるこ

とにも繋がる。商人から貴族まで熱い視線を注ぐ〈ウィルマグス〉は、この国境戦の最終局面までは確かに未曽有の好景気であった。

軍用ではあったが鉄道が引かれ、本国とこの地を繋ぐ主要街道の整備計画は国家規模の巨大計画だった。大量の投資が行われ、もしも帝国が勝利していたと仮定するなら、帝国建国以来の超好景気となっていたかもしれない。

ただ、帝国は負けた。それこそ、完膚なきまでに負けた。

新兵器はその役割半ばで破壊され、〈ウィルマグス〉は占領され、都市民は難民となった。グロリエもその戦歴に拭い難い汚点を刻まれる。グロリエ敗戦を喜んだ者たちはほんの一瞬の至福を味わった後、目を覆いたくなる現実を与えられた。その現実が、グロリエの軍籍と帝籍を守った。

彼らは、彼らに敗北の味を教えた男を恐れた。その様は、件の男が知れば苦笑するほどに滑稽だったろう。男にしてみれば過分な評価であり、恐れる相手を間違えていると言うかもしれない。

しかし男は帝国にとっての仇敵であり、帝国の者たちにとっては自分たちの抱いた恐怖こそが真実だった。

恐怖した彼らは考える。

あの〈皇剣〉に対抗するには、グロリエを当てるしかない――グロリエの持つ『帝国最強』の名が彼女を救った。

帝族という肩書きでも、名将という肩書きでもない。彼女個人の『戦闘能力』が彼女を窮地から掬い上げた。

これは皮肉以外の何ものでもない。彼女を厭う者たちが散々口にした「帝族にあるまじき粗野粗暴の輩」「低劣な血統の偽皇女」「帝族を騙る不義の子」という罵詈雑言の要因、グロリエに流れる〈龍殺し〉の血が帝族としての彼女を助けたのだ。

自ら軍を取り上げられ、閑職に追い遣られたことは、確かに重い処分であった。それでも軍に残り、兵器としてではあっても必要とされる可能性を残したことは事実。グロリエ本人は気付かなかったが、今回の敗北は逆に彼女の価値を高めたのかもしれない。

少なくとも、彼女をよく知る二人の男はそう考えていた。

◇　◇　◇

帝国鉄道の分岐点の一つであるホフトルフ駅はこの日、軍の督励のために西へと向かう帝王の御用列車を見物しようと集まった群衆で埋め尽くされていた。

駅舎には国旗が掲げられ、駅前の広場や馬車の停留所近くには出店の姿もある。ある種のお祭りのような騒ぎの中、大通りから一つ奥に入った小路で営業している喫茶店に一人の老人の姿があった。

色素の抜け落ちた金髪に、同じ色の口髭。店内の片隅で新聞を広げる彼は、まるでそこにいるのが当たり前のように店の空気に馴染んでいる。

老人以外の客の姿はなく、表の騒ぎに客を取られた店主は随分前に店の奥に引っ込んだきりで、「御用の方はこちら」という札の掛けられた呼び鈴が対面机の上に鎮座している。

暖炉で燃える薪の弾ける小さな音と、年代物の蓄音機が奏でる音楽だけだった店内に新たな音が生まれる。

入り口の扉鈴が高い音を発し、来客を告げた。

「黒豆茶を」

のそりと店奥から顔を出した店主に、新たな客は一言望みの品を告げる。店主は無言のまま調理場に入り、黒豆茶を用意し始めた。

その間に客は店を横切り、これまで唯一の客だった老人の下へと向かう。

老人が視線を上げれば、そこに居たのは四十前と思しき枯葉色の髪の男。老人は一瞬笑みを浮かべ、男に自分の向いの席を勧めた。

「外は随分と騒がしいものですね」

「都市の上役が帝王に媚を売るために手を回しただけだろうて、今の帝室を心から慕う民がどれだけいるか」

老人は呆れを多分に含んだ声で答え、男はその言葉に苦笑した。確かにこの店に入るまで、街のそこかしこに帝王を賛美する張り紙と御用列車の到着時間を伝える掲示物があった。街の民の幾らかは、帝王ではなくそれに乗じたお祭り騒ぎが目的なのだろう。

「まあそれは良い、民の無聊を慰められるならそれも帝王の役目」

「確かに」

男が頷くと、ちょうど店主が黒豆茶を持ってきた。無言で牛乳と砂糖を置き、伝票を置いて去っていく。

店主の姿が店奥に消えたことを確かめ、男がぐいと身を乗り出した。

「何か、面白いことでも書いてありますか、父上」

「くだらぬ督励旅行の一面記事を除けば、まあそれなりだな」

くく、と喉を鳴らし、老人は息子に新聞の一部を指し示した。

「皇国の摂政も〈ウィルマグス〉へ視察に来たらしい。伴ったのは前紛争のときに父を失った側妾と、白龍の姫だ」

「それはそれは……こちらに一言声を掛けてくれれば、娘を挨拶に行かせたものを」

男は面白がるような笑顔で新聞の写真を覗き込み、そこにいる一人の青年に目を向けた。

「あれもそろそろ男に慣れさせなくては」

「まだそんなことを言っているのか、輿入れまであと半年もなかろう」

老人は息子の言葉に驚き、目を剥いた。礼儀作法などはこれまで十分仕込んできただろうが、男慣れしていない花嫁など実家の恥だ。昨日今日突然決まった婚礼でもない。向こうもこちらも、一年に満たない期間ではあるが準備をする時間はあった筈だ。

「閨で無作法を晒せば、恥を掻くのはあの子ぞ」

「然り、しかしリールが中々納得しないのです。まだ遊びたい盛りだというのに、後宮に押し込められるのは可哀想だと」

「イズモの姫と同時に輿入れするという予定は、変えられん。早ければ出し抜いたと見られるし、遅ければ軽んじられる」

辺境と侮る国にそこまで気を遣わなくてはならないことが、この国の末期症状を表していると老人は思う。

今はまだことを構える時期ではない、と周囲を納得させているが、果たして時間は自分たちの味方なのだろうか。

五年十年と時間が経てば、今自分たちが持っている優位も崩されるのではないか。そう考えることもあった。

「たった三〇〇年でここまで腐るとは、先人たちは考えもしなかったろう。『アルマダ』という名に振り回され、分不相応の野望を抱いたことが間違いであったか」

或いは、人に与えられた野望などを掲げたことがそもそもの間違いであったか。

彼の人はきっと、帝国が北の地の人間たちの拠り所となることを望んでいた。大陸を支配するようなことは望んでいなかった。

「――ここで言っても詮無きことか」

「父上」

男は黒豆茶を一口含むと、その香りを楽しむように嚥下する。

そして磁碗を受け皿に戻すと、改まって老人に向き直った。

「珍しく父上から書を頂いた故、大層大切な話があると思っていたのですが、もしや愚痴の相手が欲しかったのですか」

「まさか」

老人は答え、もう一度「まさか」と言って新聞に目を落とした。

「お前に一度、訊いておきたかった」

男は眉を潜め「何を」と問う。

老人は世間話でもするように、少しも気負ったところのない声で言った。

「我が孫の伴侶となる男、お前はどう見ている」

老人は一瞬の鋭い視線を息子に向け、すぐに新聞に目を戻した。

がさりと新聞を捲り、外交関係の記事に目を通す。

中枢の外交官が属国でその国の貴族の妻を拉致同然に奪い、結果その女に閨で刺されたという記事があった。老人は「自業自得だ」と鼻を鳴らし、その外交官の名を覚える。

その間息子は思案するように腕を組み、やがて口を開いた。

「運の良い男だと」

「ほう」

老人は息子の答えに興味を引かれたのか、楽しそうに目を細めて新聞を閉じた。

卓の上に新聞を置き、蒸留酒入りの紅茶を啜った。

「運か、得難いな」

「はい。文武の才は努力で幾らも補えますが、運だけは天が独占して手放しません」

老人はその文武の才を天から与えられた息子を見遣り、苦笑した。

天より二物も三物も与えられた息子であるが、運といえば人より多少まし、という程度であった。

その息子が「天命を持っている」という隣国の皇太子に、ひどく興味をそそられた。

「何故そう思う」

「グロリエと戦い、勝ちました」

老人はそれだけではないだろうと言い、息子は頷いた。

「さらに言うならば、その勝利に至るまで幾つもの幸運を得ています」

唯一皇王家から離反していなかった白龍公に拾われたこと。その伝手で四龍公と繋がりを得、その軍を用いることが出来たこと。連合軍が組織だった反撃を行なえず、両軍ともに最小限の被害で済んだこと。そのため、連合国に背後を襲われることなく帝国と相対することが出来た。〈パラティオン〉要塞では良将ガラハを配下とし、皇国軍随一の精兵を手足とする幸運も得られた。白狼越えという奇策も完全に嵌り、〈雷霆〉の砲撃も当初の帝国側の予想を裏切ってたった数発しか要塞に命中しなかった。

あとから考えれば必然の連なりであるそれらだが、あの状況下で

これだけの必然を揃えられたことそのものが幸運であったという他ない。

「父上もご存知のはず。この世で最も得難い才能が何であるか」

息子の言葉に、老人は低く喉を鳴らした。

確かに、必要なときに必要なだけの幸運の連なりを得られる者ほど手強い者はいない。こちらがどれだけ地道に必然を積み上げても、天運はそれを容易くひっくり返してしまう。

彼自身、若い頃は随分と幸運だった。幸運だったから今の地位に辿り着けたのだ。

「なるほど、運のない者に君主たる資格はないか」

「はい。他は臣下が補うことができるでしょうが、運は完全に個人のもの。民も思うでしょう、少しでも運の良い主君に統治されたいと」

馬鹿馬鹿しいと多くの者たちは笑うだろう。運だの天命だの声高に叫ぶ者は、所詮己の力に自信がないからだ、実力が無いからだと。

だが、その実力を得た者たちは揃って知る。『運』ほど得難いものはない。

こう言い切ってもいい――『運』に勝る実力など存在しない、と。

「かの男は気付いていないかもしれませんが、あの一戦で帝国の生命はだいぶ縮まりました。――いえ、後々を思えばこちらの方が良かったのやもしれません」

息子の紡ぐ未来像は、老人の立場からすれば到底容認できるようなものではない。ただ、老人もその未来像が現実になると考え、認めていた。

この国が傾き始めていることに、老人は気付いていた。気付いていて何もしなかった。何をしても無駄なのだと、気付いていた。

「時代が変わるか」

「変えるのです、父上」

父の呟きに、息子はこれまでで一番強い語調で答える。老人は息子の様子に目を細め、小さく笑った。

「では、帝都に戻るか？　すぐにでも手配してやるぞ」

「いいえ、父上」

息子は首を振り、幾度目かの同じ遣り取りを続けた。

「今私が戻れば、この国は最悪の結末を迎えてしまう。この国がもっとも穏やかに終焉を迎えられる方法は、私たちの手の中にはありません」

彼らの血は帝国の宿業に汚染されていた。それは今更雪ごうと思っても雪げず、彼らの身体中にこびり付いている。

あと少し、あと少しだけでも旧帝国の残した悪しき慣習を改善しようとしていれば、旧帝国と同じ結末を迎えることもなかっただろうに――男は大陸統一帝国という光の部分だけに目が眩み、影の部分から目を逸らし続けた先人たちを罵倒した。

一度やり直す機会を得たはずの自分たちは、また同じ過ちを繰り返してしまったのだ。

「我らは三〇〇年前に知るべきだったのです。支配と統治は似て非なるものなのだと」

そのたった一つの思い違いが、今の帝国を作った。

身体ばかり巨大で、内部に大量の害虫を飼っている木偶のような

国を。

「これは、帝国の本来の栄光を取り戻す最後の機会なのかもしれません」

弱き者たちの生きる国を――力を持たない人間種が肩を寄せ合って生きていた遠き過去。たったそれだけを願って人間たちは国を作った。

大陸に棲む魔獣や幻想の獣たちから身を守るため、隣にいる者と手を携えて生きようと決めた。

知恵を絞り、汗を流し、涙に塗れ、友人の血を啜って、ようやく〈アルマダ帝国〉は完成した。

「皮肉だと思いませぬか、父上。同じ願いで作られた皇国が二〇〇〇年経っても衰えないというのに、その願いの原因となった国の後継は、たった三〇〇年で老い衰えた」

理由は同じことだったのに、違う結末を見ることになった。

それは種族の寿命や思考体系の違いだけが原因ではないだろう。

「父上、最後の機会、無為に捨てることなきように」

頷き、老人は息子を見た。

若い頃はあれほど野望に満ちていた息子が、今では自分よりも君主の器に見えた。

心底惜しい、そう思った。

「――今のお前が皇太子であったなら、余もすぐに帝位を譲ることが出来ただろうに」

「あのまま皇太子であったなら、今の私はありませぬ」

あの日弟に妻となる女を奪われそうになったとき、彼は生まれて初めて自分の血を意識した。

誰かを虐げるのが当然だと考えてしまう帝族たち。それを知り、ふと自分の過去を振り返ってみれば、そこには弟たちと大して変わらぬ行いをしてきた自分がいた。

奪われそうになって初めて、奪われる恐怖を知った。

皇太子の座を降りてからでさえ、幾度も妻に差し向けられる刺客。一度など妻の実家から贈られた菓子に毒を盛られ、妻の身体は今でもその毒に蝕まれたままだ。妻の小さい頃からの好物だからと、義母が心を込めて作った菓子に、毒見などという無粋な真似はしたくないと甘い決断を下した結果だった。

何故、何故と考えるたびに自分の血が憎かった。

皇太子の地位などもう要らないと叫んでも、帝位を望まぬと誓っても、彼の血が平穏を許さない。

「ただ、こうも思うのです」

自分と同じ時代に、あの男が現れたこと。それは自分に齎された幸運なのではないかと。

「だから、可愛い娘を嫁がせるのか」

父の口調は、どこか面白がっている風であった。彼が娘を深く愛していることを、父は知っている。

「そこらの凡夫にくれてやるくらいならば、優れた敵に預ける方が心安らかでいられます。それに私とて父親、娘を寡婦などにしたくはありません。あの男は――」

彼は父の目をじっと見詰め、少し躊躇ったあとに口を開いた。

「私が心の底から戦いたくないと思った、二人目の相手。実力も経

験も負けるつもりはありませぬが、あの男を前にして勝利を確信することができない」

奇しくも、同じ時代、同じ大陸に生きることになった二人の男は、相手を同じように評価していた。

皇国の摂政レクティファールは帝国の元皇太子の存在を知るや、彼とは戦いたくないと近しい者に漏らしていたのである。

それは義父になる相手だからなどの明確な理由のある拒絶ではなかった。ただ、その本能が戦うことを拒否していたという。

「グロリエは随分あの男と戦いたがっているようだが」

「あれは私よりも運に恵まれている。今回の敗北さえ、見方を変えれば幸運でした」

良き相手に負けたと思う。

負けて自暴自棄になるでもなく、あっさりと納得するでもなく、超えたいと思った。それは武人として幸運なことだ。

「弟たちは、あの男を侮っているでしょう」

「ああ、それが虚勢であるか本心なのかは別にして、な」

背凭れに身体を預け、老人は天井を見上げる。最近とみに調子の悪くなった目には、天井の模様が歪んで見えた。

それが自分たちの未来を暗示しているようで、彼はすぐに眼を閉じてしまった。十年前の自分であれば、今の自分を見て惰弱と嘲弄するだろうと思う。

「あれたちにとっては、帝王の椅子が最後の目標に見えているのかもしれんな。本当の地獄は、玉座に座ったときから始まるというに」

あれほど渇望した玉座が、実際座ってみると酷い座り心地だった。この上ない座り心地なのだろうと勝手に思っていた若い自分を、彼は殴りつけてやりたかった。

「まあよい、あれたちの中からお前の後継が出ることを戦神に祈るとしよう。そのための併せ馬として、皇国の若造は中々良さそうだ」

「父上のことです、いつの間にか併せの方を気に入ってしまうのでは？」

息子は父が優秀な敵手を愛する性癖の持ち主であると知っていた。愛するあまりに殺してしまうこともあれば、味方に引き入れようと

あらゆる手段を用いることもある。

父の寵愛する臣下たちの何割かは、そうして手に入れた者たちだ。皇国の摂政がそうならないとは限らない。

「そうだな、あの四人を下したなら、それも良いかもしれん。そうしたら孫だけではなく、娘もくれてやろうか」

老人は冗談交じりに答え、笑った。いっそそれくらいのことをしなくては、この国は近い将来自滅してしまう。

「あのたった一度の戦いで、四人が四人とも煮え湯を飲まされた。それでも侮っているのは、ある種の才能だとは思わんか？」

それが血というものかと老人は内心で嘲笑った。兄弟姉妹が揃って自分の若い頃と良く似ている。

「父上がそう思うのなら、そうなのでしょう」

息子の言葉は父を容認するようで、何処か面白がっている部分もあった。

「お前もそうであったな」

「昔のことです、父上」

男はそう言って、椅子から立ち上がった。伝票を持ち、父に背を向ける。

その背に向けて、父の声が飛んだ。

「皇国から観艦式への招待状が届いておろう。お前はどうする」

皇国から諸外国に対し、皇国・近衛両海軍合同の観艦式への招待状が送り届けられたのは、つい先日のことだった。

保護国と親皇国国家は即座に出席の返答を皇国外務院に送付し、〈アルストロメリア民主連邦〉や〈シェルミア共和国〉なども元首の訪問日程の調整を行っているという。南洋諸島の国々も参加を表明しており、この観艦式は大陸の雄としての皇国の復活を周辺国に印象付ける式典になるはずだ。

当然、帝国にも招待状は届いた。だが、帝国はこれについて特別な対応を行っていない。皇国の招待はあくまでも同等の独立国家としてのそれであり、皇国を独立した国家と認めてない帝国がこれに応えることはありえないのだ。常であればその招待そのものに難癖をつけることもあるが、今回は「無視」という対応をとることになっている。

帝王の一存であった。

「余としては、マティリエをアクィタニアの国王名代として参加させようと思っておるのだが……」

「――あれには、荷が重かろうと思いますが」

男は背を向けたまま、父に答えた。声は平坦で、父の出方を窺っているようだった。

「慣れていない男の下に嫁がせるのも可哀想とは思わぬのか？　イズモ辺りも同じようなことを考えているやもしれんぞ？」

「父上……」

男は振り返り、父を呆れたように見遣る。溜息を吐かないのが不思議な表情だった。

しかし男は、父の瞳の奥に決して濁らぬ光があることに気付いた。自然、身が強張る。

「最近、どら息子どもが新しい遊びを覚えたようでな。危なっかしい遊びらしく、ちと子どもには早いと思うておる」

娘が狙われている――男は父の言葉に意味を正確に理解した。彼に流れる帝国の血が、新たな災厄を呼び込んだのだ。

拳を震わせる息子を見据え、老人は小さな声で吐露した。

「――余はな、誰がこの国を継ごうとどうこう言うつもりはない。どんな手を使おうと、どれだけの犠牲を払おうと、玉座に手が届いたものに帝位を譲ろう。その座を守りきれれば王の器であったということ、守れなければ王の器ではなかったということ、それだけのことよ」

帝位など、血みどろになってまで欲するものではないと、老人は登り切ったその瞬間に知った。

背後には親兄弟の骸。前方には問題だらけの国。横には美しいだけの女ども。

彼はそのときになって自分の求めていたものがどこにあるのか慌てて探し回り、絶望した。

玉座を欲して最初に捨てたものが、彼のもっとも望んでいたものであった。

「どうということもない。たった一人だけでも、自分が求め、自分を求める者がいるだけで総てはこと足りたのだ。少なくとも余は、

そうであった」

「――ええ、良く分かります」

生を実感するには、ほんの一欠片の幸福だけで良かった。もっと多くの幸福がどこかにあるのではないか、そう思ったことが間違いだったと今でも思う。

「余は愚かであった」

老人の言葉には、数十年分の後悔があった。

幾度も国を立て直す機会はあった。二五年前の皇国との戦で大敗を喫したとき、国内の膿を徹底的に出しきっていれば良かった。

あれが、老人の得た最大の好機だったのかもしれない。

しかし、彼はそれを逃した。

以来、彼はそれを後悔し続けている。老人はその言葉を最後にしばし沈黙し、そして再度口を開いたときには後悔の影を微塵も感じさせない口調に戻っていた。

「――マティリエひとりでは不安というお前の気持ちも分かる。故に、グロリエを同行させようと思うておる」

「横槍は入りませんか？」

男は父の言葉に驚きを隠せないようだった。

閑職に追い遣られたとはいえ、グロリエは帝国有数の傑物。敵地に送り込むにも色々根回しが必要だろう。

「息子どもは諸手を上げて賛成したがな。敵の内情をつぶさに観察することも必要だと言っておったが、内心では摂政と刺し違えて欲しいと思っているだろう」

「あれは勇敢ではありますが、短慮ではありませぬ。弟どもの思惑通りに動くことはまずないでしょうに」

「余もそう思うておる。だが、敵を知ることに損はなかろう」

「確かに」

グロリエはあの青年に勝ちたいと思っている。その方策を決めるにあたって、件の人物を知っているのと知らないのとでは雲泥の差があるだろう。

ここで戦とは直接関わりのない場所で顔を合わせておくというのも、そう悪いことではないかもしれない。

「本人は」

「許しがあれば是非にも、だそうだ。あれほど目を輝かせたグロリエは十数年振りだ」

敵地に赴くというのに、それを心から喜ぶことができるというのは才能だろう。

男は「それでは、そのように」と答え、さらに言った。

「もうすぐ列車が出ますが？」

「影がおるよ。余はその次の列車の二等客室じゃ」

老人は会心の笑みを浮かべ、呵呵と笑う。「民たちに紛れて旅行するのは楽しいぞ」という父の言葉を背に、息子は苦笑を浮かべて会計を済ませた。

◇　◇　◇

遺跡戦艦〈天照〉。

その内部には、〈帝〉が執務を行う区画があった。そのためにこの空中戦艦は『天空御所』という別名を持っており、ここに彼の人がいる限りは絶対に沈むことはない難攻不落の要塞として民はもとより、帝室に近しい諸侯から真逆の諸侯まで共通して認識されている。

八洲の帝室がこれまで永きに亘ってこの国を纏めてこられたのは、この世界にとっての異物が大きな役割を果たしているのは疑いようもない事実だ。〈天照〉が定期的に八洲の上を周回し、諸侯をこの上なくわかりやすい形で牽制しているのである。

どれほどの軍事力を諸侯が手に入れようとも、〈天照〉以上の力は世界にさえ幾つも存在しない。同時に世界最強水準の海軍を帝室派が一手に握っていることも、八洲の体制を維持する一因と考えられていた。

だが、どれだけ磐石な体制であろうとも、常に磐石で在り続けているわけではない。

「陛下。このたびの姫さまのお輿入れについて、公議所からこのような申し出が」

第三九代〈帝〉正周帝の股肱の臣と名高い玖条束根（くじょうたばね）は、この日も

〈天照〉で政務を行う正周帝の側にいた。

文机で幾つかの書簡に花押を書き入れる主君に、恭しく封書を差し出す。この執務の間に立ち入ることができるのは、彼とその他数名の侍従だけであった。

正周帝は「ご苦労」と束根を労い、差し出された封書を手にとって中を改める。公議所議長の名で閉じられた書には、数カ月後に迫った帝妹、内親王真子の輿入れに関する提案が書き綴られていた。

「――真子が皇国まで座乗する〈龍泉〉と随伴艦六隻を、そのまま皇国に譲渡する、か」

三代目〈月黄泉〉級軽戦艦の七番艦である〈龍泉〉は、艦齢八〇年の老嬢だった。既に後継型の四代目〈月黄泉〉級が就役して久しく、皇族御召艦として改装された〈龍泉〉、〈龍陽〉以外は全艦退役している。

残った二隻も近いうちに退役することが公議所で協議されており、正周帝もそのつもりでいた。そこに、この提案である。

彼は眉を顰め、束根に視線で意見を許した。

「――臣が思いますに、このたびの姫さまのお輿入れを機に皇国との軍事同盟締結を目指す三笠派と、海軍の戦力を削ぎたいと考える瀬川派の意見が一致したものと」

現公議所議長・三笠玄嶺の三笠家を筆頭とする三笠派は古くからの皇室支持派であったが、ここ十年ほどは〈ウォーリム教国〉の侵攻を警戒して周辺国との軍事同盟を目指すべきという姿勢を取っている。正周帝もそれに近い考えを持っており、この点でいえば今回の提案はそうそう悪いものではない。

〈龍泉〉は退役間近の老艦で、随伴艦の六隻もこれといって重要な艦船ではない。おそらく来年中に退役する予定の艦を数隻含ませてあるのだろう。この国では旧型でも、他国では現役で通用する――それは世界最強の三海軍の一つである八洲海軍と、その他の海軍の技術力の差を如実に表していた。

八洲海軍を仮想的として二〇〇〇年も技術技能を磨き続けてきた皇国海軍も決して弱小ということはないが、それでも艦の性能差はゆうに一世代違う。〈龍泉〉以下六隻も十分に現役艦として働く場を得られるだろう。

正周帝としては、馴染みのある〈龍泉〉が新たな働き場を得られるというのは、政治云々を除いた個人的感情で測ってもそう悪いものではない。非公式に皇国側に打診したところ、そのまま皇国近衛海軍で皇族御召艦として使用するという案が出されたらしい。もともと〈龍泉〉の御召艦としての拵えは上々であった。さらに艦首の八弁桜花紋章を取り外し、二重十字星紋章を取り付ける――本来皇国には皇王御座船・総旗艦以外に艦首に紋章を付ける習慣はない――という提案は、皇国側の八洲に対する最大限の配慮と言えるかもしれない。

ただ、これだけでは瀬川派の方が余程損をしていることになる。皇国と軍事同盟を結ぶことになれば、皇室は皇国の陸軍戦力をあて

にするだろう。八洲の陸上戦力といえば、その大半は各国の諸侯が保有している私設軍を指し、全体から見ればごく僅かな数が海軍の陸戦部隊として皇室の指揮下にある程度。元来〈天照〉という圧倒的武力を背景に海上貿易を牛耳ることでこの国を支配してきた皇室にとって、陸の上の争いは度が過ぎなければ放置して然るべきものだった。争いがあるから物流が活性化するという側面もあるし、迂闊にどちらかに肩入れして恨みを買う必要もない。

求められて調停役を引き受けることは珍しくなかったが、民が認識する皇室とは、基本的に象徴として君臨するだけの存在であり、その軍事力を以てこの国を外敵から守護する一族であったし、これまではそれで十分だった。

諸侯家も程度の差こそあれ皇室を敬っていたし、そもそも〈帝〉と戦おうという意志がなかった。何千年も掛けて浸透した皇室崇拝の念は、それほどまでに人々に浸透していたのだ。

しかし、近年力を付けた瀬川家は、明らかに皇室を廃して自分がその地位に座ろうと考えている。

何故か、答えは簡単だ。今の皇室では今後の戦乱の世界で生き残れないと考えているからだろう。

南北の〈ウォーリム教国〉が八洲やその先に領土的野心を抱いていることは明白で、瀬川は攻められる前に積極的にこちらから打って出るべきという考えを常々口にしている。積極的な攻勢は強力な防御にもなるというのはある種の常識であるが、この国に〈ウォーリム教国〉と正面から戦える国力はない。瀬川もそれは認識しており、開戦劈頭に一撃で相手の主力艦隊を破り、八洲に対する侵攻の意図を挫く必要があると考えていた。

そのまま講和に持ち込めれば良し、ただ、そのためには〈ウォーリム〉以外の敵に背後を脅かされるのは避けたい。

皇国と八洲は決して友好的な歴史を歩んできたわけではない。皇国が八洲に大して領土的野心を持っていなかったということもあるが、ここ数百年両国がこれといった諍いを起こしていなかったのは、単に双方ともそちらに力を注ぐだけの余裕がなかっただけだ。皇国は常に大陸の勢力と戦い続けていたし、八洲も内乱や東からの脅威に対応するだけで精一杯だった。

しかし、時代は移り変わり、八洲は東洋や南洋にも植民地を持つに至り、世界を相手にして貿易をするようになった。世界最強と名高い海軍を擁し、世界の何処へでも一日と掛からず移動できる〈天照〉の存在が八洲をして海洋の守り人たらしめている。そんな中、大陸を統一するような勢力が現れ始めた。いつか世界中の国々が覇権を争うような時代が来る。世界各地に交易路を持つ八洲がそんな結論を抱くようになるまで、それほどの時間は掛からなかった。

「瀬川は何を企んでいるか、お前に分かるか？」

主君の問いに、束根は微かにためらった様子を見せ、しかし小さくもはっきりとした声で答えた。

「――皇国と、通じるつもりかと」

なるほど、それは確かに瀬川が八洲を支配するための方策として悪いものではない。

此度の婚儀に瀬川が積極的に反対意見を述べなかったのも、そういった理由であれば納得できる。正周帝の妹は〈天照〉を操る血筋であり、それを皇国に渡すことで自分たちの手札にしようと考えているのだ。

皇国との軍事同盟に積極的というのも、皇国と通じるにはそちらの方が都合がいいからと考えられる。

特に今の皇国摂政は若く、これまで他国への侵略を是としなかった歴代皇王とは違い、躊躇うことなく帝国への逆侵攻を行った。瀬川としては、このまま国内で勢力を伸ばすよりも他国と通じ、皇室の打倒を図った方が余程八洲統一という目算が立つと考えたのかもしれない。

正周帝にしてみても、皇国の若き摂政を信用している訳ではない。

以前に妹の体に宿った古き神に言った通り、妹を守るには国内に置いておくよりも他国へと嫁がせた方が良いと判断しただけだ。皇国はそれこそ人間から神まで、皇王という君主の下に平等の扱いを受ける。確かに平民、士族、貴族などといった身分階級は存在するが、皇王から見ればそれは彼らの負っている責任の差にすぎない。決して貴族だからと甘い汁を啜ることができるということもなく、平民だからと生き方が限定されるということもない。

あの国は、いっそ分り易いくらいに皇王だけを支配者・統治者と位置付けている。それ以下の国民は等しく皇王の赤子であり、皇王から見た彼らに身分の上下などありはしない。

「あの摂政がそう簡単に瀬川の小倅の思い通りになると思うか」

「なりますまい」

束根の返答は即答と言って良かった。

彼には、それだけの確信がある。

「我が手のものを彼の国に遣りましたが、なるほど中々の才物のようです。国内統治は臣下の意見に耳を傾け、彼らに大仕事を任せる度量もある。そもそも国内に敵国の軍を引き入れた男を宰相として傍らに置くという、この上ない懐の深さを持っています。わずか数ヶ月で荒れていた国を立て直したというのは、誇張などではないかと」

束根の元に非常に興味深い情報が届いたのは、つい先日のことだ。それから数日、ことの真偽を確かめるべく情報を整理したが、どうやらその情報に間違いはないらしい。

「これまで皇王家からの独立を宣言し、ある程度皇王家から離れて独自の行動を取っていた三公爵家ですが、先日、再度の服属を皇王家に申し出、受け入れられたそうです。既に三家の姫が摂政に輿入れすることは各方面に発表され、これで皇国の体制は磐石なものと

なりました」

「そうか、三家が膝を屈するに足るものがあの摂政にあるということだな」

それは、幸運なことだろうか。正周帝はそう考えた。

妹にとって、嫁ぐ相手が凡夫でないというのは幸福なのか、不幸なのか。彼には分からなかった。

「――姫さまの件、このまま進めてもよろしいでしょうか」

束根は正周帝の顔色を窺うように問う。

彼は、この主君があの薄幸の妹をもっとも深く愛していることを知っている。

愛しているが故に、海の向こうの国へと嫁がせようとしていることも。

これまで手に入れた情報を分析し、推測した摂政の人物像を主君に伝えたことはある。

束根の配下の者の中には件の摂政と直に顔を合わせた者もいるが、総じて件の摂政を「訳の分からない男」と評していた。冷静で的確な分析を旨とする彼らにしてみれば、最大限の恐怖を言葉にしたと

判断してもいい。いつ敵になっても可笑しくない、しかし最後まで信頼できる味方でいても可笑しくない、そんな男だと。

「良い、そのまま進めよ」

「――は」

しかし、束根の主君はそんな評価を知っても、妹姫の輿入れを撤回する考えはないようだった。

無理もない。あの男は敵とも味方とも分からないが、己の腕に中に抱え込んだ者に対しては常に真っ当な庇護者であり続けている。正面から相対するには骨の折れる相手だが、玉を預けるならばこれほど頼もしい相手はそういない。

こちらが内親王殿下を使って余計な口を挟まなければ、向こうは向こうなりにもっとも危険が少なく実入りの大きい道を選ぶだろう。それは主君の妹姫が安穏を得ることと同義だ。

ときとしては不干渉こそが相手との繋がりを強くすることもあるか――束根は主君に深々と頭を垂れながら、そう心中で漏らした。

「では、招待のあった観艦式へは」

「お前が真子と共に赴け」

なるほど、顔合わせとしては悪くない。二人だけで顔を合わせて余計な噂を立てられるより、こうした大々的な場で面通しをする方がいいだろう。

妹姫は余り人の多いところに慣れていないが、これも本番に備えた予行と見れば損はない。即位と婚礼が同時に行われるのだ、これまでに例のない大きな式典になることは間違いない。今のうちに立場に則した立ち居振る舞いを覚えてもらうべきだった。

「御意のままに」

束根は再度顔を伏せ、皇国へと向かうにあたっての随伴人員を選び始める。かの摂政は大層な女好きと聞いているから、そちら方面から攻めるというのも悪くないかもしれない。

〈帝〉の腹心は、そんなことを考えながら主君の前を辞した。

◇　◇　◇

人は、間違いを犯す生き物であるという。

ならば人以外は間違いを犯さないのか、否、ここにいる概念兵器

は毎朝のように間違いを犯している。

「ねえ、愚弟」

「何でしょうか、麗しの姉上様」

じりじりと間合いを測る一組の男女の間には、弓弦のように張り詰めた緊張感が漂っている。

女は右手に大剣、左手に投擲用短剣を構え、目の前の男にどうやってそれを叩き付けてやろうかと獰猛な笑みを浮かべて考えている。

男は女の得物を視界に収めつつ、この場から逃走するべく幾つもの逃走経路を想定、演算していた。

「わたしは、ね。確かにレクトからすれば取るに足らない女で、あなたが本気でわたしを求めるなら拒むことはできないでしょう」

「いえいえいえいえ、そんなことしませんよ。いや確かに、ウィリィアさんはきれーでかっこよーくてかわいーい人ですけれども――って危なッ！　いつの間に投げたんですか！」

「無挙動投擲術って、最近ちょっと研究し始めたの」

「うわあい、私ってそんなに恨まれてるんですね、初めて知りました」

ウィリィアの全身から発せられる魔力波動に、後宮の中庭に植えられた樹々が揺れる。遠くで二人の様子を見守る庭師役の乙女騎士たちが、今にも倒れそうな顔色で同僚に支えられていた。ウィリィアとの毎朝の騒動で一番被害を受けているのは、間違いなく彼女たちだ。最近はレクティファールが色々細工を弄して庭を守るようになったが、何故自分がそんなことをしているのだろうと思うことはある。

しかし、乙女騎士たちが精魂傾けて作り上げた庭を壊してしまうのは事実で、レクティファールはあとで城下の人気菓子店の焼き菓子を携えて謝りに行こうと決めた。そのために乙女騎士たちの顔を憶えておこうとじっと視線を向けたのだが、それに気付いたウィリィアがこめかみに青筋を一つ浮かべる。

「あらレクト、姫さま放り出してわたしの同僚に手を出すつもり？」

「え――と、ウィリィアさんもしかして焼きもちと……か……ごめんなさい、ちょっと場を和ませようとした冗談ですから、謝るので〈岩窟龍断ち〉下ろしてください」

がしゃん、と重々しい音を立てて突き付けられた大剣は、ついこの間改良を受けて更に威力が増したという。いずれは〈神殺しの神

剣〉と同格のものを作り上げるというのが、〈岩窟龍断ち〉の制作者たちの野望らしい。レクティファールにとってみれば、あまりにも迷惑な話だが。

「押し倒された挙句、む、胸を揉まれ……更に嫉妬？　自意識過剰も大概にしなさい！」

「分かってますから、姉さん私のことわりと嫌いじゃない――ってあー」

爆音が轟き、〈岩窟龍断ち〉がその凶悪な牙を剥き出す。

空気を切り裂く轟音に、今度こそ庭師役の乙女騎士が卒倒した。近衛最精鋭の彼女らにしてみれば、痴話喧嘩で後宮の庭を破壊するという行為の方が衝撃的なのかもしれない。

「――もう黙りなさい。わたしはあなたのことなんてどうとも……」

「えー、私ウィリィアさんのこと大切な人だって思ってるのに……」

「ッ！」

今度こそ、〈岩窟龍断ち〉が大上段から振り下ろされた。間合いは一瞬で詰められ、その動きはレクティファールを以てしても「速い」と感じられるものだった。

レクティファールは冷静に、これまでのウィリィアとの訓練を思い出しながら半身を反らし、更にウィリィアの左太腿の剣帯に納められている投擲用短剣を一本拝借すると、顔のすぐ横を通過する〈岩窟龍断ち〉の駆動部に素早くそれを突き込んだ。

ウィリィアが驚愕の表情を浮かべていたが、心なしか頬が紅い。

金属同士のぶつかり合う嫌な音が連続し、地面を削った〈岩窟龍断ち〉は火花を散らし、白煙と共に停止した。轟音が止み、中庭に静寂が戻る。

「――――」

二人とも身動きひとつせず、五秒ちょうどの時間が経過した。

「――触った？」

「はい。大変、瑞々しく素晴らしい太腿でありました」

レクティファールは姉の質問に、これ以上ない明確な感想を述べる。

偶然ではあったが、嘘を言ってもどうせすぐにばれてしまう。レクティファールはそんな理由であっさりとウィリィアの言葉を認めた。ついでに、フェリエルから「女性は褒めて伸ばせ」という助言を受けていたので、忠実にそれを実行した。本音でもあったので、特に問題もなく滑らかに言葉にすることができ、レクティファールは満足そうに頷く。

「――レクト」

「はい」

ウィリィアの震える声に、レクティファールは満足気な顔のまま答える。

美人で強くて可愛らしい姉は、彼にとって自慢の姉だった。

「――この、莫迦ぁぁあああああああッ！！」

この、暴力的な面が少しでも落ち着けば、もっと自慢なんだけどなぁ。あ、リリシアたち起きてきた――レクティファールは自分の顔に迫るウィリィアの平手を観察しながら、そんなことを思った。

ぱぁん、という軽快な音と共に、鳥たちが慌てて飛び立つ。今日も星天宮は平和である。

第一と半分の話「後宮での一幕」

とある夜の星天宮。その一角を占める後宮の談話室は戦場になっていた。

戦場とは言え、別に矢弾や魔法が飛び交っているわけではなかった。今は夜だ、摂政が義姉とじゃれあう朝ではない。

ある意味で言えば、この状況は自業自得という言葉以外では表せないだろう。

目の前にはこれまで幾度も干戈を交えた婚約者二人。共にこちらの腕を引っ掴んで離さない。

「――メリエラ殿、今夜はわたしがレクティファール様と閨を共にする日ではないですか？」

「昼間、あれだけくっついて回ってまだ足りないのですか？　レクトの仕事の邪魔をして、更に夜まで共にしようなどと、聡明な第一妃候補とはとても思えません」

嫌な汗はもとより、嫌な震えさえ全身を覆っていた。空気はびりびりと震え、両者の視線の交錯は火花を散らすどころか、質量を持ってぶつかり合っているようにさえ感じられる。いつものこと言っ

てしまえばそれまでだが、ここ最近のこの二人の遣り取りは日に日に危険度を増しているような気がした。

何故だろうと周囲に視線を向ければ、こちらに何とも言い難い視線を向ける数名の女性。

「あの、フェリエル」

「悪いが、手助けはしないぞ。怪我の治療ぐらいはしてやるが」

フェリエルは新聞の夕刊を数紙卓の上に並べ、順に内容を流し読みしている最中だった。先ほどまでは横目でこちらを見ていたのに、レクティファールが声を掛けた瞬間紙面に視線を落としてしまった。

「ファリ――」

「あ、お風呂入ってこよ。パリヴェール、用意して」

ファリエルはレクティファールが助けを求めた途端に自分付きの乙女騎士に入浴の準備を命じ、談話室をあとにする。部屋を出る直前にレクティファールに厳しい視線を向けていたが、果たしてその視線の真意はなんだろうか――レクティファールは余計な思考に余計な、しかしある意味有意義な演算を追加する羽目になった。

「オリガ」

「――ねる。おやすみ」

「お、おやすみ。いい夢を……」

オリガはぼうっとした眼差しでレクティファールを見詰め、すぐに興味を失ったように部屋を出る。オリガ付きの乙女騎士がレクティファールたちに一礼して、慌ててその背を追った。レクティファールには、オリガの瞳の中に苛立ちがあったように思えたが、確信は持てなかった。そのため、確信を得るためにさらに演算を追加する。

「フェリス」

「え……ボク！？」

フェリスといえば、一番最後に後宮入りしたという立場もあり、こういう場ではあまり意見を述べることがない。しかし時折レクティファールにじっと目を向けることがあり、今もそういった視線を彼に送っていた。

「何とか……」

この場を纏めて欲しい、という言葉は間に合わなかった。

フェリスはメリエラとリリシアに同時に睨み付けられ、びくっと飛び上がって一目散に逃げ出す。二人の背後に巨大な白龍と妖精龍が見えたらしい。

「ごめんレクト、でもやっぱりボクには無理ぃいいいッ！」

どたん、と扉をぶち破る勢いで飛び出したフェリスを、彼女付きの乙女騎士がゆっくりと追いかける。レクティファールたちに対する礼も見事な動きで、その仕草から物腰まで何とも大人な騎士である。

「ああ……」

レクティファールは急に静かになった談話室を見渡し、次に扉の横で静かに立つ乙女騎士団の長を見る。

マリカーシェルはレクティファールの視線を受けて微笑みはするが、それ以上言葉を発することはなかった。ただ、黙ってレクティファールを見つめ返すだけである。

がっくりと肩を落としたレクティファール。今もなお睨み合いを

続ける婚約者二人をどうするべきか、彼にしては珍しく真剣に悩む。

日頃の彼といえば、悩むのはその場と直接関係のないことばかりで、いざ現場に立てば即決断を下すような性格になりつつある。宰相と皇府の教育の賜物とでも言おうか、即断即決ができるようになってきたのだ。

ただし、後宮にいるときの彼は、以前と大して変わらない。

場当たり的に悩み、決断を下すことが多い。これに関しては蒼龍公マリア、総大主教ミレイディアから幾度も苦言をもらっている。

もう少ししっかりしろ――両者の言葉は当然異なるが、突き詰めればそういうことだ。

（そう言えば、こういう状況になったときはどうするかで、二人とも似たようなことを言っていたな……）

女のことで悩んだときどうするべきか、これといった正解がない感情の問題をどう解決するか、二人の大人の女性はレクティファールにものすごくためになる助言をしてくれていた。

それ即ち――「異性関係で悩んだら攻めるべし。一当てしてのち、相手の動きを見て即時決断せよ」である。

攻めて相手が本気で引き下がるようなら追わずに留まる。相手がじりじりと後退するなら主導権を維持したまま追う。相手がその場に留まるなら攻め切る。

彼はその助言を思い出し、大きく頷く。そうすると、ここ以外に二人の期待に応える場はないように思えてきた。

「お二人とも」

「何ですかッ！」

「何ッ！」

風が逆巻く勢いで振り返った二人に、レクティファールは自信満々に言った。

「今日はお二人一緒ということでしょうでしょう。ほら、学校の合宿のような感じで。いつもと違った楽しみがあるかもしれませんよ」

その日の夜、神殿と蒼龍宮で同時に二人の女性が転んだという。

◇　◇　◇

レクティファールはつい一時間前に自分の言った言葉を後悔していた。

合宿が楽しいと誰が決めた。世の中には集団生活が苦手な者もいる。集団の中で疎外感を覚え、苦痛として受け取る者もいるのだ。

そう、今の自分のように。

「ああ！　誰!?　誰が葉の四番と五番隠し持ってるの!?　わたしもう順番飛ばし使えないじゃない！」

「ふふふ、まだまだ甘いなメリエラ。こういう勝負は常に先を見据えて戦うものだ。常に手札を用意しておくのが鉄則だぞ。――そういうことで、誰か剣の六を置いてくれないか？　蓄えた手札が全く意味を成していないんだが」

「姉さん、言ってることと行動がまるで逆よ。あ、アタシは置けるからね。はい、花の九」

「――ふ」

「あ、オリガさんが葉の四持ってたんですね。よかったぁ、これで順番飛ばししなくて済みます。――本当はあまり出したくなかったんですけど」

「――やっぱり、リリシアが葉の五持ってたんだね……。しかも、

自分が出せなくなってようやく出すとか……この人もう完全にメリエラ狙いだよ」

女学校というには人数が少ないが、レクティファールの寝室は完全に合宿所になっていた。

暖炉の前に敷かれた毛足の長い絨毯の上に思い思い寝そべり、座り、六人の女性が札遊びに興じている。いずれも髪も束ねることなく流したままで、その着衣は夜着であり、色々薄い。

レクティファールはそんな女性陣を前に、自分の文机で持ち帰った仕事を片付けていた。自分の行動に後悔しながら。

「おかしい、何故こうなっている？　私は二人以外に声を掛けた記憶は……」

「あ、わたしはマリカーシェルに誘われたぞ」

「アタシも」

「――わたしも」

「ボクも」

犯人は一人であった。レクティファールは一瞬息を詰まらせ、次の瞬間には叫んでいた。

「マリカーシェル！　マリカーシェル・ド・リア・マセリアッ！！」

「はい、殿下」

レクティファールの悲鳴にも似た叫びに応えるのは、主君の慌てた声とは正反対の落ち着いた音。マリカーシェルは部屋の片隅に蟠っていた影から滲み出るように現れた。

いつの間にか部屋の片隅に存在していたマリカーシェルに、五人は揃ってびくりと身体を震わせる。いつも表情を変えないオリガですら、怯えたようにマリカーシェルを見詰めていた。今の今まで、気配など少しも感じなかった。

「これはどういった意図で行ったのか、説明してもらえるのでしょうね」

レクティファールは声を震わせながら、自らの腹心の一人に問い掛ける。マリカーシェルの能力には全幅の信頼を置いているし、その決断も信用している。だが、今回ばかりは黙っていられなかった。

されど、レクティファールの忠臣たる女性は微塵も主君の憤りに

恐縮した様子はない。

「殿下は『合宿』をご所望だったと記憶しております。ですので僭越ながら、姫さまたちにお声を」

「ですから……」

「ああ、確かに合宿というには人数が少のうございますね。殿下のご要望とあれば、わたしを始めとして今夜宿舎にいる騎士たちを『全員』、呼び寄せましょう」

「いやいや、それは……」

「ご心配ございません。騎士たちはいずれも殿下の御為に身を捨てる覚悟を持つ者たち、殿下と閨を共にして家から勘当されようとも何の問題もありません」

「私にいきなり他人の人生破壊せよと!?」

「破壊ではございません。皇府閣下より、もしそうなった場合は皇王府が彼女たちの面倒を一生見るという確約を頂いております。彼女たちが望むなら良き相手を紹介して下さるとも」

「ルキーティぃいいいいッ！」

どれだけ叫ぼうとも、ルキーティは現れない。重要な案件であればたとえ深夜でもその姿を見せるだろうが、流石にこんな騒ぎでは出てこない。

「――まあ、それはそれとして」

「横に置いたッ！？　私とその他大勢の人生に関わる問題を脇にどけたッ！？」

「落ち着いてください、殿下」

「正論をありがとう。でも、ちょっと人が信じられなくなりそうです」

「大丈夫です殿下、わたしは最後の瞬間まで殿下にお伴致します」

「ありがとう。でもさっきの……」

「では、ご理解頂けたようなのでわたしはこれで失礼致します。何

かございましたらそちらの晶盤か、鈴を鳴らしてください。それでは皆様、良い夜をお過ごしくださいませ」

主君の言葉を叩き切り、マリカーシェルは瀟洒な一礼と共に扉の向こうに消えた。レクティファールは広げていた書類の上に倒れ込み、姫君たちは揃って呆然としている。

マリカーシェルという女性が一介の乙女騎士とは格の違う存在であるとは薄々感じていたが、こうまでも主君を翻弄できる人物だとは思っていなかった。

良くも悪くも、レクティファールと関わった女性は変化が著しい――六人の姫君は同じ感想を抱いていた。

「――うう……部下が、臣下が……遠い存在に……でも優秀だなぁ、マリカーシェル、今後ともよろしく」

文机に突っ伏して魘されているレクティファールの姿に、姫君たちは揃って溜息を吐いた。

自業自得だと、同時に思った。

◇　◇　◇

「オリガ、もうちょっとそっち詰めてよ」

「無理、寒い」

「れ、れれれレクト、ボクがレクトの上に乗った方が場所広くなるよね！？　ね！？」

「落ち着けフェリス。乗るなら君よりもリリシアの方がいい。軽いから」

「ええ、そうです、わたしの方が軽い――って、フェリエルさん、何故わたしの胸を見てそう仰るのですか！？」

「でも抱き枕なら、アタシか姉さんの方がいいと思わない？　ほら、感触的に」

ぎゅうぎゅうと全周囲から圧迫され、レクティファールは自分の言葉を完全に後悔した。もう二度と言わないと心に決める。

しかし、そう決意したところで現状に変化が現れる筈もなく、彼の広い寝台は何故か彼の周囲だけ人口密度が異常に高い。

右腕は完全に枕がわりにされ、左腕にはふよふよと柔らかく暖かい感触が密着。胴体さえも左右から温かいもので取り囲まれ、もう訳がわからない。

というよりも、レクティファールは完全に意識を別の世界に飛ばしていた。周囲を意識すると、その意識自体が完璧に持っていかれることは間違いない。今は意識を〈皇剣〉の演算に集中するのが最善であった。

「うーん、こんな風に大勢の人と一緒に寝るのって初めて」

「ボクも。騎士学校とか士官学校は寝台まで一緒じゃないからね」

「――寒い、レクトもう少しちゃんと抱いて」

「オリガさん！　レクティファール様に擦り寄らないでください！」

「レクト、すまないがもうちょっと腕を上げてくれないか、これでは挟めない」

「姉さん……ちょっと下品……」

レクティファールは無言のまま、されるがままである。

ここで少しでも余計な行動を見せれば、その瞬間この均衡は崩れる。

しかし、それは今後の生活でも同じだ。

今はまだ、彼女たちは同じ立場でいられる。誰とも情を交わさず、誰とも子を成していない今だからこそ、こんな風に騒がしく過ごしていられる。

彼女たちとの関係が進めば、果たして今夜のような賑やかな夜を過ごせるだろうか。

（無理でしょうねぇ）

努力はしよう。

しかし、確信は持てない。

一年後も、十年後も同じような夜を過ごせるようにするには、どうしたらいいのか。

（変化しないということはありえない。ならば、望む形に変化するしかない）

同じ夜を目指すのではなく、変化しつつも同じような気持ちでいられる夜を目指す。

いつかこの六人の間にも差も現れるだろう、上下関係も明確にな

るはず、それを含めてレクティファールが望むのは、こんな当たり前の騒がしい夜。

高望みだ。不可能に近い。

レクティファールが望めばこの女性たちはそんな夜を演じるだろうが、そんなものに意味などない。

「――あー、前途多難」

レクティファールは思わず呟いた。

それを聞き咎めたらしいオリガが、不思議そうな顔でレクティファールを見上げた。

レクティファールはなんでもないと言うように首を振り、寝台に全身を預ける。

温かい体温に囲まれ、彼はこんな日々が続けば良いと心の底から願った。

叶わない願いだと、知りながら。

夏の夜のこぼれ話

魔導灯の照らす廊下は光に丸く切り取られ、光の届かない暗闇を余計に深くする。

足裏の絨毯の感触はいつもと変わらないのに、何故か今日だけは自分の足を絡め取ろうとしているように感じられる。

くぐもった足音がいつもより早いのは、焦りか、恐怖か。

彼女はこんな日に見回りの順番が回ってきたことを恨み、嘆いた。

「幽霊なんていない幽霊なんていない幽霊なんていない……」

ぶつぶつと呪文のように呟く言葉は、自分への暗示。

彼女が苦手とする数少ないものを避けるための、ある種の呪文でもあった。

彼らは、自らを恐れるものに近寄ってくるという。

自分たちを認識してくれるのではないかと期待し、背後から這い寄るのだ。

そう、こんな風に――

「あ、ウィリィアさん」

「みぎゃあああああああッ！！」

背後から掛けられた声にウィリィアは叫び、思わず太腿部の剣帯に手を伸ばす。

そこに嵌め込まれている魔導珠に触れれば、頼もしい愛剣が現れるはずだった。

「え！？」

ただ、それも使い手自身がある程度落ち着いていることが前提だ。ただ触れるわけではなく、明確な命令を魔導珠に伝えなくてはならないのだから。

このように落ち着きを欠いた状態で触れても、魔導珠は命令に答えてくれない。

彼女はどれだけ待っても現れない愛剣に更なる恐怖心を煽られ、背後の声か遠ざかろうと無意識の内に足を動かした。

しかし、意識の制御を外れた足は普段のようには動かず、何の段差もない場所で躓いてしまう。

「あ」

と、呆然とした悲鳴を残し、彼女は床に向けて倒れ込む。

恐怖の対象の前で転倒するという失態に、彼女は顔を青ざめさせた。

もう駄目かも知れない、そんな考えさえ思い浮かぶ。

だが、その身体は床に叩き付けられる前に、柔らかい感触に抱き留められた。

「ウィリィアさん？」

顔を上げてみれば、そこには薄ぼんやりとした義弟の顔。

呆れたような、訝しむような、そんな表情だった。

「――レクト？」

「ええ、こんな夜更けに何をなさってるのですか？　しかも声を掛けただけで逃げ出そうとするなんて」

義弟の声は、心底義姉の行動を不思議に思っているようであった。

彼女はほっと息を漏らし、しかし、自分の胸を圧迫する感触に気付いて視線を落とす。

「――あ」

彼女の視線を追った義弟が、自分の手のひらの行方に気付いたらしい。

それはもうしっかりと、形の良いそれを掴んでいた。

「事故、事故ですからね」

言い訳をどれだけ並べようとも、この義姉には通じないと知っている。

それでも口にしてしまうのは、ある種の条件反射であろうか。しかもまだ、掴んだままである。

「――レクト」

「はいごめんなさいできるだけもうしません」

ウィリィアの起伏のない声に、胸から腹へと腕を移動させ、レクティファールは早口に謝罪する。

しかし、予想した一撃はなかった。

その代わり、弱々しい声の懇願が彼の耳に届く。

「ごめんなさい、立てない……」

「は？」

義姉は、腰が抜けていた。

◇　◇　◇

どうということもない。市井でもあるような怪談話だ。

夜更けに無人の部屋で物音がする。誰もないはずの部屋から声が聴こえる。誰かにあとを追い掛けられているような気がする。

そんな話はどこにでもあるし、レクティファールも雑談の種として騎士学校で聞いたことがある。場所が場所だけに、騎士学校の怪談はもっと血腥いものだったが。

レクティファールとウィリィアは共に廊下を歩きながら、そんな

怪談話について言葉を交わしていた。

「ほう、ではこの後宮に幽霊が出ると」

「噂よ噂、夜番の間で話題になってるの。みんな怯えちゃって、まったく情けないったら」

「そこまで言うなら、いい加減、服離してくれませんか、伸びます」

「――」

立ち止まる二人。

ウィリィアは右手で魔導灯を握り、左手でしっかりとレクティファールの服の裾を掴んでいた。

それはもう、ぎゅうという音が聞こえそうなほどに。

「――いいじゃない、減るものじゃないし」

「世話係の仕事は増えますがね」

レクティファールの言葉に、ウィリィアは目尻に涙を浮かべる。

「だって……！」

「あーはいはい、私が悪いです。余計な仕事を増やしたのは私です」

レクティファールは手のひらに浮かべた魔光球をくるくると回しながら、誠意の欠片もない謝罪を口にする。

ウィリィアはたっぷりと文句があるという顔をしていたが、レクティファールが歩き出すと慌ててその後を追う。

「だったら、二人とか三人とかで見回りすればいいでしょうに」

「その予定だったんだけど、残りの夜番の子たちは別の仕事頼まれたらしくて……後宮の中にはいるんだけど」

「はあ、なるほど」

夜番の人数を増やした方がいいかもしれないなぁ――レクティファールはそんなことを考えながら廊下を進む。

何故かウィリィアの見回りに同行する羽目になったが、彼には余

計な苦労だという認識はなかった。義姉が助けを求めているなら、それに応えるのは吝かではない。

「それで、次はどこですか」

「南苑、かな。フェリエル様の研究所があるから――」

ウィリィアはレクティファールの声に答え、目的地を口にする。

もっとも、最後まで口にすることはできなかった。

二人の背後に、一つの気配が現れたのだ。

「ん、呼んだか？」

「にゃぎゃあああああッ！？」

空気を震わせる悲鳴。

ウィリィアはとっさにレクティファールの身体に隠れ、背後からの声に対する盾にした。

魔導灯を放り捨て、レクティファールの服を両手で引っ掴んでがたがたと震え出す。

義姉のそんな姿に頭を振り、レクティファールは新たな声の主を呼んだ。

「――フェリエル」

「あー、済まない。驚かせたようだな」

「――え？　え？」

ウィリィアが盾にしたレクティファールの横合い顔を出すと、そこには白衣を引っ掛けたフェリエルが頭を掻きながら立っていた。

ばつの悪そうな表情はしかし、二人の様子を見ると急に苦笑へと変わった。

「ああ、夜の逢引の最中だったのか。これは悪いことをした」

「違いますッ！　断じて！」

「だそうです」

「照れなくても構わないのにな。まあ、そういうことにしておこう」

だから違います、と叫ぶウィリィアを脇に置き、レクティファールはフェリエルの顔に疲労の色があることに気付いた。

「随分お疲れですね。また研究ですか？」

「いや、伯母上の治療のことでな。だいぶ調子は良くなってきているんだが、どうしても意識と肉体の接合が上手くいかない。こちらの声は届いても、向こうが反応を示さないというのは、おそらくそれが原因だろう」

「――なるほど」

フェリエルが伯母の治療のため、定期的に蒼龍宮に通っていることはレクティファールも知っている。

経過は彼にも報告されるが、劇的な改善というものが望めない症状だということぐらいしか理解できない。

「気長に、ということですか」

「ああ、龍族の寿命がこれほどありがたいと思ったことはない。百

年単位の治療計画も立てられるからな」

フェリエルはそう言って笑う。

しかし、ふと何かに気付いたように目を瞬かせ、口を開いた。

「ああそうだ、ついでだからオリガの様子も見てきてくれないか。そろそろ思考の混沌に囚われて現実に帰ってこれなくなっているかもしれない」

「――また、無茶を仰る」

「それくらいは男の甲斐性だろう。一人だと何をするか分からないから、ウィリィアと一緒に行ってきてくれ」

「分かりました――って、私一人だと何をすると？」

フェリエルはにやりと笑い、自信満々に言った。

「ウィリィアにやっているようなことだ」

「――ごめんなさい」

素直に頭を下げるレクティファール。

心当たりがあり過ぎた。

「分かればいい」

ウィリィアが顔を朱に染めているのを視界の端に捉えながら、フェリエルは頷く。

なんだ、また何かやったのかこの男――そう思った。

「それと、今日は妙に空気が騒がしい。大丈夫だとは思うが、気を付けてな」

「え？」

ウィリィアの呆然とした声に答えることなく、フェリエルは手をひらひらと振って去っていく。

「え？」

再度のウィリィアの声に、レクティファールは肩を竦めた。

そろそろ離して欲しかった。

◇　◇　◇

オリガの回収を頼まれたレクティファールとウィリィアは、彼女の生息域と目される特別文庫に向かっていた。

特別文庫は通常の文庫とは別の危険な魔導書を専門に保管している文庫だ。通常の文庫にも危険書専用の保管庫はあるのだが、そこにさえ入れられない本も世の中には存在する。

そこに存在するだけで空間をねじ曲げたり、周囲の時間を狂わせたり、生き物の生態情報を書き換えたり、精神を破壊するなど、中には他の魔導書に影響を及ぼすものも少なくない。

そのような危険な魔導書を保管しているのが特別文庫なのだが、オリガはレクティファールに入庫許可を得た翌日から時折そこで夜を明かしているらしい。読書にのめり込み過ぎてこちらの世界に帰ってこられなくなっているとは、フェリエルの言葉である。

「分かってる？　これは怖いからじゃなくて、あなたの護衛をしているだけだからね！」

「はいはい」

特別文庫への通路は、後宮の庭を抜けるたった一本しかない。もちろん庭の中を抜けることはできるが、ウィリィアが全身全霊で嫌がった。

庭の樹々が風で揺れる様は、確かにそういった雰囲気ではある。

先ほどからレクティファールの手を掴んで離さないのは本人曰く護衛のためということであったが、実際にはレクティファールの背に隠れても背後から襲われたら怖い。前なんてとんでもない。さりとて服を掴んでも掴んでいるのが本当にレクティファールの服かどうか分からなくて怖い。そんな理由ですったもんだした挙句、このようになったのである。

レクティファールとしては義姉の新しい一面を見られて嬉しかったが、そんなことを口に出せば翌朝の運動が激しくなるだけで得がない。最近、余計なことを口に出さないということを覚え始めた彼だった。上手くいっているとは言い難いが。

「でもあれですね、ウィリィアさんも苦手なものがあるんですねぇ」

「それはあるわよ……って、苦手とかそういうんじゃ……！」

「あ、背中に」

「うっきゃああッ！　どこなにだれぇッ!?」

手を握ったまま直立不動の体勢を取るウィリィア。怖くて振り向けないようだ。

レクティファールは義姉の様子に呆れと苦笑が綯い交ぜになった表情を浮かべ、落ち着いた声で言った。

「枯れ葉が」

「――取って」

「はい」

ウィリィアの顔が真っ赤に染まっていることは、顔の表面温度を観測できるレクティファールにはよくわかる。

本人もそれは分かっているのか、顔を伏せたままレクティファールの手が枯葉を取るのを待っている。

「取れましたよ」

レクティファールがくるくると枯葉を回すと、ウィリィアはそれをきっと睨んで叩き落とした。

ついでに手を叩かれたレクティファールは、一言「あ、痛」と漏らし、すぐに義姉の手を引いて歩き出した。

「さっさとオリガ見つけて見回り終わらせましょうね。明日だって仕事ありますし」

「――わ、悪かったとは思ってるのよ？　というか、なんで一緒に……」

「あなたが引っ張ってきたからでしょうが」

「う」

呻くウィリィアとからからと笑うレクティファール。

何とも形容し難い二人組は、ゆるゆると夜の庭を進んでいった。

◇　◇　◇

あと少しで特別文庫の姿が見えるという辺りで、レクティファールはふと近くに見知った気配があることに気付いた。

後宮内ということで、近距離周辺探査機能しか稼働させていなかったため、近くに来るまで分からなかったらしい。

「――ふぅむ」

ウィリィアは気付いているだろうかと横を見れば、きょろきょろと挙動不審気味に周囲を警戒する姿があった。

気付いていない、それはもう完璧に。

レクティファールは仕方なく、ウィリィアに注意を呼びかけようと口を開いた。

「あの……」

その瞬間、二人の進行方向にあった茂みが盛大な音を立てて揺れ始めた。

「ぴッ！」

奇声と共にレクティファールの背に隠れるウィリィア。

レクティファールは遅かったかと天を仰ぎ、茂みに向かって呼びかけた。

「リリシア、どうかしたんですか」

「――え？　レクティファール様ですか？」

茂みからひょっこりと顔を出したのは、白銀狐の毛皮の防寒着で全身を揃えたリリシアだ。

髪に葉や枝をくっつけ、レクティファールとウィリィアを不思議そうに見上げている。

「どうしてこんなところにいらっしゃるのですか？　今日はお仕事で誰の下にも渡らないと聞いていましたのに」

「散歩中です。そちらは？」

「ええ、ちょっと探しものを」

リリシアは茂みから抜け出すと、レクティファールの前で身嗜みを整えた。

これでよし、と呟き、レクティファールを上目遣いで見つめる。

「レクティファール様、今朝わたしの髪に結んであった飾り紐を似合っていると仰ってくださいましたでしょう？」

「ええ」

リリシアの髪に幾つも結んであった飾り紐を褒めた記憶はある。

風に舞う花びらのようだと思い、そのまま口に出した。

「わたし嬉しくて、今日一日それを付けて過ごしたんです。そうしたら、夜になってひとつ足りないことに気づいて……」

「それで、探していたと。護衛の騎士はどうしたんですか？」

「別の方を探してくれています」

その答えに、レクティファールは探知範囲を広げてみる。すると、先ほどまでの探知範囲のすぐ外に四つの反応があった。

「護衛総動員ですか」

「ええ、レクティファール様に褒めていただいたんですって言ったら、皆さんすごく頑張ってくれて」

何とも仕事熱心な騎士たちだ――レクティファールはあとでマリカーシェルに一言礼を伝えておこうと決めた。

「それにしても、こんな夜遅くに探さなくてもいいのでは？」

「駄目です！　こういうときは即断即決が大事だと姉さんが言っていました！」

「――はあ、そうですか」

レクティファールは、ふん、と鼻息荒く力説するリリシアの頭を撫でながら、周囲に目を向ける。

暗視機能を働かせても、そう簡単に見つかるものではない。

「ウィリィアさん、失せ物探しは得意ですか？」

「普通だと思うけど……」

「うーむ、こう、失せ物があっさり見つかる魔法でもないですかね」

「あったら世の中から失せ物なんてなくなるわ」

「それはごもっとも」

頷き、レクティファールは首飾り状に構成した〈皇剣〉を手のひらから地面に向かって垂らした。

ゆらゆらと揺れる〈皇剣〉に、ウィリィアとリリシアの視線が集中する。

「この世界の万物はそれぞれ固有の構成情報を持っている訳で……」

くるくると回転し始める〈皇剣〉。

レクティファールの視界には、その回転に沿って広がる探測波が見えていた。

今朝方見たリリシアの飾り紐。その物質構成情報を呼び出し、該当するものがないか周囲を調べているのだ。

「それを見つけ出せれば、失せ物も見つかるということになります」

この方法では、構成情報が手に入らないものは探せない。

だが逆に言えば、細かい構成情報まで手に入るなら、これまでに見たことがないものでも探せるということになる。

問題があるとすれば、探測波の到達範囲が限られていること、探測波は障害物を透過できないことだろう。

ただ、この程度の樹々であれば探測波はその隙間を抜けられる。

「――む」

意識の端に、反応があった。

距離は五メイテルと近いが――

「高い？」

高さが三メイテル。

レクティファールは反応のあった方向に目を向けた。

少し背の高い、葉の落ちた広葉樹だ。

「あ！」

レクティファールの視線を追いかけたリリシアが嬉しそうな声を上げる。

木の枝に、飾り紐が引っ掛かっていた。

「風に飛ばされたんでしょうね。ちょっと取ってきましょう」

「え、わたしが行ってもいいのに……」

「その丈の短い侍女服で木登りされるのは、見ているこっちが怖くてしょうがない」

主に冤罪で殴られるんじゃないかと。見られてもいいようにそれ専用の鎧下を着けてはいるが、おそらく殴られるだろう。

「――ッ！」

慌てて服の裾を押さえるウィリィア。

何を今更と思いながら、レクティファールはひょいと一回の跳躍で樹の幹に飛び付く。

手を伸ばせば、飾り紐にはあっさり届いた。

「降りますよ、どいててください」

一言注意を喚起し、レクティファールは地面に降りた。

すぐにリリシアが駆け寄ってくる。

「ありがとうございます！」

「いえいえ、どういたしまして」

レクティファールが飾り紐を渡すと、リリシアはそれを大事そうに抱え込む。

「これは記念に取っておきますね」

「――付けなくていいんですか？」

「他にも飾り紐はありますけど、この夜の思い出はこれだけですから」

リリシアの言葉は、レクティファールには何とも面映い。
彼は恥ずかしさを誤魔化すために再びリリシアの頭を撫でた。

「もう遅いです。休んだほうがいいでしょう」

「――はい」

少し残念そうではあったが、「睡眠は美容と健康と成長の糧」と姉に躾けられたリリシアは、自分の胸にぺたぺたと手を当てて頷く。
まだまだ序盤戦、と意気込み、リリシアはレクティファールに頭を下げた。

「おやすみなさいませ、レクティファール様」

「ええ、良い夢を見てください」

「はい」

リリシアは最後にウィリィアにちらりと目を向けると、ぐっと両

手の拳に力を入れて走り去った。

ウィリィアの身体を確認していたように見えたが、レクティファールの錯覚だろう。

「さて、そろそろ行きましょうか」

「――ええ、あまり行きたくないけど」

ウィリィアの本音に、レクティファールは頷いた。

それはもう、しっかりと。

「そうですね、特別文庫の中には世の理にまつろわぬ魂を呼び寄せるものもあるといいますし」

ウィリィアの身体が硬直し、直後。

「――――！」

彼女の声にならない悲鳴が、樹々の間に反響した。

◇　◇　◇

特別文庫の影が見えてくる頃にはもう、ウィリィアに日頃の面影はなかった。

完全にレクティファールの腕にしがみつき、風の音一つにも怯えたように身を縮こませた。

レクティファールとしては、もはや微笑ましさなど抱いていられる状況ではなくなっていた。明日になったら今夜のことを綺麗さっぱり忘れていてくれないかと本気で思っていた。

こんな醜態を見せたとなれば、ウィリィアのレクティファールに対する攻撃はその羞恥心によって苛烈を極めるだろう。物理的衝撃で記憶を飛ばすような攻撃を加えてくるに違いない。

「ウィリィアさん」

「な、なな、なに？」

ああ、今ならこんなにも小動物じみた可愛げのある姿なのに――この姿を見せれば、世の男どもはこぞってウィリィアに愛を囁くに違いないと、レクティファールは確信した。

びくびくと身体を震わせ、涙目で周囲を見回し、全身で腕を掴んで離さない。日頃の戦乙女ぶりは完全に鳴りを潜め、まるで年頃の乙女のようだ。

どうしてここまでそういった類のものが苦手なのかは分からないが、こんな状態で良くこれまで仕事を続けていられたものだ。

「どうして幽霊とか、そういうのが嫌いなんですか？」

「――お父さんが……」

ウィリィアは、小さな声でぼそぼそと理由を話し始めた。

ここまで知られては隠しても無駄だと判断したのだろう。恥ずかしそうではあったが、秘密を共有できる相手ができたことで、少し嬉しそうでもあった。

「昔から寝物語で、怪談とかそういうの話すのが好きで……わたしも最初は面白かったんだけど、段々お父さんの話が……」

アルフォードにとって、ウィリィアは待望の娘だ。可愛くて仕方が無いと言わんばかりに溺愛してきたことは、アルフォード本人から何度も聞かされた。下手な男にくれてやるつもりはない、そのときはお前も手伝えと真剣な顔で詰め寄られたほど、その愛情は天井知らずである。

そんな可愛い娘が喜んでくれるならと、アルフォードは古今東西津々浦々の怪談を調べ上げ、臨場感ある話し方まで習得したのだ。

その結果が、この有様である。

「自分のはらわたを探して歩きまわる死体とか、戦場跡で聞こえる泣き声とか、神殿地下の封印された亡霊とか……」

口に出すたび、ウィリィアの顔色が悪くなっていく。

自分の言葉で、その話を思い出してしまったらしい。

「――れ、レクト、ちゃんと居るわよね？」

「居ますよ、さっきから腕掴んでるじゃないですか」

「でも……」

これ以上どうしようもないのだ。

まさか、特別文庫まで抱えていくわけにもいかないだろう。

しかし恐怖で人格が変化したウィリィアは、さも名案であるかのようにレクティファールに提案する。

「姉さん、あなたは私にどうせよと仰る」

「ほら、抱き上げるとか」

「姉さん、もしその状態で変なもの出てきたら、対処できませんよ」

「あ」

それなりに意識が混乱しているらしいウィリィアを腕にくっつけたまま、レクティファールはようやく見えてきた特別文庫の入り口に目を向ける。

夜の闇の中でも映える紅の髪が揺れていた。

「ファリエル様」

ウィリィアが驚いたように声を上げる。

名を呼ばれたファリエルが振り返り、二人の様子に目を丸くした。

「何、逢引？　だったら北の庭の方がいいと思うけど。ほら、声とか漏れたら恥ずかしいでしょ？」

「何をどう勘違いしているのか説明して貰いたいところですが――」

レクティファールは自分の手を捕らえたままのウィリィアを見る。

こういった話には免疫が少ないこの義姉は、やはりというか口をぱくぱくと開閉して混乱していた。

「あ、あいび……？　こえ、って……なに？」

「何って、ナニじゃないの？」

「え？」

ファリエルの不思議そうな顔と、呆けたままのウィリィアの顔。

なんだろうか、この状況――レクティファールはとりあえず、混乱しているウィリィアを落ち着けようと決めた。

「はいはいはい、姉さん落ち着きましょうね。ほら大きく深呼吸」

レクティファールの言うがままに深呼吸するウィリィア。

いつもならこのくらいの会話でどうこうなる年齢でもないし、気

にするような性格でもないのだが、今夜の彼女は若干幼児退行している。

恐怖で思考が回らないということもあるだろうが、今後の人生が心配になるほどの状態である。

「あれ、ウィリィアどしたの？」

ウィリィアの様子が変だと気付いたファリエルも首を傾げ、レクティファールに問う。

レクティファールはどうやって答えたものか少し悩み、一言呟いた。

「誰にでも、得手不得手はあるのです」

事実ではあるが、やはりファリエルには理解できなかった。

◇　◇　◇

「なるほど、ウィリィア怖い話駄目だったんだ」

「う、申し訳ありません」

「いや、いいのいいの、人は誰しも苦手なものがあるんだから」

ぱたぱたと手を振って笑うファリエル。

ウィリィアは恐縮しきりだ。

「それで、ファリエルは何故ここに？　オリガに用事ですか？」

「当たり。オリガが戻ってこないって護衛の騎士が困ってたからね。アタシが呼んでくるって」

「はあ、それでまた、何でここにいらっしゃるので？」

ここは特別文庫の玄関だ。

眼の前には特殊合金鋼の扉が重々しい存在感を発して三人を威嚇している。

「入れないの」

「は？」

「だから、入れないの」

見てて、と言い、ファリエルは扉に触れようと手を伸ばした。

ゆっくりと扉に近付いていくファリエルの手は、しかし途中で何かにぶつかったようにそれ以上進めなくなる。

「壁、っていうか、空間断層ね。光学的には何もないように見えるけど、魔力分析層を視界に被せると空間が捻れてる」

「確かに」

魔力分析機能を付与したレクティファールの眼には、扉の前の空間が波立っているように見えた。

「中の魔導書のせいですか？」

「オリガが邪魔されるのを嫌って仕掛けたって可能性はあるけど、あの子だってそんな無茶はしないでしょ」

「でしょうね」

オリガは何処か浮世離れしたところがあるが、一応世間一般の常識を弁えている。他人の迷惑になるようなことを望んで行うような種類の娘ではない。

「たぶん、オリガの魔力に触発された魔導書があったんでしょうね。あの子が入ってからこうなったのなら、あの子が気付かないのも理解できるし」

特別文庫は幾重もの魔力遮断壁で区切られている。ここから中の様子が分からないように、中からも外の様子は分からない。

「内側からならあっさり通れそうなもんだし、放っておいても害はないと思うけど」

「フェリエルにオリガを連れてくるように頼まれてますからね、私がちょっと行って来ますよ」

空間断層程度ならどうということもない。それ専用の防護壁ならば多少は手こずるだろうが、これなら周囲の空間を正常な形に戻すだけで十分だ。

「じゃあ、アタシも……」

そう言ってレクティファールのあとに続こうとしたファリエルだが、その懐から耳障りな呼び出し音が響いた。

早く手に取れと喧しい通信機を取り出し、ファリエルはその画面を睨み付ける。

そしてそこに表示された一文を読むと、通信機を懐に仕舞って溜息を吐いた。

「――ごめん、陸軍病院で急患。アタシの担当患者だから、行ってくる」

「わかりました。皇城の車を使ってください」

「ん、ありがと」

ファリエルは再度「ごめん」と謝ると、二人に背を向けて走り去った。

立場が立場なので個人の担当をすることがないフェリエルとは違い、ファリエルはまだ特定の患者を受け持っている。本人の希望もあり、後宮から軍病院に通っているのだ。

「大変ですね、あとで陣中見舞いでも届けましょうか」

「――じゃあ、オリガ様をお連れしたら、こちらで手配するわ」

「お願いします」

こういうものはその道に詳しい人物に任せるのが一番早く、確実だ。レクティファールも一々口を出したりしない。

彼は無言のまま手のひらで空間断層に触れると、それを一瞬で正常な状態へと修復した。周囲の空間と同じ状態に戻すだけなら、それほど難しいことはないのだ。

「では、本の虫を迎えに行きましょうか」

「ええ、なんか、すごく寄り道した気がするけど……」

「確かに。――あ、でも気を付けてくださいね」

「何が？」

「空間断層ができていたということは、他の魔導書も稼動している

可能性があります」

「それが？」

ウィリィアは首を傾げ、しかし何かに思い至ったらしく、すぐに血の気を失った。

「ま、まさか……」

「ええ、亡霊やら幽霊やらを呼び出す魔導書も保管されていますし、もしかしたら……」

レクティファールが扉を開けば、そこは真っ暗な廊下。

灯りを照らしてみても、奥が見えない。

「――――」

「ここで待ってますか？」

「～～～ッ！！」

全力で首を振るウィリィア。

ここで放置されたら本気で泣き叫ぶ自信があった。

「では、行きましょう」

「腕、腕貸して！」

「はいはい、でもあまりしがみつかれると歩きにくいんですが――って聞いてないし」

もう半ばレクティファールに身体を預けているような体勢で、ウィリィアは歩を進める。

のろのろとした鈍速で、二人は特別文庫の奥へと進んでいくのだった。

◇　◇　◇

最終的にこうなるのではないかとは、特別文庫の話を聞いたときから予想していた。

「まだ！？　まだ着かないの！？」

「まだですねー。ウィリィアさんが背中にへばりついているせいで移動速度半分以下ですし」

「だって！」

「分かってますよ。でも、ウィリィアさんがここで待っていてくれるなら、単独でちょっと行ってオリガ回収してきますけど……」

「絶対無理！　あなたが帰ってくる頃には気絶してるか、精神的重圧に負けて死んでる自信があるッ！」

背中に張り付いたウィリィアが叫ぶたび、レクティファールは溜息を吐きそうになる。既に義姉の『怖がり』は彼の理解の範疇を超えていたのだ。

ただ歩いているだけなのに突然奇声を上げて抱き付く、光源によって影が揺れるだけで悲鳴を上げて抱き付く、魔導書によって発生した風音で声にならない悲鳴を上げて抱き付く。できるだけ周囲の状況を視界に入れないようにとレクティファールの背中に顔を押し付けたウィリィアだが、視界が塞がれたことで敏感になった聴覚が更なる恐怖を煽っているらしい。

無音が怖いと言い、レクティファールとの会話を常に続けて既に

一〇分。地下へ地下へと降りていく構造の特別文庫を五階層ほど下り、ようやく目的地が見え始める。

全二〇階層の中で言えばまだ上層に近いこの場所が、オリガの立ち入ることができる最下層であった。

「しかし、オリガも物好きというか何というか」

最低限の灯りしかない廊下を進んでいけば、ここが地獄へ続く道なのではないかと錯覚してしまう。そんな場所で禁書指定の魔導書を読み耽るというのは、おそらく人間種や混血種の神経では耐えられないだろう。

龍族に危害を与えられるような魔導書もここには保管されているが、オリガが入れる区画にはそういったものはない。ただ、最下層には〈皇剣〉を使用して封印された魔導書があり、それならば龍族の精神を完全に破壊できる。過去に皇妃を暗殺するために使用された曰くつきの代物で、皇王が直接封印したらしい。

「まあ、私も何度か最下層まで行ってきましたが……」

あれはすごい光景であったとレクティファールは言う。

魔導書によって発生した空間の歪みが世界の壁を透過させ、まるで別世界の生き物を何体もこちらの世界に呼び出したかのような不思議な光景が広がっていた。

必要以上に強い封印を掛けると魔導書が変質したり、防衛機能を作動させることもあるので、この特別文庫ではその機能を著しく制限するという封印しか施されていない。そのため、特別文庫は乙女騎士たちの間でも有名な怪奇現象多発地帯となっており、ある程度の力を持った存在しか立ち入ることはできないのだ。

ウィリィアも、レクティファールが一緒でなければ入ることはできなかったであろう。龍人族は対龍族に特化している種族だが、その他の存在に対してはそれほど大きな力を持っているわけではないからだ。

「まあ、そういうことなので、くれぐれも中に入ろうなんて――」

「思うわけないでしょう――って、何か天井にいるぅッ！？」

巨大な蛾のような虫が、天井に張り付いている。

羽を広げた大きさは、ウィリィアが両手を広げたものと同じくらいだ。

「ああ、魔界の虫ですね。こうして姿は見えますが、こちらの世界にいるわけではないので、心配はないですよ」

「でも……」

「ほら、あっちには屍食鬼が」

「あ、あれは平気」

廊下をどろどろに溶けた身体を揺らして歩く魔界の生き物を前に、ウィリィアはほっとしたような顔でそれを見送る。

年頃の娘としてそれはどうなんだろうと思ったが、レクティファールは口を噤んだ。

「じゃあ、あっちの幽鬼なんかは……」

「ぎゃあああああッ！？」

レクティファールが別の方向を指させば、そこには人の形をした発光体が一つ二つ。ふわふわとレクティファールたちの方に近付いてくるが、ウィリィアは身体を強直させたまま逃げることも目を逸らすこともできなくなっていた。

仕方なく、レクティファールは〈皇剣〉を使って幽鬼の姿を消し去ることにした。二人の身体をすり抜けようとした直前で、その姿は溶けるように消え去る。

「姉さん、もしかして姉さんの怖いものの基準って」

いつの間にか腕の中にいたウィリィアに、レクティファールはそう問い掛ける。

レクティファールの身体をしっかりと抱き締めていたウィリィアはその力を抜き、恥ずかしそうに答えた。

「――斬れるか、斬れないか」

「うーん、実にウィリィアさんらしい」

それもきっと、父親の教育の賜物なんだろうなと思いながら、レクティファールは再び義姉を背に貼り付けて歩き始めた。

◇　◇　◇

オリガの部屋――と呼ばれる小部屋――に辿り着くと、そこには何とも言い難い光景が広がっていた。

「――――」

床に突っ伏して微動だにしないオリガと、その周囲をふわふわと漂う黒い霧やら何やらの異界の生き物たち。

ウィリィアは部屋に入った瞬間に意識を飛ばし、レクティファールはそんな義姉を部屋の片隅にある簡易寝台に寝かせてからオリガの傍らに近寄った。

オリガの身体に纏わりついていた黒い霧が、レクティファールから逃げるように引いていく。

「精霊界の気化生物？　半実体化してるとはこれ如何に」

もしかしたら、オリガの発している龍族の波動に反応した魔導書があるのかもしれない。

レクティファールは戻ったら薔薇乙女騎士団の中から調査隊を派遣しようと決め、オリガの身体に触れた。

「――外傷、内傷、精神傷なし」

一瞬でオリガの身体を走査すると、レクティファールは続いてその身体を抱き起こした。

小さな身体はその大きさに見合った重さで、レクティファールにとってはないも同じだ。

「オリガ、起きてますか」

「――ん」

ゆっくりと目を開けるオリガ。

何度か瞬きを繰り返し、目の前にいるのがレクティファールだと気付くと、少しだけ目を見開いた。

「何故……？」

「フェリエルに頼まれたんですよ、オリガが戻ってこないって」

「――お腹すいた」

その一言で、レクティファールは総ての状況を察した。

「ああ、読書に夢中になっていたから気にならなかったけど、ふと空腹に気付いたら耐えられなくなったと」

「ん」

オリガはぐっと唇を差し出し、ぱかりと開ける。

餌を寄越せということだろう。

「――ふむ、何かあったかな」

レクティファールは時間の流れが緩慢な亜空間に保管してある保存食の一覧を脳裏に描き、その中からオリガの好みに合うものを抜き出す。

あとは虚空に手のひらを差し出せば、そこにぽとりと固形保存食が落ちてきた。菓子のように一つ一つ包装されており、それを見たオリガの眼の色が変わる。

「陸海軍の保存食。結構色々ありますよね」

レクティファールはその中から乾燥柑橘の練り込まれた一つを選び、包装を破いてオリガの口に入れる。

はも、とレクティファールの指ごと食われた。

「――痛くはないですが、舐めないでください」

「んー」

保存食を咀嚼し、飲み込むオリガ。

しかし、レクティファールの指は解放されない。

「――あの」

「んー？」

指先をちろちろと啄かれ、指の腹を包み込むように舐められる。時折指全体を吸われ、上下に舐め回された。

指を舐めることに没頭し始めたオリガの眼がとろりと惚けると、レクティファールは無言で指を引き抜いた。

何故だかは分からないが、これ以上は危険だと彼の中の何かが警告していたのだ。

「誰に教わったんですか」

「母、舌使いは女の嗜み、だって」

「はぁ……」

脳裏のアナスターシャが得意気な顔で胸を張り、レクティファールに向かってぐっと親指を立てた。

無性に腹が立った。

黙りこくったレクティファールの何を勘違いしたのか、オリガがその頬に手を触れてくる。

「じゃあ、今度は、口で試す？」

「それはまた別の機会に」

きょとんと首を傾げたオリガの問いに、レクティファールは大きく肩を落として答えるのだった。

◇　◇　◇

ウィリィアが目を覚ますと、そこは薄暗い石造りの小部屋だった。

何故ここに居るのだろうと考え、そして自分が特別文庫にあるオ

リガの部屋で気絶したことを思い出した。

「オリガ様！？」

慌てて飛び起きてみれば、彼女の寝ている簡易寝台とは反対の壁際に置いてある革椅子の上で、一組の男女がこちらを見て少し驚いた顔をしていた。

革椅子に座ったレクティファールと、その膝の上に横座りになったオリガ。オリガの口にはウィリィアにも馴染みのある軍の固形保存食が加えられており、それがぴくぴくと上下に動いていた。

「おはようございます」

レクティファールがそうウィリィアに声を掛ければ、オリガは無言で食事を再開する。栗鼠のようにこりこりと固形保存食を齧り、なくなればレクティファールにおかわりを所望する。ウィリィアが呆然とその様子を見守っている間に、オリガは都合四本の固形保存食を平らげた。

そのうち一回は、固形保存食を摘んでいるレクティファールの指ごと捕食していたが。

「身体の方は大丈夫ですか」

「ええ、大丈夫……オリガ様は？」

「空腹だったようで――」

「ん」

と、食べ終えたオリガが口を開ける。

レクティファールは新しい固形保存食の包装を破くと、それをオリガの口の上まで運んだ。

「はいはい、次は干し葡萄ですよ」

「んー」

かぷりと、レクティファールの指が先ほどまでよりも深く咥え込まれる。

「――オリガ」

「――――」

オリガは干し葡萄の入った固形保存食を咀嚼、嚥下すると、レクティファールの指を舐め始める。

もはや何度目か分からない。レクティファールはオリガが満足するまで放っておこうと決め、ウィリィアに目を向けた。

「――？」

しかし、ウィリィアの視線はレクティファールに向けられていない。彼の指、正確にはそれを堪能しているオリガに向けられていた。

「ん」

よく見てみれば、オリガもウィリィアに目を向けているのが分かる。

レクティファールの指を舐る様を見せ付けているような、どこか勝ち誇っているような眼差し。

頬を染め、荒く鼻で呼吸をし、じれったそうに身体を揺する。

ウィリィアはそんなオリガの様子に呆然としたまま、視線を外すことができないでいた。

「ウィリィアさん？」

そうレクティファールに呼ばれても反応はない。何が起きたのか理解できないレクティファールは、そのまま首を傾げるしかなかった。

◇　◇　◇

ウィリィアにしてみれば、オリガの挑戦的な視線はそれこそ理解し難いものだった。

何故自分がそんな目で見られなくてはならないのか。そう思い、憤慨した。

ただ、オリガを羨ましいと思う自分がいることには、ほんの少しだけ気付いていた。

そしてその思考こそが彼女にとって意味不明であり、理解不能の最たるもので、思考の揺らぎとしてレクティファールの声を遮っている。

「――――」

淫蕩――オリガの表情を見て、そんな言葉を想起したのは失敗だ

った。

目の前の二人は近いうちに夫婦になるのだ。婚前交渉は不可だが、言葉に代わる繋がり方としてある程度肌を触れ合わせることは許されている。

それだけだ。別に彼女がどうこう言うべき問題ではない。

「――ふ」

「～～ッ！」

嘲笑。

そう思ってしまうのは、自分の目が曇っているからだ。オリガにそんな目を向けられる理由を、自分は持ち合わせていないのだから。

ウィリィアは震える肩を抑え、寝台の端に座った。

レクティファールがこちらに目を向けたが、無視した。絡み合ったオリガの視線から、逃げるつもりはない。理由は分からないが、どうしても逃げることができなかった。

含んだ指を更に奥まで飲み込み、手首をしっかりと掴む。オリガはその様子がウィリィアによく見えるように、少しだけ身体の位置を変えた。

「オリガ」

レクティファールがオリガを窘める。

ウィリィアが起きたのだから、そろそろ地上に戻ろうということなのだろう。

だが、オリガはそれを無視した。レクティファールの眉がぴくりと跳ね上がり、やがて一つ溜息を吐いた。

「仕方がない」

その一言で、場の支配者が入れ替わった。

「んッ！？」

まずオリガの表情が変化した。

驚き、困惑、そして羞恥。

先ほどまでの余裕は消え失せ、ウィリィアなど目に入っていないかのように必死にレクティファールの腕を掴んだ。

苦しそうに顔を歪め、しかしレクティファールの指は離さない。

半ば意固地になって口を閉じているが、その口が、頬が内側から蠢いている。レクティファールの指がオリガの口腔内を暴れ回っているのだ。

正確には暴れるというよりも、口腔内の神経が集中している箇所を刺激して回っていると言った方が正しい。人の口腔内にはそういった刺激に過敏な箇所がいくつか存在し、レクティファールはそれをよく知っていた。

神経の位置は契約時に走査し尽くしてあるし、指先にからちょっとした刺激を与える波を出せばその効果は跳ね上がる。本来は整体などに使用される技術だが、レクティファールにしてみればそれくらいの応用を利かせることは難しくない。

「んー！　んー！」

オリガが涙目になってレクティファールを見上げる。

レクティファールはそんなオリガを見下ろし、「離しなさい」と冷たく言うばかりだ。

多少の我侭は受け入れるが、他人の仕事に影響を与えることまでは許容しない。ここで時間を取られては、ウィリィアはいつまで経っても仕事に戻れないのである。そして、レクティファールにもまだやるべきことが残っている。

「ん！」

オリガは徹底抗戦を決めたらしく、意地でも指を離さないとがっしりレクティファールの腕を絡めとる。

しかし、それが彼女の最後の抵抗であった。

「まあ、今度街にでも行って甘いものでも食べるということで――すみません」

言葉と同時に、オリガは大きく目を見開いて身体を痙攣させた。

そのままくたりと全身を弛緩させ、レクティファールはその身体を支える。

「レクト？　オリガ様は」

「ちょっと強めの刺激を神経に送り込んだだけです。健康に害のない範囲ですし、朝には目を覚ますでしょう」

「でも……」

大きく胸を上下させるオリガの姿は、ウィリィアにはまるで情事のあとを想像させる。

しかし、レクティファールが無言でオリガを抱えて歩き始めると、ウィリィアは仕方なくそのあとに続いた。

部屋の灯りを消し、扉に鍵を掛けると、ウィリィアはレクティファールの背にくっついて歩き始める。

いつの間にか恐怖はなくなっていた。その代わりに、焦燥があった。

◇　◇　◇

ウィリィアの悲鳴が量産される中で魑魅魍魎の跋扈する特別文庫から脱出すると、次はオリガの部屋に向かうことになった。

その間ウィリィアは周囲を警戒しつつも、同時にレクティファールとその腕の中にいるオリガに目を向けてはそれを逸らすという作業を繰返した。

レクティファールはそんなウィリィアの様子には気付かず、真っ直ぐにオリガの部屋に向かう。

部屋の前の廊下では、オリガ付きの侍女騎士が主人の帰還を待っていた。

「殿下、申し訳ありませんでした」

「いいえ、構いませんよ。妻の面倒をみるのは夫の務めです」

恐縮する侍女騎士に扉を開けてもらい、レクティファールはそのまま寝室へと足を踏み入れる。

入り慣れた部屋といえばその通りだが、今日は荷物を届けることだけが仕事だ。オリガの小さな身体を寝台に横たえると、レクティファールはその額にかかった髪を払い、小さく微笑んだ。

「あとはよろしくお願いします」

「はッ」

侍女騎士が敬礼すると、レクティファールはそれに答えて部屋を出た。

続々と侍女騎士たちがオリガの部屋に入っていく様を確認し、彼は部屋の片隅で立ち尽くしていたウィリィアに向き直る。

「次の見回りは、どこですか？」

「え？　でも、もう……」

時計を見れば、日付も変わっていた。

レクティファールは睡眠を取らなくても平気だが、仕事が遅れることは問題だ。ウィリィアはあとは自分一人で、と言おうとしたが――

「どうにも、先ほどから妙な波動を感知してるんですよね。これは、冥界の波動に似ている……？」

「め、冥界ッ！？」

冥界といえば、ウィリィアたちの認識では死後の世界だ。

総ての魂はそこで精神情報を初期化され、再び残りの四世界に送り込まれて新たな生命となる。

その際に情報が冥界まで届かず、こちらの世界に残留してしまうことが極稀に発生する。

それらの残留情報の目撃例が人々の間に伝わり、怪奇現象や怪談として認識されることがあった。

「そういうことなので、私も同行します」

「お、お願い……」

ウィリィアは恥も外聞もかなぐり捨て、レクティファールの腕を引っ掴んだ。

これを離したら死ぬ、そう自分に言い聞かせ、彼女は再び夜の後宮を巡り始めるのだった。

◇　◇　◇

後宮の中を二人で手を繋いで歩けば、極稀にすれ違う乙女騎士は妙に納得したような表情でそれを見送るばかりであった。

その中にはウィリィアの上官や同じ部隊の同僚も含まれており、彼女らはウィリィアに向けてぐっと拳を握って激励した。

「何か勘違いされてる気がするんだけど」

そうウィリィアが思うのも無理はないが、彼女にも問題はある。

そうやって彼女を激励していく同僚のうち、少し時間の取れる者を見付けて一緒に見回りをすれば、それだけでこの勘違いは収まる。

真夜中の後宮をウィリィアとレクティファールが寄り添って歩いているからこそ、乙女騎士たちは妙な勘違いをするのだ。

「それで、どこに向かっているの？」

その手を握ったまま、ウィリィアは隣を歩くレクティファールを見上げる。

もはや手を握ることに恥ずかしさはない。慣れたのか、頭の回路が一つ短絡したのか、その両方か。

「人工湖の方です」

後宮には地下から水を汲み上げている人工湖がいくつもあった。

それは鳥を飼育するためのものであったり、観賞・食用の魚を飼うためのものであったり、皇妃たちが水遊びをするためのものだ。

このときレクティファールが指した湖とは、用途としては三つ目のものになる。

湖の中心に四阿があり、夏場は涼しい空気の中で食事を摂ることもできた。

「どうやら反応はそちらの方から出ているようですし……」

レクティファールはそう言ったものの、現実としてはそれほど大

きな問題だとは認識していなかった。

彼が観測した限りでは、後宮やその周辺に漂っている冥界の力はこちらの世界に重大な影響を与えるほどのものではない。

この世界――特に皇国では、四つの季節ごとにそれぞれ四界の力を強く感じることができた。春であれば冥界の、夏であれば精霊界の、秋であれば魔界の、冬であれば天界の、それぞれの力が強くなる。

しかし、今は白の季節であり、本来であるなら天界の力がもっとも強く発現されているはずだった。

「何らかの要因でこの周辺だけ冥界の力が強くなっているということなんでしょうけど……」

おそらく一時的で、軽微な異常だろう。周囲の環境にまで影響を与えるならば近衛軍が黙っているはずもないし、もしかしたら定期的に起こることなのかもしれない。

レクティファールは〈皇剣〉の記録を漁ってみようと並列思考の幾つかを記録領域に振り分けた。

そのまま二人は無言で歩き続け、やがて月明かりを反射する池が見え始めた頃、ウィリィアがレクティファールの腕を引いた。

「誰かいる」

言われるまでもなく、レクティファールも気付いていた。

湖の上に張り出した四阿の中に、人影がある。影からして女性、それほど身長は高くない。

ウィリィアの同僚が異常に気付いたのかと思ったが、どうやら違うらしい。

「あれは……」

レクティファールがぽつりと漏らす。

その声に、人影はレクティファールたちの存在に気付いたのか、こちらを振り向いた。

「レクト？」

紅紫の髪が、月光に輝いた。

フェリス、とレクティファールがその名を呼ぶと、彼女は驚いたように目を見開き、慌てて身体を縮こませた。

夜着のまま出てきてしまったらしく、薄い布地に包まれたその身体の陰影が月の光で浮かび上がっていた。

「ごめん、ちょっと恥ずかしい」

フェリスが言うと、レクティファールはすぐにウィリィアに自分の上衣を手渡した。その意図を明敏に察したウィリィアも、すぐにそれを持ってフェリスに駆け寄り、その細い肩にレクティファールと自分の匂いのする上衣を掛ける。

フェリスがその小さな鼻を動かし、眉を顰めたことに、レクティファールに向けて手を振っていたウィリィアは気付かなかった。

「今夜は色々な人に会いますね」

レクティファールがそう呟きながら四阿に入ってくると、フェリスは少し不機嫌そうに彼を見た。

「色々？　ウィリィアさんの他にも誰かいたの？」

「誰かというか――フェリス、君は何か勘違いを……」

「いいんだよ、レクトが誰と何をしても。ボクはボクで勝手にやるから」

そう口を尖らせながら、フェリスはウィリィアに感情のない視線を向ける。

今日何度目かの皇妃候補からの非好意的な視線に、ウィリィアは顔を伏せるしかなかった。

皆そろって勘違いをしている、そう心の中で言い訳した。

「ボクには何も言わなくてもいいけど、メリエラには一言くらい言っておいた方がいいよ。昔から知ってる者同士が一度すれ違うと、中々元に戻らないから」

フェリスにしては珍しい、低い声だった。

無理やり感情を押さえ込んでいるような、不気味な声音。その声が自分に向けられていると、ウィリィアは本能的に感じ取っていた。

しかし彼女は世の不条理に対する怒りと同時に、後ろめたさも感じていた。何故後ろめたさなど感じたのか、本人にもよく分からなかった。

「フェリスの言っているようなことはありませんでしたが、メリエラにはウィリィアを少し借りたと伝えておきましょう」

「それでいいと思うよ。――ボクはそういう秘密が嫌いだけど、メ

リエラはたぶん、もっと嫌いだから」

フェリスは無色透明な眼差しでレクティファールを見詰め、しかしその身体を包んでいるのが彼の上衣だと思い出し、それを掛け直した。

「この服、貰ってもいいかな」

「構いませんが……」

皇太子用に誂えられた白い上衣は、レクティファール以外の人物が着用することはできない。着用できるにしても、それは極々私的な時間に限られるだろう。

フェリスの提案の意味を計りかねたレクティファールの返答は、微妙な響きを伴っていた。

「大丈夫、後宮の中でしか着ないから」

「――それなら」

レクティファールはこの数日後、フェリスの願いを聞き届けたことを後悔する。

彼女が後宮をレクティファールの上衣を着て歩き回れば、当然他の者たちにも知られてしまう。むしろフェリスはそれを狙ったのだが、レクティファールには知る由もない。

メリエラとリリシア以下三名の姫君たちに詰め寄られ、レクティファールは結局彼女たちに一着ずつ上衣を差し出すことになる。

「それにしても、フェリスは何故ここに」

レクティファールが訊けば、フェリスは幾分か表情を和らげて湖を示した。

「何故かよく分からないけど、呼ばれた気がして……」

「呼ばれた？」

「うん、なんていうのかな、声とか、精神波とかじゃない、もっと深いところに直接語りかけられたような――」

フェリスがそう答えると同時に、空気が震えた。

轟、という空気を震わせる音にならない幻の音を引き摺って、四阿の下を大きな影が通過したのだ。

三人は驚き、四阿の端から湖面を遠望した。

「――何だ」

視線の先で泳ぎ回る影を見て、レクティファールがそう呟いたのも無理からぬことだった。

この湖にはあれほどの大きさの生き物は居ない。せいぜいが大人の身長程度の魚がいるくらいである。

しかもあの影は、畔にぶつかるとそのまま地面の中へと潜り込んでしまうのだ。まるでこちらの世界の理に縛られていないような、不思議な光景だった。

「もしかして、特別文庫と同じ……」

ウィリィアの言葉に、レクティファールは半ば同意した。

あれはこちらの世界の生き物ではない。フェリスの感覚を信じるならば、冥界の生物のはずだ。

「何故ここに……」

あれだけ派手に泳いでも、こちらの世界には一つの影響もない。

湖面には小波一つ立たず、眼前を通過しても風一つ感じない。

ただ、その巨体が動くたびに空気中の魔力が攪拌され、風のように感じられた。

「――そういえば、お祖母様に聞いたことがある」

フェリスは影を見詰めたまま、独り言のように続けた。

「後宮の湖の一つには、空から落ちて来た石が安置されていて、それはこの世界のどんな蒼珠石よりも高い純度を持っている。蒼の季節にはその石に惹かれた冥界の生き物がその姿を見せるって」

「ですが、今は白の季節です」

「うん、だから違うかもしれない」

フェリスはそう言いながらも、影に言いようのない懐かしさを感じていた。

まるで古い友人に再会したかのような、そんな気分だった。

「あの子は、きっと何もしないよ。できないって言うべきかな」

フェリスが言う通り、影は湖やその周囲を泳ぎ回るだけでこちらの世界に何らかの害を与えている様子はない。

しかし、あれだけ巨大な何かがこちらの世界に姿を見せているのだ。後宮の空気に変化が現れるのも納得できる。

特別文庫の扉に空間断層が現れていたのも、あの影に反応した、冥界の力を糧とする魔導書があったと考えるのが自然だろう。特別文庫の近く、もしかしたら中を通過したのかもしれない。

「あ」

と、影を見詰めていたウィリィアが声を発した。

影が、こちらに向けて一直線に近付いてきたのだ。

「おや？」

そしてそのまま通過するかと思いきや、影は四阿の下で停止する。

どうしたのか、と三人が湖面を覗き込んだとき、影が身を起こした。

「わわわっ！」

フェリスが叫び、ウィリィアが無言でレクティファールの背に隠れる。

得体の知れない相手ということで、二人とも恐怖が優ったようだ。流石にウィリィアは不味いことをしたと思ったのか、フェリスの隣で顔を歪めていた。

「何か」

レクティファールは自分の目の前に屹立する影に、そう問うた。

影は半透明で、向こう側の風景が透けて見えている。

影の中に幾つもの光が見えたが、その中でも一際強い輝きを持つものが、影の頭部らしきものにある『眼』であった。

その『眼』はレクティファールをじっと見下ろし、そのまましばらくの時間が経過した。

彼の背に隠れた二人が恐る恐る影を覗き込むと、影はレクティファールの顔先に自分の顔を近付けている最中だった。

〈――コトナルハハノコヨ〉

異なる母の子――影のそんな言葉を聞いたのは、レクティファールだけだった。

影はそれだけを呟くと、レクティファールの前に顔を押し出す。

その先に、光り輝く何かがあった。

「――？」

レクティファールは影に促されるように、片手を差し出した。その上に、ぽとりと落ちるものがある。

親指の先ほどの蒼い、透明な珠であった。

レクティファールがそれを受け取ったのを確認すると、影はそのまま湖に沈んでいき、二度とその姿を見せることはなかった。

◇　◇　◇

冥界の影と邂逅した翌朝のレクティファールの朝食は、列車の中だった。

それも皇族専用のお召し列車ではなく、極普通の遠距離移動用の個室車両だ。

そこで彼は自らの婚約者が早起きして作った弁当を食べているのである。

「はい、飲み物」

「うん」

軽陶製の磁碗に入ったお茶を啜り、野菜や卵を薄く切った麦麺で挟んだものを口に入れる。

乾酪と肉を挟み、軽く火を通した麦麺包は何とも手間のかかっている一品で、レクティファールはこんなものを朝の時間の限られた中で作った婚約者に感謝とも呆れともつかない感情を抱いた。

彼自身、食事を摂らなくても死ぬことはない。それは隣に座って甲斐甲斐しく彼の世話を焼く婚約者も同じの筈だった。

「メリア、あまり早く起きすぎると身体に良くないのでは？」

「そう？　別に子どもじゃあるまいし、それに、こんな好機滅多にないから」

「好機？」

「二人きりで出かけるなんて、そんなにあることじゃないでしょう？　しかも長距離移動！」

両手の拳を天に突き上げて笑うメリエラ。

ここ最近、レクティファールと二人の時間を作れなかった反動なのか、異常に元気であった。

「確か予定だと、今日の昼に中間駅の街にある軍演習場で視察、そのまま同じ街にある軍の工廠を視察して、夜行列車で〈ウィルマグス〉まで行くのよね」

「ええ、帰りはメリアに乗せてもらって……」

「〈リンドヴルム〉に一泊、翌日に皇都帰還、と。うーん、中々無茶な行程ね。わたしとしては嬉しいけど」

メリエラは自分も麦麺包を頬張りながら、皇王府から渡された行程表を確認する。

指に付いた肉汁を舐め取り、嬉しそうに身体を揺すった。

「最近リリシアとか、フェリエルたちばかり構ってわたしのこと放り出してたものね。埋め合わせはちゃんとしてもらうから」

そういって彼女が差し出したのは、途中で停まる駅での予定表。

多くは駅近くの公園や商店街で散策といったものだが、中にはたった半時間の停車時間にも関わらず、駅舎の外まで買い物に行くことになっている駅もあった。

「――何という弾丸行程」

どれだけ張り切ってこの予定表を作ったのか、相談を受けたであろう皇王府の担当者が過労で倒れていないか心配になった。

「とりあえず、次の駅で昼食を摂りましょう。いいお店を探してもらってあるから」

「はあ……」

鼻歌でも歌い出しそうなメリエラの様子に、レクティファールは呆然とするばかりだ。

確かに最近、メリエラとの二人きりの時間をとった記憶はない。

ウィリィアからメリエラの不満が危険域に突入していると忠言を受

けたから、こうして二人で視察に出かけるという方法を選んだのだが、あまりにもメリエラがはしゃぎ過ぎて戸惑っているのだ。

（たまにはいいと思いますけど……ね）

メリエラに埋め合わせをしたということは、平等に他の女性たちとも時間を作らなくてはならない。

諸外国の元首級が揃う両海軍合同観艦式を前に、レクティファールの予定はぎっちりと詰まっている。その予定の中にさらに私的な時間を詰め込むとなると――レクティファールの一日の予定表は二十四時間全て埋まる。

〈皇剣〉のおかげで睡眠も食事も必要ないが、精神的疲労からは逃げられない。

麦麺包を口に加えながら現地の観光情報誌を捲るメリエラを横目で見ながら、レクティファールはどうやって精神的疲労を散らそうかと考え始めた。

酒――酔わない、興味がない、そもそも好まないので却下。

賭博――外聞が悪い上、個人的にもあまり興味がないので却下。

薬物――効果なし、却下。

女――間に合っているので却下。しかも、これに関する下手な動きは余計な精神的疲労に直結する危険性アリ。

「むう」

充実しているといえば確かにその通り。

責任が大きすぎる仕事ではあるが、嫌と思ったことはないし、ここで投げ出す方が精神的に辛い。

女性関係も、負の側面は否定しないが、得るものも多いので現状維持が妥当。

「――何だ、思ったよりもいい人生じゃないですか」

「ん？　おかわり食べる？　ええと、次のおすすめは鮭の乳卵油和えかな」

レクティファールの小さな呟きを勘違いしたメリエラが、籐製の箱から麦麺包を取り出す。

鮭の身が白い乳卵油と絡み、とても美味しそうだ。

「じゃん、乳卵油から作りましたー」

得意げな顔で麦麺包を差し出すメリエラ。

褒めて欲しいと言わんばかりの表情と仕種だ。龍の尻尾でもあれば、機嫌よさそうに揺れていたことだろう。

「はい、どうぞ」

レクティファールが口を開けるのを待っているのか、その期待の眼差しはレクティファールのぶすぶすと突き刺さった。

今後の詰め込まれた予定について思考を巡らせていたレクティファールにとって、その笑顔は何とも言い難い。

ただ、期待を裏切るという選択肢はなかった。

ここでレクティファールが拒否すれば、メリエラは落ち込むだろう。怒るのではなく、落ち込む。そして延々数日間、レクティファールに対して怯えたような態度を取るのだ。

甘えることに慣れた子どもが、ちょっと突き放されただけで強い恐怖に駆られるように。

誰かと争うなら強気に出られるメリエラだが、レクティファールに拒絶されることは彼女の最大の恐怖でもある。

それは彼女の性格というより、龍族全般の気質であった。

「――？　違うやつが良かった？　鮭苦手？」

メリエラは自信作を手にしたまま、困ったように首を傾げる。

きっと内心では、「折角作ったのに」という感情と、「嫌いなものを作ってしまった」という後悔が湧き上がっているのだろう。

女性は悲しむよりも怒っていた方がだいぶましと学習済みのレクティファールにとっては、次の言葉は用意された台詞の一つでしかなかった。

「いえ、ちょっとどこから食べようか悩んだだけです」

「あ、そうよね、上手く食べないと溢れちゃうもの」

メリエラは慌てて紙皿を取り出し、それを麦麺包の下に差し入れた。

これで零れても大丈夫、そんな笑顔をレクティファールに向ける。

「はい」

レクティファールはメリエラの差し出した麦麺包に口を近付けながら、こんな日常なら悪くないと思った。

今、自分は満足している。

こうして大切な人と隣り合って食事をし、未来のことを語り合う。

それは幸福であると、彼は断言できるのだから。

◇　◇　◇

先ほど降りた駅で手に入れた蜂蜜入り林檎茶を、蕩けそうな顔で飲むメリエラを隣に置き、レクティファールはその駅で手渡された書類を決済していた。

メリエラの「はぁ」とか「ふぅ」とか「うふふふ」といった気の抜けた声を背景音楽に、レクティファールの手は残像でも見えそうな速度で書類を捌いていく。決済印を押し、花押を書き入れ、次の駅で連絡員に渡す革箱に仕舞い込む。

およそ半時間でそれが終わると、メリエラは待っていましたとでも言うようにレクティファールの膝の上に倒れ込んだ。

美味しい林檎茶を飲むことができたので、機嫌はすこぶる良い。編上靴を脱いだ足をばたばたと動かし、レクティファールの身体に自分のそれを押し付ける。

「レクト、そういえば昨日ウィリィアと一緒だった？」

「ええ、ウィリィアさんから聞いたので？」

「ううん、マリカーシェルが教えてくれた。ウィリィア怖いもの苦手だから、夜番って大変だと思わない？」

「まあ」

大変なのは本人もそうだが、巻き込まれる側もだ。

レクティファールはメリエラの淹れた普通の紅茶を飲みながら、額に一筋の汗を浮かべた。

「ウィリィアって気難しいところがあるから、助けられるようなら助けてあげてね」

「ええ、それはもう」

メリエラはレクティファールの返事を聞くと、嬉しそうに笑った。

そしてふと何かに気付いたようにレクティファールの上着を叩き、小首を傾げた。

「何か入ってる？」

「ああ、これです」

言ってレクティファールが取り出したのは、昨夜手に入れた晶石だ。

何か意味があるのかと色々調べたのだが、これといった収穫はなかった。

むしろ、何も分からなかった。

それというのも――

「触ってもいい？」

「ええ、ですが……」

メリエラが晶石に手を伸ばし、触れようとする。

しかし、彼女の手は晶石に触れることができなかった。

「ええと……」

手をわしわしを開閉するメリエラだが、晶石には一向に触れない。触れても透過し、レクティファールの手のひらの上から晶石を動かせないのだ。

「まあ、そんな感じで、私以外に触れないんです」

「でも、服の上からなら触れたわよね」

「私の服だからじゃないですか？」

どんな基準なのか分からないが、レクティファールの服の物入れには入る。

しかし、誰かの持つ鞄などに入れようとしても、通り抜けてしまう。

レクティファールが鞄などに仕舞えば、そのまま入れることができる。

「意識があるのかしら？」

「さあ、何とも」

どんな検査機器を使っても、晶石が何であるのか分からなかった。

調べたいのに触れないという現実に、研究所の一部の研究者が発狂しかけるという事件もあり、結局レクティファールが持ち歩くことになったのだ。〈皇剣〉ならば多少の事態には対応できるという判断だった。

「変なの」

晶石を通り抜けてしまう自分の手のひらをレクティファールの手のひらに叩き付け、ぱんと音を鳴らしたメリエラ。

不思議そうに晶石を眺めていた彼女だが、自分の手に負える代物ではないと判断し、話題を変えてきた。

「それはそうと、婚礼の儀のことなんだけど……」

「ええ」

「即位の儀と一緒にやるってことは、わたしたちって皇太子妃できないのよね？」

「まあ、そうでしょうね」

「何か、損した気分」

「そうですか……」

メリエラの愚痴を聞きながら、レクティファールは晶石を物入れに仕舞った。

これが一体何なのか、分かったことは一つもない。

しかし、彼の中で確信していることがある。

この小さな晶石が、無意味なものではないこと。

あの影が言った言葉に意味があるのなら、この晶石に意味が無いとは考え難い。

（――異なる母の子、ね）

レクティファールは影の言った言葉の意味を深く深く思考しながら、メリエラの相手を続けるのだった。

第二話「三姫来訪」

皇国・近衛両海軍合同観艦式は、皇国屈指の軍港〈リュクセル〉にて実質一週間程度の期間に渡って開催される。

艦艇への体験乗艦や、演習披露、四軍の軍楽科部隊による大演奏会、旧式補助艦艇の競売、国内外の軍需企業が出展した企業区画など、人々にはある種の祭として認識されていた。

出店には家族連れが群れ、子どもたちは飛龍の体験騎乗で歓声を上げる。大人たちも一部の好事家は夢中になって軍艦の写真を撮り、退役軍人会の有志がそれぞれの古巣で案内役を務めたり、或いは子どもや孫、ひ孫に自分の武勇伝を語っては煙たがれるという光景もそこかしこで見られた。

普段は軍の関係者以外の立ち入りが禁じられている岸壁も人、人、人で埋め尽くされ、もはや普段の面影を残すのは各区画を区切る有刺鉄線の柵ぐらいのものだ。

そんな喧騒の只中で、更に多くの人々が集まっている一角がある。

第十一岸壁――観艦式観閲艦隊旗艦を務める〈カルマイク〉級重戦艦、〈ロスト・コード〉が停泊している岸壁だ。

「――おお！　ゲイツ！　貴様まだくたばってなかったか！」

「ジョルジュか、抜かせ！　貴様の葬式で海軍行進曲を歌うまでは死なんさ！」

〈ロスト・コード〉に乗艦した二人の退役軍人が、舷門で肩を叩き合って笑っている。

共に老いてはいるが、少将と准将の軍装に包まれた身体はまだまだ太く逞しい。退役軍人を示す青い腕章がなければ、現役の海軍将校として通じるだろう。

二人は出迎えの現役将兵の敬礼を受けると、それに答えて艦の中へと入っていく。現役時代に同級艦に乗り込むことがあった二人は、案内役さえ断ってのしのしと我が物顔で艦内の各所を巡る。立ち入り禁止区域には縄が張られていたが、二人はそれを避けながら栄誉礼の行われる上甲板へと登っていった。

「懐かしいな、こうしてお前と二人で艦の中を歩いていると訓練生時代を思い出す」

「そうだなぁ」

ジョルジュの言葉に頷きながら、ゲイツは急傾斜の階段を登る。

最近家の階段を登ることが辛くなってきた二人だが、この艦内階

段だけは歳若い士官候補生の頃と変わらぬ動きで登ることができた。

そのまま通路を通って上甲板出ると、強い潮の匂いが二人を包み込む。

「お互い、最後まで船乗りでいられたのは幸運だったな。もっとも、貴様は戦母なんていう扁平娘に乗り込んでいたが。貴様の趣味にはとんと呆れたぞ」

「何を言う、貴様など最後の最後まで駆逐艦乗りだった癖に。だから奥方も小さな可愛らしいお嬢さんを選んだのだろう?」

揃って相手の腹を殴りながら、二人は呵呵と笑う。

それこそこんな風に、甲板で殴り合いの喧嘩をしたこともある。そのときは揃って上官に海に投げ落とされたものだ。

その上官は今、〈大提督〉と呼ばれている。

「しかし貴様、なんだこの腹は！　こんな腹で戦場に出る気か！」

「お前こそこの緩みきった顎は何だ！　波もないのに揺れておるわ！」

二人は一頻り相手の緩んだ身体を馬鹿にすると、基地の入口近くで沸き上がった歓声に顔を上げた。

彼らが見つめる先には人だかりがあり、その中心で帝国の紋章旗が翻っている。

来賓である〈新生アルマダ帝国〉の皇女と、〈アクィタニア王国〉の王女が到着したのだ。

「グロリエ・デル・アルマダとマティリエ・ロト・リズル・アクィタニア・アルマダか」

ジョルジュが呟き、ゲイツが頷く。双方とも、その顔には軍人としての鋭利な表情がある。

「マティリエ殿下の方は、婚礼に先立って帝国の戦神教会から洗礼を受けたらしい。これまで父王の方針で洗礼を受けていなかったようだが……帝王自ら洗礼の儀式を取り仕切ったそうだ」

「ふん、マティリエ殿下の子も同じように戦神教会の信徒とするつもりか」

ジョルジュが不機嫌そうに鼻を鳴らすと、ゲイツは彼に同意するように低い声で答えた。

「戦神教会はその始まりからして四界神殿を大層嫌っておる。末席とはいえ帝位継承権を持つ帝孫が異教徒となるなど、容認できるものではなかったのだろうさ」

「だが、神殿は気にせずこちらの流儀で婚礼の儀を行うだろうな」

「違いない」

ゲイツが笑い声を上げると、それに釣られるようにジョルジュも喉を鳴らす。

彼らは二五年前の戦いで帝国海軍と近年最大の艦隊決戦を演じたことがある。世界有数の実力と規模を有するイズモ海軍を相手取るために訓練を重ねてきた皇国海軍。その甲斐あって帝国海軍に対してはほぼ完勝したが、二人はその戦いで何人もの同窓を失っている。

ゲイツに至っては、巡洋艦に乗り込んでいた娘とその婿を同時に失っていた。

ジョルジュは数十年来の友人の肩に手を置き、小さな声で囁く。

「ゲイツ、分かってると思うが……」

「皆まで言うな。しかし、両殿下ともあの戦争の頃には影も形もな

かったのだな……」

「年を取ると、自分ばかり周りに取り残されている気分になる。――騎士学校の同期など、もう半分しか残っておらん」

「我々も、次の観艦式ではどちらかが欠けているかもしれんぞ」

「そうだな」

二人とも、その階級に『退役』の二文字が付加されたあとも、国に求められれば一水兵としてでも軍艦に乗るつもりであった。

一度海軍に奉職したからには死ぬまで海軍軍人であり続ける、というのは、海軍軍人の相互扶助組織である『水友会』の皇都本部で日々酒を飲んで騒いでいるような歳若い現役水兵から、皇王家より爵位を与えられた元〈大提督〉までの誰もが心に抱いている誇りだ。

「そうなったら、適当に若い水兵でも捕まえて昔話でも聞かせてやるとするさ」

「迷惑な爺だな」

「爺とは迷惑なものだ。若い頃に、俺もそう思っていた」

「はっは！　その通り、その通りだ」

笑い声に続いて、沖合から大音量の汽笛が轟き、別の岸壁から歓声が上がった。

イズモ海軍旗と内親王旗を掲げた〈イズモ神州連合〉皇女座乗の戦艦〈龍泉〉とその随伴艦が、沖に姿を見せたのである。

ほぼ同時に観艦式会場へと入ったのは、両国を平等に扱うという皇国の方針だろう。

帝国も〈イズモ〉まで自国の領土とは主張していないから、事前の協議でもこれには文句が出なかったらしい。

「――しかし、時代は変わるものだな、ゲイツ。我々の時代なら、帝国やイズモから皇妃さまを迎えるなんて考えられなかった」

「陸軍は〈帝国〉を仮想敵に据え、海軍は〈イズモ〉を仮想敵に据え続けてきたからな」

皇国の敵として存在し続けてきた二つの国の血を皇王家に入れる。

それに対して何も感じない軍人といえば、二十五年前の戦争を直接知らない世代か、その二つの国と友好的な関わりを持つことがで

きた幸運の持ち主だけだ。

イズモであれば、直接砲火を交えたのが数百年前ということもあってそれほど悪い感情を持っていない者が多いが、その戦いの原因がイズモの血統が皇国に取り込まれたことであったと考えると、これも複雑な感情を抱く者は決して少なくない。

「これからの皇国は、否が応でも変わっていくな」

「変わらないものなどない、それだけのことだ」

ジョルジュの何処か寂しげな言葉に、ゲイツは諦念を多分に含んだ声で答えた。

帝国とイズモ、双方の姫君の元に、鉄籠を抱えた飛龍が向かう。

同時に〈ロスト・コード〉の汽笛が轟音を発し、船体の各部に魔力が流れ始めた。喫水線下の水流制御術式が光と共に稼動し、全長三三二メイテルの巨体が驚くほど静かに岸壁を離れる。

岸壁に集まった観客たちが歓声を上げ、海軍将兵が制帽を振る中、〈ロスト・コード〉を含む観閲艦隊は観艦式の行われる海域へと舳先を向けた。

◇　◇　◇

前檣楼（ぜんしょうろう）に掲げられた海軍旗と海軍元帥旗、そしてその間につい先程掲揚されたばかりの摂政旗を仰ぎ見ながら、栄誉礼のために整列した水兵たちは緊張した面持ちを隠しきれなかった。

彼らの上司に当たる乗艦指揮官など、昨日は儀礼剣の分解清掃で一日を潰し、さらに夜は一睡もできなかったという。その上、今の彼は青白い顔で今にも卒倒してしまいそうなほどに緊張していた。

自らの隣に立つ、観艦式主催者の二人――海軍〈大提督〉と、近衛元帥――と、彼らよりもひとつ前に立つ摂政レクティファールの存在に、明らかに自分を見失っている様子であった。未だ大尉の階級で、この観艦式が初の大仕事という乗艦指揮官にとっては、ただ黙って直立不動の体勢を維持するだけでも非常に辛い。

赤道直下の真夏の甲板で一人で雑巾がけした方がだいぶましだ――乗艦指揮官は昨夜から緊張で何も食べられなかったにも関わらず、嘔気さえ覚え始めていた。

（緊張で死ぬ）

しかし、逃避を目的に倒れることは許されない。

〈ロスト・コード〉の飛行甲板を取り囲むようにひしめく一般招待客を前にして、重ねて言えば各国の大使や公使、駐在武官を前にして乗艦指揮官が倒れるなど皇国の恥である。確かに、個人的には止むに止まれぬ事情であったとして軽い処分で済むだろう。だが、海軍儀仗連隊の名は地に落ち、陸軍や空軍、近衛軍の儀仗隊には延

々と笑われ続ける。

彼は儀仗連隊の連隊長を務める海軍大佐から直々に儀式剣を手渡され、くれぐれもと念を押されている。海軍総司令部と〈ロスト・コード〉の属する第五艦隊司令部の好意で、ひと月前から〈ロスト・コード〉に乗り込み、艦長以下の乗員の協力の下訓練を重ねた。日によっては、戦隊司令官や艦隊司令官までわざわざ〈ロスト・コード〉に足を運び、その経験から幾つかの助言を与えてくれた。

逃げ道はない。

彼の両肩には皇国という一国家の名誉が掛かっているのだ。

それに、ここまでは上手くやった。二人の元帥と摂政の乗艦の際は、万事滞りなく、満点とは言わないまでもそれに近い点数を叩き出したと自負している。

「できる、できるはずだ」

そう呟けば、摂政が彼に一瞬だけ視線を寄越した。

聞こえていたのかと自問し、聞こえていただろうと結論付けた。海風の中では聞き取りにくい人の声も、〈皇剣〉であればどうということはない。

乗艦指揮官は皇国の軍人がえてして抱きがちな〈皇剣〉への諦念交じりの畏敬によって、ある種の自暴自棄になった。今更恥じても、取り繕う機会はない。ならばいっそ開き直ってしまえばいいのでは

ないだろうか。

幸か不幸か、摂政は彼に向けて目元だけの苦笑を浮かべはしたものの、それ以上の――例えば叱責やなんらかの処分をする心算はないようだった。

その表情は、見ようによっては逆に面白がっているようにも感じられ、乗艦指揮官は静かに深呼吸をすると遠くの空にぽつんと浮かんでいる二つの点を見据えた。

来賓である三人の皇女をそれぞれ乗せた、特別輸送騎だ。

非戦母搭載型の航空騎らしく小ぶりなその姿は、しかし確実に〈ロスト・コード〉に向けて近付いてくる。

装飾性の高い装備に身を包んだ二頭の飛龍は、〈ロスト・コード〉の後甲板に二つ並んだ発着場にそれぞれ接近し、滞空を始める。戦母以外への二頭以上の同時着艦といえば、他国の海軍では非常に危険であるとして禁止されている行為だ。

それを苦もなく行うということそのものが、皇国海軍の航空部隊の技量の高さを表している。

翼下に浮かび上がった魔法陣から魔力の残滓を噴出し、発着場を囲む人々の衣裳を揺らしながら、二頭の飛龍は同時にその足を着けた。

膝を曲げ、鉄籠を水平に保ったまま両前足を床に置き、翼を折り畳む。素早く発着整備員が鉄籠に駆け寄り、発着場に埋め込まれた金具に鉄籠の固定鉤を接続する。

それらの着艦作業が終わり、安全確認を終えた整備員の合図を確認した乗艦指揮官。彼は足を肩幅に開き、儀礼剣を捧げ持ち思い切り声を張り上げて賓客の来艦を告げた。

◇　◇　◇

マティリエとグロリエに割り振られた鉄籠は、帝国の技術では考えられないほどに快適な旅を二人に提供した。

港の海軍基地から沖合いの観閲艦までの短い道程ではあったが、軍人として帝国軍の輸送騎に乗り込んだことがあるグロリエには、それだけで両国の技術力の違いを知るには十分過ぎる時間だった。

航空戦力の充実振りは、限られた航空戦力を切り回している帝国軍には生唾を飲み込むほど羨ましいものだ。あの海軍基地で展示されていた飛龍用の装備の数々、上空を遊覧飛行していた大型輸送騎、そしてこの小型輸送騎。

飛行甲板の大きさが限られている戦龍母艦以下の艦艇では、大型の飛龍は使用されない。これは帝国も同じだ。

しかし、帝国海軍と皇国海軍の航空戦力には大きな違いがある。それは帝国が艦同士の連絡や周辺警戒に使用しているのは飛龍ではなく、飛竜やグリフォン、ヒポグリフであり、それらの生き物を飼育するには艦内に特別な空間が必要になるのに対し、皇国では戦母以外の航空戦力には、人の姿を取ることができる飛龍のみを選んでいる。

これなら艦内に余計な空間を作る必要はないし、その世話のために余計な人員を乗り込ませる必要もない。

必要最低限の人数で、高性能な航空戦力を、しかも駆逐艦程度の小型艦艇でも運用できるのだ。対して帝国では、艦の容積に余裕がある巡洋艦以上の中型から大型の艦でしか航空戦力を運用できないでる。

真紅の軍礼装姿のグロリエは腕を組んで窓の外を見遣り、面白くなさそうに鼻を鳴らした。

マティリエがびくりと肩を震わせ、叔母を恐る恐る窺う。彼女はグロリエの軍装にも似た動き易い衣裳を着ていたが、しかしその衣裳には膝丈の傘袴など少女らしい可憐さもしっかりと残されている。彼女の母が自ら裁縫機を操って作ったということもあり、その耳や尻尾の毛色と良く合っている。

「叔母さま……？」

「あ、いや、すまない。――わが国との余りの差に、腹立たしくなってな」

眼下を見れば、白い航跡を残して航行する大小の艦艇。

いずれも一糸乱れぬ隊伍を組み、ひとつの生き物のように観艦式の会場へと向かっている。

世界有数の練度を誇るイズモ海軍との戦いを想定してきただけあって、その技量はグロリエの中に一欠片の対抗心さえ芽生えさせない。あるのは純粋な感嘆のみだ。

帝国の海軍で、果たして同じだけの技量を持つ艦がどれだけいるか。――個艦としてなら優秀な艦に心当たりはある、帝国海軍の観艦式や演習を見る限り、そういった艦が存在することをグロリエは知っている。しかし、戦場においては個艦の能力よりも部隊としての能力が重要になるだろう。一隻二隻優れた艦がいたところで、全体としての技量が低ければ話にならない。

貴族たちや軍高官の私物となりつつある海軍に、あれに対抗する力があるのか。――あるはずがない。帝王陛下の艦を私物化して舟遊びに興じる艦長。自領の治安維持に公共物である海軍を用いる艦隊司令官。そして、海軍予算を自分の懐に仕舞い込む軍官僚。汗水垂らして日々訓練に励む兵下士官を尻目に酒や女に耽る士官たちなど掃いて捨てるほど。

「父上がよく見て来いと言ったのは、こういうことか……」

父クセルクセス十世は、グロリエに皇国の姿をつぶさに観察して来いと言った。

その言葉どおりに敵国の海軍を見るグロリエには、目の前の高い技能よりも自国海軍の醜態こそが思い出されてしょうがない。

兵たちの健気さでいえば、皇国も帝国も大差はあるまい。下士官

の勤勉さもだ。しかし、その上の高級将校たちのみっともなさといったらどうだ――グロリエは拳を握り締め、自らが守るべき国の現状に思いを馳せる。

そんな叔母の様子に小さくなりながら、マティリエはこれから会う未来の夫について様々な想像をしていた。

母が言っていたように優しいのか、叔母の言う通り恐ろしい男なのか、自分にどんな表情を見せてくれるのか、そんな男が自分に宛がった彼女専属という女性ばかりの騎士団とは、国境の街で顔を合わせた。彼女たちのほとんどはどこかグロリエに似た鋭さを持った女性たちであったが、その中で部隊長を任されているという女性騎士だけは、どこか柔和な印象がある。

常に笑顔で、気配りを忘れず、それでいてグロリエを前にしても一切尻込みする様子を見せなかった。

マティリエの母リールにも似て、自然体の中に強さを見出した女性。

自国から連れて来た侍女たちとも友好的な付き合いをしているようで、マティリエの周囲にいる者たちは多かれ少なかれ彼女を頼っているようだった。

「マティリエ様、お飲み物のお代わりは如何ですか？」

「あ……いただきます」

「はい」

こうして卓の上の磁碗が空になれば、彼女はどこからともなく現れて飲み物を供する。

部屋の片隅に控えていたのは知っているが、こちらが明確な意思を持って認識しない限りその気配は恐ろしく希薄で、いることさえ忘れてしまいそうになる。

輸送騎に同乗できない侍女たちの代わりとは言っていたが、その身ごなしは侍女というよりも密偵や暗殺者に近い。マティリエは知らなかったが、いずれ彼女付きの護衛小隊を率いることになる女性は、グロリエが何度殺気を飛ばしても反応を示さず、その技量の片鱗さえ見せなかったのだ。

皇族最後の砦の名は、伊達や張子ではない。

グロリエが不満を抱きながらも、同時に満足感を抱いたのは、可愛い可愛い姪御を預けるに足る玄人に出会ったからだろうか。

「あと、どれくらいかかりますか？」

「先ほど〈ロスト・コード〉より艦隊防空圏への進入許可が下りましたので、あと一〇分もしないうちに到着できると思いますわ」

窓の外を見れば、先ほどよりも数を増やした艨艟（もうどう）の姿がある。

規則的に並び、その隊列のまま運動をしている。観艦式で用いる航行序列へと変化しているのだ。

「彼らの向かう先に、マティリエ様の夫君となられる方がおります」

騎士の言葉は、どこか楽しそうであった。

マティリエの向かいに座るグロリエが、横目で騎士を見る。自らが観察対象にされていると気付いていても、騎士の口調に変化はなかった。

「どのような、その……殿方なのですか」

「そうですわね」

騎士は顎に手を当てて少し悩む素振りを見せ、ちょうど三秒間悩んだ末に人差し指を一つ立てて口を開いた。

「きっとマティリエ様にはお優しく」

二つ。

「間違いなくいかなる敵にもお厳しく」

三つ。

「――時折情けないお方です」

「え？」

マティリエは思わず素っ頓狂な声を上げた。

ここ数日で一番大きな声だった。

「何といえば良いのでしょうか……」

騎士は頬に手を当てると、困ったように溜息を零した。

「見ていると物凄く頭を引っ叩きたくなるといいますか、取り敢えず弄って差し上げたくなるお方です」

「い、いじる……？」

マティリエの耳がぴくぴくと小刻みに動く。どうやら困惑しているらしい。

「はい、マティリエ様。きっとマティリエ様も一年後には、今のわたくしと同じように他の方にレクティファール様の為人をご説明されていると確信しております」

恭しくお辞儀する騎士の姿に、マティリエは見知らぬ生き物を見るような目を向けた。

彼女の周囲にいた侍従の者たちは、揃って父母を、そしてマティリエと弟を敬い、傅いていた。

それが一つ国境を越えただけの隣国では、皇族に最も近しい侍従がその主君を「情けない」と評している。

「――ふ」

グロリエは騎士の物言いに小さく笑った。

それは嘲笑の類ではなく、むしろその逆の感情が大きい笑みだ。

騎士の言葉は、マティリエを「身内」として扱っている証拠に他ならない。そして騎士はそれをグロリエの前で行うことで、帝国側

にマティリエを受け入れる旨を伝えているのだ。それを理解すれば、グロリエにとってこのやり取りも単なる暇潰しではない、もっと意味のあるものに感じられる。

兄にも、良い土産話ができるだろう。

彼女は笑みを浮かべたまま視線を巡らせ、洋上に浮かぶ巨大な影に目を留める。

目的地だった。

「さて、あの男は壮健だろうか」

そう心中を口にするグロリエは、自分が先ほどとは違う笑みを浮かべていることに気付かなかった。

◇　◇　◇

特別輸送騎の個室の片隅に座り、束根は窓際の席で皇国の女性騎士の歓待を受ける少女の姿をじっと見詰めていた。

光に晒されたことがないような美しい濡れ羽色の髪。細く整えられた眉。ほんのりと色付いた薄い唇。八洲人形のような白磁の肌。

纏う衣裳は伝統的な八洲衣裳と皇国の服装を組み合わせた簡素でありながら、しかし優美さを失わないもので、女性は人前で余り肌

を晒さないという八洲の価値観にも合致している。陣羽織に似た上着は、かつて一文字家の姫君が戦場で好んで着用したことで八洲女性の「戎衣」という地位を確立したものだ。特に真子はその一文字家の姫君に深い憧憬を抱いており、この皇国行きの提案を受けたそのときにこの衣裳を思い付いたという。

背中に真っ直ぐ落ちる髪に髪飾りが輝く他は余り装飾品の類は見られないが、なるほど、束根の主君が我が妹ながらと自慢するだけの美貌である。

しかし束根にとって、内親王真子は主君の妹というより他になかった。

真子が臣下の前に姿を見せるということ自体が稀で、その為人を知るには束根の情報分析能力を以てしても難しい部分が多い。

ただ、この場で好ましからざる事態が起きれば自らの身を盾にするくらいの覚悟はある。皇族の随員とは、そういったものだ。

続いて、彼は皇国より付けられた女性騎士を観察した。

〈龍泉〉を降りた二人を出迎えたのは皇国外務院の総裁であったが、その際に紹介されたのがこの女性騎士。こめかみから後ろに向けて伸びた角と、その口元から覗く発達した犬歯。縦に開いた瞳を見れば、この女性騎士が魔族であることはすぐに分かった。

そして皇国が「神族であろうとも魔族であろうとも、一切区別する気はない」という意志を持っていることも。

「真子さま、お寒くはありませんか？」

小柄な魔族の騎士はその力の一欠片も感じさせない物腰で、甲斐甲斐しく真子の世話をしている。

完全に己の力を封じているその技量を考えれば、魔族の中でも有数の力を持つ大魔族であると推測できる。そして束根の記憶に間違いがなければ、あの角は皇国六魔氏族のひとつであるアンギリーフ一族の、「アンギリーフの風切る双角」。元々は初代皇王と敵対した氏族であるが、その優れた魔法制御技術を買われて重職に補された氏族だ。

そういえば、当代族長の妹が皇王の傍にいると聞いたことを思い出し、束根はこの女性騎士がその族長の妹であると当たりを付けた。明らかにそういった上流階級の教育を受けてきた者だけが持つ物腰は、騎士という荒事を生業とする者たちの中では非常に目立っている。

皇族護衛を担う騎士団であっても、後付の礼儀作法より、幼い頃から身体に教え込まれたそれの方が身体に馴染んで見えるものだ。

「ありがとう、でも、大丈夫。――あ、あとどれくらいで着くか分かる？」

「はい。到着まであと十五分ほどです。今日は空も海も穏やかですので、予定通りに到着するかと」

「そう……」

真子は光を映さない、茫洋とした瞳で外の風景を見る。

それは彼女にとっては見るというよりも単に目を向けただけの運動に過ぎないが、たとえ錯覚であっても蒼い空と、船たちの刻む白い航跡を見ようという意志の表れでもある。

片割れが直接意識に送り込んでくる映像で外の風景を知った真子は、今すぐにでもその片割れに身体を渡して目の前の光景を見てみたいと思ったが、それは「禁裏以外ではもう一人に身体を渡さない」という兄との約束を違えることになる。

真子はままならない自らの現状にほう、と息を吐きながら、気怠げに頬杖をついた。

「わたしの連れ合いとなるお方は、こんなわたしを見て何と仰るでしょう」

それだけが、不安であった。

いずれ何処かに嫁ぐと分かっていても、心のどこかで自分のような娘を娶ろうという者はいない。いたとしても、それは大層な物好きか、性格破綻者のどれかだろうと思っていた。

（真子）

半身が、どこか心配そうに自らの名を呼ぶ。

この半身だけが、ずっと真子の心を支え続けてきた。何も知らない、何も見ることができない真子に、知識と光を与えてくれた。

兄は、この半身こそが真子の境遇を招いた元凶であるという。しかし、真子はそうは思っていなかった。

この半身との出会いは、自分にとって幸運だったのだ。

「おそらく、これといって何も仰らないと」

女性騎士は、悩む素振りも見せずに即答した。

その答えにはどうやら半身も呆れているらしく、そんな気配を感じる。

「興味がないから？」

「真子さまご自身に興味はあれども、真子さまのお身体にはさして興味を抱かないと思います」

騎士の言葉には、深い確信があった。

「もちろん、女性としての真子さまには興味を示されると思いますが、目が見えないという点は、多少気を配る程度ではないかと」

騎士の言葉を信じるならば、件の男は自分の手に余る物ごとにはあまり興味を示さないという。ただそれも、未だ直接顔を合わせたことがない相手であるから、ということも考えられる。

「直接真子さまとお会いになれば、また違ったお顔を見せるかもしれません」

騎士はそう言って品のいい笑顔を見せた。

摂政である青年は、日々新たな顔を彼女たちに見せているという。

好きな食べ物、好きな茶の銘柄、好みの香り。

青年に関する質問に関し、それが国益に反しない限り総て答えよと命じられている騎士は、真子の望むままに答えを並べていく。

相手を知るという行為は、自らを相手に近付けることと同義だ。

真子が青年を知るたびに、青年と真子の距離はほんの少しずつ縮まる。

「そろそろ到着いたしますね。ご質問の続きは、殿下にどうぞ」

部下から報告を受けた騎士は、優美なお辞儀を見せながら真子に告げた。

束根が気配を探れば、輸送騎の乗員たちが慌ただしく動き回っている様が分かる。そして輸送騎が緩やかに旋回を始めると、窓から遠い束根にも、洋上を遊弋する鉄の城が見えた。

排水量だけならば自国海軍の重戦艦にも劣らないその艦は、自分たちの国の艦と較べて無骨な印象があった。

他国の者から「イズモ海軍の麗しの令嬢たち」と綽名されるほど、優美な曲線の多い八洲の艦。対する皇国の艦は、皇国令嬢の代名詞とも言うべき「龍姫」のように、鋭く、攻撃的な印象を受ける。

そんな艦へと降下し始めた輸送騎の中で、束根は立ち上がり、主君の妹へと歩み寄る。

さあ、このお見合いはどんな結末を迎えるのか。

◇　◇　◇

鉄籠から降りたマティリエとグロリエを出迎えるため、レクティファールが二人に向かって歩を進める。

大礼装の肩掛大外套の裾が海風に大きく揺れ、舞台装置としてレ

クティファールの姿を彩る。

「ようこそ、〈アルトデステニア〉へ」

鉄籠の入り口に立つ二人に向けて、レクティファールの歓迎の言葉が向けられる。

彼が視線をグロリエへと向ければ、周囲の者たちには場の空気が軋んだように感じられた。

「――此度の招待、感謝する」

「か、感謝いたします」

グロリエが小さく頭を下げ、マティリエが傘袴の裾を持って一礼。

やはり、空気は固体化したように動きを見せない。鉄籠の階段の上で立ち止まるグロリエと、それを見上げるレクティファール。

二人の戦いの様は周囲の者たちの全員が聞き及んでいる。双方とも、この巨大な艨艟を一撃で沈めるだけの力を持ち、万が一――あり得ないことではあるが――この場で二人がその力を振るうことがあれば、それを止められる存在はいない。

それだけに周囲の賓客や海軍将兵の緊迫感は一層高まり、その張

り詰めた場の中でマティリエだけが細かく震えている。

レクティファールとグロリエはしばし視線を絡め合ったが、どちらともなくその身体から発していた剣呑な気配を霧散させた。

「お手を」

レクティファールがグロリエに手を差し出す。

グロリエは微笑み、それを受けた。

「大儀である」

階段を一段一段降りるたび、波打つ金髪が風に靡く。

自信に充ち満ちた表情は人々の心に鮮烈な印象を与え、彼らは無意識のうちに感嘆の吐息を漏らしていた。

白と真紅の軍装が交差し、レクティファールは続いてマティリエに手を差し出した。

「姫さま、どうぞ」

マティリエは透かしの入った長手袋を着用していたが、その腕は

細く、頼りないという第一印象を人々に与えた。

グロリエに窺うような視線を向けながら、マティリエは未来の夫の手を取った。

「足元が滑りますので、注意を」

レクティファールの言う通り、階段は水に濡れて滑りやすくなっている。

船に乗り慣れた者ならともかく、マティリエはこれまでも人生で数度しか船に乗ったことがない。

物心ついてからとなれば、初めてのことだ。

「は……はい」

恐る恐ると言った風に階段を降りるマティリエ。

尻尾と耳は緊張で萎れ、足元を凝視しながら甲板に降り立った。

「あの……」

「初めまして、マティリエ殿。ゆっくりお話できるときを、楽しみ

にしております」

見上げた未来の夫は、マティリエに優しそうな笑顔を見せるばかり。

叔母を常勝という道から叩き落としたとは思えないほど、温和な雰囲気の青年だ。

彼は自分の姿を見て困惑を隠し切れないマティリエを促し、グロリエはそんなマティリエを伴って栄誉礼の行われる会場へと向かった。

続いて、レクティファールはもう一騎の輸送騎へと向かう。

扉は開け放たれ、そこに凛々しいイズモ軍装の少女がいた。

「ようこそ、皇国へ」

「――お招きに預かり、恐悦の至りです」

少女の目はレクティファールに向けられていたが、その瞳が自分を映していないことは一目瞭然であった。

決して焦点の定まらぬ瞳に、レクティファールはそれでもじっと目を合わせる。

「お手を取ってもよろしいでしょうか？」

イズモでは、輿入れ前の女性に許可無く触れることは、親兄弟以外に許されていない。

神職者など一部の例外はあるが、レクティファールは念のためにそれを訊ねた。

イズモ側との事前の打ち合わせでは、ここでレクティファールが真子の手を取ることになっている筈だが。

「はい、よろしくお願い致します」

レクティファールは階段を上り、真子のすぐ背後に控えていた男の探るような視線の中で彼女の手を取った。

足場が悪いということもあり、さらに腰にも手を添える。

「お足元に気をつけてください」

「ええ」

真子の足取りは、一つ一つ緩慢で探るようなものだった。

レクティファールは真子の身体を支えながら、目の前にある濡れ羽色の髪に付いた水滴を眺める。

光沢のある黒い髪と雫の組み合わせは、どこか彼の心を落ち着かせた。

「兄上は……」

隣にいるレクティファールにしか聞こえない声で、真子が呟く。

「殿下のことを、あまりお好きでないかもしれません」

それは、単なる個人的な好みの問題なのだろう。

同じ元首としてならば、そんなことは言っていられないし、誰かに漏らすような真似はしない。

「妹を攫っていく男を好く兄はいないでしょう。これから、色々お話をさせていただけたらと思っています」

「そうしてくださると助かります。わたしは、兄も、そしてあなたも嫌いにはなりたくありませんから」

真子はそう言ったきり、口を噤んだ。

レクティファールの手を握ったまま、儀仗隊の待つ会場へと向かった。

◇　◇　◇

波を蹴立てて航行する観閲艦隊。

艦隊は二つの単縦陣を組み、それぞれ第一観閲戦隊――先導艦・〈ミーティエ〉級巡洋戦艦二番艦〈リーゲル〉、観閲艦・重戦艦〈ロスト・コード〉、随伴艦・〈ゼフント〉級軽巡洋艦二二番艦〈ディモト〉、同級二三番艦〈オルモト〉。第二観閲戦隊――随伴艦・〈ゾンネブルーメ〉級重巡洋艦三番艦〈フィゲ〉、同級四番艦〈ミスティ〉、〈ハイレ〉級防空巡洋艦一番艦〈ハイレ〉、同級五番艦〈ロッヅ〉という序列で走っている。

その間を受閲艦隊の戦隊が通過していくのが、皇国で行われている観艦式の様式だ。

イズモも同じような様式で観艦式を行っているが、これを実行するには気の遠くなるような技術の蓄積が必要になる。

一度帝国海軍が同じ様式で観艦式を計画したことがあるが、それを実行できる技量を有する艦艇が必要数に達せず、諦めたことがあった。

もし同じ規模で同じことができる海軍があるとすれば、その数は皇国とイズモを除けば片手の指にも満たないだろう。

「これより、受閲艦隊が参ります」

〈ロスト・コード〉に放送が流れ、これまで周囲の者たちと談笑をしていた者も、興味深げに周囲の写真を撮っていた者も揃って左舷へと向き直る。

艦の進行方向に、濛気（もうき）の向こうから複数の影が現れた。

「受閲艦隊第一戦隊・旗艦〈カルマイク〉。皇国海軍第一艦隊第一戦隊」

受閲艦隊の旗艦にして、皇国海軍第一連合艦隊旗艦〈カルマイク〉が先陣を切る。

双胴の長大な船体は高い安定性と凌波性を持ち、広い甲板には巨大な主砲、副砲が鎮座している。それ以外の連装両用砲や防楯型対空魔動砲が針鼠のようにびっしりと並び、高い前檣楼には皇国最大の八メイテル全方位射撃用探測儀が備え付けられ、その射撃命中精度は非常に高い水準にある。

その〈カルマイク〉に続いて、同級四番艦〈イディアール〉が観閲を受ける。同級で唯一近代化改修を施す前ということもあって〈カルマイク〉とは細部の兵装配置が異なる。

皇国海軍の主力重戦艦に続いて、近衛海軍の主力軽戦艦が姿を見せた。

「受閲艦隊第一準旗艦〈シュレッケイン〉。近衛海軍第一艦隊第二戦隊」

通称、魔導戦艦。

その兵装の八割が魔導兵器で占められた重魔導艦だ。

主砲から対空砲まで、総てが魔力を砲弾として用いるため、高出力の魔導炉を四基搭載している。ただ、弾薬庫などの容積を必要としないため、装甲の厚さに較べて船足は速い。

その有り余る出力を推進機関として用いることができるため、戦艦級としてならば世界最速の三八ノルツを常時発揮可能な高速戦艦でもある。

〈シュレッケイン〉に続き、同級艦の〈ローイエ〉が通過する。

「続きまして、受閲艦隊第二戦隊」

〈ローイエ〉の姿が離れていくと、進行方向に新たな一群が現れた。

先頭は皇国海軍第四艦隊の旗艦、〈フォーゲル〉級正規戦母の二番艦〈アルバトロス〉。続いて同級三番艦〈シュペリング〉。

飛行甲板の上に居並んだ飛竜たちと、さらに巨大な飛龍が観閲者たちを睥睨する。

全長三三三メイテルの双胴艦で、その船体の基本設計は〈カルマイク〉級と同じものだ。皇国の戦母はできるだけ飛竜などの搭載空間を確保するために、兵装の大半を魔導兵器に頼っている。

「次は、強襲揚陸艦〈オーギュスト〉。近衛海軍第二艦隊第三一戦隊」

戦母に似た全通甲板を持つ強襲揚陸艦。その甲板の上で観閲艦に向けて敬礼するのは、上陸舟艇にも搭載できるよう小型軽量化された自動人形たちだった。

正面装甲以外の装甲を削り、小型化し、上陸戦の支援を行えるだけの火力を持たせた自動人形は、簡略化された甲冑のような細身の体躯をしている。特に不整地での戦闘では人と同じように走り、跳び、伏せることができる自動人形は重要な戦力であり、砂浜での揚陸を行う揚陸部隊では歩兵への攻撃を吸収する盾としての役目も期待されていた。

「続いては――」

放送が、受閲艦隊第三戦隊の到着を告げる。

巡洋艦主体の戦隊であり、皇国海軍を支える主力部隊と言ってもいい。

次に現れたのは、受閲艦隊第四戦隊。

嚮導駆逐艦に先導された主力駆逐艦が、軽快に海原を突っ走った。

ここまでは、比較的平穏のうちに式が進んだ。

だが、受閲艦隊第五戦隊が到着すると、人々はどよめき、来賓たちは目を剥いた。

「先頭は、皇国海軍水龍艦隊第一水龍戦隊旗艦〈ゼロイバー〉」

〈ゼロイバー〉級水龍母艦。

皇国の誇る水龍艦隊の旗艦だった。

水中戦力としては世界最強の座を守り続けている水龍たちの母艦として、運用されている艦だ。

大型の船体には水龍たちを休養させるための設備が整い、彼らの装備を万全に整備するための設備も充実している。

「続いて、第一水龍戦隊戦隊長ヤーベルンシュ大佐」

紹介と同時に、水中から勢い良く飛び出した水龍が身体をくねらせ、着水する。

〈ロスト・コード〉はその制動装置のお陰で大した揺れはなかったが、随伴艦の中にはヤーベルンシュ大佐の引き起こした大波に揺られている艦もある。

その様を見ていた〈大提督〉の額に青筋が浮かび、その口が小さく「あんの大馬鹿小僧……」と音を生んだ。

ヤーベルンシュ大佐に続いた三頭の水龍は、大佐の行いに辟易したかのように粛々と通過していく。

彼らは他国の水中戦力を悉く海の藻屑に変えてしまう、水中の狩人として他国に恐れられていた。

そして場合によっては自らの従う水竜たちと共に世界中の海で通商破壊を行う、戦略級部隊でもあった。

「続いては、航空部隊の受閲を行います」

放送と同時に、人々は一斉に視線を上げる。

〈ロスト・コード〉の前方から、小さな点が近付いてくるのが見えた。

◇　◇　◇

結論から言えば、この日の観艦式は皇国が想定したよりも大きな反響があった。

皇国は内乱で落ちぶれたと思っていた大陸内外の諸外国は慌て、イズモはこの観艦式を見て改めて威儀を正し、摂政と皇女の縁組に取り組んだ。

帝国さえ、その駐在武官の報告書の分析に多くの労力が割かれたし、皇国側が軍事機密以外の情報を出し惜しみしなかったこともあって、彼らが得た情報は多大なものとなった。

南洋諸島の各国は皇国近海での私掠船の活動を縮小させ、西域諸国は大陸西方海域での治安維持活動について皇国側との交渉を願い出た。外洋での作戦遂行能力を持つ海軍として、皇国の戦力は信頼できると判断したのかもしれない。

そして、人々の注目を集めれば集めるほど、摂政レクティファールの名は、本人が望むよりも早く、そして広く、世界へと伝播していった。

第三話「戦姫訪問」

「総員、突撃に移れ」

小隊長からの命令が通信網を走るやいなや、地面の僅かな起伏の間に潜んでいた歩兵が一斉に立ち上がり、その光景に相応しくないくらい静粛に抜剣、突撃を開始する。

雄叫びもなく、ただ自分たちの目の前に横っ腹を晒す敵の列に向けて真っ直ぐに。

「敵襲！　迎撃序列三番にて迎撃せよ！」

敵方も突然の襲撃に浮き足立ったものの、指揮官はその混乱からすぐに回復し部隊に迎撃を命じた。そこに全神経を集中できる命令さえあれば、兵士たちの動揺は一気に一点へと向かう。

命令を受けた兵士たちは慌てながらも剣を、槍を、弩弓を構え、自分たちに向かって無言で接近してくる敵に相対する。弩弓兵が膝射の体勢を取り、上官の命令を待った。

「撃て」

と、命令が達せられると同時に、圧搾空気の音が連続する。発射筒の中にあった空気が、運動力を与えられた棒矢によって押し出された音だ。

黒い棒矢が何百本も空中を走り、敵に迫る。しかし奇襲を仕掛けた兵士は目の前に迫る矢雨に怯えることもなく、そのまま突進を続行した。

自然、黒い矢雨は突き進む兵士たちに殺到する。これで一割程度は無力化できる――迎撃側の指揮官がそう踏んだ攻撃はしかし、棒矢の進行方向に発生した防壁によって阻まれてしまった。

魔導兵がいる。

迎撃側指揮官がそれに気付き、慌てて迎撃序列を対魔法序列へと変更させようとしたそのとき、彼らの頭上で射爆指標用の発光弾が炸裂した。

突撃した兵士の中に、魔導師が混じっていたのだ。彼我の距離はもう、二〇メイテルを切っている。十分に発光弾の射程圏内だった。

「防護障壁！」

指揮官の命令に従い、魔導兵と、障壁成型機に取り付いた兵士が部隊を守るように魔法障壁を展開する。

直後に、魔法障壁に敵の魔法が衝突、炸裂した。

腹に響く重低音と大音量。

障壁によって直接衝撃波を受けることはなかったが、障壁から伝播した音が指揮官以下の将兵の鼓膜を激しく揺らす。

指揮官は一撃を凌ぎ切ったことを確認すると、再度声を張り上げた。

「敵が来るぞ！」

その言葉通り、もう襲撃部隊の姿は目と鼻の先まで迫っていた。

◇　◇　◇

「如何か」

レクティファールは隣で双眼鏡を通して演習風景を見ているグロリエに向かい、そう訊ねた。

陸軍第二二演習場の北端。赤茶一色の演習場を見下ろす丘の上で、二人はそれぞれ一名ずつの従兵を伴っている。

グロリエはレクティファールの問いにしばらく無言でいたが、やがて従兵に双眼鏡を手渡すと、口角を持ち上げて「面白い」と答え

た。

「それは良かった」

「だが、まだまだ甘い方なのだろう？　あの指揮官は」

「ええまあ、迎撃態勢の変更が不必要に多い――士官学校でなら減点間違いなしでしょう」

レクティファールが丘を降り始めると、グロリエは借り物の大外套の胸元を閉め直し、それに続いた。従兵二人がその後ろに続く。

「ご覧の通り、魔導技術の発達は兵士たちの生存性を飛躍的に引き上げました。徹甲効果を付与していない矢弾であれば、至近距離であっても簡易式の魔動式甲冑に内蔵された防護障壁で十分に防げます」

同時に、砲弾の破片や破壊された建物の破片で負傷する危険性も大幅に減らすことができる。皇国の兵士は大陸一の金食い虫と他国に揶揄されるのは、そういった装備を前線にいる総ての兵士に与えているからだった。

ただ、兵士一人を一人前にするためにかかる費用と時間を考えれば――その兵士が育てるであろう後進を含めればなおのこと――、

決して損な取引ではない。

「耳の痛い話だな、余には。いや、兵士に満足に防寒着さえ与えてやれない我軍に較べれば、どこの国も同じか」

グロリエはそんな軍の現状に腹を立てながらも、次々と死んでいく兵士たちにどうしても金を掛けることができない国の懐事情も理解している。

数、ひたすらに数だけで攻めるしかないのだ。

最低でも敵の三倍、叶うなら五倍の兵力を揃え、数で敵を圧倒する。それが帝国の戦い方で、他に選べる選択肢はない。そんな金も、技術も帝国にはないのだ。

帝国は帝国に相応しい形で、皇国は皇国に相応しい形で軍を作り上げている。自然と両国の状態――政治体系から財務状況、歴史的背景まで――に沿った形になった。ただそれだけだ。

「あの『戦車』とやらがもう少し使い物になれば、兵士たちの死も減らせただろうに」

「さて、どうでしょうね」

レクティファールは丘を降りると、そこに停めてあった魔動車の

後部座席の扉を開けた。グロリエは軍帽を脱ぎ、小さく会釈して車に乗り込む。

ちょっとした仕種に過ぎないが、きっとグロリエは本国でもそうして従者や従兵を労っているのだろう。レクティファールは車をぐるりと回りこんでその隣に座ると、グロリエが兵士たちに慕われているという情報は正確だと確信した。

従兵二人が運転席と助手席に収まると、彼らは事前の打ち合わせ通りに魔動車を発進させた。目的地はこの演習場にある需品倉庫だ。

しばらく走ると、前方に陣地転換訓練の最中らしい自動人形の部隊が現れた。操縦者を乗せた車両が平坦な場所を選んで走っているのに対し、自動人形は起伏や樹々、人工的に作られた障害物などに身を隠しながら、ときに岩や小さな丘陵を飛び越えるような機動を行っている。

その様子を見ていたグロリエが、窓枠に頬杖を突いて呟く。

「そう、あれだ。あれを我々は欲したんだ」

「お国にも自動人形はあったはずでは」

「あるさ、だが、調達にも整備にも莫大な金が必要になる」

特に帝国の場合、自動人形の装甲に使用される対魔法装甲の製造

技術が拙く、軍が求める性能を満たすために第三国経由で皇国から装甲板を購入したこともある。

その装甲板を分析し、辛うじて国産体勢を整えたのだ。しかし、材料などは未だに他国から輸入しているものも多い。苦肉の策として対魔法装甲を使用しない自動人形なども試作されたが、戦場で真っ先に狙われる自動人形がそれでは、大した成果も挙げないまま撃破されるだけなのは分かりきったことだ。

現に、西方戦線に投入された試作機は敵の魔法攻撃を受け、一撃で粉砕された。あまりにも呆気なく砕け散った新型の自動人形に、敵方が驚いたという話もある。軍内での権力争いによって試作段階で無理やり投入されたという事実はあるが、そのまま開発を続けて使い物になったかどうかは分からない。

現在、帝国の自動人形の保有数は大陸で最も多いが、その内実は老朽化した自動人形を延命させ、設計よりも性能を落とした、いわば劣化型で数を揃えているに過ぎなかった。

「自動人形に代わる機動戦力として、車輌を装甲化しようという話が出たことは自然の流れだ。余も同じことを考えたかもしれない。だが、どれだけ装甲を施そうとも、車輌は所詮車輌、平面でしか動けない装甲車両に、立体での機動が前提の自動人形の代役は務まらない」

それも分かりきったことだった。

装軌式、装輪式、変わったところでは多脚式、様々な戦車が試作

されては消えていった。

重装甲に耐えうるために装軌式を選べば運動性が犠牲になり、運動性・機動性を重視して装輪式を選べば運動できる地形が限られた上に装甲が犠牲にされ、様々な地形に対応できる多脚式はその代償として装甲が薄く、長距離の移動ではその複雑な脚部に故障が頻発した。

確かに、そのいずれもが「魔法が存在しない」という前提であれば、十分に実用に耐えうる性能を持っていた。中には今現在にまで続く技術の祖となった発明も存在し、皮肉にも自動人形へと転用され、大きな成果を上げた技術もある。

こと自動人形に関する限り、皇国系商会の市場占有率は高い。それは皇国が世界でも屈指の魔法材料の産出国であり、その加工技術が発達しているからだ。

鉱物資源の中で魔法材料と呼ばれるものは、地下の龍脈から放出された魔力を受けた特定の鉱物が変質して生成される。

そして古い時代に現在の皇国一帯が未開の地とされてきたのは、その龍脈に惹かれた種族――龍種、竜種、亜人種、精霊種、妖精種、幻想種など――が生息し、人間種や混血種、神族や魔族の侵略を防いできたためだ。野生の大土蛇――巨大なミミズである――や陸竜、岩窟龍が掘り進んだ巣穴の最奥部に四色魔導珠の鉱脈があることはよく知られていることで、龍や竜が魔法材料のある場所に好んで巣を作ったというのは、当の龍族の研究者が発表した学説である。

皇国が建国後瞬く間に国力を増強できたのは、そういった資源に恵まれていたからという学者も少なくない。

対して帝国に龍種を始めとした幻想の種がほとんど生息していなかったのは、帝国が龍脈のほとんど流れていない魔力的な不毛の地だったから。それ故に魔力を餌とする強力な魔物が現れることもなく、帝国崩壊後に北に追い遣られた人間種が生き延びてこられたのだ。

そういった地理的、歴史的な理由があるにせよ、帝国の魔導技術が皇国より数世代遅れているのは間違いない。

その代わりとして発達した魔法材料以外の冶金技術は、帝国に魔法に頼らない兵器の数々を齎した。人工紅珠石を用いた炸薬式の銃砲は、帝国軍の主力兵器としての役割を十分に果たしている。『戦車』と呼ばれる兵器は、そんな帝国型兵器の一つの完成形になるはずだった。

だが、一切魔導技術を用いず、機械技術のみで作り上げられたその兵器は、既存の魔法や魔導兵器の前に無力だった。

「魔導師の魔法の前に松明になり、皇国の自動人形の運動性について行けず、できたことといえば擱座して兵たちの盾になることだけ」

帝国の明日を担う兵器と呼ばれた『戦車』は、その後研究が凍結された。

『戦車』を一両製造するよりも、他の銃砲を製造して兵士たちに与えた方が、余程役に立つと考えられたのだ。

ただし、正面戦力としての『戦車』は歴史に姿を見せてすぐに退場したが、そこに使用されていた技術は他国にも流出し、今二人の乗っている魔動車にも使用された。前線で矢面に立つことはできないが、戦場まで兵士を運んだり、後方で援護を行ったり、破壊された自動人形を回収したり、陣地を造成する重機としての装甲車両は今も新たに生み出されている。

『戦車』登場以前の装甲車両といえば、基本構造は魔導技術ありきの複雑なもので、現代のように大量生産を行えるような設計ではなかった。簡略化された民生用魔動車ならともかく、軍用の車輌といえば、豊かな軍事予算を持つ国々しか定数を満たすことができず、その他の中小国はそれらの国の払い下げ品を購入するか、極少数輸入した新品を配備するしかなかったのだ。それが今ではどんな小さな国の軍隊でも一定数の装甲車両を配備している。それは帝国が研究に研究を重ねた『戦車』の技術があったからだった。

それに、西域の研究施設でレクティファールが破壊した装甲車両も、『戦車』の子孫と言える。警備行動や治安維持に使用する対人兵器としてなら、装甲車両は十分な性能を持っていた。

「――しかしいいのか？　余は敵国の将ぞ」

グロリエにしてみれば、こうして自国軍の訓練風景を他国の将に見せることがまず信じがたい。

だが、レクティファールにしてみれば、調べようと思えば調べられることを明かすことに躊躇いはない。それが余裕と受け止められ、帝国側の侵攻の意志を挫くことができれば、それに勝る成果はない。

「お国の諜報機関であれば、すでに掴んでいる情報でしょう」

「そうか……そうだな」

グロリエの表情が曇る。

果たして兄姉たちは、これらの情報をどう考えているのか。単に敵を討つための情報としか見ていないのではないか、他者を蹴落とすための材料としか見ないのではないだろうか。そんな不安が脳裏をよぎる。

「我国の情報も得ているのだろうな」

「それは当然、様々な形で」

直接帝国領に入り込んだ情報員からの報告もあるが、帝国と取引している他国の商会などからも情報を得ている。帝国内の物流状況から、軍の新たな献立まで、皇国は病的なまでに帝国の情報を集めていた。

数に劣る皇国は情報さえも武器にしなくてはならない。

陸軍だけで総兵力一〇〇〇万の帝国と較べて、皇国は四軍合わせ

ても一〇〇万に届かないのだ。装備、練度、兵士個人の力量、そして情報、勝てる部分で徹底的に勝つというのは、皇国の対帝国戦略の基本であった。

「そっちの視察はさせてもらえないのか？」

グロリエはにや、と粘ついた笑みを浮かべて訊ねる。

レクティファールは頭を振り、肩を竦めてみせた。

「視察する相手がいませんから」

情報分析だけであれば皇国情報院などに赴けばいいが、実際に情報活動を行っている者たちの顔はレクティファールさえ知らない。知ろうと思えば知ることはできるが、レクティファールはその意味を見出していなかった。知ったところで、彼らの行動の邪魔になるだけだ。

「それもそうだな。――では、この車は何処へ向かっている？」

「この演習場の倉庫です。そこにグロリエ殿への贈り物を用意しました」

「おお！　それはどんなものだ？　演習場の倉庫ということは、宝石や衣裳などではないな」

グロリエの目が輝く、そのままレクティファールに詰め寄り、贈り物の内容を聞き出そうと躍起になる。

「宝石や衣裳などをご所望なら、今から用意させることもできますが」

レクティファールの言葉に、グロリエは即答した。

「なら、新式の自動人形を一体……」

「お断りします」

その答えも、即答であった。

「何故だっ！？」

グロリエはレクティファールの胸倉を掴み、がくがくと彼を揺さぶる。

従兵が慌てたように後部座席を見るが、レクティファールが何でもないと手を振ったので渋々と言った様子で席に戻る。

「ではグロリエ殿、私が帝国の新型装甲列車を一編成頂きたいと言ったら、ご了承くださいますか」

「無理だな、あれは我国でも予定調達数に届いていない。しかも民間の商会ではなく、軍の工廠で作ったものだ。輸出は禁じられている」

「同じことです。新型の自動人形に関しては制式化から最低五年の輸出禁止が義務付けられています。自らが取り決めた法を破る訳にはいかないでしょう」

グロリエはレクティファールの言葉に詰まると、彼を解放した。不貞腐れたように革張りの座席に座り、鼻を鳴らす。

「何だ、つまらん」

「ははは、グロリエ殿は宝石よりも弾丸がお好みか」

「勿論だ。魔導珠ならば幾らでも貰ってやるが、単なる宝石であれば同じ値段の矢弾の方が嬉しいぞ。兵たちにいつもより多く持たせ

てやれるからな」

グロリエの言葉には、少しの虚偽も感じられなかった。

この皇女は、宮殿の水晶灯の下で着飾って踊るよりも、戦場で炎を囲み、兵士たちに混じって踊る方が好みなのだ。

「この国は、兵士たちが飢えることがないと聞くが、本当か？」

「ええ、たとえ最前線でも、状況が許せば温かい食事を口にできます」

熱は敵の警戒網に引っ掛かることが多い。魔獣などを用いた索敵は帝国でも行われていることで、その魔獣は熱を見ることができた。

そういった心配がない状況でなら、常に温かい食事を兵士たちに与えることができる。それは皇国の密かな強みであった。

「――なるほどな、我軍がどうしても勝てない訳だ」

戦功による貴族への道は帝国にもある、報奨金制度もある、場合によっては女や酒も与えられる。占領地での略奪暴行も、士気の維持のため実質黙認されている。

だが、皇国ではその日の食事と休息を与え、家族からの手紙、通信など、戦って得るのではなく、今持っているものを守らせようとする。

どちらが正しいということはない。

攻めるならば帝国のやり方も間違いではないだろう。だが守るならば、皇国の手法も一つの正解だ。

正しいもの同士がぶつかったとき、勝つのはより強い想いでそれを願っている方だ。

これまでの戦いで言えば、負ければ奪われると分かっている皇国兵が、勝てば得られると思っている帝国兵に負ける道理はない。死んでも勝てば目的が達せられる皇国兵に対し、帝国兵は勝って生き残らなくてはならないのだ。

「貴様らに攻められて、陛下もその辺りのことを理解してくれるといいのだがな」

「クセルクセス一〇世陛下が理解しても、これまでの戦に慣れた帝国軍のお歴々は、理解できないでしょう」

「――悔しいが、その通りだ」

だが、グロリエは理解した。それはこれまでの視察で見せた表情

を見れば分かる。

あのファルベル平原での会戦以降、グロリエが精力的に軍内部を見て回っていることも、幾つか軍改革に繋がる発言を行ったことも、レクティファールを始めとした皇国首脳部には伝わってきている。それだけに、グロリエが相応の立場になったときどれだけ強力な敵となるのか、予想できない部分があった。

そのきっかけを作ったレクティファールにしてみれば、余計なことをしたと後悔したほどだ。

「戦うばかりであった自分が、何とも愚かしく思える。少し背後を顧みることができたなら、死なずに済んだ兵士もいただろうに」

グロリエは変わった。レクティファールはそう強く思った。

勇猛さや将としての華やかさに加え、思慮を重ね、自らの足場と背後を見ることができるようになった。

それにまだ二〇歳というから、まだまだ伸び代はあるだろう。

「二〇……ああ、そうか……」

レクティファールはふと脳裏に浮かんだ情報に何度も頷いた。

そのまま身を乗り出し、従兵の一人に声をかける。

「すまないが、通信機を貸してくれないか」

「はっ、どうぞ」

従兵が、腰に掛けていた通信機を手渡す。

グロリエが訝しげな表情で自分を見ていることにも頓着せず、レクティファールは一つの通信周波数を設定した。

ざざ、という雑音のあと、若い女性が通信口に出た。摂政秘書官の一人だ。

「――私だ、皇府を頼む」

秘書官がルキーティを呼ぶ間、彼は悪戯を思い付いた子どものような表情であったと、後に従兵の一人は語った。

◇　◇　◇

需品倉庫前に到着すると、そこには白衣を来た十名ほどの技官が待っていた。

代表の一人にグロリエが手の甲を与えると、一同は早速倉庫の中に入る。

「元帥殿下と上帥殿下にこうして直接ご説明できる日が来るとは……」

グロリエに手を与えられた黒髪に銀が混じり始めた初老の男は、そう呟くと、感極まったように泣き始める。

面食らったように目を白黒させるグロリエに、レクティファールは苦笑して彼は感動屋なのだと教えた。

レクティファールとして接するのは初めてであるが、男は騎士学校の教官も務めており、レクト・ハルベルンとしてならそれなりに付き合いのある技官なのだ。

「ルッツ技官、グロリエ殿は滞在時間が限られている。早速説明してもらえるか」

「はっ、失礼致しましたレクティファール殿下」

技官は慌てて涙を拭うと、近くの作業台の上に置かれていた魔動式の弩弓を示した。

「こちらがこのたび陸軍で調達が始まった〇八式連装型魔動式弩弓であります」

「ほう！」

興味深げに倉庫内を見回していたグロリエが、技官の説明に身を乗り出す。

うずうずと触れたいという欲望を抑えつけているグロリエの姿を見て、レクティファールはルッツに頷いてみせた。

「ルッツ技官」

「はい。グロリエ殿下、よければ試し撃ちなど」

「いいのか！？」

びん、とグロリエの髪の毛の一部が逆立った――ような気がした。

レクティファールは二度三度瞬きし、それが幻だったのだと自分を納得させる。

ごく一部とはいえ触手のように髪が逆立つなど、蛇髪族や獣人ぐらいのはずだ。

「ええ、勿論。的はあちらになります」

「うむ！　これは素晴らしい贈り物だぞ、レクティファール！」

「喜んでもらえて何よりです」

新しい玩具を与えられた子どものように、即席の試射場へと向かうグロリエ。

レクティファールはそのあとに続いて移動しながら、倉庫の入り口に姿を見せた皇王府の連絡員に目配せする。

連絡員はレクティファールの合図に気付くと、一抱えほどの木箱を倉庫の係員に手渡し、姿を消した。係員は連絡員に指示された通り、木箱を先ほど魔動式弩弓が置いてあった作業台の上に降ろした。

「レクティファール、撃っていんだな！？　だめって言っても撃つぞ！」

「どうぞ、係員の指示に従って下されば、いつでも」

「あはははは！」

グロリエは心底楽しそうに、技官の指示に従って給弾装置の握把を引く。がちんという金属の噛み合う音と共に、棒矢が装填された。

その音を聞いたグロリエの表情が、一気に変わった。

驚いたような表情に続いて、じっと真剣な眼差しで弩弓を観察する。

「これは……」

「殿下、矢が入ったままでは危のうございます」

「あ、ああ、そうだな」

グロリエは一〇メイテルほど先に立てられた鉄板に描かれた的を見据えると、教本通りの姿勢で弩弓を構えた。

木製の銃床を肩に当てると、被筒を左手で保持し、握把に右手を握る。まだ引き金に指を掛けないのは、誤射を防ぐためだ。

照星と照門で狙いを定めると、安全装置を連射に合わせる。単射ではなく連射にしたことでルッツ技官から一言あるかと思ったが、技官は特に注意を行うこともなく、グロリエの好きなようにさせている。俄然気分が良くなったグロリエは、舌で唇を湿らせると、用

心鉄の上に置いていた右手人差し指を引き金に掛けた。

「撃つぞ」

「どうぞ」

レクティファールの返事と同時に、グロリエは引き金を絞った。

棒矢が空気を引き裂く音は一つに繋がり、グロリエの耳元では給弾装置が軽快に矢を装填する。

ダダダ、という連続音は、給弾装置と発射機構から発せられた音だった。

それがほんの三秒ほど続き、グロリエは三〇本の矢を総て撃ち切った。

「ふむ、二割五分と言ったところでしょうか」

的の中で、中心近くに命中しているのは三〇発の内六発。それ以外は的の中にはあるものの、いささか中央からずれていた。

「連射ならば十分だ、単射ならばもっと上手く当てられる」

グロリエは満足気に艶かしい溜息を漏らすと、弩弓を技官に手渡し、「良いものを撃たせてもらった」とその性能を賞賛した。

棒矢そのものが命中軌道へと移動する皇国の魔動式弩弓では、ある程度の技術があれば標的に矢を当てることは難しくない。

単射設定であれば、その命中率は三ヶ月目の新兵でも五割を超える。

「しかし、これの給弾装置は」

「はい、帝国の機関砲を分析したものです。海軍の実弾式対空砲よりも、小型化という点では優れた可能性を秘めていると考えました」

少ない手間と資材で武器を作ろうとすれば、構造を簡略化するという手段は自然と採られる。帝国の機関砲はそういった理由の他にも、訓練で少し整備方法を齧っただけの若い兵士でも整備ができるよう、できるだけ簡略化した構造の機関砲を開発している。それに簡略化された構造は、故障も少なくなるのだ。

その点皇国の魔動式弩弓などは、魔導技術の恩恵を使い切るように複雑な構造をしている。整備は幾つかの部品を一梱包にしてその梱包ごとに交換する方式が取られており、整備の手間という点では帝国とさほど変わりはない。幾つかの梱包を交換するだけでいいのだから、それこそ新兵でもできる。

ただし、梱包化された部品は一つ一つが大きく、輸送に手間がかかるという問題があった。

「帝国の機関砲の構造を研究する内、我国の魔導式弩弓でも応用できる部分があることに気付きました。給弾装置の簡略化、銃身内の腔線への術式の刻印、一部素材の軽金属化など、この新式弩弓は帝国の技術なしでは完成しなかったものです」

ルッツは弩弓を作業台の上に置くと、台の下から皇国陸軍の紋章の入った楢の箱を取り出すと、その中に弩弓を清掃、分解して収めた。

「レクティファール殿下からの贈り物です。帝国と皇国の技術の結晶、是非グロリエ殿下にお持ち帰りいただきたい」

光沢のある布の上に収められた弩弓には、よくよく見れば小さく帝国の紋章が入っていた。

帝国の技術を用いて皇国で作られた皇国の武器に、帝国の紋章が刻まれ、帝国の帝族へと贈られる。

これまでの歴史に、こんな出来ごとはあっただろうか。

「レクティファール」

貰ってもいいものかと振り返ったグロリエは、そこに立つレクティファールが同じような楢材の箱を持っていることに驚いた。

中には、華美ではないが、美しい装飾の施された銀色の拳銃があった。

通常の拳銃よりもだいぶ大きな、帝国で試作されている自動拳銃に似た形状のそれは、まるで宝石のように輝いてグロリエの目を奪った。

「――貰い物で恐縮ですが、私は使いませんのでね。これも一緒にどうぞ」

「いや、しかし……」

「マティリエ殿には重すぎますし、グロリエ殿であれば使うことはできるでしょう」

レクティファールに促され、グロリエはその拳銃を手に取った。

そこで彼女は、その銃に弾倉らしきものがないことに気付く。

「これは……！」

「ええ、魔導銃です」

魔力を精製し、弾丸として放つ銃。

一丁辺りの生産費が高く、魔法技能を持つ者しか扱えないという理由から、軍では魔導師の近接防御武器として採用されているだけの代物だ。

「精製効率は特一級。小型化に成功した魔力増幅機構を内蔵しているので、おそらくグロリエ殿でも撃つことができると思います」

「いいのか？　これを分析すれば……」

皇国の魔導技術のほんの一部でも、解明することができる。

グロリエは挑発するようにレクティファールを見上げたが、その表情を崩すことはできなかった。

「これ自体は、すでに輸入することができる銃です。装飾などは一点物ですがね」

「――なるほど、抜かりはないか」

グロリエは魔導銃を取り出すと、それをくるくると回し始める。

確かに重い銃だが、グロリエにとってはむしろ軽すぎずに丁度良い。

彼女はそのまま拳銃を弄ぶと、一呼吸で体勢を整えてレクティファールの額に銃を突き付けた。

「――！」

技官たちに緊張が走る。

倉庫の片隅にいた兵士たちが慌てて動き出そうとするが、レクティファールがそれを制した。

「どうですか、良いものでしょう」

「――顔色ぐらい変えて欲しかったのだが」

「誕生日の贈り物にはしゃいだ年下の女性の悪戯くらい、どうということはありませんから」

レクティファールはそう言って微笑する。

そう、もうあと一週間もすれば、グロリエは誕生日を迎える。少し早いが、その贈り物だ。

グロリエはレクティファールの物言いに少し目を見開いたが、すぐに肩を震わせ始めた。

「くくく……はっははは！　面白い！　余をそんな風に評したのはお前が初めてだ！　それに、こんな心踊る贈り物もな！」

銃を箱に戻すと、グロリエは今度こそ耐え切れないと言わんばかりに大笑いする。

目尻に涙を浮かべ、心底楽しそうだ。

「残念だ！　マティリエではなく余がお前の妻になってやれば良かった！」

「それは光栄ですが、お父上が認めますまい」

「何、そうして緩やかに皇国を取り込む方法もある。今の状況では無理だろうが、将来は分からんだろう？」

「――そうですね、その通りです」

レクティファールがそう認めると、グロリエは今度こそ大いに笑った。

お互いにそんな将来は来ないと分かっている。

それでも、馬鹿げた将来を語るぐらいに愉快な気持ちだった。

「お前にならマティリエを預けてもいい。くれぐれも頼む」

グロリエは一頻り笑うと、レクティファールから銃の入った箱を受け取った。

そして真っ直ぐにレクティファールを見詰めながら、そう願った。

「できるだけ彼女が健やかでいられるよう、努力しましょう」

「ああ、それでいい」

約束などできはしない。

二人は両国の間に好ましからざる事態が起きれば、間違いなく戦場で相まみえることになる。

グロリエはレクティファールの生命を狙うし、逆もまた然り。

マティリエとて、帝国との間で何かが起きれば、その生命の保証はできないのだ。

「余もこの銃の分ぐらいは、お前のために働こう」

「では私も、グロリエ殿の可愛い姪御のために汗を流しましょう」

それは利敵を意味するものではない。

互いのために、互いを敵として全力で戦うという誓いだ。

グロリエが勝てば、皇国に対する交渉でマティリエの生命を救えるかもしれない。

レクティファールが勝てば、マティリエの存在は無価値になる。

たった一人の少女を鎹に、二人の英傑は儚い約束を交わした。

◇　◇　◇

翌日、グロリエとマティリエは皇国をあとにする。

皇国が手配した中立国籍の客船による船旅だ。

その旅の最中、マティリエは叔母が嬉しそうに銀色の銃の手入れをしている光景を、何度も目撃することになる。

第四話「新星胎動」

「――殿下、お車の準備が整いましてございます」

彼は傅いて、自らの仕える若き君主を呼ぶ。

長身の均整の取れた体躯。旭日のように輝く赤橙の長髪。夜色の艶やかな翼。そして、覇気に満ち溢れた碧眼と声。

そのどれもがこれからの歴史の中で燦然と輝き続けるのだと思うと、彼の胸ははち切れそうになる。

君主が王都を追われて二十三年。その頃の君主は、まだ母の胎内にいた。

禁忌の子と呼ばれ、生まれることさえ望まれなかった君主が、ついに王都へと舞い戻る。

この国の王として、人々の上に立つ者として。

「ああ、分かった」

こんな薄暗い部屋の中で過ごす君主を見るのは辛いものだった。

本来なら旭天の下で人々を導くはずの主人が、身を隠し、咎人の

ように生きなくてはならない苦痛は如何ほどのものか。

「ようやく、ようやくだ」

君主の声は、歓喜に震えていた。

膝を屈しながら、彼はその言葉に深く同意する。

ようやく、この国は本来の主人の下へと還るのだ。

戦乱絶えぬ今の時代。世界のどこかでは常に強国同士が属国を従えて戦を重ねている。

そのような時代に、あの愚昧な王子では太刀打ちできない。

我が主君だけが、この国を栄光の途へと導ける。

「あの男、キャベンディッシュには、後々礼をしなくてはな」

「は、殿下が至尊の座へと登られれば、その機会は幾らでも」

遙か彼方の国にいる協力者。

細い細い伝手を辿って主の存在を知り、幾人もの手を通して自分たちに資金と情報を提供し続けた男だ。

その目的は定かではないが、僅か二十余年で主が力を蓄えられたのは、あの男の力があってこそ。

だが、この辺りで借りを返しておかなければ、後々余計な利子まで付いてくるだろう。

「――馬鹿な廷臣どもに王宮を追われた母は、今の我を見てどう思うか。褒めてくれるだろうか」

「ご母堂様も殿下のお姿を見ればさぞお慶びでしょう。ご立派になったと」

王都を落ちる君主の母に付き従ったのは、単なる身内の同情からではない。

いずれこの国は滅んでしまう、そう憂いたからだ。

特権階級と化した貴族。派閥が幅を利かせる軍部。王宮は貴族や軍人の権力争いの場となり、西域三国の一角であった〈マルドゥク王国〉の権威には罅が入っている。

だからこそ、当時母の胎内にいた君主に賭けた。

王国を守り続けてきた古き星神〈アグリウム〉の託宣。誰もが、神官さえも聞き取れなくなった古き神の声を、彼は確かに聞いたのだ。

彼こそが、この国を救うにたる人物であると。

「良い。では往くぞ」

「ははっ」

静かな、確固たる覇気に満ちた声で、宣言する。

「『凱旋』だ」

薄暗い歴史の影から、光差す歴史の表舞台へ。

付き従う者たちから旭髪の廃王子と呼ばれ敬われる青年が、自らを逃亡者へと追い遣った『歴史』に、牙を突き立てた瞬間だった。

◇　◇　◇

スヴァローグ公爵領公都〈スヴァローグ〉。

鉄道網の要地として、ひいては皇国の西と東を繋ぐ中継地として栄えてきた街。

皇国有数の穀倉・畜産地帯であるスヴァローグ公爵領の各地から様々な農畜産物が集まり、皇国中へと出荷される皇国の農畜産物の中央市場としても知られている。

その〈スヴァローグ〉の中心に、紅龍宮〈ルビーパレス〉はあった。

樹々と一体化したようなその城は、元々この地にあった大樹と構造的・魔導的に融合したものだ。

地下深くまで根を伸ばした大樹はその根から魔力を汲み上げ、紅龍宮地下の都市魔導炉へと供給している。その代わりに都市の人々は大樹を守り、その恵みに感謝しているのだ。

大樹の枝がそのまま建物の基礎として使用されている紅龍宮西塔。その六階の窓から水晶硝子をぶち破って人が飛び出した。

「でぇてぇえけえええええええっ！！」

硝子が破れる前に聞こえた声は、この城の主フレデリックのもの。

そして硝子を破って飛び出してきたのはこの国の主レクティファールであった。

「はっはっは、婿舅問題は根が深い」

そう呑気に口を動かしながら、落下するレクティファール。

上の窓から騎龍兼婚約者の一人であるファリエルが父親を怒鳴りつける声が降ってきたが、誰もレクティファールを心配している様子はない。

信頼されているのか、単に放置されているか、レクティファールは仕方なく浮遊術式を用いて落下速度を鈍らせ、軽い足音と共に庭園の一角に着地した。

「やれやれ、折角婚前の挨拶に来たというのに」

頭を振り、飛び出した窓を見上げるレクティファール。

ふと、その窓から紅い髪がひょっこりと顔を出した。

「フェリエル……？」

ひらひらと手を振るもう一人の騎龍兼婚約者に手を振り返す彼。

すると何を思ったのか、フェリエルはそのまま窓から身を乗り出し、空中に身を躍らせた。

「は……？」

フェリエルも、龍の姿であれば空を飛べる。

それ故に驚きはしても特に心配はしていなかったレクティファールだが、待てども暮らせどもフェリエルの落下速度は変わらない。

圧縮し、引き伸ばされた思考の中で、レクティファールはようやくフェリエルが自分に手を振った理由に気付いた。

よろしく、そう言いたかったのだ。

（ああもう、あとでフレデリックに文句を言われるのは私なんですがね）

レクティファールは上空に手を翳し、そこから伸ばした光り輝く力場の紐をフェリエルの身体に巻き付けた。

減速、減速、減速。

フェリエルの身体に負担が掛からないよう何度も術式を分散して行使する。

その速度がほぼ安全域に入ったところで、レクティファールは両腕を前方に伸ばし、ちょっと無茶をして男の気を惹いた女を抱き留めた。

ちょっとした感想を添えて。

「――体重が三〇二グルームほど増えましたね」

「そこは幸せ太りということにしておくのがいい男だ。そして、わたしはいい男に嫁ぎたい」

「努力しましょう」

フェリエルはレクティファールの腕から降りると、外出着の乱れを整え、レクティファールの隣に立った。

普段は邪魔にならないよう纏めている髪は自然のまま背中に流れ、薄茶の上着と同色の長傘袴の上に天鵞絨の娘外套を引っ掛けた姿は、良家のご令嬢と言って差し支えない。

普段は軍装の上に白衣という格好ばかりで、婚約者たちの中では最も年上に見える彼女だが、こうしてめかし込んでみればメリエラと同年代にしか見えない。

「ファリエルの採寸にはまだ掛かりそうだ、父に説教しているからな。それに今戻っても騒ぎに燃料を注ぐだけだ。丁度いい機会でもあるし、街を案内しよう」

「勝手に出かけてもいいので？」

「母に許可は貰った。この城で一番偉いのは、二人の母だ」

「――身につまされる言葉ですね」

後宮での地位が最近低空飛行を続けているレクティファールにとってみれば、フレデリックの境遇は同情を禁じえない。

「さて、まずは南市場から見て回ろうか。他国の農畜産物も色々入ってきてるから、後学のためにもな」

「分かりました」

「だがその前に、だ」

フェリエルはレクティファールの髪を撫でると、「まあ、これくらいなら大丈夫か」と呟き、自分の掛けていた眼鏡を差し出す。

「君は目立ちすぎるからな、とりあえずこれで変装だ」

「――変身魔法でも使った方が早くないですか？」

「魔法に頼り過ぎるのは感心しないぞ。それに、眼鏡一つでも人の印象は変わるものだ。名乗らない限り君は単なる摂政のそっくりさんでしかない」

「なるほど。ですが、大きさは合うのですか？」

フェリエルから受け取った眼鏡を透かし見てみれば、それは屈曲硝子の度が入っていない装飾眼鏡であった。

確かにこれなら誰が掛けても同じだ。意匠もどちらかと言えば男物に近く、レクティファールが掛けて違和感はない。

「掛けた人の顔に合わせる魔導具の一種だ。だから心配せず掛けてくれ」

「ふむ」

言われるがままに眼鏡を掛けるレクティファール。

フェリエルの言う通り、眼鏡はレクティファールに合わせて大きさを変え、一番無理の掛からない形状になるとその形を固定した。

「龍族が眼鏡を必要とするほど視力が落ちるという話はわたしも聞

いたことがない。だから、龍族が眼鏡を掛けていれば、それは装飾眼鏡と思って間違いないぞ」

「それはそうでしょうね。しかし何でまた」

レクティファールの質問に、フェリエルは肩を竦めた。

「若すぎる医者は患者に不安を与えるからな。研修医時代に散々この医者で大丈夫なのかと言われたものだから、少しでも年上に見えるよう、色々工夫したんだ」

涙ぐましい努力と言うべきか、単に面倒ごとを避けただけと見るか、レクティファールは悩んだ。

ファリエルの方はといえば眼鏡を掛けることもなく、しかし髪型や服装などで歳を上に見せていたから、おそらく姉妹揃って同じようなことを言われたのだろう。

「複雑なものだ。わたしたちも女だからな、あまり年上に見られるのは面白くない。だが患者に不安を与えるのは医者として失格。色々悩んだよ。今では慣れたがね」

「確かに、随分と堂に入った女医ぶりです。迫力さえ感じますね」

あの姿で診療室に陣取られ、こちらを睨めつけられたら、医者嫌いの者ならば身体が竦んで動けまい。

特に医者嫌いでもないレクティファールにとっては、単に『堂に入った』程度のものであるが。

「――まあ、わたしのことはいい。気楽に街を回れる機会は限られているんだ。さっさと行こう」

「そうですね。フェリエルと逢引などそうそう機会を得られるとは思えませんから、楽しませてもらいます」

「ふ、それぐらい楽しみにしてもらえれば、わたしも案内する甲斐があるというもの」

フェリエルはレクティファールの腕に自分のそれを絡め、自信に満ち溢れた笑顔を見せた。

同時にレクティファールの腕を自分の身体に押し付け、その巨大な存在感をレクティファールに示す。

「――ちなみにファリエルの方がでかいぞ」

「――どう答えろと」

「違いない」

そう言って笑うと、フェリエルはレクティファールを引き摺って歩き出す。

庭園から城の通用口までの間。二人は幾人もの使用人に目撃され、その楽しそうな様子は後々までの話の種となるのだった。

◇　◇　◇

恵みの秋から寂莫とした冬へと季節が変わっても、〈スヴァローグ〉の農畜産物市場は活気を失わない。

冬が旬の農畜産物や、秋に収穫されたものが市場に活気を与えているのだ。

特に南市場は巨大な大樹の根を骨組みに屋根を作り、雨や雪の日でも気にせず商いができる場所で、市場で手に入る季節の食材を使った飲食店も数十件並んでいる。

休みの日となれば家族連れで賑わい、平日でも行商人や地方からの買い出し客で人の姿は多い。

「今年はミラ平原産の麦や米が内乱の影響で不作だったから、その分別の産地のものが多いな」

フェリエルはさながら自分は新婚の若奥様です、とでも言うようにレクティファールの腕を占領し、市場を練り歩いていた。

事実、二人を若夫婦とみたのか、商店主のほとんどは身なりの良い、そして容姿も優れたフェリエルを客として口説こうと躍起になった。

夫は胃袋で操るものというのは、この国では建国以前より言われ続けていることで、商店主たちはフェリエルが常連になればその主婦仲間も取り込めると踏んだのだ。

〈スヴァローグ〉にも、皇国の大都市の例に漏れず高級住宅街というものがある。フェリエルの姿を見れば、夫の休日を利用してちょっと下町の市場まで足を伸ばした新妻と見ても不思議はない。フェリエルもまた、家は城の方――件の高級住宅街は城のすぐ西にある――から来たと言い。商店主たちから色々良い扱いを受けていた。

レクティファールも大いに冷やかされ、やっかみの視線に晒された。中にはレクティファールの手を握ってお釣りを渡し、そのまま手を握りつぶさんと全力を傾けた店主もいたほどだ。もちろん、レクティファールは礼儀正しくやられたことをやり返した。

「こんなに買って、どうするんですか」

「城の厨房で使ってもらう。今日は泊まっていく予定だろう？　我が街の自慢である五大市場で扱っている食材を是非君に食べて欲しいんだ」

「――流石に食べ切れないと思うのですが」

偽装用の住所に送ってもらった食材は既に相当な量になっている。とてもレクティファールと紅龍公一家では食べ切れない。

「使用人や城の警備兵にも分けてやるさ。摂政と同じものを食べて、少しでも皇室を近しいものとして見てもらいたいからな」

「色々気を遣わせてすみませんね」

「気にするな。皇妃とはそういうものだ」

フェリエルは得意気に笑うと、薬草問屋や商店が並ぶ通りへとレクティファールを案内する。

これまでの通りと違い、薬草香草の香りが入り交じる不思議な空間だった。

「南市場は薬草関係の問屋か商店が他の市場より多い。そういう意

味では、ここが南市場の中央通りだな」

丸干しにされたよく分からない生き物がぶら下がる商店を横目で見ながら、フェリエルはどんどん先に進んでいく。

勝手知ったる行きつけの店でもあるのかとレクティファールは考えたが、進めども進めどもフェリエルの足は止まらない。

「どこに行くので？」

「もっと奥だ。ご禁制の品まで扱う店があってだな」

「――あの、一応私、この国の司法の全権代行してるんですけど」

「気にするな。度が過ぎなければ必要悪だ」

フェリエルもそういった店が必要なことを理解するまで時間がかかった。

禁制品というのは、人の人格さえ破壊するような薬物、人生を破壊するような薬物を含んでいる。

精神薬や昂揚薬、媚薬や回春薬なども強力なものは禁制品指定を受けていて一般の市場には出回らない。しかし、それを必要として

いる者たちがいるのも事実だ。

そういった者たちに薬を提供している店が、フェリエルの目的地だった。

「そろそろだ」

フェリエルが言った通り、通りから逸れた裏道の奥に、看板さえない一件の商店があった。

事前に情報を得ていたからこそ辛うじて商店と分かったが、何も聞いていなければ民家と思ったかもしれない。

「邪魔するぞ、店主」

安っぽい硝子戸を開き、フェリエルはレクティファールを引き摺って店に入る。

店の中は三方が格子状の引き出しで占められ、店の外よりも強い薬草や薬品の匂いで満ちていた。

「お嬢か……珍しいな」

のそり、と店の奥から顔を出したのは、小柄な壮年の男だった。

小人族らしい短躯に針金のような髭が口の周りにびっしりと覆い、表情を隠してしまっている。

男は接客台に立つと、フェリエルを見、続いてレクティファールを見た。

そして、二人が返答に困る言葉を次々と吐き出した。

「若いのに、旦那のアレが駄目んなったのか？　お嬢が無理させたんだろう。本当に最近の若い奴は腰振ったり振らせたりばかりで雅さがない。だが、まあ、それが若いってことか。とりあえず旦那の方からだな。それならいいやつが今朝入ったぞ。常連の誼で安く定期供給してやる」

こういうのは、継続が大事だからな――と言いながら、男は台を使って天井近くの引き出しを漁り始めた。

呆けていた二人は意識を復帰させると、フェリエルが珍しく頬を染めて店主を怒鳴りつけた。

「こら、客に向かって失礼なことを言うな！」

全くその通りだと頷くレクティファール。

これまであまり気にしたことはなかったが、ああいう評価をされ

ると非常に腹立たしい。

「こいつのアレは現役の女軍人から最上級の『花』の腰まで砕く逸品だぞッ！」

「って、そっちですか！？」

再度頷こうとしたレクティファールがフェリエルの言葉に驚く。

「わたしなど、今から楽しみだったり戦々恐々だったりで非常に不安定だッ！」

「何言ってるんですかこの人……」

嘘を言っていない辺りが始末に終えない。

「ん？　何だお前さん、いいとこのお坊ちゃんなのか」

「まあ、世間一般ではそうなるんじゃないかと」

皇太子が果たしていいとこのお坊ちゃんであるかどうかは、議論

の余地はあるが。

「髪の色も白に近いし、まあ、納得できなくはないな」

台から降りると、店主は接客台に戻ってフェリエルを見上げた。

「てーことは、家内に用事か？」

「う、うむ。この間教わった薬を作ってみたんだ。できを見てもらいたい」

「あいつなら奥で調合しているよ。勝手に上がってくれ」

「ああ、それじゃあお邪魔する」

レクティファールにすぐ戻ると告げ、フェリエルは遠慮の欠片も見えない動きで店の奥へと入っていった。

すぐに「よく来たわねー」という中年女性の声が聞こえたが、レクティファールは所在無さ気に店内を見回すしかすることがない。

店主の視線に晒されたまま見本品として棚に陳列されている薬瓶を一つ一つ眺めては、それを〈皇剣〉で照合するという動きを繰り

返した。

そして二〇個目の薬瓶に差し掛かった頃、店主がおもむろに口を開いた。

「――旦那、お嬢とは長いのか？」

それが付き合いの長さを訊ねているのだと気付き、レクティファールは振り返りながら答えた。

「まだ、一年と経っていません」

「ふん？　それにしちゃ、随分と仲が良さそうだが」

「こういうのはただだらだらと長い時間を過ごせば良いというものじゃないでしょう。確かに時間は大切ですが、人と人が歩み寄るきっかけなど、一瞬の濃密な時間の中にもあります」

もはやフェリエルと死以外で別れることはない。

それを決めたのは、ほんの一時間にも満たない間の出来ごとだった。

「若いのに知った風な口だな……いや、それを言うだけの何かがあったのか……」

店主は髭を撫でながら深く接客台の椅子に腰掛け、天井を見上げる。

薄暗い天井には、掃除しきれなかった蜘蛛の巣があった。

「あんた、軍人か？」

「まあ、そんなところです」

軍籍を持っているのが軍人ならば、間違いってはいない。

摂政には上帥という階級が充てられているからだ。

「だったら、最近の西域の動きについてなんか知ってるか？」

もちろん、込み入ったことは訊かないけどな――店主は退路を確保しながら、レクティファールに問う。

問われたレクティファールは、脳裏に軍や情報院からの報告を広げて首を傾げた。

最近の報告の中に、これと言って変化を示すものはなかった。

未だ分析中の情報の中になら、ひょっとしたら何かあるのかもしれないが。

「いえ、特には」

「――そうか、じゃあ、俺の考え過ぎか」

「何か？」

今度はレクティファールが訊く側になった。

諜報とはこういった一般人からの情報収集も重要だ。むしろ、こちらが本分と言ってもいい。

情報員などを使った諜報活動は、ある意味では非常手段に近い。

「いや、西域の仲間に聞いたんだが、どうにも最近軍への薬の納入が増えてるらしい」

「入れ替えではなく？」

使用期限の切れた薬品を入れ替えることは、ある程度余裕のある軍ならばどこでも行っている。

必要なときに必要な役目を果たせない薬品に意味などないのだ。

「それにしては量が多いらしい。糧秣なんかの納入はいつもより少し多い程度で、ここ最近のいざこざが原因なのかと思ったが、薬はな――高い分使う宛てがないものを買うってことは考え難い。少しくらいの違いなら糧秣と同じように考えられたんだが、な」

「――ふむ」

では、薬を大量に消費する予定があるのか。

それも、これまでの状況とは趣の異なる予定が。

「お嬢もあれで軍人だからな。何かあれば西域に行くってことも考えられる。だから何か知ってるかと思ったんだが……」

「お役に立てず申し訳ない。ですが……」

レクティファールは、こればかりは言わねばならないと思い、口を開いた。

「彼女は大丈夫ですよ。それだけは保証できる」

店主はレクティファールの眼をじっと見詰めると、やがて接客台の引き出しを開けてその中から小さな小瓶を取り出した。

「――そうかい、だったらこれ以上突っ込むのはやめにしとくよ。これは、そうだな……お嬢への結婚祝いとでもしておこうか」

「本人に渡さないのですか？」

「ばーろー、女に使う薬を女に渡すやつがどこにいる」

レクティファールの肩が落ちた。

それに気付いた店主は、しかし、レクティファールを叱咤するように説明を続けた。

「いいか？　使い方は簡単だ。無味無臭だから、一滴だけ茶や水に溶かせ。酒なら二滴だ。これで万事うまく行く」

「あの……」

「おっと、お嬢が戻ってきた。ほら、さっさと仕舞え」

言われるがまま、レクティファールは小瓶を懐に仕舞い込む。

そして、仕舞い込んでから後悔した。

そのまま置いておけば、持って帰らずに済んだのだ。

「戻ったぞ。――ん？　どうかしたのかレクト」

「いえ、ちょっと店主と世間話を」

「そうか、この店主は見かけによらず博識だからな。色々面白い話を聞けただろう」

「おい」

店主が文句を言うのも聞かず、フェリエルは上機嫌にレクティファールに絡みついた。

どうやら薬は上手く調合できていたらしい。

「そろそろ陽が沈む。父が騒ぐ前に戻ろう」

「ええ、そうしましょうか」

フレデリックがまだ暴れ出せば、余計な時間を取られてしまう。

たとえ公妃よって一瞬で鎮圧されるにしても、面倒ごとは少ない方がいいだろう。

「そういう訳だ。また顔を出すよ」

「――ああ、今度はガキの一匹でも連れてこい」

「そうすぐにはできないぞ」

「さて、それはどうだろうな」

店主が意味ありげな笑みをレクティファールに向ける。

レクティファールは冷や汗を垂らし、沈黙を守った。

「何かあったのか？」

「いえいえ、別に」

レクティファールの言葉に訝しげな表情を浮かべながらも、フェリエルは父親が癇癪を起こす前に帰宅する方が優先だと思い直した。

「では、また」

「失礼します」

「おう、毎度」

店主に見送られて店の外に出れば、確かに半透明の屋根の向こうに見える空は赤く染まっていた。

「さあ、帰るぞ」

「ええ」

「そうだ、まだ少し時間があるからちょっと下着の店に寄って行こう。まだ買わないにしても、君の好みを確認しておきたい」

「え……？」

「わたしもファリエルも、中々大きさに合うものがなくてな。君の好みを確認しておいて、後宮の方で手配してもらおう」

「いえ、あの……だったら戻ってから目録でも見れば……」

「莫迦を言うな。下着の触り心地と外し心地は触ってみないと分からないだろう」

「うわーい、なんて男らしいお言葉」

二人並んで進む道の先に、温かい場所がある。

しかし少し立ち止まって空をみあげてみれば、もうすぐ、夜が来る。

◇　◇　◇

翌日、星天宮に戻ったレクティファールの元に一つの報告が上がってきた。

〈マルドゥク〉にて軍事政権側に動きがあり、それに呼応するように、前線の部隊にも想定外の動きが見られるというものだ。

レクティファールは直ちに皇国の枢機たちを招集し、対応を検討し始めた。

だが、その動きは無駄になる。

この騒動の原因が、直接彼の前に現れたからであった。

第四話「新星胎動」（後書き）

業務連絡です。

書籍化に伴い、第一章十話から十八話までを、十月二十日２３：００を以てダイジェスト版へと差し替えますので、よろしくお願い致します。

『デアの恋薬』

始まりは、ちょっとしたできごとだった。

「ふんふんふん～ふふん」

上機嫌に鼻歌に乗せて身体を揺らしているのは、特別護衛旅団第一大隊所属の侍女少尉。

この日彼女は、昼近くになって〈スヴァローグ〉から戻った摂政レクティファールの外出着を、洗濯担当の部隊へと引き渡すべく整理していた。

時折物入れの中に重要なものが入っているのは、どこでも変わらない。レクティファール本人が入れなくても、ちょっとした悪戯心を発揮した妃候補がたまに手紙などを忍ばせているのだ。

もちろん彼女たちからしてみれば単に悪戯のために書いた手紙だが、妃候補から摂政へと贈られたものに違いはない。

後宮へと配属になって三ヶ月目のこの侍女少尉も、上官からの命令と作業手順書に従って確認作業を行っていた。

「――あれ？」

そこで、彼女は上着の内側物入れの中に固い感触を感じ取る。

失礼します、と一言断って手を入れてみれば、そこから出てきたのは茶色の硝子でできた小瓶。

「――？」

光に透かしてみれば、中に液体が入っていることが分かる。

しかし、彼女はそれを開封するようなことはしなかった。

訓練された兵士のように粛々と、部屋の片隅に置かれた緊急用の通信機を取り上げ、侍女管理本部へと連絡を入れたのだ。

危険物ではないという保証はどこにもない。

もしも摂政を狙った爆発系の魔法薬であれば、大問題だ。

「――こちらウェイゼル〇一。殿下の居室にて不審物を確認しました。特別処理班の派遣をお願いします」

少尉は手のひらから熱を与えないよう、外していた手袋を付け直す。

薄手の白手袋のようだが、そのまま熱した鉄を掴めるほどの耐熱遮熱性能を持っている。

ここで爆発したら自分は二階級特進で大尉か、せめて結婚したかったな――彼女はそんな冷めた、しかし切実な思考を弄びながら、特別処理班の到着を待つのだった。

◇　◇　◇

皇城で仕事を終えたレクティファールを渡り廊下で待っていたのは、非常に珍しいことではあるがマリカーシェル一人であった。

常であれば各皇妃護衛小隊の小隊長か副長が旅団長と共にレクティファールを出迎えるのだが、今夜は少し愁眉を寄せた彼の腹心が一人だけ。

それを疑問に思いながらも、レクティファールは肩に引っ掛けていた外套をマリカーシェルに手渡した。

「――何かあった、という訳ではなさそうですが」

「ええ、殿下にご報告するような事態は何も。姫さま方は皆さん心身ともにお健やかで、立て篭もりの兆候もございません」

「それは重畳。では、マリカーシェルのその眉間の皺はどういうことです？　あまり深く皺を寄せると、痕になりますよ」

「は、お気遣いありがとうございます」

自室へと向かうレクティファールのあとに続きながら、その言葉に答えるマリカーシェル。

やはり、その声は少し固い。

（はて、今日はまだ何もやっていないような気がするのですが……）

レクティファールは背後から発せられる鈍い色の威圧感に首を捻る。

色々記憶を漁るも、マリカーシェルをここまで不機嫌にさせる理由に辿り着かない。

（厨房で調理担当の侍女に味見という名のつまみ食いをさせてもらったことでしょうか？　それとも庭師の侍女と半時間ばかり雑談をしたことでしょうか？　あ、マリカーシェルが近接戦闘用の侍女服を着用しているのを見てしまったことでしょうか？）

ちなみに、近接戦闘用侍女服とは、ウィリィアなどの接近戦を主任務とする侍女たちが着用する丈の短い侍女服のことだ。

もちろん、旅団長であるマリカーシェルが普段着用することはな

いのだが、近接戦闘訓練に参加するときは他の団員の手前、彼女もそれを着る。

（似合ってたのになぁ……そもそもそんなに怒るようなことですかね）

歳若い団員たちに混じって動き回るマリカーシェルは、他の団員にはない流麗さがあった。

動き一つ一つが洗練され、単に無駄を排したのではなく、動作の効率的な接続を実現した身のこなし。

レクティファールが思わず拍手してしまうほどに、見事なものだった。

その拍手を受けたマリカーシェルは珍しく顔を真っ赤に染め、逃げるように訓練場を出て行ってしまったのだが。

「あの……別にマリカーシェルを辱めようとかそういう意図で拍手した訳ではないのですよ？」

「何を仰っているのですか？」

「いえ、この間の訓練の……」

「――ッ！　いいえ、殿下。それが理由ではありません」

マリカーシェルは一瞬動揺を見せたものの、すぐにそれを引っ込めて生真面目な旅団長の顔に戻る。

レクティファールは、たぶん、ほんの少しだけ残った頬の朱には触れないのがいい男なんだろうなと思った。

「では、何か？」

「ここでは少し……」

「ふむ、そうですか」

レクティファールは頷くと、自室へと向かう足を少し早めた。

背後に続くマリカーシェルの頬はまだ赤いだろうか、そんなことを思いながら。

◇　◇　◇

「殿下、これはどこで入手されたのですか？」

マリカーシェルは、レクティファールが自室の執務机に着くなり、何の前置きもなくそう切り出した。

言葉と同時に彼女が差し出したのは、レクティファールが〈スヴァローグ〉で手に入れた小瓶だ。

「げ」

しまった、という表情を浮かべるレクティファール。

それを見咎めたマリカーシェルは、ずいと執務机に身を乗り出してレクティファールに迫る。

「殿下、これが何かご存知なのですか？　もしもそうなら、どなたにお使いになるご予定で？　皇府閣下はこの薬のことを――」

「いやいやいや、ちょっと待ってください。マリカーシェルはこれが何か知っているのですか？」

両手でマリカーシェルを押し留め、レクティファールは疑問を口にする。

彼自身は、まだこの薬の正体を知らないのだ。

「もちろんです。わたくしも女の端くれ、神話級の恋薬を知らないはずはございません。もちろん、部下たちもほぼ全員が知っております」

「こ、恋薬？」

何だそれは、レクティファールの脳裏にいくつもの疑問符が浮かぶ。

マリカーシェルは主君のその様子に、どうやらこの方は何も知らないらしいと当たりを付けた。

「ご存知なかったのですね。良かった……」

「え、本気で安心しておられます？　何なんですかこの薬、そんなに不味いものなんですか？」

店主の様子から普通の薬ではないと思っていたが、この沈着冷静が侍女服を着たような侍女准将がこれほど動揺する品だとは思わなかった。

「本当に……本当に、ご存知ないのですね？」

「ええ、そもそも恋薬だったということも今知ったところです」

恋薬とは、ある種の精神作用型魔法薬だ。

程度の差はあるが、総じて特定の異性に対する情愛を増幅することが、その効能である。

世間一般の言葉で表すなら、惚れ薬だ。

「ええ、不味いです。これは単なる恋薬ではありません。神話にその名を残す『デアの恋薬』です」

「『デアの恋薬』……」

「はい。神話の時代、人と女神を結び付けた原初の恋薬なのです」

当時、人と神の距離はひどく遠いものだった。

人々は神を実在のものとして認識しながら、それに触れようとはしなかった。

神々もまた、自分たちよりもか弱い人の子に干渉することをよしとせず、両者の間には埋めようのない溝が存在した。

それの溝を初めて超えたのが、女神デアと人の男グローだ。

二人は神と人の領域の中間にある湖で互いの姿を見付け、同時に恋に落ちた。

しかし二人の間には種族の壁と、何よりも種族間の心の壁があった。

二人がどれだけ互いを想おうとも、それが成就することは考えられなかったのだ。

何度も湖で逢瀬を繰り返す二人だが、やがてそれは両種族の長に知られてしまう。

結果、デアは神々の領域の最奥に幽閉され、グローは最果ての荒野へと追い遣られた。

「そのとき、神々の中で二人の想いに同情した者がおりました。相手を愛しく思う気持ちに種族など関係ない。そう言って神々の長を説得したのです」

その名を、賢神カタグラフ。

今も人々から知識の守護神として崇められる神々の一柱だ。

「神々の長は、カタグラフの言葉を聞いて、デアに一つの試練を課

しました。それは彼女のグローへの想いを計るための試練、ここにあるものと同じ恋薬を飲み、神々の中でもっとも優れた十柱の男神の求愛を跳ねつけよというものです」

その十柱の中には、デアが幼いときに想いを寄せていた男神も含まれていた。

神々が固唾を呑む中、デアはその試練を受けた。

「結果は、まあ、敢えて言うまでもありません。デアは十柱の求愛を跳ね除け、荒野から一路駆け戻ったグローと再会したのです」

再会を喜ぶ二人。

しかし、そのときデアの身体に変化が現れた。

「まるで愛情が熱と形を持ったかのように、デアの中でグローへの想いが猛りました。それこそ気が狂うほどにグローを愛おしみ、失った時間を取り戻すように彼を求めたのです」

恋薬と呼ばれながらも、この神薬はむしろ男女の情愛を増幅する媚薬として有名であった。

神さえ狂わせる愛の情薬。これまでの歴史の中で幾度も登場し、しかし、こういった話にありがちな悲恋を一度も生んでいない稀有

な薬でもある。

「この薬は、相手に対する一定以上の愛情がなければ意味を成しません。しかしその分、相手への愛情がその一線を越えているなら……」

「越えているなら……？」

「――三日三晩は……その、ええと……」

「分かりました、言わなくていいです」

紅潮した頬で視線を彷徨わせるマリカーシェルを、レクティファールは制した。

これ以上の説明は不要だ。

「では、これがここにあると知られれば……」

「はい。時期から考えましても、殿下が新たな妃を探していると皆は考えるでしょう」

というよりも、敢えてこの薬を持っていると示すことで花嫁探しの布告代わりにする君主は多かった。

他にも愛の告白で使用される紅玉薔薇を育て始めたとか、新しく離宮を建設し始めたとか、直接的な文章で布告するよりも体面がいいということで、こういった手段は古くから用いられている。

「では、どうしましょうか」

「売り払う……訳には参りません。市場に流れれば混乱が起きます」

「それほどですか」

「この薬を巡って戦争が起きたこともあるのです。いいですか殿下、この薬は愛情さえあればどんな男女同士でも結びつけるのです。それこそ、二人にそれぞれ家族があろうとも、です」

「それは……また、困りましたね」

思わずレクティファールは天を仰ぐ。

確かに使いどころを間違えると、とんでもないことになる。

本人たちが幸せになっても、周囲がそれを受け入れられるかどう

かは別問題なのだ。

『デアの恋薬』は、悲恋は生まずとも悲劇は生んでいる。

「とりあえず、今日のところは宝物庫への薬品保管室に入れておきます。殿下が必要と思うなら、わたくしに一言お伝えいただければご用意致します」

「ははは、そこまでの物ならマリカーシェルにでも飲ませたいものですが……」

それは、変に緊張した場の空気を緩めるための冗談であった。

常に冷静で、掴みどころのない侍女准将をからかうための。

「――殿下のご命令であれば」

しかし、マリカーシェルは真剣な眼差しでそう答えた。

冗談だと気付いているのか、レクティファールは思わずその目を覗き込む。

いつも通りの、忠実な腹心の瞳がそこにあった。

「――命令で飲んでも、効果はないでしょうね」

レクティファールは溜息を吐き、力なく手を振ってマリカーシェルを下がらせる。

「ええ、わたくしもできるなら、命令などで飲みたくはありません」

小瓶を丁寧に布に包むと、マリカーシェルはそう答えた。

まあ、そうだと思いますよ――レクティファールはそう呟き、しかしすぐに何かに気付いたように顔を上げた。

マリカーシェルは、ちょうど扉を閉めるところだった。

「では、お休みなさいませ」

扉が閉まる。

レクティファールはしばらく扉を見詰め、再度溜息を漏らした。

「――命令じゃなきゃ、飲んでくれたんですかね」

それはあまりにも自意識過剰か――レクティファールは自嘲気味

に笑い、侍女に入浴の準備を頼むべく通信機に手を掛けた。

そして、彼は翌日後悔する。

すぐに廃棄を命じていれば良かったと。

◇　◇　◇

レクティファールが異常に気付いたのは、昼食を摂るために後宮へと足を運んだときだ。

まず回廊でマリカーシェルに出迎えられた際、そこにいた各護衛小隊長の様子がおかしかった。

続いて廊下を歩いているとき、いつもなら粛々と頭を垂れる侍女たちがぎこちない動きで一礼した。

食堂に入れば、給仕たちの様子も変だった。

唯一いつも通りだと思ったのは、レクティファールの隣の席に座るリリシアのみ。

他の皇妃候補たちは仕事で出ているから、二人だけの昼食である。

「リリシア、待たせましたか」

「いいえ、レクティファール様。少しお喋りをしていたので」

そういってリリシアが示したのは、彼女付きの侍女だ。

レクティファールに一礼し、彼女は壁際へと下がった。やはりというか、レクティファールに微妙な視線を向けながらだったが。

「では、いただきましょう」

リリシアの言葉で、給仕たちが一斉に動き始めた。

皇都の高級料理店の給仕以上に洗練された動き。それは日々の訓練により作り上げられた身体があるからだと、マリカーシェルは自慢気に語る。

皇王主催の夜会では各国の元首や貴族、高官を相手に立ち回り、その都度高い評価を受けていた。

しかしこのとき、レクティファールにはその動きに迷いがあるように映った。いつもなら彼が気付かないうちに硝子杯に水を注ぐ侍女は、レクティファールに近付くと動きを鈍らせた。ほんのささやかな違いではあるものの、普段の動きが素晴らしいものだけに違和感が拭い切れない。

皿を入れ替える侍女も、麦麺を切る侍女も、肉を切り分ける侍女も、どことなく変だった。

「――リリシア」

「はい、どうかなさいましたか？」

汁皿に匙を置いたまま、リリシアが首を傾げる。

いつもなら、彼女たちの方から話しかけない限りレクティファールが口を開くことは少ない。

リリシアはそれ故に、不思議そうにレクティファールを見詰めた。

「何か、後宮の空気がいつもと違うような気がするのですが……」

「――そうですか？　わたしはいつもと変わらないように思いますが」

リリシアの返答が、一瞬遅れた。

やはり、何かある――レクティファールは確信した。

「そうですか」

「ええ、そうです」

リリシアはそう言い切ると、再び匙を握って食事を再開する。

静かに、食事を摂る淑女の手本とも言うべき所作で汁物を口に運ぶリリシアを、レクティファールはほんの少し細めた目で観察する。

リリシアもレクティファールの視線には気付いているだろうに、そんな様子は全く見せなかった。

「――殿下」

扉横に控えていたマリカーシェルが、そうレクティファールを促す。

午後の政務に要する時間を考えれば、食事の時間は限られている。

「ええ」

レクティファールは釈然としないまま、午後の政務に備えて食事を続けた。

いつもなら彼が苦笑するほどに饒舌なリリシアが一言も言葉を発しなかったことに、レクティファールは食事が終わってから気付き、皇城へと戻る道中、理由も分からず消沈した。

◇　◇　◇

疑問を多分に含む意識を抱えたまま皇城へと戻ったレクティファール。

だが、いつまでも余計な思考を抱えたままでは仕事に差し支える。さてどうしたものかと思考を巡らせながら執務室へと入った彼は、そこで午前中には存在しなかった書類の塔と鉢合わせすることになった。

女性秘書官二名が、台車からせっせと書類を下ろしては積みあげるという作業を行っている。皮膜状の翼を広げてふわりと浮かんだ魔族の秘書官に、混血種の秘書官が書類束を手渡すという作業を繰り返してようやく一通り書類を積み直した二人は、そこに至ってやっとレクティファールの存在に気付いた。

慌てて居住まいを正す二人。

「し、失礼いたしました」

「おかえりなさいませ、殿下」

「あ、ああ、ただいま。また随分と追加の仕事が入りましたね」

レクティファールは見上げるほどの書類塔を人差し指で突付きながら、そう呟く。

午後になって追加の仕事が入ることは珍しくないが、午前中に終わらせたものと同じだけの仕事がまるまる追加されることは少ない。

そういうときは事前に秘書官室から連絡が入り、レクティファールも後宮まで戻らず皇城の食堂で昼食を摂ることにしている。

「いえ、それが……」

魔族の秘書官が困ったように書類塔を見上げる。

「この書類――ただの書類ではないんです」

「は？」

レクティファールは呆けたように秘書官を見詰める。

あまりにも情けない表情を浮かべていたのか、耐え切れなくなった混血種の秘書官が小さく吹き出す。

もちろん、慌てて直立不動の姿勢に戻り、レクティファールに事情を説明しようと口を開いた。

「実は――」

そのとき、秘書官の言葉を遮って扉が二度鳴った。

音の大きさと間隔から、レクティファールはその音の主を瞬時に導き出した。

どうやら、説明させるにはちょうど良い人物が表れたようだ。

「入れ」

レクティファールは扉の前の人物に入室の許可を与えると、執務机に戻りながら秘書官二人を労い、自分たちの仕事に戻るよう命じた。

二人は揃って頭を下げると、台車を押して隣の秘書官室へと消えていった。

そんな二人を見送り、レクティファールは深い溜息を吐く。

「さてと、理由を説明して貰おうか。ルキーティ、そしてハイデル」

妖精の皇府はその言葉に微笑み、人間の宰相はレクティファール以上に疲れた表情で頷く。

先に言葉を発したのは、ルキーティであった。

「前置きもなく端的に申し上げれば、殿下が『デアの恋薬』を手に入れたという噂が広まったのです」

「何？」

レクティファールは思わずルキーティを睨み付け、これでは八つ当たりだと気付き、なんとか気を落ち着けて再度問い直した。

そして同時に、後宮での出来ごとはこれが原因かと悟る。

「――どういうことだ？」

「皇府殿の言葉通りです、殿下。両議会、軍、皇都商工会連合、いえ、それどころか他国の大使館、公使館にまで『デアの恋薬』の噂が広がっているのです」

「な……ッ」

レクティファールは思わず立ち上がり、書類塔の一番上の書類を力場紐で惹き寄せる。

恐る恐る開いてみれば、見目麗しい令嬢が品のいい笑顔で彼を見ていた。

「これは……」

言うまでもない、分かりやすく言えば見合い写真だ。

その下の書類も、その下のものも、引き寄せては中を確認するも、総てご令嬢の気合に満ち溢れた勝負写真であった。

「おおう」

次々と写真を確認していくと、突然書類に仕込まれた立体投影術式が作動して一人の令嬢の姿が虚空へと投射される。書類に書いてある名前を見れば、貴族議会の予算審査委員会委員長を務める子爵議員の姉であった。美貌で知られるエルフらしく、透き通るような肌が美しい。

「これまた気合の入った写真だな」

「はい、同じようなものが今も続々と皇城に届いております。まことに勝手ながら、特別編成の秘書隊を編成し、対処させております」

ハイデルの声は疲労の色が濃かった。

「そこまでか」

「ええ、そこまでです、殿下。その上外務卿の元には帝国、イズモ両国からことの真偽を問い質す通信が入っております。両国とも婚礼を目前に控えたこの時期ですから、何処かの国が先走る前にこちらを牽制しようということでしょう」

牽制、恫喝の間違いだろう――レクティファールはそう心中で独語した。

おそらく両国とも、別にレクティファールが誰を娶ろうとも構いはしない。単に「自分たちを差し置いて、下手な国と縁戚になろうなどとは考えるな」と、そう言いたいだけだ。

三国の間には常に緊張が漂っている。緊張の中で平穏が保たれていると言って良い。

現状、それをぶち壊すことはどの国も望んでいない。だからこその牽制だった。

「耳の早いことですが、皇立海運連合に〈南北ウォーリム〉から、同じく皇立海上輸送に〈トラン大同盟〉から、非公式に政府間協議の申し出がありました。建前上、海上流通路における警備行動基準

の策定と通商協定締結に向けての事前協議となっておりましたが、政府ではなく皇立企業に連絡を入れてきたとなると……」

探りを入れてきた。そう考えるのが妥当だろう。

アルマダ大陸周辺の海上輸送路に大きな影響を持つ皇国が他大陸の国家と繋がりを持とうとしているのではないか、この分だと大陸周辺の国家も同じようなことを考えているかもしれない。

「あああああああ……話が変な方向に……」

レクティファールは頭を抱えた。

たった一瓶の薬が、世界を動かしている。

レクティファールではなく、別の者が使うのだとしても、使いどころを的確に選べば強力な武器へと変化する。それが『デアの恋薬』だ。

過去に戦争を起こしたという話も、こうなっては眉に唾をつける必要もない。

「何故、ここまで……」

「殿下が思っているよりも、我々が思っているよりも、この国は各

国の耳目を集めていたということでしょう」

他大陸への流通網の拡大と、外交攻勢が仇になった。

各国は、皇国が世界規模の攻勢に転じたと警戒しているのかもしれない。

「不味いことになりましたな」

「ああ、どうやって収めたものか」

「手頃なのは、余り影響力のない国――例えば〈グラッツラー伯国〉の伯爵令妹などと時期をずらして婚儀を行うことですが……」

〈グラッツラー伯国〉といえば、軍事力も経済力も平均以下の小国で、しかし芸術分野では名の通った文化国である。政治的な影響力は小さく国益という実は手に入らないが、名声という花は手に入れられる相手だ。婚儀に合わせて伯国へ文化振興のための援助を行えば、どの国も表立って文句は言えない。

「そういうことであれば、市井の商会から側妃を召し上げるという手もございます」

ルキーティが手のひらを翳すと、そこに数枚の書類が現れる。

「いずれも学校や孤児院の建設などに意欲的な商会です。当主が道楽でやっているので、後ろ暗いところがありません」

「ふむ、皇家が後ろ盾になるということか」

「はい」

ともあれ、目に見える形で利益を得ることは不味いという点で、三人の考えは一致していた。

「もっと簡単な方法では、お妃さまのどなたかと大喧嘩をしてもらい。仲直りのためにお使いになってもらうというのも……」

「この時期に？　また四龍公の誰かが独立宣言するぞ」

一応、花嫁修業という形で後宮入りしているのだ。

そこでお手付きになるという事態になれば――結末はあまり良いものになるまい。

「では、全員同時にお使いになられますか」

冗談交じりの、というよりも総て冗談で占められたルキーティの言葉は、余裕を失いかけているレクティファールには全く冗談に聞こえなかった。

彼の眉が痙攣し、低い低い声がその口から漏れ出る。

「ははは……その綺麗な翅(はね)毟るぞルキーティ」

「――これは失礼を」

どうやら冗談が通じる状況ではないらしい。ルキーティはやれやれと溜息を吐き、面白いことになったと内心ほくそ笑む。

妖精の悪戯好きは、年を経て変化する性質ではないようだ。

◇　◇　◇

午前四時四十五分。

この時期ならば、まだ夜明けまで幾らかの猶予を残した早朝とも言い切れない時間である。

そんな微妙な時間帯。後宮の廊下に、自分の身長ほどもある革鞄を肩に引っ掛けて歩く人影があった。

「さむ……」

空色の髪を尻尾のように揺らしながら歩く侍女、早朝自主鍛錬に向かう途中のウィリィアだ。

吐く息は白く、太腿の半ばまでしかない侍女服が恨めしい。

長丈の防寒着を纏っても、素足を晒したこの侍女服では地面からの冷気は防げないのだ。

ならば支給品の薄長靴下――団員の意見を取り入れていくうち、いつの間にか全二十四色になった――でも履けばいいと人は言うのだが、破けたときに見た目が悪いと着用しない者も多く、ウィリィアもその一人だった。

膝上までの編み上げ靴――これも支給品目に含まれている――も考えたのだが、動きが阻害されることに気付き、すぐにやめてしまった。

「ここは、遮熱と気脈循環術式を編み込んだ侍女服の制定を……」

冷えという女性の天敵に立ち向かうため、毎期のように配備要望が提出される案件であるが、その都度予算不足を理由に却下されている。

すでに彼女たちの侍女服には耐熱耐魔法防刃防弾機能の数々が搭載されており、これ以上形状や重量を変えずに機能を増やすには、その素材の開発から行わなければならないのだ。そんな贔屓にも似た特別待遇を許せるほど、近衛軍は甘くない。

「ああもう、本当に寒い」

ウィリィアはそう愚痴を零し、時折すれ違う巡警の同僚と「寒いね寒いね」と言葉を交わしながら、後宮の北庭へと向かう。

そこは乙女騎士たちに常に開放されている場所で、彼女はその一角を使って自主鍛錬を行うのが日課となっている。

「しかし、あの愚弟はまた余計なことを……」

後宮の中は昨日から、明らかに異質な空気に支配されている。

たまたまレクティファールに声を掛けられた騎士が緊張のあまり卒倒して担架で搬送され、ほんの少しレクティファールと会話しただけの騎士が同僚に囲まれて事情聴取を受ける。他にも、レクティファールの下に書類を届ける者を選ぶために抽選会が催され、休憩中のレクティファールに紅茶と軽食を運ぶためには上官の厳しい審査を通過しなくてはならない。

その疑心暗鬼というにはあまりにも姦しい気配に、ウィリィアは辟易していた。

「姫さまの機嫌悪いし、本当、どうしてくれようか……」

メリエラの機嫌はたった一日で急降下し、昨夜の段階で最低点を更新してしまった。

ウィリィアに対して八つ当たりをするということはないのだが、手作りの四頭身レクティファールくん人形を寝台に叩きつけるわ、投げるわ、寝技を仕掛けるわで、それはもう大変なことになっている。なお、その後レクティファールくん人形は我に返ったメリエラの手で修復され、その夜も無事抱き枕としての任を全うした。現在はメリエラの下敷きになっているが。

ウィリィアが聞いたところによると、メリエラと同じようにレクティファールくん人形を持っている数名の妃候補は、これまたメリエラと同じように人形に様々な八つ当たりを仕掛けたらしい。本人にそれをしないのは、それこそ自分たちのやっていることが大義のない八つ当たりだと認識している証拠だろうか。

「これはそう簡単には機嫌直らないわよ……」

溜め込むだけ溜め込んで、そのうち何処かで爆発する。

そして一人が爆発すれば、連鎖的に他の者も爆発するかもしれない。

「本当、ろくでもないことしてくれるわ」

仕事ばかり増やす義弟の顔を思い浮かべると、ウィリィアはその横面を思い切り殴りたい衝動に駆られた。

今度一緒に実家に戻ったときは、徹底的に使い走りにしてくれようう――そんなことを決意しながら、彼女は寒々しい空気の中を歩いて行くのだった。

◇　◇　◇

北庭に辿り着くと、ウィリィアはその片隅にある人工林に足を踏み入れた。

他の騎士たちがあまり立ち入らない、彼女だけの訓練場がその先にあるのだ。

距離にして一〇メイテル程度、樹々の間の細い路を抜けるといきなり視界が開ける。

所々茶色い土があらわになった円形の広場は、二人で実戦形式の訓練をするには少し手狭だが一人で動く分には十分な広さがあった。

「姫さまの起床時間まであと一時間……か」

途中で余計な思考に見を任せたせいか、鍛錬開始の時刻がいつもより少し遅れていた。

ウィリィアは鍛錬内容を少し変更することを決め、広場の端にある切り株に革鞄を降ろすと、それを開いて〈岩窟龍断ち〉と同じ大きさの模造剣と、支給品の長剣と同じ重さと大きさを持つ木剣を取り出した。

そこで、彼女は一つの違和感を覚える。

「――？」

何かおかしい。

いつもと同じ場所、同じ道具、同じような時間なのに、何かが違う。

「誰かいるの？」

もしかしたら、同僚の誰かが近くにいるのかもしれない。

そう思って周囲に呼びかけたウィリィアだが、返事はなかった。

それに、人の気配はしない。

人の気配はしないが、違和感はある。

では、人以外の何かがいるのか。

「!?」

そんな結論に至ったウィリィアの全身に、鳥肌が立った。

「――ま、まさか……ね」

そう自分に言い聞かせながら、ウィリィアは取り回しやすい木剣を握った。

〈岩窟龍断ち〉を呼び出すようなことはできない。

あれは起動すれば大音量を発し、それに気付いた同僚たちを呼び寄せてしまう。

変な気配に怯えて、思わず起動してしまいました――そんな言い訳、できる筈がなかった。

「うう……」

両手で木剣を硬く握り、周囲を見渡すウィリィア。

二度、三度と広場の周辺を確認するが、やはり何もない。

「気のせい……？」

そうかもしれない、と自分の情けなさに思わず溜息を吐きかけたウィリィアだが、次の瞬間目の前に現れたものに悲鳴を上げてしまった。

「うきゃあああああッ！？」

樹々の間。

丈の低い庭木に紛れるように、黒々とした靄がわだかまっている。

ちょうど人が膝を抱えて蹲っているような大きさで、生き物のように蠢いていた。

「な、ななな……」

音はない。

ただ、ふわふわと動いているだけだ。

「な、何これ？」

ウィリィアは情けないと言われても反論できないような及び腰で、じりじりとその靄に近付いていった。

そして、持っていた木剣で、恐る恐るその靄を突付く。

「痛」

切っ先が突き刺さった瞬間。靄が、声を出した。

「ひゃあああッ！」

物凄い勢いで後退するウィリィア。

（ええい、もうこうなったらなんて言われてもいいから〈岩窟龍断ち〉出してやる――！！）

ウィリィアは太腿の剣帯に手を伸ばし、己の得物を呼び出さんと意識を集中する。

だが、それよりほんの僅か早く、靄が霧散した。

「全く誰ですか、こんな朝早くから……」

靄が拡散すると、そこに現れたのはウィリィアもよく知る人物。

「あ、ウィリィアさん。おはようございます」

「――レクト？」

「はい」

摂政レクティファールその人であった。

◇　◇　◇

「な・ん・で、こんなところで膝抱えて鬱々してるの？　ねえ？　お姉さんに分かるよう説明しなさい」

「いたいいたいいたい」

羞恥に頬を染めながらレクティファールの頬を抓り上げるウィリィア。

レクティファールはお怒りの義姉を宥めるべく、なんとか理由を説明し始めた。

「いえ、実は――」

昨夜はフェリスの部屋に行ったのだが、扉の前で門前払いされてしまい。その上「ケダモノ、最低、レクトなんてどっか行っちゃえ」と万言よりも余程堪える三つの台詞で拒絶されたらしい。

その拒絶ぶりがあまりにも強烈で、フェリス付きの侍女騎士にも「今夜はお一人で」と言われてしまい。すごすごと逃げるようにここまで来たらしい。

「じゃあ何、一晩中ここで膝抱えてたの？」

「いつの間にか、夜が明けておりました」

先ほどの靄は、レクティファールが招き寄せた闇の微細精霊だった。

闇の微細精霊は悲しみや嫌悪などの負の感情に引き寄せられる性質を持っているから、いじけたレクティファールの周囲に集まって

いたようだ。

とはいえ、中にいるレクティファールが見えないほどの密度で集まっていたとなると、一体どれだけの勢いでいじけていたのか、想像することさえできない。

「情けない……」

説明を受けたウィリィアの感想は、ただそれだけだった。

他に、何も言えなかった。

「確かに姫さまたちの機嫌は悪いけど、あなたがココでいじけてたら何の解決にもならないでしょう」

「そういうウィリィアさんは、いつもと変わりませんね」

「そりゃ……」

ウィリィアは座り込んだまま自分を見上げるレクティファールから目を逸らしつつ、小さく呟いた。

「あなたが自分から『デアの恋薬』なんて用意する訳ないって思っ

ているし……」

その言葉に、レクティファールの表情がぱっと輝いた。

「ウィリィアさん……！」

レクティファールは湧き上がる感激をそのままに立ち上がり、ウィリィアに抱き付く。

いつもとは違う義弟の態度に、ウィリィアは自分でも驚くほどに動揺した。

「ちょっと……やめなさい！」

慌ててウィリィアが抵抗を始めるが、完全に身体を固定されてしまえば自力の違いから脱出は不可能だ。

「何かもう、今夜から延々と夜会の予定入ってるし、皇城にいても後宮にいても、外に出ても全員が全員私を変な目で見るし……。これは絶対ルキーティの陰謀だと思います。証拠はないですが」

「全部含めて自業自得でしょうが！　いいから離しなさい！」

久し振り――とはいえ、正確には丸一日なのだが――にいつもと変わらない態度で自分に接してくれる相手を見付け、レクティファールは螺子が数本吹き飛んだ思考を高速回転させる。この男、完全に正気を失っていた。

だからこそ、こんな提案をしたのだ。

「もういっそ、ウィリィアさん飲みません？　たぶん、いつもと変わらずに済むと思うんですが……」

「――ッ！　駄目！」

ウィリィアは全力でその提案を却下し、さらに一瞬の隙を突いてレクティファールの腕から脱出する。

「そ、そんなこと姫さまに知られたら……」

「だってほら、一定以上の好意がないと意味のない薬ですし」

「万が一ってことがあるでしょう！」

「あるんですか？」

「うッ」

そう訊ね、首を傾げるレクティファール。

ウィリィアは答えに詰まり、結局いつもと同じように答えを返した。

主に肉体で。

「ある訳ないでしょう！　今日はもうさっさと仕事に行きなさい！　こぉの女ったらしっ！」

振り抜かれる模造剣。

それは反射的に半歩下がったレクティファールの眼前を通過し、彼を慄かせた。

「あぶなっ！」

「避けるな！」

「避けますよ！」

叫ぶと同時に踵を返し、遁走。

次期皇王の、それはもう見事な逃げ足であった。

◇　◇　◇

持ち込まれた数十件の招待状のうち、せめてこれだけは出席してほしいと政府・皇王府から求められた四件の夜会。

昨夜までの三夜連続で催されたその夜会は、皇国の貴族社交界の中で比較的大きな力を持つ二つの侯爵家と、一つの大商家が主催したもの。そして今日もまた、華やかなる騙し合いの宴が、通商協定締結の暁には〈トラン大同盟〉の全権大使として皇都の大使館に赴任する官僚の公邸で開かれている。

淑女が煌びやかに着飾り、紳士はそれらの淑女の引き立て役となる。夜会の華は淑女であり、紳士は所詮添え物、或いは、給仕でしかないのだから！――皇国きっての伊達男として名を馳せた、先々代紅龍公ヴィトリッヒの言葉は確かに、夜会の本質を言い当てているのかもしれない。

しかし、レクティファールの周囲に限れば、その言葉は正しくない。

彼の周囲で淑女は狩人であり、紳士は猟犬なのだ。

「レクティファール殿下、お初に御意を得ます。わたくしノルト・トラン交易商会のイクシード支店長を務めますゴル・エイベルスと申します。これは我が娘リヴディア。今夜殿下がお出でになると何処かで耳にしたらしく、どうしても同席したいと……」

「拙は八洲で両替商をしております弓弦・源蔵。そしてこれに控えておりますのが孫の佳月でございます。来月より皇都の皇立中央学院の専門課程に留学する予定でして……」

「レクティファール殿下、自分は〈セチェルキッツ共和国〉陸軍大佐ディオーネ・マキシマ。先日より大使館付きの駐在武官を仰せつかった者でございます。非才の身ではありますが、今後ともご指導ご鞭撻の程を……」

「良い晩ですね、殿下。わたしはセリーク・コルト。主君、第九九代法帝メルギマルガスト三世聖下より、この地の司教長を拝命した者です。以後、お見知りおきを」

件の官僚の姪を紹介されたり、この通商協定を推進する立場の商会代表から娘や孫を紹介されたり、すごく仕事ができそうな女性軍人に自己紹介されたり、アルマダ大陸では見慣れないウォーリム北教の法衣を纏った年齢不詳の美人に微笑まれたりと、レクティファールはそれはもう多忙だった。

夕方から始まった夜会は出席者が入れ替わりながら、もう日付が変わりそうな今も続いている。

レクティファールは勧められた酒を飲み、愛想笑いを貼り付けて談笑し、狩人らしい淑女たちと踊った。

美しい女性と身体を寄せ合って踊ることがこれほど苦痛だと、彼はこれまで知らなかった。知りたくもなかったが。

「ふう」

廊下まで逃げ出し、果ては裏庭まで移動してきたレクティファール。

酔えればまだましだっただろうかと詮無いことを考えながら溜息を吐けば、ここ数日の婚約者たちの態度を思い出して尚更落ち込んだ。

怒りを露にしている者が誰一人としていないのは、果たして幸運なのだろうか。

寂しそうに、哀しそうに見詰められるよりは、怒られた方が良いのではないだろうか。

「自業自得……確かに自業自得だけれども……」

フェリエルだけは、薬を入手した状況を察したのか何も態度を変えないが、他の者たちは揃ってレクティファールを避けている。

乙女騎士たちの態度も固く、皇王の私的空間としての後宮は今のレクティファールには居心地が悪すぎた。

「困った」

レクティファールが呟く。

そのまま独り言として消えて行くと思われたその言葉は、彼の背後から発せられたのんびりとした声に掬い上げられた。

「あら、何かお困りですか？」

レクティファールは緩慢な動きで、背後を振り返った。

白藍の長髪。柔らかくもたおやかな線を持つ身体。じっと彼を見詰める瞳は金色。

「マリア……」

「こんばんは、レクティファール殿下」

品のいい笑みを浮かべ、蒼龍公マリアはレクティファールの傍ら

に立つ。

香水の香りに混じって、少し酒の匂いがした。

「随分と飲んでいるようで」

「はい、皆さん随分勧めてくださって……本当、嬉しい限りで」

「送り狼志願も混じっていたのでは？」

寡婦であるマリアの纏う衣裳は、皇国伝統の独身女性のものだ。

当然、こういった場では彼女を求める男たちが集まってくる。

「残念ですけど、狼如きに龍は襲えませんの」

くすくすと笑うマリア。

確かにその通りだと頷き、レクティファールは冷たい地面に座り込んだ。

「隣、よろしくて？」

「――どうぞ」

レクティファールは異相空間から中尉軍装用の外套を引っ張り出すと、それを地面に敷いてマリアに示す。

マリアは失礼します、と一言断りを入れ、そこに綺麗に足を揃えて座った。

「こんなことをして、フェリスたちに恨まれてしまうかしら？」

「今なら、その責任は全部私に回ってきますよ。気にしないでください」

レクティファールは再度異相空間に接続すると、そこから金属製の水筒と厚目の硝子杯を取り出した。

よく冷えた清水を硝子杯に満たし、マリアに手渡す。

「それにしても、随分と飲みましたね」

硝子杯を受け取ったマリアは、それを嬉しそうに口に寄せる。

薄い紅の唇が、透明な水を含んでぬめり輝いた。

「殿下がいらっしゃると聞きましたので」

「――？」

何故自分がいると飲み過ぎるのか、レクティファールは首を傾げた。

マリアはそんなレクティファールの様子に再度微笑むと、じり、と身体を寄せてきた。

「お約束、そろそろ果たしていただけません？」

「約束――ああ、ひょっとして……」

「はい、我が息子と義娘を救っていただいたお礼です」

レクティファールの表情が歪む。

よりによって今日それを持ち出すのかと、マリアを横目で睨む。

「マリア。私は……」

「主君としての役目を果たしたまで、そう仰りたいのでしょう？」

台詞を横取りしたマリアに、レクティファールは頷いてみせた。

分かっているなら、せめてそっとしておいてほしい。

「別に、殿下がわたくし欲しさに戦ったとは思いません。ですが、それとこれとは別の問題」

マリアはレクティファールの肩に自らの頬をすり寄せると、掠れたような声で囁く。

「わたしに薬を使ってしまえば、もうこんな騒ぎに巻き込まれずに済みますよ」

「な――――！！」

レクティファールはその一言に慌て、思わずマリアに身体を向けてしまった。

すとん、とマリアの身体がレクティファールの腕の中に落ちてくる。

「わたくしはもう、子どもも産めない身体ですもの。後継者も戻って参りましたし、フェリスの婚礼を見届けたら隠居しようと思っています」

そのままレクティファールの膝の上で仰向けになったマリアは、彼の頬に手を添え、嬉しそうに微笑む。

「龍族の老後は長いものです。父のように旅に出るというのも捨て難いですが、殿下の妾として離宮で飼われるというのも中々魅力的ではありませんか？」

レクティファールはマリアの顔を深く深く見詰め、その表情に微かな安堵があることに気付いた。

そして、その安堵の理由が、息子の帰還であると悟る。

「――ケルブ殿たちの追放の件、それほどまでに……」

「いいえ、いいえ、殿下には一つの恨みもありません。ただ、少し運がなかっただけなのです。わたくしも、息子たちも」

その果てに、二人は心身に傷を負い。マリアは深い後悔を背負っ

た。

二人の傷はまだ癒えきっていないが、フェリスの晴れ姿を見ることは叶うだろうと言われている。

「わたくしが奪われたもの、殿下は取り戻してくださいました。それを恩に感じて、何を恥じることがありましょう」

マリアにとって、レクティファールが二人を生きて連れ帰ったことはそれほどまでに大きな出来ごとだった。

諦めていたのだ。

それこそ、どれだけ運が良くてもどちらか一方しか生きて戻れない。生きて戻ってきたとしても、以前のような生活は送れないと。

「別に、わたくしは自分を安売りしている訳ではありません。ただ少し、もう少しだけ殿下に近づきたいと思ったのです」

孫を娶る男は、マリアにとっても大きな魅力を抱えた男だった。

諦めかけていた自分の望みを叶えてくれた男に、マリアはひどく惹かれていた。それこそ、冗談交じりでは愛を囁けないほどに。

「これは単なる気紛れかもしれません。水龍の娘は好奇心で船を沈

め、男を惑わせてきましたから」

種族的な性質なのだと彼女は思う。

少しでも魅力を感じた異性は、絡めとってしまいたい。

自分のものにしてしまいたい。

「この一件を解決する選択肢の一つとしてわたくしをお使いになること、皇府殿にもご了承頂きました。殿下がお許しになれば、我が領地に近い離宮を一つ頂けるとも」

「ルキーティが……」

おそらくレクティファールがマリアを受け入れても、側妃にはするまい。

愛妾という形に留め、その影響力を用いて国内の商会に対する抑えにするはずだ。

「龍族は恩を忘れません。今後の殿下の治世の助けになるなら、それはわたくしの心を満たすでしょう」

マリアの声を聞きながらルキーティの手がどこまで伸びているの

かを考え、レクティファールはその場で頭を抱えたくなった。

この騒動、あの妖精は徹底的に利用する腹積もりだ。国内国外を問わず、あらゆる利を得るために動いている。

「――皇府殿の手のひらで踊らされていることが、お気に召しませんか？」

「ええ、正直少し」

間違ってはいない。

おそらく、レクティファールに自らの立場の重さを教えるという目的もある。

君主であればたった一つの行動が大陸を超えて波及することもあると、そう教えたいのだ。

「ふふ……殿下らしい……」

マリアはそう零すと、身体を起こしてレクティファールに向き直った。

そこに浮かんでいるのは先ほどまでの穏やかな表情とは違う、蒼龍公としての顔だ。

ただ、少しだけ残念そうではあったが。

「では、殿下に一つ策を献じましょう。これならば得るものは少なくとも、失うものも少なくて済みます」

ですので、お礼はまた別の機会に――そう言って浮かべたマリアの笑みが、レクティファールにはひどく楽しそうに見えた。

◇　◇　◇

「どうも、色々お世話になりました」

「いいえ、殿下。こちらも久し振りに良い夜が過ごせました。――フェリスには恨まれてしまいそうですけれど」

朝靄の漂う皇都。その一角に建つとある商家の屋敷で、レクティファールとマリアは別れの言葉を交わしていた。

久し振りに寝台で眠ることができたレクティファール。その落ち着いた表情は、昨夜と較べれば別人のようだ。

「では、例の件はよろしくお願いします」

「ええ、明日の夜までには届くよう差配致します。ですが、良くあの娘たちの好みを知っていましたね」

「何度も何度も買い物に付き合って、雑談して、日頃の服装を見て、辛うじてこの程度です。マリアにも手伝ってもらいましたし」

レクティファールは苦笑を浮かべてそう答え、それを聞いたマリアは口を手で隠して小さく笑った。

自分とは違い、何とも健全な付き合い方をしているものだと、そう思った。

「あの娘たちも、そろそろ我慢というものを覚えた方がいいのでしょうけど……」

「――随分、してもらっていると思いますが」

「いいえ、殿下」

マリアは頭を振り、じっと真っ直ぐにレクティファールを見上げながら、告げた。

「我々女には、我慢のしどころというものがあります。しなくてもいい我慢をして、しなくてはならない我慢を怠る。それは無知と怠慢です」

「男も同じですよ。絶対に堪えなくてはならない場面と、そうでない場面があります。私は未だに区別できないのですが……」

まだまだ未熟者です――頭を掻き、しかしすぐに居住まいを正して、レクティファールはマリアに小さく頭を下げた。

「では、仕事に行ってきます」

「はい、いってらっしゃい」

二人の立場を思えば、あまりにも娑婆じみた言葉のやり取り。

しかしその光景は、不思議と似合っていた。

◇　◇　◇

ウィリィアはその日、非常に不機嫌であった。

上司であるマリカーシェルに「殿下を一晩頼む」と命じられ、寝袋と一緒に現れたレクティファールを自室に泊めることになったのだ。

レクト・ハルベルンを知るマリカーシェルにしてみれば、ウィリィアの部屋が後宮内のどこよりも中立に近いと考えたのだろう。メリエラたちには、次の帰省の際に予定している、ルイーズの誕生日の宴の打ち合わせをしていると説明したらしい。

「ちょっと、息しないで」

「いきなり死ねとおっしゃいますか。いえ、確かにこの部屋の匂いは義姉さんぽくて色々申し訳なくなりますが……」

レクティファールは陸軍山岳部隊御用達の寝袋にくるまった状態で床を転がり、義姉の暴言に抗議する。

小隊の先任下士官として一応個室は与えられているが、その部屋は狭い。ウィリィアにしてみれば、その狭い中に何故あの男と二人きりで篭らなくてはならないのかという憤りもある。

先ほどから落ち着きなく転がっている義弟に、彼女は不機嫌そのままの声で文句を言う。

「大人しくしなさい。わたしは朝早いの、分かるでしょう」

「ああ、すみません」

ぴた、と壁際で動きを止めるレクティファール。

壁に向かったまま、「では、おやすみなさい」と一言。

「え、そのまま寝るの？　壁よ、そこ」

「知ってます。ですが他の方向を向くと、ウィリィアさんの寝姿が視界に入ります。それはお嫌でしょう？」

嫁入り前の、などと言うつもりはないが、自分の身に置き換えてみれば決して嬉しいことではない。

「――まあ、嫌だけど」

「ならいいではないですか」

寝袋が蠢き、沈黙した。

ウィリィアは釈然としない想いを抱えながらも、それ以上言葉を

続けると、まるで自分が義弟に寝姿を見てもらいたいと思っているようではないかと自分に言い聞かせる。

支給品の羽毛布団はふわふわと柔らかく、床に転がっている寝袋よりは遙かに寝心地がいいのだろうな――そんなことを考え、ウィリィアは慌ててその思考を追い出した。少し、ほんの僅か、寝台の半分を貸してやろうかと思った自分を恥じた。

「――ねえ」

「なんですか」

羞恥心を振り切るように、ウィリィアは床の寝袋型蓑虫に話しかける。

「もしも姫さまたちと結婚していたら、『デアの恋薬』を使った？」

それは、この騒動が始まって以来ずっと彼女の心の中にあった疑問。

現状では“使えない”相手に大手を振って“使える”としたら、この男はどうしただろうか。

「誰も文句を言えない、言う必要がない状況なら――」

「使いませんよ」

酷くはっきりした声だった。

ウィリィアの脳天に、真っ直ぐに飛び込んできた。

彼女の身体が、びくりと震える。

「何で？」

「意味がありません」

レクティファールの返答には、妙な自信があった。

「それに、あの薬には他の使い方もありそうですし」

「え？」

ウィリィアは身を起こし、床の蓑虫を見詰めた。

どういうこと、そんな疑問が口から出る前に、答えが返ってきた。

「明日になれば、分かりますよ」

それきり、返事はなかった。

◇　◇　◇

国定街道。

それは政府によって定められ、政府によって管理維持される国の大動脈である。

国定街道は特別な理由がない限り大型の軍用魔動車が二台横並びで走行できる幅を持ち、混凝土や混凝土石材、砕石などで舗装されている。

有事の際に軍部隊を素早く機動させるために、鉄道網と並ぶ国家事業として毎年相当額の予算が建設・維持費として計上されていた。

「やはり、自動人形をそのまま歩かせるには砕石舗装では不安だな」

「そうですな、魔法術式で強化されているとは言え、砕石を圧し固めただけですから」

「まあ、自動人形を輸送車に載せずに機動させること自体、余り考えたくない事態ではあるが……」

〈ヴァーミッテ〉と〈ウィルマグス〉を接続する国定街道の建設現場でそう呟いたのは、この地の陸軍を統べる陸軍中将ガラハ・ド・ラグダナ。付き添っているのは、彼の幕僚の一人である工兵参謀だ。

工事現場の視察ということで〈ウィルマグス〉から出向いてきたのだが、工兵部隊も民間の工事業者も彼を顧みることなく黙々と作業を続けている。

降雪の合間合間に工事を進めているため、無駄な時間は欠片も存在しない。ガラハもその辺りの事情は理解していたから、すぐ背後を建設重機が高速で通過しても文句は言わなかった。

「しかし、雪が深く積もる前にある程度進めておかないと、雪解けの頃に一からやり直しなどということにもなりかねませんな」

ある程度の深さまで地面を掘って基礎工事をしておかなければ、雪解け水で地面が緩み舗装が歪んでしまうことも考えられる。

今はその基礎工事の最中だ。

「きちんと指標を立てておけよ。雪が降っても、街道を使う者はいる」

「は」

工兵参謀は上官の言葉に了解の返答を送りながら、密かにその横顔を窺う。

それというのも、この北の僻地まで届いた一つの噂がガラハの機嫌を損ねているからだ。

部下に当たるような上司ではないが、司令部で延々と不機嫌な表情を浮かべられてはそこで働く者たちが怯えてしまう。只でさえも剣呑な顔立ちだというのに、苛立たしげに机を指で叩いたり、舌打ちをしたり、靴音荒く歩き回られては司令部要員の精神状態にも悪影響が出るというものだ。

工兵参謀の下にも部下からの陳情は届いていた。おそらく、他の参謀たちやガラハの副官の下にも届いているだろう。

「――閣下」

「何だ」

近くに設置してあった経緯儀を覗き込んだガラハが、ぶっきらぼうに答える。

やはり機嫌が悪いな――工兵参謀は今日この日に工事現場の視察を提案した自分の運の悪さを呪いながら、周囲の作業員に聞こえない程度の声で訊いた。

諫めるなら、ここしかない。

「あの噂のことですが……」

ガラハの赤い瞳が、ぎらりと光る。

手負いの獣のような瞳に睨まれた工兵参謀の喉から、ひゅう、と珍妙な呼吸音が漏れた。

「――すまん」

血の気を失った部下の様子に自分が何をしたのか気付いたガラハは、すぐに顔を伏せ、手元の資料に目を向けた。

しかし、その内容は頭に入ってこない。

自分の苛立ちが部下たちに知られていたという事実に、今さらながら気付いたためだった。

「どうにかしているな、俺は」

摂政が『デアの恋薬』を手に入れたところで、現実として何の問題もない。

周辺国に皇国は婚姻による縁組を行う用意があると示すだけでも、外交の手札を一つ増やすことができるのだ。

問題があるとすれば、今人々の口に登っている「摂政殿下は色を好む」という噂程度。あとは、浮き足立った周辺国が先走った行動に出ていることだけだった。

「リーデ様は、特に何も言っておられないのでしょう？　ならば、気にする必要はないのでは……」

「分かっている。そもそもあれは俺の娘ではない。俺が苛立つこと自体がおかしいのだ」

リーデからは定期的に手紙が届く。

工兵参謀の下にも、一度だけ手紙が届いた。彼がリーデに教えた築城術を摂政に話す機会があり、その際に「良い師を持ったものだ」と褒められたと綴られていた。

〈パラティオン要塞〉守備軍時代の幕僚団の面々には、最低でも一度はリーデからの手紙が届いているだろう。

何ともまめなことだと工兵参謀は思ったが、慣れない皇都暮らし

で古巣を懐かしむ気持ちもあるのかもしれないと考え、〈ウィルマグス〉の現状と自分から見たガラハの近況を認めた返事を送った。返事はなかったが、身重の彼の妻に、と皇都で手に入れたらしい南洋の果物が送られてきた。

あの頃のリーデであれば、このような気遣いはできなかったかもしれない。

軍務一辺倒で、周囲を常に威嚇していたような娘だった。

「リーデ様は変わられましたな」

「ああ。手紙が届くたび、そう思う。仕事ばかりだったあれが早く子どもが欲しいなどと……ガリアンが聞いたら泣いて怒るな」

ガラハがリーデの子どもの名を考えていることは、司令部では公然の秘密になっている。

書店で買い込んだらしい古代語の辞書にはいくつもの付箋が貼られ、当たり前のように司令官公室の本棚に収まっていた。古今東西の名を集めた人名辞書も数冊、同じ本棚に鎮座している。

「気になるならば、直接お訊きになる方がよろしいでしょう。周囲が下手に気を回しても良いことはありません」

「――そうだな」

気になるなら、本人に訊く方が確実だ。ガラハがリーデを実の娘同然に見ていることは、その娘本人が一番良く知っている。

父代わりのダークエルフが安心するよう、上手く返事を書くだろう。

「戻ったら、そうするとしよう」

ガラハは再度資料に目を向け、今度は手紙の内容を考えることに夢中で、そこに記載されている文章を理解できなかった。

◇　◇　◇

各々の護衛小隊長から「正装にて、紫真珠の間へ」というレクティファールの言葉を伝えられ、後宮にいる妃候補は、ある者は大慌てで、ある者は不敵な笑みを浮かべ、ある者は面倒臭そうに、ある者は無表情で、ある者は緊張で顔を真っ赤に染めてそれぞれ準備を行った。

指定された時間は夜も更けた二十二時。

夕食を済ませ、湯浴みも済ませ、それぞれ精一杯着飾った淑女たちは時間の五分前には全員が〈紫真珠の間〉に集まった。

その場には普段離宮で暮らす側娼二人の姿もあり、そのどちらも正妃候補たちと同じように正装を纏っていた。

国を代表する美姫たちが勢揃いし、壁際に並ぶ騎士たちも見目麗しい者たちばかり、宮廷絵師として皇城に仕える画家がこの場にいれば、どうやってこの光景を絵に収めきるか必死に考える羽目になっただろう。

「マリカーシェル。レクティファール様は？」

広間の中央に並んだ長椅子の一つに座ったリリシアが、一人離れた場所で佇むマリカーシェルに問う。

いつもならレクティファールの側に侍っている彼女が一人でいることに、その場の全員が疑問を抱いていた。

「部下と共に、少し準備を」

「準備？」

「はい。ですがそれ以上のことは……」

「答える権限を持っていない、でしょう。構いません、レクティフ

ァール様がこの場にいらっしゃるということだけ分かれば」

リリシアはそう毅然と告げると、その場に揃った女性たちに顔を向ける。

「問題はありませんね？」

真剣な表情で一斉に頷く女性たち。

唯一フェリエルだけが居心地悪そうに身動ぎしたが、誰もそれに気付かなかった。

「――――」

全員が沈黙を貫く広間には、まるで戦場のような緊張感が満ちている。

騎士たちの何人かは密かにレクティファールを恨み、また別の何人かは興味深げに事態を見守っていた。

そして約束の二十二時。

壁の水晶時計が二十二回鐘を鳴らした直後、広間の扉が開いた。

「お待たせしました」

背後に数名の騎士を従えたレクティファールが、広間に集まっている婚約者たちに一礼する。

リリシアたちはレクティファールをどう出迎えようか悩んでいるうちに、結局その機会を逸してしまった。

「やはり、怒っておられますね」

さて、困った――レクティファールは頭を掻き、背後に立つ騎士たちに目配せした。

騎士たちは無言で頷くと、まず一人の騎士がレクティファールの傍らに立った。その腕には、絹の布で隠された円盆がある。

「言い訳をすれば、こちらに非があると認めることになるでしょう。ですので、言い訳も弁解もなく、ただこれだけを皆さんにお贈りします」

それを見た上で、結論を出して欲しい。

レクティファールは一人一人の瞳を見詰め、そう告げた。

姫君たちの間に、緊張が走る。

「リリシア」

「え、あ、はい！」

名を呼ばれたリリシアが慌てて立ち上がった。

落ち着かない様子で衣裳を整え、レクティファールの前に立つ。

「あの……レクティファール様……」

「色々心配をお掛けしました。ですが、それ以上は何も言いません。その代わり……」

円盆から布を取るとその下にあったのは、リリシアへと贈った紋章と同じ意匠の首飾りであった。

銀色の細い帯を首に巻く形で、紋章部分は魔法銀でできた小さな容器になっている。

「この中には『デアの恋薬』が入っています」

「え？」

リリシアだけではなく、姫君たち全員がレクティファールに視線を集中させた。

いくつもの困惑の双眸に、レクティファールは落ち着いた声で説明を始めた。

「色々調べまして、『デアの恋薬』に関する神話と現代の恋薬の扱いには随分と違いがあることに疑問を抱きました」

策をお伝えする前に、まずは恋薬の神話を調べてくださいというマリアに従い、レクティファールは彼女の用意した資料を一つ一つ確認した。

マリアの淹れた香茶を手に、何人もの著者が解釈した神話を一つずつ丹念に調べた。

その結果、彼は神話本来の史実に辿り着く。

「『デアの恋薬』は確かに女神デアと人間グローの間の試練として描かれています。そして、その試練を乗り越えた二人を強く結び付けた」

そしてその結果、人々の間では愛し合う者同士をより強く結びつ

ける薬として認知されるに至った。

愛情を増幅するのだ。そういった用途に使用されるのが当たり前である。

しかし、とレクティファールは首を振る。

「それは間違った使い方ではありませんが、本来の用途とは少し違う。私はそう考えました」

だからこそ、こうした。

本来の目的とは違うかもしれないが、自分なりに『デアの恋薬』の意義を考えた。

「女神デアは長に試練を課せられたとき、自らこの薬を呷りました。試練を受けるか受けないか、そう提示され、彼女は答えとして薬を飲んだ」

彼女はグローを信じ、自分と自分の中のグローに対する気持ちを信じた。

そしてその気持ちが、二人を再会させた。

「――所詮、私の考えです。神話時代を研究している歴史学者の中

には、そもそも現代の『デアの恋薬』と神話時代の『デアの恋薬』は別ものであるという持論を持つ人もいます」

現代の恋薬のように愛情を増幅させるのではなく、単に意識を混濁させ、性欲を増進させることで媚薬効果を得ていただけという説だ。

麻薬のようなものは、それこそ神話時代から存在する。精神に生命の重点を置いている神族であるなら、そういった薬物の効果は高い。

「それでも私は、この薬に想い合う二人を再会させるという役目を担ってもらいたいと思います」

円盆の上から首飾りを取ると、レクティファールはリリシアの細い首に手を伸ばす。

「あ……」

レクティファールの指が首筋に触れると、リリシアはそこから走る感覚に小さな悲鳴を漏らした。

想われ、触れられることの何と素晴らしいことか。想いの伝わることの何と素晴らしいことか――リリシアは震えそうになる身体を必死に抑え込んだ。

「レクティファールさま……」

「リリシア。これは再会のお守りです。何があろうとも、どれだけ離れようとも再び出逢えるように、そんな想いを込めたお守り」

最果ての荒野から、神々の領域まで。

世界を横断したグローのように、何処からでも戻ってくる。

「私たちはこれから何度も離れることになる。そしてそのたびに再会し、また離れるでしょう」

それは互いの役目を考えれば当たり前で、どうしようもないこと。

それらを総て飲み込んで、共にいることをレクティファールは望んでいる。

「皆さんが何度この薬を飲もうとも、私はそのたびに戻って来て、再び離れるときにはこの瓶に薬を入れていく。恋薬がある限り、いえ、たとえなくとも私は皆さんの下に戻ってくる」

戻る決意。

どれだけ離れようとも、必ず想い人の下へと。

「――レクト」

メリエラが、リリシアの隣で襟元を緩める。

そこにあった首飾りを外すと、挑発するような笑みを浮かべてレクティファールを見た。

「龍族は首輪を嫌うわ。誇り高い龍が他者に服属するなんて考えられないって」

「では……別の形に」

「いいえ、それで結構」

メリエラは円盆を抱えた騎士たちを見渡し、「わたしのはどこ」と訊ねた。

それに応え、一人の騎士が――これまで静かにことの成り行きを見守っていたウィリィアが進み出た。

「こちらです、姫さま」

「ありがとう」

メリエラが布を払うと、その下には先ほどとは別の形の首飾り。

紋章をあしらってあるのは同じだが、こちらは銀細工の他に無色透明の宝石が散りばめられている。

「あ、これって……」

「はい。この間気に入ったと言っていた銀細工と同じ職人に作ってもらいました」

一度は多忙を理由に断られたが、レクティファールが自ら工房に足を運び、身分を明かし、その上で大切な婚約者に贈りたいのだと頼み込んだ。

職人は摂政という立場には少しも靡かなかったが、レクティファールがただ大切な人に贈りたいという理由だけで工房まで足を運んだと聞き、依頼を受けてくれた。

そういう役目こそ細工職人の本懐だと、上機嫌に笑って。

「じゃあ、着けて」

「はい」

蒼銀の帯を首に回して金具を繋ぐと、レクティファールはそのまま白い首筋に指を這わせた。

メリエラは湿った吐息を零し、潤んだ目でレクティファールを見上げた。

「レクト……」

「メリア」

言葉よりも雄弁な瞳で、ただ互いへの想いを確認する。

視線の交錯はほんの三秒程度だったが、メリエラは深い満足感を得ることができた。

首に張り付く帯の感触が、レクティファールの指を思い出させてくれる。

「わたしはもう部屋に戻るわ。明日も早いし」

「ええ、おやすみなさい」

「うん、レクトもあまり無理しないでね」

ごく自然な動きで、メリエラはレクティファールの首に両腕を回し、その顔を引き寄せる。

そのまま唇を重ねると、嬉しそうに微笑む。

「――じゃあ、おやすみ」

「はい、良い夢を」

「うん、今ならすごくいい夢が見られそう」

ひらひらと手を振って去っていくメリエラを、他の姫君たちは呆けたような表情で見送った。

特に順番を飛ばされたリリシアは呆然としていたが、やがて身体を震わせ始め、ついには爆発した。

「なっ……なあっ！」

何をしてくれていらっしゃるのですかあの人は――と言いたいらしいが、怒りのあまり言葉にならないようだ。

暫くの間そうして必死に言葉を紡ごうとしていたリリシアだが、その声は段々と弱々しくなり、最終的には完全に涙声へと変わってしまった。

「レクティファールさまぁ……」

レクティファールは怒りを通り越して半泣きになったリリシアの頭を撫で、頬を撫で、背中を撫で、なんとかその場を切り抜けることに成功するのだった。

◇　◇　◇

リリシアにはメリエラと同じような口づけをせがまれ。

フェリスには実家に戻ったときに一緒に街を散策する約束を課せられ、

ファリエルにはもう少し意思疎通を重んじろ、と叱られ。

フェリエルには申し訳ないと謝られ。

オリガには無言で唇を奪われ。

リーデには今夜使ってもいいですかと訊かれ。

アリアにはきちんと日記に残しておきますねと言われ。

レクティファールは総ての首飾りを贈ることができた。

この夜のことは皇都の主要新聞社と出版社にルキーティの手を経て伝えられ、『デアの恋薬』の新たな役割として人々の記憶に刻まれる。

まずは貴族たちの愛の告白に小瓶の首飾りと共に使用されるようになり、富裕層がそれに続いた。

その後、高価な『デアの恋薬』の代わりに香水や魔法薬を入れたものが、家族や恋人を持つ軍人たちの間で無事の帰還を願う御守として広まった。

さらに恋人や家族を残して遠隔地へと向かう者たちが家族に残す御守として、船乗りの妻たちが夫の無事を願う依り代として、様々な要因で離れ離れになる恋人たちの再会の証として、この新しい『デアの恋薬』は人々に受け入れられるようになる。

およそ一〇年で大陸中に広まったこの風習は他大陸にも及び、長い時間を経て新たに「離れ離れになる大切な人に贈り物をする」という風習を生み出した。同じように、レクティファールが妃たちに首飾りを贈った日は「男性が女性に来世での再会を誓い、今生での結婚を申し込む日」として定着する。

後の世でレクティファールが「女性好き」として名を知られるよ

うになる理由の一つとして、この一件を例に出す史家は多い。

彼らは口を揃えて言う、「レクティファールほど真面目に、そしてまったくの同時に複数の女性を口説いた男は、歴史上稀である」と。

◇　◇　◇

「えへへへへへ……」

「うふふふふ……」

夜の後宮の談話室。そこで自分の首元を手鏡で映しつつ、恐ろしく締まりのない表情で奇妙な笑い声を発している姫君が二人。

談話室に足を踏み入れた紅龍公の妹姫は、その光景に眉根を寄せた。

「何、あの気持ち悪いの」

「今朝からずっとです。お役目の間は流石に自重して頂きましたが……」

昨夜レクティファールから贈られた首飾りは、どうやら二人の自

制心を何処かに吹き飛ばしてしまったらしい。

食事中も、入浴中も、二人は揃って締まりのない顔でへらへらするばかり、護衛の騎士たちも当初は苦笑を浮かべていたが、やがて困惑、苛立ちを経て、今は無表情である。

極端に出会いの少ない職場であるのに、日がな一日惚気話を聞かされ続けたようなものである。

満腹を通り越して殺意を抱き始めたらしい。

「ですが、ファリエル様も……」

「なっ……」

「珍しいですね、首布なんて……」

首に巻いた絹の下には、昨夜レクティファールに着けてもらった首飾りの感触。

ファリエルは朝無意識のうちにこれを着け、慌てて首布で隠したのだった。外さなかったのは、本人曰く「作ってくれた職人に悪いから」らしい。

「いや、あのね……」

「知ってます？　下手に隠されると逆にすごく目立って、暗に自慢されてるような気持ちになるんですよ？」

「え、え……」

護衛の騎士から溢れる暗澹たる波動。

ファリエルは思わずたじろぎ、言い訳を思考に並べ立て、しかし口にする勇気を持てずに撤退を選択した。

「ちょ……あああもう！　メリエラ、リリシア！　お茶にしない！？」

ファリエルはその場から逃げるように二人の下へと駆けて行く。

「逃しましたか」

目標を失い、壁際の同僚たちと合流する護衛騎士。その場には、同じように負の波動に負けた騎士たちが無表情で立っていた。

「姫様方、お茶をお持ちしまし……ひゃあっ！？」

部屋の一角を占領する暗黒色の波動に、お茶を運んできた厨房担当の騎士が悲鳴を上げた。

彼女はがたがたと震えながら、それでも何とか台車を三人のいる卓まで運び、任務を達成した。無論、そのあとは逃げるように退出したのだが。

◇　◇　◇

「ふむ、困ったな。仕事中でも外すのは少し躊躇われるし……しかし……ふふふ……」

フェリエルはなんとか白衣に首飾りを合わせる手段は無いものかと、昨夜からずっと衣裳をひっくり返して研究を続けていた。

その最中にぴたりと動きを止めては嬉しそうに首元に手を伸ばし、小さく笑い声を上げるということを繰り返している。

「中々どうして、面白いことを考えるじゃないか」

すでに悲恋に憧れる年齢でもない。ただ、できればこういった浪漫主義というものも多少は理解してくれていると、それはそれで張り合いが出るというものだ。

「まあ、契約してしまった以上、他の男に靡くことはないんだが……」

そもそも、あの男が神話や恋人同士の催しごとを重視する性格とは思えない。

昨日のことも、単なる日常の延長として認識しているだろう。

「これは、色々巻き込んで記念日に制定してもらった方がいいかもしれないな」

国定の記念日にする必要はないだろう。それではあまりにも物々しい。

ミレイディアやルキーティ辺りに相談して、恋人同士の仲を近付ける宗教的な催しごととして利用するのが適当だろう。

次期皇王が始めたことだ、神殿も意外と乗り気になるかもしれない。

「リリシアが旗振り役になってくれれば、こちらは問題ないな」

来年の今頃は、街に仲睦まじい恋人たちが溢れるかもしれない。

「幸せは皆に分けてやらないとな」

どこか勝ち誇ったように笑うフェリエルを、鏡の向こうの彼女だけが知っていた。

◇　◇　◇

流石に療養中の父と未だ意識の戻らない母には負担を掛けられないと、フェリスは今回のことの顛末を祖母に伝えた。

各諸侯家が恋薬騒動で動き回っている以上、それを抑えられるのは四龍公家くらいしかいない。

そのためにもある程度の事情説明は必要だろうと祖母に連絡を入れたフェリスだが、そこでマリアがレクティファールに首飾りに繋がる情報を与えたという事実を知ったのだ。

「え？　じゃあ、これってお祖母様が……？」

〈そうよぉ。あ、でもちょっとした手助けをしただけで、考えたのはレクティファールだから気にしないでね〉

「うん、それは分かってるけど……って、お祖母様！？　今レクト

のこと『レクティファール』って呼ばなかった!?」

〈あら？　おほほほ……〉

「待って！　それってどういうこと!?　まさか……！」

〈フェリスにはまだ早いわぁ……うふふふふ……〉

「ちょっと待ってよお祖母様！　他の人ならいいけど、レクトはボクの――」

婚約者、と言おうとしたフェリスに、マリアは蛇のような笑みを浮かべてそれを遮った。

〈結婚はともかく、男女の間に他人が入り込むことなんて珍しくないわ。それが嫌なら、せいぜい自分を磨いて相手を繋ぎとめなさいな〉

「ぐむ……」

こと男女の間に義は存在しない。

勝った者が正しく望むものを手に入れ、負けた者は総てを失う。

今も昔も変わらない、血みどろの戦場だ。

〈でも、あなたたちと同じ戦場に上がるつもりはないわ。わたくしはわたくしなりに、あの可愛らしい人を助けるだけよ〉

「――本当に？」

〈息子と義娘の生命の重さと同じだけ、わたくしはあの人に恩を返さなくてはならない。わたくしの二人への愛情は、百年や二百年で返せるほど小さくないの〉

それに、孫の心を救ってもらった恩もある。

顔を一度も見ることがなかった、血の繋がらないもう一人の孫を弔ってもらった恩もある。

〈あの人には長生きしてもらわないと、ね〉

折角のご馳走も、一匙だけでは空腹を刺激するだけ。

総て食べ尽くしてこそ、その料理の味も分かるというものだ。

「お祖母様……何か怖いんだけど……」

〈うふふふ……〉

フェリスは思う。

何か、嫌な敵を作ってしまった気がする、と。

◇　◇　◇

「で？」

「で、と申されましても……口にするのは少し、憚られると言いましょうか……」

「アリアは」

「申し訳ありません。わたくしは“それ”の経験がございませんので」

後宮のオリガの部屋に呼び出された側娼二人は、じっと自分たち

を観察するオリガに困惑しきりであった。

後学のためにレクティファールとの夜の生活の様子を教えて欲しいと呼び出されたものの、その質問の内容はあまりにも直球過ぎて答えに窮することが何度もあった。

今も、「挟むってどうやるの」という質問をぶつけられ、二人揃って顔を引き攣らせたばかりだ。

「あの、オリガ様」

「何？」

先ほどからオリガの私物らしい帳面に赤裸々な夜の生活を綴られているリーデは、もう羞恥心で死にそうになっていた。

騎士団の報告書とは違い、こちらは完全に私的なものだ。役目と割り切ることはできない。

恥ずかしげもなく学術的興味に基づいて質問されるより、もっと単純に、それこそ幼い興味本位で訊かれたほうがまだましである。

「オリガ様はオリガ様なりの方法で、その、殿下となされた方がよろしいのではないかと……」

「――お前にはどうせできないから、虫けらは……虫けらしく地面で這い蹲れと？」

「そこまでは言っておりません！」

悲鳴を上げるリーデに、オリガは非常に冷たい視線を向けた。珍しく、非常に珍しく饒舌だった。

軍装という窮屈な服装で騙されたが、この女以外とある――オリガは親の敵のようにリーデの胸部を睨むと、自分のその部分に触れてみた。

ぺたり。

以上である。他の言葉では言い表しようがない。

「――――」

「ああ、オリガ様、落ち込まないで下さい！」

アリアはそんな光景を見て、自分にもそんな時期があったなぁと過去を懐かしむ。

先輩たちとの差に挫けそうになりながら、必死に自分を励まし続けた。いつか理想の――それが教育によって創り上げられた偶像だ

としても――主人の側へと入るのだと。

「オリガ様ぁ……」

「――――」

自分の胸を見詰めたまま硬直したオリガ。

その肩を揺さぶり、必死に現世へと帰還させようとしているリーデ。

あの頃は、こんな光景を目にするとは思わなかった。

「これも、殿下の甲斐性でしょうか」

呟き、アリアは首飾りに手を添える。

冷たい金属の感触に、アリアは微笑んだ。

レクティファールはこれをアリアに贈る際、彼女だけにこの首飾りのもう一つの機能を伝えていた。

（自裁用……毒性付与術式）

液体を入れている部分には、誰にも気付かれないようあとから術式が刻み込まれている。

蓋になっている螺子の部分を、特定回数、特定方向、特定角度回すことで、内部の薬品を猛毒に変える術式。

龍族でも神族でも、魔族でも死に至らしめる猛毒は、変化してからたった数分しかその効果を発揮できない。

だが、その数分間であれば、少しの苦しみもなく、眠るように自ら命を断つことができる。

（それを伝えなかったのは、殿下の覚悟なのでしょうね）

使わせるつもりはないのだ。

しかし、自らの手で愛しい者たちに自裁の手段を与えることは、彼をより追い詰めることになる。

自らは追い詰められなければならないと、そう考えているのだろう。これからこの国が飛び込むであろう新たな時代は、それが必要になる。

「リーデ……三分の一……三分の一でいいから……」

「む、無理です……！　ちょっと、やめてください！」

このどうということのない日常を守るため、自分を追い詰めなくてはならない。

それはただ哀しいことなのか、それとも――

「オリガ様。わたくしの知っている体操などやってみませんか？」

「たい……そう？」

「はい、身体の気脈を整え、健全な発育を促す体操です」

「やる……！」

今を精一杯生きたいという、願望なのか。

アリアはそのどちらであっても、彼の傍らに居続けようと決意した。

紅龍宮の夜

紅龍宮の文庫に最近追加された数冊の絵本を読んでいたレクティファールは、横合いからそう声を掛けられて顔を上げた。

フェリエルと共に街から戻ってすでに二時間。酔ってくだを巻くフレデリックは細君二人に連行されて浴場に消え、フェリエルは手に入れた薬を保存すると言って自室に篭った。

手持ち無沙汰になったレクティファールは、シヴェイラが学生の頃に描いていた絵本があると聞き、文庫まで足を運んだのだ。

「何でしょう」

魔導灯の薄暗い光に照らされて、紅の髪が炎のように揺らめく。

レクティファールは婚約者でもある紅の妹姫に、首を傾げてみせた。

「地下の禁書庫から本を運びたいの。でも量があるから。使用人たちも半分くらいもう帰ってしまったし」

「ちょっと手伝って」

「なるほど」

禁書庫ということは、ある程度魔法に関する知識を持っていなければ立ち入ることもできないだろう。ファリエルがレクティファールに声を掛けたのも、間違った判断ではない。

「ついて来て」

そう言って身を翻すと、ファリエルは一度も振り返らずに文庫を出た。

あとに続きながら、レクティファールは「事務的な態度は信用されていると考えるべきか」と苦笑した。

フェリエルはもとより、ファリエルの態度もあの一件以降少しだけ柔らかくなったが、未だに打ち解けたとは言い難い。

初めての口付けを半ば無理やり奪ったことが原因かと少し悩んだこともあったが、彼女の姉曰く、別に初めてではないとのこと。ただ、相手が同性なので数に数えていないだけらしい。

「どういった書を運ぶので？」

「医学関連の呪術書とか、あとは精神作用系の禁書が幾つか。でも

運ぶのは後宮に移すものだけ。父の許可は貰ったし、後宮の方は準備してるから」

皇城や後宮にある禁書庫とまではいかないが、四龍公の城にはそれぞれの一族の成り立ちに関わってきた禁書が保管されていた。

紅龍宮の禁書庫といえば戦略級攻撃魔法の触媒となる魔導書が数冊保管されているが、そちらは動かさないらしい。

「――しばらく、こっちには戻れないし」

そう言って、ファリエルは少し寂しそうに目を伏せた。

婚礼の儀――同時にレクティファールの即位の儀でもある――まで既に二四月を切った。

半年しかないのだ。軍医としての仕事と婚礼の準備にかかる時間を考えると、実家とはいえそう何度も戻ってくることはできない。

「魔法薬を創る儀式に使う魔導書は、後宮に運んでおこうと思って。あたしと姉さん以外に魔法薬を創る人は今はこの城にいないし」

薄暗い廊下を進み、地下へと続く螺旋階段へ。

複数の地下空間がある紅龍宮だが、禁書庫はその中でも最も深い

場所にある。

途中幾つか封印の施された扉を抜け、二人は冷たい空気と暗闇の満ちた地下室へと入った。

「明かり、点けるね」

ファリエルの言葉と同時に、二〇メイテル四方二層式の地下書庫が光に照らし出される。

二人がいる上階から覗き込むと、下階には夥しい数の書棚が並んでいるのが見えた。

「上は比較的低危険度の本と、仮眠室とか、簡易厨房とか、浴室とか――あ、湯雨だから浴槽は小さいけど」

そう言ってファリエルが指し示す先には、確かに壁で区切られた部屋が一つ。

扉は魔力や熱を遮断するために分厚い魔法合金でできているようだが、そこに掛けられた丸い文字で「きゅうけいしつ」という可愛らしい部屋札は――

「――あ、あたしが子どものころに作ったの！　文句ある！？」

「いえいえ、むしろフレデリックの趣味じゃなくてほっとしました」

娘の描いた部屋札を禁書庫に掛けるというのもどうかと思ったが、敢えて口には出さない。

各家庭のやり方に口を出すほど立派な生き方はしていないのだ。

「じゃあ、まずはあっちの書棚からね」

「了解、少佐殿」

ぴっと拳を胸に当てると、レクティファールは片方の口角を持ち上げて笑みを浮かべる。

そんなレクティファールの態度に頬を膨らませたファリエルは、必要な魔導書を書き連ねた用箋をその顔に叩き付けた。

ぱしんと小さな音が響く。

「それ、下にあるから！」

「――はい」

どすんどすんと床を揺らして上階の書棚の間に消えたファリエル。その後ろ姿を用箋の隙間から見詰め、レクティファールはやれやれと肩を竦める。

何とも距離感の掴み難い関係になってしまったものだ、そう溜息を吐いた。

◇　◇　◇

目的の本は、そう時間も掛からずに集めることができた。

そもそもこんな時間に頼む用事なのだから、時間がかかるはずもないのだが。

「これで全部ですか？」

「え、と……薬物呪法、新・呪殺禁書、ヘルメリア詩篇……」

用箋と積み重ねた魔導書を見比べ、ファリエルは取り残しがないか確認していく。

都合十二冊の魔導書の背表紙を確かめ、ファリエルは頷いてみせた。

「大丈夫、全部ある」

「そうですか、それでは」

「うん、じゃあよろしく」

そう言って二冊ほど魔導書を脇に抱えたファリエル。

「え？」

まさか、残り全部運ぶのだろうか。

レクティファールは分厚い十冊の魔導書を見詰め、ファリエルを見詰め、不思議そうな顔で首を傾げる彼女に小さく嘆息して魔導書を抱え上げた。

どうやら運ばなくてはならないらしい。

「――そりゃ、ファリエルさんに持たせるよりは自分で持った方が気が楽だけれども」

「どうしたの？」

「いえ、別に」

単なる男の意地である。

或いは、レクティファールの好き嫌いかもしれないが。

「じゃ、戻りましょ」

先導するファリエルに続き、レクティファールは書庫の扉へと向かう。

前が見えないので、仕方なく魔導書が反応しない極小出力で探測魔法を展開した。

脳裏に展開されるファリエルの後ろ姿。

最近少しだけ太ったと言っていたが、部屋外套を羽織った姿からはそれを推し量ることはできなかった。

「――あれ？」

扉の把手に手を掛けたファリエルが、小さく声を上げる。

その後ろ姿を観察していたレクティファールは、何かあったのかと身体を捻って直接彼女の姿を捉えた。

「どうしました？」

「ううん……何かね……扉が開かないの……」

把手を握り、それを回そうとするファリエル。

しかし鍵を開いたはずの把手は、全く動かない。

「壊しますか？」

「駄目！　そんなことしたら自爆術式動いちゃう」

盗難防止の自爆術式だ。

魔導書が悪意ある第三者の手に渡らないよう、扉の鍵が破壊された場合に発動する仕掛けになっている。

「ではどうします？」

ここはファリエルの実家だ。レクティファールが判断するよりもいい案を持っているかもしれない。

「――ここに来ることは侍女に伝えたから、しばらく戻らなければ誰かが探しに来ると思う」

「外からなら開きますかね」

「あたしたちがここに入れたのだから、たぶん」

たとえ開かなくとも、外からなら自爆術式の解除もできるという。

最悪術式を解除して鍵を破壊すれば、出ることはできる。

「問題は、父がどこまで冷静になれるかだけど……」

「――――」

可愛い娘が男と二人きりで密室に閉じ込められている。

さて、フレデリックは冷静に対処できるのだろうか。

「まあ、最悪〈皇剣〉で回復できるでしょ」

「医者としてその台詞はどうかと思いますが……納得できる自分が憎い」

とりあえず、お茶でも淹れるから――休憩室へと向かうファリエルに続きながら、レクティファールは少しだけ自分の人生を呪った。

（少なくとも今回は、悪いことはしていないはずなんだけどなぁ）

やはり日頃の行いか、と呟き、レクティファールは休憩室へと向かった。

◇　◇　◇

休憩室は、思ったよりも狭かった。

元々物置として使用されていた部屋を改装したというから、それも仕方のないことなのかもしれない。

ただ、上下水道と魔力伝導管は通じているから、湯雨や手洗いに困るということはない。

保存の利く菓子類や数種類の香茶が常備されており、窮屈ささえ

気にしなければそれなりに快適だ。

「すみませんね、これ以上は流石に動けないので」

「別に。あまり暖房も強くないし、湯たんぽ代わりってことで納得する」

肩を寄せ合うように仮眠用の寝台に腰掛けた二人は、湯気を立てる磁碗を手に言葉を交わしていた。

足側三分の一が棚の裏に隠れている寝台は、二人で座るには余りにも手狭だ。肩は当たり前のように触れ、身動ぎすれば相手の身体の感触を直に感じることができる。

意外というべきか、ファリエルはこの状況下でもレクティファールに愚痴一つ零すことはなかった。

ただ黙って香茶を啜り、茶菓子に手を伸ばしている。

そのまま半時間ほど無言が続いたあと、おもむろにファリエルが口を開いた。

「――叔母さま、だいぶ良くなった」

「そうですか」

シヴェイラの現状は、少なくとも肉体的な傷は完治したという状態だ。

精神的な傷はそもそも時間以外に治す手段がない。気長に待つしかないのだ。

例外としては精神作用系の魔法を用いた治療だが、これも大きな傷を負った精神には負担が大きすぎて施すことは難しい。

「婚礼の儀までには、なんとかしたいけど」

娘の晴れ姿を見せてあげたい。

ファリエルも、フェリエルも、おそらくフレデリックも同じように考えているだろう。

「正直、ちょっと厳しいかなとは思う。きっかけでもあれば違うけど、あまり刺激するのも良くないし」

「フェリスのことは認識しているのでしょう？」

「うん、反応はある。おそらく精神はそれなりに回復してるんだと思うけど、肉体との接続が上手くいかないみたい。叔母さまは、自

分で自分の精神を壊したから……」

正確には、精神と肉体の接続を絶った。

現実を放棄し、精神側へと逃げ込んだのだ。

「ねえ」

「なんですか？」

ファリエルは、レクティファールに身を寄せ、その銀色の瞳を見上げた。

押し付けられた柔らかい感触に、レクティファールの眉が一つ動く。

「あたしがあんたを怖いって言ったら、あんたはどうする？」

「怖い、ですか」

「うん、怖い」

それは、男どもに壊されたシヴェイラの姿を見てしまったからか。

レクティファールがシヴェイラを治療する姿を一番間近で見たからか。

「叔母さまのことは――気分は良くないけど、納得もできないけど、理解はできる。戦場に出れば珍しいことじゃないし」

そういった被害にあった女性たちを治療したこともある。

その後立ち直った女性もいれば、自ら生命を絶った女性もいた。

それに、女性ばかりではなく男性や子どももこういった被害に遭うことはある。

「じゃあ、治療のことですか」

「――うん」

あれは、ファリエルの常識の範疇には収まり切らない光景だった。

神族の奇蹟でも、魔族の秘術でもなく、兵器の御業。

創造主の領域に片手を突っ込んだかのような光景に、ファリエルは怯えに近い感情を抱いた。

「あれは……」

ファリエルは固く拳を握り、声を詰まらせながら心中を吐露する。

「人が手を出しちゃいけない領域……そんな気がする」

「私は人ではないですからね。人の領分を侵すことも、必要なら躊躇いません」

彼は兵器だ。

それも、その性能を十全に発揮すれば世界の在り方にさえ干渉できるほどの。

「だけど……！」

ファリエルはレクティファールの襟元を掴み、吐息を交換できるような距離で言葉を吐き出した。

「レクティファールは人の意志で、人の領分を超えた！　創造主の領域を侵したのだとしても、それは人の意思でやったことじゃない！」

人の意思の具現であれば、それは人の行い。

兵器ではなく、人が成し遂げたことではないだろうか。

「怖いのは、レクティファールが人じゃないってところじゃない。あんたが人じゃないって自分の存在を決め付けていること」

ファリエルはずっとレクティファールの考え方に疑問を持っていた。

他人を優先し、公人としても私人としても自分より誰かを考えている。

君主の役目――否、それだけではない。

「レクティファール。正直に答えて」

ファリエルはそのままレクティファールを押し倒し、全体重を掛けて彼の動きを封じた。

思考の片隅に、暖かいという感想が浮かんだ。

「あんたは、人？　兵器？」

ファリエルの問い掛けに、レクティファールは少しも表情を変えなかった。

ただしばらくの間沈黙し、無言のままファリエルの髪を撫で始めた。

ファリエルは、黙って待ち続ける。

「さて、自分でも分かりません」

「レクティファール！」

「でも……」

レクティファールと名を呼ばれ、彼は曖昧に笑った。

いつの間にか自分のものになっていた名前。今は、唯一彼自身を示す記号だ。

「あなた方と過ごせるなら人でありたいし、あなた方を守れるなら兵器でも困ったりはしません」

どちらでも、変わりはしない。

レクティファールは概念兵器であると同時に、レクティファールという人でもある。

人であるレクティファールを望む者がいるなら、それだけで彼は人として生きていられる。

「ファリエルが構わないというなら、私を人として扱ってください」

そうすれば、レクティファールは人でいられるのだから。

「――うん」

レクティファールの胸に顔を乗せ、ファリエルは首肯した。ほっとしたような吐息を揃って吐き出し、二人は当たり前のように身体を重ねたまま、全身の力を抜いた。

そのまま眠ってしまおうかとレクティファールが毛布を引っ張り出すと、ファリエルは彼の身体をよじ登り始める。

そのまま彼の隣に身体を落とすと、小さく呟いた。

「何かされたら、困るんだけど」

「そうですね、自制します」

確かに部屋の暖房はあまり強くないし、体調をしっかりと保つならこうしてお互いの体温を交換するのが一番確実だ。

レクティファールは厚手の毛布を二人の身体に掛けると、手を伸ばして明かりを消した。

暗闇の中で、ファリエルが呟く。

「甘え下手」

「ははは……誰かに教わろうにもあてがなくて」

アリアやリーデは甘えさせてはくれるが、上手い甘え方というものはついぞ理解できなかった。

マリアあたりなら或いは、と思ったが、流石に今は不味い。

「――甘えさせる方法、探してみようかな」

「は？」

「ん、なんでもない」

果たしてこれが如何なる感情によるものか、ファリエルは興味を持たなかった。

ただ、将来の目標の一つとして、この男に手綱を付けようと思った。

紅龍宮の夜と朝

「――ちょっと、本気？」

「本気も何も……ね」

少し腕を動かせば、簡単に触れられる距離。

彼女が身動ぎすると暖かく柔らかいものが触れ、良い匂いがする。

「朝まで過ごすのはいいけど、だからってこんな……」

「禁書庫じゃ龍族だって魔力を使えない。それはつまり、魔力を用いて底上げされていた身体機能も低下しているってことでしょう？」

「――未熟で悪かったわね、ええそうよ、あたしは姉さんや両親みたく魔力の完全遮蔽ができませんよ」

「むくれないむくれない。まあ、それはそれで可愛いですし、私は役得ですが」

「見えてるの！？」

「わりと鮮明に」

「ぎゃあっ」

叫び声と同時に毛布に隠れるファリエル。

一枚しかない毛布はそれなりに大判だが、二人で使うには少し小さい。

ファリエルに奪われた分を、レクティファールは彼女に近付くことで相殺した。ついでにその身体に手を伸ばし、色々確かめる。

医者の不養生は良くないのだ。

「ちょ、どこ触ってるの！」

「――腰から、尻にかけて」

真面目な顔で走査してみれば、この辺りは特に問題はないようだ。

続いて、上半身へと移る。

「え？　え？　レクティファール、待ちなさい、理性を取り戻しなさい！」

「理性的ですとも、ええ、あ、また少し大きくなりましたか。そういえば、胸の下着の大きさが変わったとか……」

「――背中触って分かるの！？　というか、誰から聞いた！」

「身体一つ分くらいなら透過できますし、なにより皇王のお仕事ですし。あ、情報源については守秘義務が」

「あたしの情報には守秘義務ないの！？」

配偶者の身体を走査し、健康状態を確認するというのは、もはや皇王の仕事の一つだ。

配偶者の身体の隅々まで確認できる立場にあるのだ。それこそ髪の毛一本に至るまで、徹底的に調べ上げる。

「体重は二〇〇グルーム……いや二一二グルームですか。ファリエルの身長と体型から計算するに、標準の中には収まっていますね。健康そのものです」

良かったと頷くレクティファールに半眼を向け、ファリエルは溜息を吐いた。

「ええそうでしょうよ。毎日毎日身長体重測って、週に一度血液採取して、月に一回全身の透過分析検査受けてるんだから」

だから、離せ。

ファリエルはレクティファールの胸板をぐいと押し、身体の間に空気を取り込む。

冷たい空気が二人の間を抜け、ファリエルはぶるりと身震いした。ただでさえ出力の低い暖房だが、その調子が良くないと気付いたのはつい先ほどだ。

二人で寝れば寒くないとある種気楽に構えていた二人だが、今は二人で密着していなくては寒くて――主にファリエルが――寝られたものではないという状況にある。

「寒くないですか」

「寒い！」

一度引き剥がしたレクティファールを再度引き寄せるファリエル。

レクティファールがその身体を包むと、「悔しいけど、ぬくい」と呟く声が聞こえた。

「あーあ、親父にバレたら絶対怒られる」

「怒られるようなことしてないですけどね」

「結婚前の娘がいい歳した男と二人きりで狭い密室で一晩過ごして怒らない親父に見える？」

「少なくとも私は怒られないでしょうね、殺しに来るとは思いますが」

「怒る方がましってこと？」

「ええ」

本気で殺しに来るフレデリックと剣を交えること、既に四回。

それだけレクティファールが問題行動を起こしていると見るべきか、フレデリックの馬鹿親加減が度を過ぎていると見るべきか。

確実に言えることは、それをくぐり抜けるたびにレクティファールに遠慮がなくなってきたということだ。

無論、紅の姉妹姫に対する遠慮である。フレデリックに対しては、最初から遠慮などしていない。

「愛されていて羨ましい」

「――リリシアとか、メリアに泣かれるわよ、その台詞は」

「親の愛は偉大だな、と、そう思っているだけです」

むしろ、そう思わないと納得できない。

「あんたも子どもできれば分かるでしょ」

「なるほど」

そう言って、レクティファールはファリエルをじっと見下ろした。

「――相手もいますしね」

「こっち見んな」

「ぐえ」

顎を押し上げられ、レクティファールは潰れたような悲鳴を上げる。

ごきり、と首が嫌な音を立てた。

「手ぇ出したら揉めるでしょうが」

「――フェリエルは、どっちか片方ならいいんじゃないかって言ってましたけど」

「ああもう、姉さん……」

それはそれで揉めるだろうな、とレクティファールは思っている。

特に親馬鹿が黙っていまい。

「その後二人で話し合い、妥協案として、本番をしなければいいのではないかという結論に達しました」

「あんたも姉さんも、ときどきすごく莫迦よね。――ええい、子どもの理屈かっ！」

「そして、色々どの程度まで大丈夫か確認作業中です」

「もーやだ、この婚約者と姉」

おかしな方向に吹っ切れた二人が揃うと、誰も止められない。

姉の部屋の監視役の乙女騎士が鼻血を吹き出して気絶したという噂を聞いたが、原因はその辺りにあるのだろう。

「口付けの一つや二つなら……まあ、あたしも嫌じゃないけど……」

「フェリエルとはもう少し色々やってますが」

「――聞いたら戻れなくなりそうだけど、正直気になる」

「意外とみんな好きですよね、こういう話」

「年頃だもの」

「――年頃？」

ごり、と鳩尾にファリエルの拳がめり込む。

相手と密着した状態から拳を打ち込むというのは、果たして世間一般の護身術の中に含まれる武技なのだろうか。

「～～～～！」

「一言多い」

「よ、良く言われます」

それでも回復は早い。

レクティファールはすぐに損傷を回復し、ファリエルの身体を撫で始めた。

「とりあえず、これは大丈夫ですよね」

「ん、たぶん……」

ファリエルの身体内部の気脈を活性化し、血流を促す。

体表に神経が集中している部分には圧縮した変性魔力を打ち込み、更に精神感応系の魔法を用いて精神の波を整える。

婚約者がやっていることを理解しているファリエルは黙ってその手のひらを受け入れ、五分もすると頬を紅潮させて満足気な吐息を漏らすようになった。

「はあぁ」

気脈活性は医療現場でもごく一般的な技術だ。

医療系の魔法ではあるが、薬物などと違って副作用がなく、実は魔法としてもそれほど高出力ではない。

その分技術は必要だが、一番大切なのは慣れである。

「――うまい……じゃない」

大きく呼吸し、熱い息をレクティファールの胸に吐き掛けるファリエル。

もそりと太ももを擦らせ、レクティファールの足に絡みついた。

「こっちの方が、あったかい」

「――眠いんですね」

精神を落ち着かせた分、眠気が勢いを増したのだろう。

ファリエルは既に両目を閉じ、レクティファールに身体を預けている。

「明日は……皇都にもどるし……」

「ええ、もうおやすみなさい」

「――ん」

頷いたのか、単に首の力が抜けたのか。

こてりとレクティファールの腕に頭を乗せたファリエルは、静かに眠りの国へと旅立った。

「さて、お姫さまは寝た訳ですが」

並列思考の半数は、まだ仕事中だ。

ただ、今身体を動かしている意識は情報の最適化作業――レクティファールにとっての睡眠――に入っても問題あるまい。

「寝ましょうか」

起きていても仕方がない。

腕の中の強気なお姫さまを起こさないようにできることなど、ほとんどないのだ。

「おやすみなさい」

「んー」

小さく声を掛けてみれば、ファリエルは小さく笑ったように見えた。

◇　◇　◇

「ぶっころーす！！」

怒りでがたがたと震えるフレデリック。

しかしその身体は、椅子に魔導合金製の鎖で縛り付けられている。

細君二人の息の合った動きで、フレデリックは一瞬でこの状態になった。

「レクティファール、てめえ人の娘と同衾した上に身体中まさぐったとか……！　こんの色ボケ野郎！」

「健全でいいじゃないか、なあファリエル」

「ええ、姉さんなんてもっとすごいことしてるしね」

「なんだとぅ！？」

朝一番で禁書庫に飛び込んできたフレデリックは、同じ寝台で抱き合って眠る二人を前に、怒りのあまり気を失った。レクティファールはフレデリックが飛び込む前に起きていたのだが、完全に絡み付いたファリエルを引き剥がすのに手間取ってしまったのだ。

ちなみに中途半端に引き剥がしたせいでファリエルの服が乱れていたという事実は、フレデリックとレクティファールしか知らない。

「ちくしょう！　勝負しやがれ！」

「いや、奥方の許可が出ないので……」

「当主は俺だ！」

「――え？」

「嘘じゃねえよ！？」

最近、自信は揺らぎつつあるが。

レクティファールが運んだらしい食堂で意識を取り戻したフレデリックは、剣を引き抜いた瞬間に捕縛されたのだ。

それはもう見事な動きで、レクティファールは二人の細君を見て流石元軍憲兵隊の出身だと思った。

「まあ落ち着いて下さい。――ここにエリュシオンから取り寄せた一〇〇年熟成の琥珀酒があってですね」

「娘を頼む、今度龍族でもイチコロのいいやつを送ってやろう」

即答だった。

思わず脊椎反射で答えてしまったフレデリックに、娘二人の極寒の視線が突き刺さる。

「父よ、流石にそれはわたしでもどうかと思うぞ」

「親の愛なんて、そんなものよね」

慌てるフレデリック。

レクティファールを睨み付け、罵る。だが、視線はレクティファールの持っている木箱にちらちらと。

「図ったなレクティファール！」

「自業自得でしょうが」

そんなこんなで、騒がしい紅龍宮の朝だった。

第五話「両雄邂逅」

〈マルドゥク王国〉の状況に関して、関係国にはある種の楽観論が根強くあった。

帝国の西方軍集団に相対していることもあり、軍事政権側も正統政府側も軍事政権の王都掌握以降、軍を動かすことはなかったからだ。

正統政府首班のパトゥーリア王子が幾度か軍に王都の奪還を命じかけたことはあったが、王子の周囲にいる正統政府の大臣や〈アルストロメリア民主連邦〉の高官らがその都度、「ここで軍を動かすことは帝国に利することであり、他の国の批判を浴びることになる」とそれを押し止めていた。

若いパトゥーリア王子にしてみれば、それらの忠言はたいそう耳障りだったのだろう。

この内乱が始まってから「殿下のお側に」と与えられた数名の女性と閨を共にするたび、彼女らに大臣や連邦高官に対する罵言を聞かせていた。もちろん、女性たちはそれを本来の主に報告した。

とはいえ、その本来の主人である〈マルドゥク〉貴族や連邦政府の高官にしてみれば、単に口先だけで騒いでいる分には、若き王子など後々大きな宝を運んでくる可愛い犬でしかない。餌と住まいを与え、適当に雌犬を充てがっておけばいいのだからなんとも手軽な投資先と言える。

逆に、彼らの心中で最も大きな懸案事項といえば、軍事政権側とも交渉の場を持っている〈アルトデステニア皇国〉の存在だった。

建前上は〈マルドゥク〉国内に在留する皇国国民の安全を確保するためとされているが、実際には〈マルドゥク〉に対して影響力を強めている連邦への牽制の意味合いが大きい。だが、先の内乱で弱みを握られた連邦はもとより、〈マルドゥク〉貴族も皇国の貴族や商会から様々な便宜を得ている。下手に藪を突付いて眠った龍を起こすくらいならば、少し宝を分け与えて大人しくして貰っていた方がいいと彼らは判断した。

それに、軍事政権側の内情を知る皇国と友好的な繋がりを維持しておけば、得られる宝も増えるかもしれない。

打算塗れの平穏が、しばしの間続いていた。

◇　◇　◇

「馬鹿な！」

友軍の一部が防衛線を放棄し、王都へ向かっている。

そんな部下からの報告にそう叫んだのは、〈マルドゥク〉東部の国境線で帝国軍と相対している陸軍第九五空中騎士連隊の連隊長を務めるアントニオ・ヴェスパティレ陸軍大佐だった。

空中騎士連隊とは、有翼人種の国である〈マルドゥク王国〉で花

形とされている部隊だ。

空中騎士専用に開発された魔動式甲冑を纏い、複数の術式を組み込んだ突撃槍を抱えて敵の頭上から急降下攻撃を行う空中騎士は、上空警戒の天馬部隊や一角馬部隊の援護があれば、堅牢な装甲で守られた自動人形さえ一方的に撃破できる〈マルドゥク〉の切り札――と軍の高官は嘯いているが、実際に空中騎士を率いている者たちや空中騎士自身は、自分たちが大空の中でもっとも脆弱な生き物であると自覚していた。

大地の上で人間種や力なき混血種が竜種や獣人、幻想種などの他の生き物たちに劣っているように、有翼人は空に生きるものの中で最も劣弱な種族だった。

爪も牙もなく、魔力を扱う技術も突出しているわけではない。飛行速度では小鳥に勝る程度、昇れる高度は世界で最も高き山の頂にも届かず、夜目が利くのは一部の部族のみ。地上に向けての降下突撃以外で有翼人が他の種族に優越する手段がなかったというのが、偽らざる現実である。

魔動式甲冑が実用化され、魔導武具が実用化され、非力な有翼人でも一定以上の攻撃能力を備えられるようになるまで、彼らの任務といえば空からの偵察が主であった。今でも有翼人の偵察部隊の練度が高いのは、その頃に得た技術や経験が活かされているからに他ならない。

〈マルドゥク王国〉の栄えある空中騎士連隊――人々の抱く幻想を守り抜くため、彼らの連隊は指揮官から一兵卒に至るまで生え抜きの精鋭部隊である。それだけに、戦線に占める彼らの重要性は高い。最前線の後方にあって予備機動戦力としてそこに存在するだけで、

帝国の動きを制限することができる。

それだけに、アントニオの衝撃は大きかった。

離脱した部隊は第九四空中騎士連隊。連隊長はアントニオの同期であり、また友人でもあるヴィッツ・ハルケン陸軍大佐だ。

軍学校での成績はヴィッツの方が幾らか上だったが、昇進などはこれまでずっと同時で、結婚記念日さえ半年も離れていない。お互いの子ども同士も同級生であり、父親たちと同じように友人関係を築いている。

軍事政権側のやり方を批判していたヴィッツが何故――アントニオは唸り、拳を机に叩き付けた。

アントニオの机の上には家族のものと一緒に軍学校時代にヴィッツと共に撮った写真が飾られており、アントニオは思わずその写真に写った友人を睨み付ける。

「帝国の動きは？　他の戦線は防衛線はどうなっている」

「帝国側に目立った動きはありません。偽装撤退――こちらの策略だと思い込んでいるか、単に攻勢の意思を持っていないか、それについては司令部でも意見が分かれているようです。他の戦線でも離脱部隊が現れたようですが、どれも後方の予備部隊でした。前線そのものは依然、通常の警戒態勢を維持しております」

アントニオは多きく息を吐き出し、両目を覆い隠すようにしてこめかみを揉む。

とりあえず、こちらの態勢が整っていない状況下での帝国側の攻勢は避けられたようだ。

あとの問題は、何故、この時期に軍事政権側に同調する部隊が動き始めたかということだ。

公にはされていないが、前線部隊にも軍事政権側と心を同じくする者たちがいることは想定されていた。ただ、軍事政権側も――むしろ彼らの方が正統政府などよりもよほど前線の現状を知っているため、彼らが戦線崩壊の危険性のある部隊の引き抜きを行わないであろうことは、容易に想像できた。

それらの理由から、前線部隊では軍事政権側と接触している部隊を内偵するのみに留めていた。正統政府からも軍事政権からも、前線部隊には「国境警備任務を継続せよ」という命令しか届いていない。どちらの命令に従っても、他方の命令に反するということはないのだ。

それに、正統政府も軍事政権の扱いに関して慎重になっている。

「逆賊討つべし」と息巻いていた者たちはいつの間にやら姿を消し、パトゥーリアの周辺には軍事政権側を帰順させる方が得策であると唱える者たちが増えた。

皇国からの働きかけが、形になり始めたのだ。

正直なところ、連邦も軍事政権の打倒を望んでいるわけではない。

軍事政権が軍内部で一定の支持を受けていることは調べればすぐに分かるし、積極的に支持を表明していなくても、心情的には軍事政権に近いという軍高官も少なくない。

市民の間でも軍事政権を認める者たちは増えた。皇国が背後にいるとしても、その統治は以前の王統政府時代と同じか、それ以上の水準にあるのだ。市民が軍事政権をを認めることに不思議はない。皇国資本が軍事政権の許可を得て〈マルドゥク〉の市場へと参入するようになったことで、他国や国内の商会も軍事政権下での商取引に不安を感じなくなったのか。〈マルドゥク〉国内での経済循環はほぼ以前の水準に戻り、市民が軍事政権に不満を抱く理由のひとつは、ほぼ完全に排除されたと言って間違いない。

武力による政権奪取は確かに他国の警戒感を煽ったが、彼らは武力のみで政権を奪った訳ではない。彼らの背後には旧体制に不満を持つ官僚や貴族、商会などの存在があった。そうでなければ、あれほど簡単に首都を掌握できなかったし、今に至るまで占領地域を維持することもできなかっただろう。

だが、アントニオは今回のこの軍事政権の動きには憤然とした。

皇国との戦いにおいて蒙った被害に加え、国内で帝王位を巡る争いが激化していることもあり、ここ最近帝国軍の動きは鈍化している。それを見越しての部隊移動なのだと頭では理解しているが、わざわざこんな危険を冒す理由が分からない。

アントニオが見たところ、正統政府はそう遠くない未来に連邦と皇国の二大国間の取引によって、軍事政権と和解することになるだろう。

連邦の目的は海を得ることであり、皇国は西域が安定した皇国経済の受け皿であり続ければいいと考えている。

その目的さえ達せられるなら、どちらが政権を担おうと構わないのだ。

確かに自分たちの国に好意的な為政者が国を纏めているというのは、どちらの国にとっても都合がいい。しかし都合がいいだけであり、必須ではない。

安定的に〈マルドゥク〉を治められるのはどちらか、両国の中では結論が出ているのだろう。

建前上パトゥーリアに主権を認めるのは仕方がない。しかし実権は、パトゥーリア以外の誰かが持つべきだ。軍事政権を正統政府の中に組み込み、正統政府の官僚などと協力してパトゥーリアから実権を引き剥がす。そしてパトゥーリアを象徴としての君主に据え、その下の者たちで国を切り回すのだ。

皇国も連邦も、パトゥーリアには少しの期待も抱いていなかった。

連邦はパトゥーリアを保護し、祖国への帰還に向けて多くの便宜を図っているが、その分パトゥーリアが君主の器ではないと知っている。

平時ならば多少の問題点には目を瞑ることもできようが、今は戦時中だ。それも〈マルドゥク〉は西域三国の一角、ここが崩れれば西域そのものが帝国陣営の手に落ちることも考えられる。アントニオにさえそれが分かるのだ。両大国の政府がそれを理解していないはずがなかった。

思えば、パトゥーリアは不幸な王子であった。

兄たちの存在もあり、〈マルドゥク〉を背負うことになるなど誰も考えなかった。降嫁した姉姫たちの婿も優秀な者が多く、たとえ兄たちが何らかの原因で王位を受け継ぐことがなくとも、パトゥーリアが王になる可能性は決して高くなかった。

いずれ他国の姫の元へ婿入りし、両国間の繋がりを強める役割を担うはず――誰もがそう考えていたから、こんな状況になってしまった。

戦時とはいえ、いささか平穏が続きすぎたのかもしれない。それが原因で、前線の兵士たちと王統政府の間にあった認識の齟齬が大きくなったのだろう。

兵士たちが生命を散らすことが当たり前になり、それによって保たれている平和を紛い物だと認識できなくなった王。

その結果が、今回の武力政変だ。

「ヴィッツ……」

王家への忠誠心が感じられない友人ではあったが、王家を否定するような思想の持ち主ではなかった。これで王家が目を覚ませば、それでいいと考えているのかもしれない。

「くそっ」

アントニオは椅子に身を投げ出し、部下を下がらせる。

ここでどれだけ騒ごうとも、動くことはできない。ならば、何も考えずに任務を全うするべきだ。

そう決意したアントニオ。だが、部下が部屋を出ようと扉に近付いたとき、その扉が大きな音と共に開かれた。

「連隊長！」

「何だ！」

入室の許可無く飛び込んできた部下を叱責するつもりはない。

血相を変えた部下の姿を見れば、そんな叱責に意味などないと分かりきっている。

「ハルケン大佐が……」

部下の言葉が終わらないうちに、その横をすり抜けるようにアントニオの友人が姿を見せた。

アントニオは目を真ん丸に見開き、その驚愕から立ち直れずにいた。

「よ」

軽く手を上げて笑顔を見せるヴィッツに、アントニオは拳を震わせた。

殴ってやりたいとは思いつつも、友人がわざわざ自分の下を訪ねた理由が気になった。

「――お前たち、下がっていろ」

「ですが……」

ここで二人きりになれば、アントニオにも離反者の嫌疑が掛けられる。

部下はそう考えたのだが、アントニオはもう遅いのだと言った。

「ヴィッツが離反した時点で、俺も要注意人物さ。こいつと付き合いがあると軍が知らない訳がない」

「そうだな。ここに来る途中、司令部からの出向組が随分と物々しい動きを見せてたぞ」

憲兵もな、そう言ったヴィッツは勝手に革椅子に座りながら、卓上の葉巻箱に手を伸ばして中を物色し始める。

中の葉巻は、いずれも彼の好物ばかりだった。友人の気遣いに微笑み、吸い口を専用の短剣で切り、魔法で火を着けた。

「――だ、そうだ。明日には俺の下にも司令部から連絡員が来るだろう。監視役もな」

監視役で済めばいいが――美味そうに煙をくゆらせる友人を横目に、アントニオは密かにそう考え、しかし、是非もないとその思考を打ち切った。

「もう一人、連れがいるんだが」

「なら、さっさと連れてこい」

既に毒は呷った。もう誰が来ても同じだろう。

「はいよ。――おい、そこの」

「は……？」

「外にお前らが想像してるよりもずっと偉い人がいる。丁重にお連れしろ」

アントニオの部下に対し、まるで自分の部下にするような命令を下すヴィッツ。

部下は困惑したようにアントニオを見るが、そのアントニオが頷いたのを見て、部下はヴィッツの命令に従うことにした。

「――誰だ」

「お前が想像しているより、俺たちには意義深い人だよ」

ヴィッツはそう言ったきり、葉巻を愉しむことに夢中になった。

アントニオは彼の正面に座り、自らも葉巻に手を伸ばす。

「娑婆で飲む最後の一本にならなきゃいいが」

「お前次第さ」

ヴィッツの指先に灯された小さな炎に、アントニオは葉巻を翳した。

先端を炙り、回し、綺麗に火が移ったことを確認してアントニオはそれを口に含ませた。

「嘘だったら」

「ここでお前に捕まってやる」

それで、身の潔白を証明すればいい。

ヴィッツの物言いに、アントニオは友人が本心からこの離反を行ったのだと悟った。

そして、説得など無意味だということも。

「分かった」

「助かる」

言葉は少ないが、意思の疎通に問題はない。

家族よりも長い付き合いのある友人相手に、余計な言葉は必要ない。

「――お連れしました」

扉の向こうから、震えを帯びた部下の声が聞こえた。

その声から察するに、どうやら、ヴィッツの言葉は真実であったらしい。

「入れ」

許可を出し、アントニオは扉に目を向ける。

さて、誰が姿を見せるか。

身構えたアントニオは、自分の予想が悉くひっくり返されることをまだ知らなかった。

◇　◇　◇

この日、騎士学校の第六講義室では、国際法学の講義が行われて

いた。

あとひと月で騎士学校での三種士官過程を終えて学校を去る予定のフェリス以下、第〇八九班の全員が一塊になって座っている。

真面目に講義を受けているフェリスとパトリシア。

その後ろの机に突っ伏して寝息を立てているルフェイル。

ルフェイルの隣に座るレクティファールはそんな仲間たちを眺めながら、自分の帳面に細かく講師の言葉を書き写していた。

「つまり、我々の軍法において、生存と文化を尊重すべき交戦相手とは、条件となる相手が国家であり、同時に文明国家であるという一文に従い、皇国暦九一年にキッツが提唱した『国家五原則』、一、国土を有すること、二、国民を有すること、三、主権を有すること、四、自らを国と認識していること、五、他国が国家として承認していることと、十三年にジュダースの唱えた『文明国家の三原則』、即ち、法によって統治されていること、理性によって統制されていること、国民が国という概念を理解していることを満たしている者ということになる」

皇国では、士官にはその兵科を問わず国際法学の修士以上の資格を持つことが要求される。

三〇年ほど前から新たに義務付けられたものであるが、それは他大陸国家との武力による衝突が現実味を帯びてきたからだった。

「ただし、これはその条件に満たない社会共同体を国家として認めないだけであり、そこに住まう者たちを人として認めないということではない。国際法上、彼らの扱いは自国民に対するものに準ずるとされる場合が多いが、他宗教、他種族との武力衝突ではその原則が無視されることも少なくない。しかし、我国では、それらの例外を一切認めていない。我国における人の定義――知能があり、何らかの手段で意思疎通ができる意識を持つ者を相手にした場合、我々軍人はその生活を保証し、文化を尊重、または保護する義務を負っている」

皇国と周辺国の間で結ばれた国際条約は多いが、その大半は二国間か多くとも一〇カ国に満たない国家間で結ばれたものがほとんどである。

イズモとの協商協定や南方海洋国家との通商条約、保護・従属国家との安全保障条約、連邦などとの間に交わされた防共協定の他に、帝国政府との間で暫定的に結ばれ、そのまま戦時条約と化した二国間陸戦法規――皇国を国家と認めていない帝国側は無視することも多いが――なども存在する。

いずれの条約も、トラン大同盟のような数十カ国の参加する条約として整備されたものではない。

未だ皇国とその周辺国は一つの条約を結べるほどに大きな世界観を持っていない。世界の中で自分たちがどのような立場にあり、どのような行動を取るべきか、そこまで考えを広げることができない。自国のための妥協をよしとせず、まだ妥協に意味を見出していないとも言える。

「我々が標榜する『皇王の下での平穏』は、言い換えれば陛下の御威(みいつ)の届かない場所での平穏を否定しているという説もある。しかし、我々軍人は陛下の代理人として、敵地にあっては現地の者たちの平穏を約束する存在でなくてはならない」

星龍旗の下での平和。

皇国の軍人が敵地において唱えるのは、それである。

「虐げられた者たちが、我らが星龍旗を目印に集う光景こそ、我国の目指すべきものだ」

星龍旗が平穏の象徴となるように――それは初代皇王が軍に課した使命でもある。

当時は皇国の国土を指していたその言葉は、今では他国にまでその範囲を広げている。

「レクティファール殿下は、おそらく先代陛下とは違うお考えをお持ちだろう」

自分の名前に、レクティファールはぴくりと肩を震わせた。

フェリスが思わず彼を振り返り、慌てて顔を背ける。レクティファールの正体が露見するようなことをするのは不味いと判断したのだろうか。

「貴様らは、おそらく小官よりも深く多く法を用いることになるだろう。騎士学校で学ぶような国際法の知識など、貴様らが佐官にでもなる頃は既に黴が生えているかもしれん」

講師は分厚い国際法の教書を候補生たちに示し、告げた。

「貴様ら士官の武器は、目に見えるものだけではない。その頭の中に溜め込んだ知識とこれから叩き込まれる知識だ。小官は、貴様らが自分の知識に生涯満足することはないと信じている。満足は停滞だ。それがどのような知識であっても、『これで十分』と思った瞬間に腐り始める。腐った知識では、貴様らが進むであろう時代は生き残れないぞ」

講師は教本を教卓に置き、白墨を手にとった。

「では、続いて我国の国際法に対する姿勢を――」

そう言って講師が白墨を黒板に向けた瞬間、彼の眼前に通信音と共に表示窓が開かれる。

学校からの通信ということで候補生たちが目を凝らしてその内容を読み取ろうとするが、この表示窓は特定の位置からしか像を結べないようになっている。

候補生たちの位置からでは、そこに表示窓があるとしか分からなかった。

「――ふん」

講師は表示窓に触れ、通信受諾の旨を通信元に送る。

表示窓が閉じ、講師は候補生たちを振り返った。

「――ハルベルン候補生」

レクティファールは名を呼ばれ、立ち上がる。

ルフェイルが顔を上げ、憐憫の眼差しを向けてきた。

出向組の悲しさか、こうして通信で呼び出されることは珍しくない。そのまま半日以上拘束されることもあり、軍務や学務のどちらかに専念している者たちに較べて余計な苦労を背負っている。

ルフェイルにしてみれば、そうまでして騎士学校と軍を掛け持つ選良者たちが理解できない。自分はこうはなりたくないと思うばかりだ。

「陸軍本営――陸軍総司令部――から出頭命令だ。南発着場に五分後、迎えの飛竜が来る」

「了解しました」

敬礼するレクティファールに答える講師。

「では、行きたまえ」

「は」

教本と帳面を纏め、レクティファールはそれをルフェイルに預けた。

宿舎に戻っている暇はない。

「じゃあ、これよろしく」

「おう」

「頑張ってねぇ」

パトリシアがひらひらと手を振り、レクティファールを送り出す。

フェリスはじっとレクティファールの目を見つめるだけであったが、彼にはそれで十分だった。

「では、行ってきます」

「うん、気をつけて」

途中顔見知りの候補生たちから見送りを受け、レクティファールは講義室を出た。

目指すは南発着場だ。

三階の廊下の窓から飛び出したレクティファールは地面に降り立つと、そのまま南発着場に向けて走り出した。

その光景を見ていた騎士学校の講師が驚きの表情を浮かべるが、飛び降りたのがレクティファールだと気付くと納得したように何度も頷く。

レクティファールは良くも悪くも、騎士学校で目立っているのだ。

〈レクト……こちら君の嫁三号だ。到着まであと三分〉

「了解。ですが何故に三号」

脳裏に響いたフェリエルの声に、レクティファールは首を傾げる。

愛竜ゾーリャが無人のまま飛んでくるかと思ったが、どうやら迎えはフェリエルらしい。

〈一号と二号では角が立つ。その点三号なら、適度に自尊心を満たせるし、角も立たない〉

「なるほどー」

生垣を越え、小川を越え、ついでに蔦に覆われた高さ三メイテルの有刺鉄線を飛び越える。

途中人工林の中に入って樹々の枝伝いに移動したが、息が乱れるということはなかった。

「もう少しで発着場です。そういえば、何があったかご存知で？」

〈通信で訊けばいいだろう〉

「フェリエルが知らなければそうします」

レクティファールの言葉に、フェリエルはハイデルから知らされたことをそのまま伝えた。

休日を後宮で過ごしていた彼女にレクティファールの迎えを頼んだのは、彼であった。

〈――来客だ〉

「ほう」

発着場が見え、そこに偽装用の兵装を纏った飛龍状態のフェリエルの姿がある。

フレデリックよりも遙かに小さな体躯はしかし、メリエラよりも二回りは大きかった。

フェリエルは金色の瞳を嬉しそうに細めると、身体を落としてレクティファールに背を見せた。

〈向こうは〈マルドゥク〉の王子を名乗っている。だが、パトゥーリア殿下ではない。今外務院が事実関係を調査しているが、なんと

も言えないな〉

「――偽者、とは言えないのでしょうね」

レクティファールはフェリエルの背に飛び乗り、手綱を掴むと、軽く足で腹を叩いた。

フェリエルはその合図を受けると、大きく翼を広げて身体を浮き上がらせる。

〈そいつを連れてきたのは、キャベンディッシュ卿だ〉

「――――」

余計に、偽者ということは考え難い。

あの男がそんなつまらない真似をするとは思えなかった。そういった意味では、レクティファールはキャベンディッシュを信頼している。

「会ってみなければ、何とも言えませんね」

〈その通りだな。折角だ、わたしも同席しよう〉

「お好きに」

護衛役ということなのか、単なる興味本意なのかは分からないが、非公式会談であればフェリエルがいたところで問題にはならない。

もちろん、一切口出しをしないことが絶対条件ではあるが。

「さて……これはまた厄介なことになりそうで」

〈何、今度はわたしたちもいる。あとは君がわたしたちを使いこなせるかどうかだ〉

「――そっちの方が、よっぽど難題ですよ」

楽しそうに喉を鳴らすフェリエルの背で、レクティファールは溜息を吐いた。

◇　◇　◇

皇城の一室に入ったレクティファールは、そこに見慣れない民族衣装を纏った青年に目を奪われた。

黒い翼と紅い髪、均整な体躯は細くも筋肉に覆われ、無駄がない。有翼人としては理想的とも言える姿だ。レクティファールはこの青年が件の〈マルドゥク〉の王子であると判断し、続いて部屋を見回した。

部屋の中には事前に知らされていた通り、キャベンディッシュと青年、その青年の従者らしき若い女。そして外務院総裁のマルファスと宰相ハイデルの姿がある。

青年は窓から皇都の風景を眺め、時折感嘆の声を上げたり、頷いたりしており、どうやらレクティファールの入室に気付かないはずもないのに、気付かない振りをしているらしい。

いきなり先手を打たれたレクティファールは、自分と青年を面白そうに見比べるキャベンディッシュに肩を竦めてみせた。

「待たせたようだ」

レクティファールは一声掛け、マルファスとハイデルの礼を受けながら革椅子に腰を下ろす。

青年はその声でようやくレクティファールを振り返り、白い歯を剥き出して笑った。

「突然の訪問という無礼を働いたのはこちらだ。むしろ、こうしてすぐにそちらと顔を合わせることができただけ、幸運だった」

「それは何よりだ。しかし、なにぶん突然のことで、君が何を求めているのか、私は何も聞いていない」

青年はレクティファールの向かい側の席に座ると、背後に控える女に手を差し出した。

女はその手に一本の装飾の施された短剣を乗せる。短剣が青年の手に渡ると同時に、部屋の中に緊張が走った。

「――何もしないぞ。それにこれは刃が潰れている。刺すくらいならできるかもしれんが、な」

青年が短剣を鞘から引き出すと、確かに刃はなかった。

その代わり、鍔の辺りに〈マルドゥク〉王家の紋章が入っている。

「光魔法で彫琢された紋章だ。贋物を作るのは、少々難しい」

身の証ということだ。

レクティファールはマルファスに目配せし、青年が差し出した短剣を彼に受け取らせた。

マルファスなら、〈マルドゥク〉王家の紋章を知っている。

恭しく短剣を受け取ったマルファスは、それを持ったままレクティファールに調査の許可を求めた。

「しばし、お時間を頂いても？」

「構わないか？」

マルファスがレクティファールに問えば、レクティファールは青年に訊ねる。

青年は頷き、「存分に」と答えた。

「では、失礼して」

マルファスは懐から片眼鏡を取り出すと、それを掛けて短剣を改める。

片眼鏡にはいくつもの分析用の魔法術式が組み込まれており、一度で複数の調査を行うことができた。

マルファスの視界には拡大された紋章と、そこに刻まれた細かい文字が踊り、恐ろしく高度な魔法で刻み込まれた紋章だと分かる。

彼は自身の記憶の中から〈マルドゥク〉王家が使用する紋章を呼び出し、その中から共通するものを選び出していく。

紋章は王族一人一人に別のものが当てられることが多い。確かにこの紋章が王族に与えられたものだとしても、その与えられた王族が誰であるかで、青年の立場は変わってくる。

マルファスは、額に汗が浮かぶのを感じた。

これがもし自分の考えているものと同じか、それ以上の代物であれば、この国は西域の争いに本格的に巻き込まれることになるだろう。

外務院を束ねる者として、彼も多くを求められるようになる。

（これは、帝国との戦いとは違う）

勝っても負けても恨みが残る。

レクティファールという若い摂政がどのような道を示すのか、マルファスは密かに主君の背を窺った。

「さて、あの短剣の真贋を確かめている間に、こちらの疑問に答えていただきたい」

レクティファールは足を組み、青年を見据える。

青年は余裕の笑みを浮かべながら、大仰に首肯した。

「無論」

「ではまず、名を伺いたい。我が名はレクティファール。この国の摂政を務めている」

レクティファールの言葉に、青年は少し面食らったようだった。

そして自分がまだ名を名乗っていないことを思い出すと、肩を震わせて謝罪した。

「失礼した」

青年は、胸を張り、その黒翼を揺らして自らの名を告げる。

自信に満ち、覇気に溢れた声だった。

「我が名はレイヴン。かつて父より都を追われた、〈マルドゥク〉の正統なる王位継承者である」

第六話「愛縁機縁」

パトゥーリアにしてみれば、自分に反旗を翻した軍の者たちは国家に対する裏切り者と同義であった。

自分こそが〈マルドゥク王国〉の正統継承者であり、彼らはそんな自分に反逆したのだから、その生命で罪を贖うのが当然だと。

そんなパトゥーリアを支持する者が少数ながら連邦にいたことも、彼の強気な姿勢を支えていたと見て間違いない。連邦にしてみれば、このままパトゥーリアの手綱を握っているだけで念願の海を手に入れることができるのだ。その後ろ盾となることに躊躇いはない。その立場がよりパトゥーリア寄りか、中間派かの違いがあるだけだ。

〈マルドゥク〉の首都を制圧した軍と東部戦線を離脱した軍が合流したと聞いても、連邦にそれほど大きな動揺はなかった。戦線を支える戦力が減ったことで帝国の冬期攻勢を誘発するのでないかという懸念も確かに存在したが、本来の主力である皇女グロリエの第三軍集団を欠いたままの帝国に、積極攻勢に出る気配はなかった。

やはり、帝国は内輪で揉めている――連邦の国防総省はそう結論付け、情報省と共に大統領に報告書を提出した。

ただその報告書には、例外として一部の部隊が突出して三国同盟側の出方を探るような動きを見せたとあった。しかし、それも大規模攻撃の前兆というには余りにも小規模に過ぎ、挑発と偵察を目的としたものであると判断された。

連邦も、この時期に帝国が大規模攻勢に出る可能性は高くないと考えていたし、事実として帝国が動くことはなかった。〈マルドゥク〉正統政府と連邦政府は、戦線から後退し、〈マルドゥク〉首都に向かった部隊が思ったよりも少なかったこと、それによって生じた同盟側の混乱が小さかったことが、ただでさえ緩慢だった帝国の動きを掣肘したのではないかと分析している。

つまり、パトゥーリアの怒りを無視すれば、状況はそう大きく変化してない。

少なくとも、多くの人々はそう考えていた。

◇　◇　◇

事態が急変したのは、前線に動きがあってからわずか一週間後のことだった。

「我が名はレイヴン、レイヴン・ゲート・ガリウエド。この国、〈マルドゥク〉の正しき王位継承者である」

〈マルドゥク〉王都より大陸全土に向けて、一人の青年が自らの〈マルドゥク〉王位継承を宣言したのだ。

彼はその場で自らを出自を明かし、自分こそがこの国の正統なる後継者であると告げた。

当然、青年の言葉を疑った者は多かった。

軍事政権の主だった面々を背後に並べて演説をしていることから、軍の半分を掌握していることは疑いようもない事実だが、王家所縁の者であるという明確な証拠はない。王家に連なる血統に多い黒翼の持ち主ではあったが、それだけで身の証と看做すことはできなかった。

確かにその顔立ちは若き日の国王によく似ていたし、覇気に溢れた姿は確かに王家の血を感じさせ、軍の半数を味方に付けた実力はパトゥーリアよりも国王に相応しいのかもしれない。

実際、〈マルドゥク〉の民は大いに戸惑った。

武力でもって国を奪取した青年は確かに王者の風格を備えてはいた。それに見合う戦力や、後ろ盾もあるのだろう。どこかの国か、国内の有力貴族か、国民はそんなことを考えながら放送に見入った。

そのうち、誰かが青年の背後に立つひとりの人物に気付いた。

深い皺の刻まれた掘りの深い顔立ち。灰色の翼と、同色の髪。陸軍の軍装を纏い、年齢を感じさせない隆々とした体躯。

幾度も大きな戦功を挙げ、その名と姿を人々の記憶に刻み付けてきた。

その名を誰かが口にする前に、レイヴンの言葉が人々の意識を奪う。

「我は愚弟パトゥーリアに代わり、この国を統べるべくこの地に舞い戻った。愚弟は父王の散った王都を取り戻すことさえせず、あろうことか民たちの苦労から目を背け、他国に飼い慣らされようとしている。我は一度父王によって都を追われた身、こうして王位を望むことは父への、祖国への裏切りであると思い、今まで名乗りを上げることはなかった」

しかし、とレイヴンは言う。

「父の忠臣であり、我が股肱の臣でもあるグルジ・ハイレンベルグ。この男は我にこう言った。『祖国を想うなら、主君が先頭に立ち、真っ先に血を浴びるべきである』と」

グルジ・ハイレンベルグの名に、人々は驚愕した。

〈マルドゥク〉空中騎士団の生みの親にして、この国を西域三国の一角にまで押し上げた立役者。文武に秀で、西域の歴史に深く精通した文化人としても名の通った男だ。

幾度も叙爵の機会がありながら、それを固辞し続けた高潔の士。軍人たちは国王よりも彼を主君と尊び、戦場では彼のために命を捨てたという。

そして何より、レイヴンの父王が王位に就けたのは、この男が側に侍っていたからだと言われている。

グルジがいたからこそ、レイヴンは軍部に少なくない味方を作る

ことができ、それを秘匿し続けることができたのだ。

「グルジは我が母に付き従い、都を落ちた。それは父王の意思によるものだ」

母とは誰か、そう考えた者は多い。

王子を名乗るからには王妃のうちの誰かということになるが、庶子ということも考えられる。しかしグルジという大身が一線を退いてまで守った女性となると、人々の記憶に該当する人物はいない。

いずれの王妃も、軍事政権による政権奪取の際に処刑されている。軍事政権を率いるレイヴンの母が、その中にいるとは考え難い。

それ故に、人々はレイヴンの言葉に引き込まれた。この王家の面影を色濃く受け継ぐ青年の母が誰なのか、固唾を飲んで答えを待った。

レイヴンは懐から短剣を取り出すと、それを人々に示す。

「母の名はイズールド。先王ヴェルヴォ三世の末姫だ」

短剣に刻まれた『双頭鷲と紫百合』。その紋章を与えられていた美姫の姿を思い出し、人々に衝撃が走った。

イズールドを知る者たちはここに至ってようやく、レイヴンの姿

の端々にその面影があることに気付いた。切れ長の瞳、紅の髪、端正な面立ち。

しかし、イズールドといえば、王の腹違いの妹ではないか。

年齢こそ四〇近くも離れているが、実の妹であることに変わりはない。

人々は目の前の王子が、万人に祝福されて生まれてきたのではないのだと知る。

「その通りだ。父王は妹と情を交わし、そして我が生まれた」

有翼人にとって、近親間で子を成すことは珍しくない。

元々彼らは十数人規模でひとつの家族を形成し、その家族ごとに縄張りを守ってきた。それは今も変わらず、家族こそが最も強い繋がりを持つ共同体である。

そのため、兄弟姉妹の中でたった一人の男子が、他の姉妹を総て妻として娶るという事例も過去には存在した。そして、その風習は今も一部の地域で続いている。

だからといって、王族が近親間の情交で生まれたというのは、間違っても誇れるものではない。血統的には優れていても、他国の中には近親間の婚姻を禁じている国もある。そういった国々の心証を考えれば、レイヴンの存在は〈マルドゥク〉最大の弱点にもなりかねなかった。

「皆の心配は分かる。我の存在が決して祝されぬものであることも、理解している。だがそれでも、我はこの国の王として立とうと思う」

レイヴンは放送を見守る国民たちに向け、真っ直ぐな眼差しを向け、真っ直ぐに自身の本心を吐露した。

パトゥーリアは大仰な仕草で声を張り上げる種類の男であったが、レイヴンは一つ一つの言葉を印象付ける。

「それは、それこそが我が母の願いだからだ」

レイヴンは短剣を懐に仕舞うと、静かな声で語り始めた。

「母は、我を産むと同時にこの世を去った。故に、我は母を知らぬ。我にとって母というのは、このグルジの連れ合いであるカミアンのことだ」

だが、母を知らぬとはいえ、自らに流れる血の宿命から逃れるという考えはない。

自らの血には、この国を守り、栄えさせるという役目がある。

「両親が揃って国家の守護者たる王家の嫡流であること。そして今、この国が一つの危機に瀕していること。我はこれを天の采配と思う」

レイヴンは拳を握り、それを天に掲げる。

これまで見せたことがない、力強い動き。自然と、人々の目がレイヴンに集まる。

「我は逃げぬ！　愚弟よ、帝国よ、我国と民に血と涙を求めるというなら、我がそれを阻んで見せよう！　マルドゥク万歳！　我らが故郷に未来を！」

レイヴンの咆哮に、彼の背後に立っていた者たちが唱和する。

轟、と空気が震えるほどの大音声だ。

「マルドゥク万歳！　我らが民に栄光を！」

「マルドゥク万歳！　我らが王に勝利を！」

いつしか、投影機の前に並ぶ国民たちの間からも、「マルドゥク万歳」の声が上がり始める。

ここ数世代現れなかった強い王。自分たちを引っ張り、導く者の

到来に彼らの中の有翼人の本能が歓喜の声を上げた。

群れを統率するのは強い個体でなくてはならない。有翼人に限らず、生き物として当たり前の大原則に合致した指導者を得た〈マルドゥク〉の民たちが――たとえ彼らに紛れた煽動者がいたとしても――熱狂するのも不思議ではない。

〈マルドゥク王国〉はこれまで、帝国との戦争によって多くを失い、抑制されてきた。戦いに勝つため、生き残るためとはいえ、国民に自らの欲望を抑えることを強いてきたのだ。

増大する軍事費。軍に引き抜かれる若者。いつ終わるとも分からない戦争。停滞する経済。

我慢に我慢を重ねてきた国民にレイヴンの姿はどう映るのか、自らを取り巻く苦境からの解放者ではないだろうか。

軍事政権の政権奪取以降、他国の庇護下にあり、一度も帰国していないパトゥーリアに較べれば、今こうして王都から声を発しているレイヴンのなんと凛々しいことか。

しかし、ふと冷静になった者たちは一つの疑問を抱いた。

レイヴンが軍事政権を影から操っていたというなら、軍事政権が政権奪取直後に行った王族の処刑は彼の意思で行われたことになる。

彼らが見つめる先、人々の歓声に手を上げて答えるレイヴンは、歓声が落ち着いた頃合を見計らって口を開いた。

「だが、我は諸君らに謝らなくてはならない」

レイヴンは目を伏せ、沈痛な面持ちで続ける。

「――この義挙の当初、我は自らの臣下の過ちを止めることができなかった。彼らは自らの欲望を叶えるため、我らの義を利用して父を、我が一族を手に掛けたのだ」

彼はそう言って、三人の貴族の写真を投影して見せた。

「カノピエス侯爵、ブルグムント伯爵、フォ＝マガスト伯爵。彼らが父と一族を弑した」

レイヴンが示した三人は、いずれも軍事政権に深く関わっていた大貴族だ。

これまでは軍事政権の中枢を担っていた者たちでもある。

「彼らは、我が父や前政権の担い手たちの無能が許せなかった。民たちに苦労を強いていることを理解しなかった父。それを諫めることを忘れ、自らの権力のみを求めた奸臣ども。そして王族という自らの地位の持つ権利のみに甘え、その義務を忘れた一族の者たち。彼らは父や一族、奸臣たちの死をもってしか、この国を救えないと考えたのだ」

両腕を広げ、レイヴンは吼えた。

眦に涙を溜め、震える声で。

「彼らはすでに自らの命でもってその罪を贖った！　我らの進む道を、その血で雪いでくれた！　ゆえに、我はもう彼らを責めることはしない。ただ、この国を見守っていてほしいと願うだけだ！」

レイヴンの声が途切れ、沈黙が満ちる。

そんな中で、少しずつ少しずつ人々の声が、〈マルドゥク〉万歳、レイヴン殿下万歳と形を作り始めた。

その声はやがて一つの波に乗り、いつしか巨大なうねりとなって人々を包み込む。

先ほどの歓声よりも大きな、喊声。

自らの国を、自らの君主を讃える声は、レイヴンが満足げに頷く中で〈マルドゥク〉全土に広がっていった。

◇　◇　◇

こつん、という音に、彼は顔を上げた。

音のした方向を見れば、上司にして主君である摂政レクティファールが磨き上げられた錆壇の机に、直方体の青銅の文鎮を転がしていた。

レクティファールがお忍びで街に出たときに市場で見付けてきたという文鎮は、極々簡素な意匠でこれといった特徴はない。その分、純粋な文房具としては使い勝手がいいようだ。

「――何かございましたか？」

彼――摂政秘書官としては中堅どころである首席秘書官補のディリス・サザナミは、魚鱗人系イズモ人――彼の両親はイズモからの移民だった――に多い両目の離れた顔に疑問符を浮かべて、主君に訊ねた。

ここ数日、ディリスの仕事にこれといった変化はない。そして、これから一週間程度も大きく変化する予定はない。摂政の副官として公的業務の補佐を行う彼らの仕事に変化がないということは、摂政の公務に何か問題が発生したとは考えにくい。もし問題があれば、彼ら秘書官は一週間から二週間は皇城に泊り込むことになっている。

ディリスはレクティファールが決済した書類をそれぞれの部署に送る紙箱に収め、主君の言葉を待つ。

秘書官は雑用係としての役割も負っている。秘書官長が市場まで甘味を買いに走ったこともあれば、逆に新人が急遽報道官として記者会見に駆り出されたりすることもあった。それだけに秘書官たち

は各分野に精通した熟達者が集められているが、摂政に何か命じられるときは誰もが緊張する。

ついこの間も、秘書官になったばかりの炎狐族の女性が帝国よりさらに北にある北冠大陸に派遣され、現地の小国との貿易協定の締結を命じられたことがある。外務院の外交官と共に派遣されたのだが、獣人の中でも寒さに弱いとされる炎狐族にとってはこの世の地獄だったらしい。

「いや……存外自分も女々しいな、と」

「は……？」

レクティファールの自嘲気味な台詞に、ディリスは返す言葉がなかった。肯定するにも否定するにも、情報が足りない。

ディリスは同僚に思念通信を接続するか悩み、悩んでいるうちにレクティファールは仕事を再開してしまった。

「ディリス秘書官」

「は」

資料片手に書類の精査を行うレクティファールは、顔を上げない

まま言った。

ディリスは書類箱を乗せた台車の傍らで、直立不動の体勢になる。

「あと一時間もすれば、白龍公と皇国騎士ハルベルンが登城します。それまでにこの資料を揃えておくように」

レクティファールが差し出した用箋には、数冊の外交資料集と法務資料が名を連ねていた。どれも皇城の大文庫と資料庫に保管されているものだ。

手の空いている同僚の手を借りれば、ものの半時間で揃えられる。

「複写資料は必要ですか？」

「いえ」

「了解しました。それでは、三〇分ほど頂いてもよろしいでしょうか」

「ええ、良いように」

レクティファールの返答に一礼して、ディリスは台車を押して隣

の秘書官室に戻る。

そこでは、五名の同僚がそれぞれの机で仕事をしていた。

ただ、上座にある秘書官長の机は主不在で、皇王府の渉外担当者と打ち合わせがあると言っていたのを思い出す。

ディリスは同僚たちの中から手空きの者を探し、磁碗片手に文庫本を開いていた同僚に声を掛ける。皇王府からの出向組で、ディリスと同じく中堅どころの秘書官だ。専門は物流を主とした軍政と聞いている。

「カーツウェイル、殿下に資料を頼まれたが時間が押している。手伝ってくれないか？」

「なんだって？」

カーツウェイルと呼ばれた薄い金髪の男性秘書官は、飲み始めたばかりの黒豆茶とディリスを交互に見詰め、一つ溜息を吐いて立ち上がった。

ハイエルフ族らしい翅脈の浮かんだ羽が、不機嫌そうに羽撃く。深緑の瞳は、これまた不機嫌そうに細められていた。

「君は僕の休憩時間を何だと思ってるんだ」

「貴重な時間だと思っているよ。そして同時に、君が殿下の忠臣だということも知っている」

ディリスの答えに、カーツウェイルはぐっと言葉に詰まった。

カーツウェイルは皇王家の運営する孤児院で育ち、妹を皇王家の奨学金制度で高等専門学校に通わせている。そして、自身も皇王家からの支援で高等専門学校よりも高位の、特別専門学校の経済学部に通っていた。

皇王家に対する忠誠心という点では、ディリスよりもよほど厚い。当代皇王の下でも最後まで皇王府に残って職務を行なっていたほどだ。

「分かったよ、休憩時間はずらせばいいだけだ」

「助かる」

「よく言うよ」

磁碗を置き、カーツウェイルは上着を羽織って準備を整える。

大文庫も資料庫も除湿や温度調節の魔法術式は働いているが、室温は害虫の発生を抑えるために低く保たれている。そのため、夏場

は用事もないのに屯する皇城職員がいるらしい。

「で、どんな資料だい？」

「そうだな、一言で言えば――貴族家の養子縁組と他国との縁組、かな」

ディリスは渡された用箋を眺めながら、呟いた。

◇　◇　◇

主人と共に登城したアルフォードは、扉の向こうにいるであろう主君の考えがまるで分からなかった。

「白龍公と共に指定の時刻に登城せよ」と命じられ、約束の一時間前にリンドヴルム公爵家の皇都屋敷を出て皇城差し回しの魔動車に揺られること数分。

正門を潜って皇城に入ったはいいものの、主人さえその理由を知らされていなかった。

何か問題が起きたのかと眉間に皺を寄せる主を横目で見ながら、アルフォードはここまで来た。

扉の両隣に立つ近衛兵に会釈をすると、ここまで二人を先導して

きた女性秘書官が扉を叩く。

「殿下。白龍公カール閣下、皇国騎士侯ハルベルン卿がお見えになりました」

「分かった」

扉横の晶盤からレクティファールの声が聞こえると同時に、扉の鍵が開く。

秘書官が扉を開けて部屋に入ると、二人はそれに続いた。

扉を抜け、揃って一礼。

レクティファールは執務机から立ち上がって二人を出迎えると、応接用の革椅子に二人を招いた。

その抑揚のない声に、主従は揃って眉を顰めた。

「――飲み物は何がいい？　きついものもあるが」

「いえ、まだ仕事がありますので、黒を」

「自分も同じ物を」

レクティファールに訊かれ、二人は揃って黒豆茶を求める。

頷き、レクティファールは秘書官に小さく頷いてみせた。

「はい、すぐに」

秘書官は隣室に消え、摂政執務室は沈黙に支配された。

暖房が抑えられた部屋は少し肌寒いが、三人とも寒さには強い。それを知っていたから、来客前でもレクティファールも暖房を強めなかったのだろう。

カールはレクティファールが革椅子に深く腰を落ち着けるのを確認し、低い声で口火を切った。

「何かございましたか、殿下」

「問題、といえば問題でしょうが、そうでもないといえばそうでもない事態が起きました」

口調を改め、レクティファールは二人の前に資料を置いた。

資料に記された題名を読み、二人はレクティファールを見詰める。

過去百年間の国家間政略婚と、それに付随する両国の動向。そして、国家間政略婚の法的解釈を纏めた資料の数々。

法が異なる国家同士の婚姻は、それ相応の調整が必要になる。共通した宗教を持っている場合を除けば、それぞれの国内法を改正する場合もあった。

これを持ち出してきたということは、新たに法を調べ、改正する必要のある相手との婚姻か、資料が古過ぎて当てにならない相手との婚姻ということになる。

「何処かの姫でも娶られますか？　当家と付き合いのある国でしょうか」

カールはそう仮定した。

レクティファールはカールの娘たちとの婚礼を半年後に控えた今、新たに他国との婚礼話を抱える考えはないようだ。だが、周囲が色々手を回したのかもしれない。

アルフォードを伴わせたのも、ハルベルン家が主家の名代として様々な国へ顔繋ぎに赴いたという経歴を知ってのことだとカールは考えた。

「いえ、違います」

しかし、レクティファールは首を振り、カールの推測を否定した。

では、一体何のために自分たちを呼び出したのか、そう問い質そうと口を開きかけたカールだが、それを遮るようにこんこんと扉が鳴る。

レクティファールが入室を許可すると、秘書官が三つの磁碗の乗った台車を押して、執務室に戻ってきた。

「どうぞ」

白磁の器に揺れる黒豆茶。黒茶豆（クラーフ）の芳香が部屋に広がった。

手馴れた様子で牛乳と砂糖の小瓶を起き、受け皿に小匙を添えて三人の前に並べる。

「それでは、また何かありましたらお呼び下さい」

「うん、ご苦労」

秘書官はレクティファールの労いに再度一礼して、部屋を退出した。

扉が閉まったことを確認し、カールが口を開いた。

「では、〈マルドゥク〉関係ですか」

先ほどの〈マルドゥク〉王子レイヴンの放送は、屋敷にいたカールも目にしている。外務院に奉職している知人にことの真偽を確認した程度だが、西域という皇国の影響力の少ない地域でのできごとということもあって、政府の対応を見守るつもりだった。とはいえ、政府に請われれば協力するし、皇王家に何らかの役目を命じられれば否やはない。

西域となれば蒼龍公マリアの方が顔が利くが、カールも伝手がないわけではなかった。

「そうですね、あの国に関わりのあることです」

レクティファールの肯定に、カールは居住まいを正した。

自分をわざわざ呼び寄せるのだから、それが単なる世間話の延長であるはずがない。

隣のアルフォードも、おそらく初めて見る義息のもう一つの姿に若干の戸惑いと、緊張を見せていた。

「では、詳しい話を」

「――ん」

レクティファールは黒豆茶の入った磁碗を手に取り、少し悩むような素振りを見せた。

それがカールには意外で、また不思議であった。

この部屋にいるときのレクティファールは、良くも悪くも君主としての役目を全うしている。カールの知る限り、君主としての判断が必要な場面でレクティファールが迷ったことはない。

若いレクティファールがそれなりに君主としての役割をこなしていられるのも、その決断力があってこそだ。もちろん、私生活に関してはカールの関知するところではない。

「殿下」

カールはもう一度レクティファールを促した。

次はもっと強い言葉で諫めるつもりで。

「ええ、分かりましたよ。だからそう怖い顔で睨まないでください」

「――これは地です」

カールに睨んでいるつもりはなかった。

ある程度付き合いのある者しか分からない、少し拗ねたような声で、カールはレクティファールに答えた。

「それは失礼」

レクティファールは磁碗を受け皿に置き、足を組み直した。

そして何の前置きもなく、切り出す。

「ウィリィア・ハルベルンに、婚礼の話があります」

カールとアルフォードが同時に、呆けたように口を開いた。

その表情は、レクティファールが後々に亘って話の種にするほど、間抜けなものだったという。

◇　◇　◇

レクティファールの言葉からちょうど一分が経過した頃、先に意識を取り戻したのはカールだった。

隣のアルフォードは相変わらず呆けたままで、身動きひとつしない。

「――それは、殿下と……でしょうか」

カールの言葉は彼なりの確証があってのものだった。というよりも、二人を知る者たちならそれなりに抱いている確証だが。

アルフォードが年頃の娘に結婚話を持って行かないのも、持ち込まれるそういった話を断り続けられるのも、総ては目の前の青年あってのことだ。

すでに深い仲であるとか、正妃の婚礼の儀のあとに側妃入りする予定であるとか、実はもうレクティファールの子どもを身篭っているとか、そういった噂が出るくらい、傍目には互いを想っているように見える。

もちろん、カールはそれらが噂の域を出ないことを知っているが、別に否定するほど的外れでもないと考えていた。それよりも積極的に噂を利用し、レクティファールに甲斐性を身に付けさせようと色々考えていたほどである。

「いえ、違います」

そのため、そうレクティファールに否定されたとき、カールは何

とも言い難い喪失感を味わった。

そしてその喪失感の理由を考えたとき、あの二人の遣り取りが自分にとって当たり前のものになっていたのだと気付いた。

重責ある君主の立場を全うするには、ああいった気が置けない仲の誰かが必要なのかもしれない。それが友情か恋情かの違いはあるにせよ、カールとアルフォードの立場も似たようなものだ。

「相手は先ほどカールが言った、〈マルドゥク〉の王子レイヴン殿です」

その名を聞いて、カールはレクティファールが話を切り出すことを躊躇った理由が分かった。

あの国はあまりにも不安定な地域であり、相手もまだその手札総てを明かしているとは言い難い。

「何故、とお訊きしてもよろしいでしょうか」

そう口に出したのは、カールの隣でいつの間にか意識を回復し、黙って俯いていたアルフォードだ。

カールはその態度に剣呑なものを感じ、目を剥いた。不味いと思った。

「アルフォード、御前であるぞ」

そう強い口調で制しても、アルフォードは少しも堪えた様子はなかった。

それだけの胆力があるからこそ、カールはアルフォードを重用して来たのだ。

「レイヴン王子側からの申し出、ということもありますが……それが現状でもっとも国益に叶うと判断しました」

レクティファールは常と変わらぬ静かな口調だった。

これといって動揺している様子はない。

「レイヴン王子……娘を知っておられたと？」

「詳しいことは知りませんが、以前皇国に密かに訪れた際、会ったことがあると」

「――存じがけぬことです」

アルフォードは記憶を探るようにこめかみに手を遣り、頭を振った。

彼が知らないということは、もしかしたらウィリィアも憶えていないことかもしれない。

「しかし殿下、ウィリィアでは家格が……」

「一度リンドヴルム公爵家に養女として入って貰います。その後、メリアの義姉として嫁ぐ予定です」

なるほどな、とカールは思った。

四公爵家の養女、それも次期皇妃の義姉となればそれなりに釣り合いは取れる。

少し調べればメリエラとウィリィアが実の姉妹同然の付き合いをしていることは分かるし、それだけに人質としての価値もある。巷に流れるレクティファールとの噂も、彼に対する人質としての価値をウィリィア持たせていた。

「もう決まったことなのですか」

カールは指を組み、レクティファールの瞳をじっと見詰めた。

その言葉の真意は、「あなたはそれでいいのか」という一言に尽きる。

ここでレクティファールが「本決まりではない」といえば、おそらく外交の手札としてウィリィアを使っているに過ぎない。

しかし、

「交渉段階ではありますが、条件が折り合えば」

レクティファールの回答は、消極的な「是」だった。

条件の内容はおそらくカールにも明かされないだろう。だが、他にも訊かなくてはならないことがある。

「しかし、今この婚儀を公にすれば、〈マルドゥク〉の亡命政府が黙っておりますまい」

正統政府側がレイヴンの存在を認めていない以上、この婚儀によって皇国がレイヴンの率いる軍事政権を〈マルドゥク〉の正統な政府と認めれば、当然正統政府とその背後にいる〈アルストロメリア民主連邦〉は黙っていない。間違いなく婚約解消と謝罪を求めてくるだろう。

正統政府だけならまだしも、連邦とことを構えるのは得策ではないように思えた。

「〈マルドゥク〉の国内法を調べました。ですが、レイヴン殿が何らかの理由で王族籍を剥奪された訳ではないので、父である国王が彼の存在を認知していたという証があれば……」

「王位継承権は発生すると、そういうことですか」

「はい。〈マルドゥク〉の最高法院が王籍復帰を認めれば、年齢的にも血統的にもパトゥーリア殿より上位の継承権が発生します」

最高法院には王族の籍を管理する部署がある。そこでレイヴンの血統や父王の認知状況などを確認し、結論が出されるはずだ。

「国王陛下はレイヴン殿下の存在をご存知たったのですか」

カールの疑問には、すぐに答えが与えられた。

「放送でレイヴン殿が見せた短剣。あれの茎（なかご）に『まだ見ぬ我が子へ』という言葉が刻んであったそうです。短剣自体が紋章を刻んだ身の証のようなものですし、おそらくは認められるでしょう。最高法院はこの内乱で中立的な立場ですが、それだけに正統政府の思惑に乗る可能性は低いと言わざるを得ません」

「どちらかに付けば、負けたときに権力を奪われますからな。中立であれば、法を司っている以上どちらも手は出し辛い」

「そういうことです」

皇国としても、連邦が予想よりも強い姿勢で西域への影響力拡大を図っていることに危機感を抱いていた。

連邦の悲願である海の獲得。既に正統政府との間に幾つかの港を租借する約定を交わしているという情報もある。

西域はトラン大陸との交易で中継基地としての役割を負っている。皇国系資本の船も多く出入りしているし、今は海軍の遣西艦隊が駐留している。艦隊の艦の入れ替わりはあるものの、西域の海に対する影響力という点では実際に軍を派遣している皇国が一歩先んじていると言っていい。

陸では増強一個旅団程度の戦力が在留皇国民の安全を確保するという名目で駐屯しているが、連邦がすでに一個師団程度置いている部隊を更に増強する構えを見せており、先の状況は不透明に過ぎる。

「我国としては、連邦にこれ以上西域に深入りしてもらっては困るのです。あの国には一時の熱情に任せて無茶をする性質がありますから」

その熱情で、皇国は亡国の危機に瀕したのだ。

熱情が悪とは言わない。それこそが民が国を動かす原動力でもある。

しかし、帝国という巨大な敵と相対しているときに余計な火種は抱え込みたくない。

「連邦には内密にレイヴン殿への鞍替えを打診しています。結果は何とも言えませんが、今後の戦局次第で変わるでしょう」

敵として戦うならレイヴンの方が手強いだろうが、今はまだその心配は必要はない。

あの混乱した西域で〈マルドゥク〉を纏める力量を持っているのは、パトゥーリアではなくレイヴンであるとレクティファールは見ていた。

「――レイヴン殿下は、どのような人物ですか」

アルフォードが、ほんの少しの沈黙を挟んでレクティファールに問う。

表情には複雑な心境が表れており、カールはそれを慮って顔を伏せた。

「中々のやり手、としかまだ答えられません」

レクティファールの言う「中々」の基準が若干高い位置にあることを、二人は知っていた。

周囲が傑物ばかりのレクティファールの基準は、他よりも高い。

「ただ、自分が国を握ったとき邪魔になる者たちを揃って消してしまう程度には、優秀なようですが」

三人の大貴族を処刑したことを指しているのだと、二人は気付いた。

大領を持つ貴族で、軍事政権の重鎮。当然、レイヴンが国王となった暁にはそれなりの地位を約束されていたはずだ。

そして、国王と王族の処刑について総ての真相を知っている者たちでもある。レイヴンにとっては、利用価値はあっても最後までは抱えていたくない連中だろう。

「レイヴン殿の言葉について真偽はこの際どちらでもよろしい。問題は、〈マルドゥク〉の民がそう信じていることです」

国王が処刑されて以来、身の安全のためと嘯いて他国から口を出

すばかりの第三王子と、かつての英雄を従えて王都から自らの存在を発した廃王子。

そもそもの原因が廃王子率いる軍事政権側の政権奪取だということは忘れ去られ、今や〈マルドゥク〉はレイヴンを新国王として生まれ変わろうとしている。

これでレイヴンが単なる煽動者であるなら皇国が横槍を入れる余地もあるのだが、国軍司令官に任命される予定の英雄グルジや王都に残っていた貴族たちを纏めているレイヴンの実力は本物だ。

グルジがそういった教育を施していたことは間違いないだろうが、その教育以上に彼を輝かせる覇気と才能は、両親ともに王家の嫡流という血統故か。

「少なくとも今は、レイヴン殿に首輪を付けるためにも、向こうの提案に乗るしかありません」

帝国側に寝返るとは考え難いが、可能性は皆無ではない。

それに、この話は皇国にも益がある。

「レイヴン殿は自らが国王となった場合、我国との同盟条約締結を望むと言っておられました。これは軍事・経済二つの面での同盟です」

軍事同盟は分かる。帝国に相対するためだろう。

ならば経済は、ということになるが、レイヴンは自らの国の立地を生かし、貿易拠点として国を発展させるつもりのようだった。

アルマダ大陸からトラン大陸、さらに遠方の大陸に向かうとなれば、西域はその中継地として適している。レクティファールが国内に建設を進めている港湾都市も同じような目的で建設されているが、大陸の西と東ということもあって直接競合するようなことはない。むしろ、西方貿易、東方貿易それぞれの拠点として共栄できるかもしれない。

両国の発展のため、そのための保険として、今回の婚儀が持ち上がったのだ。

「そういうことですので、お二人には色々準備を進めて頂きます」

カールはこの時点で、レクティファールを翻意させるという考えは捨てていた。

レクティファールは国主としての判断を下した。ならば、カールはそれに従わなくてはならない。

たとえそれが、もう一人の娘と言っていいウィリィアを人質として送り出すことだとしても。

「――御意のままに、取り計らいましょう」

カールはそう頭を下げ、レクティファールの命を受けた。

しかし、アルフォードは、未だレクティファールを見詰めたままだ。カールは友人の足を軽く叩き、受命を促した。

アルフォードは、頷かなかった。本人さえ密かに驚いていた。

「本当に……よろしいのですね」

万感の想いを込めた、たった一つの問いかけだった。

本当にいいのか、と怒鳴りたい気持ちだった。

誰が決めたでもなく、ただ『なんとなく』、この青年と娘は今と同じか、それよりも少しだけ近い関係のまま過ごすのだと思っていた。

アルフォードの目から見れば、ウィリィアがレクティファールを憎からず想っていることは一目瞭然。疑いの余地など一片もない。

あの主君一筋だった娘が、小言を漏らしながらもハルベルン邸のレクティファールの部屋を掃除し、ルイーズに教えてもらいながら騎士学校に差し入れる弁当を作っていた。それがアルフォードには驚きで、妬ましく、嬉しかった。

あの主君の母を守れなかった一件以来、ウィリィアは何処か死に

急いでいるように見え、アルフォードは何とか娘に人としての幸せを掴んでもらいたいと方々に手を尽くしていた。

何度も見合いの席も設けたし、好男子がいると聞けば自分の目で確かめることもした。軍ならば或いは、と思い、軍学校にも入れた。

しかし、ウィリィアは変わらなかった。

いつまでもメリエラだけを見て、自分を顧みることをしなかった。

それを変えたのが、レクティファールだ。

メリエラをウィリィアから取り上げるという形ではあったが、ウィリィアの目を自分に向けることに成功した。

そしてのらりくらりとその怒りを逸らしながら、少しずつウィリィア自身に近付いた。そして今では、誰よりもウィリィアの近くにいる。おそらく、アルフォードよりも近いところに。

「――ズルイな」

レクティファールの小さな声は、カールにも聞こえた。

やはりそうなのかと思い、それでも彼は顔を上げなかった。聞こえない振りをした。

「アルフォード」

レクティファールは義父の名を、摂政としての声音で呼んだ。

先ほどの呟きが、彼の本心総てだったかのように。

アルフォードはもう、それ以上の言葉を求めなかった。レクティファールの一言は、彼には十分過ぎる言葉だ。

「御心のままに、殿下」

妻をどう宥めようか――頭を下げたアルフォードの脳裏には、そんな独り言が浮かんでいた。

◇　◇　◇

レクティファールが後宮に戻ったとき、彼は予想通りの光景に苦笑した。

誰が漏らしたのかとは考えもしなかった。こうなるような気がしていたのだ。

「――レクト、わたしたちの言いたいことは分かる？」

回廊に居並ぶ彼の婚約者たちは、何とも剣呑な眼差しで彼を見詰めていた。

そこにはレクティファールに対する微かな敵意と、多くの悲しみがある。

「分かりますよ」

「そう……」

メリエラはそう言ったきり、何も言わなかった。

自らの従者の身に降りかかった出来ごとが、士族以上の子女には珍しくないことであると分かっていた。

こうして好き合った相手と過ごせる自分は、いくつもの幸運を積み重ねた上にいるのだと、彼女は知っている。

そんな幸運は、何度も、誰にでもあるものではない。

「まだ本人には伝えていないのでしょうか？」

リリシアは第一妃として、もしかしたら自らの義姉になったかもしれない女性の行く末を案じていた。

〈マルドゥク〉が未だ情勢不安の只中にあることは次期皇妃の誰もが知っている。

「アルフォードが伝えるそうです」

あのあと二人きりで話したとき、家長の役目だと言った義父の哀しそうな顔。本来ならもっと喜んでやるべきなのにな、と小さく漏らしたアルフォードに、レクティファールは掛ける言葉がなかった。

自分が間違っているのではないかと思い、そもそも正解など存在しないのだと思い出した。

君主の行いに間違いはあっても、正解と呼べるものは見当たらない。君主の決断には、「正解に近い当たり前」と「間違い」の二つしかなかった。

できればいつか「正解」を見付けたいものだと、レクティファールは密かに考えているが、それも遠のいた。

「何、まだ決まったわけではないのだろう」

「本決まりまでは、箝口令を敷かなくちゃね」

フェリエルとファリエルはそう独語し、レクティファールの上着を脱がせる。

珍しい二人の微笑に、レクティファールは困ったように笑った。

「優しくて怖いのですが」

「――ん、たまには余裕、見せておかないと」

オリガがレクティファールに両手を伸ばし、抱き上げろとせがむ。

言われるがまま抱き上げれば、頭を撫でられた。

「――本当に、何があったのですか？」

「別に、ウィリィアに勝ち逃げされたとは思ってないよ。ボクたちはレクトの意思を信じるっていうだけ」

フェリスがそう笑んで見せると、レクティファールは今度こそ困惑したような顔になった。

責められるような気がしていた。だが、何故かこうして決断を受け入れてもらっている。

レクティファールの表情を笑い、リリシアとメリエラは顔を見合わせた。

「わたしたちはあなたの妃で――」

「――龍だもの、あなたの決めたことならそれを信じるし、あなたが何かを為したいというならその助けになる」

女としてならいくらでも言いたいことはある。

だが、今はまだそのときではない。

「後悔しないように――わたしたちがレクティファール様に望むのはそれだけです」

リリシアの言葉が、レクティファールには酷く重かった。

第七話「百尺貫頭」

灼熱の炎に包まれる王城の中で、この空間だけが張り詰めたような冷たい空気で満ちている。

城下の街はすでに制圧が済み、徹底抗戦の構えを見せた城の兵士たちもほぼ鎮圧されていた。

どうということもない、ここから戦況をひっくり返すだけの戦力は敵方にはないだろう。戦争は終わり、彼の道を阻んでいた壁はもう破壊されている。

「――――」

それでも彼は、この場所に来た。

他の誰に任せるでもなく、彼が彼女にできる最後の贈り物だとそう言って。

「――来たのね」

謁見の間。

磨き抜かれた床の上に一人佇む女性を前にして、彼の足は止まった。

「ウィリィア」

名を呼べば、彼女は寂しそうに、しかし嬉しそうに微笑んだ。

昔と何ら変わらない笑顔だった。彼は自分の心に湧き上がる懐古の情に、僅かに声を詰まらせた。

「まだ、やりますか」

終わっている。もう何も意味はない。

ここで彼女がどれだけの成果を挙げようとも、もう大勢は決した。

それに、ウィリィアが彼に勝てる道理はない。それだけ両者の能力は隔絶している。

彼の能力の基礎はウィリィアが作ったのだ。自分が彼に勝てないことは、彼女自身が一番良く知っているはずだった。

「投降はしない。それは使者に伝えた通りよ」

「……そうだと思っていました」

彼女ならそうするだろうと彼は思っていた。形ばかりの投降勧告は、もしかしたらという億分の一程度の可能性に賭けた博打でしかなかった。

「最後に顔を合わせるのがあなたなのは、皮肉なのかしら」

「では、誰ならば――」

良かったのか、そう問い掛けると、ウィリィアは困ったように笑い。そして頭を振った。

「――いいえ、誰であっても嫌ね。そういう意味では、あなたで良かったのかもしれない」

父であろうと、元の主君であろうと、顔を合わせれば望郷の情に駆られてしまう。今の自分を捨て、昔に戻りたいと思ってしまう。

それがどれだけ罪深いことであろうとも、きっと二人ならば赦し

てしまう。

「最近思うの」

足元からくぐもった爆発音が伝わってくる。同時に、城内の魔力の動きが変わった。

どうやらこの城の地下にあった都市魔導炉の流体魔力伝送経路に火が回ったようだ。そう遠くない未来に、この城は崩壊する。

「もしもあのとき――わたしがこの国に嫁ぐという頃に戻れたなら、あなたはどうする？」

それは、何度も考えた。あのときに戻れたならと、この戦争が始まる前に何度も、始まってからはもっと多くの回数を。

何故だと思った。何故あのときの自分はもっと自分を強く意識できなかったのだと。

他にやりようはあった、あったのだ。

「わたしは……もう少し我侭でいれば良かったと思ってる。自分じゃ何も考えられない莫迦な女の振りを、一生に一度ぐらいやっておけばよかった」

「ウィリィア……」

それだけで運命は変わっただろう。もしかしたら、この国が戦火に包まれることもなかったかもしれない。

「――莫迦なのは、今も一緒か」

小さく呟き、ウィリィアは王妃としての衣裳を破り、あの頃のよ

うに膝上までを晒した姿になる。
太腿にはあの頃と同じ剣帯。ただ、その中に当時の彼女が愛用していた剣はない。
あれは彼女の実家に伝わる家宝だ。他国へと嫁ぐ彼女は、出発の前日に愛用の剣を父に返した。父は、仏頂面でそれを受け取った。

「こうしてあなたと戦って死ぬことが最後の我侭だと思っているんだから。本当に、わたしは莫迦なんでしょう」

剣帯に触れると、手の中に現れたのは目の前の男に贈られた魔動式駆動剣。餞別の品にしてはあまりにも殺伐としたものだったが、彼女はそれをずっと大切にしていた。
嫁いでから一度も、それを他人に晒したことはない。夫にさえ見せなかった、彼女の最後の拠り所。
他の贈り物は全て置いてきた。だからこの剣は、眼の前の男と自分を繋ぐたった一つの想い出。

「もっと素直になっていれば良かった」

「――同感です」

一度だけ、夢を見た。我が子を抱く彼／彼女の姿を。

「では、殺して」

「はい」

レクティファールは〈皇剣〉を抜き、ウィリィアの生命を奪うべくそれを構えた。
刃に愛しい女性の顔が映った。

彼は一太刀以上、費やすつもりはなかった。

◇　◇　◇

「どういうことだ！」

主君の癇癪にまたか、と顔を顰めた〈マルドゥク王国〉正統政府陸軍大臣は、つい先程も口にした内容をそのまま言葉にした。

「――殿下の檄に答えた者たちは、全体の半数程度であると申し上げました。それ以上に現状を表す言葉は存在しません」

その半数さえ、中にどれだけ裏切り者が潜んでいるか分かったものではない。こちらも同じように敵側に内通者を潜りこませているのだ。相手がそれをしていないと考えるのは、余りにも楽観が過ぎるというもの。

陸軍大臣にしても、本来なら恩師のいるレイヴン側に付きたかった。それをしないのは、こちらに家族がいるからだ。

亡命の際、安全のためにと家族を連れてきたのが仇になった。今でこそ家族は自由の身だが、戦況が悪化すれば『保護』という名目で拘束されるに違いない。

彼が無事に家族と再会し、故郷に戻るためには、少なくとも自分たちの身の安全を確保できる程度まで、敵から譲歩を引き出さなくてはならない。そのためには、ある程度の勝利が必要だった。

「慮外者どもめ……！」

ぶつぶつと造反者に対する恨み節を漏らしていたパトゥーリアだが、陸軍大臣が聞き取れたのはその一言だけ。

陸軍大臣は、密かにパトゥーリアを嘲弄した。慮外者はどちらか。

たとえ望まれぬ子であったとしてもレイヴンはパトゥーリアの兄王子には違いない。

その兄に対する行いが、軍を集めての反撃とは――それがレイヴンの行動に触発されたものであったとしても、余りにも国を軽んじた行動ではないか。

膝を屈せというわけではない、ただ、兄に対して譲歩する姿勢を見せればいい。レイヴンに自分が有用であると見せるだけで、生き残ることができるはずだ。自分たちの背後には〈アルストロメリア民主連邦〉がいるのだから、その後ろ盾を利用して交渉の席に相手を引きずり出せばいい。

だが、パトゥーリアは自分の手にこぼれ落ちてきた玉座を捨てられずにいる。

諦めていたのだろう、国王になることを。第三王子――実際は第四王子だが――という立場では、それも無理からぬことだ。せいぜい他国との縁組のための駒、国内貴族に降嫁する道具としての人生しか考えられなかった。

それが、玉座を手に入れた。

それ自体が兄の仕組んだことだったと知った今でも、一度手に入れた好機を失うまいと必死になっている。

「殿下」

「何だ！」

器という点で、この第三王子はあの廃王子の足元にも及ぶまい。

都を追われた姫君から産まれ、艱難辛苦を乗り越えてきた男と、都で第三王子として産まれ、国政に関わることなく生きてきた男。

前者は王座を奪うべく王国の宿将に育てられ、後者はただ外交の駒として育てられた。

自分たちがどれだけ手を尽くそうとも、趨勢が逆転することはありえない。

「一度、レイヴン殿下と会談を」

「何故だ！　何故余があのような父を誑かした罪人の子と……」

「殿下！　それ以上は王家に対する叛意と受け取りますぞ！」

罪人なはずはない。王国の法は、近親間での生殖行為を禁じていないのだ。

たとえそれが世に後ろ指刺されるようなことであろうとも、法によって治められる国の元首を目指す者が、法を無視した言動を撒き散らすことは許されない。

「余が王家だ！　余以外に残った者は総て傍流、ならば余が王家だろう！」

陸軍大臣は歯噛みした。

この国の者たちは、自分たちの価値観をこの王子に仕込んでいる。

後々、自分たちの都合のいい傀儡とするために。

価値観ほど、二者を隔てるものはない。だからこそ、自分たちの持つ価値観を共有させることは相手を操るために有効なのだ。

「殿下、落ち着いてお考えください」

陸軍大臣は激昂しそうになる自分を抑え、自らと自らの家族のために目の前の第三王子に世の理を説く。

もっと前に、誰かがやっておくべきことだった。権力から程遠いからと、政の一切から遠ざけていたことが仇になった。

「レイヴン殿下が何の勝算もなく表舞台に立つはずがありません。あの方の丞相は我が王国をここまで育て上げた功臣。その程度のことを分からない者を育てる人物では……」

「功臣？　王国を裏切った者が功臣であるはずがないだろう！？祖父から、父から受けた恩を忘れたあの男が！　あの男がこの国を滅ぼそうとしているのだ！」

滅ぼそうとしている。確かにそうなのかもしれない。少数種族国家の常か、価値観が凝り固まり、末端からの腐敗が始まったこの国。それを救うためには、炎による再生しかないのかもしれない。

「余はこの国を守らねばならん！　それが王であろう！」

言葉は正しい。間違っていない。しかし、それではもう守れない。

「殿下……」

「軍に伝えよ！　これより我らは祖国奪還のため、王都を目指す！これは我らが国を叛徒より取り戻す義挙である！」

果たしてその言葉は誰に教わった言葉なのか、陸軍大臣は恭しく膝を突きながら、そう毒づいた。

◇　◇　◇

「ははははッ、あの愚弟、軍を動かしたか！」

王城の一室で呵々と笑う君主を見ながら、彼女は自分の心も浮き立つような錯覚を覚えていた。
主君の喜びは自分の喜び、主君の悲しみは自分の悲しみ、そして主君の怒りは自分の怒り。
ある片田舎の寂れた街で春を鬻(ひさ)いでいた彼女をここまで連れてきてくれたのは、目の前の若き王であった。

「どう思う、ユリエ」

ユリエ、その名を呼ばれるたび、彼女の身体には心地よい快感が走る。
自分の名。生まれ変わった自分に主人から与えられた唯一無二の名。あの薄汚い垢に塗れた名ではなく、覇王の従者として与えられた名。
彼女はその名に、生命と同じだけの価値を見出している。

「はい、レイヴン様。パトゥーリア様は殿下に対抗心を抱いているものと」

対抗心。馬鹿げている。
そもそも同じ戦場に立つことすらおこがましい。
せめて大陸中に名の轟いている英傑たちでなければ、主人と戦う資格すらない。
ユリエは心中で密かにパトゥーリアをそう評した。

「対抗心か、まだ歳幼い弟ならば可愛いものだが……。本来ものの分別が付いていなければならない歳にもなってこれでは、な」

軍を有しているから相手にするだけ。

〈アルストロメリア〉が用意した列車で国に戻ってきた弟を指して、レイヴンは未だにその実力を認めてはいない。
それどころか、自分の覇道を邪魔する障害の一つとさえ見てなかった。

「〈アルストロメリア〉も焦っているか、このような愚挙を許すのだから、我が敵としては不足だな」

パトゥーリアだけでは軍を動かすことはできない。〈アルストロメリア民主連邦〉の支援がなければ、あの第三王子に万を超える軍勢を纏めることなどできはしないのだ。
おそらく、〈アルストロメリア〉から軍を退役した将官を助言者兼連絡役として借り受けている。

「皇国の存在が連邦の動きを抑え込んでいる間に、こちらはさっさと愚弟の軍を破らなければな」

いつまでも内輪で争っている場合ではない。
今はまだ自分たちの考えどおりに動いている皇国さえ、時間が経てばどのような動きを見せるか分かったものではないのだ。
その動きを牽制するために、レイヴンは皇国から妃を娶ることを決めた。いわば人質だった。

「――ウィリィア」

しかし、レイヴンにとってその相手は単なる人質以上の価値があった。
あの屈辱の日々、各地を転々として師からの教えを受ける中で、レイヴンはウィリィアに出会った。
それはあまりにも鮮烈な出会いであった。

◇　◇　◇

逃げているという意識はなかった。

〈アルトデステニア皇国〉という大国を知るためだと自分に言い聞かせ、彼は街に出た。

「おお……」

公都〈リンドヴルム〉。

皇国十大都市の一つに数えられるその街は、彼がこれまで見た中でも有数の賑わいを見せていた。

「これが皇国の都か」

〈リンドヴルム〉は四つの公都の中ではもっとも人口が少なく、規模の小さな都市だが、他国であれば首都と言っても通じるだけの大きさはある。近くに皇都があり、その副都としての役割も負っていた。

街中からは白龍宮が見え、綺麗に清掃された街路。手入れの行き届いた公園。そして明るい表情を浮かべて行き交う住民。

大国の余裕とでもいうべきその姿に、レイヴンは目を輝かせる。

「グルジが言っていたな。首都ではなく他の街こそがその国の本当の姿であると」

他国への見栄もあるが、政治経済の中枢としてそれなりに金が落ちる首都は栄えやすい。物流の中心になり、金融の中心となり、多くの商会が店を構えようとする。

「しかし、この国は副都であってもこれだけ栄えている。グルジが俺をこの国に連れてきた理由はこれか」

視線を一巡させれば、多くの種族が分け隔てなく暮らしているのが分かった。

彼と同じ有翼人の郵便配達人が、二階の窓から手を伸ばす人間の客に手紙を手渡していた。

岩窟小人の職人が市場の一角で鍛冶屋を開き、そこでは若い森林小人族の主婦が揚げ鍋に開いた穴を示している。

水棲種の問屋が魚と氷の入った木箱を台車に載せて運び、それを受け取ったのは獣人の鮮魚屋。

その隣ではエルフの農夫が八百屋に自分で育てたパルマ芋を持込み、値切ろうとする八百屋と丁々発止の遣り取りを繰り広げている。

公園に目を向ければ人間種の子どもと機人族の子どもがおもちゃを見せ合い、それを見て微笑む若い男女は牙人族と混血種だ。

「なんとも節操のないことだ」

レイヴンには分からないだけで、他にも多くの種族がこの街で暮らしているのだろう。

「しかし……」

なんと眩しい光景か。

服飾店から出てきた若夫婦、大量の紙袋を抱えた夫は魔族、意気揚々と次の店に照準を定める妻は天族に見える。

他にもちらと覗いた酒場では、エルフとダークエルフの男が肩を組んで酒を飲んでいた。

「天敵など、所詮は思い込みに過ぎないということなのかもしれな

いな」

共に暮らせば慣れてしまう。そこにいるのが当たり前になる。

レイヴンは他国では奇異に見られた自分の翼が、ここでは当たり前のものとして受け入れられていることに気付いた。

誰も彼に気を留めない。ごく普通の光景として通りすぎていく。

「力があれば、こんな国を作れるのか」

〈皇剣〉という絶対的な力。それを用いる絶対的な君主。

平等とは、そういうことではないのか。圧倒的な力の前では、誰しも平等になるではないか。

「――力か」

レイヴンは力を悪と断じる書物も多く読んだ。

それに、皇国と隣り合う民主国家郡では、平等こそが正義であると教えている。

生まれながらにして総ての知恵ある者は平等であると、だからこそ、それを体現した自分たちの政体こそが至上であると。

「そんなもの、力の形が変わっただけだ」

自分の力ではなく、他人の力を利用するようになっただけ。大衆の力を自分の力とするのが、大衆政治ではないか。

「国は力でしか動かせない」

グルジはレイヴンに常々そう教えている。

様々な形の力を用い、ようやく国は動くのだと。

「金、人、そして時機」

金にも、人にも、そして時間にも力がある。それをひとつ残らず使いこなせるものが、優れた為政者と呼ばれる。

「俺は」

立ち止まり、空を見上げる。

少し翼に力を入れれば手の届くそれが、彼には遠い。

一度蹴落とされた自分に再び空が掴めるのか、彼にはその疑問が拭いきれずにいる。

「ふん」

考えても仕方のないことと踵を返したレイヴン。

彼はふと公園の中に目を向け、その木立の中に人影を見付けた。

整備された遊歩道や噴水のある公園中央ではなく、緑の生い茂る中で人影は隠れるようにして樹の根元に座っている。

レイヴンは身動きひとつしないその人影が眠っているのだと気付き、街中で人が眠れるほど治安の良いこの都市の治安の良さに驚いた。

「しかし、どんな莫迦だ」

いくら治安がいいとはいえ、鼻つまみ者はどこにでもいる。レイヴンはそんな簡単なことも知らない無学者にひと言言ってやろうと公園に足を踏み入れた。

植え込みの隙間を抜け、柵を跨ぎ、樹々の揺れる中を進む。そして、樹の根元で寝息を立てている者の顔が分かるようになったとこ

ろで、レイヴンは口を開いた。

「おい、お前……ッ！？」

だが、その声は途中でしぼみ、言葉の体をなさなかった。

驚愕が、彼の舌を硬直させたのだ。

「女……？」

後頭部で一つに纏められた空色の髪、吊り上がった眦は、静かに眼を閉じていれば柔らかい曲線を描いているだけだ。

小さく上下する胸を見れば、たとえ誰であっても目の前の人物が女であると分かる。

エルフなどの種族は線が細く中性的な容姿の者が多いというが、レイヴンの目の前にいるのはごくごく普通の若い娘であった。

「莫迦か」

若い女が一人で居眠りなど、どれだけ治安が良くても避けるべきことだ。治安に胡坐を掻いて自衛の心構えを失えば、痛い目を見るのは自分だ。

レイヴンはその娘の肩に触れようと手を伸ばした。

「――ッ」

その瞬間、娘は目を開き、即座にレイヴンの手を叩き落としていた。

ぱん、という乾いた音が公園に響き、レイヴンは叩かれた手が痛みを訴えるまで呆然としてしまった。

「え」

それは、娘の声だった。
若く張りのある声。しかし、どこかに大人の柔らかさを含んだ、ある特定の年齢の間にしか出せない声。

「あ、ごめんなさい。大丈夫だった？」

娘はレイヴンの手が赤く腫れていることに気付き、先ほどの自分の行動を思い出し、彼の手を思い切り叩いたことに気付いたのだろう。
謝罪と共に手を伸ばし、彼の手を包んだ。

「な、なにを……」

「ごめんなさい、ちょっと待ってて」

娘は立ち上がると、レイヴンを放り出して公園の一角にある水飲み場に向かう。
揚水機に繋がる蛇口を捻ると、冷たい地下水が彼女の手を濡らした。

「ええと、確か……」

娘袴の物入れに入っていた手拭を取り出し、水に浸す。
それを軽く絞ると、急いで木立の中に戻った。

「手を出して」

「う、うむ」

レイヴンは有無を言わせない娘の迫力に圧倒され、大人しく手を差し出した。
握手でさえ相手が差し出すのを待つ彼にしては、素直な態度だった。

「ごめんね、痛かったでしょう」

冷たい手拭で包まれると、手の痛みと熱がすっと引いていく。
レイヴンはその心地よさに緩みそうになる頬を引き締め、ぶっきらぼうに答えた。

「別に、寝ている娘に手を出した俺にだって非がある」

物ごとの善悪の判断ができない者を、レイヴンは心の底から嫌っていた。
善だけで世界は回らないが、過ぎた悪も不必要だ。それを知らない莫迦が国を動かすなど、あってはならないことだと教え込まれた。

「そう、ごめんなさい」

「レイヴン」

再び頭を下げた娘を見、レイヴンは溜息と共に自分の名を告げた。
謝ってばかりでは話もできない。

「ええと……」

「お前の名は？」

近所の子どもとでも思われているのだろう。
娘は存外はっきりとしたレイヴンの自己紹介に面食らっているようだった。
レイヴンには、それが面白くない。

「――ウィリィア、だけど」

「ではそう呼ぶ。構わないな」

「ええ、別にいいけど」

ウィリィアと名乗った娘は、レイヴンの歳に似合わない落ち着いた態度に戸惑っていた。
公園に遊びに来た近所の子どもを傷付けてしまったと思っていたのだ。

「お前はこの街の者か」

「うん、君は違うの？」

「違う、昨日この街に着いた」

レイヴンは握られたままの自分の手を引っ込め、先ほどまでウィリィアが座っていた樹の根元に胡坐を掻いた。
ウィリィアは何も言わず、その隣に座る。

「旅の人？」

「似たようなものだ。だが、目的地はあるが、まだそこに行くわけにはいかない」

自分は、まだ王都に戻れるほど成長していない。師であるグルジも、決して許しはしないだろう。母を捨てた父を一目見ることも、まだ叶っていない。

「大変なのね」

「自分で選んだことだ」

グルジは、レイヴンに幾つもの選択肢を示した。その中には、王家を捨て、市井の者として生きることも含まれている。だがレイヴンは、それを選ばなかった。

「ウィリィアはどうしてこんなところで寝ていた。いくらこの街の治安が良くても、若い娘が一人でうたた寝できるほどではあるまい」

「――眠るつもりはなかったんだけど、ね」

睡眠不足が祟ったのか、学校の教本を読んでいる間に眠ってしまったのだという。

差し出された教本を覗き込み、レイヴンは眉根を寄せた。

「『小麦・大麦に見る皇国経済の問題と今後の展望』、お前は商人か何かの娘か？」

「いいえ。でも、主人に求められたらその真似ごとくらいはしなくちゃいけないから」

「主人……貴族の従者か」

レイヴンはウィリィアが頷くのを見て、納得した。
自分が手を伸ばしたときの身のこなしを見れば、武芸に通じていることは分かる。
貴族の従者ともなれば、護衛としての役割も求められるのだろう。

「まだ若い癖に、夜も眠れないほど働かされているのか」

「ううん、うちの主人はまだ小さいから、わたしも他の人より早く仕事が終わるわ」

彼女自身がまだ年少ということもあり、同僚たちも随分気を遣っている。
もっとも、本人にすれば半人前以下の扱いを受けているようにしか思えないのだが。

「では、将来のためということなのだな」

「そうね」

レイヴンはウィリィアの教本を奪うと、それを開く。
グルジの手製教本より、随分分かりやすかった。

「――ふ、あいつも所詮は武辺者か。教本ぐらいどこぞで手に入ればいいものを」

「もしかして君、どこかの貴族の公子さま？」

「そう聞かれて、答えられると思っているのか」

レイヴンは教本を押し付け、薄く笑う。自分の正体を知って目の

前の娘が得をするとは思えないが、その上にいる貴族がろくでもないことを考えないとも限らない。

「そうね、ごめんなさい」

ウィリィアはあっさりと引き下がった。答えなど、得ても得られなくても変わりはしない。

「別に構わん。――それにしても、皇国ではお前のような若い者も従者として取り立てられるのか」

ウィリィアはレイヴンの質問に少しだけ悩んだ。誰もが自分ほどの年齢で従者を務めている訳ではない。

特に彼女は、先祖代々同じ家に使えているという家庭環境も関係していた。

「場合によってはそうね。でも、わたしの家はずっと同じ家に使えているから……」

「なるほどな、そういうことか」

レイヴンにも心当たりはある。

グルジだけではなく、その協力者の中にも王家と代々の繋がりのある者たちがいた。

「それに――わたしは他にできることがないから」

寂しそうに笑い、ウィリィアは教本を開く。

幾つもの赤線は、彼女の日々の努力の証だ。

「この国では生業を制限する法はないと聞くぞ。それなのに他がないのか」

「ええ、他じゃ……」

わたしの罪は贖えないから――レイヴンはその小さな呟きに目を瞠った。

自分と対して変わらない歳の娘が言うには、余りにも物々しい。

「そうか」

だが、それ以上踏み込むほど彼は幼くも愚かでもなかった。

踏み込むにも、それなりの手順と礼儀がある。

「俺と、同じだな」

それに何より、レイヴンはウィリィアに自分と似たものを感じていた。

漠然とした未来の中に見える、確固たる何か。

自分はそこに向けて真っ直ぐ突き進むのだと、そう駆り立てられる。

「君は……何を目指しているの？」

「――分からん」

それは、彼の本心であった。

グルジにも他の従者にも明かせない、迷い。

「目標はある。そこに至る道筋も分かる。しかし……」

「本当にそれが正しいのか、分からない」

レイヴンは頷き、ウィリィアを見上げた。

「時折、人と時機に与えられた目的なのではないかと思えてくる。ウィリィアもそうか」

「うん」

目標は分かっている。だが、その目標は正しいのか。本来なら目標を定めるまでの間に培われる確信が、二人にはなかった。

幼い頃の夢が変わっていくのは、その培われた確信が別の目標を示しているからなのだろう。

「いつかこの気持ちまで変わってしまうんじゃないか、否定されてしまうんじゃないかって思ってる」

ウィリィアは両膝を抱え、顔を伏せる。

一瞬だけ見えた眦の涙に、レイヴンは大きく心を揺らされた。

理由など分からない。だが、心臓が大きく跳ねた。

その鼓動のなんと心地よいことか――レイヴンは心の奥底から湧き立つ衝動に駆られ、一つの答えを得た。

「泣くな、ウィリィア」

レイヴンの言葉に、ウィリィアが顔を上げる。

「――否定されて」

「え？」

「否定されて諦めるような夢や目標ならば、どう足掻いてもたどり着くことなどできない。俺はそう思う」

グルジの教えではない。

ウィリィアの涙を見た瞬間、彼の中に見えた答えだ。

「俺は決めたぞ、ウィリィア」

レイヴンは立ち上がり、ウィリィアの真正面に立つ。

そして、その頬を紅潮させて叫んだ。

「俺は、総てを力で捩じ伏せる……！」

怒りも悲しみも、正義も悪も、果ては運命でさえも。

「お前の涙だって、俺がいつか捩じ伏せてやる」

「レイヴン？」

「だから待っていろ、この国で。俺がもう一度お前の前に立つとき、俺はお前の悲しみだって捩じ伏せられる男になっている」

それは、彼なりの精一杯の告白だった。

愛情というには幼く、恋情というには苛烈に過ぎたその感情。

レイヴンという生来の王族は、それが自分の依って立つに足る決意だと本能で理解した。

「お前に逢えてよかった」

迷いさえ捩じ伏せられる力。
いつか、それを手に入れてみせる。

「そう、良かった」

ウィリィアはレイヴンの突然の告白に目を瞬いていたが、そういって笑みを浮かべた。
彼がこれまで見てきた笑顔の中でもっとも美しいその笑顔に、レイヴンは気恥ずかしさを覚える。

「楽しみにしてる」

「ああ、待っていろ」

頭を撫でられ、赤面しながらも、レイヴンはそう答えた。
もう、迷いは消えていた。

◇　◇　◇

「我にとっては、ウィリィアこそが最大の恩人だ」

自分に覇道を見せてくれた。
自分の迷いを打ち払ってくれた。
自分が一人ではないと教えてくれた。

「いつか、あいつを迎えに行こうと決めていた」

国に戻り、自分の存在を世界に認めさせたら、すぐにでも迎えに行くつもりだった。

そのために、彼女の正体を探し当てた。

「まさか、あの白龍姫の従者とは思わなかったが」

しかし、そのお陰で彼女の苦悩の理由も分かった。

レイヴンから見れば罪とも思えない『事故』の責任。

あの頃のウィリィアは、おそらく見え始めた現実と自分の目標の間で揺れていた。

罪を贖い、主人を守り抜くという目標と、自分の手が、主人を守れるほど強くも長くもないという現実。

「あの男が、変えた」

そうとしか思えなかった。

あの摂政が現れたあと、ウィリィアの様子は少しずつ変化した。

『龍虎戦役』の後、しばらく経った頃にはまるで別人のように笑顔を見せるようになった。

「――ユリエ。我は……俺は初めて同じ年頃の男に嫉妬したのだ」

自分が目標としていた『力』。

それを手に入れ、さらにはウィリィアの心さえその手に掴もうとしている。

「向こうは俺など、他国の元首としてしか見ていないだろう。多少評価されようとも、それは変わらん」

相手にされていないとは思わない。

しかし、レイヴンがレクティファールを見ているようには、レクティファールはレイヴンを見ていない。

「俺がウィリィアを手にすれば、あの男は俺を見る」

愛人という噂が、所詮噂に過ぎないことは分かっている。

しかし、一年後にはそれが真実になっているかもしれない。

写真や映像で見るウィリィアの表情は、それを暗示していた。

「ウィリィアには悪いが、今回ばかりは賞品になってもらう」

この大陸の『力』を統べるに相応しいのはどちらか。

「さあ、決着をつけよう、星龍皇……！」

◇　◇　◇

三日後、〈マルドゥク王国〉国王レイヴン一世は王弟パトゥーリアを討伐するとして軍を発する。

同日、〈マルドゥク王国〉正統政府首班第三王子パトゥーリアは、兄レイヴンを国家への叛逆者として認定。討伐のために軍に出撃命令を下した。

第八話「形影相動」

足元を揺らす爆発。その衝撃に天井から落ちる水晶灯。
床面に叩き付けられた水晶灯は、粉々に砕けて光を乱反射した。

「――！」

ウィリィアは、その音と同時に走り出した。
目標は目の前の男。
かつて共に暮らし、あと僅かで心さえ通わせることができたかもしれない、彼女にとってもっとも近しかった人物。

「レクトぉッ！！」

駆動剣が唸り、光沫を吹き散らして目標へと振り下ろされる。
それを弾いたのは、小さな鋼色の魔法陣だった。攻撃との接触面のみに防御障壁を展開する技術は、魔法を用いる戦闘技能者にとっては一人前と半人前を分ける分水嶺だった。
そしてレクティファールは、弾いた駆動剣を追うように身体を前進させる。そこはもう、大剣の間合いではない。

「随分といやらしい戦い方をするようになったわね！」

火花が散り、光が乱舞する。
刃に反射する炎が残像を生み、ウィリィアはそれさえも斬り裂いて踊る。

「良い師に巡り会えたので」

「皮肉かしら？」

そう、皮肉だった。

あの頃は、自分が育てている人物が未来で自分を殺す者だとは思っていなかった。

ただ、できの悪い弟のように思っていた。

だから育てようと思ったし、彼が成長することが嬉しかった。

少しは恨みもした。自分から生きる意味を奪ったのだから、当たり前だ。

「でも、まだ負けてあげない」

剣帯に触れ、呼び出すのは一対の双剣。

父から譲られた、無銘の名剣だった。

それを構えると、一息の後にウィリィアは動き始めた。

「どうしてなのかしらね」

迫ってきたレクティファールを薙ぐように、双剣を振るう。先ほどと同じように防御障壁で防がれたが、今度はその反発を利用して逆の回転へと入る。

次に繰り出したのは足払い。床面すれすれを通過するそれは、防御障壁で防ぐには困難だ。床と防御障壁が接触すれば、障壁の反発力で術者が弾かれてしまう。

レクティファールは足元に力場を形成し、一挙動で宙に舞った。

「命のやり取りをしているのに、こんなにも嬉しい！」

あと少し運命が違えば、自分は彼の隣に居ただろうか――この国へと向かう船の中でそう考えてしまったこと自体が、自分があの青

年をどう見ていたか証明している。
気付くのが遅かった。否、気付かないふりをして日々を過ごしている間に、運命はあっさりと手のひらを返してしまった。

「ねえ、何であのとき、見送りに来なかったの？」

「――――」

空中で身体を捻り、床を滑りながら着地したレクティファール。
ウィリィアはそれを追いながら、そう訊ねた。
あの祖国を旅立つ日、レクティファールは見送りに来なかった。
密かに期待していたのだ。止めてもらえるのではないかと。引き寄せてもらえるのではないかと。

「女々しいでしょう？　自分がこんなに面倒な女だなんて、わたしも知らなかった」

想いに気付いて、知ってしまった。
欲するとはこういうことなのだと。

「――私は、知っていました」

レクティファールの言葉に、ウィリィアは動きを止めて唇を噛み締めた。
皮膚が破れ、血の味が口の中に広がる。

「だったら、何で……！」

レクティファールは〈皇剣〉を床に突き刺し、それを支えにして立ち上がった。

柄を握るその手が震えていることに、ウィリィアはようやく気付いた。

「今近付いたなら、手に入れたくなってしまうと思った」

レクティファールの言葉を聞いた瞬間、ウィリィアの意識が真っ白に染まる。

怒りと悲しみがぶつかり合い、言葉に表せない感情となって爆発した。

「あああああッ！」

双剣を振り翳し、レクティファールに迫る。

怒りに任せて剣を振り、悲しみに任せて剣を振る。

弾かれ、逸らされ、受け止められても、彼女は叫んだまま剣を振るった。

「何で今さらッ！」

一言、たった一言で良かった。

あの日、それ以前にこの想いを肯定してくれれば、それだけで自分は後悔せずに済んだ。

「甘えだって分かってる！　あなたにその言葉を口にするだけの猶予がなかったことも！」

剣の散らす火花の向こうにある見慣れた、あの頃と何も変わらない顔。

「何故！」

何故、自分はあのとき勇気を持てなかったのか。
何故、自分はあのとき自分の心と向き合わなかったのか。
何故、自分はあのとき一歩を踏み出さなかったのか。

「答えなさい、レクト！」

叫び、振り抜く。双剣はそれぞれ炎の光を反射して弧を描き、レクティファールの首筋へと吸い込まれる。
交差する剣線。

「――ウィリィアが、あなたが大切だった」

レクティファールの静かな声と共に、二振りの剣が同時に弾かれ、宙に舞う。
逆上し、剣筋の乱れたウィリィアの懐に潜り込むことは、今のレクティファールには造作も無いことだった。

「レクト……」

無防備な胴を晒し、ウィリィアは自分の中の怒りが急速に冷えていくのを感じていた。
これで、終われる。

「ウィリィア」

名を呼ばれると同時、彼女は自分の腹に〈皇剣〉がするりと潜り込む光景を見た。
その感触に、自然と笑みが零れた。

◇　◇　◇

外務院の中でそれを知っているのは、外務院総裁マルファスとそれに近しい高級官僚だけであった。

それというのも、摂政が今回の一件について内々にことを進めるようマルファスに命じていたからだ。

「閣下、蒼龍公マリア様より書簡が」

「見せろ」

皇城近くに居を構える皇国外務院。

二百年を越える歴史を持つこの庁舎の一室で、マルファスは寝不足で隈の浮かんだ顔を隠そうともせず、部下の差し出した封書を受け取った。

封蝋は開かれているが、相手が無官である以上必要なことだ。

「――――」

香の焚き込められた紙の上に、マリアの姿によく似た流麗な文字が踊っている。ただ、その内容はひどく事務的で、一欠片の面白みもない。

摂政レクティファールより命じられた船の手配が済んだ。中期天気予測によって齎された海上予測によると、海路は比較的穏やかで、このままなら予定通り船を出せるという。

「――ふう」

マルファスは深々と溜息を吐き、それを部下に手渡す。部下は他の書類と共に用箋綴にそれを収めると、顔色の悪い上司を気遣う。

「殿下は随分と無茶をなされますな」

「国益、と言われれば我々に否はない。俺たちの給料はどこから出ているか分かっているだろう」

「確かに、税で雇われている我々は国家を富ませることが仕事のようなものです。しかし……」

部下からすれば、しなくてもいい余計な苦労を背負わされているというのが本音だ。

それによって多くの利益を得られるにしても、他のやりようはあったはずだと。

「言うな。他に手がない訳ではないが、他の手では相手に先んじることができない」

「――だからこそ、軍を動かしてるのですね」

「ああ、連邦と〈ガイエンルツヴィテ〉との折衝は遺漏なく行うよう担当者に伝えろ。軍務卿から大いにせっつかれているからな」

内務院も、軍務院と同じように外務院の動きを注視している。ただし、あちらはあちらで摂政からの命令に頭を悩ませていることだろう。

摂政レクティファールは今、三院に恐ろしく危うい仕事を命じている。それこそ、百戦錬磨の外交官であったマルファスをして「狂っている」と評するしかない命令だ。

「しかし、あの情報は本当なのでしょうか」

「事実かどうかは問題ではない。可能性を否定できない以上、こうするほかない。内務卿には骨を折ってもらうさ」

マルファスは呟き、内務卿のいけ好かない顔を思い出す。日頃予算の奪い合いと縄張り争いで顔を突き合わせる相手であるが、自分と同じように摂政の命令に四苦八苦している光景を想像すると、不思議と親近感が湧いてくる。

それでも、手心を加えようとは思わないが。

「まあ良い。殿下に幾つか奏上しなくてはならないことがある。皇城に伝え、拝謁の許しを得てくれ」

「かしこまりました」

一礼し、執務室を退出する部下を見送り、マルファスは机の引き出しから数枚の書類を取り出した。

今回の一件に関し、レクティファールから下された命令の概要が記されている。

「――これも君主の業というものか」

たった一人の女性を人身御供にする。

それで国益が贖えるならば、それを選ぶのが君主だ。

皇国の主権者は皇王であり、主権者は国家に関する総ての責任を負っている。

国を守る義務も、国を富ませる義務も、主権者が負うべきものだ。

他の誰にも担うことはできない。

それこそが国家であり、主権である。

「ただ、この国は一人が負うには、やはり重すぎる」

それでもこの国が皇王のものであり続けているのは、他にこの国を纏めるだけの象徴が存在しないからだ。

同時に、〈皇剣〉には国を背負うだけの力がある。否、諸種族を纏め上げ、一個の国として成立させるには、最低でも〈皇剣〉ほどの力が必要だった。

龍族、神族、魔族、天族。強大な力を持つそれらの種族を圧倒するために造られた〈皇剣〉。それが皇国の主柱となり、多くの種族が暮らすこの国を支えている。

「建国記が神話じみているというのも、考えものだな」

〈アルストロメリア民主連邦〉の建国の歴史のように、人々が自分たちの持つ力を結集して国を造り上げたのなら、人々は『自分たちの国』という印象を持つだろう。

しかし皇国の建国の歴史は、初代皇王が多くの種族を自らの下に従えて国家を打ち立てたというものだ。他に手段がなかったといえばその通りだが、国家という形を保つために皇王を神格化してしまった部分が少なからずある。

それを当たり前と受け止め、或いは積極的に肯定することで国体を維持している皇国。その有り様に疑問を持つ者がいないわけではない。

マルファスは、いつか龍族さえ世代交代するほど長い時間をかければ、この国も皇王体制から脱却することができるかもしれないと考えている。

「だがそれまでは、我々は皇王陛下に頼らざるをえない」

多くを失わせる道だろう。

総てを手に入れる代償に、本当に欲するものは奪われる。

「この国は、果たして幸福なのか……」

その答えは、マルファスの存命中は決して分からない。

分かるとすれば、それは気の遠くなるような未来のことだろう。

◇　◇　◇

グルジ・ハイレンベルグは、前線近くに設営したレイヴン陣営の天幕で自分を訪ねてきた男と盃を交わしていた。

老境の半ばに立つグルジは、強い酒を舐めるように減らしている。それが唯一の味わい方であるとでもいうように、愚直なまでに同じ動作を繰り返していた。

「軍神閣下にしては、随分と大人しい飲み方ですな」

「――酒の呑み方なぞ、各々好きなようにすればいい。無理やり相手の呑み方に合わせれば旨い酒も不味くなる」

「それは確かに」

琥珀酒を口に含み、来客の男――皇国国民議員キャベンディッシュは愉快そうに肩を揺らした。

グルジはその様子に表情ひとつ変えず、硝子杯を卓に置いた。

「それで、わざわざ皇国からこんな辺境までなんの用だ。貴様の目的は九分九厘果たされてるだろうに」

グルジとキャベンディッシュは、すでに十数年の付き合いがある。

共に本心を明かすこともなく、ただ協力者として利用し合う仲にすぎない。

それが、何故こんな時期にこんな場所に現れたのか、グルジは幾つかの推測を立てつつ、訊ねた。

「九分九厘果たされているからこそ、こうしてここに足を運ぶ余裕ができたとは考えないので？」

「貴様がそんな無駄足をするとは思えない。何か目的があるのだろうよ」

グルジの断定に、キャベンディッシュは再度笑った。

「閣下に隠しごとはできませんな。参った参った」

「くだらん、俺とて暇ではないのだ。レイヴン様にはまだまだ多くを学んで貰わねばならん」

「随分と、あの王子さまに入れ込んでいるのですね。軍で改革の大鉈を振るっていた頃からは想像もできない御姿だ」

キャベンディッシュはグルジがこの国の軍を作り替え、また国さえ作り替えたことを知っている。

西域の一小国に過ぎなかったこの国を西域三国の一角にまで成長させたその手腕を、キャベンディッシュは純粋に尊敬していた。

「改革は先を生きるための手段だ。それは目的には成り得ない。――そんな当たり前のことを聞きに来たのではないだろう。要件を言え」

「いえ、実はちょっとした確認にきただけなのですよ、閣下」

キャベンディッシュは懐から懐中時計を取り出すと、それを卓の上に置いた。

グルジはそれを黙って見下ろし、酒を舐めた。

「――そうか」

頷き、静かに呟くグルジ。

キャベンディッシュの意図は、ただそれだけで十分理解できた。

「いつから気付いていた」

「この話を頂いたときから、おかしいと思っておりました」

キャベンディッシュは彼にしては珍しく、ただただ無表情であった。それが、グルジにはひどく可笑しみのある光景に思えた。

「殿下には、どうしてもあの者が必要なのだ」

「――ご自分の代わりに、ですか」

「そうだ」

最後の一滴を舐め取り、グルジは空になった硝子杯を眺める。

切削によって生み出された複雑な模様の中に、過去の様々な光景が現れては消える。

「いつかこうなるとは思っていた。俺は恨みを買いすぎた」

呪いと言えば、自分の罪を無視した被害妄想だろう。
これは単なる報いだ。自分のしでかしたことの、代価にすぎない。

「最後の最後まで、俺は人を犠牲にしなくては何も遺せないらしい」

だが、総てを承知でキャベンディッシュに協力を求めた。
多罪に塗れたこの身、今更ひとつふたつ罪が増えたところで大した違いはない。
グルジは、琥珀酒を少しだけ注いだ。

「恨まれような」

「恨まれましょう」

キャベンディッシュはグルジの杯に自分のそれを当てると、一息で酒を飲み干した。
それを見たグルジは、巌の顔に苦笑を浮かべる。

「身体を壊すぞ」

「この程度、商人であれば付き合いで憶えます」

「商人……商人か」

キャベンディッシュの杯に酒を注ぎ、グルジは琥珀酒の瓶に蓋をした。
これが最後の話だと、キャベンディッシュにも分かった。

「お前は、何を望む？　何故俺たちに協力した」

キャベンディッシュはその真っ直ぐな問い掛けに、グルジ・ハイレンベルグの本質を見たような気がした。
同時に、この男がくぐり抜けてきた戦いの激しさも感じ取る。

「私は……単なる商人です」

「ほう」

「商人は何らかの品物と引き換えに代価を受け取る。私もそれを忠実に守ったに過ぎません。それに、私は皇国と皇王家を深く愛しております」

つまり、キャベンディッシュは〈マルドゥク〉に関わることで何らかの代価を受け取ったということになる。
そしてその代価は、皇国と皇王家にとって有益なもの。それが何であるのか、グルジは思考を加速させた。

「それは貴様にとって得難いものだったか」

「はい、この上なく得難いものを頂きました」

それ故に、キャベンディッシュはグルジを訪ねてきた。
彼なりの美学に従い、代金分の仕事をするために。

「――明後日、ウィリィア・ハルベルン嬢を乗せた船が出港します。到着まではしばらく掛かるでしょう」

白龍公との縁組に関しては、すでに皇国紋章院と内務院に申請がなされている。あとは、それを審査し、許可が降りるのを待つだけだ。

おそらく、西域に到着する頃には養子縁組の許可は下りている。

「そうか」

これで一つ、肩の荷が下りる。

グルジは杯を空けると、それをきつく握り締めた。

「これも宿命か、業か」

「必要なこと、そう思うしかありません」

キャベンディッシュは立ち上がると、おそらく最後になるであろうグルジとの会話を締め括る。

「それでは閣下、ご武運を」

「貴様もな」

キャベンディッシュがグルジの笑顔を見たのは、それが最初で最後だった。

◇　◇　◇

昨日、ウィリィアは母と共に寝た。

恥ずかしいと言うウィリィアを無理やり寝台に引きずり込み、ルイーズは涙を流して別れを惜しんでいた。

ただ一人の娘で、末の子どもでもある。ルイーズにしてみれば、冗談で嫁入り話を口に出しても、それが現実になって平然としていられる訳もない。

寝台の中で終始レクティファールへの文句を口にしていたルイー

ズだが、ウィリィアがそれを止めた。
レクティファールは必要な決断をし、自分はその決断を受け容れる義務を負っている。ただそれだけのことだと。
それが本心だとウィリィア自身も分からない。単に自棄になっているだけだと言われれば、頷いてしまうかもしれない。

「ウィリィア」

悲嘆の声とも言われる灰色鴎の鳴き声。その声を聞きながら海を眺めていたウィリィアは、主人――元主人の声に振り返った。
ウィリィアがメリエラ付きの侍女を務めていたのは昨日までで、今日からは公務休職期間という扱いになっている。

「準備ができたそうよ」

言って、メリエラが示すのは、灰色に着色されたレヴィアタン公爵家所有の巨大客船『ユノシア』。
今回の「嫁入り」に際し、皇王家から要請を受けたレヴィアタン公爵家が用意した船だった。
元々は二世代前の重戦艦で、老朽化して廃棄されるところをレヴィアタン公爵家が武装客船として引き取ったものだ。
武装客船としてはかなりの重武装で、両舷と船橋前部に対空対艦両用魔導砲を搭載している。

「港湾局から通達された時間ももうすぐだし、そろそろ行かないと……」

海風に踊る髪を押さえ、メリエラはウィリィアを促す。
その表情が決して明るいものではないことに気づきながら、ウィリィアは黙って海に背を向ける。

「ありがとうございました。こんなところにまで足を運んで頂いて」

「いいの。でも、本当ならもっと盛大に式典を行うべきなのに、こんな風に隠れて出発するみたいになってしまって……」

海軍の皇都防衛艦隊の使用している岸壁から出航するという時点で、一般人が見送りに来ることは考えられない。そして、この出発そのものが国民には一切明かされていなかった。

他国へと自国の姫が嫁ぐというのに、その扱いはあまりにも不当だとメリエラたちが揃って抗議しても、レクティファールはその決定を変えなかった。

そして、その本人すら、この場に来ていない。

来ているのは、彼の婚約者と近衛軍の関係者だけ。

アルフォードとルイーズさえ、この場に入ることは許されなかった。

「レクトも何を考えてるのかしら」

「――いいのです、一使用人のために殿下が時間を作ることの方がおかしいのですから」

答えた直後、ウィリィアは自分の言葉に衝撃を受けた。

そうだ、自分と彼ではこんなにも身分に差がある。

何故今までそれに気づかぬ振りを続けてきたのだろうか。

「でも、レクトだってウィリィアと別れるのは寂しいでしょうし、本心ではここに来たかったはずよ」

別れを惜しんでている。

本当にそうだろうか、邪魔者がいなくなってせいせいしているのではないだろうか。

「わたしはいつも邪魔ばかりしてきましたから……。姫さまも、これからはゆっくり彼との絆を深めてください」

「邪魔なんて……！　ウィリィアはわたしのことを想って今まで頑張ってくれたんでしょう？」

「それは……」

それは果たして、メリエラのためだったのだろうか。

幾度も自問自答し、今となっては自分のためだったのだと理解している。

自分が罪の意識から逃れるためには、メリエラを守り続けることが必要だったのだ。

「ウィリィアさん」

名を呼ばれ、視線を横に巡らせると、そこにはリリシアを筆頭とした龍姫と、寵姫たちの姿。

「随分と遠くに行かれるのですね」

リリシアが寂しそうに呟く。

彼女はウィリィアの両手を額に当てると、小さく祈りの言葉を口にした。

巫女姫としてできることなど、こうして祈ることだけだ。

「あなたは間違いなく、わたしの姉でした。それはきっとこれから

も……」

「恐縮です、猊下」

レクティファールに贈るのだと焼き菓子の作り方を教えたのは、果たしてどれほど前のことだっただろうか。

自分にもこんな可愛げがあればと思い、すぐにその考えを振り払ったことが懐かしい。

「体調が悪くなったら、ちゃんと向こうの典医に伝えるようにな。遠慮はいらないぞ」

「こちらから、医療記録簿の写本は送っておくから」

フェリエルは眼鏡の橋を持ち上げ、視線を落としながら、ファリエルはウィリィアを抱きしめ、その背を叩きながら、それぞれ別れの言葉を告げた。

世代の近い同性ということで、二人には様々な世話を焼いてもらった。残った傷痕を消すかどうか相談したのは、レクティファールの顔が意識から離れなくなった頃だった。

理由を聞かれ、咄嗟に言い訳ができずに困ったのもいい思い出だ。

「君の身体に関する研究は凍結だな。――傷痕を消せなくてすまない」

「いえ、他の同胞の治療に役立てていただければ、それだけで……」

本当なら嫁入り前に何とかしてやりたかったと、フェリエルは悔しそうに唇を噛んだ。

ウィリィアはそれを宥め、ファリエルに微笑みかける。

「愚弟のこと、お願いします」

「任せて、あの唐変木は百年掛けてでも治療するから」

「はい」

レクティファールの姿をした人形。

二人はそれを汚してしまい、洗濯室で鉢合わせしたことがある。

互いにレクティファールへの文句を言いながら、それでも楽しく人形を洗った。

物干し竿で揺れる人形をつつき回し、笑い合った。

「あの、ウィリィアさん」

「フェリス様、ご両親のこと、あの子を信じてあげてください」

「はい」

いつか両親にレクティファールを会わせる。そんなフェリスの密かな夢を、ウィリィアは応援していた。

両親に好きになった異性を紹介したい、レクティファールならそんな当たり前の幸福を得られる国にしてくれる。

二人はそう信じていた。

「年上だと思わなくていいですから、叱るときは叱ってくださいね」

「ふふ……分かりました」

厳しくも優しいフェリスの気質は、ウィリィアと似通った部分が

多い。
そう言ったのは、一人の青年だ。

「――これ」

差し出された本を受け取り、その本の主に目を向ける。
オリガはいつもの無表情であったが、差し出された本は大衆向けの娯楽小説だった。

「船の中で、暇、だろうから」

「ありがとうございます」

小難しい専門書ばかり読んでいたオリガを変えたのは、間違いなくあの男だ。
どうやって気持ちを伝えたらいいのか、それを求めていたオリガに恋愛小説を貸した。
何故そんなものを持っているのかと訊かれ、咄嗟に同僚に勧められたと答えてしまったが、実は同じ悩みを抱えていたのかもしれない。

「准尉、向こうでもお元気で」

「はい、大尉」

リーデの挨拶は、軍人らしくさっぱりしたものだった。
彼女はきっと、自分の嫉妬心には気付かなかっただろう。
彼と身体を合わせ、心を通わせることに一方的な妬みを抱いた。
言葉で伝えることを放棄したことを棚にあげた醜い自分を見せ付けられた。

「彼は、間違いなくあなたを大切に思っている。それは忘れないで」

「……はい」

それを知って、今更何ができるということもない。

だが、少しだけ胸が暖かくなった。

「ウィリィア様。慣れない土地で、体調などにはお気を付けください」

「アリア様こそ、無理などなさらないでください。愚弟はあまりそのあたりに気が回りませんから」

「そうですね、気をつけます」

品の良い笑みを浮かべ、アリアはウィリィアの手を優しく握った。

多くの言葉は要らない。手を繋ぎ、視線を交錯させるだけで十分だ。

「色々、お願いします」

「はい」

アリアは間違いなく、レクティファールを支える一人だ。

それを決して表に出さず、ひっそりと暮らしている。

そんな生き様に、ウィリィアは憧憬の念を抱いた。

「姫さま、彼のことをよろしくお願いします」

「ええ」

もしも自分が白龍公の養女となれば、レクティファールは二つの意味で義弟になる。

それが少しだけ嬉しいと感じてしまうのは、あの男が姉としての自分を慕ってくれたからだろう。

兄ばかりで弟も妹も居なかった自分にとっては、多少憎くはあっても可愛い義弟だった。

「あれはかなり莫迦ですので」

「知ってるわ、それくらい」

メリエラの笑みは、自分とウィリィアだけが知る白龍宮での時間にある種の優越感を抱いている証拠だった。

摂政でも〈皇剣〉でもないレクティファールと時間を共有した二人は、共犯者とでも呼ぶべきものかのかもしれない。

「姫さまの婚礼の儀の際には、必ず参列させていただきます」

「うん、楽しみにしてる」

未来への、約束。

それだけが、今の二人を繋ぐ細い細い糸だ。

時代という抗い難い流れの中で、二人の女性はそうして別れた。

その約束が果たされることはないと、知らずに。

◇　◇　◇

港を離れる『ユノシア』を、皇城にある尖塔の屋上から眺めてい

たレクティファールは、背後に現れた気配に声をかけた。

「必要な面々は集まりましたか」

「は、旧連合諸国の特使と、〈ガイエンルツヴィテ〉の渉外省第三席事務官、〈グラッツラー〉の副外務卿、その他中原諸国のお歴々は総て」

「分かりました」

レクティファールは寒風に晒されたまま、秘書官長にそう答える。彼の目には、舷側から身を乗り出して手を振る義姉の姿が見えていた。

その彼女が時折誰かを探すように視線を移動させるのは、自分の姿を探しているからだろうか。

「――自惚れ、だな」

望みもしない婚儀を押し付けられ、恨まれるだろうと思っていた。これから自分が行うことは、彼女を犠牲にしてこの国の国益を守ることだ。

レクティファールはこれまで、彼女を守るために力を振るった。その代償は、彼女を失うことだった。

見事なまでに、等価交換。得たものと失うものは釣り合い、世の条理を彼に教えてくれた。

「何ごとにも代価は必要ということでしょうか」

「おそらくは」

秘書官長は、今回の一件で目の前の主君が一つの壁にぶつかったのだと理解していた。
守りたいものと、守るべきものは違う。同時に、こちらが望む代価と、結果が望む代価も別のものだ。
失いたくないから戦って、その結果として失いたくないものだけ失うことも珍しくない。
それを乗り越えて、初めて君主として立つことができる。
しかし、

「――見送りは、よろしいのですか」

これくらいはお釣りとして許されるのではないか。
そんな秘書官長の気遣いは、レクティファールにとって不快な提案でしかなかった。

「必要ありません」

今更、どんな顔で会えばいい。恨まれるならそれも良い。しかし、面と向かって何を言えというのか。
別れの挨拶か、謝罪か、それとも――求めればいいのか。

「私は私の役目を果たすまで。これ以上、運命とやらに法外な代価を請求されるわけにはいかないのですから」

レクティファールはすでに決心している。
運命とやらが自分に代価を求めるのならば、自分は運命にそれに見合った結果を求める。
奪わせるだけでは意味が無い。奪われるなら、自分も奪う。

「彼女をこの手から奪った代価は、必ずこの手に」

レクティファールは上衣の裾を翻し、秘書官長を従えて議場へと向かう。
その瞳には、彼に似つかわしくない苛烈な光があった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3273i/

白の皇国物語

2011年11月20日09時27分発行